贖罪の娘

tomogon

expiation~Februusの娘~第一部

アルディ家には、彼らの一族に関する原簿がある。
個々人に作成され加除式で、その人物の一生を記録する。
現在は電子記録として保管されているが並行してその紙媒体も更新されていた。

シャルル・ドゥ・アルディの系図原簿には、２度の空白期間がある。
「青春の輝き」の短い期間と、２年弱の空白の期間の２度。
彼自身に問うても何も答えず、当主自らがその記録を抹消してしまった。
正確に言うと、23 ヶ月と26 日と7 時間。
彼は生ける屍になり、このまま本当に儚くなってしまうと関係者は誰もがそう思った。

昏々と眠る。
そうかと思えば、何日も眠らない。
浅い眠りに浸るかと思えば、眠れないと言って睡眠導入剤とビタミン剤などの複合混液を点滴しながら、煙草を吸い続ける。
睡眠薬を常用しながら、大量のアルコールを摂取する。
時々、呻くように涙を流し始めるかと思うと、何日も食事を摂らない。

その一方で、思いついたように仕事に取り憑かれ、前代未聞の論文をいくつも執筆したかと思うと、その検証論文は発表しない。

あれほど愛した薔薇の品種改良をぷっつりと止めてしまう。
ある時期になると、アルディ家の薔薇の香りが耐えられないと言って、生物が存在しない地を転々として過ごす。

各地を転々とするのに、日本の決まった場所に足繁く通う。

帰って来るといつも気鬱な表情で、眠らない日々を過ごす。
荒んだ生活と言うにはもっと荒廃した状態の彼は、このままどこまで堕ちるのかと声を出す者も徐々に減っていった。

————彼は生きながらに死んでいる。

そう言われていた。

彼がこの状態になったのは２度目だった。

１度目の記録の断絶の後、彼はこの状態になった。
しかし、それでも普通の生活は送れていた。

でも今度ばかりは･･･次期当主を立てなければならないと、親族会議の開催通知が各々届く頃。
彼の生活といえない日々が、23 ヶ月と26 日続いた翌日の事だった。

彼の記録がまた、書き足され始めた。
間もなく･･･「その日」から2 年が経過しようとしていた。

日本式でいう「三回忌」に出席した。
その際の彼のやつれぶりについて、法要を主催した親族の者達は、酷く驚いたという。

どうしても出席させて欲しい。

費用をすべて持ち、法要や供養のための親族の渡航費用をすべて負担し、今後の経済的心配については一切心配しないように、と約束するフランスの若き実業家の憔悴ぶりに、彼らは声を発することが出来なかった。

そこに幽鬼のように座る彼は、「フランスの華」と呼ばれた彼とはまるっきり別人だった。

日本の夏は湿気が多く、高温多湿な気候が彼の不健康な躰を刺激した。
自家用ジェット機で彼は日本まで直行したが、降りるなり、陽の光に当てられて脳貧血を起こした。
彼の長期間にわたる不摂生の結果だった。

それでも･･･這ってでも行くと言ってその意志を覆さないフランスの華を･･彼らは黙って見守り続けた。
彼女と彼の、心根の優しさは、彼らだけに備わったものではなく、彼らの一族に伝わるものだと知り、シャルルは少し安堵した。

来て良かった、と言った。
幸せな一生だったのだね、と思うと少しだけ･･･微笑むことが出来た。
そこに行っても、彼らに会えるわけではないのに。

シャルルは足繁く･･･日本に通った。
彼らの育った日本の空気を吸いたかった。

彼らの愛が成就した地を‥そして彼が彼女の手を離した場所を訪れて・・・

何度も涙を流した。
何度も嗚咽を漏らした。

そこに躰も魂もないとわかっているのに、行かねばならないと思った。
あのときに戻りたいと。
戻れるものなら、戻りたかった。
あとのき、手を離さなければ彼女はもっと長く生きられたのかと思うと、彼の苦悩は増すばかりだった。

彼と彼女が‥‥墜ちた場所は日本ではなかった。
フランスのパリ行きの飛行機だった。
シャルル・ドゥ・アルディの結婚式に向かう途中の飛行機事故だった。

パリ経由で、ランスに向かう途中で‥‥事故は起きた。
墜落事故で、たくさんの死者が出た。
生存者はいなかった。
彼が知ったのは挙式の後である。

そして‥‥そのまま発狂した。

純白のタキシードを着たまま‥‥戻れなくなった。
正確には、こちらとあちらを行き来する、不安定な魂になってしまった。

それを知らせなかった一族を恨んだ。
最も近い場所に用意した、彼らの場所に、彼と彼女は現れなかった。

なぜか、と理由を問うた時にはもう遅かった。
彼の中の狂気は目覚めてしまった。
何かをわめいたような気がするが、それも覚えていない。
彼の誇りがそうさせなかったのか、それとも‥‥誇り故に彼の記憶を遮断してしまったのか。

今となってはもうわからない。

それっきり‥‥彼の記憶は混濁したままだった。
時折思い出す記憶は、細切れだ。

かつて、彼女に「オレはオレを失うことはない」と言ったのに。

彼は、自分を失った。
魂が肉体から離れてしまった。
彼の魂をつなぎ止めていたものを失ってしまったから。

死ぬほど愛している。

そのとき、はっきりと解った。

死ぬほど愛しているのに、彼女を傍らに置くことが出来なかった。
彼女が愛していると言ったのは、シャルルではなく、太陽のような親友だった。

好きだから。

独り占めしたかった。でも、愛しているから独り占めできなかった。
愛のパラドクスに悩み‥そして成就する愛だけが最高の愛ではないと知った。

今でも、名にかけて言える。

君を‥愛している。
君を永遠に愛している。

ああ･･･はやくそちらに逝きたい。

このまま･･･深淵に潜む者として息づくことさえ、煩わしかった。

君は酷いよ‥オレをこのまま生かしておくなんて。
はやく、迎えに来てくれないのか。
今年も･･･君の魂が戻ってきているかもしれないと期待して、日本にやって来た。
でも君は‥オレを連れて行ってくれない。
安らかに、彼の親友と眠れているのだろうか。
この湿気にむせぶ空気が、あの惨状を思い起こさせる。

焼け焦げる匂い、腐臭、人々の哀しみの声、聞こえないはずの最期の声･･･
最期に皆で書いたであろう、遺書の切れ端‥乱れた文字の切れ端が、吹雪の様に舞う。

その中に、日本語がないか、彼は跪いて何度も探した。
ほんの僅かな紙切れさえも‥彼と彼女の痕跡さえも、シャルルには遺されなかった。
彼らの遺体も上がらなかったし、遺品もわからなかった。
ブラックボックスも回収できないほどの、荒れた惨状だった。
彼の財力とコネクションを持ってしても、彼と彼女の痕跡を見つけることは出来なかった。
なぜ墜ちたのか・・・原因さえもわからなかった。
わからないというのは最も不幸な死因だ。

医師でもあるシャルル・ドゥ・アルディはそう思った。
人間の最終的な死因は、すべて「心不全」である。
心臓が正常に機能しないから、死ぬ。
でも‥彼と彼女の死因を「心不全」で片付けられなかった。

細切れになった遺体の収容に立ち会った。
それでも、彼らを見つけられなかった。
彼はそれ以上、そこに居られなかった。
本当にその便に乗っていたのかどうか、何度も何百度も確認した。

でも･･･彼らの搭乗を見守った者が何人もいた。
便が間違ったとか、スリにあってパスポートを紛失し、本人でない者が乗ったとか･･･
そういう浅ましい期待をする情報は皆無だった。

収集すればするほど、彼らがその便にいたことが明確に
なった。

調べれば調べるほど、生存の可能性がゼロに近くなった。

･･･彼はそこで、また意識を失った。

生きているのか死んでいるのかさえわからない状況は、不幸しか呼ばない。
生きていればどこで何をしていても良かった。
生きてさえいれば･･･
シャルルでない、彼の親友と一緒に人生を歩むことを選んだ彼女の幸せを願うことが出来た。

彼女の幸せを思うだけで倖せになれた。

やがて、彼女が子供を産んだと聞いた。

彼は真っ先に祝福のメッセージを送った。
苦しかったけれど、彼女が幸せであれば、生きていればそれで良かった。

彼が生きることはつまらないと思っていた人生を、彼女は生きていることは奇跡で、それだけで素晴らしいと教えてくれた。
だから、自ら命を絶つことは決してしないと･･･言った。

それなのに。
それなのに。

彼の魂を躰につなぎ止めていた、彼女が逝ってしまった。

今でも、夢に見る。

決して夢を見ないのに。
彼は夢を見る。

夢と思いたい幻想の世界に浸る。
それは夢ではなく･･･彼の妄念と空想の世界でしかなかったのに。
夢と思いたかった。
ひょっとして･･･今までのことは夢ではないか。
ランスの教会から･･･やり直せるのではないか。
そして、彼が遡ることの出来るもっと昔まで･･･あの、彼女の手を離してしまったあのときまで、彼は遡り、やり直せるのではないかと期待した。

目を瞑り、深い眠りに入れば、目を開いたら、彼はもう一度やり直しの時を迎えられるのではないかと期待し･･･そしてその都度失望する。

そのときのことは詳細に覚えていない。
その報を聞いて･･･気がついたら、彼は現在の状況だった。
自らの結婚式が終わった後。
彼と彼女の姿が見えないことに気がつき･･･

未だに、彼と彼女の遺体は回収できていない。

シャルル・ドゥ・アルディをもってしても。
彼女を見つけることが出来なかった。

沈んでしまった地を‥‥彼はもう見ることが出来ない。
その地を思い浮かべるだけで、心が遠く飛ばされた。

法事の席で、脳貧血を起こして倒れたところまでは記憶している。

そして‥‥ぱしゃり、と何か冷たいものが顔にあたり‥‥

彼はゆっくりと、瞼を持ち上げた。

何か液体が彼の頬を打った。

その瞬間‥

彼は思い出していた。
彼女の声を。
そして、あの高い手すりから飛び降りた時の自分を。

初めて‥恋に堕ちた瞬間を思い出した。
彼の躰も文字通り墜ちたけれど、恋に堕ちるあの歓びを思い出した。

‥‥彼女の名前を呟いた。
自分の瞳から‥‥滴が流れ落ちて、ゆっくりと重力に従って流れ落ちる感触を感じた。

苦しいよ。
苦しいよ。

早く、迎えに来てくれ。
オレを‥‥解放してくれ。

どうして君はそこまでして生きろとオレに囁くのか。
オレは君なしでは生きられない。
解っているだろう。
それなのに、オレに生きろと言うのか。
死までの退屈しのぎ、と嗤った時代が恨めしかった。

今は苦痛で･･･生きる事が苦痛で仕方がない。
退屈しのぎどころでない。
彼は1 分1 秒が･･･苦痛という針に刺されている感覚に襲われていた。

いっそのこと永遠に狂うことが出来れば良いのに。
死ねないのなら･･生きたまま死んでいたい。

死ぬまで死んでいたい。

物憂げな瞳を開いた。

瞼を開く前に、甘い香りがした。
幼児特有の甘い香りに、彼はゆっくりと目覚めた。

「･･･だれ？」

低いテノールで、彼は呟いた。
天井の照明があまりにも眩しくて、彼の色素の薄い瞳は目が慣れていなかった。

「あなたはだあれ？･･･てんし？」
舌足らずな言葉が、彼の頭上から降りてきた。

その声に･･どきりとする。
彼女に最初に会ったときの声音に良く似ていた。シャルルはぎょっとして目を見開いた。そして躰を持ち上げる。

一瞬･･･目の前が歪んだ。
でも、彼は、その声の主を捉えた。

･･･彼と彼女の子供だ。

一目で、わかった。

あまりにも･･･あまりにも酷似しているから。
シャルルは言葉を失った。
酷薄そうな唇を少し開き･･･彼は彼女を凝視した。

黒いワンピースを着ていた。
黒いタイツを履き、そして髪の毛は黒いゴムであったけれど、初めて彼が会った時の彼女のように‥髪のサイドを緩やかに留めていた。

あどけない‥まだこどもだった。

薔薇色の頬に、陶磁器のような肌。
そして、まだ関節の節々がこどもであることを示すかのように、掌くぼみが骨張らず、へこんでいた。
柔らかな幼児特有の髪は強い癖髪で、波打っていたが、茶色の瞳と茶色の髪が･･･彼女そのものだった。

膨らんだ唇に、黒目がちな瞳・・・好奇心旺盛なきらきらした瞳。
頬は丸く人を見据えるような視線を時々流して寄越す。
それは彼の視線だった。
最も特徴的なのは･･･何より、子供であるのに、その瞬きの速度が遅いことだ。
････彼のこよなく愛した彼女の仕草の特徴だった。

「君の名前は？･･･オレはシャルル・ドゥ・アルディ。シャルル。」
「しゃ・・・？」
促音便と撥音便がまだ上手に発音できない年頃だった。
「シャルル」
彼はゆっくりと発音した。
天使の名前を聞いて、こどもは何度か自分の口内でくり返し口ごもった。

「君の名前は？」
シャルルが躰を起こし、ゆっくりと彼女に聞いた。
「てんしさんは、かなしいの？」
こどもはそう言った。

シャルルは笑った。
自分の涙を見て、彼女がそう言ったのだと思った。

「かなしい･･･くるしい･･･」

そう呟くと、彼女はシャルルの顔をのぞき込んだ。

「てんしさん。そんなになくと･･･てんごくにいけないよ。なみだは･･･てんごくにもっていってはいけないんだよ。」
彼女はそう言うと、彼の頬をそっと･･･おさえた。
彼は日本式の床の上に体を起こしていたので、ちょうど彼女と同じ目線だった。
こどもの茶色の瞳を見て･･彼は溢れる涙を抑えることが出来なかった。

間違えようがない。
間違えるはずがない。

彼女は･･･愛した人の娘だった。

年齢からみても間違いない。
流感にかかり、飛行機に乗せられないから、娘は置いていくと彼女は残念そうに言っていた。
彼と彼女の･･･彼が愛した者達の末裔が、ここに居た。
彼女が自分を天使と言ったけれど･･彼は彼女が天使に見えた。
彼女はシャルルにそっと近づくと･･･持っていたタオルを、彼の頬に押しつけた。
水がしたたり落ちていた。

彼女は･･･意識を混濁したシャルルをみて、咄嗟にタオルを水で浸し、彼に押し当てようとしたのだと気がついた。
医師を志していた、彼の娘らしかった。
まずは、冷やせ。

そういう知識が、この幼い命に教え込まれていたのだと････医師であるシャルルは思った。
でも、握力が足りなくて、彼女は水浸しのタオルを彼に押し当てたのだ。

「最初の質問に答えてない。･･･君の名前は？」
天使は笑った。
ああ、あの人の笑い顔だ･･･シャルルはまた､涙を落とした。

「クロス・ヒカルです！ヒカルは『昶』と書きます！えいえんのひかりといういみです！
おとうさんはカズヤで･･･おかあさんはマリナです！いまは・・てんごくにいます！」

彼は泣いた。

「てんごくにいけないよ。ないたらいけないよ」
と囁き続ける彼女を抱きしめた。

その命の光に･････彼はすがった。

そして･･･フランスの華が昏倒したと聞いて、緊急手配された救急車が到着する頃･･･
彼は、彼女を抱きしめたまま、はらはらと涙を流し･･･

「彼女を連れて行く」
と言い放った。
その眼光は鋭く･･･かつてのアルディ家当主の有無を言わさぬ口調だった。

その後、シャルル・ドゥ・アルディがどうやって彼女の後見人や血族を説得したのかは系図原簿には記載されていない。

故人の一友人でしかない外国人の彼が、ヒカルの監護権をどうやって取得したのかは、定かでなかった。

しかし･･･意外にも賛成したのは、母親の姉妹だった。

「彼女に最高の教育を･････」
それが理由だと伝えられたが、彼女が行きたい、と言い出したという。
そしてアルディ家の熱心な説得に、最後はウィと言わざるを得なかった。

決して、不自由な不幸な生活を送っていたわけではなかった。
愛に溢れ、毎日を充実して過ごしていたと聞いている。
けれども、ヒカルは「てんしさんがないているから」と言って、いともあっさり渡仏を決意してしまった。

それに、彼がどれだけ亡き夫婦に関わり合いが深かったのか、誰もが知るところだった。
もちろん、忘れ形見の彼女を手元に置きたいという血族も居た。

それをどう調整し･･どう説得したのかは、シャルル・ドゥ・アルディの片腕に聞かなければわからなかった。

「どんな方法を取っても彼女を必ずアルディ家に迎えろ」

それが当主の、長らく空白期間が空いた活動再開の最初の命令だった。
彼の荒んだ生活が一転した。

彼は‥‥眼光鋭く開口一番そう命じた。
シャルル・ドゥ・アルディの、当主としての発言は絶対だ。
変更も修正もない。予定は確実な直近の未来でしかない。
長期の休みには必ず彼女を日本に帰すと約束した。

「まるで、冥界の王のようだ」
彼は少しだけ笑った。

神話の冥府の王は、妻を手元に置きたくて、それでも悲しむ彼
女の姿に耐えられず、一年を地上と冥界とわけて住まうことを許した。

彼は確かに冥王だった。
黄泉の国からやってきた、月夜見の異名を持つ冥王のような微笑みをした。

そして様々な手続きを経て‥‥その年の暮れに、彼女はやって来た。
パリの、アルディ家に。
彼は、最後の楽土を手に入れた。
二度と手放すつもりはなかった。

就学前の‥幼い彼女は冬の朝、やってきた。

時差があったから、眠そうにしていた。
頬を赤くして‥少しだけだるそうにして、彼女はやって来た。

「ようこそ」

シャルルは前日から眠ることが出来なかった。

ここ数ヶ月、ようやくこれまでの生活から切り離された日々を送ることができた。
広大な敷地に佇む屋敷の主は、自ら玄関で出迎えた。

彼女は少しだけ‥‥驚いたように、シャルルを見つめた。

彼女の手を引いている女性と彼を眺めて「てんしがふたりいる」と言った。
「ああ、彼女は従姉妹だから。似ているだろう。‥‥おいで。」

彼はそう言って、彼女からヒカルの手を引き継いだ。
やわらかいあたたかい小さなてのひらを、そっと握り替えした。

「あなたが幸せになるのでしたら」
従姉妹はそう言って、ヒカルの柔らかな髪を撫でると、仕事に戻ると言って帰って行った。
そして、彼はゆっくりと微笑んだ。
美しい、綺麗な微笑みだった。
もう何年も見せたことのない微笑みだった。
「君の名前は？」

その問いに、あの夏の日と同じように･･･ヒカルは答えた。

「クロス・ヒカルです！おとうさんはカズヤで･･･おかあさんはマリナです。
今はふたりはてんごくにいます。
いつかあいたいから･･･ヒカルはなかないでいいこでいます。
でも・・・」

「でも？」

彼女はちょっとうつむいた。

「こんどから。おとうさんはしゃ･･･しゃるるです・・・」

「昶」

シャルルは、彼女の目線まで腰を落とした。
白金の髪が揺れた。
かつて、彼女の母が、美しいと褒めてくれた髪だった。
てんしさん・・・・？
昶が呟いた。

「誰に言われたかわからないが、君の父はカズヤ・クロスしかいない。
母も･･･ひとりしかいない。」

「･･････ひかるはよくわからない･･･」

「わからなくても良い。でも、魂に刻んでくれ。」

彼は穏やかにそう言った。
茶色の瞳をのぞき込んだ。彼女が最初に、シャルルにそうしたように。

「オレをお父さんと呼んではいけない。
君の父はひとりだけだ。
そして･･･オレは君の父にはなれない。
かわりをすることはできるけれど、それはあくまでもかわりでしかない」
・・・・・君は君が希望する限り、クロス・ヒカルだ。永遠の光と名付けた両親を忘れてはいけない。」

青灰色の物憂げな瞳を、彼女の茶色の瞳に近づける。
彼女の瞳に、自分が映るだけで･･･かつての記憶を揺さぶり起こされた。

それだけで･･･苦しくなる。
いいね、と言うと、ヒカルはこくん、と頷いた。

「さぁ･･･それではアルディ家にようこそ。
ヒカル。
君を歓迎しよう。
言っておくけれど、オレは君をとことん甘やかすからね。
覚悟してくれ」

彼の宣言通り。

シャルル・ドゥ・アルディは、ヒカル・クロスを甘やかした。

朝の弱い彼の部屋にヒカルが訪れ、彼の目覚めを促すのが彼女の唯一の役割だった。
彼が深く･･･けれども浅く眠る、厚いカーテンに垂れ込めた重苦しい部屋の中に、彼女が飛び込むだけで清廉な空気に満たされた。
教育係の彼の従妹に連れられて、毎朝、最高の状態の薔薇を片手に持ち、やって来る。

「てんしんさんはおきていますか」
と言って、やがてはひとりで訪れるようになった。

朝が待ち遠しくなった。

眠れない夜を過ごしたときは、まんじりとする夜明けが恨めしかった。
眠れないのに、夜がもっと続けば良いのにと相反する気持ちを持った。

・・・夜の間だけ、彼は彼女の事だけを考えることが出来たから。
今は・・・夜明けが待ち遠しい。
うつらうつらする朝の微睡みの中、自分を「天使」と呼びかける本当の天使が彼に舞い降りる。

彼は、朝が待ち遠しいと思えるようになった。
これまでにないくらいの深い眠りを味わう一方で彼の眠りはヒカルの到来を待ちわびて彼女が来訪する時間には浅くなる。

深くて浅い眠りが・・・彼の蝕んだ体を徐々に清浄に戻していった。
彼は、これまで締め切っていた彼の私室の鍵をかけなくなった。

重い金属でできた扉のノブをようやく回すことの出来るくらいの幼い彼女のために、彼は施錠しなくなった。

ヒカルは比較的早く、屋敷の生活に順応した。
子供の順応力とは驚異的だった。
フランス語と日本語の混ざった生活にも慣れて、毎日を過ごす。
朝は決まった時間に起きてシャルルを起こす。
一緒に朝食を摂る。

彼は朝が弱いので、朝食は摂らない。
ヒカルが食事を摂るのを黙って見つめ、テーブルマナーや今朝
のメニューについて、根気よくヒカルに細かく教えていく。

食後はシャルルが外出するのを玄関で見送り、「今日もてんしさんは出かけるのね」と言って笑って送り出す。

ヒカルはしばらくの間、「いってらっしゃい」とも「待っている」とも言わなかった。
その言葉とその動作を覚える前に、ヒカルの待つべき存在はこの世から姿を消してしまったから、彼女は随分後になるまで、「いってらっしゃい」という言葉を覚えることが出来なかった。

ただ、教えられた、手を振るという動作だけを、意味もなく行っていた。
ひょっとすると・・・彼女と両親の最後の言葉はその言葉だったのかもしれない。

覚えないのではなく、覚えたくないのかもしれない。

そのかわり、彼女は「またね」と言った。

シャルルは･･･胸が詰まった。
それはヒカルの母の口癖だった。
いつも、あの人は、別れの時にはそう言った。

またね、また会いましょうね、また・・・･会えるよね。

さようならとは決して言わなかった彼女のことを思うと･･･彼はヒカルの姿が見えないところでひっそりと、涙を流した。

あのとき。

電話で彼女はまたね、と言った。
それが最期の会話になった。

当日は、ぎりぎりに到着するので、ゆっくり話が出来ないと恐縮していた。
シャルルは、自分からよく見える位置を確保したから、構わないよ、と素っ気なく言うと、彼女は･･･あなたの幸せな姿を見に行くのだから、もっと幸せそうに言って、とシャルルに電話口の向こう側で笑って言った。そして、またね、と言って回線を切った。

またね、と言ったのに。
またね、と言ったのに、君は逝ってしまった。

これほどまでに愛らしいヒカルを置いて。

―――オレを置いて。

涙は天国に持って行けない、だから泣いてはいけない、とヒカルは言ったが、彼の青灰色の瞳から流れ落ちる滴は、彼のこれまでの澱を洗い流してくれた。

ヒカルは彼の外出を見届けた後は、日中はフランス語を覚えるためにフランス語と日本語の混じった会話をしながら遊び、昼寝をし、そしてシャルルの帰りを待つ。
夜は定時に帰るようになったシャルルの帰りを待ち、食事をし、そして、プレイルームで彼と過ごしながらいつの間にかまどろむ。

シャルルは眠ってしまった彼女を抱えて、彼が自らしつらえた子供部屋に運んでいく。
そして、ベッドに横たえてヒカルを柔らかな毛布でくるみ、彼女をさらに深い眠りに連れて行く。
彼はそれからまた仕事に戻り、時にはもう一度外出することも
あった。

これまでの激務に加えて、ヒカルに合わせた生活を続ける彼の負担は大きくなったはずなのに、
彼は滅多に浮かべることのなかった微笑みを見せるようになっていった。
静かで単調で･･･穏やかな日々が繰り返された。

ヒカルがどれだけ愛されて育ったかがよくわかった。
彼女は好奇心旺盛ではあったが、猜疑心がない。
卑屈にもならず現実を受け止めている。
無垢な魂とはこういうことを言うのだと思った。
親の記憶はほとんどないはずだった。

事故の後、ヒカルをここまで育てた、シャルルが愛した女性の家族達は、本当に･･･ヒカルと彼女を愛していたのだと思う。
自らが親だと刷り込んでしまえば、楽であったはずなのに。
記憶を塗り替えてしまうことはせず･･･彼らはヒカルに本当の親のこと、本当のことを教え続けた。

彼女が受け入れるかどうかは別として、彼らは教え続けた。
そして、いつか会えるからそれまで生きろとヒカルに教えた。

･･･その昔、彼女がシャルルに言った言葉と同じだった。

これほどまでに愛くるしい彼女を手放した彼らの心中を想像する。

でも、シャルル・ドゥ・アルディはヒカルを日本に帰すことは考えなかった。
考えられなかった。･･･いや、考えたくなかった。
取り上げたと思われても良かった。
それでも･･･ヒカルがどうしても必要だった。
穏やかな人生は自分にはありえないと思っていた。
こういう生き方しかできなかった。他の生き方を知らなかった。
―――運命のあの人に会うまでは。

そして彼女の愛は彼には向けられなかった。
一時、成就したかに思った愛を･･･彼は友に戻した。
二人の惹かれる様を見て、彼は彼女を送り出した。
･･･彼は独り占めできないくらい彼女を愛しすぎてしまった。
一瞬だけ味わった躍動する生を謳歌した期間は、彼ひとりだけのものにすることにした。
誰にも暴くことができないように、系図原簿から活動記録を削除した。

そして今･･･彼はあの人と友の忘れ形見を目の前にして、どうにもならない息苦しい想いを蘇らせた。

どうしてもあの人を思い出してしまう。
どうしてもあの人を愛していると思い知らされてしまう。

それ故に････自分の今を顧みることを躊躇う。

しかし彼は戻ってきた。
戻って来たことによって新たな苦悶を知った。

「明日は外出だな。･･･寒くないように」
彼はそう言うと、ヒカルは寒くないよ、と言って笑った。
頬がまだ赤かった。

先週、ヒカルは熱を出して2 ～ 3 日寝込んでしまった。
慣れない生活にからだがついて行けなかったらしい。
シャルルは、復調したばかりのヒカルの体温管理をしておくように、と傍近くに佇む使用人に命じたつもりだった。
それなのに、彼女は自分は寒くないとシャルルの会話に返答をした。
フランス語の会話だったのに。

彼女の聴力と語学力は素晴らしかった。
彼女が寝込んでいた間は、彼は激務の合間、どうしても着手しなければならないいくつかの案件を処理した以外は完全にオフにし、ヒカルに付き添った。

こどもの発熱は良くあることだから、とわかっては居たが、彼はどうしても彼女の傍にいたかった。

自ら指示して作らせた粥を、やけどしないように木製のスプーンで彼女の口許に運び、汗を拭き、こまめに検温する。

彼女の薔薇色の頬が赤くなり、苦しそうに唇を開いて、ぽつりと「おかあさん･･･」と言った時には、彼は咄嗟に彼女の柔らかい手を強く握った。
誰も知り合いのいない異国の地に来て、彼女が漏らした最初の嘆きだった。
シャルルはその言葉を聞き････そして「ごめんよ」と言った。

端正な頬が歪み、青灰色の瞳の端から、美しい涙が一筋二筋、漏れ墜ちた。

ヒカル。
オレは君の人生を奪った。
いつか、本当のことを知って、オレを恨んでも良いよ。
君の父と母の愛を、君が受けるべき両親の愛を奪ったのはオレだ。
君の両親は、オレが呼び寄せなければ死ななかった。
それでもその哀しみを受け入れて、両親の愛と違った愛で溢れた日々を過ごしていたのに、オレが君を日本の親族から引き離した。

一生分の夢を見た。

オレはあの人にそう言った。
でも･･･あの人はもういない。
いないと思いたくないけれど、会えない。
一生分の夢を見たと言ったのに、オレはまた夢の世界に入ってしまった。
まだ、夢を見ているのかもしれない。
決して夢をみないのに。
時々、あの人の声を聞く。

そして一瞬、夢の世界に連れて行かれる。
あの、懐かしい日々に連れて行かれる。
そして･･･
決してシャルル・ドゥ・アルディが思わない「もしかしたら」と言う言葉を繰り返す。
もしかしたら･･･と。

もしかしたらはありえないのに。

もしかしたら、あの人は生きているかもしれない。
もしかしたら、ヒカル、君はオレの子供として生まれていたのかもしれないとさえ妄想を抱く。

ヒカル。
これから君が受けるべきだった全部を君に与えよう。
でも、君の両親だけは返してあげられない。
これはオレの贖罪だ。

オレの一生分の愛を君に注ごう。

一生かけて、償う。
一生かけて････君に幸せだと言わせてみせる。

「あしたはおでかけ？」
「そう。･･ヒカルも一緒だ。」

シャルルは微笑んだ。
夕食後のプレイルームで、彼女は絵本を見ていた。
彼の･･･最も好きな本だった。「幸福の王子」だった。
挿絵を見て「てんしさんのようだ」と言った。
彼は微笑んだ。
「昔、オレが好きだった本だ。ヒカルには･･･少し早いかな。」
「そんなことないよぅ」
ヒカルが頬を膨らました。
その様子も･･･なにもかもがあの人を思い出す。

彼女は日仏ハーフだった父親と日本人だけれど非常に色素の薄かった母親の特徴を引き継いでいた。
茶色の瞳は、あの人よりずっと･･薄かった。けれども茶色の髪はあの人より、少しだけ濃かった。
そして強いうねりのある癖髪だった。
大きなアーモンド型の瞳、薔薇色の頬に、ふっくらした唇。
日本人の特徴である、肌理の細かい象牙色の肌。
柔らかい爪。
けぶった眉。
長い睫の下で影が踊るくらい彼女の睫は長かった。

あどけない表情はくるくる変わる。

しかし･･･
彼女はシャルルを「てんしさん」と呼んだ。
決して「シャルル」と言わなかった。
発音は完璧なのに、と従妹は言っていた。
けれども、彼女はシャルルの名前を呼ばなかった。
よほど･･･「これから父親はシャルルになる」と言い聞かされてきたのだろうか。

それを思うと胸が痛んだ。

彼女の無言の拒否のように思えた。
彼を否定しているかのように思えた。

ああ････
天使を得てなお、オレは満足できずに墜ちていく･･･
彼は青灰色の瞳をゆっくり閉じた。
吐息を漏らす。

しかし、次には、シャルルは、彼女にゆっくりと優しい声音で言った。

「そう。あしたは出かけよう。ヒカルの好きなショコラを買い
に。それから･･･少し散歩しよう。」
ヒカルが歓声をあげた。
両手を口元に持って行き、顔を上気させた。

「てんしさんとお出かけ！」
「ああ、だから、今日は早めにお休み。」
「はい！てんしさんもあしたははやおきだね！」

そんなに早い時間から店は開いていないよ、と彼は言おうとして･･･そのまま微笑むだけにした。

そのときのことだった。

部屋の戸口で･･･声がした。

「‥‥それはなに？」
シャルルは扉に目を遣った。
そして、目を細める。

「ルイ‥‥明日の帰りと聞いていたが。」
ノックくらいしろ、と冷たい声でシャルルは言った。

「息子が自宅に戻るのに、予定を繰り上げてはまずいのかな。」
彼も冷たい声で応えた。
ルイ・ドゥ・アルディは、シャルルと良く似た顔で、微笑んだ。
しかし、青灰色の瞳は笑っていなかった。

「ただいま、お父様」
彼はそう言って、ヒカルに視線をやり、察したように日本語でそう言った。

ルイ・ドゥ・アルディは冷ややかに父親を見た。
シャルルも同じように‥距離を置いて、彼と良く似た息子を見た。

「監護権を取得したので、今後彼女はこの館の住人になる。
彼女はヒカル・クロス。
　‥‥ルイ、妹と思って遇するように。」
「僕に妹ですか」

皮肉たっぷりに、彼は言った。
青灰色の瞳に、金髪の彼は笑った。

シャルルが白金色の髪色だったのに対し、彼は完全なる金髪だった。
どちらかというと、彼の従妹の髪色だった。

名前のルイに相応しい色だった。

フランスの太陽王の名前の通り、太陽の髪を持っていた。
甘い金の色を持ちながら、彼の瞳は冴え冴えとしていた。
ルイは‥‥星辰（※注　天体）の子と呼ばれた。

太陽の髪と冴えた月の瞳を持つ、楽園からやってきた最高の子供を、シャルルは冷たく見据えた

。

「父上。あなたは、僕と同じように･･･自分の凍結精子を使って、誰かに子供を産ませたのですか？･･･あの運命の人に？あなたも酔狂な人だ。」
「ルイ！」
シャルルが声を荒げた。

決して怒鳴らないシャルルが声を大きくしたので、ヒカルがびくり、と肩を震わせた。
彼は止めなかった。

「冗談ですよ。話は叔父上から聞いています。」
帰宅したばかりの彼は、まだ上着を着たままだった。

焦げ茶の千鳥格子の揃いを着て、彼は面白そうに室内に入ってきた。
そして、入り口近くのソファに腰を下ろし、じっと･･･ヒカルとシャルルを見た。

彼女に聞こえるように。
ルイは、面白そうに身上を話し出した。
「よくよく･･･僕は面白い運命を味わうことになりそうだと思い知りますよ、父上。
だってそうでしょう？
遺伝上の母は、躰の線が崩れるからという理由で代理母に僕を産ませ･･･遺伝上の父は僕が生まれてからもしばらく認知しなかった。
結婚することで運命の人と訣別することが怖かった情けない父親を持つ僕は、相当幸せ者ですね。
生まれて何年も経過してからようやく婚姻にこぎつけたのに、今度は挙式当日に精神錯乱を起こした夫から、離婚を申し出られた母上は、少しばかり哀れですよ。
・・・哀れ。
この僕が哀れと感じるくらいです。
けれども彼女は卵子を提供しただけで元アルディ夫人という肩書きを得たわけですからね･･･どっちもどっちでしょうか･･･
･･･僕を生み出すことが結婚の条件だった、遺伝上の母とは結婚式の翌月に離婚し･･･あなたの特質を損なわないで生まれてきた僕を･･･寄宿学校に入れて、あなたはどこかの国の古典物語に出てくるような登場人物のまねごとですか。」

「その言い方はあいつ譲りだな」
シャルルは怯まなかった。

彼の遺伝子を半分受け継ぐ、この世で最も優良な種と言われる星辰の子に反論した。
「凍結精子を使って勝手に出産させたのは、一族の決定で、オレは認めていない。
突然5歳になろうかというこどもを見せられて、認知しろと言われても容認できない。
それでも‥‥お前を認知するために、婚姻を承諾したのはオレの意志だ。」

ルイ・ドゥ・アルディは、かつての彼と同じように、理知的な瞳でシャルルを見据えた。

彼と同じ年頃の時に、「幸福の王子」と読んで欲しいとせがんだシャルルの面影は、彼にはなかった。
老成した瞳と、皮肉をたっぷりの微笑みが‥‥シャルルの半身であり、ルイの教育係である彼を彷彿とさせる。

「叔父上のことを悪く言っても、所詮はあなた方は同じだ。
同じ遺伝子だ。」
彼は肩をすくめた。

「まぁ、生まれたことも知らなかった両親より、生まれたときから実験材料と言い切って僕に最高の教育を受けさせてくれた叔父上の方が‥‥まだ良いね」
「お前は相当お喋りだな」

シャルルは立ち上がった。

「確かに、ルイ。お前はオレの息子だ」
シャルルはそう言った。けれどもその視線はヒカルに向けていたものと全く違っていた。

「最高の栄誉も当主の座も‥‥いずれ明け渡そう。
しかし、今は駄目だ。
お前は‥‥だんだん‥‥人でなくなっている。」
「人でなしに言われたくないね」
「ルイ。」
シャルルはため息をついた。

彼との話はまったく堂々巡りで、何を言っても伝わらない。
そして、ルイは‥‥ヒカルを見やると、面白そうに、天使のようなうっとりする微笑みを浮かべた。
天使なのか悪魔なのかわからない、蠱惑的な微笑みだった。

「ヒカル。･･･僕はルイ。
哀れな父の愛玩物として、ようこそお越しくださいました。
　･･･心より歓迎しよう。」
ヒカルにはその言葉は理解できなかったようだ。

ルイ、と繰り返した後、「てんしが増えた」と言った。
ルイは可笑しそうに言った。
「父上。あなたは･････高い知能を持っているのに、どうしてこういうものしか愛でることができないのですか。」

――――その瞬間だった。

ソファに悠然と腰掛けていた、ルイの体が吹き飛んだ。
シャルルが手の甲で、彼の頬を打ったからだ。
まったく、力の加減をしなかった。
高く音が鳴り、ルイはソファから体を落とした。

「てんしさん！」
ヒカルが叫んだ。
「ルイ。それ以上の侮辱は･･･アルディ家当主を侮辱したとみなす。」

侮蔑の表情で、シャルルはルイを見下ろした。
彼の手の甲も、赤く腫れ上がった。
しかし、ルイは打たれた頬を少し抑え･･酷薄そうな唇を歪
めた。

ぽたり、と唇の端が切れて血が滴り落ちた。

「ああ、良いね･･･退屈しないよ･･･」
彼はそう言って、ゆっくりと立ち上がった。

ルイの高い鼻梁から一筋血が滴り落ちた。
シャルルは我を忘れてしまい、こどもの血管は脆いことを忘れていた。
彼の息子は･･･ゆっくりと起き上がる。
ぽたりと床に血が落ちた。
しかし、ルイ・ドゥ・アルディは自分のポケットからハンカチーフを取り出して、どこまでも優

雅に顔に散らされた飛沫を拭った。

「面白い。」

ルイは笑った。
こどもの顔をした老人が笑った。

「人でないと実父に言われたのに、それでも僕の血は赤い。
おかしいですね。」
「･･･ルイ・ドゥ・アルディ。部屋に戻れ。」
「それは父としての忠告ですか、当主としての命令ですか」

彼が青灰色の瞳をじっと、同じ瞳を持つ年上の男に向けた。

「お前の好みの方で良い。
･･･オレが出て行けと言わないうちに･･･行け。」

ルイは満足げに彼の言葉に肯き、薄く笑うと、ダンスを申し込む紳士のように深く礼をして、黙って部屋を出て行った。

「ルイ」

ヒカルが呟いた。
シャルルは息を大きく吐きだして、ヒカルに向き合った。
今日、ルイが帰ってくることは予定していなかった。

彼はいつも告知した日時ぴったりにしか戻らない。
明日、ヒカルを連れだして、そのまま日本に一度戻すつもりだった。
ルイはその後帰宅し、しばらくの滞在の後はまた寄宿舎に戻って･･･ヒカルとは当分顔を合わせない算段だった。

「･･･ヒカル」
『幸福の王子』を胸に抱いたままの、ヒカルに声をかけた。
彼女は、茶色の瞳でルイに出て行った扉を見つめたままだった。

「ヒカル」

彼は、もう一度呼びかけた。
彼女を驚かせてしまった。
いくら幼い年齢だと言っても、今の剣呑な雰囲気はわからないはずがない。
‥‥だから見せたくなかったのに。
2 度、呼びかけられて、ヒカルはシャルルを見上げた。

「てんしさんが泣いている。」
彼女が哀しそうに訴えた。

「‥‥ヒカル、オレは泣いてないよ」
「‥‥」
ヒカルは黙ったまま、シャルルの長い脚に寄り添った。
「‥‥ヒカル、説明しておこう」
シャルルは、ソファに座った。ルイと同じソファには座らな
かった。
そうして、ヒカルの腕を取り、両手で肩に優しく手を添えた。
白金の髪が揺れて、彼の精悍な頬が少しだけゆがみ‥‥苦しそうに話を始める。

「彼は‥ルイ・ドゥ・アルディ。オレの‥息子だ。
遺伝上の、ではあるけれど、彼はきちんと籍にも入っているし、母親の実家の後ろ盾もあり、一族の期待を担っている。
この2 年、ほとんど当主の責務を果たさないで来られたのは‥‥彼が跡継ぎだからだ。
‥‥オレはあの一族の当主だけれど、一族はみな、いざというときのために、冷凍精子か卵子を提供する。
オレは‥そんな時は来ないと思っていた。
オレが死んだ後になら何をしてもいいけれど、と軽く考えていた。
将来の臓器機能不全でも起こしたときに、移植培養の過程で使用するときが遠い未来に‥オレが死んだときくらいまでには到来するだろう‥‥若いオレはそう考えていた。」

苦悶に満ちた表情で、彼は囁き続けた。
ヒカルに話すと言うよりは、自分に言い聞かせているようだった。

「いつか、いろいろと‥話すこともあるかもしれないが、今はわからなくていい。
でも、記憶してくれ。
君の若い脳は、すさまじい速度で日々成長している。
だから、きっと、オレの言葉もいつか何かの拍子で思い出すことができる。
そのときまで、秘密の引き出しに閉まっておいてくれ。」

ヒカルは彼の話を黙って聞いていた。

彼女の年齢で理解できたとは思えなかったが、彼女の耳の良さと記憶力の良さに期待した。

「･･･オレが愛しているのは･･･未来永劫、あの人だけだ。･･･
ファム・ファタルは･･･定めた人は、あの人だけだ。」
「てんしさん」
ヒカルがそのとき口を開いた。

彼が長い告白とも告解ともつかないような話を終えて、君も休みなさい、と言って立ち上がったときだった。
「てんしさんが泣いている」
彼女はまた、そう言った。

シャルルはそこで初めて･･･彼女の言う「天使」が自分を指すのではないと気がついた。
「ルイが泣いているって？」
ううん、と彼女はかぶりを振った。

「小さいてんしさんも泣いているけれど･･･大きいてんしさんもないているのね。」
「泣いていないよ。･･･オレと彼は泣くほど･･･情濃くはない。
あいつの顔を見ただろう。
始終･･･微笑んでいる。
冷たい微笑みでいつも嘲笑しているのさ。
オレを含めた周囲の誰も彼も。
自分自身も。」

「涙を流すだけが泣くと言わないよ」

彼女が不意に、滑らかな、大人びた口調で言ったので、シャルルは嘲笑的な笑いを止めた。
青灰色の瞳を大きく見開く。
その口調は･･･あの人のしゃべり方にそっくりだった。
見たままだけが真実ではない。
目と耳と心と･･･五感すべてで真実を見るべきだ、と言った人を思い出した。
今、彼の口から漏れたばかりの、死ぬほど愛していると告げたあの人の口調だった。

彼は呻いた。
あの人の名前を呟く。

「それはおかあさんです‥おかあさんは天国に居ます」
ヒカルがそう言ったので、我に返った。

ヒカル。

彼がもう一度呟く。
はい、と彼女が返事をした。

もう、そこには･･･ヒカルの体を借りて降臨したあの人はもう居なかった。
シャルルが凝視したときにはいつものあどけないヒカルだった。

「泣くと天国に行けないよぅ」
彼女はそう言って笑った。

ヒカルが胸に抱いていた絵本を見た。
「この本はてんしさんのことを書いた本？」

「いいや違うよ････とても象徴性のある本だけれど、その登場人物の誰にもあてはまらない。少なくとも、我が一族は･･･誰も倖せになれない。」
「それなら･･･てんしさんは･･･てんしさんたちは、この本の全部にあてはまるのね」
彼女のその答えに、シャルルは返事をすることを躊躇った。
幼い彼女に切ない問いをされた。

ルイ・ドゥ・アルディが泣いていると言う。
そして自分も泣いていると言う。

あり得なかった。
彼とは会話にならない。
意思疎通もできない。

彼と話していると、昔の自分を思い出す。
そして自分の半身を思い出す。

だから、見たくなかった。見るのが辛かった。
だが･･･ヒカルは初めて会ったばかりのルイとシャルルの喧噪を驚いたり怯えたりするどころか、哀しそうに眺めていた。

そして、その様子を見た後で、これまで感想を言わなかった彼女が、その本を指して彼に問いかけてきた。
シャルルが幼い時くり返し読んだ本の意味するところについて、彼女が語りかけてきた。
まだ、その話がわかる年齢とはほど遠かったのに。

･･･君の娘は･･･いや、君たちの娘は、相当に･･･手強いな。
シャルルは薄く微笑んだ。

「ヒカル。その問答は、保留にしておいてくれ。」
回答を待たせたり、保留にしたりしたことのないシャルル・ドゥ・アルディはヒカルにそう言うと、彼女の小さな額にキスをした。
薄い唇を寄せて、初めて･･･彼女の額に触れた。

これまで、アルディ家の中で･･･長らく、当主の挨拶のキスを受ける者はいなかった。
ヒカル・クロスをとことん甘やかすと宣言した当主は、彼女を抱き上げると、大きな声を上げて喜ぶ彼女に笑いながら「さぁ、寝る時間だ」と言って部屋を後にした。

少しだけ離れた廊下の影で、身を隠すようにして様子を伺うルイ・ドゥ・アルディに彼らは気がつかなかった。

楽しそうな彼らの声と姿を、無表情な顔を貼り付けたまま、黙ったまま窺っていた少年には、気がつかなかった。

「ヒカルを迎えに来た」

そう言ってアルディ邸にやってきたのは、あの人の妹だった。
数々の「行事」の席で彼女を何度か見たはずだったのに、シャルルは彼女の姿を見ると、息が詰まりそうになった。

目の前の彼女は、あの人に良く似ていた。
彼女たち姉妹は良く似ている。

でも、長女と三女は良く似ていたが、次女のあの人は、あまり似ていないと思っていた。
本人も常々そう言っていた。

しかし、こうして対峙する彼女はとてもよく･･･あの人に似ていた。
茶色の瞳に茶色の髪･･･ゆるく後ろで結び、きゅっと唇を結んで、哀しそうにシャルルを見つめる様は、あの人を彷彿とさせる。
酷似していなくても類似していることそのものだけで、彼の心はさざめいた。
彼はそれだけで落ち着かなくなった。

苦しくなる。

彼女の血を引く者が居るというだけで･･･心が乱される。
感情を乱してはいけないと教えられたのに、乱れてしまう。
まだ独身の彼女は、あの人とよく似ている。
若いというよりは幼い。
「青春の輝き」の頃の彼女の雰囲気の良く似ていた。
そして、彼から受けたヒカルの失調の連絡に、すぐさま来仏する行動力は、まさしくあの人そのものだった。

ヒカルが風邪をぶり返して、熱を出してしまった。
予定していた日本行きを取りやめにせざるを得なくなってしまった。
でも･･･シャルルはそれを喜んだ。

彼女がシャルルの傍らに居るのであれば、どんな状況でも良かった。
熱に苦しむヒカルを見て、熱が出て良かったと思った。
シャルルは････自分のその感情を隠すしかなかった。
この歓びは、誰にも知られてはいけない。
短い滞在で、すでにヒカルが自分にはなくてはならない存在だと知られてはいけない。
そう思っていた。

「ショコラ。」

ヒカルが残念そうに言ったので、それはまたいつでも行けるだろう、それほどまでに食べたいのなら取り寄せるよ、とシャルルが言うと、ヒカルはそうじゃない、と言った。

「てんしんさんと一緒に行きたかった。」
彼女はそう言った。
シャルルと行動することに意味があると言った。
彼は薄く微笑んだ。

これほどまでに･･･愛おしいと思う存在を知らなかった。

でも、彼女を愛おしいと思うから、あの人の妹に引き合わせる気になった。

愛おしいから、離れていくと思っていてもそうできない。
愛おしいから、手元に置くことが出来ない。

これはかつて、彼が味わったパラドクスだった。
病気だからと言って、来訪を断ることも出来たのに、シャルルはアルディ家の敷地に彼女の叔母を招き入れた。

ヒカルの叔母が来訪していると聞くと、ヒカルはすぐさま、「会いたい」と言ったから･･･。

血は水よりも濃い････
そう思わざるを得ない。

彼では、駄目なのだ。
彼では、病んだヒカルに「会いたい」「ここに残りたい」と、言わせることが出来ない。

ルイという実子を遠く別棟の離れに追いやって久しい。

食事も別だ。

やむを得ない場合を除いては、彼の顔はほとんど見なかった。

いや、見られなかった。

その様子を見られてしまった。
彼女がここを去りたいと言っても仕方がないと思う。
･･･取り繕っても、いつかは露呈する。

それでも。
それでも、もう少し一緒に居たかった。

もう少し、ヒカルのもたらす明るい日差しを浴びていたかった。

暗い路を彷徨い続けたから。

あの人の妹は、ヒカルの部屋に入ると、持っていた荷物を床に落とした。
そして、ヒカルの横たわるベッドに駆け寄った。

涙をこぼしていた。
ヒカルの名前を何度も呼んだ。

そして、彼女が日本に戻ることをどれだけ多くの人が待って居るかと言うことを訴えた。
ヒカルは彼女の事をちゃんと覚えていて、叔母の名前を呼んだ。

叔母は「覚えていてくれてありがとう」と幼いヒカルに笑いかけた。

次に。
「迎えに来た」
あの人の妹はそう言った。

「もし、ヒカルがこのまま一緒に行くと言ってくれれば･･･一緒に帰ろう。そして、一緒に暮らそう。ずっと暮らそう。」
そう言った。

シャルルはその二人のやり取りを、ヒカルの部屋の扉付近で静かに傍聴していた。
聞くだけしかできなかった。
長い脚を組んで、腕を組み、そして、物憂げな青灰色の瞳を、良く似た叔母と姪に向けた。
彼らの絆に、シャルルは入り込むことができない。

だから、見守るしかなかった。
一抹の期待を込めて。
ヒカルのために、遠く日本から乗り込んでくる、あの人に良く
似た親族を止めることは出来なかった。

ルイとの諍いを見られて･･･このままごまかし続けることが出来ないと思った。
たとえ、どんなに調整して、ルイと顔を合わせないような生活をしたとしても、きっと･･･昨日の出来事はヒカルの心の傷になる。

それなら････元の環境に戻してやることも必要なのかもしれない。
それは、シャルルにとってはあり得ない、未来の日常であったけれど。
ヒカルの日常が明るいものになるのであれば､それで良いと思えるようになっていた。

「一緒に帰ろう」
彼女はそう言って、ヒカルをぎゅっと抱きしめた。
汗を掻いていた彼女は、その熱さに少しだけ身じろぎした。
そして‥次に･･･
ヒカルは言った。

「帰らない。」
そう言った。

熱に浮かされているはずの彼女はそう言った。
叔母と、シャルルは言い返す言葉を失った。
彼女が次にこう言ったから。

「てんしさんがないているから。」
あの人の妹は、ヒカルの頬を撫でながら、言い返した。

汗ばんだ額に張り付いた茶色の髪を、指でつまんで、後ろに流した。
その細かい仕草に、ヒカルは目を細める。おかあさんみたいだ、と言った。
覚えているかどうかわからないのに、彼女はおかあさんに似ている、と呟いた。

「天使はヒカルがいないと駄目だと思うの？ヒカルが･･･天使の涙を止められるの？」
あの人の妹は感受性が強く、誰かを責めたりすることがない人だと、あの人が言っていたことを思い出した。
ヒカルの意思を確認しているのだと思った。
シャルルは黙って見つめるしかなかった。

「････ちがう。」
「何が違うの？」
「てんしさんが泣くと、ひかるがかなしい。」
彼女はそう言った。

そして、遠く離れた扉に立っている彼に。頭を持ち上げて、微笑んだ。
晄の微笑みだった。
まさしく、その笑みそのものが天使の微笑みだった。

「････ひかるはてんしさんのそばにいたい･･･」

「ヒカル。彼は天使ではない。
言ったでしょ？あなたの･･･お父さんになる人だと。」
「てんしさんだよ」
ヒカルは呟いた。

赤い頬をしながら、シャルルと視線を交わしていた。
そして、ゆっくりと･･･ヒカルは口を開いた。
ベッドの羽根枕に沈む、彼女の唇がゆっくりと動いた。
櫻色の唇から漏れた吐息とともに、彼女は囁いた。
囁いたけれど、それはシャルルには叫びのように聞こえた。
彼に、大きな声で話しかけている天使の歌声のように聞こえた。

「・・・シャルル。」
彼女は、初めて、彼の名を呼んだ。
そして････今まで、一度も流さなかった涙を･･･天使の涙を茶色の大きな瞳からこぼした。
大粒の涙だった。
後から後から流れて、彼女の薔薇色の頬を濡らした。
「しゃるるぅ・・・・・・」
彼女は声をからして叫んだ。
何度も彼の名前を呼んだ。
これまで、決して彼の名前を呼ばなかったのに。

目を瞑り、苦しそうに彼女は何度もシャルル・ドゥ・アルディの名前を呼んだ。

「ひかるを･･･！どこにもやらないで････！」
彼女はむくりと起き上がった。

寝間着のまま、彼女は起き上がり、そして、シャルルに向かってフラフラしながら走り寄った。
熱に浮かされた衝動だと言っても良かったかもしれない。
でも、彼女の叔母の姿は･･・ヒカルとシャルルの間にはすでに見えなくなっていた。

「・・・・ヒカル！」
ヒカルが走り寄る前に、シャルルは彼女に駆け寄っていた。
傍観するだけのはずが･･･彼女に歩み寄らずには居られなかった。

「いいこにしています。もう、なきません････もう、なかないから。
いいこにしているから。

なみだはてんごくにもっていけないから。
・・・・・お熱ももうだいじょうぶだから。
だから、ひかるをどこにもやらないでください。どこにもやらないで。
･･･ひかるはここがいい。
ここにいたい。
どこにもいきたくない。
･･･しゃ･･･シャルルの･･･そばがいい。
ひかるはここがいい。
ひかるのおうちはここがいい。
シャルルのおうちがいい。」

いつになく饒舌な彼女の言葉に･･･シャルル・ドゥ・アルディは息が詰まった。
遣る瀬無くなった。

こんなに小さいこどもに苦悩させていた。
シャルルは、彼を父と呼ぶなと言った。
そして彼を父と呼ぶ息子と、偶然ではあったが引き合わせてしまった。

･･･わからない顔をしていたが、彼女はきちんとわかっていた。
「昶！」

彼は叫んで･･･そうして、走り寄った小さな彼女を抱きしめた。
涙が･･･泣いてはいけないと言った彼女の前で涙が溢れた。
彼の美しい、彫像の様な顔が歪んだ。
眉根を寄せて、奥深い瞼を閉じる。

青灰色の瞳から次から次に涙が流れ、抱きしめた彼女の額に落ちた。

「なぜ･･･なぜ、オレが手放すと言うんだ。君はオレの･･･最後の晄なのに･･･！」
彼は声にならないと言いたげに、そう押し殺した声で言った。
「ひかるはシャルルが良い。ここが良い。」
彼女はそう言った。

哀しそうに見つめる叔母を背に、彼女はシャルルに向かってそう言った。
･･･日本に定期的に帰すと言ったのに。

彼女の口にした石榴はほんの一粒か二粒だったのに。

冥王は･･･彼女を帰せなくなってしまった。
このために、地上が一年中冬になり････作物が実らなくなり、絶えてしまっても良いと思った。
彼女を手放すくらいなら、何もかもを滅ぼしても良いと思った。

彼女の寝息が落ち着いた呼吸になると、あの人の妹は帰って行った。

「何が正解かは、ヒカルが決めることだ」そう言った。
すぐ会える距離だ、と彼女は言った。
そこも、あの人にそっくりだった。

シャルルは微笑んで････あえて館に滞在しない彼女に礼を述べた。
礼には及ばない、すべて、ヒカルのためだ、と微笑んだ彼女の仕草が、また、あの人を思い出す。
彼女はシャルルのそんな物思いに気がついたらしい。

「･･･姉夫婦はあなたのことをいつも案じていました。
･･･どうか、幸せに。
そしてヒカルを幸せにして･･･」
彼女はそう言った。

ヒカルの体調が良くなって、しかるべき時期が来たら、日本にも寄越して欲しいと言っていた。
その気遣いの深さが、ヒカルと共通していた。
自分たちの満足でなく、ヒカルを最優先させる彼女に感謝した。

空港までアルディ家の自家用車で送っていくことにした。
彼女は非常に恐縮していたけれど、遠方から来訪したヒカルの親族を無下に扱うことは出来ない。
だが、当主自らの見送りは、過ぎた扱いだとして、彼女は輸送手段の確保だけをありがたく受けとることにする、と言って笑った。

姪の発言に衝撃を受けているはずなのに、彼女はヒカルを置いていくことを承諾した。

「だって、姉の娘だもの。････彼女の選択に任せましょう。」
「それで後悔しない？」
「ええ。だって、あの姉のこどもなのよ？
何を言っても自分で納得しないと駄目でしょう。」
「そうだね」

シャルルは小さく笑った。

彼女の姉妹と言葉を交わせるとは思っていなかった。
静かにアルディ家を出る車の中で、ヒカルの叔母は、最後にひとつだけ、と忠告した。

「ヒカルは晄だけれど･･･眩しくて目を瞑らないで。
明るすぎる晄故の影に迷わないで。
顔を背けてはいけない。」

彼女の忠告だった。
ああ、そうするよ、とシャルルは微笑んだ。
良かった、と彼女は言った。
「あなたが･･･事故以来始めて見せる、シャルル・ドゥ・アルディらしい微笑みは、昶がもたらしたものでしょうから。
それを忘れないでいてくれれば良いのよ。」
彼よりずっと年下の彼女はそう言って去って行った。
ありがとう、と彼は小さく呟いた。
ヒカルの言葉を聞いた。
実の親族よりシャルル・ドゥ・アルディを選んだ。
その選択を「間違いだった」とは言わせない。
彼の願いから･･･彼女の人生の選択を狭めてしまったから。
もっといろいろな選択があったはずなのに。
だから、彼は彼女を幸せにしなければならないと思った。

義務ではなく。
心から。
彼女を愛おしく思うから。
可愛いと思う。
「愛す可し」と書く。
愛らしいと思うのではなく、愛おしいと思う。
あの狂おしい情念に勝るとも劣らない気持ちだった。

その一方で、そのやり取りのあった部屋の外で･･･
当主が修復にかかっている、作業の途中の、枯れた薔薇が散る温室で･･･
ルイ・ドゥ・アルディはひとり佇んで居た。

そして、誰に語りかけるでもなく･･･
薔薇をあしらった真鍮のベンチに座り、膝を抱えて、独り呟いていた。
それは･･･

彼にはよくある「自分でない自分」との会話だった。
彼は友も家族も心を許せる相手が居なかったから、彼の落とす影に話しかけることで彼は会話を成立させていた。
金髪が、陽の光を受けて、きらきらと輝いた。

しかし、その瞳は、こどもにあるまじき暗さを伴い･･･物憂げに、彼の創る陰だけを見つめていた。
ヒカルに来客があり、シャルルがすべての予定をキャンセルして来客接待に当たっていると言われた。
彼はシャルルの知己が来訪する際には、決して本邸に顔出してはいけないと厳命される。

「まるで昔のオレのようだ」

ルイ・ドゥ・アルディの教育係である、シャルルの弟はそう言った。
皮肉げに笑い、歴史は繰り返すというくだらない格言の通りになるね、と冷笑した。

ルイは、誰もこの温室に入ってこないことを確認してから･･･影に話し始めた。
それは･･･今回は、いつも話しかける「影」でなかった。
彼は、ある人物に向かって話しかけていた。

「ねぇ。･･･僕はね、帝王切開で未熟児で生まれたんだよ･･･代理母出産なのに。
陣痛によって母性が生じると困るからだってさ。
だから、僕を手放しても困らない相手に託して、代理母が僕を産んでも困らない時期に僕は生まれてきた。
そして、2ヶ月に1度は乳母が変わった。愛着を持たないように。
使用人達は母国語が違う者ばかりを集めて、僕に声をかけないようにした。
大勢の者に囲まれてもひとりであるということ植え付けられた。
物心つくころに･･･使用人達のあらゆる言語が名前と顔が判別できたときに、僕の容姿だけが当主から引き継がれたわけではないと判明した。

叔父上は僕を引き取った。
実験材料だと言った。
退屈だから、と言った。

‥‥。
‥‥。

―――人間に必要な感情は多くないと教えられた。

ヒカル。
君はその『必要でない感情』の塊だ。
僕はシャルル・ドゥ・アルディから何もかもを奪うために、生まれてきた。
だから‥‥何もかもを奪おうと思う。
彼から地位や名誉を奪っても、彼は屈しない。かつて、奪還した者はそれを失うことを恐れない。

でも‥‥君は最後の晄だと言う。
彼はそう言う。

‥‥だったら。
彼から、君を奪おう。
彼の絶望する姿を見たい。
もう一度見たい。
‥‥あのまま。
あのまま、儚くなってしまえば良かったのに、彼は‥‥。
ヒカル、君を得て、彼は戻って来てしまった。
だから、僕は、僕の存在を証明するために‥‥君を奪う。

何もかもを奪うのが、僕の生きている証だ。
僕はブラックホールで在り続けなければならない。
すべての者から奪わねば生きていけない。
僕自身は何も生み出すことが出来ないから‥‥。
自分で生み出せないから、奪わないと存在できない。」

ルイ・ドゥ・アルディは上品な青灰色の瞳を、ゆっくりと‥‥薔薇園の薔薇に移した。
彼がこの館に来てからは、枯れた鉢しか知らなかった。
それなのに、彼の不在中にここは急ピッチで復旧されていた。
今はぽつりぽつり、とそのままにしておけと言った当主自らが、枯れた鉢の世話をして、
品種改良し続けた薔薇を元に戻そうとしている。

シャルル。
シャルル・ドゥ・アルディ。
元に戻るわけ、ないだろう？
品種改良した薔薇は、温室でないと生きていけない。
そして、一度枯れると復旧できない。
僕のように。
わかっているのに、敢えて求めるシャルルの希望を･･･希望の光を･･･僕は奪ってみせよう。

そのとき。
薔薇の種の交代が行われる。
この薔薇の一族の種の交換が行われる。
澱んだ血族の･･･新たな歴史を僕が築いて見せよう。

そのためには、まずは･･･当主の最も愛でるものをもらい受けよう。

絶望で苦しむが良い。
悶絶して涙を流すが良い。

そして死ぬまで死にたいと･･･もう一度思うが良い。
シャルルと同じ顔をした、子供の顔をした老人は、疲れた表情で微笑んだ。

しかしその闘志は･･･若い獅子のものだった。

■11

シャルル・ドゥ・アルディの生活が動き始めてから、幾年も経過した。
その間、彼は初めてヒカルが館にやってきた時以降の生活を崩さなかった。
手がかからなくなる年齢まで時間ぴったりに帰った。
もう決して、ヒカルに帰れと言わなかった。
ヒカルも帰りたいと言わなかった。

穏やかで静かな生活が始まった。
彼の最も・・・美しい時代だった。
「青春の輝き」より、もっと長い時間だったのに、短く感じた。
季節ごとに彼女を伴って、様々な場所に行った。
彼女がフランスに居ながらにして、故国を感じられるような、そんな景色を見せ続けた。
桜、紅葉、夕暮れ、月の夜、雪の朝の空気、優しい霧雨の感触、雷電の激しさ。
彼が教えた。
ひとつひとつの意味、それぞれの季節、さまざまな色の意味･･･

彼女の知覚にやわらかく語りかけるように教えていった。
あの人が愛した風景や人物や･･･色覚の世界を見せ続けた。
シャルル・ドゥ・アルディが微笑むようになり、館には笑い声と活気と暖かさが戻った。
前当主である彼の父の逝去以来･･本当に長らく絶えていた暖かさだった。
薔薇園の花はまた蕾をもち、そして最初に咲く花は･･･すべてヒカルに捧げた。

純美な景色だけを見せ続けた。
彼女が寂しくならないように。

やがて彼女が就学する年齢になると、彼はヒカルを日本人学校に入学させた。
普通のフランスの学校制度を利用しないのか、とヒカルの教育係である従妹が尋ねた。

「いつか、日本に帰る時のために」
シャルルはその時だけ、美しい顔をうつむかせた。

優しい従妹は、そんなシャルルの様子を眺めながら、あなたの幸せを願っています、といつも同じ言葉を繰り返したが、彼には届いたのか届かなかったのか、わからなかった。
彼は、いつまでも美しかった。

年齢を経て、なお美しい麗人だった。
憂いを秘めた顔貌になり、彼はますます、近づきがたい天使のようだった。

淡々と、シャルル・ドゥ・アルディは当主の仕事をこなしていた。
何度となく、再婚の話は出ては消えた。

結婚は二度としないと宣言したのに、彼は都度、拒否した。

必要ないから。

理由はそれだけだった。
生涯愛する人はひとりだけだと定めた。

愛がなくても結婚できる。
死ぬほど愛していても結婚できないこともある。
死ぬほど愛している人の忘れ形見を手元に置きながら、どうして他の女と結婚できよう。
戯れにあの人を思い浮かべながら、他の女と一夜を過ごすことはあっても、もう、愛に墜ちたりしなかった。できなかった。

もう･･他の女とは子供を作りたくなかった。
当主就任して間もない頃に誕生したルイは一族の「保険」だった。
不安定なシャルルに異議を唱える親族達は、彼の分身を作ることにした。
最も優秀な者を当主にするという目的のためだけに。
駄目だったら、彼の弟に同じことを施せばいい。
彼は随分後になるまでその事実を知らなかった。

だが、シャルルは、ヒカルを引き取るときに、親族会議を開いた。
ちょうど、彼の就任について交代を囁く彼らが勝手に出した招集通知を、どこで手に入れたのか、彼はその場にやって来た。
皆がどよめいた。
そして、眼光鋭く全員を見廻すシャルルの様子に･･･彼らは口をつぐんだ。
静かで強い光を放つ彼の瞳に誰もが黙った。
有無を言わさない彼の口調に、誰もが反対できなかった。

「･･･反論がないなら。オレは絶対だ」

彼は言い放った。
そして再確認した。
彼が当主であり絶対であり、冥界の王であると。
ルイのことを「不始末」と言った親族をその場で解任した。
そして、ルイに関するすべてのことを不問にするかわりに、シャルルはヒカルの養育について一切口を挟まぬように、と厳命した。

加えて、彼は主のつとめを果たしたのだから、彼は婚姻をしないと宣言した。
―――そして今に至り、ヒカルだけを見つめる生活を選んだ。

彼女を溺愛した。

暑い夏だった。

ヒカルは、眩しそうに目を細めながら帽子をかぶり直した。
つばの広い白い帽子はシャルルが選んでくれたもので、ヒカルのお気に入りだ。
夏の時期は、学校が長期の休暇に入るので、彼女はいつも日本に行く。
「日本に帰る」のか「日本に行く」のかわからないけれど。
シャルルはいつも「行っておいで」と寂しく笑う。
だからヒカルは「帰ります」と言わない。
出発の日は･･･いつも彼は眠れないらしい。
朝の弱い彼が、その日だけは、ヒカルより早く起きて、薔薇の
剪定をしている。
今夏もそうだった。

「やぁ　おはよう」

やはり、温室にシャルルは居た。

「シャルル。おはよう。早いのね」

その日だけは、毎年決まった会話から始まる。
シャルルはヒカルに微笑んだ。

最初に会ったときと変わらない。
彼はあまり年を取らない。

物憂げで上品な瞳の持ち主が、ヒカルに微笑んだ。
シャルルは朝の陽光が差す温室で、作業をしていた。
白金の髪が陽光に照らされて光り、ヒカルは彼がそこに居るのだと確認する。
彼は音を立てない。
静かに動く。
彼を見ると、天から愛された人間というのは本当に存在すると思った。

天からの御使いは、音もなく静かにやって来るという。
静寂の天使が居る。
幼い時は本当にそう思っていた。
時々、それでも、彼は本当に天から遣わされた使いの御子なのではないかと思う。

彼は何年経過してもまったく変わらなかった。

———ここで過ごす時間は、彼の唯一の趣味の時間だ。

そして、ヒカルはここに毎日通い、最高の状態の薔薇をシャルルの部屋に翌朝届ける。
彼女だけが許された特別な仕事だった。
だが、今日だけは、シャルル自らが薔薇の花を世話し、そしてヒカルのために最高の状態の薔薇を届ける。

大きくなって知ったことだが、シャルルが品種改良を行った薔薇はすべてに「ファム・ファタル」と名付けられている。

それは母を示す言葉だと知ったのも･･･随分後のことだった。

シャルル・ドゥ・アルディは･･･

一年のうち、一時期だけ、魂を彷徨う時がある。
それはあの哀しい事故があった時･･･
そしてヒカルが夏の休暇でこの屋敷を離れている時だ。
ヒカルは、その間のシャルルの様子を見たことも聞いたこともない。
彼女に決して見せないから、彼は荒れる。
そして箝口令でもって、彼の荒れた様をヒカルの耳に入れない。

乱れるのか荒れるのか沈むのか、それさえわからなかった。
でも、彼が、ヒカルに見せるシャルル・ドゥ・アルディでなくなることは確かな事実だった。

けれども。
彼女が休暇を終えて戻ってくる時は、いつもの「シャルル・ドゥ・アルディ」だった。
———この上なく優しく、美しい人。そして哀しい人。
ヒカルは微笑んだ。
彼が求めているのはヒカルの微笑みだった。

「今日、午後の便で行って来ます。」
「行っておいで」
いつもの通り、彼はそう言って微笑んだ。

「･･･今年は13 回忌だけれど･･･シャルルは出席しないの？」
7 回忌の時には揃って出席した。
けれども、今回はシャルル・ドゥ・アルディは行くのはよそう、と言った。
「･･･君が･･あまりにも、お母さんに似てきたから。」
彼は視線を薔薇の鉢植えに移してそう言った。
7 回忌の時、親族は、あまりにもヒカルが母に似ているので、どよめいた。
毎年会っているのに、驚きを隠せないと言ったように･･･涙を流した。
彼女にそっくりだと言い、父にも似ていると言った。
その会話に、シャルル・ドゥ・アルディは入り込めなかった。
彼の親しい友人である夫婦の忘れ形見を、ここまで育てた彼なのに、その絆に臆してしまった。

ヒカルに良く似た血筋の者達を見ると･･･
ルイを思い出して、恐れてしまった。
離れていても、これほど愛深く慈しまれているヒカルと。
ルイへまったく愛情を感じない「父」である自分のなんと違うことかと思い知った。
自分は･･・あの人の幼い時を知らなかった。
だから彼女がだんだん、あの人に似てくる、と親族が言う都度、戸惑った。
あの人と出会った時までのあの人の時間を･･・知らなかったから。

シャルルは以降、彼らの法事には参加していない。
こっそり、墓に行くことはあった。
でも、そこには彼らの遺骸はなかった。

魂もなかった。
風が吹くばかりだった。
彼女は風になりたいと言った。

生きていることを謳歌していた彼女は死んだときの話はあまりしなかった。
でも、彼女は死んだら風になりたいと言った。
風に還りたいと言った。

シャルルの目に映らない、風になりたいと言う愛しい人を･･･
彼は少しだけ恨んだ。
彼女の姿は形を変えてシャルルのところにやって来たとしても。
風ならば、彼は気がつくことができない。
君とあいつは風になったのだろうか。
あの事故の現場から･･遠く離れた日本に風になって還ってきたのだろうか。
そしてたったひとり遺されたヒカルの元に･･彼と彼女はやって来ているのだろうか。
彼の狂った魂には、もうそれを感じることは赦されないのだろうか。
そう、問答し････以降、ヒカルと法事で日本に行くことはしなくなってしまった。
特に、その時期は･･・彼にとっては辛すぎた。
これほど年月を経過しているのに･･･まだ辛かった。まだ、愛していた。

彼女は、間もなく、シャルルとあの人が出会ったときの年齢になる。
長い年月が経過していた。
だんだん･･･彼女を手元に置くことが苦しくなる。
あまりにも似ているから。
容姿は･･・確かに似ていた。
しかし父親の血も引く彼女は、母の面影そのものかというと少しだけ違っていた。

茶色の瞳は母より薄い。
茶色の髪は、父に似て癖があり、焦げ茶色だった。
白く抜けるような肌理の細かい象牙色の肌。
背は、日本人女子にしては高い方だ。
でも、華奢な体つきは母親似だった。
あの人は小柄であったが、身長がもう少し伸びれば、ヒカルと同じ骨格のはずだった。
「死後是非解剖してみたいね」
「仕方がないわね」
そんな会話をしたことが、つい昨日のように感じる。

ああ、君は嘘つきだね。
約束を守ってくれなかった。

彼はヒカルに、今日、花を開かせようとしている薔薇を差し出した。
ヒカルは、ありがとう、と言ってそれを受けとった。
「ファム・ファタル･･･」
ここの花にはすべて、ファム・ファタルと名前がついている。
ヒカルは微笑んだ。
「シャルル。いつもありがとう。･･･私の天使。」
ヒカルは、シャルルに体を寄せた。

ヒカルは彼を「シャルル」と呼び、あのとき以降、「天使さん」と呼ばなくなった。
でも年に一度だけ、ヒカルは彼を「私の天使」と呼んだ。
それは、長い別れの直前。
この薔薇の園の温室で彼女の来訪を待つ、シャルルに向けられる言葉だった。

私の天使。
泣いてはいけない。
ひとりで泣いてはいけない。

天国に行けないから。
いつか、逢いたいから。
天使が涙を落とせば、天使は天国に戻れない。
涙は天国に持って行けない。
「私の天使」
その言葉に、彼は微笑んだ。
「いつか・・･･その言葉は『私だけの天使』と言う日が来るよ。
オレでない別の誰かに言う日が来るよ」
寂しそうに言うシャルルに、ヒカルは笑いかけた。

「あら。私の天使は･･･ひとりだけよ」
「どうかな」

シャルル・ドゥ・アルディは上品な唇を少しだけ歪めて笑った。
「さぁ。オレの天使･･･オレだけの天使。出発の支度をしておいで。
みんなに宜しく。ダンジョウやヒビキヤや･･･その他すべての
人に、君の元気な姿を見せてあげてくれ。」

■12

13 回忌にもなると、出席する親族はだんだん減ってくる。
先般、事故現場にはごく親しい身内だけで行ってきたばかりだった。
それでも、賑やかな方よ、あの夫婦らしいわ。
かつて、アルディ家まで乗り込んできた彼女の叔母は笑った。
なにくれと気を遣い、彼女にまめに連絡を寄越す叔母の心遣いがありがたかった。
父方の親族は、今でも･･･一緒に暮らそうと言ってくれる。
彼女が理系に進みたいという話をしたところ、祖父が元医者であるから、是非同じ路を進んで欲しいと言われた。

ヒカルの父も、医師を志していた。
研修医だった。
正直、彼らの記憶はほとんどない。
写真と･･･遺族から語られる思い出話だけだった。
うろ覚えなのは･･･
シャルルと初めて会った法事の席だった。
彼女は黒いワンピースを着ていた。

茶色の髪にあう茶色のゴムがみつからなくて、黒いゴムでごめんね、と叔母に言われて、うんと頷いたけれど気に入らなかったのを覚えている。

そして。

横たわる、真っ青な顔の異国の人。
自分にも異国の血が混じっているとは知らなかった彼女は、最初、なんて綺麗な天使なのだろうと思った。
憔悴していたが、彼は、とても美しかった。
白金の髪が散らばり、線の細い神経質そうな顔立ちで、苦しそうに目を瞑っている。
彼女の両親は天国に行ったと言われた。
泣くと天国に行けないと言われた。
だから、泣いてはいけないのだと自分自身に言い聞かせていた。

それなのに･･シャルルは泣いた。
ヒカルの顔を見て、泣いた。

透明な涙を見て、彼女は思わず、手を伸ばした。あまりにも美しくて儚げだったから。
このまま、透き通って、空気に溶けてしまうかと思った。
彼が、そのときにヒカルを抱きしめなかったら、本当に消えてしまうかと思った。

「おまえさんが幸せなら、それで良いよ」

毎年、必ず訪れる両親の旧友はそう言った。
時々、アルディ家にも訪れていく。

彼女だけでなく、両親の友だちだと言って、彼らは彼らなりの供養をしているらしかった。毎年、クリスマスカードは送るように、とシャルルに言われていた。
膨大な数のカードを、ヒカルは言われるがまま、丁寧に文字を綴った。

これらがみな、両親の知己であると知ったときは、少なからず驚いた。
そんな彼らはみな、ヒカルをみて、少しだけ涙ぐみ、両親のこどもだ、間違いなくあいつらのこどもだ、と言って微笑んだ。

日本には、彼らの遺骸はない。
遺品もなかった。
だから、墓は･･･からっぽのままだった。
名前だけが刻まれた墓標がぽつんと佇んで居るだけだった。

それでも、両親に会いにやって来る人は絶えない。
こんなに年月が経過しているのに。
その中でも、もっとも親しかったという、シャルル・ドゥ・アルディの元に居ることになったとき。

父と親友で･･･母を愛したと言う。
周知の事実だった。

シャルル・ドゥ・アルディは彼女を唯一の人と･･運命の人と定めて、こよなく愛したという。
でもその一方で、彼女がシャルルではなく、彼の親友を選んだとき、一番祝福したのは彼だった。

そして･･･・彼の挙式会場であるランスに向かっていた、飛行機が墜落事故を起こしたとき。
彼は壊れてしまった。

彼は半狂乱になり･･･そして戻ってこられなくなった。

彼と彼女を知る人々は、ヒカルを見る度に思い出して･･そして若すぎる死を悼んだ。
元気にしているから、とヒカルが言っても、親のいない家庭で･･･

しかもフランスの名家に引き取られた彼女を可哀想だと言う者は絶えなかった。

可哀想じゃない。

ヒカルはその都度、心の中で呟いた。
私は･･幸せだわ。

シャルルはすべての愛情を、彼女に注いだ。
ルイをまったく無視して。
ヒカルの口からルイという言葉が漏れると、彼はひどく不機嫌になった。
彼は相変わらず、人嫌いで、繊細で、気むずかしい人間だった。
それを覗けば･･･シャルルと一緒に暮らす日々は、まったく問題がなかった。

幸せすぎた。

「････カル？ヒカル？」

考え事をしていたので、名前を呼ばれて気がつくまでに相当時間がかかってしまった。
法事が散会になり･･･彼女はまた最後の挨拶をしに、墓標に向かった。
ここに両親は眠らないけれど･･･でもきっと戻って来てくれている。

そう感じた。

彼女は、黒いワンピースを着て････黒い少しだけヒールのついた靴を履いていた。
身長は父親譲りだ。
茶色の髪の癖が気になる年齢だったが、それも父の贈り物だと言われた。
彼女は成長するにつれて、だんだん色素が薄くなった。
日本に居ると目立ってしまう。

茶色の瞳は薄いし、うねりの強くなってきた髪は焦げ茶色だった。
両親を知らない縁戚の者が彼女を見ると、ひどく驚く。
もう、それくらい年月が経過していた。

「はい！」
彼女は名前を呼ばれて振り返った。
法要を終えて、会食会場に向かうために、縁者達はみな移動を始めていた。

・・・・慌ただしいけれどもう一度だけ、挨拶を。

ひとりだけ、後から行くから、と言って彼女はしばし墓標に向き合っていた時だった。

暑い夏で、蝉が鳴いていた。

空には雲がなく、シャルルからプレゼントされた帽子をかぶりたい気分になっていた。
この席では不向きではあったけれど。

振り返って･･･そして、ヒカルは絶句した。

最近の親戚の者は名前が覚えられないので、自分の名前を呼ばれたら答えることにしている。だから、誰から名前を呼ばれても元気よく答えることにしていた。

だが･･･その相手はよく知った人物だった。

太陽のような金髪が、夏の日差しの中で輝いていた。
すらりとした長身に、長い手足。
優美な仕草。
天使のような、魅惑的な微笑みを強調する、甘美な唇。
そして････シャルルと同じ、物憂げな青灰色の瞳がこちらを見ていた。
この空の下で、彼を見るとは思っていなかった。

「･･･ルイ」
ヒカルは呟いた。

■13

星辰の子と言われた、彼は微笑んだ。
日本式の儀式にあわせて、彼は黒いスーツを身につけていた。
スーツの上からでも、均整の取れた体がはっきりとわかる。
「暑いな。日本の夏は湿気が酷い」

彼はそう言ったが、涼しげに微笑んだ。
金髪が揺れて、輝いている。
「なんで･･･」
ヒカルはそう言った。
喉がひりつく。
自分が驚いているのだとわかった。

「親父殿の代理だよ」

彼はそう言うと、持っていた大きな白い薔薇の花を墓標に無造作に置いた。
ヒカルはルイが本当の理由を言っていないと思った。
シャルルからは、すでに大きな百合の花束が届いていた。
彼が白い薔薇を捧げるのは、彼自身が来訪した時だけだった。
しかし､彼女の気質は「それはうそでしょう」と言うことは出来なかった。
ルイなりの･･･何か理由があるのだと思うことにした。
彼はやれやれと言うように上着を脱いだ。

「これでオレの仕事は終わり。」
「ルイ。ありがとう」
ヒカルは礼を言った。

「当主の命令だからね･･･」
彼はそう言っただけだった。

この数年で、ルイは随分身長が伸びた。
シャルルの若い頃にそっくりだと言われている。
あれから･･･彼は飛び級であっという間に大学に進んだ。

そして今ではもう、社交界にひっきりなしに呼ばれ、彼の名を知らない者はいないだろう。
乗馬とフェンシングの大会では史上最年少で優勝した。
一方で、バイオテクノロジーやライフサイエンスの分野ではすでに何度も学会賞を受賞している。
近いうちに･･iPS 細胞を凌ぐ驚異的な研究結果を出す、と宣言し、世間を騒がせていた。

彼が取得した特許の数は数知れない。

シャルルの人生をそのまま歩んでいるような･･･そんな生き方をしていた。

ヒカルとはあれ以来、文字通り「つかず離れず」の状態だった。
帰宅すれば顔を合わせるし、話も食事もした。
けれどそれは通り一遍のことで、彼はすぐに別棟に引きこもってしまう。

英国の寄宿学校で学び、フランスに戻ってからは彼の叔父を教育係として様々な分野で成果を上げていった。
その一方で、華々しい社交界デビューを果たしていた。
彼の叔父とともに出席した宴での鮮烈なデビューは今でも語られる伝説だ。

アルディ家の新星を･･･星辰の子を彼らはいつのまには天陽（注：太陽の美称のこと）の貴公子と言った。
しかし彼は「星辰の子」と呼ばれることを好んでいるようだった。

すでに月の翳りを隠すことを覚えたルイは、人前では優しく明るく、麗しい若者だった。
ひとたびアルディ家に戻れば、気鬱な顔をし、無表情で冷たい顔に戻った。
「ここには体を休めに来ているだけだ」とそう言い放った。

そんなルイを･･･シャルルは無視した。
当主の命令だから、と言ったルイに、ヒカルはそう、と言った。

「シャルルに気遣いさせてしまったわ。
･･･それにルイにも。
今、オフなのでしょう？」
「これも仕事。」
彼はそう言った。

そして、ここは暑いから場所を変えようと言った。
「行くぞ。車を用意してある。」
「ルイ。私、これから･･･みんなと会食が」
「キャンセルして」
ルイは冷たく言った。くだらないというように、彼女に言った。

「死んだ者を思って食事か。･･･随分のんきな民族だね」
「ルイ」
困ったように、ヒカルは彼の名前を呼んだ。
「そうはいかない。」

「オレは2 度は言わない。」
彼は冷たく言った。
天使のような微笑みだったが、瞳は笑っていなかった。
「行くぞ」
彼は彼女の腕を掴んで、そして歩き出した。
ヒカルも長身の方ではあったが、ルイには遙かに及ばない。
体を半分つり上げられた格好になり、小さく悲鳴をあげた。

「ルイ！」
「少し黙れ」
彼はヒカルを睨んだ。ヒカルは口をつぐんだ。
彼の瞳には、何も映ってなかった。

暗い光しかない。
いつも皆に囲まれているときのような、あでやかな微笑みはなかった。
彼が良く･･うつむいて、何かをじっと考えている時があった。
見かけても声をかけても彼は反応しなかった。

彼の･･･彼だけの時間だと思うと、ヒカルはその時は彼に声をかけないようにした。
そのときの瞳と同じだった。
うつろで･･･どこか遠くを見て、そして何かを思い定めたことを、言い聞かせているかのような。
間近でその瞳を見て、ヒカルは息を呑んだ。

「ルイ。お願いだから。」
彼女は今一度哀願した。
「ルイ！」
ルイは無視した。
彼女をそのまま引きずり、墓地まで出ると、
通りに停めてあった車に合図をした。
彼はそのまま、黒塗りの車に片足をかけて乗り込み、そこを支点として力を込めた。

そして、彼女の腕を掴んだまま、そのまま引っ張った。
あっと思った時にはもう遅かった。
彼女は、後部座席のシートに投げ出された。正確には、ルイの膝の上に頭を打ち付けていた。

「出せ」
「ルイ！」

「君は人の名前しか呼べないのか。」
「そうじゃないけれど･･･」
「連絡はしてある。君は急遽、ヒビキヤに呼び出されてホテルに戻ることになっている。」
彼は長い脚を組んだ。そこでようやく彼女の腕を離した。

一体いつの間に･･･とヒカルがつぶやく。
「何処に行くの？」
「パーティー」
「え？」
「･･･今日はこれから、ちょっとしたイベントがある。その後、レセプションがあって、大使館の人間も財界人も来る。そこに顔を出すのが今回のオレの仕事。」
「それで･･･」
「急遽決まって、適当な相手がいない。ヒカルで手を打つことにした。」

それならそうと連絡してくれれば良いのに、とヒカルが言うと。
ルイは横目で冷たい視線を浴びせた。

「君に相談する必要はない」
「あるわよ･･･私の予定を勝手に変更した」
「オレの予定は絶対だ」
「私の予定もあなたと同じよ。大事だわ」

ルイは、気怠そうに、彼は大げさにため息をついた。
そして、ぎゅっと目を一度瞑ると、今度はヒカルに向き直った。

「･････」

ヒカルは黙った。

「ヒカル。頼むよ。
オレはとても困っていて･･･君にしかお願いできないんだ。
何しろ、オレはまだ未成年で･･･大人の女性は同伴できない。
とても困っている」

魅惑的なその微笑みは、彼がアルディ邸では決して見せない微笑みだった。
彼の仮面が･･・ヒカルにも向けられたのかと思うと、彼女は唇を震わせた。

彼は嘘をつく。
自分を誤魔化す。

でもそれは彼が生きていく上の手段だと思っていた。

それなのに。

今、こうして、他の誰にも振りまく愛想をヒカルに向ける理由を彼女は解っていた。

ルイ。

あなたは私を傷つけたいの？
それとも･･･自分を傷つけたいの？

彼女を侮辱するためだけに、彼はヒカルに笑いかけた。
高い知性を持つ彼には、ヒカルの行動や困惑は手に取るようにわかるようだと言っているのだ。
そうして。
ヒカルにうっとりするほど甘い笑顔を見せたルイは･･･

そっと･･･彼女の滑らかな頬に手を当てた。
秀でたルイの額を、彼女の額に押しつける。
ヒカルはこれほどまでに、ルイに接近したことがなかったので、大きく目を見開き、体をこわばらせた。

「ヒカル･･･オレを見て･･･」

彼の青灰色の瞳が近づいた。彫刻の様な、整った顔が近づいて･･･そして彼女に優しく囁いた。

■14

「ルイ！」
ヒカルは叫んだ。
顔を背けようとするが、彼はヒカルの白い両の頬を抑えたからだ。
吸い付くような彼女の肌理の細かい肌に、ルイは一瞬、ほんの僅かに目を細める。

「喪服を着るヒカルも良いね」
「･･･離して」
「ウィ　と言うまで駄目だ」
彼は小さく笑った。

「お願い。･･･からかうのはやめて」
「何が？オレを見てと言ったことが？」
「だって」

ヒカルは茶色の目をルイに向けた。
彼の両手はヒカルの頬に触れたままだった。
車が軽く振動する度に、互いの前髪が揺れて交錯する。
それくらい近い距離にあったのに、ヒカルは動じていなかった。
他の女達は、この距離は恋の開始の合図だと思い、頬を染めて目を閉じるのに。
まっすぐじっと、ルイを見た。

「ルイ・ドゥ・アルディはそう言わない」

――――やられた。

ルイは小さく舌打ちした。
彼の誇り高さを彼女が突いたのだ。

彼は愛を乞うことはしない。
何かをねだることはしない。

それをよく知っているヒカルは、彼が「自分を見て」と言ったのが本心からでないことを指摘したのだ。
これを無視して、唇を寄せれば、彼はルイ・ドゥ・アルディであることを否定することになる。

「･･･よくわかっていると言いたげだな」
「そうじゃないよ」

彼女の頬を突然ぱっと離した。少し後ろに力を入れたので、彼女は車のシートに体を倒した。
ワンピースの裾から、ちらりと白い脚が見える。
喪服に合わせて暗い色のストッキングを履いていたが、それでも色の白さがわかるくらい透き通るような肌だった。

二の腕から伸びる長い腕。櫻色の短く切りそろえられた爪。
軽く結わえられた茶色の髪に茶色の瞳。
最近ますます色素が薄くなった。
まだあどけなさの残る頬や肩や項のラインのみ、彼女がまだ10代半ばであることをあらわしていた。
何も宝飾品を身につけていないのに、彼女はそこにいるだけで･･･空気が違う。
シャルルがこよなく愛する宝玉だった。

唯一の、晄。

彼の魂と愛情を全部受けて育った、最愛の娘。
ルイは青灰色の瞳でヒカルを無表情に見た。
彼の頭の中では、何手も先を考えていた。
彼はチェスの名手でもあった。

「そうじゃないけれど･･･私たちは家族だし･･」
「家族？」

ヒカルの言葉に、ルイが眉を動かした。
笑い声もたてずに、嘲り笑った。
長い脚を組んで、タイをはずす。

「家族･･ね。ひとつの敷地に住むことが家族なら、オレはもうすぐ家族でなくなる」
「え？」
「･･･間もなく家を出る。パリ市外の叔父上の別邸に移る。そちらの方がいろいろと便利だしね」
「シャルルは知っているの？」
「なぜ許可がいるの？」
「だって、シャルルはあなたの親権者で・・・お父様よ」
「ヒカル」

短く、ルイがヒカルの名前を呼んだ。
ヒカルがはっとして、ルイを見る。

彼は怒っていた。
静かに・・・憤怒の気を発していた。
他人が見れば、よくわからない彼の微妙な変化をヒカルは察した。

「オレにとっては、父という尊称は無に等しい」
「・・・・・」

どうして彼らは歩み寄れないのだろうか。
ヒカルは常々この件について心を痛めていた。
いろいろ考えていろいろと行動してみたが、やはり彼らの態度を軟化させることはできなかった。むしろ、彼女が介入することでますます亀裂が大きくなる節がある。
だから距離を置いてそっと‥見守るしかなかった。
いつか、一緒に暮らしていれば、わかり合えるときが来る。
彼女はそう思っていた。
わかり合えるようになるチャンスを見計らっていた。
でも、これでルイが家を出てしまうと、本当に本当に‥彼らは他人になってしまう。

ルイはほとんど家にいない。

全寮制の学校に入っていたし、スキップしてあっという間に学校を卒業してからは、研修だ短期留学だと、理由をつけてはアルディ家を不在にしていた。
同じ敷地に居ながらにして、彼は帰ってきても挨拶もそこそこに別棟に籠もってしまう。
彼の別棟は・・・いつも遅くまで灯りが付いていた。

別れて暮らしてはいるが、ルイには母もいる。父もいる。
ヒカルには居ない。

どちらが幸せなのか、比べたこともなかったが、ヒカルは彼の苦悩を知っている。

薔薇の温室で・・・じっと・・・彼は自分の影を見つめて、何かを考えているというよりは影そのものに話しかけている様を何度も目撃していた。
彼女がその姿を見たことをルイは知っているのか知らないのか・・・

彼は年を経てますます、冷酷になった。
冷たい仮面と外向きの仮面を使い分けるようになった。
シャルルと衝突すれば、まだそれもコミュニケーションだと言えたかもしれない。
でもこの親子は・・・まったく接触しなかった。
完全に無視して、お互いに干渉しなかった。

「今日はアルディ家の者として顔を出す。

ヒカル、君も出席しろ。
‥‥こんな時にしか役に立たないのなら、なおさら出ろ。」

彼は当主の息子として‥・傲慢だが有無を言わさない強い口調でそう言った。

ルイ。
‥‥どうしてそういう哀しい言い方をするの。

彼女は困ってしまった。
彼の真意がわからなかった。
自分に出来ることはなにか、と考えた。
少し考えてから‥‥彼女は返事をした。

「———わかったわ」

見守ることしかできないのであれば‥‥ヒカルはルイの傍で、ほんの少しの時間でも見つめてみようと思った。

彼と時間を過ごすことは滅多にない。
滅多に話さない。

そのルイが来いというのであれば、行ってみよう。

「準備は手配済みだ。ヒカル‥‥人形は人形らしく、愛でられて
いればいいんだよ」

ルイは、歌うように楽しげに言った。
彼は美しい笑い顔をヒカルに投げた。
美しくて冷たい微笑みだった。

■15

なんて愛らしいお二人なのかしら。
広間に通されると、誰もがルイとヒカルに視線を注いだ。
ルイ・ドゥ・アルディは慣れた仕草で周囲に挨拶の目配りをする。
金髪が上から降り注ぐ照明に輝き、上品な青灰色の瞳を持つ見目麗しい貴公子に誰もがため息を

漏らした。

主賓でないので、控えめなタキシードを着ていたが、場慣れした物腰や彼の容姿は否が応でも注目の的になる。
かの有名な「フランスの華」の息子である。
滅多に姿を見せない当主よりも、名代として彼は公式の場に積極的に姿を現していた。

社交界ではルイは有名人だ。

注目と賛辞は慣れてしまったかのように、優雅に微笑むルイの隣をヒカルは歩く。
ヒールが高くて、彼女はまっすぐ歩くのがやっとだった。
そして、彼が連れて歩いている少女は一体誰なのか、と誰もがヒカルにも注目する。
彼女はルイのタキシードに合わせたオーガンジーのドレスを着ていた。
濃い青丹色のドレスには細かい刺繍が施されていて、彼女が歩く度に微妙な光沢を出していた。
年若い彼女には渋い色合いであったが、彼女の茶色の瞳と少しだけ巻いた髪によく映えて、ますます肌の色の白さを際立たせていた。

すらりと伸びた腕には、プラチナの彫りの入ったブレスレットをしており、先端の留め具はさり気ないけれど最高級のダイヤモンドが光っていた。
宝飾品はそれだけであったが、十分に彼女の可憐な美しさを引き立たせていた。

ヒールのついたエナメルの靴底だけが際立つ深緋で、歩く度に見える程度だった。
少しだけ化粧を施し、何をどうして良いのかわからずに、ただ微笑んでいるしかできなかった。

「もっと背筋を伸ばせ･･･きょろきょろするな」
「ヒールが高くて絨毯に沈むの」

ヒカルが囁くと、ルイは少しだけ嫌そうに眉を寄せたが、すぐに無言でヒカルに自分の腕を差し出した。

「ありがとう」
「オレに恥をかかせるな。･･･わかっていると思うが。
みっともない姿は晒すなよ。」

大使館主催の催しの後のレセプションだった。
フランスのアーティストの作品展示会を日本で行い、協賛した企業や著名人が招かれるパーティーだった。この場で即売会も行っているとのことで、次の間には作品もいくつか展示されて

いた。
アーティスト本人達は、談話室で話し込むか、会場のごく限られたスペースで後援者たちと懇談しているかのどちらかだ。

中央には各界の著名人が集い、さながらサロンのようだった。

「本当に重要な主賓は広場の中央には居ない」
シャルルが良くそのようなことを言っていたので、その通りだと思い、ヒカルはくすりと笑った。
「随分余裕だな」
すぐ傍から声が降ってきて、自分はルイと腕を組んで歩いているのだということに気がつき、はっとした。
見れば、ルイが小馬鹿にしたような冷たい目つきで、彼女を見下ろしていた。

「離れろ」
「ああ、駄目。倒れそう」

彼女がぎゅっと彼にしがみついた。
彼は興味なさそうにまた視線を周囲に向ける。
ルイ・ドゥ・アルディは完璧でなければならない。
「フランスの華」である彼の実父は繊細で人嫌いで気むずかしいことで有名だった。
唯美主義であり、誇り高さがそうさせていたのだが、それ故に「棘の鋭い薔薇」として非常に近づきがたい存在ということである意味注目の的ではあったが。

だから、アルディ家の当主が結婚すると報じられたときには、誰もが彼の棘をくぐり抜けて彼を捉えた相手は誰だろう、と色めき立った。
しかも、相手との間に実子がいて事情があって結婚できなかったというロマンスは、今でも語り継がれている。

結局離婚することになったのだが。
この件について、アルディ一族は語ってはならないタブーとされたので、誰もその件については詳細を知らなかった。
その実子が同じ風貌でもって、かつての当主と同じ姿で、天使か神と見紛う容姿で来臨したわけだから、これはやはり彼は注目されて当然の存在だった。

「まずは今日の主に挨拶だ。･･･来い」

彼が方向転換したので、ヒカルはバランスを崩して、また彼に寄り添うような格好になり、腕にしがみついた。
その姿にため息を漏らす周囲の声などはまったく聞こえなかった。
ヒカルもこういった席でのマナーや所作は、ひととおりのことはシャルルに教わっている。
しかしシャルルは彼女をなかなか公式の場に出したがらなかった。
出れば、彼女はアルディ家との繋がりを聞かれるし、どんなに箝口令を敷いてもいずれは出自についておもしろおかしく騒ぎ立てられるからだ。
だから知識はあっても経験がなかった。

彼は優雅に主催者に挨拶をした。
白髪の好々爺と言った彼は、目を細めて、二人の初々しい様子や、ルイ・ドゥ・アルディの堂々たる挨拶に満足げに頷いた。
今日は当主は来られないこと、その代わりに名代としてやって来た自分が分相応にも来場した詫び等々。
社交辞令を正しい順番で美しい唇から順々に滑らかに紡いでいく。

「可愛らしいパートナーですね。どちらの方でしょう。」
彼がそう言うと、ルイは花のように艶やかに微笑んだ。
目を細めて嬉しそうに言う。

そしてそっと彼女の腰に手を遣り、彼女の体を引き寄せた。
ルイ、と小さく声を漏らすヒカルを無視して、彼は言った。
ヒカルの目から見れば、この物腰柔らかい優しげな雰囲気は彼の演技に他ならなかった。
しかしその演技を見抜ける人は、この会場ではヒカル唯一人だけだった。

ルイは優雅に言った。
少し頬を赤らめて。
年齢相応の、若い男子が見せる、恍惚の表情を浮かべる。

どこで学んできたのだろうか。
ヒカルが息を呑んだ。

「彼女は、ヒカル・クロスです。･･･親同士の言い交わした許嫁です」
彼女はえっと驚いて、彼の腕を勢いよく離してしまった。

その瞬間、ルイはヒカルの腰に軽く添えていた手に力を入れて、彼女を彼の体に密着させて、抱き寄せる。

腰を押さえつけられ、高いヒールを履いた彼女はそのままルイの胸に躍り込んだ。
驚きと感嘆の声が周囲から上がり、同時に彼女のこめかみにルイが形の良い唇を押しつけたので、更に周囲から「おめでとうございます！」という声が大きく沸き起こった。

「公式での発表は今日が初めてです。ああ、彼女はまだ未成年なので非公式でお願いします‥。
ですが、彼女の成人を待って、式を挙げます。もちろん、ランスの教会で。
僕は気が長い方ではないので。待ちきれずにこうして連れて来てしまいました。」

わっと声が上がり、その場にいた誰もが彼と彼女に祝福の声をかけた。
その視線と祝辞の声と熱気で、ヒカルは眩暈がした。
高いピンヒールを履いていたので、足ががくがくするのがよくわかる。

「ルイ」

そう声をかけたけれど、彼は薄く笑うばかりだった。

‥‥やはり、その瞳は笑っていなかった。

シャルルがヒカルに見せる、慈愛に満ちた少し哀しそうだけれども穏和な瞳とはまったく違っていた。
良く似た瞳は‥冷たく、まるで人形を干渉するかのように、醒めた青灰色だった。

シャルル。‥‥助けて。

ヒカルはルイの思惑を知ろうとして‥‥早速彼に手ひどく攻撃されたのだと知った。
彼は、ヒカルのことを、家族とさえも位置づけていないのだと思い知った。

「人形は人形らしく」
彼の言葉を思い出していた。

シャルル。
シャルル。

ヒカルが日本を発つときに見せた、シャルルの儚げで美しい笑顔が、ルイに重なった。

■16

その後、気がつくとヒカルは庭園に出ていた。
広場の熱気で、顔が火照っていた。

ルイ・ドゥ・アルディがヒカルのことを「婚約者だ」と言った後のことは覚えていない。
たくさんの人々に囲まれ、日本語とフランス語と様々な言語の入り交じった祝福の雨が降ってきた。
彼はひとつひとつに優雅に答え、ありがとうと言った。

いつの間にか、彼女に回されていた手は離されていた。
・・・・どこをどう彷徨ったのかは覚えていない。

高いヒールで、ふらつく足取りでたどり着いた先は、大分ひんやりしてきた庭園だった。
夏の月の下だった。

あまり広くはないが、よく手入れされている。
すでに季節を終わってしまった薔薇もいくつかあったが、彼女はよく知った場所を思い出しながら‥ようやく心から微笑むことが出来た。
そして遠くで夏の蝉が鳴いていることに気がついて、顔を上げる。

火照った頬に、ほんの少しだけ冷えてきた風があたった。

————夏の蝉。

彼女は目を閉じた。

今年の夏は暑かった。
事故のあった年も暑かったという。
この時期に鳴く蝉は、どこか･･･死者の魂のようだ。
墓地でもそう思った。

焦がれて、鳴く。
恋しくて、鳴く。
哀しくて･･･鳴く。

初めてシャルルに会ったときも･･･蝉が鳴いていた。
あれは母の、父の鳴き声だったのだろうか。

流感にかかって、一緒に連れて行けなかった娘に何かを伝えたかったのだろうか。
ルイの考えが解らなかった。
彼は、ヒカルを「親同士の言い交わした婚約者だ」と言った。
両親がシャルルとそんなことを言い交わしているなんて知らなかった。

彼はシャルルととても良く似ているけれど、彼は嘘をつく。
そしてその嘘を本当にしてしまう技量の持ち主でもある。
その一方で、真実を自分に有利にすすめる手駒として、何年も保有する傾向がある。
彼の言葉はどちらなのだろう。
少なくとも、彼が発したことで、効力を発揮するに違いない、最高の攻撃だった。
先ほど、ヒカルがルイに対して「それはルイ・ドゥ・アルディではない」と言ったことに対する反撃だと思った。

しかし攻撃とか反撃とか‥ヒカルはそう思いたくないなと思いを巡らせていた。

彼とは長い付き合いだ。

家族‥と言わないまでも、彼女の数少ない身内よりも、ずっと長い時間を一緒に過ごしている。
ルイがああなってしまったのはルイの責任ではない。
彼が負わねばならない業というものはないと思う。
だから、早くそれに気がついて欲しい。

‥‥ヒカルを婚約者だと言って、彼に何かメリットがあるのだろうか。

シャルルに断りもなく、勝手に来日して、ヒカルと接触したことでさえ、きっとシャルルは激怒するだろう。
自意識過剰ではなく、本当にそうだと思った。

ヒカルに接触したことではなく、ヒカルの両親の法要に踏み行ったことに彼は激昂するに違いない。
余計に関係をこじらせてしまうのに、なぜ、あのようなことを言ったのだろうか。

「彼を少しだけ見つめよう」と思ったことを思いだした。
ルイには、ルイの理由がある。

「————イケダさん？」

突然、話しかけられて、彼女は振り向いた。

考え事をしていたので、人が近づいたことがわからなかった。
庭園へ出る大きく解放された扉から、ひとりの日本人女性が出てきた。

「あの･･･失礼ですが･･･それは母の旧姓です。」
ヒカルがそう言うと、ああ、そうだったわね、と彼女は笑った。

母の妹より少し年上で･･･姉よりも少し年下くらいだった。
自分も日本人だが、日本人は年齢を推測しにくい。
母と同じくらいの年齢の女性は、穏和な微笑みで近づいてきた。

「私･･･お母様と同級生だったの」
彼女が名前を名乗る。
聞いたことがある名前だった。
母の･･･7 回忌の時に弔電が送られてきた。
その相手が、たしかそんな名前だった。
そしてその人は有名な彫刻家の娘で･･･今は養子を迎えて結婚したはずだった。
自身も相当なコレクターで、絵画の収集家だったはずだ。

左薬指に、結婚指輪が光っていた。
こういったコレクターは眼光鋭い人物が多いのだが、彼女は穏和な･･静かで上品な女性だった。
記憶があやふやで失礼があってはいけないので、ひょっとしたら、と前置きしてヒカルが尋ねると、良く覚えているわねと手を叩いて喜んだ様は少女のようだった。

「黒須晄です」

彼女はそう言って挨拶すると、そう、大きくなったわね。
と彼女は笑った。
少し涙ぐんでいるようだった。

「お母さんに･･･彼女に良く似ているわ」
「良く言われます。」
「私は小学校の同級生だったのだけれど･･再会したのはあなたくらいの年だった。
すごく明るくて、意志が強くて、はちゃめちゃだったけれど･･･絵の上手な人だった。」

彼女は大きくなったわね･･と感無量のように、また頷いた。

「痛ましい事故でした。
あなたのことが･･･心残りでしょうが、どうか強く生きてね。お母様のように。」
「はい」

何か困ったことがあったら、いつでも連絡するように、と彼女は名刺を渡した。

「ここで逢えたのは何か意味があると思うの。」
自分の容姿が彼女を呼び寄せたのだとすると･･･今日法要があったことも考えると、何か･･本当に意味があったのかもしれない。
ヒカルは丁寧に礼を述べた。

「それにしても、先ほどの婚約発表。
今日の話題はこのお話しばかりよ。
･･そのときにお名前と姿を拝見して、もしや、と思ったのだけれど。」

彼女はおめでとう、朗らかに言ったのでヒカルは返答に困ってしまった。

「あら。まだ若いから。はにかんでいるのかしら」

ヒカルが黙っていると、彼女は微笑んで、嬉しそうに、肩を抱き寄せた。
小さく、彼女の母の名前を呟いた。
そしておめでとう、ともう一度言った。

「ランスの教会はアルディ家当主が結婚式を挙げる場所よ。
急がず、婚約時代を楽しんでね。」
ヒカルは言葉に詰まった。

誰かにおめでとうと言われたらありがとうと答えなさいと教えられた。
祝福の言葉は、自分も返事をすることで成就する、とシャルルに言われた。

「一方通行の賛辞は単なる音声でしかない」
彼はそう言った。

････また、儚く寂しそうに笑う美しい人を思い出していた。
かつておめでとうと言われたけれど「ありがとう」と言わなかった。
彼はそう言って少しだけ微笑んだ。

その時のことを思い出していた。
「そうだ。あなたに贈り物をしていきたいのだけれど」

ここで会ったのも何かのご縁でしょう。
彼女はそう言った。
「アルディ氏に、預けていくわね。彼とは収集家仲間なの。
若いのにあの審美眼は素晴らしいわ。
彼に･･･お母様の･･彼女のデッサン画をお渡ししておくわね。
若い頃にね、･･･私の大切な人を描いてくれたことがあったの。
そのときのラフデッサンをあなたに贈るわ。ずっと、気にはしていたのよ。」

時間がないのでこれで失礼するわねと彼女はそう言って立ち去った。

―――母の絵。
ヒカルは呟いた。

そうだ、母は･･･絵を描く人だった。
どんな人なのかは・・・･親族が語る母しか知らなかった。
自分は、母のことを知らない、と思った。

日本に訪れる度に、父の遺品や写真や論文などはいつも見ていた。
だから、将来は理系に進んでみたいと思った。
医学かどうかはまだわからなかったけれど、彼はシャルルを連れ出しに行ったモザンビークで無医療に苦しむ人々を見て･･･ 彼の路を決めたと言っていた。
その間に長らく付き合っていた母と結婚し･･･ヒカルが生まれて･・・・ようやく。
ようやく、これからと言うときに逝ってしまった。
父の軌跡はわかったけれど、ヒカルは、母が自分と同じくらいに何をしていたのか知らないことに気がついた。

彼女の友は多い。
彼女の友からもたらされる話もたくさん聞いた。

けれども。

母の遺したものを見ていないことに気がついた。
黒須晄の母ではなく。
結婚する前―――のマリナ・イケダについて知らなかった。

夏の蝉がまた鳴いた。

空には、黄色い･･･ルイの髪のようなレモン色の月が浮かんでいた。
今日は濃い色に見える。いつもはシャルルのような色の月なのに。

おかあさん。

蝉になって私に何かを伝えたいのかな。
月を見せてルイのことをもっとよく知りなさいと言っているのかな。
それとも･･･この薔薇の庭を見せて･･･シャルルを案じていることを言いたいのかな。
よくわからないよ。
でも、教えてもらったら意味がないよね。

自分の目と耳とすべてを使って。

知らなくて良いことかもしれないけれど。
知ったら苦しむことになるかもしれないけれど。

―――反省はしても決して後悔はしない。

おかあさんの口癖でしょ？
ねぇ。

おかあさんではなく。

マリナ・イケダという人を私は知りたい。
シャルルがこよなく愛した運命の人って、どんな人だったの？
彼女はもう一度･･･空を見上げた。
パリで見る星空とは違っていたけれど、あの月を。
シャルルも見ていると良いなと思った。

太陽が光るから、月も輝くのだ。
月があるから、潮の満ち欠けがあるのだ。

すべては、繋がっているから。

彼らも･･･彼らの命も繋がっていることを、どうか、知って欲しい。

■17

ルイを見つめようと思った。
母を知りたいと思った。

･･･自分は何にも知らないのだということを知った。

シャルルとあれだけ長い時間を過ごしながら、シャルル・ドゥ・アルディのことさえよく知らないことに気がついた。

知らない人のことを、知っているような口振りで非難すれば、それは怒るだろうな。
ルイの憤りを少しだけ理解する。

ヒカルはあまり怒らない。
怒る環境にないから。

喜怒哀楽が乏しいかというとそうでもないのだが、どうも、怒るという感情が恐ろしかった。
感情の昂ぶりをぶつけるところがなかったし、憤りを静かに表現するルイやシャルルを見ていると････最も切ない感情が「怒」だと思うのだ。

ルイはいつも何かに怒っている。
だから彼の怒る理由を知れば･･・彼をもっとよく知れば、今の状況は変わるかもしれない。
あまりにも冷たい関係が苦しかった。
シャルルもルイも互いを無視しているフリをしている。
嫌いか好きかより、黙殺することが最も辛い。
最も辛い選択をしている彼らが痛々しかった。

「･･･帰るぞ」

不意に声がして、ヒカルはぼんやりと眺めていた月から視線を移した。
扉にはルイが立っていた。
いつからそこにいたのだろうか。
会場の強烈な照明を受けて、彼の髪が逆光で眩しい。
夜なのに妖しく輝く眩しい光に、彼女は目を細めた。

「帰らないのなら、置いて帰る」
「ルイ」

ぼんやり佇むヒカルに、ルイは不快感を露わにした。
佳麗な顔立ちを引き締めて、彼は短くそう言うと踵を返す。

会場はいつの間にか、お開きになっていた。

それほど長い時間、ここに立ちすくんでいたのだろうか。
もう一度、ちらりと空を見上げると、先ほど見た位置よりずっと高い場所に月がぼんやりと浮かんでいた。

「待って！私も‥行くわ」
彼女は慌てて彼の背中を追った。
慣れていないピンヒールが邪魔をして、彼にうまく追いつけなかった。
ルイの背中を見てヒカルはもう一度彼の名前を呼んだ。
そして、会場の中は先ほど彼女が足を踏み出すのに四苦八苦した、毛足の長い絨毯であったことをすっかり忘れていた。

彼女の靴は床に深く沈み‥そして、次の瞬間にはバランスを崩して前のめりになる。
オーガンジーのドレスが腿に纏わり付いて、彼女が倒れ込まないように反作用の力をかけることを妨害した。

「ルイ！」

彼はぴたり、と立ち止まる。
ヒカルは、立ち止まった彼の背中に傾れ込んだ。
そして、ルイが振り返りもしないで、ヒカルの転倒を察し、彼女の身長と歩幅から、どの位置で立ち止まったら彼の背中に当たるのかを計算したことに舌を巻く。

彼は完璧だ‥‥！

まだ人が残っている。
彼らは最後までルイに注目している。
ルイはそれも計算に入れた。

「ヒカル。疲れたか？」

愛おしげな声で、彼は甘く微笑みヒカルを振り返った。
そっとヒカルの肩を抱き寄せて腕を取り、自分の腕に彼女の白い腕を絡ませた。
「帰ろう。」

可憐な初々しい二人を微笑ましく眺める観客に挨拶をしながら、彼らは会場を後にして、行きに乗り込んだ車に再び乗り込んだ。

車のドアが閉まり、静かに動き出すと、張り詰めた空気が少しだけ緩む。
「やれやれ･･･だ」
ルイが呟いた。
「勝手にうろうろするな。････黙って立っていることもできないのか、君は」
辛辣なルイの言葉に、ヒカルが口ごもった。

「ルイを探したのだけれど、見つからなくて･･･帰ったのかと思った」
「ひとりで帰れば怪しまれるだろ。」
小馬鹿にしたように彼が笑う。

「それは･･･ルイが婚約者ですって紹介するから･･･」
「余興だ」
彼は彼女の言葉を遮った。

「余興･･･」
「そう」
「何のために？」
「これからのために」

彼の真意がわからなかった。

「君もよくよく間が抜けた女だな。･･･婚約したんだぜ、オレと君は。」
「そうなの？」
「その耳は飾りか？」
少しばかり呆れたようにルイが言った。

「だって余興なんでしょう？」
「あの場での発表が余興という意味だ」

大げさにため息をついて、彼はヒカルを軽く睨んだ。
「これでシャルルは･･･君のことを公にせざるを得なくなる。
そして、シャルルは君を自分の妻にすることは出来ない。
息子の婚約者だからな」
「何を言っているの？」
ヒカルが驚いて声を大きくした。
ルイの侮蔑の言葉も耳に入らなかった。

「言っている意味がわからない。」

彼は目頭をそっと押さえた。
愚者と話すのは疲れると呟いた。
会場の強い光が眩しかったのかもしれない。

彼は高い鼻梁と眉の間を軽く指で抑えながら、静かに言った。
今日のパーティーは疲れたね、という挨拶のような軽さと唐突さでもって。

「言ったことそのままだよ。･･･オレは、シャルルの全部が欲しい。
地位も財産も名誉も全部いずれは手に入る。
それは待てば良いだけだ。
でも、オレはね、ヒカル。
シャルルの･･･全部が欲しいんだ。わかるかい？」
「･････」

そして、目を開けて、ヒカルを見据えた。
ヒカルは絶句して言葉を繋ぐことが出来なかった。
その目が･･･静かに時を待つ猛禽のように見えた。
動かず、獲物が警戒心を解く瞬間を待っているかのように。
眼光鋭い瞳はヒカルを捕らえて離さなかった。
初めて･･･ルイを初めて怖いと思った。
彼が欲しいと言っているものが何を指しているのかわかった。

「オレは、シャルルの絶望が欲しい。
　悲慟の様子が見たい。
　死ぬまで死にたいと思わせたい。
　オレが快哉を上げるのはそのときだ。」
ルイは冷酷に笑った。

それはもう、笑みなどではなかった。

彼はもう「ちいさいてんし」ではなかった。
墜ちてしまっていた。
彼の微笑みは‥死の微笑みだった。

見れば誰もが魅了されるが、触れればたちどころに猛毒で命を奪われてしまう。
彼は‥・奪うことにした、と囁いた。

「オレの血が騒ぐのかな。
　現当主も‥今の地位を奪還した。
　その一方で、たかが女ひとりのために命を賭けようとした。
　まったく正気の沙汰じゃない。
　そんなアルディの狂った血が、オレをおかしくさせて‥そして正気に戻す。
　祖母は狂死した。
　父も狂った。
　オレも間もなくそうなる。
　‥‥いや、もう、そうなのかもしれない。」

ヒカルは、掠れた声で彼の名前を呼んだ。
一縷の希望を込めて。

「ルイ。ルイ・ドゥ・アルディ‥‥」
だがしかし、彼には届いていなかった。

彼が彼の影に向かい合って、夕暮れの薔薇園で考えていたことは、こんな恐ろしいことなのだろうか。
次の言葉を出そうと思ったが、ヒカルは声を出すことが出来なかった。
まったく彼女を無視して、彼は宣言した。
囁くように、自身に言い聞かせるように、そして今日の攻撃が成功したことを喜ぶように、言った。
「そのためには君は必要な駒なので。先手を打った。

君を妻にして安らぎを得ようなどと、愚かしいことをあいつが考える前に。
　ヒカル。
これもおまえの定めだ。

諦めろ。

―――おまえをあいつには決して渡しはしない。
一緒に業火に焼かれてくれ。」

■18

共に業火に焼かれてくれ、とルイは言った。
けれども･･･
それがルイと共になのか、シャルルと共になのか、彼女は聞き返すことが出来なかった。
ルイが一緒に墜ちようと言っているのか、シャルルと一緒に荊棘の路を歩めと言っているのかわからなかった。

彼女はルイの宣言とも呪詛とも言えない話に返す言葉もなく････
ただ、彼の美しい彫像のような顔を眺めているばかりだった。
彼はやがて興味を無くしたように、横を向き、外の世界を眺め始めた。
もう、彼だけの世界に奥深く入り込んでしまっているようだった。

それっきり彼は言葉を発しなかった。

ホテルに到着すると、彼は先に降りて、ヒカルの手を取った。
出迎えたホテルの者の対応から、ルイがヒカルと同じホテルに宿泊することを知った。
彼女は何も聞かされなかった。

「ありがとう」
彼女が馴染まない靴を履いていることを気にしての行動かと思い、ヒカルは微笑んだ。
すると、ルイは興味なさそうに、無表情に答えた。

「･･･少し低すぎた」
「え？」
「ヒールだ。もっと高くすれば、うろうろ出来なかっただろう。」

その言葉で、彼があえてこれほどの高いヒールを彼女に用意したのだとわかった。

彼女が歩き回ったりしないように。
彼女が勝手なことをしないように。
彼女が立っているだけで何も出来ないように。

人形のように大人しくしろ、と言った彼の言葉を思い出した。

計算され尽くした彼の行動は、ヒカルの衣装ひとつとっても、予定済みなのだ。
彼は本当に･･･自分に何も求めていないのだと思い、ヒカルは困った顔をした。

「ねぇ。ルイ。･･･」
彼女は背中を向けてすでに歩き始めた彼に声をかけた。
彼は返事をしなかった。

「私宛の届け物が･･在るはずなの。
その人は、私の滞在先を知らないから、ルイ宛に送るって言ってた。
それを受けとって欲しいの」
「気が向いたら」
彼はそう言って片手を挙げた。

タイを片手に持ち、彼は部屋に戻ると言ってエレベーターに乗り込んでしまった。
このホテルの最上階スイートに向かったらしい。

「ルイ」

また、彼の名前を呼んだ。
そして慣れないヒールで躓きそうになる。

これもルイの計算のうちかと思うと、彼女は吐息を吐きだして、何かを思いきったように、きっと茶色の瞳を正面に向ける。

そして･･･おもむろに靴を脱いだ。

片手に靴を揃えて持ち、勢いを付けて走った。

タイルの床だったから、彼女は勢いを付けて走った。

エレベーターの扉を閉めようとする彼の傍らに滑り込むと･･･
今度はルイが絶句する番だった。

「ヒカル･･！」

呆れて声を出せないでいるルイに、ヒカルは乱れた息を整えながら、明るく微笑んだ。
にっこり微笑みながら、自分の宿泊階へのボタンを押す。
彼は青灰色の瞳を少しだけ大きくして、彼女の想定外の行動に面食らっていた。
だが他の者から見ればほんの僅かな表情の違いだった。
彼はヒールを履いて彼に追いつけないヒカルしか量定していなかった。

「私、短距離、得意なのよ。」

茶色の髪が少し乱れて、秀でた額には汗が噴き出していた。
やはり季節は夏だったから、冷房の効いたホテルの館内でも、彼女は汗をかいてしまっていた。
ふわり、と彼女の髪の香りが体温の上昇とともに、彼の鼻翼をくすぐった。
闊達に笑う彼女の顔を、ルイが呆れた顔で見る。

「ルイ・ドゥ・アルディに裸足で走って寄ってきた女は、君が初めてだよ。」
「あら、そう。婚約者と言っている割には、随分と私のことを知らないのね」
ヒカルはそう言って笑った。

エレベーターはゆっくり上昇し始める。
「何がしたいの？」
彼から、彼が予定していない質問をされるのは初めてだった。
「何も」
ヒカルがそう言うと、ルイ・ドゥ・アルディはほんの少しだけ、黙っていた。
また何かを考えているらしい。

「オレと一緒の部屋で寝たいのなら、どうぞ」
「シャルルが取ってくれた部屋に戻ります」
ヒカルは微笑んで言った。

ヒカルが何を考えているのか、ルイは戸惑っている。
そう思った。
だが、ここでシャルルの名前が出てきたことが彼の癇に障ったらしかった。

そのとき。
一瞬、ルイから目線を反らしたとき。

ルイはヒカルの腕を突然、掴んだ。

そして自分の身の内に引き寄せる。
今日、何度目かの彼への接触だった。
加減をしない強い力に引き寄せられて･･･彼女は小さく叫んだ。
「ルイ･･･！」

そう言った時にはもう遅かった。

彼は･･･ヒカルを胸に抱いて頤を掴んだ。
まるで猫の首を掴んで動作を封じるように。

そして、次には、彼女の顔を上向かせて、驚愕で抵抗する暇のないヒカルに、冷たい唇を押しつけていた。

噛みつくようなキスだった。
それは本当に短い瞬間のことで･･･ヒカルが驚いて声を漏らすとその次にはもう、ルイは彼女の躰から離れていた。

「君はオレの婚約者なんだろう？」
彼が意地悪く言った。
そして声を漏らして笑った。
艶やかな笑いだったが、瞳は笑っていなかった。

そしてヒカルの宿泊階にエレベーターが止まった。
「行け」
ルイは彼女を押し出した。
「オレと寝たいなら、シャルルの居るところでそう言え。
そうしたら･･･いつでも抱いてやる」
彼はそれだけ言うと、彼女との間にある扉を閉めてしまった。

閉まる瞬間は、もう、彼女を見ていなかった。

･･･ルイ。

ヒカルは･･･今、何をされたのかまったく理解できないというように、唇を押さえた。
強く押しつけられたルイの唇は･･冷たかった。
まったく愛のないその動作が理解できなかった。

どうしてなの？
どうしてなの？
彼女の頭の中では･･･ルイの眉根を寄せた美麗な顔と、息を詰めて彼女に烙印を押した彼の唇の感触と、「どうして」という言葉が旋回していた。

･･･そして唇を拭う。

ゆっくりと、部屋に戻る廊下を歩いた。
歩く度に、ヒールの底があたり、かちかちと音を立てた。
靴を持たない反対側の手の甲で、唇を拭う。
ほんの少しだけ施した紅がはげて、彼女の手の甲に付着した。

･･･シャルル。

彼女はシャルルの名前を呼んだ。
白金の髪の、静かに笑う麗人の名前を呼んだ。
いつも彼は必ず返事をする。
そして名前には言霊が宿ると言った。

科学的に証明できないことは信じない彼なのに、時々･･そういうことを口にした。
次には必ず少し上を見上げて･･・遠くに思いを馳せる。
誰かと対話しているかのように。
部屋に入ると、メッセージカードが届いていた。
シャルルからだった。
彼は普段、ほとんど自分でメッセージカードを依頼しない。
それなのに、こうしてヒカルが日本を訪れる際には、必ずメッセージを入れてくれる。
彼女は、彼からのメッセージを読んだ。
まだ、片手には靴をぶら下げたままだった。

「皆に宜しく･･･シャルル・ドゥ・アルディ」
メッセージはホテルの代筆だ。
けれども、それは間違いなく、シャルル本人の言葉だった。
ヒカルはカードの文字をなぞった･･･ゆっくりとなぞり、そして、カードの文字がやおらにじみ始めたことに気がついた。
何かに触れて、濡らしてしまったのだろうか。
靴を床に置いて、彼女はカードを一生懸命擦った。

素晴らしく贅を尽くした服もお構いなしに、水分を拭った。
————そうではなかった。

カードが濡れているのではない。

彼女の瞳から･･･茶色の瞳から涙が溢れていたことに、その時ようやく気がついた。
ヒカルは嗚咽を漏らした。

涙を流していると自覚してからは、涙を流すことを止めようとしなかった。
ここなら、誰にも聞かれなかった。

それでも、いつものように･･･彼女は手の甲を唇に押しつけて声を殺す。
彼女は幸せな人生を歩んできたけれど、涙を流すことがなかったわけではない。
ただ、誰もヒカルが飲泣する様を見ていないだけだった。
あの、寂しげに笑うシャルルでさえも。
氷のような無表情で自分の影を見つめ続けるルイも。
彼女の泣き顔を、見てなかった。
彼女は泣かなかったのではない。人前で、泣けなかったのだ。
ようやく一人きりになり･･･彼女は涙を落とし始めた。

裸足のまま。
立ったまま。

手にはカードを握りしめ、反対側の手の甲で、彼女は唇を押さえて声を殺して泣いた。

･･･苦しい、と言いながらむせび泣いた。

誰にも聞こえない慟哭を白い手で遮った。

･･･それは、ルイの心ないキスに酷く驚き、拭った方の掌だった。
彼のキスの味が残るような拭われた口紅が･･･彼女の唇に戻された。

それはこれから始まる何かの神託のようだった。

■19

翌日、ルイ・ドゥ・アルディはホテルを引き払ってしまっていた。

その先の予定は彼女に伝言されていなかった。
アルディ家に照会すればわかることではあったが、彼はしばしばアルディ家が決めたスケジュールの合間に何かを行っている節があった。
今回もどうもそういった特別な用事があったらしい。
彼に依頼した母の形見を受けとってくれたのだろうか、ヒカルはホテルに問い合わせをした。
彼とは名前も違うし部屋番号も違うから、第三者には教えられない、と言われ、彼女は少し思案して、自分はルイの婚約者であり、同居人だとパスポートを見せた。
宿泊者名簿から彼女の身元を知るや、ホテルはあっさり回答した。

今朝早くにルイ宛に荷物は到着したので、そのまま出立するルイの荷物に入れたと回答があった。
それ以上の情報は得られないとわかり、彼女は一度部屋に戻ることにした。
何件か電話をかける。
まずは昨日の会食に不参加となってしまった詫びを叔母と伯母に入れた。
仕方のない理由だし、何よりヒビキヤさんに会えたのだから、こちらのことは気にするな、と口を揃えて言われた。

また会えるから心配するな、と気遣った返答があった。
それよりもっと、年にあった楽しみを見つけるように、と二人から言われて、ヒカルは苦笑した。

何が楽しみか、わからない。

年頃の年齢にあった遊びをしたり、出かけたりすることはヒカルにとっては第一優先事項でなかった。
両親は若い頃からあちこち出かけていたらしいが、彼女は、パリのアルディ家の中で薔薇を眺めて過ごしたり、資料室で本を読んだり、何よりシャルルと時間を過ごすことが最も楽しいことだった。

もちろんシャルルが連れ出してくれるクルーズも避暑地の高原も、季節の空気を感じる様々なリゾート地も楽しかった。
けれど、彼女はシャルルの穏やかな横顔を見るのが好きだった。
同じように、ルイにも穏やかに微笑んで欲しかった。

彼の方が「年相応」の楽しみを持つべきだと思った。
そして、時間を見計らって、彼女に贈り物をしてくれた友人に電話をした。
あいにくと不在だと言われて、丁寧に礼を述べてそれを伝言して欲しいと伝える。

渡された名刺にはメールアドレスが入っていたので、後でメールを送ろうと思った。
日本語ソフトが入っていないノートブックしか持ってきていないことが悔やまれた。

そうだ。

ルイの予定を照会しよう。
彼女は思いついて、ラップトップを開く。
あまり機械ものは得意ではなかったが、これもシャルルが教えてくれた技術のひとつだ。
彼女はクラスの友だちよりも、比べものにならないほど膨大な知識とスキルを持っていた。
アルディー族は様々な場所に散らばっているから、こういった通信網を確保していないといろいろと難しいという。

シャルル・ドゥ・アルディは、これをもって、一つの場所に集って会議を開くタイプの親族会議を廃止した。

どこよりも早く通信網を確保して、WEB 会議システムを構築したのは、彼と彼の弟の共同事業によるものだ。
IT 事業は今やアルディ家の主要な事業の一つであると聞く。

彼女はセキュリティ向上のためにコマンドプロンプトでプログラムを立ち上げる。
彼女が使っているOS は市販のものではない。

これを使いこなすことが出来る者はアルディ家の縁の者しか居ない。
しかし彼女はゲスト権限でしかここには入れなかった。
彼女はアルディの名前を持たない者だから。
先ほど。

「ルイの婚約者だ」
と嘘をついたことが気になっていた。
情報を得るためなら、自分が納得していないことを口に出すことを躊躇わなかったことに‥少しだけ驚いていた。

大胆な方便を堂々と使用した随分後になった今になって、罪悪感が襲ってくる。
そしてこのことによって、ヒカルは哀しい現実を知った。

自分が、部外者であることを。

アルディの名前を持たない彼女が彼らに関わろうとするのには限界があるのだと知った。
ルイが何を考えているのか。
シャルルの憂いをどうしたら解消できるのか。
それを考えるのは今のヒカルでもできるが、知ろうとするとなると、越えられない壁があるのだと気がついた。

程なくして検索結果が出た。
やはり、数日前から彼はオフになっている。
今般の来日は、まったく彼の独断で行っているものなのだ。
ルイがこれほど長いオフを取るのは珍しい。

他の人にとってみればほんの数日ではあったが、ルイが連続してオフを取るのは滅多にないことだ。
ヒカルの知っている限りであったが。
シャルルは彼を無視している割に、勝手な行動を許さない。

･･･ルイは何をしているのだろう？

その時だった。

彼女のメールに着信が入る。

･･･ルイ・ドゥ・アルディからだった。

まるで、見透かしたかのようなメールの着信に少し驚く。
しかし、このスケジューラーに接続していることを彼が知ってメールを寄越したのだと想像した。
彼が彼女の行動を知ろうと思えば、それは難しいことではない。
タイトルは無題だった。
そして挨拶の言葉も何も無くただ、日時と時間と場所が書いてあり、その少し前の時間に迎えを差し向ける旨の指示が入っていた。

指示。

この言葉は正しい。
彼は彼女に命令とか指示しかしない。

会話はしない。
決して、相手の言葉を聞こうとしない。
しかも、その場所は、フランスだった。
場所も知っている。

確か･･･大きなパイプオルガンが設置されたホールが新築されて、落成式が行われる予定だった。
こけら落としには、フランスの芸術筋や、招かれた財界人たちを集めて、チャリティーコンサートを開くことになっていて、アルディ家も慈善活動の一環で協賛しているはずだった。
また、彼は彼女を公式の場に連れだそうとするのか。

ヒカルはため息をついた。

今度は不意打ちはきかない。

だが･･･彼がメールの末尾に貼ったリンクが気にかかった。
そのURL はどう見ても海外のサーバーを使用した彼独自のサーバーだった。
ミラーリングしているに違いなかったが。
だが、ヒカルはそのリンク先のページを開く。
ルイ・ドゥ・アルディには一般人のような悪意はない。
彼女のPC を汚染するほど、彼女に興味がない。
ヒカルはそのページを見て、思わぬ事に息を呑んだ。
そこは･･･シャルルのスケジュールだった。

同じ日の同じ時間。

シャルルもコンサートに参加することになっていた。
もっと驚いたのは、同席者が居るということだった。

･･･シャルルに女性の同伴者。

考えても居なかった。
チャリティコンサートの同伴者は、その催しの趣旨から、大抵が配偶者か相当親しい間柄の恋人同士しか来場しない。

アルディ家の当主が来場することになれば、VIP 待遇で、最も音が良く聞こえる最高の場所に案内されるだろう。

その席の周辺には同じような高い教養を持つ同じような環境の者ばかりが集う‥
あの誇り高く、人嫌いなシャルルが、誰かを伴って、長い時間を隣に座らせても良いと思う相手がいる･･･

今まで考えたこともなかった。

そしてシャルルがそのことを秘密にしていたのであれば、ヒカルは申し訳ないことをしたと思う。
シャルルが新しい愛を始めていて、愛する人が居るのに、かつて愛した人の忘れ形見を引き取ってしまったのだったら、それは確かに気まずいだろう。
まったく気がついていなかった自分の鈍感さに腹が立った。
それくらい、シャルルは何も言わなかった。

彼の何を知っていたのだろう。ヒカルは恥ずかしさで一杯になった。
昨日、シャルルからのメッセージを受けとり、涙を流した自分の存在が、シャルルの重荷になっているのかもしれないと想像すらしていなかった。

茶色の瞳をディズプレイに向ける。

そして電源をおもむろに強制的に落とした。
プログラムをいちいち終了させるほどの余裕がない。
指が震えてキーボードを打つことが出来ず、やむを得ず電源ボタンを長押しした。

‥‥私は何をしたいのだろうか。

ゆっくりと立ち上がると･･･

彼女は荷物をまとめ始めた。
帰る予定になっている日より大分早かった。
それでも‥帰ろうと思った。
ルイ・ドゥ・アルディから母の形見を受けとらねばならない。
そして自分のこれからを考えなければならない。
そして婚約者だと言った彼の言葉を撤回させる。

彼女が同じ敷地に居ることによるものであれば、彼女は日本に戻ろうと思っていた。
今回、熱心に･････親族から日本に戻ってくるように言われていた。

身寄りがないわけではない。
自ら選んでパリに渡った。

それがシャルルとルイを遠ざける結果になってしまっていたのだったら、これが引き際だと思う。

何てことはない。
彼らを苦しめているのは･･･自分だったのだ。

そう思った。
自分がシャルルの傍に居たいと言いだしたことが、彼らを･･･苦しめていたのだったら、それはヒカル自身が正さなければならない。

■20

パリに着くと、アルディ邸には、シャルルは居なかった。

早い帰りに、使用人は随分驚いていたが、彼女はルイと約束があって、予定を繰り上げて帰ってきたと彼女は言った。
どこでルイと約束したのか、と尋ねる唯一の人は不在だ。

シャルルは当分戻らないと言う。

彼女は少し疲れたから休むと言って、部屋に入ってしまった。
実際、毎年の滞在よりずっと短いのに、酷く疲れていた。

シャルルは何処にいるのだろう。
シャルルが居ないのであれば、薔薇の手入れは誰が行っているのだろうか。
庭師だろうか。

ヒカルは気になった。
そして、いつも彼女が日本から帰ってくるときは、シャルルは入れ違いに不在にすることは決してなかったことに思い至った。

彼はスケジュールをヒカルに合わせていたのだと思う。
そんな些細なことだけでも･･ヒカルは胸が締め付けれそうだった。

彼女には「小さなこと」とか「当たり前のこと」と受け止められないくらい、重くて深くて澄んだ愛を感じる。
これまで、自分が当たり前のように受けていた仁恩というものは、シャルルがすべて調整してもたらしているものだと思う。

･･･シャルルこそ･･･私の晄なのに。

ヒカルは部屋に一度戻ったあとすぐに薔薇園の温室に向かった。
シャルル・ドゥ・アルディのことだから、ぬかりなく手配はしたのだろうが、やはり、気になった。
今度は彼が戻ったときには「おかえり」とヒカルの方から、薔薇を差し出して迎えてあげたい。

彼女は最上の薔薇を選ぶ日々を思い出した。
彼のために薔薇を選び、朝、彼の目覚めを促すために通った廊下を、今度は一人で歩き、薔薇園に出る。
ガラス張りの温室が一角に設置されて、空調や湿度などは完全にコントロールされている。
ヒカルがやって来たときには、そこは廃れてしまっていたが、
シャルルはまた、その温室を復活させた。
この時間は、森林に囲まれたこの屋敷でもさすがに暑かった。
温室の方が涼を取ることが出来るかもしれない。

庭を横切り、彼女は陽射しの注ぐ小道を走って通り過ぎ、そして温室の扉を開けた。
最奥の品種改良のための実験棟以外は、ここは自由に出入りが出来た。

そして、勢いよく扉を閉める。

「———君はいつも走っているな」
「あなたはいつもそこに座っているのね」

今度はあまり驚かなかった。
彼がそこに居るような気がしたからだ。

「気がする」

それは長い時間を一緒に過ごした者でないとわからない感覚なのかもしれない。
それとも、時間ではなく、彼とは何かを共有しているのだろうか。
だから、彼がそこに居るとわかるのだろうか。

「･･･おかえり、ルイ」
「ここはオレの帰る場所ではない」
彼はいつもの通り、ベンチに腰掛けていた。

薔薇をあしらった真鍮のベンチは、随分と古くなっていたが、それもこの薔薇の園の風情によく似合っていたので、館の主はそのベンチを撤去することはしなかった。
そこがルイの決まった席であると知っていたかどうかはわからなかった。

金の髪が光っている。
物憂げな上品な眼差しを遠くに向けて、彼はベンチに腰掛けていた。
陽光の中の彼は酷く幼かった。

服装が彼を年相応の若者に見せていたのかもしれなかった。
ヴィンテージのデニムに、上にはごく軽い素材のシャツを着ているだけで、半袖から覗く彼の腕は白かったが、フェンシングや乗馬などでの全身運動で良く締まっていた。
少しだけ骨張ったかんじがするのは、彼がまだ成人前で、成長し続けて居ることをあらわしていた。

筋肉と骨の成長速度がまだ、アンバランスなのだ。
彼の長くて華奢な首が金髪から覗く。
彼はまだ、若い。
意識していなかったが、彼とヒカルの年齢はそれほど離れていない。

「それなら———ただいま、ルイ」
彼女は微笑んだ。

ルイはその答えは気に入らなかったらしい。
彼女の言葉を無視した。
「随分と早い帰りだね」
彼は脚を組み直した。

そして背もたれに寄りかかり、彼女に視線を合わせることなくそのまま遠くを見ていた。
‥考え事をしていた時に踏み入れてしまったようだ

彼が酷く不機嫌で、言葉を返さない理由がわかった。
深く物思いに沈んでいたのを、ヒカルの物音で、急に呼び戻されてしまったからだ、ということに気がついた。

少年時代から、彼はシャルルが居ない時を見計らってやって来る。
そして何をするでもなく、帰って行く。
ここは、彼が唯一物思いに耽ることのできる場所なのかもしれない。
薔薇の香りでむせかえるようなこの場所で彼はいつも･･･何を思っているのだろうか。

「ねぇ、私も座って良いかしら」
ヒカルはそう言って、歩み寄り、彼の許諾を得ずにベンチに座った。
3 人掛けにも相当するベンチの中央にルイは座っていたが、その隣はヒカルが座るには充分な空間が空いていた。

「‥‥何の用？」

「薔薇の様子を見に来たの」

そんなものは庭師が手入れをしているから必要ない。
素っ気なくルイが言った。
ヒカルは面白くなってクスクス笑った。

「ということは、ルイも確認しているのね、薔薇のこと」
「そういう、根拠のない前向きすぎる発言は、いつか身を滅ぼすよ」
「忠告ありがとう、ルイ」
「忠告ではなく、警告だ」
彼は気怠げに、くせのない髪をかき上げた。
「･･･予定より早い帰国だな」

「ルイに宛てて送られた届けものを取りに。早く見たかったし。

･･･それに

あのホテルに居ると、ひっきりなしに来客があって私には対応しきれなかった」
ルイが婚約者を披露したという話を聞きつけて、誰も彼もが、ホテルに押しかけてきたので、ヒカルは早々にホテルを引き上げてしまった。
元々、予定を変更して帰国するためのチケットを手配しようと思っていた矢先に、その作業さえままならないくらいの電話や来客を知らせる内線電話に辟易してしまった。

彼はそれも見越して、彼女の名前を公開したのだろうか。

････それなら、彼女が早めに戻ってくることも、ルイにとっては計算の内なのだろう。

室内は快適で清浄な空気が流れており、対流に沿って薔薇の香りが漂っていた。
少し、汗が引いてきた。
ヒカルは肩をすくめてルイに答える。

「まぁ、年頃だから。いろいろ考えることがあるのよ」
「婚約者のこととか？」
彼は皮肉たっぷりに言った。
ヒカルは吹き出した。

「そうそう。婚約者と名乗る人のことも。

今は婚約者と名乗る人が持っている私あての届け物が気になるの」
「そんなに気になる品をオレに預けたのは浅はかとしか言いようがないけれど」
「仕方がなかったのよ」
ヒカルが困ったように言った。
「できることなら、直接受けとりたかったけれど‥タイミングが合わなくて」
「オレに頃合いを求めるな」
確かにそうだけれど、とヒカルが笑う。

これほど長い会話をしたことがなかった。

相手はいつもヒカルに一方的に話しかけるか、無視するかのどちらかだった。
傷つけられたとはもう思っていなかった。

彼は彼の理由がある。
人が怒るには理由がある。

そして･･･それを知りたいと思う限り、どんなに辛くても、知
らないでいることが幸せだと思えなかった。

「オレに頼み事をするのなら･･･報酬が必要だ」
「お金はないわよ。私、ルイみたいにお金持ちじゃない」
「そういう世俗的なものはいらない」
ルイは言った。

ルイが欲しいものが何か、あの暗い瞳で告げられた時を思い出した。
彼の欲しいものは･･･シャルルの絶望だと言っていた。
「たぶん、ルイの欲しいものはあげられないよ」
「そうかな」
彼はそう言った。

そしてゆっくりと、背もたれに置いていた腕を、彼女の肩に降ろす。
ヒカルが驚いて茶色の瞳をルイに向ける。
ルイは妖しく笑った。
「ヒカルが欲しい」
歌うように彼は言った。
「････ルイ。私はルイの欲しいものでない」
彼女は低くそう答えるが、ルイは否定も肯定もしなかった。

ただ、彼女をゆっくり抱き寄せて･･･囁いた。
「オレの本当に欲しいものをもたらすのは、おまえだよ、ヒカル」
そう言って、彼は彼女の腰に手を添えて、彼女の顎をもう片方の手で掴む。
あの、エレベーターの時のように。
ルイがヒカルを「おまえ」と呼ぶ時はいつも決まっている。
彼の暗い焔を彼女にぶつけるときだ。
彼女を傷つけたいと思うときだ。

「迂闊なヒカル。―――オレは、おまえを許しはしない。」
そう言って、彼は彼女の顎を強く引いた。
いやだと抵抗することさえ許されなかった。
立っているときより、座っているときの方が躰が密着される。
彼のデニムの下やシャツの下から伝わる体温も、逞しい腕からのぞく、骨張った長い腕も、すべて感じることができるのに、これに抗うことができない。

ヒカルは小さく悲鳴をあげた。

迂闊だったとしか言いようがなかったけれど、彼女は彼がこの場所で･･
彼の「聖域」でこんなことをするとは考えていなかった。
このベンチで彼が自分の影を見つめながら何か物思いに耽るときは、侵してはならない空間であり、そしてその瞬間だけはルイは、誰も見たことのない彼になると思っていた。

「彼しか知らない彼自身」をさらけ出す場所はここだけだと思っていた。

だから･･･話ができるのではないかと甘く考えていた。
ルイ・ドゥ・アルディが長い間築いた氷の壁を乗り越えられる場所はここしかないと思った。

「厭な女だ。高慢で、なんでも自分の思うとおりになった人間
特有の傲慢さがにじみ出ているよ。
・・・・そんな女を穢しても、罪にはならない。
なぜなら・・・オレを穢したおまえを罰することができるのは、オレだけだから」
「あなたを傷つけたりはしない」

ヒカルは渾身の力を込めて抵抗した。
腰に回されていたルイの手は、そのまま伸ばされて、彼女の肘を掴んだ。
彼女は抵抗できずに、彼とますます密着した状態になる。
「傷つける側はね、いつもそう言うものなのさ」

彼はそう言って･･･ヒカルに顔を寄せた。
壮美な彫刻の様な顔が彼女に近づいて････ヒカルは再び、彼の唇を受けた。

ルイ・ドゥ・アルディの唇は冷たかった。
暑い陽射しの中で、彼の唇が最も冷たかった。
彼はヒカルの薔薇のような唇を奪い･･そして更に深く沈めた。
ヒカルは声にならない声を上げる。
抵抗しようと、躰を硬直させて、彼から離れようとする。
しかし、それは成功しなかった。

彼は･･･ヒカルを傷つけるためだけに、深くて長くて･･･心のない接吻を続けた。

■21

彼女はこれまでキスを体験したことがなかったので、酷く戸惑った。

彼女はまだ若かった。
ルイより若かった。

恋というものがよくわからない。
ルイの愛の所作がわからない。

だから･･･唇を寄せられても、彼女はどうしていいのかわからなかった。

これが心のないものであることはすぐにわかった。

シャルルがヒカルの額や髪に落とす、慈愛に満ちたキスはもっと･･･あたたかい。
そして、彼女がシャルルにキスをするときは、もっと･･･もっと心が和らぐ。
だから、ルイとのキスがこれほどまでに哀しくて冷たくて寂しいとは思っても見なかった。
同じように･･･ルイが誰かと唇を重ねる瞬間は、これほどまでに孤独を感じる瞬間なのだろうかと思うとどうにも切なくなった。

彼が「赦さない」と言ったけれど、誰かと寄り添う瞬間は、もっと温かいはずだった。
シャルルと･･･寄り添った毎日はそれだけで温かい。
彼は･･･誰かと寄り添うことで、幸せを感じることはできないのだろうか。

いやだ、と拒絶することは簡単だった。

けれども、彼を拒むことが、果たして･･･彼の望む終着点にたどり着くことができるのかどうかとちらりと思った。

彼は、誰にでも愛されるだろう。
彼は誰にでも優しいのだ。そして誰にも冷たい。

この一族以外には、すべての人に平等だ。
けれども･･それは彼の望んだ姿でないはずだった。

彼はいつも誰かに優しくすると荒れる。
彼はいつも仮初めの恋を捨てると荒れる。

それなのに。

愛されることを拒んでいる。
愛することを拒んでいる。

その一方で。

愛されることを望んでいる。
誰かを切実に愛したいと望んでいる。

そう、思った。

それは彼との哀しいキスを交わさなければわからなかった。
彼の冷たいキスが･･･彼女をどうしようもなく哀しくさせた。
ヒカルは涙を落とした。
あまりにも、切なかったから。

この親子はどうしてそんなに･･わかり合えないことに無頓着なのだろうか。
ヒカルの母親を愛したシャルルは愛について知っている。
愛を知らないルイは、それでも愛がどんなに尊いものか知っているから愛を手に入れたいと思っている。

だから、互いに愛を求めているはずなのに。
どうして･･･どうして互いに互いを求めることが出来ないのだろう。

ヒカルは涙をこぼした。
涙を流してルイに懇願した。

「･･･ルイ･･･いや･･･！」
彼女は言った。

愛のない行為は、ただ虚しいだけだ。
彼女は、ルイに温かいキスをしたかった。
ルイからは､温かいキスが欲しかった。

それなのに、こんなにも･････わかり合えないキスを交わすことが哀しかった。
いやだ、と彼女が身を捩った瞬間。
その瞬間のことだった。
「･･･ルイ」
かれた声が聞こえた。
ぎくりとしてヒカルが目を見開いた。

身を起こす。

そして･･･声のする温室の入り口に目を遣った。
見なくてもわかる。
その声は、間違いようもない。
美しい良く響くテノールの持ち主は、この館の主しか居ない。
シャルル・ドゥ・アルディが･･･
そこの幽鬼のように立っていた。

久々に見る彼は、少し面やつれしていた。
彼女と初めて会ったときの彼に良く似ていた。

･･･シャルル・ドゥ・アルディは、彼女の母の名前を呼んだ。

シャルルは不在にして戻らないはずだった。
ルイは身を起こした。

名残惜しくないと宣言するかのように、ヒカルからあっさり体を離した。

そしてゆっくりと立ち上がると･･･挑戦的な微笑みを浮かべて、シャルルに向き合った。

シャルルとルイはまるで･･･未来と過去を向き合わせたようだった。

ヒカルの母を愛することを止められなかった「青春の輝き」の時代の彼と、生涯愛すると誓ったのに他に子供をもうけて苦悩しつつ、愛する女性の娘を愛でる未来の彼と････
彼らは対峙した。

そして無言でにらみ合った。

シャルルは僅かな時間を、温室が気になって立ち寄ったのだとわかった。
先ほど遠くで聞こえたボイラーの音から、機器の調子が悪く、彼の思い通りに温室の状態を保つことが出来ないのだろうと推測した。
ルイも･･･それが気になって戻って来たのだろうか。

彼らは同じものを愛でている。
彼らは薔薇を愛でることができる。

それなら･･･全くわかり合えないということはないはずだった。
ヒカルはシャルルの名前を呼んだ。
しかし、白金の髪を揺らして･･･彼はゆっくりと動く。

かつて、ルイがヒカルを侮辱したときに手を挙げたあの激しさでもって。
「シャルル！」
ヒカルは叫んだ。

シャルルはおもむろに拳を挙げる。
自分と同じ顔をした実子に、拳を振りかざした。
ルイはそれを･･･笑みを浮かべながら避けようとしなかった。

「シャルル！」

彼女はもう一度叫んだ。
今し方まで、彼女に冷たくも美しい口付けを浴びせたルイの頬に、シャルルの拳があたる。
そして･･･ルイは勢いよく倒れた。
予測していたはずなのに、倒れ込んだ。

「･･･ルイ！」
今度は倒れた彼の名前を呼んだ。

「ヒカル･･･黙っていろ」
シャルルはそう言うと、ルイにのしかかった。

すでにルイの倍以上の年齢で在るはずのシャルルは、若いルイの上にのしかかり･･･
そして、何度も彼の頬を打った。
ルイの高い鼻梁から血が噴き出す。そして唇が切れる。

拳で彼の腹を何度も殴ったので、ルイが口から血を吹き出した。

「･･･シャルル！シャルル！！！」
激昂したシャルルは何を言っても聞こえていなかった。

久々に会う彼は、ルイと同じ青灰色の瞳を澱ませながら･･･自分の若い頃と同じ姿をしたルイを殴り続けた。
彼の拳から血が流れた。
指関節の付け根の皮膚が裂けて血が流れ出した。
それでもシャルルはルイを殴り続けた。
彼の狂気を目の当たりにして、ヒカルが叫ぶ。

「シャルル！シャルル！だめ！」

そうして。

ヒカルは無我夢中でシャルルにしがみついた。
ルイは薔薇園の温室の地面に落ち、彼にのしかかってシャルルがひたすらに殴り続ける。
何か･･鈍い音がした。

ルイの肋骨にシャルルの拳があたる音だった。
骨が軋む音がする。
そして、シャルルの顔には･･･

血飛沫となったルイの吐血と、シャルル自身の拳から漏れる血飛沫が飛び散った。
ヒカルは、シャルルの背中にしがみついた。
恐ろしく強い力が、ルイに降りかかっているのがわかる。
ヒカルの力では止められなかった。
どんなに叫んでも、シャルルの狂気は鎮められなかった。

彼の耳には何も届いていなかった。

ルイは黙って殴られるままになっていた。

計算があってのことか、それとも抗うことも出来ないくらいのシャルルの激昂に反撃できないのか･･･それすらもヒカルにはわからなかった。

「･･･どけ！」
「いやだ！」
ヒカルは叫んだ。

シャルルの怒声を久方ぶりに聞いた。
それでも、彼女はシャルルを止めようとした。

ちょうど振り上げたシャルルの腕にしがみつく格好になり･･･ヒカルは力の作用で、シャルルの腕に振り払われてしまう。

あっと思った時にはもう、遅かった。

彼が上げた腕から････ヒカルが振り払われて、転倒した。
場所が悪かった。
転ぶと思った時にはもう宙に浮かんでいた。
身を守るような体制でなかったのに、彼女はそのまま、無防備に吹き飛ぶ。
転倒した場所が悪かった。
そこは･･･先ほど、ルイの強引なキスに戸惑った、真鍮のベンチの脚元だった。

･･･そこに居合わせた全員が･･･

ヒカルを含めて誰もが、ヒカルが勢いよく飛ばされて、その真鍮のベンチに頭を激しく打ち付ける音を聞いた。
身長がある割に華奢な彼女は、シャルルに押し戻されて･･･
気を失った。
意識を失う直前。

シャルルの拳はすでに、ルイのほお骨を強く打ち付けすぎて砕けてしまっていることや、ルイの肋骨が激しく殴られて折れていることを知っていた。
けれども、深い闇に墜ちてしまっていたので･･･

彼女は彼らに「手当をしなさい」と言うことが出来なかった。

ヒカルは、そのまま深い闇に沈んでいった。

■22

深い海の底で･･･ヒカルは揺らいでいた。

彼女はどうやっても、アルディ家の家族になれないことを思い知った。
シャルルがヒカルに向かって「父になれない」と言った理由はいろいろあると思う。
ヒカル・クロスという名前を大事にしなさいという彼のメッセージが一番ではあるが。
それよりも、アルディ家に加えることが出来ないという、シャルルの当主としての苦悩があった。

不幸な誕生を招いてしまったルイのようにしたくはないというシャルルなりの選択だった。
アルディ家に生まれた者は精子と卵子の提供を余儀なくされる。
それは･･･成人と同時に義務づけられる。
当主は、就任した瞬間に再び提供を求められる。
ヒカルはもうすぐ成人になる。

万が一ルイと結婚ということになれば、彼女も卵子を提供することになるだろう。
ルイはそのことでシャルルが思い悩むであろうことも計算しているのだろうか。

考えたくなかった。
そんな恐ろしいことを考えてはいけないと思った。
でも自分が「家族」になるためには、今のままではいけないのだと思った。

シャルルは、当主に就任したときには、すでにヒカルの母を運命の人と定めていた。
一生彼女しか愛さないと決めていたはずだった。

たとえ結婚できなくても･･･その後にシャルルに恋人と呼ぶ者が居たとしても、彼の心の中に存在する人は、ヒカルの母だけだった。
その頑なさ故に、ルイが生まれた。
彼を籍に入れることは、シャルルはかなり渋ったと聞く。

そして、そんな話をヒカルの耳に囁く者に対してシャルルは容赦がなかった。
けれども、ヒカルはそれを理解できないフリをした。

聞こえないフリをした。

彼は、確かに愛を知っている。
それでもシャルルは当主になることを彼女の母に誓い･･･そして、ヒカルの両親の愛を祝福した。
シャルルが、当主としての責務を果たしたことを、年若い彼女が責める理由はなかった。

･･･ここは深くて冷たくて暗くて･･･寂しい。
シャルルもルイもこんなに深淵に沈んでいるのだろうか。

私は何も知らなかった。
何も知らないフリをした。

目を瞑って、見たいものだけを見た。
耳を塞いで、聞きたいものだけを聞いた。

シャルルの狂気はちっとも癒されていなかった。
ルイの幽寂についてちっとも解ろうとしなかった。

おかあさん・・・･おとうさん・・・私を置いて逝ってしまった。

泣くと天国に行けないと言われたから泣かないことにした。

それでもどうにも哀しくなって、涙が出てしまうときはひとりで泣くことにした。
もう一度会いたいから･･･毎日毎日、お祈りした。
早く会えますようにって。
そう言うと、シャルルは優しく訂正した。

「早く、ではなく、いつか、と言うように」と。

早く会うということがどういう事なのか、彼自身がよくわかっていた。

いつか、会いたいから。
必ず、会いたいから。

私は･･･シャルルが心配だからここに残ったわけではない。

････シャルルは私と同じように「早く会いたい」と思っていたはずだった。

だから･･･一緒に、連れて行ってくれると思った。
両親の元に。
彼なら確実に連れて行ってくれると思った。
シャルルはいつも切望していたから。
「早く会いたい」と。

私は残酷だ。
シャルルとルイを･･･
この深い闇から戻すために、闇をまず知らなくてはいけないと解っていたのに･･･知ることを拒んでいた。

自分だけ温かい晄の中に居た。
･･･永遠の晄と名付けられたのに、晄が落とす闇に目を向けることを拒んでいた。
それも晄の一部なのに。
こんなにも深くて辛くて哀しい、底のない果てのない海のような幽明の境を･･･
彼らはいつまで彷徨うのだろうか。

彼女は涙を落としそうになる。
この冷たい水の底のような空間でさえ、彼女は涙を抑えるために手首を持ち上げて、自分の口から嗚咽が漏れることを防ごうとした。

････その時だった。

誰かが、手を取った。
彼女の手首を、誰か･･･冷たい手の持ち主が掴んだ。
ヒカルはその手の持ち主を知っていた。
「ヒカル」
声が聞こえる。その声も知っている。
「目を開けて･･･ゆっくり」
彼女はその声の言うとおり、ゆっくりと目を開けた。
「シャルル」
ヒカルは目の前の人の名前を呼んだ。
「シャルル」
声が掠れて、自分の声でないようだった。
「ヒカル････ヒカル･･･」
シャルルが何度も彼女の名前を呼んだ。

意識がはっきりとしてくるにつれて、彼女は自分の部屋に寝かされていると気がついた。
どの位寝かされていたのだろうか。
頭が重かった。
カーテンの向こう側はすでに暗かった。

「起きてはいけない」
彼はそう言って、ヒカルの手を薄い羽毛布の中にゆっくりと戻した。
その際に、脈拍に異常がないかどうか調べる。
彼は医師の仕草でもって、彼女に異変がないか簡単に調べた。
しかしそれは左手のみを動かし･･･右手には痛々しい白い包帯が巻かれていた。
ゆったりしたローブの裾から覗く右腕は、指の第2 関節から上はきっちり包帯が巻かれたている。
「どこにも異常はなかったけれど･･･念のため明日は精密検査を受けてくれ」
「シャルルがそう言うなら、だいじょうぶよ」

彼女は何があったのかを思い出して、それから少し間を置いて微笑んだ。
彼の悲愴な顔に言葉を選ぶ。

何があったのかを彼の口から再現させてはいけない。
自分は大丈夫だと伝えて安心させなければいけない。

「駄目だ。オレの言うとおりにしてくれ」
シャルルは短くそう言った。
ヒカルは軽く息を吐き出して、茶色の瞳をのぞき込むシャルルの青灰色の瞳を見つめ返す。
彼は憔悴していた。

「シャルル。手は･･･大丈夫なの？」
あえて、ルイのことは聞かなかった。

「オレのことは良い･･自分のことは解っている」
「それなら私は検査を受けない････自分のことは解っているわ」
ヒカルがそう返すと、参ったと言って彼は白金の髪をかき上げた。
強情だな、と呟く。
ヒカルが笑ったので、彼は頼りなげな不安に満ちた表情から、ようやく安堵の色を見せた。
彼女にわかるように説明する。

「右手は裂傷と･･･骨が少し見えていたから縫った。靭帯断裂。

後は･･･指の骨の何本かと掌の骨が砕けた。･･･わかった？以上。」

彼女が絶句していると、シャルルは苦笑した。
だから言いたくなかったんだ、と言った。

それより･･･と呟いて、シャルルはヒカルの頬を愛おしそうに撫でた。
動かない右手ではなく、腕を伸ばして左の掌で彼女に触れる。

ベッドの端に腰掛けたシャルルは、いつから彼女を見つめていたのだろうか。

「君の状態は頭部打撲だ･･･運が良かった。
でもあと一時間、目が醒めないのなら、本当に病院に連れて行こうと思っていた。
･･･ヒカル、すまない･･･」
普段謝らない彼が、詫びた。

ヒカルは起き上がった。

彼の苦悶する顔が泣いているように見えた。
彼は寝たままで居るように彼女に言ったあと･･･少し考え直したように、彼女を介助して背中に羽根枕をあてがってやる。
そしてひとつ･･･大きくため息を出した。
今まで彼女に触れていた左手を、今度は自分の秀でた額にあてた。

「あのとき･･･オレは･･･涙を流すヒカルを見て、酷く憤った。
　ヒカルを泣かせる者は誰でも赦さない。
　ヒカル、君は決して人前で泣いたりしない。
　少なくともオレの前では。
　あのとき以来、君の涙を見たことがなかった。
　だから･･･だから、ヒカルを泣かせた男を破壊したら、ヒカルはもう泣かなくなるかと考えた。
その一方で･･･激しく動揺した。あいつの前ではヒカルは泣けるのか、と。
　･･･どうかしているな、オレ。」
「･････」
ヒカルは黙ったままだった。
シャルルは気がついていた。彼女が泣かないことを。
そして･･･彼女を泣かせたルイを容赦しなかった。

「ルイが日本に勝手に立ち寄って、ヒカルと婚約発表をしたと報告が入った。

　あいつが帰国したら、真意を聞くつもりだった。
　今日はここに戻らないつもりだったが、･･･薔薇園の空調の微調整が気になっていたので、正面から回らずに温室に直接入ると･･･。
　ルイとヒカルが戻って来ているとは聞いていなかった」

アルディ家の情報で当主が知らないことはありえない。
少なくともシャルル・ドゥ・アルディが知らない情報は皆無のはずだ。
一体、彼は･･どこで何をしていたのだろうか。

「結果的に君を傷つけてしまった。･･･悪かった」
「本当に大丈夫だから。シャルルが気に病むことではない。私が勝手に行動しただけだし･･･」
それより、と言って、彼女はそっとシャルルの右手に手を伸ばした。
まだ相当痛むはずだ。
彼女は、ゆったりとしたローブの裾に指を置いた。

「シャルルの傷が心配」
「たいしたことはない。オレは医者だ」
そうだったわね、とヒカルが吹き出した。
医者でも怪我をすれば痛い。
彼なりのジョークだった。
シャルルの険しい顔が柔らぐ。

「それより、あれだけ激しく打ち付けたのに、少々の頭痛で、外傷も脳内出血もまるでない君の躰を調べてみたいくらいだ。
チタン合金でできているのか？」
「･･･死後解剖しても良いわよ」
「それなら誓約書にサインをしてくれ。･･･ヒカルが成人してからで良いよ」
彼はそう冗談を言って微笑んだ。静かな微笑みだった。
ヒカルはこの微笑みを･･･日本で恋しく思ったことを思い出す。

後になって。

その時の様子を聞いて愕然とした。
血まみれのシャルルが、ヒカルを抱いて邸に連れて来たのだと知った。

･･･相当痛んだはずだ。

ルイより･･･ヒカルを抱いて手当を優先した。
それが彼女の胸を突き刺す。

骨が見えるほど激しい裂傷だったのに、彼は麻酔をすると診察できないと言って、彼女の手当が完了するまで血を流し続けたと言う。

ルイは･･･ルイは自ら起き上がり、自分で連絡をして、彼の叔父を呼んだ。
肋骨にヒビが入り、鼻骨骨折に、頬の裂傷に･･･口の中は歯で切れて、かなり縫ったらしい。
シャルルとルイはもう、修復できないのだろうか。
新しい関係は築けないのだろうか。

優しく静かな、大きな手のひらを持つシャルルは、ヒカルにしたように･･･ルイの頬を撫でることは出来ないのだろうか。

■23

ルイが別棟から出てこない。

抜糸して腫れが引くまでは、部屋からでないと宣言しているらしかった。
唯美主義のルイ・ドゥ・アルディらしかった。

シャルルはヒカルに乞われて薬を処方していたが、実際の容態についてはシャルルの実弟から報告されていた。

「あいつは自業自得だ･･部屋から出てきたら話をする」
シャルルは言い放った。

彼はすべての予定を調整して、館に戻ってきた。
時折、ルイの別棟に叔父の来訪がある以外は、ルイは一歩も外出しなかった。
ヒカルが訪れても帰されてしまう。

シャルルの怪我は順調に快癒した。
シャルルは元々両利きだったので、あまり生活に困らないらしかった。
何より、彼が無理をしないかヒカルがたいそう気に病んでいたので、これが彼の回復を促す結果になった。

大したことではない、と彼は言ったが、全治するまでには時間がかかった。

その間、ヒカルはずっとシャルルの傍らにいた。

何ができるわけでもなかったが･･･

彼にできるだけ傍に居るために、彼女は最上の薔薇を選んで、彼に届ける習慣を復活させた。
夜は彼が休むまで起きていることにした。

その結果、若い彼女が疲弊するのを思案したシャルルが休息を取るようになった。
････シャルルと過ごす夏は珍しい。

ヒカルは夏の間、日本で過ごす。

シャルルには夏という季節は辛い思い出しかない･･･。

航空機の事故、自身の結婚式の日が両親の命日になったこと、彼が戻ってこられなくなった日･･
夏が終わる前に、彼はルイの母と離婚してしまった。

彼が見せてくれた様々な季節の移ろいの中で、夏の記憶だけが異常に少なかった。
彼は････まだ癒えていない。
夏を素晴らしいと思えていない。
･･･狂気は消えていない。

先日見た、彼の虚ろな瞳を思い返すだけで、全身が締め付けられそうになる。
夏の時期はああなるから･･･ヒカルを日本にやって遠ざけるのだと知った。
この年齢になるまで、彼の気鬱について思いやることが出来なかった自分が恥ずかしかった。

休みが終わる都度、次の休みに思いを馳せていた自分が情けなかった。

―――私は彼らの何を見ていたのだろうか･･･。

シャルルの留守を見計らって、ルイの別棟に足を運んだ。
シャルルは相変わらず、ルイという存在を無視し続けた。

そして、処方箋を書くときだけ･･･美しい顔を歪める。

「ヒカルを傷つける者は赦さない」
そう言っているようだった。

しかし、ヒカルは、母のデッサンをまだ受けとっていなかった。
あの事件で先送りになってしまっていた。

躰の傷が癒えていないルイに「デッサンを渡せ」と言い出すことが出来なかったので、
しばらく様子を見ていたが‥‥
母の友人には、間違いなく受けとった、とカードを送ってしまっていた。
まだ中身を見ていないので、感想は書くことが出来なかった。
でも素っ気ないカードだけではどうにも気が落ち着かない。
きちんと礼を述べたかった。

そして、ルイとはヒカルを婚約者と発表したことについて、話をつけなければいけなかった。
シャルルは激昂し、報道機関に箝口令を敷いた。

そしてルイが出てくるまでその問題は凍結する、と宣言してしまったので、ヒカルはシャルルと話をすることすらできなかった。

シャルルは案外、そういうところは厳しかった。

彼が決めたことは決して‥‥覆らない。
これはルイが撤回しないと、事がおさまりそうになかった。

ヒカルは、今日もルイに面会を断られてしまった。
抜糸も済んでもうあとは腫れが引くのを待ち、肋骨のギプスが取れるのを待つばかりだと聞いていた。
ヒカルは薔薇園から薔薇を摘んで、ルイの部屋に届けさせた。
彼は外出していないから、きっと‥‥あの薔薇園での自分だけの時間を過ごすことが出来ないだろうと思った。

あの場所は、彼の唯一の聖域だ。

陽射しを受けて、きらきらと輝く金髪の天使が、再び微笑んでくれるように‥‥
彼の冷たい微笑みが懐かしかった。
ヒカルは祷りを込めて、薔薇を捧げた。

そして、カードを付ける。
彼が話したくないのであれば‥‥

ヒカルの設置したメッセンジャーボードのアドレスを記入した。
ここにはルイとヒカルしか入室できない。
ルイが見ればそれが何をあらわすのか、わかったはずだ。
それ以外はメッセージを書かなかった。
夏の空は･･･パリで過ごす空は遠く感じた。
これほどまでに、自分が不在にしている夏のこの場所は･･
哀しくて苦しくて･･･切なくなった

そしてシャルルが自分に見せないようにしていた狂気と、ルイの孤独と･･･
様々なものが、夏の庭には残されていたのだと思うと、ヒカルは遣る瀬無くなった。

涙を堪えて、上を向いた。

昔、幼いシャルルが同じように涙を堪えた術であるとは知らなかった。

■24

彼はすぐにログインしてきた。

HIKARU ：ルイ、待っていた。
Louis：暇だったから。
HIKARU ：充分な理由だわ
Louis ：セキュリティが甘すぎる
HIKARU ：それならあなたが再構築して
Louis ：他人のサーバーには興味がない
HIKARU ：：それより･･･具合はどう？
Louis ：来週には通常の業務に戻る
HIKARU ：業務･･
Louis ：業務としか言いようがない。退屈なアルディの行事だ。
HIKARU ：あなたがそれで良いのなら良いけれど･･･
Louis ：用事がないなら切断する
HIKARU ：来週のチャリティコンサートの件と、預かってもらっていた母のデッサンを引き取りたい。私の用件はこの2件。それから、ルイの容態を知りたい。
Louis ： 3 件だな。算数もできないみたいだね。
HIKARU ：ルイ。その調子なら大丈夫ね。
Louis ：チャリティコンサートは欠席する。その旨は先方に伝えてある。
HIKARU ：シャルルも出席予定でしょう？

Louis ：そう。だから、オレが出なくても問題ない。
HIKARU ：シャルルの･･･同伴者って･･
Louis ：知ってどうするの？
HIKARU: どうにもならない。知りたいだけ。ルイは知っているのね。
Louis ：どうかな
HIKARU ：ルイが知らないはずないでしょう
Louis ：気になるのなら、なおさら言わない
HIKARU ：意地悪ね
Louis ：それは主観的な表現。
HIKARU ：ねぇ　本当に具合は大丈夫なの
Louis ：こうなった原因に言われたくない。
HIKARU ：･･･
Louis ：治癒はしている。婚約者殿が見られる程度には顔も回復。
HIKARU ：その婚約者という表現だけれど･･･
Louis ：こうなったら、君を妻にすることにした。
HIKARU ：ルイ！
Louis ：ルイ・ドゥ・アルディの名にかけて誓おう。･･･ヒカルをオレの妻にする。そして生涯、苦しんでくれ。
HIKARU ：ルイ、落ち着いて
Louis ：落ち着いているよ。音声の方が良かったら今度会ったときに。
HIKARU ：私は承諾していないし、第一シャルルが赦さない。
Louis ：･･･ヒカル。なぜ君は、彼の意志を優先するの？
HIKARU ：どういうこと？
Louis ：シャルルの意志で君は人生を決めるのかと尋ねている。
HIKARU ：そうじゃない。
Louis ：君は愛玩物だね。シャルルの。
HIKARU ：私は、私だ。
Louis ：違うね。自らの意志なんてまるでない。
HIKARU ：私の意志はあるわ
Louis ：果たしてそうだろうか
HIKARU ：･･･
Louis ：幼い時から彼の元で育った。だから、そう信じ込んでいるだけではないの？
だから、君はそうして知らないことに対して罪悪感を感じているんだろう？
HIKARU ：････
Louis ：最初から言ったはずだ。愛でられる立場をわきまえろ。
知りたくないことを知りたくないと主張して通るうちは、君は愛玩物でしかない。
HIKARU ：あなたたちの苦悩を知りたい。

Louis ：今更遅いよ。
HIKARU ：遅くはない。
Louis ：それなら･･･オレに証拠を見せてくれ。
HIKARU ：証拠･･･
Louis ：そう。証拠。
HIKARU ：私は･･･
Louis ：君自身が、知りたいと思うこと。知りたくないことから目を背けることをやめれば自ずと見えるだろう。･･･この楽園のような敷地が、焦土であることに気がつくのは時間の問題だ。
HIKRAU ：ルイ。
Louis ：お喋りは終わりだ。少し休む。そしてこの仮想サーバーは閉鎖するように。できないなら、5 分後にオレが破壊する。
HIKARU: ルイ！
（ Louis が回線を切断しました）

･･･それっきり、本当に5 分後にルイはこのサーバーを再接続できないようにしてしまった。

ヒカルはラップトップのキーボードから指を浮かせた。
ルイ･･･
彼とこんなに言葉を交わしたことはなかった。
ヒカルは茶色の瞳を伏せて、電源を落とした。
ルイの冷たい心を溶かすことはできないのだろうか。

彼は名前に誓った。
ヒカル・クロスを妻にすると。

婚約問題を撤回させようとして、逆にますます彼を頑なにさせてしまった。
吐息を漏らし、ヒカルは立ち上がった。
部屋から見える、彼の別棟は、すでに照明が灯り始めた。
もう、夕方だった。
シャルルの帰ってくる時間が近い。
ルイに会いに行く時間はなさそうだった。
彼は･･･一人きりで何を思っているのだろうか。

こちらから照明が見えるのであれば、本邸のこちら側も、ルイから見えるはずだ。
彼は･･･たくさんの照明が点くこちらを、どう思っているのだろうか。
本来なら自分があるべき場所に、ヒカルが居ることを彼はどう思っているのだろうか。

･･･ルイと話ができないのであれば･･･

波風を立てない程度でシャルルに話をしなければならない。
彼はこの話を凍結したが、ルイにその気がないのであれば、彼女は現当主に判断を仰がねばならない。
･･･結果として自分が日本に帰ることになろうとも。
どんな話の結果になってもそうなるかもしれない、と彼女は思い定めていた。
予感めいたものを感じていた。

■25

「･･･その話はルイと話をすることになっている」
「私の問題でもあるでしょう」

夕食の時間の後、ヒカルは薔薇園を散歩しようと言った。
シャルルは一瞬何か言いかけたが、黙ってヒカルの申し出に頷いた。
シャルルは肩に薄いカーデを羽織っている。
腕に通さずに肩にかけていたので、彼が歩くたびに袖口の裾が揺れた。
最初、分厚く巻かれていた包帯は大分薄くなっていた。

こうしてゆったりした普段着を着ていれば、彼が酷い怪我を負っていることは目立たない。
ヒカルの話を聞くなり、それまで物憂げな様子の彼は、きゅっと唇を結んで彼は腕を組んだ。
青灰色の瞳を強く煌めかせて、ヒカルに挑むように視線を返した。
彼が憤っていることがわかる。
ヒカルは怯まずに言った。
今日が話をする機会だと思った。

・・・明日はルイと行くことになっていたコンサートの日だった。

ルイはキャンセルを入れていたが、シャルルは、ヒカルと行くと言い出した。
彼の考えはわかっていた。
ルイが発表した婚約の件を、公の場で、シャルル本人が撤回する気だ。
そして、ヒカルの身元を明らかにして、彼女がアルディ家に滞在する客人であることを強調する。

一般人だから詮索はするなと周囲に釘をさした後････

その後はどう出るかわからなかった。
彼女は暫くの間、全寮制の学校に入れられるか、ほとぼりが冷めるまで日本に帰されるかなど、シャルルは何かしらの方法で手を打とうとしていた。
ヒカルはルイとの婚約問題については、自分に一任させて欲しいとシャルルに申し出た。
彼は間も入れずに「駄目だ」と厳しく言った。

「それに･･･シャルルと一緒に行くことになっていた人に申し訳ないし」
「問題ない。ヒカル、君が同伴してくれ」

彼が公の場に、ヒカル・クロスを連れ出すことは滅多になかった。

芸術は本物に触れるべきだ、と彼は常々言っていたが、ヒカルの付き添いには、決まって彼女の教育係を指定した。
シャルルと一緒に行くことはほとんど無かった。
でもそれが寂しいと思わないくらい、彼はヒカルを様々な場所に連れて行ったから、彼女はそういうものだと思って育った。
お忍びで何回か連れだって行ったことはあるが、それでも別々に出口を出るなどして、極力大勢の目に触れないような配慮がされた。

「秘密の恋人のようだね」
と二人で笑ったことが今は懐かしい。
本当の「秘密の恋人」が居たとしたら、彼女に気の毒だ。
冗談でもシャルルとそんな台詞を交わしたことを申し訳なく思った。

「でも･･･」
「･･･ヒカル。オレには特定の恋人はいない。」

彼が見越したように言った。
そしてシャルルは少し怖い顔をした。
特定でない恋人なら居るのだろうか。
ヒカルはシャルルの言葉の意味を考えた。

清涼な空気が漂う薔薇の園で、彼はこの時期には珍しい、狂い咲きの薔薇に目を止めた。
「今年は･･･狂い咲きの花が多いな」
彼はそう言った。
一度はやめてしまった薔薇の改良を、彼はまた始めていた。
品種改良を唯一の趣味にしている彼が開発した品種によって埋め尽くされた薔薇園は、年中花が

咲き誇り、むせかえるほどの甘い香りで満ちていた。
狂った花でも、翌年はまた決まった季節に花を咲かせることができる。
この敷地に息づく薔薇たちも、今にきっと・・・・ヒカルは祈るような気持ちで彼らのことを考えた。

「シャルル。･･･もうそろそろ、解放されても良いと思う」
「オレは何にも縛られていないよ」
「そう？シャルルはお母さんに縛られていない？」
「･･･何が言いたい」
シャルルの口調が変わった。
ヒカルは茶色の目を瞑った。
瞬間、ざっと風が吹いて･･･彼女とシャルルの髪を吹き上げた。
彼の肩にのせていた上着が吹き飛んだ。

ヒカルはそれを取ろうとして躰を動かそうとしたが、シャルルの様子に射竦められて、少し離れた場所に上着が落ちる様をそのまま見つめた。
「ヒカル。こっちを見ろ」
シャルルが言った。

シャルルと母の話をするのは数えるくらいだ。
彼は大事に･･･母との思い出を抱えている。
まだ、口に出すことが出来ないのだと思っていた。

想い出にもできないし、ましてや、彼女が本当に死んでしまったと思いたくないとシャルルが強く願っていることも痛いほどわかっていた。
でも･･･私たちは生きている。
生きていれば恋もする。
誰かを好きになってもっと生きていたいと思う。
彼には、もう、両親に「早く会いたい」と思って欲しくなかった。
いつか会いたいと思い笑って生きて欲しい。

彼には泣いて欲しくなかった。
泣くと、天国に行けないよ･･･。

私の天使。
私だけの天使だと思っていたけれど･･･
そうじゃなかった。

そうだと私が思い込んでいたから、シャルルはいつまでも他の人の守護天使になれなかった。
彼女は覚悟を決めて切り出した。

「シャルル。もう･･他に好きな人が出来ても良いと思う。
ひとりの人を定めて･･･想い続けるのは素晴らしい。
けれども･･･シャルルには幸せになって欲しい。」
「オレは自分を不幸と思ったことはないよ」
誇り高い彼はそう言った。
挑戦的な微笑みを浮かべていた。
――――その笑いは、ルイと酷似していた。

「ヒカル。オレはもう、恋をするつもりもない。結婚もしない。
･･･オレを誰だと思っている？シャルル・ドゥ・アルディは、一度定めたことを覆さない。
運命の人は･･･あの人だけだ」
最後の言葉は絞り出すような声だった。
良く似たヒカルを見て、彼は眩暈を覚える。

「シャルル。私はもっとシャルルに自由になって欲しい」
「論点がずれている」
「ずれていない。･･･明日のコンサートでは、婚約の件を撤回するんでしょう？そのために、自分のことを犠牲にして･･･そして私を守ったつもり？シャルルはそれで満足なの？ルイ自身から撤回しないと、彼は何度も繰り返す。そしていつかそれを真実にしてしまう」
「最善で最良の方策を講じるだけだ」
彼は顔を背けずに言った。
それは私にとって最善で最良でない、とヒカルは訴えた。
「私の言いたいことはとても簡単な事よ。
するべき事はとてもシンプルだわ。
シャルルは恋人を伴って明日は出席する。ルイ
から改めて撤回宣言を出す。そして私は･･･」
そこまで言うとヒカルは口をつぐんでしまった。

言うべき事はわかっていたが、それを口に出すことが躊躇われた。
ヒカルは、どちらにしても、長くはここに居られない。
そう思った。
「･･･ヒカル、こっちを見て」
シャルルは彼女に近づいた。
そして、うつむく彼女の肩に、そっと左手を置いた。

愛おしそうに･･･彼女の癖の強い茶色の髪を撫でる。
大分伸びたね、と囁いた。

「オレはね」

彼の口調は静かだった。
先ほどの怒気はもう含まれていなかった。
「彼女を愛したことを後悔してないよ。一度もない。
そして今も、彼女を愛していることを誇りに思っている。
君のお父さんには申し訳ないけれどね。
同じように･･･彼女を愛し抜いた彼もオレの大事な友人だ。
そんな大事な人達の娘であるヒカルも大事だ。
だから、ヒカルには幸せになって欲しい。
オレに幸せになれと言うのであれば･･･
ヒカルが幸せになることが、オレの幸せだと思って欲しい。」
だから、恋人は作らないことにしているんだ。
彼はそう言った。何かを定めた人の微笑みだった。

「そういう気持ちになるほどの人に出会っていない。
それだけのことだ」
だから、と彼は続ける。
「今回のルイの勝手な行動を赦すこともできないし、容認することもできない。
これはアルディ家の当主としても、許可できない。彼は･･･新しい血族として、果たすべきことをしていない」
「新しい血族･･･」
「そう。彼の代から新しい時代が始まる。当主となるべき器量はあると思う。
けれども･･･彼にはまだ、足りない」
ルイのことをこんなに話すシャルルは初めてだった。
シャルルは、ヒカルの頬を、親指で撫でた。
何が足りないのかは言わなかった。

「今回の同伴者はキャンセルを入れた。
それだけの間柄だ。
間柄というほどのものでもない。
だから、オレにはエスコートするべき相手が居ない。
･･･だからヒカルにお願いしたいのだけれど。
ああ、言っておくけれど、マドモアゼルからの返事は一つしか用意していない。」

「･･･ウィ」
ヒカルは小さく返事をした。
シャルルは満足げに頷いた。
「それなら･･･ドレスは用意してある。好きなものを選べ。
ああ、君は落ち着きがないから、ヒールは高い方が良いかな。
その代わり、しっかりオレに掴まっていないと転んでしまうから
ね。」
ルイと同じことを考えているシャルルに向けて、ヒカルは寂しそうに微笑んだ。
同じことを考えるのに、彼らはこれほどまでに違ってしまっていた。

彼女の心は決まっていた。
「この話はお預けだ。君はこれから明日のコンサートのための準備をしなければならない。
演目の基礎知識くらいは覚えておいてくれ。」

■26

その催しは、演奏を集中して聴くどころではなかった。

気むずかしくて人前に滅多に現れない彼が･･･特に夏の時期は彼は人前に出ない･･･新築されて間もない新しいホールに現れたときに、誰もが驚いた。

そして、彼に付き添われる幼い少女が誰なのか、熱く視線が注がれた。
ヒカルは二度目の好奇の視線を浴びた。
演奏時間の3 時間。
彼女は黙って集中することにしたが、せっかく前日にシャルルから講義を受けたのに、その予備知識を生かして、彼に気の利いた感想を述べることさえできなかった。
しかし本当に長かったのはその後だった。

「･･･堂々としていろ。気にするな」

シャルルはそう言ったが、ヒカルはルイの時以上に強烈なたくさんの視線を浴びせ掛けられることになってしまった。
パンフレットをのぞき込んで、舞台にのみ視線を向けていれば良い時間が終わると、誰も彼もが、その後に催される懇親会場に来るように、シャルルに声をかけた。
彼は優雅に頷いた。
周囲に座る人々は、見たことがある顔ばかりだった。

ヒカルと生きる世界が違う、ルイやシャルルと同じ世界の人々だった。

･･･彼女も学校では浮世離れしていると言われることがあったが、ここでは別の意味で周囲の者とかけ離れた自分を強烈に意識せざるを得ない。

何が違うと言うのではないが、仕草ひとつひとつが･･･まるで違う。

ヒカルは波禰受（※はねず：古代に皇族の衣服の色とされたやわらかいオレンジ色）のドレスを選んでいた。

彼女の茶色の瞳と髪によく似合う、とシャルルが言ったので、彼女は少しだけ嬉しくなった。
ヒールは高いものにしよう、と冗談めかして言った靴は、踵の低いものを選んだ。

「君の身長なら、これで充分だ。若い者の姿勢の美しさは歩いてこそだから」
シャルルはそう言った。ドレスに似合う、若々しいイメージの華奢な靴だった。
彼女の白い肌理の細かい肌が光り、それだけで充分だった。
装飾品は小振りなものだ。小さな薔薇をあしらったプラチナのイヤリングに、同じネックレスを身につけているだけだ。

プラチナが照明を受けて乱反射するので、ヒカルの鎖骨の美しさが際だった。
若さゆえの美しさについて、シャルル・ドゥ・アルディは良く知っていた。
それは、かの人に感じた美しさなのかもしれない。

生命力に溢れ、いつも、生きる事は素晴らしいとシャルルに説いた彼女を思い出しているのかもしれない。
若い闊達な母がシャルルを魅了した年齢に、ヒカルはもうすぐ到達する。
しかしどんな豪奢なドレスを身に纏っても、この会場を訪れるような、彼らと自分が違うと思い知る。
ドレスの裾捌き、脚の組み方、エスコートされる者特有の間の置き方･･･

彼女が知らないことばかりだった。
「今度はまた別の機会にゆっくり来よう」
ヒカルの考えていることを察したシャルルがそう囁いた。
彼女は頷いたがこういった場に、シャルルと一緒に来るのはこれが最初で最後だろうと思った。

演奏会の間は、誰も私語を発しないから、視線だけを受けていれば良かった。
しかし、演奏会が終了し、用意されたレセプション会場で談話の時間が始まると、皆が一斉にア

ルディ家の当主に群がった。

彼女は何者なのか、ルイの婚約発表は正式にいつするのか･･･すでに噂は広まり、誰もが父であり当主であるシャルルの発言を待っていた。
櫻色にほんのり染まった指先をシャルルの腕にからめて、彼女は恥ずかしそうにシャルルに囁いた。

「私やっぱりこういう場所は･･･」
「今日は我慢しろ」

シャルルはヒカルの耳元で短くそう囁いた。
この親子ほどの年齢差のある二人の関係を、どうやって聞き出そうかと周囲の人々がさかんにヒカルに話しかける。
シャルルには、彼が気に入る問いかけをしないと決して答えないことは、まわりの者はすでに何度も経験している苦い知識だった。

「亡き友人の娘です･･･彼女はヒカル・クロス。私の幼なじみが彼女の父で･･･」
彼は流麗に話をし始めた。うっとりするくらい美しい微笑みで、かねてより考えていたであろう台詞を話し始める。

絶妙なタイミングだった。

主催者が席をはずし、懇談の時間が始まってすぐのことだった。
主賓でなく協賛者としての来場であることを考えて、彼はこの頃合いで説明をし始めた。

「彼女に最高の教育を施して欲しいという遺族の願いと、私自身もそうあって欲しいと思ったことから彼女の監護権を取得しました。パリはその点、我がフランスで最高の教育を受けられるに相応しい環境ですし･･･彼女の祖母もフランス人でしたから、やはりこちらで教育を受けるのが最適でしょう。まだ学生ですし一般人ですから、公人のように顔を出すこともありませんがいずれ社交界にデビューするに相応しい家柄の者です。
当然アルディ家としては彼女の後援をしていきますし･･･。ええ、そうですね。
息子のルイと年齢が近いですが、まだこどもですから、婚約というのは･･･あったとしても先の話でしょう。
当人同士がよく話し合って決めることですからね。
昔のように、結婚は当主就任の条件でなくなりました。
彼らが本当に想い合っているのであれば･･別の話ですけれど」

彼のいつにない長い説明に、誰もが頷いた。
シャルルの発言で、ルイとヒカルはまだ正式な婚約者同士でなく、ルイの言った「親同士の決めた許嫁」という存在は現代には通用しないから「お互い」の気持ちを尊重するべきだ、と強調した。

そして、ヒカルは一般人であり、ルイと婚約するかどうかは今の発言で曖昧にされた。
近い将来のことではないので、くれぐれも詮索しないように、と念を押したことになる。
ルイは時期アルディ家の当主となるべき身分だ。
万が一破談になったりする原因の噂や、汚点になるような噂を流せば、制裁が加わることを予告した。
また、彼女はアルディ家と懇意の者であり、相応しい待遇を与えるつもりなので、蔑ろにしないように、と付け加えるのを失念しなかった。

シャルルの話の進め方に、ヒカルは舌を巻いた。
ルイも先を見越して何でも準備する方だと思っていたが、シャルルはその上を行く。
鋭く周囲の何人かに目配せをした様子から、事前に打ち合わせと口裏合わせと済ませているのだと思った。彼の準備に漏れはない。
シャルル・ドゥ・アルディは･･･悠然と微笑むと、優雅に退場の挨拶をして、ずっと黙っていたヒカルを伴って、会場を後にした。

「もう、帰って良いの？」

ようやく口を開くことが出来て、ヒカルはシャルルから腕を離した。
彼は白金の髪をかき上げて、大きく深呼吸した。
息が詰まるな、と言ったので、彼もああいう席は気が進まないのだと思った。

「ああ。･･･あれ以上いたら、当のルイはどうしたんだと言われるから」
シャルルはそう言ってヒカルの腰に軽く手を添えて、微笑んだ。
右手はまだ包帯を付けたままだったから、長居をすればその話もしなくてはならない。

「必要充分な時間だと思うけれど」
「そうね。でも････ルイの耳に入ったら、彼は何て言うのかしら」
彼女は呟いた。

ルイが言った「シャルルの絶望が欲しい」という言葉が気になっていた。
ルイはこのままにしておかないだろう。
シャルルの思惑通りにはいかない、とルイが何かを考えているような気がした。

「ルイのことは気にするな」
「シャルル、ありがとう」
ヒカルは微笑んだ。

一度離した彼の腕に、もう一度腕を絡ませた。
「礼を言われるようなことはしてないよ」
「･･･ありがとう」

ヒカルが『ルイと話をつけるから、一任させて欲しい』と言ったことを、シャルルが尊重してくれたことに対する礼だった。
シャルルは「当人同士がよく話し合って決めることだ」と宣言した。
だが、これによって、逆に「当人同士はよく話し合っていない」と明言したことになる。
これをルイが黙ってはいないだろうと思った。

「後はヒカルが決めることだ」

シャルルはそう言って目を細めて、運命の人の娘を見た。
若い彼女が着飾る姿は美しい。
･･･あの人とこんな会場に行ったことも思いだしていた。
最近、ますます似てきた。
彼女にも、彼にも。

シャルルは鮮やかな色のドレスを身に纏い、彼に躰を預けるその重みが･･切なくなるくらい重いと感じた。
錯覚しそうになる。
あの人に良く似た彼女を見て･･･戻って来られなくなりそうになる。
特にこの季節は。
ヒカルの気質はどちらかというと父親に似ている。
我慢強く、頑固で、それでいて自分のことより他人を優先する。
誰も教えていないのに、彼女はそうする。
一方で、言い出したら聞かないし、時々、突拍子もないことを言い出したり、行動する様は、まさしくあの人そのものだった。

だんだん･･･彼女が母の面影を強く出してくる。
ヒカルはもうすぐ･･･彼と出会った母の年齢になる。
その時に、彼女を「ヒカル」ときちんと呼ぶことが出来るだろうか。

シャルルはそう思った。
彼と長い時を過ごした永遠の晄を、彼自身が滅してしまうようなことになりはしないか。
彼の中の狂気はまだ･･･消えていない。

そしてこの血に流れる狂気は、確実にルイにも受け継がれている。
これはこの家の宿命なのだと思う。

澱んだ血流を止めることが出来るのは、ルイなのだろうか。

それとも････

「ヒカル、あまり寄りかかるな。重い。減量しろ」
「シャルルの意地悪ね。」
ヒカルが頬を膨らませた。

この穏やかで静かな時間をもたらす彼の晄を、泣かせたり傷つけたりする者は赦さない。
それがルイであっても。
ヒカルは駒ではない。

ルイの思い通りにはさせない。
彼は微笑みながらそう考えていた。

静かに、次の一手を考えていた。

■27

シャルルの発言をどこで聞き入れたのだろうか。
翌朝早くに、ルイはヒカルに内線電話を入れてきた。
彼が別棟から内線電話をかけるのは非常に珍しい。

そして、ルイも朝が弱いので、これほど朝早くに連絡をしてきたということは、眠っていないのかもしれない、とヒカルはちらりと思った。
彼女は身支度を調えていたところだった。
今日も暑くなりそうだった。

「昨夜は思い通りになって、満足した？」

「思い通りにはならなかったわ。ルイと話ができなかったから」
「シャルルに同伴して･･･思い通りではないと言う君は貪欲だね」
歌うように彼は言った。

くぐもった声ではないから、抜糸も済んで腫れも引いて、いつも通りのルイになっているようだと察する。

「････君の望みの品を渡そうと思う」
「え？」
「受けとったデッサン」
ヒカルは受話器を持ち直した。

彼がいつまでも彼女に渡そうとしない、マリナ・イケダのデッサンを、こうもあっさり渡そうと言い出すルイの真意がわからなかった。
シャルルには、昨夜くどいほど念を押されていた。

「ルイには近づくな」と。

彼の別棟に行くにはシャルルに話を通せと言われていた。
彼女に一任すると言っていたものの、シャルル・ドゥ・アルディは「ふたりきりになるな」と何度も念を押した。

ヒカルはまだ、大人とこどもの狭間にいる。
ルイは若者の顔をしてはいるが老成している部分があり、その一方で今回の「事故」に関して、彼の真意がわからないうちは、彼に近づくな、とシャルルは厳しくヒカルに接見を禁じて
いた。
彼の反撃が始まろうとしていた。
実子に･･･こうして策略を練るシャルルと、考えていることのよくわからないルイを見て、ヒカルは自分の存在というものを考えざるを得ない。

どう考えても、彼らの冷戦状態の原因の一端は自分にある。

そして･･シャルルの傍に居たいと言いだした彼女は、シャルルのためにではなく、自分の願望のためにここに滞在している。

･･･シャルルとルイを壊したのは私自身ほかならない。

気付いていたけれど、口に出すことを躊躇っていた。
ヒカルは･･･もう、無邪気でいる年齢ではなかった。
「君が今日、こちらに訪れるのであれば、渡そうと思う」
彼は静かにそう言った。

今日はシャルルの帰りは遅い。
夏の予定をすべて調整し直して、彼はアルディ家に戻ってきた。
「･･･それに、シャルルが夏に何をしているのかも、教えてやろう」
傲慢な口調で、ルイ・ドゥ・アルディは言った。
「夏のシャルル･･･」
「そう」
面白そうに彼は言った。

「ヒカルが日本に戻っている間、シャルルが何をしているのか･･･知りたいと思うのなら、僕の棟の扉を叩け」
そして回線は切れた。

シャルルに言えばきっと反対される。
ルイは、ヒカルに秘密を持てと誘い込んだ。
わかっている。
わかっているが、彼女はどうしてもマリナ・イケダのデッサンが欲しかった。
それを譲ってくれた母の古い友人に申し訳なかった。
そしてルイがなぜなかなか渡してくれないかも気になった。

何かに執着することのない彼はヒカルに意地悪をすることもない。
いつもなら、きっと、つまらなさそうに「くだらないね」と言って投げ寄越す程度の軽さしか、彼には物事というものは存在しない。
ヒカルは唇を噛んだ。

シャルルに嘘はつけない。
けれども、どうしてもあのデッサンが欲しかった。
シャルルに言えば、すぐさま当主としての命令を、実子のルイに下す。
関係が悪化するのも気鬱だったが、ルイが素直にその品を渡すとは思えなかった。

どうしても･･･母のことを知りたい。
マリナ・イケダがどんな絵を描いているのか知りたい。
彼女が残した絵画はごく僅かだ。

イラストを描いたり、ジャパニーズ・コミックを描いたりしていたようだが、父と結婚してからは描いていなかった。
すぐにヒカルを産むことになったから。
だから、ほとんど作品は残されていなかった。

ヒカルは、結婚してからの両親を知っていたが、シャルルが･･･彼がこよなく愛した母の姿を知らなかった。
そして、その母に囚われているシャルルを見て、ルイが癒されない想いに沈んでいる限りは･･･
自分ができることは少ないと思った。
母そのものにはなれないが、母を知って･･その上で、シャルルに「自由になって」ともう一度言いたかった。
自分には役割があると思った。
こうして、シャルルの傍らで生活することには意味があると思う。
シャルルが、愛した人の娘というだけで傍らに置くとは考えられなかった。
彼には、彼の理由がある。
ルイと同じように。

ルイもシャルルも、彼らなりの理屈と理由と価値観と事情があるはずだ。

彼女はそう思った。

「————行きます」
ヒカルは、回線が切れた受話器の向こう側にそう語りかけた。
確かに傲慢かもしれない。

————永遠の晄･･

昶という名前の意味を考えた。

永遠の晄は･･影も知らないといけない。晄の眩しさを知らないといけない。
･･･そして
晄がもたらす歓びも哀しみも･･･知らなければならない。

彼女は、目をそらしていた事実にようやく、向き合う決心をした。

■28

「今日は来ないと思っていたが」
ルイがそう言ったので、ヒカルは「不意打ちよ」と冗談を言った。
彼は胸の下にバンドをはめていたが、それは大分薄いものだった。

肋骨の骨折には手足の骨折と同じような治療ができないとシャルルに言われていたことをちらりと思い出した。
内臓に損傷がないことが確認できたので、ルイは入院もせず、こうして自分の棟に閉じこもっている。

だが、彼は彼の叔父となにやらサーバールームを構築して、あれこれ作業しているようだった。
入り口から少し奥に入った部屋は客間であったはずなのに、いつの間にか完全に密閉された部屋になり、そこは独立して電気が配給されている。
彼は通信事業やIT 関連に対しても積極的だった。
彼の不在中はここに入ることもできなかったし、こうして入り口で立ち話をする際に垣間見る風景しかこの棟のことは知らなかった。

「同じ敷地に住んでいれば家族なのか」
とルイに問われたことを思い出し、間取りもうろ覚えの自分が言った言葉に、ルイが反論したのは当然のことだと思った。
彼の顔は完全に治癒していた。

完璧主義のルイ・ドゥ・アルディの叔父によって、彼は「完璧に」治療されていた。
まだ少し･･･不自然な部分もあった。

鼻骨骨折していたはずだし、ほお骨も大分打ち付けられていたから、つい最近まで浮腫に悩まされていたはずだった。
彼の高い鼻梁には、つい先ほどまでテープが貼ってあったが、扉を開けてヒカルを見るなり、彼はテープを剥がしてしまった。
彼らしかったが、今日訪れるべきではなかったかも・・とヒカルは少し省察した。

「･･･そういうのをいらぬ詮索と言う」
ルイは不機嫌そうに言った。
ヒカルの考えていることは手に取るようにわかる、と言いたげだった。
彼の顔を眺め回していたヒカルが、はっとして「ごめんなさい」と呟く。

「ミシェル叔父様は？」

「帰った」
ルイと二人きりになるな、と言っていたシャルルの言葉を無視するわけにはいかなかった。

ヒカルは、シャルルの帰宅が間もなくであるとわかってはいたが、ミシェルの来訪を知ったので、内線電話の回線を切って程なくしてルイの別棟を訪れることにした。

ミシェルが来訪していれば･･･シャルルは嫌な顔をするだろうが、ルイと会っていたことは咎めないだろうと考えていたのに、ヒカルはアテが外れてしまった。

「彼に用事があるわけでもないだろうに。･･･単なる立会人であれば、どちらにしても、彼はすぐさま帰ったね」
ルイは断言した。
実兄よりもルイの方がミシェルをよく知っている、といった口振りだった。

「デッサン･･･随分預けてしまっていたので。気が悪いわ」
「嫌みな言い方だね。邪気のない言葉とは時に残虐と同義になる」
彼は歌うように言った。
「オレには価値のないものだから、引き取ってくれて嬉しいよ」
ルイはそう言って、中に入れと言った。

外はもう、夕暮れを越して静かに夜を迎えていた。
ヒカルは中に通されるとは思っていなかったので･･･少し躊躇って、そして中に足を踏み入れた。
ルイの棟には･･･久方ぶりに入る。しかも、ヒカル一人で入るのは初めてのことだったのかもしれない。
彼の居住空間は、まったく･･･無機質だった。
豪奢な深い青色の絨毯も、現代風のスチール製のデスクや大理石の床も･･･
「若者の居住空間」であったけれど、まるで映画のセットのようだった。
最も、彼は普段、ほとんどここに居ない。

この敷地には「住む」ではなく「滞在する」と言った方が相応しい。
彼の望み通りに造られたサーバールームも遠隔操作ができる
し、彼自身がここに居る理由は･･･あの薔薇園でのひとときの時間しかないように思えた。
「シャルルにはなぜ、マリナ・イケダのデッサンについて話をしなかった？」
ここで何をしているのか･･･彼女は尋ねることが出来なかった。
この部屋から、薔薇園がよく見えた。
そして植林されて、向こう側からはよく見えなかったが、こちらからは、本邸の部屋の灯りがよく見渡せた。

どこの部屋に晄が灯ったのか・・よくわかる。
これらの晄の移り変わりを、彼はじっと･･･一人で眺めていたのだろうか。
ヒカルは言葉を発することが出来なかった。
彼の孤独にほんの少し触れただけなのに、躰全体が痺れてしまう。
この一人きりの空間で彼は何年･･･あの本邸の晄を見つめ続けたのだろうか。
たとえ、ここにいる時間は少なかったとしても･･･

ヒカルは言葉に詰まった。

自分がシャルルの愛を受けている間、彼はここで何を思っていたのだろうか。
そう思うことが傲慢だよ、とルイ・ドゥ・アルディは言ったのに、それでも思いを止めることが出来なかった。

「これがその品」
ルイ・ドゥ・アルディはそう言って、クリスタルの机の引き出しから大きな封筒を出した。
そして、ヒカルに封筒を見せた。
A3 の大きな封筒だった。
何の変哲もない封筒なのに、それはどういうわけか･･･待ち望んだせいもあったのだろうか。
簡単に受けとって良い物かどうか躊躇ってしまう。
手に取ることが躊躇われた。
分厚かった。
「･･･ありがとう」
ヒカルが受けとる。
重いはずはなかったのに、ずしりと重く感じた。

「今、見ても良い？」
「どうぞ」
彼は、広くて何も無い部屋の、ソファベッドを指した。
整えられたそこで、作品を広げても良いという許可を得たので、ヒカルはそこに浅く腰掛けた。
ヒカルはもう一度、ありがとう、と呟くと、その封筒を、両手で受け取り、そっと･･･腰掛けた。
動かすと壊れてしまう古陶器のように、その封筒を扱った振動を加えると崩れてしまうかと思った。

マリナ・イケダはマリナ・クロスではなかった。

だからこそ･･･ヒカルは真摯な気持ちで、受けとった。
母ではない･･･

少女の頃のマリナ・イケダ。

シャルルを魅了し、父を魅了し、そして男女問わず誰も彼もが彼女を慕った。
葬儀には、二人の友人が、会場に溢れんばかりだったという。
空の棺の葬儀に、誰もが無言だったという。
そしてそんな中、信じないと言い切ったのは、シャルルだった。
彼は壊れてしまっていた。
死ぬわけはないから、葬儀に出ないと最初は言い張り、そして焦土と化したあの事故現場を彷徨った。

何日も、何日も。

それでも両親の痕跡は見つけられなかった。
両親が乗っていないという痕跡も見つけられなかった。

そしてそのまま・・彼は戻ってこられなくなった。
ヒカルに会うまでは。
壊れてしまった彼を晒すくらい、彼は壊れてしまっていた。
幽鬼のように現れた彼の姿をヒカルは今でも覚えている。
彼は･･･今でも時々「その時の状態」になる。
ヒカルには決して見せないが。

それが、ヒカルが日本に戻る夏の時間のことなのだと、ルイは遠回しに言った。
ヒカルも薄々知っていたのに、知らないふりをした。
「戻ってこられない路に迷うシャルル」をルイは知っている。
そして・・・この封筒の中身についてもルイは知っている。

それでも、彼が静かに妖しく微笑む理由を、ヒカルは知りたいと思った。
･･･おかあさん。
あなたがシャルルと過ごした「青春の輝き」の前後の時代を、
私はこれから････観に行きます。
そう思いながら。

封筒を・・白い指で、静かに開いた。

■29

大事に保管していたのであろう。

美術品愛好家でもある、母の旧友だと言った女性は状態良く保存していた。
長期間の保存であったのに、そのデッサンは黄ばんでおらず、ほんの少し端が変色しているだけだった。
そのデッサンのほとんどは、髪の長い、美しい人が描かれていた。
どこか遠くを見るような、儚い精霊のような人だった。

見たことがない人だったので、母のモデルをつとめただけの縁の人なのだろうか。
それにしては･･･あの友人の女性はこんなに長い年月を保存しておいたことから、これは彼女の知り合いなのだろうと思った。
小さく「Lady 」とかいてあった。これは彼女の名前なのだろうか。

･･･どこか、シャルルに似ていた。
憂いがあって、誰も近寄ることの出来ない孤独と寂しさがありながら、それを超越した微笑みが印象的だった。

明るく陽気な絵でない。けれどもどうにも心惹かれた。
何枚かめくる。
いろいろな構図があったが、どれも･･･哀しそうで儚げで夢見るような愛らしい人の作品だった。
とても、想像の世界のモデルとは思えなかった。
しかしこれほど美しい人がいるとは思えないくらい、奇麗な人だ。

「それはあの人の縁者だ。･･･若くして死んでいる。」
ルイは静かに言った。

窓際の硝子窓から上を見上げて、すっかり暗くなってしまった空を見上げていた。
「･･･マリナ・イケダはその人物をモデルに、若い頃に絵を描いている。その下絵だな」
彼女は膝の上に広げた、母の作品を眺めた。
知らない人の持ち物のように思えた。
遺品の絵はたくさん残っている。

幼いヒカルが生まれたときに、情操教育の一環として、彼女はたくさんのイラストを残していた

。
けれども人物画はなく、こどもむけのイラストのみ残していた。

「‥‥あるときから、彼女は人物画を描かなくなった」
「あるとき‥‥」
「そう」
ルイは素っ気なく言った。

窓硝子に軽く寄りかかり‥‥気怠げに頭を軽く振った。
腕を上げて髪をかき上げるのもまだ、辛いのかもしれない。
彼は、回答を知っているのに教えなかった。
ヒカルも尋ねなかった。

目の前に溢れているデッサンが、母の作品だとは思えず、ただただ、その美しい人物画を眺めるだけだ。
彼女に残されたイラストは、お世辞にもプロとは言えない作画だった。
デフォルメされた絵は苦手だったようだ。
ヒカルの年齢にあわせたデフォルトされたものであり、彼女が「色」というものを知ることから始めなければならない幼年齢であったことも理由として考えられる。

写実的な描写の画は残っていなかった。
だが、これを見ると、マリナ・イケダは実在のモデルが在ると良い絵が描けるのかもしれない。
自分の母のことでありながら、ちらりと客観的な見解を考えてしまう。
ヒカルは苦笑した。
あれほど見たいと願っていた母のデッサンを手にしているのに、作品の出来の善し悪しを考えている自分が可笑しかった。
彼女は若い頃はまんが家だったと言う。
けれども何も残されていなかった。

どうして残されていなかったのかは、今となってはもうわからない。
ただ、父との結婚の時期前後であることは確かだった。
何か・・彼女に筆を折らせる原因があったのは明白だが、理由は誰に尋ねてもわからなかった。
シャルルさえも知らなかった。

ヒカルは、撫でてデッサンが薄れることを心配して、スケッチブックから切り離された幾枚もの素描を両手で大事そうに持った。

このLady という人物は･･･どこか･･･どこかシャルルに似ている。
寂しくて愛に飢えているけれど決して愛を覓がない。
これはルイにも言えている。
彼らはそれより誇り高いことを選ぶ。
そういう人達なのだと思った。
彼女に出会ったのは、小学校の頃と言っていた。
再会したのは、ヒカルくらいの年齢だと言っていたから･･･ヒビキヤなら知っているかも知れないな、と思った。
「マリナ・イケダは、その絵を残した後、もう1 枚、彼女に渡している絵があった。」
ルイは淡々と言った。

彼とあの人は、知り合いだと言っていた。
この絵を入手した後、ルイもあの人に連絡を取ったのだろうか。
彼は経過を教えてくれるような人ではなかったから、ヒカルは彼の知り得た情報について、どうして知っているのか理由を尋ねることはしなかった。

ルイは結果しか言わない。
理由はほとんど口にしない。
尋ねれば彼は冷笑して「結果を歪曲して真実から目を背ける者ほど、過程を知りたがる。」と言うだろう。

彼は、意図的に情報の量を制限して、相手にそうだと信じ込ませるだけで、嘘を口にすることはしない。
ヒカルがそう思いたかっただけかもしれないが。
･･･最後の一枚のことを言っているのだろう。
その絵は、明らかに、Lady の絵よりも最近に描かれたものだった。

別にするために､合紙が入っていた。
そして･･･一枚のメモが残っている。
きっと、あの女性の備忘録だと思った。
ヒカルはメモを手に取った。
丁寧な文字で、日本語だった。

『･･･マリナさんが訪ねてきた。･･･そして、しばらく会えないから、私にこのデッサンを預けて行きたいと言った。どうして会えないの、日本に住んでいるのに、と言うと彼女は『なんとなく』と笑った。近くフランスに用事があって短期間ではあるが渡仏するという。
私は自分で持っていれば良いでしょう、と言ったのだが、彼女は笑って持っていてくれと言った

だけだった。いつか･･･取りに来るからと言った。
もし、取りに来られなかったら、これはレディの絵と一緒にしておいて欲しいと言った。これは対になるべき絵だと言っていた。
どうしてこの絵が対になるのかわからなかったけれど、私は預かることにした。
･･･遺作になるとは思わなかった。その時の不思議な会話も、後になって理由があった様な気がしてならなかった。
虫の知らせと日本語で言うが、これが今生の別れになるとは私も彼女も決して思っていなかったのに。
・・・・・・・これをいつか、彼女の娘に渡せる時が来るのだろうか。
まだ私も混乱している・・・」

日付はあの事故の直後だった。
ヒカルは細かく丁寧に書かれた文字を、何度も何度も見つめた。

最初は、意味が頭の中に入っていかなかった。
文字列だけを眺めていくだけで精一杯だった。
･･･何が書かれているのか、読み込むことができない。
頭の中で整理ができない。

こんなことは初めてだった。
ルイがヒカルの蒼白な顔を、面白そうに眺めているかもしれない、とか
ルイと二人になってはいけないと念押ししたシャルルがそろそろ帰ってくるだろう、とか
そんなことは一切、考えられなかった。
･･･本当の母の遺作。マリナ・イケダの最後の作品････
それがこの絵なのか。
それがこのデッサンなのか。

ヒカル・クロスは、マリナ・クロスではない･･･マリナ・イケダの最期の作品を見るために、
重ねられた白い合紙をそっと取り除いた。

指が少しだけ震える。

今までめくり続けたデッサンも、たいそう驚くべきものであったけれど･･･
この絵だけは見てはいけない気がした。

その一方で、この絵を見ろ、と誰かがヒカルの耳元で、低く小さく、だがはっきりと囁いているような気がした。

見てはいけないものをこれから見ることになると･･･どこかでわかっていた。
同時にルイが「見たら戻れない」と警告した声さえも、今はまるっきり耳に入らなかった。

■30

■30

「････」
彼女は言葉を発したつもりだったが、声にならなかった。
緘口してしまう。
発声しているつもりなのに、音声が出ない。

それとも、自分の耳が自分の声を伝えることを拒否してしまったのだろうか。
ヒカルは･･･そのデッサン画を持ったまま、思わず立ち上がってしまった。
膝の上にのせた、その他すべての絵が･･･彼女の太腿からこぼれ落ちた。

「･････････っ！」

声にならない声は悲鳴に近かった。
しばらくそのまま立ち尽くしてしまう。
茶色の瞳を大きく見開いたまま、ヒカルはルイとそのデッサンを交互に見つめた。

「どういうこと･･･なの」
「つまり、そういうことさ」
ルイは静かに言った。

いつものように･･･
彼は歌うように言わなかった。
低く囁いた。
ヒカル・クロスは･･･
初めて。

生まれて初めて、幼い時から知っているルイ・ドゥ・アルディを睨んだ。

強く、意志を持って彼を睨んだ。

これを今まで黙っていたのが、他ならないルイであることを、容認できなかった。
‥‥理解できない。

デッサンは‥‥
マリナ・イケダの最期のデッサンは。

ヒカルは眩暈がして、立ち上がったばかりなのに、虚脱し、すとん、とその場に座り込んでしまった。

ああ・・・・
彼女が声を絞り出した。

それは‥‥
それは‥‥

シャルル・ドゥ・アルディとルイ・ドゥ・アルディだった。
まだ、幼いルイをシャルルが光の中で抱き上げている。
微笑んで、今にもキスをしそうに頬を寄せている。
まだ、若いシャルルと‥‥ルイが見つめ合い微笑んで、顔を近づけていた。
そして彼らの流れるような月と太陽の晄の糸のような髪が混ざり合っている。
手を伸ばしたルイの幼い手を頬に受けて、シャルルは満面の笑みを浮かべていた。

‥‥場所はここだった。

アルディ邸の薔薇園の窓辺で佇む二人のデッサンだった。
光の中に居る、幸福な様子が描かれていた。
ヒカルは息をするのも忘れてしまうくらい驚愕して・・実際に息が苦しくなり、大きく深呼吸した。
ヒカルは気がつくべきだった。
彼女の母親を「マリナ・イケダ」とルイは言った。

「マリナ・クロス」と言わなかった。
少し調べればわかるだろうし、彼と知り合いのあの旧友の女性から聞いていたのかも知れないが、それでも、ルイが彼女の旧姓を知っているとは思えなかった。
ルイにとって、興味がある情報ではないだろうに。
‥‥今、レディの絵を見て、ヒカル自身が納得したでないか。

･･･彼女は。マリナ・イケダは実在の人物をモデルにすれば写実的に描ける、と。
彼女は想像だけで、シャルルの未来にやって来るかもしれない、いつか生まれる子供を想像してこれを描いたのではない。
描いた時期は旧友の女性のメモから、シャルルの結婚式の直前だ。
これらが導く結論は、ひとつしかない。

「過程を知ることは愚かだ」と言ったルイが導いた帰結を、ヒカルは察してしまった。

・・・･ルイを知っているんだ。
ルイは･･･マリナ・イケダに会っている。
確信した。
「ルイ･･････」
ヒカルは呻いた。

ルイは薄く笑っただけだった。
それは、ヒカルに「シャルルの絶望が欲しい」と宣言したときの微笑みだった。

■31

「ルイ･･･マリナを･･･母を知っていたの？」
「その絵が答えだ」
ルイはくすくす笑った。
声を漏らして笑うルイは、とても幼く見える。
実際の年齢相当なのだろうが、老成した彼には、その笑い声は創ったもののようで、ひどく不釣り合いだった。

ヒカルを試しているのだろうか。
ルイは何を知っているのだろうか。

･･･彼女は喉元が干上がり、声を上手く出すことが出来なかった。
そして･･･ヒカルは彼が薔薇色の唇を開きかけたとき。
場違いにも「ちょっと待って」と言って、床に落とした絵を拾い始めた。
その驚愕を落ち着かせるように、ヒカルは慌てて散乱した絵を、慌てて拾い上げる。
これから彼が話し始める言葉は・・・彼女をもっと喫驚させることになるだろう、と肌で感じていた。

その時に･･･ヒカルはゆっくりとこの館を退出する自信がなかった。
それくらい、何か重要なことをルイはずっと言わないでいたのだと思った。

これほど長く一緒に居るのに・・彼はそれでもなお、決して悟られないように沈黙していた。
ルイには、自らの「札」を必要になるその時まで、何年でも何十年でも、ひょっとしたら一生でも閉じ込めておく剛胆さがあった。

「ヒカルはまったく予測不能だね」
ルイはからかうように言った。

この瞬間を何年も前から待っていた、と付け加えた。
ごく簡単に言ったので、ヒカルは、手を止めずに、母のデッサンをかき集めて、元あった封筒に収めることに集中してしまっていた。
ヒカルはそして天地を揃うことなくしまい込んだデッサンの入った封筒を胸に抱え込んだ。
彼に奪われないように、守るようにして、小さな両肩の中にしまい込んだ。
そしてその絵を確保してから・・・ようやく言葉を発することができるようになった自分が居ることに気がついた。
ルイを警戒している自分自身が･･･何となくではあるが哀れだった。
攻撃されるのかと思って身構える自分をどうにも諌めることが出来なかった。
「････何を言っても私はあなたを･･･」
ヒカルは呟くと、一枚だけ、封筒に入れることの出来なかった「最期の絵」に目を落とした。

これは他の絵と対であると母は言ったのだというが、ヒカルは

･･･一緒にしてはいけないと感じていた。

何がどうという根拠はなかったけれど、「いけない」と何かが警告していた。
それは先ほどの「見ろ」と囁いた声と同じだった。

彼女を突き動かす、本能に直接語りかける声には抗えなかった。
誰の声なのか・・考えるいとまもなかった。

ルイは、また、遠くを見るように、硝子窓に映る、夜鏡の自分を見つめた。
ルイ自身を見ているようで、もっと遠くの･･･ルイを越えて透けて見える空の模様を見ているのか、それともルイと良く似た誰かを見ているのか･･･もっともっと遙かな、形にならないものを見つめているのか、わからなかった。

でも彼が今見ているのは、彼女がかつて何度か目撃した、薔薇園の「影」と同じなのだろうとわかった。
彼は彫像の様に整った顔を動かすことなく、ヒカルに背を向けたまま「知りたいか」と尋ねた。
ヒカルは少し怒ったように「当たり前でしょう」と言った。

彼は家族でないとヒカルを否定したけれど、その短い言葉のやり取りだけで会話が進む様は、まさしく彼の否定した「それ」であった。

「良いだろう」
ルイは満足そうに言った。

ヒカルの怒気を含んだ言葉が、屈服した者の蹲踞の言葉だと思ったようだ。
ルイは･･･物憂げで上品な青灰色の瞳を遠くに向けて･･･独り言のように、歌うように話し始めた。

その口調は・・・とても穏やかで静かで･･･ヒカルが今まで聞いたことのない声波だった。
きっと、この口調で、彼は薔薇園のベンチでひとり腰掛けて、自分の影に語っていたのかもしれない。

根拠はなかったけれど、きっとそうに違いない、とヒカルは感じた。

胸に・・誰にも奪われないように隠すかのように、デッサン画をしまい込み、彼女は「最期の絵」だけを握りしめた。

でも、見つめていることが苦しくて･･･ルイが話し出すより前に、封筒の上から、その絵を自分の視界に入らないように、同じように抱きしめた。

母の最期の絵。

マリナ・イケダは、実際のモデルが居ないと、写実的なデッサンは描けなかった。
だから、これは･･･実際に、シャルルとルイを見ていて･･･ふたりが微笑み会う姿を夢想して描いた絵なのだと思った。

実際に、微笑みを交わしていたのかどうかは、ルイのこれからの話を聞かないとわからなかったが･･･

ヒカルは唇を噛みしめた。

とうに、シャルルが帰邸する時間だということをすっかり忘れていた。
ルイは、嘘をつかない。けれども、聞く者によっては解釈の違ってしまう結果になる話し方をする。

集中してひとつひとつを注意深く聞かなければ、彼から真実を聞き出すことはできない。決してできない。

･･･ヒカルは、彼女が憂えるすべてのものを、その瞬間だけ、切り離すことにした。
シャルルが戻り、ヒカルが不在にしていることを気にしてルイの別棟に訪れるかも知れない、という想像は、簡単に予想できたのに。

その予想すらすることを彼女は放棄して、代わりに、ルイの言葉に耳を傾けることを選んでしまった。
それがどんなに罪深いことだったのか、その時はまだ幼くて解っていなかった。

■32

怒るという感情は、ヒカル・クロスはあまり持ったことがない。

浮世離れしているとか、怒るようなことがないくらい平和だと言われたが、彼女は怒るという感情が怖かった。

だがしかし･･･今のヒカルは、間違いなく、これまでの人生で、数度しか持ったことのない感情に支配されていた。

そして、それまでの「それ」より、深く激しい感情であることを認識していた。
受け入れがたいけれども、その昂ぶりは自分自身の内からわき上がっているのだと知る。
知り抜いた情感でないから･･･彼女は戸惑うが、それは受け入れろ、とヒカルに強く囁いた。先ほどの声と同じだった。
ヒカルは眩暈がしそうだった。
足元がぐらぐらと、音を立てて揺らぐのを感じる。

ルイはヒカルを振り返らなかった。
用意されたのかそうでないのか、わからないような口調で彼は話し始める。
囁くような声音だったから、ヒカルはすべての神経を集中して、彼女に背を向けたまま話し始め

るルイの小さな声に聞き入った。

・・・部屋のマシンが小さく唸る音さえも、大音量に聞こえるくらい、神経を尖らせた。

「・・・あの人は、シャルルが結婚するんだ、と切り出すはるか以前から、オレの存在を知っていた。シャルルは最後までオレという存在をマリナに明かさなかったことを拠り所にしているようだが・・・マリナはとっくに承知だった。
オレが生まれてすぐから・・・彼女はオレの元を訪れた。
誰が知らせたのかは・・・君には想像がつくだろう？

それは過程でしかない。

結果として、あの人はオレに定期的に会いに来た。
シャルルに会わずに・・彼女は結婚して妊娠して、渡仏できなくなるまでやって来た。
暇さえあればやって来た。
でも、滅多に会えなかった。
叔父上が禁止した。
頻繁に会えばシャルルに知られてしまう、と言った。
でもそれは、オレとあの人に特別な絆が生まれることを危惧した言葉だった。
あの人は時々・・・薔薇園でひとり遊ばされているオレを、ガラス窓の外から眺めるだけになった。
言葉を交わすことはなかった。

乳母も使用人も短期間で交代するような環境だったから、そういう観察めいた視線は慣れていた。

シャルルはマリナがこれほど頻繁にフランスに来ていることを知らなかった。
・・・・マリナが結婚する直前は、配偶者になったカズヤ・クロスに、その生活をいつまで続けるのかと咎められたと聞いているよ・・・もちろん、そんなことは、あの人は何も言わなかったけれど。

やがて、シャルルが結婚をすると告げた時に、あの人は、その絵を仕上げることにした。
唯一の・・・実在のモデルがポーズを取らない、想像の絵を描いた。
・・・そして、それが現実にならない限りは、彼女は絵を描かないと誓った。

その夢想が叶えられるまでは、筆を折ると宣言した。
ああ、これは当の本人が目の前で言ったことを聞いた人間から・・・聞かされた話だから、本当かどうかはわからないけれどね。

それが、遺作になった。
彼女はシャルルの結婚式で渡仏する前に･･･その絵を友人に預けた。
どういう理由かは明白ではないけれどもね。
自分が死ぬとは思っていなかっただろう。
これは最大の謎になるのだろうけどね。
とにかく、マリナ・イケダは予測不能だった。
ふらっとやって来る。
そして、そのたびにオレはこの薔薇園に連れ出される。
シャルルの居ない時を見計らって。
そしてその時はオレは認知されていなかったから、それこそ極秘だった。
シャルルの親族と同伴でないと入り込めない世界に入り込んで・・むせかえる、まったく新しい品種の薔薇の香りに酔いそうになりながら･･･ガラス窓の外からだけ見つめかえすことを許される、ヒカルそっくりの女の視線を受ける。

オレは見せ物だと思ったよ。

そして、そんな特権を持つ女が･･･あの人が憎かった。
実験材料だと明言した叔父上の方が、まだ親しみが持てた。
あの人は時々涙ぐみ、視線を合わせようとオレに手を振った。
とっくに成人しているのに、小さな人だった。
窓ガラスに･･･ようやく顔が見えるくらいの身長しかなかった。
やがて、オレは認知されてこの邸に出入りすることを許された。
そして程なくして、あの事故が起こり･･･
シャルルは帰ってこなかった。
薔薇園の薔薇も枯れた。
オレは、待った。

叔父上と同じ顔の･･･渋々認知をした男を父と呼べと言われた相手を待った。

でも、来なかった。

挙式の当日は、遺伝上だけしか繋がりがなくても母と呼べと言われた女性を伴って･･･3 人で静かな夜を過ごすはずだった。
そんな夜は来なかった。
永遠に来なかった。

オレは････ひとり、薔薇園のベンチに座り･･･空を見上げて月が昇り沈んでいく様子を朝まで眺

めた。

もう、何も待たないと、その時に決めた。
父と呼ぶなとシャルルが拒否していると思った。
以降、マリナ・イケダも薔薇園に訪れなくなった。
飛行機事故で死んで、その娘がこの館にやって来ると聞かされ
たときには、このオレでも心底驚いたよ。

･･･シャルルの妄執に。

そんな感情は持つなとこの一族は小さい頃からたたき込まれた者だけしか存在できないと思っていたのに、一族の頂点に立つべき当主が、他の男と結婚して子供も設けた女を運命の人と呼んで、生涯彼女しか愛さないと豪語する。

なんて傲慢なんだ、と思ったね。
そして、当主になれば傲慢であっても良いのだ、と理解した。
シャルルはあちらの世界に行ってしまった。
オレを見ることもなく、戻ってこなくなった。
戻ってこられないのではない。
自分で選んで戻らなくなった。
どこまでも傲慢だよな。
自分の逃げ道を正当化しやがった。
オレは、そんな狂気の血を濃く受け継いだのに、シャルルは自分のことで精一杯だった。
そんなシャルルを父と呼べと言われたのに、あいつはそれを拒否した。
それなのに･･･

シャルルは、ヒカルがやって来た時に「父と呼ぶな」と言った。
オレに対する言葉とは別の意味だった。
心底･･･殺してやりたいと思ったよ。

シャルルも、おまえも･･･。
いなくなればどれだけ心穏やかになるのだろう。
オレを天使と呼び、シャルルとそっくりだというおまえを、この薔薇園の柵に串刺しにする夢を何度も見たよ。

嘆くシャルルを何度も夢見た。
だから･･･だから、オレは奪うことにした。

自分の前から滅することの出来ない存在があるのなら、それが自然に滅するようにすれば良い。
ただ、それだけのことなのだ、と気がついた。
奪って･･･そして何もかもを手に入れる。
生み出すことが出来ないなら、奪うしかない。
オレはそういう定めなのだと知った。
誰に教えてもらうまでもない、オレの生きる意味を、ヒカル、おまえが教えたんだ」

彼はそこでひとつ、小さなため息を漏らした。
妖艶で哀しげで儚い･･･マリナが描いたレディのような、夢幻の住人のような仕草だった。

■33

憎むとは赦すより甘美だね、とルイは微笑んだ。

ヒカルとそれほど年齢のかわらない若い少年は、老人のような疲弊した眼差しをしていた。
父のシャルルの方が、ずっと若々しく瑞々しい瞳でヒカルを見つめた。
彼は、いつもの彼の話し方ではなかった。
ごく短く簡潔に話をするルイ・ドゥ・アルディではない。
彼自身に話をしているような口調だった。
誰かと話をしているような口調でなかった。

「それでも居なくなってしまえば、楽になるかと想定したが、
それでは駄目だと結論に至った。
目の前から消えるだけでは、この渇きは癒されない。
もっと飢える。」
ルイはそう言った。

彼の青灰色の瞳は、彼が背を向けていたので見えなかったけれど、均整のとれた背中からは、殺気と哀傷と･･･どこか諦観した空気が発せられていた。
「あちらに渡ったシャルルは、ある意味で正解を選んだ。

そうでなければ、彼は生きていられなかったから。
生きたくないと思ったのに、体が生きていくことを優先して、彼の正気と肉体を切り離した。
最高の種の祖らしいね。

････永らえることは種の存続の条件だ。

だから･･･オレはシャルルの最も愛するおまえが欲しい。
種の存続のために･･･おまえの遺伝子が欲しい。
この狂った因子を鎮めることにより･･･シャルル・ドゥ・アルディという、狂気によって美しく咲くフランスの華は枯れる。
死ぬまで死にたいと想い続け、そして永らえた自分を恨んで死ぬ。
その時に、ようやくオレは解放される。

･･･そのためには、ヒカル。おまえが欲しい。

シャルルの愛した晄をオレがもらい受ける。
父と呼んではいけないと自分自身が命を下した男と女が・・・
自分を父を呼ぶ。

ひとりは慈愛のためにそう言った。
ひとりは許容できなくてそう拒否した。

・・おまえがシャルルを父と呼んで苦しむ様を見たい。

オレを見せ物にし続けたあの人の遺児を妻にして･･･夜な夜な組み敷く度に・・
運命の人の娘が泣き叫ぶ姿を、シャルルが哀哭して壊れていく様を見たい。

夜が来る度に。

おまえがオレに貫かれて涙を流す行為を悲しむシャルルが見たい。

壊れるんじゃない。今度は･･･壊すんだ。
オレが。
オレの自らの祖を。

穢すことの出来ないものは、穢されることに非常に鋭敏で攻撃的になることに気がつかない。
知らなければ無罪か？そうじゃないだろう？

おまえは･･･おまえとシャルルは･･･おまえ達は･･･

贖罪に努めろ。

オレを慰撫しろ。
跪け。

———マリナ・イケダが描いた、幻の絵を見て慟哭しろ。

彼女はオレを眺め回しながら、自らの願いを押しつけた。
観察しながら、自分の気持ちに振り回されて、涙を流し、オレやシャルルに･･･
偽善という刻印を残したまま死んだ。

決して叶わぬ願いを込めて、自ら筆を折った。
おまえの母がもたらしたシャルル・ドゥ・アルディの狂気は彼だけのものではない。
この一族を長らく幽鬼の底に堕とした。

オレを狂わせた。
叔父を狂わせた。
ジルを狂わせた。

･･･そしてシャルルを気の向くまま偏倚させるおまえは、本当に清らかなのか？
答えろよ、ヒカル。

ヒカル・クロスの名をもって。

そして誓え。

一生かけて、オレに贖罪しろ。

ルイ・ドゥ・アルディはそれを要求する権利がある。理由がある。

オレの受けるべきであった幸せも未来も･･･おまえがすべて奪った。
だから、それを取り戻すだけだ。

それを奪うという言葉でしか表現できないのであれば、オレは奪い続ける。
永遠の光の娘と言われているのに･･･

おまえは他の光を得ないとシャルルに輝くような微笑みを向けることが出来ない。

その光はおまえの晄ではない。

‥‥さぁ。

その絵を見て、まだ思い知らないのか。
まだ‥‥悟らないのか。
オレを見せ物にしたあの人のことを理解できないか。

シャルルの狂気はおまえが‥‥おまえ達がもたらしたとわからないのか。

‥‥この一族の存亡について‥‥シャルルという頂点の華を含めて、一族を憂えるシャルル以外の者達の悲哀を感じないの
か。」
ヒカルは胸の絵を握りしめた。
ルイの囁きは‥‥煉獄の炎が燃えさかる前に、堕天使達によって鳴らされる角笛のように、彼女の心の深くに響き渡った。
知ることを受け入れようと思ったのに。
知ってしまった今‥‥受け入れるどころか、ルイの嘆きを正面から目の当たりにして彼女はこうして呼吸をすることさえままならなかった。

彼の抱えてきた闇がどれだけ長かったのか‥‥わかっていたと思っていたのに、ちっともわかっていなかった。

■34

「ルイ。そちらの路に行ってはいけない」
「ごく抽象的な発言には回答しない」
ルイは短く言った。

しかし彼はヒカルの言う「そちらの路」が何を指しているのか、よくわかっていた。

「‥‥そろそろ行け。
　オレの用件は終わった。
　シャルルが戻ってくる時間だ」

彼は夜鏡の中の自分を見ているだけだった。

彼にかける言葉が見つからなかった。微笑むことさえ出来なかった。

ヒカルは涙を人前で流すことが出来ない。

小さいときから自分に課した習慣だった。

だから、彼女にできることと言えば、笑っていることだけだった。
朗らかに、無垢な・・いつまで経っても大人になりきれない無邪気な姿を装うことしかできなかった。
それは続ければ、いつか本当になると信じていた。

彼女はそうやって日々を過ごし、年月を渡り、遠い幻でしか会えなくなってしまった両親にいつか会うときのために、恥じない自分でいようと思っていた。

けれども･･･

今、こうしてルイの闇を覗いてしまった。
覗いただけではない。
自分がもたらした闇だった。

ヒカルはシャルルに「永遠の光」と呼ばれ続けることが嬉しかった。
自分が誰かの･･･シャルルやルイの昶になれることを願っていた。

ルイはそうじゃなかった。
ルイは光がもたらす影を受け入れざるを得なくなった。

彼が選んだわけではないのに。
彼が願っても居ないのに勝手に照らしてしまった。

思った自分が一番･･･闇深い人間だと思う。

「･･･ルイ。」
「婚約の話は継続だ。オレはおまえを妻にする。何があっても。
一生･･･自由になんかしてやらない。」

そして彼はゆっくり振り向いた。

黄金の髪が揺れて･･･月の女神と交代したばかりの太陽の神のように見える。
青灰色の瞳が仄暗かった。

でもそれが彼をますます美しくさせる。
静かな湖畔のような･･･彼の瞳はヒカルを見た。
怖い、と思ったけれど目が離せなかった。

「―――ルイ・ドゥ・アルディの名にかけて」
彼は唇を歪めた。

「オレの予定は絶対だ。シャルルの様に変更しない」
彼はそう言うと、ヒカルに出て行け、と言った。

そして背中を押し、扉の向こう側に押しやる。

ヒカルは両腕に絵を抱えていたので、彼に逆らうことが出来ずにそのまま別棟の外に追いやられてしまった。

「おまえに拒否する権利はない。選択もない。････業火に灼かれてくれ･･･」
彼はもう一度、かつて彼女に言った言葉を投げた。

ルイは二度、同じ事は言わないのに。

ヒカルが振り返ると、もう扉は固く閉ざされていた。
今まで二人が居た部屋のカーテンが厚く遮られるところだった。
彼の長い話に衝撃を受けたまま、まだ躰が痺れていた。
頭を内部から、誰かが打ち鳴らしているような感覚に襲われる。
ヒカルは脚を踏み出すことができなかった。

別棟に戻り、ルイにもう一度会うことも、本邸に戻ってシャルルにいつものとおり、お帰りと微笑むことも･･･できないと思った。
もう、自分は戻れなくなってしまった。
自分が、これまでと違ってしまったことを感じた。
ルイが倖せになれない理由は自分の倖せにある。

ルイが･･･孤独を募らせたのは、シャルルの孤独を自分が癒そうとしたことにある。
この絵は、シャルルには見せるべきかどうか、彼女は考えることすら出来なかった。
マリナ・イケダの遺作だ。
シャルルが見たいと言うのは当然だろう。

でも‥‥この絵が長らく、シャルルの目に触れなかったことにも理由があった。
あの母の旧友は、シャルルにコンタクトを取らなかった。
絵を見れば、あのモデルがシャルル・ドゥ・アルディとルイ・
ドゥ・アルディであることは、彼女はわかっていたと思う。
でもヒカルに渡した。
シャルルやルイ・ドゥ・アルディに転送しなかった。
‥‥この絵をヒカルにいつか渡すためだと言っていた。

彼女が最後に描いた‥‥想像の絵。
モデルは居るが、構図は夢想されたものだ。

ルイはそんな構図はありえない、と言うかのように、冷たく眺めていただけだった。
彼の心には響かなかったのだろうか。
マリナの願いをルイは受け止められなかったのだろうか。
この絵が持つ意味は大きかった。
特に、ヒカルにとっては。
母を知りたいと思ったのに、彼女を知れば知るほど‥‥
深く苦悩する。
苦悩しているシャルルとルイを知る。
ヒカルは少し考えて、庭から直接入れる裏口を使い、自分の部屋に入った。

シャルルが戻って来ていると連絡があったが、ヒカルは少し頭が痛いので休む、と告げた。
きっと彼は心配してヒカルの部屋を訪れるに違いない。
彼女は、そっと・・自分のクローゼットに絵をしまい込んだ。

彼女がシャルルに持った、初めての秘密だった。
後ろめたさと遣り切れなさがヒカルを陰鬱にした。

涙も出なかった。

ルイとマリナが知り合いだったことや‥‥彼を見続けるしか許されなかった母ことなどが衝撃だった。

ヒカルは両親の記憶がほとんどない。
覚えているのはイメージとほんの僅かな会話と抱き上げてくれた倖せな感覚だけだ。

実際に彼女を抱き上げてキスをし、そして様々な風景を見せて癒してくれたのは、シャルル・ドゥ・アルディだった。

そんなシャルルの実子が･･･ヒカルを恨む気持ちを理解しようとしていなかった。
もう少し早く話をしていれば、これほどお互いに傷つけ合うこともなかったはずだった。
ルイにヒカルの両親の話をしてはいけないと言ったのはシャルルだった。
記憶が薄れるにつれて、彼女がそのことを気にかけないようにという配慮だった。
ヒカルは、その言葉を黙って受け止めた。

実際に、薄れゆく記憶の両親について思いを馳せると哀しくなった。
その一方で、両親が揃っているルイが、母親のことを口にすることは禁じられた。
口にする気持ちもなかっただろうから、それは彼にとっては大したことではなかったのかもしれない。

今般の絵はひとつのきっかけにすぎない。
話す機会はいくらでもあったはずだ。
彼の知能と記憶力をもってすれば、マリナ・イケダという古い友人がシャルルの挙式に招待されて、特別な位置に座ることは覚えていただろう。

そして、その子供がある日突然、この館にやって来た。
ルイはそれでも黙っていた。

･･･いや、言い出すことが出来なかったのだ。

確かに自分は傲慢だ。

そう思った。

自分が可哀想だったから、彼女はルイに彼の母親のことや父のことを尋ねることをやめてしまった。
いつも怒られたり無視を
されるから聞くのをやめてしまった。

シャルルが家族言ってはいけないとルイに命じたから、それが自分に都合が良かったから･･･
知らない、ではない。
知ろうとしなかっただけだ。
彼女はそう思い知る。はっきりと感じる。

家族になりたいと言っていたヒカル本人が･･･家族というものを拒否していた。

おかあさん･･･
おとうさん･･･
ヒカルは呟いた。

早くあいたい････

「早く」と願ってはいけない、とあれほどシャルルに言われた
のに、彼女は願ってしまった。

ルイの闇を受け止めきれずにいた。

■35

部屋で休むと言えばシャルルが訪れるのは、わかりきっていたのだが、ヒカルにはそれ以上の方便が思いつかなかった。

シャルルが帰邸して、程なくしてからだった。
彼はヒカルの部屋をノックした。

先般のような一大事の時以外、彼は敬意を払って、年頃の娘であるヒカルの扉から室内には入り込まない。
ヒカルは扉を開けて、シャルルを迎えた。

どうぞ、といつもなら部屋に通すのに、彼女は言葉に詰まってしまう。
シャルルの･･･白金の髪と青灰色の瞳と･･･とても実年齢を推測できないような若々しい体躯を見上げた。

ルイを思い出す。

先ほどまでのルイの会話を思い出して、彼女はシャルルの顔を見つめることが出来なかった。
今までのように、闊達に「おかえりなさい」と笑うことが出来なかった。
彼は外出着から着替えてすぐさまヒカルの部屋を訪れたらしい。

「この間の打撲が傷むのか」

何度も検査を受けたのに、シャルルがもう一度検査しようと言い出した。
ヒカルはシャルルに微笑んだ。

「シャルル・ドゥ・アルディが検査して異常なかったのだから。
何度検査しても同じよ」
「君の頑丈さには敬服するよ」
「･･･チタン合金かセラミックでできていると思ってるのね？」
「もちろん。―――是非、解剖させてくれ」
彼はほっとしたように笑った。

シャルルに間違いはない。
間違えない。

でも、彼はヒカルのことになるとその自負を簡単に覆してしまう。

同じ結果になるのに、何度も繰り返そうとする。
「････ルイと会ったな？」
シャルルは扉の前でそう言った。

彼女が体調不良でなく、何か物思いを理由に部屋に籠もっているのだと察したらしい。
ぎこちないヒカルの笑顔が気になった。

彼女は嘘をつけない。
誤魔化すこともできない。

それは彼女の気質であったけれど、シャルルは「誤魔化してはいけない」ときつく教えた。
自分の気持ちを誤魔化すのは･･･自分だけで良いと思った。

ヒカルには、そういう人生を歩んで欲しくない。
もし･･･あの人達が生きていれば、そんなことを教えることもなく、当然であるという環境にいたのかもしれない。

ヒカルはうん、と頷いた。
彼女のそういうところが好ましかった。

あれほど会ってはいけないと言ったのに、彼女は考えることがあってそうしたのだと思うことにする。
･･･若い頃にはこの事実を知っただけで、激怒したものだったが、長い年月が、彼に相手の気持ちを想像するということを教えた。
もっとも、それはヒカルとあの人と･･･青春の輝きの頃の知己だけに限られた。

「シャルルに駄目だと言われていたけれど、どうしてもルイと話がしたかった」
「それは･･･婚約のこと？」
「････」
ヒカルはうつむいた。
「ヒカル。こっちを向け」
シャルルはそう言った。

彼女はいつから、彼の目を見ないでうつむくようになってしまったのだろう。
彼の知っているあの人と、いつまでも同じだと思っていた。
いつもいつも、真っ直ぐ彼の瞳をのぞき込む。

そんなあの人の視線が辛いときもあり、切ない時もあり･･･愛おしいと感じた。
それなのに、あの人の娘は俯くことを覚えてしまった。

･･･その違いは何だろうか。

シャルルの育て方に影響しているのだろうか。

それとも･･･アルディ家の荊のような妄念に彼女も縛られてしまっているのだろうか。
「ヒカル」
彼女が顔を上げないので、シャルルは細く長い指で彼女の顎を掴んだ。
軽く掴んだはずだったのに、ヒカルはびくり、と躰を震わせた。

色素の薄い、黒目がちの瞳が彼を捉える。

髪が伸びて、ちょうど、彼があの人と知り合った頃ぐらいになった。
くせの強い髪は、父親そっくりだったけれど･･･
彼女はだんだんあの人そのものになっていくような気がする。

･･･ああ･･･

シャルルは表情を変えないで平静を装うのが精一杯だった。
だんだん･･･ヒカルの放つ光輝が眩しくなる。
彼女はもうすぐ、あの人と同じ年齢になる。
その時･･･シャルルは、間違えずにヒカルの名前を呼ぶことが出来るのだろうか。
あの人と誤認して･･･力任せに自分の愛を囁くことはしないと言い切れるのだろうか。

「･･･ルイとの婚約は持ち越し。」
ヒカルが告げたシャルルは彼女の小さな顎に添えた手を離した。
「どういうこと？」
「シャルル。これは私に一任させてと言ったはずよ」
ヒカルは哀しそうに言った。

「････ルイには･･･誰かが居ないと駄目だ」彼女はそう、呟いた。
「誰か」がヒカル・クロスのことを指すのかどうか、シャルルは尋ねることを戸惑ってしまった。

戸惑う。

彼には長らくなかった動作だった。

■36

「ヒカルの思うとおりにしろ」
彼は静かに言った。

しかし、シャルル・ドゥ・アルディは青灰色の瞳を曇らせて、でも険しい顔をした。
ヒカルは従順であるかのよう見えて意思を貫き通さねば気が済まないところがある。

ここは一度引いた方が良いとシャルルは判断した。

―――若い者にありがちな「反対されると余計に意固地になる」という現象に、ヒカルが浅はかに陥ってしまうとは思えなかったけれど。

しかし、フランスの華と呼ばれる彼でさえ･･･そんな時代があったことを思い出していた。
これから迎えようとする者の気持ちはそれを過ぎた者には理解できるが、逆はありえない
決まり切った退屈な定説だった。

シャルルは彼女の肩に手を置いた。
両の掌でヒカルの肩を掴んだ。
ヒカルが叫ぶ。

「シャルル･･･怪我が！」
「痛まない」

ヒカルのことを考えると痛まない。
だから今の言葉は嘘ではない。
シャルルは彼女の茶色の髪を撫でた。
柔らかい髪質の彼女の髪に、細く長い指が絡まる。
シャルルは目を細めた。
この静かな時を･･･躊躇いながら受け入れるようになってから、
年月を経ても・・

まだ、俯いた顔のラインがあの人に酷似しているヒカルをみると、少しばかり驚愕する。
もう、逢えなくなってどれくらい経過するのか考えることさえ、哀しくなってしまう。
それでも、あの人を忘れてしまうことなんてできなかった。
彼は青灰色の瞳をヒカルからそらさずに、小さく頷いた。

「わかった」
ありがとう、とヒカルは言った。

「ルイには本当にしたいことがあるのだと思う。
家族として･･傍で見つめる人が必要だと思うの」

ヒカルはひとつひとつの言葉を確認するかのようにゆっくり言った。
シャルルは彼女の曖昧な言葉をじっと聞いていただけだった。

彼女に考えがあり、それを覆すような材料がない以上は、彼女の隙にさせておくしかなかった。

「賛成はしない。でも否定はしない」

シャルルはそう言った。
愛するあの人の娘らしく･･･彼女は一所懸命考えている。

ルイのことだけではなく、彼女がこれからどう生きていくのか、そろそろ考えても良い頃合いだった。

「でも、ひとつだけ約束してくれ」
シャルルは言った。

見守るしかできないのか、と内心では非常に憤っていたが、ヒカルに悟られないように、静かに言い切ることに専念した。

「判断したら君は自らで責任を持つことになる。
だから自分を大事にして欲しい」
「シャルル。･･･その言葉、あなたにも贈るわ」
ヒカルが茶色の瞳を細めて微笑んだ。
白い並びの良い歯が光った。
柳眉が持ち上がり、黒目がちの大きな瞳が晄を絞って彼の顔に
明るく笑いかける。
彼女は若くて美しいのだとシャルルは改めてそう思った。

･･･過ぎ去ったあの頃を思い出す。

「それから、ヒカルが話したくなったらいつでも良いよ」
彼女がぎくり、とした。
何か、話していないことがあるのだと確信した。
ルイへの訪問で、彼女は何かを知ったのだ。
けれどもそれをシャルルに言うべきかどうか悩んでいる。
それを先回りして問い詰めることも出来た。
でもシャルルはヒカルの意思に任せることにした。

「どうか、約束を忘れずに･･･オレの天使」

シャルルはそう言うと、彼女の額に唇を軽く押し当てた。
安らぎも哀しみも分かち合ってきた。
そんな彼女が自ら決めることが、シャルルと共有することができないのであれば、それは黙って受け入れてやるしかなかった。

シャルルは「具合が悪いなら早く休みなさい」と言って、彼女の部屋の扉を閉めた。
そして、美しい微笑みでヒカルと別れると･･･厳しい顔立ちになった。

青灰色の瞳が強い光を放った。

いつもの物憂げな儚い視線ではなく･･･

目の前の見えない誰かを睨みつけているような表情をした。
ルイに入れ知恵をしている自分は何を予定しているのだろうか。

彼の予定は決定だ。
それはシャルルと同じだった。
彼はシャルルの半身だから。

ルイは、何かを予定しており、それが間もなく動き始めるのだろうと計算した。
しかも厄介なことに、それが動き始めたら止めることは酷く骨が折れることで、ヒカルを巻き込んでしまう結果になりかねなかった。
ヒカルは非常に強い精神力を持っている。
年相応ではあるが、時々、自分を捨てて相手を重んじる傾向にある。
その意志の強さでもって自分のことを切り捨ててしまう。

･･･彼の父もそうだった。

彼らの娘は、とても･･･魅力的でそして彼を時々悩ませる。
ファムファタルを焦がれるときのような激しさではない。

穏やかな静かな時間をもたらした天使を、どうしても護ってやりたかった。
シャルルは彼女を壊したくないと思っていた。

『くだらないことを言わないでよ。
あたしがここまでついて来たのはあんたを置いて逃げるためじゃないわ。
あんたを守るためよ。
だから、あたしは、あんたを置いて絶対に逃げたりなんかしない』

そう言いきったあの人の娘は･･･やはり同じように、現実から眼を反らさずに逃げないことを決めたらしい。

ヒカル。
今度は、オレが君を守る。
彼は呟いた。

先手を打ったつもりが、ルイに先を越された。
高い知能を持つ者同士が、静かに試合を始める。

次の手を決めて駒を出す瞬間には、もうそれは動作でしかない。

･･･何手も先を見ておかなければならない。

彼は胸ポケットから、携帯電話を取りだした。記憶している番号を押す。

何コールかした後に、相手が出た。

シャルルからのコールを予定していたかのように、でも焦らすように何コールか間を置いて彼の苛立ちを煽るかのように。

「････話がある」

シャルル・ドゥ・アルディは次の手を出すことを決めた。

■37
「――――――それで？」

ミシェル・ドゥ･アルディは艶やかなバリトンを響かせて、可笑しそうに微笑んだ。
彼はいつも微笑んでいる。

楽しくなくてもそうであっても。
それ故に彼が何を考えているのかがわからない。
同じ水の中で浮かんでいた半身であるのに･･･これほど別れてしまった理由は何なのか。
それを考えるとシャルル・ドゥ・アルディは彼自身が導き出す答えが、決して誰にとっても愉快でないことを思い知る。

何度予測しても無理だった。

目の前の、自分そっくりの男は、つまらなさそうに、デスクのシガレットケースに手を伸ばすと、無造作に煙草を取り出し、そして火を点けた。
慣れた手つきで、細く長い指で煙草を支えて、そして大きく吸った。

「シャルルもどう？」
「吸わない」
「そう？『この時期は吸わない』だろう？」
ミシェルは薄く笑った。

彼はあるときからシャルルを「兄さん」と呼ばなくなった。
名目上は彼はシャルルと共同経営者だった。

かつて、当主の座を争って、ミシェルの存在は世に出てしまった。
苦肉の策として･･･
シャルルが当主になった折に、彼には当主代行という座を用意した。
本来なら、生涯幽閉されていて当然ではあったが。
彼をバックアップするシャルルの前妻の発言もあった。
通信業界では･･･ミシェルは幼い時から精通していた。
その業界では、シャルルが当主に就くときには、彼の実弟は確固たる地位を築いていた。
シャルルにミシェルに追いついて追い越す程の技量がなかったわけではない。
ミシェルが君臨する業界を彼が支配しようとした瞬間があった。

でも、その直後に・・
シャルルは壊れてしまった。
墜ちてしまった。

自分の血肉を分けた弟について、考える余裕もなかった。
以来、この業界はミシェルとルイに任せている。

任せている･･言葉は明瞭だか、要するに「放置している」ということだった。
アルディ家の実業家としての業績が伸びるのであれば、それで構わない。
シャルルは冷たくそう言った。
ミシェルの元で過ごす時間が長いルイも顕著にその方面に興味を示した。
もっとも、彼はすべての方面に精通しているが。
今は、バイオ関係と通信業界ではルイとミシェルの右に出る者は居ない。
彼らを凌ぐ技術を磨くことが、世界中の技術者達の憧れる夢であった。

パリの郊外に居を構え、彼はほとんど外に出てこない。

その代わりに‥代行の代行としてルイが頻繁に世に出てくるようになった。

彼らが何を考えているのか･･･

アルディ家の滅亡や再興には興味がないことは承知していた。
ミシェルは「オレはオレの人生を生きる」と言って･･･突然、これまでの生き方を改めてしまった。改善されたのでない。

「趣向を変えてみようと思ってね」

彼はそう言って鼻で笑っただけだった。

･･･それから長い年月が経過する。

「自分の息子を放置しておくわりに、あの人の娘は大事に育てているようじゃない？」
ミシェルは青灰色の目を細めて笑った。

彼は応接室の椅子に深く腰掛け、シャルルは正面の椅子に座った。
髪型こそ違えども･･･まるで鏡で映したような･･･そんなもう一人の自分を睨んだ。

彼は自らの私邸で、優雅な寛いだ風情だった。
シャルルは、彼に断りなく自分のタイを緩めた。

―――彼と居ると息苦しい。

ルイと一緒の時にも感じる重苦しさだった。
青灰色の同じ瞳がこちらを見据える度に、かつての自分を思い出す。

猛禽のような。

何かを狙い澄ましているかのようであり、何もかもが怠惰であると感じ続けた自分がそのままここに居た。

幼い頃の自分を見ているかのようなルイは痛々しいと思う。

あの頃の自分がそのまま同じ日々を過ごしていれば、ミシェルのようになっていたと思う。
けれども･･･シャルルはヒカルという永遠の晄が傍らに居る。

あの人が残してくれた唯一の･･･彼の希望。

ああ、そうか。
ルイもミシェルにも希望がないのだ。
目の前の･･同じ年齢を重ねてなお、気怠げに美しく微笑む弟がはき出す紫煙の行く先は、
天ではなく、地の底なのかもしれない。

■38

彼の煙草の吸い方は実に戦闘的だ。
ミシェルはシャルルに向かって煙を吐き出した。
シャルルは無表情に彼のそんな様子を観察した。

「･･･つまらないな」
ミシェルがそう言ったので、シャルルは
「残念ながらミシェルの楽しみのために生きているわけでないのでね」
と辛辣にやり返した。

「･･･自分でそう思っているだけかも知れないと思ったことはあるか」
ミシェルはそう言って笑った。
久方ぶりに会話する。
いつもルイを通じてしか会話していない。
ルイを通じて･･･それも適切でない表現だった。
アルディ家には、当主と同じ顔をした者がいる。
彼は「フランスの華」であり、唯一絶対であると思われてきたが、彼の一族は種を色濃く残す家系であると誰もが認めざるを得ない。

双子のミシェルに･･・シャルルに生き写しのルイ。
シャルルの従妹であり、ヒカルの教育係のジルも非常に色濃く面立ちが酷似している。

･･･この一族はだんだん、血が凝り固まっている。

自分に似た親族は彼らだけではなかった。

アルディの名前を使う者は誰しも･･･シャルルに非常に良く似ていた。
それは連綿と続けられた行為の果ての結果だった。

優秀な種のみを残すために、家柄や能力や容姿を重視された者ばかりが血族に加えられた結果だった。

そんな中に、ミシェルは実らない花であった。

彼は妻を娶らない。
娶ることが出来ない。
万が一、ルイに何かあったら。
次期当主はミシェル・ドゥ･アルディだから。
だから、シャルルの直系が･･ルイが次の長候補を決めるまで、彼は死ぬことも許されないけれど、生きて子孫を残すことも許されなかった。
ルイがそろそろ婚姻相手を探し始めるのは、早婚のアルディ家ではごく普通のことであった。だからルイの婚約発表の頃合いは早過ぎもせず、遅すぎでもなかった。
しかし、それを「演出」したのは、他ならない実弟だと確信していた。

「･･･ルイの教育はおまえが望んだことだろう」
「そうだったかな･･･」
「忘れたという言葉は通用しない」
「なぜ？オレも人間だよ」
おかしそうにミシェル・ドゥ･アルディが笑った。
そしてまた煙草に唇を寄せる。

眉根を寄せて彼は美しい顔を歪ませた。
「･･･違法なものはよせ」
「忠告? 心配？随分と･･･人間的だね」
ミシェルは薄く笑った。
何を言っても、彼には届かなかった。

かつての自分のように。
そしてルイ・ドゥ・アルディのように。

「何をしても良いが。アルディの名を汚すな」
「オレの生命そのものがアルディ家を汚辱していると思うけれど」

ミシェルがふと、一瞬、青灰色の瞳を光らせた。

その瞬間は、彼は笑っていなかった。
シャルルは睨みながら、彼に回答する。
「そう思うなら勝手に死ね･･･誇りがあるなら、今すぐ死ね」
「シャルルの言う誇りの定義はオレと違うから」
彼はそう言って薄く笑った。

非常に余裕のある、挑戦した笑いだった。
彼をよく知らない者が見れば、それは妖艶な、と言って正しい表現だった。
ここに、もうひとり･･･堕ちた天使がいた。
「てんしさん」
と呼んだヒカルの声が聞こえる。

ああ。そうだった。
自分の話すべき事を優先させるべきだ。

当主として、シャルルは膝の上に肘をのせて･･･

最上級の皮のソファにもたれながら、じっと･･ミシェル・ドゥ･アルディと同じ青灰色の瞳を、もう一人の自分に向け続ける。

ミシェルは可笑しそうに、彼の視線を正面から受け止めて、同じように見つめた。
「どうして･･･オレ達は何もかもが同じなのに、何もかもが違うのだろう」
ミシェルは、微笑んだ。
それは美しすぎた。
哀しみや怒りや･･･何もかもを越えてしまった微笑みだった。

■39

「元々アルディ家は直系相続には大して執着していないけれど、ここ何代か続いたからね。
ルイの処遇については随分煮え湯を飲んでいるようだな、シャルル」
ミシェルは穏やかに言った。
余裕のある口振りであった。

確かに、ルイの養育係であるミシェルに対しては、当主の権利を行使できる範囲が限られる。

彼はそれを見越して、こうして「おまえの用件には従うつもりはない」と言い切っているのだった。

シャルルが用件を切り出す前に、ミシェルは先読みをしてそう言った。
彼らの会話というのはいつもこうだ。
相手の話のふたつ先を行く。
だから他人が聞いていると、よくわからない会話になる。
その必要最小限の言葉で相手にチェックメイトを、いかに短い手で切り込むことが出来るのかを常に考え続けることは彼らの特徴であった。
彼らに限った特徴ではない。
ルイもヒカルの養育係の従妹も皆同じように教育される。
その中で、もっとも優秀な名手だけが生き残ることが出来る。

･･･シャルルはそれだけでなく、運も、彼を取り巻く者達の助力も加わっていたが。

「オレはオレの用事を済ませる。それだけだ」
シャルルは冷たくそう言った。

実弟の青灰色の瞳がちかりと輝いた。
面白そうに、またもう一度、煙草に口を付けて大きく吸い込んだ。

「ルイとヒカルの婚約のことだ」
「良いじゃないか。若い男女が惹かれあうのであれば･･･」
「陳腐な表現はよせ」
シャルルはミシェルを睨む。
くすくすとミシェルは笑った。
その時だけは、非常に幼い顔に見える。
何かを愉しんでいるような様子だった。
シャルルの激昂を愉しんでいるのかもしれない。
「それなら」
ミシェルは緩めていた口許を引き締めた。
「シャルルは･･我が当主は、次期当主の第一候補である実子の婚姻が気にいらないのであれば理由を挙げてくれ」
「････」
ミシェルの求める理由は「親族会議にかけてもなお納得させられる理由」のことを指した。
かつて、シャルルはヒカルを引き取る際に、有無を言わさず、彼らを黙らせた。
ミシェルはその際に何も発言しなかった。

本来なら、ルイの存在は･･･ミシェルには邪魔なはずだった。
シャルルは結婚することによって当主就任の引き替えとする、というこれまでの因習を覆した。
そして、彼が当主に就任するまでの顛末は、誰もが知るとおり、「直系長子でないと当主になれない」は就任条件として絶対ではないということを、何よりシャルル自身が身をもって知っていた。

ミシェルがそれを証明した。

最終的にはシャルルが当主として就任したが、あのとき、何かが少しでも違えば。
今の立場は逆だったはずだ。
本来なら幽閉されて一生を過ごしても、当然とされたはずのミシェルが、なぜ今ここにいるのか･･･
認知を拒み、長い時間を経て、ルイをようやく引き取ることにしたシャルルは、その直後に壊れてしまった。

心神喪失による当主失権を何より反対したのは･･･

他でもないミシェルである。

これまでルイを引き取り養育していた彼は、シャルルが復調するまで引き続き養育してルイに必要以上の･･最高の教育を示した。

･･･シャルルに言わせれば、それは単なる「教習」でしかなかったが。
ミシェルは言われたことは従う。
決して一族の意向に逆らうようなことはしない。

かえって、彼が開発する通信事業は、今は、もっとも大きな事業のひとつになっていた。
いずれ･･･医療の不足しているモザンビークなどに普及すれば、医師がいなくても診断が可能なネットワークが展開されていくだろう。
ミシェルは謳うように言った。
「････ルイは適齢期だ。できれば、次世代のこどもをより多く作り、その中から最も優れた者を、早い段階で教育したいというのは、我が一族の総意だよ。
そしてヒカルはルイの幼なじみであり、ルイの父親のとも非常に懇意だ。
必要以上に、ね。」
ルイの父親とは、シャルルを指しているのに、ミシェルはそこに存在しない遠くに居る人物について話をしているような口振りだった。

■40

「おまえがあの一族の総意などと口に出すのは･･･とても安上がりな疏明にしか聞こえない」
「･･･それならシャルルは反対する理由を言え」
ミシェルは短い言葉でそう言った。
彼らの間で言葉のくり返しはあり得ない。
それなのに、ミシェルは二度目を言った。
「当主であるシャルルのお気に入りであり･･･アルディ家の教育を幼少期から長期に渡って受けた唯一の外部の者。
かつ、彼女はクロス家の孫娘だ。
そして世界各国の著名人からのバックアップもある。
社交界にデビューしても誰も彼女を蔑ろにすることが出来ないほど。
彼女の亡き両親の友人達は、今でもヒカルを何かの象徴のように崇め奉っている。」
彼はヒカルのことを面白いと言って評価した。
「クロス家は貿易商だが、元々・・医師の家系らしいね。
それで、医療関係の取引にはかなり強い。世界の新薬に関するシェアに関わる話には、必ずあの一家が出てくる。アルディ家はこのルートが欲しい。かつ、現在の大統領も大使も皆、熱心な親日家だ。
これも偶然なのか、『誰か』の差し金なのか、わからないけれどもね。
今は、ヒカルの家に追い風が吹いている。
――――――そんな奇跡の娘を、ルイが手に入れても不思議はないだろう」
シャルルは黙っていた。

じっとりと、手のひらに汗が滲むのを感じていた。

ミシェルは本気で･･ルイとヒカルを手中に収めるつもりらしい。
それを見透かしたかのように、ミシェルは続ける。

「･･･良いじゃないか。何が不満なんだ」
「ヒカルは駒じゃない」
シャルルは呻いた。

ミシェルは煙草の煙を吐き出した。

そして半分ほど吸い終わると、灰皿に押しつけて、未練なくそれを細く長い指から離した。彼には執着するものは存在しない。
「駒。人生は･･･個はみんな駒だよ。ヒカルだけが特別なのか？」

「そうだ」
シャルルは即座に返答した。
へぇとミシェルが笑った。
「あの東洋人に、それほどまで･･･入れ込んでいるアルディ家当主の方が・・・珍しいよ」
「･･･ミシェル！」

がたん、と音がして、シャルルはミシェルのガウンの裾を握った。
激昂して、彼の正面に回り込み、まだ完治していない腕でミシェルをつり上げた。

「シャルル」
ミシェルは言った。
彼と同じ瞳が、すぐ目の前にあった。
「･･･警告する。これ以上、ヒカルに肩入れするな。
彼女は･･･いずれ、おまえから離れていく」
「それは問題ではない」
シャルルはぎり、と唇を噛んだ。

そして、思い切り、掴み上げていたミシェルの衣類の裾から手を離す。
ミシェルはそれさえ計算していたかのように、優雅に元居たソファに戻った。
実弟は大げさにため息をついた。

「分が悪いよ････シャルル・ドゥ・アルディ」
「オレの言ったことは覆らない。予定は決定だ」
シャルルは言い切った。
そして、立ち上がったまま、ミシェルを見下ろした。
「･･･もう一度言う。アルディ家当主として。ミシェル。ミシェル・ドゥ･アルディ。
おまえが･･･オレの邪魔をするのであれば、オレは一族への背信と認識する。その後は･･･
わかっているな」
シャルルはそう言うと、荒げていた息を落ち着けるために、大きく一度だけ、肩で息をした。

「つまらないね」
彼はそう言った。

しかし実に愉快そうだった。

「ひとりの小さな娘のために・・・何世代も続いたフランスの一族が滅するのか？
・・・･ああ、それも面白いな。・・・人工授精してまで新しい祖を誕生させたのに、それは永ら

える手段にならない･･･面白い。実に、面白い。」

シャルルは「言うことは言った」と吐き捨て部屋を出て行った。
「つまらない」と言った実弟を残したまま。
もう、この館に用事はなかった。
「つまらない」と言ったのにミシェルは「面白い」と言った。
何か考えあってのことだった。それは確信できる。
しかし、その考えを実行させるわけにはいかない。
シャルルは車に乗り込みながら、青灰色の瞳を遠くにやる。

布石は打った。

いわゆる「捨て駒」と投げて、相手の動向を探った。
―――次の手を考えなければならない。

ルイが入り浸るこの館に長く滞在すれば、主のミシェル・ドゥ･アルディとルイの妄念に取り憑かれそうになる。

まだ、シャルルは自分を失う恐ろしさと哀しみを忘れたわけではなかった。
彼には守るべき存在が居る。

だから･･･あのときのように、自分を壊してしまうことはもう、ないだろうと思っていた。
それなら。

自分を壊して･･･あの人への愛を示すために死ぬことができないのであれば、死ぬほど･･･ヒカルに愛を注ごうと思っていた。
ルイではなく。
あの永遠の光だけに注ごうと誓った。

ルイは･･･彼には別の晄が注いでいる。
明るい未来であり、これからの将来が約束されていた。

それに･･･彼は･･･彼は････

そこまで考えて、シャルルは考えることを停止した。
彼のために思い悩んで、その結論を覆すことはないと確信していた。
いつか･･･ミシェル・ドゥ･アルディとルイとの対立が明確化する。

それは遠くない未来だ。

その対立の舞台に、ヒカルが巻き込まれてしまうであろうと、そのことさえ予測していた。
館を出るときに･･･
シャルルは、玄関先に活けられていた薔薇に目を止める。
入館したときには、注意を払っていなかった。
その薔薇は･･･
シャルルが、あの人のために開発した、薔薇だった。

どこにも流出するはずのない･･一度廃れてしまった温室の薔薇の中でも、全部親株が枯れてしまった再現していない薔薇だった。
その薔薇の名前も･ ･･「ファム・ファタル」と言った。
シャルルは、その薔薇をじっと眺めた。

愛しい･･･永遠の恋人の名前を呟いた。

でもその声はとても小さくて･･･誰の耳にも届かなかった。

■41

シャルルは車の中で考え事とも物思いともつかないような表情で空を見据えていた。
そして･･･ふと、思いついたように、車内に置かれたままになっていたシガレットケースを取り出して、慣れた手つきで煙草に火を点ける。

記憶した動作は、どれだけ間があっても忘れない。
そして、少し頭頂が揺らぐ感覚を味わい･･･気怠げに煙を吐き出した。
青灰色の瞳を閉じる。
長い睫が頬に影を落とした。
それは、先ほどのミシェルの仕草と同じだった。
今は滅多に吸わないが、かつてはミシェルを窘めることなどできないほど、自らも紫煙に逃げ込んだ。
ミシェル・ドゥ･アルディと別れた帰り道はいつもこうだった。
実弟であり、彼はシャルルに最も近い男だった。
でも、最も遠い男でもある。
ミシェルが「新しい祖」と言って材料と公言しているルイの方が、まだ一緒に暮らしているだけ、理解は出来ないが存在を認めることが出来る。

だが･･･ミシェルはだんだん･･･遠くなっていくばかりだった。

近くに在ると思ったはずだったのに。
近い場所に立ち並んだと思ったのに。
彼は、シャルルから離れて行ってしまった。
どうしてなのか、と尋ねる気はなかった。
代わりに、ルイを選んだのだと思った。

彼はルイを愛しているのではなく、単に所有しているだけなのかもしれないが。
実弟にはそれなりの執着でもってルイを支配していた。

･･･だんだん･･･ルイも人でなくなっている。

静かな微笑みで自らの感情を殺す。
その一方で、自分を滅してなお、欲しいものを必ず手に入れる。
それなのに、一番欲しいものは手に入れられていない。

教育係のミシェルの影響を強く受けており、ルイの中にはやはり、シャルルと同じ狂気が存在するのだと思わざるを得ない。
ルイは間もなく成人する。

そうなれば、ミシェルとの関係も薄まるはずだった。

ミシェルの館にあった、あの「ファム・ファタル」‥‥
遺伝子操作でルイが今一度再現させた花だった。
シャルルが想像したものよりも、色が少しだけ薄かった。

親株から培養したはずなのに、形状を同じくするあの薔薇は、オリジナルでなかった。

ルイ、おまえのやっていることは･･･同じ事なのにシャルルは眉根を寄せて、また煙草を吸った。
車内の狭い空間に、彼のため息とともに溢れ出る遣る瀬無い魂のような煙が･･
浮かんでは消えた。
シャルルはそんな彼らに背を向けて、ヒカルの元に帰る。
彼女がおかえりなさいと行ってくれるから、必ず帰る。
ヒカル‥‥
昶。
永遠の晄の子。
オレは君を目指して帰る。
だから・・・どうか輝き続けて居てくれ。
君は、初めて会ったあの時から、いつもいつも光り輝いている。
そしていつもオレを明るく照らす。オレを暖める。

若い頃。

あの人のことを考えると、いつも微笑みが漏れた。
そのときと同じ、あたたかい切ない流れがオレを駆け巡る。
ヒカルを不幸にする者は許さない。
彼女を有益かどうかでしか評価できない者には渡さない。
ヒカルはルイの再現した薔薇ではない。
あの人とよく似ているが、あの人ではない。
わかっている。

そして･･･オリジナルと比べようとすればするほど、その違いが明白になってくる。

劣っているのではない。
違うのだ。
まるっきり。
魂が。
器は同じでも、魂が違う。

ヒカルは、あの人そのものではなく‥あの人と太陽の様な彼の魂を受け継いでいる。
自分が女だったら。
彼が「もし」を考える時は決してない。
ありえないから。
それでもこのときばかりは、考えた。

あの人を彼の元に帰した時のことを思い出す時に、少しだけ想像した。
シャルルが男でなく、女だったら。

間違いなく･･･ヒカルの父を唯一永遠の人と選んでいたのかもしれない。
そしてその人が選んだヒカルの母を、同じように大切に想っていただろう。
あの二人は、ふたりでひとつだったから。
だから･･･だから、彼女を奪うことを諦めた。

彼女を愛しすぎて独り占めできなかった。
同じくらい、ヒカルの父を好きだった。
唯一の親友だ。
過去形にしない。

今でも･･･「青春の輝き」の時代を思い出す都度、彼と彼女を思い出す。
彼は懐かしい友人達の名前を久しぶりに口に出した。
いつも胸の中だけでしか語りかけていなかった。
･･･まだ、そちらには行けない。ヒカルが居るから

彼はそう呟いて、吸いかけの煙草を細く長く白い指でもみ消した。
彼は人前では呟くことはしない。
決して。
彼はシャルル・ドゥ・アルディだから。
一族の頂点に立つ者は、絶対だ。
ヒカルを護る権力は充分にある。
そして彼女が倖せになることを見届けるまで、ルイにこの場所を明け渡すつもりはなかった。

シャルルは、何手も先の手を考えた。

何度も考えた。
しかし、その先の結果は、ひとつしかなかった。

■42

「アルディ家当主の命は絶対だからね」
ルイはつまらなさそうにそう言った。

また少し、背が伸びた。
彼は傷が癒えて外出ができるようになると･･･とうとう、ミシェルの用意した別邸に移り住んでしまった。

名目上は「短期滞在」であったが、もうそこに居を構えているも同然だった。
長らく住んでいた場所であったのに、ルイ・ドゥ・アルディの荷物はほとんどなかった。
彼には持ち物や所有していたいと執着するようなものはなかった。
ただ持ち歩きに必要なラップトップと･･･小さな皮のバッグがひとつだけで、ふらりと出て行ってしまった。

旅行に行くというよりももっと軽装だった。
「ちょっとそこまで」という散歩程度の気軽さで･･･彼は出て行ってしまった。
あれだけ複雑な配線を敷いていたサーバールーム化していた部屋もいつの間にか、電源が落とされていた。
もうここには用はない、と言うかのような放置だった。
それから随分経過する。

もう季節は夏の長期休暇から晩秋になろうとしていた。
怪我の具合を尋ねるには間が開きすぎていた。

「ルイ･･･元気そうね」
迎えたヒカルは笑った。

これまでの無沙汰を嘆いたり責めたりしなかった。
彼にはそう言った社会一般の儀礼は通用しない。

「ヒカルはもっと元気そうだね」

ルイは短くそう言った。

ヒカルも少し背が伸びた。
髪も伸びていた。
前髪を降ろしているので、幼く見えるが、彼女の仕草や振る舞いは少女特有のぎこちなさが抜けていた。
ヒカルは彼の見事な金髪を眺めて笑った。

「背が伸びた」
「だからなに？」

ルイは冷たく言って、慣れた廊下を歩いた。
シャルル・ドゥ・アルディから突然呼び出された。
電話でもメールでもなく、召喚状で呼び出された。
それが届いたとき。
アルディ家の家紋の入った封緘が施されている封筒を、ルイはしばらく開封しないで面白そうに眺めていた。
これは、絶対服従しろという意味だ。
拒否は出来ない。
「退屈しなさそうだね」
ルイはそう言っただけだった。
そして、中身に指定された時間ぴったりに彼は来訪した。
やって来るなり、ルイは来客用の控え室に入った。
彼は召喚状で呼び出された客人であり、家族でないという宣言だった。
そんな彼を、ヒカルが慌てて迎えに来たのだった。
シャルルには黙ってやって来た。また、叱られてしまうだろうと覚悟していた。
あれから、ルイは何も連絡を寄越さなかった。
シャルルの傷が徐々に癒えていくにつれて、あの夏の出来事は夢か幻か、自分の白昼夢だったのではなかろうか、と思うほどに、平穏な日々が過ぎた。
ただ、ルイの居た別棟は電気が点くこともなかった。
薔薇の季節も移り変わり、暑い季節が通り過ぎて‥

今は朝晩が冷え込むので、シャルルは温室の温度管理に注意を払っている。
夏のボイラー故障が相当気に入らなかったようだった。
何度か彼に電話やメールを送ったが、なしのつぶてだった。
まったく連絡がなかった。

そして、シャルルには「話を出すな」と一度だけ、ぴしゃりと言われてしまった。
自分に一任してくれると言ったのに、彼はルイの話を一切しなくなってしまった。
どうしてなのか、まるっきり理由が思い当たらなかった。

こうして時間をおけば、ヒカルがルイに関わろうとすることを忘れてしまうと思ったのだろうか。
一見穏やかな生活を続ければ･･･それは本当になると思ったのだろうか。
シャルルは何かを考えているようだったが、ヒカルには一切話をしなかった。

それが少し･･･哀しかった。

だから、今日、突然「ルイが来るから学校を休め」と言われたときには相当驚愕した。
シャルルは学校を休めとは言わない。
彼女が日本人学校に通い、日本人の友だちと仲良くすることを奨励している。
アルディ家に居るとついフランス語で話しがちになるのだが、シャルルは決してフランス語で会話せず、ヒカルにはいつも美しい日本語で流暢に話しかけていた。
久方ぶりに会うルイなのに彼はなんだかますます遠い人になっていた。
世間のことに疎い彼女でも、ここ最近のルイの話題は耳にする。

そして箝口令を敷かれたままのヒカルとの婚約のことについては、忘れてしまったかのように、多くの社交界の花と浮き名を流している。
各地を飛び回り、精力的に学会論文や開発研究に名乗りを上げていた。

短期間で4 つもの発症元の特定できなかった患者ゼロ（最初に感染した患者。感染ルートを特定するのに重要であることが多い）を特定したし、構成要素を解明してしまった。

まるで･･まるで、今まで、ずっとそうしないで静かに様子を待っていたかのようだった。

■43

ヒカルはルイの顔を見つめた。
彼の物憂げな青灰色の瞳も、柔らかい見事な金髪も相変わらずだった。
「今日、オレはアルディ家当主に呼び出されただけだから」
彼は短くそう言った。
豪奢な客間には、香り高い薔薇が活けられていた。
先ほど、ヒカルが急いでルイのためだけに摘んできた薔薇だった。
ルイは長身によく似合う、細身のスーツを着ていた。

こうして眺めると・・彼は非常に美麗な青年であり、ヒカルが普通にパリの日本人学校に通う日本人学生であれば、とうてい会話のできる世界の人間でないことがよくわかった。
ヒカルは良い意味で善人であり一般人であった。
そしてそのようにシャルルは育てた。
細心の注意を払って。
彼は運ばれたダージリンに唇を寄せた。
ルイの薄い唇が少し濡れた。
その様は非常に妖艶で‥‥そしてどこか神憑っていた。
人でなくなっていく、と言ったシャルルの言葉を思い出す。

ルイがもっと離れていくような気がした。
「———何？」
薔薇の刺繍の入ったソファに腰掛けたルイがヒカルに目を遣る。
ヒカルは、茶色の瞳を瞬かせて「なんでもない」と首を振った。
彼の青灰色の瞳は、切れ長になり、ますます、二重の溝が深くなっていく。
金の体毛は素晴らしく輝き、髪や眉や睫がきらきらとまばゆい光を放ちながら、滑らかな頬に影を落とす様子は本当に‥‥絵画のようだった。

ケガが完治した後、リハビリのために筋力トレーニングを行ったのだろうか。
華奢な体つきに均整の取れた筋肉が、以前よりすこし付いたような様子だった。
彼はますます「完璧」になっていく。
それを目指しているかのようだ。

そんな彼に「婚約者」と指定されてしまったことが、まるで嘘のようだった。
それくらい、ルイはヒカルを徹底的に無視していた。
無視をすると決めてしまったかのように。
彼はついに彼女の存在そのものを抹消してしまったのかもしれない。
自分の存在は、彼の完璧にならない、切り捨てられるべき部分なのだと思った。
それは、ヒカルだけでなく、シャルルの存在も同じように思っているのであるなら、ルイはとても‥とてもヒカルの手の届かない、遠い違う道程を歩み始めてしまったのだと思わざるを得ない。

「‥そもそも。学生のあなたがここに居ることがわからないけれど」

ルイはヒカルを「あなた」と言った。

涙が出そうなくらい、辛い言葉の棘だった。

「今日はね、シャルルが休んで良いって」
「へぇ･･･それは･･･」
ルイはその時になって初めて、青灰色の瞳を光らせた。

興味を持ったらしいが、やがてすぐに遠くを見つめてしまった。
情報収集だけのための会話であったようだ。
会話が続かない。
前はもっと会話があった。
少なくとも2往復は会話が行き交った。
くだらないね、と言いながらも、ルイは彼の中では割合に多めの口数で回答した。
でも今は、厳しく拒絶されているのがわかる。
緊張した空気が流れて、彼に「触れるな」と無言で命令されているような気がする。

「シャルルの用事って何なのかしら」
「さぁ」
「ルイは心当たりがあるの？」
「ああ、ヒカル。少し黙っていてくれないか」
彼は彼女との会話を遮断した。

「一人で喋っているぶんには構わないから、オレに話しかけないでくれる？」
こめかみを細い指で少し抑えて、彼は考え込んでいた。
シャルルもよくする仕草だった。
こう言ったときには何を話しかけても無駄だ。
彼は･･･彼らは高速で考えを巡らせ、いくつものことを同時に考える。
その間は集中できないから、外の世界から得られるすべてのものを遮断する。
見えているようで見えないし、聞こえているようで聞こえない。
いや、見ないし、聞かないのだ。
それができる薔薇の一族は、ますます･･･人でなくなるような気がする。
でもそれを認めることは出来ない。
彼らはヒカルと同じ人間だ。
愛も哀しみも知っているはずだった。

アルディの頂点に君臨する、シャルル・ドゥ・アルディのように。
誰かを慈しみ、誰かのために泣いたり笑ったり･･そして自分が倖せになるためにはどうしたら良いのだろうと思いを巡らせるために、彼らの素晴らしい能力を生かして欲しかった。

「ルイ。今度･･･遊びに行っても良い？」
「･････」
ルイは無言だった。
瞳は遠くを見つめて、躰は微動だにしない。
浅く呼吸をしていなければ、精巧な人形と間違えるかもしれない。
ヒカルはルイのそんな様子を眺めていた。

ほんの少しの時間、会っていなかったのに、彼は面変わりしていた。
これが本当の彼なのだろうか。
ヒカルと一緒に居たときの彼はもう少しだけ･･･冷たかったけれども。
もう少しだけヒカルに向き合ってくれていた。
ルイが浮き名を流しているのも知っていた。
本当に好きな人ができれば、自然と婚約解消を言い出すだろうと思ったので、ヒカルは誰か特定の人がルイと共に居てくれることを喜んだ。
だが彼はいつも短い逢瀬を愉しむと、次の花に渡り歩いた。
愉しんでいるのかどうかもわからない。

当主の若い頃に生き写しであり、頻繁にメディアに顔を出す、星辰の子と呼ばれた貴公子が誰に微笑むのか、誰もが興味を持って息を詰めて成り行きを見守っていた。
ヒカルの存在は忘れられたわけではないが、親同士の決めたことだからとルイがどこかで発言をしたらしい。

我こそは、と名乗りを上げるルイの恋人候補たちによって、ヒカルとの婚約騒動は「数ある浮き名の一つ」になっていった。

「･･･ヒカル」
どれくらい時間が経過しただろうか。
ヒカルの飲みかけのダージリンがすっかり冷めてしまっていた。

茶色の癖の強い髪を、彼女は揺らした。
少し伸びた髪が、肩胛骨の下で波打った。
「婚約のことだけれど」
ルイはそう言って、正面のヒカルを見た。
「なに？」
平静を装うだけで精一杯だった。
ルイの静かな声が、ヒカルを落ち着かなくさせる。

「オレは解消するつもりはないから」
そう言った。
「ルイ。・・・ルイには恋人が居るでしょう」
「いないよ」
「でも、話には良く聞くわ」
「あなたに関係がない。少なくとも、あれは営業活動と政治活動」
そう言われて、ヒカルは言葉を失った。
恋愛を活動と言い切る彼の真意がわからない。
ヒカルは首を振った。

「ルイ。婚約は本当に好きな人として」
「・・・・ヒカル」

そこでルイは低く言った。
ヒカルがルイの顔を見た。
ルイ・ドゥ・アルディは、無表情であったけれど、どこか静かであったけれど・・・じっと彼女を見つめた。
狙いを定めた獣の瞳だった。
瞬きしているのに、していないような彼の瞳はとても冷たかった。
蔑視とはこういう視線を言うのか、とヒカルは思った。

「オレの予定は決定だ。覆らない」
「でも・・・」
「・・・愛してなくても結婚できるんだよ、ヒカル。シャルルのように・・・ね」
彼はそう言って薄い唇を歪めた。
シャルルに切られた唇の端は完治していた。
ヒカルが口を開きかけたところで、扉がノックされた。
係の者がルイを当主の元に案内する旨を伝えに来た。
館の主の実子であり、つい最近まで来賓用の客間に足を運ぶことなどなかったルイに、どうやって声をかけたら良いのか判断が付かず、困惑した声音だった。
彼はそんなまわりの困惑を気にせずに、わかった、と言って立ち上がった。

「ヒカル。遊びに来るのではなく・・・婚約者と同衾するためにオレの元に来るのであれば、いつでも歓迎しよう。でも一歩・・・館に足を踏み入れたら、オレはその先を保証しない」
短くそう言うと彼はもう、次の瞬間にはヒカルを見ていなかった。
立ち上がり、足早に案内の者とともに足早に部屋を出て行った。
ルイは唇を歪めて笑った。

これからシャルルとの闘いに胸が弾んだ。
生きているという感触をその瞬間だけ味わえる。

恋を演じてみても駄目だった。
何かを開発しても駄目だった。

所詮、自分は･･･奪うことでしか生きていることを味わえない。
何かを生み出すことは出来ない。

だから･･･こんな小さな興奮ではなく、もっともっと自分が生きていると感じたかった。
それは、シャルルとヒカルの涙と苦悶と命の上を踏み荒らして歩く荊の路で、自らも血を流すとわかっていても・・・･彼はその道を進むことしかできなかった。
道を選ぶこともできなかった。
今回、シャルル・ドゥ・アルディが召喚状という絶対権限を行使してルイを呼び出したことにルイは喜んだ。
長かった。
でもまだ始まりだ。
これから･･･ようやく、オレは････

そう思いながら長い廊下を進み、何重ものセキュリティを通過して、ルイはようやく、よく知る見知った内館までたどり着く。

通常は客間で話を進めるのに、当主の部屋深くまで通されるというのも、興味深い話だった。

ルイは･･･
美しく微笑んだ。
青灰色の瞳を細めて、金の髪をかき上げた。
彼の髪は揺れて、眩しく光り輝いた。

白い頬が少しだけ紅潮する。演技でない、本物の躍動を自らの中に感じる。
ルイの白く長い指が伸びて･･･重厚な扉を叩いた。

「･･･ルイです。お父さん･･･」
彼はそう言って、扉の中に入った。

■44

ヒカルはひとり、客間で冷たくなってしまったダージリンの入ったティーカップを弄んでいた。
シャルルが今日は家に居なさい、と言ったことには意味があると思う。
けれどもルイにはこうして‥逢えても逢えたような気のしない会話しかすることができない。そして彼は今も、とても倖せとは言えないような顔をしている。

この屋敷を出て行くことが、ルイにとって気分転換になり、あらためてシャルル・ドゥ・アルディの住まう屋敷に住むことが良いと言う判断をするのだろうと思っていた。

‥‥ヒカルは、まだ、あの絵をシャルルに見せることが出来ていない。

忘れてはいない。
時々クローゼットから取り出して、開こうと思うが、いつも、丸められた紙を眺めるだけで終わってしまう。
本当は紙が傷むから広げて、良い保存状態できちんと保管しなければならないのに。
心惹かれるのにどうあっても‥‥一人で見る勇気が出なかった。
それをシャルルに見せる勇気はもっと出なかった。

何をどう解決したら、あの絵を‥‥微笑みながら眺めるシャルルを想像しながら手渡すことが出来るのか。
ヒカルは「まだその時」でないと感じていた。
ここに居ても、ルイは戻ってこない。
私邸に戻るか、どこかで待ち伏せをしないと彼は捕まりそうもなかった。
まだ話は途中だった。
ヒカルは移動することにした。
カップを置き、勢いよく立ち上がる。
最近また背が伸びたので、膝が少し痛んだ。

でも、もう、間もなくこの成長も止まるだろう。

そう感じていた。
そして自分は‥‥大人になる。
母親とシャルルが出会った頃の年齢に到達する。

まだ少女と少年だった彼らの年齢になった時に、ヒカルはもうその時は少女でないような予感めいたものを感じている。
昔はとても大人に感じた。

早く、父と母が恋に堕ちた年齢になってみたいと思っていた。

そうすれば自分の人生も決めることが出来るようになるかもしれない、シャルルの庇護から離れて･･･護ってもらう立場から卒業して、彼を惑わしたり苦しめたりするようなことから護ってあげられるほどの強い精神力を身につけられるかもしれないと夢想した。

でも、きっと、その時になっても今とあまり変わらないのかもしれない、と最近はそう思うようになった。

年齢や時間ではないのだ。

母をこよなく愛したシャルルは･･･出会った少年の時にはすでに大人達の間で生きていた。
今のルイも同じだ。
そしてルイの方が生き急いでいる。
自分はあまりにも護られることに慣れすぎてしまった。
だから、こんなにも鈍感なのだと思う。
シャルルの苦しみやルイの渇望を癒してやることができない。

「････物思いに耽る美少女は絵になるが、立ちっぱなしで考え事はレディにあるまじき行為だね」
突然低いバリトンが響いた。

「･･･ミシェル叔父様」
「ミシェルと呼ぶように。私はあなたの叔父でないからね」
シャルルと同じ顔をした人物は･･･

ルイが出て行った扉にもたれて、彼女をじっと観察していた。
観察。
その言葉は正しい。
ミシェル・ドゥ･アルディは青灰色の瞳をじっとこちらに向けていた。
ヒカルは彼の視線が怖い。

いつも恐ろしいと思う。

シャルルやルイと同じ色の瞳なのに、彼の瞳の奥は底がなかった。
何も感情を感じない。それなのに、彼はいつも微笑んでいた。

「‥ミシェル･･･ようこそ･･･アルディ邸へ‥」
彼女は膝を曲げて、レディの礼をした。

ミシェル・ドゥ･アルディは満足そうに少しだけ頷いた。
当主の実弟であり、ルイの教育係であり、今はこの一族に強い発言権を持つこの人には、いつも近づくことが出来なかった。

幼いながらにも、シャルルとまるっきり違うのだと本能で解っていた。

彼は、ルイに感じた「拒否」を全身から発している。
拒絶の気を微弱だけれども常に出し続けている。

親しくない者はわからないだろう。

先ほどのルイのようなあからさまな拒絶ではない。
感受性の豊かな者でさえ、その正体が何かはっきり口に出すことが出来ない。

「何となく怖い」のだ。
ヒカルは長じてからも‥それを感じ続けた。

だからごく希に顔を合わせることがあっても、いつも最も遠い場所にいた。
シャルルの傍に居るということは、ミシェルから一番遠い距離に居るということだっし、当主は決してミシェルとヒカルを近づけるようなことはしなかった。

彼に見つめられると、緊張して言葉が上手く出ない。
ミシェルはまたひとつ微笑みを落とした。
花のような美しい微笑みだった。

「ミシェ‥ルは、どうしてここに？」
「ルイの付き添い」

まだ完治してないから

彼はそう言った。

「肋骨は厄介でね。きちんと治さないと平衡感覚を失う。
･･･ルイはあれでも乗馬とフェンシングの名手だからね。

こんなことで選手生命を絶たれるのは惜しい」

彼の言っている「こんなこと」というのは、あの、シャルルがルイを殴打したことを指していた。
彼はどこまで知っているのだろう。
相手の出方を待て、と言うのはシャルルの教えたことだった。
ヒカルは黙って相手の言葉を待った。

「良い選択だよ」

見透かしたようにミシェルが言った。
白金の髪をかき上げる。
その仕草はルイに良く似ていたが、シャルルそのものと言ってもおかしくないほど、角度や指の開き具合まで良く似ていた。

「･･･我が一族の当主が実子に召喚状を叩きつけたというのは外聞が悪いのでね。今日は表敬訪問さ」
「････」
彼は煙草を取りだした。胸ポケットからあわせて銀のライターを取り出し、かちりと音を鳴らして火を点けた。

「ミシェル。ここは禁煙よ」
「ああ、そうだったの？」
彼は悪びれる風もなく、煙草を吸って、紫煙を吐きだした。
「灰皿がないでしょう」
「･ ･･当主はどうやら禁煙するという趣味を持ったらしい」
ミシェルは可笑しそうに言った。

「灰皿がないのであれば、外に行こうか。ヒカル、案内してくれるかな」
･･･しまった、と思った。
ミシェルはヒカルを連れ出すつもりで、煙草を吸ったのだとその時になってわかった。
彼の白金の髪も、青灰色の瞳も、整った顔立ちも何もかもがシャルルそのものだったのに、
ヒカルはミシェルのことを空恐ろしく感じた。

人を動かす。
彼は頭脳と言葉だけで。
自分の思い通りに進めていく。

「ヒカル。早くしないと灰がこぼれ落ちそうだ」
彼はまた煙草に唇を寄せた。

彼女はぐっと拳を握った。

シャルルにはヒカルが客間に来ていることを知らせていない。
知られたら叱責されるであろうと覚悟して無断で来た。
そして、今、シャルルはルイと接見中だ。

･･･この状況で、シャルルを呼びに行くことは出来なかった。

理由がない。

「わかりました。内園のポーチなら、喫煙可能だわ。･･･案内します」
ヒカルはゆっくりと茶色の瞳を瞬かせた。
「よくできました」
ミシェルは艶やかな微笑みで艶やかな声をヒカルに投げかけた。
でも、瞳は笑っていなかった。

■45

ミシェル・ドゥ･アルディは、ヒカルの斜め後ろを歩いた。
この館のことはルイよりずっと前からずっとよく知っているはずであったのに、彼は他の来客と同じように、まるで慣れていない間取りを歩くかのように、ヒカルに導かれるままだった。
彼女の歩幅に合わせてゆっくり歩くが、長身のヒカルよりずっと背の高い彼は足音を感じさせない。

獣の足取りを思わせる。
猛禽や豺狼の如く気配を消しながらも殺気だけを残す。
彼は音もなく歩くが、視線をヒカルから反らすことは決してしない。
そして背後から音も立てず、視線だけで彼女のすべてを見定めようとする。
ヒカルは跼蹐天地（身の置き場のない思いをすること）とはこのことだと感じる。
強烈に。
―――何も後ろめたいことはないのに。

「やましいことがあるからじゃないの」

ヒカルの心の声を聞いたかのように、ミシェルが後ろから声を
かけたので、ぎくりとして後ろを振り返った。
ミシェルは彼女のそんな顔を見て、少しだけ目を細めた。

「ヒカルは素直だね。･･･稜々としたルイと正反対だ」

ヒカルは曖昧に首を傾げるだけだった。
日本人らしい反応だとミシェルがくすくす笑う。
このいたたまれない時間をやり過ごすために、ヒカルは少し歩調を変えて足早に長い廊下を渡っていく。
直接ミシェルと二人で話をすることは滅多にない。
いや、ほとんど･･･数えるほどしかない。
その都度、シャルルがさり気ない仕草で彼女を遠ざけた。
シャルルと同じ顔のルイの教育係である彼は、シャルルの決定には抗わない。
そして、シャルルが壊れてしまっていた2 年近くもの間、当主代行として決して自分を主張しないで黙々と･･･シャルルが行えないことを行ってきた。
そのうえ、ルイを引き取り教育するという役も申し出た。

それなのに、彼は･･･シャルルと懇意にしている状態とは言い難かった。
ヒカルはルイよりもシャルルの弟のミシェルの方が何を考えているのかまったくわからなかった。

かつて、二人は家督を巡って争ったと聞いている。
非常に熾烈な競争だったとも。

そして最後に登りつめたのはシャルルだった。
その時もたいそう満身創痍であったと聞く。

そして･･･彼はその時のことを「青春の輝きの最後の煌めき」と言い切った。
シャルルの中でその瞬間に、すべてが始まり、すべてが終わったということだった。
その一方で･･･ミシェル・ドゥ･アルディは何年か活動履歴がない。

一説にはルイの出生により、継承権を放棄させられてキューバに身を潜めていたとか、パリのどこかで研究に没頭していたとか噂はいろいろだった。
親族のごく限られた者しか知らない。

ヒカルはアルディの一族の詳細情報に関わってはいけないと、シャルルにきつく注意されていた。
謎がたくさんある、シャルルと同じ顔の人が今、ここにいる。
しばし背後に緊張感を感じながら、ミシェルを内園のポーチに案内する。
そこは風通しが良く、本邸と別邸と彼らが今やってきた来客用の棟の中間に位置していた。
足がぎくしゃくして、自分が非常に緊張しているのだと感じた。

「・・・・成長痛だからそのうちにおさまる」

彼が外に出た瞬間、発した言葉だった。
「あなたも・・・もうすぐ成長が止まり大人になるということだ」

青灰色の瞳は色素が薄くて、外に出たときに少し眩しかったらしい。
彼は上を向いて・・・そして吸いかけの煙草を深く吸った。

ヒカルはまた、答えに窮してしまった。
気付かれないように歩いたのに、彼は微妙な歩幅で、彼女を測定してしまった。
シャルルであれば「膝が痛むのか」と聞くだろう。

ルイなら「反対側のかばった膝はあと2日後に痛むだろう」と忠告するだろう。
でも、ミシェル・ドゥ・アルディは違った。

ヒカルがやがて大人になり、そして・・・その先はないから、身の振り方を考えろと遠回しに言ったのだと思った。

「成長が止まり大人になる」
それはミシェルからの預託だった。

先行してルイが大人になる。
そしてヒカルも大人になる。

そうなれば、今のままで居られない。

こどものままでいられない。
それがわからない者は去れ。
そう言われているような気がした。

■46

ヒカルが案内した内園は、薔薇園の近くだった。
温室の近くだった。
細い路で少し傾斜がある。
彼は慣れた足取りでその路を歩いた。
その道をよく知っているようだった。
実際に･･･彼はここに住んでいた時期もあったのだから、よく知っているはずだった。
それなのに･･･彼はヒカルの前では、初めて訪れる来訪者のような振る舞いをする。
知っている場所を知らないふりをして歩くのは、どれだけ切ないことなのだろう。
ヒカルはそう思った。
特にここは彼ら･･シャルルとミシェルの生家であるはずなのだ。
彼の半身と彼の親と時間を共有した場所を･･･ミシェルは平然と歩く。
彼は、明らかに自分の感情を殺してしまっている。
「こっちに座ったら？」
ミシェルはポーチにたどり着くと、そう言った。
ヒカルは彼を案内した後、どう行動しようか迷っていた。
ここはアルディ邸の深部だ。
シャルルが許可しない者や、来訪を知り得ない者はたとえどんなに親しい者でも入り込むことが出来ない場所だった。

それがシャルルの実弟であったとしても例外ではない。
そこには、あの温室と同じ形状のベンチが据え置かれていた。
この屋敷の庭園には、同じ時期に設置された薔薇のベンチがある。
ここもその一つだった。
彼はそれを知っているようだった。
何処に何が置かれているのかも･･･居ないのにミシェルは全部知っているよ、というような余裕のある顔でベンチに座った。
同じように･･･温室のベンチにルイが座って、影を見つめながら何かを考えている様子をミシェルは知っているのだろうか。
彼女の側頭部が少し傷んだ。
激しく打ち付けられたときのことを思い出していた。
傷が疼く。
大したことはなかったのだが、あのときの･･･シャルルとルイの飛び散った血飛沫や、シャルルを抱き留めたときに激しく拒絶された力や･･･ルイの怖いほど強い力で抱き寄せられて心の
ない接吻を浴びせられたことを思い出す。
ヒカルは薄い茶色の瞳を一度閉じた。

こういう状況の時に、シャルルであればどうするか考えた。
きっと･･･何気なくやり過ごすのであろう。
ごく自然だと言うように。
でもそれでも、招いていない来訪者には手厳しくやり込めるはずだった。
彼と同じ事をするつもりはない。
ミシェルを冷遇することはできない。

彼はルイの教育係であり、シャルルの双子の弟であり･･･当主が壊れていた時期に彼を支えたかけがえのない人物なのだ。
シャルルと同じ面立ちであることを利点として、彼はシャルルが表に出られない間、シャルル・ドゥ・アルディとして何回か表舞台に出ていた。
それが嫌で昔、本当に若いころ、彼とシャルルは死闘を繰り返して当主の座を争ったと言われている。
情報に疎いヒカルでも聞き及んだ伝説だ。
アルディ邸の内部は静かだった。
秋の風がそよいでいる。

「もっと･･秋を感じる風がある」
シャルルはよくそう言っていた。

一度は日本の紅葉の素晴らしさを観に行ったことがあった。
彼はヒカルが日本の四季を感じるために必要なすべてを与えてくれた。
葉が色づき実りそして長い冬に備えて様々な命が次への準備をする季節を、シャルルはヒカルに教え続けた。
命は続く、と彼は言った。
彼は仕事を中断しても、彼女の情操教育にすべてを注ぎ込んでくれた。
大きくなった今になってそう思う。
本当にそう思う。
だから早く両親の傍に行きたいと思ったり言ったりすることは、シャルルを悲しませることであり、本当はシャルルも同じ事を考えているのにヒカルがいるからそれを考えることをやめてしまっていると悟ったとき。

その時初めてヒカルは、季節の移り変わりや時の流れを受け止めることが出来たのだと思う。
そしてその一方で、人を大切にする気持ちをシャルルから教わった。
だから、同じようにミシェルにも倖せになって欲しいと思う。

心の底から。

それなのに、ミシェルを目の前にすると、ヒカルはやりきれなくなる。

同時に怖いと感じる。

シャルルやルイには感じなかった。
どんなにルイに冷たくあしらわれても、彼女はルイを怖いとは思わなかった。

‥でもミシェル・ドゥ･アルディは違う。

■47

「ああ　暗い客間より広い空の下の方が良いね」
ミシェルは今まで吸っていた煙草を途中で放棄して、設置された灰皿に押しつけた。
そして大きく息を吸って空を見上げた。その場所をよく知っていたようだった。
ミシェルはベンチに腰掛けると、空を見上げて、そして息を吐いた。
その瞬間だけは、彼は本当の彼のように見えた。
「･･･小さいときに、ここで、こっそり煙草を吸ったことがあるんだ。･･･今のヒカルより･･･もっともっと小さいときだよ･･･」
彼はそう言って空を見上げたまま言った。

長い脚を組んで、腹の上で両の指を交差した。
「母が･･･母が壊れてしまって、オレはオレであることを拒否されていたから･･･
たまにこっそり歩くこの庭園のこの場所が好きだった。
‥当主である父の部屋も、その他のたくさんの者が通り過ぎる渡り廊
下も、いろいろ見えたから。こちらの様子は死角で見えないから、オレは上から見下ろす見えない真昼の月のような気持ちになっていた。
・・・・だからここを真昼の月の庭と呼んで・・・・誰もいないことを確かめて、何度も通ったものさ。通った･･･正確には隠れて皆の様子を伺っただけだけれど」
彼は目を瞑っていた。
独り言のようだった。

でもはっきりとヒカルに話しかけていた。
ヒカルはどう答えて良いか解らなかった。
彼女の回答は求めていないと思った。
ミシェルは･･･ルイが薔薇園で俯いて影に語りかけるように、同じ形のベンチに腰掛けて、彼の記憶を再現していただけだった。

それは彼の感想や今の気持ちではなく、単なる記憶の吐露でしかなかった。
その証拠に、ミシェルはすぐさま青灰色の瞳を持ち上げて、彼女を先ほどと同じ冷たい瞳で見つめていった。

「ヒカル･･･君は、あの人にそっくりだ。」
「あの人････」
「あなたの母親」
「････ミシェルも母を知っているのね」
「もちろん」
彼は微笑んだ。
心なしか、先ほどの微笑みと違っているようだった。

「聞きたい？」
「････」
ミシェルは薄く笑った。
そしてまた、煙草を取り出した。
「それなら、言わない」
ヒカルは唖然とした。

こんな子供のような回答をミシェルがするとは思わなかったから。
「ヒカル、真実というものは客観的であるかのようで実は非常に主観的だ。
･･･誰にとっての真実なのかでその答えは違ってくる」
ミシェルが低い良く通る声で言った。

声を漏らして笑っていた。
「マリナ・クロスがどういう人だったかを人伝えに聞いても、それは本当の彼女じゃないってこと」
彼はちらりと横目でヒカルを見た。

そして彼は天を仰いだまま、また、煙草を1 本取り出して火を点けた。

風が吹いていて、彼は煙草の火を点けるのに少しだけ時間をかけた。
次に･･･今度は先ほどより･･･長く長く息を吸った。
先ほどの煙草はポーズだったんだよ、と言いたげだった。
眉根を寄せて、その瞬間だけ彼は自分を解放している。
そんな気がした。

今の様子が、本当のミシェルの姿の一部なのだとわかった。
彼は真実を告げるときに煙草を吸う。
そしえ誰かと目を合わせたくないとき煙草を吸う。

彼は煙草を吸うときはいつも誰かから視線を反らせたい時なのだと思った。

「･･･隣に座っても良い？」
ヒカルはそう言った。
ミシェルは「どうぞ」と言う代わりに肩をすくめて、煙草の先
端で彼の空いている隣を指し示した。
彼女は失礼します、と小さい声で言ってベンチの隣に座った。
かなり距離をあけて、端に腰掛けた。ミシェルの対岸にいるのに、彼の殺気というか拒絶された空気がヒカルに流れ込んできて、彼女は落ち着かない気持ちになった。
ぎゅっと膝の上で手を握った。

「―――今度はオレがシャルルに殴られるのかな」
「それはないでしょう」
「･･･そういう根拠のない発言は認めないよ」
彼はぴしゃりとそう言った。
「推測や憶測を連想させる発言はするな。･･･君もアルディ家に住まう者ならそれくらいはわきまえろ」
ミシェルの厳しい声が返ってきたのでヒカルは顔をあげた。
隣に座るミシェルを見た時には彼はもう、緩く微笑みながら煙草を味わっていた。
そして今の厳しい口調とはまるっきり違う、静かだけれどもどこか面白そうにヒカルをからかうような声音でヒカルに笑いかけた。

しかしその青灰色の瞳は相変わらず冷たくて、やはり彼はヒカルの答えを測るために言葉を用意したのだろうと思った。
「現にルイは君を傷つけたといって、彼に酷く殴打された。
そしてシャルルもしばらく公務に出られないくらいのケガをした。
･･･ヒカルが迂闊でなければ、そうはならなかったと思わない？」
「そんな・・・」
ミシェルはすっかり高くなってしまった空を見上げながら、煙草の煙を吐き上げた。
空に雲が帰って行くかのようだった。

「あなたはわかっているのだろう」
ミシェルは言った。

ヒカルはぐっと唇を噛んだ。
「あなたがここに滞在し続ければ、いつかはこうなることを。
仲立ちするどころか、彼らの関係はますます酷くなる。
‥‥あなたに縋ろうとする惨めな彼らを見て、それが楽しいというのであれば、話は違うけれどもね」
「それはない」
ヒカルは否定した。
「私は何もできない。ただ在るだけ。彼らは縋ってこないし‥‥
誰の助けを求めても居ない。
でも酷く孤独だわ」

「孤独を癒してあげるって？傲慢だな。
彼らの孤独も狂気も自らでないと癒せない」
ミシェルは厳しく否定した。

ヒカルは言葉に詰まった。彼の言っていることは正解で正論だからだ。
自分がアルディ家に滞在することで、かえって彼らはますますばらばらになってしまう。
「それに‥‥今日のシャルルのルイへの用事も、あなたに関係することだと思わないの？」
ミシェルは薄く笑った。
自分よりずっと年下の少女に向かって、「あなた」と呼ぶ口調はルイと似ていた。
「私に関係することならシャルルは私に黙っていない。‥‥それに内密に話を運ぶなら、彼なら私の知らない場所で知らないうちに話を進めるはずでしょう」
「頭の回転は悪くないらしいね」
ミシェルは面白そうに言った。
新しいおもちゃを発見したときのように目を開いた。
青灰色の薄い瞳が見開いてヒカルを凝視する。

「でも遺伝子は恐ろしいね。気質も受け継ぐ。
あなたの両親のように‥‥ヒカル‥君は偽善者で傲慢でそしてどこまでも無邪気だ。
そうやって‥‥無邪気は罪がないと主張するのだね。そして彼らを苦しめる」
ミシェルは煙草を半ばまで吸うともみ消した。

■48

「若い人は良いね、選択肢がたくさんある」
そう言って、彼は立ち上がった。
そろそろルイが戻ると言った。

ヒカルも立ち上がる。彼を邸内でひとり歩かせるわけにはいかない。
「‥‥ヒカル」
深い低い声で、ミシェルがヒカルの名前を呼んだ。

ヒカルは、彼の白金の髪に目を細めた。
眩しい。
黙って立っていれば、シャルルと間違えそうだ。
でも、彼からは煙草の香りがする。

‥‥自らを閉じ込めてしまった、仄暗い焔を持つ瞳を持つミシェルは、シャルルの深い哀しそうだけれど静かな瞳と違っていた。
「ミシェル？」
その瞬間だった。
ヒカルは肩を掴まれて小さく悲鳴をあげた。

彼は大きな手のひらを彼女に伸ばすと、ヒカルの華奢な肩を片手で掴みそして、もう片方の手で彼女の顎をつかんだ。

すぐ近くに、ミシェルの恐ろしいと思わざるを得ないような瞳があって、ヒカルは本能で目を閉じてしまう。
「ヒカル。見ろ」
彼は顎をさらに上に持ち上げた。
ヒカルは命じられるままに、薄く目を開く。
「よく見ろ」彼は命じた。
「‥‥選択肢は３つ。
ひとつは、このまま日本に帰ること。
ひとつは、ルイを受け入れてシャルルの絶望の業火に自らも灼かれること。
ひとつは、シャルルを選んでルイを果てのない戻れない狂気に誘うこと。
どれが良い？ルイと違ってたくさん選択肢がある。‥‥選べ」

「ミシェル！何を言っているの・・・！」
どれも選べるわけないでしょう、とヒカルが目を見開いた。
ミシェルの青灰色の瞳が恐ろしいと感じたが、それより何より彼が何を言い出しているのかまったく理解できなかった。
「ミシェルの選択肢はどれも選べない」
「ああ、それならもうひとつ」
ミシェルは薄く笑った。

獲物を狙う眼だった。

あまり恐怖というものを経験したことがないヒカルは、この時初めて、底知れない恐怖というものがあるのだということを知った。

———理解できないものには恐怖を感じるのだ、と思った。
彼は言葉を句切った。

そしてぐっと彼女を捕らえていた肩の上の手の平に力を入れる。
痛い、と叫んだり感じたりする余裕はなかった。
瞳を反らすことが出来ない。
ミシェルに曝かれる
そう直感的に思った。
隠すものがないのにどういう訳か彼女は、彼の眼の晄に自分が照らし出されて･･･
何もかもを見られてしまうという恐怖を感じた。
彼に隠す事なんてできないのだ。
彼はじっとヒカルを観察しているのだから。

薄い色の瞳が、ヒカルをのぞき込んで、無理矢理にのぞき込もうとする。
「･･･いや･･･」
ミシェルはヒカルの呻きを無視した。
顔を近づけて、彼はヒカルに囁いた。
シャルルと良く似た、端正な顔が今は恐ろしい。

「もうひとつの選択肢だ」
「･････」
彼はくすくす笑った。

とても面白いことを思いついた、と言いたげだった。

「･･･シャルルとルイをふたりとも業念で狂わせて滅ぼすために･･･オレの子を産め」
ヒカルは大きく眼を見開いた。
何を言われているのかわからなかった。

「彼らが苦しむのならあなたを喜んで抱くよ。
娘のような年のあなたを抱いてもちっとも面白くないだろうがね。

‥‥子を孕むまで何度も何度も苦しめてあげよう。」
そう言うと、彼は、その顔はあの人に似ているよ、と言った。

ヒカルは眩暈がした。

この人は‥‥狂っている。
ルイの狂気どころではない。
「ああ、ルイを選択するのであれば、オレのベッドにおいで。
ルイの教育係として、彼を喜ばせるための術を教えてあげよう」
彼はそう言うと、声を漏らして笑った。
顔を横に向けて、笑いを堪えている。
肩が大きく揺れていた。
かつてあなたの母上にも迫ったけど断られてしまったからね、と冗談めかして言った。

「ミシェル‥‥」
「また会うことになる」
ミシェルはそう言って彼女に背中を向けた。
もう、彼を送っていくために一緒に並んでついて歩くことは出来なかった。
「オレは戻る。ああ、場所はわかっているから気にするな」

久々の散歩とお喋りで楽しかったよ、と彼はヒカルに優しく声をかけた。
だが、数歩歩いたところで、彼は立ち止まった。
彼は、そうだ思いついたと言って、彼女を振り返った。
ミシェル・ドゥ・アルディが突然閃くことはない。
あらかじめ用意した言葉を用意した順番で発する。
彼女に効果的に伝えるための演技であり、それを彼女に知らしめるためにこんな仕打ちをするのだということは明らかだった。
立ちすくんだままの彼女に微笑んだ。
美しい微笑みで、それでも瞳はじっと‥‥彼女の様子を検察していた。

「ああ、ごめんよ。
もうひとつ選択肢があった。
オレも年を取ったのかな。
———どうも考えがまとまらない」
手の甲をあてて口を押さえて、笑いを堪える。

笑いが止まらないとおかしそうに言ってから、斜めに彼女を見つめた。

どれを選んで良いのか、悩んでしまうね、とヒカルに声をかけた。
そして今日の空は奇麗だね、と言うかのようにさらりと言った。

「‥‥最後のひとつは。
ヒカル、おまえが命を絶って‥‥この因業の鎖を断ち切ることだ。
両親にも会えるだろう」

そして彼はそのままヒカルに背を向けると、今来た道を戻って行った。
また、煙草に火を点けていた。
後ろを向いたまま、ミシェル・ドゥ･アルディは煙草を持った方の手で、軽く手を挙げてヒカルに挨拶をした。

彼は最後に「あなた」ではなく「おまえ」と言った。

激昂したルイが彼女に浴びせる侮蔑の言葉と同じだった。

■49

秋の風がヒカルの躰を冷やした。
彼女はぶるっとひとつ身震いして、両手で自分を抱きしめた。

今頃になって、ミシェル・ドゥ･アルディに掴まれた肩が少し痛んできた。
ヒカルはようやく大きく息を吸った。
今まで緊張して浅く呼吸をしていたことに気がつく。
‥‥今のは一体、何・‥‥

最後に、むき出しの悪意を見せて、ミシェルが帰って行った。
彼はルイも苦しむと良いと言った。
彼が長らく無言で支えていたシャルルの事さえも苦しめと言った。
それでも彼が言ったことは、ヒカルの選択することの出来るすべてだった。

日本に帰る。

ルイと結婚する。シャルルとは二度と会えないだろう。
ルイとの絶縁を承知でシャルルの傍に居続ける。
そして‥‥自ら存在を消す。

ミシェルが自分の子を産めと言ったのは、明らかにヒカルの迷いを思い切らせるための発言だったと思うことにした。
しかしそれも選択肢だった。
･･･彼の庇護下に入る。これも考えられる路だ。

ルイとシャルルの関係を修復するには、ミシェルの協力が不可欠だ。
ヒカルは本当はわかっていたのに、彼の狂気に怯えてしまい、その選択を考えないようにしていただけだったと、ミシェルに指摘されたのだ。
まだ彼の瞳を間近で見た衝撃が続き、軽い眩暈を感じる。

どうにもならないほど拗れてしまった薔薇の蔓が･･･ヒカルには痛かった。
シャルルの微笑みが恋しかった。

部屋に戻ろう。

黙って出てきてしまった。
シャルルが、今日は館に居ろと言った理由もまだ聞いていない。
その時。
ルイが渡り廊下を向こう側から歩いてきた。

･･･シャルルとの話が終わったらしい。
彼は少し青白い顔をしていた。

「ルイ！」

ヒカルの姿を見ると、ルイは少し怒ったように彼女を睨み付けた。
見事な金髪をかき上げて、彼は近くに寄ったヒカルを見下ろした。

「何か用？」
「シャルルとの話は終わったの？」
「終わったからここを歩いている」
ルイは彼女の脇をすり抜けて、歩き始めてしまう。
ここにはもう用はないと呟いていた。
「････ルイ」
彼女はルイの腕を掴んだ。
「離せ」

ルイは彼女の腕を振り払う。
思いもかけない強い力だった。
「ね、ルイ。お願い」
ヒカルは懇願した。

彼はこれからミシェルと落ち合って、彼らの場所に帰っていく。
それはいけない、とヒカルは咄嗟にルイを引き留めた。

「お願いだから、私の言葉を聞いて。‥‥帰らないで。
あそこはルイの帰る処じゃない」
「ヒカルに何が解る？」
ルイは彼女を睨み付けながら低い声で唸った。
先ほどまでの青白い顔が紅潮し始めた。
ヒカルは彼の顔を見つめた。

「解らない。何にも解ってないことは解っている。
でも、あそこには行かないで。ミシェルの処に行かないで」
行けば、強力な磁力でもって彼らは引きあってしまう。

互いが互いを求めているのではなく、狂気という作用でもって強烈に引き合っているのだ。
ルイがミシェルに「実験材料」と言われてなお、彼から離れない理由がルイにはある。

「ヒカルが願い事なんて珍しいな」
ルイは嘲笑した。
「お願い。シャルルと‥‥私のいるここに戻って来て」
「良いよ」
彼があっさり言ったので、ヒカルは勢いよく言った言葉を詰まらせた。
息を止めて彼を見上げた。
アルディ家の若き薔薇を見た。
彼は微笑み、そして青灰色の瞳をヒカルに向けていた。

その瞳は‥‥ミシェルと同じだった。
彼女は、絡め取られてしまったと感じる。
ルイという美しい獣に、追い詰められてしまったと感じた。

ミシェルは彼女を逃げ場のない狩り場に追いやり、そしてルイがヒカルに向かってどこに牙を落

とせば効果的に仕留められて、かつ獲物が最も苦しむのか、面白そうに眺め回しながら考えているのだと気付いた。

獲物。

ヒカルはルイやミシェルにとって、生き存えるための獲物でなかった。
単に、なぶり殺しにされる、満腹な獣の慰み者になるのだと感じ、足元が揺らいでいくのを感じる。

「オレの望み通り･･･あなたがオレのものになるのであれば」
「･････ルイ」
「交換条件だよ。無償で何かは手に入らない」
ルイはその時に初めて青灰色の瞳を細めて笑った。
気の遠くなるくらい美しく人でないような艶やかさだった。
「そうしたら戻らない。ヒカルの傍に居る。シャルルとのことも考える。･･･どう？」
ルイは妖しく笑った。
堕天使のように眼が離せない美しさであるが、決して清廉な愛の告白ではなかった。
「愛がなくても結婚できる。･･･逆に、死ぬほど愛していても結婚できない」
彼はそう言った。
誰のことを指しているのか明らかだった。

「ヒカルのことは愛してない。未来永劫、愛など与えてやらない。
それでもヒカルが良いと言うならその願いを差し出せ。叶えてやろう。
････おまえの倖せと引き替えに」
ルイの申し出に、彼女は拳を握った。
ぶるぶると手が震える。
先ほどのミシェルに感じた恐怖とは違っていたが、彼女は酷く動揺していた。
目の前のルイは、本当に、彼女の知っているルイなのだろうか。
ほんの少しの間会わなかっただけなのに、彼は変わってしまった。
それとも、今まで、彼は彼女を騙していたのだろうか。

氷のように冷たいけれども誇り高い若い薔薇は、こんな風に･･･取引を言い出したりすることはなかった。

せいぜい、「他人に願い事を叶えてもらおうなどと浅ましいことを考えるな」と言う程度だった。
････ルイは本気だ。

ヒカルは唇を噛んだ。
汗ばむ手のひらを握った。

そして･･･先ほどは寒気さえ感じた秋の澄んだ空気を感じなくなるくらい心拍数があがり･･･体が熱くなるのを感じた。
ルイは今度は彼の方からヒカルに近づいた。
そして、そっと･･･彼はヒカルの肩を抱いた。

そうすれば勝ち誇った笑みをヒカルに見せてやることはないと思っていた。
チェックメイト寸前のこの瞬間が、彼は最も好きだった。
手に墜ちるあと少しのぎりぎりの淵。
息を潜め、相手が負けを認めて屈服する瞬間。

彼はその時だけ、ほんの少し、自分が血の通った人間だと実感する。
簡単に奪われるものは、つまらない。
ヒカル。
･･･オレを飽きさせないでくれよ
彼はそう心の中で呟いた。
彼は待った。
暫くの間、ヒカルは黙っていた。
彼の胸の中で静かに頭を上げた。
下を向くのではなく、じっとルイを見つめていた。
ルイは同じようにヒカルを見つめている。
それは若い恋人同士の愛の抱擁に見えた。
けれども彼の体温を感じても、どうにも寒かった。
こんなに近くで彼の顔を見上げるのは久しぶりだった。

ルイの胸には、まだ薄くきっちりとしたサポーターが巻かれているのに気がついた。
あの殴打をもう一度繰り返させてはいけないと思った。
万が一ルイに何かあったら、それこそ･･･この一族は崩壊する。
「･････わかった」
掠れた声で、ヒカルは言った。
ルイは微笑んだ。
「ああ、ヒカル････あなたならそう言うと思った」
彼はそう言ってヒカルの額に軽く唇をあてた。
堕天使の烙印を押した。
そして･･･この上なく美しい儚い微笑みをヒカルに向ける。

「オレは生涯をかけて、アルディ家の当主を騙し続けよう。
‥‥ルイ・ドゥ・アルディの名にかけて約束する」
そう言って、ヒカルの顔をのぞき込んだ。

彼は今までに見たことがないくらい、満足そうな微笑みをヒカルに投げた。
ヒカルの泣きそうな顔を見て、ますます嬉しそうに言った。

「ヒカル。‥‥オレの永遠の昶。さぁ、生涯の伴侶にキスをし
てくれ。君から。
‥‥恋する者の熱い切ないキスをお願いするよ」

彼女は茶色の瞳をゆっくり瞬かせた。
彼が長らく待っていた、絶望という名の晄を宿すヒカルを、今まで見た中で最も美しいと思った
。
彼女は茶色の睫を伏せて‥‥ルイの白い頬を両手でそっと押さえた。
彼はその掌の感触を味わいながら、ヒカルに頬を寄せる。
ヒカルの柔らかい櫻色の唇が‥‥ルイの薄い唇に触れた。
ゆっくりと、戸惑いながら、彼女は彼の唇を覆った。
彼は唇を心持ち広げ、彼女を受け入れた。
ヒカルの唇は震えていた。
ルイは歓喜の痺れで青灰色の瞳を閉じた。

‥‥Hallelujah

ルイは小さく呟いた。

ヒカルの唇は先ほど共に飲んだダージリンの香りがした。

そして、わずかに‥‥煙草の残り香が髪から漂った。

‥‥ミシェル。予定通りだ。

薄く微笑んだ。
やがてヒカルが唇を離すと「これで良いか」と聞いた。
屈服の証を受け取り、ルイは少し頷いた。
だが、つまらなさそうに言った。

「ヒカル。‥‥もう少しキスの練習をしてくれ。
ベッドではオレを愉しませてくれよ。
愛がなくても愉楽を味わうことはできる。
‥‥ミシェルに抱かれて来い。彼は良い教師だ。
・・そしていろいろ学んで、少しはオレを驚かせるくらいしてくれ」
彼はそう言って、唇を手の甲で拭った。

一瞬、甘美の痺れを味わったのに‥‥ヒカルからのキスは、とても退屈だったともう一度言った。

■50

夜になって、シャルルに呼ばれて、彼女は執務室に入った。
重厚な扉の向こう側の、大きな執務机の前でシャルルは椅子に深く沈んでいる。
今日、夕食時にはシャルルは現れなかった。
ひとりで摂る食事は味気なかった。
それに昼間の件もあり、ヒカルはほとんど食事に手を付けずに部屋に戻ろうとしたときのことだった。
ヒカルに館に居ろと言ったシャルルとは今日は一日顔を合わせることがなく終わろうとしていた。
会いたいときに会えず、顔を合わせ難い時に限って心の準備ができていない。
シャルルに言われるままに、ヒカルは躊躇いがちに執務机の前に置かれたソファに座った。
「‥‥今日、ルイと話をした」
シャルルは単刀直入に切り出した。
彼の顔を見ることが出来ない。
ヒカルは視線を自分の膝の上に落とした。
彼は足を組み直して、白金の髪を気怠げにかき上げた。

「‥‥聞かないの？」
「シャルルが言いたくないなら特に聞きたいと思わない」
ヒカルは答えた。
「ルイに会ったな」
彼女は素直にうん、と答えた。

「今日、ミシェルにも会った」
「‥‥奴は君に何て言ったんだ」
シャルルの良く響くテノールが少しだけ荒んだ気がした。

ミシェルの訪問はシャルルの耳に入らなかったのだろうか。
シャルルは軽くため息をついた。

ヒカルにはあれほど注意したのに、どうも彼女はルイやミシェルに関わりたがる。
そうではなく‥‥彼女に彼らが引き寄せられるのかもしれない。
かつての、シャルルやミシェルや‥‥太陽の様なヒカルの父のように。
あの人の笑顔が浮かんだ。
「‥‥ヒカル。良く聞いて欲しい」
彼は言った。
「今日、ルイを呼んだのは、これからのことを通知するためだ。
‥‥彼はもうすぐ成人になる。そうなると、今まで教育係だったミシェルの庇護を離れて、本格的に独立することになる。今まで共同や連名で行って得てきた一切の権利が‥‥彼ひとりだけのものになる。これはどういうことかわかるか？」
「‥‥‥」
ヒカルは黙っていた。
「彼はアルディ家に君臨する日が近いということ」
「でも、今はシャルルが当主だわ」
「それも代替わりがある。必ず」
彼はそう言った。
永遠にシャルル・ドゥ・アルディが生きられるわけではない。
彼は長く生きすぎた。
もう、あの人に初めて逢った時の倍の年月を過ごした。
「元々‥‥次の後継者を指名しない今の状況がおかしいんだよ」

ルイという息子がいて名実ともにフランスの華であるシャルルの後継であるのに、
彼はその地位を譲り渡すことをなかなかしなかった。
シャルル・ドゥ・アルディは、当主の仕事と実業家としての業務に加え、彼は研究論文も執筆していた。多忙の極みだ。
もっとルイに負担を分配させるべきだという親族の声も小さくなくなってきていた。
シャルルは完璧に仕事を遂行したが、一族が長らくの悲願であった政界の頂点に立つための活動はしていなかった。
また、彼はヒカルをひとりにできないという理由から、海外へ赴くことをほとんどしていなかった。
今は通信が発達しているからそれも必要ないと言って、必要最小限の出国だけだった。
唯一、ヒカルの生国に行く時を除いて。
必要があれはルイを行かせた。
ルイを当主に据え置かせて、もっと積極的に進出をしたいという親族の意向をシャルルは無視し

続けた。
そんな折に･･･シャルルとルイとの確執が決定的になるような事が起こり始めた。
ルイはシャルルに断りもなく自由に発言をし始めたし、どうもアルディ家を出たらしいという話は広まりつつあった。
問題は、ヒカル・クロスの処遇だった。
彼女のことを公式では否定しているルイであったが、今日、はっきりとシャルルに向かって「必ずヒカル・クロスと結婚する」と宣言した。
彼は決定を覆さない。覆せという命令に従えないと言った。
「･･･ルイとの婚約の話はヒカルに一任していたが、そろそろヒカルに結論を出してもらいたいと思う」
とシャルルは言った。
これはいつか訪れる事態だと思うから、とシャルルはヒカルに説明した。
「ヒカルのことを当主交代の道具にしたくない」
彼がそう言ったので、ヒカルはますます顔を上げられなくなってしまった。
「･････シャルル」
いつかは言わねばならない。
それは今しかない。
明日になればずるずる先延ばしになってしまう。
そして、ヒカルからきちんと伝えなければならないことを別の者から聞くことになったら、シャルルは傷つく。
ヒカルは息を吸った。そして顔を上げる。
茶色の瞳が大きく見開かれた。
シャルルは彼女の顔を眩しそうに見つめた。
ヒカルは若い。
そして、ますますあの人に似てくる。
こうして彼を見上げる少し頼りなげな表情も、俯く頬のラインも、すべて彼女に良く似ている。
同じように･･･ルイも若かった。
彼の頑なな心の中に、ヒカルだけが入り込むことが出来る。

シャルルの壊れた心に、ヒカルが晄を照らしてくれたように、彼女はルイにも同じように愛を分け与えることが出来る。
彼と彼女を見ていると、かつての自分を思い出す。
境遇も性格も何もかもが違うけれど、シャルルが最も輝いていた「青春の輝き」の時代を過ごした年齢に彼らは間もなく到達する。

あの人が生きていたら････

あり得ないことを彼は考えた。
互いの子どもが結ばれることを賛成しただろうか。
「シャルル。‥‥‥ルイと婚約します」
ヒカルは小さいけれどはっきりした口調で言った。
「‥‥ヒカル」
態度をはっきりしろと言ったばかりなのに、シャルルは絶句して身を起こした。
彼女はシャルルを見据えた。
シャルルは形の良い唇を少しだけ開いていた。
その時に、シャルルは、自分が彼女とルイが婚約するというこ
とがあり得ることだと想定していなかったことに気がついた。
はっきりしろと言ったのに、彼はヒカルの口から漏れた言葉を理解するのにしばし時間を要してしまった。
シャルル・ドゥ・アルディにとって、あり得ないことだった。

————驚愕した。
愕然とするシャルルは呻いた。
「ヒカル」
「もう決めたの。‥‥決めてしまったの」
「それは‥‥君の意志なの」
「そう」
ヒカルは少し首を傾げた。
茶色の癖の強い髪が揺れた。

間接照明で彼女の髪は明るく輝いていて、茶色の瞳は照明を受けて光っていた。

———眩暈がした。

シャルルは上品だけれども哀しげな二重の瞳をきつく閉じた。
これが夢で、瞼を開けたら彼は寝室に居て‥‥ヒカルが朝の挨拶にやって来ることをぼんやり考えながら、眼が醒める直前の微睡みの瞬間のことであれば良いのにと願った。

‥‥‥彼は決して夢を見ないのに。

■51

「‥‥‥このシャルル・ドゥ・アルディの想定外の答えを言って驚かせるのは、君が2 人目だよ、ヒカル」

シャルルはそう言って薄く笑った。
動揺したのはほんの一瞬だった。
震える指で、彼は口許を押さえた。

でも次の瞬間には、ああ、そうか、と思った。

想定外などではない。
想定したくなかったのだ。

彼が望まない答えをヒカルが言ったので、彼はそれで驚愕したのだと理解した。

「ごめんなさい」
「どうして謝るの？」
シャルルは笑った。
その笑いがぎこちなくならないように注意した。

「ヒカルがよくよく考えた結論だったらオレが言うことはないよ」
彼は極力穏やかに言った。

呼吸も脈拍も通常のそれとはまったく違う異常な状態であることはわかっていたが、ヒカルの前では平静を装った。

手が震えるので、シャルルは片方の掌でもう片方をきつく握りしめた。
白い指が血の気がなくなり、ますます白くなった。

「‥‥ありがとう」
ヒカルはぎゅっと唇を噛みしめた。

どういうわけか、胸が痛んだ。
シャルルを驚かせてひどく‥・狼狽させてしまったことを充分良く承知していた。
彼は無表情で薄く笑みさえ浮かべているけれども、どういうわけか、とても哀しい瞳をしていた。

嬉しい報告をするはずなのに。

彼女は酷く哀しかった。

彼女は酷く寂しかった。

どうしてなのだろう。

胸が苦しくなり、彼の前では泣かないと決めた自分のたったひとつの誓いさえ守れなくなりそうになる。

何かを手に入れるためには無償では手に入らない。
ルイの言葉が頭に浮かんだ。

ああ、そうか。

自分は捨てたんだ。
自分から捨てたんだ。

———温かいこの人の手を離してしまったのだ。

ヒカルは彼女自身がとても大切にしていたかけがえのないものを、無造作に放り投げてしまったような感覚を覚えた。

「ルイは帰ってきてくれると言っていた。また･･･3人で暮らそう」
ヒカルはそう言った。
極力明るく言った。
「ヒカルは･･･ルイと一緒に居ることを選んだんだね？」
彼を愛しているのか、とは聞かなかった。

愛がない結婚をしたシャルルは、愛を確認することをひどく躊躇うときがある。
ヒカルは、小さく頷いた。
それなら、シャルルもルイも、ずっと一緒に居ることが出来る。
心の中で返事をした。
ルイから愛されなくても、この家族を失いたくなかった。
もう、彼女にはシャルルとルイが家族だった。
血のつながりは関係ない。長い時間を共に共有してきた。
時間を共有するだけでは絆は深まらないけれど、ヒカルはシャルルももちろんのこと、ルイでさえ、彼女の家族だと認識していた。

家族を失いたくない。

もう2度と。
実の両親は、自分を置いて逝ってしまった。
事故ではあったけれど、それは突然に訪れた。
自分の選択ではなかった。
でも受け入れないといけなかった。
今度は、自分で選択することができた。
ミシェル・ドゥ･アルディの言うとおりに。
彼女は選択した。

自分は残酷で貪欲で･･･ミシェルの言うとおり偽善者だと思った。
シャルルが哀しいと思うのは、今のうちだけだ。
ヒカルが両親を思い出そうとしても思い出せない恋しさで泣いた時期を通り越して、今の日々を過ごしているように。

シャルルも、いつか、わかってくれる。

彼にはルイが必要であり･･
そして家族が必要だ。

それはルイにも当てはまった。
彼にも父の愛が必要だ。
ミシェルの傍に置くことは到底出来ない。

いえ･･･本当は違う。
ヒカルは思った。

自分が、彼らを失いたくないのだ。
そう、思った。

罪深いと思った。

だから。自分はもう良いと想った。
もう、充分愛されたと思う。

この薔薇の一族の人々は、愛を分かち合うことが出来ない。

誰かひとりにしか注ぐことが出来ない。

不器用な人たちだけれど、失いたくない。

そのために自分がするべき事出来ること‥それはミシェルの言った選択肢を選ぶしかなかった。

彼は言葉悪く言ったが、正解で正論しか言わなかった。
「真実とは非常に主観的なものであり、誰にとっての真実かで変わる」と言っていた。
ヒカルの真実とは、一体どういうことなのだろう。
まだ、うまく説明できなかった。
だから、彼女は何も言わなかった。
彼を･･･ルイを愛していると言わなかった。
言えなかったのかもしれない。
言いたくなかったのかもしれない。
彼女は小さく呟いた。

「また･･･元通り暮らしましょう」
「元通りって、何を元に戻すの？」
ヒカルは答えに詰まってしまった。
「同じ敷地に住むことだけでは家族と言わないんだよ」
シャルルはルイと同じ事を言った。
彼は小さく吐息をついた。

「ヒカルの選択については異論はない。でも、それが心から望んだことでなければ、オレは承知しかねるね」
「･･･望んでるよ」
シャルルは組んでいた足を解いた。
前屈みになり、彼女に強い視線を投げかけた。
「･ ･･でも、今はまだ駄目だ」
「･････」
「まだその時ではない。ヒカルが成人するまでは事を急ぐつもりはない」
「シャルル」
「ルイが成人しても条件は満たされない。ヒカルが成人するまでは監護権はオレにある。
そしてヒカルは日本国籍で、今の日本成人年齢に到達するまでは、到底今の話を現実にするつもりもない」
「それは････」
「ヒカル」
シャルルは強く彼女の名前を呼んだ。

ヒカルははっとして彼の顔を見上げた。
シャルルは･･･彼は、彼女をじっと見つめていた。

ルイもミシェルも瞳を合わせることに勇気がいるほど、言いようのない恐怖を感じた。
でも、シャルルの瞳は同じ色なのに、吸い込まれて行くようで、彼女の武装した決心をあっというまに打ち砕くほどの強さがあった。
何かを失って、そして帰ってこられないと誰もが思った路から帰ってきた者の強さがそこにあった。

「シャルル・ドゥ・アルディとして。アルディ家の当主として命じる」
彼は静かにそう言った。
「ヒカル・クロスが成人するまではこの話は凍結する。
　ただし成人を迎えると同時にこれを解除し、アルディ家次期当主の夫人として迎えよう。
････ヒカル、それまではアルディ家に相応しい者として遇するので、それなりに君も準備を始めてほしい」
彼はそう言いきると大きく息を吐いた。
「････ヒカル、これでこの話は終わりだ。決着が着いた」
彼はそう言って話を切り上げた。
「部屋に戻りなさい。オレはまだ少し･･･片付ける仕事があるから」
シャルルはそう言って立ち上がった。
反対はしないよ、とシャルルは背中を向けながら、小さく言った。
「おめでとう、ヒカル。・・・・君の選んだ道が幸福であるように」
あの冷徹なルイが、ヒカルと共に在るときだけは感情を露わにする。
それは良い兆しだった。
シャルルとの間では決して生まれない関係だった。
だから、ヒカルとルイが一緒に歩んでいくことが何より一番良い結果であることもわかっていた。
しかし、良い結果とは、一体誰にとって、何にとって良い結果
なのか。
少なくとも･･･彼女にとっては違うようだった。

ヒカルは満面の笑みで恋を報告する表情ではなかった。
････何か交換条件を持ち出されたとシャルルは推測していた。

そしてそれはかなりの確率で正解のはずだった。

･････ヒカル。

そんなに思いつめた顔で婚約を言い出すのは、信じないでくださいと言っているようなものだ。

シャルルは心の奥底で呟いた。
しかし、彼女は言い出したら聞かない。
一任させてくれと言った時でさえ、引かなかった。
今回も理由を問いただしても決して言わないだろう。
‥‥大体予測はついていたが。
「シャルル」
彼女は背中を向けた彼に声をかけた。
ああ、声が‥‥声だけ聞いていると、あの人が若い頃の声に‥‥

そっくりだ。
シャルルは深く息を吸った。

次に、空気が流れる音がして‥‥シャルルの背中に何かが突進してきた。
ヒカルが彼に抱きついた。
走って寄ったから、彼の体は少し前に押し出された。

それでも良く鍛えられた体躯のシャルルを、ヒカルのベクトルは動かすことはできなかった。
それが彼女であることは解っていたのに、シャルルは息を呑んで‥‥
背中の温かい感触に眼を瞑った。

「‥‥ヒカル」
「‥‥ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」
ヒカルはそう言って、彼の広い背中に顔を埋めた。
シャルルの胸の前で、腕を回す。

彼の目の前に白い華奢な少女特有のしなやかな上肢が回された。
‥‥心臓の鼓動が速くなる。彼は呼吸が苦しくなり、こめかみが少し痛んだ。
謝ることはないよ、と言おうと思って、先ほども同じ事を言ったことに気がつき、彼は唇を開きかけてすぐに閉じた。

ヒカルの前では、何度でも、同じ事を繰り返しそうになる。

言葉だけでなく‥‥様々なことを繰り返しそうになる。

シャルルは「困った人だ」と小さく言って、彼女の腕を優しく包んだ。
ゆっくり腕を掴んで、引き下ろす。

「オレに悪いと思うのであれば･･･どうか倖せに」
シャルルはそう言った。

彼女がこの場では言葉を撤回しないとわかっていた。
ヒカルが成人するまではまだあと数年在る。
今日のルイとの話で、ルイにも時間が必要なはずだった。

時間稼ぎにしかならないのかもしれないが、充分な用意ができる。
シャルルはヒカルの温度を感じながら、すでに高速で考え事を始めていた。
ヒカルに謝罪をさせるような選択をさせたのが誰であるか、明らかだった。
シャルルは微笑みながら、その瞳を煌めかせた。

ヒカルを傷つけた。

そして･･･彼女が口に出すことの出来ない残酷な選択を迫った者が居る。
いや、「者達」か。
各々、シャルルに対する思うことがあるはずだろうが、ヒカルを利用することが最も効果的だと知っており、それでいてなお･･･本当は自らも彼女の晄を欲して止まないはずの、仄き者達。
業火で灼かれろと呪詛を繰り返すのに、己がすでにその焔に灼かれていることに気がつかない者達よ。

････永遠の晄は炎で灼くことはできないんだよ。

･･･せいぜい、焦がれて苦しみ回るが良い。

■52

「‥‥そうか」

驚いたのか想定内のことだったのか、彼はどちらともつかないような返事をした。

ルイ・ドゥ・アルディは、ミシェルの私邸の最奥部・・・彼らの言うところの居室のソファに長い脚を投げ出して、最近覚えたばかりの煙草を弄んでいた。

吸ってもちっとも楽しくないし、新しい発見がない。

彼の叔父がなぜ、手放せないほど煙草を愛飲するのかということだけは、理解できなかった。
今はまだ。

ミシェルはその傍らで、眩しそうに注ぎ込む陽射しに目を細めていた。

「だがヒカルの顎にミシェルの掴んだ痕が残っていた」
ルイは呟いた。
ミシェルは面白そうに笑った。

「何？ヒカルに傷つけたと言って、ルイも怒るのか？‥‥執着は捨てろと言ったはずだが」
「執着ではない。完成度の問題だ」
ルイは反論した。
「シャルルがそれを見逃すわけない。‥‥きっと今頃は、オレやミシェルへの反撃への思案を巡らせている頃だろうね」
「それは想定内」
ミシェルは心なしか嬉しそうに言った。

ルイはそこで顔を引き締めた。
「とにかく‥‥オレは一度戻る。‥‥シャルルと決着を付けるのはその後だ」
「Tel est pris qui croyait prendre. 」
彼は深く低いバリトンで牧歌を唱えるように言った。
ルイは気怠げに青灰色の瞳を見開く。
面白い趣向だと思うがね、とミシェルは言った。

「それはあなたにも同じ言葉を返すよ、ミシェル・ドゥ･アルディ」
ルイはそう言って微笑んだ。

良く似た彼らは、お互いに視線を交わしながら、互いの心中を測っていた。
「アルディ家のトップたる男どもが、あの小さな東洋人にかかりきりなんて、まったく退屈しないよ」
ミシェルは他人事のように言った。
「ミシェルはその輪に入っていると思うけれど」
「どうかな」
彼はそう答えてから、手元にあったサイドテーブルの上のシガレットケースを引き寄せて、細く長い指で1 本取り出し、無造作に煙草に火を点けた。
薄い酷薄そうな唇から漏れる煙が、天井に向かっては消えていく。
「シャルルが苦しむ姿を見るのは楽しいから」
ミシェル・ドゥ･アルディは笑った。

「彼はひとつのものしか愛せない。愛玩物しか愛でることが出来ない。
だからその最後のおもちゃを取り上げたらどうなるか見たいだけだ」
ミシェルはそう言ってまた煙草を吸った。
「予想通りになるのだろうけれどもね」
「‥‥ヒカルはオレと契約した」
「それならオレの元に来させて。‥‥手ほどきを始めないと」
ミシェルはおかしそうに言った。
「ミシェルがヒカルを気に入る訳は何？」
「わからないの？」
「確認」
ミシェルはふと、煙草から唇を離して、艶やかに笑った。

花のような微笑みであったが、同時にぞっとするような酷薄な笑いだった。
「‥‥そろそろ同じような容姿の女どもを抱くのも飽きてきたしね。たまには東洋人も良いかなと思って。
しかも皆、なんだかんだと最初の約束を忘れがちだから、緊急避妊薬を飲ませるのが一苦労だ。
女という者は厄介だね。
子宮という業を生まれながらに背負っている。
だから‥‥アルディの子どもを孕める資格を持つ女は楽しめそう、という理由では不足かな？」

ルイは黙っていた。
「ヒカル・クロスは手に入れるよ。シャルルの泣き所だ。

･･･どうあっても彼女が欲しい」
ルイは呟いた。
「ルイ。同じ事を繰り返すな。････執着は捨てろ。くり返し確認するのは愚の骨頂だとまだわからないのかな」
「オレは何も執着してない」
ルイは言った。
彼には未練も執着も憐憫もなかった。

だからヒカルとの契約でアルディ邸に戻ることにも何も感じなかった。

契約。

それは正しい言葉だった。
彼女はルイと契約をした。

自らの平穏を保つために、彼女はルイに差し出したのだ。
愛という名前の････報酬を支払った。
彼は煙草に手を伸ばして、新しく火を点けた。

ルイはその動作は習っていたが、嗜好品と思うことが出来なかった。
それなら、まだ乗馬やフェンシングで己の肉体を極限まで鍛え上げることの方が有益のような気がした。

しかし、今は違う。

････ヒカルの泣きそうな顔を見るとどうにもたまならく昂揚する。
彼女からの退屈なキスがこの上なく･･･何度も思い出される。

もっと不幸になれば良い。
もっと絶望すれば良い。
もっともっと･･･果てのない底まで墜ちれば良い。

慙死しそうだと思うほど、彼女を苦しめてみたい。
ヒカル。

幼い時から知っている、彼の････怨敵。
そして･･･唯一の彼の徒輩･･･

もう自分は墜ちている。

星辰の子と呼ばれたが彼は輝きを増すほど･･･成長して、金の髪が輝くほど、ますます墜ちていく。
終わりがない永遠という名の幽明に向かって転落し続ける。
ようやく、ここまで這い上がってきた。
何もかもを奪いながらそれを足がかりにして登りつめた。

もう少しだ。

ヒカルを娶りそれでルイは当主の座を手に入れる。
結婚は就任の条件だ。
シャルルの頃に廃された慣習を彼は復活させるつもりで居た。
後継者の育成は当主の最大の責務だ。
シャルルはそれを放棄した。
だから彼を永遠に追放するためには･･･
必要な道具はすべて揃えるつもりだった。

それがヒカルの不幸であり、彼女の泣き顔であり、実父のシャルルの失墜であっても、彼が奪ってようやく足元を固められる材料になるのであれば、何でも利用するつもりだった。

利用･･･。
言い方が悪いな。

活用、だ。

ルイは言い直した。

ヒカル。
オレはあの荊の地獄のような家に戻る。
おまえがそれを望んだ。
邪気のない天使のような微笑みで、オレの羽をもぎ取った罪の娘。

･･･今こそ、恥辱と慟哭と涕泗にまみれて、ミシェルの用意した最後の選択肢を選べ。

もしくは･･･

シャルル以外のアルディの男の子どもを孕め。

そしてこの家の棘にからまれて一生を恨んで過ごせ。

シャルルとは決して結ばれることはない。
彼にヒカルを渡すつもりはない。
シャルルに安寧な日々を永劫与えるつもりはない。
今は･･･今は絶望の前の安らぎを味わわせてやっているだけだ。

そのためなら、シャルルの用意した「あと数年」はほんの一瞬だった。
彼は目的を達成するためなら、いつでもいつまでも待つつもりだった。

ヒカル。
永遠の晄。

････その晄は永遠でないことを、オレはこれから証明する。

ひとりのつまらない女になり、愛されない苦悶に身を捩り、そして････業念の鎖を自ら切る勇気を持ったときに、オレはおまえを心から愛することにしよう。

ルイは煙草を吸った。

この上なく甘美な味がした。

先ほどまでは、ミシェルの喫煙の理由がわからないと思ったのに。
彼は、脳が痺れるような快楽を味わった。

■53

ルイがアルディ家に戻ってきて、最初の週末の晩餐の後のことだった。
彼はヒカルとの約束通り、戻って来た。
けれども、ルイはいつも不在にしていた。
体を休めに来る、といっていい程度の滞在でしかない。
朝も遅く、ヒカルの外出時間にはいつも起きてこないので、朝食はシャルルと済ませ、夜にも戻ってこないルイを待ちながら、シャルルと時間を過ごす。
シャルルとの間にルイの話は出てこなかった。

彼はヒカルの前ではビジネスの話をしない。
どんなに仕事のスケジュールが立て込んでいてもヒカルとの予定は必ず調整したし、その時にどうにもならない事態が起きたときだけ、事情を話して予定を変更する。

滅多にないことであったが。
そして同じようにルイの話もしなかった。
それでも、朝早いヒカルが部屋の窓から覗く別棟には灯りが灯っていたし、ルイは夜遅くに戻り、昼過ぎには出かけていくという話を聞いていた。
話をすることはいつでもできる。

ルイはふらっと帰ってきた。

出て行ったときと同じように、小さな荷物一つだった。
でも、この家に戻ってくるという約束をルイが静かに実行していることに、ヒカルはなんとなく不安を覚えていた。

話が出来る時間に戻って来たのなら、連絡を入れて欲しいと、ヒカルはルイにメモを入れていたが、彼はまるっきりそれを無理していた。

そんな折の時のことだった。

シャルルが、ルイに、今日の夕食には出席するように、と伝言を入れたらしい。
ルイは時間通りにやって来た。
ヒカルはそれを聞かされていなかったので、たいそうひどく驚いた顔をしていた。
ルイは彼女を一瞥しただけで、何も声をかけなかった。
ルイはいつでも外出できる格好だった。
これから出かけるから、車を用意しておくように、と伝言していたのを聞いて、ヒカルは「また出かけるの」と尋ねたが、彼はその言葉も無視していた。

・・・少し離れた席に座る彼を見てヒカルは「もっと近い席に座りましょうよ」とあわせて促したが、「ここはシャルルの用意した席だから」と言ってルイはそのまま着席し、その後すぐに黙り込んでしまった。

・・・・シャルルはすぐに現れた。

そして、ヒカルとルイを見つめると、無言で席についた。

息苦しい食事時間だった。
彼はいつも、ヒカルが話す今日の出来事や、彼女の一日についてのお喋りに耳を傾け、ワインを少し味わい、そして食事が終わってヒカルが席を立つまで穏やかに微笑み続けて居るのに、今日は酷く不機嫌そうに無言でいた。

そしてそんな苦しい時間が過ぎると、ようやくシャルルが「話がある」と言って彼らを次の間に入るように言った。

そこは、かつてのヒカルのプレイルームであり、ルイと初めて会った部屋だった。
あのときの「幸福の王子」は今も大事に保管されている。
いつか、シャルルと一緒にまた読んでみたいと思っていた。

「話があるならはやくして」
ルイはソファに座り込んで、長い脚を組んで横を向いた。

「オレは忙しい」
「気が合うな。オレもだ」
シャルルはそう言って薄く笑った。

そしてヒカルにも座るように促した。
ヒカルは少し躊躇ったが、彼らから少し離れて座った。
その様子を、ルイとシャルルは黙って見守っていた。
「･･･時間がない。手短に」
ルイは言った。

ヒカルは彼らの会話に口を挟む権利がない。
シャルルが手元に用意しているのは2 種類の封筒だった。
ひとつをルイに、もうひとつをヒカルに差し出した。
中身は後で確かめるように、と言って、シャルルは話を切り出した。
彼も回りくどい話は好まない。
「･･･ルイ。おまえの関わる関連事業の増資を発表する。
　近いうちに」
「････」
そこでルイは初めて居住まいを正した。
彼の関わる事業は多くはないが、決して切り捨てることは出来ないものばかりだ。

通信、バイオ、ライフサイエンス、ソフト開発･･･等々、その傘下の事業は膨大だ。

「今、このときに増資をする理由は？」
ルイは静かに尋ねた。
「‥‥後で書類を読め。今が『その時』だから。理由はこれだけだ」
シャルルは短く言った。

彼の発表は決定だった。
相談ではないからルイに理由を説明する必要はないと言った。
ルイが面白そうに青灰色の瞳をシャルルに投げる。

「それで、もう一つ決定があるわけだ」
「そう」
シャルルは眉間を指で押さえた。

こちらの決定の方が、彼は伝えることを躊躇っているかのようだった。
アルディ家の事業増資は大事であり、それをルイに発表するまでには、シャルルは親族や系列事業者に説明をし、了承を得ていたはずだった。

それがルイの耳に入らない様に進めていたのであれば‥‥。
彼の反対にあうような話であるのが普通なのに、ルイの活動を
狭めるどころか逆の方策に、なぜ、ルイに黙って決定してしま
うのか、ヒカルには考え及びもしなかった。
「それで、もうひとつの決定は？」

ルイは予想できていたようだった。
シャルルが躊躇っていると知ると、少しばかり微笑みを浮かべていた。
彼らには割っては入れない空気があり、ヒカルは何度もルイに注意を促すような視線を送ったが、彼は無視をしていた。

「ヒカルのことだろう？」
ルイはヒカルに向かって言った。

その時になってようやく彼は自分の婚約者に眼を向けた。
それまでは‥‥シャルルがルイにしたように、まるっきり存在
を無視した様子であったのに。
「私‥‥？」
ヒカルは少し息を呑んだ。

シャルルが否定しなかったからだ。
彼は書類にルイと同じ青灰色の視線を書類に落としていた。

ルイに渡した書類より、ずっと薄くて軽そうだったのに、彼はとてもずっしりと重い封筒であるかのように、少し持ち上げてはテーブルの上に落とし、また持ち上げていた。

明らかに、ヒカルに渡すことを躊躇っていた。
「シャルル？そうなの？」
ヒカルはどきどきする胸を‥少し押さえた。
彼がそんなそぶりを見せることはこれまで一度もなかったからだ。
シャルルはいつも自信に溢れ、優雅で、そして完璧な計算結果に裏付けられた行動しかしない。

「シャルル？」
ヒカルははやる気持ちを抑えた。
ルイが面白そうに観察している。

彼はその書類の中身が何であるか、すでに察しが付いているらしかった。
シャルルはやがて思い切ったように、その書類をヒカルに差し出した。

「‥‥これはヒカルへの書類」
ヒカルはその書類を受け取った。

‥‥非常に軽かった。

それなのに、シャルルはこれを渡すことを躊躇っている。
なぜなのだろう。
その疑問にルイが回答した。

顔に考えていることが書いてあるよ、と冗談めかして言っていた。
ひどく、上機嫌だった。
ルイの機嫌が良いときというのは、シャルルが不機嫌な顔をヒカルに見せるときと同じくらい滅多にないことだ。

「あてて見せよう」
ルイはそう言って、シャルルを斜めに見た。
彼の金髪が揺れて、非常に好戦的な瞳が輝いた。

いつも物憂げで何をしても退屈だと言わんばかりの彼のひとつひとつの動作が、まるで水を得たように生き生きとし出した。

「‥‥それはヒカルの帰国の書類だね」
ヒカルは書類を落としそうになった。

シャルルは少しため息をついた。
「ルイ。黙っていろ」
「黙っていられない。
　ヒカルはオレと結婚するし、そのための準備のためにオレはこの家に戻ってきたのだから」
ルイがそう言うと、シャルルはルイと良く似た瞳で彼と良く似
た姿の彼を睨んだ。
「ヒカル」
「どういうことなの」
ヒカルはシャルルに目を向けた。

彼の言い出したことがわからない。
ルイの言っていることを否定しないシャルルが、ヒカルを見つめた。
ごめんよ、と言っているようだった。
その小さな囁きは、ヒカルに届かなかった。
彼女は驚愕のあまり、小さな唇を少し開き、ただただ茶色の薄い瞳でシャルルを凝視している。

彼は今度は大きく息を吸った。

そして目を一度瞑ると、彼は決心をしたように、あらかじめ用意していた言葉をヒカルに伝え始めた。

「ヒカル。日本の次の学期にあわせて、日本に帰国しろ。
　‥‥全寮制の学校だから、卒業までそこで滞在することになる。
　大学も大学院も付属しているから、そのまま進学しても良い。
　他の国に留学しても良い。
　‥‥でも、君が成人するまではこのアルディ家ではなく‥‥日本に戻るように」

彼はヒカルに「戻る」と言った。

ヒカルの居る場所はここなのに、彼は「その関係書類とスケジュールが入っている」と封筒を指して説明した。

淡々と言った。

「‥‥‥以上だ」

シャルル・ドゥ・アルディの心地好いテノールが止んだ。
ヒカルは少しばかり間を置いて、茶色の眼を見開いていた。
ますます、あの人に似てくる。

シャルルは胸の疼きを抑えるために、ヒカルから眼を反らした。
青灰色の瞳が、白金の髪の下で、微妙な晄を放った。
「シャルル。‥‥言っている意味がわからない」

「ヒカル。わからないではなくて『わかりたくない』と言い直したらどう？」
ルイは無表情に言った。

■54

「要するに、ヒカルは出て行けということだ」
「ルイ！」
シャルルが声を荒げた。
ルイは、薄ら笑いをしているだけだった。
だが、彼の中では次の手をどうやって打とうか、考えを巡らせていた。
「シャルルの思い描く未来は、そういうことなんだね」
ルイがそう言った。
ヒカルはまったく理解できないと言うように、ただただ、首を振り続けた。
シャルルは一度決定したことは覆さない。
それはルイも同じであり、アルディ家の者は皆‥‥同じだった。
唯一、当主の決定だけが絶対であるが、それ以外は彼らは言い
出したことは決して撤回しない。
その当主の発言は‥‥絶対だった。
「ヒカル」

ルイには説明しなかったのに、シャルルはヒカルに、まるで幼い子どもに言い聞かせるように言った。
「ヒカル。‥‥‥君がルイと結婚するというのであればそれも良い。
でも、その前に、君は未成年であり、学生であり、それ以上に果たさねばならないことがある。

‥‥やがてこの家に入る前に、君はアルディ家ではない者とたくさん関わりを持って欲しい」
彼はそう言って言葉を一度句切った。
「‥‥この家に入れば、これまでと同じ生活とはいかない。
その前に、君にはいろいろと‥‥外の世界を知って欲しい」
「それは単なる言い訳だよ。‥‥アルディ家当主の夫人ともなれば、誰もが注目するからね。
幼い頃からそのためだけに育てたようなヒカルは外聞が悪いから一度外に出すんだ。
東洋人で、何も功績が無く、日本人学校の一学生が仏語と日本語が流暢だというだけでこの家に入り込む‥‥。
そう考えない人の方が少ないとは、考えたことなかったのか？
一族としては何も得ることのない人物を迎えるんだ。
たいそう根回しが必要だよ。
そして監護権が消滅する成人になるまで、静かにしてもらって‥‥ようやくヒカルを迎え入れられるって寸法だね」
「ルイ。オレは、黙っていろと命じたはずだ」
シャルルは彼に低い声で言った。

「これ以上無駄なお喋りをするくらいなら、時間の無駄だから、出て行け」
ルイ・ドゥ・アルディは実父にくだけた口調で言った。
「それとも」
シャルルは怒気を抑えながら、彼の実子に威嚇した。
静かではあるが激憤に満ちた声だった。

白金の髪を揺らして、ルイ・ドゥ・アルディを斜めに見下ろした。
顎を上げて、高慢に。
ルイの説明は必要ない無駄なものであると否定した。
「また口をきけなくしてやろうか」
「シャルル！」
今度はヒカルが叫んだ。
彼らの諍いのために、ルイとの関係を考えたわけではない。
家族になるために。
本当の家族になるために、彼女は選択したのに。
「年老いた者が賢いとは限らず、年長者が正しいことを悟るとは限らない」
ルイは旧約聖書のヨブ記の一節を言葉に出した。
彼は立ち上がった。

「まぁ　今回は‥‥あなたの先制攻撃が有効だということでしょうね‥‥時間がないので失礼する」

彼はそう言うと、書類を片手に、ヒカルに微笑んだ。
「ヒカル。オレは今日の戻りは遅い。けれども‥‥あなたが帰国するまで、もう片時も離れたくないから、今日から寝室を一緒にしよう」
「ルイ！」
ヒカルが叫んだ。
ルイはくすくす笑った。

「当主の決定は絶対だから。
従わざるを得ないけれど、それは‥‥結婚を認めたと同義だからね。
オレとしては収穫だよ」
シャルルが居る前でわざとそう言ったルイは、この上なく満足げに微笑んだ。
金髪が揺れて、彼の若く精悍な頬が緩んだ。
「お父さん。これで失礼します。‥‥オレは忙しい」
立ち上がって扉の処まで歩くと、そうだと言って、彼はまたソファに唖然として座るヒカルに近づいた。
そして簡勁な顔を素早く落とすと、ヒカルの白い顔に近づき、あっという間に彼女の唇を奪った。
彼女は抗議の言葉を叫ぶ余裕もなかった。

「恋人同士のキスをするには時間がない。‥‥続きは寝室で」

彼はそう言ってヒカルに妖しく笑いかけると、本当に行くから、と小さく言って今度こそ本当に部屋を出て行った。
それがシャルルに見せつけるためのキスであると、ヒカルやシャルル自身にわかっていたことなのに、ルイはそれが成功し、シャルルが何も行動しなかったことにほくそ笑んだ。

牙を抜かれた獣は去れ。

愛を知り、愛に飢え、愛に怯える哀れな獣王よ。

彼は歩きながら微笑んだ。

とても妖しく、冷たく、美しく。

シャルルの行動は想定内であったが、こんなに迅速に行動するとは思っていなかった。
ヒカルの同意を得てから行動すると思っていたが、当主はやはりアルディの男だった。
ヒカルがルイの手に本当に墜ちる前に先手を打った。

そのためにはヒカルへの説明と理解を後回しにした。

･･･それがシャルルとヒカルの信頼関係を崩すと承知していながら。
それでも、シャルル・ドゥ・アルディは･･･。
ルイから遠ざけて･･･その間、増資を持ち出してルイをがんじがらめにする算段だった。

増資は願ってもないことであるがこれにより、ルイは多忙を極める。
だから「今」なのだ。
彼の反撃を感じ、ルイ・ドゥ・アルディは興奮を抑え切れそう
になかった。この昂ぶりを抑えるために･･･今日も夜に咲く花を渡り歩かね
ば静まりそうになかった。
だが･･･彼は車に乗り込む寸前に、ふと思い返していた。

本当に突然。

彼はそう思うことは滅多になかった。
ルイには突然何かを思いつくことはない。
計算しつくされた結果や説明の付く現象しか信じない。

でも････

ヒカルからの、官能的な香りのまったく感じない、柔らかでささやかで戸惑いのある口吻を唇に
もう一度感じたい、と思った。
これから、もっと違う花の蜜を味わいに行くはずなのに。
彼は助手席に控えていたＳＰに声をかけた。
「―――行き先を変更する。ミシェル叔父のところへ」
彼は短く言った後、気怠げに瞳を閉じた。
手に持った書類の入った封筒を面倒くさそうに隣のシートに放り投げる。

ヒカルを手に入れるのは数年後。

寄宿学校に入れてしまうつもりらしいので･ ･･もう、あと数回しか会うこともない。
美しくあの人そのものに成長したヒカルを見て、シャルルは必ず氷上の路を踏み外す。

その時が、ルイの待って居た時だ。

それまで･･･それまでヒカルに会わないでいることは厭わなかった。

彼女はルイと契約した。
自分の家族を手に入れるために、あの愚鈍な娘は、ルイと契約した。
それはフランスの華を枯死させる大きな言葉だと思っていないらしい。

ヒカル。
永遠の晄の子。

家族を渇望するあまり、この一族を滅ぼそうとする、滅びの晄を持つ娘。

おまえは自分のために、シャルルを壊す。
おまえは自分のために、オレを苦しめる。
おまえは自分のために、ミシェルを惑わす。

すべておまえという存在が、オレ達を･･･戻れない路に追いやっていることに気がつかない蠢愚の娘。

まだ、条件が整わない。

まだ早い。

じっと待て、ルイ・ドゥ・アルディ。

けれども、彼の疼きは癒えそうにもなかった。
ヒカルと数年離れて暮らす。
せいぜい、接近を禁じてルイを遠く外国拠点の事業に加わらせるか、ヒカルをパリの寄宿学校にやってしまうかと考えていたのだが、シャルルは捨て身の行動に出た。

彼自身が最もヒカルを手放したくないはずなのに、彼は彼女を日本に返すと言った。
もう、戻ってこないかも知れないのに。

彼女のことをいつか日本に帰すことも考慮に入れて、日本人学校に入学させ、「普通」であることを教育した。
シャルル・ドゥ・アルディが心を砕いて留意したことはただその点に尽きる。
いつか･･･この生活に終わりが来るときに、彼女が困らないように。
いわば彼女にとって「どの教育も受け入れられる最高の教育」であった。
それを途中で放棄して、彼女を帰国させるという。

‥‥‥シャルル。駒を捨てたら、その駒は戻らない

ルイは小さく呟いた。

そして‥‥それが自分にも当てはまるのではないのかとちらりと思ったが、次の瞬間にはそんなことはないと強く否定した。

この思いは、彼のシミュレーションから削除された。

■55

「言っていることが解らない。
第一、私は承服していないでしょう」
最後の言葉はかなり荒れた口調になった。

ヒカルは滅多に怒らないが、今度ばかりはシャルルに抗議した。
ルイが出て行った後のことだった。
シャルルはヒカルとルイの若い恋人同士の交わす口吻を表情乏しく見つめていた。
ヒカルは封筒をシャルルに突き返そうとした。
「シャルル。私はなぜ、日本に行かないといけないの」
「ルイの言ったとおりだよ」
シャルルは小さく言った。

「シャルル。‥私は家族になりたいと思う」
「知ってるよ」
彼はまた短く答えた。

「でも、日本に行くんじゃない。日本に帰るんだ」
彼はいくつか理由を挙げた。

彼女の祖父であるクロス氏の体調が思わしくないこと。

このまま日本人学校で進学していくより、日本に戻って大学に進むか、パリの学校に編入するか、他の国に留学するか選ぶ時期がやって来たこと。
ルイとの婚約については、ヒカルが成人するまでは凍結された問題であるものの、そのまま同居させるわけにもいかない理由があること。

いろいろとシャルルは話をしたが、ヒカルはどの理由も納得できないと首を振った。

「どれも本当の理由じゃない」
ヒカルは言った。

「シャルルが本当の理由を話してくれないと、私は納得しない。
納得しないことは受け入れない。
それはシャルルが教えてくれたことなのに」
沈む茶色の瞳を見ながら、シャルルは頑固な少女を苦笑して眺めていた。
ああ、あの人にそっくりだ。
「ヒカル。‥‥まだ理由は言えない」
シャルルは静かに言った。

唯一人、彼が心を許すことの出来る、小さな友人に彼は声をかけた。
後回しにしてしまったことでこの少女は酷く傷ついていた。

なぜそうなるのか、それが大事だと言った彼女の母を思い出していた。
結論しか言わない彼に、もっと話をすることで変わる結論も未来もあるはずだと諭した愛しい人を思い出していた。

「でも、前から考えていたことだ。
ヒカル、一度、日本に帰りなさい。
‥‥そして戻って来たかったら、いつでもここに戻ればいい。
ここは‥‥君の家だよ」
「だったらどうしてもっと前に話をしてくれないの」
自分が邪魔だったのだろうか。

彼の好意に甘えて、ここを安住と定めてしまったことが、彼を窮地に追いやってしまったのだろうか。

本当は‥‥もっともっといろいろな可能性や人生の選択があったシャルルの路を奪ってしまったのはヒカルなのではないのだろうか。
彼女は苦しそうに顔を歪めた。

「‥‥シャルルがそうして欲しいのなら‥‥それが私の理由になるよ‥‥」
「ヒカル、ヒカル」

シャルルは堪えきれずに、彼女の傍に座り直して、彼の胸の中にそっと頭を抱いた。

そうじゃない、と何度も呟いた。

‥‥苦しいんだ。

彼はそう心の中で言った。
「君の監護権はまもなく消滅する。あと数年だ。オレがそばに居て欲しいと願ったから、君の人生を奪ってしまった。
オレには、君の両親のような『普通』が与えられない。
母にも父にもなれない。
でも、ルイと婚約すると聞いた時に‥‥それしか選べないのにそれを択った（※最も良いことだと思い選ぶこと）と君が勘違いしたら‥‥」
そして彼も同じように苦しそうに瞳を閉じた。
胸の中にいる少女を壊さないように大切そうにかき抱いた。
こうすれば彼の切ない苦しい顔は見られないはずだった。

「やがてルイと結婚するときまで。君のために用意しておきたい。君の場所をね。‥‥君の経歴が素晴らしいものになり、アルディ家では非常に珍しいけれども相応しいと称される、真珠のような東洋人の令嬢を当主夫人として迎え入れる。それが君の本当に欲しいものであれば、オレはいつでも‥‥‥ヒカルの
ために‥‥」
「シャルル」

言葉に詰まってヒカルは思わず彼の背中に腕を回し強く抱きしめた。
びくり、と彼の体が動いた。
それでもヒカルは彼に回した腕を放さなかった。

「シャルル、私は倖せだよ。‥‥だから同じように‥‥シャルルとルイにも幸せになって欲しい。本当の家族なんだから本当に家族になるには、何も必要じゃない。‥‥でも、長らく私が邪魔をしていたから‥‥」
「それは違うと、どう言ったらわかってくれるんだ？ヒカル」
彼は苦しげに言った。
顔を見なくても、彼が苦悶に満ちた表情で、ヒカルに語りかけているのがわかった。
「順を変えて君に話さなかったことは謝罪しよう。
でも‥‥こうするしかなかった」
彼はそう言った。

だんだん傍に居ることが苦しくなる。
その一方で、離れれば、きっと自分はまた狂い始めるだろう。

常に彼の傍らで輝いていた彼女を失うことなどは‥‥シャルルには耐え難い苦痛であった。
あの人が太陽の様な親友を選んだとき、彼は身を焦がす思いをした。
あの二人を心から祝福できたはずだった。
彼に間違いも憐憫も後悔もないはずだ。
しかし、太陽の子という名前のルイと、永遠の晄という名前の昶を見て。
彼らが結ばれる様を、父という立場で見つめることが出来るのだろうか、と考える時がある。
かつてと同じように‥‥他の男を愛する様を、見つめながら悶絶する苦闘は厭わないが、そのまま‥帰ってこられなくなったときに、自分は彼女を傷つけてしまわないだろうか。
愛するあの人のひとり娘を壊してしまいやしないだろうか。
同時に、ルイがヒカルを‥‥幸せな温かい晄で包み込む太陽になれる可能性はゼロに等しかった。
彼は奪うことでしか表現できない。
だんだん人でなくなる、と言った言葉は過言でない。
彼は‥ヒカルからすべてを奪ったときに、初めて彼女を愛することが出来る。

そういう歪曲した愛を、ヒカルが受け止められれば‥‥

でも、彼女はまだ幼すぎた。

少し距離を置いて、そして自分事を他人より大事にできるようになったときに、改めてルイに引き合わせることにしたかった。

今回、ルイに戻るようにヒカルが説得したのは少々驚いた。

予測はしていたが彼女が言い出す確率は低いだろうと思っていた。
わずかではあるけれど、ルイとヒカルの距離を保って‥‥そして二人がそれでも結ばれたいと思うのであれば、シャルルは祝福するつもりで居た。
しかし。

先般の召喚の際に、彼は言い放った。

堂々と、シャルルに、良く似た青灰色の瞳を向けて、攻撃的に言った。

「ヒカル・クロスは必ず手に入れる」
と宣言した。

ルイが「奪う」と言わずに「手に入れる」と言ったことに、何か変化があるのかもしれない。

シャルルはその言葉を聞いて、少し思案した。
そしてその結果が今般のヒカルの帰国だった。

今は何を言っても説明にしかならない。
言い訳にしかならない。
こう、択ったことをヒカルに許して欲しかった。

「･･･わかった」
ヒカルはため息をついた。
言葉に出していない彼の声に反応したようだった。
「日本に行く」

その瞬間･･･今度はシャルルがぐっと彼女の体を強く引き寄せた。

「･･･ヒカル。･･･わかってくれ・・・」
「わかった。シャルル。わかった」
多くを言わなかった。

ヒカルは「わかった」とだけ繰り返した。
そしてシャルルは「わかってくれ」とだけ囁いた。
ヒカルは顔を上げた。
目の前の、美しい顔立ちの男性は、まだ瞳を閉じていた。

彼女はそっと手を伸ばして･･･白金の彼のくせのない髪に指を通した。

「シャルル。私の願いはひとつ」
彼女よりずっと年上の麗人に、彼女は自分よりちいさい者をあやすかのように、静かに髪を梳いた。細い若い少女の指は、シャルルの白金の波に沈んだ。
「･･･シャルル。私は･･･シャルルに家族を与えてあげたい。
ルイに家族を返してあげたい。ただ、それだけ」
そして、ヒカルは続けて言った。
ぽつりと言った。

「一生分、幸せをもらったわ。長くて素敵な夢をずっと見続けた。･･･ありがとう。もう、これはふたりに返してあげるときが来た････」

だから、私はふたりのためにできることをしようと思う。
ヒカルはシャルルの髪に指を埋めながら･･･そう囁いた。

ぴくり、と彼の瞼が動いた。

一生分の幸せと聞いて、かつて自分が言った言葉を思い出した。

彼は瞳を開いた。
少し目が赤かった。

まだ幼く若いのに、彼女はこれほどまでに人を大事にする。

この家の者からは教わらなかった。
この家の者には教えても伝わらなかった。

それなのに、彼女は煌めきを失わない。

―――こんなにも煌めく光を、彼は独り占めしていた。

また、同じ事をしようとした。
もう、オレはこのままだと君の足に枷をつけて･･･
飛び立つことさえ許さなくなるときが来る。

ルイとヒカルのキスを見て、彼は心を保つことが出来なくなりそうなほど･･･
気が遠くなりそうなほどの強烈な胸の痛みを感じた。

これがかつてあの人と友にも感じた、悋気であることを彼は充分良く承知していた。

もう、同じ事は繰り返すことは出来ない。

シャルル・ドゥ・アルディはヒカルを幸せにするために彼のすべてを犠牲にするつもりだった。
それが彼の贖罪だった。
「返してあげるのは、オレの方だよ」
シャルル・ドゥ・アルディは言った。

ヒカル。

君に自由を返してあげる。
もう･･･苦しいから。
もう、これ以上を自分を抑えられないから。
一緒に居れば苦しくなって切なくなって自分はまた路を踏み外す。
一緒に居なければ恋しくなってすぐに崩壊する。
でも、どちらを選んでも･･･滅びるのであれば。

ヒカル、君の笑顔が見ることのできる滅びの路を選ぶ。
シャルル・ドゥ・アルディはそう独り呟いた。

■56

「来ると思っていたよ」

ミシェル・ドゥ･アルディはようこそ、と言って、彼の別邸に入るように勧めた。
パリのいくつかに不動産を持つミシェルは、気ままにいくつかの別邸を渡り歩いているようだった。
ヒカルはルイの携帯電話に連絡を入れたが、出てきたのはルイではなくミシェルだった。
先般の件があり、平然と受け答えをすることができない動揺したヒカルに、彼は低い魅惑的なバリトンで囁いた。
電話口のミシェルの囁きは、先日の声音と少し違っており、何となくであるがシャルルに似ているような気がした。
ミシェルは何事もなかったかのように、ヒカルに挨拶をして、ルイはミシェルの別邸に泊まっていることを伝えた。
結局、ルイは昨晩帰ってこなかった。

「ルイはまだ寝ているよ。随分と昨日遅かったようだから」彼は面白そうに言った。
「彼も若いからね。････それも知っておくべきルイの一面だよ」

遠回しに、ヒカルにルイは夜遊びの朝帰りであることをミシェルは言った。
そして彼を迎えに来るように、とミシェルは言った。
「そうでなければ、彼は今日もここから夜、出かけてしまうよ」
それはまずいでしょう、とミシェルは面白そうに言った。
彼は明らかにヒカルを挑発していた。
危険な人物ではあるが、ルイの教育係であり、アルディ家の重要な位置に居る彼の言葉を無視するわけにはいかなかった。

ヒカルはルイを迎えに行くと言って、ミシェルの家に出向いた。
車を待たせておき、外出中のシャルルにはメールを入れた。
彼はミシェルに会うことを快く思っていない。
実弟なのに、彼はミシェルを信用していなかった。
「仕事とプライベートは別だよ」
シャルルはよくそう言った。

朝野を区別しないのは彼の主義であるらしいが、それでも、実弟であり彼と同じ容姿の彼をヒカルは無視しきれなかった。
あの言葉の通りになってしまったわけであるし･･･ヒカルはミシェルの顔を見たときに、眼を反らしてしまった。
彼は始終微笑んでいるが、やはり瞳は酷薄そうにこちらを静か
に観察しているだけだった。
ただ、それだけなのだ。

何かの喜怒哀楽を持って誰かと接することは決してないように思われて仕方がない。

･･･ミシェルのことをそんな風に考えるのはやめよう
ヒカルは軽く頭を振った。

恐ろしいがひどく頭の切れる男性だ。
彼の私邸は、ルイの別棟と酷く似ていた。
何も置いていない殺風景な部屋だった。
生活の息吹がまるでない。

それは彼が居をあちこちに移しているからなのか････

それとも、彼もルイと同じように、何も執着がないからなのか。
どちらにしても、ヒカルにはとても寒い空間だった。
ヒカルは上着を脱いだ。
薄手のコートが必要になってきた。
そのコートをミシェルは預かろう、と言ったが、すぐ帰るから、とヒカルは丁寧に言って断った。

「･･･聞いたよ、日本に帰国するそうだね」
「･････」
ヒカルは曖昧に答えた。

ルイに言ったことは、ミシェルに筒抜けだと解ってはいたが、昨日の今日でその話を出されると、返答に窮した。

「‥‥シャルルにしては必死な攻撃だね」
ミシェルは兄と同じ薄い唇を歪めて、腕を組んだ。

ソファにかけなさい、と言ったが、ヒカルは立ったままだった。
ミシェルは少し目を細めて、それなら好きにしていて、と声をかけて、自らは煙草を一本くわえて火を点けた。

「‥‥ルイがヒカルを諦めないから、苦肉の策で、君を国外に出すことにしたってことだね。
ルイはその間、事業増資の話を持ち出されているから、拘束されて動けないはずだろうし。
収支決算でむこう5 年連続黒字収益を条件にするなんて、シャルルも思い切ったことをするな」

ヒカルはビジネスのことはわからない、と言って、また俯いた。
「わからないじゃなくて、わかるようになれ」
ミシェルは短く言った。

また、この人は時々‥‥何かに憤って強く言う。
「ルイは君の年齢ではすでに特許をいくつも取得し、医薬品の開発販売の実績を持ち、通信業界では新しいOS 稼働への将来展望をプレゼンした頃だ。
・・・ルイと同じようになれとは言わないが怠惰な返答としての『解らない』ではなく理解できるように努めたらどう？」
はい、とヒカルは小さく返答した。

確かに自分は何も知らなかったので、そのように答えるしかなかった。
ミシェルは大きく紫煙を吐きだした。

面白いね、君は。

そう言って、もう一度ソファに座るように勧めたが、彼女はルイを連れて帰ります、とまた同じ事を繰り返した。
ミシェルが同じ事を二度繰り返して勧めたことに何か意味があったのかとちらりと思ったが、彼と話をしているとどうにも苦しい。

あからさまに観察されているということがわかる。

「・・・・あまり話をするつもりもないけれど」
ミシェルはそう言って笑った。
「本当に、日本に帰るんだね」
「はい」
「その間、ルイのことやルイとシャルルの関係改善を頼みに来たのだろ？」
ヒカルは唇を噛んだ。
その通りだったからだ。

恐ろしいと思うミシェルの家を訪問したのは、ルイを連れ帰ることが最大の目的であったが、ミシェルの指摘したことを頼みに来たのも目的の一つだった。

「良いね。合理的で」
彼はおかしそうに哄笑した。
「『ついで』で頼みごとをしようを思うなんて、若い人らしいね」
「そんなつもりでは・・・」
ああ、気にしないことだ。
彼はそう言ってまた煙草に唇を寄せた。

「何かを無償で叶えてもらおうと思うのは、・・・倖せという愚蒙に麻痺しているからだよ」
ルイと同じようなことを言ったので、彼女はミシェルに思い切って言葉をかけた。
「私は戻ってくるつもりです。そしてルイと・・・ルイと一緒に生きてみようと思います。
ルイはシャルルと関係を考え直すと言った。だから、それを信じてみようと思います」
「根拠のない約束ごとに自信満々だね」
「根拠がないから希望を持つことが出来る」
ヒカルは言い返した。
「———なるほど。この先どうなるか解らないから、それに賭けてみよう、と言うことだね」
それこそもっとも根拠のない未来だね、とミシェルは浅く笑った。
「時間がある。まだ、時間がある。だから・・・ミシェルには、ルイとシャルルを助けて欲しい」
「いやだね」
彼は即答した。

「ミシェル・・・」
ヒカルは困ったように声を漏らした。
「あなたは、どれだけ重要な人であるか解っていない」
「誰にとって？シャルル？ルイ？それとも・・・」
そこで一度言葉を句切った。
煙草を唇から離し・・・・ミシェルは強くヒカルを見据えた。

あのときの、狂気の言葉を吐いた時と同じ強い光だった。

「あの薄汚れた一族にとってオレが重要だ、と言ったら、今すぐおまえを殺す」
彼はそう言って、煙草を強く灰皿に押しつけた。
彼が静かに激昂していることに気がつき、ヒカルは次の言葉を失ってしまう。
「あなたは本当に楽しい人だね、ヒカル」
だがしかし、彼はすぐいつもの口調に戻っていた。
微笑みを浮かべて、ヒカルを見つめる。
そして細く長い指で奥の部屋を指し示した。

「‥‥ルイはこの奥。寝室でまだ寝ているよ。
まったくあの朝寝坊にも困ったものだ」
ミシェルはくすくす笑いながら言った。
もう一本、煙草に火を点ける。
「ヒカル。ルイを起こしてきてくれないか」
彼女はその場を離れることができ、少しだけほっとした。
彼の傍に居たがるルイがわからない。

これほど氷のような冷たい眼差しで、自分を閉ざしてしまっているミシェルの傍に居続けると‥‥
凍えてしまいそうだった。
彼の苛ぐような寒さは‥‥どうやったら溶けるのだろうか。
ヒカルはそんなことを思った。
シャルルの半身は、こんなにも孤独で冷たくそして狂気に満ちていた。
この邸は白を基調としていた。
ミシェルの好みかと思うと、少しだけ意外な気がした。
ヒカルは白い硬質の廊下を進み、壁も天井も何もかもが白い空間を抜けて、最奥の白色の扉の前に立った。
「ルイ？」
ノックをするが返事がない。
「入るわよ。迎えに来た‥‥」
ヒカルはもう一度声をかけて、扉を開いた。
厚い扉を開くと、そこも白い空間だった。
これがミシェルの嗜好だとしたら、とても‥‥寒々しかった。
白は無垢を表すが、時々、「無」そのものを感じることが
ある。
シャルルが好きな色だった。
けれどもミシェルの選ぶ、それは‥‥何かを感じるのでなく何も感じなかった。

部屋には誰もいなかった。
広いベッドはシーツがきちんと張られていたし、誰かがそこで数時間前まで眠っていた気配がしない。

「ルイ？」
彼女は中に足を進めた。
起き出してシャワーでも浴びているのだろうか。

続き部屋になっているバスルームも同じようにノックをしたが人の気配がない。
入ってみると、透明なガラス張りのシャワールームも使われた痕跡がなかった。

———部屋を間違えたのかもしれない。

ここはどう見てもマスタールームだ。

ミシェルが居るのであれば、ルイはゲストルームで休むはずだ。
このあたりはルイは律儀だった。
主の許可があったとしても、決して主の使用範囲を侵害することはない。
ゲストルームと間違えて入り込んでしまった。
彼女はそう理解して･･･シャワールームから出た。

そして、ぎょっとして････足を止める。

今までシワ一つ無い白い大きなベッドの上に････
ミシェルが座っていたからだ。
彼はベッドの脇のテーブル上にあるクリスタルの灰皿に手を伸ばして、煙草をもみ消すところだった。
「････部屋を間違えてしまったみたい」
ヒカルはぎこちなく微笑んだ。
彼の猛禽のような視線が彼女を落ち着かなくさせる。
彼は笑っていなかった。
「････ヒカル」
彼は言った。

ヒカルは部屋を間違えた、とくり返し言うと、部屋の扉に手を伸ばそうとした。
だが足が竦んで動けなかった。

ほんの十数歩先。
扉にいくまでの距離なのに体が射竦められて動かない。

■57

「オレは言ったはずだが」
ミシェルは静かにそう言った。
先ほどと同じように･･･彼は静かに憤っていた。
「ルイを選ぶのであれば、おまえの教育もオレがすることになる。
ルイも言っていただろう」
「････ルイはどこなの」
ヒカルの言葉を無視して、ミシェルは続けた。

「･･･愚かな娘だ。ルイを選んでシャルルとルイと家族になろうとしたのか？
　彼らにとってそんな繋がりはまったく意味がないのに」
「･････」
ヒカルは黙っていた。

はやく部屋からでなければ、この狂気と憤怒の雰囲気に気圧されてしまう。
「･･ルイは愛されないで生きてきた。
これからも愛し方を知らないで生きていく。
でもそれはアルディ家にはいらない感情だ。
執着してはいけない。
それなのに、ルイはおまえに執着する。
シャルルに執着する。
これはまったく不思議な現象だね･･･彼は･･･」
彼は笑みを浮かべながら、言った。
「できそこないの薔薇だ」
「違う！」
ヒカルは叫んだ。

ようやく恐怖で張り付いた声が出てきた。
「ルイはできそこないなんかじゃない。彼は完璧だわ。･･･だからこそ解りすぎてしまう。
だからこそ解らないこともある。それは彼の罪でも責でもない」
「それなら、誰がいけないのだろうね」
「････」
ヒカルは黙った。

白金の髪の下から、ミシェルは青灰色の瞳を煌めかせて、少しだけ頬を紅潮させていた。
切れ長の瞳がじっとヒカルから視線を反らさずにいた。
端整な顔立ちの美しいミシェルは、彼よりずっと年下の少女に本気で怒りをぶつけていた。

「彼が随分大きくなるまで、認知しなかったシャルルには罪がないの？
卵子を提供すれば結婚できるとそそのかされた、母親もどきの彼女？
母性が目覚めると困るからという理由で帝王切開を余儀なくされた代理母？
彼には愛を注がず育てろと言った親族たち？
ああ、たくさん罪作りな大人が居るね･･･」
彼は薄く笑った。
ぞっとするような冷たい微笑みだった。

「おまえはそれらの者達を罰する清めの晄だと言うのか？」
「そうじゃない」
ヒカルは唇を噛んだ。
「誰が悪いかじゃない。ルイがどう生きるかだから。
彼が心を閉ざしてしまった原因を追及したり、突き止めたりしても彼は倖せになれない」
「だからおまえが偽りの愛の晄で彼を仮初めの安らぎに導いてやろうというのかな？
･･･その先が断崖絶壁の絶望の淵であるのに前に進めと言うのだね。
･･･冒涜と破滅の笛を鳴らしながら」
ヒカルは言葉に詰まった。

偽りの愛と言われて･･･ヒカルは今叫んだように、そうじゃないと声高に否定できなかった。
偽りではないけれど本物の愛に焦がれた結果かというと決してそうではないことは、彼女自身がよくわかっていた。

ルイも･･ルイも、彼は彼女を愛していない、愛さないと宣言した。

彼は覆さない。
決して。

だからきっとシャルルがヒカルの母に焦がれた感情と同じものは･･･ルイはヒカルに対して持てないだろうと思っていた。
それをミシェルに指摘されたのでヒカルは言葉を出せずに黙り込んだ。
「だからね、ヒカル」
くすくすと彼は笑った。
先ほどの激昂は消えていた。

「せめて、ルイには逸楽の時間を与えてやってくれないか。
おまえの躰で彼を慰めてやってくれ。
愛してないのに高みに登るために、愛しているわとルイに囁いてくれ。
･･･そのためには」
そこまで言うと、彼はゆらりと立ち上がった。
立ち尽くすヒカルに近寄る。

ヒカルは半歩後ろに下がったが、ミシェルはそれよりも早く彼女の腰を捉えた。
ヒカルの上着が床に落ちた。
その音は衣擦れ程度のはずだったのに、ヒカルには大きな鐘が床に打ち付けられたような音量に聞こえた。
シャルルとの抱合は少しどきどきするが、温かい気持ちになる。
でも、ミシェルが近づくとそれだけで冷気を感じる。

「オレに抱かれて闇を一緒に見てくれないか」
ミシェルはそう言うと、一気にヒカルの腰を自分の方に引いた。
「ミシェル！」
ヒカルが悲鳴をあげた。

「ルイは忠告したはずだよ、ヒカル」
ミシェルは微笑んだ。
「この邸に足を踏み入れれば、保証しないと」
間近で見る彼の瞳は狂気の晄が宿っていた。
美しい通った鼻梁を彼女の頬にあてた。

彼は冷たかった。
手の平も、顔も、何もかもが冷え切っていた。
ヒカルは身じろぎしたが、すぐにミシェルの逞しい腕に囲まれて、体の自由を奪われた。
腰を引いて抵抗しようとしたが、彼の片手が彼女の腰を強くまたもう一度、勢いよく引き寄せて彼の躰にぴったりと密着させる。

「ルイを喜ばせるために･･･オレが教えてやろう。
　・・・絶望と愉楽が同時にある世界を。
　光が強すぎて濃くなってしまった闇を。
　愛されないというつまらない苦悶と、愛したいのにそうできない苛立ちを。
･･閨の世界はね、矛盾するものが同時に存在するんだよ･･･」

そして彼は囁いた。

「愛がなくても枕を共にすることはできる。男も女もね」
「ミシェル、ミシェル」
ヒカルは叫んだ。

誰か来て、と叫んだが誰も来なかった。
使用人が居るはずなのに、彼に入室するなときつく言われているのだと思った。
両の手首をもう片方の掌で掴まれてしまった。
こうなればもう、彼女はまったく身動きが取れなくなってしまう。

「ミシェル・・・！」
ヒカルは叫んだ。

しかし、彼はまったく動じていない。
そのまま彼女の手首と腰を掴んだまま、ベッドに無造作に放り投げた。
ヒカルの躰は決して小柄な方ではなかったが、簡単に彼女はベッドに横たわってしまう。

だがすぐに半身を起こして、ベッドに片膝をついたミシェルの脇をすり抜けようと狙いを定めた。
「・・・・いや」
「無駄だ、ヒカル」

ミシェルは、彼女のそんな思惑はお見通しだよと小さく言って、彼女の肩を掴んだ。
そして二の腕を強い力で掴み、彼女を白いシーツに引き戻した。
「自分が贖罪の娘であることを思い知るが良いよ。
　ヒカル。君は永遠の晄だけれど・・・その晄は安らぎの晄だけではなく、時に浄火する焔にもなり得ることも・・・どうしてシャルルは教えなかったのだろうね」
ミシェルはそう言うと、暴れるヒカルの喉に、大きな手のひらを当てた。
首を圧迫する。
ヒカルは途端に息苦しくなった。

きちんと計測したかのように、彼女の白い喉に手をあてて、二本の指で圧迫した。
顔が鬱血していくのを感じる。

「ほら・・人間って簡単だろう？
　簡単に死ぬんだよ。

　･･･ヒカルがどんなに生きる事が大事だと教え説いても死ぬのは簡単だ･･･」
あまりにも苦しくて･･･彼女はミシェルの手に爪を立てた。
彼の皮膚が裂けて、血が滲んだ。

けれどもミシェルはまったく気にしない風で、ますます面白そうに力を込めて、彼女の顔をのぞき込んだ。

「良いよ、ヒカル。美しい。
　人間の本能はね、とても素直なんだ。････どんなにきれい事を言っても、おまえはオレに爪を立てて死にたくないと主張する。････ヒカル。オレを侮辱した罪で地獄の業火に焼かれろ」

だんだん彼の声が遠くなり･･･彼女は本当にこのまま死ぬかもしれないと思った。

まだ、死ねない。
まだ、死ぬわけにはいかない。

そう思ったが、意識が遠のき･･･

苦しみのあまり流した涙が彼女の頬を伝って落ちた。
人前では泣かないと決めたのに、今、苦悶に満ちた拷問と呼べるようなこの恐ろしい状況で、ヒカルは涙を流した。

ミシェルの薄く冷たい唇が彼女の頬にあたり、彼女の涙を滑らかな舌で掬い上げるのを感じた。
「ああ、良いね。ヒカル･･･美しい」
彼女の意識は遠くなっていった。

遠のく聴覚が完全に途切れるまえに、ミシェルの囁きが聞こえてきた。
低く静かな、甘い響きのバリトンだった。

電話口ではシャルルにも似ている口調だと思ったのに、今はまったくそうは思えなかった。

「死ぬより苦しいって･･･どういうことかおまえも知ることになるよ」
彼はそう言った。

■58

「ミシェル。居るのか」

邸の駐車スペースにはこの家のものではない車が停車していた。
ナンバーがアルディ家のものあることから、ルイは厳しい顔でミシェルのベッドルームに入って来た。
シャルルか、ヒカルがここに来ていることは明白だった。

邸の中は静かで、かたん、という音がしたのはベッドルームからだった。
ルイは迷わずそこに進んだ。
「･･･ノックくらいしたら？」
扉を開けるなり、気怠げな声がして、ルイはシャルルに良く似た顔をますます厳しく強張らせた。

ミシェルの前でだけは、ほんの少し、表情を変えることを許されていた。
ルイは外泊はしても、日が高くならないうちに戻ってくる。

そして何事も無かったかのように、いつも淡々とやるべき事をこなす。
それでも睡眠は充分ではないから、時々仮眠して、気怠い午後を過ごし、また夜を迎える。

･･そのくり返しだった。

無機質なミシェルのベッドルームから、煙草の匂いがした。

彼が相当本数を吸っている証拠だった。

「ミシェル」
ミシェルがこのベッドルームを使用することはほとんどない。
陽射しが差し込む向きに作られたベッドルームは眩しすぎると言って、彼はこの部屋には滅多に入らなかった。

扉を開けるなり、何かを引っかけた。

下を見ると･･･ルイは柳眉をわずかに持ち上げた。

････女物の上着だった。
「････ミシェル」
ルイが低く唸った。

ミシェルは面白そうに煙草を口にくわえたまま、投げ出して交差していた足を軽く組み直した。
「おかえり。ルイ」
彼はただいま、と言わなかった。ここはルイの帰る家でない。
そしてルイにとっては、彼の家というものは存在しなかった。
ミシェルも一度も「おかえり」と言ったことがない。

彼らにとっては、建物とか、不動産とか、その程度の存在価値でしかない空間に戻ってくることに挨拶は必要でなかった。
ルイは美しい相貌を引き締めた。
青灰色の瞳が大きく広がり、想定外の光景を目にして･･･少しだけ狼狽していた。

ヒカル。

彼は小さく声に出した。
あれほど執着してはいけない、感情を表に出してはいけないと厳しく訓育されてきたのに、彼はそれでもその教えを一瞬だけ無視した。

･･･広い大きなベッドの上には、ヒカルが横たわっていた。
彼女は顔面蒼白で、胸元や足元の衣服が乱れていた。

ぴくりとも動かない彼女を目にして、ルイは大股で彼女に近寄る。
ベッドの中央に横たえられている彼女は･･･少しも動かなかった。
仰向けに寝かされているが、蝋人形のようにまるっきり動かなかった。
ルイは彼女の首にあざができている様を見て、美しい切れ長の瞳を細めた。

ヒカル･･･

あり得ない場所で、あり得ない体勢で彼女が居ることに説明や理由や状況から導き出される結論を考えている時間はなかった。

―――長い指で彼は彼女の頸動脈に触れる。

そして次に口許に手を当てて浅いながらも呼吸をしていることを確認すると、ほっと小さな吐息を漏らした。

ミシェルはその傍らで、退屈そうに煙草を吸っていた。
「もっと早く帰ってくるか、もっと遅いと思っていたよ」

このタイミングで帰ってくることを予想していたのに、ミシェルはその表情と真逆のことを言って笑った。
「･･･ミシェル」
ルイはベッドの脇に腰掛けて、窓の外をぼんやりと眺めているミシェルに向かって歩み寄った。
すでにヒカルには興味が削がれてしまったかのように、背中を向けて絶え間なく紫煙を宙に向かって浮かべていた。

「少し力を入れすぎた」
ミシェルの言葉に、ルイは彼の肩を掴んだ。
ベッドの脇に腰かけて、宙を彷徨うミシェルの瞳が、ルイを捉えた。

「････ヒカルに何をした」
「････膺懲（懲らしめるために罰を与えること）」
そこでルイは、ヒカルがミシェルの逆鱗に触れるような何かをしたのだと悟った。
ミシェルは積極的には他人と関わらない。
それはシャルルと同じだった。
しかし、彼の持つ基準に反する者には、厳しく攻撃を加える。

その者が滅するまで、彼は攻撃を止めない。

彼はアルディの一族に追放されかねない何かをしでかす狂気を孕んでいた。
ルイが知らないところで、そういったことはすでに経験しているよ、と言いたげなミシェルの物腰だった。

「オレがヒカルを殺すと思った？」
ミシェルは冷笑した。
そういう短絡的な考え方をルイがする限り、あの当主は君臨し続ける、とミシェルは言った。
ルイはミシェルから離れると、ため息をひとつついて、ヒカルに目を向けた。

「ちょっと首を絞めすぎた。
　･･･オレは意識のない女は抱くほど暇じゃないからね」
「首を絞める趣味があるんだね」
ルイはそう言いながら、ヒカルの顔を大きな手のひらで軽く叩いた。
意識がない。
完全に混濁しているが、生命の危険は心配する程度ではない。
「ちょっとね･･･ヒカルが生意気だったから、珍しくオレとした

ことが、少し遊んでしまったよ」
ルイは無言でヒカルを抱き上げた。
彼女は軽かった。
「ヒカルがこの状態だとシャルルが知ったら今はまずい。一度
アルディ邸に戻す」
ルイはそう言って、ヒカルを抱き、部屋を出て行くと言った。
つまらなさそうに、ミシェルはそう、と言っただけだった。
また、煙草に火を点ける。
「ルイ」
ミシェルが声をかけた。
「いつか、その娘がおまえを覆滅させることを知りながら、な
ぜ執着する」
「‥‥‥この人は、シャルル滅するための有効な手札だ」
「手札なら。そんな顔で見るな」
ミシェルは忠告した。

「おまえは若い。ヒカルの母をシャルルが焦がれたように‥‥彼女を焦がれる因子がおまえの中に存在するのであれば、それはそれで良い。
でも、焦がれるあまりに情動に任せて身を滅ばさないように」
最後の忠告だよ、とミシェルは言った。

そして次に「やはり警告にしておこう」と言い直した。

「ルイ。次はない」
「ミシェル。オレは行くよ」
「ああ、今日のところはね。これで許してやろう」
ミシェルはそう言って、行け、と言った。
ルイは彼を振り返らずに、ヒカルを抱いたまま、半開きになった扉を肩で押した。
まだ、肋骨が痛んだが、ヒカルが自力で歩けない以上は彼女を抱いたまま運び出さねばならなかった。
胸の中のヒカルを抱えあげて、そのまま部屋を出た。
ミシェルは振り返らず、背中を向けたままま煙草を吸っていた。

次はない。
それはミシェルも同じだ。
ルイは心の中で呟いた。

なぜ、彼女を凌辱しなかったのか、理由は尋ねなかった。
意識のない彼女を意のままにすることがつまらない、とミシェルは言った。
しかし、ミシェルは目的を遂行するためなら、つまらないという理由で方法を変更しない。

彼は飽くまで彼女を辱めて、そして地の底に堕としたはずだ。

･･･ヒカルが言ったことが相当、堪えたな

何を言ったのかはわからなかったが、相当、ミシェルを怒らせたようだった。
だから彼はヒカルを放置して･･･ルイの帰宅を待った。
彼の中で、ゲームの戦略が変更された。
ルイは緊迫した美しい顔をさらに引き締めた。

自分には、味方はいない。
シャルルもミシェルも、所詮は･･･自分がいつか、滅ぼすことになる。

新しい種を作るために、どうしてもヒカルが必要だった。

彼はゆっくりと･･･ぐったりしたヒカルを刺激しないように、大きく歩幅をとって歩いた。

外に出れば、なかなか戻らないヒカルを心配した運転手が右往左往していることだろう。
ルイは青白い顔のまま、意識を失ったヒカルをそっと見下ろした。
彼女の唇は紫色になり、顔面は鬱血の後急激に血流が戻ったために蒼白になっていた。

浅く呼吸をしているのは、ミシェルに圧迫された頸動脈がまだ痛んでいるからだった。
うっすっらと赤くなっている。
やがて、シャルルの目にとまるくらい赤黒く変色してくるだろう。
ヒカル。
ルイは無表情に意識のない彼女を見つめた。
どうして、君はそんなに迂闊なんだ。

ここに来てはいけないとあれほど念を押して忠告したのに。
保証はしないと警告したのに。

それなのに･･･彼女は無防備にこうして彼を迎えに来たと行って、ミシェルの挑発に簡単に乗ってしまう。
そして彼の冷たい、触れてはいけない部分に簡単に触れて、そして逆襲に傷つくとわかっている

のに、なぜ、君はそうして‥

･･･意味のない関係を築こうとするのか。

まったく理解できない。

ルイはふと‥彼女の白い顔を見つめて･･･
青灰色の瞳を瞬かせた。
切れ長の若者特有の張りのある瞼が少しだけ痙攣した。
見事な金髪が揺れて明るく輝いた。

彼の腕に抱かれて、重力に従ってヒカルの茶色の髪が垂れて、彼の腕に絡まった。
ルイは少しだけ微笑んだ。

そして･ ･･ルイはヒカルにゆっくりと顔を寄せると･･･

胸に抱いた彼女の柔らかい唇に、思いついたように自分の薄い唇を押し当てた。
もう、何度か重ねたことのある唇であったのに。
ルイは、この上なく甘美で痺れにも似た感覚を味わった。

―――目的のない、意味のない接吻をした。

■59

意識を失うのはこれで2 度目だった。

しかし、まるっきり暗闇に居るのではなく、ところどころ感覚を覚えている。
ヒカルは、彼女の躰を這う滑らかなミシェルの唇の感触と･･･

愛おしげにけれどもぎこちなく重ねる誰かの唇の感触を思い出していた。
アルディの良く似た男達は、屈服されることはない。
逆に人を屈服させる側の人間だった。
けれども、こうして力にものを言わせる方法で彼女を荒らすことはできないと、ヒカル自身が思っていた。

魂は彼女だけのものであり、そしてその躰は誰かの所有物にはならない。
決して。

彼女が目を醒ましたのは、勢いよく扉を開ける音に驚いたからだった。

「ヒカル！」
シャルルの声だった。

彼女は霞む目を瞬かせながら、躰を起こした。
ここは彼女の部屋だった。
頭がぼんやりして、まだはっきりとしない。
彼女は身を起こしながら、額を抑えた。

ゆっくりと戻る全身の感覚とともに･･･自分の頸が酷く痛んだので、手を当てた。

・・・・ああ

ヒカルは小さく声を出したが、その声は嗄れていた。
ミシェルに締められた声帯がまだ痛んで、復活していないらしい。
ミシェル。
その名前を思い出すと同時に、彼女は茶色の目を見開いた。
自分がなぜ意識を失い･･･こうして喉元に手をおもわずあててしまうほど痛めてしまっているのかということを。

「シャルル！」
飛び込んできたシャルルにヒカルは叫んだ。

彼はヒカルのメールを受けて、遠方に出向いていたところを戻って来たらしい。
かっちりとしたスーツを身に纏いながらも、その表情は憔悴していた。
きっと、最も速い移動手段で帰ってきたはずだった。

それでも時間がかかりすぎると言って、彼は最後は自ら車を走らせて戻って来たと後になって聞いた。
「今日は一緒に夕食を取れそうな時間に帰ってきてくれたんだね」
嗄れた声でヒカルがそう言ったので、シャルルは息を呑んだ。
「状況を･･・ああ、それはもう良い。････説明は後で良い」
彼は、ヒカルの顔を見てほっと一息ついた。
ヒカルを運び込んだ後、ルイは出て行ってしまった。

今日は戻らない、と言っていたと言う。

そして医師を呼び、手当の指示と応急処置の顛末を話すと、そのままアルディ家を後にしてしまった。

ヒカルはその話を聞いて、ルイがここまで自分を運んでくれたのだと知った。
ルイ。

ヒカルは小さく呟いた。

たとえこうなることを予測して、ルイの携帯電話をミシェルに渡していたとしても、ヒカルはこれだけでもルイはやはりミシェルと同じではないと思える。

ミシェルに攻撃された後の記憶はない。
けれども自分の躰に残された辱めは、頸に残る痣だけだった。

･･･ミシェルの激昂に触れてしまったから。

ヒカルはそう確信していた。
ミシェルは誇り高い。
決して自分を明かさない矜持を持っている。
栄辱に関しては人一倍･･･いや、シャルル以上に敏感であるはずだった。
彼の煙草を吸う仕草は拒絶の合図だ。

だから、ヒカルをどうこうしようと言うのではなく･･･アルディ家の絡まった薔薇の蔓の棘で、誰かを刺さなければ、棘同士で深く沈むことになるから彼女にああいう仕打ちをしたのだと思った。
刺さねば棘同士で傷つけ合うから。
その「誰か」がヒカルであった。
それだけだ。

「どうして君はそんなに迂闊なんだ」
アルディの男性に口々に言われた言葉に、ヒカルは苦笑した。
「シャルルも同じ事を言う･･・ルイとミシェルと同じ」
「ヒカル」
シャルルは彼女の名前を強く呼んで、窘めた。
白金の髪を揺らして、シャルルが少し声音を強張らせた。

ミシェルと同じ容姿なのに、こうして彼女の枕元に近寄る彼か
らは、ただ愛おしいという感情だけしか湧いてこない。

「君は今、自分の状況をわかっているのか」
「･･･わかっていると思うけれど」
その声はまだ掠れていた。
「･･･ヒカル」
シャルルはまた彼女の名前を呼んだ。
彼は憔悴していた。
どうして彼らに関わるのだと目が訴えていた。
「ルイを迎えに行ったら･･･ミシェルが居て。話をしていたら急に気分が悪くなったから、休ませてもらっていたの。そこをルイが連れ帰ってくれて･･･」
彼女は思いつくままにそう言った。
本当のことは言うつもりはなかった。
「･･･そういう事を言って、気が済んだ？」
シャルルがそう言ったので、ヒカルは口をつぐんだ。
「オレは医師だ」
シャルルがそう言って･･･ヒカルの喉元に手をやった。
ひんやりした感触が彼女の首筋を撫でた。
彼の細く長い指がヒカルの痛々しい頸元をなぞり、そして離れると、シャルルは怒気を孕んだ声で言った。

「ヒカルはそれで良いのか」
「･･･はい」
彼女はそう言った。

シャルルが事を荒立てずに納めようとするヒカルに、それで良いのかと尋ねたことに対する答えだった。
彼は端正な顔を少し曇らせると･･･ヒカルの頬に大きな手のひらをあてた。
「････昔は、こういう事態になったのなら。
　真っ先に相手を殺しに行く勇気と勢いがあった」
彼は独り言のように、静かに話した。哀しそうに。

「かつては、ミシェルと家督争いで世間を巻き込んで堂々と･･争ったこともあったよ。
けれどもこうして一族の頂点に立ったら･･･思い通りに心のままにならないことがあるのだと知り、そしてオレは昔のままで居られないことにとても･･・そう、とても苛立った。

オレを解放してくれた君の母を裏切る気がした。
彼女に出会う前は、今のオレよりもっと酷い毎日を過ごしていたから」
「シャルルは、今は自由ではないの？」
「そうだね」
彼は静かに微笑んだ。

「自由にならないこともあるけれど、自由になることもある。
君を護り育て、慈しみ、そして倖せにすることもできる。
･･･当主の座にしがみついているわけではないけれど、オレは･･･倖せだよ、ヒカル」

シャルルは「青春の輝き」の時代を過ぎて、ヒカルの母と父を失って･･そしてヒカルに出会ってようやくそう言うことが出来た。

思うままに生きろと言ってくれたヒカルの母の声が･･あの人の声がまだ耳に残っている。
決して褪せない記憶が彼を苛んだ。
けれども今はこうして･･･あの人が残した晄が彼を包んでいる。
これを僥倖と言わずして、何をそう言ったら良いのだろう。
憂いを含んだ瞳をヒカルに注いだ。
彼はこの感情を持て余していた。

だんだんあの人に似てくるヒカルを手放したくないと思うのに、これ以上ここに置いては彼女を壊してしまうと確信していた。

･･･所詮は見てはいけない夢を見たのだろうか。

一生分の夢を見たとあの人に告げた時に、彼はもう充分だと思った。
それなのに、今、こうして夢の続きを切望している。
倖せで穏やかで静かで時に心躍る時間をヒカルと過ごすことで、彼の狂気は表に出ることなくここまで来た。
ルイを愛しきれないシャルルをヒカルは黙って見守った。

そして自分のせいでそうなってしまったと彼女は想って心を痛めている。

･･･遂には愛のない結婚をすることで、彼女はシャルルとルイに家族になろうと言い出した。

こんなに若い彼女がそこまで思いつめてしまうことにとても･･･とても苦悶する。

「･･･ヒカル。ルイのこと･･･」
シャルルは切り出した。
「ルイのことを愛せるのか」
彼は尋ねた。
ヒカルは薄い茶色の瞳を大きく見開いた。
シャルルからその質問をされるとは思っていなかった。
「････」
しばらく黙っていた。
シャルルの端正な顔を見つめるだけだった。

彼女はシャルルの顔だけは躊躇いもなく見上げることが出来た。
幼い時から共に居た、兄でもあり父でもあり最大の友人であるシャルルを見て。

･･･嘘は言えないと思った。

彼女は白い顔を少しだけ傾けた。
「愛せると思う」
それは今、ルイを夢中で愛しているという回答ではなかった。
けれども徐々に育てていく愛もあるとヒカルは信じることにした。
シャルルが長い年月をかけて、ヒカルに注いだ愛は、間違いなく、それだった。
他人の子をここまで育ててくれた。

自分がいかに恵まれているのか･･･切なくなるくらい痛いくらいよく解った。
ルイには与えてやれない理由が、シャルルにはある。
それはいつかヒカルに話してくれると信じていた。
彼が注いでくれた愛を、ルイに戻さなければいけない。
そう思った。
シャルルはそのヒカルの考えを否定しなかった。

愛をするというのは、考えたり決心したりするものではないと教えたかった。
けれどもシャルルにはそれを教える資格がなかった。
ヒカルはそれをわかっていたから、口に出さなかった。
シャルルも口に出さなかった。
愛を作ろう。
ヒカルはそう決めていた。

人工的に作るのではなく、自然に目覚める愛を･･･彼と育てようと思った。

その芽は、見えないけれどきっとあると思う。
地中深くに眠っているけれど、きっとルイの中にもある。
「･･･わかって欲しい」
ヒカルがそう言ったので、シャルルは彼女の頬をまた、ゆっくりと撫でた。
ヒカル。
どうにかなりそうなくらい･･･君を大切に想うこの気持ちをヒカルが畏れる前に･･･

君を壊す前に、どうか遠く逃げてくれ。

誰も手の届かないところで、誰も知らない男と恋に堕ちて･･･
そして幸せになってくれと何度も祈ったのに。
君はここでルイと新しい種を育てると言う。
オレは･･･枯れて君たちの苗床となることは厭わない。
それがオレの贖罪なら･･喜んで･･･喜んでそうしよう。
この想いを悟られてはいけない。

娘ではないと彼が自ら言い切った時から、すでにわかっていたことなのに。
もう、彼女なしでは居られない。

彼女なしでは正気を保つことが出来ない。

彼女を傷つける者はこの身を犠牲にしても、雷電を堕として焦がし尽くそう。
そして･･自らも焼き払って君へその残った灰を捧げよう。

これほどまでに身を挺してシャルルとルイを思う彼女にしてやれることは、それだけだ。
シャルルは微笑みながらそう考えていた。

■60

白い無機質な邸にはあまり関心がない。
もともと執着があまりないというよりも愛執を禁じられてきたルイ・ドゥ・アルディは、帰るところがないからそこに立ち寄るだけだ、と自らに説明をしながら、磨かれた床を鳴らして中に入った。

来客があるのはわかっていた。
誰が来ているのかもわかっていた。
そこには、自分と良く似た同じ顔の男達が座っていた。

ひとりは悠然と煙草を吸い、もう一人はそんな彼をじっと冷たい瞳で見つめていた。

「･･･話は終わったの？」
ルイは言った。
「いや。これから」
ミシェルが応える。
シャルルは顔色を変えずにルイに振り返った。
「おまえにも話がある･･･座れ」
当主の言うことは絶対だ。
ルイは黙って座った。
先般、ルイとシャルルと距離を置いてヒカルが座ったように、彼らと距離を置いて座った。
それは心の開きと同距離だった。
ルイにもシャルルにも同じ距離を持ったヒカルのことを考えると、少し･･･苛立った。
普通であればこれほど親しい血縁関係であれば、そういったことは決してないはずの微妙な均衡が保たれていた。
彼らには見かけ上の主従関係があり、それを愉しんでいる者も居れば、いつか熾ってやると狙う者もいた。

「･･･ヒカルに手ひどくやられたようだな」
シャルルが切り出した。

「ああ、これ？そうだね、随分と･･荒い気性の仔猫が迷い込んだようだ」

ミシェルはまだふさがっていない手の甲の傷を見ながら、艶やかに微笑んだ。
「撫でたら引っ掻かれた」
「今度やったら貴様の存在ごと消すからそのつもりで」
「今度･･･仔猫は国外に逃がすのだから、ありえないことを前触れされてもね」
ミシェルは泰然と構えた。あまり意味はないと思うけれど、と付け加えた。
「それにしても、フランスの華と星辰の子がこうも心を奪われる仔猫というのは･･･興味深いね」
「ミシェル。ヒカルは獣ではない」
「獣王が人の子を獣でないと否定するなんて」
ミシェルが反撃した。
「シャルルのやっている事をヒカルが知ったら･･･・なんて思うのだろうね」
「ミシェル」
低くシャルルが彼の名を呼んだ。

シャルルは尖った顎を上げて、同じ顔をした男を高圧的に見下ろした。

「ルイの成人と同時に、ミシェルの後見登録を破約する･･・今までご苦労だった」
「それで終わらせた気になっても無駄だよ、シャルル」
ミシェルは微笑んだ。
「オレとルイの共同事業は継続されるし････ルイに課した事業増資の話は、オレにも深く関わることだ。･･･アルディの事業が傾いても興味がないが、オレの邪魔をするのなら、シャルルの方こそ･･･」
ミシェルはそこで口を閉じて、また艶やかに美しく綻んだ。

「その命をもって贖え･･もしくはあの人の子の命をもって償ってもらう」
「口に気を付けろ」
「お互い様だ･･･我が当主よ」
深く低いバリトンが良く響いた。
ルイは黙ってその様子を眺めていた。

大人達が話していることは、一見、ヒカル・クロスの処遇の問題であったが、それだけの話をしているのではなかった。
彼らは言葉と言葉の間に、見えない通信網で頻繁にやり取りをしている。
視線や言葉の端々の口調や、仕草ひとつからでも会話をしている。
シャルルはミシェルの主従関係を強調して確認し、逆らうなと念押しをしていた。
ミシェルはルイの後見を解除しても無駄であるとシャルルに戒飭した。
ルイは･･･彼は黙って傍観することにより、彼らの思惑から外れた存在であり、ルイに何を命じてもそれはやがて無に帰すと訴えた。

アルディ家の3 人の男達は･･･微妙な均衡と緊張を保ちながら、激しく闘っていた。
一見穏やかな口調で静かに話をしながらも、彼らは激しい怒号に近いやり取りを繰り返している
。
「クロス氏の容態が思わしくない。だから帰国させる。
それだけだ。
･･･ルイとの婚約もまだ年若くて外聞もあるから、一度外に出す。
反対はしない。クロス家がもたらす医療ルートや事業提携は魅力的であり、損はしない」
シャルルは淡々と言った。

ヒカルを大事にする理由を客観的に説明した。
彼の主観的価値観は全く語られなかったが。
「手塩に育てた娘同然のヒカルを、ルイに獲られた腹いせ？」
「つまらない干渉しか持てないのであれば今すぐ隠居したらどうだ。
―――もう一度あの島に戻ってもらっても良いぞ」
シャルルはミシェルを睨んだ。

ミシェルは肩をすくめて煙草の火を消した。
白金の髪をかき上げて、シャルルは話はそれだけだ、と言った。
「ヒカルの上着を取りに来た。あれが心配しているからな。
ルイも連れて帰る」
「それは構わない」
どうぞ、とミシェルは言った。
灰皿を手に持ち、ぎゅっと煙草を押しつぶしたばかりなのに、もう次の煙草に手を伸ばしていた
。
そこで初めて、シャルルはルイを見た。
「ルイ。･･･戻る」
ルイは黙ったままだった。

こうして自分はいつもシャルルとミシェルの間を往復している。
どちらかの傍に居れば、どちらかの元に行けば目の前の相手は
苛立つのだろうかと想像しながら過ごしていた。
ミシェルの傍に居れば落ち着くかというとそういう問題ではなかった。

･･･彼には居場所がなかった。

ミシェルが居を転々とし、ひとつところに連続して滞在するのは最低3 日間だけと決めて実行して

いるのも、彼なりの安全対策であり、ミシェルはこれまで何度も命の危険にさらされてきた。
彼を抹殺したいと思う人間は一族であれ外部であれ多かった。

フランスの華と称されて当主の座に君臨するシャルルより、その実弟でありながら栄華を極めており、当主と二つ並ぶ玉碧と言われながら謎の部分が多すぎるミシェルの方が･･・世から消すのは簡単だと考える浅薄な者が多かった。
今も多い。
どんなに優秀なSP が付いていたとしても、車に乗り込む瞬間や邸に入る瞬間などの「一瞬」の隙を狙われる。

ルイはその場面を何度も見てきた。

そしてその都度、恐怖で打ち震えるどころか、酷く･･酷く興奮した。
そしてその時だけは、生きていることを実感した。
自らも何度も誘拐されそうになったり、拉致されそうになったりした経験を持つルイは、生命の危機に直面したときだけ、生きていることを強烈に実感する。
長じてからルイは星辰の子と呼ばれて、誰かに狙われることも少なくなっていった。
フランスの華の実子という事実が浸透してからは、彼はますます虚無感を募らせた。

そしてあるときに気がついた。

誰かから何かを奪うときにも同じ感覚を味わうことに気がついた。

････シャルルがルイを薔薇園で肋骨を折るまで打ちのめしたとき。

その瞬間、彼は強烈に生きていると実感した。
気が遠くなりそうな猛烈な痛みと、躍る血飛沫が見えたとき。
怒号と叫び声が混じり合う空間で、彼は生きていると感じた。
だから、本当はあのまま・・・死んでも良かったのにと思っていた。

シャルルから何もかもを奪うと決めていたのに、あのままシャルルに屠られても良いかな、と考えていた。
だから反撃しなかった。

実子殺しの罪でシャルルが一生苦しむのなら、それも妙案じゃないかと、激しく殴打されながら、低俗的なことを考えていた。
ヒカルが静止しなければ、高い確率で、それは実現したのに。

そしてそんなヒカルを失うことを畏れるシャルルは、彼女を護るために今度は遠ざけようとしている。

･･･恕さない。
ルイは呟いた。

誰をだろうか。
誰を恕さないのだろうか。

行くぞ、と声をかけられて、ルイは立ち上がりながらミシェルをちらりと見た。
ミシェルはルイにちらりと視線を流した。

･･･また後ほど
視線がそう言っていたのでルイは少し頷いた。

「ルイ。アルディ家に戻ったら、婚約者殿によろしく。
ああ、それから、女遊びは見えないところで昼間にやれ。
･･･朝帰りは仲違いのもとだし」
ミシェルは微笑んだ。
そして煙草を持ったまま、軽く手を挙げて、別れの挨拶をした。

「････迷った仔猫は誰に拾われてしまうか、わからないからね」
ルイの美しい叔父はひとり言笑した。

■61

「･･･ヒカルの帰国を早めることにした」
車の中で、シャルルは外を眺めながらそう言った。
「そう」
ルイは感情の抑揚なくそう言った。
シャルルはそんなルイを見ようとしないで、伝えるべき事だけ言う、と言いたげにごく短くシャルルの決定した事項を伝えただけだった。
今般の件では、シャルルは相当激怒しているようだった。
彼が何も言わないのがその証拠だった。

いくらルイとミシェルを煙たく思っていても、彼らはアルディ家の一員であり、重要な役職を締めている要人なのだ。

シャルル一人で切り盛りできる規模では、もうなくなっていた。
だから彼の感情や意志だけではどうにもならないことがあり、それを鬱陶しく思っているシャルルは、ヒカルが居て、ようやくこちらとあちらの世界の狭間の均衡を保つことが出来ている。

帰るところがあるという錯覚が、シャルルの正気を保つ、醜の御楯となっている。
ルイには帰るところはない。
アルディ家はルイの居場所はない。
「･･･大事にしてやってくれ」
シャルルはぽつりと言った。
ルイは気付かれない程度にシャルルに注意を向けた。

彼は肘をついて、唇に細く長い指をあてて･･・そして眉根を寄せて瞳を閉じていた。
苦悶に満ちた表情で、シャルルはその言葉を吐きだした。さり気ない風を装って。
「･･･言っていることが矛盾している」
ルイは言った。
「大事にするさ。オレはオレを愛さない女を妻に迎える。
オレを決して求めない人間が苦しみ悶えながら、墜ちていく様を、
実父が苦しむ様と同時に眺める日を楽しみにしている。
････それなのに、シャルルは彼女を逃がそうとする」
「饒舌だな」
シャルルが冷笑した。
軽く酷薄そうな唇を開いて、目を少しだけ開いた。
ミシェルと同じ晄だった。
彼の中の狂気を間近で見て、ルイは背中を撫で上げられるような感覚を味わう。
感情を押し殺した、冷え冷えとした眼が、実子であるルイを見据えた。

「ルイ。ヒカルはおまえをいつか愛するようになる。それまで待て」
「だからそういうくだらない感情はいらない」
ルイは言い返した。

「オレは待った。生まれたときから。
いや、生まれてくる前から待った。
だからもう待たない。
･･･ヒカルをこのまま奪うのも良いが、それではまだ足りない。
だから、シャルルが定めた期日まできっちり待ってやる。
その方が・・もっと苦しめられるから。
それなら待ち望もう。

おまえ達が･･･苦しみ悶える様を見られるのなら、シャルルの定めた時間は短い期間だよ。
それでもオレの意志は変わらない」
ルイは小さな声で言った。

自分の影に語りかけるときと同じ声音だった。
良く似た、未来はきっとこういう顔立ちになるであろうと思われる、もう一人の未来のルイに向かって言った。
ルイは持っていた煙草に火を点けた。
「おまえもか」
そう言ってシャルルは整った怜悧な顔をしかめた。
「嗜み」
ルイはうっそりとそう言って煙草を吸った。
大きく息を吸い込んだ。
むせる寸前まで肺に煙を入れる。大急ぎで吸い込んだ。
そして･･･一気に吐きだし、脳内の痺れが急速に広がるのを感じながら、ルイは煙草を持っていない方の手で金髪をかき上げた。
車内に紫煙が充満したが、シャルルは眉一つ変えずに何事もなかったかのようにまた横を向いて考え事を始めてしまった。

ルイはその様子を満足げに見ていた。

シャルルがヒカルを国外に出そうとしている。
予定を繰り上げて。
想定外のことや予定の変更を決してしないのに、シャルルはヒカルに関することだけは適応除外を用いる。
だが、彼女が選んだのはルイだ。
ルイと愛のない結婚をして、家族を作ろうと言う。
愚かしい女だ。
ルイは心の中で呟いた。
しかしその語気は弱々しかった。

当主の考えでは、おそらくこのままルイにもミシェルにも面会させずに早急に出国させてしまうだろう。
手続きや準備は二の次にするつもりらしい。
それはそれで想定内であったが、ヒカルの居所を知らないままでは都合が悪かった。
彼女に逃げられては元も子もない。
でもその一方で、彼女はきっとアルディ邸に戻ってくると思っていた。

根拠がないので確信と言わないだけであったが、きっとそうなるだろうと予測していた。
その時･･･アルディ家との関わりを一度絶った彼女が、新しい価値観の元に生活をした後に今のお人好しで愚かで世間知らずのままで居るとは限らなかった。
彼女が手をさしのべるのが、ルイなのかシャルルなのかで今後の手順を変更しなければならなかった。

ヒカル。
オレ達は契約をした。
契印を付した。

彼女の白い額に口付けをした。

何度も唇を合わせた。

だから、オレを裏切るな。
オレをがっかりさせるな。
オレから逃げたその時は･･･

ルイはまた煙草を吸った。
ミシェルと同じ仕草だった。

ルイの叔父は、決して煙草を好んでいるわけではないとその時に知った。

ヒカル･･その時は、一緒に滅んでくれ。

彼はまた紫煙を吐きだした。
人形のように動かないで彼を無視し、完全に自己だけの世界に入り込んでいる彼の実父に向けて切ない吐息のように煙を吐き出した。

■62

シャルルが覆すつもりのない決定に「そう」とだけしか応えないのは、アルディ家の間違った教育からきているのだろうか。
ルイもヒカルも、どういうわけかいつも意に沿わないけれど従わなければならないことに対しては「そう」とだけ言う。

もっとずっと先の予定であったものを、彼は繰り上げてしまった。
もう何日もない出発の日を突然告げられて、ヒカルは「そう」とだけ静かに応えただけだった。

もっともっと、理解できないと言って説明を求めて怒り出すかと思っていた。
シャルルはヒカルにごめんよ、と小さく言った。

「シャルル・ドゥ・アルディが謝った」
ヒカルが冗談めかしてそう言わなければ、彼はずっとヒカルに囁き続けたに違いなかった。

長く暮らしたアルディ家を去り、ヒビキヤがほんの少しだけ在籍していた全寮制の女学校入ることが決定すると、ヒカルは「やることがないから」と言って、薔薇の世話の手伝いを始めた。

彼女が準備するものはほとんどなかった。

ルイが一度家を出たときにその荷物の少なさにヒカルが唖然としていたが、彼女も同じくらい持ち物がなかった。
シャルルが気を配ってあれこれ持たせてやろうとしたが「男の人はこれだから困る」と笑って申し出を遠慮した。
「そのかわり」
ヒカルは言った。
「薔薇の世話の手伝いと･･･最終日には一緒に街にショコラを買いに行こう」
ヒカルは提案した。
いつか、彼女が幼い時に熱を出して延期した買い物だった。

つい最近まで、シャルルとヒカルはよく出かけていた。
お忍びでいろいろなところに行った。
その時間が懐かしい、とヒカルが遠くを見て行ったので、シャルルは少し言葉に詰まった。
彼女は金品も受けとらない。
豪華な支度もいらないと言う。

ただ、質素に毎日同じ日々を過ごし、最後はシャルルと時間を過ごしたいという慎ましい願いしか持っていなかった。
日中はルイと何度か話をしようと試みているようであったが、彼は生活を改めることなく、別棟に籠もり、ヒカルとまったく違う生活サイクルで日々を過ごしていた。

まるで避けているみたいだとヒカルがこぼしたが、シャルルはルイが頻繁にヒカルに会いに来た

らそれもいつもと違うと言ってヒカルは心配するはずだ、と宥めると、彼女は小さく声を漏らして「ほんとうだね」と言って笑った。
その笑い方があの人に似ているので、シャルルはますます切なくなった。
彼が決めたことであるのに、その日が到来しなければ良いと思った。

ヒカルは毎日普通に過ごした。

ぎりぎりまで学校に通い、夕方にはシャルルを待ち、朝は最も状態の良い薔薇を彼のために摘み取って執務室に飾る。
夜はシャルルと寒くなってきたねと語りあい、そして休む時間になるとお休みなさいと就寝前のキスをして部屋に戻る。
そのくり返しがあと何回続くのか、シャルルには数えることが容易であったのに、あと何回、と数えることを止めてしまった。

あまりにも辛くて。

身を切られる想い、というのはこういうことを言うのかと思った。

あの人は突然いなくなった。

その前に、シャルルは、彼からあの人の元を去った。
彼の友に返した。行け、と言って背中を押した。
でも今度は違う。
徐々に･･･「その時」が来るのを静かに過ごす。
穏やかで静かに日々を送る。
決めたのはシャルルなのに彼はヒカルを見つめ続けて居たかった。
彼女の居ない日々は考えられなかった。
でも彼女は行くと言う。彼が行けと言ったから。
「シャルルが決めたのならそれが理由だ」と彼女は言った。
使えきれない何かを汲み取る優しさをヒカルは持っていた。
それはシャルルが与えたものではない。教えて身につくものでもない。
矛盾する狂気に苛まれて自分はこのまま･･あのときと同じように墜ちていくのではないかと思ったが、せめて墜ちるのであるならばヒカルを見送ってからにしたかった。
彼の全身全霊でもって、ヒカルを護ろうと決めていたから。

本当は護られていたのは彼の方だったのに、彼はヒカルを護りたかった。

でも何度も傷つけた。
ルイを愛していないのに、愛するように努力するとヒカルは言った。
それを止めろと言えなかった。

そうすれば彼女とずっと一緒に居られると、シャルルは思ってしまったから。
いつかルイも本当に彼女を愛するときが来るだろう。
もう、あれほど惹かれて焦がれているのだから、彼がその事実
に気がつきさえすれば、その事実を受け止めさえすれば、きっとルイはヒカルの太陽になるはずだった。

ヒカルは誰にでも愛を与えることが出来る。
あの娘は愛せない者を、自分を偽ってまでは受け入れはしない。
愛されなくても良い。
ヒカルを実子の娵として迎え入れることで、彼女との関わりを絶ちきることなく継続することが出来るのであれば、それでも良いと考えていた。
もう、失うのはごめんだシャルルはそう呟いた。
「ヒカル、ショコラは好きなだけ買うと良いよ‥‥」
シャルルは奇麗な微笑みでそう笑った。
熱心に薔薇の手入れをしていたヒカルは顔を上げて笑った。
「ほんとう？嬉しい！」
ああ、ヒカル。
永遠の晄の子‥‥オレの天使。
君のその笑顔を護るためならどんなことでもできる。
だからもう少しだけ。
もう少しだけその笑顔を見せていてくれないか。

君が、消えてしまうその瞬間まで、どうか笑ってオレに微笑んでくれ。

その微笑みひとつひとつを忘れないように褪せないように記憶していくから。

■63

ヒカルは普段、あまり希望を言わない。
けれども彼女はいくつか申し出をした。
「薔薇の世話の仕方を教えて欲しいので薔薇園の世話を手伝わせて欲しい。
それから‥日本の気候でも良く育つ薔薇の鉢植えを一つ欲しい」
これは快諾した。

「ショコラを買いに行こう」
これも約束した。
「最後に･･･ひとつ、お願いがあるのだけれど」
「具体的にどうぞ」
シャルルは微笑んで言った。

彼女との残りの回数が少ない食事で、ヒカルは食後のデザートが美味しかったと感想を述べた後に、こういった頼み事を言い出した。
すでに薔薇園の世話は任せているし、ショコラの買い出しはショコラで有名な通り一帯を押さえた。

ささやかでつましい願い事だと思う。
若い娘らしい願い事であるならば、もっとたくさん我が儘を言うところなのに、彼女の願い事は、すべて、シャルルのことを案じての申し出だった。

彼が薔薇園を枯らさないように、薔薇園を管理して欲しいと遠回しに言った。
ショコラの買い出しは、彼がかつて果たせなかった約束だった。
最後の願い事はなんだろう。
ヒカルは櫻色の唇をカップから離しながら微笑んだ。

「それは当日に。今から言うと恥ずかしいから」
「それなら楽しみにとっておこう」
「そうだね」ヒカルは少し笑った。
「ルイとは結局逢えないから、サーバを立てて、メールをすることにした」
「サーバの管理はルイにさせよう。････ここからマシンを持って行きなさい」
「ありがとう」
ヒカルは申し訳なさそうに礼を言った。

彼女はこの館での対象セキュリティレベルは最高レベルの人物であったが、客人の待遇だった。
長い滞在で、すでに家族も同然だったのに。
それなのに彼女はこうしていつも遠慮深い。
「なんでも叶えてやろう」
シャルルは笑った。
本当にそうするつもりだった。
「ほんとう？約束よ」
「シャルル・ドゥ・アルディの名前にかけて」
わからないことに名前で誓いを立ててはいけないとヒカルが苦笑いした。

シャルルはこの上なく美しい一粲をヒカルに見せた。
「オレを誰だと思っているんだ？」
その言葉に、ヒカルが若い娘らしく朗らかに笑った。

———ヒカルのためなら、守れない誓いはない。

彼女がもたらした数々の幸せな想い出は何にもかえられない。
運命の人と定めたあの人との焦がれるような日々よりもずっと長く過ごしてきた。
もう、自分の一部になってしまっているようなそんな錯覚さえ覚える。
彼の友であり娘のような存在でありそして愛する人の娘を心から愛していた。
あの人とは違った愛だった。
けれども、間違いなく･･･シャルル・ドゥ・アルディはヒカルを失いたくなかった。

覚悟も予感もなにもなく突然消えていなくなることほど辛いものはない。
まだ、遺体は出ない。
もう出ないだろう。
焦土と化したあの地域も今は緑がぽつぽつと生えてきた。
いつか、忘れ去られた荒野のようなあの墜落現場も･･･元通りになる時がくる。

あの人の忘れ形見をこうして見ていると眩しくて眩う。

若く美しく、あの人とシャルルが出会った頃に近くなってくる。

もう一度あの瞬間から始めようとは思わなかった。
ヒカルと恋に堕ちたら最後･･彼は戻ってこられなくなる。
いつか、ヒカルを彼女の名前で呼ぶときがきっと来る。

その時に･･･ヒカルを傷つけて自らも戻ってこられなくなる。
だからこれは恋でも愛でもなく、そう･･･情だと言い聞かせた。
何度も言い聞かせた。
「楽しみだ、本当に」
シャルルはまたそう言った。
「ヒカルの方こそ忘れるな」
「大丈夫。それが一番欲しかったものだから」
ヒカルはそう言って微笑んだ。
お茶が美味しいね、と言ったので、それなら茶葉を持たせよう
と彼が言うと、ヒカルは持ちきれないよと手を振った。

「これからは女子寮暮らしだしね。必要なものが必要なだけあれば良いよ」
「君の母上はそんなこと言わなかったぞ。
こっそりアルディ邸の美術品を持って帰ろうとしたり、あちこち壊したりして、本当に困った人だった」
「ああ、私もきっと同じだわ」
ヒカルは笑った。
シャルルの大事な薔薇を持ち出そうとしているから、と言うと、シャルルはおかしそうに言い返した。
「黙って持って行こうとするならそっくりだね、と言ってやるところだよ」
ヒカルはそうするのだったわ、と冗談を言った。
そして、ふと思いついたように、そう言えば、と言った。
用意していた言葉だったのに、ヒカルは様子を見計らっていたようだった。
「シャルルには渡したいものがあるの」
「何？」
「それも最後のお楽しみ」
ヒカルは悪戯っぽく茶色の眼を細めて笑った。
真珠色の歯が光る。
美しい笑みだった。
その笑みをあと何回見ることが出来るのだろう。
正気を保ったままで。
彼は彼女と一緒にいる時間の一秒一秒を記憶に刻んだ。
突然失うのと、ゆっくり失うのは、前者の方が何倍も辛いと思っていた。
でもそうではなかった。
シャルル・ドゥ・アルディは･･･
愛する者を失うのは、突然でもゆっくりでも、同じだけ塗炭の苦しみに陥って遣る瀬無くなるのだと理解した。

もうすぐ･･･彼女は去る。

■64

それはシャルルと旅行に出かける前の様子をあまり変わらなかった。
彼には休日はない。
けれども、年に数度、連続してオフを取る。
それはヒカルを伴って様々な場所に旅行に行ったり、美術鑑賞をしたり、彼女にとって必要だとシャルルが判断したあらゆるものをヒカルに与えるための時間だった。

奪うと言ったルイに対し、シャルルは常にヒカルに与え続けた。
彼女が本来与えられるべき以上のものを与え続けた。
見返りも求めずに。
ヒカルは長く暮らした自分の部屋を見廻した。
備え付けのものが多く、日本での新しい生活は寮生活だったから、彼女が持って行くべきものはごく僅かだった。
ルイの荷物が少なかったことを思い出した。

自分も同じだと思った。
あまりにもたくさんのものを与えてもらったけれど、彼女が大事にしているものは本当に少なかった。
母の遺作になったあの絵は持って行くことにした。
まだ、シャルルに見せる勇気が湧かない。
次に逢うときには、もっともっと大人になっているといいのに、と思った。

その時には、ルイとシャルルは彼女の本当の家族になる。

あの絵は･･･その時が来るまでヒカルの胸に納めておくつもりだった。
母がなぜ、あの絵を描いたのかわかるその時まで、彼女は考え続けようと思った。
彼女がその絵を微笑みながらシャルルに見せることが出来る時。
その時は今の自分ときっともっとずっと違っているだろう。

予感がした。

自分は･･･アルディ家を出て変化する。

どう変化するかはわからないけれど、こんなにも弱くて脆くて非力な自分であるということを忘れなければきっと強くなれると思った。
ヒカルは、クローゼットの奥にあった絵を大事に梱包した。
彼女が執着したものはそれだけだった。
シャルルとの思い出も、ルイとの誓いも、すべては彼女の中に存在する。
ルイからは昨夜、メッセージが届いていた。

見送りに行けないこと、サーバの管理権限を引き継いだことが事務手続きのように、箇条書きされていた。
それで良いと思った。

ルイ・ドゥ・アルディらしい。

ヒカルは長く暮らした部屋に別れを告げた。
すでに使用人や同級生達には別れを告げた。
突然の挨拶に戸惑う者ばかりであったが、彼女はまた戻ってくるから、と強く念を押した。

———思ったよりあっさりした留別だった。

ヒカルの母親もあちこちを流転した少女期を送ったという。
その時もこんな気持ちだったのだろうか。
まるで旅行に行くかのような、実感の湧かない立ち退きだった。

今日は朝からシャルルが薔薇園で剪定をしていた。

ヒカルはかなり早めに起床したのに、シャルルは居た。
寝ていないようだった。
彼は相変わらず美しかった。
もう何年も一緒に過ごしたのに、まったく変わらない。
年齢を感じない。
そして、白金の髪をわずかにそよがせて薔薇を見つめる彼の横顔を、決して忘れないとヒカルは胸に刻んだ。
高い鼻梁も、整った頬から顎にかけてのラインも、切れ長のくぼんだ瞳も、何もかもが奇麗だった。

‥‥てんしさん

ヒカルは呟いた。
いつも通りの朝だった。
まるで、夏の休暇の初日、日本に発つ日の朝のようだった。
何度も経験した儀式のように、その日の朝だけは早起きをするシャルルから受けとったのは、一輪の薔薇ではなく、薔薇の鉢植えだった。

彼が「ファム・ファタル」と名前をつけ続ける、品種改良された薔薇のうち。
最も日本の気候に適した薔薇だった。
「無精しても強く育つからね。ヒカルが育てるには丁度良い」

シャルルはそう言って柔らかく微笑む。

そして最後の朝食を済ませた後、二人は連れだってショコラを買いに行った。
ヒカルといつか行こうとシャルルが言っていた念願の外出だった。

彼らは食べきれないほどのショコラを買い込んだ。

でも、アルディ家で創られる、ヒカルだけのためにシャルルが指定したショコラの方がずっと美味しかった。
こうして若い父と娘のように、腕を組んで、堂々と街中を歩き、皆の注目を気にせずに買い物を愉しむことが楽しかった。

たくさん笑った。
たくさん歩いた。

その間、ずっと彼らは腕を組み手を繋ぎ、顔を寄せ合って言葉を交わした。
時間が迫っていることもわかっていたけれど、だからこそ、今という時間を惜しんだ。

「今日買ったショコラ、食べきれないわ」
ヒカルが朗笑しながらシャルルの腕を取った。
今日は寒かったが快晴だった。

陽射しはもう斜めに傾いて、空には玉輪と言うに相応しい月が白く浮かんでいた。
弱々しくなる陽光に比例して、気温が下がってきた。
ヒカルのはき出す息は白かった。

彼女が初めてアルディ家にやって来たのは、もう少し寒くなってからだったが、同じように冷え込んだ朝のことだった。
アルディ家に一度戻り、最後のティータイムを愉しんだ。
もう夕食の時間が近かったが、その時間にはヒカルはもう居ない。
シャルルはお茶を飲もうと行って、弱々しいけれど陽射しが差し込むサンルームで、時間の遅い、最後のお茶を愉しんだ。

買ってきたショコラをたくさん広げて･･･眼を見張り歓声を上げるヒカルに微笑みかけながら、食欲がなかったけれど、彼はひとつふたつショコラを口にした。

甘いはずの菓子がなぜか苦かった。

彼女が、どういうわけか、アルディ家にやってきたばかりの幼子に見えた。
静かに過ごす、最後の時間。
それなのに、こんなにも穏やかで和やかで、幸せに満ち足りていた。
彼女が自分の本当の娘だったら、どれほど･･･どれほどこの人生が変わっていたのだろう。

ルイと喧嘩をしながらも、仲良く暮らし、時々、父と娘は喧嘩をする。

それでも父のオフには今日のように仲良く腕を組んで寄り添って･･･互いに互いだけを見つめながら街中を歩き回る。

年頃になって、彼女がろくでもない男に魅せられようものなら、即座にその男を呼びつけて娘にしばらく口を利いてもらえないことを悩むかもしれない。
やがて結婚し、幸せそうに･･･幸せそうに微笑むヒカルを見ながら、いつか命を閉じる。

彼は、そんな黙想を思い巡らすことさえ、自分に許していなかった。
シャルル・ドゥ・アルディは、ありえないことは想像しない。

でも彼女に関することを考える時だけは、彼は普通の男になり･･そしてただの男になった。

■65

「･･･車が来たらしい」
ヒカルはそう言って立ち上がった。

広い玄関前ホールで彼女は上着を片手に、ホールに備えられた瀟洒なソファにもたれていた。
シャルルはその傍らに座り、彼女を見ることなく･･･じっと宙を見据えていた。
すでに日はほとんど沈んでいた。
空は紺紫になり、冷え込んできた。

「･･･クロス氏によろしく。母方の伯母上達にも」
「はい」
ヒカルは頷いた。
コートを受け取り、彼女は立ち上がった。
姿勢の良い、彼女の躰から風が生まれてシャルルの白金の髪を揺らした。
彼も立ち上がる。

彼女をずっと見上げていたかった。
背の高いシャルルはいつもヒカルを見下ろしていた。

そんな彼を見上げるヒカルを愛おしいと思ったけれど、シャルルはヒカルの本当の表情を見たことがあるのだろうかと思うことが時々あった。
シャルルを見上げる前の瞬間のヒカルの表情を見たかった。
飾らない彼女の本当の･･･本当の心の内をシャルルはきちんと向き合ったことがあったのだろうか。
これほど長く一緒に過ごしていながら、彼女は涙をこぼしたことがほとんど無かった。
いつも笑っていた。いつも朗らかだった。
でもそれは月の一面と同じで、彼女の全部だったのだろうかと思う。
彼女の慟哭や怒りや哀しみを受け止めたのだろうか。
オレはまた･･･また繰り返すのか
シャルル・ドゥ・アルディは思った。

「たとえ太陽が西から上っても、シャルルに間違いはないのでしょう」
シャルルの考え事を察したかのように、ヒカルは笑った。
「シャルル。･･･考えていることが漏れているわよ」
彼女は破顔した。

「シャルル・ドゥ・アルディが考え事をしているわ！大変！発作だわ！」
シャルルは薄く笑ってやり込めた。
「ヒカルのお転婆を治す薬を調合するための配合を考えていた」

ヒカルは茶色の色素の薄い瞳を大きくさせて、シャルルに抗議した。
櫻色の唇に白い頬に、けぶった眉にくせの強いけれど茶色の柔らかな髪･･･何もかもが愛おしい。
「ヒカル、もう時間だ」
シャルルは言った。
彼女を車の前までエスコートした。
当主自らが外に出て、彼女を待つ送迎用の車まで送り届ける。

･･･外気は寒かった。
あの冬の朝を思い出した。

期日が決まっている別れの瞬間は、こんなにも静閑としたものなのかと思った。
突然の留別はあんなにも･･･激しく彼を打ちのめしたのに。
覚悟はしていない。覚悟なんかできていない。

この季節が終わる度に。
記憶でまた逢えるように、今、君の姿を刻もう。
夢は見ることが出来ないから記憶に留めよう。

君を想うほどに･･･思うほどに、自分を忘れていく。
自分を失っていく。

遠く離れていても、生きている限り、オレが生きている限り、君が生きている限り、それで良いと思う。生きていれば良いと思う。
ヒカルは口許を締めた。
ゆっくり、茶色の髪を垂らして･･･頭を下げる。
姿勢の良い彼女が、頭を下げて用意していた言葉を言った。

「････シャルル。長い間･･･長い間･･･本当に･･･ありがとう。････御世話になりました･･･」
「ああ、ヒカル」

シャルルは困ったように笑った。
本当に困っていた。

「オレを困らせないでくれ。････また、逢えるのに」
本当はもう逢えないと思っていたのはシャルル・ドゥ・アルディだった。
このまま彼女がこの荊の薔薇の館に、二度と足を踏み入れないで欲しいと思っていた。

彼女が成人して監護権が消滅し、彼女自身で生きる道を選ぶことが出来る本当の瞬間。
その時こそ･･･彼女を本当に解放してやれる。
だからこれは本当の蝉脱でなかった。
彼女を蝉脱してやりたかったけれど、本当は彼自身が蝉脱できていなかった。
ああ、君の成長をこれ以上見るのは難しい。
ずっと変わらず･･･小さな、オレだけの天使で居て欲しかった。

シャルルは呟いた。

行け。
そして逃げろ。
･･･歩き出せ、ヒカル。

もう、この家には戻って来てはいけない。

過去のものになって良い。
長い人生でほんの一瞬、夢幻の館に迷い込んだと思えば良い。
君には明るい未来が待って居る。

■66

彼女の成長を見届けたいばかりに、彼女の人生を奪ったはずだったのに。
シャルル・ドゥ・アルディは、あの人に似てくるヒカルを見ることが辛くなった。

だから、解放することにした。
逃がすことにした。

いや･･･彼女を遠ざけることで、彼が逃げることにした。

「･･･最後のお願いだけれど」
ヒカルはぽつりと言った。

「ああ、そうだったね」
シャルルは低い声で言った。

今の自分の考えが悟られないようにするのが精一杯だった。
ヒカルは、上着を持ったまま、少し下を向いていた。

「ヒカル。顔が見えないから、上を向いてくれないか」
シャルルがそう言った。

ゆっくり、ヒカルが顔を上げる。

もう見ることがないかも知れない、あの人と良く似た娘の顔を･･･シャルルは記憶に留めようとした。

「シャルル」
ヒカルは泣きそうな顔をしていた。

眼が潤み、そして何かを訴えるような顔をしていた。

茶色の髪が揺れて、そして白い顔が彼に向けられた。
細い首が動き･･･彼の顔を捉える。

「なぜ泣きそうな顔をしているの。そんな願い事なら聞かないことにする」
シャルルは笑って、彼女の頬に、細く長い指を･･･そっとあてがった。

何度も触れた彼女の頬なのに、今はとても･･･触れることに躊躇いを感じた。
まるで若かったあのときの様に、彼は彼女に触れることに酷く

･･･酷く臆病だった。

――――ヒカル。

あの人と、唯一の親友の娘である、大切な･･･大切なオレの天使。
唯一の晄を自分で手放してしまう。
自ら選んだ路だ。
迷い込んだ路でない。
後悔していない。

「････私の天使」
彼女はそう囁いた。

「願い事を聞いてくれるかしら」
「ああ、君の願いなら何でも」
シャルルは微笑んだ。

天使のように美しい微笑みだった。
年齢を感じさせない、彼の寂しいけれどもこの上なく浄妙な笑いをヒカルは最も愛していた。
時間がないから、手早く。
シャルルは言った。
出発の時間は差し迫っていた。
時間を決めないと、彼は彼女を送り出すことが出来そうになかった。

「･･･を」
「もう一度言って」
「･･･キスを。キスを教えて欲しい」
彼女はそう言った。

一瞬、何を言われているのか理解しようとしたが、シャルル・ドゥ・アルディの脳が想定外の言葉に拒否反応を示していた。

「ヒカル？」
「キスを」
彼女は頬を赤らめていた。
うつむいていたのは、頬の紅潮を知られたくないからだ、ということに気がついたのはその時になってからだった。

ヒカルはあれこれ･･･言葉を用意していた。
「あの･･・ルイが。ルイが、私があまりにも幼稚なので･･ミシェルに教わって来いと言ったけれど、私はミシェルはその･･・先生になってもらうには敷居が高すぎて。･･･シャルルには･･・シャルルは教えてくれるかしらと･･･」
彼女の言葉は耳に入らなかった。

彼はヒカルを抱き寄せた。
ヒカルは言葉を句切った。
突然でも強引でもなく、自分が望んで抱き寄せられるということはこんなにも胸が躍り、静かだけれど激しく昂揚するのかとヒカルは思った。

「シャルル」
腰を抱き寄せられた。

ミシェルに小腰を引かれた時にはただただ恐怖心しか感じなかったのに、今はなぜか･･･言いようのない昂ぶりを感じる。

「なぜそんなことを願うのか、とは聞かないよ」
シャルルは言った。

「君の願いはすべて叶えると誓ったから。・・・だから誓いを果たす」
彼はそう言った。
ヒカルは良いよ、と言った。

どうして彼女がそんなことを言い出すのか、彼女の言葉が若者の戯れ言なのか、シャルルは窘めることも聞き直すこともしなかった。

ただ、彼女を抱き寄せた。
彼女の申し出た理由を考える時間はなかった。
･･･余裕もなかった。
いつもの通り、からかうような言葉をかけながら、結局はヒカルの言うとおりにしてしまうシャルルはそこには居なかった。

ヒカルはひとりの･･・男性の腕の中に居た。
自分で願い出たのに。
もう少しで、離してと言いそうになるくらい、知らない男の人の腕があった。

こんなにもこんなにも･･･

自分を愛おしいと思ってくれる人の胸が温かくて、泣きたくなるくらい切なくて、そして大きいと改めて感じることがあるなんて思っても居なかった。
怖さはなかった。

自分の言った浅はかな言葉を、シャルルが酷く驚愕しながら、彼の名前に誓った以上は果たさねばならないと思っていることは痛いほどわかっていた。
これが最後のお願いであるとは、シャルルはがっかりしたかもしれない。

言い訳は用意していた。

ルイから「もっと大人の女になれ」と言われていたけれど、どうやったら大人になることが出来るのか、わからなかった。

躰の問題ではない。精神の問題だった。
ヒカルは少女のままというよりはむしろ、童女のままだった。
自分でもわかっていた。
人より･･・何かが欠けていると。

でもシャルルがそれを気に病んでしまわないように、彼女は普通を心がけた。
シャルルが見ているところでは特に。

何が足りないから自分が幼いのかわからなかった。
演じることで補われてしまったから。

■67

小さい頃から人の感情に敏感だった。

それは自分が東洋人で、どんなに努力しても、アルディ家の一員にはなれないことや、決してシャルルやルイのように、賞賛の晄の中には入ることは出来ないと、わかっていたから。

だから、人に嫌われないように生きてきた。
簡単だった。
自分の心を殺してしまえば、後は相手しか残らないから。
自分を見つめる時間を相手に注いだ。

だからしばしば･･･ルイにもミシェルにも「自分がない」と言って責められる。
けれども、それが生きていく術だった。
ヒカルはそう思った。

人に左右される人生だった。
両親がいなくなってしまって、彼女はシャルルに引き取られた。
フランスの華と言われている、とても･･とても希有な人に育てられた。

一方で、その華の胤からは疎まれてきた。

周囲の眼も気にならないと言えば嘘になる。
自分は無害であり、何も考えてないと装った。
本当に考えることを放棄していた。
言われるがままに生きてきた。
そしてまた･･･思惑によって、彼女は生きる場所を変えることになった。

母もそうだったのだろうか。

大人の都合で生きる場所を変えていった母は、辛くなかったのだろうか。
ヒカルはそう思った。
今の自分は母に良く似ていると思う。
顔立ちだけが。
でも、心根は、母を知らないからわからない。

シャルルが、ルイが、ミシェルが『あの人とそっくりだ』と言っても、どこが酷似しているのか

わからない。

————なぜ、彼らは生きているヒカルを見てくれないのだろうか

シャルルでさえ。
あれほど愛を注いでくれるシャルルでさえ、ヒカルの汚れた感情を知らない。
似ていないところは、見てくれないのだろうかその思いが彼女を悩ませた。

だから、シャルルとの最後の日に。
彼女は願い事をすることにした。
最初で最後の･･･「無邪気」な願いをシャルルに投げかけた。

本来なら彼女の婚約者であるルイと一緒に過ごすべき時間を、
シャルルと過ごした。

そして･･･子どものフリをして、シャルルに今、最後の願いをかけた。
彼の教えてくれなかったことを、今、教えて欲しいと思った。
彼の苦しんで秘めてきた恋を、愛を･･･

自分の容姿が母に似ているのであれば、彼女の代わりに･･・唯一度だけ成り代わろうと思った。
ヒカルは黒須昶であったけれど、それと同時に、シャルルに育てられたヒカル・クロスだった。
シャルルの愛した人と、シャルルの親友のこどもだった。
だから、一度だけ。一度だけ、シャルルの願いを叶えたかった。

それがヒカルの最後の願いだった。
「・・・・ヒカル」
彼ははっきりとそう呼んだ。
あの人の名前ではなかった。
ヒカルは、はい、と返事をした。
何かを尋ねたりしなかった。

シャルルは青灰色の瞳を煌めかせて・・・切なげにヒカルを見た。
男の人の瞳だった。
誰かを焦がれて･･･焦がれて焦がれた瞳だった。
慈愛に満ちた視線ではない。
ただ唯一の･･･何かを求めている晄を宿していた。
後悔しないね、とも聞かなかった。

冗談よ、と言い直すこともしなかった。

ただ、そこには、短い時間だけ存在することを許された男と女が居た。

彼は彼女の躰に近づいた。
自らの躰に寄せなかった。

‥‥ヒカルに一歩近づいて。

そして、遣る瀬無いと全身で顫動しながら、彼女をかき抱いた。

もうすぐに離さなければいけない。
もう、逢うことも無いかも知れない。

そう思うと、シャルルは‥‥彼はヒカルの白い若い顔に自分の頬を寄せた。
あの人と同じ香りがした。
息苦しい。
呼吸をするのも時間の経過を感じるから、ずっと留め置いていたかった。

ヒカル

彼は囁いた。
愛の囁きのように、熱烈に。

彼女が望むのであれば、そうしよう。
彼は自分から寄り添った。
誰もが彼に寄り添ったが、彼自身から寄り添った人間はあの人とヒカルだけだった。

最初のひとりは‥‥もう居ない。

■68

シャルルは薄く笑った。
それで勢いが付いた。

彼はヒカルに寄せていた頬の角度を変えると、そのまま精悍な頬を滑らせた。
そして、ヒカルの･･･ヒカルの柔らかい唇に自身の薄い唇をあてた。

言い出したヒカルが少しだけ驚いて声を漏らす。

・・・ぎこちない接吻だった。
大人のキスを教えて欲しいと言ったのに。

ヒカルはとても驚き･･そしてただただ受け止めるだけだった。
シャルルは彼女の背中に腕を回し、ゆったりと彼女を抱いた。

楕円に描かれた彼の腕の中で･･･ヒカルは上を向き、瞳を閉じ、彼のキスを。
初めての彼とのキスに酔いしれた。
奪われるだけではない、与えるキスがこんなにも切なくて甘美で、そしてこの上なく昂ぶりを感じるものだと思っていなかった。
ヒカルも自然と、シャルルの広い背中に腕を回した。
彼は長身だったので、軽く背伸びをする。

ヒカルはそれほど小柄ではなかったのに踵を伸ばしすぎて、少しだけ脹ら脛が震えた。

唇を合わせただけだった。
彼は啄むようなキスしかしなかった。
大人のキスはもっと違うはずだった。

深く激しく顔の角度を何度も変えて、恋人同士は互いの愛を感じる行為に耽る。

でも、シャルルは･･･

唇を啄むように何度も何度も離しては口付けた。
少しだけ薄い唇を開き、ヒカルの小さな唇を覆った。
時々、シャルルの滑らかな舌があたり･･･ヒカルはその感触に驚いてぴくりと躰を動かした。
「レッスンは終わりだ」
シャルルはそう言った。

唇を離すまでの時間は短かった。
それなのに、ヒカルには何時間にも、ほんの一秒の親しみを込めたキスにも思えた。

「･･･行け。ヒカル。元気で。今度会うときには･･･父と呼ぶように」
彼はそう言って、呆然とするヒカルを車に押し込めた。

これが最後の挨拶かと思うと、彼と彼女は同じように遣る瀬無くなった。
どうにもならない身悶えする痺れに･･･まだ麻痺していた。

もっとゆっくりこの一連の動作を記憶しなければレッスンにならない。
けれども別れの挨拶さえ出ないくらい、ヒカルは打ちのめされていた。
車のシートに押し込められて、彼女は･･･彼女は呆然としたまま座り込む。
シャルルは屈んでヒカルの横顔を見た。
彼女はぼんやりと前を向いていた。

「これが君が最後に渡したかったものかな･ ･･ ･ヒカル。
今度はルイとレッスンしてくれ」
シャルルはそう言った。

そして、哀しそうに･･･切なそうに青灰色の瞳を･･･ヒカルに向けた。
瞬きするのが惜しいと言うように、彼はじっとヒカルを見つめた。
「ヒカル。倖せに･･･今度は、オレと君は･･･父と娘だ･･･」
そこまで言うと、シャルルは車の運転手に「出せ」と短く命じた。
それがヒカル・クロスとシャルル・ドゥ・アルディの別離の瞬間だった。

････こんなにも簡単に終わってしまうのか。

シャルルはそう思った。

ヒカルは呆然として、前を向いたままだった。
じっと茶色の瞳を見据えていた。
前を見なければ壊れてしまうから、と自分に言い聞かせているようだった。
ヒカル。
どうか、このまま逃げてくれ。
もうここには戻らないと思ってくれ。
倖せになってくれ。
シャルルは祈りにも似た気持ちで、彼女の白い横顔を見つめ続けた。

扉を閉めても彼女は微動だにしなかった。
前を向いて、何か呟いていた。

彼女からせがんだ「願い事」であり「渡したいもの」であったのに、彼女は酷く狼狽していた。

でも、そこにシャルルが介入することはもう、できなかった。
彼女は違う人生を歩まなくてはいけない。

シャルルのいない、ルイもミシェルも関わりのない人生を歩く選択肢を与えてやらねばならない。

‥‥‥ヒカル。
彼は呟いた。

彼女が呟いていることがよくわからなかった。
それはとても小さな唇の動きだったから。
でもその言葉をくり返し彼女が言うので、彼は青灰色の瞳を‥・ゆっくりと大きく見開いた。

ヒカル。

彼は口に出して、彼の愛すべき存在の名前を言った。

オレの天使。
彼はヒカルを呼んだ。

でも、もう、聞こえていなかった。

車が動き出した。
ゆっくり、動き出した。

こんな別れで良いのか‥‥‥
シャルルはそう思って立ち尽くした。
外は日が暮れて‥・もうすでにかなりの冷気が彼を覆っていた
けれど、彼は構わずに薄着のまま、彼女の乗った車を見つめた。
もっともっと違う見送り方があったはずなのに。

彼は、そのまま、見送った。
見つめるだけだった。

彼は間違わない。けれども、このときだけは･･･手順を間違えたと思った。
ヒカルの囁きの言葉を聞いてしまった。
ヒカルは車の中で呆然としていた。

･･･シャルル・ドゥ・アルディから受けた口吻が･･･酷く彼女を狼狽させていた。
ヒカルではなく、ヒカルの母を想っていたであろうキスは、この上なく甘美で切なくて･･･哀しかった。

でも同時に･･同時に、ヒカルはそのキスに酔いしれた。
総身を揺るがすようなそんな彼からの愛の贈り物だった。
本当は、あの絵を渡すつもりだった。

母の遺作であればなおさら、シャルルは手に入れたいと想うはずだった。
けれども、彼女は渡せなかった。

勇気がなかったことも理由であるが、彼女は、渡したくなかったのだと悟った。
自分は、シャルルが･･･未だ母を愛する様を見せつけることが許せなかったのだ。

だから･･･キスをねだった。彼が断れないことを知って。
ルイを理由にして。
彼女は、彼に･･･一瞬で良いから、本当の生きている自分を見て欲しいと思った。
ヒカルはシャルルに愛されていると実感していたけれど、ルイのようにミシェルのように、彼はヒカルを見ない。

ヒカルはいつも眩しい晄に包まれていて･･･その本当の姿をシャルルは見ていない。

だから一瞬で良かった。
最後のほんの一瞬の煌めく前の晄を消す瞬間に、シャルルに自らを見て欲しかった。

小さくて何も出来なくて･･･記憶のほとんどない母の姿に悩む若くて幼い自分の姿を見て欲しかった。
見て欲しい。
誰にも願わなかったのに。

･･･シャルルには願ってしまった。
そして傷つけてしまった。

･･･シャルル。シャルル・ドゥ・アルディ。
ヒカルは呟いた。

とてもとても大切な人の名前を呟いた。
ぽつり･･･
温かい液体がヒカルの頬を伝って墜ちた。

それが涙だと気がつくまで時間がかかってしまった。
もう、シャルルはバックミラーでも見えなくなってしまった。
車は静かに走り出て、そしてアルディ邸から公道に出た。

「････じゃない」
彼女は呟いた。

「そうじゃない。父じゃない。おとうさんじゃない。おとうさんなんかになれない」
ヒカルはまた言った。

そうして･･･茶色の瞳を閉じた。
記憶が･･･いいえ、違う。
魂が何かを叫んでいる････

ヒカルは息を大きく吸った。

『わからなくても良い。でも、魂に刻んでくれ』
シャルルはあの日、そう言った。

『オレをお父さんと呼んではいけない。君の父はひとりだけだ。そして･･･オレは君の父にはなれない。かわりをすることはできるけれど、それはあくまでもかわりでしかない。
････君は君が希望する限り、クロス・ヒカルだ。
永遠の光と名付けた両親を忘れてはいけない。』

そう言ったのに。
そう言ったのに、彼は言った。

「次に逢うときは父と呼べ」と。

違う。

ヒカルはまた言った。
「私の･･･」

涙が頬を伝わった。座ったままで前を向いたままで、彼女は眼を見開いたまま言った。
魂に刻んだあの日の記憶が･･･鮮やかに今、蘇った。

「私の名前は･･･クロス・ヒカルです。
お父さんは和矢で･･お母さんはマリナです。
･･･今は、今は二人は天国に居ます･･･。
いつか逢いたいから･･･私は泣かないで･･･良い子で居ます････でも」

彼女は言葉を切った。涙が。決して泣かないと誓ったのに、涙が溢れてきた。止めようもなく。

「今度から･･･お父さんは･･･シャルルです。・・・・シャルル・ドゥ・アルディです･･･」

彼女の白い頬に、涙がひとつ、また流れた。

わからなくても良い。
でも、魂に刻んでくれ。

シャルル・ドゥ・アルディの声が聞こえた。
それが、彼女の青春の輝きの最後の晄が煌めく瞬間だった。
ヒカル・クロスは、その日、パリから消えた。
そして、彼女は、少女でなくなった。

■69

蒸し暑い。

毎年のように経験しているのに、今夏は特に厳しい暑さのように思えた。
ここは海に囲まれた国だから、湿気を大量に含んだ空気が重苦しい。
けれども、蝉が鳴き青い空に白い雲が浮かび･･・そして毎夏必ず訪れる、両親を弔う儀式がある季節が嫌いではなかった。

ヒカル・クロスは東京の空の下を闊歩していた。

アスファルトからの照り返しが、彼女の薄い瞳を刺激するので、この季節はサングラスが欠かせなかった。

色の白い、肌理の細かい肌に、年々薄くなっていく茶色の髪に･･･茶色の瞳の彼女は、日本人なのかそうでないのかわからない顔立ちをしていた。
それでも彼女の顔を見ると、母にそっくりだと言われる。
あまりにも似ているので、生き写しを通り越して、彼女の母が戻って来たとさえ言われるときがあった。

年齢の割に幼い顔立ちも、大きい瞳も、櫻色の唇もそのままだったけれど、彼女は成年に達していた。

小脇にはアルバイトで貯めて先ごろようやく買った、最新型のラップトップの入った鞄を抱えていた。

フランス語と英語と日本語が堪能な彼女は、アルバイトには困らなかった。
けれども学業を優先して必要以上のアルバイトはしなかった。

生活費には困らなかったし、自分の好きなものを揃えるだけの金額が毎月振り込まれていたけれど。

彼女は必要最小限の金額しか使わなかった。

自分の欲しいものはあまりなかった。

その容姿に似合わず質素だと誰もが言ったけれど、彼女が本当に必要とするもの以外には、手に入れても意味がないとヒカルはいつも笑って言った。
パリのエッフェル塔に匹敵するほど有名な、日本の東京のシンボルタワーの近くを歩くと、なぜか、ショコラを買いに歩いたパリの区画を思い出した。

ちっとも似てないのに。

･･･ここにはただ、喧噪と排気ガスと、整備されたけれども人の息吹を感じない、広い真っ直ぐな道路しかなかった。

暑い。

日傘は好まないので、帽子をかぶり、サングラスをかける彼女は非常に目立っていた。

長らく全寮制の外出禁止の学校に居たので、立ち居振る舞いがどうも人とずれているようだった。
彼女は背中まで伸びた、くせのある髪を後ろになびかせた。

また、夏がやってきた。
あの冬の日を越えて、夏が来た。
季節を感じる瞬間はいつも切ない。
思い出してはいけない人を思い出す。
思い出すと辛くて切なくて哀しくなる人を思い出す。
そして一度も連絡を寄越さない彼女の婚約者を思い出す。
彼女を傷つけてそして自らも傷つける冷徹な人を思い出す。
彼らは良く似ているのに、それでもまるっきり違う魂を持ち合わせていた。

特に、こんな暑い夏の日は･･

ヒカルは大きなアーモンド型の瞳を細めた。
サングラスをかけていてもこの陽射しは辛い。
あの日を思い出すから。

両親が帰ってこなかった日は、もう思い出せないけれど、彼らを憂えてひとり異国から、日本の儀式に参加するためにやってきた、フランスの華との出会いを思い出すから。

ヒカルは進学し、寮を出て、独り暮らしを始めていた。
ひとりでいる生活は初めてだった。
親戚がそろって一緒に暮らそうと言ってくれたが、彼女は丁寧に断った。
寮を出て、初めて独りになった。
それがどうにも心地好かった。
誰の目も気にしなくて良い空間があり、小さいながらも自分だけのスペースに帰る日々。

彼女はひとりを選んだ。
間もなく、迎えの時が来るから。
それまでは･･･ひとりで居たかった。
祖父の通院する病院が近いという利点もあった。

たまに、病院で落ち合って、軽くお茶を飲んで、祖父を見送る。
一財産を築いた彼の後継はもう、立派に育っていた。

あとはただ、ヒカルの行く末だけを心配する好々爺は、あの薔薇の一族のことを口に出していた。

でも、ヒカルはまだその時ではないと微笑むだけだった。

･･･彼女は成人に達した。

約束の日が近い。

その予感は現実になるという確信があった。
そしてそれはすぐにやってきた。

■70

監護権が切れたという、書面が一枚、彼女の元に届いた。
それは彼女の誕生日の発信日であったけれど、到着は数日してからのことだった。

ヒカルの毎日はごく質素だ。

安全性や、祖父の病院の近くであるという条件から、やむなく都内の誰もが羨む豪奢なマンションに住んでいた。

でも、たくさんある部屋はまったく使用しなかったし、彼女は居間と寝室と物置代わりにもう一室を使っているだけだった。

彼女の生きるスペースはほんのごく僅かで充分だった。
書面には、後ほど通知文書を追加で送るから、それを読むようにと箇条書きで書かれていただけだった。
母方の姉妹や両親の古い友人達が彼女に頻繁に連絡を取ったが、ヒカルは皆に同じように元気である旨を伝え、過ぎた援助は必要ないと言った。

最も過ぎたる援助をしているアルディ家は、決まった手続きと金額の入金以外は、あれっきりまったく音沙汰がなかった。
彼らを非情だと言う者もいたが、シャルルがきっと、必要以上の干渉はするなという方針を徹底させたのだと思う。
ヒカルが気がかりだったことのひとつは、ルイと話をするためのサーバから一度も彼からのメールを受信することはなかったことだった。

ヒカルは折に触れてメッセージを彼に送っていた。

季節の変わり目、彼の誕生日、クリスマス‥‥彼女が住む日本の毎日を綴ったこともあった。
けれども、ルイからは返信も、開封した痕跡もなかった。

ただ、管理権限はそのまま維持されていたし、この長い時間の間にOS の入れ替えも行われていたので、彼との細い糸はまだかろうじて繋がっているのだと思うことにした。

———シャルルが持たせてくれたPC はすでに老朽化していた。
ヒカルは大事に使用していたが、アルディ家の設定した特殊な設定のOS にはもう対応できなくなっていた。
だから彼女はこつこつアルバイトをして金を貯めて新型のラップトップを購入した。

彼女の母はもう彼女が日本に移り住むようになった年頃から働いていたという。
彼女は勤労することで少しだけ、自分が何か価値のあることをしたのだと、僅々の金銭を受けとったときに思った。

中身のアプリケーションを入れ替えなければいけなかったけれど、これで、ヒカルの発信するメール以外には蓄積されていないあのサーバに、もっと頻繁に楽にアクセスすることができると思った。

これを愚かしいことだと、彼らは笑うのだろうか。
文書はアルディ家の紋の入った印で封緘されていた。
シャルルからの通知文書には、彼のサインが入っていた。
彼女は、そのサインをそっと撫でた。

かつて、シャルルは彼女と少しだけ離れるだけでもメッセージを書いてくれた。
その時の筆跡のままだった。
少し線が細くなったようだったが、シャルルの筆跡だった。
触れるだけで、ヒカルは指先から痺れを感じる。
彼が書いた文字を久々に見た。
もう、夢のような、遠くの記憶になりそうになるほど離れた場所に居る彼らのことを思い出すこともあまりなかった。
思い出さないようにしていたと言った方が正しい。
あれからパリには行っていない。
何度もシャルルに手紙を書こうか、こっそり会いに行こうか、
電話をしようか、メールなら迷惑でないか･･･あれこれ考えた。
結局、一度も、連絡を取ることが出来なかった。
それで良いよ、とシャルルは言うだろう。
毎日の生活に追われていたわけではない。

外出をほとんどしないヒカルには、考える時間は充分すぎるほどあった。
こちらにいる時間はパリで過ごした日々よりずっと短いのに、
いつの間にか、毎日の生活に慣れてしまっていた。
あのまま、シャルル・ドゥ・アルディという人物と関わらなければ、彼女はもっと違っていたのかもしれない。

「ありえない想像はしない」
薔薇の一族である彼らはよくそう言った。

現実的でないことや虚無感しか残らない夢想には酷く冷淡だった。
そのかわり、ヒカルには優しかった。

ルイもミシェルも冷たかったけれど、彼女を子ども扱いしなかったし、誤魔化さなかった。

いつも対等だった。
それがたとえ攻撃であったとしても。

ヒカルは軽く吐息をついた。

彼女は成人になったけれど未だ学生であったので、彼女が婚姻もしくは経済的に独立するまでは準用して援助は継続して行われることが書いてあった。
まるで契約書のように、淡々と事務的に書いてあった。
大きな荷物を小脇に抱えて、マンションのロビーで真っ先に封を開けたのに。
封を開く前の激しい動悸が嘘のように引いていく。
彼女は何かを期待していたらしかった。

「何を期待していたのかしら」
ひとり、呟いた。
期待するのは止めたはずだった。
何度も何度も、シャルルが迎えに来てくれるのかと期待した。
小さなこどものように、全寮制の寄宿学校の部屋から見える外の景色に、自分を迎えに来るシャルル・ドゥ・アルディの白金の髪が太陽光に照らされて彼女に合図をしながら、彼の姿が見えやしないかと想像した。
彼の帰りを待った幼い日々を思い出した。
決まった時間に帰る彼であったのに、シャルルを待ちわびて、玄関ホールでひとり座って待って居たこともあった。

思い出されるのは静かで穏やかで倖せな瞬間ばかりだった。
彼女は額の汗を拭った。

鞄を肩に抱えながら立ち尽くすにはこのホールは暑すぎた。
学校は長い休みに入っていた。
二期制度であったから、夏の休みは長かった。
それでも彼女はどこにも行かずにひとりで過ごした。
儀式の際だけ、親族とひっそり過ごす。

それでも17 回忌が終了した後は、もう毎年集うこともなくなっていた。
ごく親しい血族だけで食事会をするだけだった。
その席ではもう、アルディ家のことを根掘り葉掘り尋ねる輩はいなかった。

ただ、静かに故人を偲ぶ。
今年の夏もそうなる予定だった。

彼女の予感が当たらなければ。

■71

どういう配慮でそうなったのかわからなかったけれど、女学校を卒業したヒカルに用意されたマンションからは東京のシンボルタワーが望めた。
経済的に恵まれた子女が多かった学校であったが、誰もが彼女の居所を羨んだ。
皆が彼女の新居を訪れたいと言ったけれど、結局彼女はまだ誰もこの部屋に通していない。
寝室と納戸代わりに使っている一部屋と居間以外に使用されていない部屋が多数ある。
きっと異常だと思われるだろう。

定期的にハウスキーパーが掃除に来てくれる以外は彼女の部屋には、誰かの来訪は皆無だった。
ヒカルは最後まで親しい友人を作ることが出来なかった。

他の者と同じように話したり集ったり、時折一緒に食事をすることがあったが、いつもひとりでいるような感覚を持っていた。
誰も信用できないということではない。
彼女にとっては、誰もが同じだったのだ。
同じように好ましく同じように善良で、同じように･･･心を開くことができなかった。

ヒカルはサングラスをはずした。
帽子も取る。
マンションのエレベーターに乗ると、エレベーターの中のファンが自動起動して、彼女の額に張り付いた前髪の水分を飛ばした。
片手には重い鞄を提げて、もう片方の手には文書を握りしめていた。
これから買ったばかりのラップトップをカスタマイズしなくてはならない。
これはルイの作業を見よう見まねで覚えた知識だった。

彼は冷たくてヒカルを無視したけれど、彼女が黙って彼を見つめていることは許容していた。
自分の現在の挙措が、すべてあの素晴らしい、輝いていた日々からもたらされていた。
親族は彼女を受けて入れてくれたけれど心優しくて善良でこの上なくヒカルを愛してくれたけれど。

それでも･･･あの日々を忘れてしまうことが出来なかった。
思い出すことをやめる努力をしていたのに、それでも懐かしかった。
戻りたいわけではない。戻れないから。
小さくため息をついた。
「ため息をつくと倖せが逃げるよ」と彼らに言っていたのは他ならない自分であったのに、現在

はひっそりとため息をつくのが習慣になってしまっていた。
これが大人になると言うことなのだろうか。
ため息をつくのが成人すると言うことなのだろうか。

それなら･･･自分は、あの、天使のような人々と会った瞬間にため息を漏らしてしまった。
幼いこどもでありながら、あまりの美しさに息を漏らした。
自分はその時に、無垢なる魂と引き替えに、何かを･･・手に入れたのだろうか。
それとも失ったのだろうか。

考え事をしながら、家の前にたどり着いた。

防犯のために表札は出ていない。それでも誰も尋ねてこないし、荷物は1 階で受け取れたから、まったく不自由はなかった。
電子キーを取り出して中に入る。
いつもの仕草だった。
通知書を鞄の中に大事に入れた。
また後で読み返すつもりだった。
何度読み返しても文章が変わるわけではなかったのに、彼女はシャルルの筆跡が入る文書を眺めていたかった。
期待していた内容ではなかったけれど覚悟していた内容だった。

･･･遠くで蝉が鳴いている。

この都心でも、蝉が鳴いていた。
あの日を思い出す。
あの日も、大変に蝉が鳴いていて･･･そしてフランスの華も泣いていた。

誰もいないのがわかっているから、彼女は「ただいま」と言わなかった。
そのうち、自分に挨拶をするようになるよ、と誰かが笑って言っていたのを記憶している。
靴を脱ぎ、鞄を肩から降ろしながら、汗ばんだ前髪をかき上げた。
密閉されたエレベーターの方が涼しかったがそれは機械的な涼感だった。
彼女はあまりクーラーが好きではない。
だから、部屋の風通しの良さが気に入っていた。
この部屋は窓を開けて空気の入れ換えが必要だと思った時。

―――ヒカルは何処に何があるか目を瞑ってでもわかるくらい慣れた空間の

「何か」に気がついて、ぎくりとした。

風が、ある。

彼女の長い柔らかい髪がそよいでいる。

‥‥家を出るときは戸締まりをして言ったのに。

ヒカルの顔が強張った。
居間から強い風を感じる。
角部屋のヒカルの部屋は、居間がガラス張りで、ここの窓を開放すると、空気が流れて玄関まで逃げていく。

その時の風の流れだった。

‥‥誰か、いる。

彼女は唇を噛んだ。
若い女性がひとり暮らしをするに不相応な部屋だった。
知らない間に、標的にされていても不思議ではない。
あの薔薇の紋様のある柵の高い広い屋敷では、常に警備の者が居たのでまったく安全性について考えたことがなかった。
でもここはパリではない。
そしてヒカルは独り暮らしを謳歌している代わりに、困ったことに対してもひとりで判断しなければならない立場になった。

どうしよう。
一度戻って外に出た方がいいのだろうか。
でも、締めたはずの居間と廊下を繋ぐ扉が開かれている。
そして誰かの気配を感じるけれど、相手からはまったく殺気を感じない。

物色している物音すら聞こえない。

‥‥気のせいか。

彼女は滑らかな曲線を描いた眉を潜めた。

いざとなったら、勿体ないが、このパソコンを投げつけて逃げれば良い。
かなり重量があるので、少しくらいはダメージを与えられるか時間稼ぎにはなるであろう。

‥‥その時のことだった

「君の家なのだから入ってくれば？」
中から声がした。

あまりにも突然だったので、彼女は小さく悲鳴をあげた。
茶色の目を見開き、唇を少し開いたままにしてしまった。
片方の手の平を、咄嗟に自分の口許にあててしまう。

彼女は低く呻いた。

予感めいたものを感じていたのに、まさかその瞬間が「いま」だとは思っていなかった。

‥‥あえて相手が半開きにしたドアを一気に開いた。

ドアが勢いよく開く音がして、彼女は、危険か安全かも考えずに、中に飛び込んだ。
その声はよく知っている声だった。

どうして鍵を持たずに入ってこられたのか、どうしてその人がそこに居るのか、
それは居間は考えられなかった。

「‥‥‥ルイ！」
彼女の婚約者の姿がそこにはあった。

■72

眺めの良い窓からは、西日が差し込んでいた。
その陽射しを受けて、ルイ・ドゥ・アルディの見事な金髪は、黄金に輝いていた。

茜色の晄を受けていたから、彼の金色の髪の輝きは、黄金と言うよりは緋色に近かった。

「‥‥ルイ」
彼女の声は掠れていた。

パリを発つ最後の日にさえ、姿を見せなかったのに。
日本に戻ってからは、一度だって連絡を寄越さなかったのに。
それなのに、こうして通知書が届いた日に、彼が現れた。
これは偶然なのだろうか。
ヒカルは鞄を床に置き、呆然として立ち尽くしていた。

「空気が悪いから窓を開けた」
「それより前に、どうしてここに入ることが出来たの」
ルイは譏笑した。
「ここはアルディ家が購入した、れっきとした財産目録に記載されている物件だからね。　合い鍵くらい持っていても不思議はないだろ」
確かにそうだった。

ここの所有権は確かにクロス・ヒカルではなく、アルディ家の出資によるものだった。
ヒカルはもう何年も逢っていなかった幼なじみを見た。
兄でもあり幼なじみでもあり･･･彼女と契約をした婚約者だった。

彼は････
彼は確かにルイ・ドゥ・アルディだった。

太陽のような金髪は見事だった。
青灰色のアーモンド型の瞳はますます物憂げで上品に光っている。
首回りは少し太くなり、大人の男性の体つきだった。
声も少し低くなった。
彼はスーツを着ており、夕陽を眺めて窓際に佇んで居た。
窓をあけて風を入れているので、彼の金波がそよいでいた。
「暑いから」と彼は言ったけれど、かっちりとしたスーツを身に纏う彼からは暑苦しさは感じなかった。
「････再会を喜ぶべきなのかしらね」
ヒカルはそれだけ言うのがやっとだった。

「それよりこんな場所によく住めるね、ヒカル。
　･･･排気ガスで息が詰まりそうだ」
「･････ルイ・ドゥ・アルディ、ここは日本だから、せめて靴を玄関で脱いで欲しいのだけれど」

彼はああ、と言って薄く笑った。

彼がそんなことを知らないわけないのに、それでも土足で上がり込むルイ・ドゥ・アルディにヒカルは呆れて言葉が出ない。

彼は煙草を取りだした。火を点ける。
慣れた仕草だった。

「ルイ、ここは禁煙･･･」
「だから？」彼は冷たく笑った。
彼をよく知らない人が見れば魅力的すぎる微笑みだった。

その時、ヒカルはシャルルというより･･･ルイは、ミシェルの影響を強く受けてしまったのだと思った。
シャルルとは、まだ相容れてないのだろうか。
逃げ出したヒカルには、問いただす権利はなかった。
彼は深く煙草を吸うと、窓際に寄って煙草の煙を吐き出した。
ヒカルはやむなく、キッチンから小皿を出して、居間のガラステーブルの上に置いた。
彼に手渡しする気にはなれなかった。

「使って」
「どうも」
年若い男女の会話にはほど遠かった。
ごく短い会話のやり取りだけだった。
ヒカルはルイを見た。
ああ、もう････何年ぶりに彼を見るのだろう。

でも彼は･･･あの日の。
初めて、ヒカルがシャルルに会ったあの日の彼の顔立ちに良く似ていた。
もう少し経過すれば、彼は、ヒカルとシャルルが出会った年齢に達する。

もっと憔悴していたけれど、若かったあの頃のシャルルの姿そのままに･･･ルイの横顔は同じ顔をしていた。
彼らは本当に親子なのだと実感した。

「ルイ。元気だったの」
「見ればわかる話はしない」
彼らしかった。
ヒカルは微笑んだ。

「‥‥それなら私の近況もおなじ」
「聞いてないから」
彼は短く言った。

「‥‥何年も逢わなかった再会の言葉が、それ？」
彼女は苦笑した。

彼は煙草を強く吸って、美しい顔を少しだけ歪めた。
「ああ、日本は湿気が多くて‥‥煙草を味わえない」
「喫煙は年々世界的に敬遠されているけれど」
「世間体を気にするのは‥結婚の話だけで良いよ」
ルイは皮肉たっぷりに言った。

彼の浮いた噂はいつも聞いていた。
フランスの雑誌を賑わしている話題だった。

若き帝王とも言える、通信・バイオ・ジェネリックの業界で君臨するルイの噂は聞いていた。
数々の浮き名のことも。
でも彼女はもう、違う世界の人だと思っていた。
今度会うときは、彼から婚約解消の話を切り出されるときだと思っていた。
愛する人ができて、その人と結ばれたいから、ヒカルとのことは無かったことにして欲しい。

彼がそう言う日が来たのだと思っていた。

■73

「ヒカルの思い通りにはいかないよ」
ルイはそう言った。
煙草を無造作に、皿に押しつけた。
そしてもう一本煙草を吸った。

「ルイ。靴ぐらい脱いで」
「すぐ帰る」
そういう問題ではないでしょう、と言ったヒカルに、星辰の子と賞賛された彼はせせら笑った。

「相変わらず退屈な女だな」

「‥‥それならここに来なければ良いでしょう」
今まで来なかったわけだし。
ヒカルが呟いた。

ルイは唇を少し歪めて、煙草を口にくわえながらヒカルに話しかけた。
日が、すっかり翳って、天井のオート照明とファンが稼働し始めた。
ヒカルはセントラルヒーティングが稼働した音を聞くと、窓を閉めるわね、とルイの脇を通り過ぎて窓を閉めた。

彼は窓辺に立って煙草を勢いよく吸っていた。
長らく慣習としている者の吸い方だった。
「オレが女の前で靴を脱ぐときは、ベッドに行くときだけだ」
彼は薄く笑った。
ヒカルは頸を振った。

「ルイ。久しぶりに逢ったのに、何を言っているのかわからないよ‥‥」
「済ませなければならない案件がある」
あった、と言わなかったので、これから済ませる案件なのかもしれない。
ルイは短く答えた。

「ここは中継地点。そろそろ迎えの車が来ている頃だから行く」
「どうしてここに立ち寄ったの？」
その言葉に、ルイが、おや、と何かに気づいて目を開いた。

切れ長の二重の瞳が少し大きくなり‥‥色素の薄い青灰色の瞳が彼女を捉えた。
「二度は言わない。中継地点だから。
‥‥それとも、あなたを迎えに来た‥‥そう言えば良い？」
「ルイ」大きく息を吸って、ヒカルは彼を見つめた。
「———私はルイと結婚するつもりはない」
「オレの決定は絶対だ」
傲慢に高圧的に‥‥あのフランスの華と同じ口調で、ルイ・ドゥ・アルディは宣言した。
煙草を口にくわえながら、独り言を言うかのように。

「迎えに来ただけでもありがたいと思え」
「思えないからそう言っているのだけれど」
おや、とルイは面白そうに眉を上げた。
端整な顔立ちの彼はヒカルを捉えた。

「ヒカル。･･･随分と口答えできるようになったんだな」
「･･･そうしないとルイと会話できない」
彼女は久しぶりに逢う懐かしい人を軽く睨んだ。

彼は会話を中断させるために、とても短い言葉でしか話さない。
だけれども、ヒカルは会話の往復によってコミュニケーションが取れると思っていたので、
短くても良いからルイからの返事が欲しかった。

だから一生懸命･･･普段は無口であまり話をしないヒカルがルイの前では懸命に会話を紡ぎ出そうとしていた。
ルイはスーツを着ていた。

タイを緩めていないので、これから本当に用事があるのだと思った。

「ルイ。･･･どこに行くの？」
「なぜ。こたえないといけないの？」
ヒカルにルイは言った。

通りがかりの人に話をするような物言いだった。
ルイは体を動かして、2本目の煙草を消した。
長く細い指を優雅に蠢かした。
彼の言葉や仕草は･･･

彼女の過ごした日本での生活を一瞬で、パリのあの日々に戻してしまった。
物憂い感じで、誰も寄せ付けない氷のようなルイ・ドゥ・アルディ。
何年もかけて、ようやく夢物語のような不相応の日々と思うことが出来るようになったのに。

ヒカルは、ルイ・ドゥ・アルディの姿を見て･････
パリで過ごしたあの日々が夢のような時間だったのではなく･･･
この日本で過ごした、現実的な日々の方が夢物語であり、間もなく自分はあの場所に戻らなければならないのだと思い知った。

ルイ・ドゥ・アルディはつまらなさそうに言った。
「ヒカル。････あなたは成人になった。
　ようやく、ね。そしてオレは待った。
　すぐにでも出発したいところだけれど、こちらにも用事があるのでね。

　3日後に迎えに来る。･･･それまでに用意をしておくように」
「ちょっと待って！ルイ・ドゥ・アルディ。
　その話にはウィと言えない。出発って、何・・・」
「フランスに戻る」
彼はわかりきったことを尋ねないでくれと言った。
ヒカルは慌てて話を繋いだ。
「それなら通知書に書いてあるはずでしょう」
「通知書･･･」
ルイは一度呟いてから、ああ、と頷いた。
「監護権のこと？それとは別だよ。
･･･それにこの時期にパリに戻れば、ヒカル、おまえが楽しめそうな光景が見られる」
ルイは、ヒカルの手元にある成年到達に関する通知書を元に遣ってきたのではないようだった。

ヒカルは少し戸惑った。
このままパリに連れて行かれるのは困る。

けれども･･･ルイ・ドゥ・アルディがなぜ、この時期に、このタイミングで、まったく連絡をしなかったヒカルをわざわざ迎えに来たのか、それは興味があった。

夏の休みは長い。

その間のことであれば･･･彼女は見届ける必要があるのかもしれないと思った。
それに「今すぐ来い」と言われなかった。
猶予を与えられた。

あと3日のうち、ルイ・ドゥ・アルディは何かを思い定めて行動するのであろう。
ルイは自分が拘束されているから、あたかもヒカルの都合に合わせたような言い方をしていたのだ、と彼女は推測した。

「････わかった」
彼女は言った。

決心をするとか、思い定めるとかそういう時間はなかった。
考えるよりも直感が先に働いた。

･･･ルイはヒカルをパリに連れて行きたいらしい。

そして、日本に何か用事があるらしい。
それを知るべきかどうかも含めて･･･
ヒカルの予感していた夏が音を立てて、急激に、動き出そうとしていた。
あの薔薇の一族とまた、再会するとは考えていなかった。
でも、こうして何か事情があってルイと再会した。
これに意味がある。きっとある。
だから、彼女は、考えることにした。

中断してしまっていた･･････シャルルとのこと、ミシェルの狂気、ルイの苦悩。
何もかもが中途半端で逃げ出した。
でも、今、自分は大人になった。
大人の年齢になった。
だから、少し･･･少しだけ動いてみようと思った。
幸い、彼女はこの先の予定はなかった。
―――長い夏になりそうだった。
また夏が終わり、秋が来て、冬が来るのだろうか。
その前に自分はすべてに決着をつけることができるのだろ
うか。

これまで。

そう、ほんの数時間前まで、時が止まったままだったのに、急激に時が動き始めた･･･

ヒカルの中の時間軸が音を立てて変化していた。
もっと違うものに変化していた。
知りたいという欲求は、いけないことなのだろうか。
それとも･･･パンドラのように、開けてはならない箱に対する興味が抑えきれないだけなのだろうか。

■74

少し留守にすると告げると、彼女の親族は少しだけ不安そうな声を漏らした。
心配をかけないように、夏の旅行に行ってくる、とだけ伝えた。
来年からはもっと忙しくなり、学業に専念することになる。

今年の夏が羽を伸ばす最後のチャンスだから、とあらかじめ考えてあった理由を言った。
もう成人していたから、気を付けて、とだけ言われた。

こんな方便を思いつくことが出来るようにもなってしまった。
少し寂しかった。
相手を心配させないように捻り出す空音というのは遣る瀬無い。
ルイ・ドゥ・アルディは短い会話の後、彼女の部屋をさっさと出て行ってしまった。

彼がどれくらい待って居たのかもわからなかった。
「3 日後に迎えを寄越す。それまでに身辺整理をしておけ」
彼は言っていた。
彼女を見ていなかった。

すれ違うときに、煙草の香りがした。

そして出て行った後に残された吸い殻を見て、本当にルイ・ドゥ・アルディがやってきたのだと実感した。
その前後で、彼はヒカルの親族に挨拶に出向いたらしい。
夜には方々から連絡が入った。

それは当主の命令なのか、彼自身の独断なのかわからなかった。
抜かりがないのはいつものことであったが、あれほどヒカルを蔑んでいるのに、親族に、彼女を連れて行くという話はしなかったらしい。

彼は有名人だ。

その彼がひとつひとつ、自らの手で彼女の回りを固めていく準備の様を知ると、ルイには何か目的があるのだと思った。

彼女の手回り品はごく僅かだった。
必要最小限しか持っていないから。
その中に、あの絵を入れた。

そして少し考えて、買ったばかりのラップトップを入れた。
何か役に立つことがあるかもしれない。

ルイ・ドゥ・アルディは帰り際に、ぽつりと居場所のホテルの名前だけ告げた。
以前に、彼女が宿泊していたホテルだった。
そしてルイが彼女に心のないキスをしたホテルだった。
彼はまったくのお忍びで来ているらしい。

ホテルには取り次ぎを断られたし、覚えていた彼の携帯電話の番号はとっくに使用不能になっていた。

だが、どうもどこかに出かけているらしいということはわかっていた。
しかも、ヒカルの自宅からあまり遠くないところのようだった。
ベランダ越しに、黒塗りの車が見えた。
彼はそれに乗り込んでいた。

隣の席に誰かが座っているようだった。
彼は何か話しながら乗り込んでいた。
ミシェルだろうか。
それとも彼の意中の人だろうか。

どちらにしても極秘裏に行動する彼と共に動く人物はそう多くないはずだった。

ああ、でも私は今のルイを知らないわ

ヒカルは苦笑した。

そして、彼の短い来訪をどこか予感していながら、さっさと帰ってしまったルイに少しだけがっかりしている自分が居ることに気がついた。
日本の新しい生活に慣れることに懸命なフリをしていたけれど、心のどこかでは、あのパリでの日々や、彼らのことを深く憂えていた。
連絡などは無くても良かった。

そういう繋がりでないはずだった。
繋がり。

ヒカルは荷物をまとめる手を止めた。
自分は一体、何をしに、パリに行くのだろうか。

学業を優先する環境を整えてくれたアルディ家に何か不満があるといったら皆無だ。
彼女はいずれ大学院に進学する予定であったから、それまで経済的援助をしてくれると約束したアルディ家の好意をありがたいと思いこそすれ、何かを伝えに行く必要はなかった。

何も伝えるものがなかった。

ただ、元気だと言うのであれば、ルイから発言すれば良いだけのことだ。
このまま、彼女は日本でひっそり過ごし、暑い夏に顔をしかめながら弔いして歳を重ねていくと思っていた。

成年に達したときに、ルイと結婚するというのは遠い昔の口約束であり、それは薔薇の咲き誇る館で見た、邯鄲の夢だと思った。

ヒカルは茶色の瞳を閉じた。

彼らと一緒に撮った写真はない。
記憶に留めておいてくれ。

シャルルはよくそう言った。

記録することに意味がないと言った。

ヒカルの脳が記憶すれば良いと医師らしい口調で言っていた。

いつも美しく、優しく、少しだけ哀しそうな瞳でヒカルを見つめた彼は元気だろうか。
生きてはいるだろう。
でも、最後の別れがあまりにも切なかったから、しばらくの間は、彼女はシャルルを思い出すことを躊躇っていた。
名前を口に出すだけで、涙がこぼれた。
大人になると言うことは涙もろくなるということなのか、と思ったくらい涙が溢れた。

それがどうしてなのかも、わかっていた。
理由もなく涙を流す時代が終わってしまっていた。
だから、倖せなシャルルを想像した。

自分が泣かないように。
泣かなかった日が段々多くなった。

その都度、自らを褒めてやることにした。
そのうち、彼のことで泣かなくなった。

彼女はシャルルが誰かと恋にと堕ちて、倖せに過ごして欲しいと思っていた。

自分という枷を離して、彼はようやく自由になれたのだと思っていた。

だからたよりを寄越さないのだと。
そう、信じることにした。

———パリに行くと言うことは、シャルルに再会することだった。

それだけは逡巡した。
幸せに暮らすシャルルに会ったときに、自分が何を思うのか、想像できなかったから。

■75

最後にパリから日本にやって来た時には、もう少し時間がかかったものだった。
今回はアルディ家のジェットでやって来たこともあり、思っていたよりも随分とはやく到着した。

久々に訪れるアルディ邸の外観は酷く静かだった。
ルイの差し向けた車がヒカルの元を訪れたのは、ぴったり72時間後のことだった。

「早く乗れ」
彼は無表情にそう言った。

ヒカルは慌てて車に乗り込むが、彼には連れがいたはずだったのに今回はひとりで居ることに気がついて、声をかけた。

彼は長い脚を組んで、窓の外を眺めていたが、ヒカルの質問には「誰も連れてきていない」と言っただけだった。

日本での恋人というわけか。
それもルイならあり得ることだろう。
パリに着くまでの間、彼は無言だった。

持参したラップトップで何通かメールを書いたり、書類をチェックしたりしている。
まるっきりヒカルのことは無視していた。
単に荷物を引き取りに来た、とでも言いたげだった。
移動中、彼は少し仮眠を取った。
時差もあり、彼は寝ていない様子だった。

いつもそうなのだろうか。
何かに追われるように生きているのだろうか。

目を瞑ったルイの顔が･･･

はじめて逢った時のシャルルにそっくりだった。

彼女はああして眼を瞑るシャルルに出会った。
脳貧血の眩暈に耐えるシャルルに何かしてやりたくて、水浸しのタオルを差し出した。

そして･･･彼女はシャルルと共に居ることを選んだ。

その瞬間の彼の顔に酷似していた。
彼はどんどんシャルルに似てくる。
親子だから当たり前なのだが。

それでも彼の魂が、精神が、シャルルが踏み込み迷ってしまった、あの戻れない路にさ迷っているようだった。
その辿る先もシャルルと似ているのであれば。
彼女はルイを呼び戻すことができるのかどうかわからなかった。

「ヒカル。････今回の滞在は、アルディ家ではなくて、オレの用意した場所に行け」

彼と彼女を乗せた車はアルディ邸の前を通りすぎた。

え？とヒカルが声を漏らした。

目の前を通ったのに。
いつも通り、あの広大な家には灯りが点いているのに。
シャルルは、そこに居るのに。
「なぜ？」
「今にわかる」
「それじゃわからない」
「今はわからなくて良い」
彼は大げさにため息をついた。

「言い返せば良いというものではない。
もう少し、効率的に話をしてくれないか」

青灰色の瞳をヒカルに向けて、彼は断りもなく煙草を吸った。

ライターの炎が彼を明るく照らした。
整った美麗な顔だった。

「‥‥ルイは今まで何をしていたの」
「具体的に言ってくれ。言い直して」
「‥‥ルイは今までどんな生活をしていたの。元気だったの？」
「‥‥ヒカルより有意義な生活。健康状態は見ればわかるだろ」
彼は切り上げ口調でそう言った。
ヒカルはため息をついた。

それでも質問には答えてくれたルイを見て、少しだけほっとした。
最後に逢った彼は、とても冷たかったし、挨拶もできないまま別れてしまったから。

ルイは、まるで気にしていない様子だった。
ヒカルは窓ガラスに手をあてた。

こうしてアルディ邸を外から車で眺める仕草は、最後の日を思い出す。
彼女が大人になった日を思い出す。
あれから、幾年経過したのだろう。
この屋敷は相変わらず変わっていなかった。
彼女だけが時間の流れが違う気がした。

本当は逆なのに。

彼女が変わって、この家は変わらない。
この薔薇が茂る館に足を踏み入れれば、そこはまるで違う世界だった。
彼女は、そこに迷い込んでしまった寓話の主人公と同じだった。
そこを出て、初めて、世の流れが違っていることに気がつくという、日本の昔話。

「‥‥シャルルは元気にしているのかしら」
「自分の眼で確かめたら？」
でも今日は駄目だ、とルイは言った。

「ルイは･･･この間も学会論文を読んだけれど、随分研究しているのね」
ヒカルが言った。
遠のくアルディ家を見るのが辛かった。
どんなにここで降ろしてくれと懇願してもルイはそのつもりがないらしかったから言うのはやめた。
明日になればひとりでも来ることが出来る。
「そうだね」
彼はまたつまらなさそうに言って、煙草を吸った。
「ルイ、こっちを向いて」
ヒカルが言ったが、彼は無視したまま、外の景色を眺めていた。
「･･･ルイ」
ヒカルは行動に出た。

体をルイの方に向けて、彼の細く長い指から、煙草をむしり取った。
ルイは考え事をしていたらしく、彼から煙草を奪うのは簡単だった。

そして彼女は素早く灰皿に押し当てて揉み消した。
一瞬のことに、ルイは少し呆然としていた。
青灰色の瞳が、想定外の行動に驚いていた。
煙草を持ったままの形をした指先が動いてぐっと拳を作る。

「・・・・ヒカル」
「ああ、ようやくこっちを見てくれた」
ヒカルは笑った。

呆気にとられた表情のルイがおかしくて、笑い声を漏らした。
ああ、彼は戻って来てくれた。

「子どものような真似はするな」
「そうしないとルイが話をしてくれないのであれば、いくらでもするわ」
ヒカルの茶色の瞳がおかしそうに揺れた。
彼女の伸びた髪は色素が抜けて、本当に母親に良く似た面立ちになっていた。

父の血も濃く出ていた。

顔は小さく、華奢な印象を与えていたが、実際は彼女は素晴らしい運動神経の持ち主だった。

彼女がルイを追いかけて、裸足でホテルを駆け抜けたことを思い出した。
「そんなに見て欲しいなら」
彼は微笑んだ。

見事な金髪の下から、青灰色の瞳が光った。
彼は彼女の腕を掴んだ。
そして強く引いた。
ヒカルはあっと声を上げる暇もなかった。

こうして何度も引き寄せられたことがあったのに、彼女はすっかり油断していた。

————車内の煙草の煙が蠢いた。

「さっさと言えよ」
彼はそう言って、乱暴にヒカルに唇を押しつけた。
煙草の味がした。
ヒカルの唇を割って、彼は中に侵入してきた。
彼女が小さく声を漏らして抵抗しても無視された。
精悍な頬を押しつけられた。

体の重みが少しかかり、ヒカルは抵抗できずに、されるがままになった。
頭の芯が痺れて、何も考えられなくなりそうだった。
彼はやはり、まだ･･･奪うことでしか自分を曝け出すことが出来ないのだ。

そう思った。

■76

「･･･あなたの傲慢さも迂闊さも変わらないね」
唇を離した後、ルイは皮肉たっぷりに言った。

「自分を見て欲しいと願って耳目を集めるようなことをするのは、幼少期の特徴だよ、ヒカル」
「確かに私はこどものようだけれど」
ヒカルが笑いを漏らした。

「何も聞かされずにただ、来いと言われてやってきた事を浅はかだと言われるかと思ったら。････自分の想定外の事をされて怒り出すルイの方こそ、子どもっぽいわよ」

「生意気さも相変わらずだ。口が達者になっただけ、始末が悪いな」
「そうね」

相変わらず素っ気ない会話だったけれど、何かが違っていた。
ヒカルは極力、ルイの言葉に耳を傾けるようにした。
もう、言い返さずに黙り込むことはやめようと思った。
彼にはそれでは伝わらない。

「・・・学習してこいと言っただろう」
彼は言った。
「・・・え？」

「もう少しましなキスで応酬して欲しいね。
それだけ愚答を繰り返すことができるのであれば」
ヒカルは少し赤くなった。
自分の経験のなさを指摘された。

パリに来て早々に、ルイにしてやられた。
「まさか、あれ以来、オレ以外とはまったく経験してないの？」
ヒカルは唇を手の甲で拭った。

ルイは明らかにヒカルの動揺を見て、嬲（なぶ）って愉しんでいる。

「・・・習ったのもの」
ヒカルは小さく言った。

「ミシェルに？」
「・・・・シャルルに」
ルイの視線が少しだけ斜め前を向いた。

彼は、取り上げられた煙草のかわりに、また、新しく煙草を取り出して火を点けた。

それが何かまじないめいた行為のように感じた。
彼は何か考え事をする前には、必ず煙草を吸う。
まだ、誰にも指摘されていないことであったが。
彼は黙ったままだった。

「それにしては稚拙だね」
少しあってそう言っただけだった。

婚約者の父に習うと言い放ったヒカルの神経が理解できない。
しかし理解したらそれはヒカルの行為を肯定することになる。
彼は持っていた煙草の先に少しだけ力を込めた。
細い煙草が少しだけ、ほんの少しだけ歪んだ。

でもそれは僅かであったので、ヒカルはまったく気がつかなかった。
程なくして、彼女は彼女の知らない場所にたどり着いた。
気になったのは、車を一度乗り換えたことだ。
アルディ家のものではなく、彼の私物のようだった。

そこは、アルディ邸からあまり離れていない場所であり、郊外というには遠隔地ではない。

でも、静かだった。

こんな場所に、アルディ家の別邸があっただろうか。

莫大な不動産や動産を所有するアルディ家のすべてを把握しているわけではなかったが、彼女はシャルルに連れられて、短いオフをあちこちの別邸で過ごした。
———けれどもここは来たことがない。

「オレのセーフハウスのひとつ」

ヒカルが訝しげな顔をしていたことに気がついて、ルイは補足した。
「家に戻ればいいじゃない」
「そういうわけにもいかない時に使う」
彼は自ら解錠した。

だからセーフハウスなんだよ、と独り言を言った。
そこは素晴らしく豪勢なペントハウスだった。

「しばらくここを使え。･･･階下で買い物もできる。
何かあったらフロントに伝えれば大抵の用事は済む」
ヒカルは辺りを見回した。

彼の持ち家に初めて足を踏み入れた。

･･･これが、ルイ・ドゥ・アルディの生活なのだろうか

彼女は息を呑んだ。
あまりにも自分と違うかけ離れた豪奢な生活が垣間見える。
でも、変わらずに、彼は何も置かない主義らしかった。
壁には一面の････あらゆる分野の本や雑誌が並んでいた。

定期的に交換しているらしく、皆、新しいものばかりだった。
彼の脳の記憶分野は、未だ恐ろしい程までに発達し続けて居るらしい。
読んでは覚えて、そして知識とする。
また次の文字を求める。
そのくり返しをしているようだった。
普段は、まったくその素振りを見せないのに。

ミシェルが言っていた彼の「女遊び」の本当のところは、こういったひとり静かになれる場所にやって来て、そして時間を過ごしていることを指しているのかもしれないと思った。

「それにしてもものすごい書籍量ね」
ヒカルが感嘆した。

床から天井までびっしりと本が並んでいる。
几帳面なルイらしい。
まったく乱れがなく、きちんと分類してあった。

アルディ家の図書棟も蔵書がたくさんあるが、ルイはそこも読み尽くしているらしかった。

「･･･暇つぶし」
ルイは静かに言った。

「ルイ、ここまで来たから、私は説明を聞いても良いと思う」
ヒカルは切り出した。

彼がなぜ、ここに連れてきたのかを含めて説明が欲しかった。

「私も気軽にパリに戻ってきたわけではない。

目的がある。
やりたいこともできた。
だから、限られた時間で、出来ることをしたいと思う‥それは非効率的なことかしら」

必要最小限の荷物だけしか持ってこなかった。

これはヒカルにとっては短期滞在であり、日本に帰るつもりだった。

パリは「戻る」で、日本は「帰る」‥‥

ヒカルはどちらが本当の自分の在るべきところなのか、未だ判別がつかなかった。
それでも、今は、ここには「滞在」でしかない。
先ほど、深く激しい接吻を交わした相手は、冷淡に言った。

「それはヒカルの都合だろう」
「ああ、ルイ」
ヒカルは長身のルイに向き直った。
彼女も背の高い方であったが、ルイはさらに背が高かった。

‥‥あのときのことを思い出す。

ルイが彼女の額にキスをしたときのことを思い出す。
家族を作ろう、家族になろう、と持ちかけたのはヒカルの方だった。
でも、ルイが本当に好きな人と結ばれるのであれば、いつでも婚約を解消するつもりだった。
いや、実際のところはそれを期待していた。

彼がいつかアルディ家から解放されることを願って待つことにした。
それを逃げると言われて責められても仕方がないと思っていた。
だから‥‥だからルイは連絡を寄越さないのだと解釈していた。

確かに。

いつもいつも、自分の都合だったかもしれない

「ルイの言うことはいちいちもっともだけれど」
ヒカルは伝えようとした。

「オレは約束通り、迎えに出向いた。それだけ」
「それではなぜ、こんなところに連れてきたの」
ヒカルは反論した。

「ここ、シャルルの知らない場所でしょう。
セーフハウスというくらいだから、かなりプライベートの場所よね。今までこんな場所を持っていることも知らなかったくらいだし。
‥‥ルイの口振りだと、他にもいくつか所有しているのでしょう？
そんな場所に私を連れてくることの理由が知りたい。
なぜアルディ家に入れないのか理由が知りたい。
ルイが結婚を急いでいる感じがしないのはなぜなのか理由が知りたい」

わからないことだらけだわ。
彼女は呻いた。

「本来なら文書照会して欲しいところだね」
ルイは侃諤に言った。

そして同時に冷ややかだった。
「それではひとつひとつ回答しよう」

彼はそう言って、広いバルコニーへ通じるガラス扉を開けた。

セントラルヒーティングが効いているのに、彼は暑いなと言った。
風が入り込んで‥‥暑いけれど乾燥した空気が入り込んだ。

ヒカルの部屋の様子と良く似ていた。

ひょっとしたら、あのマンションは、ルイが選んだものなのかもしれない。

そう思った。

■77

「ヒカルが成人したら凍結されていた婚約問題を進めるという話の時期が到来した」
彼は言った。

バルコニーでは、風がそよいでいて、彼はそこで煙草を取り出した。
小さな白い丸テーブルが置いてあり、その上には使い古した陶製の灰皿が置いてあった。

彼はそこに灰を落としながら、煙草を吸って、バルコニーの手すりにもたれかかった。

背中越しに話をするつもりはなかったので、ヒカルも彼の脇に並ぶ。

こんな状況で、凪風に吹かれてルイと立ち並ぶとは思ってもいなかった。

彼は風下に立ったヒカルに、無言で、細く長い指で反対側を指した。
風上に立て、と言っているらしい。

ヒカルは微笑んだ。
彼のこういう仕草が嬉しい。

ルイは冷たいし表情をあまり出さないが、やはり‥‥まったくの他人ではなかった。

その彼と、何事もなければ、やがて本当の家族になる。

———言い出したのはヒカルだ。

彼女が通った全寮制の学校には、すでに婚約が決まっている者がかなりの割合でいた。

親が決めた者や小さいときから同じような環境に育っている家族ぐるみの付き合いの延長にある者同士が婚約の相手だった。
ヒカルにも居るのか、と聞かれたけれど彼女は居ない、と回答していた。
少しだけ、彼女達が羨ましかった。
先の未来に顔をほころばせたり、不安で情緒不安定になったり、相手のことを知りすぎるか知らなさすぎると不平をもらし
たり‥‥そんな彼女達が羨ましかった。
そうなりたいと思わなかったけれど、ヒカルの欠けている部分だった。

‥‥想像できないのだ、未来の自分を。

だから、ルイが婚約解消を持ち出してくれると良いな、とか、シャルルが元気でいれば便りがなくても良い、などという、何となくというか、曖昧模糊とした希望や未来像しか持っていない。

そんなヒカルの物思いをまるっきり黙殺して、ルイはぽつぽつと話し出した。
これは非常に珍しいことだった。

「これに伴って、ミシェルのオレに対する教育係の任が解かれる。
後見登録の解除だ。
未成年でも結婚すれば擬成人として扱われるから、オレとしては早く結婚したかったのだけれどもね」
ヒカルは答えに詰まった。

あれほどあのときに、婚姻を確約しろと強要していたのは、このためだったのかと思った。

それならしかるべき家柄の令嬢を迎えれば良かったのに、とも思った。
彼にはそうできない理由があったのだろうか。

「ミシェルとの共同事業や研究は、以前から継続しているものばかりだから、独立することができない。
・・シャルルの指定した事業拡充は、今のところ軌道に乗っている。
それはアルディ家の出資があってこそだから、これも独立事業というより、アルディの経営の一環だ」
ルイなりの近況報告のようだった。

「次に質問の回答だけれど」
ルイが切り出した。

「セーフハウスを持つのは、成人したアルディ家の者なら誰でも持っている。もちろんシャルルもあちこちに持っているよ。
———ヒカルが知らないだけだ」

そうか。
自分はアルディ家の者でなかったら・・・知らない事情のひとつだったのだ。

「婚約者殿がホテル住まいじゃ問題だろう。
だからオレのところに泊める。
それだけ」

「一般の旅行者と同じように扱ってもらって構わないのに」
「オレがミシェルに殺される」

「ミシェルに・・・？」

シャルルに、ではないのか。ヒカルは呟いた。

「今日はアルディ家に入れない。立ち入り禁止になっている。
だから行くなら明日行け。
アルディ家に入れない理由は明日行けばわかる」
ルイはまた煙草を吸った。

紫煙が風になびいた。
彼の髪も揺れていた。
見事な金髪が燦爛としていた。
彼は･･･本当にシャルルに似ている。
その髪の色を除けば、シャルルそのものだった。
話し方も流し目の角度も。
何もかもがシャルルの若い頃そっくりだった。

「今日は立ち入り禁止ってどういうことなの」
「二度は言わない」
明日行け、ということらしかった。
ヒカルはわかった、と言った。

それでも･･･パリに訪れているからには、知己に連絡を取りたいといったところ、一蹴されてしまった。
瞥見しただけでルイは駄目だと言った。

「大した仲じゃないだろう」
彼女は返答に詰まった。

････確かに、ヒカルには親しい友が居ない。

毎日まっすぐアルディ家に戻り、学校では何か目だった活動をしていたかというとそれほどでもない。

人に嫌われるのが怖くて、何かをすることを控えていた。
目立たないように生きていた。
だから学校の友人といっても、ルイが指摘するように、こちらに渡ることを今、伝えなければな

らない人物は居なかった。

「自分がない生活というものは楽だが後に･･･代償を払うことになる。
ヒカルはやりたいことがあると言っていたけれど、具体的なビジョンがないうちは、それは将来展望とはかけ離れた単なる『気の迷い』という」
彼は辛辣だったがそれは本当のことだった。
「だったらそれを全うしろ」
彼はぽつりと言った。
ヒカルが顔を上げる。
彼が何を言いたいのかわかった。

「―――オレは行く」
彼は煙草を揉み消した。

「どこに？」
「質問には全部答えたはずだが」
彼は薄く笑った。

「それとも同じベッドが良い？」
ヒカルは結構です、と言って断った。

「でも、アルディ家に行くまでに交通手段がない」
「今日は用事を済ませてこちらに戻る。
･･･・それなら良いだろう」
ヒカルはほっと息をついた。

アルディ家にはルイも同行してくれるらしい。

･･･ひとりでふらりとシャルルに逢うことはできそうになかった。

彼にはアポイントを取らなければ、通常は誰も逢えない。

でもルイなら別だった。
彼は次の当主なのだから。

「ルイ。今日は戻るのね」
「ヒカル。オレにたたき出されたくなかったら、くり返し尋ねるのはやめてくれ」

ルイは大きく息を吐き出して言った。
「それからオレのことも干渉しないでくれ」
ベッドで待つなら、マスタールームはその奥だ、と言って彼はまた車のキーを取り出して、胸ポケットにしまった。

「‥‥ルイ、行ってらっしゃい」
ヒカルはかける言葉を少し考えて、そう言った。
長らく、誰にもそうやって声をかけたことがなかった。

ルイは青灰色の瞳でちらりとヒカルを見てから、無表情に言った。

「‥‥‥余計な好奇心は身を滅ぼすぞ」

帰ってくるまで、余計な詮索はするな、ということらしかった。
つまり、帰ってくるまで待って居ろ、ということだった。
ヒカルは少し笑った。
ルイのことをよく知らなかった。
今までこれほど会話を交わしたことがなかった。

大人になって‥‥彼女がルイに話しかけるようにしたら彼は応えてくれる。
今まで、ヒカルが語りかけていなかっただけだった。
本当にそう思った。

■78

目が醒めたとき、彼女は広い居間のソファでうたた寝をしていた。
強い陽射しが差し込んできて、それで彼女はその場所がいつものマンションではなく、パリの、ルイの家だということを思い出して躰を起こした。

夏の陽射しだった。
ヒカルは目を細める。

盛夏を過ぎると、パリは秋になるのが早い。

もう何年も日本の夏を経験していたが、彼女はこの陽射しを遠い記憶として肌に刻んでいた。

ああ、あの夏だ。

パリの夏だ。
そう思った。

ルイの帰りを待って、居間でそのまま眠ってしまっていた。
彼の言ったとおり、生活には不自由しなかった。
でも、外出しようとしたら、阻まれてしまった。
ここは入るのも出るのもセキュリティカードがないといけないらしい。
入館にカードが必要なのはわかったが、出るときにまで必要とは相当用心深い。

彼女は渋々部屋に戻った。
それからはすることがないので、持ってきたラップトップの設定をしたり、ルイの膨大な蔵書を眺めたりして過ごしていたが、やがて寝入ってしまったらしい。

彼女は軋む躰を起こした。
若いヒカルは無理な姿勢で眠っても、その後仮眠を取ればすぐ復調する。
それでも長旅の後のこの姿勢での睡眠はさすがに疲れた。

ゆっくり躰を起こす。
こめかみが少し痛んだ。
ああ、徹夜と同じくらい体力を消耗している。
そう思ったときに、彼女の躰に纏わり付く布の感触に気がついた。

———薄い毛布が掛かっていた。その毛布からは僅かだけれど、煙草の香りがした。

誰が･･･
そう呟いたとき。

「自分で覚えがなければ、オレしかいないだろ」
声がした。

「起こしてくれても良いじゃない」

彼女は半2 階になったダイニングに座ってコーヒーを飲みながら煙草を吸う彼を見つけた。

彼は数種類の新聞に目を通し、送られてきた本日の予定をプリントアウトして内容をチェックしていた。

居間を見下ろす位置にあるダイニングからルイが冷たい視線で見下ろしていた。

「寝相が悪い女は最悪だ」
ヒカルは悪かったわね、と言って立ち上がった。

ううん、と軽く伸びをする。
関節が鳴った。

アルディ家ではコーヒーは飲まなかった。
いつも朝は濃いティーだった。

当主の嗜好だった。

ヒカルはダイニングまで階段を上った。
「‥‥私も飲んで良い？」
見ればコーヒーは二人分作ってあった。

ヒカルはコーヒーメーカーの液体を、適当なカップを見つけて注いだ。

ここは驚くほど‥‥食器も少なかった。
ルイが自分で給仕する様が想像できない。

「ルイ、いつからこういうことをできるようになったの？」
「‥‥‥取り扱い説明書を読めばわかるだろ」
つまらなさそうに彼は言った。

ヒカルがまったく気がついていなかっただけだったが、彼は着替えて、シャワーまで浴びていた。

金髪が少し濡れている。
「答えになってないよ」
ヒカルが吹き出した。

彼と朝食を共にしたのは、一体何年ぶりのことだろう。

一緒に暮らしていたときから、ルイはいつも、朝は無言でスープくらいしか飲まなかった。
朝が弱いのはシャルルに良く似ていた。

時計を見ればまだ朝が早かった。

「ルイ。いつ帰ってきたの？」
「さっき」
ということは、眠っていないのだろうか。

ヒカルはカップを置いた。

「ルイ･･･睡眠はきちんと取った方が良い」
「オレに干渉するなと言っただろ」
ルイがため息をついた。
何時間前のことなら覚えていられるんだ、とヒカルを蔑視した。

「今日、車を運転するんでしょう。寝不足の運転手が引き起こした事故に巻き込まれるのはごめんだわ」
「仮眠は取っている」
彼は無表情に言った。

「ヒカル。今日は出かける。･･･支度をしろ。アルディ家に行
く」
彼は「戻る」とか「帰る」と言わなかった。
「行く」と言った。

「ルイ････あなたはアルディ家に戻ると言ったのに、結局また家を出てしまったの？」
「いいや？」
彼は薄く笑った。

「いつもならきちんと通っているよ。
夜はそこで睡眠を取るようにする。
約束通りに。･･満足だろう？」
「それならどうしてこういう家を持っているの」
「必要だから」
「だからそれがわからない」
ヒカルは彼の答えが不十分だと言って抗議した。
「････アルディ家が定期的に出入り禁止になるんだ。だから」
彼は嗤笑した。

ヒカルが怪訝な顔をした。
そんなことは彼女が居たときには一度だって無かった。
何が、あったのだろうか。

「とにかくシャルルに会う」
ヒカルは短く言って、コーヒーを飲み干した。
ミルクも砂糖も入れなかったので、あまりの苦さに辟易した。
ルイはいつもブラックで飲むらしい。

———慣れない飲み物を飲んでしまった。

でも、ルイがコーヒーを好むことを知った。
今まで知らなかった。

「支度をする。時間を決めてもらったらそれまでに」
それなら60 分後に。
ルイが言ったので、ヒカルは頷いた。

着飾らないし化粧もしない彼女には充分すぎる時間だった。

「･･･ヒカル」
ルイが珍しく彼女を呼び止めたので、ヒカルは何？と言って、

彼に振り返った。
「････警告はしたからな」
「ああ、ルイ」
ヒカルは困ってしまって懇願した。

「私、ルイの言うところによると、数時間前の言葉も忘れてしまうくらい忘れっぽいの。だから何を警告されたのか････」
そこまで言うと、ヒカルははっとして口をつぐんだ。

ルイと会話をするために、極力彼の話に質問をすることにしていたし、感想を忌憚なく述べることにしていたのに。
彼女は黙ってしまった。
居間に降りたヒカルをダイニングから見下ろすルイが･･･あまりにも、シャルルに酷似していたから。

その姿は、あのときの。
最後に別れた時のシャルルの姿に良く似ていた。
何かを思い定めて、本当はそうしたくないのにそうしなければならない、と言いたそうな、そんな苦悶の表情を浮かべていた。
ルイは常に無表情でそんな顔をしたことはなかった。
自分の影に語りかけるときでさえ、淡々としていた。

「･･･はやくしろ。あと52 分だ」

ルイはヒカルと目を合わせて、しばらく無言で彼女を見つめていたが･･･
ふいに眼を反らして、また煙草を口にくわえた。

彼はいつも、何かを思うときに煙草を吸う。

■79

久方ぶりに訪れるアルディ家は少しも変わっていなかった。
彼女は正面玄関から入った。
一般の来訪者の扱いだ。

―――ルイもそうだった。

ヒカルは訝しげにルイに尋ねる。
物々しい厳重なセキュリティ・チェックと幾重ものゲート。
こんなものは当時はなかった。

実子のルイ・ドゥ・アルディでさえ一般受付で来訪を知らせるとはどういうことだろう。
私邸入り口に直接車が着けられない。
もう、そこからいつも通りでなかった。
いや、ルイと共に出発したときからそうだった。

彼はひっきりなしに煙草を吸っていたし、無言だった。
あれほど室内で話をしたのに、彼はアルディ家が近づくにつれて不機嫌になっていくようだった。緊張しているのかもしれない。
ヒカルも同調して何も発しなかった。

シャルル。
シャルル・ドゥ・アルディ。

ヒカルはルイから情報を得られないと知ると、ひとり思いを馳せた。
彼の活動は断絶していない。
シャルルの精力的な活動については耳にしていた。
彼女が傍らにいたときからのそれと何ら変わっていなかった。
だから･･･元気でやっていると思っていたのに。

この警備は何だろう。

あらかじめこの時期は来客者を受け付けていない旨が受付に書かれており、それは周知徹底されているようだった。
あたりはがらんとして静かだった。
彼らはGPS 機能も搭載した、非接触型チップを腕に貼られた。
ゲートを越えて内部に入るにはこれがないと進めない。
一度剥がせば通報されるシステムだった。
そして出るときにもこれがなければ出られない。
こんな物々しい警備で･･･何があったのだろうか。
ルイはいずれわかる、と言ったきり答えなかった。

気になったのが、ヒカルの知る使用人がすべていないことだった。
これにはルイは回答した。

「立ち入り警戒レベルがAAA の時には、彼らは出勤不能で自宅待機なんだ」
さらりと、ごく当たり前のことのように言った。
「そんなことを･･･」
「どうして? ヒカルが居たときからそうだったよ」

彼は事も無げにそう言ったので、ヒカルは足を止めた。
茶色の瞳を大きく見開き････ルイが何を言っているのかすぐに
は理解できなかった。
「ちょっと待って。ルイ。･･･それって･･･」
「知らなかったのはヒカルだけだよ」
ルイは冷笑した。

薄い整った唇を歪めて、彼女を見た。

置いていくぞ、と言いながら背中を見せた。

ヒカルは慌てて歩き始めたが、頭の中が突然殴られたような感覚に襲われた。
太腿の血管が激しく脈打つ。
歩みを進める度に、そこから血潮が吹き出しそうなくらい動揺していた。

ヒカルはじっと考えた。
空調が効きすぎるほどの館であったのに･･･じっとりと汗をかいていた。

････この時期。
この夏の時期。

ヒカルは･･･ひとりだけ日本に行く。

長期で日本に行き、パリの夏を本当には知らない。

････早く戻って来たのは、あのときだけ。

ルイが13 回忌で日本に来た時だけ･･･。
あのときはシャルルは別の場所に居た。
予定を繰り上げたと言っていた。

―――あのとき。

ルイは「シャルルが何をしているか知っているか」と言っていた。

そして今･･･これだけの厳重体勢の中、自分を伴ってルイが見せようとしているもの･･･

喉がからからに渇いた。
先ほどあれほど苦いコーヒーを飲んだのに。
知らなかったのはヒカルだけだった。
毎夏行われる「何か」がここで始まっているのだ。
そして彼女のが居ない間はこのような状況で、ルイはいつも外に出される。

だから彼は「成人してから」と言ってはいたが、別宅をいくつも持っている。
あの蔵書量は、成人してから集めたものではない。
もっと前から。

彼は各所を転々とする生活だったのだ。
ヒカルが知らないだけで‥‥。

そしてヒカルが帰ってくるときには元通りの静かなアルディ家になる。
唇を噛んだ。
なぜルイとミシェルが「おまえだけが知らない。知らないことは罪がないと言えるのか」と声高に言っていたのかが‥‥‥

それを知るときが来たのだと思った。
この先には間違いなく、シャルルが居る。

―――嫌だ。怖い。

ヒカルは‥‥ヒカルは縋るものが必要になった。
意識していなかったが、ルイの腕にもたれ掛かった。
そして、ぎゅっと‥‥ルイの細く長い指に、自らの指を絡ませた。
誰かの温もりを感じていたかった。
ルイの手は冷たかったけれど‥‥‥

温もりを感じた。

彼は無言で、彼女の手を握り返した。
かつて、ミシェルが煙草が吸いたいと言ったために内庭を案内した時と同じだった。
沈む絨毯を踏みしめながら次に硬質のタイルを踏みならし‥‥長い廊下とポーチをくぐり抜ける。
そこにもゲートがあった。
シャルルやルイの心の壁のように思えた。

これほどまでに幾重にも張り巡らされた壁を越えてあるものは何だろう‥‥。
それを越えてヒカルは見るべきなのだろうか。

ヒカルの知らない‥‥シャルル・ドゥ・アルディ。

室内を抜けて、ポーチを抜けて‥‥
陽射しの差す、懐かしい薔薇の香りのする庭に出た。
彼女は陽射しに目を細めた。

茶色の瞳は色素が薄いので、サングラスをかけないと辛いくらいの強い陽射しだった。
それでも手を顔にやって影を作る余裕さえなかった。
「ルイ‥‥」
彼女はぎゅっとルイの手の平を握った。
ルイが、静かに‥‥親指で彼女の手の甲を撫でた。
お父さんじゃない。兄でもない。‥‥家族にもなれない。

最愛の友であり、哀しみを分かち合う仲間であり‥‥ヒカルの心の中で最も大きな割合を占めるフランスの華の‥‥もう一つの姿を見ることになる。

ヒカルのこめかみがまた痛んだ。

―――非常に緊張している。

繋がれた手も汗ばんでいた。

ああ、シャルル。
あの、静かに哀しそうに時折うっとりするほど美しい顔で微笑む、薔薇のような人。

‥‥私は真実を知る。

大人になったからではなく‥‥真実を知って大人になる。

彼女は内庭の中に‥‥足を踏み入れた。

■80

ここを訪れるのは本当に久しぶりなのに、つい昨日のことのようにいろいろなことが思い出される。

最後の日に、シャルルが渡してくれた薔薇の鉢植えは、今もヒカルのマンションで育っている。

ルイに殴打を繰り返すシャルルを止めようとしてかえって自分が脳震盪を起こしたこと。
ミシェルに手酷く叱責されたこと。
ルイに‥‥家族になろうと言って婚約を承諾したこと。

———今も思い返せば切なくなる。

でも泣かなくなった。

彼女の中でそれだけ長い年月が経過していた。
風に乗って、薔薇の香りが漂う。
ここは年中薔薇が咲いている。
彼の品種改良した薔薇は、いつも「ファム・ファタル」と名前が付けられていた。
ヒカルは額に汗を浮かべながら、一歩一歩足を踏み出した。
全身に冷や汗とも脂汗ともつかないような汗が滲む。
湿り気で貼り付けたID チップシールが剥がれそうだった。

‥‥物々しい雰囲気だった。

周囲は静かで‥‥とても静かだった。

それでも見え隠れするSP の屈強だけれど敏捷な体躯や、ヒカルが初めて見るスタッフの厳しい顔がちらりちらりと建物の影や木立の中から浮かんでは消えた。
警戒レベルがAAA とはこういうことを言うのか。
ヒカルは唇を噛みしめた。

彼女をどうして一般来客棟に行かせたがらなかったのか、理由がわかった。
いくら夏の間だけで、撤去してしまったとしても、このゲートの痕跡は残ってしまう。
ここは明らかに彼女の知らないアルディ家だった。

強い陽射しに、濃い緑の木々に、薔薇の温室、薔薇が咲き誇る薔薇園。

‥‥何もかもが昔のままだったのに、そこは彼女の知っている

懐かしくて慕わしい空間ではなかった。
ルイから離れて行動しないように、と能面のようなスタッフから念を押された。

彼女は無意識に小さく頷いた。

シャルルに近づいてはいけない、ということなのだろう。
心臓が早鐘を打ち、喉が渇き、汗が出る。
瞬きが早くなり、これが非常に焦眉の事態であることを知らしめる。

「･･･ヒカル。勝手に動くなよ」
ルイが囁いた。

ぐっと、握られた手を強く引かれた。
自分はどうやら足を速めて歩んでいたらしい。

････温室に人影があった。

「シャルルは温室ね」
ヒカルが言った。

そちらに進もうとするが、「温室には入ってはいけない」と釘を刺された。

「どうして」
ヒカルは尋ねた。

焦りで、相手が初対面の、指示だけされているスタッフであるということを失念した。

「･･･それなら外から見るだけなら良いでしょう」
ヒカルは代案をだした。
声をかけない条件でそれは承諾された。

ルイの口添えがあったからだったが、ヒカルは彼に感謝の言葉を述べる余裕さえなかった。
裏側のボイラー室から回り込んで、温室の中がよく見渡せる場所に進む。

幼い頃からここに出入りしている彼女だからこそできたことだった。

････人影を見つける。

いつもの場所のいつもの空間に････長身の人物が立っていた。

薔薇の剪定をしていた。

「････シャルル･･･！」
ヒカルは呻いた。

ガラス張りの外壁に手の平をついた。
話しかけてはいけないと言われたが、彼女の声や姿に気がつい
て欲しいと願いながら、ヒカルは額をつけて･･･薔薇の温室をのぞき込んだ。
それは、ヒカルの母が、かつて、幼いルイを眺めていたときと同じ光景だった。

「シャルル」
ヒカルはもう一度呟いた。

ルイから手を離し、両手をガラスの壁にあてた。

手をあてても距離が詰まるわけでもないし、ここから扉が開くわけでもない。
相当距離が離れており、こちらは死角になっているので、彼からはどうやっても気がつかない場所だった。

それでも、ヒカルは距離を縮めようとして、額を壁に押しつけた。
完全室温管理されている温室は密閉されていて、声も気配も伝わらない。
ただ、室内全体を管理するボイラーの振動だけが、彼女の手の平から伝わってきただけだった。

「シャルル････」
三度、彼女はシャルルの名前を呼んだ。

･･･シャルルは居た。

シャルル・ドゥ・アルディは居た。
ヒカルは息を呑んだ。

息をすることを忘れそうだった。

最後に別れた時の、あの、切ないキスと苦しい涙を思い出した。

目の前が霞むが、涙を流せば彼の姿を見ることができない。

シャルル・ドゥ・アルディは静かに、薔薇の剪定をしていた。

年月を経て、なお彼は美しかった。

･･･少し痩せたようだった。

姿勢の良い長身に、白金の髪が太陽の晄を受けて煌めいている。

年齢を経て、柔らかく細い髪がさらに柔らかくなり、彼の整った頬にかかっていた。

薄い唇に、理知的で物憂げな切れ長の青灰色の瞳、高い鼻梁･･･
音のしない所作。
時々、耳に髪をかける仕草。
見間違えるわけがない。
確かに、確かにシャルルだ。
シャルル・ドゥ・アルディだ。

ヒカルは少し微笑んだ。
相変わらず、美しかった。
シャルルは元気で過ごしている。
これは、彼の完全オフの時間だから、誰も邪魔が入らない様に厳戒態勢なのだ。

彼は休日を取らない。
その代わりに時々まとまってオフを取る。

これまではヒカルと共に出かけていた時間を、今度は自分自身のために使おうとしている。
毎夏行われることだと知っていながら、彼女はそう強く思って、納得しようとしていた。

きっとそうだ。
そうに違いない。

ヒカルがそう思った時のことだった。

シャルルがふと顔を上げた。

そして、温室から入ってきた人物に向かって屈んで剪定をしていた躰を起こし、ゆっくりと微笑んだ。

そして･･その人物に、シャルルは艶やかにこの上なく美しい微笑みを浮かべて、嬉しそうに名前を呼んだ。

「マリナ」

確かに、彼はそう言った。

・・・ヒカルの口許から笑みが消えた。

■81

人間が集中するときは、本当に何も聞こえなくなるし、見たいもの以外は見えなくなる。

それを身をもって実証した。

ルイもシャルルも考え事をするときには、こういった状態に陥るのかと少しだけ理解した。

ヒカルは･･･

シャルルが今まで見たこともないような、少年の様な朗らかな声音と杲々した微笑みで彼女を迎え入れる彼を見つめ続けた。
これを観察と言えばその通りであった。

彼の･･･動きひとつひとつ、瞬きや目配せの微細な様子、細く長い指が伸びて、彼女を迎え入れる様を、ヒカルは信じられない思いで見つめていた。
盗み見しているとか、のぞき見しているとか、まったくそんな後ろめたい感情さえ湧かなかった。

「･･･どういう事なの」
ヒカルは呻いた。

シャルルは茶色の髪の、とても小柄な女性･･少女と言ってもおかしくない東洋系の女性を伴っていた。

彼女は･････スケッチブックを抱えて、髪の毛を揺らし、そして少女の格好をしている。

･･･随分と時代が古いデザインのものだった。
こちらからは顔がよく見えない。

「一体、どういう事なの」
彼女は手の平を壁につけたまま、じっと･･･瞳を反らせることなく唱えるように言った。

何をしているのかがわからない。

見ているのに、それが映像として脳に入ってこない。

周囲のもののピントがぼけて･･･そこだけしか見えていないは
ずなのに、それが何を湿しているのか理解できない。
判別出来ない。

彼は優しく微笑んで、彼女の肩をゆるく抱き、そして彼女の耳元に唇を寄せて、何かを囁いた。
明らかに愛を囁く者の姿だった。

「何なの、これは･･･何なの････」
ヒカルは首を振った。

「彼女は･･･誰」
「誰か」
「ルイ！」
きっと瞳を光らせて、ヒカルはルイの方に白い顔を向けた。
わなわなと唇を震わせている。

初めて見る彼女の形相に、ルイは肩をすくめた。

―――想定内の反応だった。

きっと、こうなることはわかっていた。
でも、連れてこないわけにはいかなかった。
「私の質問に答えて。今すぐ」
ものすごい剣幕のヒカルに、ルイは冷笑した。

今、ガラスの壁越しに見える、シャルルと良く似た顔の青年は静かに回答した。

「････この夏の、マリナ・イケダ」
「ルイ！わかるように説明して」
「だから」
ルイは静かに言った。

ヒカルの茶色の瞳を真っ直ぐ見た。
吸い込まれそうな青灰色の瞳と、言いようのない焔を持った茶色の瞳が交錯した。

「だから、あれはこの夏のマリナ・イケダだよ‥」
「もう良い‥‥シャルルに直接尋ねることにする」
ヒカルは押しつけていた両の手のひらを握った。

ルイの短い言葉からは事情がわからない。
ヒカルはルイの脇を通り抜けて、温室の入り口に向かおうとした。
「待て」
ルイがヒカルの二の腕を掴んだ。

「ルイが言わないなら、彼に聞く」
「ヒカル」
ルイが彼女の名前を低い声で言った。

「離して」
彼女はルイに強く握られた二の腕を振り払った。

「オレの話を最後まで聞け」
「あれはマリナじゃない。おかあさんじゃない」
ヒカルは目をぎらつかせて言った。

これほどまで自分の中に、荒れ狂う狂乱の嵐が訪れるとは思ってもいなかった。

「おかあさんじゃない。マリナ・イケダじゃない」

彼女に似せた‥‥まるっきりの別人だった。

茶色の髪も、長さも、若い頃に好んでつけたという赤い髪飾りも、みな良く似ているけれど、まったくの別人だった。

年若い‥‥そう、ヒカルとあまり年齢の変わらないような、小柄な日系人を、マリナ・イケダにしつらえているのは、明らかだった。

「聞け、ヒカル」
ルイは静かに言った。
「シャルルに聞くならそれも良い。
でも彼には今、話しかけても無駄だ。

だから、オレの話を聞け」
「どういうこと」
ルイは言葉を切った。

そして今度はヒカルの二の腕の両方を大きな手のひらで掴んで、ヒカルの躰をルイに向き合わせた。

「･･･今のシャルルにはマリナしか見えていない。あれは毎年用意される、シャルルのためのマリナ・イケダだ。本人じゃない。
･･･良く似た娼婦を呼んで来るんだ」
「娼婦・・・」
そういう職業があるのは知っていた。

でも、娼婦をシャルルが呼び寄せて、マリナ・イケダの格好をさせて、マリナと呼ぶ姿を見て・・・
ヒカルは動転していた。

「シャルルは毎年夏になると壊れる。ああやって、マリナを再現しないと正気を保つことが出来ない。
ヒカルがいないほんのひととき、彼はああして狂気を発散させる。
･･･毎夜毎夜、念願のマリナを抱いて、朝から晩まで一緒に過ごす。」
ヒカルは横目で･･遠くに見えるシャルルと彼女を見た。

彼は嬉しそうに頬を緩めて笑っている。

･･･ヒカルが見たことのない笑顔だった。

彼女以外しか見ていなかった。
彼女に常に触れていた。

そして･･･剪定した最高の状態の薔薇を、彼女に差し出しているところだった。

･･･品種改良したあまたある薔薇の中で、もっとも彼が気に入っている種だった。
「あの事故の日前後。彼の結婚記念日。その時期は状態が最悪だ。
誰も彼に会うことが出来ない。
彼は寝ないし、勝手に睡眠導入剤と致死量ぎりぎりの安定剤と弛緩剤を混合して点滴や注射したり、錠剤を大量に服用したりする。

食事もとらない。
ただひたすらに、薔薇を愛でてマリナを愛でて、そして最後には彼女が居ないと泣いて放心状態になる。

‥‥‥死にたくなくてもいつ死んでもおかしくない奇行を繰り返す」

「‥‥‥信じない」

「ヒカルが信じなくても関係ない。これは事実だ」

ルイは言った。
淡々と言った。

「ああして、誰かひとりをマリナと呼んで、短いひと夏を過ごす。
愛なんてない。ただ、躰が在れば良い。彼は毎年違うマリナを抱いて愛して、そしてそれで精神を保つ。その間は誰も逢えない。誰にも逢わない。‥‥誰の声も聞こえない」

「うそ！」

「嘘じゃない。おまえの来訪を伝えたのに、彼には聞こえていなかった。
今年のマリナに、どんな薔薇を捧げようか、それだけを考えている」

「彼はそんなに弱くない。
彼はシャルル・ドゥ・アルディよ。
‥‥そんなに‥‥脆くない」
「違う」
ルイはきっぱりと断言した。

シャルルをかばうつもりはないけれど、と前置きした。

「シャルル・ドゥ・アルディだから‥‥狂気の血を引く者だから、ああして解放しないと生きていけない」
「なぜ‥‥彼を治さないの」
「彼がそれを望まないから」
「ルイは息子でしょ！」
ヒカルは怒鳴った。
普段、声を荒げたことのないヒカルは怒気を迸らせた。

「それならどうして彼をああやって、放置しておくの。
彼はお医者様に診せて治療すれば治るかもしれないでしょう」
彼に酷いことを言っているのはわかっていた。

シャルルの隠れた病に気がつかなかった自分のことを棚に上げて、彼を責めた。

彼も長らく放置されていたのに、ルイがシャルルに何ら改善策を施さなかったことを責めた。

「ヒカル･････」
「どうして･･･」
彼女は絶句していた。

毎夏。

彼は彼女のために、メッセージを送って寄越していた。
でもそれはあらかじめ準備されていたものだった。
彼は夏にはヒカルの知るシャルルでなかった。

だから、早く帰ってきたあの夏に、ルイは先に戻って来ていた。
ヒカルに知られないように、指示を出してシャルルを別の場所に連れて行ったのだ。

ヒカルは････
ルイの手を振り払った。

そして壁に額を擦りつけた。

「シャルル････シャルル･･･私はここに居るよ････」
彼女は聞こえない言葉を繰り返した。
彼の名前を何度も呼んだ。

ヒカルの目から･･･涙がこぼれた。

人前で泣かないと誓ったのに、彼女はシャルルのために涙を流した。

「シャルル･･･私の天使･････ねぇ･･･倖せなの？彼女と一緒でほんのひととき･･･あの頃に戻れているの・・・？」

彼女は言った。
届かない言葉を吐きだした。
また拳を作って、彼女は総身を震わせた。

「ねぇ･･･私は、ここに居るよ。ヒカルは戻って来たんだよ。こっちを見て････」

・・・でも、シャルルには届かなかった。

彼が彼で在り続けるために、彼は身の内の狂気を鎮めることが出来なくなるくらい崩壊していたのに、それを静かに抑え続けた。

ヒカルのために。
でも、それが耐えられなくなった。

ファム・ファタルと思い定めたあの人に似てくるヒカルを見つめ続けることが眩しくなってしまった。
だから彼が「いつかあの人に逢いたい」と言うけれども、「すぐに会いたい」と言わなくなった理由を初めて知った。

彼は倖せそうに微笑んでいた。
似ても似つかない、背格好だけが似ている「この夏のマリナ」に、愛おしげに微笑んでいた。

唇を寄せて･･･彼は彼だけのファム・ファタルに気恥ずかしそうにキスを落とした。
その少し離れた場所で、彼の永遠の晄が涙を落としていることに、シャルルはまったく気がついていなかった。

■82

それからどうやって帰ったのか、覚えていない。
まるっきり･･･まるっきり覚えていなかった。

気がつけば、彼女はほんの何時間か前までうたた寝していたソファに座っていた。
まるで夢であったかのように。

でも彼女の肌は乾燥した汗の不快感を訴えていたし、茶色の髪は乱れていた。
シャルルに再会するということで、ほんの少しだけ紅をさした唇も乾いていた。

‥‥彼女は剥がされたチップシールの跡をそっとさすった。
まだ少し赤くなっていた。

彼女が人事不省になっている時に、出館の際にルイに剥がされた痕だった。
夢ではなかった。

彼女はうずくまった。
かつて、ルイがあの薔薇園でそうしていたように。

彼女は膝を立てて、背を丸めて、自らの躰の温度が放出しないように、表面積を縮めた。

夏なのに、寒々しかった。

そして記憶を巻き戻し、追念する。
何度もくり返しあの画像を思い浮かべる。
茶色の瞳は瞬くことを放棄して、彼女は必要最小限の生理行動しか行わなくなった。

呼吸は浅くゆっくり、瞬きは瞑っているのか瞬いているのかわからないくらい速度が落ちた。

シャルルはいつも夏にああなることを初めて知った。
だから、ルイを殴打したのは、彼が‥‥激昂したこともあったのだろうが、まだ、壊れたままだったのだ。

———彼はこちらとあちらを行ったり来たりしている。

出会った頃のマリナを再現して、彼は‥‥かろうじて自分を保っている。

ヒカルが追い詰めていたのだろうか。
彼女があまりにも、母に似ているから。

自分が無邪気に無頓着に振る舞った様々なことが、彼を苦しめていたのだろうか。
用意された『マリナ・イケダ』は『マリナ・クロス』ではなかった。
ヒカルの母のマリナではなかった。
彼と出会った頃の‥‥きっと、彼の「青春の輝き」の頃のマリナ・イケダから、彼はやり直そうとしているのか。

シャルルは、マリナ・イケダの存在が消えてしまったことを受け入れられない。
受け入れたら、死を肯諾することになるから。

こんなに、こんなに長い年月が経過しても、彼はまだ彼女を求めている。
その狂気にも似た・・・いや、狂気そのものの想いが・・・行き着く先がなく彷徨っている。

「・・・・マリナ、シャルルを連れて行かないで・・・」
彼女は膝に額を押しつけた。

そして呟いた。
「・・・・気は済んだ？」
突然、声がして、ヒカルを顔を上げた。
あたりはすでに暗くなっていた。
時間の感覚がない。

自分はどれくらい長い時間をこうして過ごしていたのだろうか。
「最悪の顔だな」

冷たい素っ気ない口調で、あざ笑うかのように、青灰色の瞳の持ち主は言った。
彼は煙草を吸っていた。
かなりの本数の煙草の吸い殻がテーブルの上にあった。
ヒカルはまったく気がつかなかった。

———放心状態だった。
「気落ちするのは勝手だけれど」
ルイは紫煙を天井に向けて吐きだした。

照明は点けられていなかった。

・・・気がつけば、ヒカルの肩には、うたた寝していたときにかけられた薄手の毛布がかかっていた。

「退行するのはよしてくれ。・・・シャルルだけで充分だ」
「シャルルが退行・・・」
そう、とルイは煙草を口にくわえながら足を組み直した。
向かいのソファに気怠げにもたれていた。

「彼はあのときに戻っている。ヒカルもオレも生まれる前の、あの人と共に居た、あの頃に。やり直して間違いを正そうとしている」
「シャルルは間違わない。シャルル・ドゥ・アルディは後悔しない。失敗しない。やり直しをするくらいなら、過去を変えるのではなく、違う未来を創り出すはず」
ヒカルは小さく呟いた。
弱々しい反論だった。

じゃあ、あれは何？
ルイは笑った。

「夏になると調達されたマリナを受け入れて･･･彼は毎年「夏のマリナ」を愛でる。しかも、彼はわかっている。彼女らが、マリナその人でないことを。だから彼は安心してマリナと呼ぶことが出来る。あの人が死んだとまだ認めていないから、器だけを愛でる。･･･いや、愛玩する。シャルルはそういう者しか愛せない、とオレは最初に言ったはずだよ、ヒカル。顔が同じでは駄目だ。良く似た背格好だけれどあの人でない人物をシャルルは愛でる。それが彼の贖罪だよ。そして････本当に彼女達をマリナと思った時、彼は本当に生きながら死ぬ時だ」
「ルイは････ルイはどうしてそんな状態で平気でいられるの？」
ヒカルはシャルルに非常に良く似た彼の息子を見つめた。
彼はちょっと首を傾げた。

「さあね」
そして譏笑した。

「シャルルに死ぬまで死にたいと味わわせたい。
だから、マリナそっくりの人物なんて万が一、存在しても彼には引き合わせ
ない。
一生、苦しめば良い。そして、オレに跪く日を待っている。
････もう、近い将来のことだけれどもね」
「････ルイ。あなたはどうしたいの」
その問いに彼は応えなかった。

辺りは暗くなり･･とても静かだった。
暗闇の中で、ヒカルとルイは対峙した。

「ヒカルはあの人を『マリナ』と言った」
彼は言った。

「オレが彼をシャルルと呼ぶように、おまえはあの人を『マリナ』と呼ぶ。母ではなく。
ひとりの女の名前を呼ぶ。ひとりの女として」

「ルイ。私の質問に答えて。・・・・シャルルはあのままでは壊れていく。
だから彼をこちらに呼び戻したい」
「それは加勢できない相談だな」
ルイは煙草の灰が落ちていく様を見つめながら言った。

「彼が正気を保つためにはあれは必要だから」
「それは違う」
ヒカルは強く否定した。
大きく頭を振った。

「ルイはどうしたいの。彼を救いたいから彼の望み通りにするの？
彼を堕としたいからあの惨状を毎年繰り返すことを黙って見ているの？」
「さぁ　どちらかな」
ルイははぐらかした。

「どちらにしても、シャルルの苦しみが長い方にオレは佑助しているだけ」
彼は酷薄そうな唇を歪めて笑った。
暗いのに、彼の表情がよくわかった。

———ヒカルは沈黙した。

「だからね、ヒカル」
彼は嬉しそうに言った。

「はやく、結婚しよう。いや、婚約でも良い。･･･そしてシャルルを助けやろう」
「････どういうこと」

ヒカルがルイの顔を見た。
彼はおかしそうに言った。
どうして気がつかないの、とヒカルをからかうように。

「･･･そうすれば、シャルルを救ってやれる。ヒカルがオレと結婚すれば」
「意味がわからないよ、ルイ」
ヒカルはそう言った。

しかしルイの言葉が出てくることが怖かった。

‥‥彼の瞳が、光っていた。

猛禽ようだ、と昔にそう思ったルイが居た。
「ああ、ヒカルは質問してばかりだ」
彼は仕方がないなと言った。
彼は足を組み直した。

人差し指と中指で煙草を挟み、親指でとんとんと、灰皿に灰を落とした。
細く長い指が優雅に動いて、暗闇の中には煙草の焔だけが灯っていた。

「‥‥ヒカル。アルディ家に入れば、おまえは卵子提供を義務づけられる。‥‥その卵子で、シャルルのマリナを産んでやれ。彼のためだけに」

「‥‥何を言っているの」
ヒカルはそれだけ言うのがやっとだった。

静かな暗闇の中で、彼の声が響き渡る。
彼女はアルディ家を訪れた時と同じくらい緊張していた。
突然何を言い出すのか、ルイの言っていることが受け入れられなかった。

「ヒカルじゃ駄目だ。
シャルルは救えない。
‥‥だからヒカルができることをやれ。
彼のマリナを創ってやれ。‥‥彼は一生、おまえに感謝して、狂ったまま生き続けることが出来る」

ああ、そうだ。
彼は付け加えた。

その様子は、彼の叔父にそっくりだった。

最初から考えていたことなのに、思いついたように彼は追補した。

煙草をゆっくり吸った。

そして自分の言葉に笑った。

「おまえが腹を痛めることはない。オレの子を、代理母に産ませれば良い。
なに、遺伝子操作して、マリナの特徴を色濃く持つ者を創れば良い。
———そしてそれをシャルルに差し出せ。畜生道に墜ちて、それでもなお、マリナを愛でずには居られない彼を見て、オレはその時、初めて･･･初めて心から笑うことが出来る」
ヒカルは呟いた。

「あなたは狂っている」

「素晴らしい賛辞の言葉だ。嬉しいよ、ヒカル」

ルイ・ドゥ・アルディはそう言って、煙草をまた深く吸った。
････部屋の中は、沈黙と、紫煙だけが立ち込めていた。

■83

「そんなことではシャルルは救えない」
「なぜ救わないといけない･･･オレは彼を救おうとは思っていないけれど」
ルイ・ドゥ・アルディはやれやれ、と呆れたように肩をすくめた。
暗闇の中でヒカルとルイは話を続けた。

これほどまでに会話が成立したことなんて一度もなかった。
ヒカルが居たアルディ家は真実ではなかったのか。

彼女は眉根を寄せた。
ため息も涙も出なかった。
深い絶望がヒカルを覆った。
肩にかけられた薄い毛布が鉛のように重く感じる。

冷たくて素っ気ないけれども、約束は違えないルイと、哀しそうに微笑むけれどいつもヒカルに優しく時には過保護なシャルルと･･･そしていつまでも永遠の晄と呼ばれたヒカルと、3 人で家族になろうと思っていた。

シャルルはちょっと困った顔をして、ルイとは、意思疎通を図ろうと努力する様を、ヒカルは微笑んで見守る未来を予想したことがあった。

成人した今は、ルイに本当に好きな人ができたら、その人を姉の様に慕わしげに思いながら、シャルルと一緒に祝福できるのだと夢想した。
時間稼ぎならそれで良いと思っていた。
でもそれらは全部、自分に都合の良い夢物語だということを思い知った。
自分が居た世界は、シャルルとルイの犠牲の上に成り立っているのだと初めて悟った。

「ルイ‥‥ルイが今まで、耐えてきたことを知らなかったことは、私が悪いと思う」
彼女はぽつりと言った。

「こんな年齢になるまで知らなかった。ちっとも知らなかった。
‥‥知らないことを理由にして罪を免れようとするなと言うルイとミシェルの言葉は受け止めようと思う」
ヒカルは言った。

「でも」
彼女は顔を上げた。
ルイを見つめる。

暗い、暗い瞳がそこにあった。

彼は幼少の頃から、あのシャルルを知っていた。
そんな時にヒカルがやって来た。

そしてシャルルの愛を一心に受けるヒカルを、ルイが何とも思わないわけがなかった。
シャルルは、父と呼ぶなとヒカルには言ったのに、ルイには父であることすら認めなかった。

望まれた子どもとそうでない子どもは、彼ら自身に咎はないのに。
彼がなぜヒカルに冷たく当たるのかわかった。

シャルルの狂気も哀しみも愛も忘れられないあの人への思慕もすべてルイは見てきた。
だから‥‥ルイも平常でいることを放擲した。
瘋癲でいないと・・・狂っていないと生きていけない。
それはシャルルもルイも同じだった。
「ヒカル。採取には、痛みも苦しみもない。だからその健康な卵母細胞をくれ」
ヒカルは言葉を発することが出来なかった。

ルイが‥‥長く一緒に時間を過ごした相手が、何を言っているのか、理解しようと努めたけれど、

できなかった。

「精神的な救いはシャルルを救えない。物理的に救ってやれ」
ルイはそう繰り返した。

しかしヒカルはウィと言えなかった。
狂い咲きのように花開く、新しい種となるべくして生まれたルイ・ドゥ・アルディの言葉を聞き入れることが出来なかった。

シャルルの狂気を目の当たりにして、ヒカルは自分の見てきた世界を根底から覆されてしまった。
ただただ、ぐらぐらと揺らぐ自分の価値観や意識というものを･･･つなぎ止めておくだけで精一杯だった。

「躰を休める」
寝る、とは言わなかった。

ルイ・ドゥ・アルディは立ち上がった。
「もう自分で躰を動かせるだろう」

彼がここまで連れてきて、彼女を座らせ、そして正気に戻るまで彼女の傍に居続けたことにヒカルは感謝の言葉を言おうとして、言えずに口を閉ざした。
彼には、会話をしようとしてできるだけ黙り込むことをやめるようにしようと誓ったばかりなのに、もう、その誓いは果たされなくなってしまった。
ヒカルもルイも睡眠不足のはずだった。
お互い暗闇でよく見えなかったが、相当疲れた顔をしていたはずだ。

ヒカルはそうね、と言った。
眠れそうになかったが、そう言うしかなかった。

「卵子提供はこの夏の滞在中に、指定の病院か研究所に行ってくれれば良いから」
ルイ・ドゥ・アルディは事務的に言った。
ヒカルは返事をしなかった。

「直接受精したいなら、いつでもどうぞ。排卵誘発剤を用意して待って居るよ。もしくは排卵日に来てくれ」

彼はそう言って彼女の前を通り過ぎて、マスタールームに入ってしまった。

程なくしてシャワーの水音が聞こえてきた。
彼はあの場面を見てなお、普通の生活を営むことが出来るのだろうか。

･･･ヒカルには出来なかった。

躰を動かすことさえ、酷く辛かった。

シャルル。

また、膝を抱えた。

そうしてもどうにもならないのに、彼女はひとり、膝を抱えて暗闇でじっと茶色の瞳を見開いたまま、下を向いて考えた。

ルイ・ドゥ・アルディも同じように考え事をしていた。
彼がその時に何を思って･･･何を感じて何を慟哭して何を恨んだのか････
今になってようやく思い知ることになった。

･･･今夜は眠れない。

シャルルが、あのシャルル・ドゥ・アルディが、マリナでない誰かを抱きしめて、あの人の名前を囁く様を想像するだけで、どうにもできないくらい苦しくなる。

････おかしくなりそうだ

でも、ここで狂ってはいけない。
ここで、墜ちてはいけない。

ヒカルは、シャルルやルイを見定めなければならない。
卵子を提供しろと言い出すルイに、別人をマリナと呼んでひと夏だけ狂うシャルル。

･･どちらも自らの責でそうなったわけではない。

ヒカルの大事な････大切な人々だ。

自分ができることはなんだろう。
どうしたら救えるのだろう。

自分が傷つけたことはわかっていた。
清すぎる水に生きていけない魚が居る。
何も知らないということが彼らを傷つけた。

どうあっても、シャルルはこちらに戻す。

ヒカルは唇を噛んだ。

そして重く感じる毛布の端をぎゅっと握った。

‥‥マリナ・イケダには連れて行かせない。

母なのに。

ヒカルはおかあさんと呼ばずに、マリナ・イケダと呼んだ。
シャルルの中で生き続ける、運命の人を、彼女は母と呼ぶことを捨てた。
彼の狂気を払拭するための方策を考えた。
ルイやミシェルには程及ばないけれども。
彼女は‥‥じっと茶色の瞳を瞬かせて‥‥今までになく考えに深く耽った。
遠くで、水音が聞こえた。

清すぎる水が苦しくて、叫びを上げた金色の成魚が跳ねる音がした。

■84

切ない夜を過ごすのは、これが最初ではなかった。

何度か‥‥シャルルと別れてからのしばらくの数日間、ヒカルは眠れない夜を過ごした。

それでも、これほど・・・寝ているのが苦しくて眠れないのではなく、もう、起きているのも寝ているのも、呼吸をしていることそのものも、どうにも苦しい夜を初めて過ごしていた。

奥の部屋では水音が消えて、やがて静かになった。

自分の呼吸音さえも･･･けたたましい騒音のように感じる。
五感が鋭敏になっているのだ、と思った。
神経が昂ぶるとこういうこともあるのだと身をもって知った。

ヒカルはやむなく、じっと座っていたソファから立ち上がり、ダイニングのワインセラーからワインを取り出した。
嗜み程度に口を付けている姿は見たことがあるが、彼が白ワインを好むことは知らなかった。
同じくらいの本数のロゼがあった。

彼の好みを全く知らなかった。

これも成人したからそう言えるのだろうか。
彼が車を運転することも、今回初めて知ったくらいだった。
ヒカルは勝手にごめんね、と独り呟いて、ワインの封を開けた。

ワインにはうるさいシャルルの言葉がいろいろと響いたが･･･
彼女はルイの揃えた数少ない食器の中から、日本人の名工が創ったという、刻印の入った淡い緑色のワイングラスを取り出した。

赤ワインでは色味が混ざってしまうが、白ワインだったので、液体を静かに注ぐと、そのグラスは中の白ワインの発光を受けて、真珠色の輝きを放った。

緑色はアルディ家の慶色だ。

････シャルルならどう評価するだろう

色味のついたグラスに注ぐなと、やんわり注意するだろうか。
アルディ家のグラスはみな無色透明だった。

―――彼の心根を表しているようだと思っていた。今までは。

ヒカルはそう思いながら、ワイングラスをじっと見つめた。
アルコールが気を紛らわしてくれるとは思わなかった。

何かが･･･今の彼女の乱れた気持ちを静めてくれるとは思えなかった。
そして、テーブルの上に残る、ルイの残したたくさんの煙草の吸い殻を見ると、煙草というもの

嫌なことを忘れさせてくれるとは思わなかった。

･･･それならこれほど大量に吸わないはずだった。

彼女は香りを楽しむことも、ティスティングもせず、その液体を一気に飲み干した。
彼女にとっては、それは液体でしかなかった。

喉元を通りすぎる熱い感触と、胃に液体が墜ちる灼熱の余滴を感じるだけだった。

乾燥した唇が湿されただけだ。
ただ、それだけでしかなかった。
シャルルもそうなのだろうか。

眠れない。
苦しい。

夏の日が辛い。
薔薇の香りが痛い。

ふとした拍子に思い出し始めると、その狂気を中断することが出来ない。
彼はそうやって、気が違うほどの苦しみを味わって、本当に惑乱してしまったのだろうか。

ヒカルはまた、片手で無造作にワインをグラスに注いだ。
そしてまた飲み干す。
また、注いだ。

血中アルコール濃度が上昇速度を上回るスピードで飲み続けた。
胃が液体で満たされて、これ以上の飲めないと訴えているのに、彼女は同じ動作を繰り返した。

シャルルのあの姿を見て、平静でいろと言う方が無理だった。
ヒカルは強打されたと同じくらいの衝撃を受けていた。

･･･彼は退行している････

それでも、シャルルの中の自我は、一緒に過ごす相手が本当のマリナ・イケダではないことをよく知り尽くしている。
そして背格好さえ似ていれば、人物を選ばない。

シャルルは。

誰も、本当は彼だけのファム・ファタルにならないことを知っている。
だから、夏が終わると帰ってくる。

こちら側に。

そして何事もなかったかのように、ヒカルを迎える。
優しく切なく哀しいくらい美しい微笑みで、マリナにもっとも良く似たヒカルを迎える。

･･･本当は、あれは･･･ヒカルを受け入れるための行為なのかもしれない。
ヒカルを愛してくれていると思っていた。でも違った。
彼女があまりにもあの人に似てくるから。
シャルルはそれに耐えられなかった。
ヒカルよりあの人が、まだ、シャルルの心に住んでいる。
それがどうにも辛かった。

シャルルの心の中のあの人は年を取らない。
最後に、シャルルの結婚式に参加する、と言った年齢で止まっている。
あの人はそのままそれ以上は、歳を取らない。永遠に。

だから。
耐えられない。
平静で居られない。

ヒカルはソファに座った。

座り込まないと、この臓腑の熱さを堪え切れそうになかった。

こんなに無茶な、とても謹厚とは言えない飲み方をするのは初めてだった。
彼女は少しだけむせた。

涙がにじむ。

････シャルルを取り戻す。

何があっても、彼はあのままではいつか･･･死ぬ。

崩壊するのではない。
彼は自ら死ねない。
生きる事は素晴らしいとあの人に教えてもらっているから。

自ら命を絶てない。
ヒカルが居るから。
ヒカルがまだ学生で、彼の後ろ盾を必要としているから。
彼は心残りがありすぎて、死ねない。

･･･シャルル、死んでは駄目だ。

ヒカルはむせかえりながら、目尻に涙を浮かべて思った。
静かな暗いリビングで、ワインを次から次へ飲み干す彼女の白い喉だけが、動いた。

自分が彼を救うことが出来るとは思えなかった。
でも、帰ってきたことを知らせれば、彼はこちらに帰ってくるかもしれない。

あの夏のように。

あのときは、彼がそういう状態であったことを知らなかった。
でも今は違う。
ヒカルは、シャルルの焦がれているあの人の年齢を超えた。
もう、似ているけれど、とても良く似ているけれど、ヒカルはあの人そのものではない。
そのヒカルが呼びかけたら、戻って来てくれるだろうか。
彼女は･･勝算のない賭けをしてみようと思った。
根拠のない勝負事はしてはいけないと教えられたのに。

シャルルのためなら、根拠のない不確実なことも、手を伸ばしてみようと思えた。

･･･シャルル。
ヒカルは呟いた。

私は取り戻す。
シャルルをこちらに呼び戻す。

私の天使。

私の‥‥私の‥‥

ヒカルはそこで声にならない言葉を呟いた。

そう、私は‥‥シャルルを失いたくないと思っている。

■85

一度だけ。

ゆっくり、瞬きをしたつもりだった。
もう一度、瞼を開いたときには、彼女は見知らぬベッドルームに寝ていた。

―――自分で足を運んだらしい。
ルームシューズが床に散らばっていた。
ルイの用意したゲストルームだった。

扉が半分開いていた。

自分が倒れ込むように、この部屋にたどり着いて、ベッドに墜ちたことを思い出した。

うろ覚えだけれども。
ひどく躰が重かった。
初めて味わう宿酔に眩暈がした。
まだ天井が回っているが、ブラインドを下ろすことを忘れた窓の外はすでに白く光っていた。
もう、朝だった。

彼女が覚えているのは、空が白み始めている頃のリビングから眺めた空の白さだったので、最後に記憶の残っている時間から、それほど時間が経過しているとは思えなかった。

‥‥具合が悪くなったときには、いつも医師であるシャルルがヒカルの傍に居た。
こうして普通でない状態の時には、彼が心配そうにいつも顔をのぞき込んで「大丈夫か」と過保護だとヒカルが言ってしまうくらい、あれこれ気を遣っていた。

どんなときも、いつでも、シャルルが一緒に居た。
ヒカルはそれが当たり前だと思っていた。
彼は彼女を甘やかした。

そして彼女は愛されることに‥‥シャルルという希有な人に愛されることに慣れてしまっていた。

だから、彼の悩乱の果てを知らないで育ってしまった。
彼は完璧だ。
完璧故に、完全に狂気を抑圧することを覚えた。
ある一定の時期を除いて。
シャルル。シャルル・ドゥ・アルディ。
ヒカルは呟いた。
そして、独りで居るという安心感からか、涙がこぼれ落ちた。
天井を向いて、ぐるぐる旋回する景色を眺めながら、涙を流した。
後から後から湧きあがるこの涙を抑えることは到底出来そうにもなかった。

美しく、儚い、薔薇の花のような人。

アルディ家の者は、土に還らず薔薇に還ると言う。
彼は薔薇の精霊そのものだった。
ヒカルは涙を掌で拭った。
彼女の涙を拭ってくれる人は今は居ない。

日本にいる間は自分で涙を拭った。
人前では泣かなかった。
それは日本でもパリでも変わらなかった。
パリにいた時は、シャルルが彼女の泣きそうな顔を撫でてくれた。
涙を見せることだけが泣くことではない、と彼は言った。
ヒカルが昔言った言葉だよ、と彼は言った。覚えがなかった。
でも彼は嬉しそうに哀しそうに言った。

「それが記憶と言うものだ」
そう言った。

‥‥ヒカルが最後の別れの日に思い出した、彼と最初にアルディ家の門前で話した言葉を。

彼女は記憶していた。
その時は、わからなかったけれど。
銘記した。

心に刻みつけて長く記憶していた。
ヒカルは上を向いたまま泣いた。
シャルルを想って泣いた。

彼の狂気を受け止めるためにルイが何を犠牲にしてきたのかを想像して泣いた。

知らなかった。
倖せなままだった。

だから、あの夏の日以降、なぜ、彼らが自分に冷たくするのか、何を言っているのか理解できなかった。

何も認めなかったから。
彼女は居心地の良い、薔薇の温室に生きていた。
そのためにボイラーの調節をし、水やりをする人々がいることに気がつかない薔薇だった。
自分の心地好い倖せが、誰かの苦悶の上に成立しているなんて、考えたことがなかった。

シャルルがなぜ、ルイを愛せないのか。
心を痛めていた。でも愛せないのではない。

愛さないことにしたのだ。

彼は、唯一の対象しか愛せない。
愛は増えるものであり、違う種類の愛もあり、そして複数人に愛を感じるという愛を知らない。
知っていてもそういう愛し方をすることができない。
唯一人、マリナ・イケダだけを愛し続けているから。

私は･･･罪の娘だ。
贖罪の娘だ。

シャルルもルイもミシェルも苦しめている。

誰も自分の生まれてきたことを喜ばない庭で･･･自分はのうのうと生きてきた。
当たり前のように愛を受けていた。
それを自覚しろ、と言う人の声を無視した。
私の存在そのものが･･･贖罪なのだ。罪なのだ。誰かを苦しめるだけだ。
そう、思った。

彼女は涙を流した。
誰かのために涙を流した。
自分のためではない。

今も。

アルディ家の庭で、あの人に注ぐべきであった、ありったけの愛をあの人でない誰かに注ぎ続けることで、かろうじて自分を保つシャルルを想って泣いた。

■86

「あなたはいつも突然だね」
ミシェル・ドゥ･アルディはそう言って微笑んだ。

あの人もいつも風のようだったよ、とミシェルは言った。

ヒカルが彼女の母の話をして、少しだけ不機嫌そうに眉をひそめるとますます楽しそうに笑った。

きっと、ミシェルがシャルルの片割れだと知らなければ、フランスの華が、パリのカフェで、年の離れた若い娘とランデブーを愉しんでいると思われていたことだろう。

ヒカルが二人だけになることを警戒して、人混みの中での会合を設定したことを、ミシェルは酷く面白がっていた。

久しぶりに会うミシェル・ドゥ･アルディは、やはりシャルルに似ていた。
相変わらず若々しい。

そして薄い瞳を強い陽射しから護るためにサングラスをかけていた。
ゆっくりとそれをはずし、ヒカルの茶色の瞳を見つめた。

その仕草があまりにも閑雅であったので、ヒカルはじっとその動作を凝視した。
優雅に悠然と足を組んで、細く長いしなやかな指を互い違いに絡み合わせた様は、絵画のようだった。
髪型が違わなければ、遠目で見れば彼をシャルルと呼ぶ者は少なくないはずだ。

ミシェル・ドゥ･アルディは煙草に火をつけた。
サングラスに彼の灯した焔が映る。

オープンカフェにヒカルはミシェル・ドゥ･アルディを呼び出した。
段取りは簡単だった。
ルイの家から電話をかければ、すぐに取り次いでもらえた。
そしてミシェルからの迎えの車に乗り込んだ。
どこに連れて行かれようとも、彼女は彼に話をするまで、屈しないつもりだった。

かつて･･･彼に首を絞められて、生きながら死ねと囁かれたことは忘れていない。

アルディ家のセキュリティレベルはまだ解除されなかった。

一度入邸した者はこの期間、再度入ることはできないと、退邸の時に説明された。
唯一、シャルルの実弟のミシェル・ドゥ･アルディを除いては。
もう、誰もあの場所に入ることが出来なくなってしまった。

実子のルイ・ドゥ・アルディでさえ、名乗ってもその酷似する顔を見せても、入り込むことが出来ない空間だった。
綿密に、詳細なマニュアルが当主であるシャルルによって組まれており、ルイの発言よりシャルルの命令の方が優先されることが例証されてしまっていた。

「久しぶりに会うのだから、こんな人混みではなく、もっと静かな場所を選ぶことも出来たのに」
ミシェル・ドゥ･アルディはくすくす笑いながら言った。
ヒカルは用意した言葉を言った。
「たまには趣向を変えようと思いまして」

そう、とミシェルは笑った。
それでも、昔と同じだった。

瞳は笑っていなかった。

青灰色の瞳は、見慣れた色だった。
シャルルの色。
ルイの眸。
ミシェルの冷たい湖畔のような、痛々しい瞳。

彼らの瞳を見ると、何もかも、昔の･･･パリを離れる前の日々を思い出す。
自分が今、大人になったことを忘れるくらい、年齢を感じさせないミシェル・ドゥ･アルディの様子にただただ感嘆するばかりだった。

「ミシェル。・・・・　私はシャルルに会いたい」
ヒカルは単刀直入に切り出した。
「良いね。その話し方はアルディ家の者を彷彿とさせるよ。簡潔で素晴らしいね」
彼は微笑んだ。

煙草を吸ったばかりなのに、彼はそれを目の前の灰皿に押しつけて消した。

「私には時間がない」
「時間がない・・・？･･･若いあなたに言われる言葉だとは思っていなかったよ」
現在、通信業界と薬事事業で君臨する帝王は笑った。
「私は夏が終われば帰る。日本に帰る。だから、あなたたちの邪魔はしない。･･･その前にシャルルに会いたい」
彼女は辛抱強く繰り返した。
彼らは、繰り返すことを厭うのに、相手にくり返し確認する。
「･･･シャルルに会っても良いけれど、あなたは、彼に会ったのに、まだそう言うの？」
「会ったから言うのよ」
ヒカルは言った。

ルイが留守をしている間を狙ってミシェルに接触を図った。
このことがルイに知れれば、彼は彼女を外出禁止にするだろう。
今でもようやく･･･ミシェルの口添えがあって、あの建物を出ることが出来たくらいだ。
彼が何処にいるのかわからなかった。
ヒカルは頭痛のする躰で、ミシェルに連絡をした。
ベッドルームから出てくると、ルイはすでに居なかった。
どこかに出かけているようだった。
でもどこに言ってしまったのかはわからなかった。

「干渉するな」とルイが言ったのを思い出した。
彼は行く先も告げず、朝早く出発した。
朝の弱い彼はきっと･･･一睡もしなかったのだろう。

これで充分な睡眠を摂取しなくなって何日、彼は保っているのだろうか。

･･･こんな生活を何年も送っているとしたら、ルイもやがて失調する。
ヒカルは憂えた。
どうして彼らは、自分の躰を顧みないのだろうか。
「それなら、なおさら･･･あなたはルイと結婚する意志を固めたのかな」
ミシェルは面白そうに言った。
「オレの処に学びに来る約束は、まだ有効だよ」
ヒカルはその言葉を無視した。
夏の暑い陽射しなのに、彼の眼差しが、あまりにも冷たくて、ヒカルはぶるっと身震いした。

「ミシェル。私はシャルルに会いたい。今すぐに」
「さて。････どうしようかな」
彼は薄く笑った。

煙草を持った指が、落ちる灰を気にせずにゆらゆらと揺れた。
ヒカルはその仕草をじっと見つめた。
酒も煙草も彼らを癒していないことはわかっていた。
酒はヒカルを癒さなかった。
ただ、虚しさだけを助長した。
それはミシェルもルイも同じはずだった。
彼らが煙草を吸ったとしても、それは何かを癒す行為ではなかった。

■87

「良いだろう」
ミシェルはあっさりと承諾した。
考える時間というのは彼には存在しない。
そんな瞬時の判断だった。

そして胸ポケットから、薄い携帯電話を取り出すと、ダイヤルした。
彼もシャルルと同じように、すべて電話番号が記憶しているらしかった。

―――口早に指示を出していた。

アルディ家のセキュリティゲートを開き、ヒカル・クロスを入邸させるように、という指示の電話だった。

毎日1度だけ入邸できるチップを用意するように、と彼は指示していた。

そしてミシェルはあの館の主でないのに、彼はごく当たり前のように指示をした。
その話の途中で、ヒカルにそうと気付かせるように。
優雅な青灰色の瞳を流して寄越した。
ヒカルはミシェルの反応をじっと見つめていた。

「なに？あなたも･･・ようやく人を疑うことを覚えたの？」
ミシェルは涼しい顔で、そう言った。

ぬるくならないうちにどうぞ、と彼は新たに運ばれた目の前のティーをヒカルに勧めた。

しかし彼自身はそのカップに口をつけなかった。
青灰色の目を細めた。
その仕草は、ルイにも良く似ていたが、ヒカルにはシャルルの眼差しを思い出させるための演技にしか思えなかった。
ミシェルは、年齢を感じさせない。

いつまでも美しい。
それは独身であるから故なのか、彼が、未来というものに対してまったく思い入れがない日々を送っているからなのか･･･
パリを去り、日本で過ごしたヒカルには到底理解できなさそうな何かがあった。
彼にも彼なりの理由がある。

ルイに感じた感情を抱いたが、それよりもまずはシャルルのことを憂えた。

早く彼に会わなくてはいけない。
ヒカルはそう念じた。

「会った結果、あなたはそうやってシャルルの居るアルディ邸に日参したいというのだろう？」
「回数の問題ではない。私は彼に･･･彼に会いに行く。
　会話ができなくても良い。
　だけれど、私がパリにやって来たのは、意味があることと思いたい」
「意味のあること・・ね」
ミシェルは薄く笑った。

天使のような、美しい微笑みだった。
周囲の誰もが彼に視線を注いだ。
でも、ヒカルは唯一、彼から眼を反らした。

吸い込まれそうな瞳も美麗な顔立ちも･･･ヒカルの知っている、シャルルと良く似ていたけれど、シャルル・ドゥ・アルディではない、作り物めいたミシェルの微笑みが苦しかった。
彼は望んでシャルルの模倣をしている。
そう思えて仕方がなかった。

ミシェル。
あなたはどうしてそうやって自分を偽るの。

でもそれを言えば、誇り高いミシェルを深く傷つける事になる。
傷つける・・・と言うより、相手の望んでない深みに踏み込むことは、ヒカルには到底出来なかった。
それがたとえ、彼女を深く貶めたミシェルであったとしても。

「ヒカルは自分自身に意味があると思っているんだね」
「あなたの言っていることがわからない、ミシェル」
こんな凡庸な感性を愛でるシャルルの嗜好を調べてみたいよ、とミシェルは微笑みながら辛辣な言葉を吐いた。

「あなたは･･･あの人が、ルイに対してした仕打ちを繰り返すのだね」
「どういうこと」
ヒカルは眉を上げた。

ミシェルは忘れたの？と言った。
彼の穏やかな口調に騙されてはいけない。
彼の言葉はいつも、ヒカルの心臓を止めてしまうくらいの威力のある蝕む言葉を発していた。
ミシェルは優雅に口角を挙げた。
何もかもが、彼の想定内の範囲だった。

ヒカルの質問も。
ティーの温度の下がり具合も。
彼は細く長い指を絡めて、引き締まったミシェル自身の腹の上で組み直した。
「ヒカルではシャルルを救えないよ」
彼は単刀直入に言った。
「彼が心を許せる相手は、唯一･･･マリナ・イケダだけだ。
　マリナ・クロスでもない。ヒカルでもない。
　････彼がファム・ファタルと定めた女性だけ。

‥‥それでも、ヒカルは彼を救えると思い上がるというのであれば、徹底的に否定されるのも。楽しい話だね」
彼はシャルルと同じ顔で、残酷な予言をした。

予言ではなかった。
断言だった。

■88

夏なのに。

ミシェルはとても冷涼な表情をしていた。

彼からは季節感を感じない。
彼は四季に生きていない。

誰もシャルルを救えない、と言ったミシェエルは青灰色の瞳をヒカルに向けて微笑んだ。

「ヒカル。…･眼を反らすな」

誰もいない空間だったのなら、ミシェルはかつてしたように、彼女の小さな顎を掴んで、彼の視線を否応なしに注ぎ込んだことだろう。

久々の対顔なのに、ヒカルはもうちょっと感慨深くなっても良いのではないの？
ミシェル・ドゥ･アルディは譏笑した。

彼と最後に別れた時のことを思い出すと、ヒカルは今でも喉が痛んで呼吸が苦しくなる。
誰かを恐ろしいと思ったのは、あれが初めてだった。

「近いうちにまた会うことになる。ヒカルから会いに来ることになる」
焦らないよ、と彼は笑った。

そしてオレの予言はあたっているだろう、と面白そうに冗談めかして言った。
「焦るのはルイ・ドゥ・アルディだけだよ」
彼はそう言って躰を起こした。

そしてその時。

ヒカルの白い指に、そっと…自分の細くしなやかな指先を乗せた。
一瞬ことだった。
ヒカルが思いもかけないミシェルの動作に、躰を硬直させて、手を引こうした。
「ミシェル…！」
彼はぐっと彼女の手の甲を握った。
「…･学べと言われているだろう、ヒカル」
彼は妖しく笑った。

ミシェルはヒカルに顔を近づけた。
青灰色の瞳が近づいた。
彼女は息を詰めて彼の反らすことの出来ない瞳を見つめる。
よく通るバリトンが彼女の目の前の美しい唇から発せられた。
ミシェルは瞬きもせず、食い入るようにヒカルの茶色の瞳をのぞき込んだ。
彼の薄い色の双眸に、ヒカルが戸惑った緊張した顔で映っていた。
一瞬…彼は狂気を表に出して彼女をのぞき込んだ。
あのときの恐怖が蘇る。
だが、目を瞑ることも許されない。

「オレを退屈させないでくれ。…･暇つぶしをしながら、一体、何年待ったと思う？」
そこまで言うと、ぱっと大きな手のひらを離した。
握られたヒカルの手の平の血流が止まり、白くなっていた。

彼を見上げる。

今の自分は、不安そうな顔をしているに違いない。
いつものとおり、ミシェルは薄く笑っているだけだった。
あでやかな、フランスの華と同じ貌の男は、ヒカルに余裕の笑みを浮かべて、先に失礼するよ、と穏やかに言った。

ヒカルは彼の真意がわからずに、ただ、広く鍛え上げられた背中を見つめるだけだった。
彼は一度も振り返らなかった。そして悠然と待たせてあった車に乗り込んだ。
彼女はテーブルの上で、手がつけることなく熱を失っていくティーの水面を眺めていた。

自分の瞳と同じように…茶色に揺れ動く液体を眺めながら、ヒカルはミシェルの言ったひとつひとつの言葉を反芻した。

彼は……嘘は言わない。

嘘を導くことはあっても、彼自身は偽りや空想は言わない。
辛辣でわからない表現をするが、彼が言っていることには意味がある。

でも、これでアルディ邸に入れる。
ルイの同伴なしに許可された。
ヒカルもゆっくり立ち上がる。
今日は眩暈がしそうなほど、暑かった。
遠い彼女の生国の夏もこんな陽射しだ。

これほど暑いのに、ミシェルと話をしていたときには、まったく暑さを感じなかった。
ヒカルはサングラスをかけた。
茶色の色素の薄い瞳にはサングラスがないと、痛めてしまう。

———行く先は決まっていた。

たとえ、自分が救えないとしても。
シャルルをこちらに戻さねばならない。
誰かに救ってもらうのでは、彼は救われない。

彼の狂気を目の当たりにして、ヒカルは彼に会わずには居られなかった。
自分が見ていなかった彼の世界を見てしまった。

もう、知らないふりはできない。
そう思った。
彼女はさしむけてもらった車に、立ち寄り先で降ろしてもらえるかどうか尋ねた。

行き先はどこか、と聞かれて迷わず「16 区のアルディ邸に」と言った。

■89

酷く静かではあるけれど、緊張し張り詰めた空気が薔薇の館を覆っている。
車で入る場所さえ違う。
ヒカルは完全に部外者だった。

数年前まではここの住人であったのに、それは免除用件にならなかった。
同じ手順を踏んで入邸の許可を待つ。

ミシェルが手配したはずなのに、彼女はかなり待たされた。
彼であってもこれほどの手続きを必要とする許可しか出せないのか…
それとも、彼はわざとヒカルを待たせるように伝えてあったのかはわからなかった。

……控え室で待たされていた。

だいぶ長い時間が経過したがヒカルはじっと待った。

そこで、あまり足を運ぶことの無かった来客棟の応接室を見廻してみることにしていくつかのことに気がついた。

当主の好んだ薔薇の花がない。

薔薇でなくても、季節折々の花がいつも生けられており、それは別邸だろうが本邸だろうが慣習として浸透していたはずだった。
殺風景な、花の色のないアルディ邸は非常に寒々しかった。
これはこの時期だけに限ったことではないようだった。

彼はいつの間にか…また、薔薇の改良をやめてしまったのだろうか。
長い時間をかけて、ヒカルと築きあった優しい習わしを彼は忘れてしまったのだろうか。

もうしそうであるなら、大変に胸が痛む。

ここはヒカルの知っているアルディ家ではない。
そして知らない場所で暮らしているシャルルに会って、どうするんだろうと自問自答した。
ルイが見せた狂気の庭の出来事は、シャルルにとってはこの上ない楽園の夢なのだ。

こちらが彼の本当なのだったら、ヒカルと暮らした静かな日々こそが彼の偽りの世界なのだと思い知ることになった時。
ヒカルはそのことを事実として受け止めることが出来るのだろうかと思った。
シャルルやルイやミシェルは知っていることを、ヒカルは知らない。
シャルルのあの人に対する愛の深さをヒカルは知らない。

でも唯一知っていることがある。

それは自分を慈しんでくれたシャルルは決して偽りの気持ちではないこと。
独りよがりかも知れないが、彼女は確かにシャルルに愛されていた。

ルイはそれを愛玩だと呼んだ。
ミシェルはそれを贖罪だと告げた。
その言葉は間違っていないと思う。

でも、それだけではない何かが間違いなく、ヒカルと彼の間にあった。
少なくともヒカルには。
あの美しい日々が今のヒカル・クロスの礎になっている。
扉が開いて、入邸を許可する旨を告げられた。

ID チップを渡されて、剥がさないように、と同じ説明をマニュアル通りに受けた。
これから毎日この手続きを経なくてはならない。
それがいつまで続くのかはわからない。
でも、彼女はそれでも彼に会いに行く。

ヒカルは手荷物を置いていくように指示されて、そのまま躰一つで応接室の扉を出た。
狂った薔薇の庭にもう一度足を踏み入れるために。
狂い咲きの花が多いな…
別れの直前に彼が言った言葉を思い起こした。
シャルルそのものが狂って咲く花だったというメッセージを、ヒカルは聞き逃してしまったことを酷く後悔していた。

シャルル。
私は眼を反らさない。
ミシェルに言われたからではない。

私は私自身の意志で、あなたを見定める。

あなたの状態を見極める。
あなたの心を知る。

それがどんなに辛くて哀しくて暗い路であっても、必ず呼び戻す。

ヒカルは心の中で呟いた。

■90

だいぶ待たされてしまったので、同じ時間に来訪することになった
彼は規則正しく日々を過ごしているらしい。
そして彼女を監視するスタッフには質問をしてはいけないと、きつく言われていたので、彼がいつからいつまでああいう状態なのか、終わりを知ることは出来なかった。

……夢であって欲しいと願ったのに、やはり彼はそこに居た。

今日は薔薇園を歩いていた。静かに、この夏のマリナを伴って。
マリナは眠そうに大きな欠伸をしていた。
そして同じ習慣を繰り返すシャルルには微笑むのに、辺りの景色を見ることはしていなかった。
シャルルと眺める景色がどれほど素晴らしいのか、気がついていないらしい。
シャルル・ドゥ・アルディも類を見ない傑物であるが、彼の育てた薔薇が咲き誇る苑や、年中咲き誇る数々の花々を眺めて、彼と意見を交わす歓びは、あの夏のマリナには必要とされていないのだろうか。
ヒカルは届かないとわかっていても、躰を緊迫させて彼らのそんな様子をじっと見つめていた。
見つめるだけしかできなかった。

こうして彼らに悟られないように、ヒカルは遠くからシャルルの様子を眺めることしかできない。

ヒカルの母も…

ルイをこうして眺めていたのだろうか。
彼女は何を思って、最後の作品を仕上げたのだろうか。
眼を反らしてはいけない

ミシェルは言った。

つい先ほど、シャルルそっくりの男性はヒカルに言った。
言われて初めて気がつく自分の愚痴無知について思い知った。
そしてそんな深く省察するヒカルを、ミシェルは面白そうに嘲った。
私には私の成すべき事がある。
ヒカルは彼らを見つめながら…そう、思った。
シャルルは相変わらず少年のような微笑みを繰り返していた。
風に吹かれて、強い陽光に青灰色の瞳を細める。
繋がれた手はマリナから離そうとしなかった。
マリナは麦わら帽子の下から微笑んでいた。

これが彼の望んだ安らぎなのだろうか。
こんなに…こんなに深く狂乱の演出をしなければならないほど、運命の人の不在を受け入れられないのだろうか。

ここに、ヒカルが居るのに。
彼はわかっていて、深く沈み込み、自ら浮かんでくることを放棄している。
シャルルの若い頃にはこんなにたくさんの薔薇はなかった。
彼は最高の薔薇を習慣はその時にはなかった。
それなのに彼は青春の輝きの頃の表情で、マリナに微笑みかけている。
それだけのささやかな…ささやかな願望を叶えるだけなのに。
ヒカルを母の名で呼べばいいのに。
彼は決してそうしなかった。
似てきたと呟くことはあっても、一度も名前を違えたことはなかった。
その代わり、何度となく心の中で呼んだ「マリナ」という愛しい人の名前を言の葉として唇に乗せるためだけに。
彼はああして夏の間だけ狂うのだと思った。
狂ってなんか居ない。
シャルル・ドゥ・アルディは狂わない。
彼の深く沈んだ鬱然たる哀しみを彼はひとりで抱えることが出来ないくらい、あの人を愛しているだけ。
ヒカルは彼らのそぞろ歩く様子を見ながら、強くそう思った。

……決心がついた。

彼の狂気が癒される頃まで、毎日ここに通おうと思った。
たとえルイに軟禁されることになっても、ミシェルに頭を垂れて懇願することになろうとも。
彼女ができることは限られている。

でも…
… もう一つだけ、シャルルのためにできることがあった。
決して身軽な服装ではなかった。
彼女は意を決して……行動に出た。
付き添いのスタッフがあっと小さく声を上げたときには、もう、ヒカル・クロスはID チップシールをもぎ剥がして、躰を傾斜させていた。
脇をすり抜けて、シャルルにめがけて走った。
背中までの髪が流される。

どんどん…どんどんシャルルが近くなってきた。

待ちなさい、という背後の声が遠のくに連れて、シャルルの姿が大きくなっていく。

脚には自信があった。

それに、ここのスタッフは優秀だけれども、非常事態や想定外の事柄には弱いはずだった。そんな事態になったことがないから。

彼の残しているマニュアルには「接近可能な距離から許可範囲を超えて急接した場合」のマニュアルはないはずだ。

彼は誰にも逢わないから。
彼の白金の髪も、整った高い鼻梁を持つ彫りの深い顔立ちも、変わらない。

「————シャルル！」
ヒカルは走った。

腿を大きくあげて、前傾姿勢をとる。

後ろと側面から、待機していたスタッフが無線で連絡を取り合っている。
身を伏せていた屈強な体躯のSP が、杜の陰から出てきた。
もたもたしていれば、確実に‥彼らに捉えられてしまう。
息をするのを忘れて、彼女は全身を大きく動かした。

こんなに走ったのは…ルイを追いかけてエレベーターに滑り込むために裸足で走ったとき以来かもしれない。
シャルルは名前を呼ばれて、顔を上げた。
これほど近くに来なくても遠くから察知できるような見通しの良い場所だったのに。
シャルルはマリナだけを見つめていたから、誰かが自分めがけ
て突進してくるようだと気がついたときには、もうヒカルは

シャルルの躰めがけて飛び込んでいた。

「————！」
シャルル！

渾身の力を込めてシャルル・ドゥ・アルディの腰めがけて…彼女は体当たりをした。
勢いがついて脚を止めることが出来なかった。
彼がきっと受け止めると思ったから。

そしてそのまま…二人は強い芳香を放つ苑の芝生に倒れ込んだ。
夏のマリナが悲鳴をあげた。

……シャルルは彼女の躰をうけとめたまま、そのまま背中を丸くしたものの、強い衝撃を伴って地面に倒れた。

無防備な姿勢で倒れ込んだので、背中を酷く強く打ち付けてしまったようだ。
ヒカルはその上に覆い被さる格好で、彼の上に落ちた。
彼女も受け身の姿勢をとっていなかったので、シャルルの上に全体重をかけてのしかかった状態になる。

止めていた息をそこでようやく吸い込んだ。
全身からどっと汗が噴き出してくる。

……連日の寝不足のうえに躰を急激に動かしたので、軽く眩暈がした。

「シャルル…‥」

何人かが彼女とシャルルに駈け寄ってくる足音がした。
ヒカルは……彼の上に乗ったまま身を起こした。
夏の太陽の陽射しを受けて…赤にも金にも見える豊かな癖の強い髪が光った。

「シャルル…‥‥戻って来て。こちらに来て。あなたを失いたくない。だから来て！」
ヒカルは一気に叫んだ。

夏の薔薇園で……ヒカルは叫んだ。シャルルに届くように、懸命に訴えた。

……そう、私は失いたくないのだ。彼を。

その時にようやく気がついた。

シャルルに会いたかったら、彼の戻ってくる日を待てば良かった。
ルイはそうしろと言って、近づくことを赦されない、彼の惨状を見せた。

それなのに、彼の姿を見たら。
体が引き寄せられた。
その先のことなんて考えられなくなっていた。
彼に向かって走っていけ、と何かが囁いた。
囁きを聞き終わる前に、駆け出した。

兄でもない。
父でもない。
家族にもなれない。

最大の理解者であり、ともに哀しみを分かち合う、最高の友。

今まで用いた、どんな言葉でも表すことが出来ない。

……彼女が初めて使う言葉だった。

どうして気がつかなかったのだろう。
本当はわかっていたのに、どうして気がつかないふりをしていたのだろう。
シャルルに…シャルルに運命の人がいるように。

私にも、いたんだ。

……運命の人が。

■91

「退屈しないね･･・さすがのオレも、驚いたという言葉を何年かぶりに使うことになるよ」
ミシェル・ドゥ･アルディはそう言って、彼女に微笑んだ。

先ほど会ったばかりのミシェルにもう一度会うことになるとは思わなかった。
ヒカルは擦り傷に手当を受けて、じっと黙ったままだった。

「あなたももう成年なのだから…ルイを困らせないでくれよ」
彼はそう言って微笑んだ。

突進してきたヒカルを受け止めて、シャルルは意識を失った。

激しく躰を強打したことも理由だったが、この夏の期間は最悪のコンディションだったらしい。
食事も摂取しないし、睡眠もあまり取らない。
少年の頃に退行している、とルイは言っていたが、煙草を乱喫するし、眠れないからと言って大量の睡眠薬を摂取する。

……若い頃はそれでも良かった。

しかしそれを一年のうちのほんのひとときであっても繰り返せば、間違いなく躰を蝕まれる。
夏の時期を迎えないシャルルは、オフを取らないし、マリナを愛でるという奇行以外は、通年、精力的に活動していた。

でも、彼の体力は限界に来ていた。

脳を酷使するから、人よりたくさんの睡眠を欲するのに、彼はあえてそれをやめてしまっていた。

「ああ、それにしても」
困ったな、とミシェルは言った。
まったく困っている風ではなかった。

「ヒカルが日本を離れて以来のことだよ。シャルルのオフ期間が、予定を繰り上げて終了するのは」
その言葉から、彼のために用意されたマリナが、すでにこの館から強制的に引き払わされてしまったことを知った。
「契約だからね」
彼は薄く微笑んだ。

違約金は払ったし、当面国外で口外しないことを契約内容に盛り込んだ上で悠々自適な生活を送る約束をしているから、と彼は言った。

「だが、ああいった職業の者は、人恋しくなってすぐに戻ってくるけれどもね」
ミシェルは唇を歪めた。
そんなことは言ってはいけない、相手を貶めてはいけない、とヒカルは言ったが、ミシェルはその言葉は無視して聞き流してしまった。

———今になって、すり切れた傷が痛んでくる。
肘も膝も何もかもに彼女は擦り傷を創っていた。

幼い時依頼だった。
そんなときには、シャルルがいつも手当をしてくれた。

「痛み止めは用意しておいたから、必要だったら飲め」
ミシェルが見透かしたように言った。

…彼はヒカルのことをよく観察していた。

そういえば成長痛に悩まされていたときにも、彼は同じように声を掛けてきた。
「…ありがとう」
「礼なら別のもので払ってくれればいいよ」
ミシェルの言葉にヒカルは応えられずに無言でいた。

「ルイには随分返答するようになったというのに、あなたは自分のことになると…とたんに臆してしまうのだね」

他人が関わることには剛胆で、自分のことには臆病なのはあなたの母上そっくりだよ、とミシェルは言った。

「ミシェルは…母を知っているのね」
「知らなかったらこういう表現はしないだろうね」
つまらなさそうな返事が戻って来た。
ヒカルは目の前の、白金の髪を持った、シャルルそのものと言えるようなミシェルを見上げた。
医務室での会話には相応しくなかった。
彼女は骨折などの重篤な状態でないことを確認されたあと、ミシェルの問診を最後に受けていた。
彼は医師登録をしているのに、まったくそれらしくない。

「私はそんなに…母に似ている？」
ヒカルがぽつりと言った。
「同じ遺伝子だと思うくらいには」
「と、いうことは、シャルルは私をマリナ・イケダだと間違えたりすることはない？」
「ヒカルがそうあって欲しいのであれば、シャルルはそうするだろうね」
あっさりとミシェルは肯定した。

「……あのマリナは私と似てなかった」
「あなたは、何を聞いたら安心するのかな」

軽蔑したように、ミシェルはそう言って脚を組み直した。

簡易的な椅子に座ってなお、彼の風格はアルディ家の頂点近くに居る者のそれだった。
例え影のような存在であったとしても。

「マリナと似ている者をシャルルが選んだら満足？
それとも逆かな？
だったら、シャルルはマリナ・イケダだけを愛し続ければ、あなたは満たされる？
…残酷だな」

ヒカルは黙った。

ミシェルの言っていることが何となくではあるが理解できた。
自分の傲慢さを、ミシェルに吐露してしまった。

「相手が死んだ者を愛し続けていれば、それは素晴らしいことなの？安心する？シャルルはあ
あやって自我を保つことが出来ないほど崩壊したけれど、それは愛の究極の姿なのかな？」
ミシェルから「愛」という言葉が出るとは意外だった。
ヒカルは違う、とぽつりと言った。

「シャルルを救うのは自分自身よ。だから私は彼を救うことはできない」
「わかっているなら、やめておけ」
ミシェルは短くそう言い切った。

何をやめておけ、と言ったのかはわかっていた。

■92

話は中断された。
ルイが部屋に入ってきたからだ。
かちり、と音がしてノックもなくルイが医務室に入ってきた。

「遅いぞ、ルイ」

ミシェルがそう言ったが、ルイは顔をしかめて、不満を訴えた。

「ミシェル。警戒レベルを落としておけ。

…ここまで来るのに時間がかかりすぎる」
「ああ、忘れていたよ」

計算の上のことであったのに、ミシェルは肩をすくめて失念を詫びた。
その仕草が「想定内範囲だよ」と言っているようで、ヒカルは、いつもルイとミシェルはこのような会話をしているのかと驚いていた。

そういえば、ミシェルはルイやシャルルと一緒に居るところを滅多に人に見せなかった。
「じゃ、そろそろ行こうかな」

ミシェルは立ち上がると、ナイトの登場だしね、と面白そうに言って、ルイの脇をすり抜けた。

「ね、ヒカル」
ミシェルは振り返った。

シャルルと同じ貌のミシェルは、青灰色の瞳を彼女に向けた。
彼はヒカルの顔をじっと見ながら言った。

「シャルルにはもう逢えるよ。…大したケガもない」
外傷はね、とミシェルはまた補足した。

どういう言い方をすれば、彼女が自分の思惑通りに動くのか、よくわかっていると、と言いたげだった。
そして彼女の返事は待たずに医務室を後にしてしまった。

「…ミシェルとルイが一緒にいることころを、久しぶりに見た」
ヒカルは彼が出て行って、かなりの間を開けてからヒカルはそう言った。
ミシェルは立ち聞きするほど情報収集能力が劣っているとは思えなかったけれど、彼の持つ恐ろしいまでの冷気を伴う雰囲気が、彼女を酷く用心深くさせていた。

そしてミシェルとルイがあまり言葉を交わさないことに気がついた。

…彼らはいつもそうなのだろうか。

どちらかというと、ルイの方がミシェルと距離を置いているような気がした。
「何か声をかける必要があると言うのなら……ヒカルの迂闊さを責めるための言葉を用意しようか。オレとミシェルの仲をあれこれ言うよりも」

そこまで言うと、ルイはヒカルに向き直った。

「ミシェルの言葉を聞かずに、想定外のことをしでかした責任は重いぞ、ヒカル」
彼はそう言って、ヒカルの腕を掴んだ。

擦り傷の上から、強く握られたので、ヒカルは顔をしかめて叫んだ。

「痛い！」
「そりゃぁ痛いだろうな。・・・成年になっても、こんな擦り傷だらけの婚約者を持つオレの身にもなってくれ」
彼はそう言ってヒカルの腕を放すと、容赦なくじろじろと彼女を眺め回した。

「……何？」
「オレが出るなと言ったのに、外出して。
アルディ邸に戻って、たいそうなことをしでかした割に、悪びれていない様を見て、呆れているだけ」
ヒカルは茶色の瞳を瞬かせて、首を傾げた。

……ルイは心配している？

彼は日々不定期な仕事をしているわけでない。
曜日や周期ごとに手がけている事業のために、あちこち動き回っている。
加えて、当主が完全オフを宣言するこの時期は、代行のための予定も多いはずだった。

それなのに、時間をかけずここまでやって来た。
予定を繰り上げて来たとしか思えなかった。
ルイはタイを少し緩めて、ヒカルを斜め上から見下ろした。

「ルイ…ごめんなさい」
ヒカルは素直に謝った。

頬にも創った擦り傷が少し痛んだ。
「ヒカルの迂闊なとしか言い表せない行動がもたらした結果のひとつひとつを謝罪してもらわないと割に合わないな」
ルイは冷たく言った。

「でも」

ヒカルは続けた。

「私、どうしてもシャルルに会いたい。シャルルと話がしたい」
「シャルルは今、安静にしているよ。誰かが、渾身の力で突き飛ばしたから、軽い脳震盪を起こしている」
そう言われてしまえばもう言い返せない。

「ミシェルは逢って良いって言った」
「駄目だとは言っていない」
ヒカルは櫻色の唇を噛んだ。
自分がしたことは間違っているのだろうか。
シャルルは夏の日を過ごすことが出来ない。

途中でこちらに戻って来たときには・・・・我を忘れてルイを激しく殴打した。
今度も、ヒカルの行動が彼を追い詰めてしまう結果になったのだったら。

……殴打されるのは自分であるべきだと思った。

「部屋で休んでいるよ。しかしどうなるかは責任が持てないな。
…･･彼が途中で『こちら』に正常に戻れた試しはない」
「ルイ」
ヒカルは思い切って訪ねてみることにした。
「質問はひとつだけだ」
ルイは面倒くさそうに横を向いた。
長居は無用の場所だった。
ここはかつて、彼が緊急で運ばれた医務室だった。

……シャルルに酷く殴打されたとき。

ルイはひとりでここまで歩いてきた。

血飛沫にまみれて、肋骨を折って、バランスを失いながら、気の遠くなる痛みを抑えてここに来たことを思い出す。
「ルイはどうして…黙ってあのまま抵抗しなかったの」
あのときのことを言っていた。
ルイと同じ瞬間のことを考えていた。

「あのとき、シャルルは普通じゃなかった。それを知っていたのに、なぜ抵抗しなかったの」
「オレのことを知っても理解できないだろう」
「理解できなくても良い。……聞きたいの」

彼はそこまで言い切った、満身創痍の茶色の髪のヒカルを見た。
彼女はルイに確実に近寄っている。
あの人と同じだった。
こちらに…こちらに不意に近づいてくる。
これほど細心の注意を払って、距離を保っているのに、彼女はそこをいともたやすく越えてくる。

でも、もう、心を開くことはできなかった。
そう‥「もう」二度と。

■93

「知って何がどうなるわけでもないだろう」
ルイは回答しないよ、と言った。
「私が先に帰ってきたから。シャルルは戻ってこられなかった。
だからあのとき、ルイに酷いことをしたのに、ルイはわかっていたからそのままにしていたの？」
「本当に呆れるほどお前は苛立つね、ヒカル」
ルイはヒカルを強く睨んだ。

無表情に黙って話を聞いていたが、ルイは少し苛々したように言った。

「ヒカル。お前は本当に苛つくよ。
あの夏は、オレが早く帰ってこいと言ったからお前は帰国してきた。すべて自分のせいにして、ひとり被害者を気取るのはよせ。
……それとも、何か？ヒカルの制止を聞かずにお前を突き飛ばしたシャルルは偽物で、自分には決してそんなことはしないと思い上がっているのか？」
彼は勢いよくそう言うと…一度だけ溜息をついた。

「ああ、お喋りが過ぎた」

そう言うと、タイを勢いよく引き抜いて、一番上のボタンをはずした。
次に、見事な薔薇の紋様の入ったカフスボタンをはずし、無造作に金髪をかき上げた。

何かに疲れている様子だった。

「ルイ…あなた、寝てないの？」
確かに、連日彼はほとんど睡眠を取っていないようだった。

「予定が立て込んでいてね」
「…少し休めないの」
「代案を立てられない者ほど、そうやって中断することを勧める」
ルイは譏笑した。

「お前が勝手なことをしなければ、数十分は眠れたかな」
そう言って彼はヒカルを残したまま部屋を出て行こうとした。
この消毒液の匂いが頭痛を誘発させる。

「ルイ！……セキュリティが厳しくて、中に入れない。…ルイが解除して」
「ミシェルがとっくに解除済みだよ」
肩をすくめて彼は彼女にそう言った。

「鎮痛剤を飲むのなら、迂闊にアルコールは摂取しないことだな。…ヒカル、アルコール過度摂取が明らかな浮腫んだ顔でオレに近づくな」

ルイはそう言うと、少し仮眠する、と言って出て行った。

その言い方から･･･彼は今日はこの館に戻って来たのだと思った。

荷物は運んでおいた。
彼はそれだけ言うと、さっさと医務室を出てしまった。
彼はヒカルが外出したことを知ると、彼女がここに戻って来ていることを察知して、そのまま荷物を運んできたのだと知った。

そうなると…一度あのセーフハウスに戻ったことになる。
もし、自分の様子を見に行ったのであれば、彼に済まないことをしてしまった。
ルイは、時が過ぎるまで待て、と言っていたのに、ヒカルは待てなかった。
あまりにもあまりにも哀しくて、彼女は飛び出してしまった。
「ごめんなさい」
彼女はもう一度そうつぶやいた。

誰に謝ったのだろう。

ルイに？
ミシェルに？
シャルルに？
それとも……

シャルルの心の中に、まだ住み続けている、あの人に、だろうか。
彼女は誰もいなくなってしまった医務室をぐるりと見廻した。
そしてしばらく待ち、一人きりになった彼女に監視のスタッフが付き添いのためにやって来ないことを確認すると、部屋を出た。
迷うことなくこの家の主の部屋に向かった。

……かつて、幼い時に、最高の状態の薔薇を毎朝届けた、同じ道程を歩いた。

■94

何度も通った廊下なのに、初めて通る路のようだった。
夏の陽射しがガラス張りの廊下を照らし出す。

空調が完全に制御されているからそれほど暑さは感じなかったが、ヒカルは目を細めて、屋敷の中から臨める青い空を眺めた。

紫外線カットを施された硝子越しでさえ、この空の青さが目に沁みる。
雲の白さがあの夏の日や、初めてシャルルに会った夏の空を思い出させる。

けれども同じではなかった。
こんなに染みいるような青い空ではない。
確かに、自分はこの空の蒼を知らない。シャルルは教えてくれなかった。
シャルルは、何度も何度もたくさんの季節の色を教えてくれたのに、この蒼だけは教わらなかった。

初めて通るような、それでいて、既視感を感じながら。
彼女は歩き慣れた、躰が教えるままにシャルル・ドゥ・アルディの部屋を訪れる。
彼の部屋は執務室と続きになっており、執務室からではないと通常の者は入れない。
ヒカルをのぞいて。
彼女だけが、シャルルの私室に直接入る扉を開けることを許可されていた。
少し躊躇ったが、ヒカルは「いつも」のとおりではない方法を選んだ。
何が彼女を躊躇わせていたのか、このときはまだわかっていなかった。
シャルルの私室に面する扉から直接入ることをやめ、執務室から入ることにした。

「…シャルル」
彼女は口に出して、彼の名前を呼んだ。

先ほど彼にしがみついたときに、彼の温もりを感じた。

久しぶりの……気の遠くなるくらい久しぶりの彼の温もりだった。
彼の体温や肌の感触や息づかいを感じた。
無茶なことをしたのはわかっている。

でも、どうにも止まらなかった。
考えるより先に、躰が動いていた。

彼もかつて、ファム・ファタルに対して感じた衝動だとは知らなかった。

…執務室は寒かった。

そして非常に…煙草の香りが充満していた。
かつてはそんなことはなかった。

彼は、煙草は吸わない。

夏の間、吸ったとしても、彼はヒカルに気取られない場所で吸っているはずだった。

…それなのに。

薄暗い執務室はひんやりという言葉を通り越して寒々しかった。
まだ清掃前のようだった。

執務室の机の上に乗る、クリスタルの灰皿の上には無数の煙草の吸い殻があった。
彼の乱喫を伺わせる。

…‥几帳面で神経質なシャルル・ドゥ・アルディらしからぬ光景だった。

シャツは脱ぎ捨てられ、あの夏のマリナのものだろうか…室内であるのに、女性ものの日傘が立てかけてあった。

澱んだ空気を感じ、ヒカルは目を瞑ったが、ここで見ないふりはすることは出来ないと言い聞かせて、もう一度執務室内を見定めた。
少し薄暗かった執務室の闇に目が慣れて、彼女は目が慣れていなくても進むことが出来た彼の私室へ続く扉に進む。

…‥シャルル。

躊躇いを感じないと言ったら嘘になる。
けれども、ここで戻るわけにはいかなかった。
この先には、シャルルが居る。

あの夏のマリナの痕跡もあるかもしれない。
二人で過ごしているであろう閨の空間に踏み込むことは、ヒカルの年齢ではまだ平常心を持ってできそうもないことだった。

でも。

シャルルに逢いたい。
シャルルに逢いたい。
……シャルルに、逢いに来たのだから。

彼女は彼の名前を三度繰り返した。
扉に手を掛ける。
ゆっくりと扉を開ける。
これまで滅多にここから入ったことがなかった。

だからヒカルは力の加減がわからず、扉は少しだけ軋んで驚くほど響き渡るような音を発した。
少し驚いて、扉をまた閉めてしまう。

……これほど些細な行動で臆する自分が滑稽だった。

ヒカルは声を漏らさず笑った。

その時だった。
中から、声がした。
静かな、響き渡るようなテノールだった。
ヒカルはその声の持ち主を知っていた。

「・・・・・あいているよ」

■95

闊達に「おはよう。今日の薔薇を届けに来たわ」とそう言った日々のことを思い出した。

その時にはいつもシャルルは目覚めの微睡みから、意識を取り戻しつつあるか、すでに起き上がっている。

いつも裸体になにも纏わないシャルルに赤面したヒカルが「早くローブを着て！」と言って反対

側を見るのを可笑しいね、と言って笑ったものだった。

いつもの彼なら「開いているから扉が開くのだろう」と皮肉を言うはずだった。
その上で彼女の待ち望んだ「おいで」と言うシャルルの声の音域そのものが返ってきた。

声を聞くだけで…手が震える。
ヒカルは扉を開いた。

・・・・中には。

部屋の中にはシャルル・ドゥ・アルディが横たわっていた。
点滴を打っているらしい。
彼の白いしなやかな腕から、長い管が伸びていた。

彼女はそんな衰弱したシャルルを見たのは…二度目のことだった。

「シャルル…！」
声を荒げるのも、彼の繊細な神経を破壊してしまうような気がする。

ヒカルは声を押し殺して……

室内を凝視した。
扉のこちらから向こう側には、なかなか足を入れることが出来なかった。

彼は居た。
ひとりだった。

人払いをしたのだと思う。
誰か付き添いがいなくては、到底、ひとりで置くことは出来ない有様だった。
憔悴した、と言っても言葉が足りない。

———彼は衰弱していた。

先ほどまで薔薇園を彷徨い歩いていたシャルルと同一人であろうかと疑ってしまう。

彼は明らかに…病んでいた。

肉体が、ということではない。
精神が、病んでいた。

彼の涼やかな瞳は宙を見上げていたし、ここから見える、薄いブランケットの丘が上下する様は、彼の呼吸が浅いことを示していた。

一歩踏み出すだけで良かったのに。
ヒカルはその一歩が、踏み出せずに居た。

扉の縁で立ち止まる自分の鈍愚な行動が恨めしかった。
さっきはあれほど…懇親の力を込めて、彼に向かって走って行けたのに。
また、結んだ唇の筋肉の硬直から伝わった刺激で、頬の擦り傷が痛んだ。
「入ってきたら？…・扉から漏れる冷気が辛い」
彼はそう言った。

静かに。
彼は冷房の微風でさえ辛いと言った。
「シャルル」
その言葉で、ヒカルは躊躇うことをやめた。

会話が出来るシャルルが居るということが、ヒカルを安心させた。
泣かないと決めたのに。
ひとりの時にしか泣かないと決めたのに。
どうにも、涙が溢れてきそうになる。
でも泣いたら、シャルルが心配する。
フランスの華と呼ばれた麗人の姿を見つめることが出来ない。
泣くのはいつでもできる……
ヒカルは自分にそう言い聞かせて、部屋に立ち入った。

執務室で見かけた不整頓な様は、この部屋では見あたらなかった。
というより、ヒカルは周囲の様子に気を配るほど注意深く在ることができなかったのだ。

……ヒカルは、シャルルを凝視した。

白金の髪の美しい人は、そこに横たわっていた。

瞳をじっと閉じて…

辛そうに眉根を寄せている。

「…シャルル」

声の振動そのものが辛いとでも言うかのように、シャルルは少しだけ呻いた。
彼が、ひと夏を耐えきれなくらい…弱っていることがその様子でわかった
なにがどう、というわけではない。

やせ衰えているわけでもないし、病的に何か奇妙な兆候が出ているわけでもない。

相変わらず彼は美しかった。

白金の髪も、高い鼻梁も、静かで物憂げな頬から顎にかけての曲線も、彼女の知っているシャルル・ドゥ・アルディだった。

……でも、彼は明らかに弱っていた。
脆弱な様を曝け出していた。

「シャルル」

自分が誰だかわかるか、とは聞かなかった。

彼に尋ねれば彼はその瞳を見開かなければならないから。
ゆっくりと傍に寄る。
気配を気取られないように。
そして彼を刺激しないように。
ヒカルは、ゆっくりと…長らく会いたかった人に近寄った。

さきほどの、どうにもならなくなって飛び込んだ気持ちはそのままに。
彼女は…そのはやる気持ちをおさえることができるようになった。
それでも最初の再会には抑制できないほどの激情を、シャルルに感じた。
ヒカルは…そっと、声を出さずに、彼の浅く呼吸する胸に、白い手を乗せた。
このまま彼に抱きつきたい情動も、シャルルと名前を呼びたいことも我慢した。
彼は沈む羽根枕の中に居た。埋もれて、静かに…静寂によって癒されるほんの僅かな休息を摂取していた。
今、話している人物が、誰なのか、わかっているのだろうかと疑問に思った。
近づくにつれて、彼の美しい曲線を描いた瞳が半分だけ開いていることや、どうも意識はあるの

にどこか遠くを見ていて、考え事をしているときよりもっと遠くに居るような目つきをしていたことに気がついた。

……医学に携わる路を志すヒカルは、その症状が何であるか、

推測がついた。

シャルルは…シャルルは、確かに、病を患っていた。

…ルイ。ミシェル。

彼の症状がわかっていながら、彼を「あちらの世界の住人」として隔離した、アルディの男達のことを考えた。

■96

この症状は明らかだった。

ヒカルは注意深く彼の様子を見定めようとしたけれど、込み上げてくる想いが客観的であろうとすることを邪魔した。

ミシェルのように、冷徹に観察することは到底出来そうもなかった。
シャルルは物憂げにゆっくりと瞳を瞬かせている。

…意識はある。

彼女は彼を刺激しないようにそっと近づいた。
彼は視線を彷徨わせていた。
気配はわかるのに、焦点が合っていない。
微睡んでいるときと同じ状態だった。

「……シャルル」
彼女は静かに囁くように声をかけた。
「私よ…わかる？」
その声に、その言葉に、シャルルは青灰色の瞳を向けた。

ヒカルに目を止めて、形の良い唇を心もち震わせながら、広げる。
少し驚いているようだった。
彼は小さく頷いた。

「具合はどう？…何か欲しいものはある？して欲しいことはある？お水はいらない？」
彼はその言葉の振動そのものに堪えるから穏やかに語りかけようとしたのに、ヒカルはどうにも止まらなくなった。

彼がこちらを向いてくれたことが嬉しかった。

再会の言葉はいらない。

彼が頷いてくれただけで…良い。
極力彼を刺激しないように、緩々と彼の枕元近くに座り込む。
眠っている彼に、小さい頃はよくこうして頭を垂れて、彼の胸の鼓動を聞いた。
彼の浅い呼吸や、脈動や、そして憂いのある低い声を間近で聞くことが嬉しかった。

同じように…彼女はシャルルの枕元に身を寄せた。
彼に触れたかったが、刺激を極力与えないように振る舞った。
「……君からのキスが欲しい」
彼はそう言った。

そして、目を閉じて、いつかの時のようだね、と静かに言った。

そして本当に声になるかならないかくらいの音量で、彼はあの人の名前を言った。

いつかの時……

ヒカルとの間にはそんなことはなかった。

それは今となってはシャルルだけしか知らない、秘め事なのかもしれない。
ヒカルは涙が目の淵に潮となったのを感じ、あわてて上を見た。

涙を堪えるときの仕草だった。

……シャルルは今、「こちら」でも「あちら」でもない狭間に居る。
ヒカルを間違えている。

あの夏のマリナと待ちがえているのだろうか。
マリナの代わりだと思っているのだろうか。
それとも、マリナ本人だと思っているのだろうか。

ルイはシャルルは夏のマリナは、あの人本人と思っていないと言った。

では、ヒカルのことは…どう思っているのだろうか。

これまで、シャルルが自分のことをどう考えているのか。
考えたこともなかった。

なぜなら、彼女は愛されていたから。
愛を与えてもらっていたから。
充分すぎるほど。
彼は。

シャルル・ドゥ・アルディは。

本来与えなければならない人に分け与えることをやめて、シャルルはヒカルにすべてを注ぎ込んだ。
ヒカルは涙を堪えるために息を止めた。

目を見開いて、シャルルから眼を反らそうとしたが、彼から目を話すことは出来なかった。

「前は君にキスをしたいと言った。今度は君からのキスが欲しい」

シャルルは夢見心地であるかのように、美しい横顔を見せながら、ヒカルに言った。

「良いよ」
ヒカルは言った。
迷う必要も無かった。

自分がマリナの代わりなのか、マリナにはなり得ない夏のマリナと間違われているのか、それはもうどうでも良かった。

彼の望みを叶えてやりたい。

「良いわ…目を瞑って」

彼の彷徨う瞳が瞼で閉じられた。
シャルルとの最後に別れた時。

なぜ、キスを教えて欲しいと言ったヒカルに、ああいうキスをしたのか、ヒカルは考えたくなかったから考えることをやめてしまっていた。
シャルルの、軽く啄むようなキス。

…それは、夏のマリナに彼が落としていたキスだった。

彼の情熱的なキスは知らない。

でも、あれは……少年だった頃の。

青春の輝きの時代に居たシャルルの、口付けなのだ。

マリナに焦がれて、彼女だけを見つめて、そして好きすぎて独り占めできなかった時代の彼の愛情表現なのだ。

戸惑い、躊躇い、壊さないようにでも確かめるように。
彼は何度も軽く接吻を繰り返した。

ヒカルはそっと…彼の顔に頬を寄せた。

涙が、こぼれた。

熱い涙が、シャルルの頬にぽつんぽつんと落ちる。
彼の白い顔に、自分の影が灰色に映った。
頬のガーゼに涙が吸い込まれて行ったが、反対側の頬からは、
いくつもいくつも筋ができて、彼の頬に涙を降り注いでいく。

やがて彼の頬から、その涙が首筋に、頬の高い部分から低いところに流れ落ちていく。
渇いた夏のシャルルの心に染み入るかのような、大粒の涙だった。

ヒカルは唇を寄せる。

シャルル。……戻って来て。私はあなたを失いたくない。
そのためなら、マリナの代わりだって良い。
微睡んでいる彼の戯言でも良い。

私がシャルルにもらったたくさんのことを全部返しても良い。

…だから、お願い。戻って来て。
祈りにも似た気持ちで、彼女は茶色の瞳を閉じて、シャルルに唇を重ねようと涙を落としながら擦り寄った。

■97

その時だった。
彼の唇とヒカルの朱唇が交わろうとした時。
シャルルの手が動いた。

これまでの緩慢な動作から、彼がそれほど素早く行動できるとは思っていなかったヒカルは、大きなアーモンド型の瞳を更に大きく見開いた。

彼は彼と彼女の間を大きな手のひらで遮った。

「・・・シャルル？」

細く長い指先が、ヒカルの唇に触れた。
彼の手は冷たかった。

「オレ……どうかしているな」
彼は遠い昔に言った言葉を同じ口調で言った。

どうかしているよ

彼は繰り返すことはしないはずなのに、もう一度言った。

「…‥やめておけ」

「シャルル。私は……」
「オレに触るな」

彼の手が、彼女の顔を軽く押し出した。
そしてヒカルの方を彼は見た。

物憂げな哀しそうな、何かを求めてやまない切ない晄をたたえた瞳をしていた。

…･･澄んだ瞳だった。

ヒカルは涙を落とした。

ああ……

感極まって、声を漏らして泣いた。
それ以外は、声にならない。

茶色の睫から、後から後から流れ出る液体を彼女は止めようとしなかった。

泪が止まらない。
止めたくない。

この泪が、シャルルをこちらに呼び戻すのであれば、いくらでも流すことができた。
彼女はシャルルの傍に居たい、と言って泣いた幼い頃に戻ったかのように、人目を憚らず泣いた。

シャルル。
シャルル。
シャルル・ドゥ・アルディ。

ヒカルは泣き笑いになったような顔をしていたはずだった。
「酷い顔だ」
彼の一言一言は短かった。

でも間違いなく、ヒカルのしゃくり上げる顔を懐かしそうに見据えていた。
射貫くような力強さはないけれど、誰を見ているのかははっきりと認識しているようだった。

何が彼を戻すきっかけになったのか、ヒカルは気がついていなかった。
でも「何か」が彼をこちらに戻した。

それだけはわかった。

シャルルは、言葉を出すのも辛そうだったが、間違いない。
彼女は確信した。
ヒカルの知っている、あのシャルルだった。

「……ヒカル・クロス。成人女性がそうやって泣くものではないよ」
「————こどもで悪かったわね」
「まったく成長しないのも困ったものだ」
彼はそう言って薄く微笑んだ。

ヒカルは涙を沛然と落とした。

泣かないと決めていた自分のこれまでを押し流すように、彼女の涙は次から次へ流れていく。

「シャルル。……おはよう」
「ああ…‥おはよう、ヒカル」

彼のためだけに、毎朝届けていた最高の状態の薔薇を、今日の彼女は携えていなかった。

彼は一度大きく息を吸った。
そして、頭を起こして、彼女を見つめる。

「ヒカル。今日の薔薇は？」
ヒカルは泣き顔のまま、笑った。
「泣くか笑うかどちらかにしたらどう？」
シャルルの言葉のひとつひとつが、嬉しかった。

「ヒカル。……今朝の薔薇は？」

彼がそう言ったので、ヒカルは茶色の目に涙を浮かべながら、微笑んだ。
「ああ、今ね、摘んでくるところ。今、温室に行ってくるわ」
彼はいつもの朝、と思っているようだった。
彼女が捧げる薔薇がないと言われて、ヒカルは時間の経過について、シャルルがまだ朦朧として

いて判別がつかないのだと思った。
顔を輝かせて、ヒカルは大きく首を縦に振った。

「待って居てね、今、行ってくるから」
彼女はそう言うと、立ち上がって、涙を拭き、待って居てね、と何度も言って部屋を出た。
擦り傷の痛みさえすっかり忘れていた。
シャルルをひとりにすることに少し躊躇ったが、温室に行きがけに誰かに言づてをしてから行けば、彼の容態を診てもらえると思い直す。

シャルルは微笑んでいた。

ヒカルは、今度は、彼の私室から廊下に出る扉から出て行った。
彼女だけが出入りを許された扉から。

早く行ってこなければ。

次の瞬間には、若い彼女は温室のどの薔薇が今日の彼に相応しいかで頭がいっぱいになってしまった。
香りが強いものは向かない。
開花時間が短いものはすぐ萎れてしまう。
ヒカルは後ろを振り返らずに、早足で出て行った。

こんなに・・こんなにすぐに彼が戻ってきてくれると思っていなかったから。

どうして彼が戻って来たのかヒカルにはわからなかった。

———彼女が出て行った後。

軽い足音が遠ざかるのを聞いて、シャルルは微笑みを消した。
眉根を寄せて、遣る瀬無い吐息を漏らす。

頭を軽く振ると、細い柔らかな絹糸のような髪が乱れて彼の頬に降りかかった。
彼は腕から点滴の針を無造作に引き抜いた。

そして上半身を起こして、気怠げに髪をかき上げて、次に眉間を軽く抑えた。

シャルルは…両手で彼は青ざめた顔を両手で覆った。

頬が濡れていた。
ヒカルの涙だった。

彼はそれを掬うと、余瀝を眺めながら微笑んだ。

存在そのものが奇跡のような、フランスの華は……

深く嘆息した。

———もう、解放してくれないか。

彼はそうして、また痛嘆した。
また、顔を大きな手のひらで隠した。

こちら側の世界は、眩しすぎる。

同じ空間なのに、罹病の闇から急に呼び戻された彼にはひどい痛痒に感じて顔をしかめる。

そして。

眩しさから逃れようとした。

———細く長い指の間から、ヒカルが落としたものではない雫がこぼれ落ちた。

■98

「泣くか笑うか、どちらかにしたら？」
シャルルと同じ事を星辰の子は言った。

「ルイ」

ヒカルは温室に入るなり、ルイがあのベンチに座って煙草を吸っている様を見て、顔をしかめた。

「ここは禁煙よ」
「……そうだったかな」

ルイはそう言って無造作に灰を落下させた。
彼は何度もここで喫煙しているらしい。

さすがに火災を心配して、みかねた使用人が用意した彼のために灰皿を用意してあった。

「夏の期間、主はここで煙草を吸いながら薔薇の剪定をよくやっているよ」
この邸は立ち入り禁止で誰も入れないはずなのに、ルイは彼の事をよく知っていた。

「シャルルは目覚めているわ」
「そう」
彼は興味なさそうに言った。

「それでヒカルはシャルルの側を離れて何をしに来たの？」
ルイは見事な金髪を光らせて、言った。
煙草を吸って、顎をあげて煙を上に向けた。

その煙が薄くなって靄になり、やがて消えていく様を彼はじっと観察していた。

「彼がそう望んだのであれば、覚醒してもおかしくない。
そろそろ終わる時期だと予測していたしね」
終わる時期、とはシャルルの夏の狂乱が終わるということを示していた。
彼の夏の時期は非常に短い期間であるらしい。
ルイの言葉から推測できた。

「ヒカルは両親の命日を放っておいて、その日前後におかしくなるシャルルの傍にいてやりたいと思うわけだ。
たいそうな正義感だね」
「父も母も、こんなときは『行け』と言ってくれたと思う」
ヒカルは反論した。
「そもそも呼んだのはルイよ」
「そうだったかな」
「はぐらかさないで」
ヒカルは少し強い口調で咎めた。

燦燦と差し込む夏の陽射しに目を細めた。

「ルイ。……どうして、彼をあのままにしておくの」
「同じ質問はするな」
ルイはそう言って質問を却下した。

「ルイがあの症状をわからないわけないでしょう」
ヒカルはそう言って、ルイの正面に回り込んだ。

「この間、ルイの論文を読んだ。
　専門的分野だから、私にはまだよくわらからなかったけれど…間違いなくあ　の症状は、ルイの書いた論文の内容のものだった」
「だから？」

ルイはそこで初めてヒカルを見た。
彼は従容としていた。

「そうだね、あれはamentia （アメンチア）…」
「……『無幻症』よね」
最近読んだルイの論文に、詳細な分析が載っていた。
ヒカルはそれを思い出していた。

「もうあれば無幻精神病と診断してもおかしくないね」
「シャルルはお医者様なのに…心理学者なのに…」
ルイはヒカルがそういう感想しか持てないことにがっかりしたように、微苦笑した。

煙草を口にくわえながら、気怠げにベンチの縁に腕を投げ出した。

「————原因が特定できない」
「原因って…」

「外的要因か、内的要因かということ」
「どういう意味かわからない」
ルイはそう言うと思ったよ、と言った。

ヒカルを立たせたまま、彼女を眺めながら話し出した。

「外的要因で考えられるのは、外傷による脳障害か脳症。内的要因は……遺伝」
オレの論文、全部読んでないね、とルイは薄笑いした。

「———シャルルは昔、頭部に銃弾を浴びて、重篤な状態になったことがある。その時の後遺症と推測したが、彼の母は重い精神病を患っていた」

自分の祖母のことを、ルイは「彼の母」と表現した。

ヒカルはシャルルの怪我のことなんて知らないだろ、とルイは面白そうに言う。
その通りだった。

「無幻症は覚醒しているのに夢をみているような症状が典型的だ。
視覚的表象（いわゆる幻覚）が見られる。
…現実との接触が失われて、幻覚・妄想、思考錯乱、強度の不安、異常なほどの興奮状態持続が前景にある…･･･」

「シャルルは無幻状態なのね。だから意識はあるのに、ああして……ああして夢の世界の住人のような振る舞いを…」
「いわゆる意識障害だね。あれほど顕著な症例は初めてだけれどもね」

彼の希望があれほど瑣末なこととはね。
フランスの華という称号は相応しくないね、とルイは冷たく言った。
「彼は夢を見ないのに。無幻症を発症すると、彼は夢に入り込む。
少年時代に戻り、マリナを愛でて、それでお終い。
そしていつものシャルル・ドゥ・アルディに戻る」

「……」

「一定時期にああいう症状になるのは本当に珍しい。
原因がわからないからシャルルはいろんな抗鬱剤を自ら投与する。
そしてそれが効かない。そしてまた狂う。
…毎夏、そのくり返しだよ」

いつになく饒舌なルイの言葉に、ヒカルは呆然と聞くばかりだった。

シャルルは病気だ。

原因がわからない病気だ。

でも、それを治せない。

外的要因も内的要因も持っているから、彼の病の源がわからない。

そして短い期間だけの症状だから、シャルルは「そのままで良い」と言う。

「彼はどうして静養に専念しないの」
「おまえはまだわからないの？」
少しだけ苛々したように彼は言った。

「ヒカルが成人するまでは。ヒカルが行く末を定めるまでは。
彼は当主の座を降りる気はない」
「…・・私は成人した。シャルルは解放されても良い。それに
シャルルは私と違う人生を…」

「ヒカル。ヒカル・クロス」
ルイは彼女の言葉を遮った。

いつも話は最後まで聞くのに、ルイはこのとき…初めて強い口調でヒカルの言葉を遮った。

「理解しろ、愚かな者なりに。
シャルルはお前の将来を憂えてオレに当主の座を渡さない。
アルディの一族に加えない。
お前の卵子を使ってマリナを再生させようとすることくらい、今の技術でできるのに。
シャルルはそうしない。
なぜか…なぜなのか…よく考えろよ！」

初めて見るルイ・ドゥ・アルディの激昂した姿だった。

彼は細い指で煙草の火が点いたままの状態で投げ捨てると、立ち上がって、赫怒したまま温室を出て行ってしまった。

すれ違いざま、「別棟に戻る」と低い声で言ったきりだった。
ヒカルは煙草の火がついたまま投げ打たれた火を見つめていた。
ルイの怒りの焔のようなそんな焔だった。
激しく燃え上がらないけれどずっと長く同じ状態で点いているそれは、ルイの静かな瞋恚の焔だと思った。

ヒカルはしばらくの間、ぼんやりと、そのたなびく煙と炎を見ていた。
長く灯り続ける煙草の尖端の火を。じっと、無言で。

■99

無幻症
補足です。
無幻症（ oneirism) という症状は実在します。
また、無幻精神病（ oneirophrenia ）も実在します。
統合失調症（精神分裂病）の類似の病気です。
覚醒しているのに、夢現の状態を指します。
幻覚や、思考錯乱、妄想、退行等々が特徴です。
強度の不安を感じたり、強いストレスで発症することもあるそうです。
脳症や事故などの後天的要因もあるそうです。
また、遺伝による症例もあるそうです。

これはナルコレプシー（薫が煩っていたアレ）や嗜眠にも当てはまります。
シャルルのママンは精神疾患を患っていました。
シャルルもその因子があるのではないかと常々疑っていますね。
マリナと和矢の事故の際には、彼は明らかに自らを失っています。

そして、原作の中で、シャルルは頭部に銃弾を受けて瀕死の重体を経験しています。

医療系知識が乏しいので、今ひとつ具体的に表現できないのですが…
ここからはtomogon の考察です。

彼が無幻症であるなら。

「夢をみない」と言っているのに夏の間だけは夢を見る状態。
そして効果的な薬がない。

でもシャルルはあえて積極的に薬の開発に着手していないような気もします。
なぜなら、夢でも。
偽物とわかっていても。
マリナに逢えるから。

彼は夢を見ないのに夢を見ることが出来るから。
それは彼の願望でもあったのではないでしょうか、と。

ヒカルが年々マリナに似てきていることに、シャルルは耐えがたい苦痛を感じています。
物語は彼がいつからそんな状態になっていったのか、ということも後ほどの「謎の解明」で触れたいと思います。

彼の誇りが「自分を見失うことをしない」と言い切っているのに。
彼は贖罪のために、あえて夏の狂乱を受けて入れたのかな、と。
これを続ければ、確実に体を蝕むはずなのに。

彼は、病を治さずに、ただ、睡眠薬やあまり効かない抗鬱剤を大量に注入している。

長くなりましたが、彼の病状について少しだけ考察というか補足を。

‥シャルルの冬眠というのは、やさぐれシャルルの状態もあったのでしょうが、
このような「夢現の精神疾患」もあり得たのではないのかな……

そんな妄想を書いてみました。
さて。これからいよいよ100 話に入っていきます。

<hr size="1" />

あれほど長い年月が経過していたというのに。

ヒカルがアルディ邸に戻って、そして溶け込んでいくまでの時間は長くかからなかった。
彼女が約束通り、最高の状態の薔薇をシャルルに持参したときには、すでに彼は起きあがっていた。

そして何年も経過したのに、とっくに日は傾きかけていたのに、シャルルとヒカルはいつもどおりに一日を始めた。

再現することで、シャルルはこちらにゆっくりと戻っているようだった。
ヒカルの使っていた身の回りのものも、部屋も、何もかもがそのままだった。

彼女が持っていったものは少ない。

そして彼女が置いていったものも少なかった。
部屋に自分の荷物が置いてあった。

それだけが異質だった。

彼女の「今」の荷物以外はすべて昔のままだった。
がらんとした空間を眺めて、自分が長年過ごしてきた場所が酷く空漠なものに感じた。

自分が居たという証拠はこの記憶だけだ。
でもシャルルはヒカルを忘れて、夏のひとときの狂気に身を投じる。

ヒカルの記憶を自ら消す。

狂気の業火に灼かれていたのに、ヒカルはちっとも気がつかなかった。
彼はいつも優しかった。
だから彼の苦しみは時間によって癒えたのだと思っていた。

————そうではなかった。

ャルルは誇り高いのに、強い精神力を持っている人なのに。

意思でどうにも出来ないことがある、とアルディ家の男達は口を揃えてヒカルに告げる。
あれほどすべてを兼ね備えた者達が皆一様に同じ事を言う。

……彼の狂気は原因がわからない

ルイが言ったことを思い出していた。
そうだろうか。
ルイは原因をいくつか絞っている気がした。
彼は根拠のないことは口にしない。

アルディの者は皆そうやって教育されているからだけが理由でない。

彼の気質がそうさせている。
典型的な分裂気質だった。
緊張が少しだけほどける。

シャルルはもう戻ってくるなと仄めかしたのに。

この屋敷の主は、彼女の再来訪を想定して、きちんと場所を確保していた。

それが…嬉しかった。

まだシャルルが彼女を必要としていれば、それで良いと思った。
シャルルがヒカルを国外に出した理由については、全部はわからない。

しかるべき待遇でもって対応すると彼は宣言していた。
それは…彼女が本当に彼の娘になるということを示していた。
だから、ヒカルは戻らないことをルイに伝えたのに。

なんの因果だろうか。

またこうしてここに戻って来た。
今度ここに足を踏み入れる時。

ルイと結婚するために戻ってくるときだと思っていた。
だから二度とここには戻らないつもりだった。

…ルイとは結婚できない。

彼を愛おしいと思う。

心から倖せになって欲しいと願っている。

そして彼が受けるべき倖せを自分が独り占めしていて、気付かないふりをしていたことをルイに責められて、解消するために結婚して本当の家族になろうと言った。

でも、彼がヒカルを望む理由がわからない。

彼の内なる悩みの姿が見えない。
本質が見えてこない。
彼は何に憂えているのだろうか。
シャルルの愛が手に入らないことか。

当主の座が手に入らないことか。

でも、それはヒカルとの結婚でないと解消できない大きな痼りなのだろうか。

ルイ、倖せというものは、奪うことでは得られない。

何とか彼に伝えたかった。

今日の食事にも彼は出てこなかった。
彼はヒカルとの契約を守っていた。

シャルルと顔を合わせることはなかったけれど、彼は同じアルディ家に住み、そして薔薇の温室に時々足を運ぶ生活を送っている。
時には執務室で打合せをすることもあるのだろう。

執務室に入ったときに、ルイの筆跡が残るメモが散乱している様が見受けられた。

ヒカルの部屋から見えるルイの別棟の光をいつも確認していたことを思い出していた。

何をするにも、数年前の幼い自分と見え方が違っていた。

彼女は大人になった。

美しい人の哀しい秘密を暴いてしまった。

星辰の子と呼ばれて賛辞を浴び続ける彼の狂気を見た。

シャルルと同じ貌の人が、ヒカルに言い続けたことがようやく理解できるようになった。
私は誰も救えない。自分も救えない。
誰かを救ってあげたいと、おこがましいことを考える気持ちはなかった。

でも、自分という存在もこの記憶も、ただ生きているだけのものではなかった。
救うのではなく‥伝えたかった。

ヒカルの言葉がすぐに届くとは思っていない。

でも、シャルルには聞こえた。

聞いてくれた。

そして･･･彼は戻って来た。

戻れない路などない。

彼女はルイの別棟から漏れる光を眺めた。
日は落ちて夜になった。
シャルルは薔薇を眺めた後、長い眠りに入っていた。
その時には睡眠導入剤を使用しなかった。
彼は一度眠りにつくと、なかなか目が醒めない。
ヒカルはそれを見届けると、自室に戻って来たが、荷ほどきをせずに、そのまま…

踵を返してルイの部屋を訪れることにした。

彼が望むのであれば……
自分が必要だと感じれば……

話の内容によっては、今夜はこの部屋に戻ってこられないこともあるだろうと思った。

■100　郭公　前編

ルイは居た。

先ほどの激昂を忘れてしまったかのように、少し唇を歪めたまま、扉を開けてそのまま彼女に背を向ける。

‥…入ってこいという許可だった。

彼が均整の取れた背中を向けたときに、ルイから煙草の香りがした。
それはシャルルに触れそうになった時にも感じた香りだった。
同じ煙草だ。

「内線電話をしたけれど、応答がなかったから、てっきり眠っているのかと思った」

「電話回線は抜いてある。必要ないから」
彼は抑揚なくそう答えた。

ひとつだけ置いてあるソファに腰を沈めた。
「それで？」
「……用事がないと来てはいけないの？」
「・・・・用事がないと来ないだろう、ヒカルは」
この場所も変わっていなかった。

自分のことを置いておいて、ここには何もない、殺風景な部屋だと思った。
彼は何台かのディスプレイを点けて、同時に別のことをしている最中のようだった。

そして何冊か、情報収集のためだけに取り寄せたと思われる、読みかけの本が床に無造作に積んであった。

アルディ家の図書室のものではない最近の医術書を読んでいたらしい。
あのセーフハウスでの分類保存とはまるっきり違っていた。
彼の何かに対する執着は、ひどく偏倚している。
「無遠慮な女だな」
「失礼ね」

眺め回すヒカルにルイは冷淡に言った。
彼は執着も嫌うが詮索も束縛も軽蔑していた。

「オレは礼を失することはしていないけれど。
･･･…夜に男の部屋に来る女に礼儀正しいと言う方が不適切だろう？」
「何も無いな、と思って」
「･･･…今日戻ってくる予定をしていなかったからね」
彼は想定していてもこんなに殺風景な部屋でじっと夜を過ごしている、と思った。

ルイは何年、こんな寒々しい棟で過ごしてきたのだろう。
彼は体をただ横たえるだけのために、誰とも話をしないで、ここに籠もる。
そして外が明るくなると出て行く。
そのくり返しを何回反復したのだろう。
ルイはヒカルが切り出すのを待って居るかのようだった。
青灰色の物憂げな瞳で、ヒカルを見ていた。
その視線は、ミシェルがヒカルを観察する様と良く似ていた。
自分も、シャルルを観ていたときには、同じような目線を彼に送っていたのだろうかと思った。

「･･･…シャルルの治療を本格的に初めて欲しい」
「何言っているかわかる？」
「･ ･･…シャルルが治るまででも良い。
彼には休息が必要だと思う。
その間だけでも、ルイが代行になって･･」

「もうそれは親族会議で決定されたことで、オレは彼の代役を長年つとめているよ、ヒカル」

彼は今頃そんなことを言い出すヒカルの気が知れない、と言い放った。
「オレが欲しいのは名実ともに当主と呼ばれることだ。
･･･アルディ家は安泰だからね。
強烈な個性を持つシャルルでも、彼の後継のオレでも、事業が安定していればどちらが当主でも良いということだ」
シャルルが君臨していた期間は長い。

健康上の理由で彼をいきなりこの世界から追放すれば、あらゆる業界でどんな反応が返ってくるのかは明らかだった。

「安寧を求める可哀想な一族は、殻に閉じ籠もるフランスの華が政治的にもう少し登りつめて欲しいと思っているわけだ。
その一方で、彼らはシャルルに見切りをつけることが出来ずにいる。
もっと繁栄させられるだろうと思っている」

もう、次世代に譲り渡しても良い頃なのに、ご老体どもは『これまでどおり』という言葉がたいそうお気に召しているようだからね、とルイは言った。

なんと答えて良いのかわからない話をされて、ヒカルの困惑した顔に気がついたルイは、面白そうに、良い表情だね、と揶揄した。

「ヒカルもいずれ知ることになるのだから、今、聞いておいても良いだろ」
「そんなことで私は動揺しないよ」
「そうか、ずいぶんと大人になったな、と言いたいところだが。
随分と磨滅したな･･･」
ルイは涼しげにそう言った。

ヒカルが困惑した顔をしながらも強がりを言ったのは明白であったのに、ルイは次の瞬間には、そのことにはもう興味が削がれてしまっていた。
「今夏はもう発症しない。･･･…発症していない間は、彼は治療の必要性がない、と言うからね。
来年まで待ったらどう？･･･待つことは愉しいぞ」
ルイはそう言って笑った。
「気が遠くなるほど、気が違うほど、待つことは愉しい」
「ああ、ルイ」
ヒカルは彼が座るソファの隣に座った。
迂闊だよ、と言われても良かった。
近くで話をしないと、彼には言葉が届かないと思った。
気が遠くなるほどの長い年月を彼はひとりで過ごしてきた。
そして少なからず、それについて感情を持っている。
ヒカルは、彼は淡泊で感情の起伏があまりないと思っていた。
でもそうではない。
あのシャルル・ドゥ・アルディに勝るとも劣らないほど、彼は激しい焔を身の内に灯している。
「ルイにも休息が必要だと思う。だから、3 人で、静かにゆっくりしよう。どこかに行こう」
「余所者がずいぶんな言い草だな」
ルイは隣に座ったヒカルに向き直った。

「おまえは贖罪の娘だと思っていたけれど･･･…言い直した方が良いな。

ヒカルは、郭公だ」
「・・・・・」
ルイは可笑しそうに続けていく。

「他人の巣に入り込んで、自分の子を生み付けていく。
あの薄汚れた郭公の子そのものだよ、ヒカルは。
本能で同じ巣の本当に孵るべき卵を落として殺し、そしてのうのうと親鳥の愛を受ける。それが当たり前だろうと言うように・・・」

「その郭公に自分の子を生み付けようとしている、本当の子どもの怨念はもう、執着という言葉を越えて、蓄念だな」
「ルイ。私は郭公じゃない」
「いや、お前は郭公そのものだよ、ヒカル。他の種に・・・宿主を選び定めて自分の種の保存をしようとしている。
ブラッド・パラサイトと言う以外、お前の生き方をどう表現したら適切なのか、オレに教えてくれ」
ブラッド・パラサイトと呼ばれて。
ヒカルは口を閉ざした。

彼が彼女を酷く冷たい目で観ることがこんなに辛く感じたことはなかった。
「ルイは私をそう思っていたの・・・？ずっと前から」
「お前がこの館に来たときからだよ、ヒカル」
彼はそう言って、ヒカルの肩を勢いよく掴んだ。

転倒したときにできた傷と打撲が痛んで、ヒカルは声を漏らした。
茶色の瞳を閉じようとしたが、「ヒカル、オレを見ろ」とまるでミシェルのように、逆らえない強い力をもった声音でルイが彼女を呪縛する。
「郭公とともに存在することが出来ないから。
郭公が愛でられ続ける限り。
オレは安らげない。生きられない。地に落とされた本当のひな鳥は、起きあがって、そこからまた巣に這い上がらなければ生き存えない」
「・・・・・」
「ヒカル。親は一度認識した子は、決して裏切らない。
寄生された宿主は、自分の種でない者を愛でる。
だから巣に戻っただけでは・・・また今度は親鳥に堕とされるんだ」
「ルイ、あなたは違う。・・・私も違う」
「どこが違うのか言ってみろ」

「私たちは鳥ではない。獣ではない」
「獣王の懐で巣くう愚者が、何を言っているのかな」
彼はおかしいね、と言って笑った。
冷然とした残酷な微笑みだった。
ルイは腕を伸ばすと、ヒカルの肩を強く掴んだまま･･･反対側の掌で彼女の頬を優しく撫でた。
左手は彼女の肩を束縛する。
右手は彼女の頬を愛おしげにさする。
悪魔と天使が混在しているようだった。
「だから、ヒカル。オレは郭公に胤を植えることにした。
そうすれば、オレは生き残ることが出来る。
愛でられる郭公はその子をまた違う種へと引き渡すことになるのか･･･
それとも、今度こそ贖罪するために、自らが寄生した親と同じ姿をする、自分が一度は堕とした本当の子に犯されて、孕んで・・・望まない賊子を産み落とし、そして育てるのかな」

■101　郭公　中編

「ルイ。そういう風に思わないで。あなただけを見てくれる人がいる。
あなたはいずれこの一族の頂点に立つ。
何もかもを失ってそこに行き着くことはない」
「失うものはないよ。失ったらまた奪えば良い」
ヒカルは絶句した。

この家は本当に、ヒカルが過ごしたアルディ家なのだろうか。
目を瞑ってまた開けば、いつもの風景が広がっているのではないのか。
ルイの指が肩に食い込んでいる痛みが、夢ではないと告げていた。

「ルイは奪うと言うけれど、それだけではない。
ルイが･･･ルイしかできないこともある。
シャルルの病を治せるのはルイとミシェルだけよ。
彼の系図原簿を閲覧することが出来て、傷病歴や活動履歴をすべて把握しているあなたとミシェルだけが、シャルルの病の原因を特定することが出来る。
どうか、あなたの稀なる力を、そんな風に使わないで」

ヒカルは願いを込めてそう言った。
茶色の瞳をのぞき込みながら、ルイは冷ややかに返答する。
「郭公の子が親を心配している。･･･親なのかな、それとも･･･」

「ルイ。私はルイから家族をもらった。これを奪ったと言われればそれまでよ。
これを返せと言われればそうする。だからアルディ家を出た。
————だからシャルルを治して欲しい。
彼をこちら側に戻して欲しい」
そう言った時、ルイは「こちら側」という言葉を、薄い唇で復唱した。

「こちら側とあちら側とおまえは良く言うけれど」
ルイは酷薄そうに笑った。
彼女の頬を撫でながら。
交換したばかりの頬のガーゼが乾燥した感触を伝える。

「ヒカルの位置を『こちら』と言って、オレやシャルルが居る場所を『あちら』と言い切るヒカルは同じ種じゃないと、いくら言ってもわらかないんだね。･･･…ねぇ、ヒカル」
彼はそう言って、ガーゼの上からヒカルの頬を静かに撫でた。
首を少し傾げて、彼女の顔をのぞき込んだ。

外は静かな闇夜が訪れており、遠くでわずかに虫の音が聞こえる。
セントラルヒーティングの微風が、ヒカルの髪を少しだけ揺り動かす。
彼女の白い頬よりもっと白い布を指先でなぞりながら、ルイは彼女に尋ね合わせる。

「その区別はどこからなの？ヒカルの居る場所が正しい路なの？
･･･闇夜に目が慣れた者はね、光が眩しすぎてそこに行き着く道程さえ目に入らない。
目が潰れて盲いても、それでもそちらに行けというのか？」
「私は区別していない」
「区別でなかったら差別だね。ヒカルにとっては自分の居る場所が『こちら』でここが『あちら』だけれど、オレにとっては逆なんだよ、ヒカル」
彼は眩しそうに彼女を見つめた。

輝く金髪のルイの瞳は薄い色素の瞳なのに、烏夜のように暗かった。

「そこがヒカルの傲慢なところだと言うのさ。･･･…ヒカルはオレの居る場所に来たことがない。
それなのに、そこは居てはいけないと言う。
晄が強いほど闇も強くなる。
自分の堕とした常闇がどんなに暗澹としているのか、それさえ知らない。
知ろうとして、背中を向けていた闇に目を向けたのは褒めてやろう。
でも『こちら』と『あちら』を切り分けて、自分の正しさだけを主張するヒカルを、オレは責める権利があると思うよ」

「･･･…ルイ」
ヒカルは懇願した。

「そうではない、そうじゃない。ルイは、ルイは･･･」
「シャルルは死なせない。彼の口からオレを後継とすると言わせる。必ず。
そのためにはヒカルがどうしても欲しい。
オレが当主になれば、シャルルが現実から逃れている夏の一時期さえ、与えてやらない。
ヒカルがオレの傍に居ることが、シャルルは一番苦しいから、一生狂っていられるように、こちらから与えてやるのさ、重苦という枷を」
そこまで言ってから、ルイは微笑んだ。

「ああ、奪うしかできないオレでも･･誰かに与えることが出来るんだな」
そう言って笑い声を漏らした。
ヒカルは呆然としてルイの話を聞いていた。

再会したルイは、明らかに･･･常軌を逸脱している言動を繰り返している。
シャルルの奇病に気を取られていたが、ルイは間違いなく･･･人でなくなりつつある。

ようよう、人の姿を保っている。

郭公と言われて。

ヒカルはそうでないと言ったけれど、ルイにとっての自分はその程度なのだと再認識した。

その時だった。

「治せないことはない」
「･･･ほんと？」
「嘘は言わない。彼の薬物治療が効果を出さないのであれば、原因となっている病根を特定すれば･･･その誘導多能性幹細胞（ iPS 細胞）による再生治療を行えば良い」
ルイの研究分野だった。

「無幻症に効くの？」
「どうかな。実験したことないから」
「･････彼の病因が、外的損傷の場合を想定しているのね」
「そう。遺伝であっても遺伝情報を書き換えることが出来る。・・・内的要因にも有効」

「わかっているなら･･･…」
「時期ではない」
「それならいつ、治療するの」
ルイはヒカルの詰問に目笑した。
冷たい瞳が少しだけ歪曲した。

「･･･…ヒカルがオレの妻になった時。シャルルは自分の細胞提供をしないからね。ミシェル叔父に頼んで治療を始める。
･･･彼らは遺伝情報が同じだから、ミシェル叔父から提供された細胞であれば、拒絶反応も可能性が低いし、分化誘導も可能だ」
「どうしてそこで私がルイと結婚することを条件にするの？」
「わからない？」
彼がそう言って笑い声を漏らした。

ルイは単に、シャルルを苦しめるためにヒカルとの婚姻を望んでいるわけではないらしいとそこで初めて気がついた。

「ヒカル。郭公の娘のお前にしか出来得ないことがあるから。
オレが子を成せばミシェルは継承権の地位が低くなる。
彼はそんなことには興味がないけれどもね。
･･･でも、ヒカルの配偶者となったオレが、親族同意書にサインをすれば、ミシェルはそれと引き替えに彼の細胞を提供するだろう」

「親族同意書･･･…」
「言っただろう？ヒカル。オレは･･オレ達はヒカルの細胞が欲しい。
稀なる遺伝子を持った、ヒカルが欲しい。お前の卵子が欲しい。
･･･…これは恋なのかな？こんなに焦がれているよ。
お前の内細胞塊を観察することをね」
彼はそう言って、また微笑んだ。
「ルイ･･･言っている意味がわからない･･･」
ヒカルはルイとは逆に、大きな瞳を見開いたまま、彼に頬を撫でられ続けて居た。

「ヒカル。お前がどうしてアルディ家に滞在し続けることができるのか･･･あのシャルルでさえ煮え湯を飲んだ親族会が、なぜ、お前の滞在を許可したのか・・･･シャルルがどうして、強引な方法でお前の監護権を獲得したのか･･･…そんな簡単な疑問も湧かなかったのか？」
「わからない･･･…」
「ああ、今日のオレは饒舌だな」

ルイは嬉しそうに言った。
狂気の笑いとはこういう事をいうのだと思った。
シャルルが夏のマリナに微笑む様などとは比べものにならなかった。

■102　郭公　後編

「ヒカルの細胞は、万能性がある。
これがわかったのは、パリに移住する前の定期検診の時だ。
･･･幼すぎて、体質が変化することもあるから、経過観察ということになっていた」
「私の細胞が･･･」

「そう。ES 細胞（胚性幹細胞）を融合して複雑な処理をして創り上げたりしないでも良い。
失敗もほとんどしない。
従来の細胞の染色体を取り除いて、DNA を断片する方法を開発した。
特許を取ったあれだよ。

･･･…ヒカルの細胞を使い、酵素で処理すると、容易に確実に遺伝子を染色体ごと取り除くことが出来る」

この処理された細胞とシャルル自身の細胞と融合させれば、万能細胞が作れる。
ヒカルの頭の中で、ルイのいくつもある論文のうち、該当する学術論文がかなり以前に発表されていたことが思い起こされた。

ルイはまた笑った。

「でもね、ヒカル。おまえから取った細胞は古すぎるんだ。
･･･以前、頭を強打して、検査に行かされただろう。
その時にお前の細胞が完成されて変異していないことが確認された。
･･･ヒカルは未成年だったから、まだヒカルの細胞を臨床試験に使うことはできなかった。
倫理規程という、国際条約の厄介な問題にぶちあたってね。
･･･…アルディの使っている医療機器は、すべてヒカルの祖父のクロス・グループから入れているものだったし。
そこの孫娘の細胞を使うとなったら騒ぎ出すだろう。
日本人とは厄介だね。
それで、いろいろと根回しが必要だった。
さすがにオレでも時間をかけざるを得なかった」

「それで･･･私の成人を待つ、と･･･…」
「そう。監護権しかないシャルルは、オレとの婚約を認容する代わりに、成年まで凍結すると言った。
成人したら、後見人登録は抹消される。
ヒカルは自由意思で提供することが出来る。
･･･…お前の細胞を使うことを、誰かが許可する必要はない」

「だったらそう言ってくれれば良い。
婚姻しなくても･･･私は提供したのに」

そこまで言うと、ルイは本当に困った人だね、とシャルルと同じ事を言った。
黙って聞け、と言った。

彼と同じ、薄い瞳で。

「ヒカルの細胞のうち、ごく一部のものしか使えない。
それはアルディ家に入って定期的な提供を義務づけられた細胞が･･･非常に新鮮な細胞だ。
人間の躰の中で最も大きな卵子という名の細胞。
･･･それとも、造血幹細胞が多量に含まれている臍帯血か･･･」

彼女は息を呑んで、ルイの話を聞いた。
彼はヒカルに愛を囁くような風情で、冷淡に微笑みながら、彼女の秘密を明かしだした。

「だから私に子どもを産め、と･･･…」
「代理母でも良いけれどもね。でも臍帯血は使えない」

ヒカルはここで突然明かされた自分のことについて、他人のことのように聞いていた。
彼の流麗な言葉が、頭に入ってこない。

心臓が早鐘を打ち･･･そして理解しようと頭が言っているのに、心がそれを拒否していた。

「･･･ルイ」
乾いた声でヒカルが言った。
「郭公の子どもは、思わぬ副産物を持っていた。
だから、そのまま育てることにした。
･･･シャルルは･･･本当の子が巣から落ちる様を見ながら･･･ね」
「････ルイ」

「ヒカル。オレがなぜ、『今』この話をするのかわかるか？･･･一番効果的だからさ。
そしてお前はこの話を聞けば、ウイと言わざるを得ない。
お前だけが、シャルルを救えると聞いて、お前はウイとしか返事が出来ない」
成人するまで黙っていたのは本当に辛かったよ。
彼は微笑みながらそう言って、ヒカルの心を引き裂いた。

「実証は済んでいる。
後はお前がこの薬指に、オレから贈られる指輪をはめればそれで良い。
ああ、同意書にもサインしてもらうけれどもね」
「ちょっと待って」
ヒカルはルイの言葉を遮った。
「私、卵子を提供してない。それなのに、どうして･･･どうして、私の細胞のうち、その部位が必要だとわかったの。今、ルイは『実証は済んでいる』と言った」
「それは後のお楽しみにしよう」
彼の声がよく響いた。
「全部を教えては･･･郭公は逃げてしまう」
「ルイ！」
ヒカルが叫んだ。
彼が精悍な頬を傾けて、彼女に顔を寄せたからだ。

「･･･ヒカル。オレと寝て。大事にするよ。
･･･そしてオレに福音をもたらしてくれ。
愛はやらないけれど、お前の卵巣に眠る未知なる力は愛することが出来そうだ」
彼はそう言って、ヒカルの頬から、ガーゼを乱暴に引きはがした。
彼女は痛みを感じなかった。
彼の話があまりにも、衝撃的すぎて、痛覚が麻痺していた。

「･･･…シャルルはすべてを知っていた。それでもなお、あいつを愛することが出来るのか？お前自身が愛されていると思ったのか？哀れだな。惨めだな。
･･･そして知らないが故の傲慢さでもってひとり空回りする様を、この一族の者達がどれだけ苦笑して見つめていたか、わかるかな･･･ああ、わからないか。
魯鈍な姫君」

彼はそう言って、ヒカルに唇を重ねた。

･･･冷たい口付けだった。

痛覚は麻痺していたのに。

彼がこれまで重ねてきたどんな口付けよりも、甘く愛おしげで、そして極めて優美だった。

自分の生は、何か意味があると思っていた。
彼の接吻を受けながら、ヒカルは遠くぼんやり考えていた。
それはこのためだったのだろうか。

これまで過ごしてきたシャルルとの生活は、この目的のためだったのだろうか。
確かにルイ・ドゥ・アルディの言うとおりだった。
彼女には選択はなかった。最初から。

「ヒカル。･･･…オレの申し出はウィしか答えがない。
だから聞かない。
･･･…おまえはオレに支配されてそして苦悶する人生しかない。
だから、言っただろう。
業火に灼かれてくれ、と」

ルイは繰り返すことは決してしないのに。
何度目かの言葉を口にした。
そして、彼女の滑らかな方の面輪に愛おしげに唇をあてた。

■103

すり傷だらけの女と同衾するつもりはないよ、とルイは言って、ヒカルを別棟から追い出してしまった。

「ヒカルの要望も実現できる。オレの渇望も。･･･ヒカルの心がけ一つだ」
ルイはそう言った。
ヒカルは無言だった。

威勢の良さはどうしたんだい、とからかうようにルイは言葉をかけた。

「オレはおまえが帰ってくるまでの間、責務を果たした。
今度はお前が義務を果たせ」
そして別棟から押し出されると、ヒカルは部屋に戻るしかなかった。

ルイは言うだけは言ったから、あとはヒカルが選べと言った。
選択できる選択も与えられていないのに、そう言って扉を閉じた。
頬の傷が少し痛んだ。
肉体を打擲されるより、彼女は衝撃を受けていた。
鼓動が早くなったり、耳鳴りがするという程度を越えていた。
人間は、限界を超えると平常になる。
それを更に越えると、もっと静寂に敏感になる。

そう思った。

彼が何を言っているのかを整理する暇もなかった。
自分は彼に質疑応答を繰り返していたから、わからない程度ではなかったはずだ。

でもそれは自分のようであり、そうでない気がした。
別の誰かが受け答えしているかのように感じていた。

･･･…自分がなぜ、アルディ家にやって来たのか、合理的な理

由がなかった。
彼は嘘をつかない。

すべては離さないが、決して確信のない話はしない。
だからあの話は本当なのだ。
広大なアルディ邸の庭で迎える夜は寒かった。
夏の夜だったのに、暑さを感じなかった。
夜風がかえって寒いくらいだった。

･･･…酷く疲労困憊していることだけ感じていた。

ルイが徐々に自分を追い詰めていく。
シャルルを追い詰めていく。

彼女の言葉は彼には届かない。

この家の人たちには、彼女の言葉は届かない。

そう、思った。

無声映画の様に、彼女の唇から発せられる叫びも嘆きも祈りも、音波となって彼らに届くことはない。

確かに。

心当たりはあった。

年に2 回の健康診断、頭を強打したときに行った病因では一般外来ではなかった。
研究棟に足を運んだこともあったし、血液検査だけでない組織採取も行ったことがあった。

でもそれはアルディ家に住まう者がみな一様に受けているものであったし、それが「普通」だと思って彼女は育った。

しかし騙されたとは思っていない。
シャルルは彼女を慈しんでくれた。
今も･･･そうだ。

戻って来てはいけないと言ったのに彼は静かにヒカルを見た。
―――ヒカルと呼んだ。

胸から込み上げる何かを感じて、ヒカルはそれまで彼女の体を包んでいた静寂という名の膜から抜け出たように、深く息を吸った。

シャルルのことを思い返すときだけ、彼女は深く息を吸うことが出来る。
爽涼な空気を肺に吸い込んで、そして切なすぎて思い出すことをやめてしまっていた、フランスの華のことを思い出す。
彼のための薔薇を、いつまで、摘めるだろうか。
彼女の今回の滞在は長期を予定していない。
少なくとも、戻る場所は今は日本なのだ。

ここではない。
ここではないどこかに、彼女の還る場所がある。

いつか、そこに行き着くことができるように。
そう言い聞かせて生きてきた。

私には‥還る場所がない。

だから作ろうとした。

ヒカルは今夜も眠れそうになかった。
パリに来て、彼女には静穏な夜はなかった。
酷く‥酷く心細かった。

自分の生の意味について、彼女なりにこうだと思っていたものを打ち砕かれてしまった。
自分がここに居るのは、こうしてシャルルやルイと出会ったのは、きっと意味があると思っていた。

その意味は、人それぞれだけれど、彼女が関わることで彼らに何かをもたらすことが出来るのだと信じた。

‥‥信じていたかった。

しかしそうではない意味について、ルイが明かした内容は、とてもヒカルが考えていた者とは違っていた。

そしてそれは間違いようもなく、ルイの言うとおり、誰もに福音をもたらすのだ。

‥ヒカルが承諾すれば。

彼女がアルディ家に入れば、クロスの家は彼女を後押しするために、高度医療機器の提供に乗り出すだろう。

それにジェネリック（後発医薬品）の問題についても、解決してくれるはずだ。
大きく再生医療に貢献することができる。
アルディ邸の庭園に点在する電灯に、羽虫が群れていた。
夜も深まっていて、そして電灯の光に吸い寄せられる蟲を眺めながら、その小さな命達が決してくれることの出来ない晄に群がる様をしばらく見つめた。
あれは、ヒカルそのものだ。

叶えられない夢に向かって、自分の羽が灼かれるとわかっているのに、晄に集う。
彼女の事を郭公だと言ったルイは、真実を言ったまでだった。

獣ではないのに。

シャルルは獣ではないのに。
ヒカルも人間なのに。

ルイには、そう映っていなかった。
少し悩んで、ヒカルは部屋に戻る前に、シャルルの容態を確認することにした。
今は看護師が待機しているだろうから、彼の肉体的異変には対応可能だろう。
でも･･何年ぶりかに会ったシャルルがどうにも心配だった。

漫歩する気にもなれなかった。
今夜も眠れなさそうだった。

■104

彼が起き出さないように、そっと、近づいた。

夜遅く男性の部屋に忍び込むなんて、と昔のシャルルなら優しく言って窘めただろう。
でも、今日は、彼にもう一度会わないと眠れそうになかった。
ルイが言ったように、シャルルはそれだけでヒカルを育てたとは思いたくなかった。

我が儘を許して、シャルル･･･

ヒカルはそう呟いた。
彼の私室に通じるドアは、入り口があり、控えの間や支度の間としても使っている、やや小さめの部屋を抜けてその奥にある。

大きなガラス張りの窓から月の晄が差し込む部屋で佇むシャルル・ドゥ・アルディの姿に、幼いヒカルは何度も何度も見惚れたものだった。

彼の白金の髪が月光を受けて、煌めくその姿は太陽のような金髪のルイと違った輝きを持って居た。

哀しみも苦しみもすべて受け入れた者の晄だった。

だからヒカルはその光彩を見ることが･･彼女がそれを赦されたことが何より嬉しかった。

部屋は片付けられていた。

きっと、乱れた執務室も、この部屋も、ミシェルの指示で元通り復元されたはずだった。

でも煙草の香りが消えていなかったし、彼女が先ほど持ち込んだ薔薇も、花瓶がないと戸惑ったことから、長らく活けられていなかったのだと思った。
そしてヒカルが知らないうちに、この館を出て行った夏のマリナの残したものは跡形もなく消え失せた。

少しだけほっとする。
どんなに彼があの人を愛しているかを知ったとしても、それは彼の運命の人なのだから、当然だと思っていた。

でもルイが言ったとおりだった。

シャルルが、もう二度と会えない人を愛し続けるから、ヒカルは平穏でいられたのだ。
それが自分の母であったとしても。
でも、あの人を愛するあまり。

もっとその他の様々な理由で、シャルルは一時の短い期間、マリナと別の者を呼び習わす。
そして乱れて狂ってそして傷ついて戻ってくる。
彼のそんな孤独な路を知らなかった。

いつも夏が終わると微笑んで‥「おかえり。みんなには会えたか」と言って出迎えてくれた。
ヒカルが出発する朝は、彼は朝が弱いのに、最高の状態の薔薇を彼女のために摘む。
そして無邪気に「行ってきます」と「ただいま」を繰り返すヒカルを、どんな風に思って見つめていたのだろうか。

それを思うと苦しくなった。

自分の価値について考えたことがなかった。
でも、シャルルに、自分が何か関わることが出来るのであれば、彼女は喜んでそうしようと思った。
自分の心思を伝えるには‥・言葉では駄目だと思った。

彼らにヒカルの言葉は伝わらなかった。

それはヒカルが「こちら」側に居るからだ。

「･･･…シャルル」

長らくの習慣で、彼女は扉の前で軽くノックをした。
返事を待たず、彼女は重くて厚い扉を開ける。
先ほど、薔薇を摘むために出て行った扉だった。
彼女だけが開けることを許された扉を開けた。

「まだ、眠ってないの？」
「目が醒めた」
「････もう休んだ方が良い」
シャルルは起きあがっていた。

軽い睡眠を取った後だったので、彼の顔色はかなり良くなっていた。

「･･･…睡眠の取りすぎはかえって朦朧とする」
「昼夜逆転の生活は良くないわ」
「活動時間が日光の照射の有無で決まるわけではないだろう」
･･･ああ、いつものシャルルの口調だ
ヒカルは微笑んだ。

茶色の瞳で、茶色の髪を揺らしながら。
彼女は淡く綻びる。

「･･･今日は何日？」
シャルルは体を起こしながら、手元にローブを引き寄せて羽織った。
どうあっても起きあがるつもりらしい。

ヒカルは彼のベッドに近寄って、介助しようとしたが、シャルルに「必要ない」と言われて数歩後ろに下がった。
ヒカルは今日の日付を答えると、シャルルは美しい横顔を少しだけ厳しくして「もうそんなに･･」と呟いた。

「ヒカル。来訪には相応しくない時間だから、もう寝なさい。･･･傷も痛むだろう」

彼はそう言って、彼女を見た。

青灰色の瞳がヒカルを捉える。

ヒカルはルイにガーゼを剥がされた傷跡を、シャルルが見ていることに気がついて、ごめんなさい、と言った。
「どうして謝るの？」
「だって」
そこまで言って、彼女は口をつぐんだ。

ヒカルは自分がいつから来ているのか、彼の何を見たのか言っていなかった。
彼女は努めて明るく笑った。

「･･･今、少しだけ、心配したでしょう」
「少しどころではない」
彼はそう言って笑った。

「どうやったらそんな場所に傷を作ることが出来るのか、ノウハウを教えて欲しいくらいだよ」
「タックルするとできる」
ふたりは顔を見合わせて、少しだけ微笑んだ。

「ああ、ヒカル･･･大きくなった」
その言葉に、ヒカルが唇を震わせた。

急速にこちらに戻りつつあるシャルルを、どう受け止めて良いのか思案した。
「そうね」
彼女はそれだけ言うと、シャルルと距離を詰めた。
「忘れていたわけではないわ･･･長らくの無沙汰を許して」
「許すとか許さないとかいう問題ではない」
シャルルはそう言って含み笑いをした。
先ほどの狭間を彷徨うシャルルはもういなかった。

彼が触れない限り、あの「夏のマリナ」については話すつもりはなかった。

「大きくなった、って言い方も不適切よ。私は成年になったの。
自分で決められることが随分増えた」

この家の当主は、じっと、彼女を見つめて、そして言葉をかけた。
美しい微笑みだった。

年齢を経たのに、彼は昔とほとんど変わっていなかった。

「･･･奇麗になった」
「ありがとう」

最高の賛辞に、ヒカルは少しはにかんだ。
彼女はいつものとおり、シャルルに近寄って顔をのぞき込んだ。
彼女がよくやる仕草だった。

･･･それは彼女の母のあの人もよくしていた仕草だった。

あの人は非常に小柄だったので、長身のシャルルの顔をのぞき込まないと表情がわからない、
と言った。

ヒカルは小柄な方ではないが、シャルルの目線と合わせたいの、と言って、シャルルが俯くといつもそうやって顔をのぞき込み、距離を詰めた。
「ヒカル」
シャルルは低く、彼女の名前を呼んだ。
また、引き戻されそうな感覚に襲われる。

「･･･…傍に寄るな･･･」

眉根を寄せて、シャルルは低く警告した。
こめかみを押さえて、彼女に背を向ける。

大人になったヒカルを見て。
シャルルは眩暈がしそうだった。
あの人そのものだった。
良く似ている、というものではない。
生き写しだ。

まるで何かの作用が働いているかのようにヒカルは、彼女にとても良く似ている。
シャルルは彼の名を心配そうに呼ぶ、ヒカルに背を向けた。

ヒカル･･･君は･･･眩しすぎる･･･…

■105

大人になった彼女を見て、急激に「こちら」に引き戻された。

あのとき。

ヒカルが、シャルルの名前を呼んで、彼にしがみついたとき。
彼は引き戻された。
強引に。
地面に激しく体を打ち付ける瞬間、あのマリナの悲鳴より、ヒカルの声が響き渡った。

「シャルル…･･･戻って来て。こちらに来て。
あなたを失いたくない。だから来て！」

間違えようもない、聞き覚えのある声が彼を引っ張り上げた。

仄暗い滓の混じった闇から、急速に明るいところに呼び戻された。

意識はそこで一度閉じられて、ふたたび目を開けたら、ヒカルが居た。

大人になったヒカルが･･･

満身創痍で頬には傷を作っていた。
そんな彼女は、あの人の若い頃にそっくりだった。

何も顧みず、何も見返りを求めず、ただ「今」を生きたあの人そのものが、そこに居た。

彼は混沌とした闇から戻って来たばかりだったので、少し思案して、そして彼女に言った。

「･･･君からのキスが欲しい」と。

次にあの人の名前を言った。

でもそれは間違ったのではない。
誤認混同したのではない。

･･･…あの人に、謝ったのだ。

あの人には愛を落としたかった。

でも、ヒカルには。

あの人に酷似したヒカルには、愛をねだった。

そこで彼は完全に覚醒した。
ヒカルが良いよ、と言って唇を合わせる直前のことだった。

･･･ヒカル、駄目だ

彼はたじろいだ。
ヒカルが良いよと言うと思わなかったから。

そして自ら懇願したのに、ヒカルにやめろと言って制止した。

なぜなら･･なぜなら、彼は、別の女と体を合わせて、唇を重ねたその穢れた肉体で、ヒカルにキスをねだったから。

彼女は幼い頃からともに居た。

でも彼女にねだる行為をするなんて、と自分の稟性を疑った。

卑しい行為に、彼の誇り高さが目を醒ませ、と急速に彼の脳細胞を活性化させた。

息子のルイより歳の下の少女に･･･彼はすがったのだ。

ヒカルの清麗さが眩しすぎる。
再会を喜ぶ暇さえなかった。
彼は、ヒカルを間違えなかった。
それが何を表しているのか、彼はよくわかっていた。
だから･･･…

だから、彼は奇行と言われる奇妙な精神疾患を受け入れた。
この病の研究や、薬を開発することをしなかった。
そしてヒカルに隠し通すことにした。

わかっていたから。

どんなに狂っていても、ヒカルを間違えることは決してしない。
シャルル・ドゥ・アルディの名前にかけて、間違えない。
あの人によく似た容姿の女を侍らせても、決して癒えない。
遠ざけたのに。
このまま、戻ってこなければ良いと思ったのに。

‥夏になると、彼は焦がれてまた無幻に陥る。

その時にはいつも‥

ヒカルが傍に居てくれれば良いのに、と。
彼女がすべてを受け入れてくれれば良いのに、と。

いつもそう思いながら闇の中を漂っているシャルルに、ヒカルが呼びかけた。

「来て」と。

シャルルは「行け」と言った。
もう戻ってこないで、自分の路を行け、と言った。

それなのに、ヒカルは。
あの晄の少女は、「来て」と言う。
自分が晄の側に居ることを承知していながら。

ひょっとすると、シャルルがその光源に灼かれてしまうこともあり得るのに。
彼女は「来い」と言った。
こちらに、来い、と。

「シャルル‥‥…」
ヒカルが背後からそっと声をかけた。
シャルルは彼女の声に、肩を震わせる。
ずっと聞きたかった声だった。
ああ、オレはもう狂っているのかもしれない。
遂に醒めない夢を見続ける時が来たのかも知れない。
こんなに‥‥こんなに近い場所から声が聞こえる。

あの人の声であり、あの人の光の子の声でもあった。

「泣いているの？」
「･･･いや」
彼はまだ彼女に背を向けていた。
たとえ挨拶でも。

彼はまだこの日の朝には、ヒカルでない別の者をこの褥に招き入れて、快絶の瞬間を味わっていた。
そんなシャルルに触れるなという、彼の拒絶だった。
彼女の光波は、彼を蝕んでいく。
酷く憔悴させる。
彼を切なくさせる。

自分がシャルル・ドゥ・アルディでありながら、娘のような歳の娘に焦がれていることを、知られてしまう。

「･･･涙を流すだけが泣くという行為ではないでしょう」
彼女は静かにそう言った。

それは昔、シャルルが「回答はいつか」と保留にした命題だった。
ヒカル。
彼は彼女に背を向けたまま、上を向いた。
堪えきれない何かがこぼれ落ちそうだった。
涙だけでない、もっと別の「何か」も。

■106

その時のことだった。

ヒカルが･･･

ヒカルがそっと彼の背中を抱いた。

彼女が広くて逞しいシャルルの背中に触れて･･･回りきらない胴囲に彼女の白く若いしなやかな腕を巡らした。

そして･･･…彼の厚手のローブをぎゅっと握った。

ローブがもし薄かったら･･･彼女の体の様子がシャルルにはわかってしまうくらい、それほど彼女はシャルルに近づいた。

「･･･…ヒカル、離れろ」
「･･･いや」
くぐもった声が、背後から聞こえてきた。

シャルルは目を瞑った。
背中から彼女の体温が伝わってくる。

胸の前で花咲くヒカルの白い掌の拳が、どうにも彼を遣る瀬無くさせる。
彼女は頬を彼の背中に押しつけた。

この吐息が彼に伝わらないと良いのに、と思う一方で、彼に言葉を経ずしてシャルルに伝わればいいのに、と思った。

「二度は言わない･･･離れろ、ヒカル」
「･･･…何度でも言う。･･･いやだ」
シャルルは溜息をついた。

彼女の豪儀さは今に始まったことではないのだが、それでも･･･久しぶりの再会の直後の態度ではなかった。

シャルルは極力感情の抑揚を抑えて･･･彼女に語りかけた。

完全に覚醒していた。

「ヒカル」
彼は永遠の晄の名前を呼んだ。

「シャルルが泣いている。シャルルが苦しんでいる。
だから私ができることを･･･したい」
「･･･駄目だ。明日にはここを離れろ」
「いやだ。私はシャルルの傍に居る。シャルルの傍が良い。
･････何度も言わせないで」

それは彼女が幼い時に言った言葉だった。

以来、彼女は常にシャルルの傍に居た。

シャルルは息を止めて･･･そして大きく息を吐き出した。
肩を大きく上げて、ヒカルの掌から逃れるように、彼は一歩前に出た。

「･･･いやだ」

「成年になったというのに、さっきから同じ言葉しか繰り返せないのかな」
シャルルは苦笑してヒカルに諭した。

「ヒカル。･･･…何がヒカルをそうさせているのか、よく考えてご覧。
そうしたら･･･自ずと答えが出る」
「･･･…」
シャルルは少し間を置いてから、ヒカルに言った。

互いに互いの顔が見えない状態で、シャルルは彼女に言い含めるようにゆっくりと話しかける。

「･･･ヒカルは戻って来た。これはヒカルが成年になって･･･ルイとのこれからを考えるためだ。
それ以上はない。君が日本でじっくり考えた結果だから。

―――ヒカル。

大人になるということは、自分で自分の出した結論に責任を持つことだ。
･･･そしてそれは決して覆せないし、誰かを酷く傷つけることもあるということを承知の上で決断しなければならない･･･」
「わかっている」
「理解できていないから言うんだ、ヒカル」
彼は静かに････ただ、静かに言った。
胸の前の白い拳を、優しく撫でる。

愛おしい、彼がずっと見守ってきた永遠の晄が、今、惑っている。

「ルイは一度誓ったことは必ず守る････」
「シャルル」
ヒカルがシャルルにしがみついた。

彼女の力は強くなかったのに、シャルルは絡め取られる錯覚を感じた。
絡められる･･･ヒカルに･･･ヒカルという晄糸に、縛られる。
そう思った。

今までまったく感じなかった、馥郁を彼女から感じる。

ああ･･･彼女は大人になった。

憂いを知り、他人の憂いを知り･･･そして････自分の秘密を知ったに違いないと思った。

だから嫌だと彼女は繰り返す。

それを受け入れられないのではなくて、受け入れなくてはいけない現実を、彼女は理解しているから。

「シャルル･･･私は自分の路を自分で決める」
「そうだね、それが成年になることだ」
「･･･だから。これから私がすることを許して欲しい」
「･････君が何をしても、オレの君に対する畏愛は変わらない。
･･･…常に愛しているよ、オレの天使。
･･･彼らに托された永遠の晄が輝けるようにするのが、オレの役割だ」
「それなら」
ヒカルは彼の背の上で囁いた。

「それなら･ ･･…それなら、私と･･･」
「ヒカル」
最後まで言わせることが出来なかった。
シャルルはヒカルの言葉を遮った。

「駄目だ」
今度は彼が拒絶をする番だった。

「シャルル･･･…！」
ヒカルが叫んだ。

静かに･･でも細く切れ切れの様から、彼女が涙を堪えて叫んでいると思った。

ぎゅっと、握られたヒカルの掌に力が入った。

「ヒカル･･･…？」
「お願い、このままで･･･」
ヒカルは言った。

顔が見られないから、シャルルの経年した姿や、あの夏のマリナに微笑む様を思い出すことはなかった。

彼女の中では、いつも･･いつも、最初に出会ったシャルル・ドゥ・アルディの姿だけが刻まれていた。

■107

彼はいつも優しかった。

そして美しく誇り高く、「フランスの華」という美称に相応しい人物だ。
その彼が、困ったように、年端もいかない若い娘を宥めていた。

ヒカルは堪えきれずに唇を噛んだ。
堪えたはずなのに、嗚咽が漏れる。

泣かない、とあれだけ自分に言い聞かせて生きていたのに、
シャルルを目の前にして、彼女は耐え難い堪えられない気持ちを、押しとどめることが出来なかった。

深く動揺していた。
彼が自分を利用していたとは思えない。

思いたくない。
思ってはいけない。

あれほど･･･あれほど幸せで美しくて静かな時間が作られた虚構の城のだとは、とうてい思えなかった。

シャルル・ドゥ・アルディは、溜息混じりに彼女の名前をもう一度呼んだ。
優しく、静かに、慈愛を込めて。

「私は大人になった」
「そうだね・・・そしてヒカルは泣き虫になった」
「そうかな」
「ああ。間違いない。･･･頬の傷に沁みるよ」
彼は優しくそう囁いた。
彼女が涙を流しているのがわかったから。

あやすように、彼女の掌を、上からそっと包み直す。
彼女の指先はところどころ爪が割れていたし、手の甲も擦り傷が出来ていた。
…彼を呼び戻すために、彼女が創った犠牲の傷だった。
シャルルは眉根を寄せて、青灰色の瞳をそっと伏せた。
「・・・愛しているの」
「オレも愛しているよ、君は永遠の天使堕････。
　今度は本当の家族になる。間もなくだ」
「そうじゃない！」
ヒカルが啼哭した。
そうじゃない、と繰り返した。

「シャルルはわかってるんでしょう」
「……」
「わかっているんでしょう」
彼が永遠の晄と呼んで常に愛おしんだあの人の娘が叫んだ。

「私はシャルルが良い。シャルルの傍が良い。
良いよ、私が役に立つことがあれば、なんでもする。
細胞だって何だってあげる。髄液でも血液でも卵巣でも何でも持って行けば良い。……でもルイとは結婚できない。ルイと結婚しないとシャルルを治せないのなら…」

「―――ヒカル」
そこまで彼女が言ったとき。
シャルルの声音が変わった。

厳しい低い声で、彼が彼女の名前を呼んだので、これまでのヒカルを慰撫するための声様でないことに気がつき、ヒカルは口を閉ざした。

「待て…ヒカル。その話……」

シャルルが振り返った。

背を向けたのは彼なのに、彼から彼女に向き直った。

…ヒカル。

改めて、彼女の姿を眺めた。
涙が茶色の目にたくさんたまっていた。
年齢を経た彼女は、父親譲りの、くせの強い髪はそのままに、色素が薄くなって、ますます‥あの人に似てきていた。
彼女がシャルルに飛び込んできたとき。
夏の強い陽射しに髪が照らされて、金色にも榛色に見えた。
髪が乱れて、白い顔が飛び込んできて、本当に…本当に天使が来臨したと思った。

その彼女が、今、こうして現実に居る。
堪えながら、彼に懸命に告げている。
どうにもならないほどの矯激をシャルルは今、受け止めることができそうになかった。

しかし、彼女の言葉に面を厳しくする。
「ルイに聞いた。ルイは嘘をつかない」
ヒカルは目に泪をためたまま、唇を震わせて言った。

大粒の涙がひとつ、こぼれた。

・・・・ルイ。

シャルルはかっと頬を赤くした。

激昂を抑える程には彼の情緒は回復していなかった。

許し難いと・・・彼の中の激しい感情が、赫怒の制御を放棄した。

彼女は泪を堪えながら言った。
まるで少女のように涕泣した。

大人になったはずなのに、人前で滅多に泣かなかった少女は、退行しているように‥‥大人になったのに泣いていた。

彼が少年に戻るのと同じように。
ヒカルはこれまで流さなかった涕涙を落とし続けた。

「シャルル…シャルル…‥」
彼女は慟哭した。

もう、何を泣いているのかわからないこどものように、泣いた。

そして彼の胸の中に飛び込む。
シャルルの肩が大きく動いた。
ヒカルはシャルルにしがみついて泣いた。
「シャルル、私がいらなくなったの？私はあなたの役に立てな
いの？私は傍に居てはいけないの？私は…私は……いつまで
たってもあなたに幸福をもたらすことが出来ないの？」
「ヒカルが不要だからオレが遠ざけたと思っているのか？‥あ
れほど説明したのに」
ヒカルがまた大きく慟哭した。
完全に情緒不安定になっていた。

■108

今度は彼女の白い掌の花弁は、シャルルの背中に咲いた。

シャルルは茶色の髪が自分の胸の中で細かく激しく震えるのを見つめていた。

…この様子からすると、先ほどルイと話をしてきたのだろう。

彼の靄がかかっていた頭が次第に鮮明になっていく。

そして隅々まで、玲瓏になっていく神経のひとつひとつを実感しながら、彼は激しい腹立ちを覚えていた。

ルイが痺れを切らして、ヒカルに早く婚姻を済ませて、生体実験させろと言ってきたに違いなかった。
ルイはシャルルの遺伝子治療をする気はさらさらなかった。

彼はただ…彼女の持つ稀なる細胞を使って、巨万の富にも神への冒涜にもなり得る行為を、はやく再現したかっただけだ。

「ヒカル……」

しゃくり上げて泣くヒカルの背中を緩く抱いた。
彼女は彼の背中に腕を回しきることが出来ないのに、シャルルは彼女の背に腕を回してもなお余った。

少女期特有の、中性的な少年の様な体つきが変化し、完全に女性になっていた。
丸みを帯び、甘やかな香りが漂う。

彼女の色素はますます薄くなり、4 分の1 だけでも東洋人でない、父方の、シャルルと同じゲルマンの血が混じっていることを示していた。

大きな切れ長のアーモンド方の瞳に、黒目がちのよく動く瞳からいくつも泪を流す。

茶色の髪は背中まで伸びて、色素が抜けていた。
白い肌理の細かい肌に、若々しい肢体。

あの日を思い出す。
あの人を思い出す。

無理に口付けをして酷く怒られたことや、彼女がシャルルを好きだと言った時のことや…

彼は夢を見た。

夢を見ないのに、一生分の夢を見た、とあの人に言った。

そして以来、夢を見なくなった。

その代わりに、無幻症に陥った。

夢ではなく創り出される幻に彷徨った。

・・・・彼の活性化されつつある脳は、ありとあらゆるあの人に関する記録を抽出していく。

ああ、ヒカルは大人になった。
けれども、こんなに華奢なのだ……

確かに良く似ているけれど、あの人ではないヒカルがここに居る。
そしてそのことから、彼は判知する。

自分の遠い日の青春の輝きは確かにあったことを。

そして彼の想いは成就せず、成就しないことを彼は受け入れたということを再認識する。

「シャルル。お願い。答えて。私は…私はあなたの…晄になれなかったの？」
「永遠の晄とオレが呼ぶのは、君ひとりだけだ、ヒカル」
彼は強く言った。

そして彼女の頭をゆっくりと撫でる。
「落ち着いて…ヒカル、酷い顔色だ。…少し休んで明日話そう。
それでも遅くはない」
「いやだ。眠れない。私は何にも知らない。知らされていない。
私は…私は一体、何？
何のために生まれてきたの？何のためにシャルルに出会ったの？
何のために…何のために生きているの」

ヒカルは号泣を鎮めることができずに、そのまま、悲鳴の様な呻吟を重ねていく。

「シャルル。シャルルは最初から‥最初からこうなることを知っていたの？
だから私に帰ってくるなと言ったのね。
……だから成年になるまですべてを凍結したのでしょう？
間違っていないはずよ。
…未成年でも結婚すれば擬成人になる。
それなのにシャルルはそれを推奨しなかった…どうして、
どうしてなの。
私をどうしたいの。
私はどうすれば良いの。
私は…なぜ、生きているの」

おかあさん、おとうさん、と言って彼女は泣き叫んだ。

なぜ、連れて行ってくれなかったの。
なぜ…私はひとりなの。

彼女は我を失っていた。

一度枷が外れてしまった感情が、止めどもなく溢れてくる。
シャルルに会ったということがそれに拍車を掛ける。
これまで秘めていた、彼女の胸のうちが音を立てて氾濫していく。
「ヒカル、ヒカル」
シャルルはそう言って、彼女の頭を抱えた。
彼の温度が伝わって鼓動が、押し当てられたヒカルの白い額から彼女の中に響いていく。

「私は郭公じゃない。獣じゃない。そうじゃない」

彼女の繰り返す言葉から、シャルルは深く息を吸った。

激昂で…彼女を今、鎮めなくてはいけないいう第一優先事項がなければ、すぐさま、ルイのいる別棟に行って、今度こそ・・・

彼を動けなくするくらいのことをしかねなかった。

怒りのあまり、彼は細く長い指を鳴動させる。

ヒカルの髪に埋もれている掌がかっと熱くなった。

ルイが何を言ったのか、大体推測がついた。

そしてその言葉に、ヒカルが深く傷ついたことも。
動揺を通り越して、ヒカルはショック状態に陥っていた。

今、彼女に何を言っても聞こえなかった。

ただ、こうして抱きしめているだけのことしか為す術がなかった。

シャルル・ドゥ・アルディなのに。

彼は…小さな、彼だけの永遠の晄が、眩しくて眼を反らした。
その晄が慟哭して、煌めきが揺らいでいる今だからこそ……どうしても伝えられなかった。

言えば、自分は我を忘れてしまうから。

彼女は「来い」と言った。
晄の側に来いと手をさしのべた。

そして彼を暗闇から引き上げた。
だからそのヒカルにともに墜ちてくれとは到底言えなかった。
言えば自分だけでなく、ヒカルも陰火に灼かれる。
そして二度と戻れない路に墜ちる。

誰にも必要とされていない、生きている意味がわからない、なぜここに存在するのかわからない、と嘆く彼女が、シャルルに求める言葉はひとつだけだった。

でも、その言葉を言ってしまえば、この瞬間は救われるかもしれない。
それでは駄目なのだ。

彼女はそれでは一生救われない常闇に墜ちる。

黒闇地獄に陥る。

自分だけなら良い。
この薔薇の一族が滅ぶのなら、それでも良い。

しかし、ヒカルは…ヒカルだけは…そうあってはならない。

■109

「ヒカル。…順を追って説明するから。
だから、落ち着いて聞け」

「いやだ。シャルル。……私はもういやだ。もういい。
もういいよ。……シャルルの傍に居られない。私の言葉は届かない。
これまでの記憶はみんな返す。みんなシャルルに返す。
このからだが必要ならあげる。もういらない。

だから、シャルルは解放されて…‥！」
シャルルは言葉を失った。

ヒカルはここまできて、それでも他人を慨している。
涙となってこぼれ落ちる嘆き憂えは、ヒカル自身のためだけではなく、シャルルへ向けられている。

「ヒカル」
彼が声をかけたが、ヒカルはただただ哀哭するばかりだった。
シャルルは彼女の肩に手をかけた。

彼女の体は満身創痍だった。
薔薇園での転倒によるものだ。
シャルルにもいくつか擦過傷があったが、ヒカルは比べものにならないくらい多かった。

…自分の身を護らなかった結果だった。

彼にしがみついた瞬間、彼に体重がかからないように身を捻ったのだ。

咄嗟に。

自分を省みずに、彼女は彼をかばった。

幼い、日本語もろくに話せなかったこどもが、今、こうして彼の胸の中で、泣いている。
厚手のローブを着ていたのに、湿り気を感じた。

ヒカルの涙だった。
彼はヒカルの肩にあてていた掌に力を込めた。
しかしそれはルイのそれとは違った。
彼女の傷をかばうように。

それでいてこの上なく愛おしい者を引きちぎる苦しみに苛まれながら、シャルルはヒカルの体を離した。

シャルルは軽く彼女の頬を…傷のない反対側の頬を打った。

「…‥……」

「ヒカル。聞こえるか？」
シャルルはよく響く静かなテノールで、ヒカルに呼びかけた。

彼女は頬を打たれて、目を大きく見開いていた。

自我を失って居る状態には、ショックを与えることで、ヒカルは茫然自失状態から復帰した。

「…‥…ごめんなさい」
ややあって、彼女は小さく言った。

この間があまり長くないことをシャルルは確認すると、満足そうに頷いた。

ヒカルは……俯いて、羞恥に顔を朱に染めた。

「落ち着いたら話そう。今日は駄目だ。‥…感情的になり過ぎる」

互いに、という言葉をシャルルは省略した。

はい、とヒカルが言った。

彼女の汀優り（とりわけて優れた様子）の様に、シャルルは少しだけ頬を緩めた。

「今日は休め。明日話す。それで決まりだ。さ、……行け」
ヒカルが頷いた。
顔を下に向けたままだった。

「ヒカル。君は笑顔が一番似合う。
そういう表情は覚えなくて良い」

シャルル、でも、私はもう子どもでは居られない。

彼女はそう思ったが、今しがたまでの自分の取り乱しようを思い出すと、そう言い返すことが出来なかった。

所詮、何が「こども」で何が「おとな」なのか区別さえ出来ない自分はまだまだ…シャルルに遠く及ばないのだと思い知っただけだった。

「……ごめんなさい、シャルルも疲れているはずなのに…邪魔をしたわ。遅く時間までごめんなさい……」

何度も謝罪して、ヒカルは部屋を退出することにした。
背中を向けても、シャルルの視線を感じる。
涙を手の甲で拭きながら、彼女は悄々としてその場を引き上げることになった。

…シャルルは彼女を引き留めなかった。

腕を組んだまま、じっと、ヒカルが部屋を出て行く様を見つめていた。
その物憂げな、上品だけれども冷淡さを持った瞳は、すでに違うことを考えていた。

ルイのことだ。

もう、放置してはおけない。

彼は溜息をついて、白金の髪をかき上げる。

そしてシャルルはヒカルが出て行くときに囁いた、彼に聞こえるか聞こえないかの言葉を思い出していた。

————どうして私じゃ駄目なの？

彼女はぽつりとそう言った。
ヒカル。

そうではない。

ヒカルの代わりは居ない。
あの人の代わりが居ないように。

どれだけ言いたくても伝えてはいけないことがある。
どれだけ見つめても、叶えてはならない願いがある。

それを知ったとき。

オレが言った意味が、いつかわかるときが来る。
荊棘の路は一緒に歩めない。
血を流すのはオレひとりで良い。
道連れはもっと…別に居る。

ああ…

どうして、こんなに離れていることが出来たのだろう。
こんなにも愛おしいのに、彼女の光が強すぎて……シャルルは言葉を失った。
ヒカルが彼女の母と同じ年代を過ごす様を見ていたくなかった。
だから彼女を国外に出した。

それなのに……彼女は戻ってきてしまった。

そして、あの人がかつて、長い眠りから彼を呼び覚ましたように。
ヒカルは、長い年月ですっかり彼を蝕んでしまっていた無幻状態から、彼を呼び戻してしまった。

薬も万能細胞による遺伝子治療もなく…

ただ彼にしがみつき、傷ついて、一言叫んだだけなのに。
ヒカルは……その晄だけでもって彼を呼び戻した。

晄の場所へ。
シャルルは深く息を吐き出した。
酷く疲れていた。

……彼の夏は終わった。

今年の夏なのか、それとも長らく過ごした悪夢のような夢幻のような、そんな空間から脱却したという意味なのか、彼自身が判別しかねていた。
ただ、言えるのは。

この夏が……
毎夏と違うこと。
ヒカルの居ない夏と同じではないこと。

そして……ルイを激しく殴打した、狭間を彷徨った、あの夏ですらないことだけはわかっていた。

■110

ヒカル・クロスが瞳を閉じて、ほんの一瞬瞬きをしたと思った次の瞬間は、実際には翌日の夕暮れも過ぎた頃だった。
時間も日付も、一瞬わからなくて、自分は明け方に目が醒めたと思った。
しかし、自室のベッドに横たわったのがすでに日も高くなってからのことだったので、それもあり得ないだろうと思った時。
シャルル・ドゥ・アルディが「明日話す」と言っていたことをすぐさま思い出した。
覚醒の合図の言葉のように。
彼の声韻は、常に彼女の「何か」を呼びさます。
それは記憶であったり…自分で意識していなかった感情であったりした。

湿り気の多い日本の夏夜にあわせて短期滞在の予定で用意した寝間の袷はごく薄い。
見ると、汗で濡れていた。

勢いよく起きあがる。

―――寝過ごした

パリに来てからはずっと睡眠不足だった。
そして精神的にも張り詰めていた。
彼女が安堵のために深い睡眠に陥ったということではない。
ヒカルの体を包む深い残疲感から察知する。
自分はどこで何をしているのかを一瞬だけ忘れた瞬きの瞬間とも言える交睫は、ヒカルを少しも癒さなかった。
重い体を急激に起こす不快感は…シャルルは何度も何年も味わっていると思った。
豊かな睡眠を彼が味わっているとは思えなかった。
夏の狂乱期には彼は睡眠導入剤を用いているし、その他の‥ヒカルの知っているシャルル・ドゥ・アルディは常に浅い眠りしか知らない人物と記憶している。
朝はあれだけ弱いのに。
彼は、深く睡眠状態に陥ることを躊躇っているように思えた。
シャルルは夢を見ない。

そしてヒカルは…どうなのだろう。
夢を見ることもあるような、ないような気がした。
自分の願望が表現されるという邯鄲の夢の世界で、ヒカルは「叶えたい夢」というものを持ち合わせていなかった。
…穏やかに過ごせれば良いのに、という希望は持ち合わせていたが。
具体的に。
何をして幸せになりたい、とか。
これをして夢を実現したい、とか。
そういった希望がまったくなかったことに今更ながらに気がついた。
だから恋をして将来に希望を膨らませる同年齢の少女達が羨ましかった。

今は…夢で良いから逢いたい人が居る。忘れようと思っても駄目だった。
忘れたふりをしていた。
この館の空気も、静寂も、そして薔薇の香りも……

薔薇の香り

ヒカルはそこで茶色の瞳を大きく見開いた。
―――彼女の部屋に、薔薇が活けてあった。
もう日が暮れて、窓から差し込む茜色を受けている、最高の状態の薔薇を見た。
花弁が淡い緑色で、棘が柔らかい花。
この庭園では見たことがない品種だった。

ヒカルはそれがシャルルの改良した薔薇であることを知らなかった。
なぜなら、シャルルの運命の人が消えてしまった時にその薔薇は枯らしてしまって、再現できない薔薇だったから。
彼はそれをもう一度咲かそうと思わなかったという話だけは聞いていた。
だんだんはっきりする記憶の中で、その薔薇は見たことがあると思った。

……それはミシェルの家にあったものだった。

「一体誰が……」
自分の声が静かな居室に大きく広がって驚いた。
誰かがこの薔薇をヒカルの部屋に届けたのだ。
それもわからない位彼女は沈降していたのかと自分のこめかみをそっと押さえた。
まだ不足する休息を訴える鈍痛があった。

それでも、ヒカルはベッドから立ち上がって慌てて身支度を始める。

目頭を押さえた。
落涙のために、瞼が腫れていた。
冷水で冷やさなければ充血は取れそうもなかった。
鏡を見る気になれなかった。
きっと酷い顔をしていることだろう。
そして抑制できない泣き顔をシャルルに見せてしまった。

慌ててシャワールームに駆け込んで、熱いシャワーを浴びる。
服を脱ぐときに、自分がかなり負傷していることを改めて感じた。
あちこち…血が滲んでいる。
そしてそれはもう、瘡蓋になっているものもあった。
自分が生きているのだと実感する瞬間だった。
傷を負って、痛いと感じるときに生きていると感じるとはおかしいね、と学友たちに笑われたことがある。
そうだろうか。
痛みを感じないということは生きていないとことなのではないか、そう思っていた。

———傷痍に湯がしみた。
でも彼女は体を覚醒させるためにじっと耐えて熱めの温水を浴びた。

濡れながら、昨日の話を思い出す。
ルイの話を思い出していた。
彼は嘘をつかない。
そしてシャルルも何かを知っている。

それはきっと…‥

ヒカルは確認しなければならないと思った。
ヒカルはそれほど多くを知らない。
彼女に打算なく何かを教えてくれる人は……思い出されるのは……

彼女はまだ濡れている髪を乱暴に後ろに流して部屋を出た。

「なんだ、卵胞摘出処置を受けに来たのではないのか？」
ミシェル・ドゥ･アルディがとても残念だ、と微笑みながら言ったので、ヒカルはその言葉の返答は曖昧にした。
彼は国立病理研究所と提携する、アルディ家出資の病理分析所に居た。
ちょうどミシェルは大きなガラス扉を開けて、渡り廊下に出てきたところだった。
ここはすべての部屋がガラス張りだ。職員の行動が監視できるように。
ミシェルとルイが使用する部屋だけはスイッチ一つでスモークがかかるように設計されており、今日はミシェル・ドゥ･アルディが来所しているのだとすぐにわかった。

「あなたの居場所を突き止めるのは大変だったわ」
「簡単にわかったら、鬼ごっこにならないだろう」
ミシェルはそう言って酷薄そうな唇を歪めて笑った。
彼らの行動予定は極秘だ。
ルイもシャルルもスケジュールは大抵頭に入れて、帳票類はすべて廃棄してしまう。

「そしてここに入るのも大変だった」
「情報漏洩に関して厳しいのは、今はどこでも当たり前のことだよ、ヒカル」
ミシェルが微笑んだ。
「ヒカル・クロスが来たらすぐ通すように、オレもルイも随分念を押したはずなのだけれどもね。最も来所を心待ちにしている人物なのだから」
彼は歩きながら禁煙のはずの廊下を歩きながら、煙草を取り出して火を点けた。
「…火気厳禁だと思うけれど」
「ヒカル。悪いが、オレはこれから出るところなんだ。・・・話は車の中で聞いても？」
「……」
「なぁに、車の中では『レッスン』はしないよ。オレもルイと同じでね。…顔に傷があるじゃじゃ馬には乗らないことにしているんだ。…あなたが希望すれば別だけれど」
ミシェルはそう言うと、ヒカルの肩を抱いて、今彼女が通ってきた廊下を進むように促した。
ヒカルは彼に触れられると、一瞬身構えた。
しかし、これほどの所員が居るこの場所ではそうそうなことはできないと思い直し、促されてミシェルについて行く。
彼は非常にシャルルに似ている。
これほど幼少時期から今に至るまで似ている双子も珍しい。
通常なら、違う容姿を好んだりすることもあって、その後の生活環境で少しずつ後天的特徴が大きく出る者だが。
彼らの場合は、違うのは髪型と声域だけだった。

彼は待たせていた車にヒカルを乗せると、自分も乗り込んで、そのまま煙草を吸い続けた。
狭い車内であっという間に紫煙が立ち込めて、ヒカルは少し眉をひそめた。
「ミシェル。……どこに行くの？」
「さて、ね」
「話を聞いてくれないなら、意味がないからここで降ろしてもらう」
「そういう取引めいたことはできないのだから、最初からやらないほうが良いよ、ヒカル」
ミシェル・ドゥ･アルディはおかしそうに言った。
「あなたは質問があって、そして回答はオレからでないと受け取れないと確信している。
それは正解だよ、ヒカル。ルイもシャルルもあなたには本当のことを告げるが、彼らは独断で時期を選ぶ。
……あなたに無断で、どこまでも自分の都合でね」
「ミシェル。私が聞きたいことに答えてくれないのなら、今すぐ私をここから降ろして」
車が出されて、ヒカルはミシェルにそう訴え続けた。
「それより、ヒカル。まずは今般の非礼と無礼について、謝罪して欲しいのだけれど」
白金の髪の間から、ミシェルがヒカルを横目で見た。
薄い色素の青灰色の瞳がヒカルを捉えた。
彼に少なからず不快感を与えたのだということを改めて感じ、ヒカルは丁寧に言った。
「……申し訳ありません」
「儀礼的な問題だけれどもね。…この年齢になると頑固にもなるんだよ」
ミシェルは満足そうに言った。
決してそうではなかったのに、彼はヒカルにそう言って話題を変えた。
「それで、話を手短に。4分以内で頼む」
彼はそう言うと、肘当てに腕をついて、煙草を一度だけ深く吸う。
それから、すぐに興味がなくなったでも言うかのようにそれを揉み消した。

「……･･ジルに会いたいの」
彼女は躊躇いがちにそう言った。
物憂げな瞳を外の景色に向けていたミシェルは、首をゆっくり曲げて、ヒカルを見た。
「……へぇ」
ミシェルは笑った。
「想定外だ。ヒカル、今の質問は及第点だよ」
「回答でないのに及第点？」
「そう。オレが予想していない質問だから」
彼女は困ったように首を傾げた。
「用件はそれだけ？……時間は限られているぞ。これを過ぎたらオレは一切回答しない」
「ジルに会いたいので居場所を教えて欲しい。
　シャルルの遺伝子治療を始めて欲しい。

　ルイに…ルイに結婚を取りやめさせて欲しい」
「ああ、ヒカル。…それは質問ではなくて願い事だろう」
ミシェルは微笑んだ。
ヒカルは口ごもったが、時間を過ぎたら口を開かない、と宣言したミシェルに何とかウィと言わせるために話し続けた。

「どちらでも同じことよ。ミシェルには何かを尋ねないと回答してもらえないから」
「それはオレに限ったことではないだろう。それに、オレはあなたの願い事を叶える理由も道理もメリットもないけれど」
でも、と彼は付け加えた。
「ジル・ド・ラ・ロシェルに会わせるのは構わないよ」
「…え？」
「彼女はあなたの教育係だったわけですし。
…突然解任されなければ、あなたの花嫁衣装を調達したり婚礼の日取りを調整するのは、彼女の役割だったろうね」
「解任……」
「そう、あなたにはシャルルは何と言ったのか、わからないけれど」
ヒカルは答えに詰まった。
彼女にフランス語を教え、毎日の生活習慣を教え、シャルルが帰邸するまでの時間の過ごし方を教えたのは、すべて、あの、シャルルと良く似た面立ちの女性だった。
「……私にはシャルルは『ジルは仕事の都合で』としか・・・」
確かに、当時の彼女は、新規事業として立ち上げたリゾート地の開発視察のために、各国をあちこち飛び回っていたように記憶している。
「ヒカルはそれで納得したわけ？たったそれだけの理由で」
彼女のことを多く知らなかったということが理由にあった。
ジルはシャルルとミシェルの従妹にあたる家柄の人で…長らくシャルルと苦楽をともにした人だと聞いている。
でも、シャルルは彼女のことをあまりヒカルに話さなかった。
何度尋ねても「仕事だよ」と言っていた。
ある日突然ぷっつりと来なくなってしまった彼女のことを思い出していた。
美しい…「てんしがふたりいる」と彼女は思わず言ってしまったほどの、美麗な顔立ちの、たおやかで少し哀しげな表情を浮かべた人だった。

「……どういうことなの」
ミシェルは目を少し細めて彼女を見た。
ミシェルを唯一、シャルルでないと言い張った、彼を見分けた人の娘が、同じような瞳で彼をじっと見る都度、どうにもならないほど昂揚する。

「自分の目で確かめないと信用しないのに、回答をオレに求めるなんて。
　貪欲だね、ヒカル」
「ミシェル。ジルに会いたいの。場所を知っているなら教えて欲しい」
「ジルに会うつもりなら…ルイを連れて行け。それが条件」
ミシェルは譏笑して言った。
細く長い指を、自らの顎にあてて、どうしようかな、と呟く。
決してそうは思っていないはずなのに思案しているポーズを取る。
「タイミングが良いよ、ヒカル」
彼の言葉がわからずに困惑していると、ミシェルは「これもすべて頃合いというものなのかな」と意味がわからない言葉を言った。

「さて、次の『おねだり』だが、これはノン。オレが細胞提供してくれって言うのだろう？ヒカルの生体細胞を提供してもらわないと実現は不可能なことに、条件が揃わない時点ではウィとは言えない」
「・・・・・」
「そして3つめの『おねだり』…これはオレの意志決定では覆せない。いかに、オレでも、シャルルでも、ルイの希望は今や親族会で承認されていることだ。……君はアルディ家に巨万の富をもたらすのだから、それもやむを得ないと思っているようだよ、あのご老体たちは」
辛辣な言葉でそう言うと、ミシェルはまた、妖しく笑って口許を緩めた。
「さて、ヒカル。…実現可能なものから片付けよう。……まずは、ジルとの会合のセッティングをオレに願い出るには……お前は何をオレにもたらしてくれるのかな？」
ミシェルはそう言って、自分よりずっと年下の、あの人の娘に言った。
まるであのときのあの人のようだ、と加えて言葉を切った。時間だ、と言ってそれっきり彼は車の中では決して口を開こうとしなかった。

ヒカルが話ができたのは、きっかり4分間だった。

■112

それからほどなくして、彼が指定した場所はアルディ家だった。
「ヒカルは順番を間違えたな」
ミシェルは面白そうに言った。
「もう少し待って居れば、オレはあなたの元に、焦がれた若いロメオのように訪れたというのに。随分と行動的なジュリエットが早く会いたいと願ってくれたから、こうして二人きりで話をすることができたが・・・・」
「ミシェル。本当に、彼女に会わせてくれるの？」
「オレがセッティングするわけではないよ。ヒカル、あなたがそう望んだからだ」

車が静かに停車した。
相変わらず、ミシェルは来客専用の門から入る。
「ミシェルはどうしてそんなに、シャルルと距離を置くの？」
ヒカルが最後の質問をした。
「ヒカル、質問は終わりだ」
ミシェルは言った。

「何か都合が悪いことでも聞いてしまったかしら」
ヒカルはそう言ってミシェルの顔をそっと見た。
「普通の兄弟よりかは親しいと思っているよ。
何もかもが当主である彼を中心に回っているしね」

ミシェルの言葉に、ヒカルは小さく息を漏らした。
その回答は普通の兄弟より親しいと言っている者が発する感想だろうか。
･･････客観的すぎた。
用意した言葉のようだった。
「ミシェルはどうして･･･どうして、ルイの教育係を承諾したの」
「もう質問には答えないと言っただろう、忘れてしまったのかな？」
ミシェルはやんわりとそう言って、彼女の質問を完全に拒絶してしまった。
彼はシャルルやルイとどう関わっているのか、ヒカルには計り知れなかった。

長らくルイを認知しなかったシャルルの代わりに、彼を引き取ったのは、間違いようもなくミシェル・ドゥ･アルディなのだ。
離婚してしまったシャルルの母も養育を拒否した。
養育は結婚契約書に記載がなく、自分に課せられた義務ではない、と強く主張した。
離婚が決まって、相手方は彼を引き取ることを拒絶した。
次の再婚に差し障りがあるからだという。
通常の世の中の道理では通用しないことが、この薔薇の一族の中ではまかり通っていた。あり得ない「値踏み」によってルイが流れ着いた先は、ミシェル・ドゥ･アルディの元だった。
親族会で決まったことではなく、ミシェルが彼を養育しようと言ったと聞く。
どうにも彼は何かを知っているとしか思えなかった。
何を知っているのだろうか。

「ヒカルがオレに何をもたらしてくれるかによって、あなたの手に入れたいと思う真実というものの項数が決まる」
ミシェルは低いバリトンでそう言うと、妖しい光を称えてヒカルを見つめた。

彼らは同じ青灰色の瞳の持ち主なのに、こうも視線が違う。
「･･･私は何をすれば良いの」
ヒカルは停車して、すでにかなり時間の経過する車内で、呟いた。
膝の上で、掌をぎゅっと握った。
彼に何かを差し出さなければ、決して自分の何かを明らかにはしないだろうと思った。
「そう･･･いい子だね」
ミシェルはヒカルの呻きを聞くと、満足げに頷いた。
「受け入れるかどうかはわからない。聞くだけよ」
ヒカルは念を押した。

彼はそうだね、どうしようか、と余裕を含んだ声でひとりごとのように囁いた。
そして、白金の髪をかき上げた。
外はすでに暗かった。
ヒカルが外出したのは夕方以降だったから、ディナーの時間になっていたはずだった。
「今日のディナー後の月夜の散歩はオレの供をすること。･･･話はそれからだ」
「今日はミシェルも居るの？」
それはヒカルがこの館に居て、初めてのことだった。
これまでもそのようなことは一度としてなかった。
すると、彼女の疑問に答えるべく、ミシェルは少し髪を揺らして若々しい仕草で答えた。
「夏のこの時期は、いつも泊まり込みだよ。･･･当主の監視でね」
ミシェルは薄く笑った。
「それより、オレ達はいつまでここに居るの？」
「あ　はい」
ヒカルはミシェルのおかしそうな声に反応した。居住まいを正す。
停車したままの車から、彼女は合図があった運転手が扉を開けるタイミングを待って、エントランスに出ようとした。
････その時のことだった。
ミシェルが、身を乗り出して、開きかけた扉をそっと･･･閉めた。
そして窓際の運転手に軽く手を振ると、その場から立ち去るように目で合図をした。
「ミシェル」
ヒカルが声を上げた。
彼女の体の前を通り、ふわり、と煙草の香りを漂わせて、ミシェルはすっと体を引いた。
「今、確約しろ。・・・ヒカルはどれだけを提供するか」
ミシェルはそう言ってヒカルに近づいた。
蠱惑的で目を話すことが出来ない冷たい晄が・・・ヒカルの茶色の瞳をのぞき込んだ。
かつて、何度もこの距離で彼は彼女をのぞき込んだ。
深淵まで、何度も底を掬った。

彼女の深くまで掘り起こしてそして彼女を乱した瞳で、ミシェルは微笑んだ。
「ヒカル。‥‥前にも言っただろう。オレの子を産む選択肢もある、と」
彼はよく切れる鋭利な刃物を思わせるような、美しいけれど冷たい微笑みを彼女に投げかけた。

■113

「まったくあなたはあの人を思い出させるよ。苛つくほどに」
ミシェルはそう言った。
泰然とした物言いではあったが、決して青灰色の瞳は微笑んではいなかった。
あの人、と彼らが言う人はひとりしかいない。
その人物を今は、慕わしげに尊称で呼ぶことが出来ず、ヒカルは黙ったままミシェルの言葉を聞くしか術がなかった。
「あの小さな東洋人がシャルルにもたらした影響は絶大だったよ。これほど長い年月、彼がひどく苛まされるほどに。そして唯一、オレを苛立たせる人物だったな」
ミシェルがヒカルの母について、感想を述べたのはこれが初めてのことだった。
・・・それほど、良く似ているということなのだろうか。
ヒカルは自分の頬をそっと、手の甲で押さえた。
どちらにも傷があったから、いつものような、滑らかな滑りでなかった。
「だからね、今度はあなたが苦しむ番だ、ヒカル」
ミシェルはそう言ってまたひとつ小さく笑みを漏らした。
よく笑う人物だった。
でも、ヒカルは彼が微笑む都度、周囲の温度が少しずつ下がっていくような感覚にとらわれていく。
「何も知らなかったことをようやく知ったようだけれど。それでもまだ全部ではない。
贖わなくてはならない罪があり、それはお前の代でさえ昇華できないだろう。･･･これを『業』と一言で言えば･･･それであなたは気が済むのだろうか」
ミシェルの予言めいた言葉に、ヒカルは眉をひそめた。
自分はまだ、知らないことがある。それはわかる。
でも、贖わなくてはならないとは･････彼は何を言っているのだろう。
わからない。
ルイも「業火に灼かれろ」と言った。2度も。
その意味もわからなかった。
わかったようでいて、彼の真意がわからなかった。
・・・・そう、自分は知らないことが多すぎる。
それを知るために、こうしてミシェルの元を訪れたのだ。
きっとシャルルはヒカルがこっそり館を抜け出して彼に会いに行ったと知れば、「またか」と言って激昂するに違いない。
でも、それでも、どうしてもミシェルと話をしておかねばならないと思っていた。

「ミシェルは、あの人を・・・母を憎いんでいるの？」
「ヒカルは何か誤解しているようだね」
ミシェルはくすくす笑いながら言った。
「オレは誰かを愛したり憎んだりしない。・・・ただ、そうだね、ただ何も感じない。誰が生きようが死のうが。そして苦しもうがオレの心はさざめかない。つまらないことを質問してはいけない。やがてアルディ家の夫人ともなる身の者は黙って静かに微笑んでいろ」

ミシェルはそう言うと、お喋りしすぎしてしまったようだ、とまたおかしそうに言った。
「だって、ルイは？ミシェルは･･･ルイを育てたのだから、彼にも何も感じないわけないでしょう」
「根拠がないことを断定してはいけないよ。ヒカル」
彼はそう言うと、あっさりとヒカルの言葉を否定した。
「ルイに何かを感じるから育てたわけではない。育てたから何かを感じるわけではない。・・・ただ、面白そうだったから。そう、退屈しのぎだよ」
「ミシェル。少なくとも・・・ルイはあなたを必要としている」
ヒカルは根気よく言った。
彼にはヒカルの言葉は届かない。
ルイやシャルルと同じように。
何かを叫んでいることはわかっているだろうが、それに耳を傾けようとしていないのだ。
・・・意味がないから。
・・・退屈だから。

そして、もう一つ理由があったから。

・・・憎んでいるから。

誰をだろうか。

でも、間違いなく、ミシェルは。

何かを、誰かを憎んでいる。

「ヒカル。あなたはオレの問いに答えてないよ。・・・何をオレにもたらしてくれるのかな」
こどもに尋ねるように、ミシェルは繰り返した。
彼は決して繰り返さないから、この問いに対する回答に対して回避はできないという、彼なりの警告だった。

「それとも」
うっとりするほど美しい顔を彼は傾けて、ヒカルを見つめた。
･･･エンジン音だけが響く車内で、利きすぎた冷房のために、肌が泡だったのは、空調のせいなのだろうか。それとも彼の眼差しのせいなのだろうか。

彼女は一生懸命考えて、ようやく口を開いた。
「ミシェルに私がもたらすもの・・・・」
「そう。巨万の富でなくて良い。あなたの孕む姿でなくても良い。苦しむ姿では足りない。
オレを充足させてくれる何か」
そして彼はそこでふっと冷笑した。
体を近づけて、ヒカルに寄ったので、彼女はぎょっとして身を遠ざけようとした。
だが・・・狭い車内で彼の追跡の手に捉えられてしまう。

「ねだり事だけは一人前の、小さき者よ。・・・・墜ちろ。そしてもっと苦しめ。もっともっと泣きわめけ。涙がアルディの庭に落ちる度に、腐った薔薇が息を吹き返す」
以前、彼に首を絞められて遠く意識を失ったことを思い出して、ヒカルは顔を強張らせて彼と距離を保とうとした。
だか、恐ろしい程までに整った顔が彼女に近づいてくる。
逃げられない。

・・・あのときの恐怖が蘇ってくる。

「いや・・・」
ヒカルはミシェルを拒絶した。
「ミシェル。あなたは・・・どうしてそれほどまでに・・・。わからない」
「おまえにわからなくても良いよ、ヒカル」
彼は言った。
狂気の仮面と天使の仮面を両方持つ、アルディ家のもうひとつの華が、妖しく笑った。
「はやくルイと婚約しろ、ヒカル。そして、命を絶って全細胞を冷凍保存するか、卵巣を摘出して次のお前のかわりをこの世に生み出せ。それはオレ達アルディの男ではできやしないことだから」
彼はそこまで言うと、ヒカルにまた一つ甘い微笑みを返して、そして・・・
悲鳴をあげることさえ出来ないヒカルの躰に、見事な体躯を重ねた。
ヒカルの手首を掴んだかと思うと・・・彼は狭い車内で、ヒカルに覆い被さった。

■114

「・・・！ミシェル！」
ヒカルが我に返って、叫んだ。
シャルルと同じ顔をしているのに。
ミシェルからは、ただ恐怖しか感じない。
哀しくて冷たい気配しか受け止められない。
彼の行動は最も予測不能だった。
何がミシェルをそうさせるのか、という根源がヒカルには見えてこない。

「ああ、ヒカル」
嬉しそうに、ミシェルが耳元で囁いた。
久方ぶりに近くで聞く・・・深みのあるバリトンが彼女の耳骨に響いた。
「何年ぶりだろうね、こうして・・・躰を寄せるのは」
ヒカルは唇を噛んだ。
彼に逆らうことが出来ないように、遺伝子配列を組み替えられたかのように、ヒカルは自分の思うとおりに躰を動かすことが出来なかった。
彼女は茶色の瞳を大きく見開いて、そして彼が落とす重力の勢いを遠のけようとして、躰を引いた。
だが、ミシェルはその抵抗をあっさり払いのけて、ヒカルの白い華奢な躰に覆い被さり、そして彼女の自由を簡単に奪った。
煙草の香りが彼女の躰の上をよぎり・・そしてミシェルはヒカルの上に自分を乗せた。
ヒカルが顔を背けても、彼は稜々として様子でもって「迂闊なヒカル・・・お前は幸せだから、それほどまでに・・・晄の世界を誇示するのか。飛駈（ひか）る羽を持つ者だからこそ・・・」

・・・その時のことだった。

大きな、低く鈍い音がして。

車体ががくんと、大きく不自然に揺れた。
軽量ではあるが頑丈で防弾ガラスとスモークを張り巡らされたはずの、アルディ家が特別に注文した仕様の車体が大きく傾いだ。

覆い被さったミシェルは、その力点に心当たりがあったようだった。
ヒカルから少し躰を浮かすと、おかしそうに微笑んだ。
ヒカルの躰の上で。
「・・・・随分早いお出ましだね、ナイト」
そう言ってミシェルは、予定内行動であったと誇張するかのように、ゆっくりとヒカルから躰を離した。

彼の恐ろしい縷言が、まるで戯れ言であったかのように、ミシェルはやれやれ、と言って、ヒカルと距離を置いた。

「・・・・ルイ！」
見れば、窓ガラスの向こう側からは、ルイ・ドゥ・アルディが、無表情に、こちらを見下ろしていた。
この車にはスモークが貼られており、外側からは決して中の様子はうかがい知ることが出来ないのに、ルイはそれを透視しているかのように、車内のこの様子を観察しているかのように、物憂げな視線をこちらに向けていた。
ミシェルは髪をかき上げて、ふと、小さく吐息を漏らした。
「・・・出てこい、ヒカル」
ルイは無表情でありながら、激憤の様を隠さずに、ヒカルの名を呼んだ。
そして次に彼の長年の養い親に向かって、呪詛の言葉を吐いた。
「ミシェル・・・ヒカルは・・ヒカルには手を出すなと言っただろう・・・！」
彼はもう一度、長い脚を上げて、車の扉に向かって、力一杯、脚を降ろした。
また、車が揺らぐ。
「やれやれ・・・困ったナイトだね」
ミシェルがそう言って、彼女から躰を起こし、そしてヒカルに向かって、ルイと同じ青灰色の瞳を向けて、面白そうに片目を閉じた。
そして囁いた。口早に。
「ヒカルがオレを頼るときは、それは真実を知りたいときだ。
もう、お前にはわかっているはずだね・・・わからないなりに」
ミシェルはヒカルに微笑んだ。
冷たい微笑みで。
・・・そしてこの上なく魅惑的な微笑みで。

3度目の衝撃は、スモークを貼られた防弾硝子に定められた。
ルイが、激昂に任せて、力任せに・・・
車の窓ガラスに攻撃を始めたのだ。
大きく車体が揺れて、そしてヒカルはミシェルに縮められた距離に対する抗議の悲鳴よりも、大きな驚きの声差しを上げた。
自分でも信じられないほどに驚嘆していた。

静な声が、その大きな振動と相反して聞こえてきた。
低い・・それはヒカルが親しんだ声だった。
ルイ・ドゥ・アルディは静かに、養い親に警告した。

「ミシェル。・・・次期当主候補のひとりとして命じる。・・今すぐ出てこい。
オレの配偶者に落胤する行為をしようものなら・・・オレは今すぐにお前を継承権上位リストからはずす用意がある。・・・忘れるな、ミシェル。お前はオレの養い親であるが、それ以上でも以下でもない使命があることを」

■115

なにも車を台無しにすることはないだろう？

彼の叔父であり、絶大な発言権を持つミシェルはヒカルに囁いた。
「ああいう教育はしなかったのに・・・誰に似たのだろうね、まったく」
苦笑しながら、ミシェルはヒカルとようやく距離を保った。

ルイの憤慨は鎮まらなかった。
なぜ、彼がそこまで激昂しているのかわからなかった。
その様は、かつて、シャルルが激しく彼を殴打した時の様に似通っていた。

いつになく、ルイ・ドゥ・アルディは激昂していた。

ここから見える彼の金髪は、スモークのためにややくすんで見えたが、それでも恐ろしく整った顔は無表情でありながら、激しく憤っている様を隠し覆うことができていなかった。
切れ長の青灰色の瞳が少しだけ大きく見開き、目の焦点が合っていない。
何か・・・何かに瞋恚の炎を燃やしているルイの様に、ヒカルは自身の座っているシートが激しく揺らぐことさえ忘れて、呆然としていた。

大きく片足を上げたルイが、こちら側から見えた。
片足を車に、もう一度大きな音を立てて蹴り上げると、彼は警告した。

「ミシェル・ドゥ･アルディ。オレは一度しか言わない。二度はない。
　それはあなたの指導によるところのもの・・・」

そこまで言った時だった。
ミシェル・ドゥ･アルディが、車の外に出てきた。
激しく変形した扉の反対側から、ミシェルは優雅にかつ軽やかに音もなく車から降り立った。
ルイは、彼と良く似た叔父の顔を軽く睨んで、一度だけ低く、養い親の名前を呼び、そして警告した。
「オレはもう成人している。そしてミシェルは後見人登録から削除されている。

これが何を意味しているのか・・・よくよく考えてくれ」
「考えなくてもわかるだろう？時間を費やすことはない」
彼の叔父は、年若い甥に向かって、そう言った。
激しく横殴りされた車体の前で話すのは無粋だね、とミシェルは言った。

「ルイ・ドゥ・アルディ。激昂して言葉を多く放つのは愚の骨頂だと言っただろう。
憤るなら言葉を滅しろ」
彼は悠然と余裕たっぷりに微笑んだ。
「・・・そもそもお前はヒカルの配偶者じゃない。まだ、ね。
そして権利を得るだけなら、交配するだけなら、お前でなくても良いのだから。
くだらない独占欲をむき出しにするな」

ルイはそこでようやく大きく肩で深呼吸をして、そして乱れた金髪の下から、ミシェルをじっと強く見据えた。
「・・・そうじゃない」
「そうじゃないと言うのであるならば、執着するな。本当に奪い攫いたかったら、なおさら」
「・・・・」
金髪の星辰の子は、ミシェルから目をそらさずに、ただ、ミシェルの一見穏やかな嗤いを無表情に眺めていた。

興が醒めたから、オレは行くよ、とミシェルは言った。

そして、近くで心配そうに待機していた運転手に替わりの車を用意するように、と短く指示をして、ミシェルはひとり館の中に入って行ってしまった。

彼は去り際に、煙草をくわえながらルイに声をかけた。
「それに、次期当主候補のひとり、と認識しているのであれば。・・・オレにも同等の権利があるということをゆめゆめ忘れてくれるなよ。甥御殿」

それから時間を置かずに慌てて降車したヒカルを斜眼に見た。

さらりと、ミシェルの流れるような白金髪が彼の頬を飾る。
その様は、あまりに凛冽としていて、暑い夏のはずなのに彼の周囲だけは冷涼な空気のみが存在するかのようだった。
睥睨するルイの視線を越えて、その向こう側にいる、車のボンネット脇で立ち竦んでいる彼女に微笑んだ。

「ヒカル。・・・それでは後ほど」
ミシェルはそう言って背中を向けて、今度は振り返らずにそのまま姿を消してしまった。

「・・・・ルイ」
呆気にとられたヒカルが、ルイに向かって静かにそっと声をかけた。
距離を詰めることを躊躇うくらい、彼は激昂していた。
拳を握り、もう少しミシェルが出てくるのが遅ければ、素手でウインドウをたたき割ることくらいやりかねない勢いだった。
あそこまで激しく憤るルイを初めて見たヒカルは・・・・
次の言葉を発することが出来なかった。

ルイは軽装だった。
薄いV字型の濃紺の長袖を素肌に纏い、同系色の細かい織りの入ったパンツだった。
スーツかカジュアルフォーマルしか知らなかったヒカルは、成人したルイがそういう服装も好んで身につけることを知り、少し意外だ、と不謹慎にもちらりとそんな感想を持った。

「ヒカル」
彼は大きく溜息をつくと、薄く上品な唇で彼女の名前を呼んだ。
そして、彼はまだ目尻を少し赤らめて、彼女を睨み付けた。

「・・・・ルイ、怒ってるの？」
ヒカルがどうして良いのかわからずに、彼に尋ねた。
「・・・お前にね。激しく」
「どうして・・・」
本当に苛つくな、とルイは言った。
そしてヒカルのその様子に、ルイはこれ以上激昂しても仕方がないと自分に言い聞かせたようで、やがていつもの静かな表情に戻った。
金髪をかき上げて、乱れた髪を大きな手のひらで流す様を、ヒカルはただ眺めているだけだった。
「ヒカル。・・・・どうして、ミシェルに会いに行ったんだ」
ルイはヒカルに詰問した。

ヒカルはわかっていない。
ルイ・ドゥ・アルディは憤っていた。

なぜなら、ヒカル・クロスが、目覚めてすぐに向かった先が、ミシェル・ドゥ･アルディの所在であったから。

そして、当主であるシャルルが、それを黙認して外出を許可したから。

･･･何もかもが、ルイの許可範囲外であったから。
そしてあの2人の考えのとおりに物事が運ぶ。何もかも。

・・・忌々しい。

ルイ・ドゥ・アルディの自由になる範囲は限られている。
シャルルが次期当主の権利を譲り渡さない限り、ルイはあくまでも「シャルルの後継」でしかない。
後継は、被後継が存在して成り立つ。
だから、シャルルが現役のまま、いつまでも引退しなければ、ルイはその瞬間まで彼は「次点」でしかあり得ない。

いつもいつまでも「次点」でしかあり得ない。
シャルルに何かがあった時の保険でしかない。

ヒカルは成年になってなお、シャルルを慕って結婚できないと主張する。
でも彼女は結局ルイ・ドゥ・アルディを選ばないといけない路しか残っていない。
それなのに、抗う。それなのに、思い通りに行かない。

・・・それなのに、ルイを激しく激昂させ、苛立たせる唯一の人物を、ルイは蔑視した。

怒りを込めて。

「ヒカル、どうしてお前はそんなに・・・そんなに迂闊なんだよ」

■116

ヒカルは呟いた。
迂闊だと言って彼女を睨むルイに向かって尋ねる。
「この外出は・・・シャルルの許可があったからなの？」
そう言えば、彼女の思いつきで外出できる状況ではなかった。
今は、ヒカルは「短期滞在者」であり、アルディ家の賓客というよりはむしろ「要注意人物」として登録されているはずだった。
ルイはそんな中で、心底うんざりしたよ、とでも言うように、頭を振る。

そして、彼の目の前に立つ茶色の瞳の女性の名前を呟いた。
たった今、忌々しいと思った人物の名前が彼女の口から出ること酷く不愉快だ、と言いたげに彼女から顔をそらして答えた。
「そうだ。シャルルがお前を呼んでいる。オレはシャルルの使いだ。『そろそろミシェルのところから帰ってくる頃だから呼んでこい』と伝えに来た」

ルイはそれだけ言うと、行くぞ、と声をかけた。
「オレも同席しろ、ということだから」
彼はそう言って、ヒカルの前に立って歩き出した。
「シャルルの具合はどうなの？」
「正常範囲。擦過傷が少しある程度」
素っ気ない返事だった。
ヒカルは慌てて彼の後ろをついて歩く。
以前にも、こうして彼の背中を見ながら、飾り立てられて歩いたことを思い出した。
あのときほどの踵の高い靴ではないが、今、彼女は少しだけヒールのある靴を履いていた。
・・・これも大人になったということなのだろうか。
そう思うと、少しだけルイの背中が違ったように見える。
「シャルルの話しって・・・」
彼女はルイに話しかける。
先ほどまでの憤激の有様が嘘だったように、ルイはすでに無表情だった。
ヒカルは背中にした、ルイによって破損した車をちらりと一度だけ見たが、すぐにルイに向かって走り寄った。
「ルイ。待って。・・・シャルルは」
「ああ、本当に姦しい女だな、お前は」
ルイは急に立ち止まってヒカルを振り返った。
「お前はシャルルのことしか頭にないのか。考えていることが漏れて居るぞ」
そこまで言うと、ルイは溜息をついてヒカルに言い放った。

青灰色の若い瞳があった。
月の色だ。
蒼い月の色が、そこにあった。
この夏の空の青さとは違う。
静かな・・孤独という名前の蒼い月の色があった。
先ほど間近に見て震え上がったミシェルと同じ瞳の色で、何かを訴えるような、責めるような、そんな眼差しでヒカルを見つめるルイがいた。

「あのフランスの華に、今度は女として愛でられたいのか？あの夏のマリナを見たから、お前も

そうなりたいと言うのか？」
「おかしなことを言わないで」
ヒカルが慌てて彼の言葉を否定した。
「ルイ、ルイが何に怒っているのかわからないの」
「だからシャルルのことを尋ねるのか」
「ああ、ルイ」
彼女は困ってしまって、次の言葉を探し出すことさえできなかった。
「今のあなたはおかしいわ。・・・何かに拗ねて怒っているように見える」
「そうじゃない」
ルイは嗤笑した。
やっぱり、ヒカルはわかっていない、とまた言った。
「ヒカル、お前はオレのものだ。だからもう少し分別を持ってくれ。
　オレは、ミシェルと女を共有するつもりはないよ」
彼の言葉に、信じられないと言ったように、首を振ったのはヒカルの方だった。
「ルイ、だから言ったでしょう。細胞なら提供する。医学発展のためだったら。シャルルを助けるためだったら。でもね、それだけのために。家族になろうと言った私の申し出は反古にされてしまうのなら。結婚しても意味がないでしょう」
「オレにはオレの理由があるんだよ、ヒカル・クロス」
彼は微笑んだ。
「君がもたらす巨万の富は、アルディ家には非常に甘い蜜だ。これ以上大きくなっても仕方がないのに、まだ根を伸ばしたいと願う腐った薔薇たちが居る限り、それはやまない。
そして、オレはお前を拘束したい。シャルルが苦しむなら、愛のない結婚も、家族ごっこを真似たアルディ家での滞在も、良かろうとウィと返事をしたはずだ。・・・・約束を守っていないのは、お前の方だということに、いつになったら気がつくのかな」
そして彼は言い直した。
「ああ、約束じゃない。・・・・契約だ」

ヒカルは困ってしまった。
愛がないから結婚できないという話はこの一族には通用しない。
そして永年に渡り、彼女を養育してきたアルディ家の申し出を無視することも、難しいと思っていた。
だから、祖父は、あれほどまでに・・・アルディ家の動向を気にしていたのか、と今更ながらに思う。
彼はどうあっても・・・実行するつもりだ。
そして、それが施行されなければ、シャルルの治療も開始されない。
すべては・・・・ルイの一存なのだ。

彼女は茶色の目を伏せた。
それでも、屈するのは何かが違うと思った。
彼を慈しむ気持ちは変わらない。
長い間、一緒に顔を合わせてきた。
もう、ヒカルには、本当の血族より親しい存在だ。
冷たいけれど、皮肉たっぷりだけれど、彼は間違いなく、ヒカルの家族なのだ。

ミシェルに覆われた時に、ルイは彼女を助けてくれた。
それはルイにとっての別の理由なのかもしれないけれど、少なくとも、これでミシェルとの間に何か穏やかならぬ空気が入り込んだのは間違いないのだ。
・・・・いつものルイなら、この現場には足を踏み込まなかっただろう。

・・・・いつものルイ？

ヒカルはそこでふと、考えた。
彼女の知っているルイは、どれが本当なのだろう。
激昂するルイだろうか。長年見てきた気むずかしいルイのことだろうか。

「ルイ。怒っていることをちゃんと話して。そうでないと、私はあなたを理解できない」
「理解？そんなものはお前には求めていないと何度言ったらわかるのかな、ヒカル」
ルイはつまらなさそうに言った。
「いつになったら・・・気がつくのかな、お前は」

■117

ルイは横を向いて、低く言った。
「あまり時間がない。決めるのはお前じゃない。だからオレだ。早く『こちら』に・・・・」
最後の言葉は消えてなくなり、ヒカルの耳には届かなかった。
彼が言葉尻を濁すのは滅多にないことだったので、ヒカルはそのただならぬ様子を傍観することが出来なくなった。

「ルイ？具合が悪いの？どこか様子が普通じゃない・・・」
ヒカルはあれほど手酷く拒否され続けるルイに近寄って、そして彼の顔をのぞき込んだ。
ルイの顔色は確かに良くなかった。
あれほどの逆鱗の後であるからだろうか。
彼は酷く憔悴していた。
シャルルの様子を思い出させる。

「普通じゃない？ああ、そうだよ」
ルイはヒカルを睨んだ。
彼の激昂に、ヒカルが具合が悪いのか、と尋ねることに酷く憤っていた。
彼は堰を切ったようにヒカルに唸った。
呪詛の言葉のように、彼の腹の底から絞り出される低い声を、目の前の茶色の髪のあどけない顔の娘に向かって投げかけた。
彼女との距離が近づくと、息苦しい。
こちらに来いと命じて、彼女はその通り自分の近くに来たのに、次の瞬間には「来るな」と言いそうになる。
ルイ・ドゥ・アルディであるのに。
自らを律することが出来ない。

「ヒカルはオレのものだ。誰にも渡さない。誰にもやらない。
お前は・・・お前はオレの腕の中で苦悶しなければならない。
郭公の娘だから。オレに償え。オレに返せ。」

孤なるを感じる瞬間は絶え間なかった。

それを苦痛と感じなくなるくらい長い時を独りで過ごした。
星辰の子と呼ばれて、あらゆる星々と同じ数だけの称号を得た。
それなのに・・・満たされない。
自ら煌めくことができないから、何かから晄を奪い続けないと、正気を保つことが出来ない。

自分を追い出した憎い郭公の娘に償わせるために、彼はずっと準備をしていた。
時を待った。
そして彼女は成人し、彼女の持つ稀なる特異体質を用いた成功例を冥土の土産にして、ルイはアルディ家の頂点に立つ。
あと、一息のはずなのに。
遅々として事が運ばない。
数々の論文も、星の数ほどの称号も、シャルルをウイと言わせる材料ではないのだ。

いつまでもヒカルを憂え、いつまでも運命の人に囚われ続ける愚かな男が自分の父だと思うと、それだけで憤り苛立たしさが募る。

「ルイ、ルイ。駄目だ、そっちに行ってはいけない」
ヒカルは彼に向かって叫んだ。

あの激昂が何か彼の枷をはずしてしまったのだと気がついて、ルイの腕を掴んだ。
彼はふりほどかなかった。

「憎んでも恨んでも良いよ。
私はルイに償わなければならない。
でも私は返すことが出来ない。
ルイに戻してあげることが出来ない。
この倖せな記憶だけが唯一私なのだから。
それに、それに・・・誰かの何かを奪うだけでは、ルイは満足できない。
―――わかっているでしょう」

「そんなお綺麗なことを並べ立てる余裕があるなんて、羨ましい限りだよ」
彼は冷たく言った。
もう、いつも通りの無表情だった。
青灰色の瞳で静かに冷たくヒカルを見下ろした。

「先に行く。・・・図書室の個別閲覧室に来い。10分後だ」
彼はそういうと、先に歩いて行ってしまった。
彼女は来客扱いなので、様々なチェックを受けないと、本邸には入れない。
だから10分ではたどり着けないのに。

まだ憤っていた。
静かに、ルイ・ドゥ・アルディは次の手を考えていた。
何を焦っているのだ、と自分に言い聞かせる。

ヒカルは選択できない。選ぶほど選択肢は残っていない。
嫌だと言っても彼女は結局、シャルルを助けるためにルイ・ドゥ・アルディに屈することになる。
単なる臓器提供は受け入れないつもりだった。
善意の第三者からの提供は、あくまでも「偶然の産物」としてしか認可されないからだ。
しかるべき経路で研究用データとして登録され、かつ定期的に同じ値を出していかなければそれは単なる「奇跡」でしかない。
再現できない現象だと言われる。
ヒカルをここにつなぎ止めておくには、彼の持ち駒は少なかった。

彼女は手強い。

こうだと決めたらそれがどんなに非合理的であっても、屈しない。
頑固といえばそれまでだが、彼女の意志の強さは、このアルディ家の当主がこよなく愛する素質であった。
何が何でも、彼女の母の遺伝子を入れたかった、と残念そうにミシェルが言っていたことを思い出していた。
自分を省みないで相手のためにだけ意志を貫き通すシャルルは当主の素質に欠ける。
多くの者の頂点に君臨する者であるのに、彼はいともあっさりその座を捨てようとする。
死闘の後に、彼の実弟から奪い取った玉座なのに。

シャルルは・・・獣の王のように、野に放たれることを望んでいるのだろうか。
自ら手に入れた帝座を捨てて。
本当に獣になって・・・
この世の何もかもを捨てて去るつもりなら、早くそうすればいいのに。
人の子に気を遣り過ぎて、獣にも冥王にもなりきれないシャルルに、酷く苛立ちを感じていた。

■118

ヒカルが到着したのは、ルイ・ドゥ・アルディが指定した時間からだいぶ過ぎてからのことだった。

また、夜が来ていた。

彼女は間接照明の輝く図書庫にやって来た。
昔、彼に読んでもらった「幸福の王子」は、彼女がここを去るときに、この書庫に保管されることになった。
その時以来、初めて足を踏み入れることになる。

アルディ家の図書室は大変に広い。
広大な敷地の中で、地下倉庫を持つ部屋はいくつがあるが、この図書室は尋常でない分量の書庫を扱っている。
そしてあらゆる分野の初版本や、貴重な資料が保管されている。
ルイはこれらの書籍の大半を読んでしまったようだったが、昔は、ヒカルはここにはほとんど足を向けることはなかった。
彼女が足を踏み入れてはいけない領域があったから。
彼女が自分は部外者だと思い知る空間に近づくことが哀しかったから。

だから、ヒカルはあまりここに入らなかった。
必要なものは書庫データベースから検索し、シャルルとよく過ごしたプレイルームに持ってきてもらっていた。

ひんやりとする空気に、ヒカルは腕を擦った。
温度も湿度も完璧に管理されている図書室は、酷く、静かだった。

それからもう一つこの空間には秘密がある。
それはヒカルが決して近寄ることの許されない空間。

この館に住まう一族の、系図原簿が保管されている。
一族と、彼らについて記録をする者しか存在を知らない。
ヒカルも存在は知っているが、それを見たこともないし、閲覧の許可を申請したことはなかった。

個別閲覧室は、文字通り固執になっていて、完全防音になっている。
アルディ家の者はしばしば集中したいときや、文字の海に溺れたいと思うときにはここを使用するという。

それから、もっと違う役割がある。

ここは盗聴も防犯カメラもない唯一の場所だった。
入室すれば狭い個室で、出口も窓もないから、誰かからの攻撃の危険や、何かを謀り事を計画するにはまったく不向きの空間だった。

だからこそ、出来うること。
‥‥話を聞かれたくないときの、密会の場所だった。

ヒカルは、滅多に訪れなかったその場所に歩み寄った。
案内されて・・・光も漏れない密閉された防音扉の前に立つ。

音のない空間で考えることは何だろう。

シャルルもルイも、たまにそこで調べ物をしているようだった。

ただひたすら、時間を忘れて漂う空間は、まさしくヒカルから見て「あちら」側だった。

だから、何となく怖くてここに足を踏み入れてはいけないと思っていた自分が居た。

けれども・・・

ルイの伝言によれば、シャルルはそこに来いと言った。
誰にも漏らしてはならない話をしようとしている、と察した。
そして、シャルルがルイにも同席を求めたことに、何か意味があるのだろか。
ルイは何となくではあるが、その内容を知っているような口振りだった。

ひんやりとした、夏の空気から遮断された空間に踏み入れる覚悟を決めなければならない。
・・・・今度こそ、彼らは自分に何かを告げようとしていると感じる。

軽くノックをすると、くぐもった声で、入室を許可する返事が聞こえた。
そして程なくして、ルイが内側から扉を開けた。
「遅い」
彼は眉根を潜めて、ヒカルを見た。
「ここまで来るのに時間がかかった。・・・ルイが先に行ってしまったから」
「オレの責任じゃないだろう。お前がついて来なかったからだ」
彼は彼女を見下ろした。
ルイは、彼の気に障るようなことを言ってしまったから、ヒカルが放置されてしまったということには触れなかった。
小部屋の中から漏れる光が、彼の見事な金髪を照らし出して、少しだけ目を細める。

煙草の香りがする。
彼はいつからこんな余香を漂わせるようになったのだろう。
知らない男の人のように思える瞬間だった。

ルイ、私とあなたは、わかり合えないのだろうか。

「・・・入れ」
彼はそう言って、長身を少しだけずらした。
薄暗い間接照明から、煌々と灯る晄の部屋に出て、ヒカルは目を瞑った。
一瞬、ルイの金の晄に目が眩んだかと思うくらい眩しかった。

そっと彼女の肩に手を遣る暖かさを感じたので、ヒカルはその手の持ち主に礼を述べた。
煙草の香りが動いたから、誰なのかはすぐにわかった。
目の前に居て、扉を開いた人物に向かって彼女は言った。

「・・・ルイ、ありがとう」

ヒカルは少しだけ微笑んだ。
目が慣れない彼女のために、ルイが手を添えたのだとわかったからだ。

どうして彼はこんなにも残酷なのに、時々優しいのだろう。

「ヒカル。・・・座れ」
無言で彼女を導いた掌の持ち主と違う者の声が、少し離れた場所から聞こえた。
「シャルル」
ヒカルは緊張した声を出した。
これほどまでに、待ち焦がれた声なのに、ヒカルはとても張り詰めた空気を感じて、その人の名前を呼んだ。

夢幻の状態から戻ってきた、彼女のとても会いたかった人物・・・
ほんの数時間離れていただけなのに、思いを馳せることを止めることの出来ない人物がそこに居た。

シャルル・ドゥ・アルディは、もう一度言った。

「ヒカル。座れ」

■119

その静かな声は、まさしく、彼女のよく知るシャルル・ドゥ・アルディの声だった。
よく通り、有無を言わせない強さがあるけれども、決して驕りを含むことのない、生まれながらの貴顕紳士であることを認めざるを得ない、そんな声音だった。

彼は、あの無幻から戻って来た、本当にヒカルの知っているシャルルなのだと思うと、どうにも気持ちがさざめく。
そして、3人で座るには、それほど大きくない、窓のない小部屋にヒカルが入ると、背後に居たルイが扉を閉めた。
防音扉なので、閉めると、空気を遮断する独特の音がする。
そして次には、それまで耳に入ってきた雑音や生活音がまるっきり違う音域でヒカルの聴覚を刺激していた。
常々、この空間は時と場合によっては監視カメラを設置しなければ危険であると館の側近の者が

進言していたが、ルイとシャルルはこの点だけは意見が一致していたようで、「集中する空間を作っておく」という名目の元に、一切誰の目も届かない空間を確保し続けていた。

ヒカルはあまり足を踏み入れない空間であったので、後々知ることになるのだが。
この場所は最大の密談場所であり、最高の・・・絶好の攻撃に適した場所だった

座れ、と言われて、ヒカルは適当な場所を探した。
彼女はいつも場所を探す。
特に、ルイとシャルルが一緒に居るときには、その距離を気にしていた。
今回もそうだった。
彼らのどちらにより近く居たいのかは、もう結論が出ていたことなのに、それでもまだ躊躇った。

「ヒカル、ここに」
ルイが抑揚のない声で言った。
急ごしらえで用意されたアイボリーの椅子に彼女は腰掛けた。
・・・ルイとシャルルと等距離の位置だった。
そしてそこにルイが椅子を用意したことが・・少しだけ哀しかった。

彼はそういう計算をしない。
だからルイが用意する距離は、効果的なものでなくてはならないはずなのに。
かつて、シャルルの前で「婚約したから」と言って心のないキスをしたルイと同じとは思えなかった。
彼は・・・ヒカルとシャルルと自分を等距離に置いた。
これが何を意味するのか、ヒカルは考えようとしたけれど、それより先にシャルルの話が始まったので、思考を中断した。

彼は細く長い指で、ほどよく経年した一枚木の机をとんとん、と叩いた。
ヒカルが考え事をしていたから、シャルルは注意をこちらに向けたのだとわかり、彼女は慌ててシャルルを見た。

白金の髪、青灰色の物憂げな瞳、上品な顔立ちに、それでいて苦悩を知る薄い唇は何かを定めたかのように閉じたままだった。

「———話を始めよう」

彼はそう言った。

それにあわせて、彼の息子である星辰の子も腰を下ろした。
彼は次に話すことは何かわかっているようだった。
シャルルの座っている側の机の上に、幾種類かの古いファイルが置かれている。
どれもが同じ厚さの同じ表紙で・・ヒカルの生まれる数年前から、現代に至るまでの年代とおぼしき数字が記載されていた。
タイトルはなかった。
だた、西暦とナンバーが振ってあるだけだった。

「ヒカル、これからの話を他言してはいけない」
「・・話す人が居ない」
「今はそうでも、これから先のことも含む。・・・いいか、決して他言するな」
「それが条件なのね」
彼女はシャルルに向かって言った。
彼がこれほどまでに念押しする何かが、今、ヒカルに明かされようとしている。
この家の当主は、大きな椅子の肘掛けに肘を乗せて、そして深く息を漏らした。
彼がこの話をすることをいろいろと苦慮したことが伺える。
そんな話を、なぜ、ずっとヒカルに黙っていたのだろうか。
間違いなく、この話は自分に関係していることなのに。
彼女は胸が高まる音も、シャルルの一言一句も、すべて記憶しなくてはならない、と心に決めた。

これから彼が話すことは、きっと・・・自分にとって、幸福な結果をもたらすものではないのだろう。

だから、シャルルは黙っていた。
だから、ルイは「知らないが故の罪を知れ」とヒカルに警告した。

その時が来たのだ、と思った。

シャルルはヒカルと再会して。
その時が・・・傷ついても聡聞ことのできる強さがヒカルにあると信じたから。

ルイはヒカルと話をして。
彼女の知らないのは、彼女自身が耳を塞いでて居たのではなく、聞こえなかっただけだとわかっていたから。
こうして・・こうして彼もこの場にやって来た。

彼女には家族が居ないと。
だから誰にも溶け込んで生きていこうと思ったのに。

ああ。

ヒカルは呻いた。
まだ話を聞いてもいないのに、彼女は深く鳴動した。

なぜなら、自分が家族になりたいと思っていた人々は、とっくに家族だったから。

「わかってるわ。・・・きっと驚くのでしょうけれど。私は・・・それを聞くことをやめはしない。知ることを拒否しない。これを誓約します」

そして、シャルルの顔を見た。
彼女のこよなく愛する運命の人のもたらす残酷な結果を、彼女は受け入れる覚悟をした。

「黒須晄の名前にかけて。私は私の誇りでもって、その事実を・・・・最後まで見届けます」

彼女はそう言った。

ヒカル・クロスではなく、あの父と母の娘として。
自分はなぜ、贖罪の娘と言われるのか。なぜ償わなければいけないのか・・・

そして、自分の意味を知るために。
自分のこの気持ちが、シャルルに本当に届くようにするために。

彼女は唇を噛んだ。
でも下を向かなかった。

じっと・・・シャルルを。
彼を見つめた。

その傍らで、彼女と同じ時を生きてきた、アルディの新たな種の、冷たい視線を感じながら。

■120

「これはヒカルのカルテだ」
シャルルは淡々と説明を始めた。
ちらり、と目をカルテに遣った。
中身は全部知っているようだった。

ヒカルは眉をひそめた。
彼女が生まれる前の年の西暦が入ったカルテなのに、それをヒカルのものだというシャルルの説明を聞き流してはいけないと思ったからだ。

彼は一度しか話をしない。
繰り返さない。

シャルルは薄い唇をゆっくりと開いた。
何となく自分に関する良くない情報を彼が言うのだと覚悟して、ヒカルは膝の上で、拳を握った。
擦過傷が少し痛んだ気がしたが、まったく気にならなかった。

「ヒカル。・・・ヒカルは人工受精児だ」
「・・・・」
今は珍しくないよ、と彼は言った。
しかし、彼女はそれを驚くより、合点がいったと言った方が正しい感情を持った。

それなら・・・それなら今までの話のつじつまがあう、と思った。
だからあまり驚愕しなかった。
山のように積まれたカルテを見て。
そしてそれが自分に関することだと言われて。
彼女は、目を耳を塞いでいたことに触れなくてはいけない時がやって来たのだと思った。

シャルルは続けた。
その口調は医師のものだった。
無表情で、瞬きの回数が少ない。
彼の最高の頭脳の中で、何を話せば良いのか、考えている節があった。

「マリナ・クロスは結婚直後から、不妊症に悩んでいた。

日本の検診結果で、そのように診断されたらしい。
クロス家は医師の家系だからね。・・・ブライダル・チェックで発覚したようだ。
もっとも、本人はその前から気がついていたようだったがね。
体躯が小さいので、普通分娩は無理だということは自分で自覚していたらしい」

彼は最愛の運命の人のことを、まるで知らない者のように話をした。
シャルルがそうやって感情を遮断しないと、話すことが辛いのだと察してはいたが、ヒカルは遣る瀬無くなって、彼の顔を見つめながら話を聞くことをできず、とうとう下を向いてしまった。

「ヒカル。・・・顔を上げろ」
その言葉を言ったのはルイだった。
彼は腕と足を組んで・・背もたれに寄りかかり、シャルルの話を聞いていた。
「ルイも・・知っていたの？」
「もちろん」
彼は短く返答した。
ヒカルは、そう、と小さく声を漏らした。
「ここにあるカルテは、正確には・・・マリナ・クロスがヒカルを出産するまでの不妊治療の過程と、生まれてからの記録だ。ヒカルがパリに移住してからは、こちらに資料を取り寄せて・・・ジルが管理していた。彼女が任を解かれるまでは」
「ジル」
ヒカルは懐かしい人の名前を呼んだ。
彼女は医師登録をしていたはずだったから、教育係として、ヒカルの健康チェックも行っていたはずである。

驚かないから、続けて

ヒカルはそう言った。

驚いていないと言えば嘘になる。
でもその一方で、ああそうなんだと思った。
なぜ、自分の躰の秘密を、アルディ家の者が知っていたのか。

しかし、ヒカルはアルディ家の者と決して認められていないのに、あの執拗な健康診断を命じたり・・・彼女の細胞の目覚めを経過観察しようと言い出したのは、他でもない、目の前のアルディ家の当主なのだと知った。

「・・・だから、マリナ・イケダは定期的にパリに訪れて・・・治療を受けていたのね。アルデ

ィ家の持つ、最高の医療スタッフと設備を使って」
「そう。彼女はどうしても・・カズヤ・クロスのこどもを産みたかった。それほど出産に執着する人だとは思わなかったけれど」
シャルルはそう言った。
最後の感想を述べるときだけ、少し・・声音が下がったような気がした。

「その時の主治医はオレではなく、ジルが担当した。そして、人工授精でないと妊娠は難しいとわかり・・・その治療を受けて、妊娠を確認して、そしてヒカルが生まれた」
「・・・・」

彼女は、そうなると、生まれた時から・・いや、生まれる前から、シャルルの元に居た、ということを彼は言っていた。
ジルが担当医でも、シャルルが知らないということはないだろう。
だからこそ、今、シャルルの手元には、ヒカルに関するすべてのデータが蓄積されているだから。

娘ではない、とシャルルが言ったのは、こういう事だったのだろうか。

そう思うと、そのことの方がヒカルを打ちのめした。

定期的にマリナがパリを訪れていた理由。
ヒカルの細胞についてアルディ家が関与していた理由。
本当はシャルルは、彼女がパリにやって来るまで内密にしたかったのかもしれない。
それは今は聞けない。
このことがあって、ヒカルを引き取ろうと思ったのかそうでないのか。
今は、聞くことが出来ないくらい、彼女は酷く・・・狼狽していた。

それは自分が人工授精で生まれた人工の娘だからということではない。

シャルルが・・・シャルルが、ヒカルに秘密を持って居たことを知ったから。

夏のマリナの秘密を知った時より、激しく動揺していた。
感情を動かすことが出ないくらい。
だから今、自分は、他から見たら恬静に話を聞いているように見えるだろう。

心を動かすことが出来ないくらい。
感情を露わにすることが出来ないくらい。

彼女は酷く傷ついていた。

■121

シャルルが長い話を始めるから、と言った。
聞くか、と彼はもう一度だけ、ヒカルに確認した。
彼女は唇を噛んで、頷いた。

自分は知らなければならない。

今一度、強く言い聞かせた。

どうしてルイがマリナ・イケダを知っていたのか。
・・・・人工授精されたルイの存在を知っていた。
もし、誰もが知るマリナだったら、シャルルに意見をするだろう。
愛してやれ、と。
シャルルに愛を与えなかったマリナであってもあえてそう言っただろう。
それなのに彼女はルイに逢いに来ていただけだった。
彼女の中で、どんどん、疑問がいくつも湧き出て、そして急速に大きく膨らんでいく。

「・・・・ここでジルのことを話す必要がある」

彼はヒカルの承諾を確認すると、また口を開いて淡々と話し始めた。
一切の感想は差し挟まなかった。

ヒカルが、ミシェルに何を聞きに行ったのか、お見通しだよ、という様子だった。
彼女の誕生と、ジルの行方について、両方同時に説明をするつもりらしかった。
・・・それだけショックが大きいと予定しているのだろうか。
ヒカルは聞き漏らさないように、じっと耳を澄ませた。
全神経をシャルルの発する言葉に向ける。
空調の音さえ、余計な雑音に聞こえる。
ここは防音処理が施されている設備なのに、それでも・・・空気の揺れ動く音や自分の呼吸音でさえも、夥多な音源だと思った。

シャルルは。

静かに口を開いた。

ジルが解任されるまでは、いくつか経路を辿った。
長らく当主の補佐役を務めていた彼女を解任するには、重大な過失があり、アルディの利益に損害を与える程度が甚大であることが必須だ。
シャルルに黙ってマリナ・イケダに治療行為を行っていたことが気にいらないから、という理由では解任できない。
実際、彼女がマリナ・クロスになった後には、クロスグループから医療機器関係の提携を受けており、彼女のもたらす利益の方が大きかった。

問題は、彼女の結婚前から・・ジルが黙って彼女を治療していたことだった。
発覚したのは、彼女は越権行為で人工授精処理を施したとき。
何もかもが、シャルルの知らないところで行われていたことに彼は酷く憤慨した。
ここまで巨大になってしまった事業のひとつひとつを末端までチェックすることはしていなかった。
彼がどんなに希有な人間でも、彼の持つ一日の時間は限られている。

ここで。
シャルルは、一度警告してあった。

報告をしなかったことには目を瞑る。
そして理由もわかる。

しかし、これは一度きりにして欲しいとシャルルは言った。

行為そのものを咎めるより、信頼関係が損なわれて、ジルと長らく築いてきた「掛け値なしの信頼」にほころびが生じるから、と。
結局、マリナは望み通り妊娠して、幸せになるのであればそれは良い。
彼女の幸せを遠く耳にすることが、彼には何より朗報なのだから。

問題はそこではない、とシャルルは言った。
彼はかつて、ジルに「ジルの人生をくれないか」と言って、彼女を異国の地に自らの代わりに行かせたことがある。
ただひとり、彼が血族の中で唯一心を許した相手がジル・ド・ラ・ロシェルだった。
そして、今般。
シャルル・ドゥ・アルディらしからぬ申し出に、彼女はウイと言ったのに。

それなのに、ジルは二度目の過ちを犯した。
・・ヒカルの躰を調べた。
徹底的に。
その時に、iPS細胞になりうるものをヒカルが持って居る、ということを発見した。
でも、彼女はそこでもすぐに報告しなかった。
開発チームに「提供者H」とイニシャルだけ明かして、細胞提供を勝手に行った。
死亡した新生児の細胞だ、と彼女は言って細胞研究を進めさせた。
羊水、胎盤、新生児の血液、組織片が揃っていた。
・・・今、角膜再生医療は常識になっている。
輸血の必要も提供者との適合率もまったく無視することの出来る臓器については、研究は完成されている。
後は、細胞蘇生までに長い時間と失敗を繰り返さない、完璧な「土台」があれば良いという状態だった。
その元になっているES細胞は、ヒカル、お前のものだ、と彼は言った。

このとき、ジルを医療チームからはずした。
それでも、彼女を切り捨てることが出来なかった。
何か理由があるのか、と言ったら、ジルは一言だけ・・・
ルイを引き取って欲しいと言った。
引き取れば、ジルはもう二度と過ちを繰り返さないのかと詰問したら、彼女は何も応えなかった。

次はない、と彼女に言った。
彼女のもたらした特恵に免じて、処分はしないと親族会でも念を押されることになった。
ジルは失態をおかすどころか、アルディ家に繁栄をもたらしたのに、なぜそうも激昂するのか、と逆に言われて、シャルルはこの件については沈黙するしかなかった。

しかし、ジルとの信頼関係に溝が入り・・・
シャルルは決断を迫られた。

■122

そして。
三度目は・・ヒカルがパリに来たとき。
彼女は、ヒカルの健康診断で、また、同じ事を繰り返した。
今度ばかりはシャルルは彼女を解雇すると言った。

親族会で何をどう決めようとも、当主としての発言を無視するなと言った。
彼がその気になれば理由はいくらでも作ることが出来る。

彼の逆鱗に触れてしまったジルは、何も言い訳しなかった。
シャルルがどんなにどんなに、理由を尋ねても、彼女は何も言わなかった。

職を辞したい、と言ってきたのはこの頃だ。
そして、彼女は・・・ヒカルが落ち着くまで、少し待って欲しいと言った。
彼女がパリでの生活に慣れたのなら、それを見届けて自ら職を辞したいと言ってきた。
その申し出にシャルル・ドゥ・アルディはウィと言った。
ジルが望んでいった言葉ではなく、彼がそう言わせたからだ。
もし、彼女がそう言い出さなかったら、彼の方から切り出していた話だった。

期限を決めた。
そしてその日がやって来る前に、ジルはぷっつりと来なくなった。
彼は、ヒカルの教育係としての解除通知を出した。
それから、無期限の長期休暇を許可する旨の通知も併せて送った。

長い時間を一緒に過ごした相手だったのに。
苦しいときも、彼の青春の輝きの時代にも、そしてそれが過ぎて、彼がとても・・人として生きて行くには辛すぎる日々を送っていた時も、傍らで支え続けていたのに。
彼が唯一「人生をくれないか」と願った人だったのに。

彼女は去ってしまった。
理由は聞かないで欲しいと言った。
でも、いつか必ず召喚することになるよ、とシャルルは忠告した。

それっきり。

それっきり今に至る。

＊＊＊＊＊

「シャルルはそれで、何年も苦楽をともにした人を絶ってしまったの？」
ヒカルが初めて、シャルルに非難めいたことを言ったので、シャルルとルイはおや、と同時に眉を上げた。

ルイは面白そうに唇を歪めた。

彼女は茶色の瞳を少し曇らせた。
「私のことは・・・なんとなく・・・薄々気がついていたよ・・・」
ヒカルはちょっと笑った。
寂し笑いだった。
「ヒカル」
「だって」
彼女は言った。
「クロスの家も、私が独立することにはあまり反対しなかった。
身内だから、すごく・・すごく大事にしてもらえているけれど・・・何かが違った」
だから、とヒカルはシャルルを見た。

「・・・これがシャルルが私に黙っていたことなの？」
ヒカルが少し哀しそうに言った。
深く傷ついていた。

真実を知らせたくないと判断した基準や根拠は何だろうか。
自分は・・知ってはいけない存在なのだろうか。
ジルは遠く仕事で忙しいからと言われていた。
それを何となく、蒸し返してはいけないのだと自分でわからないフリをし続けた結果であることもわかっていた。
どうしたら・・どうしたらこの靄がかった気持ちを払拭することができるのだろうか。

ジルには何か理由があるはずなのに。
言えない理由があるはずなのに。彼女は言わないのではない。言えないのに。

それを尋ねなかったシャルルの苦悩と理由が知りたかった。

「・・・シャルル。ジルに会わせて」
ヒカルはおもむろに、彼にそう言った。
ミシェルに頼んだように、同じ事を言った。
しかし回答は違っていた。
「駄目だ」
「どうして」
「ああ、ヒカル」
シャルルは青灰色の瞳を、切なげにヒカルに向けた。

「オレが、なぜ、今、ヒカルにこれを伝えたのか、よく考えて欲しい」
「シャルル」
ヒカルは何度目かの呼びかけをした。
哀しくて哀しくて涙が出なかった。

ジルのことを知らなかった。
シャルルがジルと訣別したことも知らなかった。
そして、どうして彼女の会ってはいけないのか、その理由さえわからない。
「シャルル。私はもっと知りたい。・・・シャルルのこと。ジルのこと・・」
自分のことを説明されたのに、そのことはあまり深く気にはならなかった。
今ではそれはあまり珍しくない。
やむを得ない処置であったと思う。
マリナは体格も小柄で、通常の出産には耐えられないから、きっと帝王切開だったに違いない。
そして遺伝疾患がないように・・・マリナはジルに依頼したと思う。
スクリーニングしてくれ、と。
ルイも人工受精児だ。
そして帝王切開で生まれている。
彼はおそらくデザイナーベビー（複数の受精卵から選別された受精卵）だろう。
ヒカルと出生までの経路はほとんど一緒だった。
唯一違うのは、望まれた子どもであるかどうかということである点だけだ。

それなのに、どうしてこうも違うのだろうか、とルイがヒカルを糾弾しても、彼女はどうすることもできなかった。
いや、ルイが知っていたことによって深く苦悩していたのであれば・・・
自分は本当に、何も知らない白い小部屋の中で小さく生きていたのだと思う。
だからこそ、シャルルは外の世界に行け、と言ったのだろうか。
ルイは、ヒカルを郭公と言ったのは、単に父を奪ったという意味でなかったのだろうか。
深く哀しい闇の一端が、少しだけ見える気がする。

なぜ、ルイとミシェルがあれほどまでに、アルディの種にヒカルを入れると言うのか。少しだけわかった。
自分とルイを交配されれば、Generich（デザイナーベビーのこと）による、新たな種が誕生する。
新たな種は存在するが、その種同士が交配をするのは極めて珍しい。
ミシェルの子を産め、ルイの種を残せ、というのは、新たにヒカルやルイと同じ・・・遺伝子をデザインされた種を残せということなのだということはわかった。
かつ、ヒカルはES細胞の変異細胞を持っている。

だから、シャルルは反対しきれなかったのだろうか。
自分は・・・一体、彼にとって、どういう存在なのだろう。

これまで、シャルルに映る自分を考えたことはなかった。
ただただ、幸せだったから。
でも、ここで、ふと。

自分という存在が、アルディの薔薇たちに何か多大な脅威となっているのだとしたら、彼らは何を畏れているのだろう・・・
疑念が胸に湧いた。

■123

「私にとってこの家の人達は家族だよ・・・」
ヒカルは自分出確認するかのように言った。
「シャルルも・・ルイも・・大事な家族だよ・・・」
シャルル、と言ったところで彼女は少しだけ間を置いた。
自分は、彼を家族と思っているのだろうか。
本当に・・・本当に？
彼は・・ヒカルに秘密を持っていた。

自分は安易な路に行こうとした。
ルイと結婚すれば、すべてが丸く収まると思ったのだ。
ヒカルは家族を得られる。
シャルルはルイとヒカルを見守って・・ようやく自分の好きなことだけをすることができるようになる。
iPS細胞による遺伝治療だってできるだろう。
そう思った瞬間が、ないとは言い切れない。
実際、今だってかなり困惑して戸惑って・・・そして回答を迷っている。

ルイと自分は同じだ。

どう生まれてきたかは関係ないと思っていた。
どう生きるかが問題だと思った。

それはルイが常々言っていた言葉を咀嚼する。

「ヒカルは『こちら』と『あちら』を区別したがる」と言われて、自分がそういう傲慢な考え方をしていることに初めて気がついた。
ヒカルの「こちら」はルイの「あちら」なのだと、気がつかなかった。

でも、何てことはないのだ。

区別していることを非難されていたのではなかったのだ。
・・・・自分もルイと同じ場所に居たのに。
それに気がつかずに、同じ場所に立っていながら、こっちとあっちを線引きしている様が滑稽だと言われていたのだ。

「曲げてお願いしたい。・・・ジルに会わせて欲しい」
どうして自分を選んだのか。
ジルに尋ねたかった。
アルディの薔薇たちは、皆、本当のことしか言わない。
でも、それは全部ではない。
自分でひとつずつ真実を拾い上げて組み立てていけと問われていると思った。

難しく考える必要はないのかもしれない。

でも、自分が生まれてきた意味、ここまで育ててくれたシャルルの真意、そしてルイやミシェルが本当は何を思っているのか、それは自分なりに回答を導き出さないと見えてこないのだということはわかった。

彼女はもう一度言った。
目の前の、美しい人に、視線を反らさずに言った。

「シャルル。私は、ジルに会いたい。ノンと言わないで、お願いだから。
今、シャルルが話してくれたこと・・・自分なりに考えたい。事実を曲げられないなら、きちんと知るべきだと思う」

「それは殊勝な考え方だけれど」
ルイが言った。
それまで黙っていたのに、彼は口を開いてヒカルに告げる。

「時間がないんだ」
「なぜ？」

時間がないなら、それこそ早く彼女に逢わせて欲しい。
彼女は懇願した。

「私はシャルルにお願いしているの。ルイ・・・だってそうでしょう。
なぜ、今になってこうやって何かが動いていることを見せる一方で、私にまた隠すの？」
「知ってもどうにもならないことがあるってことだよ」
シャルルは哀しそうに言った。
「どうにもならないのではなくて、どうにかしたいと思わないだけなのかもしれないけれど」
ルイがそう言ったので、青灰色の瞳を歪めて、シャルルは息子の名前を呼んで窘めた。
「同席しろと言ったのは、シャルルだよ・・・そして、オレに着いていけ、と言うつもりなのだろう」
「ヒカルはアルディの人間ではないからね」
シャルルが言った言葉に、ヒカルは眉を曇らせた。
彼女の教育係を務めていたジルとは、許可がなければ会えない・・・
彼女は一体、どんな環境で暮らしているのだろうか。
そう考えると、ヒカルの胸が疼いた。
予感めいた何かを感じる。

それなら、と彼女は息を吸って、茶色の瞳を一度だけ大きく瞬かせた。

「提供の承諾書にはサインをします。でもジルに会わせてくれるというのが条件」
「言うと思ったよ」
ルイは微笑んだ。
見事な金髪の前髪の下で、シャルルと同じだけれども酷薄そうな瞳が、ちかりと光ったような気がした。
彼の興味が、この対顔に移っているのだと思った。
想定のことであったはずだろうに、ルイは可笑しそうに、ヒカルは退屈しないね、と言って嘲ら笑いを浮かべた。

「反対はしない」
シャルルは静かに言った。
整った顔は無表情で、何を考えているのかわからなかった。
彼が表情を殺して、何かを遮断しているのだと思った。
「これも想定内だから。・・・・ヒカルがいずれジルに会いに行くと思った。
このカルテは電子ファイルになっているから、後でデータを転送しておくよ。
これはヒカルの記録だからね・・・系図原簿だと思って、大事に保管するように」
アルディ家の持つダウンロード用サーバーのパスコードをシャルルが伝えると、ヒカルはありが

とう、と言ってその帳票を眺めた。
電子カルテ化されているのに、シャルルはこれを直筆で書き綴っていた。
そして、その前はジルが。
何を思って書いていたのだろう。
何を思って読み返して居たのだろう。
ヒカルの体調管理のカルテという役割だけではなかったはずだ。

特に、シャルルには。

あの人がヒカルを出産するまでの経緯が事細かに書かれており、出産後は母子ともに健康状態や生活環境の問診結果や、様々な詳細データが残されているはずだった。
ヒカルの年齢で、これほど多くの情報量は蓄積されないはずなのに。
・・・シャルルは私を実験道具として扱っているわけではない。

根拠はなかったけれど、きっとそうだと思った。
そうであって欲しいという願望なのかもしれないけれど、それでも良いと思った。

私とシャルルを繋げる糸は細く短い一本だけではない。

そう思えたから。

このカルテを何年も書いてくれていたシャルルを信じようと思う。
そして、今、目の前にいる人は、私が会いたいと思っていたシャルルなのだと確認した。
だから・・・
だから、彼が「反対はしない」と言った言葉は「行っておいで」と言ったのだと思うことにする。
都合が良いし、勝手だけれども。
でも、私はちゃんと答えを出さないといけない時が来たのだろう。

母のこと、シャルルのこと、長らく会っていなかったジルのこと、ルイがどうして・・・どうして私を郭公と呼ぶのかということ・・・

いろんな事が絡み合って、シャルルとヒカルをつなぎ止めているのだと思う。

ひとつひとつゆっくり確実に解いていけば、答えが出るだろうか。

「・・・時間がないと言ったはずだよ」

ルイがヒカルの思考を読み取ったかのように言ったので、ヒカルは当主に良く似た金髪の貴公子を見た。
「出発は明日。・・・・ヒカル、他に約束を忘れていないか？ミシェルが後で客棟に来いと言っていたと思うけれど」
「行かなくて良い」
シャルルが短く拒絶した。
先ほどの無表情から一変して、厳しい顔立ちになっていた。

シャルルは立ち上がると、このカルテは後で片付けさせるから、と言って話を切り上げた。
「ヒカル。・・・ミシェルと面会は好ましくない」
「でも会っても良い、ということなんだね」
ルイがそう補足するように言ったので、シャルルは彼に一瞥した。
「ヒカルの好きにしろ。・・・ただし、ミシェルには彼の所見があるからね。・・・それを忘れないように」
シャルルがこれまでにない許可を出してきたので、ヒカルはちょっと意外そうにシャルルを見た。
「よく記憶します・・・」
ヒカルはかつて、シャルルに忠告されたときにいつも発していた言葉を、思わず口に出して言った。
その様子に、シャルルは少しだけ表情を柔らかくして言う。
「・・・今日のディナーは一緒に。
その前の時間は僅かだけれど、その間にミシェルに面会することは許可しよう。
ヒカルも成年だから・・・もう、オレの許可は必要ないのだけれどもね」
彼は少し寂しそうに言った。

そのやり取りを、ルイは・・・ひとりだけ座ったまま、じっと瞬きを忘れたかのように、観察することに専念していた。
同時に何かを計算していたのかもしれないが、シャルルとヒカルは彼を意識していなかったので、その様に少しだけ変化が生じていたことにその時はまだ気がつかなかった。

■124

小部屋は息苦しかった。
大人が3人で話をするにはあまり広くない。

ここの部屋を残しておく用途がわからなかった。
防犯カメラも集音マイクもないセキュリティが皆無の空間がこの館に存在することが奇妙だった

。

シャルルは立ち上がると、用事は終わったね、と言って部屋を出て行った。
重い防音扉を開けると、密閉押された空間に、外から涼風が入り込んできた。
シャルルは振り返って立ち去る際に、ヒカルに小さく微笑んだ。
経年してなお、美しい笑顔で、それはヒカルの最も古い記憶から少しも変わっていない。

日本にいる間、自分の押し殺してきた何かを解放してみようと思った。
少しだけ、自分の意思を伝える術を覚えた。
でもそれはシャルルの知っているヒカル・クロスではなく、久方ぶりの再会で、彼にがっかりさせてしまったのではないのだろうかと思うと、とても・・・彼女は遣る方無い表情を浮かべるしかなかった。
「そんな顔をするな」
シャルルが言った。
彼の方が苦しくなるくらい、悲嘆に暮れたヒカルの表情は、すでに少女期を抜けて、大人の女性の笑みだった。

あの人も、時々、こんな表情をした。
シャルルの気持ちに応えたい、と言った時のあの人の顔は今の・・・ヒカルと同じ表情だった。

シャルルはそれ以上居られないと言うかのように、少し疲れた表情で表を厳しく引き締めた。
ディナーの時間を告げる。
必ずそれまでには戻るようにと年を押した。
「あなたの監護権は消滅しても・・・オレはまだ君の養い親だと自負しているからね」
彼はそう言って微笑んだ。
「親」と言われて、ヒカルは言葉に詰まった。
それが彼の出した結論なのだろうかと早急に答えを出しそうになる。

ディナーとして指定された開始時間は少し遅めの時間だったが、夕刻に目が醒めて活動していたヒカルには丁度良い時間だった。

「若いから大丈夫だろう」
彼は揶揄するように言って、そのまま部屋を出た。

防音扉を開けると、何人か、秘書らしき者が待機している様が見えた。
彼は業務を中断して、この会合を設定したらしい。
・・・まだ体は相当疲れているはずなのに。

すでに、いつものシャルル・ドゥ・アルディだった。

シャルルの姿が消えてからも、ヒカルは暫くの間、扉を見つめていた。
彼のもたらした情報量は膨大だった。
そして、彼が・・・彼らが隠し続けていたヒカルの情報を今、開示した理由を考えた。

「ぼんやりしてないで、立つか座るか・・・部屋を出るか選択してくれ」
ルイに声をかけられて、ヒカルは彼の方をようやく見た。
不機嫌そうなルイが、脚を組んで、シャルルの話を傍聴していたときの姿のまま、彼女に話しかけていた。
煙草が吸いたいのだろうか。
彼は腕を組んで、細い指先をとんとん、と腕の上で軽く叩いていた。
その仕草は、先ほどのシャルルが机の上で指を叩いた仕草と同じだった。

「明日には出発する。・・・準備しておけ」
彼はそう言うと、立ち上がった。
膨大な量のカルテをちらりと一瞥した。
「出発って・・・どこへ？」
「・・・・聞いてなかったのか？ヒカルの耳は飾りか？」
呆れたな、と言ってルイが立ち上がった。
光り輝く金髪でなければ、彼は若い頃のシャルルそのものだった。
気怠げなその物腰も。
そして・・・・いつも結論しか言わないその物言いも。
何もかもがシャルルに似ているのに、どうしてもシャルルに見えない、星辰の子を・・・・
ヒカルは複雑な思いで見つめていた。

彼と彼女は同じだ。
同じように、誰かに操作されて生まれてきた。
でも、それは生きていくための理由ではない。

「何時に出発なの？」
「・・・・オレの気の向いたとき」

彼は薄く笑って、腰に手を当てて伸びをした。
若い彼には、黙って座っていることそのものも苦痛であったはずなのに・・・・
彼は無言で一部始終を聞き取っていた。

「止して。・・・・ジルの処ね？」

ヒカルがそう言うと、どうかな、と言って彼は声を漏らして笑った。

「それより前にミシェルの処だ。早く行け。彼は案外あれで気が短い。人を待たせることは厭わないが、人に待たされるのは嫌いなんだ」

ヒカルは茶色の瞳をちょっと大きく見開いた。
彼が叔父のことをそういう風に言う様を初めて見たからである。

「意外だわ。・・・ルイがそういう風に言うなんて」
「ミシェルのことを絶対だと思っていると思っていたの？
・・・・彼はシャルルの半身だぜ」

ルイはそう言うと、彼女に甘く微笑んだ。
それが作られた微笑みであるとわかっていたのに、彼女は少し・・・嬉しかった。
かつて「人でなくなってきた」と実父に言われたルイから、少しずつ様変わりしてきているような奇がしたからだ。

こうして、自分が実はルイと同じ場所に立っていたことを知ったからこそ、そういう風に思えるのかもしれない。

「ヒカル」
ルイは彼女の名前を呼んだ。
「オレと同じと思うなよ」
「・・・・」
「オレはルイ・ドゥ・アルディであり、オマエはヒカル・クロスであることに変わりはない」
「わかった」
ヒカルは微笑んだ。
どうしてそこで微笑むんだ、と彼は訝しげな顔をした。

「早く行け・・・オレは後で行く」
彼はそう言うと、次に少しだけ彼の言葉を補足した。
「このカルテの山を始末するのはオレの役割だろ。不本意だけれどもね」
彼は顎で、机の上のファイルを指した。

「ルイ・・・・私のこと、知っていたの？」

「何を？」
「私が・・・その・・・・私が人工受精児だってこと」
「だから何？オレはそれに対しては別に感想はないよ」
彼は冷たく言った。

「オレと同じだね、とか・・・ヒカルに共感するよ、とか。そんな陳腐な言葉を言って欲しいのであれば、残念だけれど、オレには言うだけの思いやりが存在しない」

彼はヒカルと同じ経緯で生まれ・・・「適格者」として選別されて、そして借り腹から生まれてきた。
誰にも望まれずに・・・
いや、親以外の誰かに望まれて。
彼女も彼もジーンリッチだ。

ヒトＥＳ細胞で優性の彼女に、ルイと同じように新しい種であるという理由でシャルルが彼女を引き取ったと思っていた。
でも違った。
ルイよりヒカルを優遇するだけの何かを・・・
いや、それ以上の何かをシャルルが感じていることが、彼はこの上なく屈辱であると感じていた。

なぜ自分は当主になれないのか
なぜ自分を彼は見ないのか
なぜ・・・ヒカルはルイを見ないのか

彼は溜息をついた。

「すぐ行くよ。煙草を1本吸わせてくれ」

彼はそう言って、もう行け、と言った。

■125

「忘れられたかと思ったよ」
「こちらにいらっしゃるとは思わなかったので・・・」
丁寧に詫びたが、先ほどのミシェルとルイとのやり取りのすぐ後とは思えない、彼の静逸さにヒカルは戸惑った。
ルイに激しく車を蹴り上げられても動じない、シャルル・ドゥ・アルディの半身は、薔薇園でルイがよく座っているベンチに腰掛けて、煙草を燻らせていた。

居ると思っていた客棟には、すでに彼は居なかった。
探してごらん、とでも言うかのように。
出されてあったティーもとっくに冷めていた。

ヒカルは来客扱いであったから、探す場所も限られてしまう。
自由に邸内を泳ぎ渡るミシェルの居所をあれこれ尋ねてみたが、彼が行きそうなアルディ邸の特定の場所、というのがヒカルにはわからなかった。
そこで、彼女はミシェルのことをほとんど知らなかったことに今更ながら気がつく。

アルディ家の薔薇たちは･･･
これほど長い時間を一緒に過ごしたのに、これほど誰よりも多く接触したのに、まったく彼らを知る術を残さない人々なのだと思った。
ジルの居所さえ、彼女は知らない。

もう、薔薇の香気で迷うことはしたくなかった。

総硝子張りの温室に灯りが点いていて、そこに3人目のアルディの薔薇が居ることがようやくわかった。
彼はぼんやりと煙草を吸っていたが、その様はルイにも良く似ていた。
そして・・・シャルルより纏う空気が冷たかった。
季節は夏なのに。
彼は、季節も年月も何もかもを超越したような気がした。
シャルルはもっと違う。
彼は年月の経過を受け入れている。
季節の隆盛を知っている。

「‥‥今、シャルルとオレを比べただろう」
ミシェルが静かにそう言ったので、ヒカルはえっと言って瞳を見開いた。
彼はくすくす笑って、顔に書いてあるよと言った。
そしてまた煙草を吸った。

「ここは‥‥惑乱の場所だね。
　シャルルはここで毎夏狂い咲きをするし。
　ルイは自らを深く沈めるためにここにやって来る」

それなら、ミシェル・ドゥ･アルディはどうなのだろう。
彼は、なぜここにやって来るのだろう。
かつては、彼を中庭に案内したことがあったが、その際には彼は薔薇園には入っていない様子だった。
しかし今あのミシェルの様子は、ここへ入ることにかなり慣れている様子だった。

「どうしてここに？」
「退屈だから。ヒカルを待って居て、退屈しすぎて散歩に先に出てしまったよ」
彼はそう言うと、途中まで吸っていた煙草を揉み消して、また新しく煙草に火を付けた。
「最初の吸い始めが良い。
　・・・何事もね。劈頭喫緊と言うしね」
アルディの庭は、夏の虫の音以外はまったく何も聞こえない。
その音さえも・・・ミシェルはうるさいね、と言って整った顔を少しだけしかめた。

「毎日‥‥毎日こうして花を愛でる生活を主は好んで過ごすけれど‥‥」
ミシェルは言った。
「作った後は、何も興味が湧かないらしい。創造主の最も優れているところであるけれど」
薔薇の品種改良の事だけを言っているわけではないのだと思った。
きっと、ルイのことを指しているのだ。
「そのうち、あなたにもわかるよ」
ミシェルは言葉が過ぎた、と思ったらしく、煙草を口にくわえながら笑った。

「ディナーはもう終わったの？・・・だとしたら、ヒカルは相当な大食らいだね」
「まだ。これからです」
ヒカルは彼と距離を保って言った。

彼の研ぎ澄まされた鋭利な刃物のような空気に、非常に緊張する。

いつもいつも。
でも、彼はいつも真実しか言わない。
しかも、それはいつも「適切な時期より少し早め」なのだと思う。
後になって彼の言葉に気がつくヒカルが愚鈍なのだ、とルイは言うかもしれないけれど、ミシェルは何か・・いつもそれを計算して言っているように思った。
だから、今回、ジルのことにについて、こちらから聞いてみようと思ったのだ。
それもミシェルの計算のうちなのかもしれないけれど。

ふうん、と彼はつまらなさそうに言った。
「と、いうことは主の許可は得てきたわけだね。・・・ルイは･･･同席しろと言われたのに･･･」
「少し用事を済ませてから来ると言っていた」ヒカルは彼の代弁をした。
「あれほどオレとあなたが一緒に居るところを、激昂してからあまり時間も経過していないのに、ルイは時々予測不能なことをしでかすね」
甥のことをそのように言ったので、この2人は本当のところは互いのことをどう思っているのだろうか、とヒカルは少し疑問に思った。

そんなヒカルの考えは。
ミシェルにはすぐに察知できたらしい。
彼は薄く笑った。
「ヒカルが思っているほど、単純じゃないってこと」

「話をしましょう。時間がない」
「何について？簡潔に」
ミシェルはそう言って、この煙草を2本吸い終わるまでに終わらせるように、と言った。

薔薇園は、むせかえるような香りで溢れている。
夏の間は、シャルルはこの薔薇園に終始居るらしい。
いつもより、もっと株が増えていた。
もっとも、ヒカルが知り得るのは、ここを去る直前の薔薇園だったが。

遠目で見た薔薇園の内部より、近くで見るこの場所は・・・どうにも切なかった。
シャルルが少年に戻る空間であり、ここで何度となく・・・
ここで展開される、ヒカルの知らない女とシャルルが交わす言葉や行為を考えると、ヒカルはいたたまれなくなって体中が締め付けられるような感覚を感じざるを得ない。

「では、簡潔に」
彼女は言った。

どうぞ、とミシェルは新しい煙草に火を付けた。
「まずは･･･ジルは今どこ？」
「明日ルイが連れて行くはずだよ。・・・シャルルが許可したのであれば」
「････ということは、ルイも知っているということね」
「そうだね。彼はかなり頻繁に彼女のところに出向いているよ」
ヒカルは言葉に詰まった。
「知らなかった・・・・・」
「ヒカルに断りを入れて行かねばならない理由はないだろう」
彼は不思議な子だね、と言って笑った。

「じゃ、私が知らないだけだったのね」
「知りたくない者に知らせる必要はないだろう」
ミシェルの言葉に返す言葉もなかった。
「ジルは、教育係を退任してから、何をしていたの？」
ミシェルの間が少しだけあいた。
「･･･なにも」
「何も？」
ヒカルは一歩前に身を乗り出した。

いつまでそこに立っているつもり？

ミシェルに言われたが、彼の隣に座るつもりはなかった。
そのベンチは、いつか、彼女が頭を強打して倒れた場所でもあるし･･･
ルイの特別な場所だと思ったので、ルイの許可がなければ、座ってはいけない気がした。
それに、座り込んで長い話をする時間も残されていない。

「ミシェルは何もかも知っていたのね」
「何もかもの範囲がわからないな」
「････私が人工受精児でスクリーニングされていることも。
ジルがそれに関わっていることも。
それが原因で、彼女が退任に追い込まれて、その後・・・表に出てこなくなってしまったことも
」
「オレを誰だと思っているの？」
ミシェルは酷笑した。
「ミシェル・ドゥ･アルディが･･･何も知らないと思っているの？オレはそれなら、何をしてここに居るべきなの？」
そうだった。

彼は、何もかもしっているはずだった。
ルイを引き取り、彼の教育係をつとめ、そしてシャルルの実弟であり・・・彼の代役を務める彼が･･･何も知らないわけはない。

「ジルのことは、会って確認してくるが良いよ。今、話を聞いても、納得しないだろうから」
「････それがミシェル・ドゥ･アルディの答えなのね」
「そう。すべてにおける答えだ。『今、聞いてもわからない』この言葉はヒカルへ捧げよう」

■126

「質問は・・・・？
　あと1本吸ったら、オレの散歩は終わりだ」
ヒカルは茶色の瞳をミシェル・ドゥ･アルディに注いだ。
「ある」
「オレを退屈させないでくれよ。
　あなたを待って随分時間を無駄にしてしまったのだからね」
ヒカルは立ったままで・・・ミシェルを見た。

「ミシェルはどうしてシャルルを治そうとしないの？」
「その質問には答えたと思うけれど」
彼はこの質問にも少し間を置いた。

「シャルルが死んでも、次の当主候補はいるわけだし。
そろそろ・・・シャルルも親族会議を納得させて、現状維持し続けるにも限界があるだろう。
続くことが確約されているからこそ安泰とか恬静でいられるわけだしね」

「ミシェルはルイとシャルルがどう在って欲しいの？」
彼が親族会で実質、シャルルに関する以外の発言権を剥奪されているのは知っている。
けれども、それは表向のことで、ミシェルは絶大な力を持つ。
シャルルの半身であり、ルイの教育係でもあった彼を蔑ろにしていることは決してないはずだ。
「オレにはどちらがどうなってもあまり大差ないよ」
ミシェルは涼やかに言った。

シャルルの持っているものと、ルイの持っているものは少しずつ違うけれど、アルディ家を存続させる器としては、変わりがない。
彼はそう言ったので、ヒカルはミシェルのことを聞きたかったが、途中で言葉を入れた。
話をすり替えられそうになったので、ヒカルは彼の話を集中して聴くことに専念した。

「親族会では・・・ジルと、ルパートと、アンドリューが退いて･･･それからミシェルの発言権がなくなって、ルイを推す声が高まっているはずだし」
「おや、そんな政治的な話をヒカルがするようになるとは思わなかったよ。たとえ知っていても温室から外に出ることはしないと思っていた」
それなら・・・・
それなら、温室の中で生まれたのに、外に出ざるを得なかったアルディの薔薇達は、今、いったいどうしているのだろうかと思った。

ヒカルはふと、疑問を口にした。
ミシェルがシャルルの病を治さないのはどうしてだろう。
ルイの後ろ楯なのに、彼を積極的に当主の座に押し上げないのはなぜだろう。
なぜ、ジルの居所を彼が知っているのだろう。
どうして････ヒカルに冷酷でありながらいつも真実を告げるのだろう。

「ミシェルは、シャルルが当主から降りて欲しいと思っているの？」
その瞬間のことだった。
「ヒカル・・・口は災いの元だよ」
彼はそう言うと立ち上がろうとしたので、ヒカルは待って、と言った。
「ミシェル。・・・まだ最後の1本が吸い終わっていないわよ」
彼がその言葉のどこに動揺したのか、わからなかった。
ただしかし、何か、酷く憤慨しているらしい。
彼が憤るときは、報復にいつもヒカルを傷つけた。

ミシェルは誇り高い。
シャルルと違う意味で、孤高の人物だ。
誰かの意見を聞き入れることもしない。彼は間違わないから。
そして、シャルルと直接話をすることもほとんどないのに、ジルが居ない今は、彼の事を最もよく知る人だ。
系図原簿を閲覧できる者は今、3人だけだ。
シャルルとミシェルとルイ。
同じ貌を持つ男達だけが、あれらを閲覧し、加除を行うことができる。
シャルルの病歴を知り、彼の治療方法を知り・・・彼と同じ遺伝子を持つ者。

「ミシェルはシャルルに治療して欲しいと思っているのね？
だけれども、シャルルはウィと言わないから･･･だから、ルイを･･･」
彼の奇行は今に始まったことではない。

きっと、ルイが生まれた時から兆候はあったはずだ。

引き取ったのね、と最後まで言う代わりに、ミシェルが煙草をぱっと手放して、地面に落とした。
「吸い終わったよ」
美しい微笑みで、気怠げな青灰色の瞳を、ヒカルに向けた。
魅惑的な低いバリトンで、彼は静かに穏やかにそう言ったが、眼光鋭く･･･奥まった双眸は、これ以上ヒカルが話をすることを許可しなかった。

ヒカルは溜息をついた。
彼が話を切り上げるのであれば、これ以上本当に話をしてくれないだろう。
ミシェルは決定を覆さない。どんな時でも。

「･･･良いよ。ミシェルが話をしてくれないのであれば、ジルに聞く」
「ジルがその話を快くするとは思えないけれどもね」
ミシェルは最後に一言だけ、と言って、ヒカルに微笑んだ。
冷たい････いつも大勢に囲まれている時に見る、彼の薄氷のような仮面にミシェルは覆われていた。

煙草はまだ吸いかけだった。
地面の上で燻るその様は････

日本で両親の魂を弔うときに上げる香煙縷々とした様を思い出した。

彼が煙草を吸うときは、何かを誤魔化すときだと思っていた。
違うのだろうか。
彼は････誰かを弔っているのだろうか。いや、違う････
彼はいつも････そう･･･何かを訴えたいときに煙草を吸う。
その煙に乗せて、何かを誰かに伝えたいのだと思った。

「ミシェルは頻繁にジルに会っているようね」
「･････」
ミシェルは微笑んだ。
白金の髪が揺れて･･･シャルルのような微笑みをした。

しかし、彼はヒカルを次の瞬間、強くにらみ据えた。

「アルディの薔薇園を無邪気に踏みにじるのであれば、相当の覚悟をしてから行け。
贖罪の娘。それでも･･･ジルにすべてを聞き出すことが出来るのであれば、オレはクィーンを取られたと思い、おまえの問いに答えることにしよう」
そう、謎めいた予言のような言葉を残して････
踵を返して、彼は去った。
ヒカルの方を見向きもしなかったし、これからどうするとも言わなかった。
これからのことをすべて予見しているようだった。

ヒカルは残されて････煙草を拾い上げて完全に鎮火させてから、ふと、
内部を見渡した。

・・・品種改良を施された薔薇たちは、たった今、水撒きされたかのように、土が湿りっていた。
ラックに乗せられた鉢からは水が滴り落ちている。
薔薇園にはまったく興味がなかったかのようであったのに。

････ミシェルが水遣りをしたのだ。
渇いた土に･･･彼が水を与えた。

■127

とうとうルイは来なかった。
後から行く、と言ったのに、彼は来なかった。

しばらく待っていたがルイは来なかったので、彼女は指定された時間が近いことを知って、慌てて一度部屋に戻り、着替えの支度をすることにした。
そのままの格好では、夜の遅い晩餐に相応しくない。
しかし、短期滞在で、このような状況を想定していなかったので、適当な服装がなく、ヒカルは少し考えてしまった。
仕方がない。
ルイには眉を顰められるかもしれないけれど、このままの服装で出席するしかない、と思った。

彼女が懐かしい、ずいぶん長い間過ごしたアルディ邸の一角にある彼女の部屋に戻ると、良く効いた空調の部屋に届け物があった。

彼女に2着のドレスが届いていた。

ひとつは、シャルルから。
もうひとつは、ルイから。

どちらも、靴からペチコートからすべて揃えてあった。
シャルルは淡い紺瑠璃の裾の短い、若々しいドレスを選んであった。
薄い長袖になっていて、彼女の白い肌によく映える色だった。
そして、ヒカルがまだケガをして所々包帯や絆創膏をあてていることを配慮した、肌を極力露出させないデザインだった。

ルイは対照的だった。
彼がこんな色を選ぶとは思わなかった。
猩猩緋（伝説の生きものの血とされる。鮮やかな赤）のドレスだった。
ヒカルの髪の色に合わせて鮮やかな色を選択したらしい。
赤いので、擦過傷にあてられている肌色のナノシート（絆創膏の代替品。極薄で肌の再生能力を高める）が目立たない。

･･･ヒカルは少し、言葉に詰まった。
こういう気遣いを嬉しいと思う反面、どちらを最初に手に取ったのか、言えないと思った。
選ぶゆとりは、彼女にはなかった。
彼女は･･･ヒカルは、最初に、青い衣を手に取ったのだ。
そして、これを着るように、と書かれたシャルルの直筆のサインに･･･真っ先に手を伸ばしたのだ。
ルイの緋色の衣よりも、シャルルの用意した、彼女を思って贈られた綺羅を、迷いもなく選んだ自分が･･･どうにも醜いと思った。

自分が誰を欲しているのかはもう結論が出ていた。
でもルイを見捨てる事なんて出来ない。
シャルルに向かって体当たりをしたと同じように･･･ヒカルは冷たいけれどもどうにも冷たくなりきれない、星辰の子と呼ばれた孤独な人を救いたかった。
自分はルイと同じように生まれてきたのに、自分が区別していたのだ。
歩み寄っていなかったのは自分の方だった。
だからこそ･･･今、自分が「贖罪の娘」と長らく呼ばれ、ルイからは「郭公の娘」と言われることをそのとおりなのだと理解しなければならないと思った。

昔は。
幼い時は。
今の自分でないときの自分は。

そうじゃない、とシャルルに否定してもらえば、それで良かった。

でも、それは違っていた。
シャルルもヒカルに黙っていた秘密があった。
ヒカルにも、自身が知らない秘密があった。
ジルにも、ルイにも、ミシェルにも。
それでもなお、その蔽われた何かを互いに隠してでも伝えたいと思いながら居た。
この薔薇の一族の人々は不器用だ。
そして自らの重苦の種を抱えながら生きている。

自分は‥‥生きている意味がある。それは自分で作るべきなのだ。
誰かに差し示してもらう人生は必要でない。

彼女は大人になったのだから。

部屋に入ると、シャルルとルイが立席して彼女を迎えた。
着ている服の色を見て、ルイは少しだけ眉を動かしたが、シャルルは似合っているよ、と微笑んで彼女をエスコートし、自らが椅子を引いてヒカルを着席させた。

久しぶりのアルディ家での食事だったのに、ヒカルは非常に緊張して‥‥
食事が喉を通らなかった。

彼女がいつも使っていた食器に、好んだ料理が出てきた。こんなにもう食べられないよ、と言うと、シャルルはまだまだ若いのだから、と年寄りめいたことを言うので、ヒカルはその時だけ少し笑った。

「いつもの」ディナーでないのは、彼女にワインが振る舞われたことだった。
前は食前酒程度で口を付ける程の量だけが出てきたが、今回は、ヒカルの生まれた年のボルドーが用意された。
経年して、こっくりとしたとろみを纏ったそれはまったく初めて口にする味だった。

‥‥‥シャルルが心配するので、できるだけまんべんなく口にするようにした。

だが、決して目を合わせようとしないルイが気になり、結局ほとんど手を付けなかった。
「美容に悪いしね」
彼女は軽口を叩いたが、酷く疲れていた。
夕刻に目が醒めたのに‥‥今日も一日、どうにも疲れ果てていた。

自分の生まれを聞いて、その晩餐にフルコースを食べられる神経があったら、是非分けて欲しいね、とルイは言った。
彼は液体しか口にしていなかった。
アルコールを飲んでいると言うことは、今夜は外出しないで、敷地内に宿泊するのだろうか。あのセーフハウスが、今の彼の本当の家であり、彼の城なのかと思うと、ヒカルは少し切なくなった。

ヒカルが居ない長い年月の間、こうして2人で食事をすることもあっただろう。
‥‥ルイはその点では約束を違えない。

誰が見ていようと、誰も見ていなくても。

彼はヒカルと約束したことを忠実に守ったはずだ。
話しかけてもらえない父と共にする、味気ない晩餐。
彼は食事をほとんど摂らず・・・ただ、その時間が過ぎるのを待つように、酒に手を伸ばす。
その様が手に取るようにわかった。

「先に休みます」
ルイは最後のドルチェとティーが出てきたときに、そう言って席を立った。
「明日は早いから‥‥ヒカル、寝坊するなよ」
そう言って彼は横を向いて、出て行ってしまった。
彼はほとんど食事に手を付けていない。
一体、何を食べて生きているのだろう。
ヒカルも喉を通らないとはいえ、口を付けた。
体力が保たないからだ。

シャルルと残されて‥‥‥
ヒカルは気まずさで、彼女が好んだフルーツケーキが出されていたのに、それを細かくフォークで切り刻んで、少しずつ口に運んだ。
味がしない。

美味しいはずなのに。

「ヒカル、そのドレス、よく似合っているよ」
シャルルに不意に声をかけられて、ヒカルは顔を上げた。
ルイに、あのドレスを選ばなかったことを、いつどうやって伝えようかと考えていたときだった。
「オレと一緒のときくらいには、こちらを向いてくれないか。・・・久々なのだしね」
彼は静かにそう言った。
ヒカルがフォークを置いて、顔を上げる。
茶色の髪は後ろで緩く束ねられていた。

シャルルと一緒にパーティーに出た時のことを思い出した。

彼は･･･いつもヒカルに最も相応しい服装を用意する。
歩きにくいからと言って踵の低い靴を用意する。
そして･･･今は、彼女の疵を思い遣って、こうして露出の少ない衣装を用意する。
自分だって、まだ痛いはずなのに。

どうして彼は、いつも・・いつもヒカルを優先するのだろうか。
彼の気質は、元々そういうものだ。
自分より他人を優先する。

そして一度、心を許した者にはとことん・・・犠牲を払う。
ヒカルの母にしたように。
時には、自分の命さえ差し出す。
そして一生･･･定めた者の立場を入れ替えたり、愛する順序を変えたり･･･誰かを同じようには愛さない。

彼が自分を優先するときは・・・　あの、無幻状態に陥ったときだけなのだろうか。

■128

「何を考えているの？」
そう尋ねられて、ヒカルはアルコールで火照った頬に自らの手の平をあてながら、振り返った。

食事が終わり、シャルルとヒカルは、昔のように･･･隣にしつらえられた談話室で寛いでいた。
ここで食事の後、幼いヒカルは彼と一緒に遊んだり、知らず知らずのうちにフランス語の会話や

アルディ家のしきたりなど、すべてを無理なく教わった。
最後に読んでもらった「幸福の王子」は、図書棟に保管されているのだろうか。
彼が幼少の頃に好きだったと明かしてくれたあの本を。

シャルルはソファにもたれ掛かって、今度はブランデーを手にしていた。
香りを楽しみながら、少しずつ口に含んでいる。
ヒカルはちょっと眉を上げて、シャルルを窘めた。
「シャルル。・・・傷に障る」
「それはヒカルも一緒だろう」
彼は声を漏らして笑った。
ヒカルの手元にある、淡い色のカクテルのことを言った。
「鎮痛剤を飲んでいるのなら、併用はおすすめできないな」
「‥‥大丈夫よ。ほどほどにする」
ヒカルはそう言って微笑んだ。

「それが今の答え？」
静かなテノールでそう言われて、彼女は短めの丈から覗く膝を改めて揃え直した。

こんな静かな夜を‥‥
「戻って来た」シャルルとすぐに迎えられるとは思っていなかった。
そもそも‥‥このパリ滞在が、これほど激流にのまれるような慌ただしいものだとは思っていなかったのである。

「さっき、ルイが‥‥ミシェルと合流すると言っていたのに、来なかったので‥‥」
「指示を守らなかったのか」
シャルルが眉根を顰めて‥‥あからさまに嫌そうな顔をした。
ヒカルは、少し躊躇ったが、シャルルに話を切り出した。

「シャルル。‥‥シャルルが私に何か話していないことがあるのは知っている」
「隠すことと話していないことは別だと思うが」
彼がそう言ったので、ヒカルはそれもわかっている、と付け加えた。
でも少し哀しい、と言った。
「何でも話すことが良いとは思わないけれど・・・」
その先の言葉は言わなかった。
非難めいた言葉を言っても仕方がないから。

「シャルル、ルイのことだけれど」

遂に、この件で話をするときが着た、と思った。
シャルルは想定していたかのように、「続けて」と言った。
脚を組んで‥‥そしてヒカルを促した。

「ルイと結婚はしないよ」
「そう」
「でもシャルルの傍に居たい」
「それは駄目だ」
彼は歌うように軽い口調で言った。

「私が有資格者なら‥‥シャルルと結婚してもおかしくないでしょう」
「ヒカル、気は確かか？」
シャルルは呆れたように言った。
大げさに溜息をついた。

「オレはアルディ家の当主で、一度離婚もしている。ルイの母とだ。‥‥しかもルイという実子より年下の娘を、当主の婦人として迎えるつもりはないよ」
彼がそう言ったので、ヒカルはシャルルを見据えた。
「もっと私が納得できる理由を頂戴」
茶色の瞳を大きく見開いて、彼女は対面に座るシャルルに、身を乗り出すようにして言った。

「年下だとか、離婚歴があるとか‥‥それは理由なの？
私のES細胞を手に入れたい、利権を得たいのであれば、現当主のシャルルが婚姻関係を結べば手っ取り早いじゃないの。・・・ルイと結婚しても、彼が当主就任までまだ長い年月が必要であれば‥‥アルディ家の利益にはならないでしょう。それでも利益相反にならないように私を囲っておきたいのであれば、真っ先に‥‥ミシェルかシャルルと結婚させるのが一番近いと思うのだけれど」
「ああ、ヒカル。結婚結婚と連呼して婚姻関係が錦の御旗のようなことは言わないでくれ」
彼は少し困ったように言った。
「その短絡的な思考‥‥母上に似ているよ」
「あの人のことはどうでも良い」
「ヒカル」

そこでぴしゃりとシャルルが強く名前を呼んだので、ヒカルははっとした。
彼は‥‥無表情に、青灰色の瞳の光を強くして、ヒカルを射貫いた。
口許に持っていったブランデーグラスをそのまま静止させて、彼は瞬きも忘れたかのように、彼女を見つめていた。

からん、とグラスの中の透明な氷が音を立てた。
表情を動かさず、切り込まれたような双眸は、明らかに不快感を表していた。

‥‥シャルルが怒っている。

彼女は気がついて、ごめんなさいと言った。
身を縮めて、申し訳ないと言った。
彼は誇り高いので自らを辱める言動は許さなかったが、それ以上に‥‥
彼のファム・ファタルについて誰かが口を差し挟もうものなら容赦がなかったことを思い出した。
それがたとえ、娘であるヒカルであったとしても許されないのだと身をもって知った。
ずきんずきんと胸が痛む。
擦過傷が痛むどころではなかった。
どうして‥‥どうしてそれほどまでにあの人だけを愛するのだろうか。
彼は愛を分け与えることが出来ない。
ヒカルにも‥与えない。
彼の愛は、あの人にだけ捧げられている。

「‥‥親のことをそういう風に言うものではないよ」
彼は彼女の反省を汲み取って、静かにそう言ったものの、かなり憤慨している様子だった。
緊張を緩めて、シャルルは話題を元に戻した。

「それにしても‥‥ルイの処遇は考えないといけない」
シャルルがそう言ったので、ヒカルは「待って」と言った。

■129

「シャルルはどうして‥‥ルイと距離を置くの」
あえて、冷たくするの、とは言わなかった。
シャルルはヒカルにはこの上なく甘いが、それと同じ待遇がルイへの愛とは限らないからだ。
彼なりに、何か考えがあって、ルイへの対応を決めているのであれば、それはヒカルが口を出すことではない。
しかし、ここになって、ルイとの結婚問題が、単に自分の家族を作りたい、という問題だけで済まされないと言うことがわかり‥‥
長い間、シャルルに尋ねたくても尋ねることが出来なかった質問を、今になってぶつけてみる気

になった。

少しアルコールが入っていたせいもあったのかもしれない。

「なぜそう思う？」
「シャルルは何かに遠慮している気がする」
かたんとグラスを置く音がした。

見れば、シャルルはテーブルの上にグラスを置き、肘当てに肘を立てて、脚を組んだままこちらをじっと見ていた。
挑戦的な青灰色の瞳を見て･･･ああ、彼はミシェルと双子なのだと思わざるを得ない。
彼もこうして、何かに挑む瞳を持っている。
今、決して向けられることのなかった晄を受けて、彼女は総身がかっと熱くなるのを感じた。

「面白いね･･・ヒカルの考察を聞いてみようじゃないか」
彼は微笑んだ。
ミシェルにもルイにも良く似た、挑戦的な微笑みで。

ああ、これが･･･アルディ家の者の、本当の姿なのかもしれない。
誇り高く、誰かに分析されたり推測されたりすることを嫌う、棘に囲まれた人々。
ヒカルは最も近い人物が、ヒカルのために、自らの身を護る荊を抜去して彼女が傷つくことを避けていたのだと、ようやく知った。
シャルル･･･私はこれからシャルルを傷つけるよ････

ごめん、と小さく言ってから、ヒカルはシャルルを見据えた。

これまで･･･一度としてなかった対峙だった。

「シャルル。シャルルはルイが生まれてこなければ良かったと思っているの？」
「ルイという存在が誕生しないという可能性はゼロだ。
　いつか･･･いつか、あり得ることだと思っていたよ」
彼は言った。少しだけ、白金の眉を顰めた。
でも、と彼は言った。

「オレにはミシェルという双子が居る。
　だから安心していた。
　同じDNAを持つ者がいるから、そんな風にアルディ家に新しい種を迎え入れるとは想定しなか

った。オレの代わりを作りたいのであれば、ミシェルが居るから、長い年月をかけて子どもを育てることはしなくても良いはずだ。
　それに、ミシェルはアルディ家の当主に一度は就こうとした男だしね・・・
　親族会はその資格や資質については充分把握しているし、承認しているから。
　･･･いや、当主であるオレの目を盗んで、そんなことをする者が居るとは思わなかった」

そんなことをする者、というのが誰を指しているのかは明白だった。
ヒカルは、それは誰？とは聞けなかった。

「生まれてこなくて良い生命はない」
彼は言い切った。
「それなら、ルイをどうして引き取らなかったの」
単刀直入に聞くね、と前置きして、ヒカルは言った。
「シャルルをもっと・・・知りたいから」
そう言って、茶色の瞳を彼に注いだ。
視線を反らすことはしなかった。
そして･･･シャルルも青灰色の上品な瞳を、ヒカルに注いだ。

年の離れた、仲の良い親子・・・友人･･･それ以上の視線で、彼と彼女は互いを見つめた。
もっとも自分の次に自身の心を深く知っている者・・・深く入り込んで良いと許可をした者同士の交わす視線だった。

年月が経過しても。
互いの秘密を知っても。

それを教えてもらえなかった哀しみを越えても。

それでも･･･私はこの蒼い衣を身につけた。
あなたのメッセージの入った･･･

何日も前から、あらかじめ用意された伝言でない、シャルルの気遣いに真っ先に心が引き寄せられた。

だから、私はシャルルの言葉に耳を傾けたいと思う。
彼女は心の中でシャルルに向かってそう呟いた。

「私は･･･シャルルがルイに対して遠慮しているように見える」

「ルイの母親でなくて？」
「うん･･･ルイに」
ヒカルは言った。
手元にある自分のグラスを持ちながら、静かな空間で、空調の音とシャルルの髪の毛が揺れる音と･･･彼の持つグラスの氷が溶けて動きながら形を変える音だけが聞こえた。

「シャルル、ルイを････当主にすることを考えて」

ヒカルは言った。

「ヒカル。アルディ家のことに口を出すな。・・・いずれ滅ぼされるぞ」
彼は忠告した。
彼がヒカルを守ってやるとは言わなかったので、少しだけ・・・ヒカルはシャルルと距離を感じた。
彼は言っていた。
「監護権が消滅した」と。

ヒカルはもう・・・彼にとっては煩わしい存在でしかないのだろうか。
監護権がなくなったら、彼女に対する罪ほろぼしは終わったと思ったのだろうか。
そんな風に考えたくなかった。
ヒカルは、両親と一緒に過ごした年月の何倍もの長さを、フランスの華と過ごしている。
四季を眺め、憂いを歎き、そして一緒に歩んで来た。
それは間違いようのない事実なのだ。

彼と自分を繋いでいるのが、あの人であれば･･･この因縁の鎖は断ち切らないといけない。
彼は自分に対して贖罪のつもりで・・・育てていたのだったら、彼を解放しなければシャルルは倖せになれない。
わざと言った言葉かもしれないが、彼女は胸が痛んだ。

「私はルイと結婚しないし。･･･でも細胞提供はするよ。シャルルを治して欲しいと思うから。・・・それに遺伝治療に貢献できるのであれば願ってもないことだわ」
彼女はそう言った。
自らが先行する学業が、そこに深く関わっていることも何か、意味があるのだろう。
シャルルは幼い頃から学術書を彼女に読ませていたし、なにより、彼女の父はそういう路を選んだ者だったから。

今なら、彼に、水浸しのタオルを差し出すだけでなく･･･

様々な対処法を考え出すことが出来るのに、と思う。

■130

青灰色の瞳で、今までにない視線でシャルルはヒカルを見つめた。
彼の視線は･･･慈しむ者への視線ではなく、何かを値踏みしているような目線だった。
深く切り込まれた、完璧な平行線を辿った瞳は薄く、そして眼光鋭い。
ヒカルは言葉に詰まる。
「品定め」をされている。
ミシェルやルイよりあからさまなその瞻視に、彼女は黙って顔を上げた。
ここで視線を反らしてはいけないと思った。
彼は今、アルディ家の当主として、彼女を見極めようとしている。

「・・・・なるほど。ジルやミシェルがヒカルを『見霽（みはる）かす者』と言うのがわかるよ」
「え？」
「見霽かす」
彼はもう一度言った。

「麗天の者ってこと」
晄は差し照らすだけではない。

彼はそれだけ言うと、満足そうに笑った。
「ヒカル。
ヒカルをどうして、アルディの男達がこぞって欲しがるのか・・・
特に、ルイが喉から手が出るほどヒカルを渇望するのか、心当たりを探ってご覧。
自ずと答えが出るだろう」
ミシェルと同じようなことを、シャルルは言った。

自ずと答えが出る。
それは自分で答えを出さないとわからないということなのだろう。

ヒカルは困ってしまって、首を僅かに傾げた。
その様子が、あまりにも・・・あの人に似ていたので、シャルルは目を細める。
彼女は、彼が愛したあの人の若い頃にそっくりだ。
クォーターの彼女は、限りなく日本人に近い。

だから非常に・・・若く幼い表情をする。
年齢よりずっと若く見える。
幼く見える。
・・・・あの人の若い頃に見える。

彼を夢の路から引き戻したのは、紛れもない、この茶色の薄い瞳なのだということを思い知る。
茶色の薄い色素の瞳が、彼を戸惑いもなく直視するたびに、彼の心が打ち震えるのを隠さなくてはいけない。

ヒカルは非常に・・・あの人に良く似ている。
昔は彼女の父に良く似ていると思った。
その心根が。

でも、今の彼女はどうだろう。
成年になってもなお、15—6程度の幼さを持つヒカルを見ると。
彼はまた夢の世界に行き着いたのかと錯覚する。
でも、それはあり得ない。

‥‥目の前に、ヒカル・クロスが居るから。
無幻の世界には、ヒカルは存在しない。
闊達に笑う、あの日々の思い出の彼女しか居ない。

誰も近づかないときに彼女は一緒に居たいと言った。
皆が自分に取り巻こうとしたときには興味がないと言った。
その時の目遣いをヒカルのそれは彷彿とさせる。

彼が戻ってくるためには、どうしても彼女が必要だった。
しかし。
あの人と良く似た彼女が必要なのか。
‥‥あの人が必要なのか。
彼は考えないことにした。
結論のでない「もしも」は意味がない。
そして彼が定めた人物はひとりだけだ。

「シャルル」
ヒカルはそっと言った。
何年も何度も何時間も過ごした、静かな二人きりの空間で、彼女は彼に声をかけた。

そして、彼女は笑う。
「私は‥‥シャルルが好き。シャルルの傍に居たい。それが結果で、自ずと出た答えだよ」
彼女は言った。

先ほどまで、あの人そっくりだと思っていた娘の顔が、もっと違った顔に見えた。
・・・彼女は涙を流していたから。

「ああ、ヒカル。どうしてそんなに君は泣き虫になったんだ」

彼は立ち上がって近づきながら言った。
目の前の少女と言った方が良いほどの若い娘は、彼に微笑みながら涙を流す。
こんな表情をする娘ではなかったはずだ。

いつも誰の前でも朗らかに笑い、心中を明かさず、人を優先する。
何か憂いがあっても、ひとり哀しみを堪えていた。

あの父と母の気質をどちらも濃く受け継ぐ娘を愛おしく、自らの贖罪のために・・・
いや、自分を佑ける者として必要としてきたはずなのに。
最も傷ついていたのは、彼女だったのに、それを知らないふりをしてきた。
自分が楽になりたいから‥‥

シャルルは目を瞑った。
シャルル・ドゥ・アルディ。
オレは何を血迷っているんだ。
オレは、誰かに助けを求めたりしない。
誰かに救ってもらいたいと思わない。
それなのに、どうして、この娘は‥‥いつもオレを掬い上げるのだろう。

彼は目の前に座る、背筋を伸ばした若い娘に近づいた。
そして‥‥初めてあの人に近寄った時のように‥‥躊躇いながら、彼女の頬にそっと大きな手の平を乗せた。
彼女の頬はまだ擦過傷が痛々しかった。
ナノシートで保護していたけれど、化粧はできなかったから、素肌に涙を落としていた。
水分を吸収するシートだから、彼女はひりついて痛むのだろう。
少し、顔をしかめていた。
でも、あの人と同じように・・・静かに、大きな黒目がちの瞳を大きく見開いて、
雫をいくつも落としていた。

大人になることは、涙を隠したり誤魔化すことが上手になることだと思っていた。
でも、彼女は幼い時にすでにそれを学んでいた。
彼女は･･･今になって、ようやく、老成していなければならないという透明な膜を破り、自分であることを受け入れ始めているようだった。

■131

「触らないで」
彼女は涙を流したまま、手を伸ばした彼を拒否した。
けれども、彼はそのまま、彼女の頬に、そっと手を触れた。
彼女は一度だけ、イヤだと顔を横に振ったけれど、すぐに・・・
シャルルの手の平を受け入れた。
傷ついていない方の頬にあてられた彼の指は冷たかった。
火照った頬に心地好いくらいに。
でも彼女はその快美を受け入れなかった。

「憐みなら･･･いらない。
私はこの蒼い衣を選んだ。
ルイが選んだ服じゃない、シャルルが私に贈った服を選んだ････
その時に、もう、決めていたことを、どうしてシャルルは･･･」

最後まで言葉が出なかった。
八つ当たりだとわかっていた。
でも、言わずにはいられなかった。

父とか。
養い親とか。

ヒカルは一度もそんな言葉で彼を見たことがなかった。
そう、初めて見たときから・・・彼女は、白金の髪の、青灰色の瞳の、今にも萎れそうだけれども気高い薔薇に魅入られてしまっていたのに、その当人はヒカルを拒否し続けながら、冷たくしきれない。

残酷な人。
残酷なシャルル。
残酷な･･･愛しい人。

ヒカルは涙を流しながら心の中で恨めしく呪詛のように言葉を繰り返した。
これが言霊となって、彼を捉えられれば良いのに。

彼ほど完璧な男性に育てられて、ヒカルに他の恋をしろと言う。
それなら･･･ヒカルは誰の何を好きになれば良いのだろうか。
だから、彼の息子のルイと共に在れというのだろうか。
それならなおさら残酷だ。

シャルルと良く似ているのにシャルルではない者の元に行けというのか。

それなら。
それなら、クロスグループの後継候補の者で、貌も見たことがない見知らぬ者と娶せられる方が、まだ良かった。

所詮・・・家同士の繋がりはこうなってしまうのか。
それとも、シャルルはヒカルの実家のグループ提携を視野に入れて、彼女を引き取っただけなのだろうか。

シャルルは頬に手をあてたのに、ヒカルはそれを拒絶した。
本当は一番欲しかった温もりなのに、彼女はその手を振り払ってしまった。

････また、涙がひとつこぼれ落ちた。

「ヒカルはどうしてそんなに泣き虫になったのかな」

シャルルはその場を取りなそうとして、軽口を叩いたが、ヒカルは答えられなかった。
彼がそんなことをするのは、ヒカルだけだとわかっていたのに。
代わりに、涙を流しながら･･･静かに朗らかな微笑みを浮かべた。

その笑みから･･･

彼女が心から微笑んでいるときはあまりないのだと気がついた。
いつも微笑むときは泣いているときと同義なのだと思った。

偽りの笑みほど嗟嘆を表すものはない。

それを知っているはずなのに、ヒカルはシャルルにそれを向ける。
シャルルが常にそうであったことを責めるかのように。

「ヒカル。ヒカルの望み通りにはならない。未来永劫。どんなに望んでも」
彼はそう静かに言った。
何か思い切るような、自分にも言って聞かせるかのような、断言的な口調で。

■132

「ヒカルと痴話げんかのような陳腐な話はするつもりはないよ」
シャルルはそう言った。
彼女の茶色の髪を軽く撫でる。
それは、彼女が子どもの時によくシャルルがした仕草だった。

彼が言うところの「未来永劫」というのは本当に「曠劫」の事を言う。
彼は自分の言ったことを覆さないし、反転させるつもりもないようだった。

シャルルは少しだけ痩せた。
変わらないと思っていたのに、ヒカルは間近で、こうして彼に触れられて、そう思った。
きっと、相変わらず、寝食を忘れた日々を過ごしているのだろう。
容易に想像できた。

彼は‥‥自分の躰を大事にしようとしたり、自らを甘やかしたりすることはなかった。
学校の行事でどこかに小旅行に出かけたりすると、彼はいつも少し痩せた面持ちで彼女を出迎えた。
だから、自分が居ないと、彼は何かを食することも忘れて、没頭するのだと思った。
彼は生きる事そのものが「退屈しのぎ」だと思っている。

まだ死ねないから、生きているのだ。
死にたくないから生きているのではない。
生きていたいから生きているのではない。

そう言いながらも、彼は涙を流し続けるヒカルが拒絶したにもかかわらず、涙を細く長い指で拭った。
彼女は顔をそむけたけれど、彼は‥‥

「こちらを向け」
と言って、ヒカルの頬を両手で挟んだ。
「傷に障る」
彼女の頬を押さえて、涙が染みるのを防ぐように、シャルルはヒカルの溢れる涙を拭い続けた。

「・・・・・シャルル」
ヒカルは、決して見せるつもりのなかった涙を何度もシャルルに見せていることに臆していた。
自分がこれまで守ってきた自分の誇りというのは、シャルル・ドゥ・アルディに比べればごくちっぽけなものなのだと気付く。

それなのに、シャルルには「泣き虫だ」と言われる。
何を訴えて良いかわからないし、シャルルに「未来永劫、ヒカルの望み通りにならない」と宣言されて、途方に暮れていたというのが正直なところだった。

「もう、良いよ」
彼女はそう言った。
少し、すっきりした気分だった。

頬にあてられた彼の掌を、上から包んだ。
何年も夢見てきた彼の掌だった。
最後に・・・彼女に唇を合わせたシャルルの手の平を懐かしんだ。

そして・・・・
ヒカルは目を瞑った。
何かを思い切るように。
彼女の手の平より、ずっと大きな彼の掌は包みきれなかったけれど、ヒカルは彼の手の平を・・・そっと下に降ろした。

先ほどは激しく拒否したのに・・・・
今度はどういうことだろう。
ヒカルの中で、何かが・・・何かが変わってしまったのだと思う。

彼女は秘密を知り、大人になった。
そしてシャルルと同じ物思いを知り、彼女は大人になってしまった。

決して寄せてはいけない思いを持ってしまった。

それはシャルルと同じだったから。
彼と同じだったから。

‥‥それに、今、気がついた。

シャルルは‥‥
あの人を。
母を。
あの人を。

好きになりすぎてしまった。
愛しすぎてしまった。

だからヒカルはシャルルを自分の方に引き寄せたいとは決して思わなかった。
もう、今の話で彼がこちらを向かない決心をしていることがわかった。

それなのに・・・

彼女の擦過傷が染みると心配して、彼女の頬を塞ぐシャルルの優しさだけで満足しきれない自分がなんて矮小なのかと思った。

誰かを想うというのは‥‥こんなにも苦しくてこんなにも悲しくてこんなにも‥‥
こんなにも激しいのに穏やかに涙を流すことができるものだとは想わなかった。

これをヒカルより若い年齢の時に知ったシャルル・ドゥ・アルディのその後の人生を考えると、どうにも・・・どうにも切なくなった。

だから、それを貫いたシャルルに向かって、「私を見て」とは決して言えなかった。

彼が「未来永劫」というのは、彼の愛を指すのだと思った。

だから、彼女は微笑んだ。

「シャルル。もう良いよ」
「ヒカル」

彼は、寂しく笑う彼女に愕然とした。

こういう笑いをする人物を、もう一人、知っている。
それは、シャルル本人だった。

何かを諦めたような、振り切ったような･･･
そんな美しい透明な微笑みに。
今度はシャルルが切なげに声を漏らす番だった。

■133

シャルルは、ヒカル・クロスがこうもあっさり意見を覆す人間だと定義していなかったということに気がついた。
･･･情報が古いのかもしれない。
書き換えなければいけないと思う反面、非常に困惑し、狼狽える自分が居ることに気がついた。

「ヒカル」
震える声で、彼女に手を伸ばしたのに････
今度はついさっきまでは彼の温もりを求めたヒカルは、それはいらないと言うかのように首を横に振った。
予測不能な事態に、狼狽するのは･･･彼女の母の前で以来のことだった。

満身創痍で、自分の事を顧みず、彼女はシャルルを晄のある場所に呼び戻した。
まだ、頭の芯が少しだけぼんやりする。
だがしかし、ヒカルの心の変移は見て取れた。

彼女は最初・・・シャルルに向かって求めたものがあったのに、彼が未来永劫それはないと言い切った途端に「それならいらない」と言い放った。

非常に、彼女の母親に似ていた。

あの人は。
得られないものを渇望するのではなく目の前の現実を見据える、リアリストだった。

彼がたくさんの者に囲まれている時には興味がなさそうだったのに。
窮地に追い込まれて、誰も周囲にいなくなったときには、傍に居たいと言ってどこまでもついて来た。
あの人の伴侶となった、彼の親友との別離を覚悟してまで･･･彼女はやって来た。

その時に、彼は彼女を自分のものだけにすることができなかった。
愛しすぎて占有できなかった。
占有したかったのに、愛していたから手放した。

今‥‥
自分は、同じ事を再現しているのではないのだろうか。

いや、ヒカルだけではない。

自分は・・・愛する者を傍に置くことを畏れるあまり、意図せず、手放しているのではないのだろうか。

ヒカルも。
ジルも。
‥‥ミシェルも。
彼の息子も。

ヒカルはルイにシャルルが遠慮をしていると言った。
ルイを愛せないのはどうしてなのか、と誰もが問うのに、ヒカルはそういう質問はしなかった。
なぜ、彼に距離を置くのかと聞いた。

それはね。
シャルルは心の中で、即座に回答していた内容を思い出していた。

それは‥‥ルイとヒカルが同じ場所に居るからだ。

シャルルは彼女の顔を見つめながら思った。

非常に、良く似ている。
あの人に。
そして、彼にも似ている。

だから、彼らを見ているようで、シャルルは苦しくなる。
遺伝は性格も価値観も引き継ぐのだろうか。
それは検証していなかった。
しかし、どうあってもヒカルの放つ晄は眩しすぎて、自分の中に引き入れることが出来ない。

こうして健やかに育ってくれたことが奇跡なのだ。

彼女のES細胞について、最初に気がついたのはジルだった。
でも、その事実を知った時に、そのデータを廃棄しろとは言い切れなかったシャルルに全責任があると思った。
頂点に立つ者とは、そういう引責も引き受けることを承知していなければつとまらない。

だから。
だから、自分の前から引き離して、国外に遣ったというのに。

そして監護権の消滅を日本で迎えるまで、彼は彼女との連絡を絶った。
自分が若かりし頃に無理強いして得た権利を放棄することなく、期間満了を円満に迎える時まで待った。

その間、どれだけ愛らしく・・・どれだけ美しく成長したのだろうと夢想することが彼の唯一の許された自由だった。
そして夏の狂乱を迎える度に、彼は少しずつ壊れていく。

あの人が彼と過ごした「青春の輝き」の時代をあえて一緒に過ごさないことで、彼はようやく・・・生き抜くことが出来た。
夏が終わって正気に戻ることが出来た。
狂っていく瞬間というのは自分でも認識できた。
堕ちていくな、という感覚があり、逆らえない。抗えない。

彼は他の誰にもなりはしない、とかつてあの人に宣言したのに、彼は・・昔の「なりたかった彼」になることは許容してしまった。
それがかつて受けた脳損傷の後遺症であったとしても。

なぜ、彼女は戻って来たのだろうか。
ヒカルは、あのまま、日本に居るはずではなかったのか。

それなのに・・・・
彼に「シャルル！来て！」と叫んだ彼女を、シャルルは・・・・
無幻状態であったのにもかかわらず‥‥
「ヒカル」と認識して彼女の名前を呼んだ。
これがどういうことなのか、彼女はわかっていない。

ヒカル。

あの人とヒカルを比較することはできない。
あの人がいなければヒカルは生まれてこられなかったから。

そして･･･そして、愛はひとつだけだと定めていたのに。

自分はその定めた愛を時々･･･分割しそうになる。
自分は愛はひとつだけしか持てないし、また、持たないと決めていた。

だからヒカルには、泣かせるとわかっていたのに。
「未来永劫、ヒカルの思い通りにはならない」と宣言した。

それに対してヒカル。
ヒカルは･･･「もう良いよ」と言い放った。

それを聞いた時のシャルルの動揺と動悸を・・・ヒカルはわかっていたのだろうか。

彼は、望んでいたのだ。
結ばれない相手であるということはわかっていた。

けれども・・・

それでもそんな状況でも、昔の自分のように、シャルルがどんな奇行に走ろうとも、ヒカルが彼だけを愛し続けてくれないかと願ってしまったのだ。

だから、あんなに酷いことを言って・・・泣かせてしまった。

ヒカル。

シャルルは心の中で叫んだ。

あの人を泣かせる者は許せなかった。
君の父になった者でさえ、許せずに殴打した。

でも。

ヒカル。

君は・・・いや、貴女はどこまでも純粋で無垢で美しい。

ヒカル。

貴女は、唯一･･･
オレだけが泣かせても良い相手だと思う。

これはどういう変化かヒカルには、説明がつくだろうか。

オレには・・・このシャルル・ドゥ・アルディでさえ説明がつかない、考えるだけでさざめく波立つ心の紋様を、君は解明してくれるのだろうか。

■134

「さて、そろそろ休みます。・・・・明日は朝が早く起きないと」
「ルイが早朝に目覚めるとは思えないけれどもね」
「それはシャルルにも言えることよ」

彼女は笑って部屋に戻ると言った。
明日は、きっと、彼女は昔と同じように、最高の状態の薔薇をシャルルに届けるのだろうと思った。

「少しアルコールも入ってしまったし。・・・・これから鎮痛剤を飲んで寝ます」
「併用は良くない。・・・やめておけ」

当たり障りのない会話が、これほど苦しいとは思わなかった。
ヒカルは、彼に向かってちょっと肩をすくめて言った。

「我慢出来ないくらいだったら、使うことにするわ」

でも、彼女はこの胸の痛みが、鎮痛剤などで緩和されることは決してないと思った。
涙で濡れた頬を、自分で今一度拭う。

「今日はちょっと感情的になってしまったけれど、いつもはこんな状態ではないのよ」

ヒカルが照れくさそうに笑った。
自分の内にある、波だった感情が急速に引かれていくのを感じる。
「酒癖が悪いのは母親譲りだ」
彼はそう言ってあの人の名前を出した。
それで、ヒカルは察しがついた。

・・・もう、思い切らなければならない。

この短い滞在時間で、イヤと言うほど思い知らされたのに、まだ思い切れてなかった。
長い年月を、一緒に居て、それよりは短いけれど、大人になってからの彼女はずっとシャルルのことを思い、憂えてきたから。

家族になろうと言ったのはヒカルの方からだったのに、それを破壊するような行動を取ってしまった。
でも、明日になれば、シャルルは「いつもの」ように、振る舞うだろう。
彼はそういう人だ。
自分が彼を緊縛しているから、彼は自由になれないのだと思った。

だから、彼をそろそろ・・・解放してやらないといけないと思う。
ルイを苦しめているだけではなかった。
自分は、最も愛するシャルルさえ、困らせていたのだと思った。

「明日の外出から戻って来たら・・・少し用事を済ませて、日本に帰ります」
ヒカルはそう言って、目の前の青灰色の瞳の持ち主に言った。

それほど長くは居られないと言った。
そうではなく、居るつもりがない、と思ったが、そうは言わなかった。
「これでも、日本ではあれこれ忙しいのよ。友だちと約束をしているから」
彼女はそう言ってまた笑う。
彼女は大人になって、小さな嘘がつけるようになった。
アルディの者は嘘はつかない。
けれども、ヒカルは・・・嘘を覚えた。

パリに居た頃は、友だちをここに連れてきたことはなかった。
連れてきたい友がいなかったということもある。
しかし、若い娘が全くそう言ったことに興味がないのは面白いね、とシャルルが言ったことを思い出した。

それは、興味がないのではなく、ヒカルがあえて興味を持たないようにしていることをシャルルが指摘した最初の出来事だったからだ。

ヒカルが自分を「透明だ」と感じていることは、彼は気付いていたように思う。
誰にでも好かれるから誰にも愛されない結果を招くことを彼女は承知していながら、ヒカルはずっと微笑み続けた。

誰かと衝突したり、ルイと言い争いになったりすることもない。
何を言われてもどんなに冷たい仕打ちをされても、じっと下を向いて、耐えている。
そしてすぐに顔を上げて、辛いことは全部忘れてしまったかのように振る舞う。

「それじゃ・・・お休みなさい」
シャルルは寝る前には、いつもお休みのキスを額に落としていく。
彼女は少し考えて‥‥そしてお休みなさい、ともう一度だけ言って、シャルルの脇をすり抜けた。
空気が動いて、シャルルの白金の髪と、ヒカルの茶色の髪の毛が揺れ動いた。
これが、彼と彼女の距離なのだと知らしめるかのように。
シャルルとヒカルの間には、風が通り抜けるほどの距離ができてしまった。
一瞬のことだった。

諦めることを決してしないヒカルは、自分のことになるとすぐに諦めてしまう。
自分が望んだ結果であるのに、シャルルはどうしてなのだ、と言いそうになる。

そしてヒカルは選択した。
彼と彼女はもう、以前のようには戻れない。
けれども、諦めた。
彼女の無音の言葉が聞こえてくるようだった。

彼らが共有した、夜の別れの挨拶は交わされなかった。

「・・・ヒカル」

扉まで彼女が足を運んだとき。
シャルルがヒカルを呼び止めた。

「なに？」
「・・・お休みのキスをまだしていない」

彼がそう言ったので、ヒカルは声を漏らして笑った。
いつもの明るい微笑みだった。

「もう、年頃の娘は、むやみやたらにキスをしないものよ。
・・・それに、私は成年になったしね」

茶色の瞳を細めて、彼女は言った。
先ほどまで泣いていたので瞳はまだ赤かった。

泣いていたかと思うと、ああして大人の女の微笑みを浮かべる。
シャルルの傍に居たいと言ったすぐ後には、もういらないと突き放す。

シャルルは少し哀しそうに、そうか、と言った。
そして次にはいつものように、彼女に声をかけた。
「おやすみ、ヒカル。良い夢を」
はい、と彼女は言って、扉を開けた。
そして、最後に彼に言葉を残していった。

「お休みなさい・・・・おとうさん」

そして扉は閉められた。

いつになく、扉を閉める音は大きく聞こえ、シャルルは拳を強く握った。

心臓が締め付けられそうに痛かった。

彼が次に逢ったときにはそう言え、と言ったのに。
彼は今の言葉は幻聴なのではないかと疑った。

・・・彼はシャルル・ドゥ・アルディなのに。
自ら望んだ結果になったのに。

この時ばかりは、彼は後悔という言葉を彼の胎内に飲み込んだ。

■135

「そのみっともない顔を何とかしろ」

ルイにしては早い時間の出発だった。
どこにどれくらいの時間かかるのか、まったく知らされず、ヒカルは一人きりで済ませた朝食から戻って来るなりかかってきた内線電話に呆気にとられていた。
そして周囲を見廻したが、ルイはどこにも居ない。
呆れた声が戻って来た。
まるで彼女を観察していたかのように、言い放った。
「さっき薔薇園で見かけた。まったく酷い顔だ。そしてその鼻声も。あと30分で出かけるから、何とかしてくれ」

彼の冴え冴えとした命令口調が終わると、ルイはヒカルの返事を待たずに回線を切断してしまった。

確かにヒカルの顔は酷い。
だから、今日の朝食は早めに済ませることにした。
シャルルが起き出す時間よりずっと早く。
その前に、彼女は薔薇園に立ち寄って、これまでどおり・・・彼の育てた品種改良の薔薇のうち、最高の状態のものを選んで届けることにした。

しかし泣き腫らした顔で彼に届けるわけにもいかず・・・
結局は部屋に飾っておいて欲しいと、アルディ家の庭師に頼んだだけだった。
彼女は来客待遇だったから、薔薇園に入れないと思ったが、シャルルが夜の内に手配をしておいてくれたらしい。
以前となんら変わらない様が待っていた。

確かに、ルイに言われるまでもなく、酷い顔をしていた。
夜、泣き腫らして朝を迎えたことは一目瞭然だ。
彼女の切れ長の二重が、三重になっていた。
瞼も顔も浮腫んでいて、黒目がちの白眼部分が瞼で隠れて、ますます・・・彼女を幼い顔つきにさせた。

まだ頬の瑕が痛むので、透明のナノシートを貼り付けることにした。
躰の軋みはだいぶ良いが、打ち身による内出血が色濃く変化しだしてきたので、こちらをジルに見せてはきっと彼女は心配をするだろうと思い、できるだけ隠す服装を選んだ。
彼女はそれほどたくさんの着替えを持参していなかったからだいぶ迷った結果、かなり夏にしては暑苦しい格好になってしまう。

車での移動のようだった。
それなら車内で冷やせば良い。
楽観的にそう思った。
泣いた顔をルイに見られることより、シャルルに見られる方が辛かった。

言ってはいけない最後の一言を、自らが選択して言ってしまったことが悲しくて泣いた、とは言えなかったし、そうシャルルに思って欲しくなかった。
泣かないと決めたはずなのに、どんどん・・・自分は弱くなっていく。
大人になれば、強くなれるのだと思った。
でも大人になったのに、ヒカルは少しも強くなることが出来ない。
なぜなのだろう。
なぜ、自分はこんなに弱いままなのだろう。

少し考えて、彼女はシャルルにルイと出かける旨の伝言を入れた。
彼も承知のことだから、心配はないと思ったが、こうして「心配性なシャルルに安心させる娘のヒカル」を演じなければ、挫けそうだった。

シャルルは、ルイと一緒に行けと言った。
シャルルは・・・シャルルと一緒に行こうと言わずに、ルイと行けと言った。
ヒカルは唇を噛んだ。
彼がまだ復調していないのはわかっていたが、いつものシャルルなら、きっと自分が同行すると言っただろう。
それなのに、彼はヒカルと距離を置いた。
それが酷く彼女を傷つけた。

彼女は･･･
日本から持ち込んだラップトップとメモリーカードといくつかの小物を持って、部屋を出た。
指定の時間が近かった。
いくらヒカルでも、30分で顔の腫れを引かせる自身はなかったので、キャスケットを深めにかぶって誤魔化すことにした。

朝のうちはまだ柔らかかった烈日が高くなってきた。
ヒカルは薄い茶色の瞳を細めた。
紫外線が目に染みる。
長いガラス張りの廊下から差し込む晄に、彼女は痛みを感じた。
経年するにつれて、彼女の色素は段々薄くなっていく。
だからこそ感じる紫外線の強さではあるが、自分が変わったのは外見だけであって、中身はちっ

とも変化しなかったのだと思い知る瞬間でもあった。

離棟に設置されている、この館の私用車庫に向かう。
夏の暑い陽射しが、彼女の厚着した服の内側の温度を急速に上昇させていく。
じっとりと、汗が滲んできた。

こうして自由に邸内を歩き回ることが出来るのは、ヒカルが居たからなのだと思うと、少し悲しかった。
自分は虚構の庭を歩いていたのか、それとも仮構の薔薇を愛でていたのか、そんなことを考えてしまう。
自分が知らない夏のこの時期は・・・庭に出るときさえも、監視があったのだなんて、まったく気がつかなかった。
こんなに長く、ここに居たのに。

大きなエンジン音が突如したので、ヒカルは目を上げた。
電動シャッターのガレージの内側からだ。
あまりに大きな排気音だったので、ヒカルは一瞬、排気量が多く闊歩して歩くには暑すぎる東京の街中を思い出した。

普段はアルディ家の自家用車に乗るので、車はエントランスの前から乗る。
シャルルは車は滅多に運転しないので、ここに何台か駐車されている車は、ルイのものか、それとも時折やって来るミシェルの所有物なのだろうと思った。
どれもこれも、日本ではあまりみかけない車種だった。
車には疎いヒカルだったが、それでも、エンジンが急速に回転数をあげている、その車を見たときに、これはルイの趣味で、そしてかなりスピードが出るタイプだなということがわかった。
シルバーとブルーが微妙に混じったメタリックのボディは、そのフォルムが美しい。
幅が太く、けれども空気圧がきちんと調整されているタイヤは黒々していて、走る都度、隅々まで手入れが行き届かせている。
几帳面なルイらしいと思った。
そしてルイが自ら車を運転するのだろうかと思った。

車に近づくと、彼は、車の外で、煙草を吸っていた。
車体にもたれかかり、考え事をしているかのようだった。
エンジン音が大きかったので、ヒカルが近寄っても気がつかなかったらしい。

空を見上げて、燻る紫煙を眺めている。
その様は、薔薇園のベンチに腰掛けて、じっと地面を眺めているルイと同じ目つきだった。

だから、ヒカルは声をかけることを躊躇った。
どうしたら・・・彼はあんな深淵まで思考を沈めていくことなく生きていけるのだろうか。
それは同じ条件で生まれた自分には、理解することは出来ないのだろうか。

しばらく彼女はルイが煙草を吸い終わるまで待つことにした。
でも、視線に気がついたのだろうか。
ふっと物憂げな青灰色の瞳を、車の向こう側で佇んで居るヒカルに向けた。

彼はあまり驚きもせず、言った。
「遅い」
「ごめんなさい」

ルイは溜め息をついて、煙草を消し、吸い殻をガレージの一角の灰皿に捨てた。
彼はここでよく喫煙するらしい。
そのあと、ルイは車体を回り込んで、無言で車のドアを開けた。
顎を上げて、乗れ、と合図する。
ヒカルは助手席に乗り込んだ。
車内は、ひんやりと冷房が良く効いていて、寒いぐらいだった。
総革張りの車内は煙草の香りがしない。
・・・・几帳面なルイらしかった。運転中は喫煙しないことにしているらしい。
彼は強い紫外線を避けるために、サングラスをかけて、運転席に乗り込む。

ヒカルを乗せて、ルイが乗り込む。彼は軽装だった。
「今日は何処まで行くの？」
「遊びに行く訳じゃないぞ」
彼はヒカルの出で立ちを見て、眉を顰めた。
彼女はちょっと苦笑した。
確かに、ジルに久しぶりに会いに行くには、相応しい格好とは言えなかった。

ルイは不機嫌そうに、革巻きのハンドルに手をあてて、リモコンで電動車庫のシャッターを全開にした。
シャッターが開くにつれて、車庫に籠もっていた排気ガスとエンジン音が拡散されていく。

以前に持っていた車のキーと同じだった。
彼はこれを愛用しているらしいが、そんな素振りは全く見せなかった。

「ルイは車を運転するのね」

「今見ている光景は一体何なのかな？」
会話にならないと言うように、彼女に答えるルイの横顔を見た。

■136

運転中のルイは不機嫌そうなのか機嫌が良いのかわからなかった。
「運転中に話しかけたら放り出す」と彼は宣言をしてから車を走らせた。
ハンドルを握る様は、まったくの無表情であったが、時折、ハンドルをとんとんと軽く叩く様を見ると、彼が運転を嫌っているわけではなく、かえってかなり好んでいるのではないかと思った。

彼は場所を知っているのか、必要がないのか、カーナビのディスプレイもオフにしたままだった。
パリのアルディ邸を抜けると公道に出て、しばらく見慣れた街並みを走る。
ルイが何を考えているのか、サングラスをかけているので余計に表情が読み取れない。

彼女の事を「酷い顔だ」と言った彼は、ヒカルの顔を見ようとしなかった。
しかし、薔薇園で見かけた、と言っていたからには、彼女の事を、別棟の窓からでも見ていたのだろう。
確かに、ヒカルは夜だけではなく、朝、シャルルのための薔薇を摘みながら、何度も涙をこぼしていた。
あれを見られてしまったのだろうか。
だとしたら・・・・ゆうべ、何があったのかも、勘の良いルイならわかったはずだった。

「立ち寄り先がある」
彼は短くそう言って、ハンドルを斜めに切った。
そして、短く細い路地を抜けて、また大通りに出る。
有名なブティックの入り口に出た。
まだ店が開かない時間であり、どこもかしこも店の扉は閉まっている。
だが、その店だけは営業中を示すライトが点いていた。
入り口では、すでにドアマンが制服を着て立っていた。

ルイは降りろ、と言った。
彼はエンジンを止めると、そのまま扉を開けて、長い脚を地面に付け、そのまま車を降りた。サングラスをはずす。彼は無表情だった。
大通りに面しているので、ここには駐車場はない。
それなのに、彼はヒカルが降車したことを確認すると、ロックをしてキーを店の前に立つ従業員

に放り投げた。
どうやらルイを待って居たらしい。
彼は、この店に良く来る常連のようだ。
・・・・婦人向けのトータルコーディネートの店なのに。
ルイが店に入ると、まだ営業時間でないのにすでに従業員が何人か居た。
彼を見知っているようで、朝の挨拶をしながら彼の入店を待っていたかのようだった。
全員が、彼に視線を注いで、直立不動だった。

そのうちの、チーフとおぼしき貫禄を持った年上の女性が、彼に近づいてきた。
システム手帳と携帯電話を持ち、ネームタグは持っていない。
・・・・彼女はその人物を見たことがあった。
若い女性実業家で・・・このブティックを経営するノウハウについて、先頃日本でも紹介されていた人だった。
有能で切れ者、という感じがしたが、同時に女性としての魅力を失わないように配慮している、といった印象も受ける。
完璧なボディラインを強調したスーツを着ていた。

「ルイ。久しぶり」
「昨日はありがとう」
彼女はそう言って、彼に近づくなり、頬にキスをした。
ルイは甘く青灰色の瞳を煌めかせて、彼女に微笑み、彼女の巻き上げられた前髪をそっと押さえて、白い額に唇を寄せた。

・・・それはどう見ても、年下の恋人と妖艶な女性との、恋の挨拶のように見えて、ヒカルは黙ったまま、少し離れた場所で見つめていた。

「いつもの荷物を引き取りに来た。・・・それから、彼女にも何着か見繕ってくれ。
これから出かけるので、そのままひとそろいは着せたままで。そう。上から下まで全部だ」
彼はそう言って、ヒカルのことを顎で指した。
場違いな服装のヒカルに、従業員達の視線が注がれていることに気がつき、ヒカルはキャスケットを深く被り直した。

「可愛いお嬢さんね。・・・ヒギンス博士？」
彼女は声を漏らして笑いながら、そう軽口を言って、ルイの胸に手を当てた。
彼女と彼の関係は、そういったことに疎いヒカルでも、何となく類推することができた。
ルイは泰然と微笑むと、彼女の手首をさり気なく取って、長く伸ばした整えられた爪を親指の腹でなぞった。

「今日は少し急ぐので・・・また今度食事でも」
良く響くテノールでそう言うと、ルイはその手の先に接吻をした。

ルイは最奥のVIP用の部屋で待つ、と言って、少し離れたガラス張りの部屋にそのまま姿を消した。
「30分で用意してこい」
彼の待つ限界は30分らしい。
すでに、胸ポケットから煙草を出して、口にくわえていた。

「さて」
完璧なフランス語のイントネーションで、残った女性は妖艶に微笑んだ。
「あのルイ・ドゥ・アルディが女性をここに連れて来たのは初めてなのよ」

まったく妬けるわね、その代わりに、あなたを思いっきり着飾って、ルイが驚くほどの請求書を突きつけてやりましょう。

彼女はそう言って微笑んだが、ヒカルを値踏みするような視線だった。
ルイはヒカルのことを何も説明も紹介もしなかったし、彼女もヒカルには興味がなかったようだった。
ただ、ルイの気にいらないことはしない、ただそれだけのようだった。

ヒカルは、久しぶりにルイの交友関係に接して・・・何も言えなくなってしまった。
彼が本当に愛しているのは彼女でないということがわかって、そして、彼女も同じように見えているけれど、ルイに何かを期待していることがわかってしまったから。
そういう風に考えたくはなかったけれど、ルイを取り巻く人々というのは、皆、こういった態度で彼に接しているのかと思うと、彼の心安らぐ場所というのは、アルディ家の内でも外でもないのだと、思い知った。

■137

「車からたたき出されたいのか」
ルイはそう言って、明らかに不機嫌そうに唇を歪めた。
「待てない女だな」
30分しか待てないルイが、ヒカルに向かってそう言ったので、さすがにヒカルも口答えをした。
「良いわ。それなら・・・独り言を言うから」
ヒカルも横を向いて、ヒカルの足元に所狭しと積まれた荷物の数々を眺めまわした。
後部座席が以上に狭いミッドシップエンジンの車には、乗せるところがほとんどないからと言って、彼はヒカルの膝の上に荷物を積み込んでしまったのである。
「中身は開けるなよ」
彼はそう忠告した。
「開けたら本当に車から降ろす」
「大きな独り言ね」
ヒカルも応酬した。

ヒカルに何着も服から帽子から靴を揃えたあと、入店時の服はすべて廃棄処分すること、身につけていない残りの荷物はアルディ家に届けることを指示したルイは、合計金額も見ないで受け取りのサインをし、そのまま暑い陽射しが照りつけ始めた外に出た。
そしてヒカルを車に押し込めた。

彼が事前に連絡をして、この店の開店時間より前に店の準備をさせていたことはわかった。
そして、そんな無理が利くのも、あの女性と親密な関係だからだ。

それから、もう一つ。
昨日のドレスをここで用意したことがわかった。
急遽必要となったものなのに、彼は今の彼女のサイズにぴったりのドレスを用意していた。靴のサイズも。
それから、今日は採寸しなかったので、ヒカルのサイズのものを用意していたことから、ヒカルは誰かに尋ねる間もなく‥‥ルイがここの店であれこれヒカルのために支度を調えたのだと思った。

「彼女とは、付き合いが長い。だから無理も利く」
ルイはそう言った。
それから少しして‥‥

「あれとは何でもない」と言った。
『あれ』呼ばわりするのであれば、何でもない関係でもないでしょう。
ヒカルは苦笑した。
「あなたの遍歴について、とやかく言う筋合いはない」
そう言うと、ルイは、そうだったな、と言った。

それから、彼女は「ありがとう」と言った。
「昨日のドレス・・・素敵だわ。今日か明日でも着させてもらうわね。この服も」
彼女は年相応の、落ち着いた感じのする花柄のワンピースを着ていた。
つばの大きな帽子をあてがわれ、華奢なサンダルを履いていた。

昨日のドレスもそうであったが、ルイは「瑕は隠してもわかってしまうのだから、無理に隠すより、ごく自然にしていた方が目立たない」という方針らしかった。
このドレスも‥‥車内の冷房では少し薄いと思ったが、夏の陽射しの強い時期にしか着ることの出来ない柄模様の、ヒカルの白い肌によく映える服だった。
つばの広い帽子は、紫外線防止と、やはり顔の傷を隠す。
陽射しの下に出れば、影に隠れてその瑕は目立たない。
厚手のハイネックや場違いなキャスケットで顔を隠すよりずっと自然だ。
それからヒカルの泣き腫らした顔さえも韜晦する。

「オレの妻になるのはヒカルだけだ」
彼がそう言ったので、ヒカルは吹き出した。
お互い、独り言が大きいわね、と言った。
エンジン音が大きいので、確かに、室内ではいつもより大きめの声で話していた。
「ルイ。私はあなたと結婚しないし・・・そもそもそういうことでパリに来たわけではないでしょう」
「そういうことでパリに来たんだよ、ヒカル」
彼は唇の端を歪めた。
「このままランスの教会まで行っても良いんだよ」
「悪い冗談は止して」
「冗談？これが冗談だとしたら」
彼はそこで言葉を切った。スピードを少し出した。
「‥‥何年も同じ冗談を言い続けるほど、オレは繰り返さないし、酔狂でもないよ」

「好きでもない人と結婚するのは不幸だと思うわよ」
「シャルルのように？」
「そうは言わないけれど」

ヒカルはルイの言葉に困惑した。
「さっきの人は？」
「‥‥‥だから関係ない知り合いだから」
オレに繰り返させないでくれ、と彼は言った。
それっきり黙ってしまったので、ヒカルはこの件については、アルディ家に戻ったら、日本に戻る前に決着をつけなければならないと思った。
どちらにしても‥‥‥
彼の思い描いた最終結末にはならないし、ヒカルはそうしてやることができない。

それっきり、ヒカルは口を閉じた。
あとどれくらい乗っていれば良いのだろう。
この沈黙が辛かった。

彼はヒカルを見ていない。
そして、ヒカルはルイではない、ヒカルを決して見つめ返すことのない人物を見つめている。

互いに向き合うことは難しいのだろうか。
でも、ルイには理解者が必要で、それはミシェルではなかった。
ヒカルが理解者になれるかと言ったら・・・どうだろう。
ヒカルにジルやシャルルが居たように・・・ルイにはミシェルが居たけれど、それは彼の心安らぐ場所だったのだろうか。

「そろそろ到着する」
彼の車はそれほど遠くまでは走らなかった。
公道を通り抜けて、アルディ邸と同じように、私道に入る。
その境目で、ルイの車は一度速度を落とし、彼はセキュリティゲートの解錠カードをシート脇のポケットから取り出してゲートにかざした。
すると、ゲートは重い扉を内側に開いて、彼の車を向かい入れた。
ヒカルは随分とセキュリティが厳重なのだな、と思った。

ここはロアール河の近くにある瀟洒な古い城だった。
鬱蒼とした森のどこまでが・・・アルディ家の私有地なのだろうか。
水音がするから、どこかに水路があるのだろう。
昔は跳ね上げ橋で城と入り口を行き来していたのかもしれない。
今は、コンクリートで頑丈なロータリーが城の前に設置されていて、中央には天使達が女神を中心に音楽を奏でたり踊ったりする様の噴水があった。
全体を白で統一された城は、礼拝堂が右手にあり、ゴシック様式はそのままに、改築を行ったら

しい。
外壁は淡い卯花色に塗り直されていた。噴水もどうも城の建築年より遙かに新しい。

・・・・ここに入るまでに気がついたのだが、敷地をぐるりと高い塀が、目立たないように木々や蔓などに似せて保護色で張り巡らされている。
ここからは杜が見えるが・・・直接は行けないようになっていた。
第一印象は、「さり気ない幽閉城」と言ったところだった。
透明な・・・外からは見えるのに、出入りできない玲瓏な籠のようだと思った。
厳戒態勢のアルディ家の中庭を思い出した。

「ここ・・・・・」
「ロアールの館」
彼はエンジンを切ると、降りると言って、サングラスを車内に放り投げて外に出た。
ヒカルが来たことのない場所だった。

シャルルは折につけ、近くのアルディ家の別邸には、ヒカルを連れだしてオフを過ごしたものだった。
いつもアルディ邸ではつまらないだろう、と言った彼に、シャルルと一緒ならどこでも同じだと言って、彼を苦笑させていた。
でも、ここには来たことがない。
「ここにジルが居るの？」
「そう」
彼は反対側にまわり、ヒカルの助手席のドアを開けた。
どんな基準で、ルイがヒカルのエスコートのために扉を自ら開けたり閉めたりするのかわからなかった。
さっきは押し込むようにしたのに。
今度は、彼は彼女の手を取って、足元の荷物を自ら持った。

先ほどの店て渡された、「開けるな」と言われていた包みだった。
だいぶ大きな包みで、ずっしりと何か大量に入っている。
・・・きっと衣類だろうと推測がついたが、それはジルに対する贈り物なのだろう。
だとしたら、彼とあの店の女性との話しぶりからすると、彼はちょくちょく、こうして何か手土産を用意してここに訪れていることになる。

「行くぞ」
彼はヒカルのサンダルの踵が白く塗られた地面に降り立ったのを確かめると、そう言って歩き出した。

ヒカルは慌てて彼の後ろをついて行く。

・・・今度は置いていかれることのないように、彼女はルイの背中を見て小走りに歩いた。

■138

シャトーの中は、外気温があれだけ高いのに、ひんやりと寒いくらいだった。
石造りの、風通しの良い建物ならではの冷涼な空気に、ヒカルはここが日本の木造家屋と異なる文化で建設されたところなのだと思った。

空気の流れを感じる。
建物の中にあったパティオの見事なアポロンの噴水を横切る。
太陽神アポロンは、二人居た。
通常は太陽の男神と、月の女神を対にするのに、どういうわけか、その噴水は、太陽神が二人、向き合っている像だった。
そして、無言のルイに付き従って、廊下を渡る。

ここはジルのためだけに用意された城なのだろうか。
それにしては・・・何もかもが異質だった。

セキュリティは堅牢であったが、建物は酷く古い様式をあえて残している。
こんな場所に、ジルが居るのだろうか。
ジルは本当にここに住んでいるのだろうか。

「条件がある」
ルイは言った。
長い暗い廊下を歩きながら、彼は言った。
「・・・彼女が何を言っても、あたりさわりない返事をしてくれ」
その言葉に、ヒカルは茶色の瞳を見開いた。
彼は頼み事をしない。
だから、「あたりさわりのない返事をしろ」と言うのであれば、ヒカルはいつものことだろうと思って、理由を聞いたのかもしれない。
けれども。
彼は、今、依頼をした。
「そうしてくれ」と。

これは初めてのことであったので、ヒカルは酷く驚愕した。
でも、驚愕のあまり、なぜ彼がそのようなことを言い出すのか、問うことが出来ずにいた。
聞いてはいけないような気がした。
少なくとも今は。
彼は表情を見せないように、前を歩いている。
でも、確実に彼女とは同じ距離を保って歩く速度を調節している。

「・・・・わかった」
それだけ言うのがやっとだった。
彼は振り向かないで、そのまま・・・・　無言で長い廊下を歩き、大理石でできた白と粒黒の混じった階段を上った。

この城の雰囲気に、ヒカルの服装は華やかすぎた。
また、ルイが肩から提げている明るい彩色の紙袋も、外から来る何もかもが異質のような気がする。
階段を上がって行くにつれて・・・
彼女はここがなぜ、異質なのかということに気がついた。
ジルのようなまだ若く美しい女性が住むには・・・静かすぎるのだ。
生活音がしない。

アルディ邸も静かではあるが、ここまで静かではない。
ここは・・・誰もいないかのような粛が全体に漂っている。

「ルイ。本当にジルはここに居るの？」
「それからもう一つ」
ルイは彼女に向かって振り返った。
階段を上る途中で、かつん、と音を立てて、彼は階段に足をかけて、ヒカルを見た。
その様は・・・若い頃のシャルル・ドゥ・アルディにそっくりだった。
物憂げで、退廃的で、そのうえ・・挑戦的な彼の瞳が、ヒカルを捉える。
眩しい金髪だけが、フランスの華と違っていた。

「オレには話しかけるな」
彼は良く響く深い低い声でそう言った。
廊下に彼の声が響き渡った。
「どうして」
「それも聞くな。・・・今からだ」
彼は細く長いひとさし指を、自分の薄い唇にあてた。

・・・・彼女に寂然を求めた。

「‥‥オレの言ったことに従え。それが身のためだ」
そう言うと、彼はまた背中を向けて、ヒカルの前を歩き出した。
彼女は大きなつばの帽子を胸にあてて、黙り込んでしまう。
「さあ、ジル・ド・ラ・ロシェルとの面会時間の開始だ。時間は30分。これが限界」
その時間は、彼が待てる限界の時間だった。

二人は階段をのぼりきると、そこは一度大きな踊り場に出た。
ヒカルはルイがそこで少し立ち止まって、彼女を待って居ることに気がついた。
彼の視線は、廊下の突き当たりの部屋に向けられる。
ひときわ、大きくて、白い扉だった。

ジルは、ヒカルが今日、来訪することを知っているのだろうか。
彼女は、ヒカルに本当は会いたくないのではないのだろうか。

昔の彼女であれば、きっと玄関ホールまで迎えに来たはずだ。
いつもそうだった。
幼いヒカルの傍に居た。
一緒にシャルルのためにその朝の薔薇を摘み、そしてヒカルがひとりで届けることが出来るようになるまで、いつもこっそり影から見守っていてくれた。
ヒカルは何度も振り返って、彼女の姿を確認し、安心をして、長い廊下を歩いてシャルルの寝室をたずねる道程を覚えた。

その彼女は‥‥

本当にここに居るのだろうか。

扉の前まで来ると、ルイがどうぞ、と言ってヒカルに先を譲った。
次に何かわかっているかのような、そんな超越した微笑みだった。
「オレの言ったことを忘れないように」
聡慧な笑み、というのはこういうことを言うのだと思った。

ヒカルは白い扉の中で唯一、彼の髪と同じ黄金色のドアノブに手をかけた。
帽子は片手に持ち直した。
自分の腕が伸ばされたときに、まだ癒えていない打撲傷が見えて・・・
ジルが心配しやしないかと思った。

ノブに力を入れて、扉を開く。
重かった。
それほど古くはないはずの扉が、彼女には秘密の扉のように思えて、非常に重かった。

■139

防音処理が施されている事に気がついた。
なぜなら、アルディ家の図書棟の閲覧室で感じたような、密閉された空気が一瞬にして出入りする僅かな風を感じたから。
それに、微音であったけれど、圧が抜ける音がした。
これは防音扉ならではの現象だった。

中から漏れてきたのは、僅かな低音を絞ったBGM程度のクラシック音楽だった。

そして、薄暗い廊下を渡ってきた後では強烈な閃光に感じるくらいの、窓から漏れる夏の晄が、ヒカルの目を差した。
眩しくて目を細める。

‥‥‥そこは白を基調とした空間だった。
病院のような、異様な純白ではない。
練色と言った方が良いのだろう。
淡い色彩の白い部屋だった。

中からは薔薇の芳香が漂う。
気がつけば、扉の入り口にある海松色の大理石でできたテーブルの上に、最高の状態の薔薇が飾られていた。

壁紙は小さな小花の浮き紋が入っており、色味はない。
何もかもが白の空間。
カーテンも、家具も、壁紙も、薔薇の色でさえ白かった。
けれども微妙に色合いや質感を変えてあり、決してそれが白という色で統一したものではなく、基調を白と決めて計算された家具が、同じように考え抜かれた配置で並んでいる。

部屋はいくつかの小部屋を通り抜けできるように、改装してあった。
ヒカルはホテルのスイートルームに来ているような錯覚を覚えた。

規格外の大きな窓は開いており、白いレースの細かいカーテンが揺れている。
ルイは肩に提げていた荷物を、白い革張りのソファに置いた。

「ジル！」
ヒカルは心臓が高鳴って、同じように彼女の名前を呼ぶことが出来なかった。
こんにちは、と挨拶して部屋に入ることもできなかった。
ただ、どうしてこんな場所に彼女が住んでいるのかわからない。

‥‥扉は防音扉で、流れるBGMのパネルスピーカーは天井に埋め込み設置されたものだ。
プレーヤーがない。
そして、女性が暮らすには、生活雑貨が何も無いことに気がついた。

総床面積はかなり広いはずだ。
ウォークインクローゼットは作り付けだし、奥に設置されたバスルームはかなり防湿に注意している作りのようだった。
机もあるし、化粧鏡も全身鏡もある。
本棚もあるし・・・きっと、いくつかある扉の向こう側は、ベッドルームだったり、普段の居室だったりするのだろう。
ひとつだけ細く開かれた扉の向こう側には、ミニバーがちらりと見える。
ここの空間だけで、何もかもが済んでしまうくらいだ。

そう、どこにも行かなくても・・・・

それなら、どこにも出かけないのであれば。
どうして、ここはこんなに生活の匂いがしないのだろうか。
タオルローブが椅子にかけてあったり、飲みかけのティーカップがあったりしても良さそうなのに。

「ここにジルは居るの？」

ルイは不安になったヒカルの呼びかけを無視して、窓に向かった。
彼の髪が一瞬、黄金に光る。
ふわり、と風に吹かれてルイの髪がぱっと散った。

「ジル」
彼は、そこに誰が居るか、そこに行けば誰が居るのか、わかっていたようだった。
ルイはバルコニーの外の人物に声をかけた。

「やぁ・・・良い天気だね」
彼はそう言った。
背中を向けているから、彼の表情がわからない。
しかし、ルイ・ドゥ・アルディは、ヒカルが滅多に聞くことのない、穏やかな静かな声で、挨拶をしていた。
バルコニーはかなり広闊らしい。
彼が声をかけてから、かなり時間が経過して、踵を鳴らして女性の足音が聞こえた。
ヒカルは、持っていた帽子を胸にあてて、口をつぐんだ。
緊張で、目が大きく見開いてしまう。

ああ、ジル。

何年ぶりの再会なのだろう。

そして、自分はどうして彼女に会いに来なかったのだろう。
こんなに、近くに居たのであれば、もっと早く会いに来ることが出来たのに。
彼女に居所も、趣味も、何もかもを知らなかった。
いつも地味なスーツを着て、静かに微笑む、シャルルに良く似た面立ちの、ヒカルの「もう一人の天使」だったのに。

「いらっしゃい。来るとは思わなかった」
「想定外だろう？」
ルイはそう言って、『彼女』に長いしなやかな腕を差し出した。
カーテンが邪魔をして、ヒカルの位置から見えるのは、ルイの伸ばした腕と、その手の平に乗せられた、華奢な白い細い腕と指先だけだった。

ルイの声は、先ほどの店の女性にかける音とは違っていた。
そしてヒカルにかける声よりも・・・ずっと優しかった。

ヒカルは、見てはいけない恋の逢瀬を見てしまったかのように、胸が痛くなってきた。
ルイを見て、そんな風に思ったことはないのに。
・・・どういうわけか、こめかみが脈打ち、呼吸が乱れていく。
これは緊張しているからなのか。

自分のことではないのに、頬が紅潮していく。
塞がりつつある擦過傷が、血流を感じて少し痛んだ。

ルイは一度その手を離すと、バルコニーに面した天井まで伸びたガラスの勝手口から回って、再び『彼女』を迎えた。
どの窓も、その勝手口と言うには豪奢な扉も、すべてが防音ガラス扉だった。
なぜ、ここまで音漏れに気を付けるのだろうか。

わからないことが多すぎた。
でも、一番わらかないのは、目の前の、美しく優しく微笑むルイ・ドゥ・アルディの心中だった。
彼の手を握る女性を見るのは今日で2人目だ。

一人目には気にはならなかったいろいろなことが・・・・
今、自分が会いたいと強く願った女性とルイ・ドゥ・アルディに関しては、ヒカルは激しく動揺していた。

違う。

私はジルに会えるから、緊張しているから・・・。

自分に言い聞かせたが、彼が手をさしのべて、彼女を介助する様が。
ひとり大きな居間に取り残された自分の様が。

どうにもヒカルを落ち着かせることを阻む。

さえずりのような、美しい女性の声が、ルイを破顔させる。

ゆっくりと、姿を現した女性は、やがて、今日の来客が彼だけでないことを知ったらしい。
ヒカルの気配に気がついて、彼女はゆっくり顔を上げた。

「・・・・ジル」

今度は、ヒカル・クロスがジル・ド・ラ・ロシェルの名前を呼んだ。

彼女は、晄の庭の煌めきから目が慣れていないらしく・・・少し目を細めていたが、シャルルやミシェルと良く似てはいるが、少しだけ色合いが違う瞳を大きく見開いた。
ヒカルの姿を捉えて、彼女は笑った。

「待って居ました」
彼女は、ルイの手を取ったまま、微笑んだ。

何年も経過しているのに、その人は、変わらずに美しいままだった。

ヒカルの茶色の瞳から・・・涙が溢れた。

「帽子はそこに置いてください」
ジルがそう言ったのに、ヒカルは、つばの大きい帽子で、自分の顔を覆った。
泣かないと決めていた自分は、パリに来てから、一体、何度泣いたことだろう。

■140

「ジル・・・・ジル！」
ヒカルは帽子で顔を隠しながら、ただひたすらに泣いた。

どんなに制御しても、つばの端を掴んだ手が震える。
どんなに我慢しても、嗚咽が漏れる。

涙が、堪えようもないくらいの涙が溢れて、ヒカルの目の端から次から次へ溢れては落下していく。
これまでは静かに涙を流していた。
誰かに聞かれては困るから、自分ひとりになった時でさえ、声を漏らさずに泣いた。
自分は、泣くことを我慢しすぎて、歔欷することは覚えたけれど、啼哭することは覚えることが出来なかったのだと思っていた。
でも、今のヒカルは大人になったのに、声を漏らして小さな子どものように泣いた。
涙の拭い方がよくわからなかったから、帽子の影でナノシートが貼られた手の甲で何度も何度も顔を拭った。
擦る旅都度にシートが湿気で剥がれていくのに、まったく気にも留めていなかった。

身につけている花柄のワンピースの上に、いくつもいくつも雫を落とした。
花弁の上に大きな雨雫が落ちて、アルディの庭に訪れた夏の恵みの雨のようだった。

ジルに近づくことが出来ないくらい、彼女は変わっていなかった。
触れれば夢になって消えてしまうかもしれないと思った。

泡沫の影であって欲しくないから、ヒカルはジルと距離を縮めることが出来なかった。

ジルは・・・背中まで伸びた髪を少女のようにそのまま下ろし、そして、片方だけ耳にかけていた。
櫻色の唇も、透明な、磁器のように滑らかな頬も、どこか少女めいている。
シャルルやミシェルと変わらない年齢のはずなのに、彼女は若く見える彼らよりもずっと年下に見えた。
だからだろうか。
ルイと並ぶジルは、とてもお似合いの・・まるで生まれた刻から定められた運命の恋人同士のように思えた。
ヒカルの学生時代の友人達がよく夢想した・・・生まれながらの魂の半分同士が求め合って惹かれ合って、当然のようにそこに在るような気がした。

目の前の女性が本当にジルなのか、ヒカルは思い出そうとしても思い出せなかった。
何度も何度も、ここに来るまでに姿を思い返していたから、かえって、それが自分の創り出した幻像なのかもしれないと思えるくらい、思い返していたから。
反復しすぎて、彼女の中のジルが本来のジル・ド・ラ・ロシェルなのかどうか、それさえうろ覚えになってきたのだ。
それくらい・・長い時間の径庭を感じていた。

彼女は昔より・・・稚くなった。
束ねていた髪は下ろしていたから余計にそう思えた。

「ああ、帽子はそこに・・・置いて」
ジルが踊るように、軽やかにヒカルに近づいた。
バルコニーでは軽やかに靴を鳴らして歩いていたのに、室内では非常に静かだった。
床に防音クッションが施されているのだと思った。
こんな、泣いている場面なのに、そんなことだけ気になってしまう。

天使が舞い降りた。

ふわりと、ヒカルが頭をすぼめて、帽子の中に顔を隠して泣いていた様に、ジルがそっと・・・手を当てて、ゆっくりとヒカルと彼女の間に阻む、つばの広い夏の帽子を下方に移動させていく。

「・・・・見つけましたよ」
ジルの涼やかな声が、ヒカルの顔にじかに降り注ぐ。

「ほら、居た」
かつて、彼女とかくれんぼをしたときのようだった。
古い日本の遊びを、彼女はよく知っていた。
フランスでの生活を覚えると同時に、彼女は日本の風習を忘れないように心を配る人だった。
だからこそ、ヒカルの教育係としてシャルルの絶大な信頼があったのだと思う。

ヒカルは・・・ジル、と叫んで、彼女に抱きついた。

もう、我慢が出来なかった。
どうして、こんなに美しい人に会わずに済んでいたのだろう。

誰にも嫌われたくなかった。
シャルルに眉を顰められることが怖かった。
だから・・・だから、聞けなかった。

「仕事に行った」
という言葉を正直に、素直に信じることにした。
それはそこに疑問を持ってはいけないと、ヒカルは無意識に自分に命じてしまっていたように思う。
シャルルにたずねてみれば、今よりもっと早く・・・彼女に会うことが出来たのだろうか。
それなら・・・自分の怠慢から故のこの涙を・・ジルに見せてはいけないと思った。

彼女は「待って居た」と言ったのに。
ヒカルはここに到着するまでに、長い時間をかけてしまった。

距離とは、そういうものなのだと思い知る。

遠いと思えば遠いのだ。
・・・近いと思った瞬間に、それは一気に縮めることができるのに。

■141

「ジル！」
今度はヒカルから近寄った。

あれほど慎重差があった彼女とは、今はほとんど変わらない。
ヒカルはジルの首に腕を回して、そしてむせび泣いた。

ジルがそっとヒカルの背中をさすった。
また勢いが付いて泣いた。

優しい薫りがする。
落ち着くような、静かな・・・薔薇の薫り。
遠い記憶の中で、この匂いを記憶に刻んだような気がする。

ヒカルがひとしきり泣き終わるまで、ジルはずっと・・そのまま、彼女の背中をさすり続けた。

「背が伸びましたね」
ジルはそう言った。
ヒカルはこくんと、頷いただけだった。
大きくなったでしょう、と言えば、別れたあのときから、今に至るまでの間の時間を肯定することになったから。
だから彼女は何も言わずに、ただただ・・・こどものように、ジルにしがみついた。
持っていた帽子はジルの手の中に移行した。
ヒカルは・・・懐かしい、柔らかい髪の波の中に顔を埋めた。
昔は抱き上げてもらわなければ、彼女の髪に触れることもできなかった。
それなのに・・・今はこんなにも近い。
近くなったのに、遠ざかっていたのは、ヒカルの方だった。

「ジル・・ごめんなさい・・・」
「どうして謝るの」

彼女はそう言って小さく声を漏らして笑った。
その笑い方は、シャルルに良く似ていた。

「あなたはこうして会いに来てくれたのに」
そうしてジルとヒカルはしばし目を合わせた。
恐る恐る、青灰色の澄んだ瞳を見つめると、それだけでもう、言葉にならない何かがあふれ出して、また、ヒカルの頬を濡らした。

「・・・ジル。・・・座ったら？」
ルイがそこで横から声をかけた。

彼の声様に、ヒカルはまた少しだけ・・傷ついた。
何年も前から知っているルイが、これほど優しい声をかける人物だとは知らなかったから。

やはり、自分は、郭公なのだろうか。

ルイや、ジルや・・・アルディの似通った顔立ちの、素晴らしい能力を秘めた者達とはとうてい並ぶことの出来ない存在なのだと思い知る。
自分を卑下したことはなかったけれど。
明らかに・・ルイは自分とジルを区別していると思った。
現に、彼が視線を注いでいるのはヒカルではなかった。

「夏の陽射しは体に良くない。・・・少し中で休んで水分を摂ってくれ」
ルイはバルコニーから居間に入ってくると、扉とカーテンを閉めた。
中の空調が行き渡るように、なのかもしれないが、念入りに・・錠を閉めて回った。
完全に外の熱気と遮断されると、小さな音だった、パネルスピーカーの音が少し大きくなる。

ああ、やはりここは防音室だ。
ヒカルはそう思った。
白く装飾された部屋ではあるが、人の生活音だけでなく、音響の吸収率を考えると、ここは部屋全体が密閉されているだと思う。
そして・・入るときに気がついたのだが、ここは、外から鍵がかけられるのに、内側には鍵がなかったことだった。

ルイは物憂げな瞳をジルに向ける。
こうして見ると、良く似ている。
かつてシャルルの代役をしていたほど造作が似ているジルとルイが並ぶと・・・姉弟と言ってもおかしくない。
いや、あのルイのジルに対する扱いぶりを見ると、恋人同士と言った方が相応しかった。

ジルは白いソファの上にルイが置いた、大きな紙袋に目を止めた。
「これは？」
「ああ、貴女へのお土産。気にいると良いのだけれど」
「ありがとう」
ジルはそう言ってふわり、と微笑んだ。
彼女はどうも外出をほとんどしないらしい。
それなら、彼女の身の回りの衣類などは、ルイが見繕っているのかもしれない。
あの布地の総量を感じさせるような、化粧箱の中身は、ジルの身につける様々な・・小物に至る

までの何もかもなのだろう、と思った。

そしてルイはヒカルにしたように、誰かに届け先まで荷物を届けさせるのではなく・・一度に、
自分が運べるだけの分量を、回数をわけて自ら運び込んでいる。
それだけ足繁くここに通っているということだった。

ジルはありがとう、と言うと、傍らに立ったルイに近づき、踵をあげて、彼の頬にキスをした。

ヒカルはどきり、とした。

美し男女が寄り添う姿はやはり美しい。
けれどもこれほどまでに窒息するくらい、息苦しい思いをするのは、なぜなのだろう。

自分は、ルイとジルの仲睦まじい光景に・・・嫉妬しているのだろうか。
わからない。

ヒカルが思い定めた相手は、ヒカルを拒否した。だから、同じ顔立ちの者達が、「同じ」だから
こそわかり合っているとでも言うかのような様を見て、ヒカルは激しく揺れていた。

自分を郭公だと言ったルイの言葉はその通りだと思った。

ヒカルは、ここに居ては不協和音を出すだけしかできない。
ヒカル・クロスは招かれざる客であったはずなのに、ジルは。彼女は微笑んだ。
彼女から逢いたいと言えばすぐに実現した距離にずっと居た。
それなのに、ヒカルはジルを忘却し、ジルはヒカルを放置した。
やはり、教育係というのは、彼女にとって重責だったのかもしれない。

その心がどうにも痛ましかった。

■142

おかしいと思ったのはその時のことだった。

ジルがその化粧箱を嬉しそうに持って微笑んだ。
「ありがとう・・・シャルル」

ヒカルがえっと声を漏らそうとした瞬間。
ルイが、ヒカルの肩を強く掴んだ。
彼は上品な微笑みで、ジルに応える。

「それを着たジルと、今度は杜を散歩しよう。ああ、パリの街中でも良いな」
「デートはマリナさんとしてください。ね、マリナさん」

そう言って、ジルがヒカルに微笑んだ。

‥‥‥それまで涼しいと感じていたのに、一瞬で、体から、汗が噴き出た。

心地好い程度に聞こえていたはずのスピーカーから漏れる音楽が、今は騒音のように聞こえる。
ジルの言葉は、今の噪音によって、何か‥‥聞き間違えてしまったのだろうか。
信じられないと言うより、何を話しているのか、頭に入ってこない。

ジルは絹糸のような柔らかい髪を背中に流して言った。
青灰色の美しい瞳が柔和な晄を放ち、ヒカルとルイを眺めた。
満足そうだった。

「運命の人の前で、そう言うことを言ってはいけないわ。・・・・ようやく、ようやく念願が叶ったのに」

ジルが冗談を言っているのではないということは、その二人のやり取りを見て、わかった。
彼女は真剣に、まじめに、ヒカルの名前を間違えて発音しているのではなく・・・・
彼女をあの人だと思っている。

彼女はそういう小芝居はできない。
そして、そんな冗談のような演技をする必要もない。

今の言葉は、聞き間違いかと強く思うことにしたが、彼らの会話が進んでいくに連れて、ヒカルはただ唇を少し開き、目を大きく見開いているばかりだった。

「マリナとはいつでも出かけられる。でもジルとは滅多なことでないと一緒に出かけられないだろう。・・・いつもオレの代役ばかりしていたから」

「シャルルが2人居ると言われて驚かれるから、並んで歩くのは良くないわ」
「それも一興というものさ。・・・・マリナと3人で食事をしよう。近いうちに」
「楽しみだわ。それは、とても楽しみだわ」
彼女はそう言って微笑んだ。

ヒカルは声をかけられずに居た。
声が出せなかった。

涙が止まる。
思考が停止する。

次に、状況を把握するために、いろいろと自分の頭の中で言葉を組み立てていくが、どうにもうまくいかない。
どんな理由や理屈を思いついても、今の有様を説明できない。

手に持っていた帽子が、非常に重く感じる。
その一方で、ルイに打撲した側の肩を掴まれているのに、それさえ感じない。

干上がった喉から漏れるのが自分の呼吸音のみで、声を失うほど驚愕している時には、何もかもが聞こえなくなるのではなく・・・聞きたくない音が大きくなり、聞きたい音は聞こえなくなるのだと思った。

「この間、指輪を探していると言っていたけれど良いものは見つかった？」
「ああ、駄目だね。・・・だからオリジナルを創ることにした」
「デザインが決まったら、教えてくださいね」
「勿論」
「いよいよ・・・ですね」
彼女はヒカルを見て言った。

会話について行けないヒカルが困惑を通り越して驚愕している様を横目で見ながら、ルイが彼女の肩から手を離し、今度はヒカルの腰に彼の腕を回した。

ジルは少し涙ぐんでいた。
「ようやく、シャルルの念願が叶うのですね。今にも、ランスの教会の鐘の音が聞こえてきそうです。白いタキシードのシャルルに・・・純白のドレスを着たマリナさんに・・・」
彼女はそう言うと、目を細めて、少し上を見上げた。

「まだ少し先だよ」
「でも早くしないと・・・夏が終わってしまう」
「ああ。だから、ジルはそれまでに体調を整えてくれ」
「薬は飲んでいるし、元気ですよ」
ジルがそう言って微笑んだ。
「オレは医師だからね。・・・誤魔化されないよ。オレが信じるのは根拠のあるものだけだから、その言葉は、今度の検査結果の数値によって実証してくれ」
ルイはそう言うと、黙ってルイに抱かれるままになっているヒカルの体を静かに抱き寄せた。

「マリナ。オレと君の挙式に間に合わないと困るから、ジルに早く良くなるように君からも言ってくれ」

そしてまだ正面を見据えて、放心状態になっているヒカルに顔を寄せて、こめかみに唇をあてた。

「‥‥話を合わせろ」
彼はヒカルの耳に囁いた。
こめかみに口吻する真似をしながら、彼が言った言葉に、ヒカルは反射的に体をぴくりと痙攣させた。

「マリナさんの気にいるリングを創ってあげてくださいね」
「いや・・・デザインは彼女に任せようと思う」
ルイがそう言って、デザインは進んでいるか？とヒカルに言った。

腰を抱いている、ルイの手に力が籠もり、適当な返事をしろと促してきた。

「・・・・まだなかなか決まらなくて」
「家紋の薔薇は必ず入れてくださいね」
ジルは嬉しそうに言った。

そして、ジルはちょっと失礼、こちらを片付けますね、と言って、ルイの持ってきた化粧箱を持って、居間に面している、一番近いクローゼットを開けた。

ヒカルはジルが背中を向けて、シャルルからの贈り物だから、大事にしないと、と言いながら扉を開ける様を眺めていた。

静かな‥‥空調の音さえヒカルには苦痛に感じ始めていた。

何もかもが受け入れられないと五感が叫ぶ。
額から汗が落ちた。
背中からも汗が落ちる感覚があったが、それも自分の体液だと感じられないくらい・・・熱湯をかけられていると思うくらい熱かった。

白い扉を開けられたクローゼットには・・・同じ形で同じ色で、同じ化粧箱に入った箱が整然と並んでいた。
上から下まで、ぎっしりと。並べられていた。
いくつもいくつも重ねられたその箱は開封されていなかった。
シャルルからの贈り物だから、大事に保管しないといけない。

ジルはまたそう言って、ルイが持ってきた箱を、隙間に入れ込んだ。
パズルのピースをはめ込むかのように、ジルはそこにおさまった箱を、満足そうに眺めた。
少しずつ色合いが違うが、どれも同じ形の箱だった。
すべてが、今朝立ち寄ったあの店のものだった。
あの店は、季節折々のシーズンカラーで包装される。その柄や色は毎年違う。
そして、ルイはここを訪れる度に、そこで決して開封されることのない化粧箱を用意して、彼女を訪れているのだと知った。
用意したのは、すべてルイなのだ。この膨大な数の箱をいつも持参しているのは彼なのだ。

「・・・これまでずっと・・・男のなりをさせていたからね。ジルによく似合う今シーズン最新のワンピースだよ」

ルイはそう言って、背中を向けたまま、シャルルからの贈り物だから大事にしなければいけないと繰り返すジルに声をかけた。
その声は、届いていなかった。
ジルは返事をしなかった。

ルイは、唇の端を少し歪ませて笑った。

確かに、彼女は病を煩っていた。
病気療養中というのは、嘘ではなかった。

ジルは病気だ。

異常なほどの対象への固執。
ものを秩序立てて整頓することへの執着。

過去へ戻った状態と、現在の生活習慣を併存させることができる程度の意識の錯乱。
つじつまの合う話ができるのに、人物へは脆弱な認識しか持てない。

もう、結論は出ていたのに、ヒカルは彼女の概況がわかっていたのに。
・・・認めることが出来なかった。

その光景は、つい最近見たばかりだったから。

そうか、と納得する時間が短かったことを認めたくなかった。
その病を認めたくなかった。

最初に出会った時。
シャルルとあまりにも似ていたので「おんなの天使さん」と彼女のことを呼んだ。
すると、ジルは少し悲しそうな顔をして「私は天使じゃないの。羽がないの」と言ったことを思い出した。
少し悲しそうに美しく笑う、いつも穏やかにヒカルを導いてくれた、優しい人。

ヒカルの頬に、また、一筋、涙が流れた。

今度は顔を隠すことさえできないくらい腕が重かった。
ルイに抱かれているのに、身を捩って泣き伏すこともできなかった。
目を瞑ることも出来ない。
ただ、見つめるだけしか出来そうもない。

ジルは。
ジル・ド・ラ・ロシェルは。

シャルルと同じ‥‥無幻症だった。

夢幻の世界に入り込んでしまった彼女は、ヒカルもルイも区別できなくなっていた。

「・・・・・それで、いつまでそこに居たら気が済むのかな？」
ルイが何本目かの煙草に火を付けた。
ヒカルは膝を抱えて、顔を両手で覆ったままだった。

鮮やかな花柄が光に照りつけられていたが、陽がだんだん翳ってきた。

館の中庭の噴水で、縁に腰掛けたふたりは、そこで座ったままだった。
噴水の、女神が差し出す薔薇の花弁から漏れる水音だけが響く。
それでも各所に巡らされた監視カメラのレンズが焦点を合わせてこちらを眺めている音さえはっきりと聞き取れた。
聞きたくない音だけが聞こえてくる。

その中で。
ヒカルは顔を埋めたまま、ぴくりとも動かなかったし、ルイは煙草を燻らせて空を見上げていた。

ジルと別れた後、ルイは扉を閉めて、そして鍵をかけた。
指紋認証のセンサーが、ドアノブの裏側にあったことにようやく気がついた。
だからノブが重かったのだ。
外からは自由に開錠できるが、中からは、登録していない者は出られない。
ここに来訪するには、GPSチップも本当は必要なのだと思った。
でも今日はルイと一緒だから、ヒカルは免除されていたのだと想像した。

ようやく顔を上げると、中庭から、バルコニーが少しだけ見えた。
そこには転落防止のための透明なネットが敷かれていた。
また、バルコニーは外に面しているのではなく、二重ガラスになっていて、彼女は手摺りの向こうのガラスの柵状に巡らされた外窓から、外気を浴びているのだと知った。
まるっきり幽閉状態だった。軟禁状態と言ってもおかしくない。

「・・・彼女は何度か自殺を図っているからね。用心のため」
遠く反射屈折に最新の技術を取り入れた透明な柵を見上げているヒカルの視線に気がついて、ルイが説明した。

あれからどうやって、ジルの部屋を辞したのかはっきりと記憶していない。
始終彼女はヒカルを「マリナさん」と慕わしげに呼び、ルイを「シャルル」と言った。

ただ、それに呼応して、返事をしただけだった。
ルイが「話を合わせろ」と言ったことがわかった。

そして、ジルの中では、いつまでも、どんな季節が来ても、彼女の過ごす季節は夏の季節のままであることを知った。
だからルイが持参する服はいつも・・・夏の服だった。
通年を通してフリーシーズンを用意しているあの店でないと、用意できない物品を、ルイは用意し続けた。

ジルの中のあの日は永遠に訪れない。
皆がもっとも苦しんだ夏のまま・・・その直前で、彼女は刻を止めてしまった。
無幻状態は、本人のもっとも望む頃に遡るという。
そして本人のもっとも望む状態に置換されるという。

ジル。
ジルの一番望んだことは、それだったの？
ヒカルは大きく溜め息をついた。
彼女が何を思っているのかさえ、考えたことがなかった。

若い頃は、シャルルに最も似ていたから、代役を務めて、彼の命によって遠い異国まで行ったくらい、彼に信頼されている唯一の親族だと聞いたことがある。
それでも。
彼女は何のために、生まれてきたのだろうか。
何のために・・・彼女は生きているのだろうか。

「治療をしないのは、シャルルと同じ理由ね？」
「そう。適当なES細胞が見つからない。・・・ヒカルの細胞は使いたくないと本人が承諾しなかった」
稀なる細胞を発見したのに。
彼女はそれを使って自分を癒すことを拒否したのだ。

「けれども、発見者であるジル・ド・ラ・ロシェルの名前は消すことが出来ない。誰かがそれを自分のものとすることもできない。これは研究者の掟だね。彼女は権利放棄をしたが、これは誰かに譲渡できるものではない。・・・・ジル・ド・ラ・ロシェルが放棄したのであれば、次に発見した者に権利が移行してしまう。だから、一族は･･･彼女を生かしておくことにした。彼女を生かさず殺さず、永らえさせることにした。治療はしなかった。彼女が拒否していたし、正気に戻った彼女が何を主張するのかはわかりきっていたから。・・・・発見者としての功績を維持する

ために、彼女をここに閉じ込めて、夢幻の空間に幽閉することにした・・・」

「ルイはそれで良いの？」
ヒカルは声を低くして言った。

彼は薄く笑った。
煙草を口にくわえながら、面倒だと言わんばかりに淡々と言った。

「最初はシャルルが来ていた。定期的に来ないと、彼女は発作を起こして自傷行為に走る。あのバルコニーはその名残だよ。・・・彼女は飛び降りて死のうとした。次に、絶食した。
最後には‥‥硝子窓に頭を突っ込んで、頸動脈を切ろうとした」
「ジル・・・」
ヒカルは刻が止まってしまったままの、一番親しいはずの人の名前を呼んだ。

「そしてシャルルはマリナ・クロスと結ばれることを夢見ているジルの言動に、耐えられなくなった。彼も発症したから。だから、オレが当主代行として、ここにやって来る」

そして、小さく声を漏らして笑った。

「あの『夏のマリナ』にはもう一つ仕事があってね。・・・こうして夢現の境がなくなる同じ夏の季節には、ジルもひどく不安定だから。・・・オレと一緒にここにやって来て、ジルの相手をする。散歩し、ジルの話を聞くだけだが。・・・その後はシャルルと同じ事をする」

最後の言葉は、自嘲的だった。
彼が、シャルルと同じ事をするとは、何を示すのか、ヒカルはそれ以上深く尋ねることが出来なかった。

「ルイ・・・・」
「だから、早く。おまえの言うところの『あちら側』とやらに、墜ちてくれないか、ヒカル」
彼はそう言った。
そしてそこで、ようやくヒカルの方を向いた。
ヒカルもようやく・・・彼の顔を見た。

シャルルと似ていると思ったその面立ちは、もう、違う男の人に見えた。
どんなに造作が似ていても・・・ミシェルとシャルルが違うように、シャルルとルイは違う。

その背負ってきた苦悩の重さは同じでも、苦悩そのものが違う。

誰も変わってやることの出来ない責務を負って、ひとり、ルイはこうして定期的にシャルル・ドゥ・アルディとなってここに訪れる。
虚しい会話に付き合い、そしてジルに次を約束して去る。

無幻症は後天的でも先天的でもある。
もし、先天的であれば、一族の最大の弱点となる。
それを究明するために･･･ルイがあの研究所に入り浸りになり、ミシェルも長い時間を拘束されているのだと、ようやく思い知った。

どうして、あの研究所に、彼らが居るのかも。
どうして、居を構えないで、「セーフハウス」と称して環境を変え続けるのかも・・・・

アルディ家は、もう、長らく、そのような問題に携わってきたのだと。
今、知った。

そして、その最大の秘密を明かそうと言った、シャルルと。ミシェルと。・・・そしてルイと。
彼らの各々が主張する言葉を、ヒカルは耳に入れなかったのだと、悟った。

自分の命ってなんだろう。
自分が生まれてきた事ってなんだろう。

・・・そして、この悲しみの鎖を断ち切るために、自分が必要とされて・・・そして自分だけに課せられた重責を受け入れる覚悟がなければ、これは到底解決できないことをようやく知った。

愛とか。
恋とか。
そういう問題ではなかった。

彼らの「声」が、遠くから聞こえ始めた。

■144

「シャルルもジルも、あのままで良いはずがない」
ヒカルは低くそう言った。
ルイは煙草の火を消すと、肩をすくめてから、ヒカルに向かって冷ら笑いを浮かべた。
「それならどうすれば良いのか、是非教えてもらいたいね」

その言葉は辛辣で、冷たく、ルイの絶望が込められているようで、ヒカルは彼の顔を見つめるだけで返答に窮した。

彼は端正な顔を少し傾けた。
「ヒカル。オレ達は・・・オレは幾通りもの、幾百通りもの路を想定した。
でも、シャルルが当主で、当主を退かない限り、シャルルもジルも治療ができない。
彼らを救いたいわけではない。
いずれ、自分の身に起こるかもしれないと戦々恐々としている親族は、病の究明を最優先とさせるように主張している。
けれども、シャルルが当主では、駄目なんだ。
彼は、親族会議の議決権を持つ数と同じ数だけの採択権と拒否権を持っている。
同数は否決される。
・・・・オレは当主代行だから、いつまで経過しても、一票を投じる権利がない」

「ルイ・・・これは遺伝なの？」
「今のところはウィともノンとも言える」
彼はそう言った。
もう、何度も導き出した回答を、また繰り返さなくてはいけないのかと言いたいようだった。
うんざりした表情だった。

「シャルルは発症しているのに、ミシェルはそうではない。・・・ジルとシャルルは血縁関係が濃いから、遺伝的要因も考えられる。・・・・そしてミシェルかオレか・・・どちらかが発症するか、頭部に損傷でも受ければ、証明ができるのだろうけれど」
「何を言っているの」
ヒカルはルイの言葉が終わる前にそう言った。

「ルイ・・・ルイはひとりしか居ない。ミシェルも。シャルルやジルだってそう。それなのに、何を証明するというの。それより前に、治療方法を探すことが先でしょう」

「ああ、ヒカル」

彼は薄く笑った。
「そういう甘いセンチメンタルな発言は、控えてくれないか。どうにも苛立つ」

「人の命が平等だと思っているのか？そうじゃない。人の命は優先順位がある」

「ルイの命は誰かと比べられない。何かと比べてはいけない。・・・どうしてそうして自分を滅

することに享楽的になれるの」

「ヒカル・クロス。言葉を慎め」

ルイが強い口調で、彼女を窘めた。
そして次に、青灰色の瞳を瞑ると・・・上を向いて、そして次には地面に視線を落とした。
それは、かつて、彼が薔薇園でひとり物思いに耽る視線と同じものだった。

整った顔が、硬直している。
薄い唇は、先ほどヒカルのこめかみにあてられたのに、まったく別の・・・冷たい氷のような質感を感じさせる。

彼の誇りを著しく傷つけた憤慨を、ヒカルは今、受けていた。
彼は噴水の縁から立ち上がり、そして彼女を傲慢に見下ろした。

しばし、視線だけが交わされる。
青灰色の瞳と、茶色の瞳が・・色素の薄い者同士が交わす、罍波（激しい電波のこと）とでも言うかのような、そんな視線を交えた。
ヒカルは視線を反らさなかった。ここで反らせば、自分の主張はルイに通じない。

彼が非常に憤慨していることはわかった。
誰かとルイを比べてはいけない。
彼はひとりししか居ない。
それなのに、そう言った先で、彼女はルイを「何か」と比較しようとした。
だから彼は憤っている。
ヒカルは吐息を漏らした。

■145

「ルイは医療従事者でしょう。かつ、バイオもライフサイエンスも扱っているのに、どうして・・・どうしてそう言うのか、理解したい」
わからない、とは言わなかった。
ヒカルは、理解したいと言った。
謝らなかった。
彼の誇りを酷く傷つけたことはわかっている。
それでも、彼には語りかける人間が必要だった。
ヒカルでなくても良い。

でも・・・
でも、ルイはこの館に来て「シャルル・ドゥ・アルディ」になる。
それではルイが壊れていく。
彼はシャルルではない。
ヒカルもマリナではない。
装うことがジルの治療にはならない。
刺激を与えないようにしているだけだ。
根本的な解決にはなりはしないし・・・いつか、いつか破綻する。

シャルルがヒカルの呼びかけに戻って来たように。
ジルにも、何かのきっかけと、適切な治療が必要だった。

ヒカルはルイの顔を見た。
もう、彼は、シャルルの若い頃にそっくりな息子ではなかった。
彼は、違う人間だ。
例え、シャルルの遺伝子を引き継いでいたとしても。
Gene　rich（遺伝子選別されたデザイナーズベビーと同意）であっても。
彼は生命があって、ここまで生きて、感じて・・・そして嘆いて憤っている。
だから彼はルイ・ドゥ・アルディであって、シャルル・ドゥ・アルディではない。
本人もわかっているはずなのに、どうしてそれを放棄するのか。
わからないよ、と言ってしまえば簡単だが、それでは駄目だと思った。

届かないかもしれないけれど。
今の自分には彼の声は遠くからしか聞こえないけれど。

でも、きっと。
きっと・・・
届くことを祈って。
ヒカルは言った。

「最初から言っているだろう、ヒカル」
彼は呆れたように、ヒカルに言葉を投げかけた。
「ヒカルとの婚姻は、アルディ家に福音と莫大な富をもたらす。
ヒカルがアルディ家の籍に入れば、シャルルもジルも治せる細胞を培養する使用許可が出る。そしてオレは念願の当主になれる。ヒカルの実家も巨万の富と栄光を得られる。・・・どうして拒む。どうして、シャルルに固執する。・・・どうして・・・どうして、オレを選ばないか理解

できないよ、ヒカル」

彼はそう言って、頭を振った。
見事な金髪が散って、太陽の晄を受けて、乱反射した。

薄い切れ長の瞳が、ヒカルを捉えていた。
彼は、少し戸惑ったように、その続きを言った。

「オレにしておけ」

ルイはそう言った。

ヒカルも立ち上がって、彼を見上げる。
「どうしてシャルルを運命の男と定めた。
ヒカル。
オレを選べ。
・・・・おまえは晄の子だ。
確かに、晄輝くこれからを担う者だ。
誰もが望む幻の奇跡をもたらす聖女と崇められるほどのものを持っている。
これから何十年も・・・おまえの細胞を母床にして、皆が遺伝治療をこぞって乞い願う。
それを捨てても、大勢の命を捨てても。・・・アルディの薔薇を枯らしてでもしたい何かとは、叶わぬ恋を夢想し続けることなのか」

彼は言った。

「運命の女を他に定めた男を、運命の男と定めるおまえの気が知れないよ、ヒカル」
叶わない恋に溺れても、このまま夢から覚めたくないと思うヒカルは、シャルルと同じだ、とルイ・ドゥ・アルディは言った。

■146

「私が・・・私が夢を見ていると言うの？」
「現実を直視したくないと言って目を背ける状態は、その他に何と言って表現すれば適当なのかな。それを、逃避と言っても間違いはない」
ルイ・ドゥ・アルディは横を向いて、冷たくそう言った。

「無駄話は終わりだ。
・・・ヒカル。
パリに戻ると選択したときから、こうなることは決まっていた。
ヒカルに帰る場所などはない。
一生彷徨って・・そして、戻って来い」

彼はそう言った。
見事な金髪が、苦しくなるくらい眩しかった。
すべてを輝き照らす、そんな黄金の髪に、彼女は目を細めた。
ああ、こちらとあちらと・・・そんな言葉では、彼は位置付けできやしない。
彼は星辰の子だ。
星々を従え、そして太陽にも月にもでさえ、なり得る。

「シャルルを定めても良い。でも、夢から覚めて・・現実を見ろ」
彼はそう言った。

「私は夢など見ていない。私は・・・私は・・・」
そこまで言ってから、彼に納得できるような言葉を用意することが出来ないことに気がついた。
ヒカルは、シャルルとジルの発症を見てしまったから。
そして、自分が彼らを救うことが出来るかもしれないと聞いてしまったから。
次の言葉に戸惑ってしまった。

ルイ・ドゥ・アルディはその隙間を見逃さなかった。
彼は・・・青灰色の瞳をヒカルに向けて、冷笑した。

「夢幻の世界に入り込んでいるのは・・ヒカルの方だ。想っても叶わない想いに身を捩り、そして自分を憐れむ。
その稀なる細胞は、歎きの呼吸をする傍らで、どんどん死滅しているというのに」
「・・・・私はちゃんと考えたい」
「へぇ」

今度は、ルイ・ドゥ・アルディが声を大きくして、彼女を嘲笑った。
いつも静かな彼が、おかしいね、と言って、声を漏らして笑った。

腰に手を当てて、少し離れた場所に立つ彼女を見下ろした。

「ヒカル。ヒカルの卵細胞はあと300個ある。その1個にどれだけの値段が付けられていると思うの？
その一方で、おまえが月に一度、卵を捨てる都度、無限の状態から抜け出る機会を逃すシャルルを観て。
おまえはその人を恋しいと言って泣く。
シャルルを焦がれて泣く。
・・・・これに矛盾が生じてないと主張するのであれば、ヒカルの言い分を理路整然と説明して欲しいものだ」

「それなら・・・それならどうすればルイ・ドゥ・アルディは満足するのよ！」

ヒカルが激昂して叫んだ。
この声が、刺激に弱いジルに届くかもしれないとちらりと思ったけれど、もう止めることが出来なかった。

「私は生きている。細胞だって提供する。でも・・・私の心は提供できない！」

「ヒカルのここととはシャルルのものだから？」

「違う！私の心は、私のものだから」

彼女はそう言った。

「シャルルが誰を選んでも良い。でも、私の心は私だけのものよ。
・・・・シャルルのものでもない。ルイのものでも、誰のものでもない。私だけのもの。
だから、私が誰を想うかは、私の自由だわ」
「ああ、ヒカル。叶わない想いに身を焦がすことそのものに酔っているのかな」
彼が辛辣にそう言ったので、ヒカルはとうとう・・・
涙を流し始めながら、ルイに感情をぶつけ始めた。
茶色の瞳の端から、滝のように涙が流れ落ちる。
ルイにこれまで激しく・・・感情をぶつけることなどはなかったのに、ヒカルは初めて、彼に怒りを投げかけた。
その感情は恐ろしいと思い、彼女は常に距離を置いてあったのに。

とうとう・・・・ヒカルは、誰の前でも泣かない、という誓いを破ったことに引き続き、誰に対しても憤らないというささやかな誓いを破ってしまった。

■147

「完全に離れろと言われたのに。それをおまえは無視して、パリに戻ってきた。
アルディ家との関係が切れることに臆病になったからだ」

ルイ・ドゥ・アルディは、ヒカルに向かって、そう言い放った。
そう言えば、ますますヒカルが涙を流すことはわかっていたのに、彼は続けた。
彼女を泣かせるつもりで言ったのか、それとももっと別の目的があって言ったのか、無表情な、シャルルに良く似た顔は感情が乏しく、彼の心中を窺い知ることが出来なかった。

「自分の憂慮に囚われている者ほどそう主張する。
自分の心は自分だけのものだ、と。
ヒカル、おまえも。
自分の精神を制御出来ない者ほど・・・自らの創り出した夢幻に入り込む。
とうてい実現しないことを夢想して、実現しないからこそ・・・夢見ている。
シャルルとジルと、どう違うと言うんだ。
ヒカル、おまえも、夢幻の状態に自ら足を踏み入れて・・・そして帰りたくないと言いながら泣き喚いているだけじゃないのか」

「・・・違う！」

「どこか違うんだよ」

彼は溜め息を漏らした。
ヒカルに向かって、繰り返すことはしないと言ったのに、と文句を言った。

「何度も言っているよ、ヒカル。おまえが理解していないだけだ。
・・・・アルディ邸に居たくないのなら、オレとアルディ家を出れば良い。
あそこは単なる妄執の空間だ。シャルルが夢幻状態に陥るときに必要な舞台であるだけだ・・・何も無い。何も残っていやしない」

彼女は違う、違う、と何度も叫んだ。
しかしルイはそれをただ黙って聞くだけだった。
ヒカルの茶色の瞳が、泪で真っ赤になる様を観察していた。

「ヒカルがそうやって居る限り、誰も救われない」
その時のことだった。

ヒカルが、数歩前進して、ルイに近づき、彼の滑らかな頬に手を挙げて、平手打ちをした。
彼女が人を殴ったのは初めてのことだったので、力の加減がわからずに、弱い音がしただけだった。
我を忘れるというのは、こういう事なのか。

自分を否定されたから憤ったわけではなかった。
彼女の気持ちに、ルイは気がついていながら、今までそれを指摘せず無視をした。
そして彼はいつも自分の傍らに来いと彼女に言い続けたから。
自分が気がつくより前に、ルイが気がついていたから。

「・・・平手打ちにもなってないよ、ヒカル」
ルイが、冷笑した。
彼の躰はまったく動じなかったし、彼女の手の平も痛まなかった。
ただ擦過傷を追った側の手を使ったので、ふさがりかけた瑕が、また開いた感触がしただけだった。

今度は彼女は両の掌で、勢いよくルイの胸を押した。
「何よ・・・何よ！」
彼女は落涙を止めることなく、ルイに憤りを当てた。

「シャルルが誰を想っていても・・・？ヒカル、それはないだろう。あの人を想うシャルルの無幻症を治すということは、あの人はもう居ない、とシャルルに思い知らせることと同義だ。
それなのに、それをシャルルのためだから進めてくれというヒカルは・・・シャルルが誰を愛していても構わないと言っておきながら、それを否定していることにならないのか」

「そうじゃない・・！」
「そうだよ、ヒカル。もう少し理路整然と物事を考えてくれ。そしてその感情的になって、昔よりますます愚行に走る行為を自重しろ」

そう言って、ルイは彼の胸を叩き続ける彼女の両手首を大きな手の平で握り、彼女の憤激を押さえ付けた。

ヒカルは嗚咽を漏らした。

「どうすれば良いの。どうすれば満足するの。どうすれば・・・私の声は届けることが出来るの」

ルイはそんなヒカルの両の腕首を掴み・・そして引き寄せた。
彼の胸にヒカルの額があたりそしてルイはヒカルを抱き締めた。
息も出来ないほど、強く、激しく。

「・・・・届かないわけないだろ。聞こていないわけはないだろう。
　ヒカルが・・・ヒカルが聞こえてないだけだ」

ルイはそう言うと、厭がるヒカルの抵抗を黙殺して、彼の胸の中に引き寄せた。

ジルの視界には入っていたはずなのに、ジルには見えてなかった、彼女の痛々しい傷跡がいくつも見えた。
華やかな柄の服を纏っているのに、彼女は少しも笑おうとしない。
ルイと居るときには、いつも困ったような顔をしているか、誰かを思って遠くを見ているか・・・そしてこうして泣いている。

彼女は昔は人前では泣かなかった。
唇を噛んで、じっと耐えているだけだった。

それが、運命の男を定めた途端に・・・こうも脆くなっていく。

いや。
違うな。

・・・違う。

自分が泣かせているのだ。
ああいう物言いをしなくても、ヒカルは充分理解できるはずなのに。

わざと、泣かせた。

これほど歎き憤るヒカルを見て、今まで彼に見せたことのない激昂が、あの男でさえ見たことのない表情をルイに見せるヒカルに、彼は言いようのない恍惚を感じているのだ。

自分が。このルイ・ドゥ・アルディが、ヒカル・クロスに溺れているのだとわかった。

もう、ずっと前から。

繰り返さない彼が、唯一何度も繰り返し言葉をかける相手が、別の男を思って慟哭する様を・・・こうして抱き締めて涙を受け止めることだけしかできない。
彼は星辰の子と呼ばれて、何手も先を読むことができるのに。

・・・・ヒカルに関してだけは、彼女の涙を止める方策を講じることが出来ないなんて。
■148

ヒカルを泣かせたいのか、涙を止めたいのか、ルイ・ドゥ・アルディはそれを峻別することはやめようと思った。

「夢の世界で偽物の幸せに浸かっていたのは、おまえ達の方じゃないか」
ルイはそう言った。
違うと繰り返すヒカルを捕らえたまま、ルイは続ける。

「かりそめの親子ごっこをして。
互いに失った人を悼んで自分の哀しみに溺れていただけではないのか。
・・・現実から目を背けて、ジルが墜ちていっても、シャルルはどんどん無幻症の時間が長くなっていっても、それでもヒカルの毎日を保障することが最優先だと言う。
・・・・オレとおまえはそれほど違うのか。
同じように、アルディの研究所の試験管で受精されて、他の受精卵から選別されて生まれてきた。
それなのに、なぜ違う。
おまえが希有なる体質だからか。それも創られたものなのか。
創造主であるジルは、もうその時のことを語ることが出来ない。
語ってはいけないとあえてあの状態にさせられている」

そこまで言うと、彼は彼女の髪を撫でた。
そして、かつて、あの薔薇園で強打された側の頭頂部にそっと触れる。

「シャルルはおまえが頭部を打ったときに、酷く怯えた。
自分と同じように、頭部損傷が原因で・・・無幻症に陥りはしないかと。
外的要因なのか、遺伝子異常なのかそれさえもわからないのに。

彼は、自分とジルの病の原因も対策も講じないのに、ヒカルの治療をしろと言った。
当主が聞いて呆れるよ。
私情で、人を動かせると思っている。
肋骨が折れた息子のことよりも。
粉砕骨折した自分の手のことよりも。
気を失っただけのおまえを憂えた。
これは一体、どういうことなのかな・・・ヒカル・クロス」

「ルイ・・・ルイ」
ヒカルは涙を流しながら、嗚咽を漏らしながら、彼に縋った。
逞しい広い胸に抱かれながら、彼に懇願した。
「シャルルを・・・ジルを・・・彼らを助けて」
「それがおまえの願い？家族になろうと言った願いは破棄されるの？」
ルイは薄く笑った。
でも、金の髪の下で煌めく青灰色の瞳は冴えていて、そして孤独だった。
その視線をヒカルは見ることは決してないだろう。
もし、ここで、彼の表情を見たのであれば、ヒカルは、もっと違った言葉を放ったかもしれない。

「ルイにシャルルを返したかった。私は幸せだと思ったから。
でも、本当は・・・・
本当は、ずっと、私の方が、夢の世界に居たのね・・・」

「ヒカル、ヒカルの言葉は届いている。
けれども、オレの言葉はヒカルに届かない」
彼はヒカルに容赦なく言葉の雨を降らせた。
彼はいつも言葉が少なかった。

でも、それは彼の真の言葉ではなかった。

今が、その時だと、ルイは頃合いを見てヒカルに話をした。
そして、それはシャルルとミシェルも承知の上のことなのだ・・・・

「目を醒ませ。おまえの言う『こちら』は夢幻の世界だ。『こちら』に来い・・・！」

ルイがそう言った瞬間だった。

がつん、と頭部を殴られたような感覚があり、ヒカルはその瞬間に目の前が暗くなった。
疲労した満身創痍の体に鎮痛剤を飲み、そして激昂して血圧が揚がったためだ、と頭ではわかっていた。

でも、次の瞬間には、誰かに・・・膝が折れて地面に墜ちる前に、ルイに強く引き上げられた感覚が、最後に重力を感じた瞬間だった。

「愚かな娘だ・・・ヒカル。贖罪の意味をもう一度、考えてくれ・・・」

ルイがそう言って、闇に呑まれていくヒカルの頬に口付けをした。

ヒカルの記憶に残っているのは、それが最後だった。

深い真っ暗な闇に呑まれていく。
自分が自分でないような感覚が全身を襲う。

こう言ったときの状態は、意識がまったくないわけではない。
呼びかければ答えるし、痛覚もある。

ただ、体が目覚めるのを拒否している。
瞼が細かく痙攣して、顔面が蒼白だった。
一目で、彼女が軽い脳貧血を起こしているのだとわかった。
振盪状態と同じだった。

無幻症でなくても、人の本能は、こうして自分の意識を断絶させなければやりきれないと判断する。

ルイは、気を失ったヒカルを胸に抱き締めた。
彼女に触れることが出来るのは、こうして意識を失っているときだけだ。
茶色の髪の毛がルイの腕に纏わり付いた。
彼女の白い額が露わになっていたが、不調のために細かい汗が浮かんでいた。

このまま・・・どこか遠くに連れて行こうか。

彼は細く長い指で、ヒカルの涙を拭った。
透明な液体が、ルイの指をすり抜けていく。

意識を失ってぐったりしたヒカルの足を持って、彼は軽々と彼女を抱き上げた。

かつて、ミシェルに攻撃されて意識を失った時のように。
あのときは、ミシェルや誰かに見られていないかどうか、酷く気にした。
でも、今はそうではない。
誰に見られても・・・自分が今からする行為は決して咎めることが出来ないと思った。

・・・ゆっくりと彼女の唇に、自分の唇を押し当てた。
涙の味がした。

彼女を手に入れたいのか。
それとも・・・シャルルの苦悶する姿が見たいのか。

狙いはひとつに絞れとあれほどミシェルに言われていたのに。

彼は、両方が欲しくなった。

■149

ゆらゆらと揺れて、水面の煌めきを見つめながら、深く沈んでいく感覚は、かつて経験したことがあった。

失神というものは、良い気分になるものではない。
特に、失調から起因するそれは最悪だ。
ヒカルは躰が揺れているのを感じた。

それなのに彼女はゆらゆらと波間に漂うような感じを受けていた。

煙草の香りと・・・絹糸のような細い髪の毛が覆い被さる感触。
大きな力で自分が持ち上げられて、まるで壊れ物のように運ばれる気遣われた僅かな振動。

そっと横たえられて、大きなエンジン音でさえ
それは決して不快なものではなかった。

彼女の体調は最悪のコンディションだったのに。

ジルは無幻症だった。
シャルルの無幻症の時間は長くなっていく。

ヒカルは、彼らのために・・何ができるのだろうかと思った。

ヒカルの言っていた「こちら」も「あちら」も実際には存在しなかった。
彼と彼女は同じだ。
アルディの研究所で誕生した命だ。
それなのに、こうも違うと彼は問い掛ける。

ヒカルが、あの人の娘だからか。
シャルルはだから、ヒカルを愛でるのか。
ルイが初めて会った時に言った言葉を思い出していた。
「シャルル、あなたはどうしてこういう者しか愛でることが出来ないのか」と。
そして、シャルルはそれにひどく憤慨して、ルイを鼻血が出るほど殴った。

ルイは、殴られることがわかっていて言ったのだと思った。
自分とどうしてこんなに違うのか、と訴えたのだと思った。

彼女の声はルイに届いていたし、ヒカルはルイの声に耳を傾けていなかった。
知らなかったでは済まされない。
彼の長い深い孤独を、ヒカルは踏みつけて幸せを噛みしめていただのだから。

彼がジルに、シャルルと呼ばれて返事をする屈辱を察した。
彼がミシェルに、できそこないと言われて反論できない哀哭を想像した。

ルイ・ドゥ・アルディは叫んでいたのに。
ヒカルは、その言葉を聞かなかった。

ルイの申し出を受け入れることは簡単だった。
ウィと言えば良いだけだ。

でも、ヒカルは定めてしまった。

ルイではない・・・・アルディの華を、自分の唯一の人だと定めてしまった。
拙いキスをヒカルに落とした、孤独な美しい人を愛してしまった。
あなたに・・・あなたに、ただ、会いたい。
本当はそれだけで、ここに来てしまった。
ただ、シャルルに会いたかった。

彼が、あの人を忘れて・・・・静かに生きている様を確認できれば良かった。
誰と愛を交わしても、あの人でなければ良かった。
もう、囚われて欲しくないと想ったのに。
それでも、その反面、あの人だけを思い続けるシャルルに少しほっとしていた。
失われた人には、誰も勝てないから。

ヒカルも勝てないけれど、他の誰も、あの人に成り代わって彼の心を大きく占める人物は出てこないことに安堵していた。

ヒカルは。
単に。
それを確認したかったのだ。
さもしい考えに支配されたヒカルこそが、彼らを脅かす脅威なのだと今更ながらに思った。

「・・・・ルイ！」
激しく叱責する声が聞こえて、ヒカルは目を開けた。
それは今のこの瞬間まで、彼女が深く想って憂えていた相手の声だった。

シャルル・ドゥ・アルディは酷く激昂していた。

ここがどこなのか・・・察しが付いた。

ここはヒカルの部屋だ。
アルディ邸に戻って来たのだとわかった時には、シャルルの怒号が部屋に響いた。
「ヒカルを泣かせるなと言っただろう」
彼は激怒していた。
シャルル・ドゥ・アルディは、ヒカル・クロスのこととなると、我を忘れる。

ルイが指摘するだけではなかった。
だから、シャルルはいつしかヒカルを伴って、公式の場に出ることを躊躇うようになった。
彼女がシャルルの唯一の「アキレスの踵」だったから。

でも、それはヒカル自身を大事に思っているからなのか、あの人の娘だからなのか・・・
もっと言ってしまえば彼女の稀なる体質を考慮してのことなのか・・・

ヒカルは聞くのが怖かった。
だから、パリにふたたび訪れている間、昔の幸せの時期を思い起こすことをやめてしまった。

傍に居れば切なくなるから。

だから離れた。

シャルルじゃないと駄目なのだと、伝えることが出来なかった。
シャルルからの愛も。シャルルからの温もりも。シャルルからの何もかもか、ヒカルのすべてだったのに。
それを夢幻の世界とルイに指摘されて、ヒカルは自分を遮断した。

いつまでも続きますようにと祈った世界が、違うと言われて、拒否をしてしまった。
躰が、心が。

もう、自分のことなのに、制御出来ない。

躰が重く、起きあがることができない。
鉛がまとっているようだった。

「・・・・ヒカルの体調不良は、シャルルも知っていただろう」
低く、ルイが言ったが、シャルルは冷たく言った。

「それを踏まえておまえを同行させたつもりだが・・・」

ルイは声を漏らして笑った。
シャルルの言葉を嘲笑した。

「それならジルに会わせなければ良かったのに」

シャルルは深く溜息をついた。
少し間を開けて、自分の息子に言った。

「遅かれ早かれ、ジルとヒカルは引き合わせることになった。
ヒカルは愚かではない。いつか、あそこを突き止める。・・・・その時にはもう遅い。
ジルはもうその時には、戻ってこられないところまで行き着いてしまうから」

「今回のジルも、戻ってこられなかったよ」
ルイはシャルルに報告した。
「オレをシャルルと呼び・・・ヒカルをあの人の名で呼んだ。
そしてランスでの結婚式はいつか、とたずねた。
たずねる度に、繰り返す邂逅を、どうやってヒカルに事前説明しろと言うんだ」
もうあれは、見せるしか説明できないだろう、とルイは静かにシャルルに伝えたが
シャルルは違うなと言って、ルイを完全に否定した。
「ヒカルにドナー登録を強要するな」
シャルルは言った。
「アルディ家特有の病の治療のために・・・ヒカルを利用するな。
それが巨万の富をもたらすモノであっても、だ。いや、なおさらそうだ」

「それなら」
ルイがシャルルに申し出た。

ヒカルはその声の逢頼をただただ黙って聞いているだけしかできなかった。
彼らは、ヒカルの処遇で揉めている・・・・

「それなら、オレにヒカルを譲ってくれ」
「いやだ」

フランスの華は即答した。

「かつて、そう言った男が居た。そして同じようにイヤだと言われた。
それを思い出すよ、ルイ」

フランスの華は、よく通るテノールで、彼の遺伝子を持つ男に宣言した。

「ヒカルはやらない。おまえでは駄目だ、ルイ」

■150

「それなら、シャルルがヒカルを連れて行くと言うのか？」
ルイがせせら笑ったが、シャルルは違うと言った。

「彼女は、アルディ家とは関わりのない一般人だ。・・・・日本に返す。彼女は成人して、監護権が切れた。もう、ここことは一切関係が・・・ない」
シャルル・ドゥ・アルディともあろう人が、愚かなことを、とルイは吐き捨てた。

「幼少のヒカルを引き取ったのは、シャルルだろう？
今となっては英断だと言わざるを得ないが。
・・・彼女を一般人として育てたつもりだろうが、もう、彼女は戻れない」
「それはルイが決めることではない」
シャルルは溜め息混じりに言った。
深い、軫念が混じった吐息だった。

「ここまで関わらせておいて、ヒカルはやっぱり帰すと。シャルルは言うが、ヒカルはどこに帰るというのか、示してやれよ。
・・・・自分の闇に。この薔薇の家に。閉じ込めた張本人が、今度は出て行けと言う。
あなたは・・・・あなたは、あの人以外の者は同じかもしれないが・・・」

その時のことだった。

「・・・・ルイ」
ヒカルが声を漏らした。
まだ、舌が上手く動かない。
もつれるような感覚があって、彼女はゆっくりと唇を動かした。
ルイ、とまた名前を呼んだ。
全身麻酔をかけられたような、痺れを感じる。
ヒカルは、シャルルではなく、ルイの名前を呼んだ。

自分の処遇で言い争う彼らの声が遠くで聞こえる。
でも遠いけれども、きちんと聞こえる。
だから、それに応えないといけないと思った。
自分の声が届かないことを嘆いてばかりいた。

でも、本当は自分が声を大きくしすぎていたから、彼らの声が自分に聞こえていなかっただけなのだと思うと、唇が自然に動いた。

目を開けると、そこはヒカルの居室であることを確認できた。
見覚えのある天井が見えて、彼らの声の通り具合から、慣れ親しんだアルディ家に、ルイが連れ戻してくれたのだとわかった。

腕の静脈に、少しだけ張った感触があり、点滴後の止血シールが貼られていることに気がついた。
だいぶ、目を開くことのできない時間があったようだ。
彼らの・・・苛立たしげに白金の髪をかき上げるシャルルと、腕組みをしたルイが腕を解いてこちらを見る様が、スローモーションのように視界に入った。

最初に彼女が呼んだ人物の名前がルイ・ドゥ・アルディであったことに、シャルルは少しだけ悲しそうな顔をした。
シャルルの顔をまず見ていたから、ルイの表情は見ることが出来ず、彼が自分に近寄って来ることを目の端で捕らえるだけだった。

最初に姿を探す男と。
最初に名前を呼んだ男と。
同じ貌をしているのに、各々違う名前を持っていて、ヒカルはわかっていたのに、何よりも気遣っている、彼女の最も大切な人物の息子の名前を口にした。
シャルル、と気軽に呼ぶことが出来ない。

最後に、シャルルに声をかけたとき。
ヒカルは「おとうさん」と呼んだから。
これからそう呼ぶ度に、彼女の心は少しずつ凋んでいくと思った。

「ヒカル。寝ておけ」
ルイがそう言って声をかけてきた。
彼女の脈を取り、そして頬に大きな手の平を添えた。
「単なる過労。寝ていれば治る」
彼が素っ気なく言った。

「・・・・ヒカル」

シャルルがそっと声を出した。

ヒカルは、ルイよりもずっと距離を置いて、立ったまま、横たわっているヒカルを切なげに食い入るように見つめるシャルルの声を聞いて、びくりと躰を震わせた。
その振動がルイにも伝わって、彼は一弾かれたようにヒカルから手を離した。
・・・・彼女の頬から、数滴透明な雫がこぼれ落ちたから。

私はここに戻って、何度涙を流せば、本当のことに近づくのだろう。
いや、涙を流すほどに、何かから遠くなるようであり、何かに近づいていく。

「もう、だいじょうぶだから。私、だいじょうぶだから」
ヒカルはそう言った。
「それなら、泣くな」
「泣いていない」

ヒカルは横を向いて、毛布をかぶった。
幼い仕草であったけれど、ようやく躰が動くようになって、ヒカルは青灰色の視線から逃れるように、毛布をかぶった。
くぐもった声で、ヒカルは言った。

「・・・だいじょうぶだから、ひとりにして。御願いだから、ひとりにしてください」

ヒカルは哀願した。
涙がまた流れた。
唇を噛んで、嗚咽が漏れないように浅く呼吸する。

ジルに会って。
そしてルイに問いかけられて。

自分は、アルディ家の者達に、問われ続けたのに、答えていなかったのだと思い知って打ちのめされた。

激しく深く彼らは叫んでいたのに、自分は水面を漂って、深く沈むことに怯えて・・・・距離を置いていたのはヒカルの方だったと感じることが耐え難いほどに、息も出来ないほどに、苦しかった。

「わかった。ゆっくり休め」
しばらくあって。シャルルの声が聞こえた。
ルイが溜め息をついて、オレも行く、とヒカルに声をかけて、そしてそのまましばらく待

つと・・・気配が消えた。

その間、ヒカルは目を閉じて、これは夢なのかもしれない、夢であったら良いのに、と強く念じていた。
目を開けば・・・自分はまだ、小さなこどもで、シャルルもジルも居て、ミシェルもそれほど怖いとは思っておらず、ルイを遠巻きに見ながら何とか近づけやしないかと思ったあのころに戻れるのではないかと思った。

そして、こうやって、何度も何度も深く思いを沈めていって、シャルルとジルは無幻の世界に迷い込んでしまったのだと、思い渡した。

ヒカルはひっそりと・・・静かになった、ヒカルが長らく過ごした部屋で、泣いた。
昔のように、ひとりになったことを確認してから、声を漏らさないように。
柔らかな羽根枕に顔を押しつけて、声を殺して泣いた。

ジルの幸せそうな微笑みと、ルイの少し怒ったような顔が交互に浮かんでは消えて・・・
そしてシャルルの寂しそうな美しい微笑みはヒカルの目の前に浮かんだ。
目を瞑っているのに、浮かび上がる恋しい姿を消そうと、彼女はもっと強く瞼を閉じた。
それなのに、涙が次から次に溢れてくる。

シャルル・ドゥ・アルディの声が耳から離れない。
シャルル・ドゥ・アルディの手の温度が忘れられない。
シャルル・ドゥ・アルディの・・・・ヒカル、と呼ぶ声が恋しい。

彼のちょっと悲しそうで、それでいて静かで穏やかな微笑みが好きだった。
その微笑みが、彼女の瞼の裏に焼き付いて離れなかった。

■151

アルディ家の当主と、次期当主は・・
ヒカル・クロスの部屋から出ると、2人のよく似た面立ちの男達は各々、溜め息を漏らした。

若いヒカルに出て行けと言われて、押し黙ったまま、フランスの華と星辰の子が退室する。
その様をミシェルが眺めていたら、さぞかし嬉々として・・・いろいろと癇に障る感想を発することだろう。

シャルルは吐息を漏らして、彼女の私室の扉にもたれ掛かると、白金の髪をかき上げた。
それまでが酷く緊張していたようだった。
ヒカルに逢うのに、緊張する。
これまでなかった緊縛がシャルルを襲う。

彼女は・・・あの人に酷似している。
娘だから、当然と言えばそうなのだが・・
彼女の言動や、微笑みや、ちょっとした仕草が、シャルルの心を激しく乱していく。
体格を除けば、その心根も、貌の造作も・・・・錯覚するくらいに、とても良く似ている。

まだ、手が震えている。
躰があの人だと誤認識して、電撃を墜とされたかのように痺れる。
でも、あの人ではない。
シャルルはそれを認識しているのに・・・それでも胸が高鳴る。

ヒカルを引き取ったときに。
監護権を獲得できたことを喜んだ。
そして、反対を押し切って彼女を引き取るだけの価値が、ヒカルにあると知った時の親族の反応を見て、快哉をあげた。
これで彼女と一緒に居られると思ったから。

代わりでも良い。
ヒカルを手に入れられなければ、あの人との姉妹のどちらかをこちらに呼び寄せるつもりだった。
良く似た器であれば、誰でも良かった。
シャルルはそれほどまでに、ヒカルに求めたものが残酷なものであったことは、承知していた。
充分過ぎるほどに。

・・・シャルルだけにしかわからない激しい思いがあった。
受け止めるのに、苦痛と思わない無垢な魂が欲しかった。

彼の愛は重い。
それはシャルル自身もわかっている。

ひとりだけしか愛せない。
ひとりだけにしか愛を向けることができない。

あの人にしか向けられなかった想いを、受け止められる存在はヒカル・クロスだけだと思った。

「シャルルなら良いのか。・・・・勝手だな」
ルイが部屋を出て、廊下を歩きながら辛辣に言った。
彼が父を尊称で呼ばなくなって久しい。

先ほどのシャルルの発言が理解できないと言った。
見事な金髪が揺れていた。

「ルイがヒカルに執着するのは容認してやる。
けれども、手に入れるだけが愛ではないと・・・そろそろ識認しろ」
「欲しくてヒカルを手に入れたシャルルが何を言うのかと思ったら」

そこでルイはシャルルに振り返った。
その姿は、かつての自分のようだった。
シャルルはぴくりと頬を動かして、かつての自分と酷似したアルディ家の新しい種を見つめる。

「今度は飽きたから帰すと言い出して、そして別の者が欲しいと言ったらやっぱり駄目だと
言う。・・・・頑是無いこどものようで幼稚だ」
「オレにその生意気な口を利くくらい、余裕があるのであれば、もっとヒカルの体調に気を配れ
」
シャルルは動じずに言った。

「ルイ。彼女にも彼女の人生がある。
だから、おまえと一緒に歩むと彼女が決めたのであれば、それも良い。
そう思っていた。
ヒカルが望むのであれば、それが叶うことが最善だと。
・・・・でも駄目だ。
ルイでも、ミシェルでも・・・オレでも駄目だ」
「ヒカルがその言葉で納得するのかな」

ルイは薄く笑った。
少し疲れたから休むと言った。

「シャルル。彼女は夢寐の城から抜け出した。
　だから、彼女がどうしても欲しい。
・・・シャルルを父と呼ぶヒカルが、ね」

挑戦的に言うルイに向かって、シャルルは同じ色の瞳を向けた。

「それはオレに対する挑戦かな・・・ルイ・ドゥ・アルディ」
「ヒカルの心が自分に在ると・・・驕っている者への諷諫」

その言葉に、誇り高いシャルルは唇を結んで、厳しい顔つきをした。
ルイがこうして、シャルルに酷く難詰することは珍しい。
彼はいつも遠回しに、何手も先を読み込んでからでないと発言しない。
それはシャルルと同じだった。

「彼女の心は彼女だけのものだ。誰のものでもない」
示し合わせたように言ってくれるね、とルイは微笑んだ。
ヒカルにも同じ事を言われた、とシャルルに告げることはしなかった。

けれども彼は薄い唇を引いて、空笑いをした。
「早く隠逸しろ・・・シャルル・ドゥ・アルディ」

ヒカルは、扉の向こうで、おそらく泣いているであろう。
明日の朝もきっと、酷い貌をしているに違いない。
そんな顔を見て、辟易して顔を顰めても。
・・・どうにも閑却することができない。

囀るように、歌うように彼はシャルルに言った。
「シャルル。時は来た」

彼は緘黙を破り、宣言した。

「ヒカルを娶る。シャルルがあの玩弄物は不要だと言うなら、オレが貰い受ける」

煽れば、シャルルはきっと動く。
自分自身を窮地に追い込むことになるかもしれないが、彼を駆るには、自分も無傷ではいられないだろう。

「おまえ達が創った種に滅ぼされて・・・・そして枯死してしまえ。古き薔薇たち」
星辰の子は、神寿のような呪詛の詞をシャルルに浴びせた。

■152

また、ここに戻って来てしまった。
医療機材が揃っている研究所に連れて行かれると思っていたのに、ルイはここに連れてきた。

彼が自分を責めているような気がした。
ルイがこれまで、ヒカルに黙って、何をしていたのか・・・
何年、彼は続けてきたのかと考えると、胸が苦しくなった。

ジルにシャルルと呼ばれるとわかっているのに、彼女に微笑む。
シャルルが夏に魂を彷徨わせているのに、それを護ってアルディ邸を閉鎖する。
ミシェルの要求に応え続けて、彼はいつもアルディ一族の先頭を走り続ける。

この家の人達は、何が大切だと思っているのだろう。
ヒカルが大事だとシャルルから教わったすべてのものが・・・彼らにとっては、とても脆くて危ういガラス細工の城の中でしか咲くことの出来ないガラスの薔薇なのだと思った。
力を込めればすぐに崩壊してしまうような、そんな場所で、彼は息を潜めて生きていた。

そう。
ヒカルはこれまでの夢のような、奇跡のような日々が、本当はどこか現実とかけ離れた世界であることは承知していたはずなのに。
あまりにも、あまりにも。
穏やかで優しくて。

ガラスの城に、ヒカルは住まっていた。
外からはその様が丸見えなのに、内側はそうであると気がつかない、特殊なガラスの檻に居たのだと思った。

ヒカルは涙を拭いて、起きあがった。

後から後から零れる涙を彼らに見せることがなくて、シャルルとルイが退室するまで嗚咽を堪えたことは、自分を褒めてやろうと思った。

このまま眠りに落ちてしまえば、どんなに楽だったろう。
疲れた神経と体は、完全には休まらないかもしれないけれど、少しの時間だけ、苦しみから解放される闇に沈んでいることが出来るから。
でも、彼女は大人になって、眠れないほどに苦しくなるという時艱を知った。

彼らが出て行く時に、廊下でなにやら話をしながら出て行った音声だけを拾っていた。

シャルルに逢うのもつらい。
ジルに逢いに行くと切ない。
ルイの今までを考えると沈む。

日本に帰ろう。

そう、思った。

彼女はここに居てはいけないと言ったシャルルの言葉が思い出される。
彼はヒカルをパリから出したときに、こうなることがわかっていたのだと思った。
そして、ルイも。

あのままでは居られないから、ルイはヒカルを迎えに来た。
あのままでは居られないから、シャルルはヒカルを拒んだ。

自分は、遠い昔に彼と交わした、シャルルとの問答である「泣くだけが泣くという行為ではない」ということに、解を提示できたのだろうか。

・・・・シャルルに拒否されて。
自分の秘密について知った。
そして、ルイが、普段この館に居なかった理由も。
ジルがどうしてヒカルに会いに来なかったのかも。
何もかもが、ようやくわかったのに、わかったからこそ、ヒカルはここに居てはいけないと思った。

涙を拭いて、ベッドから起きあがり、そして数少ない荷物を引き寄せた。
日中の時のままの服装で、彼女は全身から発汗していたので、ひどく湿っている感じがした。
・・・・着替えなければいけない。

ルイが邸に運ぶように指示した、たくさんの衣装ケースは、部屋の扉の近くに積み上げられていたが、それをひとつひとつ、化粧箱をあけて中身を取りだそうという気になれなかった。

自分の馴染んだ服が恋しかった。

つましく、質素に、買ったばかりのパソコンを持ち歩く、そんな生活が本来の自分なのだ。

・・・・パソコン。

そこで、ヒカルはシャルルが電子カルテをサーバーからダウンロードできるようにした、と言ったことを思い出した。
自分のカルテは日本に持ち帰りたい。
それでなくても、母と父の記憶がほとんどないから。
せめて、彼らの名前が残っている記録だけでも、手元に置きたかった。

太陽のような人と言われた父と母。
同級生で、再会して、そしてそのまま・・永遠の愛を貫いた。
そう、永遠に。

もし、彼らが生きていたら、ヒカルはシャルルに心を奪われただろうか。

わからない。
わからないから、自分はこうして・・・彷徨っている。

ヒカルはベッドから抜け出して、ルイが運んできたと思われるバッグを探した。
あたりを見廻す。

・・・あった。

律儀な彼は、ヒカルをここに運び込むときに、きちんと持ち込んであった。
今まで学習机として使用していた、一枚板のデスクに乗っていた。
ヒカルは立ち上がってバッグからラップトップを取り出した。
薄型の、最新の機種だ。
もちろん、無線ＬＡＮの設定もされているので、ここのパスコードの暗号変換パターンが変更されていなければ、アルディ家のマスタサーバでなくても、ミラーリングしてある古いサーバーの最も上層くらいは繋げることが出来るだろう。

電源を入れて、起動までの時間が短いそれを、こちらに来てから触れていなかった事に気がついた。

起動して・・・しばらく待つと、ＯＳが立ち上がった。
これは昔シャルルが持たせてくれた、アルディ家の独自開発ＯＳをそのまま引き継いでいる。

これを旧マシンから引き継ぐのは大変に苦労した。

今、ここで役に立とうとは思わなかった。

ネットワーク接続のパスコードを入力する誘導画面が出た。
パスコードは日々変更される。
そのパターンを知っている者でなければ、わからないし、一度しか入れられないパスだ。
失敗すれば、その場でＯＳのセキュリティプログラムが発動し、内部のハードディスクが破壊される。
・・・「アルディ家の者なら間違えない」という前提条件から成立する、ひどく厄介なパスワード承認画面だ。

ヒカルは少し考えて、最初の頭文字と、ひとつ飛ばされた文字を見て、その組み合わせの可能性を考えた。
何年も経過して、変更されているかもしれない。

一度きり。

シャルルが「電子ファイルを送っておく」と言ったことを信頼しようと思った。
あの口振りでは、今までの方法で良いはずだ。
夢幻の状態から覚醒間もない状態であったけれど、シャルル・ドゥ・アルディは決して・・ヒカルに偽りは言わない。

彼女は久しぶりに入力するパスを、順番に入れ始めた。
何度も教わり、何度も失敗して、シャルルに教わった技術。
そう、ヒカルがここまで生きてくるため以上のものを、シャルルは教えてくれたし、一緒に感じて、一緒に・・・時間を過ごした。

最後にエンターキーを押すと、それは静かに、当然のように接続を開始して、静音とともに起動した。
起動するまでのわずかな時間、ヒカルは考え事をしていた。
自分のカルテの記録がこの館にあるとは思っていなかった。
いや、系図原簿を残している家柄だから、ヒカルの記録もきっとあると思っていたが、それが不妊症の母の時代から残っているとは思わなかった。
シャルルはこの国の医療法を無視して・・・ヒカルとあの人の秘密を守り抜いたのだと思った。

ヒカルの母は。

・・・何を思っていたのだろうか。

シャルルに愛されて、そして彼の親友である父と結ばれた。
父とはシャルルと出会うよりずっと前に知り合って、恋に堕ちたと言う。
ヒカルは頬の涙を拭った。
涙で瞳を潤ませていれば、ディスプレイは見えない。

そして、サーバーに接続する。
やはり、ミラーリングされたファイルサーバーにしか接続できなかった。
ぽつんと、大容量サーバーの中にひとつだけ置かれた、「ＨＩＫＡＲＵ」と書かれたフォルダをダウンロードした。
すると、一度だけのダウンロードで、そのファイルは消えた。
ルイの組んだプログラムであると思った。
彼はそういうところは用意周到だった。
たとえ、ヒカルであっても、情報の授受は一方通行でなければならないという理念は曲げなかった。

かなりそのファイル数は多いようだ。
最新型の機種なのに、ロードするのに時間がかかった。
拡張子が見つからないのだろうか。

・・・ヒカルはそのフォルダを開いて少し驚く。
その中にあったファイルの数が、あまりにも多かったから。
几帳面に、ひとつひとつのファイルには名前がつけられていて、順番に付番されていた。

だがしかし。
順番に、同じタイトルに加えて番号が入った、ファイルが整然と並ぶ中。
そこに、ひとつだけ、ぽつんと違うタイトルのファイルが入っていることに気がついた。
タイムスタンプが最近の日付だった。
しかも、容量が大きい。

ウイルスかとも思ったが、そのチェックはすでに済んでいるから、そうではないらしい。

ヒカルはパッドから指を浮かせた。

・・・・これは何？

茶色の瞳を見開いて、そのファイルを凝視した。
うっかり開いてしまうこともできないから、しばらく考える。
そして、プロパティを見ると、作成者がミシェルの名前になっていた。
最終更新者はルイ・ドゥ・アルディ。

つまり、ファイルを作成したのはミシェルで、最終的にこのフォルダに入れたのはルイということだ。

・・・・・ルイが私に何かを伝えようとしている？

少し指が震えた。

夢の城から出てこいと言ったルイを思い出した。
更新時間を見ると、あの図書室に呼び出しをされたほどなくして後に更新されている。

ジルのところに行く前に、ヒカルがそれを見ることを考えていたのだろう。
ということは、それは・・・ルイが、外出する前に見て欲しかったのだろうか。

まったく気にしなかったヒカルに、だから、腹を立てて、外出するときにはあれほど不機嫌だったのだろうか。

わからない。
このファイルを見るまではわからない。

これは何かのエラーを引き起こすファイルかもしれないが、それでもヒカルはそれを見ようと思った。
そうなったらこのマシンは即座にネットワーク切断して・・・
いざとなったら、ハードごと廃棄すれば良い。
苦労して手に入れたものではあるが、ルイやシャルルや・・・この家のネットワークには替えられない。

ヒカルは、意を決して、そのファイルを選択して、そして開いた。

何か、予兆のようなものを感じた。

■153

一分一秒がとても長く感じていた。
朝をこれほどまで、待ち焦がれたことがあっただろうか。
朝にならなければ良いと思ったことは何度もあったのに。

彼女はベッドの上にラップトップを乗せたまま、じっとその画面を見つめていた。

横になることはもうしなかった。
もうできなかった。

充電プラグ接続部分と変換プラグとがあまり相性が良くないらしく、熱を帯びていて、ベッドのシーツは生暖かくなっていた。
が、彼女は気にしなかった。
暑さ寒さも感じない程にそのディスプレイに見入っていた。

夏の朝は夜明けが早い。
使用人達が活動を始める僅かな音と、外から漏れ聞こえる生きものが朝を告げる物音が、酷く煩わしかった。

膝を抱えて毛布を被り・・・そして茶色の瞳を見開いて、瞬きをゆっくりするだけで、呼吸も浅く無表情だった。
この一瞬一瞬でさえが長く感じる。
自分の呼吸音さえ煩わしい。
そして、外出するためのアルディ家の運転手が、車のエンジンを暖める時間まで、彼女は耐え抜いた。
数時間が何十年にも感じた。

朝を待つ、というのは、準備をすべて整えて、その時間を待つのではないと思った。
楽しみに待つ朝ではなかった。
どちらかというと、やって来なければ良いとさえ思う。
それなのに、ヒカルはどうしようもなく焦れた。

ただただ、何度もディスプレイを眺め回した。
何度見ても結果は変わらないのに。

そうしてようたく待ちわびた時間が近くなると、彼女は寝不足で脱力感を感じる体を起こして、シャワーを浴びた。
熱めの湯はあまり好きではないのだが、澱んだ頭をすっきりさせたかった。
瑕に湯が染みた。
そしてそれがヒカルの意識を覚醒させていく。
点滴を打たれた痕や擦過傷の痛みも、涙の痕も、みな、痕跡を洗い流してくれた。

そして白い肌が櫻色に火照るまで浴び続けた。
この時だけは、時間の経過を焦れることもなく過ごした。
もっと早く湯浴みをしていれば良かったと思った。
・・・彼女が今日しなければならないこと考えながら、シャワーブースから出てくると、そこからは日々の習慣どおりに、順番通りに支度を始める。
ここは長らく留守にしていたアルディ邸のヒカルに与えられた部屋であるのに。
それなのに、忘れていた手順を彼女の体は覚えていた。
日本で暮らすときとは違う間の取り方に、ヒカルの体は自然に動く。

自分はここで育ったのだ。それは夢ではない。

そう思い知る。
だから、夢から戻ってこいと言ったルイ・ドゥ・アルディの言葉そのものが夢ではないかと思う。

シャルルもジルも・・・こんな夢幻の状態を続けていたのだろうか。
どちらが夢でどちらが現で、どちらが本当でどちらが願望なのか・・・・
混在する世界を彷徨いながら、彼らは何を思っていたのだろうか。

また涙が出そうになって、ヒカルは上を向いた。
いつから自分はこんなに泣き濡れることに慣れてしまったのだろう。
涙を流すだけが泣くことではない。
涙を流さないで泣く者が居る。
この薔薇の一族はみんなそうだった。

だからほんの一時、幼いヒカルはそれを敏感に感じ取って、同じように模倣して彼らと同じように涙を流さないで居ることに没頭した。
それなのに、彼女はほんの少しここを離れただけで、堅忍することを忘れてしまったかのように、涕涙する。

問題は解決しないから。
だから、ヒカルは濡れた髪を乾かし、瘡蓋になった瑕に顔をしかめながら。
自分のラップトップと、パリにやって来るときに持ってきたスーツケースを取り出した。
あまり大きくない、小旅行用のものだ。
そしてそこに自分の多くはない荷物を放り込んだ。
このまま、いつ、パリを出発しても良いように。

彼女は最後の場所に行った後は、ここには戻らないつもりだった。
日本行きのチケットが取れないのであれば、適当なホテルに宿泊すればよいと思っていた。
もう、この部屋には戻ってこられない。
いや、アルディ邸でヒカルは来賓扱いである以上は、ここにはもう戻れない。

入邸する都度、IDチップを貼られるのはもう、切なくて耐えきれなかった。

持ってきた荷物はそれほど多くはない。
だから、スーツケースに入れる荷物も少なかった。
扉の脇に積まれた、ルイが用意した衣装箱も・・・ウォークインクローゼットの中の、ディナーのために用意された服もそのままにした。

ヒカルの中ではそれは夢の残骸でしかない。

・・・・食事も取らなかった。
シャルルの為の薔薇を用意することもなかった。

ただ、ひっそり、その館を出た。
行き先を定めていたし、シャルルに別れを告げることもしなかった。
自分には成すべき事があったから。
今日の今日では、パリから日本行きのチケットは取得できなさそうだった。
この世の中は夏だった。
人々がバカンスに興じる季節なのに、ヒカルは心を躍らせることは到底出来なかった。
これからもそうだろう。

夏を迎える度に憂える。
決して心躍る季節にはならない。
彼女の両親が消えてしまった季節なのだから。
そして、ヒカルが大切にしている人々が、路をはずす季節だから。

彼女がこっそり館を出ようとしたとき。
ガレージから、大きな爆音がした。
今、エンジンをかけたようだ。
しかも、ヒカルがスーツケースを引きずる音を確かめてから、エンジンをかけたかのような、絶妙なタイミングだった。

こんな爆音をさせる車は、ヒカルはこれまで1回しか乗ったことがない。

「・・・・ルイ」
ヒカルは呆れたように目の前の人物に声をかけた。

彼は何十本目かの煙草に火を付けながら、退廃的と表現するしかない表情で、言った。サングラスをしているから、表情がわらかなかった。

「・・・・乗れ」

彼はそう言って、運転席から、無造作に吸いかけの煙草を投げ捨てた。
彼の愛車に乗って・・・いつからヒカルを待って居たのだろう。
夏の朝の光を浴びて、ガレージの中の陰にあってさえ、ルイは晄輝いていた。

■154

ヒカルがここを通るのを待って居たのだろうか。
数え切れないくらいの煙草の吸い殻を見た。
そして、彼は不機嫌そうに、横を向いたまま、シートベルトを着用した。

サングラスをかけているので、目元がわからない。
けれども、どうも・・・ほとんど眠らないでいたようだった。
ヒカルから見ても、彼は酷く疲れているように感じた。

「ルイ、いつからここに居たの？」
「それを言ったら、ヒカルはどうするの？」

逆にルイに訪ねられてしまい、ヒカルは困ってしまった。
ルイはきっと、ここでずっと時間を過ごしていたと思う。
それを、ヒカルを待って居たとルイは決して認めないし、ヒカルはルイに対してそこまで自分が

彼の中に踏み込んでいる存在だとは思っていなかった。
だからルイに、車に乗れ、と言われたが、その申し出を素直に受け入れられそうもない。

「ヒカルがこれから行くところは、オレと一緒だから」
ついでだ、と彼は言った。
彼女はどこに行こうとしているのか、お見通しだよ、と薄く笑った。

ヒカルは少し考えて・・・そして同乗することにした。
きっと、ルイは、アルディ家の運転手達にも、ヒカルを乗せないようにと言い聞かせてあると思った。
あのファイルの最終更新者がルイであるのであれば、きっと、そうすると思った。

「乗るわ・・・」
ヒカルはそう言って、意を決して車に乗り込んだ。
助手席の足元からはみ出して、スーツケースが空間を占領したので、ルイは眉を顰めた。
ミッドシップエンジンの車だから、余計に狭く感じる。
「後ろに置けよ。・・・そこも適切な場所ではないが」
ルイはそう言って、不愉快そうに言った。

「ごめん・・・ルイの愛車だったわね」
「愛車・・・オレにはそういう執着はないよ」

そうだろうか。
あれほどの蔵書をセーフハウスに保存して、そしてこれほどの車を乗り回す。
彼は一見、執着しないようでいて・・・ひどく、いろいろなものに愛執を感じているのではないのだろうか。
そんなことをふと思った。

彼が執着しないと宣言するのも。
そして本当にそのように、アルディ家の別棟に何も置かないのも。

本当は、その飄逸であるのではく、その逆ではないのだろうか・・・・

「早くしないと出るぞ。オレはあまり待たないから」
朝まで彼女を待ったルイ・ドゥ・アルディがそう言い放ったので、ヒカルは慌てて、スーツケースを後部座席に押し込もうとして・・・

「ああ、少し待って」
と言って、スーツケースから荷物を取り出した。

「ここから大事なものを出しておくから。・・・2つだけ取り出しても良いかしら」
許可を求める言い方であったけれど、ヒカルはルイの許可を待たずに、スーツケースを開いた。
中身は隙間だらけで、ヒカルが年若い娘に相応しいような荷物を持ち合わせていないことを証明していた。
恥ずかしいからあまり見ないでね、と彼女は言ったが、ルイ・ドゥ・アルディの視線の先は、サングラスで遮られていて、よくわからなかった。

ひとつは・・・
ひとつは、彼女の銀色のラップトップ。
それから、もうひとつは・・・
大事に梱包し直した・・・マリナ・クロスの最後の作品。

ヒカルはこの2つを大事に取り出した。

ルイはその様子を静かに見て居たが、それで全部か、とは尋ねなかった。
それがヒカルの全部だとわかっていたようだった。

「行くぞ」
ルイは低くそう言うと、車を走らせた。
エンジンの回転音が大きいのに、その銀の車体は振動をあまり感じさせずに走り出した。

前回と同じように、無言の道中だった。
ヒカルはこっそり、ルイを横目で見た。
彼は夏の太陽の晄を受けて、金髪が乱反射していた。
白い頬はまったく日焼けしておらず、サングラスがその晄の乱反射を更に拡散させていた。

・・・・ヒカルはこれが前に通った道程だということに気がついた。
寄り道をしたから、少し時間がかかったけれど、まっすぐそこに向かうと、そこはかなり近い場所にあるのだと思った。

風が凪がれて、ルイから煙草の香りが漂った。
相当本数吸ったのだろう。
彼は・・・
自分を隠すときにだけ煙草を吸うのだと思っていたが、そうではないのだろうか。

それとも、自分を隠すために、何時間も喫煙していたのだろうか。

「ルイ・・・煙草は良くないよ。やめようよ」
ヒカルは無視されると覚悟の上で、そう言った。
エンジン音と、夏の陽射しで熱くなり始めたアスファルトの上を、薄いタイヤがすべる音だけが響く中、ヒカルの言葉がルイに届くように、少し大きめの低めの声で言った。

「ヒカルがオレと一緒に居るなら、やめる」
「ルイ・・・困らせないで」

ヒカルが困って言った。
「困らせる・・・？手古摺らせているヒカルが悪い」

ルイは前を向いたまま薄く笑った。

「このまま、オレと一緒に消える？」

■155

「・・・・で、答えは？」

しばらく黙っていると、彼はまるで世間話をしているかのようにさらりと答えを求めてきた。
ヒカルがその間、どう答えようか頭を悩ませていることはお見通しである、というような絶妙なタイミングだった。

風がヒカルの髪を巻き上げた。

ルイはいつもひとりで・・・ひとりでないかもしれないが・・・この車に乗って、何を考えているのだろうか、と思った。
助手席に、ヒカルではなく、ジルに渡すための、決して身につけてもらえることのない衣装箱を積んで移動するとき。
シャルル、と呼ばれて、マリナは元気だよ、と答えるとき。

ルイ・ドゥ・アルディという人物はどこに行ってしまうのだろう。
どこかに行き着きたいのだろうか。
だから、ヒカルに困った申し出をするのだろうか。

彼の金髪も風にそよがれて美しい乱反射を創り出していた。
その横顔を見て思った。

長い時間を経過して、彼はますますシャルルに似てくる。
そしてますます、彼の孤独は濃くなっていく。

ルイは美しい。
そして完璧だ。
何もかもが約束された人生で、何もかもが手に入れられる環境も能力もある。
でも、彼は何も手に入れられないと言って瞋恚の焔を燃やす。

その彼が、一緒に消えようと言う。
彼女は茶色の髪を棚引かせたまま、言った。

「ルイ・ドゥ・アルディはそんな質問をしない」
「それは答えではないよ、ヒカル」

ヒカルの想定外の答えに、ルイは少し頬を動かした。
彼女はエンジン音で言葉がかき消されないように、声を大きくして言った。
自分の答えは正解ではないかもしれないし、ルイの欲しい答えではないかもしれない。

でも、大きく息を吸って言った。
「ウイと答えても。ノンと答えても。
　きっと、ルイなら『退屈しのぎの冗談だ』と言うから。
　だからそれが私の答えよ」
「言ってくれるね」
ルイ・ドゥ・アルディが面白いね、と言って笑った。

「オレは冗談は言わないよ、ヒカル」
「それなら、余興？」
彼はそこで、運転をしながら、ふいとこちらを向いたので、ヒカルは慌てて言った。
「ルイ！正面を向いて！運転中だから」
無表情で、サングラスをかけているから、視線がわからない。
彼が怒っているのか、嘲っているのか、わからない。

ルイはゆっくりと前を向き、そしてもうすぐ到着するから、と言った。
「・・・・冗談でも余興でもないと言ったら、ヒカルはどうする？」

「どうもしない。あり得ないから」
「あり得ない。あり得ないという言葉は存在しないよ、アルディ家ではね」

ヒカルは反論した。
「シャルルはよく言うわ。座右の銘をね。あり得ないと言う」
「ヒカル。忠告しておこう・・・オレとシャルルと比べるな」
客観的事実を言っただけなのに、と言ったヒカルに、ルイは冷笑した。

「このまま車の外に放り出すぞ」
ヒカルは微笑んだ。くすくすと笑った。

「ルイ、残念でした。もう間もなく着くわ」
「ヒカル、わかってないな、オレが運転しているのだから、主導権はオレにある」
ヒカルは自分もサングラスを持ってくれば良かったと言って、高くなりはじめた強い陽光に目を細めた。

あれほどルイに打ちのめされたのに、ヒカルが微笑んだ。

それを見て、答えをはぐらかしたヒカルにこれ以上、答えを求めることはできなくなった自分に、ルイは苦笑した。
彼女の精神構造は一体、どうなっているのだろう。

泣いていたかと思えば、すぐに笑う。
打ちひしがれているかと思えば、立ち直って果敢に挑んでくる。

これがヒカル・クロスなのだろうか。
それとも、あの人の娘だから、シャルルが満足するように、あの夏のマリナたちのように、気を回してそういう振る舞いをしているだけなのだろうか。

昨晩は、よく眠れていないはずだ。

膝の上に大事に抱えている荷物は、車の振動で傷むのを防ぐために、持っていたいというだけの理由ではないはずだ。

それなのに・・・
ヒカルは微笑む。
そしてルイをあしらう。

彼にはこれ以上ない譲歩なのに。
これ以上ないくらい、求めていると訴えているのに。
彼女はそれはルイ・ドゥ・アルディではないと言う。

シャルルと呼ばれて返事をする自分を見ているのに。
彼女は、それはルイではないと言う。
こうしてヒカルに提案するルイは違うと言う。

それなら、自分は誰になったら、ヒカルは微笑むのだろう。

ヒカルの言うとおり、ロアールの館にはほどなくして着いた。
彼と話をしながらも、周囲の景色に気を配ることのできるヒカルの余裕が、何となく癇に障った。

「何となく」
ルイにはそういう曖昧な定義は存在しない。
それなのに、彼女には「何となく」退嬰的な態度をとってしまう。

もうすぐ公道から私道に入る。
門を潜ればもう一度、彼女と夢幻の館に足を踏み入れることになる。

彼女はあのファイルを見ていたはずなのに、ルイには一言も・・・何も言わなかった。
ラップトップを後生大事に抱えていることから推測できた。
彼女は何をしに、この館にもう一度来たのか。

ひとりにしてくれ、と泣いたヒカルをシャルルは放置した。
涙を拭いてやらず、ただただ、彼女があの人と酷似しているから、戸惑っているだけだった。

シャルルにとって、ヒカルは愛玩物だと最初から言ってあったのに。
だからやめておけと言ったのに。
彼女は笑っているだけの生きものではない。
本当はよく泣くし、自我を主張できない懊悩も知っている。

代わりでない、と思っていること自体が、もう代用しているのだということに気がつかない、望蜀の国に迷い込んだ流離い人たちには、決してルイの深淵は窺い知ることはできないと思った。

「オレが・・・・オレはおまえが欲しいと言っても、ヒカルは『それはルイではない』と言い張るのか？」
彼がシャルル・ドゥ・アルディになる前に。
彼女に言わせてみたかった。
ルイと一緒に生きようと、彼女が少しでも心を動かす素振りを見せれば、このままどこかに連れ去るつもりだった。
いくつか持っている別邸でも良かった。ホテル暮らしでも良かった。
ただ、どこかに行きたかっただけだった。
ヒカルを伴って。

彼の申し出に対する答えは、ひとつしか用意しなかった。
それなのに、彼女は違う答えをした。

あなたは、ルイ・ドゥ・アルディなの？と尋ねた。
孤独で気高く、そして誰にも跪かない彼が唯一屈する相手が尋ねた。
それはルイではないと言う。

サングラスの下の、切れ長の瞳は正面を見ていた。
でも、まだ、ミラーに映る助手席の人物を、眺めていたかった。

彼らは警備の者の目礼を通り抜けて、ロアールの館に入っていった。

この館で各々用事を済ませて、もう一度この門をくぐる時には、ヒカルは助手席に座っているだろうか。

■156

この館には入った記憶はあるが、退館した記憶はない。
ヒカルは前回の来訪からそれほど時間が経過していないことを思い出して、これが夢ではないかと一瞬疑った。
パリに来てよく眠ることが出来ないのは、夢を見ることそのものが怖かったからなのかもしれない。

そしてここは空夢の場所だ。

シャルルとミシェルの母が過ごした館であり、今はジルが過ごす。

ヒカルは、現実から切り離された空間に、今一度足を踏み入れる。
彼女は・・・いや、彼女達は、どうして現実から逃れてしまったのだろう。

ジルはたおやかで柔弱な雰囲気なので、内面も同じであるかのように見えるが、賦質はアルディ家の他の者達と同じように究竟だ。
若い頃はシャルルの代理も務めていた。
ルイのように「代理」としてではなく、シャルル本人として。
では、一体、ジル・ド・ラ・ロシェルという人格は、その間、どこに彷徨っていたのだろう。
シャルルに似るように、シャルルの思考をトレースし、彼の行動・発言およびその他、シャルルにまつわるなにもかもが、彼女を動かしていたとき。
・・・・彼女は、何を考えていたのだろうか。

「着いた」
ヒカルは吐息をついた。
手が震えて、酷く緊張する。これから尋ねることにジルは応えてくれるだろうか。
彼女の時間は遡ってそのままそこで止まったままだったが、その他は異常があるように見受けられなかった。

ルイは車を止めた。
前より、ゆっくりと車の速度を落として滑るように館に入っていき、エンジンを切った。
無言で扉を開けて、車から降りる。
先に車から降りて膝の上に乗せていた荷物を取り出していたヒカルは、車高があまりないタイプの車から降りた彼の横顔に目を細めた。
彼は星辰の子と言われているが、それは「日月星辰」の略称だ。
太陽のような耀く髪と、月のような星のような瞳を持つ、アルディ家の次期当主と言われているルイの横顔を見て。
彼はどうしてそんなに悲しそうなのだろうかと思った。
容姿も才も財も何もかもを持っているのに、彼は「持たざる者」と自分を定義している。

ようやくサングラスをはずしたルイは、陽光に目を細めながら、両手に荷物を抱えてぼんやりルイを見ているヒカルを見て、眉を顰めた。

「それを持っていくのか」
「そう」

許可されなくても持っていかねばならないと考えていた。
だから、ルイが素っ気ない態度で「そうか」と言ったので、肩すかしを食らったヒカルは身構え

ていた肩の力を抜いた。

互いに無言で館に入る。
これも前回と同じであった。
けれども、空には入道雲が発生し、日本の夏の季節のような空模様だった。
一雨来そうだと思うと、胸に抱えていた物が雨に濡れたら困ると思い、彼女はまだ雨のにおいもしない内からそれらを守るように胸の中に収めようとした。

横から腕が伸びる。
ルイが黙ってヒカルの腕からラップトップを取りあげていた姿を見上げたのと、彼が無言で正面に視線を戻すのは同時だった。

「・・・ルイ、ありがとう」
それにはルイは答えなかった。
ありがとうという言葉は彼が本当に欲しい言葉ではないのかもしれない。

本当はたくさんの者達がここを出入りしているはずなのに、館はひどく静かだった。
そういうシフトを組んで、誰もがすれ違わないようにしているのだろうが、それにしても徹底されている。
ジルひとりの静寂を守るために、一体どれだけの労力が費やされているのだろうか。

そこは、アルディ邸と同じ薔薇の香りがした。
前回は気がつかなかったが、こうして見ると、ごくさり気なくまるでホテルロビーのようなエントランスとでも言うような広い空間に、薔薇が飾られていた。
夏の暑い陽射しに耐えられるように品種改良されたアルディ邸の薔薇だった。
ミシェルの邸でも見た、シャルルが再現することが出来なかったあの薔薇だ。

ルイは足を止めた。

その絢爛に咲き誇る花弁を青灰色の瞳で見つめた。
すると、彼は片手で軽々と持っていたラップトップをヒカルに差し出した。

「・・・・ヒカル、ここから先はひとりで行け」
「ルイの用事はどうするの？」

ヒカルは驚いて、荷物を受け取りながら彼に尋ねた。

彼はあの薔薇を見て予定を変更したのは明らかだった。
ルイは形の良い唇の端を少し持ち上げた。

「オレはここから先には行けない。だからヒカルひとりで行け」
「どうして？」
「・・・・ミシェルが来ている」

どうしてわかるのか、と言いかけて、彼女は口を閉じた。
あの薔薇を見て、ルイが足を止めた。

あれは、ミシェルが来ている合図なのだ。

室内で鉢合わせしないように、玄関ロビーのホールに目立つように飾っているのだろう。
そしてルイが訪れるときも、同じように違う薔薇を活けて知らせるのだ。
ふらりと立ち寄ることもあるのだろう。

彼らは・・・館の者に来訪を告げる予告はできても、互いの予定を知らないくらい疎遠なのかとヒカルは思った。
ヒカルの考えを読んだかのように、ルイがヒカルを冷たく称美した。

「ご名答。オレとミシェルが同時に居たら、ジルが混乱する」
「でも、シャルルとミシェルが居ると思うのかもしれない」
「ジルの中には、シャルルしか居ない。
　ミシェル・ドゥ･アルディは居ない。
　もちろん、ルイ・ドゥ・アルディという人間も」
彼は素っ気なく言った。
まるで他人のことを述べるかのような言い方をするルイに、ヒカルは茶色の瞳を向けた。
彼はシガレットケースを取り出した。そして煙草がない、と呟いた。

「オレの用事はジルに会うことではなく、もっと別のことで・・・ひょっとすると、ここにミシェルが来るかなと思っていたので、かえって好都合だ」
ルイはこの館ではなく、ヒカルがこの館を出た次に行こうとしていたミシェルに用事があったのだとわかった。

行く先が同じだ、と彼が告げたのはこのことも想定したからだ。
しかし、煙草が足りなくなるほど喫煙するのは想定外だったらしい。

「・・・ルイ」
そこで彼女は口を閉ざした。
ヒカルはルイに待って居て、と言えなかった。

彼はいつも所要時間を決めていて、それ以上は待機しない。
いつまでかかるかわからない読めない終了時間をルイに告げることは出来なかったし、ミシェルに会うのであれば、彼はこの後、別行動をする予定なのかもしれない。

「・・・わかった。行ってくる」
ヒカルはそれだけ言うと、ふたつの荷物を大事に抱えて歩き始めた。
大丈夫、その他の荷物は車の中だから。
パスポートも財布もＩＤもみんな置いてきたから、ルイは去らない。
自分に言い聞かせた。

「———ヒカル」
ルイに背中を向けて、ジルの部屋に通じる階段に向かって歩き始める。
その時に、彼がヒカルに声をかけたので、彼女は振り返った。

彼が少し下を向いていた。
「・・・ルイ？」
何か忘れ物をしただろうか。
何か伝えていないことでもあったのだろうか。

そう思った時に、ルイが青灰色の切れ長の瞳を瞑った。
そして、唇を噛み、拳を握っていた。
「ルイ？」
彼女は涼風の流れる館の中で、静かに立ち尽くすルイが何かに苦悶している顔を初めて見て、驚いた。
あわてて、彼の名前をもう一度呼んだ。

でも、それが彼への合図であったかのように、彼は弾かれたように動くと・・・
大股でヒカルに近づき、そこから先は進まないと宣言したばかりなのに、ヒカルの傍に迫った。

彼の靴音だけがこの空間に響き渡る。

数歩の距離もないのに。
まるで遠くから走ってきたかのように、ルイは息を切らせていた。

大きく深呼吸すると、腕を伸ばしてヒカルの腕を勢いよく掴んだ。
大きな手の平で、彼女の肩を包み、そして自分の方を向かせる。
金髪が乱れて煌めき、ルイの額の上で揺れた。
痛い、と彼女が顔をしかめた様子に気がついて、ルイが手を離さなければ、そのまま肩を砕かれてしまうのかと思うくらいの強さだった。
ルイの手の平がヒカルから離れたが、彼の手は心なしか少し震えていた。
彼女は彼の行動の意味がわからずに、ただただ眉根を寄せて顔を傾けた。
どうしたの、と聞けないような緊迫した様子だった。

「・・・・行くな」
彼はそう言った。
「え？」
「行くな」
繰り返さないルイが、繰り返し言った。

「ヒカル、行くな」
目の前に彼の大きな胸があり、長身のルイの顔を見ようとして、ヒカルは目線を上げた。
その時。彼は彼女を胸に抱き寄せた。
背中に腕を回し、彼女の顔を自分の広い胸に埋める。
「ルイ・・・！」
ヒカルは身を堅くした。
こういうことは慣れていない。
何もかもに躊躇していた。

ルイがヒカルの背中に腕を回し、彼は囁いた。
「オレを今、見るな」
彼はそう言って、ヒカルの髪に頬を埋めた。
彼女が意識のない時か、こうして両手が満ちている時にしか、彼は彼女に触れられない。
やめて、と言って彼の胸を押し返すことができない時にしか、彼女を抱くことができない。

茶色の髪からは日向の匂いがした。
半分渇いていない状態で車に乗り込み、太陽光を浴びたからだろう。
太陽の様な人々から生まれた彼女は、同じように太陽の寵愛を受けた娘なのだろう。
自分と同じ過程で生まれたのに。
本当の母の腹から生まれたかどうかで、こうも別れてしまうのか。

ルイ、どうしたの、と彼女が戸惑った声を漏らしたので、ルイはようやく腕を下ろして彼女を解放した。
大息して、彼は髪をかき上げた。

この館に居る時は、ルイ・ドゥ・アルディであることは禁じられている。
けれども、一瞬・・・彼はルイ・ドゥ・アルディになった。
シャルルと呼ばれれば、そうだと返事をしなければならない場所で、禁忌を犯した。

彼女の温もり。
彼女の髪の香り。
彼女の声。

————何もかもが欲しい。

その欲求に勝てなかった。
ルイ・ドゥ・アルディが抑制できない。

彼は薄く笑った。
先ほどの重苦に満ちた表情はもうなかった。
そのかわりに、傲慢な目つきで彼女を見下ろした。

目の前の贖罪の娘に行け、と顎を上げて命じる。
いつものとおりに。

「行け。
・・・・ミシェルとジルは庭園の噴水前に居るはずだ」

■157

一対の薔薇の化身達が集っていると思った。
それくらい、彼らは遠目から見ても良く似ていて・・そして穏やかだった。

ルイ・ドゥ・アルディが言ったとおり、彼らは中庭の噴水前に居た。
エントランスホールを抜けて、階段を上らずに脇の通り抜けできる廊下を過ぎると、ルイと話した噴水のある庭に出た。

少し湿った水のにおいがする。
噴水から漏れる水しぶきか晄を受けて小さな虹を作っていた。
しかし、それだけではない湿った風を感じて、ヒカルは空を見上げた。
入道雲が出て、合間から漏れる強い朱夏の陽射しが漏れて、庭に濃い影を落としている。
やがて遠雷が聞こえ始める頃には、向こう側からやって来る乱雲が雨を降らせるだろう。
容易に想像できる空模様だった。

それでも雨催いの空合いに・・・上空の移り変わりをまったく気にしていないかのように、ジルは嬉しそうにミシェルに微笑んでいた。
少女の様に浮き立っていた。
彼女は昨日、ルイと立ち寄った店のショーウインドウで見かけた服を着ていた。
よく似合って居た。
生地は最高級であるのに、彼女の控えめな雰囲気を生かしていて、それでいて白い肌と長い髪と色素の薄い瞳がより映えるように、対照的な色鮮やかな紋様の服を見て。
ヒカルはおや、と思った。

ルイが選んだ生地と、色違いだったから。
そして、彼女はルイが運び込む化粧箱を宝物のようにいつもしまい込んでいるのに、それを着ている。
ジルがミシェルに裾を広げて何かを話しかけていた。
ミシェルは艶やかに微笑んで、ジルの様子を眺めている。

・・・彼がああいう表情をするのは、初めて見たかもしれない。

ルイの時にもそう思ったが、ミシェルも同じように、ジルを特別に大切にしているようだと思った。
ヒカルの知っている、大勢の人々に囲まれている彼らは・・・
いつも、微笑んでいるのに、酷くつまらなさそうだった。
いつも、称賛に対してうんざりしているようだった。

彼らは自分に近寄らせない、という殺気に近いものを含んで人と接する。
特にミシェルは、ヒカルに対しては人前では礼を尽くすが、瞳は笑っていない。

今、両手が塞がっていなければ、彼女はかつての仕打ちを思い出して、喉元に手を当てたかもしれない。

それなのに、それほど怒気を含んでヒカルに触れたミシェルをジルは知らない。

ミシェルはジルに対して穏やかに微笑んでいる。
彼はやはりシャルルの方割れだと思った。
ヒカルを見るシャルルの微笑みとよく似ていた。
静かで穏やかで少し悲しそうな瞳の色も同じだった。
どうしてその視線をルイに向けられないのだろうかと、切なくなるくらい似ていた。

噴水の前で、その脇からずっと続く植え込みを彩る薔薇を眺めて歩いていた。
ゆっくりとした歩調で散策を愉しむ彼らは、まさに薔薇の精霊と言っても良いくらい美しかった。
ミシェルはジルの歩調にあわせて、ジルが何かを話す都度、ひとつひとつに頷いた。
ジルはそんなミシェルを見て、ヒカルよりずっと若い娘のようにくすくすと笑いを漏らしていた。

ジルの様子から、やはり・・・やはり、彼をシャルルと呼んでいるのだろうと推測された。
遠目でも、ジルが「シャルル」と名前を呼んでいるのがわかる。

ヒカルは声をかける頃合いをいつにしようかと、しばしふたりの様子を眺めていた。

これが彼らの「仕事」なのであれば、彼らは自分を偽ることをどうやって受け入れたのだろうと思った。
誇り高いルイとミシェルが、シャルルの代行をする。
成り代わるのではなく、そのものになることを、なぜ、彼らはウイと言って承知したのだろうか。

先に気がついたのはミシェルだった。
青灰色の瞳を、ほんの僅か、開いた。
しかし、ヒカルに声をかけずに、ちらりと一瞥しただけで、またジルに視線を戻す。
程なくしてジルが気がつくまで、ミシェルは彼女を無視していた。

「・・・・マリナさん」

ジルがそう言って、近づいてくるまで、ヒカルはその場で穏やかな時間が流れていく様を見つめていた。
それが現実ではないことを気がついている者の苦しみを覆い隠してしまうくらい、美しくて眩しい様だった。
ジルがヒカルに走り寄って来た。

「シャルルが待って居ますよ。
あんまりマリナさんが遅いので・・・・きっと支度に時間がかかっているのでしょう、と言って世間話をしてもまだ時間があったので、散歩に出てしまいました」

ヒカルは少し微笑んだ。

「そう・・ごめんなさい。手間取ってしまって」

そう言った。
ここに到来するまで、時間がかかってしまった。
ジルにようやく逢えたのに、ヒカルの知っているジルには逢えなくなってしまった。

この時間が続けば良いのに、と思っているのは、ジルだけだろうか。
この場に居る誰もがそう思っているはずだった。
でも、それは現実ではない。
ジルが強く願った夢幻の世界だ。

これは夢の中の舞台の上なのだと気がついていない者にとっては、この空間は心地良い安寧の次元であるが・・・
気がついている者がここは現実だよ、と囁き続ける空間でもあるこの『場』は、ヒカルにとっては酷く息苦しかった。

「マリナさん、荷物がたくさんですね・・・何か、持ちますよ」

ジルがそう言ったので、ヒカルは現実に戻った。
白い手が伸びてきて、ジルが微笑んだ。
花嫁がそんなに荷物を抱えて、転んでケガをしたら一大事だ、とジルが眉を顰めた。
ヒカルは返事に詰まって、しばらく声を出せずにいた。
・・・・彼女に声をかける言葉を探してしまう。
自分がマリナでないとは伝えられない。
でも、自分は彼女の為にマリナを演じることはできない。

どうしてもジルの望むような言葉をかけることができずに、ヒカルは掠れた声で首を振りながら小さく言った。

「いえ・・・大丈夫よ」

「オレが持とう。・・・マリナ、こちらに」
よく響く低い声がして、ミシェルがこちらに近づいてきた。
彼の伶俐な頭脳が何を思ったのか、ヒカルが胸に抱えた荷物をジルが引き受けようとした間に割って入って、彼女の困窮をたすけた。

艶やかに微笑みながら、そういうことは自分がやるべきだろう、と言った。
「花嫁がケガでもしたら、一番困るのはオレだからね」
ミシェルはそう言った。
ヒカルはまだ癒えていない体の傷に、針で刺したような痛みを感じた。
満身創痍のヒカルを見ても、ジルには見えていない。
ヒカルは慌てて、包帯を巻いている方の腕を自分の体の後ろに隠した。

「マリナ、これはオレが持つよ・・・・ジル、そろそろ邸内に入ろう。
執務室で待って居てくれ」
「長い休憩時間でしたね」
ジルが笑った。

彼女の今日の『夢』は・・・
マリナを待つ間、マリナとの新しい生活について、あれこれジルが気を揉んでいるので、辟易したシャルルに散歩がてらの打合せを提案されるという、そんな時間のようだ。

・・・ジルが嬉々として話をしていた内容は、自分のことではなく・・・
シャルルとマリナの新しいこれからのことについて話していたのだと知ると、ヒカルはこれ以上、微笑むことができない、と顔を曇らせた。

「マリナと少し打合せをしてから行くから、先に処理を進めてくれ」
「マリナさんとの時間はあまり作れませんからね・・・今日はもう切り上げた方が良いのではないのでしょうか」
「公私混同はしないことにしている。オレの予定は絶対だ。・・・だから時間短縮の協力をしてくれ、ジル」
そこまで言うと、ミシェルにジルはそうですね、と言って頷いた。

彼は満足そうに頷いた。
とてもシャルルに似ている所作だった。

「終わったら。3人でゆっくり話をしよう。
ジルの好きなカップを用意してくれ。

今日の薔薇にあった色が良いな・・・・
マリナを待たせたくない。・・・・ジルの処理次第だ」
だからもう行け、と言われて、ジルは納得したように頷いた。
その顔は、ヒカルの知る、シャルル・ドゥ・アルディの片腕としての頃の顔立ちだった。
「それでは後ほど」
彼女は、彼女の主に向かって微笑むと、ヒカルにも目礼をした。
そして、あまりお待たせしませんから、と言って背中を向けた。

やはり、ヒカルのことはわからなかった。
少しも思い出さなかった。
ヒカルは溜め息をついた。
初回はわからなくても、二度目には何か、心に感じるものがあるのではないかと期待していた。
もう何年も・・・ミシェルとルイとシャルルを混同して過ごすジルが、たった2回連日で会っただけのヒカルに、何かを感じてくれると期待する方が大きな過誤だと思い知らされた。

「・・・滑稽だろう？
憐れと思うのなら、自分のすべきことを・・・そろそろ決断したらどうだ？」
完全にジルの姿が見えなくなったところで、ミシェルにそう声をかけられた。
ヒカルは、彼をシャルルと言うべきか、それともミシェルと言っても良いものなのか、少し考えてしまった。
ヒカルに声をかけたミシェルは、彼女がよく知っているミシェルだった。
先ほどの、シャルルと呼ばれて淡く笑った男性は、もう居なかった。

「ジルに話があるようだが、あの状態だ。・・・オレが聞いてやろう」
ヒカルが何を話すかを、もう彼はわかっているようだった。
ヒカルからラップトップを取りあげて、軽々と持った。
「それとも、オレに話があったのかな・・・ヒカル・クロス」
彼は妖艶に微笑んだ。

これから長い話が始まると思った。
すべてを知っているのは、ミシェル・ドゥ･アルディだ。
ヒカルはゆっくりと頷いた。

「私の質問に答えてくれますか？ミシェル・ドゥ･アルディ」
かつて叔父様と呼んだこともあった。
シャルルと非常に良く似ていのに、どうしてあれほど違うのかと思った。
なぜ、ルイの教育係が彼なのか、そしてルイとミシェルとの距離が理解できないと思ったこと

もあった。

きっと、ヒカルには一生かかっても交わらない人物なのだろうと思っていた。

それでも、彼女はどうしてもミシェルに巡り着いてしまう。

・・・彼は偽りを言うことはないと思った。
必要がないから。
真実の方が偽りより残酷だと知っているから。
彼がすべてを知っていると知るまでに時間がかかってしまった。
かかりすぎた。
それも、ミシェルの思惑通りなのかもしれない。

「良いだろう。ヒカル、貴女の答えを聞かせてくれるのなら。・・・贖罪の娘という卑称を持つ貴女の答えは、実に興味深い。・・・オレを失望させないでくれよ」

■158　呼子鳥01

呼子鳥・・・（郭公の異称）

まるで天候の変わりやすい地形の場所に立っているかのように。
風向きが急に変化した。
それまで木陰に入れば、館の渡り廊下と同じくらいの湿度と温度の空気が流れていき、肌を擦り抜けて去っていく様を感じることが出来た。
今は、空の遠く向こう側で夏の気紛れが、磊音とともにやって来そうだった。

「・・・もう夏も終わる」

短い夏が終わりを告げそうだ、とミシェルは微笑んだ。
夏は嫌いだ、と言った。
あの太陽が気にいらないと彼は豊かに響くバリトンで語った。
煙草に手を伸ばすことはしなかった。
彼はいつも、ヒカルと一緒に居るときには喫煙し、そして退屈しのぎをして時間の経過を我慢していると言っていたのに。

「これから、このままひと雨降るまでここに居る？」

雨の中の散歩も一興だね、とミシェルは言った。
ヒカルは首を振った。
胸に抱えているものを濡らすわけにはいかない。
それに、彼とこうして二人でいることに、まだ彼女は完全に安堵できる状態ではなかった。
いつも彼はヒカルに至極攻撃的で、そして何かを残していく。
その答えを見つけないと、彼は次の話をしない。

「あの人が消えた夏もこんな陽気だった」
彼はぽつりと言った。
シャルルもジルも決して語ろうとしなかった、あの夏の日のことをミシェルは言った。
白金の髪が、湿気を帯びた風に吹かれて揺れた。

ミシェルはシャルルと良く似て居たが、シャルルは太陽が嫌いだとは言わなかった。
太陽の様なあの人が好きだった、と時々・・・堪えきれずに言ったことはあったが。
それは未だ生々しい癒えない傷であり、苦しさから逃れるための吐露だった。
だからこういう風に、遠い記憶を辿るように話をするアルディ家の者を見るのは、ヒカルにとっては、初めての経験だったかもしれない。

「前日から、霽れた空と沛雨が交互にやって来ていた。
フランスの華がついに結婚するということで、世間の誰もがざわめき立っていた。
そんな地上の人々の熱気が上昇して起きた、乱気流のような乱れた天景が・・・・
あの人達を消した。その雷電で墜ちた機体が何機もあった時期だった」

彼がそう言ったので、ヒカルは驚いてミシェルを見た。
しかし、ヒカルが耳を傾け始めると、彼はシャルルと同じ色の瞳を面白そうに煌めかせて、それ以上は言わないよ、と言って浅く笑った。

「この日の話は・・・当主から箝口令が敷かれているから。
　オレが話をしたと知ったら、激昂するだろうね、彼は」

ミシェルがさり気なく名前を伏せた理由はわかっていた。
例えジルが居なくても、この館ではシャルル・ドゥ・アルディのみしか、存在しない。
同じ貌の持ち主が、あと2人居るのに、彼らはこの空間では存在しない。
ミシェルが口にした『彼』が誰なのかはわかっていた。

かつて、ミシェルとシャルルの母が過ごした館で、彼らの従妹が、彼らの母と同じように夢の世界を彷徨って生きている。
ミシェルは、ずっと、その過程を見てきた。
シャルルよりも長く。

強い突風が彼らに向かって吹き抜けた。
ヒカルの髪が巻き上がって、彼女のそんな姿を、ミシェルはとても興味深そうに眺めていた。
・・・いや、精察していた。

冷たい青灰色の瞳だった。
慈愛に満ちたシャルルの瞳と違っていた。
彼らは別人なのに。ルイも違う個なのに。
それでも、ミシェルもルイもシャルル・ドゥ・アルディを演じる。

それは酷く孤独で、悽愴で・・・誇り高い彼らがなぜそのようなことを続けるのか、ヒカルは推測することは無理だった。
だから、尋ねることにした。

「ミシェルは、なぜ、ここに来るの？」
「ヒカル、もう少し考えてくれ」
彼は言って、空を見上げた。

白い喉元が見えて、ミシェルはそのまま、天に住まう彼の使役天使達を呼び寄せる合図をするかのように、大きな溜め息をついた。
絹糸のような細くて柔らかい髪の毛が重力に逆らえずに、こぼれ落ちた。
先ほどの、ヒカルが巻き上げられた癖髪とは対象的だった。

「ヒカルがいつになったら訪ねて来るかと思っていたよ」
彼は顔を戻すと言った。

「ジルに聞いても無駄だよ。・・・彼女の記憶は欠落している状態だ。時々、思い出すこともあったが、今はもうほとんどそういうこともない。
・・・また激しく動揺して死にたいと暴れるのを宥めるのは億劫だ」

「ジルは戻れないの？」
「戻りたくないだけだ」
ミシェルは素っ気なく言った。

「・・・行こう。貴女の胸の中で暖まっているその荷物。
それを広げる場所を提供してやろう」

それが何であるか、ミシェルはすでに知っているような口振りだった。
彼が驚き焦る様というのは、ひょっとしたら生涯訪れることはないのかもしれない。
シャルルの片割れであり、常に陰のように寄り添いながらも、シャルルを決して肯定しないミシェルは、いつも・・・いつも、どこか超然としている。

「彼も来ているのだろう」
彼はヒカルの前に立って、先導をしながら歩いた。
広い背中を見つめながら、ヒカルが促されるままに歩み始めると、ミシェルはヒカルに振り返ることもなく言った。
「待って居るわ」

薔薇を見たから入邸できなかった、とは言わなかった。

「待つ？誰を？」
ミシェルは嘲笑した。
「何を待つのかな、彼は。そして何を・・誰を貴女は待たせているのかなあ。
星辰の子は常にひとつところに留まらない。
それなのに、そこに居ろと獣のしつけのように命令しているヒカルは、本当に・・残酷だね」
ミシェルの言葉に反論しようとしたが、彼はそれを遮った。
彼女の歩幅を把握しているはずなのに、距離を大きく開けて、館の中に消えてしまった。

また、強く風が吹いて、ヒカルは目を瞑った。
そして、彼女も振り返った。
慌てて背にした噴水と薔薇園をちらりと見た。

これから強風と磊音がやって来る。
その前に決着が付くだろうか。
この人から、何かを聞き出せるだろうか。
私がずっと疑問に思っていて、言えなかったこと。
あのファイルの中身の説明。

そして・・・・
ヒカルは唇をきゅっと噛んだ。
彼の機嫌を損ねるような順番で話をすれば、彼はすぐさま席を立ってしまうだろう。

穏やかに弧を描いて煌めいていた噴水の虹はとっくに消えていた。

■159　呼子鳥02

彼が案内した部屋は、空調の効いた静かな部屋だった。
廊下が終わった行き止まりの部屋だった。
この館は非常に静かで・・遠くで雷の来訪を告げる音がした。
それに伴って、空が急激に曇ってきたのだろう。
最初にこの館に入った時よりも薄暗く感じる。

ジルが出入りするのだろうか。
やはり、窓は錠がかかっていて、飛散防止フィルムが貼られた窓ガラスから、嵐の前の予兆を主

張する薄暗い陽光が弱々しく差し込んでいた。
そこは何もない部屋だった。
ただ何も無いと目立つから、目立たなくするために設置したとでも言うような、そんなソファがいくつか置かれていた。
談話するためのものではなく・・・物置のような、殺風景な部屋であった。

・・・かすかではあるが、油絵の具の匂いがした。

「ここは、母がよく過ごした部屋だ」
彼がそう言った。
え、と顔を上げたヒカルに対しては無表情だった。
そしてどうぞ、と言って、自らが扉を開ける。

彼が動くと、煙草の香りがする。

それでも、ジルはそれを指摘しない。
彼女は夢の中に居るから。
それとも・・若い頃のシャルルは、やはり、彼らと同じように喫煙して、ジルを困らせていたのかもしれない。
ルイもミシェルも皆、ジルは「シャルル」と呼ぶ。
では・・・本当のシャルルには、彼女は何と語りかけるのだろうか。

ヒカルは、改めてミシェル・ドゥ･アルディという人物を見た。
非常にシャルルと良く似ている。
白金の髪は絹糸のようだし、白くて滑らかな肌はとても男性のそれとは思えない。
左右対称の彫りの深い顔に、切り込んだような深い双眸は青灰色で、非常に上品だ。
長身に、年齢にそぐわない均整の取れた体?。
不思議なことに、彼には加齢を感じない。
手も首筋も、すっと伸びていて、皺も染みもない、若々しい皮膚組織を維持していた。
そして彼らを・・ミシェル・ドゥ･アルディを年齢不詳と感じさせるのは、その動作だ。
何をするにも音がしない彼の身熟しは、この国の者であれば誰でも憧れるステータスの者が持つ特徴だった。

でも、ヒカルには別の人物に見える。

彼はいつも違うことを考えている。ヒカルが知り得ないこといつも考えている。
そして、ジルに微笑むミシェル・ドゥ･アルディは自分を偽ってシャルルと呼ばれることを肯定し

ている。
なぜなのだろう。
シャルルに成り代わるために彼と敵対したこともあったミシェルは、たとえやむを得ない事情だと言っても、シャルルと呼ばれて平然としていられるはずはないのに。

「座って」
ミシェルはそう言って中に入ると、入り口近くの壁掛けの内線電話の受話器を持ち上げて、適当に食事を運ぶように指示をした。
この電話でさえも、注意散漫な者には気がつかないような死角に設置されている。
何もかもが、何も無いと思わせるような世界を再現していた。
かちり、と受話器を静かに置くと、彼は扉の入り口で戸惑っているヒカルをそのままに、いくつかあるソファのうちのひとつに腰を下ろした。

点在するように見えるソファはひとつひとつがまるでデザインが違っていた。
乱雑に置かれているようだったが、それは緻密に計算されていて、互いが互いを向き合わないように目線と体の角度を調整されるようになっていた配置だった。
無造作に座ったように見えたが、彼は部屋の中央の椅子に座った。

「ここでしか通常のネットワークは通じないから」
彼はそう言った。
独自の信号でこの館のセキュリティは保たれるわけというわけだ。
ヒカルが持ってきたラップトップが、ネットワーク接続する必要が生じた場合を想定して、この部屋に連れてきたのだろう。
「その必要はなさそうだけれどもね」
彼は冷ややかに言った。
ヒカルの顔を見て、大体の察しは付いているらしい。
それなら話は早かった。

「遠回しな話はやめて、お互いに単刀直入に。時間の無駄だから」
彼は座れと言いながら、テーブルの上に常備されていたシガレットケースから煙草を取り出した。
長い脚を組み、優雅に煙草に火を灯す彼を見つめる。
・・・彼はここで、ミシェルに戻るのだろうか。それとも・・・
「どうした？・・・今頃引き返そうとしても無理だよ」
ミシェルは薄く笑う。
何もかもがお見通しだとでも言うような余裕が彼を包んでいた。
ヒカルは一度だけ肩で大きく深呼吸した。

これからの話が長くなるかそうでないかは、ミシェル次第だ。
そして、ヒカル次第でもある。

「まず、オレに見せたいものはどちらの方？」
話を切り出したのは、ミシェルの方からだった。
彼は始終煙草を口許にあてながら、ヒカルを注視していた。
青灰色の冷たい眼差しで。
ミシェルは誰も見ていなくても、常に微笑みを絶やさないのに、今は無表情だった。

「まずはこちらのデータから」
ヒカルは座りながら、薄い銀盤を掌でなぞった。
省電力モードにしてあるので、いつでも起動する。
ファンが軽く回っていて、バッテリー部分が熱かった。
冷却ファンを改良されたモデルであっても、長時間の使用は適していなかったから、間もなくバッテリーが切れるのかもしれない。
「アルディ家のミラーサーバーから抜いたファイルだろう？知っているよ」
ミシェルはその時になって笑った。
切り込んだような深い双眸が、冴えた繊月のようになった。
「あの管理者権限を持っているのは、ルイとシャルルとオレであることを忘れているね」
「ファイルは2種類あった。私の電子カルテと、もうひとつ。作成者はミシェルだった」

彼女は間を空けずに彼に話をしだした。
いきなり始まった本題に、ミシェルは悪くないね、と言った。
「ヒカルがもうひとつの品から話を始めるのであれば、オレはすぐさま席を立つつもりだったよ」
「ありがとう」
彼は決して感情論でものを言うことはない。
そしてヒカルの順番が間違っていないことを称賛したので、彼女は少し微笑んだ。
しかし、それは安堵の微笑みではない。
単に順番が正解だった、というだけだ。
ミシェルの賛辞は、彼女の推測が当たっていることを裏付ける証拠でしかない。

こういう状況でありがとうと言う貴女は、まったく感嘆するに値する。

ミシェルは謇諤に言った。
「結論から言ってくれよ、ヒカル。日本の死刑判決とは逆で頼む。
　あれはどうにも賛成しがたい」

ミシェルはそう言うと、また眉根を寄せて煙草に唇を寄せた。
最新式のラップトップには、煙草の煙はあまり良くないのだが、彼にとってはヒカルが大事に抱えているそれは単なる箱でしかないのだろう。

心臓が激しく鼓動し始めるのを感じた。
自分の言葉を、目の前の人は待っている。
ラップトップのキーボードを叩く必要はなかった。
ミシェルがそこまでわかっているのだったら、ファイルを見せながら話をする必要はない。

「このルイの・・・ルイの電子カルテはミシェルが作成したのね」

ひとつにまとまっているので、大きな容量ではあるが、ヒカルが入手したファイルは、ルイのカルテだった。
「そうだよ、オレが作成した。当時はまだ暗号化されている電子ファイルの開発が途上でね。
・・・完璧に暗号化される必要があったから」
漏洩防止のために、彼が自ら組んだファイルはパスコードが破壊されていた。
それはきっと最終更新者のルイが行ったのだろうと思った。
そして、ミシェルはそれを承知の上で、ルイに閲覧権限を渡したのだ。

「・・・ルイの誕生には、ミシェルが医療チームに加わっていたってことね」
「そう。シャルルが『青春の輝き』の喪失で酷く荒れている時だった」
彼は少し上を向いて言った。低い豊かなバリトンが響く。
「もう一人、シャルルを創ってくれと言われた。
クローンはテロメア異常を発生させるから、それはできないと言った。
倫理の問題もあった。
従うつもりは毛頭もなかったけれど、出生証明をでっちあげるには、アルディ家は高名すぎた。
いつか、丹精込めて育てた薔薇の出所を聞かれたときに、少しでも瑕疵がある状態は好ましくない。

彼らが満足するのは、シャルルの優秀な遺伝子を引き継ぐ新しい種であり・・彼らの言いなりになりつつも種の繁栄を築くための指導力のある者であり・・・そして、我が一族の長年の非望を叶えてくれる種を生み出したかったというわけだね」
ファイルを読んだのであればわかるだろう？とミシェルはおかしそうに言った。

「それなら、体外受精児を創れば良い。シャルルはああ見えて情に流されやすい。
自分そっくりで遺伝配列も同じ子どもが目の前に現れれば、処分しろとは言わないだろう。
だからちょうど、同じ技術でヒカルが誕生するまで、内密にすることにした。」

「そこで私が同じ技術で生まれた・・」
「ああ、そう。貴女は優秀なデザイナーズベビーだ」

ミシェルは含み笑いを漏らした。
当時の苦労を思い出すと言った。
最も優秀でその後も健康に生存し続けることの可能な「タイプ」として選ばれた。
「ヒカルの名前は・・タイプHから取っているんだよ」
彼女はぎょっとした。
ヒカルの時にも、彼は携わっているのかもしれないという予想はしていたが、まさかそこまで・・・知っているとは思わなかった。
彼女は自分の電子カルテの中に、「タイプHを採用」と書かれて居た部分を思い出した。
それが、自分なのだ。

決して、『永遠の晄』などではなかった。
自分の始まりはHというアルファベットだった。

「永遠の晄だって・・おかしいね、ヒカル。あなたはAから始まり、Hに至るまでの同じもの達を踏み台にして生まれてきたのに。永遠に耀くどころか・・永遠に他の者を闇に葬ってしまったのに」
ある意味、永遠に耀くことになるのかな、とミシェルは呟いた。

「当主の座を・・ああ、昔の話だけれども、当主の座を争ったときが、最も生きている感じがしたよ、ヒカル。
それ以降、彼は貴女の母を手に入れることができなくて、自堕落な生活に走り、そして結婚はしないこどもは作らないと言い切った。彼はたくさんの女を渡り歩いたけれど・・・結局彼の傍らに居ても良いと許可された女はジルだけだった。それも恋人としてではないけれどもね」

どくん。

ジルの名前が出てきたので、ヒカルは膝上のラップトップの縁を強く掴んだ。

「ジルが・・・ルイの医療チームに荷担していたことはわかっている」
ヒカルはそう言った。
ああ、そこまでわかっているの？と軽くミシェルが言った。
青灰色の瞳をヒカルの方に流し、白金の前髪をかきあげた。
雄偉な容貌を少しだけ傾けて、彼女を色素の薄い瞳でじっと・・見つめる。

「ジルは、昔シャルルの代役をしていたこともあって、彼のサインを完璧に模倣することができる。だから、医療同意書にサインをし・・・そしてルイの誕生に携わった。
代理母を用意し、彼の母がこれでなぜシャルルと結婚できないのかと憤るのを説得し、そして・・そして、教育係としてオレに托すことを許可するサインをした」
「そんなの、無効じゃない。シャルルが了承していないのに、シャルルのサインをするなんて、それは彼が申し立てをしたら・・」
「だめだよ、ヒカル。」
ミシェルはぴしゃりと言った。
「シャルルはね、自分の世界に閉じこもることを条件に、一切の業務について、委任したんだ。ジルにサインをすることを許可した。その昔、モザンビークに行ったときも。彼が自らの殻に閉じこもる時にも。シャルルは、ジルを使って自分の権限を委託した」
委任状がちゃんとあるんだよ、とミシェルは言った。
彼は・・シャルルはその場を離れなければならない窮地に陥ったときに、ジルを代理とした。
そしてその際は彼女がシャルル・ドゥ・アルディとしてサインするすべての書類は有効だ、と宣誓書を残したのだ。

「ジル・ド・ラ・ロシェルこそ、アルディ家の長年の念願を叶える新しい種ではないかと錯覚するよ、ヒカル。
彼女がもたらした様々な功績を考えると・・・シャルルが心を許した、数少ない親族のうち、もっとも・・一族に貢献した人物かもしれないね」

「同じようにヒカルの誕生にも加わったのだから・・・ヒカルはもうちょっとジルの有様に感謝しても良いと思うよ・・・貴女は喜ばないの？
彼女は夢幻の世界に入り、ヒカルの秘密を知る者は減ったのに」
「ミシェル」
ヒカルは大きく息を吐き出してから言った。
やるせない想いが彼女を苛む。
彼女は都合が良いと思ったことはなかった。
自分の秘密は・・・誰が知っているのだろうかと思ったこともなかった。
ただ、ただ、酷く驚いただけだった。

「彼女が壊れ始めたのはこの頃だった。
でも、シャルルが後継の者を定めない限り、彼女の失調を無視して働いてもらうしかなかった。
まだ間隔が間遠だったしね・・・」
この頃に治療していたのなら、ジルはあそこまで深く陥ることはなかったのかもしれない。
それなのに・・・それなのに。
何を切り捨てて、何を救うのかを決めるのは、シャルルでもなくミシェルでもなく・・・大きな

うねりなのだと思うと・・・
ヒカルは言葉に詰まった。

ジルが自らの異変に気がつかないわけがない。
それなのにそれを押し通して何でもない風を装った理由を知った。
彼女は・・・意識を失う最後まで、シャルルのことを考え続けた。
美しい年上の従兄を思いながら、シャルルに成り代わった。
目の前に、彼そっくりのこどもが誕生しているのを眺めなら。
そして同じ技術でヒカルが生まれた。

本来なら・・・シャルルと結ばれて欲しいと願った相手は、違う者と結ばれて、そして、シャルルでない父を持つこどもを産ませて欲しいと言った。

ジルはジルになれなかった。
シャルルであることを求められて・・・そしてシャルルの幸せを願うことで自我を保っていたのに。
シャルルの願いが成就すれば、彼女は解放されるはずだった。
それなのに・・ジルは永遠にアルディ家の薔薇園の中に閉じ込められた。

シャルルが壊れる度に。
シャルルの代わりをする。

シャルルのこどもが生まれたときに。
シャルルを真似て同意書にサインをする。

医療チームのチームリーダーの名前は、シャルルになっていた。
望まれて生まれたこどもでないのに。
ルイは。
シャルルによって創り出されたことになっていた。

だから。シャルルは。
卵子提供者との婚姻を拒んでいたのに。
結局は・・・彼を受け入れざるを得なかった。

自分が夢幻の世界に陥っているときに。
同じように、苦悶の世界から夢幻の世界を行き来する従妹の哀しみを知って。
彼は‥‥自分だけが苦しんでいるわけでないと知ったから。

ヒカルは目を瞑った。

シャルルの苦悩と・・・ジルの哀しみを少しだけ共有した。

■160　呼子鳥03

「ミシェルは、なぜ、私にそんな話をするの？」
「種明かしをしたがらないマジシャンは居ない、ということかな」
彼は即答し、声を漏らして笑った。

「誰もここまで到達しなかった。誰も、オレに尋ねなかった。
その答えが、自分に不都合や不具合を生じると知っていたいから。
それなのに、ヒカルは・・・・ヒカル。
貴女が初めてだよ。
オレにこうして物怖じしないで訪ねて来る者は」

ミシェルは良く響くバリトンで彼女に称え辞を浴びせた。
まったく畏れを知らないとはこのことだね、と言った。

彼は優雅に肘当てに腕を乗せて、細く長い指を組んだ。
そしてヒカルの出方を待っている。
まるでチェスの試合のように。
何手も先を、どう答えようか、何通りもの組み合わせを考えている。
年齢に不相応な彼の若々しい肢体は、背筋を伸ばしてヒカルの方にやや前傾していた。

「そろそろ待ちくたびれたからね。もっと・・・違う者が訪れるかと思って居たのに。そう、たとえば、あなたの母とか」
「え？」
「彼女は最初に・・唯一全部を知った人間だった」
「どういうこと・・・」

ヒカルはぐっと拳を握りしめた。
ラップトップのディスプレイが、省電力モードに切り替わって、暗くなった。
ヒカルの膝上のマシンから漏れる、冷却ファンの軽い音だけが響く部屋の中で。
ヒカルは、ミシェルが重大な話をするということに気がついて身構えた。

「あなたの母は・・そう、あの人は。ルイに会わせろと言って、ものすごい剣幕でジルをたずねて来た。ちょうど、ジルは不在にしていたから、オレが代わりに出た。当時は同じ研究チームだったからね・・・あの人の来訪もすぐにわかった」
「でも、ミシェルはルイに会うことを禁じたのでしょう」
ルイの話から、ミシェルかジルがルイと彼女を引きあわせることを拒んだと察していた。
「会って、何かが得られるとは思えなかったから。案の上、彼女は・・・あの人は、ルイを引き取るとまで言い出した。
あんな温室の薔薇のような育て方をしていることは、シャルルが知ったら許さないだろうと言い出した。
おかしいじゃないか。
彼の昔からの友人なのに・・・彼女の伴侶となるべきカズヤ・クロスにも、シャルル本人にもその事実を告げないで、彼女はひとり苦悶していた。
こっそり、ルイに会いに来るほど彼を気にかけていたのに」

アルディ家の次の世代を担うルイを、一友人であり、アルディ家の研究所に通うあの人は、何も手立てを打つことができなかった。
シャルルは、あの人の娘を引き取ったのに。
これが、違いだよ、とミシェルは言った。
「これは持たざる者と持てる者の違いだよ、ヒカル」
「そうは思わない」
ヒカルはこれに反論した。
「状況が違う。きっと、理由があったはずだわ」
「理由・・・理由ね・・・」
ミシェルは苦笑した。
彼の笑い方は、ルイにもシャルルにも似ているようで違っていた。
世の中すべてを侮蔑するような笑い方だった。

「それで、同じ製法で、自分の子どもを妊娠したら、ルイはできそこないとして、もう忘れ去ってしまうわけだ」
「違う」
ヒカルはミシェルの言葉を否定した。
「ルイはできそこないじゃない。製法だなんて言わないで。
私は・・･私もルイも生きている」
「生きていることと、生命の誕生の過程を『製法』と呼ぶことには関連はないよ、ヒカル」
ミシェルは彼女の言葉を正した。
「どうして、こう、オレの周りの者達は、生命の神秘と言ってみたり、命は尊いと言ってみ

たり・・・くだらないこと同士を比較して優劣をつけたがるのかな・・」
彼はそういうと、ゆっくりと長い脚を組み直した。
白金の髪が少しだけ乱れた。
恐ろしい程までに整った頬が少し緩んだ。
彼は本当に楽しそうだった。
何が楽しいかはわからない。
しかし、ヒカルに謎解きをしていくことは彼が長い間、待ちわびていた瞬間だったのだと思った。
ヒカルでなくても良かったのかもしれない。
誰でも良かったのかもしれない。

彼の吐露を誰も聞かなかったから。
彼の言葉を誰も聞かなかったから。

ミシェルは長いこと、「シャルルの半身」だった。
誰も彼を見なかった。
ずっと・・・彼は潜んでいたから。
それまで、彼の母と過ごしていた時期をシャルルは羨んだが、ミシェルはシャルルを羨んだ。
自分をミシェルと呼ばない母と同じように、周囲の者は・・・彼をシャルルの代役としか見なかった。
誰も、彼も。

こうして・・・彼の長い話に居合わせることができる者は僥倖に遭遇したとでも思え、と言うように。

傲慢な厭離穢土の王は、双生の半身でもある冥府の王を嘲笑っていた。

■161　呼子鳥04

「ルイのことを忘れたわけではない」
あの人は、ルイのことを、シャルルのことを気にかけていたはずだ。
だから、あの遺作を残していたし・・・
そこで言葉に詰まった。
ヒカルはそれ以上のことを、知らなかったから。
彼女の母のことを。

あの人が意図したことが理解できなかった。
絵を描いたのなら、なぜ、シャルルなりジルなりに絵を渡さなかったのだろう。
なぜ・・・日本の友人に預けてしまったのだろう。

「ルイのことを、貴女は本当に、よく知らないんだね・・・」
おかしそうに肩を揺らしてミシェルは笑った。
「面白い。貴女は・・ヒカルは実に面白い。ルイが夢中になるわけだよ」
「ミシェル・・・私が知らないルイをあなたが知っていてもおかしくない。
だって、ミシェルは彼の教育係だし・・・」
育ての親でしょう、と彼女は言うと、ミシェルはようやく笑いを止めた。
「ただ、成長させるだけなら誰にでもできるんだよ、ヒカル」
嘲ら笑いを浮かべて、ミシェルは髪をかき上げた。
挑戦的は薄い色素の瞳がこちらを見つめていた。
深い双眸も、同じ白金の睫も、みんなシャルルと同じなのに、彼は何もかもが違う。
彼はルイの養育のことを「単なる暇つぶし」と言った。
そして最高の教育を与えた。
アルディ家の必要不可欠な要素を全部。漏れなく。

「ヒカルの言いたいことはわかるよ」
ミシェルは言った。
「なぜ、彼に愛をもてないのか、だろう？それはシャルルも同じだろう。
ルイは誰からも望まれて・・誰からも望まれなかった撞着の子だ。
誰からも愛される要素を持つのに、誰からも愛されないし、誰も愛さない。
これこそが、アルディ家の最も欲しがっている素質だと・・思わないか」
「思わない。ルイは品種改良の薔薇じゃない」
「おや、不思議なことを言うね、ヒカル。・・・シャルルは品種改良を趣味としているのに、彼の趣味を反対するようなことを言うなんて」
ヒカルは泣きそうになる。
ミシェルがルイを本当はそう思って居ないことをどうしても聞きたい。
彼は誰からも愛されていないなどと、ミシェルの口から断言して欲しくなかった。
しかし、何を言っても、何を尋ねても、どう訴えてもミシェルの言葉を覆すことができなかった。

「・・・ルイはこの家の為だけに生まれてきた。そう・・・本当にそうだから」
彼はぽつりと言った。
ヒカルは思いあまって、もう一つの荷物を取り出した。
丁寧に梱包されているそれを、彼に差し出す。

本当は、ジルに見せるつもりだった。
「・・・これを見て、まだ、ルイが誰にも愛されていないと。幸せになって欲しいと思っている人が居ないと・・・そう思えるの？」
ミシェルに見せる、数少ない札だった。
彼はそれを受け取らずに、ただちょっと首を傾げただけだった。

「それを見て、オレが心を動かされると思ったの？」
ヒカルは絶句した。
慌てて手を引いた。

彼はこれが何であるか知っているらしい。
ちらりと一瞥しただけで、横を向いてしまった。

・・・ルイの手に一度渡っているから、その時にルイから話を聞いているのだろうか。
「マリナ・イケダの遺作を見て。オレが、彼女の短い人生を憐れんで、何か思うとでも？
なぜ、シャルルの人生を狂わせた女の描いた作品を見て、オレが何かを思わないといけないの？
思わなくてはいけないと強要するのか？
・・・ヒカルが贖罪の娘と言われる理由はそこにもあると思わないか？

傲慢で、愚かで・・・そして、皆を引き寄せる晄であるのに、そこにできる影の濃さについて気がつかない、愚かな娘が・・・何を叫んでも・・・それは届かない」
上品で物憂げな瞳がヒカルを捕らえた。

そして言葉を切ってから、今度はヒカルを斜めから見た。
彼が何かを切り出すときのスタイルだと気がついたときには、彼はもう話し始めていた。
深いバリトンで、魅了する会話の順序で。
彼は、アルディ家のもうひとつの薔薇でもあることを今更ながら思い知る。
洗練された物腰や、言葉の使い方、そして誰もが魅了される容姿。
彼は・・・ルイの先を走り続ける者であるはずなのに、敢えて・・・陰に潜む生き方を選んだ。

いや、選んだのだろうか。
選ばされたのだろうか。

「ルイの見せたかったファイルは、そこではないよ、ヒカル・・・・
ルイが本当にヒカルに言いたかったことはね、その最後の頁の・・彼の遺伝子型配列についての分析表だ。・・・最新の情報が、掲載されているだろう。
ほら、検査日はつい最近のはずだ」

おおよその見当はついているはずだけれどもね。
ミシェルは嬉しそうに言った。
この話をすることが、ようやくできると言った。

「ああ、あなたがもう少し長じて・・医学の道をもう少し進んでいたのであれば、そこに書かれた内容が理解できるはずなのに」
彼はそういって微笑んだ。

今の時代は・・・いろんなことが解るようになったね、と彼は微笑んだ。
ヒカルが何を知っているのかも知っているよ、と言いたげだった。

「ヒカル。ルイの分析結果を見たなら、そう言え」
「見た」
ヒカルは短く言った。
その話をしに、ここまでやって来たのだから。
彼女は居住まいを正した。本題に入る。そう思った。
空気が張り詰めて・・・何かが始まる予感がした。
始まるのか。終わるのか。わからない。
でも、ミシェルから、何か・・・何かをもたらされるのは確実だった。
それが何であっても。
彼女は、責を負って受け入れなければならない。
シャルルが言ったとおりに、選択した結果をやめることはできない。
それが大人になることだと彼は言った。
それを違えることはできない。

「そう・・・それなら、もう解っているだろう」

彼は言った。
そして薄い唇を歪めた。

「・・・ルイが・・・シャルルの子どもでないこと」
ヒカルが呟いた。

ぱちん、とミシェルが彼の顔の前で手を叩いた。

とても興味深そうに、素晴らしいと言った。
まったく動じていなかった。
彼の整った顔がまったく歪んでいなかったし、驚愕や焦燥で激昂する様もみじんもなかった。
それが合図のように・・・彼は否定もせずに話を開始する。

「そう。よく、読めたね。あの解析配列は、難しいと思ったけれど・・」
「比較サンプルがあったから。・・・あとはルイの最近の学術論文と・・・翻訳ソフトで何とか・・・」
「貴女の未来に前途あれ。ああ、本当にオレの子を妊まないか、ヒカル。
・・・大事にするよ」
「最高の褒め言葉として、言葉だけいただきます」
ヒカルはそう言った。
決して余裕のある発言ではなかった。
彼にウィとうっかり言ってしまえば・・・以前のように、ベッドルームに引きずり込まれそうな危うい空気を感じ始めていたから。

「最近のDNA抽出・精製装置は良くできていてね。それに、ゲノム解析方法も。
・・・ルイが特許を取得した、例の方法だよ」
ルイは特にバイオ方面や、特許分野およびシステムでの超高速計算システムのチップ開発では、世界でも開発者の五本指に入る。
単なる研究者や開発者ではできない、あらゆる方面に精通していなければ成し遂げられない解析方法を彼は出願している。

いきなり本題に入ったので、単刀直入に、と言われていたにもかかわらず、ヒカルの躰から汗が浮かんできた。
この館の空調は最適に保たれていて、かつ静穏であり、彼女の膝上のラップトップのファンの音だけが鳴り響くほど・・この部屋は静かなのに。
彼女は心臓の鼓動が大きく鳴り響くのを感じていた。
暑くないのに、汗が出て喉が渇く。
腕と足の付け根から、その先に伸びた四肢が痙攣する。
これは何度も経験していた。

人が驚愕するときの、躰のサインだ。

彼に梱包物を差し出して、慌てて引いた手から、力を失った指先からこぼれ落ちて、床に転が

った。
硬質な床の上に、かたん、と。墜ちる音がした。
衝撃を与えないように、大事に抱えてきたのに。
彼女はそれさえ気にならないくらい脱力していた。

自分の予測が間違って入れば良かったのに。そう思ったのに。

・・・ルイが、シャルルのこどもでないとわかったときに。

・・・彼女は、ああ、そうかと思った。

「ヒカル。今頃気がついたの？シャルルも、ルイもとっくに知っていたよ。
その証拠を解明できるようになったのは・・・つい、最近で、もう誰もルイをシャルルのこどもでないと主張することができなくなるくらい年月が経過しているからね、今は。
・・・だから、彼らは黙っていることにした。
オレに何も聞かないことにした。
ジルに至っては・・・夢幻の世界に逃げ込んだ。これがどういうことか。わかるか?ヒカル」

「・・・ミシェルが医療チームに加わっていたとわかったときから、何となく」
「何となく。そうだね、何となく・・素敵な言葉だ」

彼は決して繰り返さないのに、繰り返した。何度も。
「何となく」と繰り返した。

そして、天井を見上げると・・また煙草に火を付けた。

「何となく・・・遊び心だったと言えば適切かな。卵子提供者の容姿を聞いて、オレは『何となく』そうしてみた。・・・・試験管の中で分裂を繰り返そうとするその受精卵ではなく・・同じ研究室の冷凍保存庫で眠る、ロシェル家の娘の卵子と、オレの冷凍精子を使ったら、面白そうだな・・と思って、同じように受精させてみることにした。
その、貴重な新たな種となるべき試験管の隣でね。
うまくいったよ。
何年も前のものなのに、ヒカル、おまえのようにタイプHまで行き着くことはなかった。一度の処置でそれは成功した。

・・・ああ、その時の興奮は、どんな素晴らしい肉体の女と寝るより、興奮したね」

ヒカルは声を出すことができなかった。
自分の想像が妄想であって欲しいと。
何度も何度も思った。

ルイの隣に並んで、行動を共にすることが苦しかった。
自分の予想が当たっていたのだったら。
どこまで、彼は知っているのだろうと思った。
尋ねることなんてできなかった。
彼女を待って、朝まで車の前で待機するルイに、一緒に居られないと言えなかった。

・・・ここの館に入る前に、行くなと言ったルイに、どう答えようか一瞬迷った。
いつも通りの「ヒカル・クロス」を演じるのは・・・こんなにも苦しいと思ったことはない。
ずっと、自分を殺して生きてきたのに。
これほど、自己を滅することが苦しいとは思わなかった。
でも、ルイもシャルルもこうして・・・こうして苦悶に震えていたのかと思うと、彼女は堪えなければならないと思った。

目の前が・・・ほんの少し暗くなった。
外が暗雲に包まれて・・・嵐が近いことを告げているからだった。
遠くで‥遠くで何か大きな音が鳴っていた。

でも、それよりももっと大きな音が、彼女の中で鳴り響いていた。

「だからね、何度も失敗を繰り返すシャルルの冷凍精子より、こちらの新たな種を採用することにした。オレは・・・それにラベルを貼り替えて、そのまま代理母に移すように言った。ただ、それだけだよ。そして、流産か死産すれば・・・オレはそれで諦めるはずだった。これまで、何度も、シャルルの受精卵は失敗を繰り返してきたから。きっと、今度もそうなるだろうと思っていた。
ところが・・・それは誕生してしまった。
ねぇ、ヒカル。
これがどういうことかわかるかな、貴女は。
貴女と同じ製法で生まれたのではない。いや、製法は同じでも、彼は失敗しなかった。
誕生から、失敗しない、間違えることのないアルディの薔薇が生まれた。
最も濃い血族から生まれたルイ・ドゥ・アルディは・・・最も強い生命力を持つ。
素晴らしいじゃないか。
・・・・素晴らしい、種の誕生だと思わないか」

ヒカルは息を吸った。
吐き出せば、それと一緒に涙が出そうになった。
苦しい。呼吸が苦しい。
だから言葉と一緒に息を出さなければ、とうてい・・この事実に耐えられそうもなかった。
手が震える。

「カルテの最後にあった。ゲノム解析によって・・・同じ遺伝子を持つ双子の特定ができる技術は発見されたけれど、ルイは更に進んで・・・双子のどちらが親なのか特定できる方法を見つけた」
「そうだね。彼は最近になって、それを確実に証明できる方法を確定したらしい」

ルイが行くなと言った理由が初めてわかった。

彼がどうして・・・成年になったヒカルに、感情を露わにしたり、激昂してミシェルの近接を阻んだりしたのかわかった。
彼の言葉のひとつひとつが・・・今になってようやく意味を持ってきた。

ミシェルは煙草を吸い終わると、落ちたよ、と言って、躰を起こし、ヒカルの手から零れたマリナの遺作を取りあげた。
ミシェルが近くに寄って距離を縮めたのに、ヒカルは動くことさえできないまま呆然としていた。
そのまま彼が梱包材をほどいて、興味なさそうにその絵を広げたとき。
いつものヒカルであれば、きっと、そこで異を唱えただろう。
返して欲しいと言っただろう。

でも、それさえ声に出すことができなかった。

遠くで、雷が鳴った。

「これは・・シャルルとルイじゃない。オレとルイだ」
ミシェルは絵を広げて、細く長い指で絵の端と端を摘むと、少し眉を上げた。

ああ、そうだ。

どうして、わからなかったのだろう。
昨夜になって気がついた。

梱包するときに、気がついた。
何年も持っていたのに、彼女は久しぶりにこれを見た。
そして、そこで気がついた。
あのルイのカルテを見て、疑問と憶測が彼女の胸に生まれたとき。
その時になって、初めて気がついた。

これは・・・シャルルじゃない、と。

マリナが描いたのは、シャルルとルイではなかった。
ミシェルとルイだった。

・・・マリナは気がついたのだ。

金の髪と、物憂げな青灰色の瞳の子どもが、誰と誰のこどもなのか。
そして、ジルが・・・気がついたのかは不明だったけれど、少しずつ壊れ始めていることも。

だから彼女は誰にも告げられずに絵にしたためた。
会ってはいけないと言われたのに、彼女は窓ガラス越しで良いから逢いたいと言った。
そして、手を振り続けた。

・・・本当の事を誰にも言えなかった。
そして、それを誰にも漏らさずに逝った。

確かに。
その絵は、よく考えてみればシャルルの絵ではなかった。
良く似ているが、彼であって彼ではない。

彼は昔、頭部に銃弾を浴びている。
だから、晄を背にして佇んだりしない。
その絵の構図のように、誰かに背中を向けて、安心しきった様子は見せない。
その頭部には、未だに銃弾を摘出したときの手術痕が残っている。
彼は、綺麗に形成手術されていたが、無数の瑕が躰にある。
晄に照らされないと、それはわからない程度ではあるが。
人物画に関しては写実主義のマリナが、そこもデフォルメして省略して描くことはないはずだ

った。
ヒカルは、幼い彼女の為に描いたこどもむけのマリナの挿絵しか知らなかったから。
彼女のデッサン画と、あの絵を見て。
そして自分の考えというか疑念を含めた視線で見ることで・・・初めて・・・気がついた。

シャルルを苦しめることになったから、彼女は絵にしたためた。
シャルルでないもう一人の彼を描いた。

でも。
証明できなかったから、口に出せなかった。
自分の目と耳と足で。
確認したけれど、それを誰かに告げられなかった。

だから、絵にした。
それが最期の絵になった。

■162　呼子鳥05

「ミシェルは戯れでそんなことはしない」
ヒカルが低く呟いた。
彼は軽く応えた。

「そうかな、スリルで胸が躍ったよ。
・・・・久しぶりに生きているって思ったな。
・・・これが発覚すればオレは二度とパリに足を踏み入れることができない場所に幽閉されるだろうと思った」

「・・・覚悟の上のことなの？それほどの大罪を犯したと思って居るの？」

「ああ、ヒカル。話をすり替えないでくれ。
贖罪の娘が、理の大罪を問うのは愚かしいことだ。
オレは罪は犯してないよ。彼らの望むとおりの種を生み出しただけだ」

彼は言った。
「オレが生きていると思ったのは、2度だけ。
1度目はシャルルと当主争いをしたとき。

2度目は・・・ジルの卵子とオレの精子を顕微鏡で受精させたとき。
それ以外は・・・オレはつまらない怠惰な日々を過ごしている。
――――昔も。今も。
・・・シャルル・ドゥ・アルディと呼ばれて。
にこやかに微笑む毎日は、シャルルやジルと同じ夢幻の世界にいるようだった。
夏になるときまって狂う彼の代わりに当主の代行をし、夏のマリナを調達し、時々・・・こうしてジルの元を訪れる。
何れもシャルルとして。

オレとシャルルの誇りは違う。

オレは生き抜く。
何があっても。
必ず生きる。

生まれてから、これまでの無為でありながら最大の屈辱をすべて有意なるものに昇華するまでは、死なない。
だからこの状況を屈辱的とは思わない。

なぜなら、こうしている時が・・・生きていると感じるから。
シャルルが、オレをミシェルと喚ぶから。

オレの名前を呼ぶから。
その時だけは、オレはシャルルではなくミシェルになる。

ああ、どちらが本当なのかな・・・

母も最後はオレとシャルルを判別できなかった。
気儘にどちらか一方の名前を呼んだ。
機嫌が良ければどちらかの名前を。そうでなければもう片方の名前を。
・・・・どちらの場合にどちらの名前を呼ぶのかは、もう、関係がなくなったけれどもね」

「・・・・だから、だから・・・ルイを愛さなかったの？」
その言葉に、ミシェルがくっと声を詰まらせて笑った。
堪えきれない笑いを止めることは難しいと言った。

「愛、というとても無駄な感情は彼にいらないよ、ヒカル。

だから、シャルルだって・・・彼を徹底的に無視しただろう？」
「シャルルは無視をしたくてしたわけではない」
ヒカルは反論した。

彼はそういう人ではない。
大変に高潔な人物である。

だから、彼女は今まで、ルイとシャルルの関係について口を差し挟むことをしなかった。
今になって、ミシェルの話を聞いてなお、彼は決してルイを嫌悪していたわけではないと強く断言できる。

「それでは、憎悪かな？彼がいなければ・・・自分の人生はもっと違ったものになるのかもしれない、と思うと、彼の存在を羞悪の心で否定したのかな」
「違う」
彼女は強く言った。

それと同時に、部屋の窓の外では、大きな雷鳴が轟いた。
一瞬、部屋の中にまで閃光が走った。
ヒカルは一瞬、目を閉じる。
けれどもミシェルはそれを感じないかのように、まったく動じていなかった。
この部屋は、絵画を嗜む者が好む部屋の向きだ。
部屋の奥まで直射日光があたらないように設計されている。
それなのに、雷音と雷光はミシェルには届いていなかった。

まるで、展翅のように広がり続けるミシェルからの言葉による事実を知らしめるように。
‥‥誰に知らせるのだろうか。

ヒカルは激しく脈打つ鼓動を感じながら、彼に述べた。
これほど空調が効いているのにひどく暑かった。

「シャルルはルイと始められなかった。
本当の父が名乗りを上げて引き取りに来るかと思っていた。
だから、誰にも言わなかった。
それなのに、実の父は・・・・ミシェルは、ルイの教育係に就任した」

父ではなく。
父のような愛を注いではいけない立場に自らを置いた。

いつか名乗りを上げることができる立場に居ながらも。
決して、近寄ってはいけない距離ある者としてミシェルはルイの傍らで観察することにした。

「そうだね」
ミシェルはヒカルの言葉を肯定した。
いつも否定をするばかりの彼であったのに、ヒカルの推測を正しいものだと判断した。

だから、彼は‥シャルルは相当憤ったはずだ。

「オレはそれを見てたいそう愉快だったよ。

彼は愛に関しては不器用だから・・・ルイを一度愛せば、彼はルイを手放せなくなる。
だからルイが長じて自分で気がつくまで・・・彼はルイを放置した。

それは愛なのかな？

単に逃げているだけではないのかな？

あのころは、シャルルは・・・彼は半信半疑だったようだ。
自分の子か、オレの子か。
ジルの卵子を使ったことはわかっていた。
検査すればすぐにわかることだ。

でも・・・オレ達双生児の遺伝子を解析できる技術はまだ開発途中だった。
シャルルは待つことにした。
当主の座をその間、引き渡すことはしなかった。

自分は、無幻症に悩まされているのに。

シャルルが自分の世界に閉じこもり、いわゆる『冬眠』状態にあったときに、彼が全権委任をした人物がサインをして決行されたことを・・・シャルルはノンとは言えるはずがない。
そしてそのジルがああして自分と同じ状態になった時に・・・彼は･･･

ああ、わかるんだよ。
オレ達は元はひとつだったから。

他の男のこどもを認知して・・・自分のこれからを諦めざるを得ないと悟った時には、さぞかし愕然としただろうね。
そして何年も口実を設けて渋った。

渋ったのか、オレが認知すると思ったのか・・・・」

彼は薄く笑った。

「酷いと思わないか、ヒカル。知っていたのに。言えないから。
だから、シャルルはあれほどまで、ルイを徹底的に無視した」
「違う！」
ヒカルが悲鳴の様な声をあげた。
茶色の髪を振って、違うともう一度言った。

「シャルルはわかっていたから・・・だから、だから」
そこまで言って言葉を詰まらせた。

「彼は悲しんでいた。憎んでも居なかった。ルイを自分の息子だ、と言っている。
彼に当主の座を譲ることも考えている」

「激昂して、堪えきれなくなるほど息子をたたきのめす父がどこにいるのだろうね・・・
しかも、自分の息子と公言している者より年が下の・・・自分の運命の女の娘を愛玩する男の、どこが良いんだ？ヒカル」
ミシェルはヒカルに反論した。お話にならないと言った。

外が急に薄暗くなり・・・室内は照明が必要なくらい明度が落ちた。
それでも、ヒカルとミシェルは対峙したまま、そのまま話を続けた。
彼の話は種明かしなどではない。

どうして、今。

シャルル・ドゥ・アルディの。
ルイ・ドゥ・アルディの。

アルディ家の重大な事情を漏らし始めたミシェルの意図がわからなかった。

彼は、今度は自分の腹の上に手を乗せて、ゆっくりと大きく、背もたれに重心を移動させて、天井を見上げた。
何かを見るわけではなかった。
今はもう煙草に手を伸ばしていなかった。

「オレはルイ・ドゥ・アルディという新しい種を誕生させた。それがヒカルという娘が欲しいと言う。たとえ、その娘が贖罪の娘であっても。稀なる能力だけを手に入れれば良かったのに、彼はシャルルから得られなかった愛という、非常に・・・主観的で得てもどうにもならないものを欲しがるようになった。
・・・シャルルを得られなかった代償行為としてヒカルに焦がれるのか。
それとも・・・シャルルの息子でもないのに、あの人の娘に惹かれるのは、アルディ家の特有の性なのか」

「アルディ家の性・・・」

「そう」
ミシェルは目を瞑った。
もう、この室内では、闇も晄も関係ない、というように。
彼は彼の視覚を遮断して、深く・・・話をすることに没頭し始めた。

白金の髪が淡く光っていた。

■163　呼子鳥06

薄暗くなったと思ったら、辺りは急に真っ暗になってしまった。
雷鳴が近くで轟き、窓を叩く強風の振動が微妙に変化し、風向きが完全に逆になったことを告げる。
近くのロアール河は、普段は穏やかな河だけれど白波が立っているだろう、とミシェルは言ったが、明かりを灯す気はないらしい。
彼女の膝上でスリープモードに入ったマシンのランプだけが、この部屋の唯一の光源として、ゆっくりと点滅している。

かちり、と小さく音がして、ライターの火が灯った。
闇の中でミシェルが煙草に火を付けた。
恐ろしく整った顔がちらりと闇の中に浮かび上がる。
白金の髪が淡白く光っていた。

紫煙が彼の肺に吸い込まれる度に、煙草の火が点滅した。

「マリナ・イケダを何度かシャルルとジルが治療したことがあった。
　若い頃にね。
　特にジルは、シャルルに託されてマリナを長期療養させていたこともある。
　・・・その時に採取したサンプルから、すでに彼女の躰は非常に・・・非常に珍しい体質であるということがわかっていた。
だから、シャルルは彼女に事実を明かさずに『死後解剖させて欲しい』と何度か申し出ている。
それは叶わなかったけれどもね・・・。

それから年月が経過して、マリナの不妊治療をすることになった時に。
この体質をもっと極めた状態で創り出すことができないかと思いついた。
ああ、言っておくがオレではないよ。
まだ実用化されていない万能細胞についてレポートを書いていたシャルルが、発表するつもりもない論文を書いた。
それを、彼が不在時に埋もれていたデータベースから引き出しただけだ」

「彼は発表するつもりはなかった・・」

「そう。しばしば、彼はここを不在にした。鑑定医なぞつまらない職業を肩書きに持って、あちこち出歩いていたし、もっと若い頃には、ヒカルにはとても言えない悪行の限りを繰り返していたよ」

小さく声が漏れて、ミシェルが笑っている様子が窺い知れた。
ミシェルはこの闇の中で、ヒカルの姿や表情はわかりやすくて想像しやすいから、陽光の下で見て居るようだと言った。

「どうしてあの小さい東洋人が、フランスの華と讃えられるシャルルの唯一の人なのだろうね。
これは、彼の狂人じみた精神から来るものなのか。
それとも・・・この一族が欲してやまない遺伝子治療をするに必要な細胞を持っている彼女を知らず知らずのうちに求めていたのか・・・他にサンプルがないから、比較対象できないが、非常に興味深い現象ではあるね。」

彼はまたそこで煙草を吸った。

「そうこうしているうちに、ジルが発症した。
またか、と思ったね。

母も精神を病んでいたし、一族の中には時折そういった者が生まれる。
だから、多情と言われた我が先祖は、たくさんこどもを残した。
・・・当時はそれが唯一の打開策だったから。
他人の血を入れて薄めてやればいいのに、この一族は、自分の血筋が最も優れていると思い、澱んだ血族結婚を繰り返して・・・こういう遺伝疾患や、かなりの割合で出現する精神疾患に対応できない。
・・・いや、しないのかな。
代わりがいくらでも創ることのできる時代になったから」

「ルイは代用品ではないわ。シャルルもそう」
「そうかな・・」
ミシェルはヒカルの言葉に疑問を投げて寄越した。
彼は笑った。
「シャルルだって・・マリナの代わりを用意したじゃないか」
「それは・・」
ヒカルは答えに詰まった。

「それなら、なぜこれほど同じ顔立ちの者がたくさん存在するのだろうか。
そしてオレはなぜ、生かされていたのだろうか。シャルルの代わりだからだ。
彼はしばしば・・・自分の殻に閉じこもり人前に出てこないで、ジルに代役を任せていた。
仕事を放りだして日本に足繁く通った。
ジルが彼の代わりを務めるには限界がある。
その時のための、代用品をたくさん・・彼らは用意することにした。
ただそれだけが、オレが生きていた理由だよ。

所謂日本で言う「影武者」という立場なのだろうね。
とても便利な依り代だ。
死んでも構わない。
でも、本物が死んでも構わない程度の出来具合だから」

ヒカルは彼の静かな勘考に反論もできず・・話しかけているようで、そうではないミシェルの言葉を黙って聞くしかなかった。

ざっと・・一度だけ、烈しく窓ガラスを風が叩いて、次には大粒の雨が落ちだしてきた。
雷鳴が近くまで来ている。
閃光が走ったのに、彼女はミシェル・ドゥ･アルディの一挙手一投足の僅かな動きから漏れる音に神経を傾けていたので、その雷音は気にならなかった。

「シャルルが居るから、オレはミシェル・ドゥ･アルディという名前がある。
彼がオレをミシェルと呼ぶからオレは生きていられる。
・・・それなのに、シャルルはあの人でないと駄目だと言った。
何もかもを投げ出して、彼女を思い偲びながら、生きているのに死んでいる状態になってしまったとき・・・彼の誇りとオレの誇りは違うのだと思い知らされた」
「シャルルとミシェルは双子だけれど・・まったく別の人よ」
彼はヒカルの声を無視した。

もう、何も聞こえていないようだった。
もう、何も見えていないようだった。

忙しなく煙草を吸っている様だけが、かろうじてぼんやりと見え隠れする。
ここは直射日光が当たらない設計になっているので、他の部屋よりも余計に薄暗いのだろう。
しかし人払いをしてあったので、ここには誰も近づいてくる気配さえなく・・ただただ、磊音と雨音と・・・ミシェルの声だけが部屋を巡っていた。

「だから、オレは代わりを作ってやった。シャルルの代わりにオレは当主になるという資格を剥奪されている。
不測の事態の時以外はね。
オレは結婚してこどもをつくらないし、誰かひとりを定めることもしない。
シャルルが当主として就任したときに、そう誓約した。
なぁ・・・ヒカル。
それなら、オレが生きている証として。オレがオレであるために。
シャルルという晄から逃れるために・・・身代わりを創ったとしても。
ルイ・ドゥ・アルディというシャルルの重責を肩代わりする代わりを創ったとしても。
彼が畏れていた無幻症の治療をするために必要な、遺伝子疾患による発症かどうかを実験するために、血縁関係者間のこどもを創ったとしても。・・・それは贖罪するべきだとおまえは糾弾するのかな」

彼がルイを「実験材料だ」と言った言葉の意味を、ヒカルはようやく理解した。
茶色の目を瞑って現実から逃れることはできなかった。
大きな瞳を見開いたまま・・・

彼女はそのまま、ミシェルの吐露に耳を傾けた。

■164　呼子鳥07

「シャルルはなぜ、捨て置くような仮説を打ち出した論文を書いたと思う・・？」
ミシェルが話題を変えたので、ヒカルは薄暗くて見えない彼の顔に向けて視線を遣った。
「彼が生きながら死んでいる時。彼が『青春の輝き』と言っている時代を越えてしまったとき。・・・彼はいくつか、未発表の論文を書いた。実証検体がないからということを理由にして・・・彼はそれらを廃棄処分にしようとしたので、オレがコピーしておいた」

「更に、彼が医師を志したのは、彼の母親が病気だったからだ。彼の母親もアルディ家の血族であったのに・・シャルルでさえも、他の者でさえも、彼女と型が一致するドナーが居なかった。どういうことだろうね。前当主が手を尽くしても・・・とうとう、見つからなかった」
「・・・それはそういう時もある」
彼女は声を絞り出した。ミシェルは小さく笑った。

彼女の病は血の病だ。
移植すれば治ったのかもしれない。
しかし、型が一致しないケースもある。
躰が弱っていたり、他の投薬治療を受けていたりすれば、成功率の低い移植は施術許可が出ない。
「貴女は命を大事にしろと言っているのに、しかたがない命もあると言う。
これはどういうことなのかな」
彼はそう言った。
闇の中で目が慣れてきて、彼の白金の髪が揺れ動くのが見えてくる。
彼は自分の母のことを「シャルルの母」「彼の母」と言った。
誰よりも彼女と一緒に過ごした時間が長かったのに。
ミシェルは母を彼女、と言った。
ヒカルがヒカルの母を「あの人」と呼んだように。

「あの病の末路はね・・本当に惨めだよ。無菌室に入り、精神疾患の投薬と交互に受ける、生き存えるためだけの治療は・・・彼女が夢の世界の住人だからこそ耐えられたのではないかと思うくらいのものだった。
そんな状態をシャルルが見て。
思わなかったはずはない。
『どうして、自分は、彼女と型が合わないのだろう。
誰にでも拒絶反応が出ない、誰にでも適合する骨髄はないのだろうか・・』と。
まったく思わなかったら嘘になるだろう。

その後の彼の経歴を見れば、それを忘れ去った進路ではないはずだ」

「・・・・」
ミシェルが言いたいことが何となくわかった。
だから、マリナ・イケダの卵細胞からデザイナーズ・ベビーを創れば、彼の願いが叶うかもしれないと思ったことが、本当にないのか・・・
ルイを「実験材料」と言ったミシェルと変わらないことをしているのではないのか、と彼は言いたいのだ。

でも、シャルルはそうしなかった。
彼女を愛していたから。
彼女が他の男を愛していることを知っていたから。

パリに留まって、研究の協力をして欲しいとは決して・・言えなかった。
それなのに、ジルがシャルルのサインを真似て、彼女をパリに呼び寄せた。
そして、稀なるこどもを誕生させてしまった。
あまり間を空けずに・・自分の子どもが存在することも知った。

「結局は、ルイがその理論を打ち立てて完成させたけれど、元々はシャルルの仮説があったからこそ、ヒカルの万能細胞の利用方法が確立した。
ね、これは非常に興味深いことだと思わないか・・・・シャルルは新たな時代を創る者の祖となったのに、その者に滅ぼされることになった。
彼はルイが発案した特許新薬を使うことを拒否した。ジルも拒否した。
・・・まぁ、承認しても投薬治療はしなかっただろうけれど」

「シャルルは決して屈しない。ルイもそういうつもりで生きているわけでない」
彼女はそれだけ言うのがやっとだった。
シャルルとミシェルの母の死が、彼らに大きな影響を及ぼしていたことを痛感する。
そして・・とうとうマリナに打ち明けられずに、彼女を送り出したシャルルの気持ちを考えると切なくなった。

ジルが時折見せた悲しそうな顔を思い出した。
彼女は望んでそうしたわけではなく、きっと、マリナに頼まれたのだろう。
どうしても、治療を受けたいと。
そして、シャルルにも言えずに彼女は板挟みになって・・シャルルとマリナが結ばれることもあるかもしれないから、この繋がりを断ち切ることができない、と暗い闇に堕ちてしまったのかもしれない。

他の男のこどもを産みたいと願うマリナを見て、ジルは相変わらず自らの心を押し殺して、微笑んでいたのだろうと思うと、どうにも息苦しくなるくらい遣る瀬無くなった。

もう、あの時代には戻れないのに。
シャルルもジルも、夢を見続ける。
彼らは夢を見ないのに。

「貴女がいつまでもそうやって、ルイとの婚約を・・いや、細胞提供を拒否しているから。
いつまで経過してもシャルルもジルも戻って来られない。
シャルルはこれからどんどん、夢幻状態が長くなっていくだろう。
そして、念願の万能細胞の可能性が目の前で微笑んでいるのに、彼はつまらない愛に縛られて自らを滅ぼそうとしている。
遺伝病なのか外的要因なのかさえわからない奇病なのに、それを解明する探求心さえ放棄した」

そこでミシェルは一度言葉を句切った。

「ルイがほとんど眠らないのはね・・恐怖に怯えているからだ。ルイがヒカルに執着するのは、自分を癒してくれると思っているからだ」
「え？」
ぎくり、としてヒカルが声を出してしまった。
独り言のようなミシェルの話に、ルイが出てきたからだった。

彼の事をミシェルは「実験材料」と言った。
彼を引き取り、最高の教育を与えた人物は、彼を観察し、彼を支配し、彼を・・・彼をどうしたかったのだろう。

「ヒカル、ルイは貴女を日本から連れ去るときに・・・勝手に何かを持ち出したりしなかったかな？」
「・・・ないわ」
ヒカルは自分の顔色が蒼くなっていくのを感じた。
心当たりがあったからだ。
嘘をつくのが下手だね、とミシェルは笑った。
「勝手にあなたに内緒で・・家に上がり込んで。そう、たとえば、毛髪を採取したりしなかっただろうか。パリに来て、貴女のその擦過傷の治療ガーゼをこっそり研究所に持ち運んだりしなかっただろうか。」
「ミシェル、言っている意味がわからない」
彼はヒカルに回答しなかった。

「オレは最初から答えを言っているよ、ヒカル。
彼がどうして長い睡眠を取らないのか。
それは目覚めたときに、自分が無幻状態になることを畏れているから。
彼がどうしてヒカルのことを執着するのか。
それは彼を癒すための夢のような治療薬を貴女がもたらすと期待しているから。
・・・実際、彼はそれで生き存えている」

「ミシェル！」
ヒカルは低く唸った。
「どういうことなの。・・・どういうことなの」
「ああ、ヒカル。もうわかっていることを尋ねるのは愚行だよ」
ミシェルはくすくす笑った。
また煙草を吸う仕草が風に乗って彼女を包んだ。

「もう、ヒカルはわかっているのではないの？
・・・ルイに再会して。
貴女は、少しもおかしいと感じなかったの？

彼がなぜ、あれほど感情の抑制が効かないのか。
シャルルをひとりの男として・・オレをひとりの男としてヒカルに近づけたくないのか。

なぜ、大量に水を飲んだりするのか。
なぜ、ティーではなくカフェイン含量の異なるコーヒーを飲んで煙草を摂取するのか。
なぜ・・・彼はあれほどの蔵書を細かく分類して、セーフティハウスに保持しているのか。
食が細くなり、睡眠を取らずにいるのか。

こうして・・こっそりヒカルから採取した細胞から精製された薬を常備するために、ここでオレと鉢合わせする可能性を考えないで・・ここにこうしてジルと同じ薬を取りに来るのか。

ねぇ・・誰かと誰かに似ていないか、この症状。」

ひときわ大きな磊音が館の近くで鳴った。

■165　呼子鳥08

「ルイが発症しているということ・・・？」
ヒカルは声に出したくなかったが、互いの顔が見えないので、絞り出すようにしてようやく言った。

確かに、以前の彼とは違っていた。
彼が激昂したり、自身のプライベートを見せたりすることは、今まで決してなかった。

でも、それが「予兆」であるとはまったく気がつかなかった。
そう・・・ジルの異変に途中まで気がつかなかったように。

———まったく？
以前の彼と違うと理解できるほどには彼の事を知らなかっただけではないのか？

「今の段階では心因性のものだろう。診察させないからね、彼は。詳細はわからない。
あれほど絶やさず薬を飲んでいるところを見ると、自覚できなくなることが怖くて、発症していない者が服用しても副作用しか出ない薬を摂取している、と言ったところかな。
カフェインを多量摂取するのは、幻覚症状に陥ることを抑制したいから。
無幻症になると、自分が異常であるとは気がつかないから。
彼のように積極的には投薬治療を受け入れることはしない」

「遺伝異常か、外的要因かわからないと言っていたのに」
「そう、未だわからない。でも、アルディの家系では、その引き金が他のものより甘いのは事実だね。精神が脆く、すぐに自閉状態に陥る。
他の者との交流ができず、同族意識が強い割に競争により生き残ることを性向がこのような奇妙とも言える現象を起こしたのかな」

自分とは違う、とでも言いたげなミシェルの言葉だった。
彼も内的要因を保持しているはずなのに、長らくアルディ家で育っていなかった。
シャルルと同じ因子を備え持っているのに、彼は発病していない。
それなのに、シャルルもジルも発病し・・・そしてルイも脅威にさらされていると述べるミシェルの意図がわからなかった。

内的要因か外的要因か、それはまったくミシェルには関係がないとでも言うように。
彼は・・そう、ミシェル・ドゥ･アルディは、この状況を愉しんでいる。
そうとしか思えなかった。
彼の中では結論が出ているように見えた。

ミシェル・ドゥ･アルディは「わからない」と口にすることはない。
それが確実であると言い切れるまで、頃合いを見計らっているように見えた。

「・・・原因はどちらでも良い。その病を癒す方法があるのだったら・・・原因を探る時間を取るより、癒す時間に費やした方が良いと言う。まったく、シャルルの考え方は、進歩的すぎるよ」
ミシェル・ドゥ･アルディは言った。
その癒すために必要な人間が躊躇して足踏みしているというのに。
原因はどうでも良いと言う。
その間にも、この世には、適合するiPS細胞を求めて、たくさんの者が困窮しているのに。
彼らを救うためにミシェルがそう言っているのではないと解っていたけれど。

「・・・オレの育った国では」
ミシェルはぽつりと言った。
「オレが存在を隠されて育った国では、原因を探してそれを予防する暇もないくらい、あっという間に人が死んだ。
政情も難しい時期だったこともあったが、衛生状態はこの国とは比べものにならないくらい悪かった。
そんな国が他にもたくさんあるのに。
・・・シャルルも他の場所で見て居たはずなのに。
彼は・・・ヒカルとあの人を大事にするあまりに・・・貴女たちが心安らぐのであれば、世が滅びれば良いと傲慢な結論をだした。

その傍らで、原因究明から予防治療の普及まで待ちきれない者がどんどん・・命を落としていくのに。シャルルは、あの人を護るために、他の者を犠牲にした。
これは、運命の人だから、と言って赦されることなのかな、ヒカル。
命は等しいと言っている者の命は、尊いのかな。

そんなシャルルと違い、あとはヒカルの細胞培養さえあれば、いつでも実用化できる状態まで創り上げたルイを・・あなたはそうして拒否し続ける。
シャルルが恋しいと、オリジナルの正当性を容認するかのように、ルイを拒む。
言っただろう?彼は新しい種になると。
それなのに、その芽を枯らそうとするヒカルは、誰からも愛されてしかるべきだと言うの？

そもそも、貴女は誰を愛しているの？
同じ貌をした者達に囲まれて、同じ環境に育ってなお、あの人の気質を受け継ぎ常に剛胆で・・決して病の脅威など理解できない貴女は、誰を選んで、この家の者達をどこに導くの？」

そこまで言うと、ミシェルはヒカルに言った。
「だから、貴女は贖罪の娘と呼ばれ続けることに、いい加減、気がついたらどうかな」

「・・・ミシェル」
ヒカルは唸った。

「ああ、オレは女性機能は備えていないから。
卵細胞をどう使用するかによって生じる染色体XXの気落ちはわからない。
ジルの憔悴も理解しない。
最も大きな細胞とだけしか認識していないから、そのつもりで。
できないことは実行に移さないことしている。
オレも人生の半分を生きたから、もう半分は・・・いや、もっと短いかもしれないけれど、無駄な時間を過ごさないように気を付けているつもりだよ、ヒカル」

「待って、ミシェル。順を追って説明して。
・・・ルイは、いつ頃から気がついていたの」
「何を？」
「自分が・・・シャルルの子ではないかもしれないということ」
そうだなぁ、と言ってミシェルはまた煙草を吸ったようだ。
しばしの沈黙があった。
彼は饒舌だった。
シャルルと同じ貌を見られない時だけが、唯一ミシェルで居られるとでも言うかのように。

「ヒカルが日本を離れる前に、召喚状でシャルルに呼び出しされただろう。
その時に、双子のうちのどちらが父か、判定検査が可能になる検査方法について説明があり、彼は判定検査を受けることを承諾して、そのままサンプル採取に応じている。
それでも、シャルルは、結果はどうであれ、ルイが誰にも口外しなければこのままアルディ家の当主継承者として遇しよう、とシャルルに持ちかけられたらしい。交換条件は、ヒカルに婚約の話を強要しないこと」

・・・あの「契約の日」のことか。
彼は確かに青白い顔で、執務室に呼ばれてそして出てきた。
その後、ヒカルに、家族を創りたいのであれば、ルイの協力はなくてはならないものだと彼はヒカルに言っていた。
それよりもっと前から、彼は気がついていたのか。
気がついていたから・・・自らの真実を探すために、彼はバイオ関係や高速処理チップの開発などに携わったのか。

事実を宣言された彼が、平静を装って、ヒカルに話しかけた心情を思うと、胸が痛んだ。

あのとき。
自分はそれさえ知らずに、ルイにシャルルを返そうと。
それだけを考えていた。
ルイからではなく、ヒカルから承諾するようにと言っていた。
ルイが、本当に彼が帰るところはもっと違う場所だったのに。

「・・・今、ジルもシャルルも症状が進んでいないが、やがて、シャルルの母のようになる。
まったく違う人間でも、見分けがつかなくなり、誰もかれも同じ人物の名前で呼ぶ。
・・・彼の母の場合には、夫でもなくシャルルでもない人物を呼び続けて死んだ。
・・・目の前に、その人物の双子の方割れがいるのに。
双子の存在を知られてはいけないと皆が必死に隠していたのに。
それをシャルルは知らないふりをした。
そして、双子では駄目だと思った。
母を救う骨髄は自分と同じだし、籍も違うから、ロベールが認知しない限り彼からの骨髄採取はできない。
たとえできたとしても自分と同じ結果になるだろうと思った時。
シャルルは思わなかったのかな・・・
どうして、二卵性でなかったのだろうと思ったはずだ」

その「シャルルの母が最後まで呼び続けた相手」は自嘲気味に言った。
彼とシャルルが一卵性ではなく、二卵性であれば、こういう結果にはならなかったのかもしれない。
シャルルが言っていた。
「もしも」は存在しないのだと。
実現しないことは考えるのはやめた、とシャルルが悲しそうに言っていたことを思い出した。
ヒカルは、ヒカルの母との恋愛が成就しなかったことだけを指すのだと思っていたが、実際にはそれだけではなかったのだ。
「自分の母を救う因子を持つ者を探して、それが叶わなければ『それなら、創れば良い』と思ったシャルルが。
自分を救うために・・・アルディ家から解放されるために作られた因子が存在すると知って、愕然としたのは矛盾するね。
彼も所詮は・・・フランスの華と呼ばれているのに、人の子だったのか。
それとも・・・『青春の輝き』と彼が呼んで、戻れない時代を懐かしむような行為をさせる古き友人達に感化されたのか・・

くだらないことだね、とミシェルは吐き捨てるように言った。

「ルイはシャルルとオレとの間を行き来しながら育ったが、シャルルは結局、ルイを実子かどうか疑っていたらしい。
オレにもっとルイを愛するように、と忠告までしてきた。
愛ね・・・愛を知らない者に愛を受け入れろと言われても無理な話だ。

ルイもルイで、これほどヒカルに執着することになったのは、シャルルがヒカルに執着する様を傍で見て居たからだとオレは思っている。
彼は最初、ヒカルこそがシャルルの実子だと疑念を抱いていた時期もあったらしい。
徹底的に・・ゲノム解析までやらせていたことを、貴女は知らないでしょう」

健康診断と言われていたパリで滞在中での「必須要件」のことや、彼女が頭部を強打して病院で精密検査を受けたときのことを言っていると思った。

「自分と血縁関係がないことがわかって、一番ほっとしたのは、シャルルかルイか・・・
その時にヒカルが機能を損なわずに成長した事実は単なる副産物だと、シャルルは言っていたが、そうではない。
それでもなお、ヒカルには知らせないままにしておく状態は、いずれ破綻すると何度も警告したのに、彼らはまったく・・頑固だね。良く似ているよ。
聞く耳を持たないのだから」

「シャルルがルイに対して冷淡だと言う人は居た」
ヒカルは低く言った。
「でも、彼を叱責するときのシャルルはいつも辛そうだった。そう思った。
・・・ルイをひとりのアルディ家の者として・・対等な人間として扱っていただけで・・シャルルは・・・いつも同じ距離をもってルイに接していた」
「冷淡で済まされる程度かな？彼を殴打したり無視したり・・・・同居人程度しか認識にしていないようだったが。
ルイにはそういう執着は捨てろと常々言っていたので、彼も彼でアルディ邸には近寄らないようにしていたのに、ヒカルが戻ってこいなどと言うから。
ルイの・・・彼の狂気を呼び覚ましてしまったのは・・ヒカル、貴女だよ」

薔薇園で考え事をするルイを思い出した。
薔薇園で品種改良を続けるシャルルを思い出した。

彼らは、何を思ってあの館で過ごしているのだろうかと思ったことがあった。

「ルイが自分自身に近寄ることを赦す人間はほとんど居ない。それなのに、ヒカルは、あの人のように・・簡単に彼に飛び込むのに、自分の心の内は見せない。
簡単に彼の誇りを打ち砕くのに、彼がヒカルに近寄ろうとすると、ヒカルはシャルルの背中の陰に逃げ込んでしまう。
まったく、つまらない女に執着してしまったな、と言ったら、彼は返事をしなかった。

・・・そんなあなたを、憤りに任せて、郭公だと言ったそうだが、ルイこそが郭公であることは、その時には自分でも良くわかっていたはずだよ」

■166　呼子鳥09

「彼こそが郭公であるということを、自分で確認しないと気が済まなかったのか・・・
それとも、彼自身がすでに崩壊を始めているのか・・・
ヒカルを迎えに行くと言わずに日本に行った。
最初の出国の理由は『ゲノム解析装置がもっとも優れている日本にビジネスで行く』と言っていたので、シャルルも事前申請にOKを出した。
その間・・・当主代行が不在にしているので、オレは対応に追われていて、ルイの行動報告を確認する時間が遅くなっていた。
ジルも不調だったので、あちらこちらで「シャルル」を演じるのが・・たいそう億劫だったよ。
まさか、ヒカルを連れてパリに戻るなんて、あのときのシャルルには考えも就かなかったに違いない。
いや、考えていたけれど・・・ヒカルが拒否をすると思って居たようだ。
そして貴女の細胞片を手に入れて・・彼は日本でも解析依頼をしている」

ヒカルは最初に彼が彼女のマンションを訪れたときに、誰かを車に待たせていたことを思い出した。
・・・あれは、ルイの知り合いではなく、ビジネス関係者であり、ヒカルの毛髪を鑑定に出す途中のことだった」

ルイは決して、商談の席以外に、ビジネスの相手を同伴しないことで有名だった。
最初にこの館に訪れる前に立ち寄った店でも、あれほど親しげにしていた女性とは、決して・・一緒に並んで長くは歩かなかった。
それなのに・・そこまでして解析を急ぐほど、ヒカルの解析結果を知りたがった、とミシェルは溜め息混じりに言った。

まるでその場にいたかのように、ミシェルは流れるような口調で言った。
ヒカルは、自分が毛髪を採取されていたことにはまったく気がつかなかった。
しかし、ルイには・・確かにその時間もあったし、彼は彼女に接触した唯一の人物である。

確かに。
彼はきっかり72時間後に迎えに来た。
現在、解析技術は飛躍的に進歩したが、それでもやはり72時間程度はかかると言われている。
・・・彼は、その間、ほとんど眠っていないようだった。

あれは、投薬が切れた副作用で、不眠に陥り、酷く疲労感を感じていたのでないのか。
確かに彼はひっきりなしに煙草を吸っていたし・・・機内では、メールをしきりに打っていたが、何度も送信を取りやめて書き直しをしていたように見えた。

彼がこの数年間、たったひとりでどれほど孤独で過ごしてきたのかと思うと、ヒカルは彼がメールを返信しないことに、もっと気を遣うべきだったと思った。
彼は・・メールを返信したくなかったのではない。できなかったのだ。

送信したメールのテキスト本文が、もし・・自分が意図しないことを書いてあったら。
テキストは残る。
なかったことにはできない。
だから、彼は送らないことに決めたのだと思った。
ルイは間違えない。
それなのに、何度もメールを送受信していた。

サーバーに一度溜めて、少し時間を置いてから、自分の言動に異常がないことを確認して、送信していたのだろうと思った。

ミシェルは少し息を吸った。
肺にまで紫煙を吸い込むような動作だった。
ふっと息を吐く微かな音が聞こえてくる。

外は大変な通り雨と雷雨であるのに・・・ひどく静かだった。

「・・・クロス夫妻が飛行機事故にあったとき」
彼は続けた。

「シャルルはこれで、彼らから解放されると喜んだ。
それなのに、彼は・・・自らの自我を放棄して、再び意識を遠く飛ばしてしまった。
アルディ家の頂点に立つのに、どうしてこうも彼は・・精神面で弱いのだろう。
手に入れられない愛を抱えながら、ずっと彷徨っている。
自分から手放したのに、まだ・・・思い切ることができない。
形にならない、実らない幻影をずっと追い続けている様は、オレからみたら、そちらのシャルルの方が無幻症ではないかと疑いたくなるくらいだよ」
ミシェルが辛辣に言った。
彼は、まだ、青春の輝きの時代を継続しようとするシャルルの方が建設的だと言っているのだ。

「あのころの彼は素晴らしかった。
オレが自分自身が「生きている」と強く思わせるくらいに、酷く攻撃的で挑戦を絶やさず・・そして当主の座を勝ち取った。
オレにはそこまでの執着がなかったと言えばそれまでだが・・・
何が彼をそうさせるのだろうと思った。
理由はたくさんあっただろう。
しかし・・・彼の母親のときに救えなかった病を治すことができるのは、当主の座と、研究所の使用権限を行使しないととうてい実現できないとわかっていたからだろう。
アルディ家がバイオテクノロジーやシステムネットワーク構築に本格的に着手し出したのも同時期だしね。
廃棄予定の論文を、ぎりぎりまでそうすることができなかったのは、やはりシャルルは万能細胞を実用化できないかと思っていたのは否めない結論だ。
これは研究者というか探求者の性なのだろうか。
自分の仮説を捨てきれないという・・・アルディ家に良く出る特徴だけれど、ルイもシャルルもそれが裏目に出たな」

また、彼が煙草に火を付けた。
そしてそのまま・・今度は、ライターの火を付けたり消したりして、何度かその仕草で指先を翫んだ。
硬質のかちん、という音がその都度部屋の中で響き渡った。

「・・・この一族の者は、誰でも畏れている。シャルルとジルのように、自分がいつかなってしまうのではないのか、と。原因究明をルイに急がせているのに、肝心のルイは一向に成果を出さない。
・・・加えて、ヒカル・クロスがパリに戻っていると知れてしまったものだから、ここ数日は大変な騒ぎだ。まったく、あの大捕物騒動は、失態だったよ、ヒカル。
ルイはこっそり貴女にシャルルの実体を知らせて、そのまま細胞提供の同意書にサインさせるつもりだったのに。
貴女は、シャルルに突進していき・・結果、予定も計算も大幅に修正する必要が生じてしまった」

ミシェル・ドゥ・アルディは少し憤っているようだった。
「シャルルをあのままの状態にしておけなかった」
ヒカルは低く言った。
彼をあのままにしていたら、ミシェル・ドゥ・アルディの予言どおり、彼は徐々に・・・ジルのように、夢の世界の時間が長くなるだろう。

ヒカルを見た時の彼は虚ろだった。
そして、戻ってくる時までに時間がかかった。

ルイを激しく殴打したときの後のシャルルの様子と、現在のシャルルの様子からは・・明らかに進行していると認めざるを得ない。
今のシャルルは、戻ってくるのに時間がかかりすぎている。

ヒカルは少し黙って居た。

「ルイはいつも『30分しか待たない』って言うだろう？前はね・・あれは『60分しか待たない』だったんだよ。徐々に時間が短くなっている。この・・危機的状況で、ルイはいつもヒカルの傍に居ろとシャルルに命じられた。
彼はいつ何時、強制的にヒカルが研究所に連れ去られるのかということを危惧して・・いつも貴女の傍に居たはずだけれど。
勿論、シャルルがヒカルの傍に居るときは除くけれど」

「彼は小さい頃から、何度も誘拐の危機に直面している。彼だけではない。オレへの襲撃も、目にしたことがある。
自分で自分の身が守れるようになってからはそれもなくなってきたようだが、毎日がおもしろ可笑しく過ごしているわけではない。
車から降りるとき。
それから玄関エントランスで出入りするとき。
彼は外に出る度に、ルイ・ドゥ・アルディであることを求められてそしていつも緊張することを強いられる。
それはアルディ家の者であれば、誰もが感じることではあるが・・・
そしてここにやって来ればシャルルと常に呼ばれる。
自分の存在意義について、常に自分は価値があるものだと思って居たい人間の性というのは、本当にやっかいだよね、ヒカル」
それはルイ・ドゥ・アルディに限ったことではなかった。
ミシェルにも・・・シャルルにも適用できた。

彼らは、自分自身であるために、一体何を拠り所にしているのだろうか。
「お喋りは終わりだ。種明かしも終わり」

気がつけば、外の雨が止んでいた。強風も弱風になっていた。

・・・雨が上がる

「気圧の変化は、たいそう体調に障るらしい。これも興味深い現象だけれど。
オレはジルを見に行く。・・おまえは、ルイを探しに行け」

空が明るくなってきた。

ミシェルは煙草を揉み消すと、各々一脚ずつしかない奇妙な部屋の中央で立ち上がった。
この部屋は、油絵の具の匂いがするから長居したくない、と彼は言った。

外が急激に明るくなってくる。
雨が止みそうで止まない状態ではあったが、ミシェルの姿は僅かに差し込んできた陽光の下で視認することができた。
彼は相変わらず、瞳は笑っていないまま、微笑んでいた。

・・もう、ヒカルがよく知っているミシェルだった。

ジルにシャルルと呼ばれて、優しく微笑む男性ではなかった。

彼らは良く似ていた。
現実で生きていることを実感するか、無幻の世界で自分の描いた世で生きて実感するか、それだけの違いだった。

彼らは生きている。

そして、深く悩んでいる。

■167　呼子鳥10

「この絵はミシェルとルイだったのね」
ヒカルは自分自身に確認するように言った。
ミシェルは何も答えなかった。
優雅な物腰で立ち上がった彼がヒカルの脇を横切って部屋を出ようとした時のことだった。

「それをどう扱うのかは、ヒカルの問題だ。・・・オレには必要ない」
ミシェルは、興味がないとでも言いたげだった。
「あの人が言いたかったことは何だろうね・・・ヒカル。ここで課題を出しておこう」
良く通る声で、彼は言った。

ヒカルは目を瞑って大きく息を吐き出した。
もう一度目を開くと、彼女が座っている傍らにミシェルが居て、彼女を見下ろしていた。
冷酷な青灰色の視線がヒカルを見つめている。
もう、いつものミシェルだった。
いつも彼女を観察して・・・そしていつも何かを問い掛けている冷たくて美しい人は唇を歪めて笑った。
「オレは、この一族が滅んでも構わないと思って居るよ、ヒカル。その時にこそ・・オレは3度目の生への実感を満喫するのかも知れない。もう、退屈でたまらないからね」
彼はそれで話を終えた。

部屋を出れば、彼は束の間、この館に居るジルのためにシャルル・ドゥ・アルディになる。
それは彼が望んだ始まったわけではないのだろうけれど、ジルに向けられたミシェルの微笑みが忘れられなかった。
あの穏やかで静かな微笑みが演技であったとは、ヒカルはとうてい思えなかった。

「ミシェル」
ヒカルは彼を呼んだ。
「・・・・・どうか、ジルを」
「ああ、ヒカル」
彼は初めて彼女の言葉を遮った。
どんな時でも面白そうに興味深そうに彼女の話を最後まで聞いていたミシェルは、ヒカルの言葉を遮断した。それ以上言ってはいけない、と拒絶した。
「その言葉は、不必要で余剰なものだ」
「・・・そうかな」
ヒカルはぽつりと言った。
白金の髪の、シャルルと良く似た人はくすりと声を漏らして笑った。
「そうだよ」
そして彼は扉に向かって歩き始めた。
差し込み始めた陽の光が眩しいとでも言うように光とヒカルに背中を向けた。
「・・・今度会ったときに聞いてやろう」

彼が出て行くと、ヒカルは肩で息をついた。
酷く緊張していたようだった。
でもこれで彼女の知りたいことがわかった。
そしてミシェルは、ヒカルがジルに尋ねたかったことを全部回答した。
きっと、そうなるのだとわかっていたと思う。
だから、ルイと共にやって来ることも想定してなお・・彼はここに先回りしたのだと思った。

シャルルだけではないはずだ。
シャルルの母・・いや、彼らの母を癒すてだてがあれば、ミシェルだって実行していたに違いない。
前当主でもある彼らの父を早世させることもなかったのかもしれない。
彼らは「もしも」ということは考えないと常に言う。

その時に彼は権限がなかった。存在しない人物だった。
だから、シャルルに訴えたかったのかもしれない。
だから、シャルルと共有したかったのかも知れない。
哀しみも苦しみも慶びもすべて・・・・すべて。
ヒカルがシャルルと共有した何もかもを、本当はミシェルやジルやルイが共有すれば・・もっと違う結果になったのかもしれない。
それなのに、誰でもなく、シャルルはヒカルを選んだ。
それが何を意味するのか、ヒカルは受け止めなければならないと思った。

シャルルにはシャルルの理由がある。
ミシェルでもなくルイでもなくジルでもなかった理由。

頭が酷く混乱していた。

ミシェルの言葉を全部記憶したはずだけれども、夢のようであり幻のようであり・・この額に浮く汗や、膝の上で間もなくバッテリー切れになるという警告を発しているラップトップの点滅が、決してそうではないと告げていた。

彼女はしばらく同じ姿勢で考え事をしていた。
そして直射日光が入り込まないこの部屋にも明るい陽光が入り込んで、夏の蟲が何事もなかったかのように声をあげて限りある命を謳歌する歌を奏で始めると、ヒカルはゆらりと立ち上がった。

私は、これからやるべきことがある。
自分しかできないことがある。

それはきっと・・・

彼女は空いた手で、彼女の母の描いた最期の絵を握った。
軽く握った積もりなのに、緩衝材に指が少し食い込んだ。

もうすぐ夏が終わる。

短いと思ったけれど、長い、長い・・・途方もなく長かった夏が終わる。

そう思った。

■168　呼子鳥11

ひとりで歩いた渡り廊下を、今度もひとりで歩いた。
先ほどとは様子が変化し、今度は雨上がりの強い陽射しが彼女の体を射貫いていた。
酷く体が重かった。

何もかもを洗い流す贖罪の雨ではなかった。
中庭を通って、ルイと別れたエントランスまで進む途中、まだ地面が濡れていて、急速に乾燥していく様が目に入った。
直射日光があたる部分では、陽炎が立ち上っている。

糸遊、と言うのだと、シャルルがその現象を教えてくれたことがあった。
まぼろしのようで真実を歪めているだけのそれは、決して錯覚ではなく、空気の密度が不均一になるから生じる現象なのだと、幼いヒカルにまじめな顔で説明したときのことを思い出した。

雨が降り陽炎が立ち上り・・そして水蒸気はまた雲になる。
嵐を呼んで、それが過ぎればまた白い雲や青い空がのぞく。
地表で問答を繰り返す自分たちとは関係なく、季節は変わり自然現象は繰り返し、そして時は過ぎて流れていく。

ミシェルはそのまま、きっと、ジルの元に行ったのだと思った。
彼はジルの前でなら、シャルルと呼ばれてもミシェルで居られるのかもしれない。
そして繰り返している。
彼だけを見つめているのに、彼でない者の名前を時折呼んだのに、それでもなお、ミシェルを愛した母と過ごした時間を彼は繰り返している。
シャルルと呼ばれているのに、自分だけを見つめるジルに穏やかな微笑みを浮かべる。

それが演技だとは思えなかった。
あれが偽りだとは思いたくなかった。

煙草を吸って、冷たく観察するような視線しか寄越さないミシェルよりずっと・・・・生きているミシェルを感じた。
彼が彼であるために、シャルルが必要なのだ。
そう思った。

彼の深い苦悩に触れた気がした。
ミシェルが・・・・ルイを誕生させたことは決して良いことではない。
しかし、肯定できない代わりに否定もできなかった。
ミシェルが居なければ、ルイはここには居ない。

何が良いことなのか、最善のことなのかわからなかった。

自分が善悪を決めてはいけないと思った。

ヒカルは神の子ではない。
そして万能でもなく、正しいことばかりをしているわけではない。
間違いを繰り返すし、何も見えていないことを指摘されても気がつかなかった。

だからこそ。
だからこそ、自分にしかできないことがあると思った。

静かな空間を過ぎると、エントランスに出た。
ルイと先ほど別れた場所だった。

そこには、入邸を待つ者のために用意された、ソファがあった。
それほど大勢は座れないが、いつでも使用できるように配置されていた。
先ほどの合図のための薔薇は、そこにも飾られていた。

ジルがここまでやって来ることはないはずなのに、彼女に普通の環境を与えている彼らの配慮が少し苦しかった。
ごく自然に。
彼女が夢幻の世界で不便がないように。
流行は取り入れず、質素だけれども品の良い調度品ひとつひとつは、ひょっとしたら、シャルルやミシェルの母が愛用していたものなのかもしれない。
それらは花瓶一つとっても、古くささは感じなかったが、真新しいものではなかった。

ほとんど来客も居ないはずなのに、綺麗に整えられた細かい刺繍の入ったソファに座っている人物に、ヒカルは声をかけた。

そこに、いる気がしたから。
だから驚かなかった。

「・・・・シャルル」

先ほど別れた人物と同じ顔立ちの人物に、ヒカルは声をかけた。
夏の陽射しの中で見るシャルルはひどく美しかった。

間違いなく、シャルル・ドゥ・アルディだった。
間違えようがない。
ミシェルとたいそうよく似ているけれど、彼ではない。
白金の髪も、憂いのある青灰色の瞳も、深い双眸も、何もかもがまるで違って見えた。
彼の背に乗った歎きが見えるようだった。

彼はソファに座って考え事をしていたようだったが、やがてヒカルの気配に気がつくと、顔を上げた。

「やぁ、ヒカル」
シャルルは微笑んだ。
先ほどの、ジルに見せた、ミシェルの微笑みと同じような、穏やかな微笑みだった。

「ルイは？」
「一度屋敷に戻ると言って帰った。ヒカルにそう伝えてくれと伝言を受けた」
シャルルが帰らせたのだと思ったが、ヒカルは、そう、とだけ言った。

数歩離れて待機していた使用人に彼は軽く手を挙げた。
ヒカルに、座ったら？と言って、彼の目の前のソファを進めた。

「隣に座って良い？」
ヒカルは正面に座れと言った彼にそう言った。
シャルルは二人がけのソファに沈んでいたが、少し眉を持ち上げると、どうぞ、と言った。

ミシェルはいつも一人がけのソファにしか座らない。

そして彼女と向き合った位置には座らなかった。
でも、シャルルはヒカルに正面に向き合えと言った。
それなのに、ヒカルは隣が良いと言った。
このことを、シャルルがどう考えているのか・・・・

ヒカルにとっても、それは変化だった。
彼女はシャルルの提案を受け入れなかったことはない。
これまでは誰もと同じ距離で座ったのに・・・今度はシャルルの隣に座ってみようと思った。
何の気なしに言ったわけではない。
彼の隣には・・・いつも、誰かが居るような気がしていたから、ヒカルは決してシャルルの隣に座りたいと言ったことはなかった。
それがシャルルがこよなく愛する人だけが許されている場所だとわかっていたのに。

ヒカルは、そこに腰を下ろした。
柔らかいソファが少し動いて、シャルルが瞬きをした。

息を潜めて・・・二人は会話を始めた。
ヒカルは、シャルルの顔を見ないで話を始めた。
ミシェルがそうしたように、話をそらすのではない。
彼がどうして光を灯さずに話をしたのか、意味があると思った。

ヒカルは。
ミシェルとシャルルとルイと同じ顔立ちの者の容貌に惑うことなく、彼らの声を聴いてみようと思った。

「・・・ミシェルに会った」
それですべてがわかったようだ。
シャルルは、背凭れに深く沈み、長い脚をゆっくりと組んだ。
その腿の上で、両手を組み・・・ゆっくりと、目を瞑った。
「そう」

いつもヒカルがそう、と言っていたことが不本意だった。
しかし、今度はシャルルが「そう」と一言だけ呟いた。

「ミシェルは私とルイを郭公と言った」
それで全部が伝わったと思った。
ヒカルは膝の上に絵を乗せ、そして二人の目の前に置いてある小さなサイドテーブルの上にラッ

プトップを置いた。
バッテリーが切れて、すでに振動を伝えなくなった銀色の箱は、静かに音も立てずに乗ったままだったので、ヒカルの髪が揺れる僅かな音や、衣擦れの音だけがシャルルの耳に飛び込んできた。

こうして、彼女の姿を見ないまま会話をすると・・・あの人と話をしているような錯覚に襲われそうになることが怖かった。
だから彼女を決して隣に・・彼の視野に入らない場所に置かなかった。
ヒカルをヒカルと認識できなくなるのが怖かった。
怖い。
シャルル・ドゥ・アルディであるのに、怖いと思う。

何が怖いのだろうか。
ヒカルを違う名前で呼ぶことか。夢幻の世界に入り込んでしまうことか。
あの人を忘れられなくて、代わりでよいから抱いていたいという仄暗い欲求を抑えられないことか。
それとも・・・それとも。
実現しないことは想定しないはずなのに。
シャルル・ドゥ・アルディは、あり得ないと定めたことを想像してしまう。

彼女が隣に座るということは、そういうことなのだ。

「郭公はね・・・別名、呼子鳥とも言われている」
シャルルは低い声で言った。
何かを話していなければいけないと思ったかのように。

ヒカルは、シャルルがどうしてここに居るのか察しがついた。
ルイと同じように、ミシェルが居るから、中に入れなかったのだ。
それでも、彼はここまで来た。
ルイと一緒に行け、と言ったのに、シャルルは頃合いを見計らってやって来た。

「国や文化によって聞こえ方が違うが・・・あの啼き声が、乞う、と聞こえることからそう呼ばれているらしい。子が親を呼び叫ぶ鳥なのか・・・それとも親が子を呼ぶ叫びなのか・・・何を乞うのかな」
シャルルは小さくそう言った。

だからね、郭公はヒカルとルイだけじゃないよ、とシャルルは言った。酷くもの悲しい声音だ

った。
その「郭公」という発音そのものが・・・ヒカルには『乞う』と聞こえた。
シャルルは一体、何を乞い願っているのだろうか。
彼も、呼子鳥なのだろうか。

■169

「ルイはどうしたのと、聞かないんだね」
「シャルルはどうしてここに居るの、と聞きたい気持ちと同じくらい聞いてみたいわよ」
ヒカルがそう言い返したので、シャルルは軽く笑った。

「なるほど。ヒカルは大人になって・・・口が達者になったらしい」
あの人に似ているよ、とシャルルは言った。

「ルイもシャルルに良く似ているわ。勝手に帰ってしまうところとか」
私の荷物を乗せたままなのにね、とヒカルは小声で言った。

ヒカルがあの人に似ている、と言われることは、昔は誇らしかった。
でも今は酷く胸が痛む。

彼は眩しいくらいの白いシャツに濃い暗紫色のパンツだった。
細身の紐靴は真新しかった。
オフの時の服装だったが、彼はここに訪れるときには、きっと、ジルを刺激しないように年齢を感じさせない服装を選んだのだと思った。
ジルの中では・・・まだ若いシャルルの姿しかないから。
そして、ヒカルの母への愛が成就したシャルルが、彼女の中では現実のシャルルだから。
しかし今日はミシェルが居ることを知って、ここで待機していたらしい。
ルイから事情を説明されたのかもしれない。

「・・・・ルイのことは聞いただろう」
「・・・うん」
ヒカルは俯いて、低い声で肯定した。

「彼は薬を常用している。・・・先ほども薬を処方したら、分量を増やせと言われた」
「処方してるのはミシェルじゃないの？」
ヒカルが驚いて尋ねる。

シャルルは嗤った。

「ミシェルはルイが発症するかどうかを経過観察しているのだから、そんなことをするわけはないだろう」
「彼は・・ルイは、どうなるの」
「・・・ルイは自分でわかっているはずだよ。最新の解析技術に携わる研究者でもあるから・・・彼はこの病が、遺伝的要素でもあり、後天的にも陥りやすいことも。
何が引き金になるかわからないが、その日が近いのではないか、と思っている」
彼はどんどん追い詰められている、と思った。

「誰もが陥る病ではない。これはアルディ家のような・・血が濃い者が多く集う家系に見られる遺伝病と変わらない。外的要因もあるけれど、それが誘発されやすい体質、と言ったら説明にならないか」

アルディ家には問題が多い、とシャルルは言った。
精神疾患も多いし、早世する確立も高い。
そしてシャルルの母親は白血病で死んでいるから、親族にはその因子を持っている者も居ないとは限らない。
これほど近親婚が多いのに・・・結局、彼らは彼女を救えなかった。
今では確実ではないけれども、幹細胞から治癒できる方法も確立しつつあるというのに。
それが今でもシャルルとミシェルに深い影を落としている。

「・・・ヒカル。ヒカルが悩むことはない」
シャルルはそっと言った。
彼女の方を見なかった。
愁いを帯びた横顔がとても・・・初めて会った時のシャルルを思い起こさせた。

どうして彼女を遠ざけようとしたのか、どうして彼女を呼び寄せたのか。
ヒカルはシャルルの行動が、叶わぬ愛を求めて苦しんだ結果だけで起こしたものなのではないと知って、眉根を寄せた。

彼が若い頃に滞在した貧困の国では、伝染病が蔓延していた。
今でも世界では原因究明と同じくらい治癒を優先しなければ滅んでしまいそうな程に急速に広がっている病もある。
難病と言われて、拒絶されない細胞を移植しなければ再生できない者もいる。
それもヒカルが居れば救える。
きっと、シャルルとルイなら、数少ない卵細胞だけではなく他の髄液や別の部位から何かを見い

だす事ができると思う。
シャルルとミシェルの母のような病だって、ドナーからの移植を待たなくても良くなる。
移植をするためのこどもを産もうと決断する家族の憂慮も減る。

「ジルに会わせてくれなかったのは、シャルルがそうした方が良いと思ったから？」
「いや・・・ジルがそうしてくれと言ったから」
シャルルは答えた。

「私、何にも知らなかった。何にも・・・知らないで、勝手に悩んでいたわ」
ヒカルは自嘲的に笑った。
「ヒカル、そういう言い方はよせ。ヒカルに責任があるわけではない」

ヒカルはその言葉に応えなかった。
「・・・シャルルがどうしてルイに父としてというよりもむしろ、同じ人として接しているのか気にはしていた。
時には年齢差もなく、彼を遇した。それは・・・・ミシェルが居たから？」
「・・・ルイはアルディ家の次の世代を担う者だ。母が居ない。・・・でも強く育って欲しい」

本当は違う、とシャルルは思った。
彼女は婉曲に言ったが、本当は・・・
シャルルはひとりの男として、ルイに接していた。

ヒカルを侮辱する者は許さない。
ヒカルを泣かせる者は許さない。

ジルも去った。
彼の異母弟も今は遠くに居る。

ヒカルは彼が今現在、唯一愛でている存在だ。
愛するあの人の一人娘であるヒカルだけに、シャルルは無償の愛を捧げることができる。

そして・・・シャルルは父としての愛し方を知らない。

彼が若い頃に父は死んだ。
厳しい人だったが、シャルルをかわいがった。
しかし・・・ミシェルという弟が居ることは最期まで父の口からは聞けなかった。

母がどんなに、シャルルでない者の名前を呼んだとしても、父は、それは気の病から生じる幻なのだ、と言い張った。
シャルルは父がわからなくなった。
それほどまでに、家族より一族を優先させる父が、自分に対して与えた、愛だと思って居たものは・・実は違うものなのではないかと疑った。

ルイといつか、ヒカルの処遇を巡って争うことになると簡単に予想できた。
ルイは自分の出生と同じ過程で生まれた彼女を無視することができない。
そして、どうしてシャルルがヒカルに対して愛を注ぐのに、ルイにはそうではないのか、理由があると疑っていた。
最初から。
それが単に、認めていない勝手に生まれてきたこどもだから、というだけではないことも、聡いルイは知っていたから。

距離を置くしかなかった。
いや、距離を置きたかったのだ。

自分と同じような容姿を持つのに。
自分と同じような容姿を持つから。

誰からも愛されないということは不幸だとシャルルは知っていたのに。

またか、と思った。
また、同じ血を持つと否が応でも認識しなければならない者が出現したと思った。
彼らは・・・自分も含めて良く似ている。
気質も容姿も環境もほとんど同じだ。
だからわかりあえるだろう、と言われて、シャルルはひどく傷ついた。

同じ血なら愛せるだろうと言われた気がした。

そうではない。

違うから。自分と違うから、愛したいと思うのだ。

あの人を愛して、そう思った。

■170

愛するということについて、「青春の輝き」の時代に、彼は「魂の試練」だと答えたことがあった。

好きで好きで、愛しすぎてしまった。
過ぎたるは及ばざるがごとしとよく言ったものだと思う。
愛しすぎたから、愛し抜くことができなかった。
彼女をひとりじめできなかった。
だから、彼女を解放して、彼に返してやった。

それ以降、彼が業火に灼かれるほどの苦しみを味わうことは、わかりきっていたのに。
それでも後悔しなかった。

・・・なのに。それなのに。
今は、どうだろう。
目の前に居るあの人の娘を見て、シャルルは苦悩と後悔で惑溺していた。

苦渋に満ちた表情をするヒカルは、彼が愛したあの人の年齢を越していた。
ちょうどヒカルくらいの年齢の頃は、あの人はヒカルの父との婚姻話が持ち上がり、幸福の絶頂を迎えていた頃のはずだった。

幸せを願ったのに、幸せを耳にすることを疎んじた。
その結果、あの人が密かにパリを訪れて、シャルルに黙って治療をしていることに気がつくのが随分遅くなった。
聞きたいことだけを聞き、そうでないものには目を瞑った。
彼がいつか、長い眠りについて、そしてあの人に呼び起こされたときもそうだった。
自分は、あのときから変化していない。進化していない。

シャルル・ドゥ・アルディであるという誇りはあるが、それだけが彼を生かしていると思った。

「ヒカルが生きている。それだけで良い。それだけがオレの・・・今の喜びだ」
シャルルはぽつりとそう言った。
隣に並ぶ彼女の、柔らかな香りに眩暈がしそうになる。
呼吸をするために僅かに動く振動が彼を刺激する。
青灰色の物憂げな瞳を反らして、下を向いたまま彼は呟いた。
ヒカル、どうして戻って来た。
「・・・これ」

ヒカルがそっと・・・持っていたシャルルに包みを渡した。
大事そうに抱えていたそれを、シャルルは受け取った。
そして中身を確認しようとはしなかった。
「今、見て欲しい」
ヒカルが静かにそう言ったので、シャルルは少しの間、その包みを眺めていたが、やがて神経質そうな指で梱包テープを解き、元の形状に戻るまでに時間がかかりそうなその大きな画材用紙の端を持ってゆっくりと広げた。

一瞬。

静かな広間に緊張が走った。
彼の指先が僅かに震えていた。
呼吸を忘れてそこに描かれたものを見入っている。
久々に見る、彼の考え込む姿だった。
あの人は彼のこの様子を「発作」だと言ってしばしば笑った。
そして、それほど無防備になるなと忠告した。
けれども、彼は、そのまま・・・無幻症の状態とは違う、幽玄の常闇に紛れ込んでしまいそうになっていた。

驚愕しなかったといえば嘘になる。
確かに、シャルル・ドゥ・アルディは驚いていた。
手に持ったときに、それが何であるか、大体予測はついていたのに。
それでも・・・それを見てしまった。

ここで、見ることになろうとは思わなかった。

ああ、あの人の娘は、あの人と同じように・・・予測不能だ。
シャルルは少し微笑んだ。

そして、かなり年代が経過している、あまり質の良くない用紙に描かれたそれを、シャルル・ドゥ・アルディは、しばらく無言で眺めていた。

両腕を広げたので、脇に座ったヒカルが少しだけ体を動かした。

それだけでも、彼は苦しい。
それだけでも、彼は辛い。

耐え難い激情の波を、鎮めることが出来ない。

このまま・・・彼女をシャルルと同じ無間の世界に連れて行ってしまいそうになる。

「・・・母の遺作よ」
「ミシェルとルイだね・・・」
ヒカルが声を漏らして驚嘆した。
「シャルルはわかるの？」
「ヒカルはわからなかったの？」
シャルルは苦笑した。
ヒカルが、息をのんで、うん、だいぶ時間がかかってしまったと言った様子があまりにも幼かったからだ。

彼女はまだ、大人と少女の迫間に居る。
そう思った。

「種明かしをすれば。この絵のことは知っていた」
「え？」
「この絵を預かっていたのは、スズノヤ氏だろう？・・・彼女から、昔、絵の画像を見せてもらったことがある。この正当な持ち主かモデルにこの作品を引き渡したいと思うのだが、と相談されたことがあった」
本物を見るのは、これが初めてだけれどもね、とシャルルは前置きした。
ヒカルは、肩で息をついた。
よほど驚いたらしい。
シャルルは薄い唇を歪めた。

「オレはそのまま持っているように、と助言したまでだよ。彼女はオレだと思って居たようだったけれど、法定相続人のヒカルに持たせてやるのが一番だろうと言った。
そして、それは彼女からヒカルに直接渡して・・・最期のあの人の様子や言葉を聞かせてやるのが、一番この作品に意味があることがだから、と言った」
長い時間がかかってしまった、とシャルルは呟いた。

彼女が最期に伝えたかったことが、シャルルの絵ではなく、ミシェルとルイであることの意味を、シャルルは考え続けたに違いない、とヒカルは思った。
家族が欲しいと願ってやまなかった、肉親の情に恵まれなかったシャルルが、ようやく彼の家族を得ることができた。
嵐のような「青春の輝き」の時代を通り抜けて、シャルルはミシェルとジルとルイを得た。

良く似た彼らは、何もかもを共有している。
負の因子も、薔薇の輝きも。
急いで大人にならざるを得なかった彼らを見て、マリナ・クロスが・・いや、マリナ・イケダが、「ミシェルとルイ」というモデルを通して・・・様々なことを伝えたかったのだと思った。

大人になった彼らと、次世代の若い薔薇の苗木。
微笑むミシェルとルイの愛が、目に見えて光の中で煌めくように。
そして、それを見つめる誰かの視線で描かれたその絵は・・まさしくシャルルのために描かれたものだと思った。
ヒカルには、絵の才能も知識もない。
けれども、一生懸命・・様々な意味を込めて、その絵をあの人が描いたのだと思った。
ミシェルとルイが本当の親子関係であるというだけのメッセージではないように思った。

「・・・これは、シャルルに見せたかったのだと思う」
ヒカルは言った。
違うかも知れないけれど、そうに違いないと思いたかった。
いや、きっとそうだと思った。
「そうだね」
彼は微笑んだ。
低く良く通る美しい声で、ヒカルに囁いた。
画像でははっきりとわからなかったが・・・絵の隅に、隠し文字が入っていた。
シャルルはその部分を、震える指先でなぞった。

晄輝く部屋の中で、微笑みルイを抱き上げる、白金の髪の美しい男性と・・・黄金の髪の良く似た彼らは、本当に幸せそうだった。
物憂げで上品で、それでも冷たい印象のない・・・静かで穏和な双眸で、互いを見つめ合うその様は、見る度にヒカルに違う衝撃を与える。

それは絵が変化したからではない。
彼女が変化したからなのだ。

そして・・・ようやく。
ようやく、これをシャルルに渡すことができた。

ヒカルは大きく息を吐き出した。

本当ならば・・彼はひとりで、ここが彼の居室であるのならば。
彼はゆっくりとこの絵を何時間もかけて眺め・・時間の経過を忘れてそのまま無我の境地を味わったことだろう。
それでも・・・シャルルはそうしなかった。
傍らに、誰よりも慈しむべき、この絵の作者と同じ魂を持った者が居るから。

何度も泣いた。
何度も嘆いた。
何度も・・・あの人の居る処に行こうと思った。

けれども、その度に眩しい光を思い出した。
昶という、永遠の光と名付けられた愛おしい人の娘を幸せにしなければいけない、と思った。
最高の教育を与え、彼のありったけを注いだ。
唯一、彼女だけに。
シャルルはそういう愛し方しかできない。
唯一をひとりの人だけにしか注げない。
それ故に、倖せになれない、配分されない者が居たとしても。
それが彼の贖罪だと思った。
これは彼が招いた事だとわかっていた。
自らの度が過ぎた愛によって、自分ではない他の者が滅されていくことを黙認した。

シャルルはそっと息を吐いて、ゆっくりと絵を元通り梱包した。
「これはヒカルが持っていなさい」
「本当の持ち主は、シャルルだと思う」
ヒカルがそう言ったので、シャルルはくすりと声を漏らして笑った。

「それなら、これはヒカルが預かっていてくれないか」
「預かる・・・？」
「そう。オレがいつか、取りに行くから。それまで、ヒカルが持っていて、大事に保管して欲しい」
シャルルの言葉に、今度はヒカルが声を詰まらせた。
取りに行く・・・

シャルルはヒカルと離れて過ごすことを前提として話を進めている。
自分はここに居るべきでないのだ、とシャルルが遠回しに言っているのだと悟った。

茶色の瞳を瞬かせて、ヒカルは微かに震える声で返事をした。
差し出されたそれを受け取り、今一度彼女は自分の胸に抱いた。
「わかった。これはいつか・・・アルディ家の美術管理庫に入るべき品だとして、私が責任もって預かります」
毅然と言い切ったその様に、シャルルは満足そうに頷いた。

彼女は大人になった。
微笑むその姿は、あの人そっくりだった。
いや、彼女の父の色も濃く出ている。
優しい暖かな微笑みが、今は眩しい。

彼女はこんなにも美しかったのだ。

シャルルは目を瞑った。
これ以上、見つめることができそうになかった。

あの人の名前を呼んだ。
小さく呼んだ。

あなたの・・・あなたの娘はこれほど美しく強く育った。
素直で誰かを思い遣る心を忘れず・・・それでいて屈しない強さを持っている。

「当たり前でしょ、私とカズヤの娘なのよ！」と彼女は笑い飛ばすのかもしれない。

シャルルは胸に込み上げるものを抑えた。

尋常ではない話を聞いたばかりであろうに、彼女はそれを受け入れている。
しかも、自分で確かめるまでは決して・・・抗ったり受け入れたり軽はずみな判断をすることを避けている。

彼女の稀なる体質が欲しいのではない。

この家の者達は・・・みな、彼女の心が欲しいと競って願う。
それがなぜなのか、理由は様々であるけれども、この健康で強くしなやかな魂を誰もが欲するのは、当然のことなのだろうと思った。
病んだ薔薇の蔓は健康な苗に縋り付く。
若木は決してそれに爛れずに自らの命を燃やしながら成長していく。

時に、病株が・・・そのまま朽ちたとしても、それすらも糧にして育っていく。

それでいいと、思った。
シャルルは、長く生きすぎた、と思った。

ヒカル。
おまえはおまえの人生を生きなさい。

「空港まで送っていく。・・・日本に帰れ」
シャルルはそう言って、自らに言い聞かせるように立ち上がった。
これ以上、彼女の傍近くに座っていることが辛かった。

あの絵に触れていることも。
ヒカルと同じ空気に触れていることも。
何もかもが・・彼を大きく揺り動かす。

夏の陽射しが戻り、先ほどの嵐が嘘のような晴天が戻って来た。
静かな館の中でさえ、今年最後の夏の喧騒が漏れ聞こえてくる。
通り雨の名残の・・・少しだけ涼しくなった風が吹き付ける音がした。

いつまでもここに居るわけにはいかない。

「シャルル」
ヒカルは立ち上がったシャルルにあわせて、顔を上げた。
待って、と言って彼の腕を掴んだ。
ぴくり、とシャルルが腕に力を入れる。
唇を少し噛んだ。

・・・何てことだ。

彼は内心失笑していた。
自らを嘲った。

彼は、彼女に触れられて、ひどく狼狽していたのだ。

・・・・彼女に惑うなんて。

自分はシャルル・ドゥ・アルディであるのに。

惑う。

その言葉は正しくない。

シャルルは、ヒカルの顔を見ないように、遠くを見つめたままだった。

わかっている。

自分は・・・自分は・・・

その時のことだった。
ヒカルが慌てて、早口で言った。
「待って。私はまだ、行くところがある。シャルルと行くところがある。だから、まだ帰らない」

彼女が「帰る」と言ったことが少し悲しかった。
日本に帰ると彼女が言う言葉は、あの人が帰ると言った時と同じくらい鋭く・・・・彼の胸を刺した。

鋭く一瞬だけのはずであったそれは、張り裂けそうな痛みを伴った。

「どこに？」
シャルルは答えがわかっていたのに、尋ねた。
ヒカルは彼の言葉に回答する前に、立ち上がった。
小柄なあの人より、ずっと背の高い女性が、彼の脇に並んだ。
そして・・・そして、柔らかく美しく悲しそうに微笑む。
ヒカルはこんな微笑みをする女性だったのだろうか。

苦しみも。哀しみも。何もかもを共有した小さな天使であったはずのヒカル・クロスは、
両手に絵を抱えたまま、言った。
その言葉に、シャルルは逆らえなかった。
フランスの華である彼が。

自分よりずっと年若いヒカルに魅入られて・・そして今度は視線を反らすことができなかった。
わかっていたから、目を合わせることが出来なかった。

彼女の引力に逆らえない。

手のひらからこぼれ落ちる光を惜しんだのに。
彼は今・・その光を漏らさず掬い上げることを躊躇った。
自分から解放した光の粒子を、今一度、彼は拾い集めようとしたことを、彼女に知られてしまったのではないかと思った。
心の内を隠すように、彼は無表情にヒカルを見た。

茶色の瞳の茶色の髪の人は、シャルルの青灰色の瞳を見据えながら言った。

「シャルルと私が行っていないところ。
　大人になってから行っていないところ。
　あの事故現場の海に。
　行こう。
　シャルル。行こう」

■172

ヒカル・クロスは言い出したら、それをなかなか撤回しない。
それは彼女の母譲りであった。
彼女の記憶の中には、そんな思い出が眠っているのだろうか。
幼い時に別れてしまったきりの母親に似ている箇所をヒカルの中に見つけると、シャルル・ドゥ・アルディは嬉しくもなるし、同時に切なくもなった。

こうして、自分は未だに探し続けているのだ、と思うと・・・・
思い切れない自分の想いに対処することを放棄してきた報いがこの有様だ、と痛感する。

彼女を捜して。
彼女の面影を探して。

それなのに、シャルルの「運命の人」は決して姿を現さなかった。
どんな姿でも良い。
生きていてくれれば良い。
たとえ、死んだとしても、そこに自分が行き着けば良いのだから、せめてどこにいるのか教えてくれ。

そういう狂気にも似た願いを持たなかったかと言えば嘘になる。

消えていなくなるのは、違背しているよ。
シャルルはそう思った。

彼はヒカルの申し出を断ることができない。
それを彼女はわかっているのだろうか。
たとえ、ヒカルがシャルルにとって、死ぬより辛い残酷なことをねだったとしても、彼は逆らえない。

ヒカル。
ヒカルの存在が・・・苦しい。
ヒカルと一緒に居ることが、死ぬより辛い。
どうして、わかってくれないのか。
それでも、こうして吸い寄せられるように彼女から目を離すことが出来ないのに。

シャルルは軽く溜め息をつくと、そのまま体を動かして、傍にあった内線電話の受話器を持ち上げた。
コールするには決まったボタンをプッシュしなければ繋がらないようになっていた。
彼は彼だけのホットラインに繋がる番号を、神経質そうな指先で押した。
コール音なしに繋がる。
名前を名乗らなくても、彼がシャルル・ドゥ・アルディであることは、相手にはわかっていたようだった。
それほどまでのセキュリティを備えた、古風に見える館の中で・・彼は背中を向けているのに、当主であることを全身で主張していた。
ややあって、回線が繋がると、彼は低い声で、簡単な指示をいくつか出した。
受話器を置く音さえ大きく響き渡る静かな空間で、彼は背中を向けていたヒカルに振り返った。

「準備して・・・これから出発するから」
「何も用意するものはないわ」
ヒカルは微笑んだ。
そして小さく、ありがとうと言った。
我が儘を聞いてくれてありがとうと言った。

「これから行く先は・・少し離れた場所だ。戻りは遅くなる」
「はい」
その場所は頭の中で完全に記憶してしまっている。

忘れようもない。

―――ヒカルはシャルルとの最後の訪問になる、と確信していた。

ヒカルがパリに来て、何度かそこに行ったことがある。
そして、彼らの遺族が訪れた時にも案内したことがある。

しかし、シャルルは結局、あの焦土に足を踏み入れて、何が起こったのかを推測することが最後までできなかった。
車の中で、離れた場所で・・・じっと、青灰色の瞳で眺めているだけしかできなかった。
足を踏み入れれば、あの日のことを思い出してしまうから。
あの焼け焦げた匂いや、人々の驚歎する叫びや・・・生暖かい風を思い出すから。
そしてそのまま、帰ってこられなくなった世界の闇に簡単に堕ちてしまいそうになるから。

妻として定めようとした者の存在などは瞬時に忘れ去ってしまった。
ただ、あの人との最後の会話を繰り返し・・・・繰り返し思い出していた。
そのうち、何を話していたのか、困惑するようになった。
本当に話をしていたのか、彼の願望なのか、それとも夢なのか。
彼は、これは夢だと言い聞かせてみた。
彼は夢を見ないのに。
一生分の夢を見たと言い切ったのに、彼は夢だと思うことにした。

その時のことを思い出すから。
遠方だったこともあった。しかしそれは理由にならなかった。
単に・・・そうだ。
単に、彼女と一緒にそこに行くことができなかった。
そこに行けば、あの人の死を受け容れなければならないから。

パリに住むようになったヒカルにも、積極的にそこに行って鎮魂してこいとは言わなかった。

「後悔しないね？」
彼はそう言った。ヒカルは笑った。
「なぜ？初めて行く場所でもないのに」
彼女が言っている言葉は正論であったが、それでもシャルルは念を押した。
戻って来たら・・・これまでのヒカルでは居られない。
これまで通りと言って、懐かしい再会を味わうこともない。
何かが変わることは確かだった。

それでも、ヒカルは朗らかに笑った。

「シャルル。行こう。私達は・・・私とシャルルはそこに行ったことがない。この季節に行かなければいけないのに、目を反らしていた」
シャルルは微笑んだ。
彼女の申し出が酷く痛ましかったからだ。
ヒカルは、まだ幼かった。だから、あの惨状を知らない。写真や伝聞で知識としては得ていたのだろうが。
それでも・・・シャルルが目の当たりにしたあの惨事を、ヒカルと共有しようとは決して思わなかった。
その責は、自分ひとりだけが負えば良い。
そう思っていた。

「車が到着する。・・・狭い小道に入るから、運転手付きのリムジンではなく、オレが運転しよう」
シャルルの運転はあやしいわ、とヒカルが笑った。
その笑みに誘われて、シャルルも微笑んだ。
どうして彼女はこうして・・・彼を穏やかな気持ちにさせるのに、その一方で、彼を落ち着かなくさせるさざめきをもたらすのか。

それは、かつて感じたあの人への憧憬と同じだった。

あの人はシャルルを落ち着かなくさせる。
怠惰な自分の日々を、あの人は・・・一瞬にして新しく塗り替えてしまった。
だから、あの人と一緒に居れば自分は新しく生まれ変われると思った。

愛しているという言葉だけでは足りない言葉と賛辞を、あの人に捧げた。
唯一ひとりだけだと定めた。
どんなに愛していると叫んでも、決して結ばれない人だった。
来世があるのであれば、そこで巡り合いたいとさえ・・・そういう宗教的な価値観が違うシャルルに・・・・そう思わせるほどの人だった。

けれども、ヒカルはどうだろう。
今を生きろと言う。
そして、彼にその闇から抜け出して・・・彼にこちらに来いと大きな声で命じる。
彼はいつも晄に誘われて惹かれるようにそこに到達していたのに。
彼女は。

ヒカルは。
そこに、自らの意思で来い、と言う。

失いたくないから。

愛しているからと言う言葉は、あの人からはとうとう聞くことが出来なかった。
けれども、ヒカルは違った。
あの人と同じ魂と同じ容姿を持つのに、ヒカルは失いたくないと言う。
これが何を意味するのか。

シャルル・ドゥ・アルディはとうにわかっていたのに。

気がつかないことにしようと決めていた。

■173

車を用意するまで、少し時間がかかると言われたので、そのままそこで待つことにした。
気まずい雰囲気が流れる。
気まずい。
シャルルと一緒に居て、そんなことは今まで全く感じたことがなかった。
ヒカルは言葉を選んで、目の前の佇む美しい人に声をかけた。
言葉を選ぶ。
ヒカルが、言葉を選んでシャルルが何を考えているのか推し量る。
そんなことを気にすることは決してしなかったのに。

彼も同じように、ヒカルと視線を合わせようとしないで、しきりに外を眺めていた。
それほど時間の経過はなかったはずなのに、酷く長い時間を待たされたような気がした。
大人になると言うことは、こういうことなのだろうか。
ひとつひとつの過程が短く感じるはずなのに。
ひとつひとつの過程が長く果てしない時間に感じる。

彼もこんな風にして・・・長い時間を過ごしてきたのだろうか。

わからなかった。

嵐が通り過ぎて、外はすっかり夏の陽射しであった。
雨上がりのために湿度があがり、いつものパリの冷涼な空気ではなく、高温多湿の日本の夏に

近かった。
それがシャルルには耐え難い苦痛のようだった。

「ジルは・・・ジルはいつまであのままなの？」
いつか、彼女が崩壊することは目に見えていた。
ヒカルは今、それを尋ねなければならないということではないのに、自分とシャルル以外の人物の話をすることで気まずさを紛らわそうとした。

狡いと思った。
自分は・・・この空気に耐えられないから、ジルを話に出した。
そんな狡猾なヒカルという人間は矮小だと思った。

彼女は、無幻症だ。
万全の医療体制でもって彼女を看護していると言い切れない。
彼女は・・自分の躰の不調がわからない。わかっていても言わない。
だから、ちょっとした体調不良が命取りになる。
第三者から見て「ちょっとした」体調不良に見えても、我慢強い寡黙なジルが不調を訴えるときは、もうすでに遅いのだ。

シャルルの母親もそうだった。
気がついたときには手遅れだった。

シャルルはこちらを見ないで、静かに言った。

「ヒカルが心配することはない」
「でも」
「心配することはない」
彼はもう一度強く言った。
この家には関わってはいけないと、言われたようで、ヒカルは言葉に詰まった。

「・・・・ジルは大事な家族ではないの？」
ヒカルがぽつりと言った。
今まで、彼女の消息を尋ねることをしていなかった贖罪をここで詫びるかのように。
ヒカルはそう言った。
彼女が今までジルに逢えなかったのは、彼女の責任ではないのに、ひどく恥じていた。ひどく悔やんでいた。
それをシャルルが慰めたり、責め立てたりすることはできない。

なぜなら、彼も・・・ジルの状態をそのまま放置していたのだから。
彼女の治療を放棄したのだから。

ジルが発症したと聞いた時。
彼は、すぐさま治療をしろと言わなかった。
ジルが拒んだこともある。
あのころは。
彼女の治療をするには、ヒカルの生体細胞の提供が必要不可欠だった。
特に、細胞分化が烈しい骨髄か、未成熟の卵細胞の提供が必要とされていた。
どちらの採取も、こどものヒカルには非常に大きな負担になる。
大変な苦痛を伴う。
血縁者でもないのにドナー登録をさせるわけにはいかなかった。
それでもなお、完治するかどうかわからないジルを優先させることを躊躇ったのは、シャルルにも原因がある。
これを後悔しているわけではない。
結局、ジルが治療拒否をし、同意書にサインをしなかった。

「家族だから、優先させてやりたいこともある」
シャルルは低く言った。
それが言い訳だとわかっていたが、どうにもならなかった。
それを言わせるヒカルの姿が・・・あの人の姿をかぶった。

昔、もう治療の施しようのない共通の友人を、助けてやってくれとあの人は言った。
そして彼はそれを実行した。
愛していたから。
彼女の願いを叶えてやりたかった。
友人の命を救うという行為より、あの人の泣く顔を見たくなかった。
それが最初の動機だった。

同じように・・・ヒカルは、ジルを助けて遣ってくれと言ったのなら。
自分はどうするのだろうかと思った。
あり得ない想定はしないはずなのに。
彼はその先を読むことができなかった。

そう。
彼女に関してだけは・・・・何手も先を読むことができない。
あの人の場合には、読むことをやめた。

想定外のことばかりするあの人に呆れて、興味を持った。
自分が怠惰な生活を送っていたから、あの人の新鮮な風に魅了された。
ヒカルも同じだ。
想定外のことばかりしでかす。
それなのに脆いと思えば強いし、強靭な精神だと思えばこうして脆弱な魂を曝け出す。

ヒカル。
オレは、繰り返すつもりはない。

シャルルはそう、心の中で囁いた。

「・・・あれはジルが望んだことだ」
「ジルが叶わないことを望んでいたとしても、叶えてあげるのが、シャルルの愛なの？」
ヒカルがそう言ったので、シャルルは少し低い声で言った。
「ヒカル。それ以上踏み込んではいけない」

■174

彼女の母は、彼に容易に踏み込んだ。
これ以上入ってはいけないという距離を超えて、彼に入り込んだ。
誰も、入ってこられなかったのに。
あの人が選んだあの男も入ってこられなかったのに。

ヒカルが同じ事をしようとするのであれば、シャルルはそれを拒絶するつもりだった。
意図してか、そうでないのかは関係ない。

もう、誰もシャルルに踏み込んではいけないと思っていた。
誰も・・・誰も彼を愛することも、彼から愛されることもない、と定めたから。
自分でそう決めたから。

恋人と呼ぼうと思った者も居た。
夏だけと決めて過ごす、狂気の贄も居た。

「叶うかそうでないかは、すべて彼女の選択であり願望であり、それをオレが裁定することはないよ」
シャルルは静かにそう言った。

ヒカルが悲しそうに眉根を寄せたので、その顔を見たくなくて顔を背けた。

「貴方は一体、いつまで背け続ければ気が済むのか」
とルイに言われたことを思い出した。

ああ、そうだ。

シャルルは。
シャルル・ドゥ・アルディは、何もかもから視線を反らさないと生きていけない。
夢のような幸せな日々を演出しないと生きていけない。
この薔薇の棘だらけの空間で、呼吸することができない。
唯一の、彼の唯一の晄だけが、彼を安らぐ空間に導くというのに。
彼はその晄を自ら捨て去った。

ヒカルは彼の言葉に何も返さなかった。
ただ、下を向いて、ぎゅっと、拳を握っただけだった。

シャルルは彼女の息吹を感じるだけで眩暈がしそうになる。
再会して・・・まだそれほど時間が経過していない。
本当なら、互いの息災を喜んで・・・これまでの時間を埋めるように一緒に過ごして・・・彼女の大人になった姿を微笑んで祝ってやりたかった。

成年の祝いに、昔に約束した、彼女の誕生石で創ったブレスレットを注文しに行こうと思っていた。
食べきれないほどのショコラを一緒にまた・・買いに行って持たせてやろうと思っていた。

本来なら、こうしてここに居るべきではない存在に・・シャルルはひどく狼狽していた。
彼はフランスの華なのに。
彼は狼狽している。
躊躇っている。
そして・・・後悔している。

それをミシェルやルイが愚かなことだと嘲っても、彼は未だに・・それらを捨て去ることが出来ない。
それはあの人が彼に教えたことだから。
それはあの人から学んだ事だから。

生きるということ。
謳歌するということ。
人の一生は一度きりで、そして誰も自分の代わりにならないこと。
瞬間を大事にすること。
相手を思い遣ること。
相手から望まれたいと思うこと。

すべて、あの人が教えた。
彼は知らないことが何も無いと思って居たのに、何も知らなかったことを知った。
これが、ミシェルとの覇権争いで大きく勝敗を分けあった要因だと思った。

「・・・・シャルル」
ヒカルは彼の名前を呼んだ。
彼は返事をしなかった。

「・・・・来た」

その代わりに、エントランスに排気音が流れ込んで、彼が手配した車がやって来た合図があった。
クラクションを鳴らしてはいけないと厳命していあったので、車体は静かに、エントランスに流れ込んできた。
真新しいタイヤは黒く漆黒に塗れていて、先ほどの嵐で濡れた路面を走ってきたことを示していた。
ホイールが回転して、銀色に光っていた。

シャルルは軽く手を上げて、運転手に交代を命じた。
彼が運転するのは・・・ヒカルのために車を走らせたあの夜以降のことだ。

「行こう、ヒカル。用意ができた」
シャルルは低く短くそう言った。

彼はヒカルを背にして、エントランスまで歩いた。
何も持っていなかったから、とても身軽だった。
扉が開き、外の空気が流れ込むと、彼の白金の髪がふわりと揺れて・・・
太陽光を正面に、彼の後ろ姿に眩しさを感じて、ヒカルは立ち上がりざま、目を瞑った。
シャルルは美しい。
何もかもが完璧だ。

それなのに・・・ヒカルはとてもその背中を悲しいと感じる。
どういうわけか、彼女が拒絶されたと思ってしまう。

シャルル。
私を拒否しても良いから・・・自分を拒否しないで欲しい。
自らを否定しないで欲しい。
彼の生きてきたこの空間を拒絶しないで欲しい。

シャルルは、シャルルなのだ。
アルディ家の当主という肩書きだけの人物ではない。

彼こそが、あの似た容貌を持つ人物を多く輩出する、アルディ家の頂点に立つ人間なのだから。

運転手から差し出されたサングラスを受け取った。
彼はそのサングラスを受け取って、無造作に身につけた。
これから彼が、眩しい晄の下を、贖罪のために照らされると宣言するかのように。
焼け付くような太陽光の下を、ヒカルという贖罪の娘とともに、流れ行くことを覚悟するかのように。

「行こう。ヒカル。・・・準備はできた」

彼はそう言った。
短く、ひとつひとつを、区切って言った。
それは宣言のようでもあった。

■175

シャルルはエンジンがかかったままの車をちらりと見つめた。
そして運転手から簡単な説明を受けると、そのまま車に向かう。
「ヒカル。・・・乗れ」

サングラスをかけると、その横顔は、ルイ・ドゥ・アルディに非常に良く似ていた。
ヒカルは、彼らの造作ではなく、彼らの冷たい何者をも寄せ付けない心根が似ていると思った。
素っ気ない言い方も、彼らは似ている。
これまで、ヒカルに対してそのような声音で話すことのなかったシャルルが、硬質の口調で短く指示した。

「オレの運転は荒いぞ。・・・久しぶりだから」
そして、彼は開けられた扉の中に吸い込まれるように消えていく。
配慮されていると思った。
シャルルは進行方向まで指示していた。
エントランス入り口側がヒカル乗っても良いように助手席側で、彼女は少し微笑んで、ありがとうと係の者に言った。
彼ら使用人はあまり話をしない。
そう教育されているからだ。
特に、この館の者達は、何も彼女に声をかけなかった。
居ないかのように振る舞う彼らに、ヒカルはありがとうと言って頭を下げた。
こうして静かにジルが時を過ごすことができるのは、シャルルやミシェルやルイが注意を払っているだけではないのだとヒカルは思う。
日本で暮らして、パリでの暮らしがいかに、平々凡々という言葉からかけ離れていたのかを知った。

自分は恵まれていたと痛感した。
そして無神経であったとも思った。
彼らは・・・静かに目礼をした。
「荷物は後ろに置け」
「シャルルの運転は荒いのでしょう？大丈夫？」
「それくらいの配慮はできる程度には」
彼が言ったので、ヒカルは声を漏らして笑った。
ようやく、微笑む気力が湧いてきた。
「乗れ・・・行くぞ」
繰り返さない彼がそう言って、運転席のミラーを微調整した。
僅かな事でも気になるらしかった。
車はベントレーのフライングスター・コンチネンタルGTCだった。
流線型の美しい形でありながら、悪路走行にも対応できる素晴らしいエンジンとボディを積んでいる。かつ、エンジン音がほとんどしない車内の内装は、乗ることを楽しむ車ではなく、乗る者がそうと感じさせない配慮がされたものであると思った。
ブラックの車体がひときわ美しく、夏の空を反射し紫外線を吸収していた。
それでも車内の空調は完璧で、ヒカルが乗って扉を閉めると、外音と完全に遮断された。
すぐにエアコンが作動し、室温の調整が完了するまでそれほど時間はかからなかった。
快適な温度と微風が流れ始めた。
車内は、アイボリーホワイトの白革張りだった。
シャルルが好みそうな内装だった。
どこまでも白いけれども・・・決して他に染まらない。

そんなシャルルの決意に似ていると思った。
まだ新しいので、革が馴染んでおらず、ヒカルがシートベルトを探して躰を捩ると、革の硬質な肌触りがして、少しソファが軋んだ。よく鞣してあったが、それでも真新しい感じがして、シャルルは後部座席に座ることはあっても、誰もこの運転席の隣の助手席には座らない車なのだと思った。

彼女の汗がひいて、少し肌寒いくらいだった。
シャルルの瞳と良く似た・・・アーモンド型の切れ長の瞳の様な窓ガラスはスモークが張られており、外の蒼い景色は、紫外線カットされて薄暗くなった。
ヒカルは窓の外に目を遣った。
先ほどの嵐の時のような薄暗さを感じて少しだけ不安になった。
あれが夢であれば良いのにと思わないが、あれが・・まだ、本当につい先ほどのことであったのかどうか、迷っている本能に戸惑っていた。

シャルルがヒカルが正面を見ずに、窓ガラスの向こうに気をとられている様を観察しているかのように、じっと・・・様子を伺っていることに気がつくと、ヒカルは慌ててシートベルトを締めた。
「お待たせしました。御願いします」
ヒカルはそう言った。
総革張りの白いシートに、彼女の茶色の髪が散った。

荷物は言われたとおり、後部座席に荷物を置いた。
転倒や移動防止のために敷かれたマットの上に、パソコンと・・・その上に、更に、遺品の絵をそっと置いた。

ルイの車とは違っていた。
彼らは・・・そう、彼らはこういう好みでさえ、かなり違う。
だから、決して彼らは・・・同じなどではない。

「少し時間がかかるぞ」
シャルルは低くそう言った。
スモークによって、車内はかなり薄暗いのに、彼はサングラスをかけたままだった。
白いシャツに青紫のパンツ姿の彼は、とても若く見えた。
ハンドルを、細くない指で軽く触れるだけの運転は、とても慣れており、彼が普段運転しないという話は本当は嘘ではないかと思ってしまうほど、彼は精通しているようだった。

「・・・シャルル、車の運転、慣れているのね」
「ヒカルよりかはね」
シャルルは静かに皮肉げにそう言った。
やがて、ゆっくりと車体が動き始めて・・・彼がどうして、自分で車を運転すると言い出したのか、ヒカルは何となく察した。

彼は、誰にも話を聞かれたくないのだ。

あの、静かな使用人達にでさえも。
彼がひとりで行動することはできない。
この車にだって、GPS機能が搭載されており、どこに居るのかはわかっているはずだった。
必要があれば、ハンドル下に小さく取り付けられた集音マイクで、車内の音響装置の操作のためではない音を拾って録音することだって可能なのだろう。

誰も傍に居ないという時間を、一体どれだけ彼が過ごしているのかと思うと、ヒカルは切なくなった。
どうして彼らは自由で居られないのだろう。
それが自由でないと言い定めるつもりはない。
でも、シャルルがそれを気にするような話をするつもりであり、そういう空間をあえて作り出さなければシャルルは自分の言葉を出すこともできないのだろうかと思うと・・・
ヒカルは自分だけがそこから逃げ出したと思わざるを得ない。

「ヒカルに責任はないよ、なにひとつ」
シャルルが前を向きながらそう言った。
館を出て、広い路に入り、一定の距離で走り始めて間もなくのことだった。
高速で走行しているにもかかわらず、車内は静かだった。
そして、シャルルも久しぶりの運転で緊張しているといった様子はなかった。

「ヒカルは・・・・ここに戻って来てはいけない。早く帰れ。日本に戻れ」
その言葉に、ヒカルは首を振った。
「イヤだ」
「アルディ家には留め置かないよ」
「良いよ。適当なホテルに泊まるから」
「そういう意味じゃない」
シャルルは小さく吐息を漏らした。

■176

シャルルにはカーナビもステレオサウンドも必要なかった。
彼はただ、静かに車を流していた。
軽く手の平を添えてハンドルを押さえるだけで、制御の効いた車体は自由に彼の意図を受け止めて自在に走る。
先ほどの館の中よりも近接したシャルルの腕の動きや、髪の揺れ動く様を見ていると、ヒカルはとても・・・先ほど以上に、彼を見つめていることが耐え難いほど苦しくなる。
自分で行きたいと言い出したことなのに。
しかし、シャルルがこうして自ら運転して彼女を連れ出すとは・・・予想していなかった。

そう。

彼はいつもそうだ。
彼女にとっては。

ヒカル・クロスの予想などはまったく的中しないくらい・・彼は想定外なのだ。

「ミシェルと話をしただろう」
それでわからないのか、と言いたそうなシャルルの口調に、ヒカルが反論した。
「ミシェルと話をしても何も変わらない」
「いいや、ヒカルは変化し続けている」
彼は短いけれども強い声音でそう断言した。
「ヒカルは決められるようになった。ヒカルは大人になった。それだけでも大きな変化であるのに。だからここに居てはいけない。
それに・・・あの現場に行っても・・・彼らには逢えないよ、ヒカル」
「私は両親に会いに行きたいと言ったのではないわよ、シャルル」
彼女がそう言ったので、シャルルは美しい眉を少しだけ動かした。
「・・・それなら、何をしに行くのか、きちんと答えてくれ」
彼は少しむっとしたように言った。
ヒカルの答えがなかったので、シャルルは辛辣に言った。
「ヒカルの耳は機能していないらしい」
「・・・しているわよ」
そういう稚拙な会話はやめてくれないか、とシャルルは唇を歪めた。
「ヒカルはもう大人なのだから」

「シャルル。大人と言ったり私を大人と認めなかったり・・シャルルの方が矛盾している」
「オレを父と呼んだり、シャルルと言い直したりする、生意気な娘に言われたくないな」
彼はぴしゃりとそう言って彼女を黙らせた。
「たんに余興で行こうと言うのであれば、すぐさま引き返す」
「違う」
ヒカルは慌てて言い直した。
彼はわかっているのに、あえてそう言っているのだと思った。
わざと・・・ヒカルを怒らせようとしている。
失望させようとしている。
そんな気がした。

「認定死亡だけでは満足しないの？」
シャルルがぽつりとそう言った。
「彼らが死んだかそうでないかは問題でない。ヒカルの元に、帰ってこないかどうかということだけだ」
彼は無表情にそう言ったが、その言葉通りのことだけしか考えていない、とはヒカルは思えなかった。首を振って、下を向いた。

「違うよ。・・・もう、そろそろ・・・そろそろ私は、あそこと訣別しなくてはいけないと思ったから」
「訣別」
彼は面白そうに復唱した。
「何から訣別するの？」
その言い方は、非常に・・・ルイに良く似ていた。
いや、ルイが彼の口調を真似ていたのだと思った。
「宣言しなくてはいけないことなの？」
彼は自嘲気味に笑った。
たった今、アルディ家から切り離せと言ったばかりなのに、彼女の言葉に腹を立てている自分が居た。
自らの宣言は高慢に言えるのに。
彼女から訣別という言葉を聞くと、どうにも・・・彼は酷く狼狽する。
そのままうやむやにする会話の術を知っているはずなのに、シャルルはどうしても彼女の言葉を撤回させたくなる。
何から訣別するのか。
シャルル・ドゥ・アルディからか。それとも・・・もっと別の人生への足がかりにするためか。
それも良い。
それでも良い。

彼女が選択する道を遮るつもりはない。
けれども・・・けれども。

相反する気持ちが彼を流そうとする。
わかっていた。
彼女が分かちたいと思って居るのは、アルディの絆ではないことをわかっていた。
それを実行したら、彼女と二度と会えなくなるだろうと思っていた。
それなのに、彼女にその言葉を言わせようとする自分は、酷く狡猾だと思った。

「それは後ほど」
ヒカルは微笑んでそう言った。
その場で決定することを避けた。
これまではそういう舵取りは、彼の役割だったのに。
シャルルは苦笑した。
自分より、ずっと幼い・・・少女と言えるような年齢の彼女に、うまくはぐらかされてしまった。
そして、今はアルディ家の当主自らが・・彼女の希望通りに希望の場所へ彼女を運んでいる。

「久々だね・・・シャルルと出かけるのは」
昔を思い出す、とヒカルが目を細めた。
彼女の瞳の色も薄いので、紫外線カットガラスが張られた車内でも、差し込む陽光が、相当眩しいらしかった。
「もう少しすると日が正面から当たらなくなる」
シャルルはそう言った。
少し休め、と彼は言った。
目を瞑るだけでもかなり効果があるはずだ。
彼女が疲労しているのは明らかだった。
若く健康な彼女が疲弊している姿は見て居たくなかった。

「訣別・・というより、蝉脱」
彼女は小さく呟いた。
それが先ほどの「後ほど」と言った言葉の続きだとわかったが、彼はその言葉から次の会話を始めることはしなかった。
聞こえないふりをした。

彼自身が自ら運転することは滅多にない。
気晴らしであったり、自ら独りで居ることを求めて彷徨うための手段であったりすることもなか

った。
ヒカルとの外出の時でさえ、彼は彼女に対する注意が散漫になることを避けて、決して運転してどこかに行こうと言わなかった。
だから、ヒカルが「シャルルと出かける」と言う表現を使ったことが少しだけ意外だった。

「ヒカル。少し眠っておけ」
「・・・そんなに酷い顔をしている？」
シャルルの忠告に、彼女が少し笑った。
サイドミラーに自分の顔が入り込むようになるかと思って躰を動かしたが、ベントレーは彼女の座っている位置からミラーをのぞき込むことができるほどの車高ではなかった。
ヒカルがそっと・・頬を押さえた。
白い指に、白い華奢な手の平が彼の視界に入った。

若者が好むような服装であったけれど、ヒカル・クロスは非常に上品でたおやかな印象を与える。
そのひとつひとつの仕草が、闊達なあの人とはまったく違っていたけれど、瞬きの速度や、笑った時に見える口もとの造作などは、あの人そっくりだった。
ふとした時に感じるあの人の息吹を、シャルルは未だにヒカルに感じる。
彼女は間もなく・・・シャルルと別れて、あの人がヒカルを産んだ年齢に達しようとしている。
その時に。
その時までに。
自分はこうして彼女に微笑むことができるのだろうか。

生きていながら死んでいるのではないか。
もしくは、本当に・・常闇に堕ちているのではないか。
そう考えることがあった。
彼は長く生きすぎた。
そう思わざるを得ない。

こうして・・・ヒカルにまた会うためだけに、生きていたと言っても、今なら「そうだ」と肯定できた。
ヒカルに会うのか・・・それともあの人に逢いたいからなのか。
それすら、判別が難しくなってきた。
だから、あの人の年齢を超えたヒカルをみていることは出来ないだろうと思った。

シャルルは苦笑した。
「顔が気になるなら、最初からもうちょっと・・・大人の女性としての身だしなみを整えてくれ

、ヒカル。その乱れた髪も、眠そうな顔も、何もかもが・・・オレにとってはおかしいよ」

この時ばかりは運転することは便利だ、と思った。
愉しいのではない。
彼女の顔を見なくてすむから。
見つめ続けることをしなくても、良いから。

だから、彼は前を見続けた。
サングラスの下の、青灰色の瞳が、色素が薄く遮光しないと夏の陽射しに灼けてしまう色で良かったと思った。
ヒカルを観察していることを悟られないようにするためには便利だったから。

彼の瞳を美しいと言ったあの人の言葉を思い出していた。

「シャルルの顔があんまりにも綺麗すぎるのよ」
あの人と同じ言葉を、あの人の娘はシャルルに向かって投げかけた。
彼は唇を横に引き締めた。

このひとつひとつの言葉のやり取りだけでも、魂が削がれそうなほどに苦しいというのに。
車の操作は、時に残酷だと彼は思い直した。
集中することで考えなくて良いこともあるのに。
そうでないからこそ、苦しい場面から逃れることのできない狭い空間にあえて身を置かねばならないことが、これほど彼を落ち着かなくさせるとは思って居なかった。
集中することで意識を寄せ集めることができなくなる。
あの人にそっくりなヒカルがこれほど近い場所に居る。

それが今は苦しい。

■177

「ヒカルとお喋りをしていると事故を起こしそうになる」
シャルルは低くそう言った。
瞳の表情がわからないので、ヒカルにはそれが冗談かそうでないのか、判断しかねたようだった。
ヒカルは首を少し傾げて・・・困ったように顔を曇らせた。
彼女にそんな顔をさせるためにシャルルは言葉を発したのではない。
でもそれを言うことができなかった。

彼女との会話は酷く苦痛だった。
それなのに、彼女の声が愛おしい。
これはどういうわけなのか。

ふたりで居ることが彼にとっては艱苦に耐えられないという状態を呼び起こすのか。
・・・しかし、この話を誰かに聞かせるわけにはいかない。

・・・これでは、少年と少女の稚拙な会話のようではないか。

支離滅裂で、ひとつひとつの会話が短く、脈絡がない。
そしてそれらを楽しんでいる風でもあるヒカルに、それを窘めることはできなかった。
シャルルは苦笑いした。
彼は大人になったはずなのに。
未だにこうして若かったときのあの時代のことを思い返し、そこに戻ろうとしている自分を押し留めている。

愛を終わらせることができなかった。
愛をすることはできたのに。

始めることは難しいと思っていた。
でも終わらせることの方がもっと・・もっと難しかった。

「シャルルは、私のことを、あの人のかわりだと思っている？」
「馬鹿なことを」
シャルルは吐き捨てるように言った。
エンジンが高回転している振動が僅かに伝わってくる。
ただそれだけの空間で、ヒカルが話を切り出した。
陽が彼女に直接差し込まないようになった直後のことだった。
「あなたの母のことを『あの人』と呼ぶな」
シャルルは窘めた。
前を向いていたので、彼女の表情の微妙な変化が判別しにくい。

「そういう愚問はやめてくれ」
「うん。わかってる。わかっているけれど、聞きたかったの」
「だからそれが愚問だと言っている」
彼は少し憤っていた。

「明らかであることは尋ねても意味がないだろう」
「私が、マリナ・クロスの代わりだということ？」
「ヒカル！」
シャルルが声を大きくした。
「その答えはノンだ。ヒカルと比べたことなどは、一度もない」
彼は語気強く否定した。
似ているところを探していることを指摘されたのであれば、ウイと答えるつもりだった。

しかし、彼女の代わりは誰にも務まらない。
たとえ、あの人の娘のヒカル・クロスであっても。
彼の心に住まう人に出入りはない。
一生、あの人だけが住み続ける。
そう、決めたから。
シャルル・ドゥ・アルディがそう決めたのだから、それは変更されることはない。
「それなら、ルイも誰かの代わりにならないわよね」
「当たり前だ」
彼は低く短く回答した。
良かった、とヒカルが微笑んだ。
彼女が、自分とルイの存在意義を模索しているのは手に取るようにわかった。

ヒカルも、ルイも・・・誰かの代わりをするために、生まれてきたのではない。
双生児のミシェルもシャルルの代わりではない。
代役を務めるのと成り代わるのは違うのだ、とあれほど・・・長い時間をかけて証明してきたというのに、また、ここで惑っている者が居ると思うと、シャルルはひどく胸が痛んだ。

「そういうつまらない話をするのであれば、今すぐ車からたたき出す」
そう言うと、ヒカルが吹き出した。
「凄い・・！ルイと同じ事を言った！やっぱり似ている！親子だわ！」
彼女の最後の言葉に、シャルルは首を軽く振った。
「ヒカルは忘れっぽいのかな。ミシェルと話をしたのだろう。・・・ルイはオレの子じゃないよ」
ヒカルは微笑んだ。
声を漏らしして笑うことをやめて・・・・そして、静かに彼に向かって微笑んだ。
「ルイは、シャルルの息子だよ・・・・シャルルが育てた」
「教育係はミシェルだよ、ヒカル」
穏やかだけれど抑揚のない声で彼はそう言った。
彼女は微笑みながら、そうじゃないよ、とシャルルに静かに言った。

「ルイはシャルルを見て育った。
だから、シャルルが親だよ。
そして、ミシェルも親だ。たくさんお父さんが居る。たくさんお母さんがいる。
ルイには、たくさん・・・家族が居る。それを早く伝えてあげたい。彼は孤独じゃない」
家族を作ろうと、言った自分が間違っていた、と彼女は言った。
闊達に深刻な内容を言い散らかしたものだから、シャルルは少し驚いて、彼女が話をするのをそのまま黙って聞いてみることにした。
ヒカルはこんなにお喋りだっただろうか。
彼女はいつも、自分の言葉を発することはしない少女だった。
シャルルのいくつかの提案のうち、希望を述べることはあったけれど、彼女が何かを言い募ったり考えを吐露したりすることは滅多になかった。
だからこそ、一度言い出すと深念を曲げない頑固さがあると思っていた。
見立て違いだったのだろうか。いや、そうではない。
・・・そうではない。

「誰かに定めることはない。ルイはアルディ家のこどもだから。それでたくさんの家族がいる。それが彼への・・・答えにならないのかな。シャルルもミシェルもお父さんなんだよ。素敵なことじゃない。ジルがお母さんなんだよ。素晴らしいことじゃない。そして・・・あの人は・・マリナ・クロスはそれを祝福して絵を描いた。それが事実なのだから」
あれだけの大きさの絵を描くのは下絵からであったのなら、相当に時間がかかったはずだ、とヒカルは言った。
その時間をかけて、あの人が何を思っていたのかを知ることの方が大切だ、とヒカルが言った。

「ヒカルの脳は、破壊されている」
シャルルが辛辣にそう言ったので、ヒカルが抗議した。
「シャルル。私は健康よ。・・・どこもおかしくない」
「おかしい。明らかに常軌を逸脱しているとしか思えない言動を繰り返している」
オレは医師だよ、と彼は自嘲気味に言った。

「・・・・ヒカル。少し黙って休んでいてくれないか。オレの方がおかしくなりそうだ」
彼はそう言って、片手を揚げて白金の髪をかき上げた。
その時に、額に皺が寄せられて、サングラスをかけた彼が酷く狼狽していることがようやくわかった。

ヒカルの言葉に、彼は動揺していた。
どの単語が彼をそうさせてしまったのか、わからないが。

彼は、ヒカルの言葉と自らの深慮を照らし合わせているようだった。

「シャルル、どちらが正しいかどうかは問題でない。どちらが必要かどうかだよ」
彼女はそう言った。
その言葉が彼に届くかどうかわからなかった。

彼はギアに力を込めて・・・スピードを上げた。
「飛ばすぞ」
シャルルはヒカルの言葉を遮るようにして、車を加速させた。
エンジン音が高速になり・・・そこで、ようやく静かな車内がそうでなくなった。
彼らが話をするには少し難しいほどの猛音を唸らせ始めた。
彼はそれっきり口を開かなかった。

何かに集中しているようで・・・
何も見ていないようだった。

シャルルがどこを見つめているのかわからなかった。
ただ、横を向いて彼の顔を見ていたかったけれど、彼はそれを無視しているようだった。
無視と言うより、拒絶に近かった。

そう。
彼はヒカルを拒絶している、と思った。
言葉が届いているはずなのに。
この問答を始めようとした途端、彼は遮ってしまった。

・・・仕方がない。

目的の場所に到着してからでないと、話を始めるつもりがないと、無言の宣言をしたシャルルを軽く睨んだ。
茶色の瞳が輝いて、シャルルを射貫いた視線の強さを、シャルルは感じ取っていたのに。
それを拒否して、彼は正面を向き続けた。

そして何手も先を考えた。
いつものように。

・・・しかし、何手も何十手も先を考えても。
あらゆる可能性を考えても。

考えつく答えが同じになることにやがて気がついた。

■178

こういう駆け引きを彼と交えることになるとは思って居なかった。
彼はそれっきり黙り込んでしまった。
ヒカルが何かを問えば、彼は応えてくれると思ったが、彼からはもう何も聞くことが出来ないとわかった。
彼女が知りたいと思うことは、シャルルは答えないと無言で宣言したから。

ヒカルがあの人の代わりか、と尋ねたことが、それほど彼を怒らせてしまったのだろうか。

―――わからなかった。

顔を見ていないから。
瞳を見ていないから。

彼をよく知っていると思ったのに。
これほど近くに居ながらも、シャルルの考えがわからない。
それは・・自分が変化してしまったからなのだろうか。
いいや、違う。そうではない。
ヒカルは答えを知っている。

そして、彼を知っているからこそもっと知りたいと思っていることを、彼にどうやったら伝えられるのだろうかと思った。
シャルル。

何が真実かということではない。
何がシャルルにとって必要なのか、なのだ。

まったく見知らぬ男性と一緒に居るようだった。

ルイの運転する車に乗ったときには感じなかった感覚がヒカルを被う。
ミシェルよりもルイよりも遠く感じる。
それでいて・・・傍に居たいと思う。
これは一体どういうことなのだろうか。

酷く長い時間だった。
シャルルと一緒に居て、時間が長いと感じたことはほとんどなかったのに、ヒカルは押し黙ったまま・・ただただ、外も見ることもできず、正面を向くこともできず、下を向いたまま、ヒカルはじっと、その時間が経過するのを待った。
彼と車で移動したことは数え切れないほどあった。
黙っていてもシャルルは常にヒカルの動向に気を向けていたし、ヒカルは無言の空間でさえ楽しむ余裕があった。

余裕がない。
・・・そう。
今は、余裕がない。

長い時間であったのか、そうでないのかさえ、わからないくらいの時間を、彼女とシャルルはひとつの空間の中で過ごした。

本来なら、今まで何をしていたのか、ということや。
互いの近況報告や・・・

今日は帰りが遅くなるから、どこで食事をしようかという他愛もない会話でさえも、彼らの間では交わされなかた。
張り詰めた緊張感だけが漂っている。

これが本当のシャルルなのか。
いつも緊迫し、常に何かを考え続けて、誰も寄せ付けない、そんな冷たいシャルル・ドゥ・アルディの姿を、彼女は初めて見た。
ヒカルの目の前で決して見せなかった姿だった。

何度か・・膝の上で、手の平を握ったり開いたりした。
自分が彼にできることは、こうして、誰も耳を欹てていない空間で、彼に語りかけることだけだと思うから。
彼女が、彼女だけにしかできないことをするしかないと思った。
どのような結果であっても、ヒカルにはヒカルだけがやるべき事柄があると思った。

やがてヒカルは顔を上げた。

「シャルル。私は・・・成年になった」

「生活年齢ではそういうことになるね」
彼は素っ気なくではあるが、肯定した。
「そして・・・夏期休暇を利用して、パリにやって来た」
「そう。だから早く日本に戻りなさい」
シャルルはこの言葉にも応えた。
「私は・・・・これは夢の世界だと思わない。
これは現実で、シャルルもルイもミシェルも生きている。
だからこそ、私はここに居るのだと思う」
「ヒカルの存在意義を否定するつもりもないし、それを肯定するつもりもないよ」
素っ気なく・・・これが本当のシャルルだと思った。
本当のシャルル。

来るなと言ってヒカルを拒否した。
今もそう言って、彼はヒカルを拒んでいる。

私はあなたを弱くするのだろうか。
あなたは私を弱くするのだろうか。
それなら・・・私はあなたを強くすることもできないか。
それなら・・・あなたは私を強くすることはできないか。

知らないことを知った。
今までが夢の世界だったと思った。
秘密と言うまでには彼の中で密やかにならない程に激しい想いを知った。
シャルルであっても、どうすることもできないことがあるとわかった。

だからこそ。
だからこそ、シャルルを知りたいと思うのに。
彼はそこを踏み越えてはいけないと言う。

「私の疑問に答えてほしい。結論は、それから」
このヒカルの言葉には、シャルルは即答しなかった。
彼女の結果次第で、結論を変更する予定はないということらしい。

しばらくして。
彼はヒカルに応えた。
静かに、けれどもはっきりと強く。

「・・・・選択する権利はオレにある」
シャルルは前置きをした。
シャルルがその言葉を発するまで、ヒカルも黙ったままだった。
彼の答えが、自分の思うとおりになるまで、説得するつもりだった。
だから彼女は、シャルルの承諾の声音に少し戸惑ってしまう。
あまりにもあっさりとした返答だったから。

「あの場所に行って、何かが変わると思えないし、ヒカルが何を言っても、オレは覆すつもりはないよ」
何を覆すつもりがないのかは、彼は言わなかった。
そしてそのことについて話をするのは、ヒカルが口を開いたときだと判断した。
「・・・久々にシャルルと出かけるのに」
「そうだね。久しぶりに・・・ヒカルに会う」
彼と最後に出かけたのは、日本を発つ直前のことだった。
たくさんのショコラを買って、薔薇の植木鉢をひとつわけてもらった。
そして・・・そして。
彼との切ない思い出が、彼女の脳裏に蘇った。

思い出に仕切れない記憶によって、ヒカルの櫻色の唇は戦慄いた。
ヒカルはぎゅっと指を握った。
打ち震えるほどの激しい動悸が彼女を痺れさせた。

「言い直すわ、シャルル。私の疑問に私が答えるから。結論は、それから」
ヒカルはそれっきり黙ってしまった。
あの噎返りが、彼女を寡黙にさせてしまった。

間もなく、あの場所に到着する。
「・・・少し路が悪くなるぞ」
彼は舗装された道路が間もなく途絶えることを予告した。
それにも、ヒカルは答えなかった。

同じ空間に居てこれほど・・これほど息苦しいと思ったことはなかったのに。
今は、知らない男性と一緒に居るようだとヒカルは思った。
彼がこちらを向いてくれないことがこれほどまでに落ち着かないのだと理由は明らかになっていたのに。
そして、常に彼女に視線を向けていたシャルルは今、ヒカルを見ていないと思った。

今・・・今、見ていないのか。
それとも。今まで見ていなかったのか。

わからなかった。

ヒカルは、シャルルがわからなかった。

あれほど長い時間を一緒に過ごしたのに。

■179

そこはパリからあまり遠くない海岸だった。
路が細くなり始め、周囲が木々に囲まれて、それほど通過しないのにすぐに・・・海に出た。
どうしてこの場所に墜ちたのか、未だに原因がわからない。
そんな場所だった。

「・・・間もなく到着する」
シャルルがそう言った。
長い時間が経過したようだったが、時計を見ると、それほどではなかった。
時間の感覚が鈍くなっている。
朝までヒカルが考え込んでいたあの時間に比べれば、それはあっという間の時間だったように思う。
しかし、シャルルと過ごす時間の中では、最も長くていたたまれないと思った時流だった。

ヒカルは窓ガラス越しに、外を眺めた。
シャルルの運転はひどく静かだった。
久しぶりだと言っていたのに、彼は顔色ひとつ変えずに、初めて乗る車種に対応していた。
サングラスをかけているので、表情がよく見えなかったが、それほど緊張しているわけでもなさそうだったし、何か・・・考え込んでいるようだった。
それでもこの道程は忘れていないとでも言うかのように。
ここまで、標識も地図も・・・何も確認することもなくやって来た。

今は静かな・・海浜となっているこの場所に、今、こうしてシャルルと一緒に訪れている。
他には来訪者はいないようだった。
広すぎる駐車場を越えて、シャルルはそのまま、砂利の敷き詰められた小道を直進していった。

こうした方が、より近くまで行けるから。
彼はこの辺りの地形を良く知り尽くしていた。
あの惨事が起こった直後から、現在までの変遷が、すべて頭の中に刻まれているようだった。

彼と彼女を乗せたベントレーはそのまま静かに砂利道に入っていく。
まだ真新しいタイヤが砂利を弾く音が聞こえてきた。
シャルルがふと、横を向いてヒカルの方を見たので、彼女はどきりとして躰を硬くしたが、それが車体を後進させるために、彼が後方を目視確認したのだということに気がつき・・そしてサングラスをかけたままの、シャルルの横顔をちらりと盗み見た。
革張りの車内で、彼が躰を捩ったので、真新しい表皮が軋む音がした。
「・・・なに？」
彼が腕を動かしながら、僅かに眉を顰めたので、彼はこちらを見ていないわけではないのだと思い知って、ヒカルは大げさに首を振った。
頬が火照る。
彼に見とれていたなどと言うのは躊躇われた。
彼女の白い頬に浮かんだ変化を、シャルルは気がつかなかったかのように、ごく自然にやり過ごした。

「何でもない。・・・着いたのね」
「もうすぐ停車する」
シャルルが短くそう言った。
その声音の堅さから、彼もここを訪れて、酷く緊張しているのだと悟った。
車のドア越しに、音が聞こえてくる。

ああ、これはいつもの音だ。

ヒカルは少し目を細めた。

・・・懐かしい。
・・・眩しい。

夏のこの場所は眩しすぎる。
陽が傾き始めていた。
煌めく光が乱反射して、ヒカルとシャルルの居る車内まで差し込んでくる。

そこは、訪れる都度、姿を変える不思議な空間だった。

彼女が訪れる周期よるはるかに早く、この場所はめまぐるしく変化し続けた。

この場所には、ヒカルはあまり足を運んだことがない。
正確には、彼と一緒に足を運んだことがほとんどない。
シャルルはヒカルと一緒にはここに来ようとしたがらなかった。
幼いヒカルの同伴としてジルが居なくなって、ようやく一緒に来るようになったが、いつも車の中から「行っておいで」と優しく微笑むだけだった。
だから、いつも人の顔色を窺っていたヒカルは、彼のそんな寂しい微笑みに絶えきれずに、いつしか、車の外に出ることをやめてしまった。
変わっていく風景を眺めているだけに留めることにしてしまっていた。
遠出という距離ではなかった。
空港の近くや、市街地に墜ちなかったことを幸運と言った者が居たが、それほど・・突然で、原因不明で、そして人の記憶から消し去ることのできない場所に墜ちてしまった。
とても日帰りでは行き着けない場所であったのなら、諦めもついた。
逆に、はるかに遠い地点であったのなら、そういう場所に墜ちてしまったと言い切ることができた。

でも。
・・・未だにすべてを「そうあるべきのこと」と受け止めることができない。
この墜落事故で誰かを失った者はみんなそう思ったはずだった。

もうすぐ、着陸という時だったのに。
もうすぐ、会えるという時だったのに。

彼の傍で。
彼女は車から降りることをやめてしまった。
シャルルがその場に立つこともできないくらい、まだ悲しいとわかったから。
・・・ヒカルも真似をした。
両親の記憶を思い起こして、偲ぶという行為に耽ることができなかった。
彼が苦しそうにしていながらも、ヒカルに「行っておいで」というその心がどれほど傷ついているかと考える方が優先された。

・・・ヒカルも生きているから。
シャルルも、生きているから。

忘れるのではない。忘れることはない。

特に、シャルル・ドゥ・アルディは忘れたくても忘れられない。
でも、自分たちは生きている。
「早く会いたい」と言っていたのが、「いつか会いたい」と言い出すようになったのは、この頃からだった。

ああ、自分は・・・ヒカルは心の中で呟いた。

私は・・・・

その先の声は、自分の内なる声であったのに、小さく凋んでいった。

遠く・・はるかに遠く跳梁していったたくさんの魂達が、各々帰りたい、帰り着きたいと思っている場所に辿り着きますように、と祈って・・・そしてそれでお終いにしていた。
両親の魂も、肉体も、ここにはないと思って居たから。
彼らの魂は常に様々に、心を残した友や、愛すべき家族や・・ヒカルの傍に居ると思っていた。
固定される魂魄であるとは考えにくかった。
彼らはいつも・・そう、特にシャルルの運命の人は、常に様々な場所を揺蕩っていると思った。
彷徨うのではない。
いつも傍に居ると感じるのは、彼がそう願うからだろうか。
彼らは自分達が愛する者達の傍に居る。

そう思うことにした。
そう、その言葉が正しい使い方だ。

現実は酷く凄惨だったから。

海に堕ちたら最悪だ。
遺留品だけが流れ着き、そして有機体はすべて、波の向こうに押しやられる。
海の清めを目の当たりにした。
潮流を把握して、どのあたりに生存者がいるか確認しようにも、海向こうは思い通りに計算通りに事が進まない。

遺品もなかった。
死亡を確認することもできなかった。
最後に、何かを書き残したかさえわからない。
何を持参していたのかも、何を身につけていたのかも、推測できない。

・・・・彼らが堕ちた場所は、海だったから。

いくつもいくつも、死屍が流れ着いて・・・そしてその都度、彼は鑑定した。
死因を鑑定するのではなく。
あの人と、あの男を捜し求めるために。
彼が目にする凄惨な姿の人々と同じであって欲しくないと強く願うのに・・
彼らがそこに居ないことに、平衡を保つことができそうもなくなるほど・・・絶えられないほど心が揺さ振られた。
彼は結婚後アルディ家の当主としての仕事に専念するために、医師登録の抹消手続きをとっていたが、急遽取り下げをして、身分を使って強引に救護チームに加わり、海岸をひたすら歩いた。

今はもうあの光景を思い出すことをやめるという術を身につけてしまった。
シャルルは軽く溜息をついた。

そう、またやって来た。
ここに。
またやって来た。

彼女は、エンジン音と波音が交じり合う車内から、じっと・・茶色の瞳で、窓の外を眺めた。
細い路地を抜けて行ったシャルルが停車させた場所は、海にほど近い場所だった。
エンジンを止めると、車は一度だけエンジン音を高速で回転させて、その後は静かに停止した。
総革張りの車内は音を吸収し、静かな空間が訪れた。
それでも・・・潮騒と言うには僅々な音振が彼らを包んでいく。

フロントガラス上に、海風がもたらす汐の粒子が乗ってきた。
来る都度姿を変えるこの場所は・・・アルディ家も出資している、民営化された元公社が入り、地道に植林したり・・海岸を洗浄したり、路を舗装したりした。
遺族が詣でやすいようにという配慮だった。
その一方で、生命の息吹さえ感じない、オイルが溢れた波泡や、熱風でなぎ倒された木々を放置してはおけない、という強い意識を感じた。
それが誰の采配なのかは、とっくにわかっていたが。

ヒカルは、それを黙って享受した。
その罪が、今になって露呈したのだと思った。
その権利を行使するために彼が受けた責務という名の犠牲に、知らないふりをした。
シャルルがどれだけ・・・この場所をそのままにして、彼女を捜し求めていたいと思って居た

のか、わかっていたはずなのに。
それなのに、ヒカルは、シャルルが自分を曲げて、ひととおりの事故調査が終わった後に、誰もが訪れることができやすくするために後援した

・・・もう目の前は整備された美しい海岸だった。

事情を知らない者が訪れれば・・そう、身近な観光にはちょうど良いと思っても当然であろうかというほどにそこは清浄な空気を持っていた。

かちり、とシートベルトをはずす。
いつもは・・いつもは。
彼女はここで終わっていた鎮魂の儀式を取りやめて、外に出てみようと思った。

「シャルル。・・・外に出てみない？海に。・・・海に行こう」
ヒカル・クロスはそう言った。
シートベルトをそのままにして、まったく動こうとしないフランスの華に向かって微笑んだ。

■180

日が斜めになってきていた。
もうサングラスは必要のない時間帯にさしかかっている。
それなのに、シャルルは一向に・・・動こうとはしなかった。
横から見てなお、彼は無表情に何かを考え込んでいるように見えた。
彼の精悍な頬に影が差し込んでいき、そして徐々にそれが広がって行く。

わかっていた。
彼は決してこの地に足を踏み入れようとしない。
特に、ヒカルと一緒の時にはいつもこうだった。

「シャルル。海岸に出てみよう」
ヒカルはそっと声をかけた。
そして・・・シートベルトをはずした彼女は、彼の肩に手を乗せて、降車を促そうとしたとき。
ヒカルに触れられたシャルルの肩が大きく動いた。

「・・・シャルル？」

彼がその瞬間、雷に打たれたかのように、肩を震わせて、ヒカルに向き直った。
ぎょっとした後に、凝視して・・・そして釣り上げた眉を鎮めた。
それまではずそうとしなかったサングラスを突然毟り取って、彼はヒカルを見つめた。

・・・次に、彼は何も言わずに、また、サングラスをかけてしまった。

・・・・ああ、彼はまだ癒えていない。
ヒカルが思い知った瞬間だった。

「シャルル。私と一緒に・・・行こう」
彼女は辛抱強く重ねて言った。

・・・・涙が出そうになる。

遠くで潮の満ちていく音がした。

彼が・・・夢幻の状態から戻ってこられなくなる、ぎりぎりの縁を彷徨っていることを実感する。
彼の青灰色の上品な瞳は、ヒカルを見ていなかった。
何年もいくつもの夏を、彼はヒカルの知らない間に、知らない人と過ごしていた。
毎夏、相手を違えても彼が呼ぶ名前はたったひとつだけだった。
その名前は「ヒカル・クロス」ではない。
それなのに、シャルルはヒカルの顔を見て、彼女の声を聴いて、彼女の手の平の温もりを感じて、「何か」を起動させた。

彼が行きつ戻りつしている時間があった。
シャルルをよく知っている者でもそれはわからないだろうと思われるくらいの、ほんの少しの変化だった。

それをヒカルは静かに見守っていた。
ほんの僅かな・・・人によっては、一度の瞬きの間程度の短い時の流れの中で、彼はあちらとこちらを彷徨って、そして不意に元に戻った。

「ああ・・・」
彼は首を振った。
そして、眉根を細く長い指で、強く押さえた。

かちり、と整えられた爪とサングラスがあたって音がする。

「すまない・・・少し考え事をしていた」
彼は静かにそう言って取り繕った。

昔、ヒカルの母親が何度か遭遇したシャルルの考え込む姿は、今はあまり見ることはない。
ヒカルがパリを離れるまでは、彼はヒカルの保護者役に徹していたので、彼女の前で我を忘れてひとり深く物事を思弁することはほとんどなかった。

シャルル・ドゥ・アルディはヒカル・クロスを違う名前で呼ぼうとして口を開きかけた。
そのことがどれほどヒカルを深く悲しませているのかわかったので、彼は嘯いたのだ。

ヒカルをヒカルと呼ばないことが悲しいのではない。
彼がそうやって、ヒカルを傷つけたと先回りして察して、そして自分を隠してしまうことの方が悲しかった。

「シャルル」彼女はもう一度言った。
何度でも言うつもりだった。
彼をこの豪奢な庵から引き出さなければならない。
彼が海を・・・彼と彼女が墜ちた場所を、ひとり静かに眺めることができるようになる、最後のチャンスだと思った。
そのためなら、ヒカルの「永遠の晄」と呼んで愛でてくれたシャルルを騙してでも・・
錯覚させてでも、あの場所に佇んでもらうつもりだった。

誰かと一緒ならなおさら彼は自分を曝け出すことを畏れて、向き合わない。
意気地がないのではない。
それほど、それほど・・・深く愛しているのだ。

あの人を。
今も。

そう考えると、彼女の胸は痛んだ。
シャルルがヒカルをヒカルと呼ばないことよりも、悲しかった。
愛をひとつだけと定めてしまったシャルルの孤独な魂は、それなら、どこに行けば安らぐのだろうと思った。

「シャルル。海に行こう。私が居る。私が一緒に行く。だから、行こう」

動こうとしないシャルルに彼女はそう言って、扉を勢いよく開けた。
潮の香りがして、扉の向こう側から潮風が湿気を伴って車内に流れ込んできた。

同時に、遠くで鳴り響いていた潮音が大きくなった。
脚を地面に降ろすと、ざっと白砂が音を立てた。
彼女の足裏からは、砂を踏みしめる独特の感触が立ち上っていく。
車を回って、彼の座っている運転席のドア前に立つと、ヒカルは扉を開けて・・・そして前を見据えたままのシャルルに手を伸ばした。
革巻きのハンドルから手を離そうとしないシャルルの手に自分の手をあてた。

彼の手は酷く冷たかった。
緊張しているらしい。
ヒカルは・・・彼女は、手を伸ばした。ヒカルの顔を見ようとしないシャルルに、囁きかけた。
わかっている。
彼女は・・・彼と彼女が別れた時代を通り越して、成年に達してしまった。
あの人と良く似た面立ちであるのに、今のヒカルは、ヒカルの両親が互いだけを見つめ合った時代と同じ年齢になった。
シャルルの介在しない、彼らだけの愛の時間に生きたあの人と同じ顔つきのヒカルを見るのが辛い、と彼は全身で訴えている。
それは、ヒカルが、シャルルが小菅で別れたあの時のあの人の顔を見るより耐え難いと感じていることも・・・今のヒカルになら、良くわかった。

だから。
彼はヒカルを遠ざけようとした。
出会った頃のあの人と同じ年齢になる前に、彼はヒカルを日本に遣った。
そして・・・今。
彼女と対峙して、彼は酷く振り幅も大きく揺らいでいた。
友の娘。愛した人の娘。
そういったカテゴリで、ヒカルを愛することができないとシャルルが悲鳴を上げている気がした。

・・・・もう、これが最後のチャンスだ。

ヒカルは彼の手の甲に添えた自分の指先に力を入れた。
もう片方の手で・・・彼女はシャルルのサングラスを取り外した。
彼は抵抗しなかった。

・・・整った顔の全てが現れて、ヒカルがこよなく愛するシャルルの瞳が見えた。
冷たいけれど、孤独で誇り高い晄を失うことのない、青灰色の上品で静寂な印象を強く残す双眸が現れて・・・ヒカルは大きく息を吸った。
できるだけ・・・落ち着いて、ゆっくりと言葉を発した。

「シャルル。シャルル・ドゥ・アルディ。来るのよ。・・・・私の声が聞こえる？」
彼はぴくりと頬を動かした。
そして・・・前を向いて深淵に落ち込んでいたような彼が、身動ぎをした。
次に・・・青灰色の瞳をヒカルに向ける。

そう。それで良いの。あなたは、シャルルなのよ。シャルル・ドゥ・アルディなのよ。

ヒカルは微笑んだ。
涙が、また出そうになったが、深呼吸をして涙を堪えた。
人前では決して泣かないことにしている彼女が身につけた、自らを保つための術を、久しぶりに使った。

「・・・・あの人に逢えるのなら」
「わからない。でも、きっとあそこにはシャルルが置いてきたものがある。きっとある。行こう。シャルル。行こうよ。私と一緒に」

彼女がそう言ってサングラスを助手席に放り投げた。
そして両手で改めて彼の手を取り・・彼を刺激しないように、静かに車の外に誘った。
陽射しは柔らかくなり、空は茜色になりつつあった。
海は凪ぎて、白い雲が連なっている空が色づいている。

「シャルル。・・・忘れ物を、取りに行こう」

ヒカルが言った言葉が終わる瞬間と、彼が・・・ヒカルに引かれて車の外に出て靴底を、ヒカルと同じように砂を踏みしめて音を鳴らしたのは、同時だった。

行こう。
ここから海までの距離は短い。
歩いても数十歩だ。

でもシャルルにとっては永遠ともいえる途方もない距離・・・

沖を眺めて、あの海岸に立つことができるとき。
彼が忘れていたものが蘇る。
それは何かわからないけれど・・・答えが出る。きっと出る。

この場所に行こう、と言った時。
彼女はすでに決意していた。

忘れる事なんて決してしないシャルルが、あえてそこに置いてきたものを・・・
ヒカルは何があっても、取り戻そうと決めていた。
それが私の贖罪なのかもしれない。

生きているということは罪を償うことだと誰かが言っていた。
でも、私は・・･生かされていると思ったり、生きていることが贖罪だと思ったり、ルイとシャルルが和解するために助力することが自分の役割だと思っていた。

でもそれはシャルルが望んでいなかった。ルイも否定した。ミシェルは最初からそれは違うと警告していた。
業、と言えばそれまでだけれども。

私の命は、誰かが運んできたものだけれども。
でも、私の命を繋げるのは・・私が命を運ぶ先は・・・・

彼女はそう考えながら、彼の手を引いた。
自分の置いてきたものも、ここに在る。そんな気がした。

■181

輪止めもないスペースに車を置き、彼らはそこから出て、次の場所に歩み出ることにした。
正確に言えば、ヒカルがシャルルを連れ出したと言った方が適切な表現だった。
彼の腕を取り、そしてぴったりと寄り添って、無言で海に向かう。

風に吹きさらされて飛び散った砂とアスファルトが混じった足音が、やがて砂だけを踏みしめる音に変わるまで、それほど距離も時間も必要としなかった。
潮風が向きをかえて、彼らの躰に纏わり付いた。
湿った潮気を帯びた風が絶え間なく吹くが、不快だとは思わなかった。
ヒカルの茶色の髪と、シャルルの白金の髪が流れていく。

車から降りた彼らは、そのまま何も語り合わずに、ただ口を噤んで、緘黙の隊列を組んで歩いた。
何かを語ればその儀式は成就しない。
そう信じ込んでいるかのようだった。

陽が傾いて・・・やがて空が朱くなって・・・その光が差し込む海に向かって、彼らはただ歩んだ。
時刻は、夕方から夕暮れに変わろうとしていた。
夕暮れから夜に落ちるまでは、この時期は大変に美しい返照が見られるが、ここを海浜公園のように美しく飾っても、人々の心に残る悲しい歴史は消え去っていなかった。
人がほとんど居ない。

ほんとうに・・本当に静かだった。
シャルルがここに到着するまでに、人払いを命じたのかもしれない。
そう思わせるほど、誰も居なかった。

この海岸は、人々が集うことができるように整備された場所であるはずなのに、冥海自身が、集うことを拒否するかのような冷たい美しさがあった。
季節は海を最も慕わしく感じる夏であったのに。
日中はもっと・・・もっと人が居るのかもしれないが、この寂しい夕さりつ方には、この奥まった場所にやって来て、何か物思いを愉しもうという者はほとんど居ないらしい。
漏れたオイルが海岸に辿り着き、周辺の生きものが死に絶え、機体の残骸が打ち寄せるあの惨状をシャルルは知っていた。
今は・・まったく別の場所に遣ってきたかのような変貌を遂げてしまっていた。
その変貌をシャルルが故意に、かつ積極的にもたらしたものであったのにもかかわらず、彼はいつもこの場所にやってくると、激しい痛みを伴った眩暈を感じる。
その瞬間は、あの時・・事故直後のあの場面がフラッシュバックして彼の視界に飛び込んでくる。
彼は自分を律することができると信じて疑わなかったのに、あの現場の記憶だけは操作できない。
彼の五感すべてで、彼の魂にも躰にも細胞の隅々にまで刻み込んでしまった、あの夏の日の記憶。

彼女の名前を声が枯れるまで叫び続けた彼の声。
飛び散った機体の熱波が植林を焼き尽くした、あらゆる生きものが焦げる匂い。
熱い風。

夜になっても煌々と灯された救助灯。
海の上を滑って陸に渡ってくる熱気。
夏であることを差し引いても、何もかもが凄惨だった。
汚染された海岸に辿り着いたモノを眺めるだけででえ、嗚咽と嘔吐感が込み上げてきそうな惨状を、彼らは今も忘れ去ることができない。

そう。彼らは。
シャルルだけではない。
それはわかっていた。
だからこそ、ここに踏み込むことができなかった。

忘却は放棄した。
遺された者が生きていくために選択する本能的な行為を捨てた。
故意に記憶に膜を張って、それ以上傷つくことを防ぐという術さえ抛り捨てることにした。

ヒカルは彼の腕を取って、彼女の躰を支えにした。
彼の逞しい躰を感じて胸が苦しくなる。
でももっと苦しくなった。

彼が、なぜこうしていつまでも当主の座に居続けるのか、理由の一つがわかったからだ。
ここを保存するためだ。
これだけの美観を損なわずに保存するにはたいそう・・莫大な資力が必要のはずだ。
若いヒカルでさえ、それは理解できるくらい・・ここは急速に復旧していた。
かつ、人が集う元通りの場所にしたいという意図を感じない空間だった。
入り組んだ車庫、人の出入りの厳重な入り口、定期的に清掃されているだろうごみひとつない海岸は遊泳禁止になっていて、誰も夏の海を満喫している様を目にすることができなかった。

ここに訪れる都度、ここは変貌し続けた。
それは彼の指示でもあったけれど、来る都度・・・何かが損なわれていくような気がした。
ヒカルの中の海というものは、たいそう恐ろしくて・・そしてとても悲しい色をした場所だという認識しかなかった。
その変貌を受け入れることがなかなかできなかった。
この場所が復旧して欲しいと願ったけれど、その一方で、何かが奪われていくような気がした。
悲しくて・・両親の残骸はきっと塵として清掃廃棄されてしまったのだろうと思うと、辛くて悲しくて、それでここにやってくることは避けるようになってしまった。
長い間、彼女は海に行きたいと言い出すことはなかった。
今でも積極的に海水浴に行きたいとは思わない。

変わりゆく海岸が、整えられて美しくなればなるほど、悲しかった。
辛かった。
そして恐ろしかった。

彼女の記憶だけが取り残されているような気がしたから。
ヒカルの記憶では・・・荒んだ波間に漂う穢れた海の光景しか思い浮かばない。
それが恐ろしくて、彼女は泣き喚いて、当時の教育係のジルをたいそう困らせたことだけは覚えている。
そして、それを困ったように、寂しそうに、見つめるシャルルが、ヒカルを通り越して、海の向こうに視線を定めて・・・じっと何かを考えるかのように動かないまま、車の中から海原を観察する光景がヒカルの記憶に残っている。

時おり、ヒカルの両親の話をするシャルルとの時間は徐々に減っていった。
ヒカルが成長するにつれて、彼が彼の知る両親の話をしなくなっていったことに、彼女は気がついていた。

でも、気がつかないふりをした。

自分が生きていくために、彼女はシャルルと反対に、忘却や無知を装うことを学んだ。
シャルルが悲しむという理由の他に理由を見つけることができて、幼い時、ヒカルはほっとしたことを思い出した。
そして、次の瞬間、後ろめたくなった。
両親の魂を悼むことができるのは、ごく限られた人間のはずだったのに。
彼女は・・・待てど暮らせど戻ってこない両親のことより、目の前のシャルルに心を痛めていた。

生きている人の方が大事なのか。

そう、シャルルに責められている気がしたから、彼女は知らないと言って装った。
無邪気にシャルルだけを見つめて、幸せな家族を演じ続けた。
それは・・・シャルルもよくわかっているはずだった。
それなのに、何も言わずにヒカルの芝居に付き従った。
彼はシャルル・ドゥ・アルディなのに。

その結果・・・彼は夢幻状態に陥りながらも、当主の座をルイに明け渡すことをしなかった。
ルイに対する発病の危惧もあったのかもしれない。

・・・シャルルは、病の原因を、特定しているような気がした。
それなのに、それを「わからない」と言っているような気がした。

ヒカルのために。
あの人の魂を護るために。
そして・・・彼が彼で在るために。

ここに、シャルルがあえて置いた何かがある。

「シャルル、海風って気持ち良いね、・・・・日暮れで涼しい。さっきまでの嵐が嘘のようだ」
「そうだね」
彼は静かにそう言った。

ヒカルは微笑んで、彼の腕に躰を寄せた。
ぴくり、とシャルルの腕が反応する。
わかっている。
彼は今、ヒカルを見ていない。
惑っている最中なのだ。
彼女は自分が黒須昶だと主張しなかった。

まずは、彼が脚を動かして、海辺に向かっていることから、次のステップに繋がるのだから。

彼と彼女は、白いスロープをゆっくりと降りて、砂丘に降り立った。
ここまでくると、完全に・・足の甲まで砂に沈む。
踏み固められたことのない、柔らかい海砂が彼らを誘って離そうとしない。
この地域でも嵐が訪れたはずなのに、すでに砂浜は乾燥して、唯一、海風だけが湿気を含んで砂浜の表面を撫でつけていく。

・・・白い波が見える。
・・・寄せては返す潮騒が聞こえる。

海は目の前だ。

「ヒカル。オレを海に連れ出して、どうしたいのかな」
彼は静かにそう言った。
彼女を見なかった。

見れば惑うから。

今、激しく・・あちらとこちらを行き来しているシャルルは、ヒカルにそう尋ねたので、彼女はぎゅっと櫻色の唇を噛んだ。
彼女の返答次第では、彼はあちらに渡ってしまう。
あちらとこちらと区別をしてはいけないと、ルイにあれほど警告されたのに。
こういう表現でしか、彼女は言い表す事ができなかった。
稚拙な自分の感覚と表現力を恨むが、今は、シャルルの内面の葛藤をただ静かに・・・見つめることに徹しなければ、最後のチャンスを取り逃すと思って居た。

もう、これを逃せば・・シャルルは帰ってこられなくなる。
それだけは確信していた。

「私は・・・」

ヒカルは口を開いた。

■182

海にやって来て、何がしたいのかとシャルルは問うた。
彼女が何か考えがあってここに来たことは承知の上で・・それでも彼はここに辿り着くまで何も訊かなかった。
ヒカルはその問いに対して、慎重に答えようとして、唇を開き、そして一度噤んでまた開いた。
そして彼女はその時に、シャルルの顔を見つめた。
彼の上品な青灰色の瞳は、彼女を通り越して遠く波間を見つめていた。
夕陽が反射して海が緋色に燦めき・・彼は眩しそうにしていた。
ヒカルは彼の変化を感じ取ったかのように、言うタイミングを見計らっていた。

こたえを考えるための沈黙ではなかった。
こたえを求めるシャルルの問答にも似た慟哭が波音で聞こえなくなることのないように、耳を澄ませた。
彼の問いかけに正解を出して褒められようとした過去の自分との訣別だった。

「私は・・」
彼女はもう一度言った。
「シャルルに何か期待も判断も求めていない。
ただ、シャルルに・・・思い出して欲しいだけ」

「何を？」
彼が囀るようにそう言った。
「思い出すと言うことは・・・何かを忘れているということだ。オレは何も忘れることはできないし、そうできないからこそ、たくさんの様々なことを・・抱えていられる」
「でもシャルルはここに置いてきた。忘れたくてもできないから、置いていくことにした。それを・・・今、取り返しに来た」
「取り返す。面白いね。・・・・まるで奪われたかのような言い草だ」
シャルルが詠うように言った。
心がここにない時・・・彼は・・・いや、彼らはいつもそうして一定の音数律で言葉を発する。
「オレは誰からも何からも奪われない」
「自ら手放すことには？」
ヒカルはシャルルのシャツ越しにぴくりとシャルルの腕が動くのを感じた。
僅かだったが、彼が反応したので、彼女はますます・・・彼の腕に添えた指先に力を込めた。

遠くから見れば・・・彼らは美しく寄り添う一組の恋人達に見えたかもしれない。
でも。
近くで見れば・・・彼の娘ほど年若い彼女が、シャルルを心配して、彼の動作にあわせてヒカルの方が歩みを調節していることは明らかだった。
彼らの会話は、恋人同士の甘い囁きの程度にしか音量がなかった。
それなのに、その交わされている内容は、これまで・・そう、これまで長い時間を共に過ごしてきた者同士が交えるそれではなかった。

ヒカルは、シャルルがここに何かを置いてきたと言った。
自らが定めて、そうしたと言った。
それなのに。
同じ唇で「取り返しに来た」と言った。

彼女から奪ったものを・・・ここに隠したことを、彼女は知っているのだろうか。
彼女が得るべきであったもの・・・・それがここに封印されていることを知っているのだろうか。

シャルルはそれ以上、ヒカル・クロスの顔を見つめることができなかった。
それでも彼女の面立ちに惹かれて視線がそちらに注がれてしまう。

惑いそうだった。
あの人と同じ貌をした彼女を見て。
果たして・・・あとどれくらいの時間、彼女をあの人と間違わないで名前を呼び続けることがで

きるのだろうか。

こうして寄り添って居る間中、彼の全神経と感覚は、彼女が寄り添って温度を伝えてくる彼の腕に注がれていた。

わかっていないね

ヒカルの母親にそう言ったことを思い出していた。
例え騙してでも手に入れようと宣言したあの日々を思い出した。
手に入れる。
その時に宣言した時には・・・愛は知っていたけれど、愛をすることを知らなかった。
愛をすること。
愛することではない。
愛をすること。
それを彼は、彼女を愛して初めて知った。

奪う愛は決して・・・決してあの人を幸せにすることはできないのだと思った。

だから、手放した。
だから、別れを告げた。

もう二度と会わないつもりだったのに。
彼女は、シャルルにヒカル・クロスという彼女の最も大事なものを置いて逝ってしまった。

そして彼は惑い彷徨い続けている。
精神を彷徨わせてなお・・・・彼は求めている。

ヒカルの揺れ動く思いは・・・シャルルには苦しかった。重かった。そして・・・彼女を解放してやりたいと思って居たのに。
また、自分は繰り返そうとするのか、と叱咤した。
籠の鳥にして、シャルルだけを見つめるマリオネットとしてヒカルを育てれば、彼の長年の夢想が実現する。
でも、ヒカルはあの人ではないのだと、一緒に居ればいるほど知っていくことになった。
彼はこれほどまでに誰かと一緒に過ごしたことはなかったから・・・

彼の家族はいつもバラバラだった。
最期までひとつになることはなかった。

だからこそ・・ヒカルには。家族を失ったヒカルには、幸せになって欲しかった。
彼女が家族を演じようと思ったり、意識しないでも切望している様子を観察すると、シャルルは彼女が望むものを与えてやることができないのだと思い知った。
長い時間を一緒に過ごしてなお・・・ヒカルには時折はっとさせられた。
あの人の魂がヒカルに宿ったかと思った瞬間さえあった。
でも違った。
あの人は、たったひとりだけなのだ。

・・・なぜなら、シャルル・ドゥ・アルディが定めた運命の人なのだから。

ヒカルは代わりにならない。
それでも、あの人に最も近い彼女をいつか、ヒカルと呼ばなくなるだろうと、わかっていた。

・・・・ヒカル。

彼は青灰色の瞳をゆっくりと瞬きさせた。
目の前に、静かな波が広がっている。
足に砂がからんで、彼らの躰はバランスを取らないと、すぐに砂に足を取られてしまう。
そして、数歩先には波が打ち寄せ始めていた。
ほんの僅かな時間の経過のことであったのに、潮が満ちてきていた。
シャルルの中の何かを思い満たすように。
静かに・・でも確実に溢れようとしていた。

「シャルル」
ヒカルがぽつり、と言った。
海岸の散歩のために、ここまでやって来たわけではないことは、彼も彼女も承知の上であった。
「私はシャルルを失いたくない」
ヒカルがそう言った。
「だからここにシャルルがわざと置いてきた・・・あの人に向き合うときが来た。
シャルル・・・私を恨まないで欲しい」

彼女がそう言った瞬間。
シャルルに触れられていた腕が離れた。
彼はそれまで一対であったからこそ保たれていた衡平が突如として破られたので、ほんの少し・

・躰を傾けたが、すぐに足を半歩下げて、その場に踏み留まった。
彼女の支えがそれほど大きいとは計算していなかった。
・・・それほど彼女に躰を預けていたのか
一瞬、そんなことを思ったが。
だが。

次には、何も考えられなくなった。
彼から躰を離したヒカルが・・・次の行動に出たからである。

「ヒカル！」

彼は惑いそうになりながらも、最愛の贖罪の娘の名前を呼んだ。

次に呼吸をしたときには・・・彼女はすでにシャルルから遠く離れていた。

■183

先ほどまで彼が困惑していた彼女のぬくもりが・・一瞬にして去ったので、シャルルは息を呑んで腕を軽く上げた。
彼の腕を取り、柔らかいと感じた温度が、一気に落ち込むのを感じた。
外の空気は暑さが抜けて、海風が彼らに吹き付けていたので、急激な温度変化を認知して、シャルルは青灰色の瞳を見開いた。
切れ長の二重の瞳が、大きく見開き・・そして、紅蓮に染まる海に消えていこうとするヒカルの背中を捕らえた。

・・・彼女は海に入った。

そう認識したときには、ヒカルは身も軽く、あっという間に波間の中に腰を沈めていた。
彼が声をかける間もなかった。
彼女の茶色い髪が海波に沈む様を、彼は写真一枚一枚のように瞬間で画像で捕らえていた。
あまりにも美しすぎる光景だった。
彼女は彼を振り返ることもなく、躰を離すと、そのまま・・着衣したまま、海に飛び込んでいった。

彼が叫んだのに。
彼が呼んだのに。

それを振り切って、ヒカルは光を受けて眩しく耀く波の中に躰を沈めていく。
遠くで聞こえるような、近くでささやかれるような耳鳴りにも似た音が・・･聞こえる。
ヒカルが海に入る、波に逆らっている音が聞こえてきた。

シャルルはそこでようやく実感した。

彼女はあの人ではないことを・・・彼女の俊敏さを忘れていた。
彼女は・・・運動能力が素晴らしく発達している。
彼の制止の動作よりも早く彼女は移動した。

やめろ！行くな！

彼が言う叫びにも似た命令がたどり着くよりも高速で彼女の姿が消えていく。

ここは穏やかな湾であったのに・・間もなく満ち潮を受け入れ始める時間なのだろうか。
白い波が浮かんでは消えて海辺に寄せていた。
白い潮頭が押し寄せてくる。
彼の足元に近く寄り添うそれが恐かった。
海が恐いのではない。

あの日を・・・あの時を思い起こさせる蠢きが恐かった。
畏れといった方が良いのかもしれない。
それなのに・・彼はその燦めきに吸い寄せられるようにして動けなくなる。
潮の香りも波の音も、彼の数歩先のことではあったが、そこにヒカルの言う「あちら」と「こちら」の境界がそこにあるような気がした。
今、彼女はあちらに行こうとしている。

「あちら」なのだろうか。
それでは、ここは・・・・「こちら」と「あちら」のどちらなのだろうか。

ぞくりと。
彼の足の甲から、太腿の付け根まで一気に悪寒が立ち上った。
まだ暑い盛りのはずなのに、寒気が彼を包み込んで、彼の均整の取れた躰がぐらりと、わずかにバランスを崩した。
軽く左右に揺れる。

足元そのものが覆されるような、そんな感覚が彼を襲った。

「・・・やめろ！」

絞り出すようにして、シャルルが叫んだ。
その声は、ちょうど、波が打ち寄せた時に吐き出した音と重なり合い、ヒカルの背中に吸い込まれて消えた。
彼女は振り返らずに、沈みゆく太陽に向かってどんどん・・躰を沈めていく。

「戻れ！」
彼は波際で立ち竦んだ。

波が恐い。
海が恐い。

恐怖というよりは、彼はそこに立ち入ることのできない生きものなのだと、彼の細胞ひとつひとつが叫んで警告しているかのような、本能的とも言えるような・・・そんな呪縛を感じて、シャルルは足をそこから先に進めることができなかった。

「戻れ！戻ってこい！」
彼はいつか・・・そう、いつか、茶色の髪の毛を揺らしながら、彼に立ち向かって躰ごと彼に魂をぶつけてきた娘と同じ言葉を叫んだ。

「こちらに来い・・・！」
その声にも、彼女は振り向かなかった。
シャルルの顔が厳しく締まって・・・そして、彼が、挑戦的かつ瞋恚を含んだ眼差しで、彼女を挑むように睨んだ。
彼女はどんどん・・遠ざかっていく。

「はやくあちらに行きたい」と言っていたヒカルの拙い声を思い出した。
「いつか会いたい」と言い直すようになったのに。
彼女は、今、実行しようとしている。
「早く会いたい」と願ってやまないシャルル自身の願いを実行しようとしている。
自らあちらに行くことはできない。
あの人の居る場所に、自分から飛び込むことはできない。
そこは・・・いつか、行き着く先であっても、今、行き着けない。

それを知っているシャルル・ドゥ・アルディが苦悶を続けながらも今に至るまで生き延びている理由と動機がここにはあった。

・・・自らの命の灯火を消すこともできずに細く小さく煌めくだけしかできないシャルルの焔の願いを聞き遂げたかのように。

そう。
ヒカルの言う通り。
ここにシャルルは置き去った。

あの人と再会することへの切望と熱望と叶わないことへの絶望。
あの人のいない未来への夢想。
あの人の娘の困惑と涙と選択のすべてを奪う事への罪悪感。

・・・・この場所を整備して、あの時と違う場所にすれば、彼は痛みも疼きも和らぐと思って居た。

でも違った。
彼が違えたことはほとんどないはずなのに。

あの人が戻ってこないとますます強く思い知るだけだった。
そして・・そして、この場所が美しく変化するにつれて、ますます、立ち入ることが難しくなった。
彼はシャルル・ドゥ・アルディなのに。
彼にも、思い通りにならないことがあった。
思い通りにならないことの方が、今は多い。

どうしても思い切れなかった。
思い出にできなかった。
今も・・今も彼女を愛しているというその想いだけが彼を生かしている。そう信じた。
強く願うことで、彼女の精神力の強さを模倣している気になった。
自分にはないものを持っているあの人を焦がれた。
自分では持ち得ないから・・・傍らで微笑んで、傍らで彼の補えない欠如した何かを埋めてくれるのは彼女だけだと定めていた。
次に、傍らに居なくても、愛は継続できるのだとあの人がシャルルに教えた。

例え誰と結ばれて誰を愛して・・・誰の子を宿したとしても。

あの人には代わりがない。
誰も代役を務めることができない。
シャルルが愛しているあの人の魂は、いつまでも彼を魅了し続けた。

今、この瞬間でさえも。

彼女を想う都度・・・。

彼の愛は深まる。
彼の愛は広がる。
彼の愛は・・色濃くなる。

彼の愛は、生きている。
留まることを知らず、常に進化し、そして彼にいつも問いかける。

その愛を・・・ここに置いてきた。
ヒカルの言う通り。
永遠の晄は・・今、海の晄と溶けて一つになろうとしていた。

「やめろ・・・！」
シャルルは叫んだ。
声を限りに。
でも、喉に声が張り付き、干上がって、そして彼の肺に流れ込む、潮が彼の声量を奪ってしまった。
彼は乾燥した完全管理された空気しか長らく吸っていなかった。
こんな湿り気を帯びた・・そう、あの夏の日の日本のような空気は、触れるだけで困惑した。
だからそれを避けて夏を過ごした。
過ごさざるを得なかったということもあったが、彼は・・・彼はこの湿度がどうにも辛い。
あの人の最期を思い出すから。
あの男の無念を思い出すから。

そして・・・・

そして。

ヒカルと初めて会った、あの湿度の高い、蒸し暑い一日を思い出すから。

彼は目を瞑った。
激しく心臓が鼓動していることを、誰にでもない・・・持ち主のシャルルに告げている。

彼は、あの人の名前を唸るように言った。
彼が、あの人の名前を祈るように呟いた。
彼は・・・次に。

同じように、海に飛び込んだ。
それまで・・・一度も海に入ったことはなかった。
あの事故以来。
この環流を躰に受けることはしていなかった。
思い出してしまうから。
惑ってしまうから。

それなのに・・・彼は、今、そこに飛び込んだ。
彼の声を無視する、ヒカル・クロスのために。

■184

シャルル・ドゥ・アルディは普段、声を荒げることはしない。
それは彼の生きる世界では、最も恥ずべき行為のひとつであるということを、小さいときから叩き込まれていたからだった。
それなのに、あの人と居ると、それまでの当然であったことが次々と覆った。
虚無と怠惰に浸る毎日が、いつの間にか、違う色を帯びていった。
母を救うことが出来ず、儚くなってしまったとき。
もう、誰かと一緒に時間を過ごすということはないだろうと、彼の中で切り捨ててしまったはずの感情がもう一度息を吹き返した。

誰かと一緒に・・・自分でない誰かの存在が傍らにあって、その者の息吹を確認しながら自らも生きる。

例え、傍に居なくても。
心が傍にあって、彼の心が、その者の傍にあると実感する瞬間をシャルルは短い時間ではあったが謳歌した。

誰かと生きる。

彼女に出会って彼はそれも悪くはないと思い始めた時に。
彼の定めはそこで決まったのだと思った。
彼女を運命の人と定めた。

運命に定められたのではない。
運命を定めたのだ。

彼には間違いがない。
それまでもそうして生きてきたし、これからもそうして生きていくのが当然であると思って居た。
彼の判断したことや切り捨てたことや・・・そして得たものには決して誤魔化すことのできない真実だけがあると思っていた。
でも、最善策というものは、ひとつしかないのではないことや、こたえがひとつではないのだということを知ったのは、彼女と出会ったからだ。

「ヒカル！」
彼は二度、声を出した。彼女の娘に声を出した。
喉から絞り出すような声だった。
一度目は掠れていて、波の音量が勝った。
彼の声はヒカルに届いていなかった。

そして・・次に、もう一度、「ヒカル」と声を出した。
不規則に寄せては返す波の魅せる呪縛に囚われて、彼はそれまでまったく声を出すことができなかったのに、ヒカルの茶色の髪がどんどん面積を狭めて視認することができなくなっていったとき。
彼の声が、彼に合図をした。

急に許可された仕草は、彼がそうしろと命じたはずであったのに、彼の脳と躰をつじつまのあった一連の動作にすることができない。
小さく舌打ちをして、シャルルはそのまま・・・彼女と同じように波に足を入れて、そのまま膝を埋め、躰を浸した。
夕暮れの海は、温度が下がり始めていた。
誰も遊泳しない海は循環しないので、湾であっても水温が高くならない。
あっという間に躰に冷波が押し寄せて・・そして彼の躰を浸水した。
長袖のシャツが水分を含んで、二の腕が重くなった。
足に着衣の布が纏わり付いて、彼の動きを阻んだ。

それでも。
それでも・・・彼は脚を上げて、海に沈みゆくヒカルめがけて歩みを進めた。

「ヒカル・・！ヒカル！」

彼は彼女の名前を呼び続けた。

それなのに。

彼女の移動する速度の倍速で近づいていくのに追いつかない。
あっという間に追いつく距離なのに、彼が辿り着くべきそこには到達しない。
対象が移動し続けているからだ。
彼の心臓の鼓動が、早鐘を打ち鳴らし、崩壊の序音とでも言うような音波が彼を襲った。

波が彼を打ち付ける。
腰元まで浸かれば、静かな海の波でも・・・異邦人を除外するかのように、白波でもって抵抗し、彼に打ち付けた。
波というものは、その流れに逆らう者には容赦しない。
長い時間をかけて・・・波というものは・・・岩を崩し砂を運び、そして想いさえ取り込んでしまうような執心を寄せ続ける。

波を掻き分けるのには、それほど体力を必要としなかった。
それなのに、彼女の姿を見つけるのに彼は全神経を注いでいる。
ヒカルの気配は、探すという過程を経ないでも良かった。

彼女の息吹は感じることができた。
探さなくても。

彼女の声はいつも彼の耳に届いていた。
離れていても。

・・・・これまでは。

それなのに、今、彼女が思いも寄らない行動を遂行していることに、彼はまったく・・・予定も、可能性についての想像もしていなかった。

彼は大きく躰を動かして、水の中に揺蕩った。
夏であっても、日が陰りはじめて、水温は急激に低下していた。
またたく間に、彼の体温を奪っていく。

「ヒカル！」
彼は叫びながら、躰を波に埋めた。
そして、彼女の姿を求めて・・・歩みを進める。
海に入った後は、同じ感覚だった。
いや、彼に纏う水圧が高くなるにつれて、彼の躰の動きが鈍くなっていくはずであるのに、彼はそれを計算せずに
砂に脚の甲が沈んで・・・そして、衣が波に翻弄されて自由に前に進むことができない。
彼の計算どおりに進めているはずであったのに、なかなか・・・ヒカルに到達できない。

彼はそれを埋めるかのように、彼女に声を限りに叫び続けた。

思いもかけず・・彼が計算した効果というものは、そこには存在しなかった。
先ほどの行動の端々を見ても。
彼女に声をかけても、決して振り向くことはしないだろうと思ったからだ。

シャルルは叫んだ。
彼は、はっきりと・・相手を見定めて張り上げた。

ヒカル・クロスがこの海が恐いと言って、滅多にみせない涙を流してジルに縋り付いていた時のことを思い出した。
以来、彼もこの場所には近寄らなかった。遠くで眺めているだけだった。
ヒカルは・・・「はやく会いたい」と両親に祈っていた。
でもシャルルと暮らすようになって、笑顔を多く見せるようになって行ったとき。
彼女は、「いつか会いたい」と言い直すようになった。

仄暗い路にさしかかる夏の直前と、狂乱の夏を越えた直後。
いつも、彼は「はやくそちらに行きたい」と強烈に思っていた。
そこに・・ヒカルが一緒に居てくれれば、彼は思いとどまることもなく、躊躇うこともなく、未練もなにも残さずに行き渡ることができると思った。

一度ではない。
何度も、何度も。

彼は行き着く先が同じ結果になるのに、幾通りもの過程を考え続けた。
どうしたら早くそこに為果せるのか。

彼はいつも、今ある情報と状況から、どこに行き着くのかを考えることばかりであったが。
そこに至るためにどうすれば・・・最も近いのかを考えるようにもなった。
これが、あの人と逢えなくなってから・・・彼が得たものかと思うと、愁嘆した。

ヒカルと一緒に、あの人とあの男の居る海に沈もうとか、海に還ろうとかいう邪念が・・・彼の中では浮かんでは沈み、そして流されていくようでまたこちらに寄せられていく。
この波のように。

真新しい革靴にも着類にも海水が浸透し、彼の歩みを阻んだ。
「ヒカル・・！」
シャルルは猛進した。
大きく脚を振り上げたので、海水が飛沫となって、彼の精悍な頬に飛び散っていく。

足首から膝へ。膝から腿へ。
彼が歩みを進める度に、水面が揺れて、枷となって彼の動きを重くしていく。
火色でも言うような・・・朱い水面が、あの時を思い起こさせた。
あの時も・・・目が眩むほどの、朱い残陽が彼を照らしていた。

彼はもう一度、叫んだ。
声を大きくしながら、彼女の姿を追った。
彼女は若いが、着衣のまま泳ぐことは慣れていないはずだった。
計算をしている時間はなかった。
腕を伸ばせば、すぐ届くと思うようなくらい、彼女は近くに居るのに。
彼の声が聞こえているはずなのに、決して・・決してヒカルは彼を振り返ろうとしなかった。

いつか・・・いつか、自分も同じように、振り返らずにあの人と別れを告げたことが脳裏に蘇っていく。
その時は、立場が逆だった。
振り返れば、また連れていきたくなるから。
振り向けば、あの男と一緒の彼女が目に入るから。
だから、彼は背を向けて、去った。もう二度と逢うこともないと思っていた。

今は・・・今は。
状況が違う。
意味が違う。

「やめろ！」
彼の脳内ではあの時の若い頃の瞬間と、今の映像が、激しく錯綜して交じり合い、奇妙な融合を始めていた。

■185

そこでようやく・・ようやく彼はヒカルに辿り着いた。
彼女の肩を掴もうとしたが、波が彼の躰に纏わり付いて、伸ばした指先が彼女に届かない。
ヒカルが彼の呼びかけに答えない。

かつて一度もなかったことだった。

彼女はいつも、彼の声に反応し、彼の微笑みに応じ、彼の・・彼の哀しみにいつも同調していた。

だからシャルルは生きていられた。
死んでいるような生でも、それでも生きようと思った。
生きながらに死んでいても。
死にゆくための生であっても。

死までの退屈しのぎであると言い切ったこともあったが、今では・・・・違う意味を持って、彼は呼吸をしている。
自分が生きていることで、彼女の微笑みが長く続くのであれば、自分の命は無駄ではないと思うことができた。

両親が不在であるという寂しさよりも、彼女が今を寂しくないように過ごさせることに心を砕いた。
彼はヒカルの父にも母にも・・・彼らの何にもなりかわることが出来なかったのだから。
ただ、傍に居るだけだった。
最高の教育と言い切って彼女を引き取ったが、結局のところは、彼自身がこの世で得ることのできる最高の安らぎのために、単に彼女の人生を奪ったにすぎない。

シャルルは切れ長の青灰色の瞳に海の塩飛沫が入るのも躊躇わずに、そのまま美しい双眸を彼女に定めたまま・・・腕を伸ばし続けた。
そのまま腕が伸長して、彼女に届けばいいのに。
そんなあり得ない願いさえ、一瞬考えた。

飼い慣らせない感情を、早々に捨て去らなければならない。
抱えることができなければ、それを切らなければ生き存えない。

だから。
だから、ここに置いた。
忘れたのではない。

ここに・・・故意に置いてしまった。

「待て！」
シャルルは彼女の・・水面に漂っている、沈みゆく髪の端を掴んだ。
長い髪が水面に躍り、そして夕陽を受けて、燦燦と耀いていた。
シャルルは目を細めた。
青灰色の瞳が狙いを定めて、もう一度腕を伸ばす。
彼の指先に、手応えがあった。

水面に浮かぶ彼女のくせの強い髪が彼に触れた瞬間。
彼は、深い哀しみをたたえた切れ長の瞳を大きく見開いた。
「ヒカル！」
ほんの僅かな・・髪の先を、彼は指先で絡め取り、そのままぐっと指を握る。
次に彼の指先に捕らえた茶色の濡れた髪を、一気に自分に引き寄せた。

「・・・・いや！」

彼女が、そこで声を発した。
悲鳴だった。
彼女が初めて、抗議の声をあげたが、彼はそのまま・・力を緩めることはしなかった。
諫める言葉も出なかった。
ただ、彼女を沈めるわけにはいかないと思った。
それだけだった。

肘を曲げて、絡め取った髪をそのままたぐり寄せる。
古代の日本の伝承のように・・・この細く柔らかいくせの強い髪を、手繰り寄せれば自分はどこに行き着くのか、期待を込めて。
期待・・・彼は希望も期待も何も持たないと決めていたのに。

それなのに、彼女の髪に触れたときに。
指先に絡め取った時に。
彼の躰に電撃が走った。

「離して」
彼女がそう叫ぶのと、彼が彼女の躰を手繰り寄せるのは同時だった。
髪を引かれて、彼女は首を振ったが、シャルルは躊躇うこともせずに、そのまま抗うヒカルの体に到達し、彼の腕の届く範囲にまで距離を縮めた。
「シャルル、離して」
波の音にかき消されるほどに細くヒカルが叫んだ。
「駄目だ」
シャルルは答えた。

そしてそのままぐっと力を入れる。
彼女のどこに、そんな腕力があるのかと思うくらいの抵抗であったが、彼はそれを上回る強さでヒカルの肩を掴んだ。
彼女が悲鳴をあげた。

服の上から、擦過傷の手当の跡とおぼしき布の感触があったが、彼はお構いなしにその部位を敢えて掴んで引いた。
計算通り・・彼女の力が少し抜けて、その瞬間、力の均衡はシャルルの優位に転じた。

乱れた髪と波と、煌めく夕陽のために、彼女の顔がよく見えなかった。
ただ、シャルルから逃れようと抗う彼女に・・・どうにも・・・どうにも激しい焔を感じずには居られなかった。
それは、かつて・・あの手摺りから飛び降りたときと同じ感覚だった。
彼は激しく動揺する。
なぜ、そうするのか。
自分で説明がつかない。
後にも先にも・・・あの人に感じる熱情以外に、彼はそういう事態に陥ることを自らに許していなかったのに。

今、この状況は、何もかもが違っているのに。
あの時とはまったく違うのに。

彼は・・・彼の中で眠っていたものが再び激しく揺さ振られるのを感じた。
波の振動が彼を揺り動かした。

彼も塩水にさらされて、ヒカルと供に負った瑕が染みるとか、瑕が開くとか、そこまで考えを及ばせることを放棄した。
感覚を遮断した。

「・・・・！」
言葉にならない声を発した。
もう、誰の声も聞こえなかったし、ヒカルの声さえも彼の耳に届かなかった。

目の前に煌めく・・朱い夕陽に染まった彼女の茶色の髪だけが、彼の視界に入った。
色素の薄い金茶の髪は、陽射しを浴びて・・・水を含んで濃くなるどころか、ますます薄くなり・・そして彼がこよなく愛した、慕わしい懐かしいあの人の髪を思い出させた。
もう生きていてもそうでなくても、触れることの叶わない、あの人の髪と同じ茶色の髪に
絡めた指が、このまま、絡み付いて解けなければ良いのにとさえ思った。

痛みで叫び声を上げる彼女の声を無視した。
シャルルは、ヒカルの肩を掴むと、そのまま、手繰り寄せて浅瀬に運んだ。
暴れる人間を海中で運ぶのは至難の業だ。

しかし、彼は有無を言わさない強い力でもって、彼女を引きずり寄せた。
途中、彼の名前を呼ばれたり、脚をばたつかせたり・・・彼がしっかりと廻した腕を放せと抗議して抵抗する力をまったく無視した。

彼は男で・・彼女は女だと、体格的差違を知らしめた。
年齢差があって、彼女がいくら若くても。
シャルルの力強い腕には抗えない。

これまで、彼がそのように振る舞うことがなかったので、ヒカル・クロスは油断していたのだと思うと、彼の口の端に好戦的で挑戦的な微笑みが浮かぶ。
そう、これが本来の・・シャルル・ドゥ・アルディの姿であるのに。
長らく、この場所に眠らせてしまっていた。
青春の輝きの時代に彼が得た感情、感覚、そして・・・・それ以上の何か。
海の波の奥底に沈めていた感情が蘇る。

彼の腰丈にまで、彼女を引き寄せた。
腕を回し、彼女の抗う両手を無視して、彼は彼女の右手首を引き上げた。
これまで水中に居たために、浮力で軽く感じた彼女の体が重みを増して、彼はそれさえ無視して・・手首をねじり上げて、水面から彼女を引き上げた。
「・・・シャルル、痛い！」
ヒカルが叫ぶ。
しかし彼は憤怒の焔を宿した瞳を彼女に向けたまま、無表情に波間に立った。

貴女は生きろと言ったのに。
何をしているのだ。
彼はそう言った。そして、彼女の手首を引き寄せて・・・浅瀬で腰を落として、彼の足元に跪づく茶色の髪の茶色の瞳の乙女を見下ろして言った。

「その先は急激に深くなる・・・！まだ還ってはいけない。・・・・君は泳げないはずだ。マリナ！」
「私はマリナじゃない！」
哭声が響き渡った。
波の音よりも。彼の激しい鼓動よりも。
もっと激しい声が叩きつけられた。
シャルル・ドゥ・アルディはそこで・・・口をつぐんだ。
白金の髪は濡れて乱れて・・彼の唇は青白く震えていた。

彼が、何を口走ったのか。

お互いが、わかっていた。
お互いが、承知していた。

今、黒須晄とシャルル・ドゥ・アルディの対峙が始まろうとしていた。
彼が慕わしげに呼んで愛でた「ヒカル」は、そこに居なかった。
目の前の、海水で濡れそぼった体を震わせながら、彼をにらみ据えるひとりの乙女は、彼の知っているヒカルではなかった。
彼女は、シャルルに、これまで見せたことのない強い晄でもって、訴えた。
絞り出すような、悲しい叫喚を浴びせながら。

「シャルル・・・シャルル・ドゥ・アルディ！私は昶。ヒカル。永遠の光と書いて、昶と言う。・・・マリナじゃない。あの人じゃない。わかっているのに、なぜ、そう言うの。それが貴方の忘れたものなの？答えて！」

■186

「逝きたいのなら、もっと確実な方法にしろ」

シャルルは低い良く通るテノールで抑制した声音で言った。
彼の声は憤慨を含んでいなかった。
ただ、無表情に彼女を冷たく見下ろした。
それは、非常に・・彼の血族に似通った表情であったが、シャルルはヒカル・クロスに対して一度も見せたことのない貌だった。
尖った顎を少しだけ持ち上げて、青灰色の双眸は彼女を見下ろしていた。
濡れた髪をそのままにしていた。
こぼれ落ちた白金の前髪から、幾つもの海滴が落ちては海に戻って行った。

「そうでないなら、あらかじめ、ここで余興を披露すると言え。
・・・・オレは生憎とそこまで時間に余裕がある身ではない」

波が彼女の体を打った。
ヒカルは浅瀬に引き摺り戻されて、彼の足元に屈していた。
彼らは、波打ち際で・・・仄日を肢体に浴びせるだけだった。
それまで不規則に感じていた波の音が、今は規則正しく聞こえてくるような錯覚が彼らを誘った。

闇に、幻に・・・そして現実のシャルルとヒカルに。

彼女は打ち倒されて、腰を落としていた。
じっと立ち竦むシャルルの前に座り込んでいた。
大きく息を乱して、肩を震わせているが、彼女の茶色の視線は、濡れた髪の間から強く眺を放ってシャルルをにらみ据えていた。

・・・・しかし手を振り払おうとはしなかった。
シャルルは掴んだヒカルの手首だけが、奇妙な角度で彼と彼女の体を繋いでいた。
手と手の温もりなどは感じない。
かつて何度も巡る春夏秋冬をともに眺めた、あの幼い手は・・・今、彼の掌の中にもう存在しなかった。

ただ、彼が酷く憤っていることだけが伝えられる。

惑っているのはどちらだ。
迷っているのはどちらだ。

彼が、そう言っているような気がした。

「私はマリナじゃない」
彼女は彼女の限りをもって、哭声を発した。
波の音が混じった。
彼は沈みゆく茜の眺を背にして・・・逆光で目を細めて、燃え上がるような茶色の髪の望主をただ、眺めていた。

探し続けたあの人を。
彼は、目の前に再現して良いのだろうか。
すさまじい速度で算盤が始まった。
頭の中で、計算を始めるが、こたえが出ない。

「私はマリナじゃない。
シャルルの求めるマリナ・イケダはもういない。
生きていても、海に還ったとしても。
それはもう、シャルルのマリナじゃない。
私のお母さんよ。
マリナ・イケダじゃない。

マリナ・クロスよ。
あの人を解放してよ！お母さんを逝かせてあげてよ！
私を・・・・もう、赦してあげて」

同じ哀しみを生きてきた者の慟哭を彼は初めて訊いた。
もう、赦してあげてと。
ヒカルが懇願する。
あの人が懇願しているような錯覚を受け入れようか否か、シャルルの体が考えている。

わかっているよ。

シャルルに「あたしに恋をさせてみろ」と言った人はもう居ない。
彼ではないあの男を唯一の人と定めて、そして彼だけを愛していると言い切った彼女を見て。

愛して良かったと思った。
愛しすぎてあの人を苦しめてしまった。
愛して・・・愛し続けたまま死にたいと切望した。

あの人であってそうでない、目の前の女性と一緒に、生きてきた。
あの人と過ごした時間をはるかに超えた長い歳月を目の前に居る人と過ごした。

年月ではない。
それもわかっている。

愛には、月日は関係しない。
現に、こうしてシャルルは気の遠くなるような年月を、あの人を焦がれて彷徨っている。

けれども、シャルルと彼女の間には、間違いなく・・・あの人とシャルルの間に流れるものとは別の何かが、ある。
家族を持たないと決めたシャルルの数少ない家族だった。
血族は確かに存在するが・・無償の愛を捧げて常に安否を案ずる存在はほんの僅かだった。
彼の無償の愛を受けることのできる人物は、非常に少なかった。

彼女はびしょ濡れになった頬に波飛沫がかかるのも気にせずに、彼を睨み上げた。
「シャルル。答えて。シャルルは私に気紛れに優しい。自分の都合で私を引き離す。
・・・貴方が望んで・・・私はここに居るのに。こうして生きているのに。貴方はまた、私の心も躰も・・・自分の思い通りにしようとしている。私は生きているのに。シャルルも生きている

のに。私とシャルルは・・・何が違うと言うの。何が違うから・・・私はシャルルの想いを受け止める資格がないというの」
ヒカルは唸るように言った。

黙ったままのシャルルに、ますます憤慨したと言わんばかりに、憤りを募らせていくように、口調を強くしていった。

「資格がないとは言わない。あの人は何にも比べられない」
「私の命も誰とも比べないで」
彼女は言った。
「どうしてあの人を基準にするの。どうしてあの人しかいないと、一人を定めてしまうの。私の入り込む余地はないの？ルイがシャルルを癒す可能性はないの？
・・・・シャルル。シャルル・ドゥ・アルディ。・・・・愛は。愛はひとつじゃない」

彼女はそう言った。
その時に、初めて・・彼は目を見開いて、目の前の人物の言葉に・・・・・酷く動揺した。

ぶるぶると唇が震えて、彼は・・繋いでいた手首を乱暴に引き払った。
ぱしゃり、と、彼女の手首は水中に沈んだ。
それでもヒカルは彼から視線を反らさなかった。

「シャルル。こっちを見て。私は何度でも言う。何度でもシャルルに体を体当たりする。それでシャルルが目覚めるなら。シャルル・・・こちらに来て！」
シャルルは両手を握り、拳を振るわせながら・・・その言葉をじっと聞いていた。

海の波音が、彼らを包む。
彼らの体温を奪って、陽が翳りゆく報せに乗じて、彼らの影を奪っていった。
太陽が沈んで・・・空が紫紺の色の支配を受け入れる合図を送った。
最後の陽光がちかりと晄を放ったあとに、水平線に沈んでいく。
その様を・・・いつもの彼らであれば、一緒に眺めて微笑んで、美しい情景について語り合ったのかもしれない。
でも。
今は、そうではなかった。

心が惹き寄せられるのは、彼らを明るく照らしながら沈む日輪などではなかった。
互いが互いを・・・視線を反らさずにいた。反らすことなどできなかった。

水が彼らの衣類を濡らして重く張り付いている、この上なく惨めな格好で。
彼らは対峙していた。
そして、互いの目の前の人物を咎め立てている。

「支離滅裂だ」
彼は吐き捨てるように言った。
「わかっているわよ！」
ヒカルが叫んだ。
どうしようもなく昂揚している人を目の前にして・・シャルルは辟易したと言わんばかりに大袈裟に溜め息をついた。

愛はひとつではない。

そんなことはわかっているよ。

彼は薄く笑った。

「わかっていない」
ヒカルは、彼の考えを読み取ったかのように、抗議した。
ざっと音を立てて、彼女も立ち上がった。
そこで、彼女が・・・あの人でないことを思い知る。
彼女は背が高かったし、髪もあの人はこれほど癖が強くなかった。
茶色の髪と瞳は、経年してますます色素を薄くしていたので、こうして薄暗がりの中で見ていても、彼女は日本人離れした容姿の持ち主であることは判別出来るのだが、あの人の・・・小柄なあの人の娘であることは、事情を知っている者でなければもう見分けが綱かなかった。

彼女は・・あの人の娘であると同時に、背が高くくせの強い髪のあの男の娘でもあった。

「わかっていない・・・シャルルは何でも知っているのに、わかっていない」
彼女はそう言って叫んだ。

■187

「私を・・赦してあげて」
ヒカルの放ったこの言葉の間には、正確には「私を・・・そしてあの人を赦してあげて」という言葉が省略されていた。

ヒカルの耳にも入っていたのだろうか。
フランスの貴族の出自を持つアルディ家で、日系人を迎え入れることは、一族はウィと言わない。
シャルルの父親が、大変に熱心な親日家であり、日本人をあえて・・・恋人や内縁の妻と呼ぶべき親しい間柄の者を選んでいたことは、今でも有名な話だった。
シャルルとミシェルの母親を忘れているはずはないのに。
彼らの父は享楽的に・・・彼らと容姿の違う者を次々と侍らせた。
文化が違うから。人種が違うから。
そういう「どうにもならないこと」に積極的に受け入れているような気がした。
だから、日本人の知り合いは、あの男だけにしようと決めていた。
日本人の知り合いは他にも存在したが、シャルルは・・・父親が彼を受け入れないと宣言して、そしてそれを実証するために、あえてフランスから遠く離れた民族を愛でるのだと思っていた。
彼の父も彼の母を愛しすぎた。
そして狂わせた。
最期は・・・救うことが出来なかった。

それを傍観しながら、彼は想った。
愛は・・・愛は自分で決めようと思った。
誰かに与えてもらうものではないと思った。
誰かに与えることはあっても。
自分は愛を・・・誰かから恋うことはしないと誓った。

でも。
それでも。

彼は・・・あの人を定めてしまった。
そこで気がついた。
人種も年齢も環境も関係がない。
愛には、愛は・・・何かを理由にして始めることができない。

————始まってしまうものだと。

彼の意思で始めたと思っていた愛は。
いつの間にか、始まっていた。
そして終えることができなくなってしまった。
彼女がいなくなってしまったから。

突然、彼の前から姿を消してしまったから。
だから。
だから、ヒカルを引き取った。
彼女の代わりと言えばそれまでだった。
良く似た依り代が欲しかったという理由は否めない。

今でも・・・今でも、ヒカルのふとした仕草や表情に息苦しくなる。
大人になったヒカルと、それほど時間を過ごしていないのに。
少女の頃のヒカルがどんな大人になるのだろうと夢想した。
彼女の素晴らしい資質が、これからの長い人生で、どれほど見事に花開くのだろうと心待ちにした。たとえ、自分の傍らに存在しなくても、あの人の息吹が・・あの人の血脈が絶えることなく続くのであれば、彼は一生をかけて見守ろうと思った。

それが、彼の愛だったから。
魂の試練だと言った。愛は試練だと思った。
だから、今生で結ばれなくても。たとえ、生涯・・来世でも結ばれなくても。
この愛は、偽りなどではないから。
この愛だけが、自分の生きている証だから。
シャルルはそう固く信じて・・・生きてきた。

死のうと思ったこともあった。
あのまま儚くなってしまえば良いのに、と思ったことは何度もあった。
でも。
ヒカルが居た。
あの人が沈んだ海を護らなければならないと思った。
当主の仕事はごくつまらない日々だったのに。
彼はそれを甘んじて受け止めた。
後継が存在するのに、彼はそれを認めなかった。
譲れば、彼の愛が消滅すると思ったから。

ああ、そうだ・・・オレの愛は独りよがりだ。
彼は微笑んだ。
目の前の・・・愛するあの人の娘を前にして。
彼女を痛めつけてなお、彼は微笑む。

ヒカルが愛はひとつでないと言った。

それなら。
それなら・・・彼の愛は。彼の魂は。彼の定めた運命は。
どこに行くのだろうか。

■188

ヒカル・クロスを誰が娶るかについては、何度となく親族会議で持ち上がった議題だった。
しかし、毎回、シャルルの命によって、議事録から削除されていた内容だった。
年齢から言えばルイ・ドゥ・アルディが相応しいが、彼は・・シャルルが為し得なかった政界への出馬や、今後のアルディ家の世界規模の事業進出の際に、妻帯者であっては都合が悪いとされて、当面独身を貫くことに決まっていた。
彼の後継は、いつか・・ルイ・ドゥ・アルディ本人と同じ過程で誕生させれば良いだけの話だった。
同じような能力を持った者を次世代に生み出す労力より、・・今、絢爛と花開く、同じ容貌の同じ才を持つ者達の保持に力が注がれた。

そうなれば、クロス・グループの財力とコネクションを手に入れるために、シャルルとヒカルが内縁関係であれ、事実婚の状態になるか・・・外聞を気にするのであれば、ルイを差し向けるか・・または、ミシェルを寄せるか・・・親族会では駒を動かすかのように、淡々と話が進められていた。
その状況をシャルルは把握していたのに、口を差し挟むことを辞めてしまっていた。
シャルルはアルディ家の頂点に居る。

シャルル・ドゥ・アルディでも、どうにもならないことがある。
実際に、この長い年月・・彼の意思決定を抜きにして、決められたことがいくつかあった。
彼がそれに抗議しなかったわけではないが、彼の意見は黙殺された。
そして、それ以上・・・そうさせないために、彼は君臨し続けるのだ。

彼の意思では決められないことがあって・・・彼の意見は通らない時もある。
ヒカルを呼び寄せたのは自らの意思だった。
それが、どんどん一人歩きをしていく。
ヒカルの処遇が、彼の望んだ結果にならない。

・・・彼女の稀なる細胞が、世界規模で必要とされると知った時。
彼は慌てて・・・ヒカルを日本に帰した。それが、もう遅いことなのだとわかっていても、日本の倫理規定は最も遅れていて・・審議に時間がかかる国であったから。

彼女の万能細胞として利用価値がある体質について、何かを決めているうちに・・・彼女の存在を霧散させてしまえば良いのだと計画していた。

だから普通に学校に通わせた。
だから日本に帰した。
だから・・・だからこそ、アルディ家と縁続きになるように、動産も不動産も彼女に与えて・・・飼い殺しにした。
それを彼女に責められても仕方のないことだった。
すべては、この一族の長が、彼女の言う通り・・愛でたいときに愛でて、利用したいときに利用して・・・そして捨て置くことができないから、アルディ家のルイと娶せようとしたことに、彼女が憤っても無理のないことだった。

それでも。
それでも・・・結果はそう見えても。

彼は確かに・・・ヒカルの幸せを願っていた。
ルイ・ドゥ・アルディが愛のない結婚をしようとしたときに、彼は止めた。
ヒカルを日本に遣った。
それは・・・ルイという彼の若かりし時代を生きるもう一人の彼に・・・ヒカルを渡したくなかったから。
たった一人を定めるまでの・・仄暗く孤独な路を歩み続けるルイを見て、彼は自分が・・ミシェルの他にもうひとり居ると思った。
幼少期をキューバで過ごした、シャルルと違う時間を生きたが故に違う価値観を持つミシェルよりも、ルイはもっと始末が悪かった。

シャルルの生を模倣し、彼に成り代わることを夢想している・・・最も濃い血を持つアルディ家の星辰の子は・・・暗い野望を持ったまま成長した。
それを止めることもできなかった。
ヒカルを定めて・・彼女の晄を求めて手を伸ばすこともわかっていた。

ああ、そうだ。

シャルルは冷笑した。
彼は・・・彼は、耐えられなかったのだ。
ルイとヒカルが愛を始めるかもしれないという可能性を。
確率を高めることを。
否定したのだ。

愛は・・・愛はひとつでない。
それはわかっている。
頭ではわかっている。
でも、心が駄目なのだ。

彼が夢幻の世界に陥ってなお、求めて探すのは、誰でもないマリナ・イケダの魂だった。
探しても彼女はやって来てくれない。
だから自分で創り出すことにした。

あの人の娘を遠く追いやる夏の時期にだけ、あの人に逢える。
だから彼はそれを受け入れた。
受け入れることで、彼はこの海を保持することもできたし、ルイがヒカルを手に入れようとすることも阻む権限も持てた。
一族が、彼女の稀なる細胞を商品化しようと持ちかけることにも、時間を持たせることができた。
一族の長になるということは結局・・・・・・そういうことでしかない。
その特権は少ない。

しかし、彼が当主でいる間は、時間を持つことができる。
彼女を逃がすことができる。
この薔薇の一族が伸ばした棘を、彼女が触れないように彼が間に立つことができる。

単にそれだけであるのに。それだけしかできないのに。
彼は長らくそこに居座り続けた。

「わかっているよ」
彼は吐息混じりにそう言った。
執着してはいけないと、いつも教えられていた。
それなのに、彼は・・・あの人との愛に。輝ける青春の時代に執着した。
戻れないのに。
戻ろうとした。
戻れるだけの能力を持っていたから。

しかし・・戻っても。
時代を遡っても、そこに居ない人物がいる。
目の前の・・・ヒカル・クロスは、あの時代には存在しない。

彼が苦しんで、あの人の手を離し、あの男と供に在れと言ったからこそ、目の前のヒカルは存在する。

ヒカルは首を横に勢い良く振った。
しかし、決して項垂れることはしないで、彼を見遣った。
ヒカルは、立ち上がった。

「シャルルはわかっていない。何もわかっていない。何もかもが・・シャルルは置き去りにしているから」
ヒカルの懇願にも似た声が、彼に向けられた。
シャルルは膝から腰に纏わり付く濤声を感じながら、瞬きをした。
髪をかき上げることも忘れていた。
彼の体に衣類が纏わり付いて、体温で潮香が下から上に立ち上っていくのも、無視をした。

「私は死のうと思った訳じゃない。」
彼女は小さく言った。
しかし、彼から視線を反らさずに言った。
これほど・・・激昂に身を任せるヒカルを、シャルルは知らなかった。
彼女はいつも、はにかんで笑い、そして誰かの意思を尊重し・・いつも自分ひとりだけで泣くことを強制していた小さな貴婦人だった。
それが・・今は、まるであの人が海から蘇ったかのように、激しい感情をシャルルにぶつけてくる。
あの人が、逝ってしまった年齢に非常に近くなったヒカルを直視することが苦しかった。
シャルルは唇を噛んだ。

今、目の前に居るのは。
幽玄の世界から、彼女の娘の体を借りて蘇ったあの人と対峙しているのか。
それとも・・・
本来のヒカル・クロスと、魂の遣り取りを交わしているのか。
彼はどちらの選択をすれば、安らぐことができるのだろうか、と思った。

■189

「随分とわかった口を利くね」
彼は冷笑した。

ルイ・ドゥ・アルディに非常に良く似ていた。
これもシャルルの一面なのだということを知る。
彼は常に優しい物憂げな微笑みしかヒカルに向けていなかった。
彼は月に徹したのだと思う。
いつも同じ面しか見せなかった。
ヒカルには、彼の内なる激情も暴戻さも覗かせなかった。
哀しみも喜びも苦しみも共有していると思ったのに、ヒカルはシャルルの何もかもを薄い表面だけしか感じ取っていないことを実感した。

憤った彼の端正な顔は、夕暮れの消えゆく晄を浴びて非常に美しかったが、同時に寒々としたものだった。
夏だというのに。
日本の夏のように、蒸し暑く、寄せては帰す海波が、本来は心地良く感じるはずなのに。
なぜか、彼の瞳を見つめていると体に触れている水温も体温も、熱度が急速に低下していく。

「シャルルは忘れている。マリナはマリナ・イケダであったけれど、マリナ・クロスになった。だから愛を忘れなければならないと定めるシャルルが自分で自分を苦しめている」
「あの人は、あの人だよ」
彼は苦しそうにそれだけ言った。

彼女の名前が変わろうとも、彼女は変わらない。
変化しない。
本質はいつも同じだ。

「ヒカルが知っているあの人と、オレの中で生きるあの人は違う。
それはあの人だけに限らない。
自身から見た相手というものは非常に主観的で、かつ誰にも冒すことはできやしない」
「それなら。どうして、生きようとしないの、シャルル」
彼女は言った。

これまで堪えていた・・どうしても言えなかったことを尋ね始めた。
彼女の体は潮に濡れて、まるで海からわずかな時間だけ揚がって、呼吸をすることを許可された海獣の姫のようだった。

「なぜ、生きないの。生きて、とあの人は言ったと思う。シャルルは・・・・シャルルひとりしか居ないのに、どうしてあの人が教えた生を生きないの。そうしたら、あの人を忘れてしまうと思ったの？あの人を裏切ると思ったの？あの人を・・・愛する自分が消えてしまうと思った？

」
「言葉が過ぎるぞ」
シャルルは静かに忠告したが、その言葉に憤っているのは明らかだった。

先ほど・・・彼が惑って彼女を本当の名前で呼ばなかった時から、それは始まった。
彼の側頭部が激しく傷む。
ヒカル・クロスは運動神経が発達している。
泳ぎも得意だ。
あの男から譲り受けたものだった。

それなのに、シャルルは、水が苦手なあの人の名前を呼んだ。
沈みゆく彼女を見て、彼はあの日の・・・あの惨状の記憶を呼び起こさせられた。
そしてそこで、彼女に「違う」と諭された。
目の前の・・あの人の貌をした、断罪の天使に彼は切り落とされた。
それでも、彼女の腕を掴んだまま離すことが出来ずにいて・・・彼はどうにもできないものが、
彼の内なる場所に巣くっていることを再認識せざるを得なかった。

目の前でヒカルはシャルルの前に立った。
彼女の均整の取れた体が、残照に照らされてまばゆい晄を放つ。
名前のとおり、彼女は永遠に晄輝き続ける存在他ならないと感じる。
触れることに躊躇いを感じる。
彼女を見つめることに・・・罪悪感を感じる。

彼の罪は、愛をしてしまったことだ。
愛を始めてしまった。愛を終わらせることができなかった。
そして、今もなお、あの人の面影を追う生に縋り付いている罪。

罪深いのは、彼自身なのだと思う。
愛してはいけない人を好きになった贖罪が、人のかたちをして彼を断罪しに来たと思った。
あの人の姿をして、彼を責め立てに来たのだと思った。

それも良い。
あの人に逢えるのなら。
あの人に責められるのなら。
あの人に・・連れて行かれるのであればこの命も惜しくない。

ほんの一歩か二歩で、手が届く範囲にいながら、ヒカルとシャルルの間には、はっきりとした界

線があった。
興奮した山猫のように、ヒカルは目を少し釣り上げて、彼をじっと見つめていた。
あの人が怒ったときの顔に良く似ていた。
でも・・あの人の貌が思い出せなかった。
若い頃の・・・青春の輝きの時代のあの人の貌は思い出せるのに。
それを越えた、あの人を思い出せなかった。

シャルルは忘れることができないのに。
忘れたと記憶していないのに。
目の前のヒカルが、あの人に似た容貌で大人になったことに戸惑っていた。

大人になって。
目の前の彼女は、逝ってしまったあの人と変わらない年齢になった。間もなくすれば、それを越えて彼女はもっと美しくなる。
誰かを愛し、誰かに愛され、誰かの子を抱くヒカル・クロスを見届けるのが、彼の役割であり贖罪だと思った。
彼が愛さなければこんなことにはならなかった。
ヒカルをこうして・・・アルディ家に捕らえることもなかった。
ルイの執着にヒカルを差し出すこともなかった。
この娘は・・それでも良いと言ってくれたから。
一緒に居たいと傍に寄ってくれたから。

シャルルは、それに答えた。それを利用した。それに・・・生きる理由を見つけた。
でも。
今は、惑っている。激しく揺らいでいる。

あの人は、こんな顔立ちだっただろうか。
あの人は、これほどまでに憤ってシャルルを叱咤しただろうか。

ひとつひとつの言葉が、彼に槍となって差し込んでいく。
決して・・答えが出るまでは抜くことのできない、断罪の矢が彼に刺さっては・・突き抜けて、そしてまた巡ってきた。

ヒカルは問うているのだ。
あの人を愛するまま、死んだまま生きるか。
生きて・・・
あの人を愛したまま、死ぬまで生きるか。

どちらも同じ事なのに。

ヒカルは、尋ねた。
生きろ、と。
本当の意味で生きろ、と。

彼女は先般のように・・彼に魂をぶつけた。
この静かな海で。
叫ぶことをやめた。
海に入って・・彼の忘れた心を引き上げて・・・そして、今。

彼の惑いに正面から付き合おう、とヒカルが宣言したから。

彼は・・シャルルは、それに答えなければならないと思った。

売られた喧嘩は買う。これは家訓だ。
そして・・・

シャルルのこたえを、ヒカルは待って居る。
同じように。
ヒカルの問いかけを・・シャルルは待っていた。

「あの人を忘れない。あの人を愛している。今も。これまでも。これからも」
「それを否定はしない」
ヒカルは首を振った。
そうじゃない、ともう一度言った。

「シャルル。愛はひとつに定めてはいけない。愛は、ひとつだと思った先がある。その先を見て欲しい。愛は・・愛はね、シャルル。愛を知っている人だけが、愛を増やすことができる。愛をすることができる。愛を・・・愛をいとおしむことができる。
シャルル・ドゥ・アルディなら、わかっているはずよ」

彼女がそう言ったので、彼は青灰色の瞳を閉じた。
ああ。

この人は、どうしてこうも・・・あの人の魂に似ているのだろうか。

空は、茜色の衣を脱ぎ捨てて、今、静かに・・・紫紺の闇に包まれていこうとしていた。
火色と深紫の間の色は。彼の瞳の色に良く似ていた。
透き通った、青灰色の色が、一瞬だけ、彼らを目映い閃光でもって照らし出した。

■190

「あの人を忘れて、ヒカルを愛することはしない。決して」
彼はそう言った。
その言葉に、ヒカルがすぐさま反応した。
そうじゃない、と繰り返した。
「私を代わりに愛でてと言っていない。シャルルが誰と愛を始めても・・私は良いと思う。愛しているから。シャルルが幸せになるのであれば、それで良い。どうでも良い。
ルイを愛せないと言って苦しむシャルルや、ルイを愛してはいけないと定めたミシェルには、そうする理由がない。理由が・・その原因が私なら、私はいつでも消える」
「ヒカル」
彼はその時に強い口調でもって、今度は惑わずに彼女の名前を呼んだ。

「貴女が我が一族に介入してはいけない。その理由もない」

「シャルル！」
彼女は叫んだ。

茶色の瞳を大きく見開いた。
その問いに、彼女は酷く狼狽していた。

「ヒカルの存在がどれほど重要なのか、ヒカル自身がわかっていない」
「わかっていないのは、シャルルの方だ！」
彼女は、幾度めかの「わかっていない」という言葉を発した。

「シャルルは私をあの人と似ていると言う。でもあの人そのものだとは言わない。
私は何？シャルルが安らがない存在の私ならいらない。私はいらない。
私は・・・・
ずっとシャルルと見ていた。
シャルルを見てきた。
シャルル・・・シャルルを唯一の人と定めた私はシャルルと同じだ。これからシャルルだけを求めてシャルルに命を運び続ける。
シャルルが生きている限り。

呼吸する限り。
あなたが・・・あの人を求めて誰かを依り代とする限り、私はあなたに何度でも体を預ける。

何度も叫ぶ。
何度でも言う。

この命が続く限り、何度でもあなたの目の前で海に潜る」

ひたむきに言うその姿に心を動かされなかったと言えば嘘になる。
しかし、シャルルは彼女に彼の世界のすべてを・・・・大事に思っている彼の中核となっているものがなんであるのか、告げる機会を窺っていた。

恋とか愛とか・・言葉を越えた絆がそこにはあった。
ヒカルが懸命に訴えていることについて彼は理解できていた。
それでも。
それでも・・・彼は探している。彼女の中に、あの人の面影を探している。
あの人に逢いたくて・・あの人に似ている彼女を傍に置いた。
それがどれほどヒカルを傷ついていたのか、彼女の成長に大きく影響していたのか、シャルルは把握していた。

温もりが欲しくて、ヒカルを奪った。
同じ空を見つめたくて、あの人に逢いたくて、ヒカルの息吹を引き寄せた。

愛は・・愛はひとつだけだと彼は定めていたのに。
そうではないとヒカルは言った。
愛はひとつではないと言った。

それなら・・彼のただひとつだけの真実は、いったい、何であるのだろう。
これまでの彼を存在せしめた、一つだけの愛について。
シャルルは、愛について深く考察したが、その愛の波及について考えたことがなかった。
愛を知って他の愛を知ることはないと思っていたから。

「それは偽りではない。涙を流すだけが泣くことでないのと同じように・・」
彼女は言った。
その言葉に、シャルルはほんの僅かに頬を歪ませた。
それは・・ヒカルが幼いときに、彼とヒカルとの間で保留にしていた問いかけだった。

いつか、こたえを出そうと約束していた言葉だった。

ヒカルは・・あの人の娘は、とっくにこたえを出していたのに。
その言葉に回答することに躊躇っていたのは、他ならないシャルル・ドゥ・アルディ自身だったのだ。

「生きていると実感しないから、ルイを愛さないと決めて。
ミシェルもジルも。
誰もが愛をすることを放棄した。誰もが・・・あの人に囚われていた。
あの人は、そう希望していない。
今ならわかる。わかるよ、シャルル。
あの人はね、強烈にただ一人だけを愛するシャルルを心配した。
だから・・だから、シャルルに会わなかった。
そう思うよ。今ならわかる。

そして・・・
憂えたはずよ。

・・・シャルル自身も自分の生について放棄することに。
だから互いに冷たくする。
ルイに冷たくするのも、きっとそれが理由。
愛したらあの人の愛が薄れると思っているから。

私には慈しみを教えたのに。
私には・・愛を植えたのに。

シャルルはひとりと定めた相手以外に愛を与えることが不誠実だと思っている。
誰もがそう思っているけれど・・・愛はね、シャルル。

愛は、海に還る。
愛は、風に還る。
愛は・・・愛は形に寄らず、その人の思ったとおりに還る」

■191

「ヒカルをあの人の代わりにすることだけはできない」

彼が呻くように、声を絞り出して言った。

遠くでは・・そう、本当に遠くで、海鳥が、夜の到来を告げる哭声を空に放ちながら散り散りに乱れ啼いていた。
この場所には、まだ生きものはやって来ない。長い年月が経過しているのに、まだ・・生命はここに根付かない。
ここに立つのが辛いとシャルルがなかなか近寄らない理由はそこにあった。
どれほど・・・この場所を美しく飾り立てて、静謐な空気で満たしてもここにはあの人の魂が帰ってきていないと思い知るから。
彼は・・鳥が啼き、魚が群れて潮の香りが強くなるまで、そこには立つまいと決めていたのだと思った。

どれだけ、彼が尽力しても。
それでもまだ、海は忘れていない。
シャルルと同じように、年月を受け入れているのに変化を拒否している。変化と忘却は違うとわかっていのに。忘却することができないから・・・毎夏狂うことでしかみずからを保つことができなかった美しい人は、ヒカルから目を反らさずに・・・じっと、食い入るように彼女を凝視した。

悲しい記憶を内包したまま、彼を・・・彼に暗く長い果てのない波間で彷徨っていることを強要する。
鳥も魚も打ち寄せる生物の息吹を感じない、作り物めいた箱庭のような空間で、ただ波だけが生き物として存在しているようだった。
その波の中で・・・ヒカルとシャルルは、対峙しながらただ立ち尽くしていた。

「代わりにしてとは言わない」
彼女は強く、一句一句に祈りを込めるような言い方で彼に告げた。
「私ひとりを定めろとは言わない。私は・・・あの人の娘だから。
シャルル」
そこで彼女は一度言葉を完全に区切った。
でも、その言葉を抑えることは出来ないと言うかのように、すぐに唇を開いた。
彼から視線を反らすことはなかった。

強く激しい晄を見て。
シャルルは・・・かつての自分を思い出していた。
惑うこともなく迷うこともなく、ただ、みずからの真実について、確信していたあの青春の輝きの一瞬。彼は目の前に居るヒカルと同じ目つきをしていた。

そして。
同じ瞳を持つ彼が唯一親友と呼んだ、太陽のようなあの男を思い出した。

「シャルル」
彼女は彼の名前を呼んだ。
それが言霊となって聖句となり、彼の体を縛した。

ヒカルは拳を握った。
両腕を彼女の体につけて・・彼女は、拳を握って、彼に痩躯を篩わせた。
「シャルル」

彼女はゆっくりと言った。

「ねぇ・・・シャルル。
シャルル・ドゥ・アルディ。
私の声が聞こえているのなら。
私の願いを聞いて欲しいの。

生きて。
生きて・・・・
生き抜いて。

私と・・・
私と一緒に生きよう。
私と一緒に生きていこう。
一緒に・・・一緒に居よう。

これまでと同じように。これからも同じように。
シャルルが死にたいなら、一緒に逝く。
死は恐くない。
死は寂しくない。
でも、悲しむ人が居るから。
あちらに渡っても、あちらに居る人達は悲しむから。
私はそれは恐い。それは悲しい。

だから・・・

まだ・・・まだ逢えない。

いつか、逢いに行こう。
いつか、一緒に行こう。

でも、今じゃない。

シャルル。

シャルルに・・・
全部あげる。
全部。
この私が手にできる全部をあげる。
私の命も、私の心も、私の細胞も、私の何もかもを。
だから・・・だから、生きて欲しい。私と生きて欲しい。」

「やめてくれ」

彼は両手を上げて、その端麗な顔を覆った。
最後の言葉が、彼を激しく困惑させた。

「何を言っているんだ！」
かつて、あの人に向けた言った言葉を、あの人と同じ貌をした娘が、口にした。
誰に教えられてもいないのに。
彼が、あの人にそう言った言葉は、あの人と彼の中だけで終わった言葉だった。

心臓が激しく鳴動する。
声が掠れて出ない。
眩暈がして、頭が割れそうなほどの痛みを伴った耳鳴りがする。
鼓膜がおかしくなりそうだ。

彼は背中を向けた。
彼女に背を向けて、激しく・・・顔を覆ったまま、大きく肩で呼吸をした。
だが酸素を肺に入れることが出来ない。
胸が苦しくなり・・・そして昏倒しそうになるが、脚を打つ波によって、この場で倒れるわけにはいかないという本能が、かろうじて彼の直立を保ち続けて居る。

顔を覆った両の手が、ぶるぶると細かく顫動する。

「オレはあの人だけを愛している！」
「わかっているよ・・・そんなことは」
ヒカルは彼の背中にそう声をかけた。
何を当たり前のことを言うの、と言った。

彼は・・・目の前に広がる海原が、つい先頃まで彼が揺蕩っていた無幻症の症状と良く似ていることに気がついていた。
波に乗って彷徨えば、どんな遠くにでも行ける。
でも、波に逆らえば、ほんの近い距離であるのに行き着けない。

夢を見ないのに。
彼はある時期だけ、夢を見る。
もう、戻らない時代に戻る。
そして・・・もう、言葉をかけることのできない人に、愛を囁くことができる。
その時、彼は決まって同じ事を言った。
「全部、君にやる」と言った。
ありがとう、と微笑む者が本当のマリナ・イケダでないことも、わかっていたのにそれで満足して・・・その夏を終えることができた。

なのに。
それなのに。
目の前の、本当にあの人に最も近い魂と容姿を持つ人物は、彼に全部を引き渡そうと言う。
彼と同じ事を言う。
彼の愛と同じ愛を持っていると叫ぶ。
彼は唯一を定めたが故に、他の愛を受け入れられないと言うのに、その彼と同じ愛でもって、彼に囁く。叫ぶ。伝える。

「わかっているよ。シャルルの全部が欲しいと言ってない。私の全部をあげる。だから、シャルル・・・・だから」
「言うな！」
彼は叫んだ。

激しく動揺していた。
彼はシャルル・ドゥ・アルディであるのに。
彼は・・・もう愛はしないと決めていたのに。

あの人への愛が継続したまま、死を迎えることを望んだのに。

■192

「私は・・・あの人を愛してるシャルルしか知らない。
あの人を愛していることに惑うシャルルしか知らない。
だから、あの人の代わりに私を愛して、とは言わないし言えないし・・・」
ヒカルはそこで初めて言葉に詰まった。
彼の背中を見つめながら話をし続けるのは難しいと感じたからだ。
「シャルル。こちらを向いて」

彼はまだ彼女に背を向けたままだった。
潮に濡れて、彼の鍛えられた筋肉質の背筋が衣類越しに露わなり、何も身につけていない姿より妖艶だった。
空は夕暮れを越えて間もなく闇に落ちようとしている。
街灯がほとんど設置されていないこの場所が、徐々に紺瑠璃に染まっていく。
茜色の夕陽が薄くなり、空に白く浮かび始めた月が姿を現し始めていた。
そしてそれに気がつくこともなく、地上の波間に体を置いて、ヒカルはシャルル・ドゥ・アルディの姿を凝視していた。

薄暗がりでもよく見える。
細かく打ち震えている彼の様子も手に取るようにわかる。
自分自身の心もシャルルに呼応するかのように、震えていたから。

何が悪いとか。
何がいけないとか。

責めるだけしかできない幼いヒカルはもういなかった。
責めることさえできないシャルルはもういなかった。

彼らは、長い時間を経験して・・・それでも変化することをやめようと、無言で承知しあった。

シャルルは。
いつまでも素直で従順なヒカル・クロスを、育てた。
あの人と良く似ているけれどあの人はもっと違っていたという比べ方をすることで、心の平穏を保っていた。
比べる事なんてできやしないと思っていたのに・・・あの人と違うヒカルを見て比較して安堵

した。
あの人への愛は唯一絶対で、ヒカルがたとえどんなに酷似する風貌を備えていても、決して彼は愛を移すことはしない自分自身を確認し続けた。
そしてそれが彼の唯一の拠り所となった。
ヒカルが心の支えではなく、ヒカルがあの人の娘であるけれど、あの人そのものではないと認識できることが、彼の愛の物差しで価値観そのものだった。

ヒカルは。
親子になりきれないシャルルとの距離を詰めることも開くこともしないで、ただ、依存した。
心地よい距離を保ち続けて、そしてシャルルの苦悩に目を瞑っていた。
彼が本当は何に苦しんでいるのか、ただ見つめているだけだった。
それが彼の苦しみを助長していたのに。

ルイとシャルルと本当の家族になりたかった。
どんな形でも、シャルルと一緒に居たかった。
ルイへの憂いを払拭できるのであれば、自分の人生はアルディ家に捧げようと思っていた。彼女はそれほど・・・自分の何かを将来へ繋げようとは思っていなかった。
欲がないといえばそれまでだったが、彼女にはシャルルの居ない日々こそが、夢のようであったと今なら言い切れるから。

———そうだ。

そう。
ヒカルは・・・・彼女はアルディ家の薔薇に囲まれて育った。
通年薔薇の香りに囲まれた穏やかで静かな空間で、彼女は両親のことをゆっくりと考えそして癒してきた。
いつも傍にはシャルルが居た。

そこで彼女は何もかもを学んだ。
愛も哀しみも迷いも。何もかも。
何も見えていなかったはずであるのに、彼女は健やかに育った。
根本的な基盤を培ったのは、紛れもなくあの薔薇の家であり、薔薇の一族なのだから。

シャルルはいつも絶対だ。
間違えない。
けれども・・・本当にその姿はシャルルの姿なのだろうか。
ヒカルが知っているシャルルは、シャルル・ドゥ・アルディという月の一面なのではないのだろ

うか。
どうにもならないことで焦れることもあるだろうし、ルイとの距離を保つ彼の精神力には驚き呆れるばかりだ。
それでも。

「シャルル」
彼女はもう一度、彼の名前を呼んだ。ぴくり、とシャルルの躰が動く。
わかっているはずだ。シャルルも、このままでは居られないということを。
最初に壊したのはヒカルだった。
けれども、いずれ、こうして対峙することになるのは、時間の問題だった。
それを先延ばしにしたシャルルの理由を、ヒカルは知りたいと思った。
「父と呼んではいけない」と言ったのはシャルルだった。でも次には「父と呼べ」と言った。
いや・・・そうではない。ヒカルが戸惑うから、彼はそう言ったにすぎない。
彼の気持ちや憂いは、ヒカルより優先されることはなかったから。

いつもいつも・・・誰かが傷つくことを畏れているのに。
何気ない彼の一言で、誰かが一生を持ち崩すことを、シャルルは知っていた。
彼の言葉や行動というものが、どれだけの人に影響するのかも知っていた。
ヒカルが傷つくことを最も畏れているシャルルの背中を見つめる。

「私はシャルルを父と呼ばない」
彼女は宣言した。
「シャルルを救うことは出来ない。自分自身だけが、そうすることができるから。
私を救うことができるのも、私自身だけだ。・・・・だからね、シャルル。シャルルは・・・
もう、わかっているのでしょう」

愛しているからこそ、愛してはいけない。
愛しているからこそ、近くに居てはいけない。
愛しているからこそ・・・自らを滅ぼさなければならない。

彼がいつか聞いた愛の逆説について、その経緯を知らないあの人の娘が、同じ言葉を口にした。
そして、彼があの人に囁いた最大限の愛の言葉を、彼女は誰にも教えられていないのに、彼に還した。
還す・・・そうだね。
ここは還る場所だ。

人が海の中から息吹を漏らして生きていく直前の海潮がそこに広がっている。

生まれてくるときに、誰もが漂う閼伽水を今一度浴びて。
彼は彼女と供に陸に揚がった。もう一度呼吸するために。ああ、そうだ。
彼はずっと・・・こうして忘却と追懐という名前の波に漂って、時には水底深く沈んでしまっていた。

あの人が還ってくるべき場所。
あの男が戻ってくるべき場所。
そして、シャルルの愛もここに還ってきた。

贖罪の娘を伴って。
いや、贖罪の娘が、シャルルをここに還した。

「シャルル・・・・シャルルにこれで一度、還したよ。
愛を還した。
海に入らないシャルルが海に入った。
私を助けた。
私に生きろと言った。

でもシャルルは私と一緒に海に沈まなかった。
はやくあの人に逢いたいはずなのに。
シャルルが何かに・・・些細な理由でも、今死ねないと思ったから、今こうして私達は目の前に立っている。

それは・・・シャルルが生きていたいと思ったからだ。

だから・・・だから、その命。
私にちょうだい。私の命を受け取って。

私は、あの人を愛しているシャルルしか知らない。
あの人を愛したままで良い。

愛を捨てないシャルルの愛が欲しい」

■193

「オレの愛はひとつだけだ」
彼は呻いた。

「シャルル。シャルルが・・・こちらを向いて、私の顔を見てそう言うのだったら、私はそれを受け入れる。でも、そうして背中を向けていたら、シャルルの声が聞こえない。私とシャルルは違わない。私の愛もひとつだけだ。でも、愛はひとつしか持ってはいけないわけではない。いろんな愛がある・・・」
「だからそれが詭弁だと言う」

彼は両手を覆っていた手の平をそのまま持ち上げて、額に移し、両手で髪をかき上げた。

「私はその愛が欲しいと言っていない。その愛を抱えるシャルルが・・・愛ごと欲しい」
「駄目だ、それはできない」

シャルルが言った。
まだ、彼はようやく両の手を離して・・・・遠く海原を見つめた。
夕陽が沈んで、最後の光輪を水平線に落とし、一瞬だけ閃光を放って煌めかせる瞬間と同時だった。

「それなら、こちらを向いて。私に顔を見せて。目を見て言って」
ヒカルが囁いた。

一歩彼に近づいた。
波を分かつ音がして、シャルルは肩をぴくりと動かした。
彼も・・・ヒカルの気配を聞いているのだと思った。

「寄るな」
シャルルが忠告した。
「来てはいけない」
「それならシャルルがこちらに来て」
ヒカルは彼の美しい背中に向かって言った。
もう、これを逃したら・・・二度と彼とこうして向き合うことはない。
今度彼とこんな風にここを訪れるときはきっと・・・彼女は、あの人が去った年齢に達してしまう。
「シャルル！」
彼女は言った。
黒紫の帳が広がって行く。
その中で、夕闇の中で、ヒカルは彼の名前を呼んだ。

「私を愛してとは言っていない。一緒に生きていこう。あの人を愛したままで良い。あの人を忘

れることはしなくていい。私は・・・私は一緒に居る。一緒に生きる。それでもシャルルがはやくあの人に逢いたいというのなら、一緒に行こう。でも、その前に、私と生きて。私のために生きて。誰かのためでなくても良い。・・・シャルルのために、生きて・・・」

そこまで言うのが精一杯だった。
彼女は堪えきれなくなり、茶色の大きな瞳から涙を流し始めた。
泣かないと誓ったのに。
大人になってから、幾度となく彼女は涙を流した。
でも彼はもっとたくさんの涙を流していると思った。
濡れた海水と交じって塩辛かった。

もう、涙なのか潮水なのか判別がつかないほど・・・彼女は濡れて光っていた。
その名前のとおりに。
彼女は陽の光を受けていない夜の中でさえ、僅かな夕焼けの晄を一身に浴びて・・白く耀いていた。

彼に近寄ることは簡単だった。もう一歩か二歩、歩めば彼に到達する。
しかし、それでは駄目なのだ。彼から・・・彼からやって来なければ、駄目なのだ。

恋い焦がれて愛おしいという気持ちだけでは彼を動かすことができない。

「シャルル。・・・愛はね・・・愛は、永劫回帰しない。愛は繰り返さない。・・・・愛をするってそういうことではないの？」
「何がわかると言うんだ」
「わかるよ・・わかるよ・・・わかるんだよ、シャルル」
ヒカルは涙声でそう叫んだ。
彼の背中に向かって、叫び声を上げた。

「わかっていないのは、シャルルの方だ。
シャルルは愛を知っている。
この海に置いて・・・・捨てられない愛をそのままにして・・・。
それなのにそれを還してなお、まだ惑っている。
どうしてなの。
どうして生きてくれないの」

ヒカルの叫びに、シャルルは両の掌で、シャルル自身の肩を抱いた。
「オレは・・・オレの愛はひとつだけだ」

誓った愛を裏切ることはできない、と彼は言った。

「裏切る？誰に？何に？」
「オレ自身にだ」
彼は短くそう言いきった。

■194

彼は言った。
空を仰ぎ見ながら・・・彼女に背中を向けたまま。

「騙すのは、自分自身と愛を騙る相手と神だけで良いと思った。オレは二度、同じ事を繰り返した。二度・・・いや、もっとたくさんだ。
自分自身を偽って、彼女への愛を消そうとした。忘れることなんてできないとわかっていたのに。抱えて生きていくしかないと思ったのに。
好きになって良かったと思ったのに、好きになってはいけなかったと何度も自分を責めた。
それでもなお・・・結局・・・それでもうまくいかなかった。
だから。
もう、二度と・・誰も愛さない。
誰を裏切っても自分自身の愛は裏切らない。
・・・・そう誓った」

彼はヒカルに語りかけるというよりかはむしろ・・空に。海に。何かに向かって・・・そう、あの人に向かって吐露しているようだった。

「私と・・・シャルルが、あの人との愛を繰り返して欲しい訳じゃない」
彼女は言った。
「そちらに向かって語ってはいけない。シャルル。シャルルは過去に囚われているのではない。捕らえているのはシャルルの方だ。過去を・・・過去にならないならそれも良い。シャルルの中では思い出にできないのならその瑕を抱えて生きていけばよい。それがシャルルなのだから」
近づいてはいけないとあれほど自分を縛めたのに。
彼女はシャルルの背中に向かって・・・また一歩近づいた。
そしてそっと・・・彼の背中に触れる。
ぴくりと、筋肉質のシャルルの背中が顫動した。
彼は酷く弱々しく感じた。

「離れてくれないか」
彼は彼女を振り返らずにそう言った。
絞り出すような苦しい声音に、ヒカルは涙声で訴えた。

「こちらを見て欲しいわけではない。
私を見て欲しいわけではない。
ただ、シャルルにはシャルルの人生がある。
シャルルがあの人に囚われているんじゃない。
あの人の魂を捉えて放していないのはシャルルの方だ。
もう・・・もう、自分を責めなくて良いよ。
誰が悪いわけでもない。
ここにあの人の魂が帰ってこないのは、シャルルが悪いのではない。
・・・いつか、ここに生き物がやって来れば。
あの人も還ってくる。
だから、一緒に生きよう。
そして待とう。
この海がもう一度・・・あの人が戻ってくるまで一緒に海を見よう。
一緒に海に還ろう。
ひとりじゃない。ひとりじゃないよ、シャルル」

駄目だ、と彼は呻いた。
低く・・・低く静かに。

「早く離れてくれ。そうでなければ・・・オレはまた惑う。もう戻れなくなる。もう・・・戻りたくないと思ってしまう。・・・ヒカルが居るから帰って来られるのに」
「シャルル」
ヒカルは、手の平を彼の背中に当てた。
両手を・・・そっと、彼の背中にあてて・・・彼女の体温を伝えた。
水に濡れて衣類ごと体温が奪われていく彼の広い背中に。懸命に祈りを込めた。

空はすでに暗くなって・・・星が輝き始めていた。
それほど長い時間をここで過ごしていたわけではないのに。
どんなに日が長い季節であったとしても、夜になる瞬間というものはいつも・・・あっという間の短い時間だ。

「私の命が必要ならあげる。全部あげる。でも・・・シャルルは生きて欲しい。あなたが生きていることが必要だから。私は必要だから」

彼はやがて・・またひとつ大きく溜息を漏らした。
濡れた白金の髪が少しだけ色味を落として・・・海面の晄を受けて光っていた。
海の波は、もう、明るい紅蓮の命の焔色から様変わりして、シャルルと同じような冴えた淡い闇色を放っていた。間もなく完全に日が落ちればこの海の波色は、もっと濃くなっていくだろう。

「オレの気が変わらないうちに、消えてくれないか」
彼はそれだけ言った。

「これ以上。これ以上一緒に居れば、オレはあなたを本来の名前で呼ばない。あなたがどんなに泣き喚いても・・オレは貴女を連れて行く。あの海の底に沈めることも厭わない」
「シャルル」
「だから・・・だから、離れてくれないか」

彼はそう言った。
ヒカルに向かって、一緒に消えようかと言ったルイと同じ声音だった。
彼らは消えたいわけではない。
ヒカルは声が詰まった。嗚咽が漏れそうになるがぐっと堪えた。
彼に投げかけるのは涙ではない。
それでは彼に届かない。

「良いよ・・・シャルルが望むなら、それでも良いよ・・・！」
彼女はそう言って、一度だけ・・・彼の背中に向かって、額を押し当てた。
何かに祈るように。何かに囁くように。

シャルルが異変を感じて振り返ったのと、彼女が海深く、もう一度波間に飛び込むのは同時だった。
「ヒカル」
シャルルがようやく振り返ったのに。
ヒカルはそれを観ることもなく、また海に飛び込んだ。
海飛沫があがり・・・海の底は先ほどと同じ程度の深さであるのに、晄が差し込まないだけで、ぞっとするほど底のない深淵に辿り着いた気になった。
彼女は泳ぎは得意ではあったが、夜の海は初めてだった。
どちらが陸でどちらが沖かわからなくなるから。闇夜の海には入ってはいけない。
いつか、シャルルにそう教えられていたのに。
彼女はそのまま・・・水深く沈んだ。

万全の体調ではなかった。
彼女は酷く疲れていたから、足がすぐに縺れた。
着衣に水が再び吸い込まれて行き、そして彼女の腕もそれにつれて重たくなっていく。
背後で、シャルルが叫ぶ声がする。
彼に追いつかれてはいけない。彼から離れなければならない。
それがシャルルの望みだから。
それなら。
・・・ヒカルの願いは一体何だろう。

こうして、あっけなく・・・両親のところに行くことを決心することだったのだろうか。
これから先の未来について、シャルルに語り、もうヒカルの心配をしなくても良いよと安心させるためのパリ来訪だったはずなのに。

どうしてこうなってしまったのだろう。
どうして・・・自分の思いを彼にぶつけてしまったのだろう。
どうして・・・生きていくことは難しいのだろう。
そうして・・・シャルルは生きてくれないのだろう。
いくつものどうして、が彼女の頭の中で旋回した。

いつか・・・頭を強打して彷徨った波間を漂う感覚が再び彼女を包み込んだ。
今度は現実だった。
いつかのような浮遊感は感じなかったし、どんどん・・・足も手も躰も重くなっていく。
ヒカルの名前を呼ぶシャルルの声が遠くなり近くなり・・・彼女はそれに振りかえらずに、海に向かって躰を投げ打った。

「・・ヒカル！」

ああ、シャルル。ありがとう。私の名前を呼んでくれている。
それだけで良い。私が生きていることがシャルルを苦しめているのなら。私の顔を見て、あの人を思い出し、そして夢幻の世界に陥ることを余儀なくされるのなら。
私は・・・私の存在を海に還そう。
元々・・私の命はもっと小さな海の中で生まれた。
誰かに操作された生命だけれども。望まれて生まれたと思いたかった。
生まれてからどう生きるかが問題だと思っていた。
だから、生きていたいと思う。シャルルも同じように・・・生きていたいと思って欲しい。

これほどまでに、世の中は素晴らしい。春も夏も秋も冬も、すべてこの世の生命の美しさをシャ

ルルが教えてくれたのに。それを教えてくれた人は、生命の燦めきを放棄する。
それなら。
私ができる最大のことは・・・・

彼女の唇から海水が入った。
涙を流しながら波を切って進むので、彼女はすぐに呼吸困難になった。
呼吸を保つことができないが、この両手両脚の動きを止めれば、すぐさまシャルルに追いつかれてしまう。
ここは照明がないから。月明かりが海波を照らし出すまでまだ時間がかかる。
ほどなく沖に進めば・・彼女の姿は消えてなくなるはずだった。
シャルルの望みどおりに。
死にたいと思ったわけではない。
でも、消えたいと思った。

躰が重い。
ヒカルは勢いよく海水を飲み込んでしまう。
肺に水が入って・・器官が悲鳴をあげた。
それでも彼女は沈み込むことをやめなかった。

「ヒカル！ヒカル！」

愛は一つだけだと言い切ったシャルルのためにできることは・・・・ひとつだけだった。
彼が生きたいと思うのであれば、恨まれても憎まれても良かった。
誰かを裏切ってもこの愛を裏切ることができないとまで言った彼に・・向き合うために。いや、彼自身が彼の愛にもう一度向き合うために。
ヒカルができること。
それは・・・

「ヒカル！」
シャルルがヒカルの腕を掴んだのと、彼女の顔が水面に沈むのは同時だった。
「ヒカル！」
シャルルが渾身の力を込めて、彼女を抱き上げた。
脚が届く場所まで彼女の腕と肩を掴んで、引き寄せる。暴れる彼女の躰を引き上げるのは至難の業だった。
先ほどの倍以上の力でもって対抗してくる彼女の躰を押さえ付けて・・・シャルルはヒカルの体を自分の胸に寄せた。

「・・・！離して」
「いやだ」
「シャルル、離して。私を・・・あそこに還して」
「駄目だ、離さない。還さない」

彼はそこまで言うと・・・激しく咳き込むヒカルの背中をゆっくりとさすった。
腰を抱き、もう彼女が沖に出ようなどという暴挙に出ないことを確認してなお、彼は彼女の躰を寄せたまま・・・反対側の手で、彼女の背中を撫で続けた。
海の波の中で。
シャルルの胸の中で。
ヒカルは激しく嗚咽を漏らした。むせながら涙を流して言葉にならない言葉を叫んだ。

「ヒカル・・・ヒカル。おまえは生きろ。還ってはいけない」
「シャルルがいないと駄目なの。シャルルが居ないと私は息もできない。どうしてこんなに苦しいの。どうしてこんなに悲しいの。どうして・・・どうしてこれほどまでに胸が痛いの」
彼女はこどものように泣いた。
彼の胸の中で大声で泣いた。
これまでの涙をここですべて吐き出すように。

夕闇が彼らの上に墜ちた。

ヒカルの悲鳴にも似た慟哭が・・・波の音に消え隠れしたが、その間シャルルはずっと彼女の背中を摩っていた。
そして広い胸の中に抱き、彼らは陸に上がることもできずに、ただ立ち尽くしていた。

星が白く輝き始め、その合間から、月が顔を覗かせたことにも気がつかずに。
ただ静かな海の中で、彼らは漂ってた。

互いの温度を確認しながら。
いつしか、ヒカルはシャルルの背中に腕を回し・・・彼の胸の中で泣いていた。
苦しいよ、と何度も彼に訴えた。

そうだね・・・・オレも苦しい。オレも悲しい。オレも・・・・オレもだ。

シャルルが、そう言った。

■195

・・・どれくらいそうしていたのだろうか。

とてつもなく長い時間だったように思えるが、僅かな時間のようでもあった。

彼が自らの苦しみについてはっきりと吐露するのは、ヒカルと最初に出会ったあの時以来だった。
彼は決して自身の苦しみについては誰かに意識して話をすることはない。
話しても、それは決して緩和されるような程度ではないからだ。
彼の味わっている哀しみや心惑いについては、誰も・・・そう、誰も共感することもできないし、誰も分かち合うこともできないし・・・誰も癒すことができない。

あの人をあの男に返してから。
彼の周りを幾人もの人々が駆け抜けていった。
時折、彼に安らぎをもたらす者もいたが、それでも彼がのぞむ本当の意味の静逸をもたらす者はいなかった。
彼の周囲でほんの少しだけ風を起こし、彼の海原に飛び込んで来たかと思えばすぐに去ってしまう。
―――その繰り返しだった。

ヒカルは言った。
「愛は回帰しない」と。
そうだ。
元に戻らなかった。

また誰かを愛することになるとは思えなかった。
確かにその意味で言えば、愛を捨ててしまっていた。

一生分の夢を見たから。
一生分の夢を見続けていたいと思ったから。

「命をくれてやると言うくらいなら。生きろ。生きろ、ヒカル」
「私の命をシャルルが決めないで！」

彼女は泣きながら、彼の背を叩いた。
水しぶきとともに、彼の温度で温められた海水が、彼女の手の平で躍った。

彼女の茶色の髪だけが視界に入り、彼は惑いそうになる。
かつて、胸に抱いたあの人を思い出させるその色から意識を反らすことができない。

・・・・誰かがどこかで見つめている。
・・・・誰かの視線を感じる。

波が彼らを打ち付けるのに。
それでもなお、そこは静かだった。
そこは彼が求めてやまない幽寂があった。
彼女の大声で叫ぶ声振が彼の胸を打ち振るわせるのに。
彼はただひたすら・・・ヒカルの体を抱いていた。
いや、抱かれていたのかもしれない。
彼らは寄り添っていた。
それが正しい。
どちらかに靠れ掛かるのではなく互いが寄り添った。
彼女の華奢な躰は海に濡れて冷たかった。
それでも彼女は自らの命を燃やすように・・・熱い涙を流し続ける。
それが時折、水温が下がってきた海水と異なると主張するかのように、彼の鎖骨に落ちた。

彼女は生きている。
消えたいと思っているのに。
それでも躰が。本能が、生きろと彼女に囁く。
彼女は若い。
心と躰が追いつかないのだ・・・。

「もう逢えなくなっても良い。ヒカルが生きていれば良い。だから・・・だから、早くここから離れろ」
体温を奪われて、小刻みに震え始めたヒカルの体を抱きながら、彼はそう言った。
彼の唇から漏れるのは・・・絞り出すような掠れた声だった。

早く、あの薔薇の家の籬から解放されて・・・自由に生きろ。
自由に生きたあの人と同じように。

あの人も・・・決して自由ではなかった。

ヒカルを産むために大変な苦痛と労力を強いられた。
それでもあの男との愛の証が欲しかったのだと思うと・・・激しい情炎が今でも立ち上る。その一方で、あの男に托して良かったと思った。
返して良かったと思った。
彼女が穏やかな愛をシャルルと築こうとしたのに、それを捨てて・・・激しい愛を手にしようと足?いたから。
そんな彼女を見て、寂しかったが嬉しくもあった。
愛について彼と同じ激しさを持っているあの人が、この世に居る事が嬉しかった。

たとえ違う人生を歩んでいくことになっても。それでも良かった。

あの人を愛していたんだ。

彼は呟いた。

愛している。
死ぬほど、愛している。

何度そう囁いたことだろう。
何度そう呟いたことだろう。

彼が恋人と思うことのできる者にさえ、そう言うことができなかった。

だから・・・だから、夏になると現れる彼だけの幻のマリナに、彼はいつも囁く。

愛しているよ、と。
死ぬほど、愛しているよ、と。

でも、今。

目の前の人は、死んではいけないと言う。
一緒に生きようと言う。
死ぬほど愛するのではなく、生きたいと思うほどの愛をしろと言う。

彼が出会った者の中で、最もあの人に似ている者が・・・・死ぬほどの愛ではなく、生きたいと

思うほど愛してくれと叫ぶ。

彼の目尻に熱いものが浮かぶ。
喉がぎゅっとせり上がるような感覚を伴う。
それは彼女が落とす熱い命の燦めきと同じものだった。

苦しい、と彼女は叫ぶ。
悲しい、と彼女は嘆く。
寂しい、と彼女は欲する。
愛している・・・と彼女は彼に訴える。

誰かが・・・誰かが見ている気がした。
彼と彼女しかいない湾で。
確かに・・・誰かの視線を感じる。
それは彼がよく知っている視線だった。

時折、心配そうに・・そしていつも慈愛に満ちて・・・

潮が満ちてきた。
彼らの腰元までしかなかった波が、シャルルの胸を打った。
ヒカルはシャルルに抱きかかえられたまま・・そのまま大きく息を吸った。

「シャルル・・・涙を流すだけが泣くとは言わない。苦しいなら一緒に苦しもう。悲しいなら一緒に悲しもう。泣くなら・・・一緒に泣こう。
全部をあげる。でも、シャルルの・・・半分をちょうだい。
私はシャルルの苦しみも哀しみも痛みも・・・分かち合おう」

がつん、と何かに打たれたような衝撃がシャルルの後頭部を殴打した。
青灰色の瞳が・・・胸の中で叫ぶ贖罪の娘を直視することができずに・・・大きく息を吸って・・顎を上げて・・・そして、昇りゆく桂月に初めて気がついたというように、空を見上げた。
もう、空は濃い端色になっていた。

目の前の腕の中の人は。
あの人と同じ容姿をしているのに。
分かち合おうと言った。
全部をやろうと言ったシャルルと違う言葉を述べた。
半分。

全部ではない。
半分をくれ、と言った。
彼女は全部、シャルルにくれてやると言ったのに。
シャルルには、半分が欲しいと言った。

愛は同じだけを求め、愛は同じだけを捧げるのかと思っていたのに。
彼女は、同じものを求めては居ない。
自分はすべてを捧げようと言ったのに。
シャルルには、五分で良いと言う。

この人は・・・・

シャルルは絶句した。

それは、シャルルがシャルルであるための「何か」をそのままに・・・
そして、それを抱えたまま。
彼女はそれでも・・・哀しみも苦しみも一緒に内包しようと申し出た。
半分だけ共有しようと言っているのではない。
分かち合おうと。
彼の苦しみは誰かが引き受けるものではないから。一緒に共有しようと言ったのだ。

これは・・・誰も彼に言わなかった言葉だった。

「ヒカル・・・！」
彼は彼女を強く抱き締めた。

彼は何を見ていたのだろう。
彼女はこんなに美しく・・・心健やかに成長した。
それは誰でもない、あの人とあの男の魂が育んだものだ。
彼が教えたものではない。

彼女は幼かったのに。

倒れた彼に、水浸しのタオルを差し出した。
困った人が居たら、助けてやれと教えられて育った。

シャルルがこうして・・・澱んだ苦しみに身悶えしている様を、ヒカルは放置できなかった。

ヒカル。
ヒカル・・・・！

彼は何度も彼女の名前を呼んだ。
苦しい。
胸が苦しい。

彼女と同じように、呼吸をすることが苦しい。

慟哭を放つ彼女を腕に抱きながら・・・彼は同じようにその共鳴を自身が透過することを許可した。

「ヒカル・・・・！」
シャルルはそう叫ぶと、彼女の肩を力一杯抱いた。

哀しみを。苦しみを。愛を。喪失感を。すべて共有してきた、愛おしい永遠の晄を、彼は今一度強く抱き締めた。

■196

シャルル・ドゥ・アルディは苦しいのに。
苦しくなって・・・ヒカルの体を強く抱き締めた。
苦しみから逃れるように、彼女の華奢な体に縋り付いた。

贖罪の娘を胸に抱けば、彼の罪が軽減されるとは思っては居なかったけれど・・・。
上手く愛せない、ひとり空回りする愛に・・・・彼女が囁いた。

一緒に生きよう・・・と。

彼は好きになってはいけない人を好きになってしまった。
愛を始めてしまった。
そして・・あの人が、結ばれたいと想う相手から引き離してしまった。
それは彼の罪だ。
その後に、ふたりが本当の愛を知って結ばれたとしても。

彼が割り込んでしまったあの時間は、彼らに何も影響しなかったと言えば嘘になる。
あの人が覚えてしまった憂いを与えてしまったのは、シャルルが原因だ。

この世界でたったひとりだけ・・・大事な人は君だけしか居ない。

それを・・何度あの人でない者に伝えたのだろうか。

彼の背中で拳を握り、むせび泣く彼女を捨て置くことはとうていできなかった。
彼女は・・彼が育てた人物であるが、それ以上に、シャルルの晄であり喜びであり・・・そして
彼が哀しみを乗り越えるために必要な大事な家族だった。
愛はひとつではない。
確かにそう思う。
愛は・・・愛という名の慈愛はひとつではない。
だからこそ、ヒカルにあの人を重ねるわけにはいかない。

彼の名前にかけて。
彼の誇りに誓って。

シャルルはそこで切れ長の瞳を勢いよく閉じた。
追い詰められたような・・・そんな勢いでもって彼は双眸を閉ざした。
胸が熱い。
胸が苦しい。
この世界でたったひとりだけ・・・護りたい人が居る。

離せない・・・・離さない・・離したくない。

この世界でたったひとりだけ・・ひとりだけが、彼の苦しみを壟断することができる。

愛のパラドクスについて、彼に教えた人がいた。
愛のパラドクスそのものを教えたあの人はもういない。
愛のパラドクスについて・・・今、共有しようと言う人が居る。

この風を。
この波を。
この息吹を。
この空を。
この・・晄を。

彼は苦しかった。
いつも苦しかった。
生きる事が苦しかった。
ヒカルを見守ることが苦しかった。

今、ここでもがく自分たちのように、いつも・・清麗な空気を求めて、天を仰いでいた。

でも、彼女が居た。
彼女の晄はいつも眩しかった。

いつもさざめいていた。

春の風を受けて。
夏の風に煽られた。
秋の風が彼を撫でた。
冬の風が彼を凪いだ。

いつもいつも・・・
あの人は。
風になって。
雨になって。
晄になって。

・・・彼の傍に居たのに。

そして彼の傍に居た者は。
あの人の魂だけではなかったのに。

譲れない答えを探しながら。
彼はいつも彷徨っていた。
胸が熱くなるほどの思いを抱えながら。
時の流れを知った。
それも譲れない自らの孤独と誇りと・・愛を感じながら、彼は生き存えた。

心を・・・心を燻らせる様々な景色を、ヒカルと一緒に見つめてきた。
彼女が色鮮やかな景色に歓声を上げる度に。

彼女が理由もなく景色に涙を浮かべながらそれでも涙を流さない様に。
シャルルはいつも・・・いつも心を痛めた。

身勝手な愛と言えばそれまでだった。
こんなに・・・こんなに愛を知っているのに。愛を知ることができたのに。
それでも・・・あの人に愛を囁くことはもうできない。

あなたへの思いで溢れている。
あなたへの哀しみで堪えられない。
あなたへの・・愛を伝えきれていない。

そこへ、ヒカルが一緒にそれを得ようと言った。

シャルルは戸惑った。誰も・・・誰もそんな愛の共有を申し出なかったから。
誰も・・・その一つだけしかない愛に取って代わることを望んだ。
彼の愛を凌駕し、そしてそれを越える愛を求めた。
彼は・・・愛を捨てることができないのに。

■197

哀しみも苦しみも激しさも何もかも。
彼女は何もかもを一緒に味わおうと言った。

シャルルは流れ行く自らの言霊にかわる熱い飛沫を、目の端から零れ落とすことを拒否できなかった。

溢れる気持ちを・・・もう、抑えきれることが出来なかった。

「ヒカル・・・ヒカル」

彼は彼女の体を抱き締めた。
もう一度、強くしっかりと。

海の波間の中で、波がその動きに逆らう音がした。
彼が彼女の背中を両手で抱く音だった。
水音がした。

「ヒカル・・・！」
彼は何度も彼女の名前を呼んだ。
もう、それ以上彼女の名前を囁いたら、惑ってあの人の名前を呼んでしまいそうだった。彼の唇から漏れる声が、ヒカルと呼んでいるのに。
違う名前を・・・あの人の名前を言うわけにはいかない。

彼の誇りにかけて。
彼の名前にかけて。
ヒカルを傷つけてはいけない。
ヒカルを泣かせてはいけない。

それでもヒカルと呼び続けなければ、彼の隙を襲って、幻愛という彼の最大の狂気が、すぐさま・・すぐさま、彼の望んだあの青春の輝きの時代に引き戻していきそうだった。

不思議だった。
彼は、あの時代に還りたいと思って、彼自身が望んだ世界に・・・夏の一定期間身をやつすことを望んだのに。
それなのに、彼は今、その世界に入り込むことを畏れている。

彼はもう少しで、永遠と定めた運命の人の名前を呼びそうになる。
そして一瞬の躊躇いを残したまま、贖罪の娘の名前を呼んだ。
かろうじて。

生きる事に決着をつけて、未練を残すまいと思ったこともあった。
彼は執着することをやめた。

でも・・・でも、未練を残したら駄目だと思った。

目の前の人は、マリナ・イケダではない。
そう、マリナ・イケダはもう居ない。
彼が最後に話をした彼女はあくまでも・・マリナ・クロスだった。
彼の愛したマリナ・イケダであってそうではなかった。

「シャルル、こちらもあちらもない世界に行こう。
シャルルならできる。シャルルなら・・そこに行き着くことができる」

彼女は声を限りに涙に濡れたまま、彼にそう訴え続けた。
彼に語り続けることが、彼女の唯一の誠意だと言いたげに。

吐息を体に巻き付けて。
彼女は彼に愛を冀って貪ることを放棄する代わりに・・愛について彼に問い続けた。
彼は胸の中に息づく温もりに向かって言った。

「シャルル」

彼は深く憂いのある青灰色の瞳を強く瞑った。
彼女の髪の香りと潮の香りが相まって、浮遊感が増していく。
それは海波に漂っているそれではなかった。
ヒカルとは逆に・・・彼はどんどん、現実でない世界に引き寄せられながらも、かろうじて自制心を保っていた。
波に攫われていく足元の砂の蠢きさえ、彼は遠い感覚のように思えてならない。

そうでなければ、彼はすぐさま・・・彼女と一緒に、遠く沖合まで手を取り合って逝ってしまいそうになる。
いや、彼女が嫌だと叫んでも拒否しても、彼はそのまま彼女を水底まで引きずり込んだだろう。

彼の先ほどの言葉どおりに。
長らく彼が望んでいたことだったから。

シャルルはヒカルの震える肩を抱いた。息も出来ないほど強く。激しく。
そして・・・そして、彼女の濡れた髪の毛ごと、後頭部を、大きな両の掌で包んだ。
彼女はまだ泣いていた。慟哭していた。哭声を彼に浴びせ続けた。
「ヒカル、泣くな・・・」
頬を寄せて、彼女のこめかみに頬を当てた。
彼女の顔は泣涕のために炎のように熱かった。
発熱しているのかもしれない。
だが、その熱が彼をこの世に留めている。
彼の中で残る医師としての杞憂を持ち合わせていたので、彼女の体調を気遣った。
それでもそんな現実の彼でありながら・・・目の前の人はヒカルであり、あの人ではないという切言が彼にいくつもの言葉を喃々と捲し立てていくことが煩わしいとさえ思う。
このまま夢幻の世界の入り口で・・・浸っていたいという強烈な欲求が彼を支配しそうになる。

「シャルルが一緒に戻ってくれると約束してくれるなら、泣かない」

彼女はやっとのことでそれだけ言うと、また、大きな瞳から同じだけ大きな粒を零し始めた。
涙を真珠にかえる姫の古の話を思い出した。
彼女はそれほど・・涙を流し、海に浸かり、満身創痍の状態でなお美しかった。
どうして離れていることができたのだろう。
彼女はこんなに美しいのに。
彼女をこれほど愛おしいと思うのに。
シャルルは彼女の頬に手を移した。
彼女の呼吸が乱れて・・・そして彼女の顔が露わになった。
雪のように白い滑らかな頬が浮かんだ。
波から突如浮かび上がったかのように、彼の視界にはっきりとヒカルの顔が飛び込んでくる。

「シャルルが一緒なら、泣かない。もう、泣かない」
彼女がそう言ったので、シャルルは黙ったまま・・・頬を引き寄せて体を少し屈め、彼女の額にシャルルの秀でた額を押し当てた。
彼らは月夜に惹かれて海間から陸にやってきた一対の人魚のようだった。
男の人魚と女の人魚が、陸を焦がれてやって来たのにそこで出会い、そこで・・・惹き合うかのように。
月華が彼らを静かに照らし出していた。
いつの間にか、月が出ていた。星が囁いていた。
彼の望む静かな・・・静かな波が彼と彼女を洗い流していく。
罪も哀しみも葛藤も何もかもを流していく。
彼らを・・・贖罪という言葉から解放して、無辜の民に還していく。

「駄目だ」
彼がそう言ったので、ヒカルはまた、大きな涙をこぼした。
なぜ駄目なの、と美しい真珠のような涙を惜しげもなく彼のためだけに流す。
唇は色がなくなり、彼女の色素の薄い肌は、ますます・・・白く透明感を持って透き通りそうな儚さを漂わせ始める。

胸が苦しい。

・・・でも、遠く沖合で。この海の向こうで、あの人が見ているから。
勇気を出して、という言葉が彼の耳に遠く近く聞こえてくる。

彼は長い睫を伏せた。酷く・・酷く怖々としながら。しかし・・ヒカルの頬を両の掌で押さえたまま、彼は額を押しつけて・・・そしてそのまま言った。

彼女の茶色の瞳をのぞき込んだ。
今度は目を瞑らなかった。
眼を反らさなかった。

この世界でたった一度だけだ、と思った愛をもう一度・・・もう一度だけ、信じてみようか。

シャルル、あたしに心を開いて見せて。
―――あたしに恋させてみなさいよ

声が、聞こえた。

マリナ。

シャルルは声にならない声を出した。
ヒカルに聞こえたかもしれない。
彼女の泣き声がやんだから。

彼の深い双眸から・・・見る間にふわりと淡い滴が浮かんで、ぽつりと落ちた。
彼の頬も海水で濡れていたのに、それはまったく異質のものだった。
彼女と同じように・・・真珠のような魂の滴のような、そんな涙を落とした。
喉が詰まり、目頭が熱くなって、堪えきれない激情を迸らせ・・・彼は大きく息を吸った。
息を吐き出せばまた余瀝を残してしまうから。
彼は、軽く息を止めた。
ゆっくりと少しずつ息を吐き出す。
そして、彼女の額にまだ額を押しつけたまま・・・さらに顔を傾けて、ヒカルの頬に彼の精悍な頬を添えた。

ごめんよ、マリナ。
オレが君を還さなかった。
還そうとしなかったから・・・ここに戻ってこられなかったんだね。
オレの心の中に沈めていた狭隘な妄執が、君を閉じ込めてしまっていた。

「おれは・・・ヒカルを泣かせる。泣かせないと約束はしない。きっと・・・何度も泣かせる。
でも、流した涙を止めてみせる」
ヒカルもシャルルの瞳を見ていた。

蒼く冴え冴えとした澄んだ瞳だった。
涙で互いの瞳は潤んでいたし・・・勢いよく海飛沫を浴びていたから、充血して澱んでいたかもしれない。
でも、シャルルの瞳は美しかった。

・・・深い月夜の海に乱反射する色がそこにあった。
彼女の姿が映っていた。

彼は頬を彼女に更に強く押しつけた。
彼女の溜息と嗚咽混じりの深い呼吸音が聞こえてくる。
二人の間に波は滲入してこなかった。それほど彼と彼女の距離は近く触れ合っていた。
心臓の音が聞こえる。互いの生きている血潮の流れがわかる。
そして・・・涙を流し互いを気遣い、お互いが同じ人物について想い憂え目の前の相手が愛してやまないあの人を愛しながら生きていくことを赦す。

「ヒカル。もう戻らない」
彼は囁いた。
目の前の人に言った。

小さい声ではあるがはっきりと。

「・・・オレは貪欲だよ、ヒカル。
貴女の言う全部とは違う。
本当に、すべてを。・・・・全部だ。
全部が欲しい。
涙も笑顔も。
そして、貴女の心も何もかもを奪う。攫う。何も残さず、すべて焼き尽くすほどに・・穏やかな愛ではない・・・・それがオレの愛し方だ」

何もかもを奪うしか出来ないと言ったルイ・ドゥ・アルディと同じ言葉を言った。
奪うのではなく、差し出すのに。
ヒカルは涙をこぼした。
彼はフランスの華なのに・・・どうして愛に関してだけは、不器用なのだろう。

彼はそれだけ言うと・・・顔を起こして、彼女の顔を見つめた。
全身濡れた彼女は眩しかった。

もう日は落ちて・・・彼と彼女を照らし出しているのは、茜の陽射しではなく、柔らかい月光だった。

シャルル。
ヒカルが少し微笑んだ。

もう、戻らない。戻れない。戻るつもりはないから。
彼は視線で彼女に告げると、それに呼応するかのように、彼女は小さな顎を引いて承諾の合図をした。

彼はそれを待って・・・・ヒカルにそっと唇を寄せた。
本当に静かに。軽く触れるだけでも罪深いと言うように。
薄い唇は少し震えていた。
彼女の若い瑞々しい唇に触れるだけで息苦しい。
胸が高鳴り・・・彼はあの人と交わした口吻を思い出していた。
それとは違うキスだった。

触れた場所から何かが新しく息吹くのを感じる。
そして伝えなければならないと思うことが溢れ始める。
彼の胸に蕾が生まれた。
永遠に咲き続ける「ファム・ファタル」という薔薇の傍で。
もう一つ・・・彼の中で新しい種が生まれた。
品種改良などではない・・・自然の中から生まれた稀なる魂を持つ、彼だけの晄になりたいと言った花が、彼の為に咲くと言って・・・彼の胸に蕾んだ。

それは初めて交わす接吻ではなかったのに。
全身が熱くなり、手足が痺れ、そして触れた唇から電流のような震える刺激が彼を鳴動する。しかし不快ではなかった。一瞬だけの触れるようなキスであるのに。
彼は眩暈がしそうなくらい甘美な心地に酔いしれた。

涙と海水の味がした。

大きな波がやって来た。
彼らを・・・横から大きく打ち返した。
彼らは少し、陸に向かってバランスを崩した。
まるで誰かが意図して・・彼らに指示しているかのように。

ふたりはそこで躰を離した。

罪深いオレを罰しても良いよ・・・
でも、地獄に堕ちても・・・贖罪の娘がどんなに責めても・・・
オレの生で償おう。オレの全部をやるから。

彼は彼女の腕を掴んだ。
波によって彼女の躰が彼から離れた反作用だ、と訴えるように。
波を切る音がして・・・ヒカルが再び彼の胸に飛び込んできた。
シャルルはその躰を今度も同じように、強く抱き締めて・・・そして今度は長く激しいキスを彼女に落とした。

何度も、何度も。
彼女がどういう表情をしているのか、確認することもしなかった。
確かめるという行為はもう必要なかった。
彼女は肩を震わせていた。
瞳をかろうじて閉じていたが、ぎゅっと・・眉根を寄せて、突然の嵐のような接吻に荒らされていた。
ヒカルが戸惑って何度も腕を上げ下ろしした後に・・・シャルルの背中にそっと腕を回すまで、彼は何度もヒカルに口付けした。

その間。
ふたりには、言葉はなかったが、確かに言葉を遣り取りしていた。
何往復も。

ただ一言。

・・・愛している、と。

ただそれだけの言葉を伝えるために、彼らは何度も唇を重ねた。

波音が静かに・・・夜の海辺に響いていた。

■198

シャルルとヒカルの影が一つになってから。
どのくらいそうしていたのか、わからない程の時間が経過した。
経過したことはわかっていた。
時間というものを感じる余裕もなく、シャルルの唇はヒカルの唇に添えられたまま、いつまでも彼女の躰を解放しようとしなかった。
手離せば、波がヒカルを連れ去ってしまうと危惧するかのように、彼は彼女の腰を抱いたまま指先に力を込めた。

もう、離さないから。

彼の宣言通りだった。
陸に上がることもしなかった。
そのまま動くことさえできなかった。
移動して改めて彼女を抱き締めるという余裕がなかった。
誰かの愛に応えることがこれほどまでに甘美であるとは、誰も彼女に教えなかった。
シャルルは狡い。
そう思った。
すべてを彼女に教えたのに。
まだ・・･彼はヒカルに、あえて教えていないものがあると思った。
それを思うと胸が痛い。そして苦しくなる。
今・・・今、目の前の男性は、ヒカルの知っているシャルル・ドゥ・アルディではなかった。見知らぬ・・でも懐かしくこの上なく美しい人は、彼女から視線を反らせることもなく、ただ静かにヒカルを見つめている。
彼女は頬を少し朱くした。
これほどまでに熱情を込めた視線で、誰かに見られることがなかったから。
誰にも嫌われることがないように生きてきた。
これまでの人生の中で・・・誰かに恋われたことは幾度かあった。
アルディの薔薇たちの囁きよりも、健康的で闊達で、その微笑みにや健やかさに身を投じればどれだけ安らかになれたのだろうか、と思う。
でも、それではヒカルは自らにウィということができなかった。
それだけだった。
だから、今まで・・・恋も愛も優先することができなかった。
遠い空の向こうで、シャルルやルイや・・パリに住まう彼女のよく知る人物達が元気に過ごしているか考えることの方が嚆矢だと彼女は考えた。
そしてその考えが覆されることはなかった。
パリを再訪するまでは。

しかしその静でありながら躍動にも似た犇めきは、間もなく破られることになった。
なぜなら・・・シャルルが停めたベントレーの後部に、別の車がライトを煌々と照らしながら停車したから。
光にあてられた車が闇に浮かんだ。
その光の源の車が、アルディ家から差し向けられたものであることはすぐに分かった。誰も後部座席から出てこなかったからだ。
それは・・・シャルルとヒカルを乗せるためだけに用意されたものであることに気がつく。
よく教育された者たちが、シャルルとヒカルの姿を見つけて・・・声をもとんど漏らさずに、ベントレーの後部座席から毛布を出す姿が見えた。
あの車に毛布が積まれていて、彼が乗車してきた幅広のベンツには濡れた彼らの躰を癒すための様々な仕様が施されているのかと思うと・・・それを誰か差し向けたのか、だいたい察しがついた。
シャルルはヒカルを胸に抱きながら、薄く微笑んだ。

渡すつもりなんてないぞ、ルイ・ドゥ・アルディ。

彼は戸籍上の彼の息子の名前を呼んだ。
それは彼の遠祖の名でもあった。
太陽の子という名前であるのに、星辰の子と呼ばれる彼の息子として生きる男の名前を呼んだ。
彼と同じ容姿を持つ彼を・・・シャルルは初めて、ひとりの他人だと言い切った。
彼がルイをそう呼び表すことは滅多にない。それなのに・・シャルルはルイが差し向けた車で待機する者達に軽く手を挙げて合図を送った。

その無機質な光は、闇に差し込んだ。
罍独特の直線でもって、遠い海原まで闇を割った。
そこでシャルルが彼女の躰をぐっと持ち上げたので、彼が車の気配に気付いていたのだと
知り・・・ヒカルは泣き顔を自分の掌で拭った。
現実に戻ってくる。
そこで初めてヒカルは貌を顰めた。
彼女の頬や手の平や・・・躰が酷く痛んだ。
擦過傷が、海水に晒されて染みているのだ。
痛みが彼女を生への現実に引き寄せる。

「戻る。・・・上がるぞ、ヒカル」

彼の言葉に、ヒカルが彼に視線を戻した。
目の前の男性は本当に・・ヒカルの知っているシャルル・ドゥ・アルディなのだろうか。
彼の全身から生気が漲っている。
ヒカルの魂を半分貰い受けた彼が活力を燃やしつくすように青灰色の炎を全身から昇立たせているかのようだった。

彼に何かが宿ったのだろうか。
それとも・・・彼に宿っていた何かが還ったのだろうか。

わからない。
わからなかった。

でもこれだけは言える。断言できる。

彼女に触れたままの細く長い指は、ヒカル・クロスの知っているシャルルのものだった。
そして、彼は遠くを見据えていたけれども、決して・・夢幻の扉を叩いているわけではないということも理解できた。
戻ろうとしているのだ。
彼が迷い込んだ路から昶という永遠の光の源に。

・・・初めて会った時から。わかっていた。
彼は決して父になれない。ヒカルの父にはなれない。彼の言ったとおりだった。

白金の髪に、薄い青灰色の瞳を潤ませて・・・
ヒカルを越えて、誰かを見て居た。天使のような美しい人に、魅入られていた。
彼は具合が悪そうだった。
夏の陽射しに・・弱っていた。
タオルを額にあててやろうと思った。
彼はあの暑さにとても・・そう、とても酷く傷ついているような気がした。
蝉の音。白い鼬雲。湿った空気。強い紫外線。何もかもが彼の命を削っていると思った。
その時に。
ヒカルは思ったのだ。

天使さんがいる・・・と。

天使は天から遣わされた、使徒だから。優しくしなければならない。

・・・そうでなければ、お父さんとお母さんに逢えないから。

シャルル・ドゥ・アルディがこよなく愛する彼女の母も、同じようにヒカルは慕わしかったが。
同じように・・いや、もっと強く彼女は彼女の父が語った言葉の断片を記憶していた。

「いつか・・・あのフランスの華がヒカルを我々と同じように・・・愛する時がきたら。それが贖罪なのだから」

彼はそう言った。
確かにそう言った。
永遠に別れてしまう直前に。

ヒカルは流感にかかり、熱に浮かされてむずかっていた。
それでも、そんなヒカルの額に、唇を押しつけて、彼の父は神寿を彼の娘に捧げた。
「愛をするということは難しい。でも誰に教えてもらうものでもない」
ヒカルの父はそう言った。
「だから・・だから、誰かに愛をしたら。それを躊躇うことなく戸惑うことなく解放してくれ」

ヒカルの父が・・・彼の娘が彼の親友と呼ぶ男に恋をすると、わかっていたのだろうか。
強い癖のある黒い髪を、ヒカルの頬に押しつけた・・・その記憶が最後だった。

私は愛を知っている。
でも愛をすることを知らなかった。

ヒカルはまた、涙を流した。
シャルルが端正な横顔を見せて、彼女を波間から引き上げる動きに身を預けながら。
彼女はまた、泣いた。
シャルルが傍に居るのに泣いた。

これは悲しい涙なのだろうか。
嬉しい涙なのだろうか。
それとも・・・自分でない誰かが自分を通して、流しているのだろうか。

その様に・・・シャルルが気がついて、ふと。
力を抜いた。彼女が感じていた力強い作用が緩んだ。

シャルルは・・・
ふっと儚げに彼女に貌を戻した。
先ほどまで情炎を彼女に浴びせ続けたシャルルであるのに。
今は・・・とても幼く見えた。
彼の魂は、今、どこに在るのだろう。

「行こう、ヒカル。沖ではない。陸に行こう。・・・そしてそこに揚がったら。
もう逃がさない。
もう・・・離れてはいけない。

このシャルル・ドゥ・アルディに誓ってくれ。

貴女の名前ではない。

オレに・・・シャルル・ドゥ・アルディに誓ってくれ。

生涯・・これからの生涯をただ一人だけの人と定めるヒカルが・・・すべてを捧げるのは・・・
オレだけだと」

「誓うわ」

ヒカルは即答した。涙声がまだ回復しなかった。喉から絞り出すように、少し低めの湿った声で囁いた。誓った。

「シャルル。貴方は言った。私に言った。父と呼んではいけないと。魂に刻めと。それを・・・
私が忘れていると思ったの？」

そこまで言うと、二人の躰は完全に波間から離脱して・・・陸に上がった。
躰が浮力を失って・・酷く重く感じたが、不思議と心地良かった。
なぜなら・・シャルルと手を握っていたから。
彼の長身が完全に自ら揚がると・・・彼は目映い光を放ってヒカルを魅了した。
ああ、これが・・本来の彼なのだ、と思わざるを得なかった。

ヒカルの母が描いた、ミシェルとルイの絵の時代より・・・ずっと若々しい彼がそこに居た。
海で御祓をすませた御子神のようだった。
彼は・・･月光を浴びて、そして波にさらされて・・・すべてを還して還された。
彼がその短い時間で何を体感したのか・・・ヒカルの言葉では言い尽くせない程の激変があった。
それだけしか断言できない。
しかし・・海から陸に戻った獣王は、彼女の指に自らの指を絡めたまま、離そうとしなかった。

シャルルは冷笑した。

あのベンツが、ルイ・ドゥ・アルディが差し向けたものであり・・彼はこうなることを見越していたのだと知ると、脊柱に何か・・心地良い微電が走るのを感じる。
闘いの前の身震いというやつだ。
ルイ・ドゥ・アルディは。
あの男は、賭けをしているのだ。
あのベンツにシャルルとヒカルが乗り込むか。
ベントレーとベンツに彼らが別々に乗り込むか。
その報告によって今後の方策を立てるらしい。
ベンツから運転手が2人降り立った。
・・・ベントレーのスペアキーを持って、シャルルの目の前でエンジンをかける様子を見て、彼は確信した。

執着するなと言ったミシェルの忠告を守りきれずに・・愛に堕ちた男を憐れに思った。
悪いな、ルイ・ドゥ・アルディ。
オレは・・お前のように待てない。長い、悠久とも思える時間を過ごしてようやく気がついた。
同じだけ待ったルイの心が痛いほどわかった。

ヒカルが・・・彼を向く頃合いを待った。
ルイは気の遠くなるほど長い時間を待った。
待ちすぎた。
それはほんの僅かな差でしかない。

しかし。
しかし・・・シャルルは微苦笑した。

ヒカルを・・・ヒカルを離さない。もう決めた。

オレが決めたことは絶対だ。ルイ。

彼は微笑んだ。美しい微笑みだったが・・・彼の青春の輝きと呼び習わした時代の微笑みだった。

彼はもう一度愛を始めてしまった。
もう・・二度と眼を反らすことのもない、永遠の光に向かって微笑んだ。

「ヒカル。・・・戻ろう。ここは冷える。ここにはまた来よう。・・・・でも。覚悟してくれ。
次に来る時には。ここに来る時には。ヒカルは・・・黒須晄でない。
そうでなければここに立ち入ることを赦さない。シャルル・ドゥ・アルディの名前に誓う。

・・・ヒカルの全部をオレに。オレのすべてを貴女に。

この言葉を貴女も誓ってくれるまで・・・オレは貴女にここに立ち入る許可を下ろさない」

ほらね、貪欲だからねと言っただろう。

彼は添う言って微笑んだ。
濡れた白金の髪を・・・彼女と繋いだ手の反対側で書き上げた。

海から・・還った彼らは・・・水を含む重い体を引き上げて、それでも重力の申し子として生きる事を選択した。

いや、彼らは・・もう一度、生きてみようと思ったから。
傍らに居る人と一緒に、生きてみようと思ったから。
苦しくも悲しくも重い力の作用するこの世に、戻って来た。
愛という重みは決して・・・苦しいだけではないと知ったから。

彼らの手は繋がれたままだった。

ベンツの光に向かって・・・彼らは歩き出した。

ゆっくり。でも確実に。

別々の車両に乗るなどとは考えられなかった。
もう、片時も離れないと彼は誓ったから。もう、一秒でも・・・彼女を感じない時間を過ごすこ

とはできないと思った。

シャルル・ドゥ・アルディは。

この時。

二度目の・・・二度目の愛に堕ちた。

愛ではない。恋でもない。区別できない大きな感情が彼らを包んでいた。
誰かから見られている。彼の感覚はいつしか・・誰かから見守られている。
そう思えるようになっていた。
茶色の髪の茶色の瞳の・・・美しく若い人は、シャルルに微笑んだ。
そっと。
はにかむように。その微笑みは、あの人と違っていた。何もかもを・・・何もかもを教諭する人と交わす笑みに、彼は同じように微笑みを返した。

「ヒカル。オレに呆れないでくれよ」
そう言うと、彼女はそこでくすりと声を漏らして笑った。
まだ鼻声だった。
「シャルル。・・・貴方は私に飽きることがなければそれはあり得ない。呆れさせないように互いに尽力しないとね。・・・ああ、そうね、厭きることも呆れることもないでしょう。あなたが・・・シャルル・ドゥ・アルディである限り」

彼女はそう言って微笑んだ。
シャルルはその微笑みが・・・眩しくなって、目を瞑った。一度だけ。
すぐに目を見開いた。彼女が現実なのか幻なのか混同することを避けるために。
孤独を増す行為ではなかった。
彼女の・・・温もりを感じながら。彼は、左手をぎゅっと握った。彼女の右手が繋がれていたから。

あの頃と同じように胸が高鳴り切なくなった。これは・・恋なのだろうか愛なのだろうか。

・・・・違うでしょう。シャルル・ドゥ・アルディ

誰かの声がまた聞こえた。
でも、それは最後の声であると彼はわかっていた。

愛をするのよ、シャルル

その声に導かれるままに。彼は見えない誰かに頷いた。
ああ、もちろんだよ。
オレを誰だと思っているのかな？
オレは完璧で‥‥完全になる愛しか保持することができない。

彼は微笑んだ。美しい、天使のような微笑みだった。
誰に向けるわけでもない、その笑みを浮かべながら。
ヒカルと一緒に、陸に上がった。
それは、彼の復活の宣言でもあった。

もう二度と同じ事は繰り返さない。

そう言い切るようなそんな強い光を瞳に宿しながら。
彼は、現世に戻って来た。
昶と言う永遠の光を伴って。

彼の魂の妻を得て。
獣王と誹られた彼は、獣から・・・人に成った。
愛を知って。別の愛も知って。生涯のひとつだけだという愛の別の解釈を得て。

彼は獣から人になった。

その様をヒカルに見せることは・・厭わしいと思わず誇りにさえ思った。
愛しているという言葉で尽くせぬこの世でもっとも・・・彼の魂に近い存在であると認識されて。ようやく。
ヒカルは、シャルルの魂に今、初めて、触れたような気がした。

■199

濡れたシャルルは待ち受けていた者が用意していたブランケットに近い大きな綿布を差し出されて、挑戦的に微笑んだ。

これを指図したのが誰であるか察していた。
・・・こうなることを予測していた者がいることに対して、彼は笑みを漏らしたのだ。
いや、その者は、こうならないことを予測していたのだ。

だからこそ・・・
車を差し向けた。
ヒカルとシャルルが永遠の別離の儀式を済ませて、互いに違う路を歩むであろうということも想定していたのだ。

シャルルは彼が運転してきたベントレーから荷物を引き上げるように伝えると、ヒカルの荷物を丁寧に移し替えるように、先ほどの言葉に加えて短く指示をした。
良く通るテノールで、彼は言った。
「戻る。ヒカル。同乗しろ」
彼はそう言って、彼女の肩に同じように用意されていた布をかけた。
壊れ物を扱うかのように・・・彼は自分の身なりより、まずはヒカルに目を遣った。

「ヒカル。・・・躰が冷える。瑕に障る」
彼がヒカルをアルディ邸に迎える前に・・・最初に言った言葉を、彼は忘れていなかった。
そのまま実行した。

シャルル・ドゥ・アルディは・・・最初に、ヒカルに言った。
彼女をとことん甘やかすよ、と。

今、目の前の男性は、ヒカルを幼いあの時と同じように・・・彼女の一挙手一投足に、息をつめて眺めるものだから、ヒカルは少し頬を赤くした。
彼女は全身海水に浸されており、そして躰の線が露わになっている。
シャルルだけではなく、運転手たちが目のやり場に困るというかのように視線をそらしたので、ヒカルは下腹で水滴を下垂するシャツを引き延ばした。
その行為が、ヒカルの腰元を露わにして、ますます・・・扇情的に香り立つことを彼女は理解していなかった。
ふわり、と彼は彼女に布をかけた。夜の月光から。男達の視線から彼女を隠すようにして、彼はヒカルの肩にそっと布地をあてる。
華奢な彼女の躰はすっぽりと蔽われた。
よく乾燥した薔薇の香りがほのかに残る布に身を包んだ。
「ありがとう、シャルル」
ヒカルは微笑んだ。
こんな穏やかな微笑みを、ここで落とすことができるとは思っていなかった。

「あまり甘やかさないで」
「甘やかす？」
彼はくすりと笑った。
同じように用意された大きなブランケットで、彼は躰の水分を軽く拭き取り、新しい乾燥したものと交換しようとしている最中のことだった。
白金の髪が乱れて、その隙狭間から、彼の青灰色の瞳がヒカルを瞥見した。
彼女はその視線と目が合い・・・そして口をつぐんだ。
これほどまでに・・・妖艶な彼を見たことがなかったから。

どうしよう。
どんどん・・・どんどん吸い込まれて行く。
呼吸をする度に。
瞬きをする度に。
彼女の意識は目の前の白金の髪の中からじっと彼女だけを見つめる男性に惹かれて・・・身動ぎすることさえ苦しくなる。

空はすっかり闇に染まって、車のエンジン音とライトだけが異質の存在のように主張しているだけの空間で。

ヒカルは、この状況なのに・・・胸が躍り彼の視線を浴びていたいと思う一方で、彼の視線から逃れないと・・・どうにも落ち着かないという気持ちにさせられる。

こんな気持ちは味わったことがなかった。
彼の視線を感じて・・・心安らぐことはあっても、心乱れることはなかった。
それなのに・・・それなのに。
目の前のシャルル・ドゥ・アルディは、彼女を落ち着かなくさせる。
頬が火照って唇が震える。
彼が見て居ると思うだけで・・・それだけで涙が出そうになる。
これをなんと言えば良いのだろうか。
言葉にできない。
言葉に表せない。

・・・でも、惹かれてやまない。
心臓が淅瀝を告げる度に。
彼女は彼に近づいていく。
息づかいや視線や・・そして何もかも、奇跡のようなフランスの華に、引き寄せられていく。

もう。
もう、どうしようもなく。

魂が。
魂が・・・惹かれるのだ。

どうしようもなく。

死ぬほど愛している、と伝えることと。
生きて愛し抜きたい、と伝えることと。
どちらの愛が重いのだろう。
そう、思った。

シャルルは、そっと・・・彼女の肩を抱いて、用意された乗車するように囁いた。
触れていたのに、触れると困ったように、彼女に触れていた彼の指は震えた。

濡れた靴は、脱ぐようにと言われたので、彼女は開かれた扉の向こう側の、革張りの後部座席に座りながら、靴を脱ごうとした。
濡れた靴は着脱が困難だ。
ヒカルは少し眉を顰める。
ああ、水浸しの重い枷をはずせ、とシャルルは言っているのに・・なかなか脚が言うことを聞かない。

すると。

シャルルがふっと風のように軽く動いて・・
彼女に屈んで・・・・水を含んですっかり重くなってしまった彼女の紐靴の紐を解き始めた。
神経質そうな指が器用に動く様を見て、ヒカルが慌てて言った。

「シャルル・・・自分で、できるよ」
「いや、できないからオレが遣るしかないだろう」

彼はそう言ったまま、腰を屈めて彼女に跪いたものだから、ヒカルが慌てて脚を引き戻そうとした。
「ヒカル」
足首を掴まれた。

片膝をついて、ベンツの後部座席に座りながら脚を投げ出すヒカルに向かって、叩頭するかのような姿勢をとった、シャルルは囁いた。
彼は決して、このような屈辱的な姿勢を取ることはない。
それなのに・・彼女の脚に触れることさえ僥倖であると言いたげに。
恭しくも厳かに、彼はヒカルに跪いた。

「貴女の脚に触れて良い人間は・・・オレだけだ」
彼はそういって、丁寧に靴の紐の縛めを緩め・・・そして、愛おしげに彼女の足頸に触れたので、ヒカルはびくりと躰を震わせた。
ヒカルのことを「貴女」と呼ぶシャルルは、ヒカルの知らない男の人のようだった。
よく知っているのに。
懐かしいのに。
それなのに・・・それなのに、胸が躍る。
なぜなのだろう。

ああ、そうか・・・

紐が解かれて、彼女の靴が彼女から離脱した。
両の脚が同じように自由になったとき。
いや、自由にはならなかった。
彼女は素足になったので、もうどこにも行くことができなくなった。
それでも、それは、自由になったと感じる瞬間だった。

素足で長い廊下を駆け抜けて・・・彼と同じ貌をした人物に走って近寄ったことを思い出した。
近づくためには、素足で走り込まなければ駄目だった。

今は。
今は・・・

彼女は曝け出された。
シャルル・ドゥ・アルディという人物によって。

後ろ暗い彼女の希望さえ、彼は受け止めようと言った。
そして彼女の叫びを受け入れた。

それが・・・例え見捨てられない情から来ていても良いと思った。

シャルルが何度も、そうではないと。
これから、愛を囁いても。

ヒカルは何かの際に・・・シャルルがこの世でもっとも愛している彼女の母について考えざるを得ないときが来ると思った。

構わない。
構わないよ。

だって、私とシャルルは似ている。
最も愛している人は、さらにもっと愛している人がいる人なのだから。

永遠の、片想いだ。

でも、それでも良い。

あの人を愛しているシャルルを愛しているから。
あの人の娘でありながら・・・昶という、あの人とは違う魂をシャルルが愛そうと誓ってくれたから。

彼は彼女の靴を祓った後に、一緒に後部座席に乗り込んだ。
その際に・・短く、行き先を「ロアールのシャトーへ」と言ったので、ヒカルはえっと声を漏らした。
彼女はブランケットを身に纏い彼を仰ぎ見た。

・・・そして少し離れた反対側の扉の傍で、シャルルは同じように濡れた髪を乱し光りながら躰を拭いていた。
美しい・・・天使のような人が、燦めきを拭っていた。
ヒカルは目を細めた。眩しすぎる。
彼女よりずっと年が上の大人の人なのに。
彼は・・・天が遣わした特別な人なのだと思う。
濡れた洋服というのはまったく始末に負えない。
素肌よりも、それに包まれた躰を露わに曝け出してしまう。
経年を感じさせない、若々しい肉体の動きが伝わってくる。

「ヒカル。オレがこうするのは、ヒカルだけだ。これから先は。オレが滅するまで。
ヒカルだけだ。だから・・だから」
彼はそこまで言うと、彼女に向かって、切ない光を携えて、斜めにヒカルを見下ろした。
溜息が出るほど美しい視線だった。

「貴女は、オレだけのものだ」
ヒカルは目を瞑った。

これが贖罪と言うのであれば喜んで身に受けようと思った。
あの人を愛し尽くして、愛したまま絶えることができなかった、シャルルへの贖罪だ。
あの人は。
シャルルの愛を終わらせることをしないで逝ってしまった。
シャルルは一人残されて・・・孤独なまま、生きていかねばならないという業火に灼かれてしまった。
自らが救うのは自らであるとわかっていたのに。
ヒカルが遺されてしまったから。

彼女の為に自己を滅し、そして息をしているのに死に絶えているというような虚無な時間を過ごした。
当主でなければ守れないものがあったから。
彼女を、救いたかったから。

でも、救われていたのは、どちらだったのだろう。
後にシャルル・ドゥ・アルディはそう言った。

彼女は罪を償うだけではない、もっと違うものをシャルルに捧げた。
だから・・・彼があちらの路を選ばずに、ヒカルに向き直った。

こちらとあちらを選別することはしてはいけないと言われた。
そう思う。
自分の歩いてきた路はいつも分かれ道に遭遇する。
だから、何が正しいかという路は・・・正解はないのだと思い知った。

シャルル。

ヒカルは、彼女と少し距離を置いて、ベンツに乗り込んだ人に囁いた。
声にならない声を発したのに。

シャルルは、ふと。
こちらを向いた。

いや、それまで視線を故意に反らしていたようだった。
彼女に呼ばれて・・彼は振り向いた。
青灰色の瞳をこちらに向けたので・・・ヒカルはなぜわかったのかと問おうとしたが。
それもできずに、シャルルの澄んで冴え渡った瞳をじっと見つめた。

「ヒカル。・・同乗するということは・・・オレの申し出にウィと言ったとみなす」
彼は言って、彼女に念を押したが、ヒカルは泣きそうになって、目を潤ませ・・・
ブランケットに身を沈めて、頭を垂れた。膝を立てて、車内でありながら、かつてのルイ・ドゥ・アルディのように、小さく身を縮めて、低く回答するだけだった。
「はい」

彼の申し出。
先ほど言われた内容を反芻する。
彼の愛を受け入れることがどういうことなのか・・・・彼女はそれに伴なう様々な利害得失を考えるよりも前に、彼の愛を受け止める度量を用意しなければならないと考えていた。

彼の愛は底がない。
彼の愛は果てがない。
だからこそ。
ヒカルだけが、彼の愛を受け止めることができるのだから。

車の扉が閉められた。
彼らは静かに・・・後部座席に座ったまま、各々の物思いに沈んだ。

それでも。

シャルルとヒカルの指先は・・軽く尖端が絡められたままだった。

どこまでも一緒だ

彼がそう囁いているような気がした。

■200　femme fatale

「あの・・・・シャルル？」
車の中で彼女はおずおずと彼を見つめた。隣に座るアルディ家の当主は、体をヒカルに向けて、彼女を無遠慮に見つめ続けている。

「何？」
彼はヒカルを見つめながらそう言った。

ヒカルは彼の視線から逃れられることができず、茶色の瞳を戸惑いがちに伏せた。
「ヒカル。こちらを見て」
彼の言葉に従うことが難しい。

「質問があるの。２つ」
「順にどうぞ」

シャルルが可笑しそうに即答した。
この状況で彼女は質問があると言う。
目の前の・・・ヒカル・クロスが戸惑っている様子が手に取るように良くわかる。

でも、その質問の内容はわからない。
いや、ひとつは分かっていたが、もうひとつが予測不能だった。

「回答しよう」
彼は微笑んだ。

彼女がまだ尋ねていないのに、それを見越して言った。

彼女の唇から言葉が漏れるのが嬉しい。
彼女の口唇から彼の名前が呼ばれると苦しい。
しかしもっと呼んでくれれば良いのにと思う。

「あの館に戻るのは、アルディ家に戻る前にヒカルが風邪を引いてしまいそうだから。・・・着替えは用意させてある。・・・・もう、その距離さえも長いと・・・戻るまで待ち切れそうにないから」
何が待ちきれないのかは言わなかった。

彼が今、ここでこうして・・・僅かに彼女の指先だけを絡めて弄んでいるだけでも耐え難いのに。
彼女はシャルルを理解していないと思う時はこういう時である。
ルイは満身創痍の彼女を抱くことはしないと言い切った。
しかしシャルルは違った。
満身創痍であるからこそ、彼女を抱き締めたいと思う。
瑕が相当・・・染みるはずだ。
鎮痛剤も切れていることだろう。

時折、彼女が体のあちこちを・・・シャルルに気付かれないようにと思いながら軽く摩っている様子を見ると、彼女を息も出来ないほどに強く抱き締めて、更に圧痕を加えてやりたい衝動が湧いてくる。

繋いでいる指先から鮮やかに色が加えられていく。
彼の視界が見る間に暖かく色鮮やかに変わっていく。
暖かい温度が彼に流れ込んでいく。
その反対側の触れていない指先からは。
彼女と片時も離れていたくないという衷情が彼を支配していく。
オレ達を惹き寄せたあの海が遠くなっていく。
車内で・・・彼は窓の外を見ることがなかった。彼の海が、目の前に居たから。

海に還る。
そうだな・・・薔薇に還る一族であるはずなのに、海に還ったあの人を焦がれるあまりに・・彼が長い気の遠くなるような時間を蒙昧に過ごしたことは、決して無駄ではないと思う。
しかし、彼女が。ヒカルがシャルルの心に飛び込んできた。
改良された種であるはずなのに、彼女は生まれながらに・・・そう、生命に満ちている。

次にここを訪れるときは、もっと違った景色が見えるだろう。

「それにジルのこともある。・・・・ヒカル」
彼はそこまで言って、彼女を見つめた。
その時・・・彼はその時表情を少し強張らせた。厳しい面持ちに・・・ヒカルが伏せていた目をあげて見開いた。
青灰色の冴えた瞳がこちらをじっと見つめていたが、それは先ほどのシャルルの甘さを含んだものと違っていた。
「はい」

彼女は返事をした。
ぎゅっと・・・彼が一度だけ強く彼女の指先を掴んだ。
大きな手の平で、彼の細く長い指は彼女の指から抜けて・・ヒカルの白い手の甲を覆った。
彼女は決められる年齢になった。
成年に達した。監護権が切れた。
もう、誰かの承諾を得なくても、ヒカルは自分の人生を切り開く権利と自由がある。

「・・・ジルの治療をする。ヒカルの骨髄と卵細胞と血液を提供して欲しい」
「もちろんよ」
彼女は彼と同じように、間を入れることもなく考える時間を取ることもなく即答したので、彼は青灰色の双眸を見開いた。

なぜ、シャルルがジルに会いに行こうと言っているのか、察しがついたからだ。
着替えというのは口実だ。
ジルにヒカルをあの人だと思わせておくわけにはいかない。
もう離さないと彼はヒカルに宣言した。
彼女の憂いも悲しみも彼が占有すると言った。
だからこそ。
シャルルはジルに・・・彼とヒカルと一緒に、今を生きて欲しいと願ったから。
彼は方針を変更して・・・ジルの治療をしたいから、そのためにヒカルに協力して欲しいと申し出たのだ。

このタイミングで。

聞けば彼女はきっとウイという言葉しか用意しないと思った。
でも、今言わなければいけないと判断した。
彼はまだ少し・・・・彼女とのこれからを憂えていた。

これから。
これからのこと。
そう。
未来のことを彼は考え始めていた。
これからのことを思った。

彼には今だけを生きる享楽的な愛だけを楽しむことはもうできなかった。
これまで。
長い時間をヒカルと過ごした。

親子になりきれなかった、あの切ない時期を越えて彼らが到達する場所について考えた。

愛に溢れた生活の中にも苦しみはある。
惑いがある。
美しい楽しいことばかりが人生ではない。
ヒカルに無駄な幻想を抱かせることになるかもしれないから・・・まずは言っておかねばならなかった。
それでもなお、彼は自分の中の矛盾に気がついていた。
シャルルがどんなに否定的なことを言ったとしても、彼女はウイと言って彼に寄り添う。一緒に生きようと言ったから。
これからは、ずっと一緒だとシャルルが言ったから。
彼はヒカルを思うあまりに遠い日本に返すことはもうできないだろうと思っていた。
相反する気持ちが・・彼の手の平から彼女に伝わっていく。

それなのに彼女は即答した。
「条件があるわ。・・・シャルルも治療すること。
原因は、わかっているのよね、きっと」
私の条件はそれだけよ、後悔しないわ、とヒカルは言って笑った。
彼女の微笑みはいつも眩しい。
果てのない底のない仄暗いシャルルの愛に向かって、彼女は永遠に晄を放ち続ける。
奥底がわからなくても、そこに届けと願いながら、どんな時でも、彼女はいつも彼に晄のような微笑みを向ける。

・・・昶。オレの晄。永遠の晄。

彼は軽く息をついた。
後先を考えないその即答が、彼はなぜか少し嬉しかった。
彼女は、いつも・・・反省はしても後悔してはいけないと言っていた。
同じ魂の燦めきをここに感じる。
今まではそれを感じると・・・酷く辛かったのに。今は、嬉しい。

「貴女にはいつも驚かされる」
「それなら・・退屈しないね」
「そうだな」
彼は彼女の言葉に微笑んだ。

互いに潮の乾きに比例して、とうてい人前に出られそうな、整った身なりではなかった。

それでも。
それでも、互いに目の前の人物はどんなに豪奢な衣を纏っていても、そうでなくても、目の人は美しい、と互いに感じていた。

アルディ邸に戻れば・・彼は彼女をそのまま部屋に戻すことができないだろうと思った。
いや・・・彼が彼女の部屋に入るのだろう。
ヒカルではない、あの人でもない夏の幻を抱いた彼の閨で、ヒカルを抱き締めることはしたくなかった。
でも。
それなら彼女をひとり部屋に帰せばよいのにという考えに至らなかった。
そうできないことはわかっていた。
ヒカルがノンと言っても。
ルイが居る敷地内だとわかっていても。
それでも抑えきれる自信はなかった。
彼はシャルル・ドゥ・アルディなのに。

「・・・・ふたつめの質問は？」
彼と彼女の間で・・・・説明も講釈も必要なかった。
シャルルが必要だから。ヒカルが必要だから。
そして、生きていくことにしたから。
それが理由であり結果であり、彼らの出した答えだった。
彼と彼女ではない。
彼ら、と表現することがとても・・彼にとってはとても清新だった。

傷つくことも恐くなかった。
傷つけるのではないのかという畏れも去った。

―――ずっと、一緒だから。

その話はこれで終わり、とヒカルが言った後に。
シャルル・ドゥ・アルディは魅惑的な艶やかな声で彼女に囁くように言った。
彼は話題を変えた。

ヒカルは桜のような唇を少し開いてまた閉じた。
彼女が少し顔を赤くした。
首筋まで赤い。

穢れなき晄は、彼に向かって呟いた。
夢から覚めろと言うように。夢に陥りなさいと誘うように。
彼は夢を見ないのに。
決して見ないのに。

「・・・・どうしてそんなに見るの・・・」
「ああ、ヒカル。それは質問ではないだろ？」
彼は微笑んだ。
互いに包まれた大きな綿布が煩わしいとさえ思う。
シャルルは彼女に触れていない方の手指を伸ばした。

・・・・あの情動の焔を宿した指先が・・・そっと彼女の頬に触れる。

彼女の擦過傷さえ愛おしい。
海水を洗い落としていないから、痛むのだろう。
彼女は少し眉を顰めていた。

「痛むか・・？」
「少しだけ」

偽らずに、彼女は素直にそう言った。
館についたら、まずは海水を洗い流すように、と彼は言った。

「その問いに回答しよう」
彼は微笑んだ。
濡れて張り付いた白金の髪と睫を向けながら言った。
少し渇いてきた髪は、元の色実に戻りつつあったが、前髪が目にかかり、彼を更に若く見せた。
シャツのボタンをはずして彼の喉元が見える。
先ほど、彼女が縋り付いて泣いたボタンには彼女の茶色い髪が絡まっていて、それがどう
にも・・・彼を扇情的に見せてヒカルを困惑させた。
吃逆泣きした自分の幼い仕草に、シャルルは向き合ってくれていた。
彼はずっと・・背中を摩っていてくれた。
大きな手の平を思い出した。

「ヒカルが眩しいから・・・見ていたいから。以上、回答」
そう言いながら、そっと・・・繋いでいた手の平を彼女の肩に回した。
眩しくて目を反らすのではない。眩しいから・・・輝きを見つめていたい。

彼の詐らない気持ちであった。そういう風に、思った実意を率直に口にすることを、長い間やめてしまっていた。でももう一度自分に赦すことにした。
彼女の存在を確かめるように、シャルルは、また、背中をそっと撫でた。
彼は回答を簡素化した。
もうひとつ、理由があったがそれを口に出さなかった。
愛しているから、という言葉を言わずにおいた。
もう、わかっていることだから。
これを音声にすれば、彼はここが移動中の車内であることを忘れて・・・・きっと、このまま彼女の体を惹き寄せてしまいそうになるから。

「そんなに見つめられたら・・・・恥ずかしいよ」
彼女はそう言った。
これまで、どれだけ長い時間、彼がヒカルを見つめ続けて居たのか知っているはずなのに。
「狡い人だ」
彼は笑った。
彼女の横顔を見て・・・・・もう、あの人そのものだとは思わなかった。
非常に良く似ているが、あの人とあの男の娘なのだと思うことができた。
「貴女はもっと・・己を知るべきだね」
シャルルはそう言って含み笑いをした。
ゆっくりと・・・彼は彼女の濡れた髪に顔を寄せる。
乾布から昇る薔薇の香りと彼女の濡れた体から潮の香りがしたが、不快ではなかった。
どれだけ彼女が彼を・・・・いや、彼らを魅了しているのか、彼女は理解していない。
そしてまたパリに戻ってきたことがどれだけ大きな意味を持っているのか、わかっていない。それでも、彼はもう彼女とは片時も離れていないと誓ったから。
離れていても、生きていてくれれば良いと思ったあの人とは違う愛だった。
傍に居て。
一緒に笑って一緒に嘆いて・・・同じ景色を見たいと思う。
同じ愛はない。
ヒカルはそう言った。
愛は回帰しない。繰り返さない。けれども、愛は巡る。形を変えて。軌道を変えて。時を越えて。
もう一度愛をする喜びは巡るのだと彼女が教えたのに。
彼は微笑んだ。この上なく美しい・・・彼女が天使だと見間違えた微笑みだった。
「ヒカル・・・オレは貴女にたくさんのことを教えたけれど。まだ、教えていなかったことがあるね」
彼女が顔を上げた。
彼の胸の中で、大きな瞳が彼を見上げて、思ったよりも近い場所で彼を捉えたので、シャルルは

少し・・・唇を噛んだ。
余裕のない態度というものは、彼にはありえないことだと自負していたのに・・・・余裕がない。

シャルルは腕を伸ばして、内扉に設置されている操作パネルに指を置いた。
彼女を抱いたままだったが、決してヒカルと距離を置くことはできないと言うように。彼女の体を胸にしたまま、細く長い神経質そうな指で２つ３つ、パネルに触れた。
平たいパネルのどの場所に何があるのか、わかっているようだった。

時が止まる。
いや、時が始まる。
小さな少女が、彼の胸に舞い降りてきた。天使は、ヒカルの方だよ、と何度も言ったが、彼女は晄そのものだ。
天が遣わす使徒などではない。
彼女は・・・晄なのだと、今になってようやく思い知る。
運転主席の後部が遮光された。偏光フィルターによるブラインド効果を採用した車内は、あっというまに暗くなり、次にぼんやりと、仄明るくLED室内灯が点いた。

「キスを」
彼は彼女に囁いた。
車内の冷房は抑えられていたが、彼らの濡れた体から体温が放出されていく。
でも寒いとは感じなかった。
なぜなら・・・彼と彼女は寄り添っていたから。
僅かな声量でも彼女に届く。
そんな距離を赦された互いの息づかいがもう一方の何か奥深くを刺激して・・・そしてどうしようもなく眩暈がしそうなほどの甘く切ない濤声が内なる声として・・響き渡せる。
「キスを教えていなかった」
ヒカルの唇が一度だけ、ぐっと横に結ばれたので、シャルルは可笑しいと言って微笑んだ。
彼は顔を少し斜めにして・・・ヒカルの顔をのぞき込んだ。彼女が目を臥せることのできない近い距離まで彼は近づいた。そう、彼から、近づいた。
あの別れの日のことを忘れていないのは、ヒカルだけではなかった。
魂が裂けて砕けそうなくらい・・・彼は胸が痛んだことを思い出したが、今、この胸に宿っている痛みにも似た激しい動悸は、もっと別の感情からだった。
愛おしい。
彼女が・・愛おしい。

外は暗くなり、ここに到達するまでの道程は、酷く長く感じた。

でも・・・今は・・・短いと思う。
もっと・・一緒に居たいと思う。

手の平を彼女に近づけて・・・静かに。流れるような動作で。
ヒカルの尖った顎を・・・彼は薬指で持ち上げた。
五指のうち、最も力が入らない部位でないと、彼は彼女の体を傷つけてしまいそうになるから。
彼は整った顔を寄せると、そのまま、ヒカルの顔に重ねた。唇を合わせて居るという感覚はなかった。神の肖像に接吻をするかのような・・・そんな崇敬を伴った動作だった。
啄むように、軽く。彼女の唇に軽く触れる。
瞳が。
青灰色の瞳が、近づいてきて・・・天使が彼女に祝福のキスをした。
ヒカルは、そのまま愛の極印を受け止めた。
軽いのに、重い・・・ひとつひとつが、啄むように軽快であるのに、それなのに熱い。
彼の頬。彼の吐息。彼の・・・接吻。
何もかもがヒカルの知らないシャルル・ドゥ・アルディだった。
あの夏のマリナに・・・躊躇いがちに唇を寄せたシャルルを見て。
ヒカルはとても悲しかったことを思い出した。
彼はいつも愛に関しては躊躇っている。戸惑っている。
それなのに・・・最も、あの人に似ているヒカルには、そうではない。
彼女はヒカル・クロスであると認識している。
決してあの「青春の輝き」の時代を繰り返すことはしなかった。
ヒカルに落とすキスは、彼の今の心そのものだった。
彼の誠実な心根を感じて・・・

涙が出そうなほど嬉しいキスというものを味わった。
彼女はこれほど・・誰かと交わす口吻が甘美で微醺を誘うものだとは思っていなかった。
彼女も彼に応じた。
初めての動作だった。
目を閉じて・・・何度も何度も彼の少年のような幼いキスに応えた。
「・・・・ここまでは、教えたけれど」
シャルルは唇を離すとおもむろにそう言った。
誰も見ていない静かな空間は移動し続けていた。
タイヤが回転する音だけが、車内で響き渡る。
速度が一定になったので、間もなく目的の場所に到達する。
彼らが身動ぎする音そのものをかき消すかのように。

じっと・・・薄い青灰色の瞳がヒカルの茶色の瞳をのぞき込んでいた。

深淵まで見渡すかのような・・・静かな瞳が彼女の顔のすぐ近くにあった。
「この先を・・・貴女は知らない」
激しいキスを交わした海での抱擁の後なのに、シャルルはそう言った。
酷く不敵で・・・艶めかしかった。

「誰か他の男を思い出したキスなんて許可しない。オレだけに応えてくれ」
息を呑む暇もなかった。
彼は彼女に覆い被さると、そのまま・・・息も出来ない激しいキスを彼女に落とし始めた。
シャルルの背中に彼女の手の平が添えられて・・・躊躇いがちに細かく震えていたが、やがて・・・やがて、彼女の腕が彼の背中に廻された。
ヒカル。
オレの永遠の晄。

誰かと愛をするということをもう一度だけ、信じてみようと思う。
もう一度愛をしてみようと思う。それなら・・・ヒカルが良い。
ヒカルで良かった。

長い時間を一緒に過ごした。
鮮やかな季節を見せ続けた。穏やかな空間しか与えなかった。

でも。

シャルル・ドゥ・アルディと一緒に生きるということは、美しいことばかりではない。
その覚悟を貴女が持つと言ってくれたことに感謝しなければならない。
貴女は・・・ああ、そうだね。
贖罪の娘という言葉が相応しい。
貴女は贖罪の娘だ。
この意味を貴女は思い知ることになる。オレと一緒に生きる限り。

オレの贖罪を受け止めてくれ。
貴女に何も教えなかった。
暖かさは、冷たさを知って暖かいと感じるのだから。
何もかもを教えたと思ったが。
貴女がオレに教えてくれた。
鮮やかな季節を。
いくつもの季節を過ごす喜びを。
そして・・・そして。

死ぬほど愛しているという愛を知って、生きたいと思う愛を知った。

ヒカルの唇を割り、そして彼はヒカルの内に入った。
愛撫の操作について教えるつもりはない。
ただ、愛していると。
彼女にぎこちなくてもどんなに拙くても。
伝える喜びがあった。彼女は・・・そう、ヒカルは生きている。人形ではない。

「何もかもやる。オレの手にできる全部だけではない・・・全部、全部だよ、ヒカル。
貴女が欲しいというものは全部」
「私の欲しいものはただ一つ。シャルル、わかっているでしょう」
ヒカルが少し涙声でそう言った。
彼の愛の嵐を受けながら・・・それでも必死に応えた。

二人の時を刻もう。
迷うこともない。
惑うこともない。
例えそうなっても、戻ってこられる。
ヒカルが居るから。

彼は持ちうる情熱をすべて傾けて・・・彼女に捧げた。
「ヒカル・・・・・オレのファム・ファタルになってくれないか」
彼が震える声でそう言った。
ヒカルは彼の言葉に即答した。
もちろんよ、と言った。
考える時間は必要なかった。
先ほどと同じように。
「シャルル。・・・私の天使。運命でなく・・利運の人でもない。シャルルは私のファム・ファタルなのよ」
シャルルとヒカルは、その瞬間、激しく交合した。
獣王は人になりて・・・愛を知った。憂いを知った。
そして・・・生きることにした。

運命の人と言う言葉で表すことができない。生きていたいと。
祈りにも似た命の燦めきを教える人を・・・・無視できない。

ああ。

ヒカルは、目を閉じた。
そうだった。
シャルルはファム・ファタルなのだ。自分の。

そして・・・彼のファム・ファタルはまだ彼の中で生きている。
それでも良い。
それなのに・・彼は「彼のファム・ファタルになってくれ」と言った。
これが何を意味するのか・・考えようと思った。
生涯をかけて。

確かに・・・館に戻るまでの時間は短かった。
彼らは・・・激しく・・かつてない激しさでもって。
互いの存在を感じるために接吻を続けていたから。

夜が更けていった。

■201

夏の薔薇の香りはことさらに強く豊潤に香る。
ルイ・ドゥ・アルディはいつもの場所に居た。
人払いをしてあるから・・・当分誰もやって来ない。
ルイは真鍮の薔薇のベンチに腰を下ろした。

彼が考えを巡らせたいと思ったとき。
いつもここにやって来る。
場所に固執しているわけではない。
それでも・・・激しい雷雨の後に空に生まれる月が、柔らいけれども冷たく彼に差し込むときには、いつもこめかみが痛む。
そうすると彼の思考は中断を余儀なくされるので、煙草を吸いながら庭を散策する。
放浪といった方が正しい。目的がないから。
そうするといつの間にか、最終的にはここにやって来て・・・薔薇をぼんやりと眺めて、月光を浴び・・そして絶え間なく煙草を貪るように吸う。
気休めだとわかっていても効果がなくても、彼は彼が危惧している無幻症に対応できる鎮痛剤や鎮静剤を混合した点滴をし、錠剤を飲み、そしてしきりに煙草を吸う。
この悪癖から逃れられそうにない。
この家の男子はみなそれを経験している。誰もが通る路だとは思わないが、生きるのが退屈になると必ず・・・こういったことに手を出す。

・・・未だに、シャルルにこの場所で激しく殴打された時にできた瑕が少し痛む。

自分がこうしていることがすでに夢の中のことであるとしたら。
自分の生きていることがすでに幻なのだとしたら。
それを考えると気鬱になる。
実証できない仮定をいくつも想像することは疲労だけを彼にもたらす。
結論が出ないことを考えるのは実りがない。不毛だった。

ヒカルがここにやって来てから。
この薔薇園が再び整備された。
一度は・・シャルルはそれを放棄して、本当に死んでいるのかもしれないと、姿を現さない彼に対して世間が噂を始めたとき。一度だけ、この薔薇園は枯れて閉じられた。

使用しない設備をそのままにしておくことはこの家に相応しくないから、取り壊そうとルイは当時提案したが、それは却下された。
その時に、シャルルという人物は・・・フランスの華と呼ばれて久しいのに、ただ一つの愛にしがみつく矮小な人物なのだと思った。
そしてそれ以来・・・シャルルが不在の時にはルイ・ドゥ・アルディがここを管理している。
園庭の担当者に任せてしまえば良いのだが、彼はそうしなかった。
品種改良された薔薇を保持するために微妙な温度管理や湿度設定が必要で、その改良種ひとつひとつによって少しずつ扱いが異なっている。
シャルルは誰も信用しない。だから自らがそこを管理運営していたのだが、それも難しくなった。
後継を育てることより、薔薇を品種改良し続けることに熱中する貴人を見てルイは育った。
アルディの頂点に立ちながら、そこから背を向ける弱い当主を、なぜ彼らが据え置いたままにするのかが・・理解できない。
そして、ルイは彼に成り代わるために生まれてきたのに。
望まれて生まれた、いわゆる「正規の手続き」を経て誕生したわけではない。
しかし多くの取捨選択を乗り越えて、彼が・・ルイが選ばれし者であることは間違えようのない事実であり、それが今日の彼の思考を動かす礎となっている。
成年に達してなお、シャルルは傲慢に言い放った。
まだ、その時ではない、と。

確かに。
ルイがアルディの籍に入れられてからの年数と、彼の生活年齢では開きがある。
正当なる後継者となるためには相当年数を経過しないと取得できない権利がある。
それを、シャルルは主張している。
・・・時間の問題なのに。

ルイはいつもそう思う。
ルイ・ドゥ・アルディという新しい種を生み出したのに。
その種が君臨することは厭う。
これはなぜなのだろう。
優れた者がのぼりつめるために・・・彼はそれを体現するために生まれてきたのに。

誕生させることに夢中で、その後のことは関与しないと言われているのと同義だ。
次の世代まで親族会が待つとは思えなかった。
悲願である政界への出馬に際して、ルイ・ドゥ・アルディは不適格なのだ。今は。
彼の母の家柄とアルディ家のそれは釣り合いが取れているが、婚姻まで・・なぜ、ルイが誕生を秘匿されたのかという理由について、世間に堂々と公表することのできる理由が欠けていた。

シャルルはそれを好都合と思っているようだが。
シャルルと同じ能力を保持していることを主張しても駄目だった。
そうではない彼独自の能力を主張すればもっと厭われた。
彼がなぜ・・・シャルルの様に。
あの、フランスの華のように、世間に認められる機会が少ないのかと言えば。
やはり彼の出自に関係するとしか帰結できない。
ずっとずっと・・・彼は待っていた。
それなのに、「その時」が訪れない。

嘆くということを知らない。
絶望なら知っているが。
痛楚号泣は経験していない。
渇望なら知っているが。

彼に足りないのが何であるのか、シャルル・ドゥ・アルディは決して言わない。
ただ「後継に足らざる者」と冷たく言い捨てるだけだった。
もう長いことそう言っている。

彼はもう1本煙草を吸うことにした。
本来なら、ここは禁煙だ。
しかしルイがそれに従おうとしないので、ついにこの場所だけは喫煙場所として黙認されている。
唯一の彼の抵抗だった。
温室は一度完全に枯れてしまったことがあった。
それを復活させたときに尽力したのはルイだからだ。
彼は黙々と・・・この温室の設計を見直し、薔薇の品質管理環境について改善し、そして短い時間で以前と同じように・・いや、それ以上に完璧な環境を整えた。
だからこの場所は、彼が物思いに耽ることのできる空間であり、このことをヒカルもシャルルも知っていることを彼は承知していた。
だからここは彼だけの空間だった。
ルイが訪れているときには誰もここに来ない。
彼の存在を無視し続ける者達が唯一、彼の存在を気にかける瞬間だった。

彼はベンチに腰掛けて、空を眺めた。
嵐の後の月夜というものは何とも言えない湿った晄を讃えている。
色は違うが・・・まるでヒカルの涙に濡れた瞳のようだ。
彼女の大きな瞳から涙が溢れる様を思い出すと、無性に煙草が吸いたくなる。

ヒカルは滅多に泣かない娘であるが、ルイの前ではよく泣いた。
いや、ルイが泣かせたと言った方が正しい。

・・・・煙草を吸う。
深く吸って、大きく紫煙を吐き出した。

ベンチの縁に両腕を乗せて、彼は大きく天を仰いだ。
見事な金の髪が揺れて動く。
まるで月夜見の人その者が舞い降りてきて・・気怠げに夜中の降臨を楽しんでいるかのようでもあり・・・穢れた現世に降り立ってしまったことを嘆くようでもあった。

ロアールの館にヒカルを置いてきた。
ミシェルの居る時に、彼女とミシェルを引き合わせた。
その後は、シャルルが入れ違いに館に入っていく車とすれ違った。
彼はこちらを見ようともしなかった。
じっと正面を見つめて・・・ただヒカルの放つ晄に向かって突き進んでいくようだった。他は目に入らない。
シャルルの視界には他者は存在しない。
ルイはそこに居るのに存在しない。

その後に起こることを想定した。
アルディ邸からベントレーが持ち出されたことを知って、ルイは察しをつけた。
シャルルが自ら運転するような場所と言えば、あの場所しかない。
あの人がいなくなってしまった場所。
パリに近い場所に墜落したことで、今でも皆の記憶に残るほどの惨事だった。
そしてシャルルが帰ってこられなくなったきっかけを作ったあの事故。
ヒカルと一緒に館を出た、と聞いて。
彼は指示をいくつか出した。
頃合いを見計らって、ベンツを差し向けた。
彼らのうち、どちらか一方は・・・海に入り、そこがまだ生物の住まう程には浄化されていないことを嘆くだろうと想定した。ふたりともかもしれない。
あの場所はどんなに整備しても、潮の流れの関係で、なかなか微生物が循環して住み着くようにならない。
まだ時間がかかるはずだった。それをシャルルも承知しているはずだった。
ルイの用意した予想は予定にさえならないで外れる確率が高かった。それなのにきっと・・・予想は的中したのだと思う。
ベンツとベントレーが、各々違う場所に向かうことになったら、連絡を入れろと指示をした。

ヒカルとシャルルがそれぞれ違う場所に向かって進むのであれば。
ヒカルの乗った車の行き先はルイのセーフハウスに指定した。
彼女がどんなに違う場所に行けと言っても決して従わないように、と強く言ってある。
けれども、それは実現しなかった。
彼らは・・・ベンツに乗ってロアールの館に向かった。
報告を聞かなくてもわかる。
帰ってこないから。
帰る。どこにだろう。

ここはルイの帰る場所ではなかった。
彼はいつも居処を転々としていた。
安全性の問題もあるが、どこも彼が落ち着ける場所ではない。
もちろん、この別棟も然りだ。
ここだけは彼がずっと住まっている場所ではあるが、滞在地でしかない。
荷物を置き、体を休め出発のために準備を整える場所。それだけの場所だ。

虚無で怠惰に満ちた日々を気が狂うこともなく生き存えることができるのは、ひとえにアルディ家の頂点に立つために生まれたという目的があるからだ。
他者より具体的で明確で現実的な目的のためだけに、彼は毎日を過ごして呼吸している。
長い時間をそうしてきた。
彼を決して認めないシャルルは・・・・いつしか彼に目を向けることもなく、とうとう・・・彼だけの晄に包まれることを選んで、ルイに背を向けてしまった。

ヒカルが戻ってこない。

彼は煙草を地面に捨てた。
もう何回同じ動作を繰り返しているのか、数えないことにした。

ヒカル。

彼はヒカルについて思いを馳せた。彼女について考えることも止めていた。しかし再会してしまったから。
彼は・・・ヒカル・クロスを日本に戻すつもりはなかった。
彼女がどんなに帰ると言い張っても、そこは帰る国ではないと言うつもりだった。
彼とともに生きる事をヒカルが選ぶのであれば。
いや、選ぶ権利は彼女に与えてやらないと思っていた。
彼女は彼と一緒に生きるしか路がない。

本当はその言葉は。彼に当てはまる言葉であったのに、ルイはそれを認めなかった。
確かに。

彼は彼女なしには生きられない。生き存えない。

日本に彼女を置いておいた長い時間がもっとも長かった。
彼は待つことに慣れていたが、堪えきれない長さというものをその時始めて体験した。

ヒカルがアルディ邸に居た頃は。顔を合わせると面倒だと思っていた。
彼女の健やかな素直で人を疑ったり反発したりすることを隠す性格が気にいらなかった。
どうしてああいう者しか愛でられないのか、シャルルの神経を疑った。
彼の庇護欲は人一倍強い。
誰かを・・何かを独占していたいという欲求は、アルディ家によく出る特徴だった。
しかし、なぜ、彼女なのだろうか。

ルイはまた吐息をついた。

なぜか・・・理由がわかっているのに「なぜ」と繰り返すことは愚かしいと思う。
それなのに・・・「なぜ」こうも繰り返し彼女のことを考えるのか。
「なぜ」これほどまでに彼女との未来を繰り返し考えるのか。
チェスで戦略を練る思考パターンではない。
ルイは何通りでも未来も策も瞬時に同時に考えることができるのに。

・・・彼が考える未来はいつもひとつしかなかった。

■202　星辰の子

ヒカル・クロスは稀なる体質を持って生まれてきた。
その性質を選り分けられて生まれてきたと言ったほうが正しいかも知れない。
彼と同じだ。
デザインされた生命だ。
喉から手が出るほど欲しいと乞われる存在だ。
それなのに。
この世の研究者たちがこぞって先を争う研究の成果を実現することのできる対象が、アルディ家の薔薇園で静かに平々凡々と生活している。

しかし長い時間は隠しておけない。
彼女を被験者にしたいと言う者が出てきた。
でも、シャルルがそれを一切・・秘匿してしまった。
隠し通せなくなるぎりぎりまで、シャルルはヒカルを守り抜いた。

ヒカルをあのまま放置しておくことはできなかった。
ルイの婚約者として発表し、彼女にしかるべき地位を与えなければ、被験者としての申請が殺到することは目に見えていた。実際、シャルルは監護権を持つ彼宛にきた相当数の申請について、すべて却下するようにという通知を出している。

そして・・・ルイが先手を打ってヒカルと婚約したと公言すると、シャルルは後手であることを臆することもなく、ヒカルを日本に帰国させてしまった。
自らは狂乱の病に甘んじているのに。
ジルをあの館に閉じ込めているのに。

邪曲としか言い様のないシャルルの愛の本質を、ヒカルは知らない。

あの男は誰も寄せ付けない。
ルイを愛せない男は、唯一の者しか愛さないと決めていた。
固執する性質が顕著に出ていた。
同じ特質を持った者を生み出した祖は、自らを捨てて、自らと違う者ばかりに目を向ける。
シャルルは・・・　最初から彼を寄せ付けなかった。

妹として遇するように。
シャルルは最初にそう言ったが、ルイには親もきょうだいもいないと思っていたので、妹という玩具なら受け止めようとせせら笑うと、シャルルは力に任せて彼を殴打した。

それなのに、ヒカルは、ルイに向かって家族になろうと言った。
家族になってやろうと言うヒカルに憤りを覚えた。
あのまま滅してやろう、粉々に砕いてやろうと思った。

・・・彼は酷く誇りを傷つけられた。

周りの視線をまったく気にしないヒカルの行動に時々巻き込まれる。
その時彼は、途方もなく言い様もなく彼は激昂する。
感情をすべて制御して生きてきたのに。
彼女に関してだけは制御できない。

彼女が素足で彼に飛び込んで来た時。
彼の煙草を取りあげた時。

彼はいつも・・・いつも彼女の行動を想定できないでいることに気付かされるから。
余計に憤る。

彼は溜息とともに、周囲に咲き誇る薔薇の鉢植えを見つめた。
水耕栽培と鉢栽培による生育の影響を観察しているところだった。
薔薇は水耕栽培ではあまり長持ちしない。
この謎を解明する気にもなれない。

・・・土に還ろうとするからだ。
根を下ろし、根を生やし、土の抗いと闘いながら、地中深く根を下ろして命を燃やす。
それが生き物だと主張するかのように。
彼の土壌はどこにあるのだろう。どこに還るのだろう。
薔薇に還ると言われる血族であるのに、還る場所がない。
最も濃い薔薇の血を持っているのに。すべての責務を負って生きているのに。

ヒカル・クロスもここに毎朝足を踏み入れて・・・最高の薔薇を摘み取って、シャルルのために捧げている。
それが長いこと、日課になっていた。
彼女が日本に発つ時だけ、シャルル自らが彼女のために薔薇を捧げる。
この温室の薔薇は・・・すべて品種改良され、その後、シャルルの放棄によって枯れてしまったので、ルイによって再現されたものばかりだった。
それを彼らは摘み取って、互いに捧げあう。

ヒカルを随分と泣かせた。
何度も泣かせた。
そしてそのたびに、彼女の涙を見る度に、彼は小気味好い気分になった。
でも次の瞬間には、彼女が落涙することに苛立ちを覚える。
これまでの鬱屈した感情を彼女に吐きだし、彼女が涙を流す。
滅多に泣かないのに、彼女がルイによって涙を流す。
シャルルには決してできないことをする。
そうすることで、ルイはルイであることを証明しているのだと考えていた。
大きな茶色の瞳から涙が落ちる度に、苦しくなった。
涙を浮かべるところまでは快絶の極みであるのに。

彼女から墜ちる水滴がどうにも彼の呼吸を乱して荒らす。

唇を重ねてもそれは同じだった。
彼女に寄せる口吻はいつも苦しい。息ができない。
胸に抱けばもっと苦しい。

彼によって彼女がどれだけ傷つけられても、決して・・ルイを決して諦めたり距離を置いたり感心がなくなるということはないと確信していた。
だから彼は決して人と深く関わらないのに。彼女にだけはそれを赦す。

シャルルがルイを激しく殴打したとき。
ヒカルがそれを止めようとした。
シャルルの狂気を止めたかったのか。
・・・それが理由でも良い。
彼が激しく殴られている時に、彼女は身を挺して防ごうとした。
そしてシャルルに投げ飛ばされてヒカルが気を失った時に、彼は自らに降りかかる激痛を忘れて身を起こした。

今でも、折られた鼻腔の軟骨異常で、出血が止まらないときがある。
鼻の粘膜を焼いて治療してもなかなか快癒しない。
その影響で、耳鳴りも時折感じる。

喫煙は良くないとヒカルにも止められていたが、今は従う気はない。

彼はまたひとつ、紫煙とともに溜息をついた。
夜は更けた。
彼らは戻ってこない。

・・・・・自分はどうしたいのか。

アルディ家に認めさせるためには、彼は然るべき家柄の娘と結婚して、確固たる地位を築くことが一番の近道だとわかっていた。
しかし、それでは駄目なのだ。
婚姻などしなくても。
シャルルは婚姻による当主就任の因習を撤廃してしまった。
自らは婚姻を一度は考えたのに。
それはルイを迎え入れるためのやむない方策であったと押しつけがましく言われているようで、

酷く気に障った。
だから、彼自身の能力であそこに登りつめなければ・・・いつでも蹴落とされる。
シャルル・ドゥ・アルディがかつて味わった危機と同じ事態が訪れる。
安寧の座に就きたいと思ってはいない。
誰かが攻撃すれば、受けて立つつもりだ。

しかし・・・しかし、彼のそんな荊の座の傍らに座るのは、ヒカル・クロスではなければならない、そうなるための方策しか講じない。

なぜ、彼女のだろうか。
彼女がこれからもたらす福音を享受するため、というのが大きな口実だ。

空には、月が浮かんでいた。
極力落とした照明よりも明るい晄が、ガラス張りの天井から漏れ落ちる。
この場所はルイにとってはアルディ邸の本邸よりも滞在時間が長い。

考え事をするときに、時折・・・ヒカルがこっそりこちらを伺い見て居ることは知っていた。
しかしそれを無視していた。
彼が思考の深淵に潜っている時に、何を邪魔するのかと最初は憤っていた。
でも、彼女は決して声をかけないし、薔薇園で何を考えに耽っているのか、とシャルルに告げることもなかった。
ただ静かに・・・彼に心配だと言わんばかりに大きな瞳を覗かせて見つめているだけだった。

その彼女が。
夏のマリナと過ごすシャルルをここで目撃したときに。
遠くで見守るどころか、彼に近づこうとした。
決して近接してはいけないと言ってあったのに、酷く動揺して、シャルルに真意を問うと言った。
そしてシャルルに走って行った。
ルイを振り返らなかった。
一度も。
躊躇わずに走って行った。

ルイはまた煙草を途中まで吸って、足元に落とした。
鼻腔の異常が原因で、煙草の味がほとんどしない。
最初の一呼吸だけが、かろうじて彼の満足のいく味わいを彼に与える。
また煙草を口に持っていく。

同じような過程で生まれてきた贖罪の娘。
タイプHと名付けられた彼女と彼は何が違うのだろう。
ルイの贖罪は何だろう。
彼がどんな罪を犯したのだろうか。
生きていることも・・誇りを持って生きることも・・・そして誇りを持って死ぬことも恐くない。
でも、ヒカルが微笑まなくなると、どうにも足元がおぼつかないという感情に襲われる。

そこで彼はベンチの縁に足をかけて、背中を丸めた。
小さいこどものように、片膝を立てて自身の体を抱え込んだ。

下を向いて、何かが落ちてきた。
床上に落ちた煙草の吸い殻の山の脇に水滴が落ちる。
スプリンクラーの水ではない。
彼の瞳から落ちているのだと気がつくのに、相当時間がかかってしまった。
鼻が詰まり、目の前が少し歪む。

・・・・彼は涙を流していた。

美しい、切れ長の青灰色の瞳から、魂を搾り取ったような、透明な涙を落とした。
両の目の端から・・・涙が零れた。
そうだ。
その時になってようやく理解した。

幼いときから一緒に過ごした。
面倒だと思っていた。
でも・・・彼女はいつも同じ笑みを浮かべて彼に臆せず向かってきた。
大人になって。
彼女に再会したときに・・・彼は長い時間を待って良かったと思った。
日本に迎えに行く日にちが決まると、心が躍った。
誰と過ごすよりも、ヒカルと過ごした日々のひとつひとつを思い出す方が、時間の経過を忘れた。
彼女の行動記録の報告を受ける度に、彼はつまらなさそうに目を通したが、それでも詳細な文言まで記憶している。
彼女が何を考え、何を行動し、どう生きているのかトレースしようとした。
彼女の部屋の香り。

彼女の驚いた顔。
彼女のために用意した自家用の機内での食事に飲み物。好みの毛布を用意するのは、酷く楽しかった。

きっとまた、巡り会えると思った。
時が来れば、彼女は彼の傍らに惹き寄せられると思っていた。
でも違う。
惹き寄せられたのは・・・ヒカルではない。
ルイなのだ。
ルイが、惹き寄せられているのだ。
彼女という晄に。

彼は星辰の子と呼ばれている。
でも、星は何かの晄を受けなければ晄輝くことができない。
晄そのものに・・・焦がれて手を伸ばし渇望し・・・そして叶わずに晄を消していく星々を眺める役割を背負った。
この称号を受けたときに、彼は自ら晄輝くことはないと思った。

・・・彼女の笑顔が欲しかった。彼女の愛が欲しかった。
同じ境遇で生まれた者であるのに、彼が長らく欲してやまないものを、彼女は生まれながらに持っている。
それを妬んだ。
妬みは罪の一つだという。
それなら。
彼の罪は修羅を燃やしたことなのだろうか。

彼はゆらりと立ち上がった。

彼は単に・・・・そう、愛されたかっただけだ。
栄誉も名誉も称号もいらない。
ただ、ルイ、と。
ルイと呼ぶヒカルが欲しかった。
それだけだ。
彼の悲しみも苦しみも・・・そして喜びも共有することのできる、新しい種を作るために必要な彼女が欲しかった。
そうだ。欲しかったんだ。
彼が決して手に入れることのできないシャルルの関心や・・・。

この世の人類が注目しているiPS細胞を生み出すことのできる聖女について。

彼は、独り占めしたいと考えていた。
でも、独り占めできなかった。

彼女はルイだけを見つめることができない。
彼女はルイを見つめない。
わかっているのに。
わかっているのに・・・それでも焦がれる。

これは遺伝子の欲求なのか・・・ルイがそう思うのか、もうわからない。

新しい種となって・・・アルディの薔薇に君臨するために生まれた。
でも、これほど・・・これほど焦がれてしまう因子を無視することができない。
シャルルがあの人に焦がれて・・・唯一の人と定めてしまったように。

ルイも。
ルイ・ドゥ・アルディも、運命の人を定めてしまっていた。

そうだ・・・こたえは単純だった。

単に・・・彼はヒカルの愛が欲しかったのだ。

誰かに愛されたかった。
誰かを愛したかった。

損得のない、無償の愛を味わいたかった。
この欲求はどこから来るのだろう。

―――彼女の声が響く。

ルイ、家族を作ろう。
シャルルとルイと私で・・・家族を作ろう。

その時にウイと言えなかった。
ただ単に奪っただけだった。
奪うしかできない。

彼は与える物がないから。
彼女はそれでも微笑みを絶やさなかった。
彼に問いかけ続けた。

本当に強い者とは一体どんな者を言うのだろう。
アルディ家の考えている不屈の精神の保持者とはどんな者のことなのか。
シャルルでも足りない。
ミシェルでも充足できない。
ルイも届かない。
そんな脆弱な精神を導く存在は・・・
あの晄の子なのかもしれない。

ただ一言。
愛していると言えば良いのに。

彼は長い間その言葉を躊躇っていた。
この気持ちが何かを分析することを止めてしまった。
考えたら・・・彼はルイ・ドゥ・アルディでなくなると思ったから。
冷たく扱うしかできない。それがルイの表現だ。

ルイ・ドゥ・アルディは音もなく立ち上がった。
この薔薇の温室には、今日はこれ以上居る事ができないと思った。

頬に流れ落ちる涙を拭うことはしなかった。

彼は気づいていなかった。

昔。
昔、交換したボイラーの調子が悪いことも。
結局、老朽化したボイラーを交換したが、シャルルの設計したそれとは違っていた。
振動が数台のボイラーと共鳴して・・・摩擦を起こし、ひび割れを起こしていたことに誰も気がついていなかった。

新しく交換した、薔薇園の室温を調整する特注のボイラーからガスが漏れていることに気がつかなかった。
センサーが異常を知らせるランプを点滅させていたのに。
夜が更けていたので、警報に監視棟の対応が遅れたことも助長した。
加えて、彼が誰も来てはいけないと厳命していた。

彼は気がつかなかった。
背中を向けて出口に向かって歩んでいたから。
いつもの用心深い彼なら・・・そこで振り返ったのに。
今夜はそうしなかった。そうできなかった。

鼻腔の異常によって、匂いに鈍感だった。
喫煙していたことも助長していた。
耳鳴りがすることも影響していた。
低周波の警告音が聞こえていなかった。

積まれた煙草の吸い殻の山が・・・消火したはずなのに、積もって再び着火したことを確認するまでの時間にそれは発生した。

泣き虫のヒカル。
いつも泣かせてばかりいた。
その泣き顔さえ・・今は愛おしい。

・・・・永遠の晄、オレの晄。

目映い晄が放たれた。
月光よりも眩しい・・・・地獄の業火のような閃光が彼を包んだ。

何かに着火する音がした。
漏れたガスに・・煙草の火が着火した。
ガスは彼の呼吸を妨げない範囲に、ゆっくりと確実に広がっていたことに彼は気がついていなかった。
小さな音がした。

そのとき。
声が聞こえた。

————もうひとり天使さんがいる

彼女の声が鳴り響いた。

彼女の少しはにかんだ、恥ずかしそうな笑顔が目に浮かんだ。

・・・ヒカル。
・・・昶。

伝えきれなかった言葉を、次に逢ったときには伝えられるだろうか。
もう、遅いだろうか。
それとも・・・・。

・・・・。
・・・・。

次に、爆音がした。

———そして彼は閃光に包まれた。

それが、彼の最後の記憶だった。

■203

シャルルとヒカルを乗せた車が公道から砂利道に乗り上げられ、後部追走していたベントレーのライトが彼らの乗っているベンツを一瞬だけ明るく照らし出した。
少し小高い場所に乗り上げたからだ。

彼はそこでようやくヒカル・クロスから少し距離を置いて体を離した。
「館に着いてしまった」
シャルルがヒカルを見つめたままそう言ったので、ヒカルは羞恥で目尻を濡らしていた顔を、ようやく自らの手で拭うことができた。
それまで、彼によって身動きができないほど激しく抱合していたから、彼女の手の平は彼を包んだ布の端を掴んだまま細かく震えているしかなかった。
自由になった体は・・・引力の法則で、彼の胸の中にそのまま残りそうになり、あわてて体を引いた。
自分が自分でなくなりそうになる。
それは初めて経験する嵐の到来だった。
備えることもできず、彼女はただひたすらシャルルの愛の嵐に耐えた。

「泣かせないと約束できないと言っただろう」
彼は薄く笑うと、ヒカルの顔に細く長い指を伸ばして、そっと・・壊れ物に触れるかのように彼の親指の腹で彼女の目尻を拭ってやった。
彼女は潮に濡れてなお・・・美しい。
シャルルは目を細めた。
切れ長の瞳を惑うことなく彼女だけに注ぐ。
「教えてないことはたくさんあるよ、ヒカル」
彼が少し顔を傾けてそう言ったので、ヒカルは困ったように眉根を寄せた。
「シャルル・・・私、そういうのに慣れていないの」
「慣れていたら、オレは教えないよ」
シャルルが声を漏らして笑った。

彼女はこの年齢にしてなお愛を知らないで生きてきたのかと思うと、自らの半生とどうしても比べてしまう。

ほんの一時だけ、彼の単色で無機質だった世界が・・・彩りをもって鮮やかに咲き乱れる時代があった。
でも、もっと長い時間・・・彼はこの世がこれほど色彩に溢れた世界であることを忘れるように自らに言い含んだ。
まるで世を楽しんではいけない、と罰しているような気持ちになった。
それが贖罪だと思った。
彼があの人を諦められないまま、この世に偽りの妻を持とうとしたから。
それを祝おうとした人達はそのまま・・・還れなくなった。
偽りでも一緒に居て、互いを理解すればきっと・・きっと違う愛もあると彼らは思いながらランスに向かってやって来たことだろう。
彼は繰り返さないと知っていたから。
かつて若かった時のように、自分と神と花嫁を騙せばそれで良いだろう、と言い放った傲慢な彼は・・・繰り返してしまった。
だから、罰せられた。
愛を偽ったから。
誰も罰してくれないから、自らを自らで罰した。

それなのに。
・・・それなのに。

彼女は自分の年齢の半分程度しか生きていないのに、生きる事を懸命に模索している。
シャルルは彼女の年齢と同じくらいの長い年月を・・・生きていても死んでいると感じて深淵を彷徨っていたというのに。
どんなにヒカルが彼の晄になったとしても、それでも癒されなかった。
どうしてそんな風に思うことができたのだろう。
今、ここにこうして並んで恥じらっている彼女を、どうして・・・手元から話すことが出来たのだろう。
いや、離れていたからこそ、今のシャルルがあると思った。
今のヒカルに向き合うことができた。

エントランスに間もなく入る気配がする。
彼は再びパネルに腕を伸ばして、遮光された窓ガラスを透光状態に戻した。
見覚えのある塀の中に入って来たことを視認する。
すでに陽は落ちていたから、ところどころ灯された街灯が淡く光って、その光を反射し、白を基

調とした館全体は、幻想的な空間に面変わりしていた。

ヒカルがほっと・・・息をつく。
シャルルが横を向いて、当主の顔に戻ったからだ。
その方が、彼女のよく知るシャルル・ドゥ・アルディに近かった。
先ほどの甘く魅惑的に彼女を誘いそして戸惑うヒカルに強く唇を重ねるシャルルは影を潜めてしまった、

彼女は背凭れに押しつけられたまま、長身のシャルルの体重を受け止めて悲鳴をあげていた背中を軽く伸ばした。
そんな様子を、シャルルは青灰色の流眄で観察した。

毛布に包まれた彼女の茶色の髪が渇いて、強いうねりが少し伸びた。
今はもう・・・あの人の髪を連想することはない。
もっとヒカルは色素が薄い。
もっと癖の強い髪をしている。
今まで似ているところだけを探していた。
でも今は違うところも見えた。
彼女は経年するにつれて、あの人に似ていくのだろうか。
それとも・・あの男に似ていくのだろうか。

どちらでも良い。
楽しみだ。
やっとそう思えるようになった。

「ヒカル。到着したらまずバスルームに行くように」
彼は指示した。
車の速度が落ちて、やがてゆっくりと停止するまでの徐行の時にそう言って身を正した。
「傷の手当てをする」
その言い方が、医師でもあり、ヒカルのよく知るシャルルの口調であったので、ヒカルは少し微笑んで、はいと答えた。

今まで見たことのないシャルルを知って、彼女はうろたえていた。
だから、今までのシャルルをみて、ほっとする。
知らないシャルルを見つめていたいと思うのに、知っているシャルルにも接して欲しいと思う。
貪欲だよ・・・・
彼女にそう言ったシャルルの言葉は、自分に当てはまると思った。

この短い時間でさえ、彼女はどんどん・・・シャルルに惹かれ、シャルルの温度に触れていたいと思い、それでも彼の熱い視線に戸惑ってしまうのに・・・その青灰色の瞳で彼女を見つけて欲しいと思っている。
明日になったら。
彼女はもっとシャルルと一緒に居たいと思うのだろう。
明後日になったら。
彼女はもっと・・シャルルに見つめて欲しいと思うのだろう。
それが少し恐かった。

やがて彼らを乗せた車体が、気遣うようにゆっくりと停車した。
エンジンが回転速度を下げた音がした。
扉を開けても良いかという、合図がして、シャルルはヒカルに声をかけた。
ヒカル、と声をかけて、彼女にシャルルは微笑んだ。
美しい微笑みだった。
充足した笑みを・・・ヒカルに向けた。

「ヒカル・・・シャワーを。その後で・・・」
そこまで言うと、彼はちょっと可笑しそうに首を振ってから、ヒカルに笑いかけた。
乱れた白金の髪の間から、先ほど彼女が酷く戸惑ったあの・・・彼の優美な微笑みが見えて、また息を止めた。

「これからは」
彼は少し声を落として言った。
ひとつひとつ、大切に言った。

「これから。朝は・・・貴女が薔薇を届けるのではなく、オレが摘んで捧げるのではなく・・・一緒に薔薇園で摘もう。ふたりで。・・・ずっと。ずっとだ」

それが何を意味するのか、ヒカルは最初わからなかった。
しかし、次に・・・開かれた扉の前で。
彼女と彼の降車を誘う開かれた扉から、夜風に乗って、僅かに薔薇の香りがした。

ヒカルの目から涙が浮かんで、頬に落ちた。
「・・・シャルル、瑕に染みるよ」
彼女はぽつりと言った。
陶磁器のような、若い滑らかな肌に、また、滴が落ちた。

「ほら、貴女はまた泣く・・・いつからそんなに泣くようになったのかな・・・」
「シャルルが教えた。シャルルから教わった」
彼女は涙を流しながら微笑んだ。
胸に染み入るほど、彼女の笑顔は綺麗だった。

今日の空を忘れない。
今日の海を忘れない。
今日の・・今日のことを決して忘れない。

たとえ、病が進行して、このことを忘れても。
また思い出す。
忘れても思い出す。
この時間を忘れない。
この瞬間を忘れない。

そう、過去に戻るのではない。
未来に還るのだから。

彼の病は、もっとも・・・望んだ時代に還るから。
それなら。
それなら・・・・。

彼はそれなら、今が良いと思った。
今に還りたいと思った。

あの人を愛したままで良いという、永遠の晄が微笑むこの瞬間が良い。
愛は回帰しない。
でも、回帰する病に陥っても、この愛は不変で・・決して・・彼は忘れない。
忘れないことにした。

―――忘れても良い。
―――魂に刻んでくれ。

彼が彼女にその昔言った言葉を反芻した。

そうだ。
そうだね・・・

ヒカル。
魂に刻んでくれ。
オレも魂に刻むことにしよう。
忘れても。
魂が覚えているから。

確かに、愛を始めた瞬間を忘れない。

そして・・・彼は微笑んで、彼女に降車するように促した。

「ヒカル。シャワーを浴びておいで。ゆっくりで良いから。
そして・・・そしてその後はオレの為だけに・・・」
そこまで言ってから、言葉を句切った。

彼は、茶色の瞳をのぞき込むようにして、少し前屈みになり、彼女の耳元に囁いた。
鼓膜が震えるほど近くに唇を寄せて、囁いた。
小さな声なのに、シャルルの低くよく響く声が・・ヒカルの形の良い耳に囁きだけを残した。

彼女の肌に触れていたい。
彼女の温度を感じていたい。
彼女の・・・愛を確かめていたい。

それを自分に赦しても・・・良いだろうか。

「オレの為だけに、涙を流してくれ。ヒカル。
その次のシャワーは一人でないことを予定しておいて」
彼がそう言って、彼はヒカルの耳朶を軽く噛んだ。
小さく悲鳴を漏らしたヒカルを残し、先に出る、と言った。
ヒカルは茶色の目を見開いて、かっと全身を朱に染めた。

「シャルル・・・！」
彼女は声を荒げて彼の名前を呼ぶと、シャルルは声を出しながら笑い、そして濡れた体はこりごりだ、と言って颯爽と車から出て、ひとりで先に館に入っていってしまった。

■204

ロアールの館で用意された浴室は、天井がガラス張りになっていた。
庭に張り出すようになっているので、周囲の視線を気にしなくても良い作りになっていた。

・・・今日は日中の嵐によって雲が吹き流されて、空がよく見え、月がいつもより近く明るく見える。

ヒカルは浴槽に浸かりながら天を仰いだ。
冷えた躰が急速にあたたまっていく。
雷雨によって白波が立っていた海に入った。
全身ずぶ濡れだった。
それでも・・・それでも愚行だと後悔することはない。

ヒカルは吐息を吐き出した。
暖かい湯の上で躍っていた花弁が彼女の吐息で方向を変えてまた舞った。

この構図は、アルディ家の薔薇園に似ている。
ガラスの接合部分をまったく感じさせないが、ガラスの冷たい反射が空や月の射入を損なうことがないように工夫されている。
また、温度差に対処できるように、ガラスは薄く幾重にも重ねられていた。
これはミシェルが新しい建築様式として取得した特許だった。

少しぬるめの湯だった。
シャルルが瑕に障るからと言ってそう指定したのだろう。
シャワー後は、遅い夕食を一緒に取ろうと言って、彼も着替えと湯浴みを含めた支度に消えた。
乾燥させた数種類の薔薇やリラックス効果の高いオイルをふんだんに使ったバスに浸かりながら、彼女はほんの数時間前までに起こったいろいろなことを思い返していた。
顔を目元まで湯に埋める。

バスに浸かるまえに入念に潮を洗い流した茶色の髪を結い上げていたのだが、僅かに零れて湯に落ちた。

・・・・彼が、ヒカルとのこれからを考えていることは彼自身が明確にしている。

それでも。

それでも・・・これまで過ごしてきた長い年月が、急に方向を変えて加速をあげて進んでいくことに戸惑いを覚えないと言えば嘘になる。
シャルルはどうしてこの館にもう一度ヒカルを連れてきたのだろう。

車から荷物を下ろし、彼女の僅かな手荷物をちらりと見て。
シャルルは、絵は大事にしなさいと言った。
もちろん、あの人の遺作であるから、おろそかにするつもりはなかった。
しかし、シャルルはもっと違う何かを考えている。
それは何だろう。

————息苦しくなって、湯から顔を上げた。

浮かんだ花弁が舞って、彼女の頬からこぼれ落ちた。
頬の擦過傷が少し染みた。

よそう。
考えても仕方がない。
何を聞いても、もう驚かないし・・・驚いても良いとさえ思っている。

だから。
彼はそういうヒカルに尋ねたのだ。
同乗することについての意味をわかって乗れ、と。
そして彼女は乗ることに決めた。誰に決められたわけでもない。
自分で決めたのだから。
彼女に選ぶということを教えたのはシャルルだ。
選ぶ道を用意してくれた。
道が分かれていることにさえ、最初は気がついていなかった。
でも、シャルルが足元に晄を灯してくれた。
彼女が選ぶことのできるように。
彼女が選んでいけるように。

彼と一緒に居ることは、決して楽しいことばかりではないだろう。
今、ヒカルは休暇中ではあるが、学生だ。
彼と一緒に居るということの・・・今後の具体的なビジョンが湧いてこない。
でも、シャルルの導くままに過ごすことは考えられなかった。

それらを考えても。
この夏の間だけでも一緒に居たいと思った。
なぜなら・・彼は夏の間に惑うから。

惑っても良い。
ヒカルをあの人と間違えても良い。
それでも良いと思う。
それだけあの人を愛しているシャルルという人物がシャルル・ドゥ・アルディであり、あの人との間に生まれた思い出や絆について割り込むことも、成り代わることもできないし、そうするつもりもなかった。

ヒカルはヒカルだ。
黒須晄という名前を持っているし、彼女はあの人にはなれない。
あの人を愛したシャルルを冒涜するようなことはできない。
真似はできてもそのものにはなれない。
だから、それで良いと思う。

バスタブの縁に手をかけて、彼女は勢いよく飛び出た。
くよくよしていても仕方がないと思うからだ。
自分の目と耳で確認したことを信じようと思う。
シャルルの温もりは決して偽りではないから。
それを信じなければ・・・彼女は何を信じれば良いのだろうか。

バスルームから出る前に、もう一度、空を見上げた。
空を眺めながら湯を楽しむことができるここは、増改築された場所だった。
ジルが空を眺めながら、心安らげるように。
そういう願いが込められていると思う。
彼女は普段は、決してあの居室スペースから出てくることはないということなのだが。
時折、この別棟の客室棟を使うときがあるという。

それなら、ジルはここで、ローズバスと呼ばれる薔薇の水滴を身に浴びながら、空を眺めて・・月を見て。
シャルルを思い出しているのだろうか。もっと違う何かを思っているのだろうか。

・・・もっとジルと話をする時間が欲しい。
そう思った。
彼女はヒカルの教育係だ。

フランス語がおぼつかないヒカルに、何もかもを根気よく丁寧に教えた彼女のことをどうして忘れてしまっていたのだろう。
自分のことに精一杯で、彼女のことを問うことすら諦めていた。
だから今は・・・少しだけ、ジルのことを考えることを自分に課してみようと思う。
幸せな晄しか知らなかった。
それは私の罪だ。
贖罪の娘と言われて、自分の生きる意味を考えていかなければならないと思い始めていた。
虚無に生きるのではなく・・・
ヒカルにはヒカルの生を見つめることが必要だと思った。

空を見上げた。

もう一度月を見た。

月のようなアルディ家の人々を思った。
決して裏面を見せることのない、薔薇の家の人々を思った。
・・・・切なくなる。
・・・・苦しくなる。
シャルルだけではなく・・・どうしてこの家の人達はこうも不器用で・・・そして真摯に生きるということについて誰よりも深く考えるのだろう。

・・・ぱちん、と音がして、彼女の髪を止めていたピンが落ちた。
上ばかり向いていたから、彼女の癖の強い豊かな長髪を支えきれずにバレッタが割れた。

ああ・・・
彼女はバレッタを拾い上げた。
もうバスルームから出るので、問題はない。

でも、それを拾い上げながら。
ふと、手が止まった。
彼女の動きを何かが止めた。

何か・・・何かがヒカルに教えているのに気がつかなかった。
それが何かを意味する、いわゆる・・・「虫の知らせ」であることに、ヒカルは気がつかなかった。

彼女は生まれて初めて、何か忘れているのではないか、という気持ちになったが、すぐにぶるっと身震いをして、タオルを求めて手を伸ばした。
体温が急速に下がっている。
このままでは、シャルルの予言通り風邪を引いてもおかしくはない。

・・・・その時にはすでにその「何か」については忘れてしまっていた。

誰かが、ヒカルを呼んだような気がしたのに。

ヒカルに声は届かなかった。

月の晄が、バスルームに注がれた。
バスタブは、ヒカルの揺らした波で静かに揺れていたが、やがて・・・やがて静かになった。

薔薇の花弁が湯水を吸って・・・いくつか水中に墜ちた。

ヒカル、と誰かが呼ぶ声と一緒に、花弁も沈んでいくような。
静けさを伴いながら薔薇の花弁は水底に沈んでいった。

■205

新しく用意されていた服はヒカルにぴったりだった。
でも非常に華奢な作りになっており、この服のデザインと特徴的な縫合から、ルイと一緒に入った店の品であることはすぐにわかった。
バスルームに隣接されているパウダールームに吊られていた、鮮やかな萱草色の花柄の服は、ヒカルがバスを使い始める時には掲げていなかったので、誰かが用意したのだろう。
見ると、それらの着替えのひとそろい揃えられたバスケットの上には、上品な色合いの和紙でできたメッセージカードが置いてあった。

『サイズが合うと良いのですが　ジル』

ヒカルはそのメッセージカードを何度も見つめて読み直した。
流れるような書体の繊細な文字。
見覚えがある。
・・・・ジルの筆跡だった。

シャルルがヒカルにあてた、夏に日本を訪れている時に必ず寄越すメッセージカードを思い出した。
彼らの筆跡は良く似ている。
ジルは若い頃、彼の代行を務めていたこともあるが、その際には、シャルルの筆跡まで完璧に擬することができたという。
彼女が彼の代行を務めていたとき。
彼女は何を思ったのだろう。

唯一、彼の心の内を映し出すことができる鏡のような存在として、存在を消すことで存在を感じるのだとしたら。
やがて体格に差が出てきて、とうてい彼の代わりをすることができなくなったとき。
ジルは何を・・・自分であるという誇りの拠り所にしたのだろう。
彼が当主に就任してからも常に傍らに居て。
そして居ないときは、彼の命を受けて、世界中を飛び回っていたと言う。
ヒカルの移住についても手配準備を行ったのは、彼女だ。
物腰が柔らかく、誰も傷ついたり憤慨したりすることなしに、業務を短時間で遂行する最高の秘書について、シャルルは交代を考えることはしなかったという。

もう、今ではシャルルはシャルル・ドゥ・アルディというブランドだ。
ルイやミシェルが・・・同じような美しい顔を持つ男達や親族達が表舞台に出て、シャルルという人物の価値を高めていく。
本物はほとんど表に出てこないのに、その値打ちがどんどん・・・彼らによって高められていく。

ジルのことをどうして放置できていたのだろう。
ヒカルはほっと・・溜息をついた。
湯気の残る空間で、誰が聞いているのでもないが、誰にも聞こえないように少し溜息をついた。
傍にジルが居て、この嘆息する様を知ったら。
きっと悲しむだろう。
彼女はシャルルのことだけを見つめすぎて・・・そして見つめすぎて・・・
生きていることは見つめていることだと思うようになってしまったのかもしれない。
それなら、どうしてヒカルは傍に居ながら、そうではないと。

そうではない、と。
そうではないよ、と。
なぜ。

どうして。
ジルが放つ生命の燦めきについて、貴女はひとりだけしかいない。
ヒカルは貴女そのものが好きだ、と。
どうしして、伝えることができなかったのだろう。
幼かったことは理由にならない。
わかっていたのに伝えなかったら、それは伝えたことにならない。

わかっている。
ヒカルは・・・自分が生きる事に身を護るあまりに、ジルの悲しみや彼女の内面の物思いについては目を瞑ることにしたのだ。
シャルルやルイについては距離を置いて見ることにした。
自分と彼らと距離を置いた。
その方が安心できた。
その方が嫌われないと思っていた。

それをシャルルがいつも少し悲しそうに、「あの人にそっくりだね」と言った。
何を言っているのかわからなかったけれど、今になって考えればわかる。
あの人は、誰にでも近づくことができるのに、決して自分に近づけない厳しさと頑固さがあったと思う。
最後の絵を。
最後の絵を、シャルルではなく、ミシェルとルイを描いた。
そしてそれをシャルルでない別の人物に托した。
彼女は・・・すべてを托すことができない人だった。
全部寄りかかれば苦しいから。
全部を托すことができなかった。
唯一、ヒカルの父を除いて・・・。

ヒカルはそこで首を振った。

シャルルがここに彼女を連れてきた。
そして、濡れた体をあたためた後は、ジルの居室に訪れるようにと言い残していた。
何か話をするのだろう。
彼が先ほどヒカルに落とした愛の嵐の続きではなく・・・彼はこれからもっと違う何かをヒカルに落とそうとしているのだと察していた。

悲しみも苦しみも。涙も笑顔も。
一緒に・・・一緒に居ようと誓ったから。

約束ではない。
祈りに近い。
誓約に近い。

鴛鴦の契りにも似た彼女と彼の言葉の遣り取りは決して、楽しいことばかりをもたらすのではないと言うことはシャルルにも告げられていた。
ヒカルも承知していた。
昂揚感だけではこれからを生き抜けない、とシャルルは忠告した。

でも。
シャルル。
私は後悔しない。

ヒカルは唇の端をぎゅっと引いた。

そして、毀れたバレッタを、誰もケガしないように、そっと使ったタオルの上に置いた。
癖の強い髪を乾かすのは時間がかかる。

彼女は着替えを手早く済ませると、タオルドライで髪の湿気を拭った。
サイズはちょうど良かった。薔薇の香りがした。
ジルの匂いを思い出した。

母の香りというものを覚える前にパリに来た。
だから・・・彼女の母は、きっとこんな香りがしたのだろうと思っていた。
でもジルが話すヒカルの母親の話は、いつも違っていた。
冒険譚を寝物語に聞いた。
あの人と、シャルルと、ジルと・・この家の人達の名前が出てくる度に、ヒカルは目を輝かせて話を聞きたいと言った。
楽しいお話ではないですよ、と少し悲しそうに微笑んだジルに、続きを話して欲しいとせがんだ。
彼女は言葉を選んで、あの人の思い出を語ってくれた。
ベッドの中で、微睡むことができないほど・・・わくわくするような話をするときのジルが好きだった。

その時だけ。
その時だけはジルの青灰色の瞳が輝いていたように思った。

頬が上気し、髪が軽くなる気がした。
ようやく・・・潮が張り付いて瑕に染みるという状態から解放された。

今度は。
今度は・・・ジルが耳を傾けることのできるような話を、ヒカルがすることができるだろうか。
どんなに時間がかかってもいい。

ジルとシャルルの病は癒える病であることを、シャルルは言外に言った。
だからそれを信じようと思う。
夢の世界に入り込んで、深く戻れない路に迷ってしまった美しい人達を、呼び戻すことができるのであれば。
ヒカルは、その方策について、耳を傾けることのできる人物になりたいと思っていた。
自分の幼さが恨めしかった。
どうしたら失った時を取り戻せるかを考えるより、失った時間以上に何かを得るためにはどうしらいいのか。それを考えなさい、と言われている様な気がした。
自分の目と耳で・・・何かを感じで、何かを確かめ・・そして何かを最終的に決める。
生きているからそうすることができる。

彼女はバスルームの扉を開けた。
ひんやりと・・・扉の外の瑞気が流れ込んでくる。
適温に定められた空気が、熱気の混じり合うかのように流れ込んできた。

彼女は部屋を出た。そして、次に少し離れたジルの居室のある螺旋階段を昇るために、長い廊下をひとり歩いた。
でももう、心細くなかった。
行き着く先に、シャルルが居る。ジルが待って居る。
だから仄暗い路も恐くない。

彼女は、ジルが用意してくれた衣に身を包んで、歩き始めた。
髪飾りも、装飾品も何も無い。
でも、彼女はほんの少しまだ湿っている髪をたなびかせて・・・
長い廊下を歩いた。

ここをもう一度・・・いや、何度でも通おうと決めた。
この場所は夢幻の入り口であるけれども・・・現実に戻るための出口であるのだから。

■206

ジルの居室のある扉の前にもう一度立った。
螺旋階段を昇って、長い廊下をまた歩いた。
辺りは照明が、突き当たりのジルの部屋だけを目指せ、というかのように、等間隔に足元で壁伝いに淡く灯っていた。
白を基調した館の内部が照明によって、淡く練色に変化していた。

ヒカルは扉の前まで到着すると、腕を持ち上げて、拳を作り・・ノックをするための準備をしたのに、また、腕を下ろしてしまう。
ここは指紋認証でなければ入れないことはわかっていた。
でも、それを感じさせないように配慮したルイの行動を見て。
「ここでは話を合わせてくれ」と彼が初めて彼女に頼み事をした言葉を思い出す。
だからなおさら、礼砲のような音を立てて良いのかどうか考えてしまった。
この空間は彼女が立ち入ってはならない聖域のようにさえ思えてしまう。

どうしてだろう。

シャルルを見つめていきたいと言っていたのに、どうにも・・・ルイを思い出す。
何か、胸騒ぎがする。

ルイがジルを・・・非常に繊細な壊れ物のように扱っていることはわかった。
ヒカルは同じように・・・あの人の名前を呼ばれて、ルイのように、ミシェルのようにシャルル・ドゥ・アルディとして振る舞った彼らのように、あの人になりきれるかどうか不安だった。

ヒカルはあの人ではないと主張することが。
ルイはシャルルではないと主張することが。
彼女の傷ついた魂に妙薬になるとは・・・今は判別がつかなかった。

その時。
重い・・・白く厚い防音扉が開いた。

「・・・・入って」
シャルルだった。
彼は自ら扉を開けて、ヒカルを出迎えた。
「どうしてわかったの？」
ヒカルはシャルルに微笑んだ。

防音しているのにヒカルの来訪がわかった彼に尋ねてみたがシャルルは答えなかった。
シャルルはヒカルと同じように、潮を落とし、非常に軽装で立っていた。
少し髪が濡れている。
落ち着いた縹のパンツに、白いV字に切り取られたシャツを着ていた。
差し色にシャツの裾に、赤い刺繍が入っていた。
彼が普段好むのはこういった服装なのか。

ヒカルはシャルルのことについて・・・あまり知らないということを知った。
彼女は長い時間を彼と一緒に過ごしたはずなのに。
それなのに・・・彼をよく知らなかった。

シャルルはヒカルが何を考えていたのか、読み取ったようにくすりと微笑んだ。
ふわり、と彼の愛用する香りがした。
「そのうち、教えるよ。・・・まずは入って」
彼の甘い視線がヒカルの頬を赤くした。
薄暗い廊下からみて、シャルルは部屋の漏れる晄で眩しかった。
逆光でシャルルの躰の線が露わになる。
夏の服装であるから、なおさらだった。

彼の締まった体が目の前で浮かび上がり、薄暗い廊下からやってきたヒカルはシャルルが視界に入ると・・・その部屋でジルが待って居ることさえ・・忘れてしまいそうになる。
自分がどこに足を踏み入れているのか、惑ってしまうくらいシャルルは艶めかしい。
ヒカルを招き入れる際に彼がヒカルの肩に手を置いて、扉の中に誘った。

それだけで、ヒカルは胸が張り裂けそうに・・・困惑する。
いや、胸が高鳴って、どうして良いのかわからなくなるのだ。

「マリナさん」
ジルに声をかけられなければ、彼女はシャルルの胸にそのまま惹かれてしまっただろう。
それくらい・・シャルルは美しかった。
祓を落としたというかのような・・彼の何かが明らかに変わっていた。
それを見て、ヒカルの他の誰もが心を動かされるはずであった。
背後で、ジルの声が心なしか嬉しそうだった。

マリナさんと・・・慕わしげに呼ばれて、ヒカルは・・・
はい、と返事ができずに黙ったままだった。
そこで、現実に戻る。

いや、夢の空間に入る。
ヒカルは茶色の目を、彼の背後に立つ女性に向けた。
「ジル。・・・こんばんは」
「こんばんは、マリナさん」
用意されたように彼女に違う名前を呼び続けるジルは、とても若かった。
見事な金色の髪は腰まで伸び、透明感のある肌や、青灰色の瞳の色はシャルルに良く似ていた。
ふたりは一見で血縁関係とわかるほど、容貌が似ていた。
華奢な線の細い体は、薄いジョーゼットのワンピースを纏っていた。
七分丈で、そこから伸びた白い細い腕が優雅に泳いで、ヒカルを部屋の中に誘うために空を舞った。
彼女は腰まで腕を持ち上げて、彼女を招き入れた。
「お茶でもどうでしょうか。それとも・・・お食事にしましょうか。
シャルルと一緒に来てくれるなんて、嬉しいです」
彼女はそう言って、照れたように笑った。

「ジル」
そこで、シャルルは言った。

扉が閉まり、完全に・・・彼ら3人だけになったことを確かめた後だった。
入り口の平坦なパネルに何かを打ち込んでいた。
とたんに、僅かに遠く離れた場所で奏でていたような音楽が止まり、カーテンが窓の端から次々に遮光状態に閉塞され・・・まったく、無の空間になったかのような静けさが漂ったときに、シャルルが何か・・まったく誰も聞いてない空間をつくったのだということに気がついた。
何か・・・モーター音が停止する音が聞こえる。回転数が落ちたせいだ。
あたりは・・急に静かになった。
これまでも静かだったのに、それに加えて更なる静寂があたりを包んだ。
共鳴することで消音効果をもたらしていたBGMが消えて、辺りは・・・辺りは、とても静かになった。

防音扉を閉めて、シャルルがすべての監視体制をオフにしたのだと悟ったのは、彼が窓に近づいて、窓を開けて・・・長い腕を伸ばして、窓の鍵を開けて・・・ガラス扉を開け放った。
居間に風が音を立てて入り込んでくる。
ヒカルの髪が揺れて、外気が入り込んだことがわかった。
いや・・それより、外と内を解放したシャルル本人の白金の髪が揺れて・・まばゆい煌めきを飛散させた。
彼が背中を向けて、扉を開ける瞬間は非常に象徴的だった。
彼自らが閉ざされた扉を開けたから。

ヒカルを迎え入れるための扉を開けた。
外と内を開くための扉を開いた。
自らがそうした。

何かも制御された空間で、彼は自らの力でそれを行った。
それが何か・・どこか嬉しかった。

シャルルは少し声を低くして言った。
「空調も止まったから、少し窓を開ける」
と言った。

夜風が部屋に入り込んでくる。
カーテンが・・・装飾のための薄手のカーテンが風に揺れた。

「ジル・・・・ヒカル、座ってくれ」
彼は居室の白い背の低いソファをちらりと見た。
そこに座れと言うことらしい。

ジルは、ヒカル、と聞いて少し首を傾げた。
でも、シャルルはそれを無視した。
「後で話をするから。・・・ふたりとも、座ってくれないか」
彼が何を話そうとしているのか。
ヒカルは聞かなければならないと思った。

―――聞かなければならない。

義務ではない。
責務ではない。でも、

彼が話をしたいと言う。

シャルルは、ジルの斜め前に座った。
ジルはヒカルの正面に座った。

ヒカルは正面のジルと、斜め前のシャルルを見ながら腰を下ろすことにした。
上質の革張りのソファに、3人の体が沈む。

和やかな談笑ではない。
3人とも等間隔だった。
これは・・・何か大事な話をするからだ。
これまでの経験から、ヒカルはそう感じた。

彼が寄り添うことのない場所に座る。
ヒカルはジルとシャルルと同じ距離で座る。
ジルはシャルルと寄り添わないあの人に似たヒカルを見て何か話を聞くことになる。

シャルルが何か思い定めて、これから重大な告白をしようとしているのは明らかだった。

ヒカルは息を呑んだ。
水分を摂ってくれば良かったと思うくらい、喉が渇いた。

青灰色の瞳が、2人分あった。
茶色の瞳が彼らの瞳を追った。

ヒカルは浅く腰掛けて、居住まいを正した。
何かを伝えたいと、シャルルが思うのであれば。
ジルにだけではなく、彼はヒカルに伝えたいこともあるのだ。
だから・・ジルの前で「ヒカル」と言った。
マリナと呼ぶジルの前で、彼女の本当の名前を言った。

これには意味がある。
その意味を・・・・きちんと聞きたいと思う。

自分の目と耳で感じたことを・・・感じたままに考えたいと思う。
何がシャルルの言葉になって告げられるのかわからない。
寄り添って、縋って聞く話ではない。
そう感じた。
シャルルは、その様子を、じっと・・青灰色の冴えた瞳で眺めていた。
ヒカルの面持ちから、内面を観察していた。
その時の様子は、ミシェル・ドゥ･アルディに非常に良く似ていた。
客観的に、何もかもを越えて見つめるその視線が・・・彼らは良く似ている。
でも、恐くなかった。

「いいわ、シャルル。・・・私は聞こうと思う。聞きたいと思う」
「ああ、貴女はそれでこそ・・それでこそヒカル・クロスだ」
彼はもう一度、夢の住人であるジルの目の前で、彼女の名前を愛おしげに呼んだ。

不思議そうな面持ちのジルを、ヒカルは静かに眺めていた。

何かが始まる。
何かが聞こえる。
何かが私を変える。

ヒカルは膝の上で拳を握った。
少し汗を掻いていた。
緊張している。
それはわかった。

でも。
恐くなかった。

一緒に居る人がいるから。

「ヒカル。愛しているよ」
彼はそう言った。ヒカルは微笑んだ。
なぜ、彼が最初にそう言ったのか。
何となくわかったからだ。
彼はこの話を終えたら、彼女の愛が揺らぐと畏れている。
でも、それはないと確信しているから話を始める気になった。

シャルルは白金の髪を頬に散らしたまま、じっと・・ジルでもヒカルでもない場所に向けた。
これから、彼は話を始める。
ヒカルは呼吸を落として・・・そして彼の言葉に耳を向けることに集中した。

■207

シャルルもヒカルと同じように、浅く腰掛けて、膝の上に肘を置いた。
少し前屈みになり・・じっと、正面を向いたが、その視線はヒカルもジルも見て居なかった。
「シャルル、恐い顔をしたら、マリナさんがびっくりしますよ」

詠うように、囁くようにジルがそう言った。
シャルルと同じような、切れ込んだ双眸を少し細めて、彼を柔らかく窘めた。
しかしシャルルは少し微笑んで「ジル、少し話があるんだ」と繰り返し言った。

遠くを見ていた。
そう、遠く・・遠くの記憶から彼は呼び戻そうとしていた。

「・・・アルディ家の者が、冷凍精子や凍結卵子を義務として保有していることは知っているね？」
「はい」
ヒカルは頷いた。
彼が切り出した突然の話題に、動揺を見せないように短く返答をした。
少し悲しかった。
義務として、と淡々と言ったが、シャルルはこのことについて、深く傷ついている。

彼は・・何度か話そうと唇を開き閉じて、そしてとうとうそれについて語り始めた。
シャルルが戸惑っている。

彼はフランスの華と言われて・・彼ほど完璧な人は居ないと言わしめた人物であるのに。
彼はその話をすることを躊躇っていた。

ルイはそこから誕生している。
そして、ヒカルはその技術を応用して生まれてきた。

「・・・なぜ、彼が直接・・・結婚した相手との間ではなく、婚姻前に誕生したのか・・・アルディ家は聖職者も生み出す宗教的意見も無視できない家柄なのに、どうして倫理に反するような彼を生み出したのだろうか」
シャルルは話し出した。

自らの考察をもう一度反芻するために、自らと問答を始めたようだった。
それは先にミシェル・ドゥ･アルディが行ったヒカルへの問いかけに近かった。
とてもよく似ていた。
彼の声は少しだけ震えていた。
でも誰かの温もりに靠れ掛かることはしないで、ひとり・・ひとり静かに背を伸ばし、遠くを見つめながらも事故を見失わないように律していた。

彼の声は・・低く・・・聊けし声音だった。

「時期を待って、誕生を操作すれば良かったのに、ルイはそうではなかった。
出生証明も・・日本で言うところの戸籍を調整して生まれた彼は・・オレの知らない間に誕生していた」
彼はそう言うと、苦しげに吐息を漏らした。

「それは親族会が決定したことだ。シャルル・ドゥ・アルディの意思を無視した。これは咎められるべきことなのだが、理由があった」
「理由・・・」
彼は頷いた。
少し・・声が震え始めていた。
彼は憂えていた。
このことを話せば・・ヒカルが離れてしまうかも知れないと。
でも、告げなければならない。
彼女は知らなければならない。
知らざる者故の罪と苦しみを、ヒカルに与えることを苦しんでいるように思えた。

「シャルル」
ヒカルは微笑んだ。
ゆっくりと、彼を安心させるように。
蕾から大輪の花に変化していく薔薇の花のように。

「良いよ」
彼女は彼に赦した。
何もかもを解放して話してしまうことが愛ではない。
それは理解していたから。
だから・・彼がヒカルの知らない話をすることを赦そうと思う。
赦すとか、そうでないとかという次元ではないのだが。
彼女に赦しを乞うのではない。
でも、これから話をすることに・・彼女が憔悴することは確かだった。
でも。
湯浴みをして美しくほのかに立ち上る香気と光輝をまとうヒカルに、これから告げることは酷であると言うしかない。

でも、言わなければ・・・彼と彼女の未来はない。

そう。
シャルルは彼女との未来を切望した。

これから先。
一生。
どちらかが生きて居る限り。
命が続く限り。
いや、命が絶えても。

彼と生命を、彼女に寄り添うことを赦してもらうには、この話をしなければならない。
それでもなお、彼女がともに在って行こうと言うのであれば。
彼は・・彼は何かが変わるかも知れない。

誰かに何かを托すのは久方ぶりのことだった。
誰かと・・・秘密を共有することになるとは思わなかった。

ジルはその話を黙って聞いていた。
まるで理解できない言語を聞いているかのように。
でも、その内容は彼女にわからないはずはなかった。
それなのに・・・彼女は忘れたいと思っているから。
夢の中に入り込んでいるから。
その言葉を聞かないことにしているのだと思った。

シャルルが、あの人と永久の約束をする前に、アルディ家のことについて話をする・・・
そんな程度の話のように、彼女は聞こえているらしかった。
始終微笑みを絶やさず・・彼女のそんな様子にシャルルは悲しそうに視線を遣った。
「ジルのことは少しそっとしておいてくれ・・・これからの話は長いから」
彼はそう言った。
順を追って説明をするから、少しこのままで彼の話を聞いて欲しい、とシャルルは低く言った。
「彼女の内面を聞くことは、結局なかった」
彼がぽつりとそう言ったので、ヒカルはそれは違う、と言おうと思ったが、言葉にできずに無言でシャルルを見つめるばかりだった。

開けた窓からは、夜風が入り込んできて、ちょうど、ヒカルが座っている場所からは月が見えた。
明るく・・・そして夏の月なのにどこか冷涼な晄だった。

だから彼はジルが何を考えているのか、全部を把握することができない。
全部を想像して、彼女の憂いを取り除いてやることができない。
彼はシャルル・ドゥ・アルディなのに。

・・・彼の大切な従妹であり、彼の水鏡である彼の長らく一緒に居た人を救うことができない。

あの泥滓のような日々の中で。

彼女はいつも微笑んでいた。
いつもウイと言った。
いつも・・・シャルルを心配していた。

彼は両の掌で、一度だけ、端正な顔を撫でつけた。

■208

「ああいう生殖細胞は、半永久的に保存されるが・・・一度提出すれば良いと言うものではない。当主の就任のときや、長期療養を必要とするような病に陥ったとき。危険度を伴う何かに従事しなければならない軍人職の者も・・・定期的に提出を要する」
ルイの命の源を敢えて、淡々と「生殖細胞」と彼は言った。
ヒカルはその時だけ、彼の目が合った。

・・・悲しい瞳をしているシャルルが居た。

「オレは当主だ。あのアルディ家を背負う首長であるのに、一族は無視をした。これは許し難い事実であったし、これに伴って、幾人か責を問うて解任した。
それは容易に想像できたことなのに。彼らは実行したんだ。
・・・・オレがこの症例に感染したことを知ったから。当主はすぐ交代するのだから、次を用意する方が先決だと考えた」
「感染・・・・」

シャルルは少しだけ頷いた。
ちらりとジルを見つめた。
「モザンビークに」
彼は続ける。
話題を変えた。
「モザンビークに滞在していたことがある。

そこで希少金属の鉱床を見つけようとして、しばらく・・ほぼ単独で、地下に潜り、採掘をする素材や方法について徹底的に調べようとした」
「シャルルは当主にならなければモザンビークを救うための手立てを講じることができないと思い・・それで私が引き継いだのです。彼の医療と、調査を」
ジルが彼の言葉を引き継ぐようにして、詠うように言った。
彼女は少し誇らしげだった。

———あの時、初めてシャルルがジルを見つめたから。
ジル。君をオレにくれないか、と聞いてくれたから。
だからどんなことがあっても何があっても、シャルルの希望を叶えてみせようと思った。

シャルルはジルの言葉を聞いていたが・・・そこで軽く溜息をついた。
「モザンビークでは、新しい鉱床の発掘と、彼らへの医療行為が優先されました。これには莫大な費用がかかります。そこで・・シャルルは当主就任を承諾することによって・・・自分の人生を犠牲にすることで、モザンビークを救おうとしたのです」
ジルは平坦に抑揚もなくそう言った。
何度も繰り返し述べた末葉のことだった。
彼女は・・彼女は、彼の行動について批難しない。
いつも理解を示し、いつも彼の行動を最優先する。

それが彼との距離を隔ててしまうことになったとしても。
いつも彼女は同じだった。
ジルはいつもシャルルに同じ月面を見せ続けた。
怒ったり泣いたり問うたりしなかった。

「あの国で・・未知の鉱床の採掘調査をしたとき。
それが、アルディ家の一族の運命を変えた。この血族が滅んでしまうような危機的状況を招いたのは・・・オレだよ」
彼はそう言うと、少し言葉を句切った。
話が核心に触れようとしていた。

シャルルが非常に緊張していることがわかる。
ひとつひとつの言葉を慎重に選んでいることがわかる。
本当は話をしたくないと思っているのに。
それなのに。
ヒカルに真実を・・ジルの目の前で真実を打ち明けなければならないと理解している。

彼の贖罪なのだ。
身を切るように切なく辛い話をヒカルの前で、ジルの前で、告白する。
ジルを癒すために。
きっと、自分のことはまったく考えていないのだろうと思う。
シャルルは自分の身を切ってまでして他人を優先する。それが彼の誇りだから。
辛い顔をしないで、涼しげな表情で内面から血を流す。それが彼の深念だから。

「あの国を救うには、当主に就任するしかないと思った。
でも、当主に就任するということは一族を後世に残すことだった。もう誰とも結婚を考えたくなかった。ほんの少しだけ。ほんの僅かな期間でも当主に就任して、それであの国を救う手立てを誰も中断することのできないところまで・・・そこまで運べば良いと思っていた。当主に就任するためには、結婚していなければならない。でも、オレはそれを撤廃することを条件に当主に就いた。
それくらい・・・オレ以外に、継承者が居なかった。
父ロベールの子とされている正当な者は、オレひとりだけだった。
数多いる叔父達には、権利放棄の請願書があって、就任は決してありえなかった。
・・・・ミシェル・ドゥ･アルディはすでに権利を剥奪されている。
オレには都合が良い状況だった。本当に、天がオレに味方をしてくれていると思ったよ。誰も導くことのできないアルディという流浪の民を、オレしか居ないという理由で頂点に据える愚かな者達を嘲ら笑いながらも、利用したんだ。
それに・・・都合の良い事態が生じた」

生きるには煩わしいとさえ思ったことのある家なのに。
その家に縛られて、その家の掟を利用しようとした。
シャルルは嗤った。

■209

「後にやって来るテクノロジーが必要とする希少価値の鉱物が、そこにはあった。
豊富に眠っていた」

シャルルはそう言って、遠くを見た。
窓の外の夏の闇空を見上げていた。
遠く・・・同じように深い闇を孕んだ遠い異国を懐かしそうに思い出していた。

彼が愛した国。
彼を必要とした国。

今は自由に行くことができないが、きっと・・・彼が治療して命を吹き返した者達は今も生きて笑って泣いて・・・そして生命は一度きりしかないと思ってくれているに違いないと思う。
そう思いたかった。
当主としてできうる限りの助勢を行っていた。
今の彼ができる精一杯のことだった。
当主を交代すればすぐさま方針変更されるような、小さな助力を重ねていった。
大きな方策を打ち立てることが難しかった。
シャルルでも・・・アルディ家の当主であったとしても、叶わないことがある。
いや、彼の一存で決まらないことの方が、だんだん多くなっていった。
大人になるというのはこういう・・自由にならないことを受け入れていくことなのか、とさえ思って、当主という肩書き以外の職業をいくつも兼務した。
彼が自由になることは何だろうと模索したのに。
それでも結局・・・ここに戻ってしまう。
何処に言っても、行き着く先は同じだった。
遅いかはやいかの問題だった。
結末は同じだ。
いつも・・・いつも同じ結果になる。

「そこで・・・そこで鉱床を発見したけれど、同時に、他の副産物も発見した。
いや、発見したというべきかどうかわからない・・・」
「副産物」
ヒカルが復唱した。

そうだね、副産物というより・・罪に対する罰だろうか、とシャルルは言った。

斜め前で淡々と語ろうとする人の・・・深い悲しみと憤りと驚愕を感じていた。
このことについて、アルディ家の者以外に話をするのは初めてなのかも知れない。

でも、最初はヒカルが良かったから。

シャルルはそう言った。

ヒカルが良い。
ヒカルで良い、ではなくて。
ヒカルが良い、と言った。

彼はそこで思い切ったように言葉を紡いだ。
静かにでもはっきりと。

「ヒカル・・・無幻症の正体は、ウイルスだ」

その言葉を聞いて、ヒカルが茶色の目を見開いた。
ウイルス？
彼が何を言っているのか瞬時に理解できない。
これほどまでに長い時間を患わせてきた彼らの憂いを一言で片付けられてしまうほど、単純ではないと思っていた。
遺伝なのか外的要因なのか、わからないとミシェルは言っていたのに。

わかっていたのなら・・・なぜシャルルは黙って居たのだろうか。

彼が何を話し出しているのか、最初にすぐ理解することができなかった。
夏のマリナに惑うシャルル。
青春の輝きの時代を回帰するジル。
その原因が・・・ウイルス？

脆弱で、温度差や湿度に弱く感染力については千差万別のあれが彼らを蝕んでいる？

・・・理解できなかった。

シャルルはそこまで言うと、ほっと一息ついた。
まるでその言葉を長らく言い禁じられていたと言うかのように。
ようやく、言うことができたと安堵するかのように。

「モザンビークで新たな土壌を発掘する際に・・・オレは感染した。未知なる原始のウイルスに・・・人種の違うオレが、そこに入り込んで何が起こるのかを想定して備えておけば良かったのに。現地人が平然としていたので・・いや・・そんな危険を感じるような設備もなかった。あの当時は、何も無いところから何かを探さなければならなかった」

彼は新たなモザンビークの財源となるべき希少金属の鉱床の発掘に尽力した。
これによって、他国に依存しなければ生きていけない国は独立した。
でも。
でもその代わりに、彼は地中深く潜ることによって・・・・あの国の人には免疫があって自身にはそうでない未知の・・・脳細胞を激しく振盪するウイルスに遭遇することになった。

「最初は・・・より長い時間滞在していたジルが発症した。次にオレが・・・
因果関係も前後の関係も証明できなかった。
それを解明するために・・・系図原簿での行動履歴が必要だったのに、オレはそれを抹消させた。
モザンビークでの活動は後悔はしていないし、決して忘れることはない。
でも。
・・・それはオレにとって辛く苦しいけれど、忘れられない・・・青春の輝きの時代の一時期でしかなかったから。系図原簿に書かなくても、それをオレが覚えていれば良いと思った
から・・・」

「鉱山探索が、モザンビークの地民族では感染し得ない未知のウイルスを一緒に掘り起こしてしまったということね」
ヒカルがぽつりと言った。

それなら、彼らの発病時期にも説明がつく。
だからそれは嘘偽りではないだろうと思った。
でも、これほどあっけなく簡潔な説明をされるのであれば。

彼らはなぜ、もっと早くに・・このことについて抗ウイルス投薬を開始しなかったのだろう。

「鉱脈は誰も採掘したことのない場所だった。
エジプトの密閉された墓標のように。そこは密閉されていた。
・・・あの人と、あの男と一緒に探索した部屋のことを思い出したよ・・
誰にも触れられてはいけない聖域とされたような、そんな空間に足を踏み入れた時に。
ああ、これで・・これでこの国の人々が助かると思ったのに。
引き替えに自らの肉体を差し出してしまった。
これまで誰も踏んでいない地に・・・土足で利益のためだけに足を踏み入れたオレは処罰されたと思った」

「何を言っているのよ」
ヒカルが呻いた。

彼が私利私欲を持たずに、あの国に尽力していることは今でも現在進行形である。

それなのに。
それなのに、それを罪だとか、あろうことか大罪であるとでも言いたげな彼の物言いに、ヒカルは反発した。

なぜ・・・なぜ彼はそうまでして自らを罰しなければならないのだろうか。

何も悪いことはしていない。
何も自分に返ってこない。

それなのに彼は自分を滅して・・・そしてジルの半生を捧げてまで、あの国に尽くした。
愛する人を失った彼が、無償の愛を注ぐ対象を求めていたことも相まって。
これからモザンビークが大きく転換するであろう、可能性をシャルルは見つけたのに。
それを引き替えにして、自らに足枷を積んだと言う。

納得できないよ、シャルル

ヒカルは呻いた。
でも声に出さずに、息を潜めて彼の話を最後まで聞くことにした。
文句もなぜ？という問いも、最後に聞くことにする。
今尋ねれば彼の真意を損ねてしまうと思った。
この告白は、シャルルがヒカルに対する贖罪の弁明などではない。
ジルを救いたい。

ヒカルを・・あの人ではなくヒカルを見るために。
彼にとって必要なことなのだ。
そして。
ジルにとっても必要なことなのだ。

いや・・・

ヒカルにとっても。
彼がこれまでに一生口を噤んで誰にも吐露することがないと誓った内容を聞くことで。
大きく変わろうとしていた。

「シャルル。私は・・・最後まで聞きたいから。最後まで聞く。
だから、どんなに辛くてもきちんと話して欲しい」
この言葉に、シャルルは淡く微笑んだ。

青灰色の瞳で。
それでこそ貴女だ、と称賛した。

傍らで、何が夢幻の中の出来事で、何が・・・「今」のシャルルの言葉なのか、聞き分けようとしている彼らにとって大事な人が混迷していた。
でもこれは必要な惑いなのだ。
ジルは少し・・・金の眉を顰めて、何かをじっと考えていた。
その様子は、シャルルや・・・他の薔薇の一族と非常に良く似た動作だった。

「続けて」
ヒカルは少しかすれた声で言った。
シャルルの話は終わっていない。

彼の病の原因はウイルスだという。

「ジルもオレの調査研究を引き継いで、モザンビークのあの鉱床に何度も足を運んだ。
そしてその時に感染した。
まったく・・・まったく微弱なものだから、地元民は耐性があって、まったく影響しない。
でも。
それは・・・未知なる大陸からやって来た異邦人には激しく攻撃を始めた」
彼の気がつかない間に。

長い時間閉鎖されていた空間に澱んでいた、微弱な濾過生病原体は、彼の体を蝕んだ。
発症しなかったから、同じようにシャルルの代行で訪れたジルの体を蝕んだ。

そして・・・シャルルが頭部損傷を負ったことによりそれは引き金となって始まりを告げた。
無幻症。
夢幻の世界に誘う病が、彼を襲った。
あの人を思い、彼は疑似恋愛を彷徨った。
当主でありながら、そこに固執することができずに様々な職種の遍歴を好んだ。
自らを知ろうと思ったことなのに・・・
ひとつのことに固執するというアルディ家の最たる特徴から離脱したことを喜んでいた。
固執できない・・自分の思い願った世界にのみ固執するというあの無幻症を発症しているとは気がつかなかった。
そんな可能性を考えなかったか、というと、それはノンというこたえになる。

なぜなら。
彼はモザンビークを救う為に、結婚を決意してフランスに帰国したときに。
体調不良を訴えて、しばし療養していた。
この時に精密検査を行っていたから。
彼が自身を診断していれば、即座に判明したことかも知れない。
でも。
その時に、ちょうど、あの人とあの男に再会した。
自らの体調の管理より、彼らのことを最優先にし・・・その後すぐに、彼は流浪の生活を送ることになる。
双子の弟ミシェルによって、当主継承者の座を追われてしまったからだ。

「人種特有のウイルスなんてね・・・しかも非常に脆弱でなかなか感染しない・・・
そう、アルディ家のように、血族結婚や近親婚を繰り返したり、近い血縁で縁故関係を瑕事にやっきになっている人種でなければ陥らない罪業の病だ。・・・モザンビークではありえない事態を日常的に行っている病んだ家系にのみ、脅威となる、不思議なウイルスだ・・・。
抗体がないからね。
優れた種だとか。高貴な血族だとか。
可笑しくて、最初は嗤ってしまったよ。
・・・それなら、こうも原始の未知なる濾過生病原体に滅されるような弱い血筋を持つ者を当主に据え置くのか・・これが彼らの望んだ『強い当主』なのか。
非常に・・・非常に興味深く観察したよ。一種、憐れみをもって」

自嘲的にシャルルが言った。
もう、誰も見ていなかった。
ジルは黙って彼の話を聞いていた。

ヒカルは彼らの様子を伺いながら・・・そのまま話を続けるシャルルに耳を傾けるしか為す術がなかった。

彼らの一連の憂いの根源は・・・シャルルが個人で救おうとしたあの国がもたらしたと言う。そしてそれを甘んじて受け止めているという。
薔薇の一族はそれで滅んでしまうのであれば、滅してしまえと、シャルルが望んでいる狂気について、彼は正直にヒカルに吐露したのだ。
彼は優しいだけではない。高潔だけではない。
シャルルも生きている。
彼の暗闇について、彼がこうして話をしているのだから、それを受け止めたいと思った。

ヒカルは言葉を発することを忘れた。
相づちはこの場には必要ない。
ただ・・・彼がこの話をするのは一度きりだ。
彼は繰り返さない。
だから何度も話さない。

ヒカルは黙ってそのまま話を聞くことにした。

■211

「二次感染はほとんどない」
彼は続けた。
「だからヒカルも感染していない。これは毎年行われていた検査でもわかっている」

・・・あの検査は、ヒカルの幹細胞をどこから採取できるかという経過観察の検査だけではなかったのか。

「数値のわずかな異常には気がついていた。
ヒビキヤ達を治療するときに・・・・予防接種をした。
滅菌状態の中で感染症を起こされたら困るからね。
免疫系が弱まっている。
その程度の結論だった。

―――自分のカルテはいつも後回しにした。
遣るべき事が山積されていて、オレは・・・自分はどうでも良いと思っていた。
面倒だな、と思っていたことは否めない。
その時はオレ自身ではなく、ジルやオレではない誰かの方が、オレのことをよく観察していたわけだ」

でもジルは気がついていたらしい。
戻って来て。
何かが違うと感じた。

・・・シャルルのカルテを見て。
そして、ジルは何かがおかしいと気がついて、自分の検査もした。
陽性だった。
でも検査結果を秘匿したままにした。
彼がそうしろと言ったから。
個体数が少ないので、実証できない。
いや、この件について言えば、解決策を模索するつもりはない、と言った。
特段に影響を与えるものでなければキャリアというだけで済まされるだろうと言って、彼はジルの感染について、自分で確認しなかった。
ジルは自分の感染については、染色体に影響されるから、XXの自分は平気だと偽りを言った。
発症していることに気がつかない、無自覚であるということが・・この症例の大きな特徴であるのに。
でもジルは発症しなかった。
モザンビークでは・・彼女は彼女の思うとおりに願ったとおりに生きていたから。
戻りたいと思うような強烈なストレスを感じなかった。
肉体は疲れたが、精神は健やかだった。
遠い空の下でシャルルが彼の思うとおりに生きているのであればそれで良いと思い、そうであると信じていたから。

それなのに。
呼び戻された。

シャルルは、自分が自分でなくなることは絶対にあり得ない、とあの人に断言した。
それなのに、それなのに。
彼は自分でなくなった。
いや、シャルルでなくなることはなかったので、彼は昔の彼になっただけだった。
彼女が経過観察の詳細データをミシェルに渡して、研究所に彼を招き、ミシェルに解明させよう

としたことに、ジルは非常に苦悩した。シャルルは激昂した。
誰かを利用したから。
自分を犠牲にして体を切り刻まれるのならそれでも良い。
でも、もうその時には、記憶の欠落が現れ始めていた。
他者から見るとまったく違和感がないという。
しかし自分の中で、明らかに「今」でない自分が居るということに気がついた。
ジルは迷った。
迷いが更に彼女の進行を速まらせたのに。

あの人の治療をジルが行ったことがある。
昏睡状態のあの人の管理を任されていたジルが、あの人の特異な体質について、気がついた。
そして、その後に、小柄な体軀故に不妊に悩んでいることも知って。
彼女は、あの人を利用した。
これで、シャルルが幼い頃から願っていた、彼の母の病であったあの治療方法について画期的な効果をもたらす新薬が見つかるかも知れない。
ドナー登録制度ももっと違う方向で発展するかも知れない。

それなら・・それなら。

ジルは・・・
自分は罪深い人間だと、当時よく言っていた。
なぜそう思うのか、とシャルルは尋ねなかった。
彼女の内面について・・・深く思い遣ることができなかった。
それは自分の罪業だと思う。
シャルルはぽつりとまた一言漏らした。

ジルの一生をくれ、と彼は言った。
それなのに、いざ捧げられると戸惑った。
彼は捧げることは知っていたが、捧げられることがこれほど重いとは知らなかった。
愛を知っていたのに、愛されることを知らなかった。
ジルの深い慈愛とでも言うかのような・・・献身的な愛について考えたことになかったし、その愛は受けて当然だと思っていたから。
いや、それすらも感じなかった。
空気のように・・・・それについて存在を思い遣ることをしなかった。

それが彼の罪だ。

愛をすることに夢中になり、愛されることについては考えなかった。
愛する者が自分を愛してくれることに夢中になったが、その一方で・・・穏やかに振る舞っているジルの悲しみや苦しみについて考えなかった。

すべてが終わってしまった後だった。
その時になってジルの異変に気がついた。

彼女はミシェルに実験データを提供し、ミシェルからの報告書にも「経過観察」と最終的に判断を下したのはシャルル自身だった。
ミシェルは何度も警告していた。

このまま進行すれば、やがて・・・常時、現在と過去の判別がつかない夢幻状態に陥ること。
所謂、無幻症と良く似た症状を引き起こす亜種とも言えるウイルスではあるが、未知のものであるから、モザンビークに渡って原種株を採取し、培養した上でワクチンを創り出すか、マリナ・イケダを使って幹細胞を培養し・・・そして遺伝子治療を長期に渡って施すことを提案されていた。
どちらにしても原種の特定と解明を急げと書かれていた。
ミシェルも繰り返さないのに。彼は何度も警告した。
でも、ジルとシャルルはそうしなかった。
これから先、モザンビークに赴いてあの鉱床を訪れる者は、アルディ家の中では居ないだろうと結論付けた。
誰かに感染させるものではないのなら・・アルディ家を除いてだが・・・それなら、彼らはそれでも良いと思った。しかし彼はフランスの華であり、いつか親族会で知られることになるだろうとミシェルは最後に一言申し添えた文書を送ったが、シャルルはそれを無視した。

その間、相当年月が経過した。
でも彼はごまかし続けた。
ほんの一瞬だけ・・・あの人のへの愛について考える時にストレスを感じ、ほんの一時惑うだけで、その他の事柄にはまったく影響しないと判断したからだ。
あの人はやがてあの男と結ばれて程なくして子を産んだ。
アルディ家の提携する施設でヒカルを産んだ。
それについては、もうジルを咎めるつもりもない。
あの・・・昶と名付けられた赤子の晄輝くような顔を今でも忘れていない。
今、彼が愛していると囁く目の前の娘の誕生を彼は喜んだ。
誰と結ばれても良い。
彼女が生きていてくれれば良い。

あの人が、幸せよ、と言う日々を送るのであればそれが彼の幸せだった。
あの男となら、なおさら・・彼は祝福しようと思った。

でも。
程なくして・・・あの事故が起こったから。

その前から彼への負荷は大きかった。

当主復権への過程で、彼は頭部を損傷した。
そして、当主になった直後に、親族が秘密裏に・・・彼の凍結精子を使ってルイを誕生させたことを知った。
DNA鑑定では、シャルルが父親ということが明らかであるので、彼は当主として後継者を受け入れるようにと言われたので、激昂した。
そしてヒカルが誕生するずっと前に・・プロトタイプとしてルイがデザインされたことを知り、彼はこのまま・・・このままこの一族が滅亡してしまえば良いのに、と思った。
でも。
当主の座を降りることはできなかった。
固執していたわけではない。
でも、当主を降りればモザンビークへの復興支援が遅れてしまう。
アルディ家だけが優遇されている、モザンビークへの出入国も制限されてしまう。
まだ、彼はあの場所で遣るべき事があった。
いつか、当主の座を退いたのであるならばもう一度・・あの場所に行ってみたいと思う。
ジルを頻繁に出入りさせるだけでは済まされないいろいろなことを・・彼が自ら赴いて、解決する日々を送ることができるのであれば。

彼はその時すでに・・・どう実現するかを考えるより、いつかまた、という夢想を貪ることに執心してしまった。
その時すでに発症していたことに気がつかない。
それが無幻症の症状だからだ。
唯一、彼の状況を詳細に知るジルがすでに・・すでに短い時間ではあったが、過去に遡るようになっていった。

■212

やがて彼は当主に就任し続けるには、ルイを認めなければならないという究極の選択を迫られた。
その時には、彼はすでにいくつかの職業を兼務していたが、当主の座だけは誰にも譲ることがで

きなかった。
彼の意向を継承する者が居ないのだ。
ミシェルは権利を剥奪されているし・・・ジルはロシェル姓であるので、一度誰かと婚姻させなければならない。
最も近しい親族のリストを何度も見つめ直したが、シャルルの意思を継ぐ者は皆聖職者か軍人になり・・・到底彼の意思をそのまま伝え続けることのできない者ばかりだった。
唯一、彼の異母弟と、彼の年下の叔父が居たが、彼らは就任を固辞した。

・・・それにモザンビークに来訪するようなことがあったときに、彼らが感染しないとは限らないのだ。

シャルルは、その危険性について天秤にかけた。

自分が・・・
今一度。
神さえ騙して婚姻するか。
誰かを生贄にするか。

彼は迷わず前者を選択した。
そして、結婚することにした。

ルイの母親であるということを理由にすれば、婚姻を急ぐ理由も周囲は納得する。
その時にはすでに、ルイは類い希なる能力を発揮して、シャルルの再来だ、新しい種の誕生だと言われ始めていた。
彼は自分を殺して、再び婚姻することにした。
ランスの教会で結婚式を挙げるのは、あの人としかあり得ないと思っていたのに。
結婚前に相手の居処に、ひと月も常駐することなんてできなかった。

―――とにかくはやく終わらせたかった。

一日だけ。
挙式の当日だけ。
我慢すれば良いと思った。

閨を伴にすることもあるだろう。
でも、それはあの人と一緒に微睡んだあの夜とはまったく違う。
あの人以外にはもう・・・心から愛していると囁くことは決してないと思った。

そして。
そんな気持ちで居た挙式当日に。
彼の耳に囁かれた言葉は。
彼らが・・あの人とあの男が二度と戻ってこないという報告だった。

彼はその瞬間・・・暗闇に墜ちた。

モザンビークの民を愛していた。

だからこそ・・・だからこそ。

彼の生がどこに向かっているのかさえ、わからなくなった。
愛の矛先について迷った。
彼はひとつのものしか愛せない。

そして。
彼はジルを利用したのに。
その他の人々を利用したのに。
自分が自分であるために、あえて病の治療をしなかった。
大人になって、あの・・・青春の輝きを遠い昔と言い切ることが恐かった。
だから。
だから、そこに戻れるのであれば・・・
そのウイルスは彼に味方しているのだと思った。
消滅させてしまえば、あの人に二度と会えなくなる。

だからシャルルはこの病は治療しないことにした。
ジルは・・・それを決めたときには戻れない場所まで行き着いてしまった。

「このウイルスは非常に脆弱でね」
彼はもう一度言った。
「・・・・ほとんど感染のおそれがない。
原種株に触れてしまった者だけが禁忌の扉を開ける。
・・・もしくは、抗体を持たない者が感染するとき・・
アルディ家の者のようにね・・・

それは、感染者の体液から感染する」

だからオレは子どもを作るつもりはなかったし・・・
ルイという保菌された罪の子が生まれた時。
もうだめだと思ったよ。

少し寂しそうに彼は小さな声で言った。

「ルイは・・・生まれながらにしてキャリアだ。
彼が畏れているように、いつ発症してもおかしくはない。
でもね。
でも・・・・彼は遡りたいという過去がない。だから発症しない。
彼に思い出も愛も・・・戻りたいというような記憶はないから」

ヒカルは息を呑んだ。
肩を大きく上げた。

シャルルがなぜ・・・どうして、ミシェルさえもルイに愛を注がないのかが・・・

今になってようやく理解できたからだ。

彼らはルイを現在に留めておきたかったから。
ルイには未来だけを見て欲しかったから。
・・・いつか、この病について、ヒカルという晄が光明を照らすまで。
ルイには遡及する過去を与えないと決めたのだ。

・・・なぜ。

どうして、そんなに・・・不器用なのだろうか・・
彼らはどうしてそれほどまでにして秘密にしておきたいと思ったのだろうか。

親族達は知っていたのだろう。
詳細は知らなくても。
そしてルイはいつも言っていた。

「どうしてそういう者しか愛でられないのですか」と。

彼はわかっていたのだ。
自分に愛が捧げられないことを。
理由を知っていたかどうかはわからない。
でも、理由があって、誰からも愛を受けることのできない生なのだと知っていた。

だからこそ・・・・
あんなに冷たいのに。

ルイは。
ヒカルに優しかった。
決して見せかけだけの優しさではなかった。
彼の不器用で木訥な表現について、もう少しヒカルが考えを及ばせていたら。

こういうことになはならなかったのかもしれない。

彼は言った。
「父方からの遺伝による発症の確率は半分。
でも母方からなら、100パーセントだ。
確実に母子感染する。
X染色体に異常が現れる。
だからXY染色体の男子から遺伝される確率は半分。
XX染色体の母親から遺伝されるのは100パーセント。
ジルは、XX染色体は感染しないと言ったのに。
オレはそこでジルの解任を決めた。
彼女の願望と発言が混雑し始めたから。
でもすぐには解任できなかった。
アルディ家というものは・・・もう、オレの一存では、何もかもを決定することができないくらい肥大化していた・・・だからこそ、後継を求めてルイを生み出したのだが・・・

・・・だから親族は、代理母出産でも・・・帝王切開を試みた。
出産時の血液感染を防ぐために。

それでも、ルイは帝王切開でも自然分娩でも影響しない。
なぜなら・・・母親が保菌者だから」

ルイの遺伝上の父母が誰であるかを知っているのはごく僅かな者であるということを理解した。

彼は今でも・・・アルディの嫡男なのだ。
それを覆すことはない。決して。

シャルルは、言いたかったのだ。
ミシェルの凶行は止めることが出来なかった。
でも、それによって、ルイという夢幻の状態に陥ってもおかしくない確率を持った者が誕生してしまった。
新しい種を作ったのに。
新しい・・薔薇の一族を滅亡させる種を作り出した。
親族会の意向に反してルイが生まれた。
親族が望んだ新しい導者であるのに。
彼は滅するために・・・彼らを滅するためにルイは生まれた。

■213

シャルルが途中で、ルイがシャルルの子ではないと気がついたのは、ミシェルがルイの遺伝配列を彼がなかなか開示しないことからだった。
父親の遺伝子型については開示するのに、母方については「先方の強い意向だから」という理由を素っ気なく言っただけだった。
確かに、シャルルはルイに興味がなかった。
今は簡単にＤＮＡ鑑定ができる。
シャルルも医師だからその気になればすぐに判明することだった。
でもしなかった。

見た限り、彼はアルディ家の血筋を濃く伝えている。
自分の幼い時にそっくりだ。
そして・・・彼の母親が誰なのかを知った時。
彼は、父親は自分でないことを確信した。
後に、一卵性双生児でありながら、父親を特定できる検査方法を考案したときに、真っ先に検査をした。ルイもそうしたはずだった。
・・・その時まで、自分が父親かどうかを検査することはなかったのに。
ミシェルが何をしたのか知った。
・・・ミシェル。
確実に病む子を産みだして・・・彼はどうしたかったのかを知った。
父親も母親も抗体を持たない者同士であるならば。
あれほど近い血族であるのなら。

ルイがそのまま健やかに一生を終えることなどは到底できないだろう。

ミシェルは・・気紛れで彼を創ったわけではない。
気紛れなどではない。
彼は気紛れなどで実行しない。

ミシェルはどうなるかを予測してそれでもなお、病を治そうとしないシャルルとジルを断罪するかのように、罪の烙印をこの世に生み出した。

彼らは双子だから何でもわかるということではない。
・・・・双子だから。
同じ遺伝子だからどうしてそういうことをしでかしたのか、わからなかった。
面と向かって尋ねる時期を逃していた。
シャルルは・・・不幸な墜落事故を経験して、生きているのに死んでいる状態を長らく続けて居たから。
結婚も解消したし、彼は病んでいた。
だから、もう誰の子でも良いと思った。
自分は失うものはないと思っていたから。

ルイが惑う過去を作るのは罪だと思っていた。

自分の一族のことに思いやりを持てなかった。
家族はもう居ないと思っていた。
それならどこまでも病んで夢幻の世界を彷徨い、治療する手立てがないままにいつ自分も発症するかもしれないと戦々恐々となる一族を眺めて過ごすことにした。
ミシェルはそれを傍観していただけではなかったが。

シャルルなりの復讐のつもりだった。
決して侵されることのない未知なる恐怖に、彼らは未来永劫苦しめば良いと思った。
彼に追いつく者は居ない。ミシェル以外は。
・・・解明できないだろう。
もしくは、相当年数を経過しなければ明らかにならないはずだった。
ミシェルはわかっていたようだった。
でも詳細はわからない。
何が原因なのかはわかっていない。
自分には感染しないということだけしか彼は把握していないはずだった。

ミシェルはモザンビークでの彼の活動履歴の詳細を知らないから。
ジルが口を噤んでいる限りは、きっと・・・誰にもわからない。
ルイが彼らに追いつくまでにはシャルルはもうあの場所に居ないと思っていた。

「オレは贖罪しろと言われても・・・仕方がない」
彼は言った。

ルイにこのことを話しておけば話は拗れなかった。
でも言うことで、いつ発症するかわからない恐怖に陥れることはできなかった。
あの鉱床に近づくことがないようにすることだけ徹底的に監視した。
何か強いストレスに晒されなければ・・彼が頭部に損傷を受けたりすることがなければ、そのまま健康に一生を終える確率の方がはるかに高い。
ルイに責められても良かった。
弱い血族だ。
もう、関心がなくなってしまったと言えばそれまでだった。
ミシェルに托したのは、彼とミシェルとでいつか、独自にあの病について解明する日がやってくるだろうと予測したからだ。甘い期待と言えばそうだったが、自分でこの件について解決するつもりはなかった。・・・その時期は思ったよりはやかった。

ルイは宿業や因縁やそれを越えるために生まれてきたのに。
それなのに、彼らの最も澱んだ罪業を保有して生きている。
シャルルがルイのことを憐れだと言うには、ルイは誇り高かった。
だんだん、ルイからシャルルを寄せ付けなくなっていった。
当然だった。
シャルルはルイをひとりの人間として認識はしたが、家族としてはまったく認識しなかったから。

医師として研究者として、シャルルがまったく無関心でいることは難しかったが、それでも封印した。
このことで莫大な労力と財力を使うつもりはなかった。
もっと他のことの研究に使え、と彼は方針を覆すことはなかった。
その代わりに、不眠不休と言っても良いほどにやらねばならないことを遂行した。
少しでも時間ができると考えてしまうので、本来の職に加えて様々に動き回った。

あの墜落事故があって以来、彼は生きる事を完全に放棄してしまった。
生きているのに死んでいる状態だった。

恨まれても憎まれても良い。
ヒカルはそう言ったが、それはシャルルも同じだった。
自分の為だけに生きているようなものだった。
アルディ家を動かす時には、彼は自分の満足のためだけに動かした。
当主の代行を任せて。
ミシェルにルイを任せて。
ジルが治療を拒否しながら、シャルルの為にと研究を続けていたことを咎めた。
そうしてシャルルは彼女を切り捨ててここに閉じ込めた。
夏には惑い、ルイには愛を注がない。
彼はフランスの華と呼ばれているのに、ひとつも・・・そう、ひとつも完璧に遂行できない希代の愚王と呼ばれても仕方のないことをし続けた。

ミシェルルイはシャルルの事を獣王と呼んだ。
相応しい称号だと思った。
彼は自らの欲望のために、この一族を食いつぶすことになっても良いと思った。

あの人の沈んだ海を護るために。
あの国の民を護るために。
もっと・・違う理由もたくさんあったが、それを挙げ連ねても彼は満足しなかった。

あの死闘の末に手に入れた座を、自らが破壊することになった。
奪われることは誇りが許さない。でも、捨てることは躊躇しなかった。

ミシェルは瀞であることを決め、ルイは新しい種として君臨するための準備に入った。
ジルはそのまま朽ち果てていこうとしている。
せめて進行を遅らせることくらいしかできない。
彼女はそれ以上は拒否すると強く言った。
シャルルも同じように、このまま朽ちていくつもりだった。
モザンビークに渡ってそのまま帰ってこなくなるという叶わない夢想を愉しんだ。

それなのに・・・それなのに。

でも。
そこに。
ヒカルがやって来た。

■214

彼女が傍らに居るのであれば、シャルルはジルを治療しようと思った。
ヒカルは家族になろうと言った。
娘でもない娘ほどに年齢の若い日本国籍の少女が、彼に言葉を投げ続けたから、彼は今ここにこうして在ることができるのだと痛感する。

生きたい、と思ってしまったから。
そう。
生きたいと思った。
誇りのためには死ねる。
今でも誇りは捨てていない。
でも。
誰かのために、生きたいと思う。
それだけではなく・・自分のために生きたいと思う。
これまで道連れにしようとしたアルディ家という血族達の憂いや惑いから眼を反らしていたが、彼らにも家族があり愛する者が居て・・そしてシャルルのように、今から眼を反らす状態で過ごすことはできないと言う者達が居る事をようやく考えることができるようになった。
彼はシャルル・ドゥ・アルディなのに。
間違わないのに。

間違わないが、惑った。
誤らなかったが、驚惶した。

彼は生き存えたいと思う愛に逢ったから。
死ぬほど愛しているという愛を知った。
もうそれ以上の魂の試練はないと思った。
でも。
これほどまでに荒廃したアルディ家という薔薇を・・・もう一度花咲かせようとヒカルが言う。
彼女から提供される細胞で何もかもが解決できるとは限らない。
これから着手するのであれば、臨床実験を経ないで投薬を開始しても・・・おそらくまだ数年は必要とされる。その間に何が起こるかわからない。前例がない。単に無幻症と同じように夢見がちな状態に陥っているだけではない、重篤な発症を控えているのかもしれない。
・・・朽ちて薔薇に還ろうとしたのに。
ヒカルはまだだと言ってこの世に彼を引き留める。
彼女を利用したのに。彼の満足のために。この家の充足のために。

理由をつけて引き取ったが彼自身が癒されるために彼女の人生を奪ってしまった。
もっと穏やかで静かな半生が送れたはずなのに。

「これから・・・これからもう一度やり直せばいいよ、シャルル」
ヒカルは小さい声で静かに言った。
彼が遠くを見て、長い話を語り続け、シャルルが自らのことをどう思っているのかを聞いた。
ジルはいつもこうして・・・黙って彼の話を聞いているだけだったのだろうと思うとふたりの絆が・・・とても・・
とても脆く危ういものでありながらも、それでも、それだけを頼りに彼らは生きていたのだと感じる。
痛いほど強く感じる。
自分自身を突き通して、彼女を見つめることがなかったシャルルは、もう一度。
もう一度、ジルを見つめようと思った。
もう一度、愛を信じてみようと思ったから。

「シャルルはシャルル・ドゥ・アルディなんだよ。間違えたりしない。昏迷しただけ。
たとえ太陽が西から昇っても・・・シャルルは間違えない。だからジルも治せる」
ヒカルはひとつひとつ、彼に言い含めるように言った。

内面を曝け出すことを決してしないシャルルがこうして・・彼の内なる物思いを吐露した。
ジルにはいつもこのように語りかけていたが、ジル以外に語ることを自分自身に赦した。

・・・・彼の想いに応えることはできるだろうか。
・・・・ヒカルにできることは何だろう。
彼は罰して欲しいと思っているが、彼の贖罪は一体何なのだろう。

「シャルル」
「ジルは治す。オレの名前にかけて。・・・・オレがきっと治してやる・・・ああ、そんな顔をしないでくれ」
彼は青灰色の双眸を細めて、ヒカルを見つめた。
「ジルはヒカルにとっても大事な人だ。・・・だからきっと」
そこまで言った時だった。
「違うよ、シャルル」

ヒカルが彼にそう言ったのだ。
シャルルが顔を上げた。
白金髪の髪が揺れた。彼の整った顔が、少し・・不可解だと言うような表情を作った。

ヒカルの茶色の瞳が見える。彼女はもう泣いていなかった。
ジルの用意した夏の服を着て、夜であるのに陽光を受けているかのような眩しさを持った彼女は・・・シャルルをじっと見つめていた。静かに。深く。
そして、にこりと微笑んだ。
シャルルがいつもその笑顔を見て安堵した、あの太陽のような笑顔だった。

「シャルル。シャルルが助けるのではない。シャルルだけで背負う事ではない。
・・・一緒に。一緒に、ジルを治そう。」

シャルルが。
その言葉を聞いて、息を呑む音が聞こえた。
ヒカルは彼を見つめ直す。

ひとりで背負ってはいけない。
彼ひとりでどうにかするのではなく・・・・治療にはヒカルが必要だから。
だから、一緒にやり遂げよう。
彼女はそう言った。

「ずっと一緒だよ、だから何年かかっても良い」
ヒカルは恥ずかしそうに付け加えた。

見る間に・・・その言葉を聞いて、白い花のような儚い微笑みしか浮かべていなかったシャルルの青灰色の瞳に・・・・涙が溢れた。
自分でも気がつかないかのように、それはあっという間に目尻から頬を伝って、流れ落ちた。
自分で意識せずに涙が零れる。涙が止められない。
溢れるこの激しい想いをどう表現しても言い切ることができない。

「シャルル？」
「すまない・・・」

彼は言葉を詰まらせて、両手を手の平に当てた。
それでも涙が止まらない。
海で流したはずなのに。
彼の内に眠る魂が・・・激しくまた、揺さ振られた。
声を押し殺して・・・溢れ出る涙を止めることが出来ずに、彼は上を向いた。
高い白い天井をじっと見つめて・・・それでも目の端から、涙が落ちる。

あの人は。シャルルに友達を治して、と言った。
あの国の人々はシャルルに救ってくれ、と言った。
誰もが当主としてのシャルルに。フランスの華としてのシャルルに縋る。

でも。

・・・・・共に。

考えたこともなかった。
彼は誰かと並んで歩んで行くことを考えていなかった。
彼はいつも先頭を走り続けていたから。
後ろを向いて誰かを待つことはしなかった。
前を一瞬だけ走る者が居たが、それもすぐに追い越して彼は走り続けた。

ヒカルはそうしないで歩いて行こうと言う。

ああ・・・・
彼は目を瞑った。
きつく寄せられた眉根の下で、薄い瞳から墜ちる水滴を彼は拭った。

涙が止めどもなく溢れる。
涙が零れるほど・・・嬉しい。
彼女が生まれてきてくれて、嬉しい。

素晴らしい。
素晴らしいよ。

そして、それは、あの人とヒカルが決定的に違うことを思い知った瞬間だった。

あの人は言った。
助けて、と。
助けてやって、と。
だから彼はそれをやり遂げた。
それが愛の証だったから。

でも、ヒカルは違うと言って首を振った。
そうではない。
一緒に助けようと。一緒に助けてみよう、と言う。
彼女ができることがあって、それをシャルルと一緒にやり遂げようと言う。

・・・明らかな違いがそこにあった。

でもそれは悲しいのではない。

嬉しい。
嬉しくて、涙を落とす。

ヒカル、貴女に会えて嬉しい。貴女を愛して嬉しい。
貴女は・・・貴女はまさしく晄の子であり、贖罪の娘だ。

ヒカルが救ってやって、と言えばそうするつもりだった。
自分の身を業火に投じても、ジルとヒカルは国外に出して・・そして穏やかな人生を用意するくらいの時間はシャルルに残されているはずだった。

孤独に生きてきた。
ジルが居ても孤独だった。
同じ容貌の者達に囲まれて朽ち果てていくと思っていた。
でも。
そうではない。

彼は涙を落としながら月を見上げた。
開けた窓から・・・月が見えた。
柔らかいカーテンがふわり、と風を受けて舞った。

吸い込まれて惹かれて行く。
この晄のような人を心から求めて止めることが出来ない。

「そうだね・・・ああ、そうだね・・・」

シャルルは低く言った。
涙を落としながら。
長い間彼の心の底に蓄積された、暗鬱たる何かが・・・今、ふっと軽くなるのを感じる。
すべてが消滅したわけではない。
でも。でも・・・この心の滓を彼女は拭った。
贖ったことにはならない。
ヒカルと一緒に居ると言うことは・・・これから苦難も共に味わうということだ。
彼女を苦しめることになるのに。

それでも、ヒカルは微笑んでくれるだろうか。

永遠の・・・オレの永遠の晄。

彼は言った。

「ヒカル。・・・貴女と一緒だ。どこまでも、どこまでも。
　彼らにいつか、逢える日まで、一緒に居て欲しい」

ヒカルは微笑んだ。
その言葉にウイと言った。

「泣き虫の私の天使・・・シャルルは私の天使なのよ、今も。これからも」

オレの天使と呼んだ人は、大人になって。
彼を導いた。彼が導いていたと思っていたのに。

「ヒカル。・・・・死ぬほど、愛しているよ」
彼は囁いた。
ヒカルは笑った。あたたかい笑みだった。

「シャルル。生きていたいと思うほど愛していると言い直して」

ああ、そうだった。

彼は笑った。
彼は間違わないのに。
間違えたね、と言って笑った。

気の強いところは、あの人そっくりだ。
でも太陽のような微笑みはあの人とあの男にどちらにも似ている。

この上なく美しい微笑みで。

彼は言った。

「オレはシャルル・ドゥ・アルディだよ。たとえ太陽が西から昇っても・・・間違わない。決して。だから、オレが囁く愛の言葉について、貴女はすべて受け止めて欲しい」

そこで言葉を句切った。

「ヒカル。愛しているよ。・・・・もっと生きていたいと思うほど愛している」

彼の愛は間違えない。
間違えた愛をすることはもうしない、と彼は誓った。
神ではなく、彼自身に。
そして彼の半身とでも言えるような、彼の従妹の前で。

彼は響き渡る通る声で、そう言った。

■215

「シャルル、大事な人の名前を間違えていますよ」
ジルがそっと彼に囁くように窘めた。

シャルルはジルを見つめた。
良く似た風貌の、親しい従妹を見て、彼はちょっと微笑んだ。
まだ瞳は涙に濡れていた。
こうして、彼はジルの前でも人知れず涙を流すことがあったのだろうか。
ジルはシャルルの涙にちょっと困ったと言う風に首を傾けた。

「ジル・・・オレは間違えないよ」
彼は花のような淡い微笑みを浮かべたまま、静かにジルに言い含めた。
「彼女はね、マリナの娘だ。・・・ヒカルと言う」

「マリナさんですよ」
彼女は少しムキになって言った。
ヒカルを見つめる視線は、いつもの通り慈愛に満ちていたが、ね？とヒカルに念押しをしていた。

彼女は返答に困り、ジルとシャルルを交互に見遣った。
彼女を刺激しないでくれ、とルイやミシェルに言われていた。
シャルルが一緒であったとしても、不用意な発言はできない。

「ジル」
シャルルがジルの名前を呼んだ。
それまで内面を吐露しているシャルルに語りかけてはいけないというかのように、じっと耳を傾けていたジルに向かって、シャルルは静かに言った。

「ジルはわかっているよ。・・・ジルはわかっているけれど、聞こえていないだけだ。
だから、何度でも。
聞こえるまで言う。
届くまで繰り返す。
オレは繰り返さないけれど・・・繰り返して言わなければならない時もあるから。

彼女はね、ヒカル・クロスだ。
マリナに良く似ているけれど、マリナじゃない。
あの人ではない。
でもあの人から伝えられたものを持って生まれてきた。
ジルが生まれてくるのを手伝ったから・・・。
だからヒカルはここまで成長した」

「だって、彼女はマリナさんだわ。シャルルはようやく・・マリナさんと一緒に過ごすことができるようになったのに・・・」

そこまで言うと、ジルはふと、桜色の唇をつぐんだ。
マリナと違う色の薄い茶色の瞳を持つヒカルの瞳を食い入るように見つめた。
何かが違う。
それは彼女も感じているだろう。
でも彼女が今目にしているのは、あの青春の輝きと言った自由なシャルルと・・・
彼の傍らで微笑む茶色の髪に茶色の瞳の小柄な少女の幸せそうな姿であった。

「ジル」
もう一度、辛抱強くシャルルは言った。

ジルはシャルルを仰ぎ見た。
少し不安そうな瞳をしていた。

あの人は。
あの人は誰とも違った。
同じ人は居ない。
あの人を間違えることはない。
それなのに、シャルルは何を言っているのだろう。

ジルをジル・ド・ラ・ロシェルとして。
シャルルの従妹、とかシャルルの代行という役割と尊称でしか認識しない者と違った。
あの人は、いつもジルをジル本人として見つめてくれた。
大好きな・・・大好きな人達。
その最も愛するシャルルとマリナが結ばれれば良いのに、とずっと願ってきた。
今、それが実現している。
それなのに、シャルルはなぜ、そうではないと言うのだろう・・・

「ジル、ジルは、ヒカルにジルの服を出した。
・・・マリナはね、もっと小柄だから、ジルの服はサイズが合わない。
でも、ジルはヒカルにジルの服をちょうどよいサイズだろうと言って取り出した。
・・・・迷うことなく。
これが何を意味しているのか、ジルは理解しているよ。
ただ、言葉が出てこないだけだ」

ジルの青灰色の瞳がぴくり、と動いた。
薔薇色の頬から血の気が失せるのに時間はかからなかった。
・・物憂げで上品な瞳が曇って・・・細かく唇が震えていく。
目は見開いているがヒカルを越えて遠くを見て居る。
ヒカルの目の前に座る美しい人は自分の胸を右手で押さえた。
心臓の動悸を、掌で押さえている。
呼吸が短くなった。
何度か短く息を吐くと、唇を噛んだ。

ヒカルが慌てて立ち上がった。

腰を浮かせてジルの様子を伺う。
彼女の異変は明らかだ。
「待て」
シャルルが腕を上げた。
手でヒカルの行動を制した。
彼女の苦しそうな少し開かれた唇から、声が漏れたからである。
「・・・マリナさん。マリナさん？」
彼女は酷く動揺していた。
シャルルがもう一度重ねて言った。
彼が立ち上がり、座って小刻みに震え始めたジルの肩にそっと手を置いた。
ジルは胸を押さえたまま・・・ヒカルを凝視している。
信じられない、と瞳が訴えていた。目の前に映る、シャルルに愛を囁かれた人物は間違いようもなく、ジルのよく知るあの人なのに。

「ジル。彼女はヒカルという。永遠の晄という名前の・・・昶だよ。
ジルが言葉を教えてジルがパリに連れてきた。あの時のこどもだ」
「・・・・ヒカル」
彼女はヒカルの名前を呟いた。

そう、ジルはわかっているはずだった。ヒカルの姿をきちんと認識して・・・彼女のために彼女の体軀に合わせた服を用意した。夏の服を用意した。
色素の薄い彼女によく似合う色を選び、そしてヒカルの為にメッセージを書いた。
それは日本語ではなかった。
流れるような文体のフランス語であった。
あの人はフランス語は読めない。

「徐々にで・・・それで良い。・・・ジル・・・治していこう。
オレが・・・・ジルをあの国に遣ったから、貴女はこうなった。
でも一度も責めなかった。
だから、治そう。

・・・・一緒に。
ヒカルが居る。
オレも居る。
・・・生きる事は苦しいけれど、一緒に生きていこう」

彼は少し屈んで・・・ジルの見事な金髪に唇を寄せた。

彼女の肩を抱いて、そして言った。
囁くように震えるジルを宥めるように優しく、静かに。でもはっきりと。
彼の愛を込めて、ジルに語りかけた。
「ジル。貴女はオレの家族だ。なくしたくない。・・・だから、ヒカルと。オレと。家族を作ろう」

「シャルル・・・・何を言っているのか、わからないわ」

ジルが呟いた。

でも。

彼女の瞳から涙が一筋頬を伝って、零れた。
先ほどのシャルルの涙と同じ・・・透明で、何にも穢れていない涙とともに、彼女の歔欷がシャルルの肩越しから聞こえた。

■216

その時だった。
コツン、とノックをする音がした。
分厚い防音扉が少し開いた。
遮音性に優れた扉からノックをする者がいる。
相当強い力で叩かないと聞こえないはずだった。
それにこの扉は認証しないと開けることができないはずなのに。
・・・・ヒカルは顔を上げた。

白い扉の向こうから。
・・・・薄暗がりから、青灰色の瞳が見えた。

ルイかと思ったが、ミシェルだった。
目が合ったヒカルは、ミシェルが軽く顎を引いて、こちらに来るようにと指示を出していることに気がついた。
彼はジルが惑うので、シャルルと一緒には彼女の前には現れない。
ヒカルは少し考えたが、腰を浮かせて扉の方に向かった。
ミシェルの視線が、少し・・・彼にしては慌てていたように感じたからだ。
彼はいつも微笑みを絶やさずにいるが、決して目元は笑って居ない。

その青灰色の瞳は、シャルルと同じ色であったが、決して同じではなかった。
しかし、今回は違う。
ルイと見間違うほど、ミシェルはいつもの彼ではなかった。
未来だけを見つめるために過去の記憶をルイから剥奪した・・・シャルルとジルの共犯者は、ヒカルが近寄ると、早口で小声で囁いた。

「ヒカル。シャルルを呼んで来い」
「え・・・・？」
扉越しでよく聞こえない。

ヒカルは扉の反対側である廊下に出た。
空調が効いていて、寒いくらいの風が彼女の肌をかすめていった。

「どういうこと？」
「ベントレーにエンジンをかけてある。すぐに・・・行け」

シャルルと交替するから、シャルルを呼んで来いとミシェルは短く命じた。
ヒカルがただならぬミシェルの様子に、何かを察した。

「何・・・？どういうこと」
声が漏れるので、ミシェル、とは呼ばなかった。

しかし彼はシャルルではない。
これほど違うのに・・・彼らは良く似ているが、同時に違う魂を持っていることが今では良く理解できた。
ミシェルは小さく舌打ちをした。
暗い廊下で見て居るからだろうか。
顔色が悪い。

「良いからシャルルを呼んで来い」
「ミシェル、それではわからない」
ヒカルが困ったように言った。

彼は今、ジルに重大な話をしたばかりだ。
彼女には急な変化は酷であるということが、ミシェルはわかっているはずなのに。
ミシェルはヒカルの腕を掴んだ。
あっと思ったが、そのまま腕を強い力で掴まれて、廊下に引きずり出された。

行け、と言われた。

「ヒカルと問答をしている時間はない」
「・・・何があったの」
彼の声音が少し震えている。
平静を装っているのに、彼は動揺している。
そこでようやくヒカルはミシェルが相当に・・・急いでいることに気がついた。

「シャルル」
ヒカルは扉の向こうで、シャルルを呼んだ。
彼はジルの涙を拭って遣っているところだった。

ちらりとこちらを見たシャルルが、瞳を細めた。
ミシェルの影を見つけたからだ。
シャルルはゆっくりとジルから体を離すと、彼女の見事な金髪を大きな手の平で撫でた。

「ジル・・・・ティーを煎れてくれないか。貴女の煎れるティーは最高だから」
彼はジルにそう言った。

ジルははい、と嬉しそうに頷いた。
「シャルルとマリナさんのために、とっておきのカップを用意しましょう」
ああ、そうだね、とシャルルは微笑んだ。

そしてジルは涙を拭いながら、立ち上がり・・・・・次の間に消えていった。
ここは平面だから、彼女がシャルルから背中を向けて、なぜ自分は涙を流しているのだろうと思いながら頬に落ちた涙を拭うために、タオルを取りに行ったほんの僅かの合間に、シャルルは素早く立ち上がって扉に向かう。
「要件を手短に」
シャルルは出てくるなりそう言った。
ミシェルは彼に囁いた。
一言二言、彼が耳元でシャルルに何かを告げた。

「・・・わかった」
二人の会話はこれだけだった。
シャルルはミシェルの脇を擦り抜けて、ヒカルの肩を抱いた。
「ヒカル。ここを出る」
ヒカルは肩を抱かれて、そのまま廊下を歩き始めたシャルルにあわせて足を踏み出したが、気

になってミシェルを振り返った。
彼は扉の向こう側にするりと長身を滑り込ませて、扉を閉めるところだった。
シャルルと交替をしたのだ。
彼は・・・またミシェルと呼ばれないことに対して憤りを感じながらも、シャルルが決してそうすることができなかったことを遂行する。
ジルの話を聞き、シャルルとあの人とのこれからについて、未来を語るジルの話を聞く。
未来に生きる。過去に遡っているのに、未来を作り続けるジルを見つめて過ごす。

・・・ミシェルの思いはいつか、届くのだろうか。

ヒカルはそんなことをちらりと思ったが、肩を強く抱かれて、螺旋階段を慌ただしく下りるシャルルに気がついて彼を見上げた。
「シャルル」

階段を駆け下りるように移動するシャルルは、ヒカルの肩から手を離すと、今度は彼女の手首を掴んだ。
彼の掌はいつも冷たいのに・・・ひどく汗ばんでいた。
緊張しているシャルルを見て、ミシェルが囁いた言葉が彼を動揺させているのだとわかったが、何が起こっているのかヒカルにはわからない。

長い廊下を歩きながら・・・シャルルは前を向いたまま、ヒカルの手を引いた。
彼の歩幅について行けず、ヒカルは小走りになった。
手首が痛むが、それさえ告げることのできないほどの緊迫した顔のシャルルに、言葉をかけることができない。

「シャルル。シャルル！」
ヒカルは叫んだ。
「ヒカル。急げ。オレが運転する」
彼はそう言った。
長い廊下を抜けて、エントランスに入ればもうそこには彼が先ほど運転した車が準備されて扉が開かれていた。

運転席を空けろ、と彼は近寄りながら、大きな声で言った。
運転手が慌てて降りる。
ヒカルはそんな様子のシャルルを観たことがなかった。

「何？何があったの？」

「・・・・アルディ邸の温室が炎上している」
「え？」
「ルイが負傷したらしい。ここで詳細な報告を聞く時間がない。ヒカルは、車内で詳細をアルディ邸に確認してくれ」

彼が胸ポケットから薄い銀色の携帯電話をヒカルに投げ寄越した。
シャルルは普段、携帯電話はOFFにしている。
彼が用事があるときにだけしか使わないからだ。
しかし、緊急時には、強制的に電源が入り、コールが入る。
見れば・・・・彼が投げ寄越したことを合図にしたかのように、携帯電話が鳴動し、赤いランプが点滅した。

ヒカルはシャルルの短い言葉に投げて寄越した携帯電話が突然鳴動したので、両手でそれを受け止めたが・・驚愕のあまりそれを取り落としそうになった。

その時。

先ほどの予兆めいた何か・・・大事なことを忘れていると言った感覚を思い出した。
バスルームでバレッタが落ちた。
その時に何か・・・何か胸騒ぎがした。
今、同じ感覚が彼女の足元から湧き上がって、勢いよくのぼり・・・そしてヒカルの薔薇色の頬を蒼白にした。

・・・・ルイ。

ヒカルは呟いた。

「急げ。話は後だ」
シャルルの声が遠くで聞こえた。

■217

アルディ邸の温室が炎上した。
ボイラーに着火したらしい。
夜で使用人の人数が少なかったことと、ルイが人払いをしていたために、負傷者は想定数よりずっと少なかった。
彼が監視システムを停止させて、薔薇園に入り込んだので、異常を知らせる警報に気付くのが遅

れたということだった。

―――シャルルの運転は荒かった。
ヒカルは慌てて回り込んで助手席に乗り込んだが、それさえ遅いと言うかのように振る舞った。
ヒカルが扉を閉めると同時に、慌ただしく車を出発させた。

「事故の原因はどうでも良い。それより被害の程度と、人数・・・ルイの搬送先を調べろ」

シャルルが短く言った。
前を向いたままだった。

ルイの搬送先は、研究所に併設されている病院だった。
そうか、とシャルルは言った。
「命だけは助かったようだ」
彼がそう言ったので、ヒカルはそこで初めてシャルルに尋ねた。

命だけは・・・ヒカルは彼の言葉を繰り返した。
「命だけは・・・？シャルル、どういうこと？」

「あの研究所は、再生医療の最先端技術の臨床試験を行っている。
緊急救命のための設備も充分に備えられている。
その併設された病院に搬送ということは、彼の負傷は相当酷いということだ。
でも、その場の救命医療行為で済んでいるところを見ると、命には別状がないから、場所を移しても良いと判断された」

携帯電話に画像とテキストによる報告が送られてきたので、ヒカルはそれを見ることが出来ないシャルルのために手短に説明をした。

淡々と説明したが、声が震えた。

スクロールして膨大な量の情報量から、シャルルが必要とするであろうと思われる文字を拾っていくが、それでも頭に入ってこない。
ヒカルも酷く動揺していた。
彼らが集った薔薇園は・・・跡形もなくなっていた。
ガラスがすべて砕け散って、柱は不自然な形に捩れて、薔薇の鉢植えとおぼしき形状をした物体が飛び散っていた。
消火活動が迅速に行われたので、鎮火の際に幾人かが怪我をしたようだった。

ルイは・・・
ルイは。

ヒカルは読み上げている傍から次から次へ受信されていくメールの件数の多さに指が震える。
この中に・・・このテキストの中に、ルイの状況を知らせる最新のものがどれであるか、わからない。
彼の安否を確認するために、ホットラインにかけたが誰も出なかった。
・・・それくらい異常な事態なのだ。
小刻みに・・・体が震える。
太腿の血管が脈打つのを感じる。
こめかみが痛い。
ただ、握ったままの携帯電話の液晶画面が光り続けて放熱している。
その温度だけが・・現実だと。
ヒカルにこれは夢ではないと伝える。

ルイ・・・・ルイ。
ヒカルはぎゅっと携帯電話を握りしめた。
ディスプレイを凝視する。

寒い。
夏なのに、彼女は酷く寒いと感じた。
冷や汗が出ているからだった。
車内は快適な温度であったはずなのに・・極寒の地に居るような感覚に襲われる。

「研究所に向かう」
シャルルは短くそう言った。
「ヒカル、状況を説明してくれ」
彼女の声は掠れていた。
はい、と答えたが声にならなかった。
シャルルの声が遠くに聞こえる。

これが恐怖というものなのかと思った。
かつて、激昂したミシェルに襲われた時とは比べものにならないほどの・・・得体の知れない言い様のない大きな影が彼女を覆う。

「・・・ヒカル！」

シャルルが、ハンドルを一度だけ強く叩いた。
クラクションが派手に勢いよく鳴った。
そこで彼女は我に返った。
隣の運転席で、蒼白な顔をして前を見続けるシャルルの横顔を見上げた。
・・・・ああ。シャルルは繰り返している。
繰り返す恐怖を味わっている。

かつて・・・あの不幸な墜落事故があった時。
ヒカルが頭部を強打して意識を失った時。
彼の母親を失った時。
彼の父が逝去した時。

彼は・・彼はいつも遺される側にいた。

安否を確認したいのにできない。
飛んで行きたいのにそうできない。

そのもどかしさや息苦しさを、彼は何度も経験している。

ヒカルは大きく息を吸った。

落ち着け・・・落ち着け。

彼女はあの墜落事故の混乱を知らない。
でも、きっと、彼は真っ先に事故現場に駈け寄って、あの人の名前を呼んだに違いない。
花嫁を放置して。
ランスに集った彼を祝福するための賓客も・・・・彼の為に用意された大聖堂の聖なる誓いさえ放置して。

ヒカルは唇を噛んだ。
ここで狼狽しているだけでは・・・シャルルがなぜ、ヒカルを連れてきたのか意味がなくなる。
彼女は大きく息を吸った。
目を瞑って、数度深呼吸をした。
汗が背中を、額を、鳩尾を流れていく。膝の裏からも汗が噴き出した。
もう一度深く息を吸って吐き出す。

シャルルの昂ぶりを横で感じるからこそ。
ヒカルは、彼に伝えなければならない。

それを何度か繰り返して・・・そして、もう一度、先ほどと同じように行動した。
淡々と、送られてくる情報をものすごい勢いで読み上げていく。

「ルイは重度の火傷を負っている。
温室の出口付近に居たので、爆風を背中から浴びて、熱風を吸い込んで起こる肺の損傷は僅か。
自力呼吸はできる。
爆発と同時に、入り口のベンチも吹き飛び、ちょうど彼を覆うように吹き飛んだので、ルイはその下敷きになった状態で飛ばされた。

・・・鼓膜の損傷が酷い。

皮膚組織の損壊は命に別状はないけれど、体液が損耗によってかなり・・・ダメージが大きい。
ショック状態による一時心停止から、今は蘇生。
感染症が心配されるので、研究所に搬送された」

極力、簡潔に報告したが、シャルルは青灰色の瞳を遠くに見据えて・・・黙ったままだった。

■218

「研究所に向かう。アルディ邸の始末はミシェルに任せる。
・・・ホットライン経由で、そう言え」
シャルルが短く指示を出した。

彼には、信頼できる部下が少ない。
方針を決めてなお、彼は細かく指示を出さないと気が済まない気むずかしい当主として有名だった。

でも、彼の意向を汲んで行動ができる者は・・・今はミシェルだけだった。
ミシェルが足りないわけではない。

でも。

人数が足りないのだ。

そこにジルが居れば・・彼は何倍も何十倍も心強いのに、と思った。

アルディ家は、彼がひとりで切り盛りするには肥大しすぎた。
彼は・・・それを知ってなお孤独を伴侶にして、君臨し続ける。

ルイに明け渡さないのも・・・
彼を補佐する人物がミシェルだけしか存在しないことを憂えてのことだったのだと思う。
もっと・・・ルイにもっと、彼を支える人物が出現するのであれば、シャルルはいつでも当主の座を明け渡したのだと思う。
彼の愛するあの国を救うことのできる、新しい種とそれを支える者達に喜んで・・譲ったと思う。

彼は奪われることには敏感だが、固執しない。
その座には固執しない。
愛の為にシャルルはいつでも・・捨てることのできる潔さを知っていた。
独り占めできない、と彼は言った。
愛しているから、独り占めすることができない。

だから・・だから愛する者の為に、彼は手放すことの切なさももどかしさも悲しみも知っている。

・・・・ルイ。

ヒカルは呟いた。

まだ、背中から襲う、冷気というか跼蹐とでも言うかのような言い様のない何かが。
背中を這い、彼女の腰を襲い、全身を駆け巡った。
この感覚を、未来永劫と言えるような長い時間味わったシャルルが傍に居るのに。

「ヒカル。・・・ヒカルの細胞、使わせてもらう・・良いね」
ヒカルは頷いた。
シャルルがこれからルイにどういう治療を施すかにまで考えを及ばせていることを知ったから。
前を向いたまま、無表情に整った顔を強張らせて運転するシャルルは・・・・

誰かを愛することを知っている人の横顔だった。
まさしく、人の親だった。
対価のない無償の愛を知っている人の顔だった。

「シャルル。ルイが呼んでいる」
ヒカルは非現実的であると言わるかもしれない言葉を囁いた。
ルイが呼んでいる。
そう思った。

彼は確かに・・呼んでいる。
ヒカルを。
シャルルを。

愛が欲しいと無言で叫び、何も与えることができないから奪うしかできないと言った星辰の子の、表情乏しい青灰色の瞳を思い出していた。
あらゆる天体を司り、星々を従える者であるのに・・・・
月に叶わないと嘆いていた。
いつも、嘆いていた。

「急ぐ。ヒカル・・・急ぐ」

彼は速度を上げた。
制限ぎりぎりだった。

■219

研究所に到着したとき。
シャルルの運転する車から、ヒカルは転げ落ちるように降車した。
銀色の携帯電話を掴んだまま・・・彼女はもどかしく指を動かして駐車場に降り立った。

少し離れた・・・いや、目には入るがかなり距離のある病棟まで、ヒカルは目を泳がせた。
到着は夜も更けたという表現からかけ離れた時間だった。
今は時間外であるから、シャルルは研究所の駐車場に車を停めるしかなかった。
でも、そこはシャルルとヒカルが本当に到達したかった場所から遠かった。

なぜ、そこに直接停車してはいけないのか。

シャルルは係員に詰問した。

その者に尋ねても。
「上からの意向です」という回答しか返ってこないのは承知していたのに。
その上に君臨するシャルルを目の前にしてなお・・・アルディ家という組織は、当主を護れと命令し続ける。

「・・・シャルル。先に行く」

ヒカルはそう言うと、病棟の入り口に顔を向けて、そして・・・いきなり走り出した。
彼を振り向くことはなかった。

「シャルル！行ってるね！」

彼女は若々しい声でそう言うと、車から飛び降り、そして広大な駐車場の端から端までを・・・走った。

慣れない靴だった。
慣れない服だった。

でも、彼女はそれを気にせず、走った。

まっしぐらに。

ああ・・・ヒカル。

シャルルは息を呑んだ。
ルイ・ドゥ・アルディの窮地に駈け寄ったのに。

ヒカルの背に生える白い・・・白い天使のような羽を幻覚だと嗤うことができない。
彼女の纏う夏のワンピースが。
ぱっと裾が散った。
彼女が動かす、彼女が司る風があるのだと知った。

白い脚が見えるが、決して扇情的ではなかった。
どこか・・大聖堂の告解にも似た厳かな空気を感じる。

研究所と病棟では、この駐車場を間に置いて、かなりの距離がある。
研究者達はみな、交通機関の適用範囲を超えた勤務体系であるので、自家用車や・・アルディが

用意する深夜バスに頼るしかない。今は宿直の医師や看護師が寝不足で事故を起こさないために、充分な休息後に退出することを確保された広い・・果てしなく広い空間がヒカルの目の前に広がっていた。

■220

何度か健康診断と称する検査で足を運んだ場所ではあったが、内部がこれほど入り組んでいて複雑な構造になっていることには気がつかなかった。
緊急搬入口を使ったのだろうか。
主玄関は閉められていたが、ガラス扉の向こう側では照明がつき、ヒカルの立っている外側からでも慌ただしい様子が伺えた。
時間外であるために、自動ドアが作動しない。

走ってやってきたものの、ヒカルはそこで行き着いてしまい、ようやく足を止めた。
先ほどとは違う汗が額から流れ落ちていく。
分厚いガラス扉が手動で開くことはないのか手を添えたが、頑丈な造りのそれは、来訪者を固く拒んだままだった。

扉の向こう側。
そこには、慌ただしくスタッフの者や医師達が激しく往来し、・・・炎上によって軽症ではあるが経過観察を必要とする者達がロビーに居た。
大惨事でないことは確かだった。人が少ない。
その代わりに、緊急で呼び出された者達の多さに胸騒ぎが大きくなる。
彼らはすべて、唯一の重傷者のために集められた者達であるということが、ここからでも見て取れた。
幾人か、ヒカルも見知った顔の者達が居る。
先般の学会雑誌でも掲載されている研究者達の顔ぶれが揃っていた。

「ヒカル。あちらから入れ」
シャルルがそこでヒカルにようやく追いついた。
背後からヒカルに声をかけながら、彼は足早に彼女の肩を抱いて、緊急ゲートへの入り口を差し示した。
脇に守衛棟があり、照明がついて数名が待機していた。
こちらでも慌ただしく無線や内線電話で対応している者達がおり、皆、通常業務と異なった緊急対応に追われていた。
シャルルがそちらに足早に進んでいく。

彼は何も身分証を持っていないから、そこで入所の申請手続きをしないと入れないということのようだ。
しかし頻繁にここを出入りしているミシェルやルイと同じ容貌のシャルルを観るだけで、管理棟の者達が慌ててブースから出て来たので、シャルルは苛立たしげに軽く手を挙げて、中に入るというようなことと、ルイ・ドゥ・アルディの居処についていくつか質問をしていた。そしてフィルムタイプのIDシールを受け取る。
必要な情報と入館の許可を得ると、シャルルはヒカルに向かって言った。
言葉が少なく、やはり・・どこか緊張しているようだった。無表情で厳しい顔つきをしていた。
「ヒカル。ルイは今、治療棟にいる。処置の最中だ」
行こう、と言ってシャルルはヒカルを促した。歩きながらシールを貼れ、と彼は言ったので、ヒカルは慌ててシールを手首に貼りつけた。軽く圧迫する。
温度で粘度が増すシールは、ヒカルの体温によって少し色を変え、そのまま彼女の白い皮膚に密着した。
同じ仕草をしながら、シャルルがゲートを潜る様子をちらりと見た。勝手がわからないので、シャルルに付き従って行くことにする。
しかし。
彼がどことなく・・・何かヒカルに伝えていない情報があるのではないかと思ったが、時間がなかった。
彼が今どうしているのか、どうなっているのか・・

そこはどことなく、ヒカルの通う学校に似ていた。
幾つもチーム毎に仕切りが作られており、廊下を隔てた反対側には、各々のオフィスがあり、打合せや会議ができるようになっている。
少し先を行くと、滅菌のエアシャワーが天井から吹き付ける場所を通る。
・・・・すでにそこは、ヒカルが知っている場所ではなかった。
一度エレベーターで地下まで下がり、長い廊下を歩くにつれて、そこから病院ではなく研究所の治療棟に向かっていること気がついた。地下の廊下を歩いているのだ。
そして、シャルルがなぜ、手続きを省略したいと思う程急いでいるのに、研究所から回り込んで歩いて行くのかわかった。
ここは研究所の手前で・・・完全滅菌された巨大な実験棟なのだ。
その中に、治療棟が併設されている。
病院内の治療室ではなく、研究所の治療棟に居る、とシャルルは言っていたのだ。
これがあまり芳しくない状況なのだと、無言で歩きながら考えていた。
良くないことを考えたくはない。でもどうしても考えてしまう。
病院の治療棟ではなく、地階に設けられた入ることが制限された場所にルイは居る。
彼が非常に希有な存在で、特別なスタッフでないと対応してくれるな、とルイが要望したのだろうか。

いいや、違う。
シャルルは言っていた。ここは再生医療とiPS細胞の研究所だと言ったではないか。

向こう側に渡るスタッフに時々遭遇するが、彼らは皆、IDカードを携帯していない。
研究所では、すべて行動範囲が各々管理されており、誰がどこの場所まで入り込むことができる権限があるか、一括管理されている。そこにはパスコードも必要としない。
最近では、埋め込み型の小さなチップフィルムを体の一部に付けるだけで良かった。
以前のIDシールよりずっと小さく薄くなった。
ヒカルがアルディ邸で行動を制限された時に使われたものと同じタイプなのだろうと思った。

何かがおかしいという予感はどんどん大きく具体的になっていく。
白衣を纏っていても、彼らの雰囲気は違う。
幾人かの姿を見かけたが、こちらをすれ違う者がほとんど居ない。
つまり、皆・・・治療室に向かっているのだ。
廊下の何カ所かで、降り注ぐエアカーテンを潜った。
滅菌エアシャワーも何度か受けから降り注がれて、だんだん進むにつれて、室温が下がっていくことがわかった。
雑菌繁殖防止のために、温度を下げているのだ。・・・冷気が漂う。

白いリノリウムの廊下をシャルルが大股で歩く。
この間、たくさんのゲートの認識ランプが点滅していた。シャルルが与えられた権限はMasterだったようだ。
ヒカルが通った時とシャルルが通ったときでは違う。細かく管理されているそれについて、権限付与を与えている者が居て・・その者は、シャルルの行動を制限しない。
彼が自由に行動できるように迅速に動いている。

ヒカルはそんなことができる者はミシェルしかないと思った。
ルイが居ればルイもそうしただろうと思う。
ジルが居れば、ジルはさらにシャルルに快適さを与える。

・・・こんなにも、アルディの薔薇たちを必要としているのに。
ヒカルは唇を噛んだ。

「ヒカル」
それまで無言で歩みを進めていたシャルルが、突然立ち止まった。
目的の場所にようやく到達したのだと気がつく。
白く長い幾つもの曲がり角を越えて、ようやくルイの居る場所に到着したのに。

シャルルは立ち止まってしまった。
壁には、認証ゲートが設置されていた。
これまでのまったくストレスの感じない、ゲートとは違って・・・物々しかった。
人は配備されていなかったが、そこにはIDフィルムに加えて、コードと虹彩認証が必要だった。
それにパスコードも入力するように指示が書かれたテンキーが壁に設置されていた。
「ここから・・・ヒカルは入れない」
シャルルが黙って居た理由がわかった。
彼女をここから先に立ち入らせないために・・彼が先ほどの警備棟で違う権限のシールを要求し、ヒカルにはMaster権限がないものを渡したのだということに気がついた。
フィルムは一度剥がせば二度と使用できない。
そして、ここを出ることもできなくなるから、紛失してはいけない。

間違えたのか。
違う。
彼は間違えない。

————わざと、そういう設定を指定したのだ。

■221

「シャルル」
ヒカルが困惑した声でシャルルに言った。

シャルルは、長身を動かして・・・ゲートの向こう側に立った。
ゲートは小さな電子音を立てて、ゲートのランプが蒼く輝いた。
そして何事もなく彼を迎え入れた。
彼がその境界を越えた瞬間、入館者の滅菌を目的として、エアシャワーが彼に吹き付けられた。
でもヒカルがそこに入ればきっと・・・ランプは蒼く点灯しない。

「こちらに来てはいけない」
シャルルは少し哀しそうに、そう言った。

一緒に生きていこうと。
一緒に居ようと。
・・・・そう言ったのに。

彼はあえて「こちら」と言った。
ヒカルが言い表すことのできなかった「あちら」と「こちら」の狭間に居るような・・・
そんな状態だった。
白金の髪の、青灰色の瞳を持つ、色素の薄いフランスの華は、悲しそうに、そう言った。
こちらに来てはいけない。
こちら・・・ルイの容態はそれほどまでに酷いのか。
シャルルはどうしてヒカルを連れていってくれないのか。

「シャルル・・・どういうことなの」
彼女は唖然として、彼の前に対峙した。

シャルルが距離を持った。ヒカルに対して、ここから立ち入るなと言った。
それは医師としての見解であるなら、ヒカルはそれに従ったのかもしれない。
でも。
明らかに・・・シャルルがヒカルをその先に入ることを禁じたのは、ルイの容態が思わしくないことを咨嗟している。
シャルルは何も言わなかった。

あれだけの情報量で・・彼が何を察したのかを聞く時間さえ惜しかった。

ヒカルは。
ヒカルはいつも傍観者でしかないのか。
いつも渦中に居ながらにして、穏やかな風だけを受けることを愉しんで良いのか。
彼女は

ヒカルはぐっと・・・拳を握った。
「なぜ、私はそこに入れないの」
彼女は低く言った。
これから生涯かけて愛そうと誓った人を軽く睨む。

憎まれても良い。
嫌われても良い。

でも。
それでも。

シャルルを一人にしておくことはできない。
彼は孤独に生きてきた。
また、孤独を背負うことはさせない。決して。
彼には必要とされるルイという星辰の子を・・・ヒカルの家族を。
ヒカルは、ヒカルの意思でもって見届けなければならない。
義務ではない。
そうしたいから。
ヒカルは、ヒカルの家族を自分の意思で定めることができるようになった。
大人になって。
帰る場所はあの薔薇の香る寂しいけれど静かなあの場所だと思ったから。

――時間がない。

ここでこうして立ち往生している間に、ルイに何歩近づくことができるだろうか。
彼の革靴が、きゅっと床を踏み鳴らした。

「愛しているよ、ヒカル」
彼はそう言った。

少し悲しそうな瞳をヒカルから反らすことはなかった。
彼は少し・・長身を屈めた。
ヒカルの方に少し顔を寄せた。

その言葉は免罪符にならない。
これから彼が何をするのかを赦す言葉にならない。

「シャルル・・・ルイはどうなっているの」
「ルイはこの先に居る」
シャルルはヒカルと距離を保ってそう言った。
彼も苦しそうに・・・短く呼吸していた。
「ヒカル、良く聞いてくれ。・・・この先には、ごく限られた者しか入ることのできない場所がある。この場所には治療棟が2つ在る。一般病棟のそれと・・・この、集中治療を施さねば再生できない者を癒す場所と・・・」
「私は」
ヒカルはそう言って言葉を切った。
目の前の・・・医師として客観的な判断を下す白金の髪の美しい人を見た。
ヒカルが歎く事態を避けるために。
彼は見てはいけない、と忠告したのだ。

この病棟にやって来ること。
この研究所に立ち入ること。
それはヒカルに酷だから、入ってはいけないと案じたシャルルがヒカルに警告をしたのだ。

ここは・・・ルイとヒカルが誕生した場所でもある。
小さな生命の晄であった時からここに存在したのに、今はまったく記憶にない。

でも。

それでも・・。

ルイは戻って来た。
ルイはここに居る。

まだ認可されていない臨床実験を繰り返すこの場所にルイは居る。
一般病棟の集中治療室でさえ癒されないからここに居る。
彼の体は・・・彼の魂は・・・どこを彷徨っているのだろうか。

■222

「私はそれでも行く」
ヒカルが強く短くそう言いきった。
シャルルの顔を見つめながら、惑うことなくそう言った。
唇を横に引いて、強くシャルルを見た。
その言葉を言うのに、躊躇いを感じなかった。

「シャルル。私はシャルルを信じる。この国の医療を信じる。ルイを信じる。
・・・自分の決断を信じる」

そう言い放つと、手首に貼ってあったIDフィルムを引きはがした。
躊躇いもなく彼女はそうした。
それが何を意味するのかもよく説明されていたのに。
それは簡単に剥がれて床に落ちた。
茶色の瞳の茶色の髪の娘は・・・そう言うと、少し微笑んで、彼の傍に近寄った。
電子音がして、異常を知らせるランプが点いた。

「行こう。行こう、シャルル。一緒だ。一緒だよ・・」
ヒカルはそう言うと、唖然としているシャルルの手を取った。

彼女は他のチップシールを保持する者と接触していれば・・・一対の個体とみなすこのシステムの特徴を知らなかったはずなのに。
いつ・・・知ったのだろう。
そこでシャルルは目を見開いた。

ああ、あそこか。

シャルルに逢いに・・・彼女がアルディ邸に入り、侵入したとき。
彼女とルイは手を繋いでいた。
ルイがMaster権限を持っていて、ヒカルはビジター権限しか持っていなかったから。
彼はヒカルの手を振り払うことをしなかったのだ。
彼女があの内庭に入ることができるように。
シャルルに近づくことができるように。
その時ルイは黙って・・・手を差し出した。
ルイが目覚めたら・・・シャルルはヒカルを愛しているのはルイだけではないと告げなければな

らないと思った。
だから、ルイ。生きろ。
彼は強くそう念じた。
根拠の無い願いや希望は虚しいだけだと思っていた。
でも違う。
そうではない。
根拠がないから、希望したり切望したり・・・人は未来に生きる事ができるのだと知った。

ルイの愛し方は奪うだけだ。
シャルルと同じだ。
でも与えることもできる。
創り上げることのできる愛もあるのだと、彼に教えていなかった。
未来だけを考えて欲しかった。
過去に生きるそんな思い出はルイに必要ないと判断した。
でも、判断するのはシャルルやミシェルではなく・・・ルイ本人なのだ。
自分があの人を定めたように。あの人の娘を定めたように。
ルイも定めるべき人が居て・・・その人との思い出を作り未来を作り生きていくことを彼が願っているという、ルイ本人からの叫び声が・・・聞こえていなかった。
人はなんと業が深く罪が重いのだろう。

「良いだろう。ヒカル・・オレの手を離すなよ」
後ろから、異常を感知したことを知らせる警報によって、スタッフが駆けつけてくる音がした。
シャルルはヒカルの手を取って、握り返した。

ヒカル。・・・ルイを救おう。彼を救えるのは、ヒカルだけだから。

彼は反対側の手を挙げて、心配ないというように首を振った。
廊下は天井が高かったが、彼の声は良く響き渡った。

この廊下は産道に似ている。
長い廊下を行き着く先に、星辰の子は居る。
新しく生まれ落ちるために、彼は今、そこに居る。

ルイ。
ヒカルは呟いた。
ルイではないシャルルと手を繋いでいるのに、違う男の名前を呼ぶ。
でも、その人は彼と彼女の家族なのだ。

なくすことができない、唯一の、代わりのいない人の名前を呼んだ。

「彼女のIDシールが剥がれた。もう少し・・・紛失防止に策を講じるか、改良しておけ。・・・・彼女はヒカル・クロス。この施設の医療器具を提供するクロスグループの会長の孫娘だ。・・・そしてアルディに迎え入れる重要な人物だから・・・彼女に新しいIDを持って来てくれ。
勿論、Master権限のもので」

彼はそう言うと、ヒカルの手に自らの指を絡めた。
「先を急ぐから・・そちらに持って来るように。・・・彼女はオレと一緒だ」

■223

そこから先の道順については、ヒカルは後になって思い返しても良く覚えていなかった。
酷く寒かった。
酷く静かだった。
あれほど騒がしかったのに、そこは静かだった。

シャルルに連れられて、進んだ先では、彼は医師の顔をしていた。
ヒカルに新しいIDが渡されると、彼は彼女と絡めていた指の力を抜いて、ヒカルから少し離れた。
認識ゲートを潜れば、彼と手を繋いでいる必要も無かったのだが、どちらともなく、手を離すことが出来ずにそのままここに到達した。行き止まりの自動ドアをシャルルは慣れた足取りで
進み・・そしてその先に待機する医療チームのグループが一斉に彼を振り返ったので、シャルルは軽く頷いてその輪の中に入っていった。
若い。皆、一様に若かった。
雑菌飛散防止のために、マスクをしている。
そして白衣を着て誰もが同じように・・・シャルルの指示を待っていた。
彼らの向こう側のガラス張りの部屋に、ルイが居ると思ったが、ヒカルは彼らを越えてルイの安否を確認するのは、シャルルが良いと許可をしてからだと思った。
ルイが居る。
ルイが生きている。
それだけで・・・それだけ確認する。

ヒカルにはここで待つように、という言葉さえ必要なかった。
シャルルはヒカルから離れて、そのままチームのリーダーらしき人物と話をし始めた。
彼女は静かにその様子を見守る。

こういう場所では治療方法をあらかじめ決めてから対処にあたるから、本来なら会話はほとんど行われない。
医師によっては、手術中に音楽をかけて集中力を高めるということも在るのだという。
それくらい・・・静かな空間だった。
応急手当はした、という声が聞こえてくる。
専門用語はまだヒカルには良くわからない。
もっと勉強しておけばよかった、とちらりと思った。

彼の元に、現在の状況だと書かれた箇条書きの説明文書がハードボードに添えられて届いた。
シャルルはそれを受け取ると、細く長い指を苛立たしげに動かして、書類を乱暴にめくり、通常の者の倍以上の速さで情報を頭に入れていく。
同時に、何人かが違うことを話し出しているのに、彼は同時にそれを聞き流し、適切に短く簡潔に返事をしていた。

凄い・・・
これが、シャルル・ドゥ・アルディなのだと思った。

彼は医師であるだけではなく研究者であり、鑑定医として様々な事例を扱っている豊富な経験を持っている。
ここはルイとミシェルが指示をする場所であると聞いているのに・・・彼らはシャルルの言葉を待つ。これはルイとミシェルの能力が低いと言うことではなく・・・これが、頂点に立つ者の持つ力なのだということを肌で感じる。
ミシェルがシャルルの指示に従え、という命を出しているのは間違いない。
でも、それだけではないものがそこにはある。
誰も煽動しているわけでもないのに。
シャルルの当主としての才覚は、誰もが認めるところの者であり・・・彼が決してこれまで自身が言うように怠った愚王であるということはないのだ、とヒカルは思った。
そんなシャルルが・・・ルイの治療をすると宣言した。
だから、それを信じようと思う。
ルイに声をかけて良いという許可をシャルルが出すまで。
ヒカルはルイを見守り続けるしかない。
あの薔薇園でもそうだった。
彼の苦悩を見守るだけしかできなかった。
でも。
今度は声をかけてみようと思う。
彼に黙って視線を投げるだけしかできなかった。
でも、今度は、声を出して、ルイに呼びかけてみよう。

ここは全面ガラス張りになって居る治療室だった。
アルディ家の薔薇園を思い出す。

その時。
チームが次の部屋に移動する動きを見せた。
打合せが終わって、いよいよ治療室にシャルルが入ることにしたらしい。
一瞬・・・背中しか見えなかったシャルルの横顔が見えた。
ガラス越しに見える光に、目を細めた。そして、厳しい貌をした。
見たことのない・・・彼の顔だった。
「ヒカル。ここに居てくれ」
彼は振り返った。
ヒカルが立っている場所からは、内部の様子が見えない。
シャルルの様子に、再び・・・ルイの姿を確認したいという欲求が生まれてくる。
でも足が動かない。
見てはいけない、と何かが囁いているようだった。
治療が終わったら集中治療室に移すから、と彼はヒカルに短くそう言った。
ヒカルは頷いた。

「そこで中の様子が見える・・・マイクもONにしておくから。でも、何があっても、動揺しても・・・ルイが目覚めたら、真っ先にヒカルが声をかけてやってくれないか」
彼はそう言った。
そして、スタッフを数人、追加で寄越すようにという指示を加えた。
「ヒカル。場合によっては、今、骨髄液を提供してもらうかもしれない。すべての手続きに関する手順を省略するが・・・良いね」
「はい」
ヒカルは頷いた。
急を要するものではないはずなのに。
iPS細胞は、短時間で作成できるものではない。
それなのに、ルイの治療と同時に着手を始めるということは・・・そしてこの状況に乗じて、彼女の国籍も家族同意書も何もかもを無視して手続きをすると言ったシャルルが・・・時間がないと判断している。
だからそれに従うことは問題ではない。
彼が瞬時に同時に、様々なことを考えることができる人物であることはわかっていたが、それほどルイの状態が酷いのかと思うと、ますます・・・足が重くなる。

いいえ、違う。

長期治療を必要とするから、今から着手するのだ。
少しでも期間を短くするために。
ということは、ルイはきっと良くなるのだ。
命が助かっただけでも嬉しいことであるはずなのに。
更に、元通りになってくれることを次に願う。
人間とは何と欲が深いのだろう。
あの墜落事故では、遺体があがらなかった。
どんなに探しても、生きているのか死んでいるのかわからない状態より・・・それより何倍も嬉しい事態なのだ。
だって、ルイは生きている。
ヒカルはそう言い聞かせた。
自分をそう言って、納得させた。

そしてシャルルがそのまま・・・・・着替えをして消毒をし、医師として彼ができる処置をするために次の部屋に消えて行くと、扉が自動で閉まった。雑菌を抑えるために、すべての操作が自動で行われていく。
・・・・人の気配が瞬時に消えた。

ヒカルは弾かれたように・・・そのままガラス扉に近づいた。
入り口は少し離れていて、ちょうど彼女が立っている場所からは中が見えなかった。
ここは地下で、直射日光が入って来ないので、照明だけが頼りだが、最大出力であるかのような眩しさだった。

———今は夜なのだろうか。
それとも朝なのだろうか。
それすらわからない。
時間の経過を感じない。

夏の陽射しが恋しかった。
夜の風が懐かしかった。
今、彼女はここにやって来たばかりなのに。

ここは、研修医などが見学をする場所も兼ねているらしい。
シャルルの指示どおり、スピーカーから声が漏れ始めた。
しかしあまり言葉が多くない。
すでに彼の指示通りにチームが動き、麻酔医が麻酔を増やす旨の宣言を始めた。

マイクが入り、手術道具が揃えられていく音がする。
すでに応急処置はしているらしく、その使用済みの血に染まったガーゼを詰めた廃棄ボックスを空のものと交換するために出入りする扉の開閉音が聞こえる。
溢れんばかりボックスは、蓋が閉まりきらずに少し開いており、そこから鮮血を吸って、変色を始めている赤い色を見つけて、ヒカルは息を呑んだ。

・・・ルイ。

ヒカルはそこでようやく、彼女の伏せていた顔を上げた。
まだ隣のブースで待機しているのだろうか。
シャルルの姿は見えなかった。

・・・・だから。
だから、あの治療台の上に横たわっている人はシャルルじゃない。
彼女はガラス窓に額を押しつけた。
内部の照明が強すぎて、目が慣れるまで、よく見えない。

「・・・・・ルイ」
その姿を見て、ヒカルは手を口許に当てた。
そうでなければ、叫び声を上げてしまいそうだったから。
ルイは確かに生きていた。
自力呼吸もしている。
でも・・・・・でも。

生きていてくれれば良い、とほんの数十秒前に思ったのに。
ヒカルは自分の脈と呼吸が激しくなっていくのを感じた。
体が震える。先ほどの顫動はまったく・・・比ではなかった。
短く呼吸をしなければ、息をすることも忘れて見入ってしまうところだ、と本能が彼女の意思に逆らって彼女の命を長らえさせる行動を取ったことにも気がつかずに。
大きく瞳を見開いた。
見開いても、彼に近づけないのに。

また・・・ガラスの壁越しに・・・アルディ家の薔薇を見つめることになるのか。

彼女は手の甲を当てて唇を押さえた。

ルイ。

ルイの声が聞こえる。

『シャルルに、生きていながら死にたいと思わせたい。生きながら死んでいると思わせたい。それがオレの願いだよ、ヒカル』
彼はそう言った。
でも。
でも・・・・
今、目の前に俯せに横たわり、背中に散ったガラス片を除去されて体温が下がったり体液が流れ出ることを避けるために皮膚を保護されている彼は・・・彼は今、彼が予言した状態に陥っていた。
意識はない。
シャルルをその状態にしてやる、と冷たく言い放った傲慢な星辰の子は居なかった。
その代わりに、彼がその言霊に絡め取られていた。

・・・目を瞑ったままの彼の惨状をヒカルは観察することができない。
でも眼を反らすことができない。

ルイ・・・・ルイ。

彼女は本当に悲しくて驚いているときには、涙が出ないのだと知った。

彼は、生きながらに死んでいる状態に陥っていた。
生きているのに。
彼のあの状態は・・・生きているという状態なのだろうか。

■224

晄に包まれていた。
でも、酷く寒い。
体が震えるのを感じたが体が動かない。
体ごと何かに浮かんでいるような・・・・・海の中に居るようだった。
晄の・・海。
目を瞑っているのに、酷く眩しい。
瞑っているのに、彼は周囲の様子を把握していた。
説明のつかない場所で、彼は浮遊している。
ここがどこかと考えることはしなかった。

もうこの場所に居るしかないと思ったから。
でもそれは苦痛ではなかった。

・・・晄の海を揺蕩う。

これほど安らかであるなら・・・・ここに永遠に沈んでいるのも悪くはない。

傷嘆も感じない。
惨憺も忿恚もない。

吸い込まれて行くあの晄の感覚は・・・・彼が愛する人の魂の煌めきに似ている。
彼にはこれまでの過去がない。
辛く冷たくただ何も無いという過去しかない。
未来に生きろと言われたが、何を言われているのか理解できなかった。
過去が積み重なって現在となり、彼の未来は玉座とでも言えるあの席に登りつめることだけしかないと思ったから。

過去が交錯する。
走馬燈のように・・・・彼の記憶が巡っては旋回し、そしてまた遠くなっていく。
晄が生まれて闇が生まれて・・・ふたつはひとつであるのにも関わらず、晄はどこまでも眩しい。
強い晄は闇を色濃くすることを忘れて、闇そのものさえ消しさってしまうような強さを持って・・・・闇を・・・彼を照らす。

ひとりの少女の・・・茶色の瞳が思い出される。
彼の唯一の過去だ。彼の晄。
その者の名前を呼ぼうと思ったが、彼の唇は動かない。
彼女の名前を呼ぼうとするが、言葉が浮かんでこない。

未来なんてない。
過去なんてない。
でも、彼女と過ごした短い瞬間が積み重なって・・・彼の現在となって過去にも未来にもなっていく。
輝ける光の娘。
彼女を贖罪の娘だと呼んだ。
賤しい郭公だと言った。

・・・・・でも。
・・・・・でも。

誰かが、声をかけている。
起きて、と言っている。
でも、声が遠く、くぐもっているので・・・自分のことを呼んでいるかどうかもわからない。

目を開いて。起きて。行かないで。

言葉を繰り返す声音が・・・・遠いが、それでも彼に何かを訴えていることだけは理解できた。

「・・・・・て。起きて」
彼が記憶している声音が・・・彼を呼び覚ました。
独り占めしたくなったあの声の持ち主は・・・彼を呼んだ。
唇を動かす。
彼女の名前を呼ぼうとする。

晄の海底で・・・・・彼は目を瞑っていたが・・・やがてゆっくりと瞼に力を込める。
このままここで揺蕩っていたいのに。
彼を呼ぶ声がするから。
彼は声のする晄の海を上昇し、浮かび上がっていった。
水底から浮かぶという行為を、自分で意識して操作できるのに、瞳を開くことは難しかった。
それでも。

「起きて」
彼はゆっくりと目を見開いた。
大きな苦痛が彼を襲った。
そこに辿り着けば・・・・決してこんな穏やかな波間ではないことを理解していたのに。
彼女が、呼ぶから。
彼女が、囁くから。
彼女を・・・・そうだ・・・・彼女を愛しているから。

「生きて」
彼女がそう言った。
今度ははっきりと・・・聞こえた。

彼は青灰色の瞳をゆっくりと・・・持ち上げた。

目の前に・・・誰かの瞳があった。
茶色の瞳が彼をのぞき込んでいた。
涙をいっぱい溜めていた。

「・・・・泣くな」
彼は掠れた声でそれだけ言った。酷く嗄れた声で、自分の声なのかよくわからないが、彼の切れた唇から発せられたものであることは確信できた。
なぜなら、彼の言葉で・・・・・目の前の娘は大粒の涙をこぼし始めたから。
泣くな、と言ったのに。
彼はちらりとそんなことを考えた。

彼女の茶色の瞳が目の前にあって。
理由はないが、安堵した。

貴女は・・・・いつも泣いてばかりだね・・・・

彼女は大判のマスクをして、髪を結い上げていた。雑菌が入らない様にするためだった。
でも、涙を。涙を流してそれがマスクを伝って濡れていた。声にならない嗚咽を漏らす。
マスクをしているので、唇の動きがわからない。でも何かを言っていた。よく・・・聞こえない。

周囲の空気が動く。
誰かが自分の体に触れて脈を確認し、瞳孔の開きを見る。
冷たい・・・・何か点滴が彼の腕に刺さった針から注入されていくのがわかる。
冷たいと言う感覚だけはわかる。

「麻酔が切れる。痛むから少し眠れ」
彼の頭上から、声が聞こえてきた。

・・・・・起きろと言ったり眠れと言ったり・・・騒がしいな・・・・
彼はちらりとそんなことを考えながら、目を瞑った。

今度は晄の海に戻らなかった。
暗い闇ではない。彼に煌々と照らす照明が眩しいな、と思ったが彼は目を瞑った。
誰かが・・・・誰かが彼の頬に触れた。薄い手袋をしているから、誰の手なのかわからない。

目を瞑っているからなおさらだった。
でもその手は。
彼はよく知っていた。
彼のことをよく知っている手だった。
不思議と、嫌な気持ちはしなかった。

彼は再び意識を失った。

■225

ルイ・ドゥ・アルディが次に目覚めた時。

正確には身を起こすことができるようになるまでに回復することができたとき。
夏は終わっていた。
季節は冬を通り越して春になっていた。
あの事故から・・・すでにいくつもの季節が過ぎていった。
夏の陽射しが柔らかくなり、短い秋の訪れが去っても、彼は季節の移り変わりを見ることなく、そのまま日射を遮った集中治療室で過ごすことになった。
季節の翳りを代償して、彼は驚異的な回復力を見せていく。

しかし、意識は半混濁したままだった。
昏睡状態から脱しても、彼はうつらうつらと・・・眠っていたり起きていたりする半覚醒状態を続けていた。
その間、彼の体は着実に癒されていったのに。
それなのに、彼は眠った状態を長く続けた。

鼓膜の損傷が酷かった。
今も片方の耳が良く聞こえないが、これは鼓膜再生治療を施すことができた。
先般、その手術をして安静期間を終えて聴力回復の経過観察期間に入ったばかりだ。

それから、背中に受けた火傷も裂傷も、ガラスで切った部分も・・・皮膚移植で綺麗に癒着した。
培養皮膚の移植とヒカルから提供された細胞を使ったドナー細胞から作られた皮膚は見事に彼に定着した。
この短い期間で、拒否反応もないし、薬物投与による抗体制御も必要がなかった。
通常の回復速度よりもずっと早く安全に、皮膚の赤みが消えていく。
彼の美しい背中が再現されていく。

後は何回か手術を必要とするが、徐々に瑕は消えていくだろう。
細胞分裂を始めたばかりの皮膚細胞を移植されていく都度、彼は若返っていく。
シャルルの形成外科手術を最後に受ければ・・・大惨事に遭遇して生還した人物だとは誰も気がつかないくらいになる。

骨折も靭帯損傷も癒えた。
焼けた髪なども生え揃って、見事な金髪が輝きだした。
先般、長くなった髪を整えたばかりだった。

あの事故で吹き飛ばされたが、彼の体は奇跡的に無事だった。
出口付近に居て、彼は爆風で柔らかい植え込みに投げ出されたこと、彼の体の上に、ちょうどあの真鍮製の薔薇のベンチが覆い被さるように吹き飛ばされてきて、ルイの体を防護する役割をしていたこと。
それで彼は下敷きになって、骨折もしたのだが。
彼が乗馬とフェンシングで体を鍛えており、とっさに受け身の体勢を取って躰の臓器を損傷することがなかったこと･･･等々。

・・・それはもう僥倖としか言い様がなかった。

ルイの生命力が彼を生かした。

彼の体に取り付けられた装置がひとつひとつ少なくなっていく度に、彼の体は癒えていく。
しかし、良く鍛えられた体は筋肉が落ち、彼は非常に痩せてしまっていた。
歩けなくなってしまうので、徐々にマッサージとリハビリを受けているから、少し筋力が戻って来たようだったが、かつての彼と面立ちが変わってしまっていた。

・・・・それでも意識が戻らない。
彼はほとんど言葉を発することもなく、ただ眠り続ける。

滅菌室から出て、重篤な感染症や後遺症がないことを確認できると、ルイ・ドゥ・アルディはようやく陽射しの差す場所に移された。
正確には、ロアールの館の一室を、医療設備を兼ね備えた部屋に改装してルイの滞在先として設けたのだ。
ここは、アルディ邸より研究所と近い場所にある。
それに・・・彼の家族が集う場所でもあった。
反対側の棟には、ジル・ド・ラ・ロシェルが住まっている。

ミシェルは最近、ここで寝泊まりしているようだった。
ルイが、ジルの居る場所まで、自ら歩いて行き来できるようになるには時間はそれほどかからないだろう。
彼の目標にもなる。
アルディ邸のルイの別邸からは、焼け落ちた温室が見えてしまうので、まだ彼を戻せない、とシャルルは言った。
ルイが悲しむと思ったのだろう。
憂いの源になるような記憶は極力作らないでおきたい、と彼は付け加えた。
アルディ邸は補修工事が終わっていたが、温室の再建が完了していなかった。
次の冬までには温室は新しくなるだろう。
しかし、温室で愛でるべき薔薇は全焼してしまった。

「おはよう」
ヒカル・クロスはルイに声をかけた。
彼の聞こえない方から声をかけてしまったのだが、手元に手繰り寄せたカーテンを巻いていくことに四苦八苦しており、そのことに気がつかなかった。
彼女はそのまま言葉を続けた。
「よく眠れたかしら・・・そのポプリの入った枕、私が作ったのよ」
彼女が部屋に入ると、少し薄暗かったので、ヒカルは荷物を置いて、そのまま窓辺に寄った。
少し緊張する。
ルイに会うのは久しぶりだった。
彼に向かって飛んできたい衝動に駆られたのに、そういう刺激はいけないから、通常通りに振る舞うように、と注意されていた。

柔らかい羽布団をかけて、ルイは背凭れにもたれていた。
大きな羽布枕を背中にあてている。
ぼんやりと、物憂げな青灰色の瞳が開いていた。
まだ微睡んでいる最中なのかもしれない。
ヒカルが言ったとおり、その枕はひとつひとつ彼女がポプリを調合して作らせたものだ。
こちらからも、ほんのりオレンジとカモミールの香りが漂ってくる。

季節を感じるように。
リラックスできるように。
よく眠れるように。
祈りを込めて、彼女が用途別にひとつひとつ作った。
パリを離れている時でさえも、彼女はポプリを送り続けた。
作り方はジルに習った。

彼女もかつて、シャルルのためにそうしていたことを知った。

それをその時々にあわせて組み合わせて彼の枕を指定するのは、シャルルだった。
彼は決してルイが目覚めているときには会いに行こうとしない。
彼が眠っているときや治療中で処置室に搬送されていくときに、じっと遠くで見つめているだけである。
主治医ではあったが、問診などはチームに任せてしまっていた。
彼の仕事はそれだけではなかったから。
ルイが不在にしている分、シャルルは多忙を極めることになり、とうとう、先頃、ミシェルが彼の補佐をする立場として、当主代行に就任した。

シャルルはそれでも時間を見つけては、ルイの意識のない時にだけ・・・シャルルは病室に入り込んで、そっと・・・ルイの金髪をそっと撫でて行く。
それだけだった。

ヒカルはそろそろ、季節がかわるからカーテンも替えないとねと言った。でもどの季節になるからとは言わなかった。
窓を開けるには、まだ少し肌寒い。
上着は入館時に脱いだが、首元のマフラーがまだ身につけたままだった。
彼女は慌ててマフラーをはずす。
ここには時計がない。
時間を感じさせるものを極力置かないようにしている。
彼が目覚めた時に時間が経過していることを計測することがストレスになり、彼は眠らなくなってしまうからだ。
だからルイの季節の進み具合と、ヒカルのそれとは若干違っている。
彼の中では・・・まだ季節は夏なのだ。
彼女の手作りの枕に染みこませた季節の香りだけを頼りにして・・・彼の胎内でゆっくりと時を刻んでいる。

そう、それで良い。
いつか、追いつくから。
焦ってはいけない。
シャルルに言い含められたことを思い返す。

・・・少し腰が痛む。
脊髄麻酔と、穿刺による骨髄採取を繰り返したせいだ。
特にこんな温度差が大きい一日は、ちくりと何かが刺さるような痛みを感じる。

でもこれはいくつかの季節を越えていけば、必ず治るからと言われていた。

■226

腰を片手で押さえていたときだった。
「痛むのか」
彼が言葉を発したので、ヒカルは目を見開いて彼の方を見た。
そして・・・息を呑む。
彼のベッドがある部屋とこちらでは少し距離があり、寝室は薄暗いままだったから顔がよくわからなかった。
彼が言葉を発することは滅多にない。
そして、ヒカルが彼と最後に別れた時には、彼はひとことも口にすることがなかった。

ルイが意識を取り戻した後。
もう、回復に向かうだけだからとシャルルに言われたが、どうしてもパリを離れる気になれなかった。
でも、彼女には現実があった。
学籍のこともある。
病がちな祖父のことや・・・日本での生活をそのままにしてきてしまった。
それらをアルディ家に代行してもらって解決しようとは思っていない。
彼女は成人しており、何もかもを自分で決められるようになったが、何もかもを自分で整理しなければならないと言う責任も発生した。
ヒカルの思うとおりに生きろ、とシャルルは言った。
一緒に居たいのだけれど、それだけでは駄目なんだよ、と彼は少し悲しそうに言った。

ヒカルは考えた末、後ろ髪を引かれるような思いで、パリを後にして、一度日本に戻った。
ルイの容態について逐一知らせてくれるように何度も念を押した。
マンションに戻ったときに、ただいまと言っても誰も返事がないことに少し涙が出た。
ひとりで生きていけると思ったのに、ヒカルには家族が居て・・・愛する人が居て・・・そして何より、自分が今、一番どこに走っていきたいのか、痛感した。
彼女が生きる場所は、ここではない。
日本だとかパリだとかいう国のことを言っているのではない。
幼いときから過ごした、あの薔薇の家に戻りたいと。帰りたい、と思った。

慌てて用意して出発したので、部屋は散らかっていた。
そして、ルイの残した煙草の吸い殻が残っており・・・ヒカルは少しだけ泣いた。

その夜、シャルルとWEB電話で話をしたときにも泣いた。

帰りたいな、と言ったら。
帰っておいで、とシャルルは言った。
帰る場所なんてないと思っていたのに。
ヒカルに帰っておいで、と言う人ができた。

そして愛しているよ、と何度もディスプレイ越しに囁いた。
彼女は・・・ディスプレイに映るシャルルの頬にそっと触れて・・・そしてまた涙を流すと、シャルルは困った人だと言って苦笑した。
「泣かせると言ったけれど、涙を止めるとも言った。でもこれでは涙を拭ってやれないだろ」
ヒカルが笑うと、やはり笑顔が一番だよ、とシャルルも笑った。

それから・・・彼女は休学の手続きを取った。
シャルルはそれと同時に、パリでの入学の手配を考えていたらしく、シャルルの申し出に迷わずウイと返事をした。
ヒカルはパリでもう一度試験を受け直すことにした。
何年かかっても良いから・・・ヒカルはもう一度パリで過ごしてみようと考えた。

そのことについて、日本の・・・彼女の本当の血族達に説明をして歩いた。
祖父が一番反対した。
でもどうしても・・・どうしてもシャルルと一緒に居たいと言うと、祖父は昔からよく知るシャルルなら、託せると言ってくれた。
孫娘が少し雰囲気をかえて帰国した。
彼の耳にもアルディ家の惨事は聞き及んでいただろうから、相当に心配をかけてしまったと申し訳なく思った。
彼はヒカルの話を最後まで聞いていたが、最後は「倖せに・・・」と言って声を詰まらせた。
忘れ形見のヒカルは、とてもよく・・・息子に似ていると言った。
我慢強くて、人一倍他人を気にする人間が、初めて、何かを求めるのであればそれは本当に大切にしなくてはいけないよ、と祖父は言って笑った。
彼にもそういう悲しい記憶があったからそういうことが言えたのだろうと思うと、ヒカルはありがとう、という言葉以外には、なにも言えなかった。
祖父も外国人である祖母と結婚したときにはたいそう反対にあったようだった。
思えば家族に恵まれない人だった。
次々に・・・自分より先に逝ってしまうと呟いた。
「ヒカルは、そういう気持ちを相手に持たせないように・・・長生きしなさい」とだけ言って送り出してくれた。

誰かを見送ることは悲しくて辛い。
それは誰でも一緒なのだと思った。
母方の伯母や叔母は、「やっぱりあの子の娘だわ」と言って諦めていたようだった。
生きていればまた逢えるから、と言ってくれた。
母の昔からの友人である音楽家は「そう」と短く言った。いつか・・・彼女とゆっくり話ができると良いのに、と思っていると「メンテナンスをしにアルディに行くよ」と約束してくれた。
シャルルは彼女の主治医でもあるからこれでさよならじゃないよ、と彼女は闊達に言って笑った。

そして、あの絵をくれた夫人に手紙を書いた。
彼女も世界中を旅する人なので、ヒカルが訪れた時には不在にしていたからだ。
初めて訪れる場所なのに、その屋敷はどこか懐かしかった。
誰かの・・・母の記憶なのだろうか。
そして手紙を置いていった。
あの絵が母の遺作になったことと。
今はモデルとなった人に渡したことと。
そして自分は・・・ルイとシャルルと一緒に新しい家族を作りたいと思うと書いて結んだ。
シャルルを定めたことは書かなかった。
きっとわかっていると思ったから。

最後に・・・両親の墓標に行った。
日本には、彼らの肉体は存在しない。
でも、彼らを愛する人達のために、この墓標を道しるべにして、あの人達は帰ってくると思った。
だからこれは無駄ではない。
いつか、会いたいから。
だから、こうしてここに詣でる人達が居る限り・・・父と母はいつでもここに帰ってくるとことができるのだと思う。

———もう、だいぶ風が涼しくなって居た。

ヒカルの髪が風に巻き上げられる。
風になって・・・誰かが彼女の傍に纏って何かを囁いていったような。
そんな感覚があった。
不思議と懐かしい・・・どうにも形容しがたい感覚だった。
胸が締め付けられるほど苦しくて切なくて・・・でも懐かしい。
最後の抱擁を思い出した。

彼らは最後に「またね」と言って出発していったことを思い出した。
不思議と・・・感慨深いものを感じたが、また彼らに会うことができるような気がした。
でもそれは今ではない。

早く会いたいと思っていたけれど。
まだ、会いに行くことはできない。

彼女はこの世で愛をしているから。
彼女はこの世で生きているから。

「おとうさん・・・おかあさん・・・またね」
ヒカルはそう言ってその場を離れた。

あの海で、また会いましょう。

彼女は呟いた。
そして少し微笑んだ。
大人の女性の微笑みだった。

———あの海に還ってきてね。きっとだよ。

■227

「痛むのか」
ルイにヒカルは「少しだけ」と言って微笑んだ。
動揺を隠せない。
ヒカルは言葉を失った。
彼女にルイが話しかけたことにも驚いていたが、もっと驚いたのは彼がシャルルに似ているからだ。
遺伝学上それは当然のことでもあるのだが・・・どうにも、その持っている雰囲気が良く似ている。

そして彼の今の風貌は・・・ヒカルが初めてシャルルと会ったときに非常に良く似ていたからだ。

痩せて幽鬼のような顔になりつつも、それでも美しい人。
何もかもがこそぎ落とされて、この世の憂いだけを羽に纏った悲しい天使のような美しさだった。
・・・青灰色の瞳が印象的だった。

そして彼女は夏が終わると、パリに移り住んだ。
アルディ邸の改修があり、そこには住まずに、ルイのあのセーフハウスに住んだ。
シャルルはその間、ルイの別棟に寝泊まりしているらしい。
ヒカルは・・・そこには一緒に住もうと言わなかったし、シャルルもそう言い出さなかった。
ここの合い鍵を渡してくれたのは、ミシェルだった。
ヒカルは、ルイが読んだ本や彼の論文を読んで過ごし、入学のために彼女に必要とされる知識を埋めるために勉強をする。
・・・煙草の香りの漂う寝室に空気を入れて、時折・・・ルイのためにコーヒーを入れる。ティーだけではなく、コーヒーも好んだルイのために。
時折、シャルルがそこを訪ねて来る。
時々、一緒にコーヒーを飲む。
彼はあまり好んでいないことはわかったが、シャルルはいつも黙って出されたコーヒーを口にしていた。
シャルルはいつも薔薇を持ってやって来る。
温室が炎上してしまい、完全に焼失してしまった彼の薔薇たちをもう一度彼は育て始めていた。
ガラス張りのルイの別棟の1階には、かつてルイがサーバとクライアントマシンしか設置していなかった空間に、薔薇の鉢植えが所狭しと並べられていて、新しい温室が完成したらそれらは移される予定だった。
研究所には、いくつかバイオ実験用の種苗が残っていたので、そこから・・・徐々に再生させているのだと言っていた。

そして先般、諸手続のために一時的に日本を訪れていた彼女が、先ほど戻って来たばかりだった。これで当分、日本とパリとの往復をする生活から解放される。
どこにも寄らずに、まずロアールの館にやって来た。
これで・・・ルイの看病に専念することができるという時期に入っていった。
ここは静かだ。
そして医療設備は整っているし、ミシェルが居る。
ルイの容態は安定しているし・・・後は、言語の回復だけだった。
頭部は損傷していないので、強いストレスを感じているが故の滅語症だと言われていた。
会話ができないわけではない。
でも、ヒカルには口を開かない。
わざとそうしているわけではないということも良くわかっていた。

でも少し寂しかった。

そういう時は、彼が目を醒ましたときのことを考える。
生きていてくれさえすれば良い、と思った時のことを考える。
小さいときから一緒だった。
でも彼を知ることができなかった。
自分のことで手一杯だったから、彼を傷つけた。
酷く誇りを傷つけた。
だからこれを贖罪というのはおこがましいが・・・彼を見守ることを貫き通すのも、ヒカルだけができることだと思った。
やり通さねばならないと思った。
それまではシャルルからの申し出である婚姻については、凍結して欲しいと言った。
一緒に暮らすことも待って欲しいと言った。
ルイはヒカルの家族だ。そしてシャルルの・・・大切な家族だ。

今では再生治療というものは珍しくなくなっている。
皮膚は再生する。
鼓膜も。彼の肉体は間もなく元通りになる。
いや、若返って蘇る。
でも、ルイの心が再生しない。
それはどんなに稀なる妙薬を使っても癒されない。

毎日を慌ただしく過ごしているうちに、いつしか季節は冬になり年を越して・・・新しい生命の季節になった。
ヒカルは今年からパリの大学に通うことが決まった。
そして、日本でのすべての事務手続きを終えて、帰ってきた。
そう。ここに。帰るべき場所に戻ってきた。

この館では、先般ちょっとした祝い事があった。
それをきっかけに、シャルルがルイをこちらに移すことを決めたらしい。
移床は、ヒカルが戻ってからにしようと思ったのだが、とシャルルは言ったが、ヒカルは良いのよ、だって戻ったら逢えるでしょうと微笑んだ。
シャルルは電話の向こうで少し言葉を選んでいた。珍しい。彼がそういう躊躇いを見せるのは滅多にないことだった。先にルイに会いに行けと言われた。
シャルルは遅くまで処理しなければならないことがあるらしい。
戻ってくる機内と、移動中で、スケジュールを調整した。
この館でシャルルと落ち合うことになっている。

長い移動時間で傷口が少し痛んだのを、ルイが見逃さなかったのである。
「だいじょうぶ」
ヒカルは掠れた声でそう言った。
久方ぶりのルイの声に息を呑んだ。
声量は小さいが、確かに・・・ルイの美しいテノールが響き渡った。
次に、ルイが返事をしないで正面を見たままだったので、ヒカルは作業を中断して、ルイの方に歩み寄った。
彼が聞こえる側に回り込み、ベッド脇の椅子に腰掛ける。
「だいじょうぶだよ、ルイ。ありがとう」
ヒカルはルイを見上げた。
彼の金髪はそのままに・・かなり痩せたが整った顔は今も美しい。
青灰色の瞳がこちらを見ていて・・・目が合ったヒカルはその時に涙をこぼしそうになった。
彼はヒカルのことを一度も・・・目が醒めてからは一度も見つめようとしなかったのに。
ルイの冷たい人の心をのぞき込むような瞳がそこにはあった。
彼は顔を向けて、ヒカルに声をかけた。
腰の痛みなどは吹き飛んでしまうくらい嬉しい。
ルイが目覚めて、声をかけてくれる。
最後に別れてから事故があって・・・ヒカルときちんと会話をするのはこれがあれ以来最初のことだった。あれからお互いにひとつ年を経た。
ヒカルは髪を少し切った。
ルイの快癒祈願をして、髪をアルディ家の薔薇園に埋めた。

彼女は嬉しくなって・・・そこで話をし始めた。
矢継ぎ早に、彼に話をし始める。

「あのね、ルイ。・・・ジルが妊娠したの。お父さんはミシェルよ。だからシャルルがそれを理由にミシェルが復権する手続きを取って・・・ジルは治療を始めているけれど胎児には影響ないって・・もうすぐ、ルイに妹か弟ができる。ジルは初産だし、体力のこともあるから、ルイに傍に付いていてあげて欲しいの。ほら、あの向かいの棟に居るのよ」

始まりは愛ではなかったかもしれないが、今、あの二人には確かに・・・誰とも築くことのできない絆があり、そしてその証が間もなく誕生する。ジルがそれを承諾した。
彼女はシャルルとミシェルを間違えない。今はミシェルと彼を呼ぶ。
ヒカルは少し会わないと・・未だにマリナさんと呼ばれるのに。
ミシェルにはそうは言わない。

「それに薔薇園ももうすぐ新築される。ルイにあの薔薇たちを復元して欲しいって・・・シャルルがそう言っている。ルイに戻して欲しいって」
ヒカルがベッドの上に置かれたルイの手にそっと触れた。
彼の静かな瞳に吸い込まれるようにして、語り始める。それをじっと・・・ルイが聞いている時間が制限されているわけではなかったが。
自分のことより、ルイが喜びそうなことを挙げ連ねた。
もっと話したいこともあったし、彼を抱き締めたかった。
でも、それを抑えて・・・その代わりに語りかけた。

彼が眠っている間にしていたように。
彼が昏睡状態であった間。
ヒカルはずっと語りかけていた。
あまり口数が多い方ではなかったが、それでも拙い記憶を思い起こして、一生懸命彼に話しかけた。
・・・・彼らの思い出を話して聞かせた。

初めて会った時のこと。
彼が素晴らしい才覚を次々と披露していったこと。
論文の賞について。
乗馬やフェンシングやチェスでは、彼の右に出る者は居ないこと。
日本まで、はるばるルイがヒカルを迎えに来てくれたこと。
薔薇園の薔薇のこと。
過去と今を順番通りには話せなかったのかもしれないが、それでも彼女はぽつりぽつりと話して聞かせた。
彼の過去は未来に繋がらない。
でも、未来は今を積み重ねていけば自分の願った未来に近づけることができる。
今は積み重ねていけば過去になる。彼の思い出になる。決して・・・その時に戻りたいという思い出ではなく・・・未来に生きたいと思うようなそんな記憶の積重がある。

「ね、ルイ」
彼が黙ったままだったので、ヒカルは彼に声をかけた。
返答がない。
それでも、聞こえてはいる。
彼はゆっくりとした瞬きではあったけれど、視線を彼女に向けて・・・ヒカルの茶色の瞳をじっとのぞき込んでいるのだから。
ヒカルは言葉を切った。
慌てて早口に喋ったので、ルイが混乱しているか、苦笑して辛辣な嘲笑を浴びせるのか、どちら

かなのだろうと思った。
後者であるならば、良い兆候だ。

彼が唇を開いた。
「ルイ・・・？」
「間違えているよ」
「え？」
「名前を間違えるなんて、酷いな、ヒカル。・・・君はオレの守護天使なのに」
彼はそう言うと、横を向いてしまった。
名前を間違える・・・・ルイの名前を間違えただろうか。
発音がおかしいのだろうか。いや、そんなことはない。
ルイがすっと手を挙げて、ヒカルの手を振り払った。
ヒカルは慌てて、彼の手を握りなおしたが、茶色の瞳が見開かれていた。
「ルイ」
彼はそれでも返事をしなかった。でも、ヒカルの手を今度は振り払おうとしなかった。
彼がもう一度・・ヒカルが手を重ねることを期待していたのだと思ったので、ヒカルはそのままもう一方の手を添えて、両手でルイの手を覆った。
しかし、先ほどは寒いと思ったのに・・・額に汗をかいていた。
シャルルがどうして・・・どこにも立ち寄らずにすぐにここに来いと言ったのか、理由がわかった。
一瞬でわかった。
彼のこの雰囲気。彼のこの視線。彼の・・・間違えているという言葉。
ヒカルは震える唇から切れ切れに声を出した。
先ほどの流れるような、溢れ出てくるような歓喜の話題ではなかった。

・・・・心臓の鼓動が速まっていく。
この感覚を何度味わえば良いのだろう。
もう、忘れていた。
もう、経験することもないと思っていたから。

あの事故の時以来の感覚に、指が震える。

この一言を言ったら。
これで彼が振り返ったら。
それはありませんようにと願いを込める。
ただ一度きりのヒカルの戯れ言だと、彼は笑って窘めてくれないのか。

・・・ルイ。

彼女は心の中で、彼の名前を呼んだ。

そしてゆっくりと・・・・声を出した。

「・・・・シャルル」
彼が振り向いた。
「はい、よくできました」
彼は悪戯っぽく微笑んだ。

綺麗な微笑みで。彼女に笑いかけた。

生きながら。
生きながら死にたいと思わせたい。
生きているのに死んでいると思わせたい。
それが願いだよ・・・・

ルイの言葉が響いた。
彼はこの願いを2度、叶えた。
一度目は彼の肉体が損傷したとき。
そして、二度目は今・・・。

確かに。
確かに・・・シャルルは生きながら死んでいる。
ルイという体に宿ったシャルルは彼の思い通りに・・・思い通りになった。

ヒカルがぽつり、と涙を流した。
彼女が待ち望んだ、ルイの言葉があまりにも重くてあまりも・・・切なかったから。
誰もこんな結末、待っていない。
生きていてくれさえすれば良いと思った。
でも心が・・・心がまだ彷徨っている。

彼は。まだ・・・
戻って来ていない。
戻って来てくれない。

ルイ。
・・・ルイ。

「ああ、泣き顔より・・・笑顔が似合うよ、貴女は」
彼はすっかり細くなってしまった指を持ち上げて、ヒカルの頬に流れる涙を拭ってやった。
「ルイに怒られるだろ。しかも、ルイも貴女を泣かせてばかりだ。困った息子だね」
ヒカルはまた言葉に詰まって涙を落とした。

苦しい。
苦しいよ、ルイ。

そこでようやく・・・ようやく、わかった。
ルイが本当に切望していたもの。

シャルルを越えたいのではなく・・・彼は、シャルルになりたかったのだ。

夢から醒めたくないと強く願ったから。
彼は夢に入ろうとしたけれど。
遡る過去がないから・・・だから彼はシャルルになった。
シャルル・ドゥ・アルディになって、夢に入った。
ルイは決して夢を見ないのに。夢に焦がれないはずなのに。

ヒカルの両目から・・・大粒の涙が落ちた。
もうこれからは、嬉しい涙しか流すことはないだろうと思っていた。
どうして毀れそうなくらい不安だったのか、わかった。
ルイがこちらを見てくれなかった理由もわかった。

彼は・・・彼はシャルル・ドゥ・アルディになったからだ。

■228

ルイ・ドゥ・アルディの居室を離れて、ヒカルはしばし放心状態だった。

長い廊下を歩き・・・その間は、ひたすら下を向いていた。
彼の居室にマフラーを忘れていたことを思い出したが、取りに行く勇気がない。
この時期は日が長くなり・・・あの夏の日を彷彿とさせる。
まだその季節までにはずいぶんと日数が必要だったのに。
肩にかけた荷物以外は、すべてヒカルが仮住まいしているあの場所に運ぶように、と頼んでおいた。
いつもはそんなことは依頼しない。

自分でできることは自分でする。
自分で運べるものは自分で運ぶ。

でも今はその気力さえ失われていく。
あまりの衝撃に、声もなく涙をただ流すばかりだった。
泣きながら廊下を歩いた。
涙を拭いても拭いても零れて落ちる。
咽び泣きする。
自分の声が涙とともに咳き上げる。
そんな顔をルイに見せるわけにはいかなかった。

悲しい・・・苦しい・・・
シャルルがヒカルにそう言った言葉を思い出した。
ヒカルも今、悲しくて苦しくて胸が張り裂けそうだった。

笑顔が似合う。
オレの守護天使。

彼はそんなことを言わない。
いつも素っ気なく・・・涙を流せば免罪されると思っているのなら、この世は誰にも優しくないんだよ、と言って彼女に教え諭す。
誇り高くいつも冷たく・・・それでいて・・・いつもヒカルを見つめていたあの人はどこに行ってしまったのだろうか。

行くね、と短く言って部屋を退出した。

彼の顔を見つめることができなかった。
扉を閉めると堪えきれない涙が溢れて・・声を上げながら、彼女は廊下を歩き、ジルの居室とに作られた螺旋階段を一人で降りて、そして目の前が滲んで視界が歪むのを気にもせず、彼女はエ

ントランスに戻って来た。
ほんの少し前は、ここを慌ただしく小走りに走って過ぎて行った。

はやく。
はやく、ルイに会って彼のつんと澄ました顔を見て。
何をそんなに怒っているのよ、と彼をやり込めてやろうと胸を膨らませていたのに。
ようやく、彼が治療棟から出て、こうして家族と一緒に過ごすことができるようになったのに。
ヒカルは今、最高の笑顔を彼に向けることができない。

・・・今日、初めて訪れたルイの居室には、ヒカルの母の遺作が掲げられていた。

劣化防止の処理が丁寧に施されており、皺が伸ばされて、立派な額縁に入っていた。
タイトルは空欄だった。
あのタイトルを決めるために・・・ルイとルイの本当の父があれを並んで眺める日が到来すればよいのに、と思った矢先のあの出来事だった。

彼女はまだ明るい陽射しの中で、玄関間のソファに腰を下ろした。
白い革張りのソファに新調されており、近くに活けられている花瓶には、大輪の薔薇が活けられていた。
シャルルの品種改良している薔薇のうち、いち早く復元した種だった。
それは以前に、シャルルがどうしても復元することができず、ルイがその株を持ち帰って再現した、あの薔薇だった。
でも少し違う。
香りが強く、そして寒さに強い。
この亜種にシャルルは名前をつけた。
ファム・ファタルではなく。
彼はこれに和名を付けた。
「星辰」と。
あらゆる困難に打ち勝ち、孤独な寒さと闘いながらも、自らの誇りを咲かせる薔薇になれ、と彼が願いを込めてつけた薔薇がそこには在った。
それは開花時期が非常に長い。
ルイがあの部屋を出られるようになったら・・・その時は庭に植えられた苗が芽吹いて・・花咲き、そこかしこに咲き乱れて、各部屋に活けられたその薔薇にきっと気がつく。
次の夏が来る時までには。
温室だけで愛でる薔薇ではない。
野生でも充分に育つことのできる強い品種にシャルルは改良した。

その薔薇を見てまた泣いた。
どうしてこう・・・うまくいかないのだろう。
何もかもが思い通りになるとは思っては居ない。でも。
でも、ようやく、彼らが心を通わせることができる準備が整ったのに。

ルイが眠っているときだけシャルルはルイに触れる。
ミシェルは彼の健康管理と投薬治療や皮膚移植のスケジュールを調整する。
ジルはヒカルに、彼の為にどんな香りが安らぐか教える。

それなのに。
それなのに。

「湿った顔は貴女によく似合うよ、ヒカル」
そこで良く響き渡るバリトンで、ヒカルに声をかける人物が居た。

「・・・ミシェル」
ヒカルが顔を上げると、彼は近づいてきた。
彼女の愛する人達とおなじ顔をした人は、軽く手を挙げた。
煙草を口に銜えている。
喫煙するためにここにやって来たのだと思った。
この館は禁煙になった。
だから限られた場所でしか喫煙することを許可されていない。
今まではそれを無視していたが、ミシェルはとうとうこの規則に従わざるを得なくなってしまった。
彼の復権の条件に、シャルルが「指定場所以外で喫煙しないこと」と項目を入れたからだ。
まったく、馬鹿馬鹿しい条件だよ、とミシェルが苦笑しながらそれにサインをしたことはヒカルの耳にも入っている。

ミシェルは少し穏やかな顔つきになった。
そう思った。
この場所でミシェルはいつも歎いていたと思う。
彼をミシェルと呼ばない人といつも居た。
彼の母親はミシェルと呼ばなかった。
ジルも彼をミシェルと呼ばなかった。
シャルルは最もミシェルが彼らから愛されていると思っているが、ミシェルはそうは思っていない。
彼はいつも傷ついていた。

ジルを傷つけて、なお愛が欲しいと囁いた。
―――生き抜くと彼は言った。
流転の半生を歩んだ彼は、生き抜くことこそ彼の誇りだという強い信念がある。
その声が届かないことをわかっていたのに、彼はいつも・・・いつもここに還ってくる。
彼が望んだ家族がここに居るから。
彼の声を聞くことが出来る人がここに居るから。

だから彼の声は届いた。
彼が諦めないでずっと・・・ずっと囁き続けたから。
・・・そして、彼の望んだ命がここに宿ったから。
愛を捧げる新しい命がここに息づいているから。

ミシェルは彼女に断らずに目の前のソファに座って、手元のクリスタルの灰皿を引き寄せた。
青味がかっているその灰皿は、特殊加工で、それもルイが特許取得のために尽力した品だった。
ヒカルは涙をまた流した。何を見ても・・・ルイを思い出す。
そして、ルイと声をかけながら、ルイが何を考えていたのかを思うとまた涙が零れる。
彼女自らの愚かさと無神経さと・・・彼を思い遣っているつもりで決して彼を癒していなかったのだと思い知ってまた涙が出るほど悔しくなる。
薔薇の花瓶の前でぽたぽたと涙を床に落とした。
鼻が詰まって、高貴な香りを感じることができない。

「ミシェル・・・。ルイが・・・・ルイが」
声が詰まって、ヒカルの目の前が涙で歪んだ。
祝いの言葉を述べる余裕がなかった。

「座ったら？」
彼は静かにそう言って、彼の座ったソファの正面に・・・目の前の空いたソファを指さした。彼は誰かを正面に座らせることはなかったのに。
ヒカルは涙を拭いながら、言われるがままに座った。
「そうしていると、貴女は本当に若いね、ヒカル。あのシャルルを籠絡した人物とは思えないよ」
彼は軽口を叩いた。

■229

「覚醒当初から、シャルルは気がついていたよ」
ミシェルは言った。

ゆっくりと紫煙を燻らせて・・・彼は煙草の煙を愉しんでいた。
でも、もうそれもなくなるのだろう。
彼はいつもで喫煙を止めることができる人なのだと思った。
しかしヒカルと話をするために・・彼は口実を設けてここにやって来たのだと知る。
ミシェルが物憂げに青灰色の瞳を細めて・・・眩しそうに煙たそうに紫煙を見つめたからだ。
ヒカルの知っている以前のミシェルは、そんな顔つきで彼は煙草を吸わなかった。

「それでも・・・ヒカルが自ら気がつくまでは黙っておけと箝口令が敷かれて。
その後、今回貴女が帰国するに際して、ルイがこの館に移床されたのをきっかけに、彼が言葉を発するようになったから、もう黙っておけないと判断したのだろう」
それでヒカル以外の者には会話をすることができたのか。
彼らはルイをシャルルと言って扱ったから。
でも彼はルイ・ドゥ・アルディだ。
誇り高い・・アルディ家の薔薇だ。
同じ薔薇であっても、彼はシャルルではない。

「貴女を手放すことができない我が当主について・・・ヒカルがどう思うのかは別に考察することにしよう。
しかし。
貴女が一族にもたらした昏迷と困惑は甚大なる影響を及ぼした。
・・・これについてはどう思っているの？」
「ルイを呼び戻したい」
彼女は短くそう言った。
家族だから。愛しているから。・・・失いたくないから。
彼女は言葉を羅列したが、その言葉のどれもが当てはまるようであり、当てはまらない気がした。
「私は・・・生まれてきた意味がまだわかっていない。生きるという意味がわからない。でも、これだけはわかる。シャルルもルイも・・・ジルもミシェルもみんな生きている。各々に生きる意味を問うている。私は・・・そこに在り続けることで、何か・・何かを知りたいと思う」
「贖罪だね」
彼はそう言った。
静かに・・・煙を天井に向かって吐き出した。
そして長い脚を組んで、闃然として言った。
「貴女は罪を犯していないけれど・・・罪を贖うべき対象である。シャルルの罪。ルイの罪。そして貴女自身の罪。・・・オレの罪。貴女は、様々に・・皆の愁思を受け入れ受け止め・・そして常に考えていかなければならない。
あの人が残した、アルディ家に投げかけた「生きる」という意味を、貴女は伝え続ける種なのだ

ということに、ようやく気がついてくれた？」
「私は生きている。だから、私の愚かさが招いたことについても向き合わなければならない」
ヒカルは言った。
「誰かを傷つけたら・・・誰かを癒すことはできないと思った。
だから誰にも嫌われないように生きた。
でもそれは違うとあなた達は言う。
棘を持ったら棘自身に自らが刺されることも承知しなさいと教えられた。
人を傷つけたら二度と回復できないのではない。
回復できる。誰かを癒すこともできる。自分を癒すこともできる。
でも、それを感じながら・・・誰かを傷つけることがあってもそれは傷つけられることを免罪されることでも贖罪することでもないということだから・・・

だから・・・だから、誰かによって傷つけられても人は愛することを止めない。
誰かを傷つける事を畏れなさいと言われたのではないと・・・ようやく気がついた。
傷つくことを畏れてはいけないのだということなのだと思った。
愛することに臆病になってはいけないのだと思った。

自分以外の誰かを愛して・・自分以外の誰かから愛されていると知って・・・ようやく知った。
傷つくことを畏れてはいけないのだという言葉に気がつくのに遅くなってしまった・・・・」
ミシェルは少し声を漏らして笑った。
ルイ・ドゥ・アルディに良く似た憫笑だった。

「そう。貴女はやはり・・・あの人の娘だね。
貴女は・・・我が一族が喉から手が出るほど欲しい遺伝子であり・・貴女の精神力の強さは、何にも代え難い宝玉であり・・・そして未来へ続く道しるべとなる晄の子だね」
時は満ちた、とミシェルは言った。
加えて我が一族が望む万能細胞になる幹細胞さえ備えている・・とミシェルは言った。
ヒカルは黙っていた。
彼らがなぜ、マリナ・イケダの血筋を欲しがるのか、よく理解していたから。
彼女の叔母や伯母では代用できなかったのだ。だからヒカルがパリに呼び寄せられた。
でもそれは恨んでいない。
必然だから。
生きたいと思う人々が、その可能性を手に入れたいと思うことは罪ではない。
なぜなら・・人は生きているから。
死んだら治癒できない。

「貴女の母と、シャルルがなぜ、結ばれなかったのか。

・・・あの男との愛に生きるあの人の愛が勝ったわけだが・・・
でもね。
ヒカル。

シャルルの愛が劣っていたわけではない。
あの人が選ばなかっただけだ。

愛は優劣を決めない。
愛に優劣はない。

シャルルの愛は永遠だ。
彼が一人を定めたら・・・それは永遠だ。
忘れられないから。
記憶は薄れることはないから。
彼の強烈な愛は和らぐことも薄れることもない。

その人のみに捧げられる永遠の薔薇を受け取り続けなければならないという責務にも似た、愛の雁帛を彼に与え続けなければならない。
それができる者が現れなかった。
そういうことだ。

そして長い年月を経て・・・貴女がシャルルに問いかける。
愛は・・愛はひとつではないと。
愛は回帰しないと。
あの人の愛を別の者に捧げるのではなく内包しながら生きていくことを選べ、と。
はじめて・・・ヒカルがシャルルに問いかけた」

■230

おかしいね、オレが愛という言葉を使っている、とミシェルは苦笑した。
とっくにそれは捨て去ったと思ったのに、と言った。
捨て去ったのに、忘れられない。
これはアルディ家の特徴なのだろうか。
彼の言葉を聞いていたヒカルは呟いた。

「それが私の贖罪であり・・責任であり・・答えになる」
ヒカルはそう言った。

ルイをあのままの状態に放置することはできない。
償うとは思っていない。
償いきれるとは思っていない。
でも、ルイはルイ・ドゥ・アルディであり・・・シャルルで居続けることが彼の倖せに繋がるとは思えない。

「ルイが突然、今日、劇的に快癒するということではないから、ヒカルが泣いても解決しない」
ミシェルは冷たくそう言ったが、泣くのをやめて帰りなさいと言っているように聞こえた。

「ヒカル。・・・マシンを見てくれ」
ミシェルが突然そんなことを言い出したので、ヒカルはえ？と声を出して身構えた。
彼は煙草の火を消すところだった。
近寄ってきた使用人に、濃いめのティーを、と伝えると艶やかに微笑んだ。
「ティーが到着するまでの暇つぶし。ここにも無線が届いているから。ちょっと、開いてみてくれるかな」
それは御願いではなく命令だった。
彼は彼女がいつも持ち歩いているものを知っているようだった。

ヒカルは鞄を下ろし・・・自分のラップトップを取り出した。
膝の上に乗せる。
あの夏から持ち歩いている薄型のもので、今ではシャルルとの連絡用にも使っている。
ルイの蔵書を読み終える度に、細かくデータを分類してそこに記録しているから、気がつけばいつも持ち歩くようになってしまった。
いつか、ルイがまた読みたいと言ったらすぐに持って来ることができるようにするためだった。
彼が繰り返し何かを読むとは思えなかったが、それでも彼と共通の話題を持つこともあっても良いのかも知れない、とヒカルは考えていた。
また、彼の軌跡を辿るのはとても興味深かった。
あらゆる分野の蔵書を彼は読み漁っていた。
もっと小型のものを携帯するようにしたらどうかとシャルルに言われるが、彼女は必要がないから、と言ってそのままそれを持ち歩いた。
あの人がスケッチブックを持って、様々なところに出歩いたように。
彼女は端末と情報を片手に持って、様々に出歩いていく。

「タイムマークを未来の時間に設定して」
しばらくしてOSが起動すると、ミシェルは優雅にそう言った。
彼女は言われたとおり、日付を未来日に変更する。
適当で良いのかと言ったら「あの事故の一年後の日付」を指定された。

「まあ、そのくらいの日にち設定だろう」
次に、ヒカルがかつてダウンロードしたデータフォルダを開けと言われた。
ハードにまだ保存してあるとは、情報保守が散漫だよとミシェルに注意された。
アルディ家のファイルサーバのひとつを使用するようにと言われたが、彼女には使用権限がないと言うと、ミシェルは
「貴女はいずれアルディ姓を名乗るのだろうから・・・早く申請しておけ」とちくりと釘を刺された。
彼女がシャルルとの関係について、立場をはっきりさせないことに対する苦言だった。
「内縁関係でも別に良いけれどもね。・・・結婚という制度に荷担するつもりもないし」
彼は素っ気なく言ったが、きっと、祖父の具合がいよいよもって悪くなったことが影響しているのかもしれないとちらりと思った。
こちらに帰ってくるときに、ヒカルは実家からこれからどうするのか、とかなり言われていた。
だから、アルディ家にも、日本から何か圧力がかかっているのだろうと思った。

クロスグループの会長が交代してから、彼らの関係は微妙に変化している。
ヒカルの処遇をはっきりさせないことも一因であった。
彼女の体組織をいち早く取得して、今般、新薬の発表を行った事に対する抗議の意味もあったらしい。
もう、彼女やシャルルの一存や意思では済まされないから、責任を持って対処するように、というミシェルからの忠告だった。
彼らは大人になって自由にできることも増えたが、自由にならないことも増えた。
ヒカルもそうだ。
何でも自分で決められると言うことは、全部は自分で決められないということと背中合わせなのだと知る。

ヒカルはミシェルに声をかけた。
言われたとおりのフォルダを開いていく。
膨大な数のファイルが整然と並んでいた。これはヒカルのカルテだ。
今の臨床実験にも必要なデータが保存されている。
それを先般、彼女はあの研究所に開示した。
もともと、あの研究所でジルによって作成されたものだったからだ。

「・・・開いたわ」
「そこに・・・ファイルがひとつ、増えていないか」
「え？」

ミシェルはすべてを知っているようだった。
白金の髪をかき上げて、物憂げな瞳をヒカルに向ける。
ディスプレイの照光を受けて、ヒカルの頬が白く光っていた。
・・・・本当だ。ひとつ。ファイルが増えている。
タイムスタンプが先付けになっていて、その時刻が到来すると、ファイルが出現する仕組みになっていた。
こんなことをするのはたったひとりしかいない。
最終保存者はルイ・ドゥ・アルディの署名であった。
電子署名までついているから、これは公式にルイが作成したものとして認められるものであった。
彼女は震える指で、そのファイルを開こうとしたが、パスワードを求められたので、動きを止めた。

「パスが必要だわ」
彼女が困って言った。

このタイプのパスワードは一度きりしか入れることが出来ない。
ヒカルはルイにパスワードなどは聞いていない。
こんな仕組みは聞いていない。
そして、今尋ねることは出来ないし、彼がパスワードをどこかに保存していることはあり得なかった。
秘密は形に残してはいけない。
彼はいつもそう言っていた。
だから重大な秘密を絵にしたヒカルの母のことを相当に冷笑したあの時の・・・彼の高慢であるが誇り高い姿を思い出して・・・そしてまた息苦しくなった。

「パスワードはわかっているだろう？」
ミシェルがそう言ったので、ヒカルは顔を上げた。
彼はもう一本、煙草に火を付けた。
そして青灰色の瞳でじっと・・・ヒカルの顔を見つめる。彼の整った顔があった。
相変わらず眼光は鋭かったが、もう何かに挑むような視線ではなかった。

「・・・・彼の最も一番大切にしている者の名前。ヒカル、貴女の名前だ。試してみろ」

彼ももうちょっと気の利いたパスワードにすれば良いのにね、とミシェルは呟いた。
ミシェルはそのファイルの中身が何であるか知っているようだった。
容量も表示されていない。

拡張子も表示されていない。
そんなファイルを、ルイがそこに潜めた理由もわからなかった。
しかし・・・ヒカルははい、と頷いてミシェルの言葉に従うことにした。
震える指で「HIKARU」と入れる。
ロードを命令すると、パスが入ってファイルが開かれていく。
・・・相当数のファイルがフォルダに現れ始めた。

「ミシェル！・・・これは」
「ルイから貴女への贈り物だよ」
彼は脚を組み直した。

そこに給仕されたティーカップが運ばれてきたので、彼は香りを楽しみながらカップを持ち上げ、薄い唇に運んだ。
「それを転送しておくように。もちろん、アルディ家のファイルサーバに入れておけ。・・・それはあの無幻症の研究論文と実験データ、仮説に反証、それにヒカルの骨髄液から加工した遺伝治療のための化学式に配合比率に・・・彼のすべてがそこに入っている」
ミシェルにティーを勧められたが、彼女の膝上に乗る・・・重大な誰もが何年かかっても解明できない問題について述べられたファイルを見つめて・・・ヒカルは言葉を失った。
シャルルが先頃ようやく着手を始めた。
彼ひとりでは手に余るので、チームを組んだと言う。
彼はやり遂げるだろう。
そのチームのメンバーには、ミシェルの名前も連なっていた。
それでも時間をかけて経過を見なければならないものもある。
今から着手するのではなく、何年も・・・症例報告として記録を取りながら仮説をこつこつと打ち立てて・・ひとりで何年も研究していた結果が、そこにはあった。
彼らしく細かく分類されていた。
そして、彼はモザンビークでのウイルス感染の可能性についても仮説を立てていた。

「いつか、発表するつもりだった。ヒカルが体細胞を提供して、実証できたときに」

ミシェルがそう言ったので、ヒカルは俯いた。
彼女の細胞をくれないか、とルイが言ったのに。
ヒカルはイヤだと言って断った。
それなのに・・・彼は穿刺が辛いのか、とヒカルの体のことを心配した。

また涙が出そうになる。

■231

「さて、オレは行くよ」
ミシェルはほんのふたくちほど、口をつけただけでティーカップを置いて、席を立ってしまった。

「香りはよいが、濃いめのティーは好きではなくてね」
わざわざそれを指定したのに、ミシェルはそう言って立ち上がった。

彼がヒカルに何を目的に話しかけてきたのか、理由がわかった。
彼は理由がなければヒカルに話しかけない。
ジルを刺激するようなことはしない。
ミシェルはもう・・・・あの人を愛するシャルルを演じなくても良いとわかっているのに、それでもジルの前ではあらゆる可能性に対策を講じる。
彼は彼女が居る時には、ヒカルと一緒に並んで歩くことはしない。

「ハーブティーにすることにしよう」
きっと、ジルに煎れてもらうのだろうと思った。

「彼女のところには後日。・・・今日は帰れ」
明日からのルイの加療予定表を送っておいたから、と彼は言った。

ミシェルが立ち上がったのを合図にして、ヒカルはファイルフォルダを一度閉じた。
メールの着信ランプが光っていて、すでにミシェルから言ったとおりのファイルが転送されているのを知った。
ミシェルがどうしてこのメールアドレスを知っているのか・・・

「オレを誰だと思っているの？」

通信業界に君臨する帝王は、怪訝な顔をするヒカルに向かって、おかしそうに言った。

「それなら、このファイルについても、とっくに開示できたのではないの？」

ヒカルが疑問をぶつける。
彼は薄く笑った。

「理由はひとつでなければならないというわけではないよ、ヒカル。
これも同じ。パスワードは２つ必要なんだ。
ひとつはそのラップトップをヒカルが自分のユーザー権限で開くこと。
もうひとつは、あのパスワード。
２つ揃わないと受け付けない」
彼は種明かしをした。

そして、マジシャンは種明かしをしたがるものだ、といつかと同じ事を言った後に、繰り返しは愚問だよと言ってヒカルに背中を向けた。

一年後・・・一年後の未来をルイは築いていた。
パリにヒカルが戻って来て。
いろいろな手続きをするにはそれくらい時間がかかる。戻ってこなくても学業を修めるか留学を考えるような時期。
彼の言ったとおり、ランスの教会で式を挙げるのであれば、どれくらい短い時間でもその程度は必要だった。
アルディ家のしきたりでは、確か、一定期間は花嫁の家で暮らさなければならない。
日本で暮らしても。
アルディ家に戻っても。

———そしてその時が訪れたら。それを想定していた。
ファイルにはスケジュールも入っていた。
式の招待者リストから、日取り、その後のヒカルの手続きの細部に至るまで・・・何もかもがそこに記載されていた。
ファイル更新数を見ると、相当更新してあった。
彼は繰り返さないのに。
何度もこのスケジュールを調整して・・・彼は未来を夢想した。

彼は秘密を遺してはいけないと言ったのに。
彼の秘密をヒカルに贈った。

まだ未完のこのファイルを開示して・・・彼は新しい家族を作ろうとした。
彼は新しい種として生まれたのに。
それなのに・・・彼は彼の周りにいる人達を救おうとしていた。
やがて彼とヒカルの間に子どもができたらどれくらいの割合で因子を引き継ぐ可能性があるかということまで想定していた。

ヒカルはひとり、残されてラップトップを静かに閉じた。
一度だけ溜息をついた。
ティーカップからは煎れたての湯気が立ち上っていた。
そして立ち上がる。
シャルルとここで落ち合うことになっていたが、疲れたので先に戻るとメッセージを煎れて置いた。
彼と一緒の車に乗るつもりで居たので、帰りの車を用意してもらっている間。
彼女茶色の瞳で、じっと・・・遠くを見ていた。
その様子は、ルイ・ドゥ・アルディに良く似ていた。
遠くを見ているのは、彼が未来を考えていたからだったのだと知った。

ルイ。
私は・・・私はルイと向き合わないといけないね。
そう、思った。

■232

ヒカルの話を聞き終わったとき。
シャルル・ドゥ・アルディは無言だった。
そして次にヒカルの頭を軽く撫で、そのまま指を滑らせて頬を撫でた。
もう、あの時にできた擦過傷は綺麗に治っていた。
ヒカルが滞在先のセーフハウスに戻って来て、しばらくするとシャルルがやって来た。
コーヒーを頼む、と彼は言った。彼はあまりコーヒーを好まないのに。
必要最小限しか持たないルイの什器をそのまま使用しているが、ほとんどが二客ずつ揃えてあった。そのうちの一組しか使っていないかったことを、先頃キッチンで発見して、ヒカルはそれをすべて取り出し、二組にして並べて保管するようにした。

「ファイルの転送を受けて、明日からは方針を変えていくことになりそうだよ」

ソファに腰掛けているシャルルの膝の上に、彼女は頭を乗せた。
泣き腫らした顔を見せるのが辛い。
彼女は彼の足元の床に敷かれた白い絨毯の上に直接座り、彼の膝に額をあてて俯いていた。
笑顔でただいま、帰ってきたよと言いたかったが、そう言えなかった。
「シャルルはわかっていたのね・・・でも私が気がつくまで黙っていた」
だからシャルルはルイと直接顔を合わせないようにしていたのかと思うと・・彼女はまた、知らないということがどれだけ誰かを傷つけているのかということに深く歎き、胸を痛める。

「ルイは病気ではない。だから彼が戻りたいと思えば帰ってこられる。・・・あとはきっかけだな」
シャルルが静かに囁いた。彼女の髪を愛おしそうに指で梳いた。
体が癒されても心が戻ってこない。
彼が帰ってくるための最も良い条件について、シャルルもヒカルもどうすればよいのか、わかっていた。
「シャルル。私・・・私ね」
彼女の唇が戦慄いた。
シャルルはゆっくりと・・指を動かし、その唇に細く長い指先をあてた。
それ以上言ってはいけないという合図だった。

「・・・・ルイにはヒカルは渡さないよ」
彼がはっきりとそう言った。
「貴女がルイに心惹かれて・・・彼のあの状況を見たら、きっと考えることはひとつだと思った。でも、やらない。・・・言っただろう？オレは貪欲だから。貴女の全部が欲しい。その悲しみも欲しい」
彼の顔を見ることが出来ない。
愛の言葉を囁かれているのに、彼女には涙で答えるしかできない。
「間もなくアルディ邸の修改築が完全に終わる。温室も新築される。
・・・ヒカルを迎えるために」
彼はヒカルの腕を掴んで、彼女をソファに座らせた。
同じ高さに彼の青灰色の視線があり・・・ヒカルの顔を軽く両手で押さえて、彼は彼女の額に自らの額を押し当てた。
「ヒカル。・・・ヒカル」
彼は彼女の名前を呼んだ。
しばらく逢っていなかったから、彼は彼女にキスの嵐を落としたいと思っているのに。
目の前の人は、憂いに涙で頬を濡らしている。
今は泣いていないが、相当泣いたらしい。泣き腫らした瞳は赤かった。
これほどに夢中になり我を忘れて焦がれ抑えきれない想いを、ルイも持ち合わせており・・・そしてそれが手に取るようにわかる。

・・・同じ人を愛する男として、ルイの愛の重さを感じる。
でも。
彼女を渡すつもりはなかった。

諦められるくらいなら、最初から愛をすることはしない。
彼女は彼のもう一人のファム・ファタルなのだから。

永遠に一緒に居ようと誓った彼女を、もう、理由をつけて手放すつもりはなかった。
彼の心は決まっていた。

「ルイと向き合えるのは、君だけだ。君の声だけが届く」
シャルルは彼女に軽く啄むようにキスを一度だけすると、そう囁いた。
コーヒーの香りがした。
シャルルのキスを受け止めて、はい、とヒカルが茶色の瞳を瞬かせた。
彼女の若い頬に涙が落ちる。
「貴女は本当に涙をよく流す。・・・昔はそうではなかったのに」
でもね、と彼が付け加えた。
「涙を止めて見せると言っただろう」
彼はそう言うと、彼女にもう一度唇を寄せた。
今度は、深い長い接吻だった。彼は静かに彼女の腰を抱き、彼の胸に寄せて行く。
シャルルの唇が彼女の涙の味のする唇を割って、ヒカルに近づいていくと、目を瞑って懸命にシャルルに応えようとするヒカルが声を漏らした。彼が教えた愛の仕種だった。
「シャルル・・・」
困ってヒカルが眉を寄せて顔を横に背けたが、シャルルは彼女の顎を軽く掴み、もう一度深く激しく彼女の唇を吸って、そのままソファに彼女を倒した。
その上にシャルルが覆い被さったので、革張りのソファが軋んで、音を立てた。
「・・・今日は泊まっていって良い？」
シャルルが彼女の耳元で囁く。
自分でない男の為に涙を流すヒカルを見て、彼は情動を抑えきれないと言うように、彼女の首筋から鎖骨にかけて、唇を這わせ、いくつもの赤い花弁を落として行く。

たとえルイであっても。
渡さない。
彼女が行くと言っても行かせない。

彼女は身動ぎして抗ったが、ヒカル、と何度も彼女の名前を呼びながら強く抱き締めるシャルルの体軀がヒカルを覆っているので、逃げ出すことができない。
「ダメ」
ヒカルが顔を赤くして拒んだ。
「もう・・待てない」
シャルルが続けて魅惑的な声で囁き、彼女の耳朶を軽く噛んだ。
「私はどこにも行かないよ」
ヒカルはシャルルに向かってそう言った。
彼の狂気にも似た愛の表現が、とても苦しかった。

「シャルル」
「ダメだ。貴女がルイに気持ちが傾くのなら・・こちらを向かせるまでだ」
彼はそう言ってヒカルの体をきつく抱いた。ヒカルが困ったようにシャルルの名前を何度も呼ぶ。
「シャルル、私はシャルルを愛している」
「それなら、証拠を見せて」
「シャルルを愛している。誰よりも。シャルルじゃないとイヤだ。でも今はイヤだ」
ヒカルが小さく悲鳴をあげた。
その瞬間、ふわりと体が軽くなった。
シャルルが彼女の上から体重を預けるのをやめて、体を起こしたからだ。

青灰色の瞳はすでに静かさを取り戻していた。
そっと・・・細く長い指先を伸ばして、壊れ物でも扱うかのようにヒカルの頬を撫でた。
ヒカルの髪の毛を整えてやると、彼は次に、乱れた自分のスーツの上着を正した。
タイも少し緩んだので、それも締め直した。

「・・・シャルル？」
「ほら、涙が止まった」
ヒカルは真っ赤になって、身を起こした。
彼が決して言っていることを実行しようとしたのではなく、ヒカルが涙に暮れるばかりで建設的に物事を考えていないことを律したのだと気がつくと、彼女はきゅっと唇を横に結んで、ごめんなさいとシャルルに謝罪した。
「厭がる人に無理強いはしない。でもね、ヒカル」
そこでシャルルは不敵に笑った。
「オレは貪欲で・・・すべてが欲しいと言っただろう」
彼は挑戦的に言うと、彼女の顔をのぞき込んだ。
彼がいつかこの先を実行するという宣言だと思った。

「次はないよ」
シャルルはそう言うと酷く好戦的な瞳でヒカルを見つめた。

でも今はそうしない。
・・・ヒカルを泣かせることはしても、悲しませたくないから。
彼は囁いた。

一緒に生きていこうと言った。
生きてみたいと思うほどに愛していると誓った。

だから、ヒカルは思うとおりに生きろ。
彼はそう言った。

ああ、違ったね、と彼は間違わないのに、そう言った。

「補足しよう。オレの傍で・・・思う通りに生きろ。ヒカル」
はい、とヒカルは頷いた。
彼の心がわかったから。

「今日は帰る」
シャルルは立ち上がった。
疲れているだろうから、休みなさいと言って、それから上着のポケットから、小さな袋を取り出してヒカルに渡した。

「鎮痛剤。・・・痛むだろう？」
ああ、この人は何でも・・・自分の事のように見守っている。
ヒカルはありがとう、と言った。
「そうだね、その言葉が相応しいよ。そして貴女には笑顔が似合う。泣き顔よりも」
シャルルは微笑んだ。ヒカルも笑みを浮かべた。

ヒカルが何をしなければならないのか、シャルルも一緒になって考えようと言ってくれたから。
ヒカルは、シャルルを見送りながら思った。
彼の懐の大きさを今頃になって再認識する。
ヒカルの最大の理解者でもあり・・・今は最愛の人だ。

ヒカルは少し伸びをした。
腰が痛んだので、シャルルが処方した鎮痛剤を飲んで今日は眠ってしまおうと考えていた。明日からはルイのところに通うことになるのだから、体調を管理しておかなければならない。ジルにも会いたい。

ヒカルは。

今・・・今考えていることを、その通りにやってみようと思った。

■233

夏が終わって、海に秋がやって来た。

この地域は秋が短い。
海は秋の短い滞在についてのみ許可する。
もう間もなく冷たい風が海面を走る。
日が落ちれば寒風に変化するだろう。
その直前の・・・ほんの少しの間だけ赦された、暑くも寒くもない仙界の軽風を浴びて、ヒカルは彼に提案した。

「・・・・少し歩いてみようか」

彼の肩に、柔らかい素材で肌を刺激しないショールをかけてやった。
風が吹いて、彼の見事な金髪の髪が乱反射して晄を拡散した。
彼は頷いて、車椅子から立ち上がって、ゆっくりとヒカルの手を取って海辺に降りた。
最近備え付けられたスロープと手摺りを頼りに、彼は静かに海岸に降りて海浜に足を埋めた。
きゅっと、砂を踏む音がした。
平衡感覚を必要とするので、足場の悪い砂浜を歩くのは、適度な負荷になる。
彼のリハビリとトレーニングには丁度良い。
ただ、この間施術したばかりの鼓膜の再生手術と皮膚移植の部分に潮風が影響しなければ良いのだが、と思ったが、それは杞憂であったようだった。
彼は心地よさそうに、青灰色の瞳を細めて・・・風濤の音を愉しんでいた。
彼の髪は少し伸びて・・裾が首筋で躍っている。
また、切らないとね、とヒカルは微笑んだ。

ヒカルは沈みゆく夕焼けを眺めながら茶色の瞳を細めた。
間もなく陽が沈む。
見ると、反対側の陸の空はすでに紫色に染まり始めていた。
水平線に明るく照らされている茜色に見覚えがあった。
でも今の時期の方がほんの少し・・柔らかい紅色だ。
それ以外は、ここは以前と変わらない。
まだ、生物はここに集わない。
まだ、ここは静かに波を寄せて返しているだけだった。

緋色に燃える太陽の晄を受けて、ヒカルの髪は鶸茶色にも金茶にも見えた。
「・・・しばらくぶりだね。皆は元気だったのかい？」
「そうだね・・・」
ヒカルは薄く微笑んだ。
ゆっくり二人で海岸を歩く。こんなに静かに時間を過ごし、二人でならんで歩く事なんてないと思っていた。

かつては、蹌踉けるほど高い踵の靴を履いて彼の後ろ姿を追ったこと思い出した。
彼がヒカルに向かって「久しぶり」と言ったのは、毎年恒例であった日本への帰国を差しているのだと思った。
ヒカルが日本で両親の追悼で悲しみに浸っている間、いつも・・シャルルはいつも狂乱に身を投じ、彼はそれを黙って観察していた。

彼に会うのは久しぶりになる。
しばらく・・夏が終わるまではヒカルは彼を訪れなかった。
でもそれは、ヒカルが日本に行っていたからではない。
もう、帰る場所はここしかなかった。
あの国は慕わしく両親の思い出深い国であり、ヒカルの親族が住まう国ではあるが、ヒカルが帰る場所はもっと別の場所にある。

シャルルの投薬治療が完了した。
この間、彼は久方ぶりのオフを取った。
でもそれは体を休めるためのものでもなく、ヒカル・クロスという彼の年若い恋人と過ごすバカンスのためでもなかった。
彼が・・・この夏の時期にマリナを焦がれる無幻状態に陥るかどうかを、シャルル本人が投薬を中断して確認すると言い出したのだ。
ひとり別棟に籠もり、経過を誰にも知られずに録画記録すると言った。
しかし誇り高い彼はそれを必要部分だけ、彼の研究チームに開示し、リアルタイムでは公表しないと言った。
それでは客観性が失われてしまう。
投薬量の適量を計測するために、自らが、被験者になると言ったのだ。
そしてそれを見守るために・・・今年は、ヒカルが夏のマリナになった。
ヒカル自らが希望した。
それができるのは、自分だけしか居ないと思った。
もうこれ以上、彼に悲しい夏のマリナという幻影を作らせてはいけないとヒカルが言った。
それが彼への愛の証だと思ったから。
シャルルは反対した。
ヒカルをマリナと呼ぶくらいなら、いっそ他人をあの人の名前で呼び、迷夢を彷徨った方がましだ、とシャルルは言ったが、ヒカルは首を横に振り続けた。
シャルルにもう、あの夏のマリナを抱くことを赦さない、と言った。
それを言うことができるのはヒカルだけだったから、彼女は赦さないから、と繰り返し言った。
そして長い話し合いの末に、シャルルはヒカルとオフの期間を過ごすことにした。
同時に・・・・彼はこれからは・・・ヒカルと一緒に眠り、新たに建設された薔薇園で少しずつ咲き始めた薔薇を摘みに一緒に行こう、と約束し、それを違えることはなかった。

予想していた事態とは反して、彼はヒカルをあの人の名前で呼ばなかった。一度も。
投薬効果が切れている時でも彼はヒカルの名前を呼び続け、オレの天使、永遠の晄とヒカルに囁き続けた。
・・・・シャルルの愛の深さを感じた。
あの人の名前で呼んでも、ヒカルはそれでも良かったのに。
シャルルの強い精神力が蘇ったのだと思った。
時折、両親の話を聞くことにする。
愛していたんだよ、死ぬほど愛しているんだ、という悲しい言葉を聞くことも少なくなった。
でも彼は忘れられないから。
あの人のことを忘れたわけではない。
今も鮮明に記憶に残っているはずだった。
忘れられなくて苦しくて辛い記憶をヒカルと共有する。
彼はヒカルにだけ吐露する。
誇り高いシャルルが唯一、彼女だけに赦した彼の贖罪。
自分を騙したから。
そして、あの人だけを見続けた結果、誰かが傷ついてもそれを踏み越えてあの人への愛をし続けることを選んだことに対する彼の償いだと思った。
本当なら誰にも・・ヒカルにも見られたくないと思っていたはずだった。
いや、ヒカルにだけは見られたくないとずっと思っていたから、彼女をいつも彼の手の届かないところに置いていたというのに。
オフ期間は外出を一切せず、彼らは静かにアルディ邸の中だけで過ごした。
まるで、これまでの夏の時間を取り戻すかのように、互いだけを見つめて時間を過ごした。

彼は順調に回復していた。
もう間もなく失われた筋力も元通りになるだろう。
長距離や慣れない足場では車椅子での移動であるが、それも今はほとんど使用しなくても歩行できるようになっていった。
走ったり乗馬やフェンシングを愉しんだりすることは間もなく実現できる。
彼は苦痛を強いられる回復への手順を、淡々とこなしていた。

久しぶりにロアールの館にヒカルが顔を出した。
そして、彼に言った。
散歩をしよう、海へ行こう、と。
彼はいいよ、と言った。
もう普段の生活をするには支障なく過ごすことができる。

ヒカルはこれまで彼に献身的に尽くした。

医療行為については彼女はすることができないから、それ以外の精神的負担を共有した。
毎日欠かさず館に行き、薔薇を活けかえる。
朝が弱い彼のために遅い朝食を彼と一緒に摂り、散歩をする。
彼のためにポプリを作る。
時折、一緒に庭に出て花を愛でる。
白い入道雲を眺め、小さな生き物の蠢きを観察し、雨の匂いを感じ、月を眺め、陽の光の傾きを感じる。
それはかつて、シャルルがヒカルに教えた様々な季節の煌めきと同じだった。
小さなことも、色鮮やかに・・・彼女は感性豊かに彼に伝え続けた。
まだ彼のことをシャルルと呼ぶジルと会話をする。
彼女の腹部はだいぶ目立ってきた。
ミシェルと倖せに、と彼が言うと、ジルは少し恥ずかしそうに微笑む。

静かな時間が流れていった。
これが永遠に続けば良いのに、と思う程に静かな時間だった。
家族が館に集う。
前当主夫妻が創り上げた家族が、もう一度新しい家族を連れて集う。
彼が少しずつ、穏やかに笑うようになっていった。
ヒカルはそれを見届けて、今度は彼女の愛する人と向き合うために、しばらく姿を消していた。

「ヒカルに逢えないから。ジルが寂しそうにしていたよ。・・・後で寄って遣ってくれないか」
彼はそう言ったので、そうするね、とヒカルは笑った。
仄日が彼らを照らし出した。
金の髪がまた光った。

■234

「ね、シャルル」
ヒカルが話を切り出した。
「ようやく言った。・・・いつ話をするかと思っていたよ」
彼は笑った。彼女が何か話があって、ここに彼を連れてきたことを承知していたのだ。
ヒカルは敵わないわね、と言って笑った。
「オレを誰だと思っているんだ？」
彼は薄い唇を少し持ち上げて笑った。
ヒカルはその問いに答えなかった。

また伸びて長くなった髪を、彼女はかき上げた。

少し目の端が赤かったが、黄昏の晄が彼女の顔を赤く照らしていたので、うまく誤魔化すことができた。
「私ね・・・私、これから出発するの」
「どこに？日本から戻ってきたばかりなのに」

彼が青灰色の瞳を少し見開いた。
ヒカルは肩を少し持ち上げた。
何でもないというかのように。
でもそれは何度も頭の中で練習した仕種だった。
ヒカルは静かに言った。

「モザンビーク。今夜、発つ」
「なぜ？」

彼の面が厳しくなった。
あの国はまだ、ヒカルのような若い娘が行く場所ではない。
それは常々言っているだろう、と彼は言った。

「ヒカル、理由を言え」
彼は抑揚なくそう言った。
ヒカルはちょっと困ったように首を傾げた。
理由はひとつでないから、と言ったが、その言葉に彼の美しい眉がぴくりと動いた。

「･･･お父さんやシャルルが行った場所だから。
そして、そこには重大な秘密がまだあるから。
・・・私なら大丈夫。
体力だってあるし、モザンビークには行ってみたいと思っていた。
だから、研究所の調査隊の募集に応募したの。
まぁ・・少しばかり反則技を使ったけれど」
彼女は悪戯っ子のように笑った。
そしてそのまま彼女の考えを伝える。

「鉱床の水か苔か空気か・・・何が無幻症の原因になるのか調べてみたい。
解明したいの。
根本的な治療をして欲しいと思っているから。
シャルルに治してちょうだいとは言わない。
だって、シャルルはその場所に足を踏み入れることができないから。

だから私が行ってくる。
やがて生まれてくるたくさんの・・アルディ家のこどもたちや、アルディ家の人達が負うべき罪ではないから。
・・・これからもアルディ家が、モザンビークの援助活動を行うのであれば、これは避けられない。
・・・・私の家族を襲う重篤な問題について、私は知らないと言えないし、眼を反らすこともできない。

・・・もう誰も、過去に遡って欲しくないから。

私にできることは数少ない。
だからできることをする。
だから行く。
モザンビークに行って、シャルルやジルがどうして感染したのか、原因を見つけたいと思う。

・・・・大学にはきちんと通う。
いつか、あの研究所で働きたいから。
私が生まれた場所だし。ルイが生まれた場所だし」

ヒカルは立ち止まった彼に、一歩近づいた。
彼に近づくことを赦されていたのは、彼女だけだったのに、ヒカルはいつも・・・彼と距離を置くことしかできなかった。ごめんね。彼女はそう言った。

あの国への協力活動について、アルディ家当主が尽力していることは世界に名高い。
シャルルは基金を募って新たに財団を設立した。
それが世に認められて、希少鉱物の発掘と開発について見直し着手する発表があった。
彼の居室には最新の情報を取得する端末がないので、彼が知らないだけであるが。
未知のウイルスが及ぼす欧州人種への影響について、彼は研究所の名義で、国を超えて各国の研究機関に協力要請を行う準備を整えている。
アルディ家特有の病ではなく・・・血族結婚が多かったり抗体や因子が欠損している者には深刻な問題である。
あの病だけではなく、類似する様々な症例に、ヒカルの細胞から作った新薬とメカニズムが役に立つはずだった。

「どうしてヒカルが行く・・・それならオレも一緒に」
「ダメだよ」
ヒカルが泣きそうな顔をした。

「ジルの経過を誰が観察するの。ミシェルもシャルルも今、世界を飛び回っている。シャルルは完治しているわけでない。症例が少ないから、絶え間なく観察しないと必要情報を取得できないって、ルイが論文に書いたんだよ」

ヒカルの言葉に彼は困惑した顔をした。
会話のつじつまが合ってないことに気がついたらしい。
ヒカルはそこで大きく息を吸った。
彼女は自分のポケットに手を伸ばしてそこから・・・薄いキーを取り出した。

「これ。ルイの部屋のキー。返しておくね。今まで使わせてもらっていた。ありがとう」
「それならルイに返却してくれ」
「･･･シャルルから返して欲しい。私、この後すぐに発つことになっている」
「ルイには会っていかないのか」
ヒカルの顔が歪んだ。
うん、と涙を堪えて彼女は頷いた。
次に、ううん、と首を振った。
「もう逢っているよ」
彼は黙ったままだった。

ふたりの体に、風が吹き付けた。
潮を含んだ風は彼の体に触る。
風向きが変わったようだった。
気温が下がる兆候を感じて、ヒカルは彼の手を取った。

「だから、当分また来られない。でも、戻って来たら、真っ先に・・・会いに来るよ。約束だよ」
ヒカルはそう言って、彼に微笑んだ。
彼が酷く狼狽し、戸惑っている様子が彼女の視界に入ってくる。

「ヒカル」
彼が彼女の名前を呼んだ。
次に・・・彼は彼女の肩を掴んで強く抱き寄せた。
どうしてだろう。
彼は困惑した表情を隠すことなく、そのまま彼女を彼の胸に抱いた。
ヒカルは抗うことなく、彼の胸にそのまま体を預けた。
肩が震えている。涙を堪えていることが伝わってくる。
彼女はいつも泣かなかった。

ルイがいつも泣かせていたが、彼女はいつも微笑んでいた。
ルイ・・・・ルイ。

彼は彼の息子の名前を何度か呟いた。
しかし、目の前の晄の子が彼から離れていくという告白を聞いて、彼は酷く動揺していた。

「またね・・・また会おうね。きっとだよ」
彼女は彼の胸の中で囁いた。
声が震えていた。

■235

「それがヒカルの出した答え？」
「うん」
ヒカルは頷いた。
少し稚拙な返事だった。

彼の胸の中で。
彼の腕の中で。

ヒカルはふっと片息をつきながら、そっと彼から体を離した。
彼と両手を繋いだ。
彼らは無言で指を絡め合った。
ごく自然に。
青灰色の瞳と、茶色の瞳が交叉した。

ヒカルはごめんねと謝らなかった。
その言葉に代えて、ありがとう、と言った。
貴方の長年に渡る調査結果が・・・今回調査団を作るきっかけになった。
だから、その思いに答えたいと思う。
結果を出したいと思う。
彼女はそう言った。

「夏までにはまた戻ってくる。学校も通いたいし。ジルの赤ちゃんが生まれるところに立ち会いたい。ああ、そうなるともっと早く帰ってこないといけない」

「・・・オレができることはないのか」

彼は苦しそうにそう言った。
ヒカルの決断に、彼の意見や助言が関与しなかったことが酷く彼を傷つけた。
「あるよ」
ヒカルはそう言った。

海の潮が満ちてきた。
静かに・・・彼らの近くまで潮が彼らを誘う。
陽射しが翳り、落暉を知らせるように・・・風がまた吹いた。
彼女と彼の横顔を照らし出していた陽の光が柔らかくなって薄くなっていく。
間もなく夜だ。
夜になれば彼女はここを発つ。

行くな、ダメだ、と言っても彼女はウイと言わないだろう。
ルイとの婚約話はどうなるのか。彼女は彼を置いていくのか。
また・・・ヒカルに万が一のことがあったら。
消息不明の報を聞いて夢幻の世界を彷徨わなければならないのか。

「あるよ・・・」
ヒカルがまた困ったように言った。

彼女は表情豊かで実に・・情に深い人物なのだと改めて思う。
これは彼が・・・アルディ家の者は教えてやることができない。
彼女の持って生まれたものと、幼い時に一緒に過ごした彼女の本当両親から得た愛と・・・シャルルの繊細で傷つきやすいけれども深く相手を思い遣る情愛が彼女を彼女たらしめているのだと思った。
そしてそこで、彼は自分のことをひどく客観的に表現していたことに気がついた。

「貴女は・・・いつの間にか、オレが教えてやることがないくらいに成長したんだね、ヒカル」
彼は少し言葉を詰まらせた。
彼女の選んだ道を、彼は否定することができない。
彼の永遠の晄の輝きが失われることを憂えているから。
そして彼は彼女を愛しているから。
こよなく・・・そう、誰よりも愛しているから。

愛している・・・？
あの人よりも？
誰よりも？

誰かと比べることなどはできない。
なぜなら・・・・
彼の思考はそこで途切れた。
ヒカルが声をかけたからだ。

ヒカルは彼と繋いだ指をぎゅっと握った。
・・・どこかで彼女とこうしたことがあったような気がする。
既視感なのだろうか。
いや・・そうではない。
確かに記憶している。
彼は忘れることができないから。
だからこの記憶は幻影ではない。
彼女の不安を取り除くために彼女の指が彼に助けを求めた。
彼は彼女の手を握った。
Master権限の付与を受けていない彼女を、非難されることを承知で薔薇園に入れた。
彼女が望んだから。
それで彼女がシャルルの狂乱の様に呆れて・・・愛想を尽かせば良いのにと思った。

シャルル？
オレはシャルルなのに？

「ヒカル」
「キスを」
彼女はそれだけを言うと、声を漏らして泣いた。
泣かないと決めたのに、と言って泣いた。
大粒の涙が彼の目の前で流れ落ちる。
茶色の髪が涙で頬に張り付いた。でも、彼女は決して彼の手を離さなかった。
そして、彼に向かって、ヒカルは言った。

「キスを・・・まだ教えてもらっていない」
彼女の声は切れ切れだった。
波声に消えそうなくらい・・・彼女の声は小さかった。

沈みゆく残照の中で。
彼女の横顔を照らし出す。
彼の横顔を照らし出した同じ晄なのに、彼女に照らす晄は、この世のすべてから祝福された天使の煌きっだった。

彼女は美しかった。
泣いているのに美しい。
誰かを愛している者の表情だった。
愛を知って憂いを知って惑いを知っている者の顔だった。
でも愛することの喜びを知っている者の顔だった。

「・・・シャルル。キスを。キスを教えてもらっていない」
彼女が泣きながらそう言った。声が潰れて言葉にならない。
彼は息を呑んだ。なぜ、彼女が啼哭しながらそう言い出すのかが、理由がわからない。
我慢しようと思っていたのだがそうできない、と言うかのような状態で、ヒカルは泣きながら言った。
ひとつひとつ言葉が単語でしか出てこない。
しかし、彼女は繋がれた手を離すことはしなかった。

「あの･･･ルイが。ルイが、私があまりにも幼稚なので･･ミシェルに教わって来いと言ったけれど、私はミシェルはその･･･先生になってもらうには敷居が高すぎて。･･･シャルルには･･･シャルルは教えてくれるかしらと･･･」

彼女はかつて言った言葉を繰り返した。
その時の言葉と明らかに違うのに。
胸が押しつぶされそうだった。
張り裂けそうだった。
その時は恥じらいがあったが、これで最後だからという気持ちが大きかった。

でも今は違う。
でも今は・・・・

戻って来て。帰ってきて。
生きて。生きて、ルイ。
貴方はルイ・ドゥ・アルディなのだから。

泣きながら。
「家族のキスを・・・教えて欲しい」
彼女は最後までそう言うと、嗚咽を漏らした。

彼は彼女から指を離した。

あまりにも苦しくて。苦しいのに、また胸に抱いた。
夕陽を浴びて、輝く彼女の体を抱いた。

「どうしてそんなに泣くの」
彼も苦しそうにヒカルの耳元に囁いた。どうしてだろう。胸が痛い。

■236

「貴女が望むのであれば」
彼はそう言って、彼女に微笑んだ。

胸に顔を埋めるヒカルには、彼の微笑みは届かないかもしれないが、それでも彼は彼女に微笑みを落として・・・優しく言った。
彼は良いよ、と言って彼女の髪にそっと唇を埋めた。

家族のキス。
労りと慈しみと祝福の接吻を、彼女に落とそうとした。
彼女がそれを教えて欲しいと言う。

ルイの愛を受けて家族になろうと言う。
晄の子が、新たな種であるルイと一緒に歩んで行くことを承諾したのなら。
それは最も喜ばしい。
かつて、あの人との結ばれなかった愛が、次世代の彼らによって成就する。

あの人と家族になりたかった。
でもできなかった。
それをルイとヒカルが実現してくれる。

ルイも詮無きことを要求するな。
彼は苦笑した。
キスを学んで来いと言うのは、それを知っているルイでない者からキスを受けてこいということだ。
たとえ戯れ言だったとしても・・・ヒカルが他の者から接吻を受けることを何とも思わないのだろうか。
それとも・・・もっと違ったことを考えているのだろうか。

・・・それなら、シャルルは家族としての祝福のキスを・・・・

そこまで考えて、ふと動作が止まった。

――――違う。

何かが囁く。彼に囁く。

ヒカルにシャルルは何と言ったのだろうか。
思い出せない。

彼女がキスを教えて欲しいと言う。
家族の接吻を教示するのに、どうして・・・どうして自分自身はこれほどまでに胸が躍る一方で、押しつぶされそうな苦しみを感じているのだろうか。

ぶるぶると唇が震える。
こめかみが激しく痛んだ。

何かが・・・何かが違うと囁くが、それが何であるかはっきりしない。
靄がかかり、彼の思考を阻む。
彼は何手も先を考えることができるのに。
彼はすべてを手に入れたはずなのに。
彼は・・・彼はシャルル・ドゥ・アルディなのに。

彼女が顔を上げた。
・・・・ヒカルの顔は、彼の知っている最後のヒカル・クロスから、少し顔つきが変わっていた。
眼を反らさない。
彼の瞳をのぞき込んで、語りかけている。
そしてとても静かだ。

ロアールの館で、ヒカルに行くなと言った。
でも次には、行けと言った。
彼女はいつも彼に背中を向ける。
そして振り返らずに走っていく。

・・・「彼」とは誰のことなのだろうか。

心臓が激しく鼓動を主張する。

彼女に言祝ぎを携えた接吻をしようとして。彼は動作を止めた。

違う。

体が強張った。
彼女に慈愛のキスをすることができない。

なぜなら・・・・。

なぜなら。

――――――彼は慈愛と労りを伴う、血肉の者同士が交わすキスを知らないから。

ヒカルはそこで彼にまた涙を流しながら訴えた。

「ルイ。ルイ・・・！ルイ・ドゥ・アルディ！」
彼女は彼の本当の名前を呼んだ。
彼は激しく瞬きした。
ヒカルが叫んでいる名前は・・・彼の名前ではない。

「違うよ。ルイ・ドゥ・アルディ。
私は、何度でも言う。
星辰の子と呼ばれた貴方はひとりしかいない。
星を泳ぎ渡り、誰よりも光る眩しい人。
太陽の髪を持つ人。

私はずっと羨ましかった。
私はアルディの子になれなかった。

どんなに頑張っても、白金の髪にも金の髪にも、青灰色の瞳にもなれない。
私には家族がいなかった。
おとうさんも、おかあさんもある日突然、いなくなってしまった。

だからルイが羨ましかった。
ルイには立派なお父さんが居て・・叔父さんが居て・・・ジルが居る。
それなのに、なぜそれほど孤独であろうとするのか、私はルイを理解できていなかった。
理解したら・・・自分が可哀想だと認めることになったから」

彼女は叫んだ。
涙を流しながら、彼に先ほど彼女自身がかけてやったショールが彼女の指先にかかり、彼の肩から砂丘に落ちた。
「ルイはひとりしか居ない。
ルイは私の大切な家族だ。
私は・・・私は忘れていた。
一緒に過ごした季節のことを。
一緒にいた日々のことを。
心の奥にしまいこんで、思い出さないようにしていた。

ルイはいつも私の一番近い場所に居た。
誰よりも。
シャルルよりも。

私の孤独を知っているのは、ルイだけだ。
私の醜い矮小な妬みを知っているのは、ルイだけだ。

ルイ、未来を一緒に作ろう。
過去はいらない。
ルイが過去はいらないよというなら、あの日々を捨てたって良い。

でも、ルイは生きている」

彼女が何を言っているのか、言語では理解できたが意味がわからなかった。
彼はシャルルなのに。
なぜ。
ルイに語りかけているのか。

その瞬間。

彼の頬から・・・一筋の滴がこぼれ落ちた。

綺麗な青灰色の瞳から、彼の魂のような、透明で澄んだ滴が落ちた。

■237

彼女の頬に唇を寄せた。
潮の味がした。

彼は彼女の泣き顔をこれ以上見つめることができずに、彼女の肩を抱いて、反転した。
彼に背中を向けた状態で、彼女を改めて抱き寄せる。

向かいあっていないのに。
彼の胸に抱いていないのに。

今、彼らは背中を向けている。
ヒカルの肩に回された彼の腕に、彼女は指を添えて更に彼の腕に潮水を落とす。
互いに零し落とすその贖罪の涙について、問わずにいる。
でも、揺るがない何かがそこにある。

・・・初めて見たときから。
どうしてこんな玩具のような者に愛を注げるのか、不思議だった。
茶色の髪の、良く動く茶色の瞳を持ったこどもは彼に笑いかけた。
裏意味のない微笑み。彼は初めての笑みに戸惑った。

天使さんがもうひとりいる。
そう言われて苦笑した。
彼女は、あの人の娘であり・・・この荊の家にやってきた贄なのだと思った。
安らぎとかあたたかさとか無縁の家だった。

それなのに。
彼女がこの永訣したかのような者達を、また集めてしまった。
晄輝く存在であれ、と名付けられた永遠の晄という名前の子は、晄押しつぶすほどの光量でもって彼らを明るく照らすのに。
彼らを惹き寄せる。

まるでルイのように。
彼は何も持たないからすべてを奪うと宣言していた。
それなのに、彼女にすべてを吸い込まれて行く。

孤独も苦痛も憂いも・・・愛さえも。

最も・・彼らはこれまでになく一番近い距離に居た。
同じ視線で、夕焼けを眺めた。
ヒカルの背を静かに抱いた。
肩に腕を回すと、ヒカルはその腕に手を添えた。
啼き声を漏らす。

彼女の首筋に。彼女の髪に。彼の涙が落ちた。
そして廻された彼の腕に、彼女の涙が落ちた。

「捨てられないだろう・・・」
彼は絞り出すようにそう言った。
ヒカルの茶色の髪に顔を埋めた。

彼女と過ごした様々な季節。
風を感じたあの庭園でのひととき。
薔薇園でそっと彼の様子を伺う幼いヒカルの視線。
当主が復元できなかったからという理由だけで復元したファム・ファタルと名付けられた薔薇の再生。

忘れられない。
捨てられない。
諦められない。

これがアルディの血筋であり、最も忌まれる資質であることはわかっている。
・・・わかっている。
忘れられないから。忘れられないから、内包していくしかない。
抱えて生きていくしか術がない。

・・・。
・・・。

ヒカル。

彼は目の前の、大人になった人の名前を呼んだ。
幼い・・・彼を「もうひとりの天使」と呼んだあどけない顔立ちは消えていた。

時間がない。
わかっている。
でも・・・‥彼女の髪に、精悍な頬を埋めて、唇を寄せた。

・・・家族のキスだ。

無償の愛と慈愛と・・・労りや願いを込めて。

彼は彼女の頬にキスをした。

ヒカル。

・・・愛しているよ。家族として。貴女が望むなら。
・・・未来永劫。
でも。貴女を愛することを赦してくれないか。

そう、囁いた。

ヒカルはまた涙を流した。

「ルイ・・・」

■238

「時間がない・・行け」
ルイはそう、絞り出すような声でそう言った。
本当なら、あの国にヒカルを遣る事なんて賛成できない。
むしろ妨害工作をしてまで反対するべき事項だ。

でも彼はそうしなかった。

自分が誰であるか宣言もしなかった。
例え・・・彼がどういう状態であれヒカルはあの国に行ったと思う。
あの人の娘らしい。
それでこそ・・・貴女はFebruusの娘だ。

清めの神でありながら、戦乱の場に降臨する・・・癒しと死を同時にもたらす神の娘に相応しい。
あの国はFebruusの支配する国だ。今はまだそうだ。
その乱れた国に足を運ぶ娘がいる。
自分のためではなく、他人のために。
まさしく、あの人とあの男の娘でありながら・・・彼女は神の遣わしたFebruusの娘なのだと感じる。

だから。

彼は引き留められなかった。
愛しているから。
愛しているから、胸の内に抱いておくだけで大切に壊れ物を扱うかのようには置いておけなかった。

ヒカルが遠くに行く。
でも戻る。
家族としての彼女のその報告に・・彼はノンと言えない。

言うことができない。
言ってはいけないのだと思う。

ずっと・・・ヒカルの傍で手を握りしめ傍に居たことを忘れない。
彼には過去がない。
だからヒカルが彼の思い出を作っていく。
彼の未来を作る唯一の人に、ルイは囁いた。
愛しているよ、と。
それでも彼女は行くと言う。

そうして腕を広げて彼女を抱き締めると、ヒカルはそれほど小柄でもないのに、彼の背に胸に覆われてしまう。
彼女はこれほどまでに華奢であったと実感する。

彼女の髪の香り。
彼女の涙の味。
彼女の吐息。
彼女の声。
彼女の指先の温度。

何もかもを記憶しよう。
何もかも忘れない。

・・・貴女を愛しているから。

初めて会った時から。
彼は微笑んだ。

・・・初めて会ったときから、彼はシャルルに言ったではないか。
どうしてそのような者しか愛でられないのか、と。

シャルルだけではない。
シャルルと同じ環境で育った別の薔薇も。
彼自身も。
ルイ・ドゥ・アルディも。
晄輝く種を焦がれて枝を伸ばす。
花弁をその晄に向ける。
天使のように微笑み、誰にも差別も区別もしないで微笑む茶色の天使に。
・・・そうだ。
最初から、心惹かれていた。

「ヒカル。・・・・行け。
ただし、こちらを振り返ってはいけない。
・・・こちらを向いたら。

貴女の意見は聞かない。
有無を言わさず、貴女をこの国に留めて・・アルディ家所有の孤島に閉じ込める。
貴女の稀なる体質だけを利用する。

愛も安らぎもない世界に行きたくないのであれば・・・・行け。
振り返るな。
そして・・・・戻って来ても、オレに会いに来るな」

彼はそれだけ言うと、彼女のこめかみにもう一度唇を寄せた。
ルイ、と彼女が呻いたが、彼は無視した。

「行け・・・そして戻るな。それが生きると言うことだ。後ろを向くな。
前だけを見て行け」
彼は彼女に絡ませていた腕を解くと・・そっと、彼女の肩を押した。
「振り向くな。前を行け。・・・・ヒカル。
愛しているよ。死ぬほど。
死んでしまいたいと思うほど。
・・・でもヒカルを愛しているから。

だから解放する。
愛しているから。
これから未来を作っていきたいと思う程に。
愛しているから。

・・・・次に逢うときは、もっと違うだろう。

・・・行け。
行け、ヒカル。

永遠の・・・オレの晄」

彼はそう言ってヒカルの肩を押した。
振り向くなと念を押した。

彼がシャルルと名乗っていても。
ルイ・ドゥ・アルディであっても。

関係がない。

彼の孤独な魂を拾い上げたのは、誰でもなく・・・あの晄の子なのだ。

ヒカルは声を上げた。
ルイの名前を呼んだ。
でも振り返らなかった。
涙が彼女の哭声を妨げる。
頭が痛くなるほど泣いた。叫んだ。
でもルイ・ドゥ・アルディは彼女から離れて・・・離れた場所で見つめながら彼女を解放した。
行け、と彼が言ったから。

彼女に添えられた大きな手の平が離されたと感じたとき。

ヒカルは前に一歩・・・歩みを進めた。

彼女は日が暮れかける砂丘を一歩一歩・・・踏みしめながら前を向いて歩いた。
遠くにはルイに同乗した車とは別に、シャルルが差し向けたと思われる車が停車していた。
そのまま空港まで行けということらしい。

「・・・またね。またね、ルイ・ドゥ・アルディ」

恋ではない。でも愛だ。
愛は一つではない。
ルイ・ドゥ・アルディに対する愛は彼女の中で、誰にも比べられることのない感情なのだ。
彼女の中のどす黒い感情を知っていながら、彼女の世界を常に護ったアルディの孤独な薔薇を置き去りにしていく。ヒカルの罪がひとつ、増えた。
でもきっと・・・

ヒカルは前を向いて歩きながら、そう思った。
素晴らしいこの世界で、ルイと出会えて良かった。シャルルを愛せて良かった。
でもこれは終わりではない。続く。続いていくのだから。

ヒカルは振り返らなかった。

彼女は前を向いて歩んだ。

彼にかけてやったショールが、海風に煽られて空に舞っていく。
その様子だけを、茶色の瞳で追い続けた。

「ルイ・・・ルイ！」
彼女は彼の本当の名前を呼び続けた。
振り返らずに、腕を挙げた。
「還ってくるから！ここに、還ってくるから！」
彼女はそのまま走り出した。
こちらを振り返らなかった。

・・・それで良い。

彼は微笑んだ。

■239　妹背鳥　前編

彼女の最後の後ろ姿を忘れない。
彼は忘れることができないから。
年を経る毎に、色褪せるどころか、鮮やかになっていく彼女のシルエットを記憶の波から浮かび上がらせて考えに沈む。
彼はいつも夕陽の眩しい海を見ると、その姿を重ねて静かに日暮れをただ黙ってひとり眺める。

ルイ・ドゥ・アルディは、煙草を口にくわえながら・・・いつも通りにこの海岸にやって来た。

季節はもう夏を迎えていた。
彼はスロープの下の僅かな段差に腰掛けて、足を海砂に埋めて煙草に火を付けた。

・・・潮の香りと共に磯の香りのする潮風に目を細める。
生命の匂いがする。
海中の魚を狙って鳥が飛び交う。
鳥の声が以前より大きくなっていった。
数が増えてきている。

誰も集うことのなかったこの海が、磯の香りがして貝が繁殖し、いつの間にか近住者が遊泳に興じるようになっていた。
でもそれはようやく最近になってからのことで、まだそれほど年数が経過していない。

彼はいつもこの海の夕暮れを眺めにやってくる。
時間が許す限り。
スケジュールが合う限り、この場所にやって来ては夕暮れを眺める。
朝焼けを眺めることもあるが、夕さりのあの空の色を見つめるためだけにここにやって来る。
運転手付きの車は煩わしい。
今日もそうだった。
だから自ら運転してここまでやってくる。
それもつい最近までは叶わなかったことだ。
今まではそういう自由も許されていなかった。
彼は重病人であり、精神を病んでいながらも、その頭脳は明晰なままであるというやっかいな「

星辰の子」であったのだから。
完治証明が出されて、ようやくひとりで行動できるようになった。

最近では・・・その移動時間さえ惜しいと思われるほど多忙を極めているので、近くにセーフハウスを買った。
でも以前の家はそのままにしてある。
いつか・・・彼の不在中にそこを仮住まいとした人とこの夕陽を見たいと思ったけれど。
そしてその人が、その家をもう一度使うのではないか・・・もう一度訪れるのではないか、という期待故だったが、それは実現しそうもなかった。
アルディ邸の別棟には今はもう帰らない。
あそこは彼が帰る場所ではない。
これほど近い場所に居るのだから、もっと頻繁に立ち寄れ、とアルディ邸の主は言うが、彼は薄く笑ってそのうち行く、と言うだけだった。

完治するまで滞在していたロアールの館には、もう今は足を運ぶことはない。
時折・・・門扉の前を車で横切る。
こどもの声が聞こえてくる。薔薇の香りがする。
そして、夜になると静かに明かりが灯される。
それだけ確認すれば十分だった。

彼は海岸に沿って設けられた遊歩道の手摺りを越えて、より海に近い場所に出た。
少し離れた場所にはスロープがあり、そこにベンチが設置されているが、今はまだ人気があるので、敢えてそちらは避けて、ひとり静かに落暉の瞬間を待つ。
遠浅の海岸は人工的に整備されたものではあるが、そこにいつしか、自然の息吹が見え隠れするようになった。
学生とおぼしき若者達が嬌声を上げてまだ遊泳している。
子連れや散歩を愉しむ夫婦などが遊歩道を往来する。
誰もが茜色の空に目を細めて美しいね、と褒めそやしていく。

・・・あの墜落事故を覚えている者はほとんど居ないだろう。
この場所に入ってくるには細い道を回り込んで来る必要がある。
その道に入る前の道路脇に設置された慰霊碑はいつも綺麗に清掃されていて、その時期が到来すると献花で溢れるが、年を経るごとにその数も減っていった。

彼は見事な金髪を夕陽に惜しげもなく晒して、深い双眸の奥に輝く青灰色の瞳を細めた。
この景色をサングラス越しに見ることはしない。

ルイは浅い段差の階段を下りて、桟橋に出た。
磯の香りが強くなった。
白い火成岩で作られた桟橋はロープが張られて誰も出入りができないようになっていた。
海洋学上の観測をすることを目的として沖に出る小型船の発着場も兼ねているので、学術団体の者しか出入りできない。
しかし、彼は関係者以外立ち入り禁止と書かれた札を無視して、迫り出した先端にまで進んで行き、腰を下ろす。
最も太陽に近い場所に彼はひとり腰を下ろした。
誰も来ないから静かだった。
積まれたテトラポットに波があたり、他に不規則な波音が聞こえる。
藻がだいぶ付着するようになった。

妻は娶らないと宣言をして、親族会を唸らせた。
彼はようやくルイ・ドゥ・アルディとしての発言権を取得することができたのに、開口一番それを言ったものだから、議場は騒然とし、彼らは非常に困惑していた。
あの会合は意味がない。
しかし変わらないだろう。
変化しないということを護らなければ維持できないこともある。
いざとなったら・・・彼らはルイの凍結精子を使って、更に新しい種を作るのかもしれない。
現当主がそれを厳しく禁じているが、彼の決定権に及ばないアルディ家の存続に関わる懸案と認められれば、防ぎきることができない。
親族会の決定について、これまで彼が参加していなかった議事に掲載されていない極秘事項のファイルを確認しなければならない。
さて、どういう手で攻めようか。
———チェスの手を考えるよりはるかに退屈だった。

彼は胸ポケットから煙草を取りだした。
そして慣れた手つきで煙草をくわえると、火をつけて大きく息を吸った。
片膝を立てて、もう片方の足を海に向かって投げ出す。
煙を吐いた。
陽が落ち始めようとしていた。
風が出て来て、彼の髪を撫でていく。
彼は煙草を口に銜えながら、ぼんやりと遠くの真緋の空を見つめた。
深く考え事に沈む。
そういう時は彼は何も聞こえないし、瞬きの回数が減って呼吸がゆっくりになり・・・そしていつも、あの夏の夕陽の別れを思い出す。
忘れられないから。

彼は、決して忘れることができないから。
目の前に広がる斜暉を彼は全身に浴びながら、思考の深淵に沈む。
あの晄の海に漂ったときのように。
このまま・・・このまま目の前に広がる海に身を堕としたら、彼は楽になるのだろうか。

■240　妹背鳥　後編

「ここは禁煙よ」
声をかけられて我に返った。
煙草の灰が落ちそうになっているが、彼が考え込んでいた時間はそれほど長くなかったようだ。
落暉の日色はまだ朱かった。

「・・・・やあ」
彼は振り返ってその声の主の顔を見ることはしなかった。
声でわかったから。

彼が生涯をかけて愛すると決めた相手がそこに居た。
「探したわ」
「探してくれと頼んだ覚えはないよ・・それにIDフィルムの貼付義務がまだ解除されていないからね。GPS機能もついているから、居場所なんてすぐわかるだろ」
彼は素っ気なくそう言った。
彼女がその機能を使って彼を捜し出すことを必要としない、唯一の人物であることを承知していたのに。
「私の上長になる方だから、緊急時の居所を知っておく必要がある」
彼女はそう言って笑った。

ヒカル・クロスが遅れながらも大学を卒業し、研修生活を終えて念願の研究所の臨時研究生として入所してきた。
ルイは研究所に籍を戻し、新薬の開発と実用化への研究に携わっている。
しかし彼の業務はそれだけではなく、そのほかの業務をいくつも併行させて進めている。
その合間に論文を書き、アルディ家の必要とする会合に出席し・・・忙しく過ごしているから、彼女がルイのことを上長だと言っても、実際に彼と顔を合わせることはない。
「臨時研究生とは・・随分出来が悪いな」
「仕方ないわよ」
ヒカルは彼の後ろに立った。

空も海も綺麗ね、と言って声を漏らして笑った。
「モザンビークとこちらの往復がまだ続く。・・・もうすぐそれも終わるけれど。だから常勤は無理でしょう」
私が入所することを知っていたんでしょう、とヒカルは言った。
「日本国籍のままだからだ。あの施設に日本人研究者が入ったと言うからリストを見た。それだけだ。黒須昶と名乗る者が、あのアルディ家のヒカル・クロスだと知られることを想定していないのか」
まったく、考えが足りないとルイは無表情に言った。
シガレットケースの底に備え付けられた灰入れに煙草を捨てた。
そして2本目の煙草を吸う。
とんとん、と煙草をケースの上で軽く叩いた。

「さっさと籍を入れろ。外聞が悪い」
彼女は長らく当主と事実婚を続けており、アルディ家当主が代々ランスの教会で挙式するしきたりであることを承知していながら、それを頑なに拒否していた。
あの国に身軽に行けなくなるからと言ったが、理由はそれだけではなかった。
ランスの教会で挙式していたことのある当主のことを憂えているのだ。
しかし、彼女のもたらす大きな福音を失うことができず、親族会はそれを黙認し続けて居る。

「今度の親族会の議事に挙げるぞ」
放浪癖はあの人そっくりだ、と当主も苦笑するほど、彼女はあの国とパリを行き来する。
成果は出ていた。
今ではあらゆるバイオテクノロジーにそのメソッドが適用されている。
彼女は地道に調査を進めて、貴重な調査データを持ち帰って来る。
一族の中で抗体を持たない者への予防接種が今は義務づけられている。
これは当主の母方から遺伝する血の病にも施された。当主の悲願でもあった。
今は製薬会社との折衝に入っている頃だろう。あれが普及されれば、医療業界は根底から常識を覆されることになる。

しかし、良いことばかりではない。
その一方で、クロスグループの名誉会長であったヒカルの祖父が逝去した。
これによって、クロスグループはヒカルから採取し精製したあらゆる薬品の権利無効を主張している。
これを取りなすために、ヒカルは日本にも足繁く通っていた。

「要件は手短に」
ルイは夕暮れから視線を反らすこともなく抑揚もなくそう言った。

彼女が彼に会いに来たということは用事があるからだ。
ヒカルは冷たいなぁと少し寂しそうに言った。
「またこちらをすぐに発つ・・・今度はシャルルも一緒なの」
彼女が話を切り出した。

「それが用事？」
「ジルのこどもが発症した」

現在の治療方法で致命的な欠陥がある。
・・細胞分裂が盛んな幼児には接種できない。
ジルのこどもは最も高い確率で発症するキャリアだった。
しかも母子感染している。

「めまいがすると言って倒れた。
そして眠っている時間が長くなってきた。
精神疾患に陥る前の特徴だ。
・・・シャルルは、私が持ち帰ってデータ解析に不備があるって・・・
だから幼児に適応できる新薬を開発するために確認したいことがあるって・・・」
解析データやサンプルを持ち帰るまでの時間さえ惜しいのだろう。
当主は彼女のこどもを我が子同然だと公言して、あらゆる特権を付与しているくらいなのだから。

「それで？・・・オレには関係ない」
彼は冷たくそう言った。
彼女にしてやれることは・・・そう、ただ冷たくして距離を置くことだけだ。

「ルイ。御願いがあるの」
ヒカルは彼の背中に跪いて、そっと・・・彼の肩に手を遣った。

「よせ」

ルイが彼女の手を振り払った。
彼女の華奢な指先が見えて、ルイはよく鍛えられた鋼のような腕を動かして、彼女の体温から逃れようとした。
触れた指先から・・痺れが走る。
まだ・・・まだ忘れることのできないあの感覚が蘇る。

しかしヒカルは怯まなかった。
彼の目の前には海原が広がっており、そして彼が決して立ち上がってヒカルを拒否しないと確信した上で・・・彼の背中をそっと抱いた。
あの時と逆だった。

彼の再生された皮膚を通して・・・背中から彼女の体の温もりや頬の形が伝わってくる。
「ヒカル、海に落とすぞ」
彼は少し身動いだ。
ヒカルは彼の胸に腕を回した。
柔らかく暖かい感触。
二度と触れることはないと思った彼女の体温がそこにあった。
彼は彼女のその動作に影響されないことを誇示するために、そのまま煙草を吸い続けた。

「———狡い女だよ、貴女は」

彼の言葉に、ヒカルが声を漏らして笑った。

「そう。私は狡くなった。
命が惜しくなったし・・・シャルルを残して逝くことがあったらと思うと、私が無幻状態に陥ってしまいそうになる。
でも、ルイ。
ルイのことも心配で不安になって時々・・・泣く」

泣くな、と言ったのに。
彼女はまだ涙を零すのか。

「そんなことがあれば、貴女の凍結卵子でもう一度貴女を再生してやるよ」
彼は意味がないことは言わないのに、気休めだということがわかっていながらそう言った。
人は天寿を全うして老衰死するだけが死因ではない。
それはヒカルが一番良くわかっているはずだったのに。
「それは私ではない」
ヒカルが強く短く言った。

陽が水面にいよいよ墜ちそうになっていく。
完全な正円が、少し歪んで楕円になった。

こんなに近くに居るのに、オレと貴女は・・・いや、オレが遠いところに行き着いたから。
彼は言葉に出さなかった。

彼女は額を彼の背中に押しつけた。
彼女の声振が彼の背中を伝って響く。
ヒカル、離れろ。
彼は唸った。

・・・心臓の鼓動が速まるのを、気付かれたくなかった。
彼は誇り高い星辰の子なのだから。

「・・・ルイは私を郭公と言った。確かにそう。そうだった。
　・・・・ね、ルイ。
郭公はね、日本では妹背鳥とも言うんだって。
・・・ほととぎすのことだけれど、托卵をする鳥なのよ」

ヒカルが話題を変えたが、彼女の言葉に彼は軽く首を振った。
陽光が輪郭を淡くさせたかと思うと今度ははっきりとその姿を現した。
墜ちる瞬間の、最後にひときわ強くなる夕明かりだった。

ヒカル、わかっているのか。
妹背とは夫婦のことを言う。
そして、ほととぎすは・・・・恋教鳥とか・・・霊界を往来する鳥として、蜀魂とも言われている。

彼がそう言うと、意味が深いね、と言ってヒカルは笑った。
知っているようだった。

「ルイ。私は行く。私だけしかできないことがある。
・・・・だから。ルイ。私を助けて。
私と一緒にこども達を助けて。
あなたが必要だ。シャルルひとりでは間に合わない。

それから・・・もうひとりの私は創らないで欲しい。
それは私そのものじゃないから。
そんなことに科学の粋を尽くさないで。

・・・・だって、もうひとりの私を置いていくのだから」

「・・・・・」

彼がそこでようやく唇から煙草を離した。
彼女がなぜ妹背鳥の話をしたのか・・・察したからだ。

「おいで」
彼女は手招きをした。

桟橋の先で打ち寄せる波に怖じ気づいていたこどもは、彼らのずっと後方に立ち尽くしていたが、ヒカルに手招きをされて怖々ヒカルの傍にやってきた。
幼児特有の、たどたどしい足音がする。
彼はそこでようやく体を捩って振り向いた。

そして青灰色の瞳を開く。
・・・・・ヒカルがいた。
あのころの。彼と最初に出会った時のヒカルそのものがそこに居た。
彼女が「もうひとりの私」と言ったのか頷けるくらい似ていた。
母方の特徴が良く出ていたが、肌の色が抜けるように白くそれは東洋人らしからぬ肌であった。
色素も薄い。
ヒカルよりもっと薄く、強い癖髪というよりかは巻き毛だった。

彼女はルイの顔を呆然として見て居た。
「おとうさまが居る。ふたり居る」そう言って、彼女はもと来た道・・・陸側を向いた。
ここまで、誰と一緒にやって来たのか推測がついた。
ルイと同じ貌をした男は、ヒカルと彼女を送り出したあと、あの場所で待機しているに違いないと思った。
・・・往路は二人を見送り、復路はひとりだけを出迎える。
そんな途方もない狂人めいた役割を引き受けたのか。

彼女は体を反転して落日の逆光を浴び、金の髪を輝かせている美しい人に見入っていた。
「てんしさんだ」と言った。
ヒカルは微笑んだ。母の微笑みだった。
「この人はルイ。ルイ・ドゥ・アルディ。おとうさまじゃない。よく、お話していたでしょ。金色の髪の人のこと。お星様の子だっていう名前をもっているけれど太陽っていう名前も持っている。

あなたの・・・あなたの教育係になる人よ」

「ヒカル」
ルイが最後の言葉に反応した。彼はそんなことを聞いていないし、親族会からの通知もない。
「断る」
「断れないわよ、ルイ。だって、この子を連れて行けない。この子だってキャリアだもの」
「然るべき人物に預ければ良いだろう。ジルのところとか・・・」
「ルイのところが良いの。だって、私達、家族でしょう」
ヒカルがちょっと笑って言った。
ルイは呆れたな、と言って、捻った体を戻し煙草を勢いよく吸った。
「これは当主命令よ、ルイ。逆らったら召喚状だって言ってたわよ。怒らせると恐いんだから。
悔しかったら・・・分籍手続きを取ったら？」

そうそう。
そうだ。
ルイの別棟は今はこの子が使っているのよ、とヒカルは可笑しそうに言った。
くすくす声を漏らして笑った。

「あんなに何も無い場所だったのに、今はおもちゃがたくさん散乱していて、足の踏み場もないわよ」
「だったらなおさら、早く籍を何とかしろ。私生児をアルディ家の別棟に・・・オレが使っていた私邸に入れるな」
彼は苛立たしげにヒカルに言った。
「アルディ家の子でない者を教育するわけにはいかない」
「アルディ家の子なら教育してくれるのね」
彼女は仕方がないわね、こどものためなら・・・と他人事のように言い出した。
「さっさと行ってくれないか。オレは忙しい」

ルイの言葉を無視して、ヒカルはルイ、と声をかけた。

そして、右手には彼女の娘を抱き、左手をルイの肩に乗せた。
赤い夕焼けが3人を照らし出していた。

「親になってわかった。
・・・こどもと離れるのは身を切られるほど辛い。
・・・・両親が帰ってこなかったとき、私は自分ひとりだけを憐れんだ。でも違う。
両親だって、帰ってこられないことが辛かったのではないのかと思う。

私は私ひとりだけ残されたことだけしか考えていなかった。

・・・・本当は置いていきたくない。
でも。
でも親だから。
だから置いていく。
ルイになら、任せられる。
私の命を受け取って、ルイ。
貴方に。貴方だけに、こどもを托していくことにする。
生きて欲しいから。
ルイにもこの子にも生きて・・・生きていることって何だろうっていうことに対するこたえを見つけて生きて欲しいから。
愛をすることって素晴らしいって思って欲しいから。

それに托せる相手が居るから。
・・・家族がここに居るから。
私はまた帰ってくる。その時まで、預かって。もう一人の私を」

彼女はそこまで言うと、両腕を伸ばし、ヒカルはルイの首にしがみついた。
彼のこめかみに・・・そっと唇を寄せた。
かつて、彼が家族のキスだと言って彼女に落とした祝福のキスを、彼女はルイに落とした。

「愛している。ルイ、愛してる。シャルルも。私も。ジルもミシェルも・・・皆が貴方の命を尊んでいる。貴方が生きていてくれて嬉しい。生まれてきてくれてありがとう。
ありがとう、ルイ。・・・・・これだけ伝えたかった。
・・・・私の・・・私の命はここにもある。だから、御願いしたわよ」

彼女はそこまで言うと、少しおどけたように言った。
「凄いでしょ。シャルルとおかあさんとおとうさんと・・・大親友だった3人の血が混じっているのよ。しかも、ジルとミシェルの姪にあたって、その上、ルイとも血縁。みんなの血が入ってる」
だからルイが適任なのよ、ルイしか居ないのよ、と言ってヒカルは念を押したがルイは返事をしなかった。
ヒカルは相変わらず頑固ね、と呆れていた。

彼女は、おいで、と言って次にこどもを抱き締めた。
万感の思いを込めて、彼女は囁いた。

「いいこで居てね」
「またね」
こどもはそう言って手を振った。
彼女の不在には慣れているといった様子だった。
簡単な別れの挨拶だった。
今度の不在は父と一緒で・・・こどもひとりだけを置いていくというのは初めてなのだろう。

「それじゃ・・・」
彼女の語尾は消えていた。涙声だった。
そして、ヒカルは走って桟橋を越えて・・・最愛の人の元に走って戻っていった。
後ろは振り返らなかった。
立ち止まる足音は聞こえなかった。

ルイも振り返らなかった。

彼は無言で・・・目の前に広がる水平線に沈みかかっている太陽を見た。
もう一本煙草を吸う。

「ねぇ、ご本を読んで」
彼女が桟橋の縁に座るルイに向かって、言った。
ルイは無言だったが彼女を少し指で押した。
「こちらに近寄るな」
こどもの頭は体との比重が成人と違い頭が重い。
下を向けば海に落下してしまう。

風が出て来た。
彼は煙草を吸いながら、沈みゆく太陽をしばらく見つめていたが、やがてこどもが彼の隣に座ったので、彼女の持っていた絵本の表紙を細く長い指先をとんとんと叩いて合図をした。
彼の座っている場所の反対側を指し示す。
風下から風上に移動しろ、と言う意味だった。

しかしこどもは意味がわかっていないようだった。

本を読んでくれるという許諾の合図だと思ったらしい。
「いちばんすきな本を持って行って良いって言われた」
・・・・古い本だった。

何度も何度も読んだ、こどもの父もヒカルも読みふけった本だった。

タイトルに「幸福の王子」と書いてあった。
・・・・彼も読んだ。

ルイはゆっくりと立ち上がると、彼が移動して、こどもの座り込んだ場所の反対側に座った。

・・・・日が落ちた。

辺りは急に薄暗くなり始めた。
日没を合図にして、街灯が灯り始める。
海で戯れる者達が引き上げていく。
そして、海にはまた静寂の夜が訪れて・・・星が輝き月が浮かぶ。
それを繰り返す。
そしてこの海は、命を届け、生命の回帰を繰り返し、次の命を運んでいく。

彼のファム・ファタルは・・・彼に命を教えた。愛を教えた。そして生を教えた。
彼は一体何を教えることができるのだろう。

沈んでしまった夕陽の僅かな残照を見つめた。
すぐにそれも海の向こうに消えていく。

ルイは、この海であの黄昏に身を置く度に、あの火色を、地獄の業火だと思った。
でも違う。
あれは・・・贖罪の晄だ。
彼は青灰色の瞳を細めた。
煙草を口許に持っていったが、ふと、手を止めてそれを消して灰皿に捨てた。

「まったく・・・オレの了解もなく、何をしているのかな、貴女の親は」
呆れるね、と言った。

「おとうさま、ご本をよんで」
「ああ、オレは貴女の父ではないよ・・・」
彼は苦笑した。
こどもは、先ほどのヒカルの説明を聞き流していたようだ。

幼い。

非常に幼い。
この奇妙な生き物をどうやって教育しろと言うのだ。

拒否権がなければ、分籍手続きを取るしかない。
ルイの異母妹として、やかましくてとうてい論理的思考を持ち合わせていなさそうな落ち着きのないこの生物とルイが同列に扱われるのは彼の自尊心が許さない。
今は遺伝子診断も進み、シャルルとミシェルのどちらが父親なのか、一卵性双生児でも父親診断ができる時代だ。
それでもアルディ姓を名乗っているうちは、教育係は免れそうもない。

・・・贖罪の娘というのは、ヒカルのことだと思っていたが。
ここにも贖罪の娘がいる。
贖罪をする娘なのか、贖罪される娘なのか・・・・

「ひとつだけ言っておく」
彼はこどもに忠告した。
良く響く、テノールで言った。
不思議そうにしている、茶色の巻き毛の幼女に彼は言った。
こどもに言い聞かせるような言い方はしない。
彼の教育を受けるのであれば、彼が合わせるのではなく、こどもが彼に合わせなければ教えてやるつもりはない。

「オレは繰り返さない。一度しか言わない。
・・・・。
　オレはあなたの父になれない。兄にもなれない。
・・だから・・・忘れても良いから魂に刻んでくれ。
あなたの父はシャルル・ドゥ・アルディ。・・・オレの叔父。
今は父だが、いずれ籍を抜く。
あなたの母はヒカル・クロス。
オレとあなたはいとこ同士だ」

ヒカルの名前を聞いて、こどもは嬉しそうに微笑んだからだ。
ルイの言葉の全部を聞き終わらないうちに叫びだした。

「おかあさまは『えいえんのひかり』と書いて、『ひかる』と言うんだよ！
おとうさまはおかあさまのことをいつもそう言うの！」

得意げにそう言った。

「ああ、そうだね。
・・・彼女は黒須昶という。
永遠の晄と書いて、昶だ。
永遠の・・・永遠に晄輝く贖罪の娘だ」

間もなく、彼が愛した女性は名前が変わる。
でも、ヒカルは昶だ。

「オレは代わりはできるけれど。そのものにはなれない。なぜなら・・・」
彼はそこで言葉を切った。
綺麗な微笑みで、彼は微笑んだ。
不敵な挑戦的な微笑みであったが、こどもが、薄い茶色の瞳を丸くして、てんしさんだともう一度言うくらい、溜息が出るほど美しくて・・・染み入るほど美しい微笑みを浮かべた。

「なぜなら、オレはルイ・ドゥ・アルディだからだ。
・・・・さて、オレが名乗ったのだから貴女も名乗れ」

行くぞ、と言って彼は彼女を高慢に見下ろした。

■242　expiation~Februusの娘~　最終回

アルディ家には、彼らの一族に関する原簿がある。
個々人に作成され加除式で、その人物の一生を記録する。
現在は電子記録として保管されているが並行してその紙媒体も更新されていた。
そして、ルイ・ドゥ・アルディの系図原簿には、２度の空白期間がある。
一度目は、彼が出生してから、アルディ家の後継者として認知されるまでの数年間。
二度目は、彼の長い療養期間中。一切記録がない。

その後。
突然彼の記録が書き加えられていくことになる。

そして、系図原簿の最初には、当人の出生までの記録が書かれて居る。
父母の名前から始まり、出生するまでの詳細な記録である。

この出生登録原票について彼は書き換えが行われている。
アルディ家では珍しいことではない。

アルディ家の当主にも、大幅な加除が加えられているのだから。
こういった大改編を行うとき。
これを系図原簿担当者達は、「贖罪の加筆削除」と呼んだ。
なぜ、そう言うのか・・・・理由を知っている者はもう、ほとんどいない。

（FIN）

夢見る魚　01

■夢見る魚　01

夏の終わりを感じさせるようなものは何一つなかった。
それなのに、彼女はぽつりと言った。
誰に聞かせるでもなく、ひとり呟いた。
「夏が終わるね」
ヒカル・クロスはこの季節をほとんど知らない。
かつて、この邸で過ごしていた頃。
夏が終わる頃に彼女は帰ってくるが、それまでは別の国に居て、彼女の両親の魂を弔ってくるからだった。
けれども・・・今夏はパリで夏を過ごす。

夏の一時期に、ここで何が行われているのかさえ、知らなかった。
でも、季節の移り変わりについて、いつも教えてくれたのはシャルルだった。
彼は夏の始まりをヒカルに告げる時、どんなに苦しかったのだろうかと思うと・・・ヒカルの胸が痛む。

夏が移り変わっていく。
ヒカルは深呼吸をした。

季節の巡りを、自分で感じるようになった。
シャルルに教えてもらったからだ。

別々の空の下で何年も過ごして、ようやく、ここが自分の場所だと悟った。
幼い時から過ごした薔薇の香りの漂う、美しい天使が住まうこの館に戻って来たいと思った。
そして彼女はすべての手続きを終えて、またここに戻って来た。
夏なのに・・・夏の音がしなかった。
夏なのに・・・夏の香がしなかった。

まだ、ここは元に戻らない。
だいぶ外観は戻ったが、それでも、些細な箇所が夏の惨劇を思い起こさせた。

アルディ家の夏の庭園は、こんな風だったのだろうか。
「以前と同じ」と言われても、ヒカルはその「以前」がわからない。

ヒカルは茶色の瞳を細めて、元通りに修復しようとしているアルディ邸の庭を眺めていた。
昨夏の不幸な事故によって、アルディ邸の一部が損壊し、そして元通りになるまでは相当年数かかるだろうと言われていた。
当主はそれを赦さず、急ピッチで復旧作業が進められていた。
真新しい接着料や塗料のにおいがまだ風に乗って来る。
新しく植わった薔薇の苗はまだ背が低い。
わかるのは・・・ここにもう一度、天使達が集うための薔薇の苑を再現することだけだった。

額に少し汗が浮かんでいた。
少し躰をずらして、木陰に入った。
直射日光を浴びると、まだ日差しは強かったが、木陰の風は乾燥していて心地よかった。
残った大きな樹木の下で、彼女は木漏れ日を浴びて、茶色の薄い髪が金の髪のように光っていた。
彼女は決して金髪になることができない、と歎いていた。
アルディ家の本当のこどもだったら良かったのに、と何度も思った。
この桜の木の下で、何度もひとりで涙を堪えて唇を噛んだ。
幼い時に、ここではないどこかに帰りたいと思って・・・月や花に願いをかけて夜中に出歩き、ルイに叱咤されたことさえ今は懐かしい。
けれども、今は、そうでなくて良かったと思った。

彼女は夏であるのに、長袖を着ていた。
数多の検査のために、彼女の静脈には無残な跡が残っていた。
細心の注意が払われたが、それでも内出血の跡は隠せない。
それを見れば、シャルルが直ちに研究を止めろと宣言するということは容易に想像できた。
腰も痛んだ。
髄液を抜かれたからだ。
これを行うと、麻酔をしているとはいえ、しばらくの間は鈍痛に悩まされる。
しかし、できるだけ・・・早く、ルイが元に戻るように・・・せめて躰だけでも・・・治してやりたかった。
ルイの回復に繋がることだと思えば、躊躇いを感じなかった。
たとえ、彼がどんな状態であったとしても、ヒカルの大事な人であることには代わりがない。

ヒカルの毎日はここ最近では非常に規則的だった。
朝起きて、薔薇園に向かう。
・・・今は、ルイのセーフハウスに住んでいるヒカルは、ここに毎朝通っている。
そしてまだ起きていないだろうシャルルのために、最高の薔薇を摘む。
薔薇園の温室が壊滅してしまったので、外苑に咲く薔薇の中から、朝露に濡れた薔薇を探し出してそれをシャルルに捧げる。この花を探すのはかなりの根気を必要とするが、ヒカルはそれを毎日続けた。
同じように・・・薔薇を幾つか摘んで、ルイの病室に運んだ。
だから彼女の指先は土と棘の傷で掩われている。
あの美しい指先が荒れて・・・シャルルはそんな彼女の爪先に唇を寄せて、苦しいよと言って顔を曇らせた。
しかしヒカルは止めなかった。それでも、彼女が出来ることはすべて注ごうと思った。

それからルイの病室に、時間が許す限り一緒に居る。
ただ座って居るだけのこともあるし、ルイのセーフハウスにある蔵書を持ち出して読むこともある。

体調が良ければ外の空気に触れるように、彼を連れ出す。
ルイ、と呼んでも・・・彼はまだ答えない。
けれども、躰は順調に回復していった。
ルイが強靭な快復力を見せるのは、彼が乗馬とフェンシングで鍛えた肉体を持っていたことと、彼の治療には、シャルルとミシェルが担当していることも影響している。
それでも介助が必要なときもあるし、彼は気難しいので、料理が口に合わなかったり辛い治療の後には何も口にしなかったりするので、ヒカルが手ずから料理を作り、彼の口に運んでやる。

・・・・昔、ヒカルにシャルルがそうしてくれたように。
病気の時は嬉しかった。シャルルがいつも傍に居てくれたからだ。
同じように、ルイも少し唇を綻ばせる様を見ると・・ヒカルはなぜ、自分はルイの歎きを気づけなかったのだろうかと思う。
自分が嬉しかったことは、ルイだって嬉しいに違いないのに。

彼が午睡を促されて渋々眠りにつくと、彼女は夕餉の支度を指示して、眠っているルイに明日もまた来るから、とメモを残して、カレンダーに印をつけてから退室する。
・・・そうでないと、日付の感覚が失われていくからだ。
彼はすぐに過去に戻ってしまう。
ルイの過去ではなく、シャルルの過去に。
そして、行き着く先がないということを知って、また絶望の淵に沈んでしまう。
その繰り返しだった。
躰が回復しても・・・心が回復しない。

そして夕刻になると、シャルルがアルディ邸に戻ってくる。
時間が合えば、一緒に食事をすることもあるし、ヒカルがセーフハウスで自らの料理を振る舞うこともある。
静かな時間だった。
まるで、何も知らなかった日々を取り戻すかのような、そんな日々だった。
しかし、行き来している生活も長くは続かないから、とシャルルに言われていた。
確かに、ルイの見舞いと、アルディ邸の行き来だけではなく、彼女は研究所にも足を運び、ジルの見舞いも訪れている。
自分の時間というものがない。
けれども、その日々が、ヒカルにとっての自分のためだけの時間なのだと思っている。
■02

アルディ邸に移り住めばよいのに、とシャルルに言われる。
確かにその方が何かと都合が良いのは事実だ。
しかし、ルイの不在中に本邸に戻ることはしたくなかった。
彼の存在がなくなってしまうようで、怖かった。
ヒカルの躊躇いを察して、それ以降、シャルルは何も言わなかった。
ただ、無理をするなと言う。

アルディ邸の別棟に、荷物が運び込まれている様を、ヒカルはじっと木陰で見つめていた。
・・・間もなく、ヒカルの知らなかった夏を、シャルルが迎えるときが来る。
その時。
彼が彷徨わないように、アルディ邸ではなく、この別邸に籠もり、投薬効果が切れた後の効果を臨床実験するとシャルルが言い出した。

ジルとシャルルだけしか・・被験者が居ないからだ。
このまま治療を続けていれば治癒するのもはやいのに。
投薬の効果は出ているはずだった。
しかし、シャルルは頸を振った。
「効果ばかりを追い求めていては駄目だ。・・・不具合を探すのも務めだよ」
彼の研究開発者らしい発言を聞くと、ヒカルは笑みを溢した。
絶対の自信があるからそう言うのだろう。
それは、ヒカルがアルディ邸に戻らないと決めているのと同じ豪儀さであったので、彼女はそれ以上、シャルルを引き留めることが出来なかった。
その代わりに、研究所の病棟に籠もって検査を受けることを拒んだ。
シャルルの誇り高さがそうさせるのかもしれない。
彼がヒカルの母を運命の人と定めて、こよなく愛した。
その心情を誰かに聞かれることは、彼の気高さが赦さなかった。
だから彼は毎夏のように、ある一定期間、完全にオフ休暇を取った。
この間、誰も彼に会うことが出来ない。
誰も彼に何か判断を求めることは赦されない。
当主の不在の時期に代行していたルイも今夏は不在だ。
・・・・・シャルルはそこまで考えて実行に移そうとしている。
研究棟ではあらゆる情報が漏洩防止のために措置されている。
逆に、シャルルの耳にも最新の情報が入ってこない。
同じ聞こえない状況であるのだったら、アルディ邸で過ごす、と彼は言った。
・・・・有事の時には、ミシェルがシャルルの代役をする。研究棟に居ればそれも難しい。あらゆる可能性を考えて、シャルルはアルディ邸に籠もることにした、と言った。
しかし、この夏にはヒカルが居る。
アルディ邸で彷徨えば、ヒカルを・・・ヒカルをマリナと言ってしまいそうになる。
愛する人の名前を呼び違えるくらいなら、彼は自分を滅することさえ厭わないだろう。
だから彼はルイの別棟を使って、そこに籠もると言い出したのだ。
他の場所に行くことも叶わない。
アルディ邸でヒカルの生活サイクルを変えることはしたくない。
それなら・・・それなら、彼はここに蟄居するしかないのだ。

ヒカルは何ができるのであろう。
シャルルはヒカルの運命の人だ。
彼が居るから、自分が居る。
そして、愛するということについて永遠の問答を繰り返す。
母を愛しているシャルルごと愛している。それは変わらない。

けれども・・・ヒカルがヒカルだけしかできないことはあるのだろうか。
シャルルが当主として、ひとりの男性として、ヒカルのことを考え続けるように。
ヒカルは・・・シャルルのことだけを考える時間を持っていないことに気がついていた。
それでも良いよ、とシャルルが言う。
その言葉に甘えて・・・そして今年のシャルルの夏を迎えようとしている。

「ヒカル」
声をかけられて、彼女は顔を上げた。
長い時間考え事をしていたようだった。
木陰で涼しいといえども、今は日中である。
燦々と照りつける太陽の下で長い時間立っていたので、明暗の判別がしにくくなっていた。
彼女は目の前の明るい髪色の人をちょっと眩しそうに見た。
「・・・シャルル」
彼は今夜からオフに入る。忙しいはずなのに、時間を割いて一度邸に戻って来たようだった。この調子では、彼がオフに入るのは今夜からではなく、明日という日付になってからのようだった。
「だいぶ遅れているな」
彼はヒカルと同じ木陰に入り込んで、涼しそうに青灰色の瞳を細めた。
しかし彼は汗一つ流していない。
ヒカルは溜息の出るほど美しい、シャルル・ドゥ・アルディという人物を見上げた。
高い鼻梁に吸い込まれそうな程に美しい双眸。
年齢を重ねてなお若々しい体軀と足取り。
・・・彼はフランスの華と呼ばれて久しい。
そして、いつまでも咲き誇る薔薇なのだと思う。

彼は、胸元のタイを緩めることはしなかった。
彼女の前でだけする仕草であったが、これからまた出掛けるつもりなのは一目瞭然だった。
彼はいつも外出後シャワーを浴びる。

シャルルは別邸に運び込まれている品々を眺めながらそう言ったので、ヒカルは答えた。
「シャルルが入るまでには終わるでしょう。・・・それに搬入するものはほとんどない」
彼の指定する寝具と、いくつかの身の回りのものとがあれば良かった。
必要なもので不足しているものがあれば、ヒカルが用意すれば良いだけの話だった。
完全に籠城するつもりはないらしい。
・・・・シャルルは、薔薇の成長を気にしている。
ファム・ファタルと名付けた多くの品種改良された薔薇はほとんどが全焼してしまったそれでも・・・それでも彼はまた創り続ける。それが彼の贖罪であるかのように。
生涯・・・その習慣は変更されることはないだろう。
それが、彼の愛なのだと思うと、ヒカルは切なくなる。
もう、届かないかもしれないと想いながらも、創り続ける彼の心を思うと、辛かった。

「今日は遅くなるから、夕食は一緒に過ごせない」
それだけを言うために、シャルルがここを訪れたとは思えなかったので、ヒカルははい、と小さく頷いて、次の言葉を待った。
シャルルの白金の髪の下から覗く、青灰色の瞳が、ヒカルをじっと見つめていた。
「ヒカル。・・・オレは繰り返さないよ。聞くのは、これが最後だ」
彼が何を確認したがっているのかは、ヒカルにはわかっていた。

搬入が遅れているのは、ヒカルの身の回りの荷物も運んでいるからだった。
セーフハウスを引き払って、彼女の荷物をルイの別棟に運び込むという追加の作業が発生したからだ。
それをシャルルが本当に良いのか、と尋ねている。
ヒカルは笑った。
「何度も言われると、まるで・・・間違っていることをしているように思えてくるので、それ以上は聞く必要はないわ。・・・私は私の決めたことをしようと思うし、それがシャルルの迷惑になるのであればシャルルのいやがることはしない」
「嫌がる・・・？オレが？」
シャルルがふと、挑戦的に笑ったので、ヒカルは茶色の目を少し大きく見開いた。

シャルルと過ごす。
それが何を意味しているのか、わからないわけではない。
しかし、ヒカルは誰か・・・誰とも知らない女性を、シャルルがマリナと呼ぶのは赦さなかった。
それならば、ヒカルをマリナと呼んで惑ってしまうシャルルと共に過ごすことを選んだ。

これが嫉妬というものなのだろうか。
それも少し違うような気がした。
誰にも渡したくないのではない。
彼の愛が惑うことが辛いのだ。

いずれは彼と閨を共にする日が来るだろう。
シャルルが激務をこなしているのは、幼い時から養育していたヒカル・クロスを正式に彼の室として迎え入れる準備を整えているからだ。
彼は・・・・・親族会が口答えできないように、着実に根回しをして親族会の議事として立案するつもりなのだ。
世の批判は彼は耳に入れない。
かつては息子の婚約者であると報が流れた時にも彼が否定した理由が、娘ほどの年齢差のあるヒカル・クロスの恋人が自分自身であるからだと囁かれても、彼はそうだと言い切る覚悟があった。
そしてその通りにしている。
成人を待って・・彼女がフランスに永住する手続きを待って、彼は動き出した。
ヒカル・クロスの心を射止めたのは誰でもないシャルル・ドゥ・アルディであり、ただそれだけだ、と言わんばかりの予定されたものであると知らしめた。
これまでどんなに噂が立っても、彼は決して再婚しなかったのは、彼女の成長を待っていたからだという下卑た話をシャルルは甘んじて受け止めた。

誰も結局は本当のことの一部分しかわからないものなのだから。
シャルルはそう言って笑った。
彼の強さがヒカルを支えている。

ルイが療養中であるということも重なって、彼は相当披露しているはずだった。
だからこのオフ期間は彼にとっては必要な休息になるだろう。
それだけでもこのオフ期間は、得るものは大きかった。

夏の夜に仄めかされたとしても。
それでも・・・ヒカルは彼と一緒に居ると言い張った。
彼が根負けしてしまうくらいだった。
その代わりに、オフ期間はルイと会えなくなる。
それだけが心配だったが、ミシェルは言った。
「他人の心配をするくらいなら、自分の足元の憂鬱を払えよ」
・・・ヒカルは破顔した。
ルイのことは心配ないから、とミシェルなりの言葉だったから。
彼らの発している言葉が、今はこれまでと違って聞こえる。
冷たくて突き刺さるような言葉ではなく、彼女にはいつも愛を含んだ言葉で語りかけていたのに。彼女が気がつかなかっただけなのだ。
■03

「ヒカルがようやく・・・オレと一緒に朝を迎える気になったのに」
挑発的な言葉に、ヒカルが赤くなった。
シャルルはその様子に、くすりと声を漏らして笑った。
「貴女の専用の寝具も運び込んでいるようだけれど・・・・オレは貴女をそこに横たえるつもりはないよ。枕だけあれば十分だ」
「私に『やっぱりやめる』と言わせるのは無理よ、シャルル」
ヒカルは慌てて横を向いて言った。
こういうやり取りは慣れていないし、まだ慣れない。

彼が理性でもって、彼女の気持ちを尊重していることはありがたいと思った。
シャルルはヒカルがウイと言わないので・・・その先に進むことをしない。
恋人達に訪れる甘く芳醇な夜を、シャルルは待ち焦がれていると言った。
それなのに、それでもヒカルからやって来るまでは触れないよ、と言う。
彼はやはり誇り高い薔薇なのだ。

シャルルが、こっそり、ルイの見舞いに行っていることは知っていた。
しかし、シャルルはヒカルの前ではルイの話を尋ねたりしない。
ただ、いつもありがとうと静かに言う。
そして、彼女の荒れた指先に唇を寄せて、愛おしそうに大きな手の平で包み込む。
・・・・誰かに感謝されたいから、していることではない。
けれども、この瞬間に、ヒカルは癒される。

彼は確かめに来たのだ。
本当に、彼女の決心が揺らがないのかどうか。
夏のシャルルを見て、ヒカルが悲しむとシャルルは危惧している。
投薬効果は出ているから、彼の計算では、同じ症状に陥ることはないだろうと考えているようだ。しかし、確信がない。データがないから。
症状の軽重はあるかもしれないが、それでも、一度でもマリナ、とヒカルを呼んでしまったら、その先は転がり落ちるように彼は惑いの杜に迷い込んでしまうと懼れている。
それでも良いのか、とシャルルは念を押しているのだ。
そんな中で、シャルルはヒカルを閨房に招くことはしないだろう。
しかし、彼の理性と迷夢の狭間でシャルル自身がどうなってしまうのか予測しきれない何かが発生して、ヒカルを苦しめたり傷つけたりすることが怖いとシャルルは言った。
彼は彼女の前では・・・心情を吐露する。
それは彼女が彼の永遠の晄だからだ。
彼女の両親でも、彼の心の闇底には触れられなかった。
孤独と気高さを併せ持つシャルルの狂気を癒せなかった。
鎮めることは出来ないかもしれないが、それでもシャルルと一緒に生きていこうとヒカルが決めたことを・・・シャルルは後悔しないね、と今一度確認しに来たのだ。

ヒカルは微笑んだ。
熱い日差しの中で、涼しげな顔をしている目の前の愛する人は・・・内心では相当に苦悶しているはずだった。
「こちらの準備は万端よ。・・・・明日からのオフ期間をゆっくり過ごしましょう。
何をしようか考えることから始まる毎朝って、素敵だと思わない？」
ちらりと、シャルルが時計を見たので、ヒカルはシャルルが戻らなくてはいけない時間だと知り、彼を安心させるために言葉をかけた。
「そろそろ行く時間でしょう。・・・・玄関エントランスまで見送るわ」
彼女がそう言ったときだった。

「・・・・その前に」
シャルルがふらり、と動いた。
「シャルル・・・・！」
彼が風を乗せて動いた先は、ヒカルだった。
「予行演習。・・・・今夜はこれだけでは済まされないからそのつもりで」
彼はそう言うと、ヒカルの躰を攫った。
彼女の両肩を掴み、桜の木の幹に彼女の背を押しつける。
さあっと・・・・風が吹いて、彼女の茶色の髪と、シャルルの白金の髪を揺らしていく。
別邸で作業を進めている者たちの死角になる位置に彼女を連れて行き、彼はヒカルに顔を寄せて唇を奪った。
ヒカルの柔らかい唇を押し開いて、彼は薄い唇をヒカルの上に重ねる。
彼がヒカルの中に躍り込んでくる。
優雅な仕草であったが、彼が性急に彼女を求めていることをヒカルに知らせていた。

ヒカルの肩に乗せた手を滑らせて、首筋から頬にかけて登っていくシャルルの指先が、彼女の汗ばんだ肌の上で踊るように駆け上がっていく。
頬を両手で挟まれて、彼女は身動きできずにただただ、愛の礫を受け止めるだけだった。
漣のように躰が細かく痙攣する。
喘ぐことも赦されないほどの、目眩がしそうな程に激しくて深い口吻だった。
白金の髪が、彼女の茶色の髪にかかった。
けれども、ヒカルは目を閉じて嵐が過ぎ去るのをじっと耐えるしか術がなかった。
柔らかいシャルルの前髪が自分の額に降りかかる感触があったが、目を瞑ったままで彼女は五感すべてでシャルルを受け止める。
やがて、唇を一度だけ離して、シャルルがヒカルの耳元で囁いた。
「ヒカル。・・・・愛しているよ」
彼は囁いた後に、彼女の耳根に唇を落として、彼女の耳朶を軽く噛んだ。
落とされた花瓣が、彼女の上で舞い始めたのを、満足げにシャルルは見つめている。
彼の重みが彼女に伝わってくる。
ただただ・・・ヒカルはシャルルの広い背中にしがみついているだけだった。
自邸の庭先で・・・こうして愛を交わす当主の姿は夏の日差しの下でさえ、蠱惑的で扇情的だった。
彼は片腕を落として、彼女の腰に手をあてると、ヒカルの躰は電流を流されたかのようにぴくりと辟易ろいだ。
骨盤から彼女の躯の線に沿って、ゆっくりとシャルルが腕を擡げる。
ヒカルの隆起にまで到達すると、彼は目を瞑ったまま彼の胸に額を乗せて凭れているヒカルのこめかみに軽く唇を寄せながら、親指の腹で聳立した丘を翻弄した。
声を漏らすまいとして唇を噛みしめるヒカルを愛おしく想いながら、シャルルは燻る情動を抑えられない、と囁いた。
夜まで待てない。
この場で・・・このまま彼女の中に沈みたい。
シャルルはそう言ったが、ヒカルは顔を赤らめたまま、頸を振った。
「シャルル・・・・私・・・・汗が・・・・」
嫩娘（＝処女のこと）の主張を、シャルルは無視しようとした。
シーツの波の中で、彼女は汗を噴き出させるだろう。涙を流しそして彼の祈雨を願うのだ。
シャルルの想いを流し去ることができない。
ヒカルは目を閉じた。
抗うこともできず・・・ただ、シャルルの熱情を受けるだけだった。
熱い日差しの下で、押し当てられた背中が軋む。
ヒカルの整った眉が、僅かに顰められた。

しかし、シャルルはやがてふと躰を離した。
ゆっくりと躰を起こして、彼は彼女の背中から腰元を擦った。
それはたった今行われた愛の疎雨と違っており、医師特有の手つきだった。
ヒカルが腰椎注射を受けて、まだ腰が痛むことについては、シャルルには話していない。
それなのに、彼は服の下に隠された止血テープを感じて、躰を離したのだ。
しばらくの間、シャルルはヒカルの顔を見つめていた。
シャルルは両手で彼女の白い顔を包んだ。
両手に挟まれたヒカルの顔は上気しており、シャルルの愛撫に打ち震えている。
しかしそれだけではない。
彼女の僅かな苦悶の表彰を、シャルルは見逃さなかった。

「ごめんよ」
ぽつり、とシャルルは言った。
幼い少年のような言い方だった。
彼女の額に、軽くキスをして、シャルルは彼女から離れた。
ヒカルが乱れた髪を後ろに靡かせた様子を見て、シャルルはほっと息をついた。
そして、足元が朧気なヒカルの手を取り、暑いからここの準備は人に任せて邸内に入るように、と指示をした。

「これほど気長な男も珍しいと思うよ、ヒカル」
彼は自嘲的にそう言った。
「オレは貴女のことを考えると・・・おかしくなりそうだ」
狂った路から戻ってきた白金の髪の人は、嗤った。
彼の息子として育った男のことを、ヒカルは憂えて居る。
それなのに・・・その彼女が欲しいとねだる自分を恥ずべきなのに。
それでも・・・それでも彼女と歩くと決めた残りの人生を、彼女のために費やそうと思う。美しい永遠の晄のために。
そして、彼の愛した運命の人のために。彼の親友のために。
自分自身のために、後悔のないように愛し抜こうと誓った。

「今日は遅くなるから、先に休んでいるように。
・・・・今日からこちらに戻るのに、ひとりで休ませてすまないが・・・」
「休暇を取ると言うことは、そのぶん忙しいということね」
ヒカルは微笑んだ。
彼はヒカルの手を取って、彼女の指先に唇を寄せた。
土の香がする。彼女はその手で、薔薇を毎朝シャルルのために用意する。
・・・・明日からは、彼と一緒に薔薇を手折るとヒカルは主張する。
彼は微笑んだ。
「そういうことだ。・・・・でも、その先に楽しみがあるから越えられるものもあるということだね」
彼はそう言うと、ヒカルの手を愛おしそうに見つめた。
彼がこれほど穏やかな表情をするのは久しくないことだった。
■04

ヒカルが寝付いたのは明け方近くになってからだった。

枕が変わったこともあったが、シャルルがなかなか戻ってこなかったからだ。
かなり夜遅い時間まで本邸で過ごしていたが、長居すれば、それだけ他の使用人達に延長業務を強いることになってしまう。
そういう気遣いは不要だと言われるが、それでも自分ひとりのために誰かが無理をするのは良くないと思っていた。
これは日本でひとり暮らしをしていたり、寮生活をしていたりしたからこそ思うことであった。
・・・・あの日本での数年間は決して無駄ではないと思った。
日付が変わっても彼が戻るという連絡はなかったので、ヒカルは諦めて別邸に入った。
シャルルは寝室に来るように、と言ったが、主寝室には進まずに、彼女の居室に入る。

用意された寝具はシャルルの計らいで、本邸にあったものを運んでもらった。
彼が自らヒカルのために・・・彼女がおとなになってからでも使えるようにと選んでくれた最高級のスプリングの入った寝台だった。

ルイのセーフハウスを出てくるとき。
・・・少し悲しかった。
でも、またアルディ邸に戻れることを嬉しいと思った。
このベッドで休む日がもう一度来るとは思わなかった。
こんな広い別棟で、ルイが何を思って長い時間を過ごしたのか、彼女は知ろうとしなかった。深い孤独が染みこんだ別棟でシャルルは一夏を過ごすことを選んだ。

・・・人はシャルルの行動を奇行だと言うかもしれない。
息子と呼んだ男の過ごした館の下で、娘のような年齢のヒカルと・・・シャルルが睦み合うのは人獣の蛮行だと言うかもしれない。
けれども、シャルルはルイの孤独も悲しみも一緒に・・・一緒に彼の狂気に取り込んでしまおうと思っているようだった。
建物は容れ物でしかない、と言い切ったルイが長い期間を過ごしたこの別棟には、シャルルはほとんど訪れなかった。
それも深い愛があってのことであったが、長い間、ルイはここで静かに孤独に過ごしていた。
それを思うと・・・・ヒカルは全身が苦しい程に痛む。
高い天井を見つめていると、自然に瞼が開いてしまう。
彼の溜息が聞こえてきそうだった。

シャルルのための医療器具や、経過を記録するための様々な物品が運び込まれて、いざというときのための、簡単な説明を受けた。
孤島に迷い込んだような生活にはならないだろうが、シャルルが極力人と会わないような配慮をしなければならない。
彼が戻っている「青春の輝き」の時代には、この建物はなかったから、彼はどこに居るのか迷ってしまい、混迷するかもしれない。
様々な心配事を募ったが、ひとつひとつに対応策を考えてもきりがないことに気がついて、ヒカルは考えるのを止めた。
どうにかなる、という楽観的な想いはなかったが、それでも、シャルルと一緒だからという安心感があった。
彼に何かをしてもらおうとは思ってはいない。
でも、彼女の知らなかった夏のシャルルが・・・惑い行き着く先は、ヒカルであれば、それで良かった。
たとえどんなに傷ついても、彼を受け止める覚悟が出来ていた。
ルイをシャルルと呼ばなければ振り向いてもらえないつらさや・・・彼女が知り得なかったアルディ家の者たちの苦悶を考えると、自分が傷つくことなどはまったく怖いと感じなかった。

シーツの波の中で、彼女は揺蕩っていた。
神経が高ぶってなかなか寝付けなかったが、やがて彼女は眠りに落ちた。
戻って来たという感覚が強かった。懐かしい香りがする。
アルディ邸の薔薇の香りがする。
ゆらゆらと揺れて・・・母の胎内を連想させるスプリングだと言う。
彼女は眠る時には魚になる。
目が醒めるとその時の感覚は忘れてしまうのに、眠りに落ちるときには思い出す。
頭を強打して意識を失った時に感じた奇妙な浮遊感と・・・・あの海に沈んだときに感じた息苦しさを思うと自分は魚になりきれなかったのだと思った。
あのまま・・・あの海に沈むべきだったのだ、とさえ思う。
後悔していないが、それでも時折・・・戻らないルイを見て、涙を抑えることができないときにあの海を思い出していた。
彼は戻りたくないのだと思うと、シャルルとの新しい生活に踏み込むことができない。

誰かの不幸の上に成立する幸福を受け入れることができないでいる。

ヒカルの目の縁から涙がこぼれ落ちた。
泣かないと決めたのに、また泣いてしまう。
泣いても良いから涙を止めてみせるとシャルルは言った。
・・・・シャルルの嘘つき。
ヒカルは涙を流した。
ひとりで・・・ひとりで流す涙はシャルルは止められない。
目を瞑っているのに、なぜか周囲は白く明るかった。
間もなく夜明けを迎えるからだろう。
電灯は付けっぱなしであったし、遮光カーテンは閉じずにおいておいた。
シャルルが戻って来た時に、暗い別棟に足を入れさせるのは忍びなかったからだ。
・・・・・シャルルは戻らなかった。
本邸で休んでいるのだろうか。
それならそうとメッセージを残してくれても良いのに。

ヒカルはうつらうつらとしながら、涙をこぼし、そして考えに沈んでいた。
枕が濡れていくのがわかる。
肌に晄を感じていた。
外は間もなく・・・・完全に夜が明けるのだろう。
バルコニーの下で、人の気配がする。
シャルルが完全にオフ期間に入るので、警護の者が特別配置につくのだ。
その準備の気配だった。
当分屋敷からは出られなくなる。誰も立ち入らないのと同じように。
目覚めの気配を感じながらも、彼女の中で何かが揺蕩っていた。
目が醒めたくない、と躰が睡眠を欲していた。
あたたかい波動が、彼女の疲れた躰を癒す。
誰かに撫でられているような心地よさだった。
彼女は横を向いて、胎児のように丸くなった。
海に還っていくような、そんな心地よさだった。
涙が溢れては彼女の頬や鼻梁を伝わって枕に沈んでいく。
どうして悲しいのだろう。どうして涙が出るのだろう。
・・・どうしてシャルルの胸に飛び込むことを躊躇うのだろう。
また、ヒカルの目から涙が落ちた。
呼吸をする度に、枕と柔らかなシーツの狭間で、ヒカルの躰はどんどん軽くなっていく。

呼吸を忘れた魚が突然それを思い出したかのように。
ふっと軽くなる。
暖かい手の平で、彼女の頬が撫でられているような・・・そんな心地よさにまた涙する。

・・・・違う。
ヒカルは目を見開いた。
誰かに撫でられているのだ。
よく知っている・・・細く長い指先でヒカルは涙を拭われている。
ぎしり、とスプリングが軋む音がして、彼女は横を向いた。
・・・・人の気配にどうして気がつかなかったのだろうか。
そこまで深く眠り込んでいたのだろうか。
ぎょっとして振り向いた。
涙が瞼の開眼を阻んだ。

「・・・・シャルル」
彼女は絶句した。
彼が、ヒカルの寝台に横たわっていたのだ。
片膝を立てて、肩肘を枕に立てて、彼はヒカルのすぐ傍で横臥していたのだ。
ヒカルは小さな悲鳴を上げて飛び起きた。
そして次にまた悲鳴を上げて、毛布の中に滑り込む。
・・・・彼女もまた、薄い衣しか身につけていなかった。肩が丸出しのものだ。
滞在していたルイのセーフハウスでは誰も居なかったから・・・彼女はそのままの夜着を持ち込んで、そのまま着て寝てしまった。
迂闊だった。シャルルが寝ている間に、やって来るとは思わなかったのだ。

「涙を止めてみせると言っただろう」
彼は少し面白くなさそうに言った。
薄い夜着に着替えたシャルルは、物憂げな青灰色の瞳をヒカルに向けていた。
ヒカルは真っ赤になって呟いた。
「どうして・・・ここに・・・・・仕事は・・・」
「オレは今日からオフだと思ったが」
「そうではなくて、どうして私の寝室に居るの？」
「オレはオフの期間、婚約者と一緒に過ごすと宣言してオフを取った」
彼は溜息をついた。ヒカルは胸の鼓動が通常値よりもずっと速くなっていることを知られないように大きくゆっくりと深呼吸をしたが、声が震えるのは止められない。
頬が燃えるように熱かった。
・・・・彼が自分の寝顔を見ていたということだけでも恥ずかしいのに。彼女は涙を流してしまっていた。それを・・・・シャルルは見かねて涙を拭いたのだ。
ただそれだけのことなのに。それだけのことなのに・・・・。
「同じ部屋の寝室で寝ることしか、許さないと言っただろう？」
「いつ、戻って来たの。どうして・・・ここに居るの」
「戻って来たからここに居るのだけれども」
シャルルは辛辣に言った。

「戻って来たのは先ほどのこと。
主寝室には誰も居ないがヒカルの居室は煌々と電灯が灯っている。
そしてカーテンも閉めないで、若い乙女が眠っていて・・・・・涙を大量に零している。
しかもその人はオレの妻にすると決めた人だ。泣かせるけれど涙を止めてみせるとオレは誓ったからね。その通りにしただけ。
・・・それがオレがここに居る理由」
ヒカルは震える声で抗議した。
「許可してない」
「許可？」
シャルルは鼻で笑った。
気怠そうだったので、相当疲れているらしい。
しかし機嫌は悪くなさそうだった。
「ここに居るということはすべてを・・・オレにすべてをくれるのではないのかな？オレは貪婪だよ、と言っただろう？・・・・貴女の全部を手に入れても、貴女の全部よりもっと貴女が欲しくなる。それがシャルル・ドゥ・アルディだ」
胸元を羽根枕で隠しながら、ヒカルは躰を起こした。
シャルルには・・・見られたくない起き抜けの寝顔を見られてしまった。
しかも彼女は涙で頬を濡らしており、瞼も腫れぼったい。
茶色の瞳を何度も瞬かせて、頭を振ると、ようやくヒカルの躰は覚醒を始める。

シャルルは腕を伸ばして、枕元にある室内灯の主電源パネルに指を乗せて、電源を落とした。室内が薄暗くなる代わりに、窓の外から白い晄が射し込んでくる。
もう、朝なのだ。

「私はもう起きるから・・・シャルルはここでそのまま休んで」
ヒカルはそう言って、起き出そうとした。薄暗くなっている今のうちに寝所から抜け出そうとした。彼に見つめられていると、どうにも気恥ずかしくて言葉に詰まる。
恋人同士の口吻も経験した。彼はその先の劈頭までは彼女に伝えていた。
どうすればヒカルの肌が熱くなるのか、どうすれば彼女が溜息を漏らすのか、自分ではない自分について、シャルルはほんの少しだけ、彼女に教えた。
しかし・・・更にその先に待っているものについて、ヒカルはまだ知らなかった。
知識では知っている。それでも、自分が自分でなくなるより前に・・・・本当に自分でなくなってしまった人を思うと、踏み込めないでいたのだ。
自分だけか幸せになってはいけないと思った。
シャルルはそんなヒカルを見て、静かに微笑むだけだったが、こうして夏の休暇を一緒に過ごすということについて、彼にも覚悟と考えがあったようだ。
「オレは随分待ったよ、ヒカル」
間違えずに、シャルルは彼女の名前を呼んだ。
胸が締め付けられる。・・・・彼が自分の名前を呼んだことがこれほど嬉しいなんて。
ヒカルの目から、また涙が零れた。

シャルルは青灰色の瞳でヒカルを見ていたが、静かに言った。
「今度は・・・・オレの腕で泣け。・・・それなら許そう」
そしてヒカルが掴んで躰を包んで隠れていた毛布の端を掴み、強く引いた。ヒカルがあっと思った時には・・・もう、シャルルの胸の中だった。袖無しの絹布の寝間着からヒカルの白い腕が露わになり、シャルルの劣情を掻き立てた。
スプリングが揺れた。漂うほどの小波ではなく・・・・嵐の前の大きく引く潮のようなそんな大きな波が彼女の腰下でうねりをあげて、シャルル・ドゥ・アルディの元に彼女を運んだ。■05

シャルルの計らいで運んだベッドなのに、そこに横たわることは許さないと彼は言った。それなのにその言葉を無視したヒカルへの罰だよ、とシャルルは意地悪く言った。
・・・・確かに、彼は薬の効果が切れている。
彼の言動はとても現在のシャルル・ドゥ・アルディよりもずっと・・・幼かった。
熱情を抑えられずそして物言いまでは少し若くなっている。
いつもの彼であれば、意地悪くヒカルを追い詰めることもしなかったし、自分で命じたのに、寝具を運ばせているようだけれども、という言い方もしないだろう。

それでも・・・彼はヒカル、と呼んだ。
彼女の母の名前で、彼女を依り代にすることはしなかった。

ヒカルは慌てて身を起こそうとしたが、彼の胸の中に躍り込むような格好で傾れていく。
「シャルル・・・・待って」
「待たないよ」
「あの・・・・私、寝起きで・・・・顔も酷いし・・・」
「構わない」
シャルルはそう言って、悲鳴を上げたヒカルを彼の躰の下に組み敷いた。
彼女の夜着のスナップの留め金を器用に外していく。
鳩尾から腹にかけて、彼女の白い肌が露わになった。
細い肩紐がずれて、彼女の鎖骨が大きく上下に隆沈していく様子は非常に艶めかしかった。
ヒカルの身動ぎが、身悶えに変わる姿をシャルルは青灰色の瞳で眺めていた。
「・・・ヒカル」
彼女の言葉を遮るように、彼はヒカルの唇に自らの唇を重ねた。
涙の味がしたが、シャルルはそれすら愛おしむかのように、彼女の唇を軽く吸って真珠色の歯の間をすり抜けて、ヒカルの奥に入り込んでいく。
更に深く彼女に沈むと、ヒカルとシャルルの距離は限りなくゼロに近くなった。
寝起きのために体温が低くなっているヒカルの肌が急速に温度を上昇させている。
彼の広い胸にヒカルの苔が触れて・・・シャルルは躰が熱くなるのを感じた。
彼女の洞を乱したシャルルは、四方に散ったヒカルの茶色の髪に指を埋めた。
髪がシャルルの腕の下に敷かれて、彼女は逃げることすらできなくなっていた。
まるで・・・瀕死の蝶のように。
茶色の双翼を振るわせていた。
そして陸に揚げられた人魚のように、鰓を塞がれて呼吸を止められた魚の鱗のように彼女の瞳が煌めいて瞬いた。
彼女はシャルルの下で浅い呼吸を繰り返していた。
「シャルル・・・・・」
哀願の声が聞こえてきたが、シャルルは駄目だと言った。
「貴女に涙を流させても止めてみせると言っただろう。それなのに・・・なぜひとりで涙を流すのか・・・」
彼は吐息を漏らしながら、彼女の首筋に唇を躙らせた。
甘い薫りが彼の鼻腔を刺激する。
彼はそのまま彼女の鎖骨に白金の髪を埋めた。シャルルが愛の雨を降らせると、その度にヒカルが小さな声を漏らし、そしてヒカルの白い肌の上にはうっすらと赤い花瓣が、昼間にシャルルが彼女に落とした花弁よりも色濃く鮮やかに浮かんでくる。
シャルルはその先に進んだ。
彼女の涙を見て、理性が吹き飛びそうだった。
涙を止めてみせると言ったが、ヒカルが涙を流す様を見て、彼は酷く・・・昂ぶったのだ。なぜ泣いているのか想像はついた。
彼は宣言どおり、ヒカルに対しては貪婪になろうと思った。
昔、全部をやる、とあの人に誓ったが、ヒカルには全部をもらい受けると言った。
彼女の苦しみも悲しみも涙さえも・・・・欲しい。
自分ではない誰かのことを案じて涙を流すヒカルを残酷だと思う。けれども・・・けれども同じくらい愛おしい。

これまで彼女と最後の境を越えなかったのは、ヒカルが望まなかったからだ。
しかし彼女を妻にするために彼は準備を進めている。
ヒカルがもし妊娠するようなことがあれば既成事実として婚姻を早めることが出来る。
でも今はその時期ではなかった。
後継問題が解消されていないからだ。
ルイが快癒しない限り、誰かを後継者候補に指名しなければならない。
そのためにも、シャルルには正当な妻が必要だった。
でも、ヒカルを政治的な道具にしたいとは思っていない。
彼女は鷹揚に気構えていて、結婚の話を先送りにしたがった。
焦って彼女を傷つけるようなことは避けたかった。ヒカルが望まないことはしたくない。
しかし・・・・彼の中で抑えきれない不安と情動が渦巻いて、どうにも抑制出来なくなるときがある。・・・・投薬をやめたからだ。
薬が切れてもなお、効果が継続しており、症状を緩和させるだけではなく治癒効果もあることを証明したい。
そのために断薬期間を設けて、立証しなければならない。
その時に・・・・ヒカルと一緒に過ごすことは危険だった。知らないうちに、彼女をマリナと呼んでしまうかもしれない。
その時に亀裂が、二度と修復できないものになる可能性は大きかった。
だから内々で話を進めているのに、その一方で、既成事実としてヒカルを名実ともに妻にすることに対して、二の足を踏んでいる。
彼女の愛を試しているわけではない。
今・・・試される時が来ているのはシャルル・ドゥ・アルディの方なのだから。
二度と手放さないと決めた。
彼女は娘などではなく、愛した人の忘れ形見などではなく、それ以上の存在だった。
それなのに・・・・ヒカルがシャルルの腕からするりと抜け出してしまうような感覚が払拭できない。
・・・・そう。不安なのだ。また、居なくなってしまうのではないのかと思ってシャルルは彼女の温度を確かめたいのだ。

若く瑞々しい肌を、シャルルは貪った。
疲労しきった躰に灯った獣炎が燻ったままで居ることを赦さない。
これは薬の断薬症状なのだろうか。
それとも・・・・・
夜着から覗く白い丘に彼は顔を埋める。
唇を軽く開き、今度は彼女の磁器を思わせる可憐な聳立に近づくと、衝撃でヒカルの背が大きく反った。
「シャルル・・・・・待って・・・・」
ヒカルが懇願した。しかしその声は弱々しかった。
イヤだとは言わなかった。
シャルルは美しい眉根を寄せて、彼女に頬に自らの頬を寄せた。
堪え切れそうもない激情が彼を襲う。
ヒカルの甘い吐息が彼を夢中にさせる。
・・・・彼はフランスの華なのに。
理性で抑えきれないものはなく、自分自身をそうできなくなったときは命を絶つ、と高慢に言ったのは、他ならないシャルル・ドゥ・アルディなのに。

彼は彼女を知らない世界に導いていく。
同時にヒカルの躰はシャルルを忘我の頂へ誘っていく。
彼女を恍惚の高みに連れて行くことは簡単だった。
しかしそうする手前で彼は引いて行く。
シャルルは・・・・彼女の肩を掴んでそのまま躰を滑り落としていく。
滑らかな染み一つない彼女の肌の上を泳いだ。

悶えて身動いだ時に、シャルルはヒカルの脚を割った。
シャルルの前で乱れた躰を見せることに羞恥の念を感じているヒカルが彼の腕の下で泳ぐ人魚のように見えた。
彼女を海から引き揚げたのは他でもないシャルルなのに。
・・・・海に潜って揺蕩う海姫を強引に目覚めさせてしまったのではないのだろうかと思う。
人の世の・・・・獣王の妻になると言って彼女は陸に上がってきた。

腿に手を触れると、ヒカルが小さく呻いた。ぴくりと彼女が弾け動く。
彼の手の平がヒカルの太腿を撫で上げる。
もう片方の手の先で、愛おしそうに、シャルルはヒカルの手を取った。
彼女の細い指は・・・大人の女のそれだった。
小さい頃の手の平を知っている。
少女の頃の華奢な指先も。
そして・・・・シャルルのために土に染まった今の指先さえ恋しい。

「今日・・・・オレに全部をくれないか・・・・ヒカルが・・・ヒカルだけ欲しい」
「シャルル・・・私・・・・・」
ヒカルの困惑した声が聞こえてきた。
彼女は視線を反らして、自らの躰に生じている悦楽の熱に戸惑っている。
「・・・ヒカル・・・オレにも触れて・・・・」
彼はそう言って、彼女の腕をシャルルの滾りに導こうとした。
彼女が緊張の余りに、手の動きを強ばらせたが、シャルルは・・・・ヒカルの腕を伸ばして彼女の指を彼の指に改めて絡め捕らえた。

あのときも・・・・彼とあの人との間にこんな時間が訪れていたら、今、もっと違った未来があっただろうか。
■06

シャルルはそこではっとして動きを止めた。
・・・・昼間気がついていたことなのに、今また、改めて射し込む陽光で・・・・彼女の躯を見たシャルルは、そこで獣焔が氷っていくのを感じた。
ヒカルが顔を歪めているのは、羞恥ではないことに気がついたのだ。
こめかみに疼痛が走る。
息をするのも忘れた。
美しい肢体を前に、今まで溺れていた彼の愛慾が急速に鎮まるのを感じていた。
彼女が待って、と言った理由を知った。
彼女は怯えているのではない。
彼に抱かれるのがイヤだと言っているのではない。

ヒカルの両腕は無数の針の跡で変色していた。
内出血が止まらないのだ。
皮膚が薄く血管が脆い若い女性特有の症状だった。
痕が消える前に次の検査が始まるから彼女の腕には無数の検査痕が残っていた。
・・・・針の跡で内側の薄い皮膚には穴が空いていた。
腰椎麻酔のために腕を縛られ・・・何度も血圧を測定したから、彼女の皮膚は爛れていた。皮膚の麻酔シールだけでは内部の痛みは治まらない。
皮膚組織を採取した跡に盛り上がった薄桃色の皮膚が盛り上がっていた。
最新の医療設備でもって対応しているはずなのに、ヒカルの肌にはそれでも・・・
それでも、どうしてもどんな手立てを使っても、癒して欲しい者たちのために、彼女は夏でも長袖を着ている。

どうして、彼女が毛布を被って躰を隠したのか、その時になって初めて理解した。
どうして、待って、と言ったのかその時に理解した。

シャルルの瞳から一筋の滴が落ちた。
激情が抑えられないのは、薬効なのだろうか。
それとも・・・ヒカルの前では彼はあのときに戻ってしまうのだろうか。
「すまない・・・・オレは・・・・貴女のことを考えていなかった」
シャルルはそう言って、彼女の躰に毛布をそっとかけた。
顔を背けて・・・絞り出すような声ですまない、と言った。

愛する人と初めて過ごす時間に・・・彼女がそのような躰を彼に見せられないと思っていても、それでもなお、シャルルと一緒に時間を過ごすと言った悲壮な覚悟について、シャルルは思い遣ってやれなかった。

「・・・ごめんよ」
彼は繰り返さないのに、掠れた声で繰り返し謝った。
大事にすると約束したのに。一生、愛すると言ったのに。
彼よりずっと年下の娘のような年齢の恋人は・・・・・彼よりも大きな愛を持っている。
誰も教えなかったのに。
彼女は・・・あの人に良く似ていた。
それが今は・・・嬉しい。けれども、悲しい。

「どうしてシャルルが泣くの？」
ヒカルが静かに言った。
「貴女を愛しているから」
彼は即座にそう言った。
答えを考える時間は必要としない。

「初めて会った日も泣いていた」
「それは貴女に出会ったから」
ヒカルは声を漏らして嗤った。
「嘘。・・・シャルルは時折、優しい嘘をつく。
・・・・私はあの人を好きなシャルルが好きだと言ったのに。
まだ・・・気兼ねしているシャルルを見るのが辛い」
彼女は身を起こしながらそう言った。
起き抜けのしとけない姿を見られて恥ずかしいと思う気持ちより・・・腕の圧痕を見られたことのほうが気にかかった。
これを見て、シャルルがヒカルに臆することがあったりしてはいけないと思っていたから、隠していたのに。
本当ならば腕を持ち上げるだけでも痛覚を刺激する。
けれども、それを誰かに訴えても彼女は満願成就しない。
躰の痛みは耐えられる。
しかし心の痛みは・・・・耐え難い時がある。

誰かを救うということはこういうことなのだと思う。
自分だけが幸せの舞台に乗ったままでは誰かを救えない。
人魚姫が声を失って王子の傍に居たいと脚を手に入れたように。
ヒカルは自らの身を削って・・・この薔薇の家に居たいと思う。
愛する人の微笑みを得るために、自分ができることは何でもしたいと思う。

「・・・寝室で少し休むよ。・・・オフの初日から寝不足だ」
「そう」
シャルルは涙を拭いて躰を起こし、ベッドに膝を立てた。
どうしても彼女の顔を見ることが出来なかった。
愛する人を悲しませてしまった。愛しているから、彼女が欲しい。
それなのに・・・愛しているから傷つけてしまう。
愛のパラドクスについて、彼の答えは出ていたはずなのに。
それでも・・・今でも彼は惑っている。

「待って」
彼女は同じ言葉を言った。
今度は・・・・彼の情動を抑える言葉ではなかった。
繊細な傷つきやすいシャルルの魂を囲むように・・・・ヒカルはそっと彼を包んだ。
痛む腕を彼の頸に回し、乱れた衣服のまま、彼に寄り添った。
「ヒカル・・・・離れろ」
シャルルは困惑して彼女に忠告した。薔薇の香りが彼女から立ち上る。
目の前の茶色の髪の人は、それでもシャルルから離れなかった。
「・・・・愛は回帰しない。けれども回帰しない愛はない」
彼女は囁いた。
涙に目を腫らした瞳で、彼女はシャルルに告げる。

「私は・・・シャルルの傍に居たい。それだけ。妻になりたいのではない。傍に居たい」
「ああ・・・・ヒカル・・・」
シャルルは彼女の細い躰を抱き締めた。
「オレもだよ。・・・・・・オレもヒカルを愛している。ルイを案じるヒカルを愛している。
丸ごと・・・全部すべてを欲しいと言った言葉に嘘はない。・・・・ヒカルの心からルイを懸念する気持ちが在る限り、それはオレの中でも生き続ける」
・・・・・シャルルがマリナを愛するように。

ヒカルが誰かを憂えてひとり幸せになれないという憂いを愛そう。
シャルルは囁いた。
「貴女のすべてが欲しい。心も体も。・・・それだけじゃない。未来も今この瞬間も。
全部だよ。オレは全部が欲しい」
「欲張りな人ね」
ヒカルは笑った。

シャルルは低く笑って、彼女から躰を離した。
「さぁ、ヒカル。・・・・夜が明ける。外が明るくなって、室内の貴女の乱れた姿を見られるくらいなら、オレは貴女をこのまま主寝室に連れて行くよ。・・・・・その時には抗っても無駄だから。もう少し、勉強してくれないかな。オレが相当な忍耐力でもって、この場を鎮めようとしていることを」
ヒカルは慌ててまた、毛布の中に逃げ込んだので、シャルルは軽い笑い声を立てて、彼女に毛布の上からキスをした。
「今日のところは赦してあげよう。オレも相当眠くて疲れているからね。・・・・でも疲れているときにこそ、ヒカルの肌が恋し

いと思うことも忘れないでくれよ」
彼はそう言うと、ドアの向こう側に消えた。
ヒカルは顔を火照らせたまま、茶色の瞳だけを覗かせて、彼の退室を見送った。
・・・・彼と彼女の夏の休暇はまだ始まったばかりだったのに、ヒカルはもうすでに何日も経過したような体力を消耗してしまったと思った。

■07

・・・・シャルル・ドゥ・アルディが主寝室から出てこない。
彼は日が高くなり、そして夕暮れになっても主寝室から出てくる気配はなかった。
内側から錠を下ろしてしまった彼に何度かノックをして返事を促したが、答えはなかった。
まさか、中で具合が悪くなっているのではないのだろうかとヒカルが心配を始めたのは、日が落ちてしばらくした頃だった。
食事の時間になっても彼は出てくる気配がない。
内線を鳴らしても、音源を切音しているようだった。繋がらない。
・・・主寝室と言っても、続き部屋にはバスルームもあるし、ミネラルウォーター程度であればクーラーボックスもある。
シャルルの居室の電灯が灯されていないことを確かめると、ヒカルはもう一度、彼の居る部屋の前に立った。

シャルルは寝室に入る前に「疲れているので、起こさないように」と念を押して扉を閉めた。
それが彼を見た最後の姿だ。
シャルルは脳を酷使するために、一度眠りに落ちるとなかなか目が醒めない。
寝起きも最悪の機嫌だ。
定期的に覚醒を促さなければ、そのまま軽い脱水症状を起こすまで睡臥の民になってしまう。
そのために、毎朝決まった時間にヒカルが朝一番の最高の状態の薔薇を届けていたのだが、今日はオフの初日ということもあって、彼の希望どおりに休ませてやろうと思ったことが間違いだった。
彼は今、普通の状態ではない。
欠かさず投薬している薬効が切れている可能性がある。
その状態を観測するために、このオフ期間を設けているのに・・・・・。
何のためにヒカルが随伴しているのか、これでは意味がない。
彼がゆっくり休みたいというのであれば、それでも良かった。
誰にも邪魔されずに、完全防音の主寝室で、無音の交睫を楽しむであれば、それでも良かろう。
けれども、どうもそうではないという胸騒ぎを感じずにはいられなかった。
・・・・シャルルが見せた涙が気になっていた。
情緒不安定気味であることは、確かなのだ。
それが疲労からきているものであれば、それは回復する。
しかし、そうでなかった場合には極度の鬱状態に陥り、考えもしないような行動に出たり・・・想定できないような人事不省の状態に陥って誰にも助けを求められない状況であったら、と思うと、ヒカルは扉の前を行ったり来たりして中の気配を伺えないか、と耳をそばだててみたりしたが、それは虚しい徒労に終わった。
ヒカルは何度か外の薔薇園から、主寝室を見上げた。
昔は・・・本来のこの別棟の住人の在不在を見上げた場所に立って、そこからシャルルの安否を確認するために、また見上げた。
何度も、何度も。
しかし彼女の見つめる先の部屋は分厚いカーテンが閉じられており、外から見ても中の様子がわからない。
でも、人の気配はするのだ。
確かに、シャルルは目覚めているようなのであるがそこから出てこない。
文字通り籠城だった。

外からの内線電話は非常用としてヒカルの居室に敷設されている直通電話だけ通じるようになっていた。
それ以外は、彼は完全に外との接触を遮断するつもりで居たらしい。
非常用に持たされているホットライン用の携帯電話も電源が切られたままだった。
メインスイッチが切断されており、強制入電さえできない。

・・・・シャルルは昔、自分の自我を保つために、不定期に外界から自分を遮断して過ごす期間を設けていたと聞いたことがあった。
彼はそれを自虐的に「冬眠」と呼んでいたが。
失調した時に取得するオフ期間は、ミシェルやルイがそつなく代行をこなしていたので、漏洩することのなかった秘匿すべき重大な秘密だった。
それは今夏から解消されるはずであったのに・・・・。
運命の人を求めて彷徨い歩くことはしないかわりに、彼は・・・また、若い頃の彼に戻って自我という幽邃の地に沈み落ちてしまっているのだろうか。

・・・・初日から騒ぎ立てるのも良くない。
ヒカルは思案した。
誰かを・・・ミシェルを頼って指示を求めることは簡単だ。
しかし、それではシャルルはきっと繰り返すだろう。
せめて、不調ではないことだけでも確かめられないのだろうか。

・・・ヒカルは再び扉をノックした。
「シャルル。・・・・具合が悪いの？」
彼はこの敷地と邸宅の主であり、鍵をかけて休む必要のない人物であるのに・・・・
「今日は・・・シャルルの口に合うかな、と思ったものばかりを用意したの。・・・だから一緒に・・・・」
「いらない」
低い声が聞こえてきた。
「・・・具合が悪いの？」
「しばらくひとりにしてくれないか」
彼の短い返事はそれっきりだった。
それ以降、彼女がどんなに話しかけても、シャルルからの返事はなかった。
確かに、彼の声だったのに。
確かに、彼は返事をしたのに。
どうしてなのだろう。
ヒカルには理由が少しも推し量ることが出来ない。

彼に応えなかったから、彼は傷ついたのだろうか。

違う。
・・・違う。
そうではない。

ヒカルの状態を見て、彼は愕然としていた。
だから涙を流して・・・ヒカルを労った。

ヒカルはぎゅっと唇を噛んだ。
自分が何をしなければならないのか。できることはただ一つだった。
彼女は扉の向こうのシャルルに声をかけた。
「不調でないのなら、それでも良い。私に会いたくないのならそれでも良い。
でも、ここはシャルルの家で、ルイの別棟で・・・・シャルルが誰とも会いたくないのであれば、私が出て行く。それなら、鍵をかけてそこに籠もることもないでしょう。もっと広く敷地を使って休息して欲しい。・・・・シャルル。ねぇ、聞いているの？」
返事はなかった。
彼女は軽く溜息をついた。
「食事の用意、しておくわね。・・・・これからこの棟を出ます」
誰かに何も伝わらない苦しさを、ヒカルもシャルルも知っているはずなのに。
どうして・・・・シャルルに何があったのだろうか。
それすらわからないことが口惜しい。
甘美な恋人同士の時間を期待していなかったと言えば嘘になる。
この休暇中に、彼女はシャルルと同衾するかもしれないと・・・いや、そうなるだろうと思っていた。
けれども、シャルルは深い憂いの瞳で、ヒカルに背中を向けてしまった。
彼女の体調を案じてのシャルルの行動だ、と言い切れない・・・何かがシャルルの中でまだ思い切れていないような、そんな様子だった。
ヒカルとシャルルはあれほど話し合ったのに。それでも、まだ、シャルルの憂いは去っていない。

ヒカルはぐっと拳を握って、主寝室を後にした。
今夜、彼女は先ほどシャルルに述べたように別棟を出て本邸に移るつもりだった。
彼女に会いたくないのではなく、誰にも会いたくないのだ。
・・・・・その前に、やるべきことがあるけれども。

誰に聞かせるでもなく、ヒカル・クロスは呟いた。
茶色の瞳を見開いて、肩を一度大きく持ち上げた。
・・・・シャルル。私はね、あのマリナとカズヤの娘なのよ。
愛しい人に向かって、心の中で、そう宣告した。

夢見る魚　02

■08

シャルル・ドゥ・アルディは最初の幾本目かで数えることを止めてしまった煙草を口に銜えた。
ベッドの上で、最小限の動きでもって腕を動かす。
ガスがなくなってしまったようで、最後の炎を出し切る。
彼は小さく舌打ちをした。
そして、枕元のライターが役割を終えると、シャルルの細く長い指先から空を切って床に投げ捨てられた。

床がライターを受け止められずに、硬質な音がして、僅かに滑って行く音がした。
その音さえも障ると言いたげに、彼が眉根を寄せて、煙草を勢いよく吸って吐き出した。
すでに、寝室の中央にあるローテーブルの机上の灰皿は吸い殻で一杯だった。
普段の彼であれば、そんな見苦しい景色が彼の視界に入ることさえ赦さないのに。
倦怠感が彼の全身を包む。
今は必要最小限の動作しかしていない。
このまま・・・ここで静かに息を止めてしまえばどれほど楽になるのかとふと考える。
そして水分さえ補給していれば、人間は何日生きられるのか、と頭の中で密かに計算している自分自身に苛立ち、そしてまた煙草に火をつける。
ひっきりなしに煙草を吸い続けるので、室内は白く靄がかかっているように煙っている。シガレットケースの中身がなくなると、彼はストックされている吸湿性の高い保存箱から直接煙草を取り出した。
いつものシャルル・ドゥ・アルディであるならば考えられない行為であるが、誰も彼の姿を見ることはないし・・・これが本来の彼の姿の一つなのだと自分で受け入れることをした時。
彼は・・・シャルル・ドゥ・アルディであってシャルルでなくなる。

途中何度か、扉をノックする音と、くぐもった女性の声が聞こえたが、彼はそれらを無視していた。
内線電話も何度も鳴るのでとうとう、それらのメイン電源を切断してしまった。
どうして、誰もかれも・・・自分を静かな空間に浸しておいてくれないのだろうか。
甘美な自己陶酔の瞬間ではない。
ただただ・・・ひたすら虚無に沈むこの時間が、シャルルをかろうじて正気に保っている。
昔は不定期にこのような状態になったが、今では・・・毎夏、自分で計画したようにこの状態に陥る。
意識がないわけではない。
陥るな、という瞬間と、その虚無感を越えたなという「最初と最後」は認識している。
しかしその間の時間に空白が訪れるのだ。
まったく記憶が欠落しているというわけではない。
自分が・・・自分ではない誰かになるのであれば、捨ててしまえる命だと思った。
誇りのためなら、死ねる。そう思っていた。
命さえ惜しくないと言ったのに、彼は昔の自分に戻ることは許可してしまっている。

彼は溜息をついた。
現実を逃避したいのではない。ただ・・・気怠い虚無感が彼を襲う。
こんなことを繰り返しても、あの人は帰ってこない。もう一度、シャルルを目覚めさせるように手を尽くす人はもう居ない。
彼はアルディ家の当主として命じれば、誰も逆らうことが出来ない。
この部屋に入ってくるなと言えば、誰も入ってこない。彼がたとえ餓死していたとしても、それは絶対の命令であり、当主の命を優先とするように、という指示はまっさきに削除してしまった。
この期間、彼は完全にオフ休暇となるためにあらゆる指示を各方面に残している。
もう、アルディ家の当主でないと決断や判断できないものという事項はとても少ないのだ。
シャルルでなければならないものというのはアルディ家の事業の中では限られている。
シャルル・ドゥ・アルディというブランドが確立されてしまっており、事業も拡充をしなければならない方面についてはすでに手筈を整えている。
・・・今は維持の期間であり、代が変わればそれも縮小する傾向になっていくだろう。
彼を凌ぐ者が現れない限り。
・・・これ以上肥大化することは難しい。
軌道には乗せたのだ。・・・・だからもう、良いだろう。

シャルルはそこでまた煙草を吸った。
この時間が一番・・・危ないのだ。
夢と現を行ったり来たりするこの瞬間が、彼の危惧するもっとも危険な症状だった。
昔に戻ることはもうないだろう。けれども・・・けれども、この曖昧な瞬間については解消されないようだった。
これは改善指摘事項として、記録すべきだと脳内で判断した。
この時間が最も孤独だ。
いつ終わるかわからないからだ。
そして、いつ再び始まるのかさえ計測できなくなる。
それまでに彼は薬の効力が切れるまでの時間、症状、そして特徴などを細かく分析するためにここに居る。
だから、誰も寄せ付けない。
この期間を過ぎれば・・・
彼の躰の中で潜伏する彼の後ろ暗い罪とも言えるような「それ」との闘いは始まったばかりである。
誰にも助けを求めることはしない。
差し伸べられたどんな手も・・・彼は手を取らない。
これは自分の贖罪だからだ。
あの人を愛した罪が、今、アルディ家という澱んだ血族を滅してしまおうとしている。
それも良い方策だと考えたこともあったが、それでは・・・罪のない者の命も奪ってしまうことになる。

このまま自分の体力が消耗するか、いつもの夏のように「シャルルであってシャルルでないシャルル」になって、自らマリナを求めて彷徨い歩くのか・・・根比べだと思った。

彼はベッドの中で天井を向きながら、銜えていた煙草を枕元の灰皿に投げ入れた。
時間の感覚がなくなっていくので、煙草を吸う時間と本数だけが、経過を知らせる。
それから喉の渇きが彼はまだ生きているのだと知らせる。

睡眠も必要なかったし、陽光の明暗は彼には煩わしいだけだった。

青灰色の瞳が焦点を失って、ぼんやりと天井を見上げているばかりだった。
あの人がまたやって来るような気がした。
こうしていれば、賦活させるために、彼女がまた・・・命に背いて、ここまでやって来るような気がした。
当主であるシャルルの命令に逆らった、唯一の人。
当主の目覚めを優先させた・・・・残酷な彼のファム・ファタル。
目覚めてすぐに、彼女は彼女の友人の命を救って欲しいと言った。
シャルルのことではなく。自分自身のことでもなく。
彼女は・・・いつも他者のことについてだけを、シャルルに希った。
自分のことは何も願わない人だった。
だから・・・彼女の長い間の悩みも、シャルルにではなくジルに打ち明けた。
彼は最高の名医として彼女を癒せたはずなのに。
その結果、マリナは待ち望んだ子を産むことになったのだが・・・・。

彼女の娘。
そこでシャルルは考えを止めた。
彼女の・・・彼女の娘。永遠の晄と書いて、昶と名付けられた娘。

どんな声だっただろうか。
先ほどの、扉の向こうで声をかけてきた女のような声に近かった。
・・・・いや・・・近いのではなく・・・そのものだ・・・・
混濁する意識の中で、シャルルはゆっくりと瞬きをした。
滲んだ視界の中で・・・白く澱んだ空気の層の中で、何か・・・茶色い色が蠢いたのを認識したからだ。
それは、ベッドの際で、じっと・・・シャルルを見下ろしていた。
「それで気は済んだ？」

両手に腰を当てて、横臥しているシャルルを見下ろしている人物が居た。
先ほどの声の主だった。
・・・・・・・彼はゆっくりと唇を開いた。掠れた声を漏らす。

「・・・・ヒカル」
「シャルル。シャルル・ドゥ・アルディ。聞こえている？」

滅多に彼女は怒りを露わにしないが、今、目の前に居る人は、シャルルに対して憤っていた。
険しい声で、彼の名前を呼んだ女性は、・・・待ち望んだあの人ではなく、あの人の娘のヒカル・クロスだった。
■09

「シャルル・ドゥ・アルディ。私は怒っている」
普段怒りを露わにしないヒカル・クロスは、怒りの表現を知らない。
けれども、彼女を掩っているのは、間違いようもなく憤りと悲しみとそれから・・・少しばかりの安堵だった。
「生きてるのか死んでいるのか、教えてくれたって良いじゃない」
「死んでいたら教えられない」
「勝手な理屈はいらない」
ぴしゃりとやり込められて、シャルルは口を噤んだ。
叱られたことなど数えるほどしかない。父に叱責されて、手の甲を打たれたくらいだ。
しかし・・・あの人はよくシャルルを窘めた。
時には叱咤した。
彼は間違えないのに、それは違うとよく言った。

非常に良く似た顔立ちの・・・・それでも決してあの人ではない、薄い茶色の瞳の持ち主は、彼の脇に立っていた。
「それより、どうやってここに・・・・」
ヒカルは頬を引きしたまま、軽くシャルルを睨むとくるりと背中を向けた。
そして窓辺に行き、電動のブラインドや遮光カーテンを手動で開けていく。
しかし外は完全に夜になっていた。
それでも、漏れる本邸からの淡い晄に、シャルルが眼を細めた。
「ヒカル。・・・閉めろ」
「いやよ。・・・・人間の躰はね、日光を感じないと、サイクルがうまく働かないようにできているのよ。それから夜の微妙な暗さも。
それくらい私が言わなくてもわかっているのに、シャルルはどうして小さなこどもみたいなことをするのよ」
低く早口でそう言って、ヒカルは次々に部屋に晄を入れ始めた。
そして窓を開け始める。
夏の暑い空気が入り込んできて、シャルルは顔をしかめたがヒカルは無視した。
温度差のある風に、束ねられたカーテンが膨らんだ。
ヒカルは良い風だよ、と言って茶色の髪を靡かせた。

「こんなに煙っていたら・・・火災と思われても仕方がないわよ」
寝坊にも程があるわ
ヒカルそう言うと、そこでようやくシャルルの方に向き直った。
天蓋付きの大きなベッドの中で、シャルルが横向きになって晄に背を向けた。
一瞬・・・ヒカルの姿が白く光って、本当に天使のように見えた。
彼女は彼をてんしさん、と呼んだが、彼にとっては、彼女こそが永遠の晄であり、天から遣わされた人なのだと思っている。

横を向いて視線が移動したので、反対側に、最高の状態の薔薇が一輪だけ、クリスタルの一輪挿しに活けられているのが見えた。
青灰色の瞳をゆっくり瞬かせる。
彼女はこれを届けに来たのか。

ヒカルは室内を見回して、大きく溜息を一度だけ吐き出した。
そして、煙草の煙が対流を始めたことを考慮していたのか想定以上だったのか、少し咳き込んでむせた。
シャルルはそこでヒカルに向き直った。

煙が目に染みて、涙も出ている。
・・・・彼女は、若いのだ。
こんな狂態を見て・・・・彼女が心変わりをしたら、楽になるのだろうか。
いや、駄目だ。
・・・それでもシャルルはヒカルを愛することを始めてしまったから。もう、止められない。

「・・・・私がどこからやって来たのかとシャルルは聞いたけれど」
そう言って、ヒカルは彼に答えを教えた。
この上のフロアの天井裏の床を抜いて、通気孔を通って・・・・バスルームの換気扇を壊して入ったの。
・・・音を立てないように作業をするのは大変だったのよ」
彼女は勝ち誇ったように言った。
が、シャルルは呆れ果てて絶句し、そして彼女に言った。
「君は正気の沙汰じゃない」
「その言葉、そっくりシャルルに返す」
ヒカルが即答したので、彼は苦笑した。
こういう言葉を発する娘ではなかったはずなのだが、どこで覚えたのだろうか。

・・・そう、シャルルの知らないヒカル・クロスの側面は、たくさんあるのだ。
あの人やヒカルが知らないシャルルの暗い狂気と同じように。
あの人も、シャルルに相談しなかったことがあった。
ヒカルの中にも、シャルルの知らないヒカルが居る。

彼女は軽装だった。
相変わらず長袖を着ていたが、袖は汚れていたし、よく見れば彼女の滑らかな頬も汚れている。
空調を一度停止させて作業をしたのだろうが、汗が背中に張り付いていて、彼女の締まった背筋が透けて見えていた。
両袖や両腿から汚れを払い落として居たが、それでも彼女は美しかった。
「男の寝室に忍んでくる娘が、アルディ邸にいるなんてね。
・・・もう繰り返さないでくれよ」
「あら、こうしなければシャルルに逢えないのであれば、いつでも繰り返すわよ」
シャルルの言葉に、ヒカルは苦笑して反論した。
これではシャルルの分が悪い。
彼は何を言っても、憤っているヒカルを鎮めることは出来ないと思い、しばらく黙っていることにした。

「それより、何をひとりで沈黙しているの？私の言葉を忘れたの？シャルルが言ってくれた言葉を忘れたの？・・・・この夏の休暇は、私と過ごすのよ、シャルル・ドゥ・アルディ」
彼は痛哭の声を漏らした。
最も会いたくない人に、会ってしまったから。
会いたくないのではない。
彼女を傷つけたくないのだ。
誰よりも何よりも。
彼女のすべてが欲しいと思いながら、彼女のすべてから遠ざかりたいと思う。

それなのに・・・・
ああ・・・・

あの人と同じだ。
彼の周りに誰もいなくなった時に彼女はシャルルに寄り添った。
シャルルが皆に囲まれている時には、彼女はシャルルを振り向かなかった。
・・・小さな歎きの声を、彼女は聞きつけてやって来てくれた。
今度は、あの人の娘が、シャルルの傷歎を癒そうと・・・やって来た。

「君がキスさせてくれたなら、起きるよ」
彼は彼女に囁いた。

昨夏彼女にそう言って、彼女を酷く傷つけ、自らも自己嫌悪に陥ったことを思い出した。でも、今なら、彼女に心からそう言える。
同じ言葉なのに、なぜこれほどまでに意味合いが違うのだろうか。

「眠り姫みたいね」
ヒカルが笑った。
前の夏のヒカル・クロスではなかった。
愛する人を目の前にして、はにかんだように微笑む・・・・光り輝くという意味を持つ名前の通りの・・・・昶る人だった。

「オレは誰も入ってこないように、と言ったと思ったけれど」
「そうだったかしら」
ヒカルは首を傾げて、肩をすくめた。
羽枕に頭を乗せたまま、シャルルは軽く寝返りを打った。
「どうしてオレの言葉に従わないんだ」
「・・・・シャルルが来て欲しいって言って居るように思ったから」
その言葉に、シャルルが唇の端を歪めて苦笑した。
確かにその言葉は正解であったが、それでも簡単に認めるわけにはいかない。
シャルルは、シャルル・ドゥ・アルディなのだ。
たとえ季節や時代を遡ったとしても。
今の自分がヒカルの望んでいるシャルル・ドゥ・アルディではなかったとしても。
今、こうして・・・あの人と惑うこともなく会話を繰り返しているから・・・・
彼のこの気持ちは、運命の人に向けられた惑乱した愛ではなく、彼のもうひとりのファム・ファタルに・・・ヒカルに向いている愛なのだということはわかっている。

「随分なうぬぼれだね」
「うん」

ヒカルは素直に認めた。
暑いが乾燥した風が室内を巡り始めた。
夏の夜の風は・・・間もなく夏が終わることを告げていた。
彼女が感じていた夏の終わりを確信させるような、そんな風だった。
シャルルはこの風を知っている。
それまでは、ヒカルと凪ぐことを共有しなかった。
夏のこの時期は彼はいつも狂うからだ。
・・・・だから教えなかった。
でも、これからは違う。
夏の終わりの風を、ヒカルと一緒に受け止めるのだ。
彼の白金の髪が、風に揺らいだ。
■10

ヒカルはシャルルのベッドの脇に腰掛けようとして、座るのを躊躇った。
酷く汚れているから、と言って彼女はまた立った。
そして、膝立ちをして、彼の枕元に傍寄り、目線を彼と同じ位置にした。
汚れていない、利き腕と違う方の腕を伸ばして、ゆっくりとシャルルの髪を指先で梳いてやった。
そして彼女は身を屈めると、シャルルのこめかみにキスをひとつ、落とした。
「・・・・シャルルがここに居ても、薬が切れた時のことを懼れても・・・私は傍に居る」
彼女は囁いた。
彼の懼れを承知していた。
目の前の彼女の愛する人は、ヒカルのことを、ヒカルと認識できないことを危惧しているのだ。
だから・・・・ここに閉じこもった。
ルイの別棟に入る理由はそれだけではない。

ヒカルは・・・込み上げてくる思いで言葉を詰まらせながらも、シャルルに伝えようと思った。
「ルイが・・・・ルイがシャルルに戻りたいと思ったのと同じように、シャルルもルイに戻ったら、彼が救われると思った？ルイの過去を認めてあげれば、彼は戻ってくると思った？・・・・そうじゃないよ、シャルル」
シャルルは決して間違えないのに、ヒカルは違うと言った。
かつての、あの人のように。
シャルルは眼を瞑った。

・・・・薄い唇を噛んで、眉根を寄せる。

シャルルと共に居る時には決して語らなかった、彼と彼女の間に立つ・・・もうひとりの・・・青灰色の瞳の持ち主のことについて、ヒカルは口にした。
茶色の瞳が、彼の薄い青灰色の瞳を覗き込んだ。
何もかもを見通すような、そんな聡い瞳に、シャルルはまた悲しそうに双眸を歪ませた。

やがてヒカルはそっと囁いた。
「あのときのシャルルに戻ろうとしたのではなくて、ルイの過去を回帰しようとしたの？」
「・・・・・・・」
シャルルは黙っていた。

「この館を選んだのも。・・・ルイが何を思っていたのか、跡をたどろうと思ったの？」
「どうかな」
それだけで十分すぎるほど明瞭な回答だった。
彼がルイの事を案じていない訳はないのだ。
シャルルは・・・ルイのことを放置できないからヒカルとの距離を縮めない。
口ではヒカルから寄るのを待つと言うが、彼が・・・ルイが快癒するまでは、シャルルはヒカルの望まないことはしないと・・・・ヒカルは知っているから、シャルルが実行しないだけなのだということを、ヒカルは承知していた。

そして、彼は、ルイが決して自分　の過去に戻ろうとしないことに心を痛めている。
あえて、そうした愛の注ぎ方をしたのに。
彼が戻ってこられないことに。
そして、ルイの戻る過去がないから、彼はシャルルになってしまったということを憂えて居る。
いつか・・・・シャルルそのものとしての記憶が欠落していることに、ルイは気がつくだろう。
自分はシャルル・ドゥ・アルディではない、とすでに察知しているのかもしれない。
それが長引けば長引くほど、ヒカルの満身創痍の状態は続く。
ルイの病は感染から発症しているわけではないのに。
そしてシャルルがなかなか快癒しないルイを案じていることを知っているから、せめて肉体だけでも早急に治療してやりたいと言って、ヒカルは自分の躰を差し出すのだ。・・・・まるで贖罪の贄が自分そのものであるかと言うかのように。

だから彼は誰も寄せ付けない。
彼は、過去の自分になるのはまだ良いと思っていた。
しかし、自分ではない人物になるくらいなら・・・命を絶っても惜しくはないという誇りを持っているシャルルが、敢えて・・・・「彼が決してなり得ないもの」になるかもしれない危険を冒して、ルイの別棟に籠もる。
シャルルは・・・・それなのに、ヒカルにそんなシャルルの姿を見られてしまうかもしれないのに・・・それでも・・・・彼女にだけはシャルルの近くに寄ることを赦した。
この意味を、ヒカルはきちんと受け止めなければならない。
そう、思った。

ヒカルの瞳が潤み始めた。
泣かないと・・・そう決めたのに、彼女はまた涙を流す。
「とにかく・・・無事で良かった。心配した。このまま、逢えなくなってしまうと思った。それはいやだから、どうやったらシャルルに逢えるのか・・・それを考えた。考えるより前に、躰が動いていたの。・・・シャルル・・・・もう・・・・こんな寂しい気持ちはイヤだ。
誰かに置いて行かれるのはもうイヤだ」
絞り出すような、切実なヒカルの声に、シャルルは無言で聞き入っていた。
心地よい音の葉が彼を現実に戻す。

煙草の煙の燻る中で、彼と彼女は・・・しばし無言で見つめ合っていた。

ヒカルは大人になった。
大人になって・・・・誰かと離れる苦しさも、誰かと寄る喜びも知った。

この人を、愛して良かったと思った。
互いが互いをそう思った。

シャルルがじっとヒカルを見つめていたが、やがて、柔らかく微笑んだ。
「オレが何を考えているか教えてあげるよ」
シャルルはそう言ってヒカルに囁いた。
「毎日のように泣く人を、オレはどうやって涙を止めようか、思案しているところだよ」
「自分の身体を労って」
彼女は囁いた。
「まだまだ消費するには惜しいわよ。まずはゆっくり休んで」
ヒカルは笑った。
彼女の身体から、汗が蒸発して甘い薫りを漂わせていた。
シャルルはそんなヒカル・クロスを見て、小さく言った。
「キスを。・・・・起きるのはそれから」
先ほどの言葉を繰り返した。
彼が恋うているのは、慈愛のキスではない、とシャルルの瞳は告げていた。
ヒカルがちょっと顔を赤くして、唇を横に引く。
・・・・シャルルから接吻をすることは多いが、ヒカルから愛を注ぐのは滅多なことが内限り、ない。
「ほら、はやくして」
シャルルが急かす。
いたずらっ子のように・・・眼を閉じて、微笑みながら彼は言った。
ヒカルは誰も居ないとわかっているのに、頬を染めて、周囲を見回した。
煙草の香が強く残るこの空間で・・・・シャルルの目覚めを促すキスをしてくれと彼が言う。
愛には上下関係があると思っていた。
けれども・・・こうして・・・何も考えずに、誰かにキスを求めたのは・・・どれくらい久しぶりのことなのだろう。

何度も繰り返した口付けなのに。
酷く動揺する。
目の前のシャルルは、彼女の知っているシャルルなのだろうか。
それとも・・・・彼は誰かを思い浮かべているのだろうか。
しかし疑いたくはなかったので、考えるのをやめた。真実と違うのではないのかと思うことはしたくない。
この想いが・・・間違いであるという前提では成立しないものであるということは、わかっていたからだ。
彼のことをヒカルはこよなく愛している。
それだけで良い。
シャルルが愛している人ごと、ヒカルは彼を愛している。

目の前の人は美しすぎた。
整った顔立ちは経年を感じさせないし、染み一つない白い頬に、高い鼻梁。
そしてくっきりと彫りの深い顔立ちの目鼻の間隔は理想的なで、申し分のない配列だった。白金の睫が閉じられて、彼は少し微笑んでいるように見える。
ヒカルからシャルルに口吻をすることがないことを知っているからだ。
・・・・意地悪したいのは、ヒカルの方なのに。
時々、シャルルはヒカルに対してとても・・・そう、とても幼くなる。

ヒカルは思い切ったように、息を吸った。そして止めた。
まるで、海に潜るときのように。意を決して。
そして眼を閉じて・・・
彼の唇に自分の唇を重ねた。
「・・・・シャルル」
触れるだけの軽い口吻に飽きたらず、シャルルがヒカルの細い首に腕を回したのだ。
彼の腕の重みで、持ち上げたはずのヒカルの頭がまたシャルルに戻っていく。
羞恥のために呼吸を止めていたヒカルが、想定外の事態に息苦しくなって、彼女が唇を開いた時を狙って・・・・シャルルが彼女の胎に入っていった。
微醺を帯びたように彼女の顔が熱くなった。
シャルルの頬に重なって・・・・いつもは感じない煙草の香りがヒカルの心搏を乱す。
彼はヒカルを捕らえたまま、決して離そうとしなかった。
片方の手の平で彼女の顎を掴み、そして回した腕には力が込められていて、ヒカルはあっという間にベッドに押しつけられてしまう。
長くて深いキスを交わした。何度も、何度も。

シャルルは、ほんの少しでも離れていたくないのに、シャルルはこの口付けなしにどうして過ごしていられたのだろうと考える。
呼吸をするために喘ぐヒカルは・・・やはり海からやってきた海姫なのだと思う。
美しい鱗を持っているのに、外気に触れて、欣喜の喜びに震えながら、同時に苦しみ喘ぐ。
獣王に穢されることを覚悟して陸にやって来たヒカルは・・・・贖罪の娘なのだと思い知る。彼女のすべてが欲しい。・・・・身体ではない。彼女の・・・何もかもが欲しい。
そう・・・ルイに対するヒカルが自ら説明できない気持ちさえシャルルは手に入れたかった。

唇を離したシャルルは、静かに言った。

「それからもうひとつ言っておいた。
・・・・疲れている時ほど、ヒカルの肌が恋しい、と言ったけれど、忘れてしまったのか？」
そしてまた頭を僅かに持ち上げて、彼女の唇に向かって彼は起き出した。
ヒカルのキスが、彼を覚醒に導く。
彼女の捧げる薔薇の香気が、彼を目覚めさせる。
戻れない路から戻るための道しるべとなる晄を携えて。

ヒカルの手が・・・彼の胸の上に乗り、そしてぎゅっと拳が握られた。
少し、震えていた。

恋人達の甘い抱合に熱せられたかのように、夏の風が彼らの周囲を吹き乱した。
■11

むっつりとした顔のシャルル・ドゥ・アルディに、ヒカル・クロスは苦笑いを浮かべながら、彼女は手元のロイヤルブルーの茶器に紅茶を注いだ。
彼が好む茶葉を用意したのだが、彼は喜ぶどころか、ますます不機嫌になっていく。
・・・・空は白み始めて、いつしか夜が明けようとしていた。

「煙草の煙の充満する部屋はシャルルに良くない」とヒカルが主張したので、結局そこから引っ張り出されて、アルディ家の当主は、ゲストルームのシャワーブースを使用させられたことが気に入らなかったらしい。
「だって、マスタールームのバスルームの換気口を壊してしまったから」
とヒカルが言うと、シャルルはますます顔をしかめた。
「静音設計のものの中で、あのモーターは日本の職人芸を持つ者しか作れないからスペアがない・・・手に入れるのは苦労したんだぞ」
当分故障したままになりそうだと知って、彼はヒカルの暴挙を窘めたのだ。

「だったら本邸に行けば良いじゃない」
「貴女はいつからそうして意地悪になったのかな、ヒカル」
シャルルは溜息を漏らした。

「貴女はどうしていつも考えつかないような行動ばかり取るのかな」
「シャルル・ドゥ・アルディでも想定外があるってことよ」
かつては、彼に向かって・・・突進して行った少女は、その時から変化して、大人びた表情も見せるようになった。
けれども、本質は変わらない。
彼女の内に眠る、大事な者を護りたいという熱情が、シャルルをこちらに呼び戻したのだ。
希有なる生まれの人だ。
そして、この場所でこんな狭い空間でシャルルと過ごすために・・・彼女は様々な検査や細胞採取を前倒しで進めてきた。
だから、彼女は夏でも長袖を着ている。
・・・・いつもいつも満身創痍のヒカルは、それでも愚痴や文句や不平を露わにしない。
自分を大切にしろ、とシャルルのことにだけは憤慨する。

しかしこの会話は悪くない。
シャルルはフランスの華と呼ばれているが、彼の会話について来られる者はごく限られている。
知能指数が高すぎて、同レベルの者しか理解できないのだ。
会話が終わらないうちに次の会話が始まる。
そして、会話しながら次の次を考えている。
話し終わったときには結論が出ているし、その結論について語るつもりはないので、多くの者が困惑し、そして彼から離れていく。
それが才ある者の特徴だと理解している者たちの囲いの外では通用しない。
彼の容姿や財力や・・・その他彼が「取り戻した」ものに愛着する者だけしか、残らない。

普段は、彼の方が会話の中身をコントロールするのであるが、ヒカルと居ると、どういうわけかそういった配慮をほとんどしなかった。
そして彼は彼女よりずっと年が上なのに、あたかも・・・・そう、彼が戻りたいと思ったあの時代の友たちとの会話を彷彿とさせるような口ぶりになってしまう。

これは意識していることではない。

シャルルは決して自分を取り繕ったりしないはずなのに、どうしても・・・ヒカル・クロスという人物の前でだけは・・・彼は他の者に対して違う行動を取るらしい。
なぜなのだろう。
彼は生涯かけて研究しなければならない題目なのかもしれない、と思った。

「どこかで調節しないと、すっかり昼夜逆転している」
ヒカルがそう言って溜息をついたので、シャルルは薄く笑った。
「ヒカルの計画通りにはいかないよ。・・・それはオレの予想通りだけれども」
シャワーを浴びて、意識がはっきりしてきた。
まだ髪が僅かに湿気を帯びているが、ヒカル・クロスの目の前に居る人物は、彼女のよく知るシャルルであった。
物憂げで上品な青灰色の瞳をやや伏せて、温度変化によって変化していくティーの深い飴色を眺めていた。

決められた時間以外は誰も入棟しないようにという取り決めになっているので、別邸の中は静寂に満ちていた。

「この後、少し休んだら？怠そうな顔をしている」
ヒカルが提案すると、シャルルは頸を横に振った。
「皺だらけのベッドシーツに横たわる気はないよ」
自分で籠もっていたのに、整えられたベッドでないと使用するのはイヤだと言う我が侭な恋人に、ヒカルは呆れながらも、彼の美しい横顔に見入ってしまう。
シャルルは夏の暁光の中で退廃的な表彰を浮かべ、ゆっくりとティーカップを持ち上げていた。
夏の休暇を一緒に過ごそうと言ったのはヒカルからなのに、それでもその申し出にシャルルがウイと言った時、ヒカルの複雑な心中を見透かしたかのような表情だった。
彼女に様々な考えがあり、そしてそれを尊重する、と言ったシャルルは、ヒカルの前ではきっと・・・惑わないのだろう。精神力の問題ではない。
惑う前に、姿を消して見せないようにするのだろうと思っていた。
そして彼はそのとおり実行した。
惑いそうになり、ヒカルの寝室で彼女の状態を考えずに・・・身体を重ねようとした。

だからひとり閉じられた空間で考えに耽り、ルイのことを考え、ルイの介助をしているヒカルの想いを疑ってはいけないと自らを叱咤し・・・そしてまた戻ってしまうかもしれないという自分の体調を客観的に記録していく。
これはシャルル・ドゥ・アルディでなければできないことだった。

「それなら、私の居室で休むと良い」
「ヒカルと一緒に？」
「私はそこのソファで休む」
「どうして？」
なぜ、と聞かれてヒカルは返答に少し間を置いた。
白金の髪の、青灰色の瞳の人を直視することが出来なかった。
かたん、と時間を計測するための小さな砂時計がすべての砂を落とした静寂でもって自己主張したので、ヒカルは静かにティーを注いで自分のカップを満たした。
テーブルの上座にシャルルは座り、そして90度斜め脇にヒカルは居た。

・・・・アルディ邸の夏の朝はとても静かだった。
ヒカルは大きく息を吸う。
気怠い感覚を払拭するための行為であったが、何か・・・自分の中の何かが・・・ふっと軽くなったような気がした。
この一年に様々なことがあった。悲しいことも、嬉しいことも。
そしてそのすべてをシャルルと一緒に共有してきた。
いや、違う。
もっと前から。
彼と出会ったあの日から。
そうだろうか。
もっと・・・もっと前からのように思う。
これは遺伝子のなせる奇蹟なのだろうか。
あの人の娘だから、シャルルを愛したのだろうか。
贖罪のために、彼に愛を捧げることで何かを赦されるように・・・そういう定めなのだろうか。
違うと思った。
定めたのは運命でもない。
彼女と彼の長い時間が、彼女の愛を生み出したのだ。
別れも経験し、そしてまた巡り会って・・・・・彼に良く似たルイの魂を癒すことが出来ないのにそれでも惹かれる。それでも・・・シャルルを忘れることが出来なかった。
涙の数だけ・・・涙を我慢した数だけ自分は大人になって行った。
そして少しずつ、マリナの娘というヒカルではなく、ひとりの人を愛するヒカル・クロスになっていった。
誰を傷つけても良いとは思わない。
けれども・・・この思いを誰かのために自分の中でなかったことにはできない。
■12

「シャルルと会ったのは、夏だった」
ぽつり、と彼女は言った。
「あの日は暑くて・・・どうしてこんなに暑いのに、わざと暑くなるような服を着なくてはいけないのか、と駄々をこねたことを覚えている」
シャルルは黙っていた。
「あのときに、見たこともないような綺麗な男の人が・・・弱って横たわっていた。涙をたくさん流して・・・とても悲しそうなのに、あんまりにも透き通りそうで綺麗で・・・不謹慎だったけれど、とてもきれいだなと思った」
シャルルは黙っていた。

あれから、幾つも夏を経験した。それなのに、シャルルの夏を知らなかった。
自分の中で沈む両親への悲悼に酔い痴れていて、ヒカルはシャルルの本当の奥底の苦しみを知らなかった。
今も。今も、シャルルは深く憂えている。
一緒に、一生、傍に付き従うと誓ったのに。
娘もなく、父でもなく・・・年齢や人種や国籍やその他すべてのものを越えて、今、ヒカルはシャルルの傍にいるのに。
「・・・・私はシャルルを愛している・・・・・だから、夏のシャルルも知りたいの・・・・」
誰かと一緒に生きていくという希望を捨ててしまったシャルルが・・・もう一度人を信じようと思った。
ヒカルにはそれがシャルルからの愛の呼応そのものなのだ。
彼が彼女に明かさなかった、夏のシャルル・ドゥ・アルディを知ってなお、愛おしいと思う気持ちがあることを、どうしたら彼に伝えられるのだろうか。
今度はヒカルの方が沈黙に苦しくなって、下を向いてしまった。

「ヒカル。上を向け。・・・・下を向いてもそこには何もない。ヒカルの答えは何も落ちていない」
彼女は唇を横に引いて、顔を上げた。そのまま下を向いていれば、涙を落としそうになってしまうからだ。
涙顔を毎日見せては、さすがにシャルルを気鬱にさせてしまう。
・・・・残された時間は少ない。
その間だけでも・・・穏やかにシャルルに過ごして欲しい。
そう思ったので、ヒカルは顔を上げた。

かたん、と音がして、椅子からシャルルが立ち上がった。
彼は大きく溜息をつくと、貴女はまた涙を流すのか、と吐息混じりに歎いたので、ヒカルも慌てて立ち上がって、笑顔を作った。
「シャルル。疲れているのよ。私も少し休むから・・・・シャルルも少し休んで・・・・目が醒めたら散歩をしましょうよ」
彼女はそう言って微笑んだ。彼は相当気怠そうで、深い双眸には疲労の色が見えていた。
ヒカルの回顧について耳を傾けていたシャルルには、休息が必要であることは明白だった。
どんなときにも、どんなときでさえも・・・・彼は自分よりヒカルを優先させる。

彼は自分のことを愛していないのだ。
救えなかった人が居る。救いたいと思っていても限界がある。
彼がどんなに尽力しても、多くの命が失われて・・・そして彼は絶望したことがあった。
ヒカルの母の悩みを解消してやることができなかった。
ルイを癒すことができない。
それは、彼の責任ではないのに、彼は自分を責め続ける。
どうしたら、ヒカルはシャルルの心に触れることが出来るのだろうか。
せめて、近づくだけでも・・・・彼の孤独な魂の重荷を分かち合うことはできないのだろうか。

シャルルは立ち上がってヒカルに近づくと、彼女の肩に片方の手の平をあてた。
そしてもう一方の手の平で、反対側の肩に手をやると、両手に少し力を込めて、ヒカルを自分の身体の前に向き直らせた。
「ヒカル」
彼は小さな声で囁いた。
すぐ近くに・・・彼の身体があって、ヒカルは胸が苦しくなる。
傍に居なければ寂しいのに、近くに居ると苦しくなる。
シャルルがヒカルを見下ろしている視線を感じて、彼女はまた下を向いてしまう。
彼は・・・あのときから変わらずに、美しいままだった。
私の天使、と言ったことさえ恥ずかしくなるほどに。
彼の永遠の晄になることができるのだろうか。
稚拙で矮小な自分が・・・フランスの華と呼ばれる人の傍らで、彼を支えることが、できるのだろうか。

「ヒカル。・・・上を向いて」
シャルルが、また、彼女の名前を呼んだ。
決して、他の誰かと間違えなかった。

シャルルが少し腰を落として屈み込み、そしてヒカルの唇を攫った。
・・・・今度は、彼女の煎れたティーの香りが広がり、ヒカルは眼を閉じた。
上を向かされて顎が上がり、唇が僅かに開いて彼を迎え入れる。
・・・・大人の仕草を教えたのはシャルルだ。
芳醇で濃厚で・・・そしてとても切ない。
彼女は変化していく自分に戸惑いながらも震えながらシャルルの愛を受け止める。
口付けだけで、全身が細かく打ち震えるのに。
その先がまだあるのだ、とシャルルは言う。
自分が・・・シャルルによって、今のヒカルではないヒカル・クロスになることを、シャルルは望んでいる。
いつの間にか、ヒカルはシャルルの身体にしがみついて、眉根を寄せ、彼の嬖愛を浴びて、立つことさえままならくなりそうなほどに震えていた。
シャルルは薄い唇を離すと・・・・
ヒカルの瞳を覗き込んだ。
青灰色の薄い・・・濁りのない瞳が、ヒカルの心の奥底までを見透かすかのような瞳で彼女を見つめていた。

「もっと前からだ」
「え？」
シャルルは微笑んだ。
「・・・・・あの夏の日より、もっと前からヒカルを知っている」
「どういうこと？」
ヒカルの震動が止まった。シャルルの言葉が理解できない。
クロス夫妻の娘の存在は知っていたはずだった。
しかし、そういった意味ではないらしい。
彼は小さい声で言った。
「ヒカルが・・生まれた直後を知っている」
「・・・そうなの？」
ヒカルが訝しげな顔をしていたので、シャルルはくすりと声を漏らして笑った。
「正確には、貴女が生まれた直後の画像を、カズヤがオレに送って寄越した。
カズヤは短絡的に自分の娘の誕生の喜びを誰にも彼にも押しつけて画像を送るほど短慮ではない。
その時に・・・意味があったのかどうかと聞くことすら、できなかった。
ただ・・・自分の異母弟に対してキスを贈ったように、生まれたばかりの彼女に祝福を与えてくれないかな、と言われて、彼は応えたのだ。
その時には深く考えなかった。

毎日を怠惰に過ごしていた。
仕事に明け暮れて・・・健全な精神を持っている者や生者との交わりを極力避けていた。
そんな時に、生命溢れる命を見て。
・・・それでも彼は心を大きく揺さぶられることはなかった。

何気ない、一言を言った。
親友の望みを叶えてやることが目的であって、その言霊に意味はなかった。
夢見る魚のように・・・陸を夢見て海から出てきた赤子はこれから苦難と慟哭を知るのか、と思うだけであった。

「『永遠の晄となるように、と』・・・・オレはそう言った。」

タイプHと付けられた子であった。
彼女が誕生するまでに、祝福の言葉さえ与えられることもなく闇に沈んでいった者たちがいた。
その中で、ひときわ強い生命力を持って、彼女は生まれて来た。
皺だらけで、赤い顔で泣き・・・羊水から揚がったばかりでまだ皮膚が伸びきっていない赤子の写真を見せられても、彼の心が大きく揺れることはなかった。
この赤子はもう、何でも持っているではないか、とシャルルは思った。
ヒカルか・・・良い名前だね、とカズヤは言った。
そして昶と名付けられた。

『えいえんのひかり、とかいて昶です』
幼い、舌足らずのヒカルの声が蘇ってくる。

「だから、最初は名前を聞いて、少し驚いた」
シャルルは苦笑した。
ヒカルの頬を、愛おしそうにそっと軽く撫でた。

『今日から・・・・おとうさんはシャ・・・シャルルです』
彼女はそう言った。

しかし父とは呼ぶな、とシャルルは言った。
シャルルは・・・ヒカルの髪の中に指を埋めた。
秀でた額に唇を寄せる。
大きな茶色の瞳がまた、閉じられた。

なぜ、彼は昶と和名で滅多に彼女を呼ばないのか判ったような気がする。
彼なりの贖罪なのだと知った。

ヒカルは言葉に詰まった。
それでも・・・それでも、ヒカルは「昶」でもあるが「ヒカル」なのだ。
どちらも、ヒカル・クロスなのだ。

「もっと前から知っていたけれど・・・それなのにオレは、ヒカルを全部知らない。
夏の間のヒカルを知らない。離れていた時のヒカルを知らない。
だからオレは全部知りたい。
過去も欲しい。未来も欲しい。
オレの持っているものは全部やる。
オレが手に出来るものは全部捧げよう。
でも。
・・・オレはヒカルの全部が欲しい。
ヒカルがこれから手にするものも欲しい。
それから・・・ヒカルの夫という称号も欲しい」

ヒカルは黙ったまま、彼の接吻を受けた。
彼女はアルディ当主の妻の座は、必要としていない。
そんなことは承知している。
けれども、どこか別の所に行って帰って来なくなってしまうのではないのかという恐怖を感じながら夏をひとりきりで過ごすのは、もうしないと誓った。
ヒカルが傍に居るから。彼女が道しるべの晄なのだから。

シャルルはヒカルから身体を離して、そして数歩後ろに下がった。

夏の空が・・・・青く輝き始めていく中で、シャルルは蠱惑的に微笑んで、ヒカルに向かって手を差し伸べた。

「昨夏はヒカルがオレに『来い』と言った。・・・・今度は、オレの順番だ」
シャルルはしなやかな腕を伸ばして、手の平を上に向けた。
「ヒカル。・・・・・オレのものになれ。・・・・ヒカルを愛したい。だから・・・・」
そこで言葉を句切り、強い視線でヒカルを見つめた。
そこには・・・かつて優しくあたたかく彼女をアルディ邸に迎え、そして送り出したシャルルの姿をした、ヒカルの知らない、愛を囁くひとりの男性が居た。
そしてその人物を・・・代え難い運命の人であると、ヒカルは定めていた。
これほどまでに自信に満ちて、そして隠すこともなく愛恋を滾らせているシャルル・ドゥ・アルディに逆う理由はなかった。

「ヒカル。・・・・来い」

彼女はシャルルの手の平に自らの手を乗せていた。
触れた、と思った時には、もう、シャルルの胸の中に居た。
黒須昶であり、ヒカル・クロスでもある、もうひとりの運命の人を、彼は抱き締めた。

「シャルルは何も教えてくれなさすぎる」
ヒカルが彼の胸の中で言ったので、シャルルは微笑みながら、彼女を抱く腕をますます強めた。
「ああ・・・そうだね・・・でも教えるよ。
全部・・・・オレの全部をやると言ったからね。
オレがどんなに貴女を愛しているか・・・
どれほど・・・貴女を失いたくないと思っているか・・・・
そのかわりに、ヒカルも教えてくれ。
・・・オレをどけだけ愛しているか、オレの愛にどうやって応えるつもりなのか・・・・」
彼は彼女からやって来るまで待つと言った。
ヒカルが彼に向かって・・・手を差し伸べた瞬間に、それは成就された。

もう・・・待たない。

彼は万感の思いを込めて、胸の中の、彼の永遠の晄に囁いた。
「愛のパラドクスについて、一緒に考えてくれないか、ヒカル」

返事はなかったが、彼の背中に腕が回された。
痛々しい傷跡の残る白く細い腕の持ち主は・・・彼にウイと回答した。

神に誓わなくても良い。
あの時・・・海に誓った。陽に誓った。
星や空や風がヒカルの心を知っている。

『泣かないでいいこにしていれば、おとうさんとおかあさんに会える』
そう言った時代を思い出していた。
泣かなければ、倖せになれると思った。

今は違った。
泣いても涙を拭いてくれる人が居る。

泣かせても涙を止めてみせると言った人が居る。

その人を父と呼ぼうと思ったときもあった。
家族になって穏やかに暮らせればよいと思ったときもあった。
けれども・・・今は違う。
ヒカルは囁いた。

「今度から・・・私の夫は・・・シャルル・ドゥ・アルディです・・・・・」

シャルルは宣言した。
「・・・・ランスで式を挙げる。予定しておくように」

シャルル・ドゥ・アルディの予定は絶対だ。
変更されることはない。

そして夏の朝が始まった。

シャルルだけの夏でもなく、ヒカルだけの夏でもない。
シャルルとヒカルの夏の始まりだった。

・・・・・・彼女が目覚めたのは、ヒカルの寝室の窓の遮光ブラインドから漏れる夕暮れの茜色が部屋の中に射し込む時間だった。

その日、ヒカル・クロスはシャルル・ドゥ・アルディの妻になった。
■13

ヒカルが部屋に戻った時間は、夕暮れが過ぎて、涼しい風が吹く夜の始めの時間だった。
そろそろシャルルを起こさないと、昼夜が逆転した生活になってしまう。
夜間に活動するのは彼らの一族にはよくあることであったが、それではシャルルは薔薇の朝露も見ないことになってしまうし、彼が万が一失調することになった場合には、それが不規則な生活から発生するものなのかどうかさせわからなくなってしまう。
少なくとも・・・彼に休息は必要であったが、同じように規則正しい生活を行う必要も感じていた。

ヒカル・クロスは居室の扉を静かに開けて、奥の寝室から晄が漏れていないことを確認した。まだ眠っているらしい。
彼女は極力静かに移動して、手折ってきた最高の状態の薔薇を花瓶に活けた。

まだ温室内で消失してしまったファム・ファタルたちは、再現できていない。
大急ぎで復元が急がれていたが、シャルルひとりの力では無理だった。
ミシェルの尽力を仰ぎたいところだったが、彼は今、ジルとルイの病状経過を見守るという最優先事項に携わっている。

焦らずに・・・ゆっくり進むべき時なのかもしれない。
ヒカルはそう思いながら、花瓶の薔薇を眺めた。
温室の薔薇ではないが、シャルルが好む嫋やかな小ぶりの薔薇だった。
どうしてだろう。
いつもと見える景色が違うような気がする。
ほんの一日前までの・・・この花がそろそろ咲く頃だと思い、茎に目印のリボンをくくりつけた自分と、それを手折る自分が別人のような気がした。

まだ身体が軋むように痛んだ。

シャルルはヒカルの寝室で寝ている。

彼女はシャルルと同じベッドで眠った後、そっと起き出してシャワーを浴びて、身支度を調えた。
そしてアルディ邸の中に設置されている、小さなチャペルに脚を運んだ。
私設の祭壇であるが、当主は不在がちであるので、ほとんどそこを使用しない。
信心深い使用人達の礼拝を許可しているので寂れていくことはなかったが、それでも何か特別な事がない限りには訪れることはない静かな場所だった。
シャルルは、ヒカルにはそういう習慣について教えていたが信仰を強要することは決してしなかった。
シャルル自身が、神と自分と花嫁を瞞して生きていこうと思った時から・・彼は信仰について少し違う考えを持っているようだった。
何かを礼拝しなければ自我が持ちこたえられない者を信者とするような驕傲な神ならいらないとルイは最初からこの場所には積極的に訪れないようにしていた。
少しだけ・・・ほんの少しだけ、厳かな気持ちになったというのが理由だった。

愛を信じるということは、神を信じることと似ている。
似ているようで違う。
違うようで似ている。
祈りに似た気持ちを捧げるところは似ている。
目に見えない神像ではなく、同じ時を生きる自分ではない誰かを愛するところは違っている。
信仰は一方通行だ。
愛は一方通行とは限らない。
信仰は癒しを与える。
愛も誰かを癒すことが出来る。

そんなことを考えながら・・・彼女は静かなひんやりとした礼拝堂を訪れて、何かを祈るでもなく・・・ただしばらく時間を過ご

していた。
そして・・・穏やかな顔つきの聖母像に向かって、語りかけた。
自分が今日・・・初めて、誰かと一緒に眠ったことを。
それまで幼い時には一緒に眠った人と、いまひとたび同じ眠りを共有することにした、と。

本当ならあの海に報告をした方が良いのかもしれない。
けれども・・・父もそこに居るから。
父は、苦笑するのだろうな、と思った。
記憶が曖昧で、思い出もほとんど残っていない。
記録なのか記憶なのかよくわからない混同した知識という名前と同義の彼女の中に眠る、過去情報はそれだけに留まらないものに変化した。
父と母を思い出すと苦しかった。
けれども・・・・今は懐かしい。

愛することは誰かに教えてもらうものではない。

確かに・・・確かにそうだった。
愛は回帰しない。
だれひとりとして同じ愛はない。

母に報告する。
好きな人ができた、と。
その人は母を好きで、そんな人を好きになったと思う。

そして、時期が来て・・・自分は彼の妻になった。
恋人同士の愉楽の夜ではなく、厳かにそれは始まり、静かに終わった。

シャルルはヒカルをベッドに横たえた後・・・十字を切った。
普段はそんなことをしないのに。
聖なる儀式の始まりだと言って、指先をヒカルの額にあてた。

ゆっくりと重なる肌の温度を感じながら・・・ヒカルはシャルルを受け止めて、両腕を回した。
彼の美しい肢体とは比べものにならないほどに醜く腫れた両腕を隠さないでくれ、とシャルルはヒカルに言った。
それも貴女だから、と。
ヒカルは頷いた。

彼女はシャルルの溜息や声や囁きを受け止めた。
・・・・彼が身体を引いて次にヒカルの中に入り込み深く沈んでは浮かんだ。
シャルルは苦痛に目尻を濡らすヒカルの痛みさえ欲しいと囁いた。
その間中、静かに・・・ただ静かに彼はヒカルの名前を呼び続けていた。
残酷だけれども赦してくれと謝罪することもなかった。
ヒカルがそんな風に感じることはないと信じているからだ。
・・・・シャルルは、根拠のないものは信じないのに。
それなのに、神に祈りを捧げて、そしてヒカルに捧げるよ、と呟いた。
愛の交驩を知らない若い者のように、彼は震えていた。
その一方で、シャルルはひとつひとつ・・・ヒカルに伝えていく。
ふたりは婚媾の儀式を行った。

彼は美しい白金の鱗を持つ、青灰色の眼の魚のようだった。
水を得て、そして海に潜り、自在に波を起こし、晄を感じて浮かび上がる。
彼は自分のことを獣王と言って揶揄することがあったが、そうではなく、彼は聖魚の化身のようだと思った。
あの海に・・・父母が居るあの海に生きる宝珠のような魚なのだと思った。

薄い羽を持ち、時折海面を跳び、また水底に戻る。
シャルルはそんな波間に彼女を誘った。
そしてヒカルは一緒にその中を泳いだ。

忘れられない人を忘れていないシャルルが良いと思う。
そんな人を運命の人と定めた。
今はもう・・・・たったひとりの、ヒカルの夫だ。

指輪がなくてもランスの教会式はなくても。
ヒカルはシャルルの傍らで眠ることを赦されたたったひとりの女性なのだ。

指を絡めて眠った。
彼はヒカルの腕を擦ってやりながら、彼女の温もりを確かめた後、やがて眠りに落ちた。
乱れた髪を整えてやり、シャワーは浴びたいな、と呟いたが彼は彼女の香りを感じていたいと言って微睡んでいった。
ヒカルも総身へ落とされた祈雨の嵐を鎮めることが出来ずに、そのまま眠った。

陽が高くなり、人の気配がしたが、誰も入室してはいけないという指示どおり、誰も入ってこなかった。

主寝室には誰もおらず、煙草の煙が染みつき、窓は開け放しのままであったし、バスルームの天井裏が破壊されている様子に皆が呆れて事情を聞きたいと思っているであろうと推測したが、その説明はヒカルに任せるよ、とシャルルはいたずらっ子のように微笑んで言った。

「アルディ夫人としての最初の仕事だ」
シャルルはそう言って笑った。

ヒカルは薔薇の一輪挿しを整えると、そっと・・・・自分の寝室に足を向ける。
これまでは、シャルルの眠る寝室に薔薇を運んだ。
今度からは・・・・彼女は自分の寝室に薔薇を運ぶことになる。
■14

部屋に入ると、暗闇の中で白金の髪と白い背中が僅かに光ったが動く気配がなかったので、ヒカルは声をかけるのを止めた。
闇に慣れるまで動かずに、扉の入り口で静かに佇む。
シャルルはまだ眠っていた。
徐々に暗闇に目が慣れると、彼の姿がぼんやりと浮かび上がってきた。
いや、そこにしか視線を向けることが出来なかった。
闇に眼を凝らしたのではなく、シャルルの姿を探し求めようとして・・・自分の意識は、閨の波間に沈む彼の姿以外に向けることが出来ないのだ。
シャルル・ドゥ・アルディは眠りの中を揺蕩っていた。
ほっと息をつく。
彼がどこかに行ってしまわないか・・・ヒカルは少し不安だったのだ。
ここは彼の生家であるのに、彼はこの館に執着しない。
この家の当主になるために死闘を繰り広げたのに、シャルルは家の存在を軽んじていた。
彼を待つ家族が誰も居ないから、ということもあった。
彼の半身であるミシェルが密かにアルディ邸に隠れ住んでいた場所があるということもあった。
それでも・・・それでもここは紛れもなく、シャルルの家なのだ。
ルイが戻ってくる場所なのだ。

ルイの別棟で・・・・ふたりで交わることが狂気の沙汰だと、後ろ指をさされるかもしれない。
それでも、彼は考えがあってそうした。
シャルルは、昔のシャルルにもならなかった。ルイにもならなかった。
彼はシャルル・ドゥ・アルディであり、そして・・・ヒカルと生きようとする新しい面を持ったシャルルになったのだと思う。

ヒカルは彼の気配を感じて、ほっと吐息をもらした。
そしてその安堵の呼吸さえシャルルの眠りを妨げるかもしれないと思い、あわてて口を噤む。

彼を短い時間でもひとりにしたことを悔やんだ。
彼女は・・未来永劫、こうやってシャルルの姿を求め続けるのだろう。
どんなに一緒に眠ったとしても、彼が完治しない限りは、シャルルが深夜にひとり彷徨い歩いていないかどうかを案じないで居られることはないのだと思った。
儚いぼんやりとした状態で・・・あの人を夢見て、彼は現実と夢幻の世界を泳ぐようにして・・・ヒカルの手の届かない場所に行ってしまうのではないのかと案じた。

心夫（※心の中で深く夫だと定めた相手のこと）と定めたのに、それでも・・・それでも彼を思うだけで心が苦しい。

ゆっくりと、絨毯の毛の長さを足先に感じながら室内を進んで、近くのテーブルに薔薇を置いた。
眠っているシャルルの傍に寄る時には、いつも静かにゆっくりとした所作で音を消し気配を消す。
彼はそれでも気がついていたようだったが、ヒカルの・・・幼いこどもの気遣いについてシャルルは優しく受け止めていた。

いつものような朝露を含んだ清々しい艶やかさはなく、ひっそりと咲く花瓣から夜さり方の香りが漂ってくる。

「・・・・目が醒めているなら、起きてみたら？」
ヒカルはそっと声をかけた。
今まで動かなかったシャルルが、ぴくりと背中を動かして、埋めていた羽根枕に顔を斜めに押しつけて、寝返りを打ったからだ。
人は就寝中は微動する。まったく動かないのは、目覚めている証拠だった。
よく、そう言って・・・ヒカルが近寄ろうとすると、眼を見開いて彼女を驚かせたシャルルを思い浮かべて微笑んだ。シャルルは誰かと一緒に眠ることが出来ない。
だから、深く睡臥していても・・・かつての逃避行が影響しているのか、気配を感じるとすぐに瞳を開けてしまう。
目覚めても、なかなか起きないのに。朝は弱いのに。
それなのに、夏の始まりの朝は、彼は一睡もしないで朝を迎える。
そしてヒカルのために、最高の状態の薔薇を朝摘みし、捧げる。
彼は睡眠さえコントロールする。
自分の感情だけでなく、本能の欲求さえも抑制する。

それなのに・・・・夢見る魚のように揺蕩っている。
それなのに・・・夏は狂う。
でもこれからはそうではない。
そうはならない。
夢を見ない人なのに、夢を見ている状態を過ごした夏の日々はもう、やってこない。
ヒカルが・・・シャルルに向かって走っていったあの時から、止まっていた刻が動きだしたから。
いや、違う。
逆行していた時間が戻った。
少しずつ進んでいた時間が正位置に戻ったのだ。

長い時間、一緒に居たのに。
ヒカルはシャルルのことを何も知らなかった。

彼を目覚めさせてはいけない、というヒカルの気遣いはまったく無駄であったと彼女が残念そうに言うと、彼が種明かしをしたことを思い出した。

暗闇の中なのに・・・ヒカルは白金の燐光を眩しく見つめながら囁いた。
彼は・・・これほど美しいのに、ヒカル・クロスの夫と呼ばれることをさえ欲した貪婪な男性だった。
夢見る魚のような人は低い声で返事をした。やはり目覚めていたらしい。
「・・・・ヒカルが居ない。枕が違う。あと小指の第1関節分ほど低いものでないと頚椎を傷めるぞ」
羽根枕に埋もれていたのに、シャルルはそう言って横を向いた。

ヒカルは苦笑して、ベッドの端に座る。これもいつもの仕草だった。
「・・・・機嫌を直して。せめて月光浴でもしましょう。それとも、このまま朝まで眠る？」彼女はくすくす笑いながら、年上の恋人に囁いた。
先ほどまでの激しくも静かな雅交のままのシャルルを見て、次に顔を赤くした。
「シャルル・・・何か着て。風邪を引いてしまう」
慌てて横を向く。
シャルルは言葉にならない声を漏らした後、片膝を立てて、身体を気怠げに起こし、ヒカルの方に向き直った。
暗闇に慣れて、ヒカルはシャルルの妖艶な肢体を直視することができず・・・薄いブランケットをかろうじて羽織っただけのままのシャルルに向かって忠告した。

「オレの身体が冷えたのなら、それはヒカルの責だ。・・・黙って居なくなるから」
「私は居なくなったりしない」
「・・・・それは正しくない」
シャルルはそう言って、腕を伸ばし、ベッドの端に置かれたヒカルの手の平の上から自分の手を添えた。
彼の手は冷たかった。
「ヒカルがオレを置いて行くのは、何度目なのか、数えるのは止めることにする。そのかわりに・・・」
彼が手の平に力を込めて、ヒカルの細い指を握った。
寝起きのはずであるのに、力強い搦めに反射的に身を引こうとしたが、シャルルはそれを赦さなかった。
「駄目だ。・・・全部欲しい。・・・・ヒカル・・・・」
彼はそこまで言うと、反対側の手を伸ばして、手をついていた方のヒカルの肘をくっと折った。
突然バランスを崩されて、彼女はベッドの中に倒れ込む。
ふわりと・・・彼と彼女の香りがした。
ベッドの中はあたたかく、そして・・・合歓の跡がいまだ鮮やかに残っていた。
シャルルがまたヒカルを求めた。
ヒカルはどうして良いのかわからずに、彼の鍾愛の仕草に戸惑いながらも、シャルル、と声を漏らしたが、それも彼の唇によってかき消された。

「何もかもをもらい受けると言ったはずだ。
・・・・言葉を攫う。心も体も攫う。・・・・そして、最後はヒカル・クロスという名前を捨ててもらう。・・・・ヒカルの・・・・ヒカルの中で泳ぐ魚は唯一オレだけだ」
彼はそう言うと、ヒカルの躰を抱き寄せて、先ほど抜け出したばかりの波間の中に、またヒカルを引き摺り込んだ。
彼女の抗議も悲鳴も戸惑いの声すら貰い受けると誓ったから。

目が醒めたとき。
ひとりであることを認めたくなかった。
ヒカルの気配がないことを認めたくなかった。
だから・・・だから目覚めないでいたのに。

・・・ヒカル。

シャルルは彼女の服の下に手を差し入れながら、青灰色の瞳を彼女の茶色の瞳に近付けた。

オレとヒカルは・・・長い時間を過ごしてきた。
恋の始まりのような緊迫感や駆け引きはない。
けれども。
けれども・・・・・こうしていることそのものが、もう・・・・愛であり恋なのだとヒカルが教えたのだから。

こうなることが怖かった。
誰かを愛せば・・・また、狂気に墜ちるかもしれない。
そう思って生きてきたし、誰かを愛することもないだろうと思って生きてきた。
また・・・愛する者を突如として失えば、その時こそ彼は永遠に戻ってこられないだろう。
次に愛する者は存在しないから。

かつては、ヒカルが居たから戻って来た。
けれども・・・ヒカルを失ったら、もう、戻れない。

胸が締め付けられる。

愛している者を抱いているのに、違う名前を囁くのではないのだろうかと不安になる。
でもこれはヒカルとシャルルで燃やした炎だから。
他の者では駄目なのだ。

愛は回帰しないとヒカルは言った。
同じ愛はないから。

だから・・・だから。

ヒカルが鎮めなければならない。
ヒカルが解放しなければならない。

・・・・・どうしようもなく堕ちてしまったのだと思い知らされる。

かつて、シャルル・ドゥ・アルディはマリナという女性に愛をした。

けれども・・・今は。

シャルル・ドゥ・アルディはヒカル・クロスという女性に愛を還す。

返却するのではない。贖罪するのではない。

愛が還って行く。還ってくる。巡り巡って戻ってくる。
彼の捧げた愛は見返りはない。
信仰によって、愛を何かと交換してはいけないと言われてきた。
誇りによって、何かを求めてねだる行為は決してできないと思った。

それなのに。
あの人にはキスを求めた。

それなのに。
ヒカルには永遠を求めた。

ヒカルが、愛は回帰しないと言った言葉が理解できた。
同じ愛はない。
愛は戻らない。
あの人に向けられた愛と同じ愛ではない。

暗闇の中にあってもなお、彼女は光り輝いている。
永遠の晄と名付けられた、シャルルの天使は茶色の瞳を潤ませていた。
彼女を摘み取ってしまった罪は生涯シャルルの中で燻るだろう。
本来なら・・・彼の息子と言われている男と結ばれるのが相応しい娘であるのに。
それでも・・・それでも。
獣王、と言って彼を蔑んだ男の声が聞こえてくる。
そうだ。
獣の焔で、ヒカルを灼いてしまった。
業火に焼かれるのはシャルルだけで良かったのに。

・・・これからヒカルは、今以上に憂いを覚えて悲しみを知ることになる。
嬉しいことや喜ばしいことばかりではない。
これから先の・・・長い試練を思うと、彼は「愛とは魂の試練だ」と言った若かりし頃の発言は、なんと傲慢だったのかと思い返していた。

撤回するつもりはない。
あのときの言葉に嘘はない。

しかし・・・・
愛は共有するのだと思った。
魂の試練を受けるのは、シャルルだけはないのだと知った。

それも、愛なのだと。

「・・・・愛しているよ」

言葉は万能でないと思う。
万感の思いを込めて囁いているのに、まだ足りないと思う。

何も伝え切れていない。
何も伝わらない。

けれども、彼は伝えきれなくても、囁き続ける。

ヒカルが彼の背中を包む限り。
彼の愛の滴を受け止める、彼だけの最高の薔薇が微笑む限り。

これは・・・運命だろうか。

命を運ぶ人のことを、運命の人なのだと思った。
シャルルはヒカルに愛を還しているのに。
それなのに、そのシャルルの愛に自分の愛を付して再びシャルルに運んでくるヒカル・クロスは・・・

彼はそこまでで思考を止めた。

目の前の幼い己妻に向かって、ただひたすら愛をささめくことにした。

「・・・・ヒカル。オレをひとりにした贖罪をしてくれないか・・・・・・・」
彼女が決してそう思ってはいないことを承知の上で、シャルル・ドゥ・アルディはそう言って甘く微笑んだ。

夢見る魚　03

■15

「・・・ほら」
シャルルがそう言って差し出した腕に、ヒカルは手を伸ばそうかどうか、しばし躊躇っていた。
すると、シャルルはくすりと小さく笑って、彼女の手を取り、指先にキスをしてから、自分の腕にヒカルの華奢な手首を搦めて脇を締めたので、引き寄せられた格好になり、ヒカルは一歩、大きく前に歩み出た。
彼と並んで歩く。腕を組んで。
いつか・・・ショコラを買いにパリの街に繰り出したとき組んだ腕の感触と違っていた。
彼女は、あの頃より少し背が伸びた。
そして・・・日差しのきつい夏の終わりのパリの街を歩くことはあっても・・・・月夜の美しい、夜の薔薇の園を、シャルル・ドゥ・アルディとともにそぞろ歩くとは思っても居なかった。

シャルル・ドゥ・アルディがヒカルの申し出の通り、月光浴のために別棟を出たのは、夜も更けて、月が空高く昇ってからのことだった。
彼のオフ期間の、行動範囲から逸脱していたが、それでも、シャルルは外に出ることを承諾した。
決して別棟から出ないと宣言してオフを取ったのに。

それまで彼はヒカルを片時も離さなかった。文字通り、片時も。
綏撫を共有し、そして何度も・・・まだ慣れないヒカルの躰に彼の吐息を漏らし、そして彼の愛を染み込ませていった。
頬を染めて茶色の瞳を潤ませる若い妻に彼は何度も囁いた。
愛しているよ、と。
そして涙を流して良いよ、と言った。
溜息を漏らし涙を流し、そして・・・何度も何度も囁かれる愛の言葉にヒカルは高みに登っていく。
抗えない力に押し上げられて、ひとつひとつ静かに・・沈んでいくようで浮かんでいくような奇妙な感覚を味わっていく。
このまま強く抱かれながら・・・抱かれながら夢見るように浮動していたいと思わせるほどに彼は彼女を包み込んで、そのまま彼らは静かに溶け合った。

「おかしくなりそうだよ・・・・どうにかなりそうだ」
シャルルはそう言った。
若者の戸惑いのような、そんな言葉をシャルルが漏らす。
永遠の晄だと。
シャルルだけの天使だと。
そう言ったのに、今はどんなことばも彼は言うことが出来ない、と言った。
惑わないと決めたシャルルが、ヒカルによって惑いそうになると声を漏らす。
彼の腕の中で静かに溜息を漏らし、ヒカルはシャルルにしがみついているのか彼を抱き締めているのか・・・はっきりと判別できないほどに乱れる自分を感じながら・・・夜が更けゆく空を見つめた。

やがて抱き合ったまま静寂を迎えた頃。
ようやく彼がぽつりと言った。
「月を見に行こう」
夏の夜風は風邪を引きやすいから・・・暑いかもしれないが、あたたかくしておいでと言って彼はバスルームを先に使い、次に彼女を送った。
「一緒でも良いが・・・月を見に行くどころではなくなるから」
悪戯好きの少年のような晄を宿して、青灰色の瞳でシャルルがそう言うと、ヒカルは顔を赤らめて・・・そして身支度をするからと言ってバスルームに入った。

恋人達の夜は、これほどまでに短くて長くて・・・そしてもどかしいのだろうか。
自分がシャルルの腕の中で呼気を乱して溜息をつくとは思ってもいなかった。
知識はあったが・・・彼とそうなる日のことを考えていないといえば嘘になるが・・・それでも唐突に訪れた夜ではないのに・・・どこか幻のような気がする。

それくらい、彼は彼女の躯を労ったから夢のような気がする。
それなのに、彼は彼女に愛の花瓣を散らせたから現実だと知る。

シャワールームから出て出来た時には、シャルルは先に身支度を整えており、後から来るようにと言って先に庭に出てしまっていた。
ひとり、彼を外に出してしまうことを危惧したヒカルが慌てて居室を出ると・・・硝子張りの居間に、いくつか届け物がされていた。
・・・真新しいシーツと。それから、白い薔薇の束だった。
それが、この館の使用人達からの心ばかりの贈り物であったと知ると、ヒカルは少し涙ぐんだ。

こんな状況なのに。
こんな事態だからこそ。

夏の一瞬だけの幻の恋人ではなく・・・・シャルルに永遠に輝き続ける晄がようやく訪れたのだということを、誰もが祝福していると伝えられて、ヒカルは泣きそうになった。
乙女の破瓜に訪れる朱の滴を、彼女が恥じらっているだろという気遣いだった。
ヒカルは寝室のシーツの波を・・・新しくした。
波間がなだらかになり・・・そして、薔薇の花束は、居間に飾ることにした。

静かな・・・静かなアルディ邸には、誰も居ないようで、たくさんの者が居る。
ヒカルとシャルルの動向を静かに見守る人々からの、ささやかな贈り物に・・・彼女は誰も聞いていないことを承知のうえで、ありがとう、と呟いた。

もし、他のタイミングでこのようなはからいを受ければ、彼女は頬を染めて・・・羞恥に目も開けていられなかっただろう。

でも。
母が居ない、きょうだいも居ない、彼女に妻であるべき必要な手配を教える教育係も居ない・・・そんなヒカルには、ただただ、それは有り難いと思うばかりだった。
数多居る使用人たちの誰が手配してくれたのかはわからない。
今日の当直の者で、こういったことに気を利かせることが出来て、許可もあまり求められずに手配できるものは少ないはずだった。
それでも・・・名前を名乗らずにこうして準備をしてくれた者は、ひとりではないはずだった。・・・・皆の総意なのだと思った。
愛されていないなどと、どうして思ったのだろう。
シャルルが愛しているのはあのひとだけだとどうして思っていたのだろう。

・・・自分はこれほどまでに・・・この館で生きていくことを渇望しているというのに。

シャルルは・・・彼は、自分が惑うことを念頭に入れながらも、こうしてヒカルと歩くことを選んだ。
あの夜の海に誓ったように。
月夜のシャルルは、見上げれば・・白金の髪が光って、とても綺麗な横顔を見せていた。
穏やかで・・・そして決してヒカルを別の人の名前で呼ばないと心に決めた強さをにじみ出している。
・・・・アルディ家の求めていた真に強い当主がそこに居た。
■16

「・・・ヒカルはオレを責めても良いよ」
「どうして？」
月夜の・・彼と同じ色の晄の下で、ふたりは静かに薔薇の庭園を歩いた。
慣れ親しんだ薔薇の園なのに、今宵はどういうわけか、とても・・・・見たことのないような苑に感じた。それなのに、とても懐かしかった。
先ほども来た場所なのに。
いつも来ている場所なのに。
それなのに・・・シャルルと寄り添いながら歩く夜の苑は・・違う気がした。

恋の惑いに溺れる時間は必要なかった。
もう、愛という海底に何度も沈んでいたから。
もう、愛という空に向かって何度も浮かんでいったから。

「・・・貴女の人生はもっと選択肢があったと思うから」
「どうして今頃そんなことを言うの？」
シャルルはくすりと声を漏らして笑った。
・・・・何度も彼女を伴って、こうして腕を組んで様々な場所に出て行ったことがあった。
それでも・・・今はあのときともっと別の存在でヒカルはシャルルの傍らに存在する。

神と自分と花嫁を瞞すと言ったあのとき。
そして、本当に神を瞞したあのとき。
・・・彼は幾度目かの、虚偽の誓いを経て、真実の黙契を交わす。
言葉にできない程の愛を込めて、目の前の・・・茶色の髪の茶色の瞳の人に、愛を囁く。

「単なる確認。・・・オレは貴女を誰よりも倖せにすることもできるし・・・たくさん涙を流させることもするだろう。だから、それでもオレの傍に居たいと・・・そう思わせるよという、自分自身へ言い聞かせているだけだ」
ヒカルはその言葉を聞いて静かに微笑んだ。
これから先・・・・幾度となく、彼によってヒカルは涙を流すのだろう。
あの人を忘れられないと言って、惑う瞬間があるかもしれない。

「責めるのなら・・・そう言って私を遠ざけようとするシャルルを責める。・・・・もう、私はシャルルの傍に居たいと思う気持ちから・・・シャルルの居ない世界はあり得ないと思っている」

そこまで言うと、薔薇の庭園でヒカルは立ち止まった。
シャルルに手を引かれて・・・そして夜の静かな薔薇の園に誘われて・・・そしてヒカルは脚を止めた。
かつて、ここで、彼に向かって行ったヒカルであったのに。
今は・・・足を止めて、すぐ近くに居るシャルルを見上げた。

「シャルル。・・・・・私の天使」
彼女はそう言って、泣きそうな顔をして微笑んだ。
どうして涙を流さないのか、シャルルに伝えることができなかったが、彼は知っていると思った。

ひとりでシャワーを浴びておいで、と言ったから。
始終、彼女の指先にキスをしていたらから。

シャルルも立ち止まって・・・そしてヒカルを見つめた。
青灰色の瞳を見て。
ヒカルは懐かしい、と思った。
初めて会った時の彼は涙を流していた。
悲しくて苦しいと言っていた。
天国に行けないから、哀しむことをやめると言ったヒカルに微笑んだ、天使のような人は・・・今はひとりの男性として、ヒカルの傍らに降りてきた。

・・・・この人が蟬蛻（＝解放すること）するのを見届けなければならない、と思った。

しばらく無言で歩いた。
空を見上げて・・・夜の薔薇園を一緒に歩いた。
決して・・・これまではあり得なかった。
シャルルはヒカルを伴った夜の散歩は好まなかった。

もどかしくて苦しくても、ヒカルしか見えないという閑歩は彼自身に許していなかった。

夜の月の晄の下で・・・あの人と見間違ってはいけないというシャルルの配慮だった。
でも今は・・・ヒカルはシャルルと一緒に歩く。
惑っても良い。
あの人と間違っても良い。

あの人も愛しているシャルルを、愛しているから。
夢を見ないシャルルが、夢見た世界を愛しているから。
夢で終わる夢にならないから。

「・・・・行くのか？」
「はい」
会話は始まった。

「どうしても、今、行かなければ皆を・・・シャルルを救えない」
ヒカルは囁いた。

彼の顔を見るのが辛かった。
きっと・・・悲しい顔をしていると思ったから。
上を見なければ、ヒカルのこたえはない、と言われていたのに。
でも今は・・・彼の顔を見るのが辛かった。

彼は、早乙女と交わるのは初めてではないのかもしれない。
でも、ヒカルには初めての・・・そして最初で最後の人なのだ。
ヒカルは生涯・・・・・シャルル以外の男性を運命の人と定めることはしないだろう。
生まれ落ちてから今まで・・・彼女はシャルルだけだった。
最初は彼のことが「天使」だと思った。
余りにも綺麗で儚げだったから。
そして、長じてからは、ヒカルを、悲しみも苦しみもない楽土へ導く人だと思った。

でも、今は違う。

彼女の悲しみも苦しみも受け止める伉儷（※来世までと言って永遠を誓った配偶者のこと）として・・・
ルイ・ドゥ・アルディが彼女に愛を囁いても。
それは、シャルルの声と同じに聞こえなかった。
だから。
だから・・・・ここに居る。

だから彼女は言った。
言葉は、言の葉だ。そして言霊だ。
一度口にしてしまえば・・それは気の迷いでは済まされない。

「・・・・モザンビークに行く」
「知っているよ」
彼の返答に、ヒカルは辟易ろいだ。
泣きたい気持ちはヒカルの方だったのに。
・・・・シャルルの方が、泣きそうなほどに悲しそうな微笑みを浮かべていた。
先ほどまでに激しくも静かに愛し合った、我を忘れる唯一の存在が。
悲しそうにしている。
ヒカルは喉に使えた嗚咽を漏らしそうになって・・・そして大きく息を吸った。
今、自分が泣いたら。彼は涙を止めるためにあらゆる方策を講じる。それはいけない。
■17

「何でもお見通しなのね。・・・かなわないな」
軽口を叩いたつもりなのに、声を詰まらせてしまい、ヒカルは大きく息を吸った。
倖せは墜ちていない。希望は昊にある。
泣きそうになったら、上を向け。
それは、シャルルから教えてもらったことだ。

「オレと勝負するなら・・・ヒカルのベッドの上にしてくれよ」
彼が蠱惑的な微笑みを浮かべたが、ヒカルはその言葉に唇を引いて少し頸を傾けただけだった。
そんな彼が囁く恋人同士だけにしか通用しない河漢の言に微笑むことが出来ず、眉を凝らしてただ・・・悲しい瞳で彼を見つめていた。

シャルルはその瞳を見て、青灰色の瞳を一瞬大きく見開き・・そして横を向いた。
そして呟くように、ヒカルに告げる。

ぎゅっと・・・白金の睫を強く合わせて。
彼は絞り出すように言った。
「よしてくれ。そんな眼で・・・オレを見ないでくれ」
彼が言いたいことはわかっていた。
痛いほどに。
惑いそうなほどに。

彼女の涙は透明で美しい。
そして・・・涙を流している本人だけではなく、それを眺めている他者をも切なくさせる。
シャルルはフランスの華と呼ばれて・・・天使のようだと賞賛されたのに。
今は・・・目の前にいる・・・茶色の髪の茶色の瞳の人の背に・・・・
淡く白い羽根が見える。

彼は堪えた。
清らかな天使の翅をもいだ。
一時の情動ではなく・・・永遠に彼女を愛することができると思った。
それは。
彼の贖罪を、ヒカルが受け入れて赦したから。

あの人を愛していた。
狂ってしまうほどに。
でも、愛しすぎて、自分の傍に置けなかった。
眩しすぎた。
好きで好きで・・・何もかもを与えてやりたいと思った程に好きだった。
過去形にできない。
あの人を今も思うだけで胸が疼く。血が吹き出そうな程に胸が苦しくなり痛んで呼吸を阻む。

あの男を好きだというあの人が好きだった。
別の性に生まれていれば・・・きっと彼に恋をしたらだろう。
だから、嬉しかった。
彼女が、彼に恋をして・・そしてその先の未来で結ばれて、実りを生み出したことが嬉しかった。

それなのに。
それなのに。
シャルルは、彼と彼女の閨を自分の手元に置くことにした。
・・・・ヒカルが居なければ、彼はそのまま・・・夢幻の世界を味わったままでいた。

永遠の晄と名付けられた人は・・・・
シャルルを照らし、そして・・・・もっと違う路があるのだと言う。
森厳な神域からやってきた晄の子は・・・彼に穢されてなお、美しい。

「・・・指先からインクの香りがした」
彼は囁いた。
そうだね、とヒカルは頷いた。

渡航同意書にサインをして・・・自らの肉体が滅んでしまうようなことがあった時には。シャルルに解剖してもらい、献体をする旨の書類にサインをした。
昔・・・その昔に、彼女の母親が、シャルルに差し出した書類と同じ内容に、ヒカルは署名押印をした。

・・・屍体解剖同意書にサインするとは、マリナ・イケダの思いは、恋を越えている。
ヒカルは、自らがサインをした時に、そう思った。
インクの香りが指先に残り・・・ヒカルはすべての書類への処理が終わった後に、自分の指先に口付けをした。
自分が死んだら。
肉体を、シャルルに捧げる。
魂は・・・・魂はどこに行くのだろうか。
ヒカルの魂は。
肉体が滅んでも、きっとシャルルの傍に居たいと思うに違いないと思った。
母も。
マリナ・イケダもそう思ったのではないのだろうか。
魂は・・・愛は・・・父であるカズヤ・クロスの元に。
しかし、母床となる肉体はシャルルの元に。
これが、愛ではなくて一体何だというのだろうか。

「たくさんの書類にサインをしたのだね。・・・・ヒカルがあの国に行かなくてはならない理由はないというのに」
シャルルはそっと尋ねた。
ヒカルは静かに答えた。

「私が・・・私ひとりだけで決められる時間はとても少ない」
ヒカルは言った。
監護権が切れて、1年が経過する。
今、シャルルの正式な妻になる前であれば・・・彼女は黒須昶として自分の行動を自分で決めることが出来る。

だから。
血液や骨髄の提供を自分の意志で行うことが出来た。
シャルルは成分血液の提供程度しか赦さないだろうと思った。
ましてや、アルディ家の当主夫人という称号を与えられれば・・・ヒカルの身柄は、その希なる細胞の価値よりも、生存して彼の子孫を残すことが優先されるだろう。
そうなったら・・・・ヒカルはヒカルができることについて、制限されることになる。

彼女ができること。
そして。
シャルルではできないのに、ヒカルではできること。
それが、遂行できなくなる。

たとえば。
モザンビークに行くこと。
シャルルはまだ、行くことが出来ない。でも、病の解明のために、誰かが行かなければならない。
誰も行きたがらない、少数の探査隊に志願すること。
・・・・これは、ヒカルにしかできないことだった。
いや、黒須昶としてできる、数少ないことだった。

■18

行きたくても行けない人が居る。
あの国に、足を踏み入れたくても、まだ、そうすることができない人が居る。
そんな人を、ヒカルは運命の人と定めた。
それは、ヒカルがあの国に行く理由にならないだろうか。

かつて、シャルルを迎えに行くために、大勢が、あの国に行った。
そして、シャルルは、彼だけが背負う業を担って戻って来た。
本来なら彼だけ受ければ良い罪を、彼に良く似た従妹にも知らず知らずのうちに引き受けさせてしまった。
シャルルが最初に異変に気付き・・・そしてその様子と事実に気がついた従妹が苛まされた苦悩を思うと・・・シャルルはこの病を自分の中に閉じ込めることにした。
恥辱はあってはならない。
誇りを傷つける者は赦さない。
そう思っていたのに。
・・・・シャルルにできないことは何もないと思っていたのに。
できないことがあった。
あの・・・青春の輝きを過ごした友にも感染していたら。
彼はそれを思うと治療薬を開発することに専念しなければならなかったのに。
・・・惑うことによって、あの人に会えるのであれば、それで良いと思ったことがあった。
ヒカルの躰を使わなければ治癒しない病なら、そのまま引き受けようと思った。

気高さを捨てたわけではない。
でも、自分がこうして生き存えることが・・・・記録となって系図原簿に書き込まれる。
それなら。
ルイ・ドゥ・アルディやミシェルがいつか・・・・ヒカルを利用しないでその記録を参照しながら、癒せる方策を考えるようになるまで自分は贄になろうと思った。
シャルルの友と接触を断ちながら、消息を把握し続けたのは、彼と同じ事態に陥っていないかどうか確認するためだった。

しかし事態が変わってしまった。
ヒカル・クロスの・・・細胞を提供しなければルイは完治しない。
本当はそうではないのに、罹病したという錯誤が彼を・・・・皮肉ではあるが、ルイを安寧の地に誘う。
戻る過去がないから。
シャルルになって・・・仙境を訪れる。
そこでなら・・・ルイはヒカルを唯一の人だと、声に出して言うことが出来るとでも言うかのように。

「ヒカルが赴いて助けられる人数と、ヒカルがここでアルディ夫人として尽力して助けられる人数は、雲泥の差があると思うが」
「わかっている」
ヒカルは短くそう言った。

わかっている。
シャルル・ドゥ・アルディでさえ・・・一日に診察できる人数が限られる。
だから彼は抜本的に改善するために、パリに戻ってきた。
実作業を担うより、それを遂行させる場所で、より多くの人を救うための・・・このウイルスの根源を探るチームの要に居た方が、情報を得るのも最速だ。

皆を救うおうとすれば、皆を失うことになる・・・・

それはルイやミシェルが繰り返しヒカルに囁いた忠告だった。
それを、聞き入れなければならない時に、彼女は聞き逃してしまっていた。

だから・・・・
だからこれは私の贖罪なのよ

ヒカルはそう言って微笑んだ。

「購うだけでは済まされないけれど。・・・・私は、シャルルもルイもジルもミシェルも救いたい。
そんな場所に行ってこようと思う。
・・・そして、必ず、持ち帰るわ。シャルルの・・・みんなの待っているこたえを持って、戻ってくる」

シャルルは。
シャルル・ドゥ・アルディは。
大きく息を吸った。
焼失してからしばし失われていたけれども、徐々に戻りつつある、アルディ邸の薔薇園のかぐわしい薔薇の香りとともに・・・
ヒカルの息吹を吸い込んだ。

彼は全部を攫うと言った。
それでも、彼女の希なる細胞を奪うことは出来ない。
これを使って・・・ミシェルが研究を始めている。
そして、やはり現地調査が必要だという結論に至ったのだ。
それを阻むことはできない。
彼女が行かなければならない理由はない。
でも、ヒカルは知っているのだ。

・・・このままでは、ルイは戻ってこないことを、彼女は知っている。
シャルルは、いつまでもヒカルを違う名前で呼ぶかもしれないと懼れ続けることを、ヒカルは知っている。

アルディ家が、なぜシャルルとマリナ・イケダの接触を禁じなかったのか。
そして・・・その後のクロス夫妻とシャルルの縁故を絶とうとしなかったのか。
今となっては理由は明らかだった。

感染の可能性があった、仏系日本人の父。
希なる体質を持ち、死後、シャルルが遺体を解剖することの同意書に署名押印をした母。
彼らから生まれた・・アルディ家の技術を用いて生まれた晄の娘。
ヒカルは、仏系日本人を父に持つ。
あの国に赴けば、同じように人種の性質から生まれる作用で・・・感染するかもしれないという可能性がゼロではない。

それらを踏まえて、クロス家がアルディ家にもたらすものについて、彼らはよく知り尽くしていた。
・・・ヒカルとシャルルの絆はそういったことから始まったかもしれないが、今はもうそれだけではないということを、シャルルもヒカルもわかっていたのに。

・・・・誰かを納得させるには、自分の意志だけでは無理なのだと。
大人になって、知った。
・・・・自分だけではなく、誰かを倖せにしたいと思った時に。
危険を顧みずに行動することもあるし、そしてそれは優先するに相当するに値する上位の理由ではないのかもしれない。

・・・このままシャルルの傍で、毎日のように愛しているよ、と囁かれていたい。

それなのに。
ヒカルは選んだ。

彼女は・・・父や他の者がそうしたように。
シャルルのために。
ルイのために。
ジルのために。
・・・・自分の家族のために、母が決して行かなかった場所に、行ってみようと思ったのだ。

たくさんの書類にサインをした。
インクが指先に染みつくほどの量だった。
懐かしい・・・シャルルの愛用するブラウンブラックのインクの香りがした。
直筆のメッセージはほとんど残さないシャルルが、ヒカルの夏の訪日時にはいつもメッセージを寄越してくれた。
彼の伝言を受けて、ひとり涙した日々を思い出した。
ひとりで暮らすようになってからは、彼からの手紙が来ないかどうか、ポストを眺めた毎日を繰り返した。

同じように・・・ヒカルは何かを残したいと思った。

こうして・・・・
シャルルと眠るようになって。
夢見る魚となって彷徨う心地よい闇間の先にある晄を・・・探してみようと思ったのだ。

「・・・貴女を愛していると言ったオレの言葉が信じられない？」
「そうではないことはわかっているでしょう・・・・」
ヒカルが掠れた声で反論した。

悲鳴のような・・・それでいて絞り出すような声だった。
「愛しているから、行くのよ。愛しているから・・・私にしかできないことを成さねば、私はシャルルの傍に居られない」■19

驚き呆れた様子を隠そうともしないで、シャルル・ドゥ・アルディは彼の定めた永遠の晄に言った。
青灰色の双眸で、彼は茶色の瞳の人を見つめた。
・・・彼の美しい視線を受け止めてなお、彼女は眼を反らさずにまっすぐにシャルルを見た。
仄明るい夏の月夜の中に、静かに佇んでいた。
太陽のような光だと思っていた。
太陽のようなあの人と、太陽のようなあの男の娘は、シャルルの目の前に立っていた。
でも、ヒカルは太陽でも月でもない、まったく違う晄なのだと思った。

惑いのない、決して揺るがない意識を感じて、シャルルは吐息を漏らす。
かつてヒカルではないヒカルに良く似た人の視線も、同じように強くまっすぐだった。
あの人がシャルルに語りかける言葉はいつも真実で、嘘や飾りを嫌ったあの人の言葉がひとつひとつ蘇ってはまた次の言葉に重なっていく。
そんな激しい言霊の旋回の中で、シャルルは軽い目眩を感じながら、そっと言った。
言えば、それが本当になってしまうと懼れているかのように。

「ヒカルは、自分が感染するかもしれないと怖くないのか。・・・自分だけは大丈夫だと過信している」
その言葉を聞いて、彼女は淡い微笑みを浮かべた。
「そうなったら・・・シャルルが治してくれる。だって、あなたほどの名医はいないのでしょう？」
「そうなったら・・・オレは貴女を元に戻さないかもしれないよ」
彼は唇の端を少し持ち上げて、ヒカルに言った。
「・・・オレが行きたいと願ったあの時代に貴女が行ってくれるのであれば、オレは戻らなくても惑わなくても・・・・逢いたい人に逢えると喜んで、貴女をそのままの状態で放置するかもしれない」
ヒカルは悲しそうに目を瞬かせた。
そして腕を伸ばして彼の頬に・・・そっと手の平をあてた。
シャルルが愛おしそうにその手の上から自分の手を重ねて・・・そして眉根を寄せて、彼女の柔らかな手の腹に唇を寄せて接吻した。
手の平に乗せて伝えるには、多すぎる溢れる想いはどうやったら・・・・・どうやったら、伝えられるのだろうか。

シャルルが自嘲的な仮説をヒカルに告げるのは、彼女があの国に行っても危険が大きすぎると危惧しているからだ。
ヒカルはあてられたシャルルの唇から微電が自分に向かって流れていくのを感じて、甘い溜息を漏らした。
そして、もう片方の手は躰の脇に添えられていたが、その手をぎゅっと握って、身を切るほどに辛いというかのような震える声音で・・・シャルルに辛抱強く囁いた。
「シャルル。・・・私はそれでも行く。それに・・・私はそこには行き着けない。・・・・だって、私はシャルルの望むその時代を・・・知らないから。だから、戻れない。・・・・ルイと同じだとわかっているのに・・・どうして、そんなことを言うの」
「オレは貴女を愛していて・・・離したくないからだと言っても。何度貴女を抱いても。
それでも・・・それでも貴女は行ってしまうから」

「私はシャルルを愛している。心から。・・・・私は・・・私が夫と呼ぶ人のことが好きなの。どうしようもなく」
言葉にする術がわからない。
この気持ちをうまく表現できない。
でも、伝えたい。
だから、ヒカルは懸命にシャルルの青灰色の瞳を覗き込んだ。
まっすぐに、瞳をそらさずに。

「でも、一緒に居ることが最大の愛だとは思っていないのだね」
彼は寂しそうに笑った。

かつて、彼は・・・・彼ひとりを愛していることを求めた。
あの人に求めた。
でも、あの人が選んだ人物はシャルルではなかった。
たったひとつだけの愛を求めた。
それさえ在れば、たとえ成就しなくても生きていけると思った。
誰と結ばれても、どんなに年月が経過しても、生きていていれば・・・苦しくても辛くても倖せだった。

けれども。
その愛を教えてくれた人が、目の前から突然、いなくなってしまった。
そしてその愛を捨てることはできなかった彼に、愛はひとつではないと教えた人が現れた。
・・・・彼女は、あの人と良く似ていた。
しかし、その愛とは違う愛で彼はヒカル・クロスという人物に向き合おうと思った。
そこから・・・いや、もうそこで愛に堕ちていることを認めざるを得なかった。
あの時には・・・たったひとりだけシャルルだけを愛してくれることを切望した。
今は違う。
ヒカルが、あの人を愛しているシャルルで良いと言うように。
シャルルは、彼女が広く大きな心で、シャルルを含めた多くの者たちに想いをかけていることを知って・・・この人を妻にして良かったと思った。
シャルルの生涯の伴侶は、今となっては、ヒカルしか考えられなかった。
それが叶わないのなら、もう神の前で永遠を誓約することはしないと決めたから。
彼がもう一度あの教会に立つ時は・・・ヒカルを伴った時しかあり得ないと思った。
彼女以外では満たされない。
他の誰でもない・・・誰かの代わりでもない・・・ヒカルが彼の永遠の晄なのだ。

そして今、ようやく彼女のすべてのうち・・・ほんの少しだけ・・・ほんの一瞬だけ、彼女を独り占めした。
彼は自分の肌の上に彼女の素膚を重ねて温度を感じたばかりだというのに。
彼女を妻に定めて、彼と彼女は海に誓ったように、互いの温もりと心音に誓ったというのに。

傍に居たいと囁いたのに。
ヒカルはシャルルの傍に居ると誓ったのに。
・・・彼女の「傍に居る」という言葉は、肉体の近接を指すのではないということを痛感した。
■20

景風が吹いて、ヒカルの茶色の髪を揺らした。
少し長くなったシャルルの白金の髪の裾を持ち上げた。

夏の薔薇園では、植垣の背が全体的に少し高くなっていた。
これもヒカルの知らない・・・昨夏になって初めて知った薔薇の苑の様子だった。
彼のオフ期間のことであり、周囲の人の気配を隠すための策だった。
だから、周囲から杜の香りが漂い、空に月が浮かんでいる様子だけを眺めることが出来る。
僅かに、本邸から漏れる淡い晄が空を一部白くしている。
足元に設置された遊歩用の灯は極限までに光量を落とされていた。
その中をふたりは静かに対峙していた。

「死体解剖同意書にもサインをしてきた」
ヒカルは言った。
「・・・何かあった時の話はしない。もしも、という仮定で未来を作ることはしたくない。
でも、今、私ができるのはこれだけだから」
全部が欲しいとシャルルは言った。
私の全部・・・私の魂だけではなく本当にすべてを捧げたいと思うから。
ヒカルの悲壮な声に、シャルルが頸を振って、苛立たしげに言った。
「仮定ではない。可能性を考えろ、ヒカル。・・・・貴女の身分保障が十分ではない現在の待遇で行けば、その同意書にサインをしたことを後悔することになるぞ。貴女は、行かなくても良い国に足を運んで、そしてわざわざ後悔するために赴くのか」
「後悔しないわよ」
「ヒカル」
シャルルは彼女の名前を呼んだ。
どうして彼女はそうやって言い切れるのだろう。

「私が万が一、私でなくなったら、シャルルが治してくれる。きっと治してくれる。
それに・・・私が万が一・・・・シャルルと結婚・・・してから行ったら」

ヒカルは結婚、という言葉を小さくして言った。
近い将来実現する未来だろう。
シャルルなら必ず完遂させるだろう。
でも、それは今ではないことは、彼もよくわかっているはずなのだ。
それなのに、行くのが止められないのであれば、ヒカルに十分な安全を備えてから、行け、とシャルルは言う。
その気遣いすら・・・ヒカルは不要だと申し出たので、シャルルはあからさまに不機嫌な顔をして不満を表出させた。

「あの国に行って命を落とすことだけを仮定しているわけではない。もし。・・・もし。私にもしものことがあれば、シャルルはひとりになってしまう。その点については後悔する。きっと、悔やんでいるだろうとシャルルに思わせてしまう。
・・・・だから、シャルルにはジルが必要で・・・ジルに付きそうミシェルが必要で・・・・そしてルイが必要だ」
「ヒカル。オレはもしも、という話はしたくないというヒカルを尊重したつもりだけれど。・・・それではオレと別れるために、ヒカルはオレと一緒に過ごそうと思ったのか？・・・傲慢だな。オレを夫と呼んで、オレは貴女を妻と呼んだ。
それが何を意味するのか、わかっているのか」
「わかっている・・・わかっているよ」
ヒカルは泣きそうな顔をしたが、唇を噛んで落涙を堪えていた。
「シャルル、お願い。私をあの国に行かせて欲しい」
問答を繰り返しても、ヒカルの決意が変更されないだろうと思ったのだろうか。
シャルル・ドゥ・アルディは軽く溜息をついて、空を見上げた。
・・・・見たくないと思っていた夏の夜空だった。
でも今は・・・この空にヒカルが消えて行きそうな感覚がわき起こり、地面を見つめる方が辛かった。
下を向けば、顔を上げたときに、目の前に佇む茶色の瞳の彼の妻は夢幻（ゆめうつつ）で・・・・彼女が晄となって実体を失い、薔薇の空気に還ってしまうような気がした。
地面に答えは落ちていない。
上を向けばヒカルを想って不許可を繰り返す言葉しか唇に乗せることが出来ない。
それなら・・・それなら、彼はどうすればよいのだろうか。
わからないことはないはずなのに。
シャルル・ドゥ・アルディは、この気持ちをどういう範疇に属する問題として処理すれば良いのか、わからなかった。

「・・・・それでは、アルディ当主夫人となってから行くことも考えないのか」
繰り返さないシャルルが再びそう言って、ヒカルの再考を促したが、彼女は首を横にしか振らなかった。
「シャルルは、わかっているはずよ・・・私が何をどうしたいのか・・・」

わかっている。
彼女は、黒須昶として行きたいのだ。
かつて、シャルルが足を運んだあの国に行って・・・
母マリナが行き着くことがなかったあの国の土を踏んで、そして彼女はマリナではない・・・・成人したヒカル・クロスになるのだ。
皆が置いて行ったことを、マリナが気に病んでいたことは知っていた。
しかし危険を冒して、必要のない・・・彼女には必要のない危険を受け入れてくれ、とは言えなかった。
だから､シャルルもカズヤ・クロスもマリナを連れて行かなかった。
そして他の誰もが同じように単身で行った。
マリナを連れて行けば、シャルルはきっと姿を現すということを知っていたのに。
もし、マリナがあの国に行けば、今の状態は存在しなかったかもしれない。
彼女の存在が危険な情勢のあの国にあると知ったのなら、シャルルは何を捨てても彼女の安全を一番にしただろうに。
しかし・・・もしもを模索しても・・・・ヒカルはシャルルの永遠の晄であることに揺らぎはない。
彼は・・・ヒカルの全部を貰い、掠い、そしてすべてを・・・彼は与えると言った。
眼の前に居ない人を想うのは苦しかった。
しかし目の前にいる人を失いそうになる時も、苦しいのだと知った。
・・・ヒカルはシャルルにシャルルの知らないシャルルを教える。
何もかもを教えたはずなのに。
シャルルが、ヒカルに教示されるのだ。

・・・・彼女が居なければ、生きていけない。

彼女と生きたい。
彼女と生きていきたい。

死ぬのは赦されていないから。
ヒカルが居なければ、生きているのに死んでいる状態になるだろう。
彼女を失ったら、今度こそ・・・自分はもう、何もかもを捨てて・・・生きていたくないと思うほどの荒野を彷徨うことになるのだろうと確信していた。

「私は・・・シャルルを助けたい。
根本的な原因を調べなければシャルルだけではないこの後の世代に何も残せない。
だからサンプルを取ってくるだけ。
それには、当時のシャルルの系図原簿の記録から、シャルルの行動記録を知っている人しか・・・水なのか空気なのか、苔なのか、カビなのか・・・・
どの場面で感染したのか、知りうることができないから・・・誰にも頼めない。
だから、私が行く。
・・・・私がシャルルにできることは少ないから。
私はこの家の家族になりたいの・・・愛されて倖せになって、それでも何かに目をつぶっている状態を倖せと感じても・・・本当に安らかになれない。
シャルルの杞憂の源を取り除きたいの。
・・・シャルル、私はもう、眼を反らしたくないのよ」

知らないことを知っていたのに、彼女はこの家の沈鬱を知っていたのに。
それなのに、知らないふりをしていた。
それを気に病んでいる。今でも・・・これからもずっと、考え続けるだろう。
■21

シャルルは冷笑した。
「あいにくと」
彼はそう言って言葉を句切って微笑んだ。
挑戦的な、青灰色の瞳を、ヒカルに向けた。

「オレはヒカル・クロスというオレの唯一の妻を優先することにしていてね。
ヒカル。
・・・・よく聞いてくれ。
オレは神に誓わないで妻を娶った。
これが・・・当主はランスの教会で式を挙げるという、しきたりに反する行為だとしても、オレはこの事実を曲げるつもりはない。
・・・貴女の大いなる愛も欲しいと思うけれども・・・オレを按じての渡航なら、オレは許可しないよ。
・・・空港を封鎖してでも、貴女をここに閉じ込めてでも、行かせない。
・・・そして貴女が使命だと信じるすべてのものを切り捨てて、オレは貴女を・・・毎日寝室から出さないようにすることもできる。
貴女が自然妊娠するまで、毎日・・・毎日貴女を抱くことを自分に課すこともできるんだよ」

「シャルル」
ヒカルは悲鳴のような弱々しい声を漏らして、彼女の運命の人の名前を呼んだ。
そして・・・苦しくなって、ヒカルよりもっと苦しそうな表情を浮かべるシャルルにもっと切なくなって、ヒカルは意図せず、腕を伸ばした。
躰を預けて・・・あの夏の日のように、彼の胸の中に飛び込んだ。
胸が潰れそうだ。
愛しているのに・・・愛しているのに・・・・離れたくないのに・・・シャルルの苦悶を取り除くことが出来ない。
彼が、哀しむことも憤ることも予想していた。
言葉が続かない。
考えていた言葉のほんの一握りしか・・・言うことが出来ない。

狂おしいほどに、夢中なのに。
それなのに・・・それなのに。
彼はヒカルを抱き締めた。
強く・・・しっかりとした力で、ヒカルを抱き受けて・・・彼女の茶色の髪に頬を埋める。
ヒカル、と何度も彼は囁いた。
月の光の中で、惑いそうな予兆の目眩を感じる。
しかし・・・この腕の温もりと、彼女の髪の香りと・・・明らかにあの人ではない晄の娘の躯の感触が、彼をこの世に留め置く。
狂った獣王は海姫を妻にすることで、ようやく・・・悩乱の世界から戻って来た。
こよなく愛する彼女は、獣王が失ってしまった愛や思い出さえ愛おしむ。
彼が慈しむ彼の血族達も同じように汎愛する。

「シャルル。・・・・愛している。愛している。愛しているの。ずっと好きだった。ずっと好きなの。いつでも、いつまでも。どこにいても。・・・・・あなたが好きよ」
ヒカルは囁いた。
シャルルが苦しげに歎息する。

いっそのこと、ヒカルと一緒に自らの存在を、この瞬間に消え去ってしまいたいと思うくらいに。

幸福の絶頂は、過ぎ去ってみないとわからない。
けれども・・・シャルル・ドゥ・アルディは、今、この瞬間が最も倖せな瞬間であるとわかっていた。
滅多に自分の想いを口にしないヒカル・クロスが、途切れ途切れにシャルルに思いを述べるということが、どれほど勇気が必要であったのかということを、シャルルは知っていたから。

全部・・・全部が欲しい。
彼女のすべてが、欲しい。
今すぐ。
彼女の記憶が混乱するような罹病について期待したことがないと言えば嘘ではない。
マリナとして生きたら、彼女は楽になれるだろうか。
それとも・・この絶頂で生き存えた方が、彼女は倖せになるだろうか。
しかし、そのどの可能性についても、シャルルが愛することを止めるという条件は含まれていなかった。
愛を始めてしまった。
始まったら終わる。
終わりと始まりは表裏一体だ。
でも・・・終わらせることが出来ないのだ。
終えられないのだ。
あの時のように。
マリナの倖せを願ってあの男に彼女を戻したように。
・・・ヒカルを戻してやることが出来ない。
彼女の倖せを願って、他の男に渡すことが出来ない。
この愛の罪を贖罪するために・・・地獄に堕ちて業火に焼かれてもなお、後悔しない。
それでも・・・ヒカルを想って彼女の唯一の思い人という地位を捨てるつもりはなかった。

ヒカルは涙を堪えるので精一杯だった。

言葉を重ねても・・・彼に対する想いが全部伝えられない。
躰を重ねても・・・彼に対する愛は深まるばかりで、愛のすべてを捧げられない。

愛する度に。
愛される度に。
彼女と彼の愛は深まり広がりそして未来へ紡がれていくから。

ふたりはしばし・・・無言で抱き合ったままだった。

「傍に居たいから、行くのよ。
・・・・戻って来たら・・・シャルルが困ったと言ってしまうくらい、一緒に居るわ」
「それなら・・・・・オレに示してくれないか」
「どうやって？」
彼はそこで小さく含み笑いをした。
そして、ゆっくりと・・ヒカルの躰から離れると、彼女の顔を覗き込んだ。
大きな手の平で・・・ヒカルの小さな顔を包み込む。
彼の妻は美しかった。
最近はますます色素が薄くなり、彼女は意図せずして、望んだ金の髪や白金の髪の・・薄い色素の瞳のこの家の者たちに近くなってきたように思われる。
「あの男には、くれてやらないよ、ヒカル」
あの男、とはもちろん、ルイ・ドゥ・アルディのことだった。
ヒカルは黙ったままだった。
彼女からどういう答えが戻ってきても、この宣言を覆すことはしない。
「ヒカルは渡さない。誰にも・・・。どんな男のことを想っても赦そう。でも、オレはオレだけしか赦されない願いを、ヒカルに望む。それを叶えてくれるのなら、ヒカルの出立を許可しよう」

「・・・・どんな？」
その答えをわかっていたのに。
ヒカルは涙声で言った。

泣かないと誓ったのに。
それなのに・・・シャルルの前では、涙が溢れる。

あっという間に、茶色の大きな瞳から、滴が墜ちて、シャルルの手の平を湿らせた。
「・・・どうして泣くのかな。オレは、まだ何も言ってないよ」
「・・・わからない。でも、涙はシャルルが止めてくれるのでしょう？」
「我が妻は、随分と夫任せで困るよ」
「そうね・・・諦めて」
彼はそこで永遠の晄という名前の彼の恋人にキスをした。

何度も交わした口吻であったし、塩の香りのするキスはこれが最初ではなかった。
それなのに・・・それなのに、胸が締め付けられる。
初めて口付けを交わしたあの日のように・・彼は啄むような軽いキスを繰り返した。
頬を包んだ手の平の中で、ヒカルは涙をこぼしながら瞳を閉じて・・シャルルの頬を押し当てられた彼女の若い滑らかな頬を濡らし続けた。

しばらく彼女の唇の自由を掠った後に。
シャルルはそっと呟いた。
そして願い事を口にした。
これは幻影だろうか。
夏の夜の・・・毎夏のような幻惑の夢の中で彼は囁いているのだろうか。
しかし、涙の潮気が、彼にそうではなく現実なのだと告げる。

これまで・・・誰にも願ったことのなかったことを。
白金の髪の、青灰色の瞳の人は・・・・
生涯口にしなかった言葉を紡ぎ出した。

・・・あの人にも言わなかった。
誰にも、言わなかった。
誰にも、望まなかった。

それなのに、その願望を知っているよ、と傲慢に強引に実現した、彼の誇りを傷つけた血の繋がる者たちを許せなかった。

「ヒカル」
掠れた声で、彼は言った。
目の前の・・・若く美しい、最愛の妻に向かって、彼は言った。
厳かに。
そして・・・密やかな積年の願いを、彼はようやく、夏の夜の空気に混じらせて、言うことにした。
一生、言うことはないと思っていたのに。

・・・・これまで恋人と呼べるような者もいた。
でも、言わなかった。言えなかった。
まったく・・・・そんな可能性について未来を描くことはしなかった。
彼は。
シャルル・ドゥ・アルディは。
静かに言葉を待っている、目の前の茶色の髪の・・・永遠の彼の天使に願い事を囁いた。
一夜の夢から始まった他の者と閨房を共有しても、誰にも言わなかったし、誰にも願わなかったことを口にした。

「オレのこどもを産んでくれないか。
・・・・カズヤとマリナとオレとヒカルの血を引くこどもを・・・・・体外受精ではなく代理母でもなく、貴女が腹を痛めて生み出してくれないか」

贖罪はこれで・・終わったのだろうか。それとも新たに始まったのだろうか。
そんな胸の痛みを感じながら。
ようやく、彼は彼女に祈るような気持ちで苦悶しながら言った。

夢見る魚　04

■22

しばし茫然とシャルルを見つめていたが、やがてヒカルは少し頸を傾げて質問した。

「・・・何人欲しいの？」
「オレの祖父の記録を凌ぐくらいかな・・・・でもそれは・・・貴女から生まれる者でなければあり得ない」
彼は笑った。
そんなこたえが戻ってくるとは想定していなかったからだ。
ウイかノンかの誓約で良かったのに。
彼女はそこを越えて、いきなり「何人生み出せばよいのか」と交渉し始めたからだった。
まったくもって、予測不可能な人だった。
・・・あの人に似ている。
そしてシャルルが愛したあの人の年齢を超えて・・・彼女はあの人でもなく昔のヒカル・クロスでもない者に成長しようとしている。

彼の祖父には、母親違いのこどもが何人も居た。
そのことが、今のアルディ家の後継問題をより複雑化していることもあった。
それなら､シャルルは同母多子であることが良いと考えたらしい。
「・・・・それは大変だわ」
ヒカルは言った。
シャルルは彼女のこめかみに、軽く唇を添えて、囁く。
「そうでもないよ。・・・貴女だけが実現することの出来る夢なのだから」
シャルルは夢を見ないのに、そう言って微笑んだ。
そして彼女の波打つ茶色の髪をそっと撫でた。
細く長い指先に、海の漣のようにヒカルの髪が絡み付く様に、シャルルは満足そうに眼を細めた。

「・・・出立は許可する。でも・・・それはジルの治療のためだ。そして・・・ルイ・ドゥ・アルディを戻すための方策でしかない。結果が出なければ、すぐさま貴女に帰国命令を出す」
「私はまだアルディ家の指揮命令に従う義務はない・・・」
ヒカルが慌ててそう言ったので､シャルルはまた一つ、笑いを漏らした。
「ヒカル。・・・オレはね、欲しいものはどんなことをしても手に入れるという、この家の最も良からぬ性質を受け継いでいると実感するよ。・・・特にこんな時には強烈にそう思う」
「どうして？」
「ヒカルの躰の胎に、オレの望みが宿っていたらどうする？・・・たとえそうでなくても、オレは医師で、そういう可能性があると周囲に言ったら、誰も無視できない。
・・・・貴女は渡航者の黒須昶ではなく、アルディ家当主の子を宿した母体になるわけだから、誰もが貴女の安否情報を確保することに躍起になるね」
「シャルル」
「ああ、ヒカル」

困って彼の名前を呼んだヒカルに、シャルルは微笑んだ。
これまでに見たことがないほど・・・蠱惑的で、そして少年のような闊達さがあった。

「ヒカル。オレは何度も繰り返さない。
・・・・オレが貴女を事実婚を優先させて、先に妻にしたと報道規制を解除したら、どうなると思う？・・・徐々に浸透するように情報操作していたけれど、一気に伝わるように操作することの方が、より簡単なのだろうね」
彼はそこまで言って、またひとつ、ヒカルに軽くキスを落とした。

「オレと貴女の・・・夢見る魚が貴女の胎で泳いでいるのかもしれないと想像するだけで、とても・・・冷静になることが難しいくらいだよ、ヒカル」

満身創痍になることを懼れずに、彼女はシャルルにこの場所で・・・昨夏シャルルの惑っていた世界から彼を呼び戻した。
決して一緒に過ごすことは出来ないと思った夏の庭で、彼女とこうして月晄を浴びて歩くことができた。
・・・彼が彼女にしてやれることは、彼女を送り出すことだけだ。
彼女を日本に送り返したあの時のように。でもあの時とは違った。
誰かと倖せになって・・・二度とアルディ邸には来なければ良いのにと願ったあの時は、もう違う。

・・・父としてでもなく、保護者として送り出すのでもない。
彼女の・・・彼女の唯一の者だという自負があるから、彼女を送り出すことが出来る。
シャルルは彼女を引き止めるような言葉を述べたが、それは彼女が無理や無茶をしないためだ。行くのを止めろとは繰り返さなかった。

自分がいなくなっても婚姻関係もないし、骨髄提供も行っているし、死体解剖同意書にもサインしたから万全だろう、と言うヒカルに・・・どれほどシャルルが彼女を愛しているのか、知らしめたかった。
しかし、愛する者が居れば決心が鈍ることも、シャルルにはわかっていた。

「・・・すぐに戻るように。もちろん、結果を持って帰国してくれ」
シャルルの言葉に、ヒカルは頷いた。
ヒカルが帰る国は、ここだ。帰る場所は、ここだ。
「はい」
「・・・・それから年内には戻れ。・・・それ以上は待たない。もし、戻らないのであればオレが貴女を迎えに行くために、直接乗り込むから、そのつもりで」
「それでは意味がない」
「だから」
シャルルはそこで言葉を句切った。

甘く切ない晄を放ち、目の前の茶色の瞳の贖罪の娘に・・・微笑む。

「サンプル採取だけで良い。あとは、オレが引き継ぐ。・・・そして、抗体を作ったら・・・今度は一緒に行こう。あの国に。
・・・・一緒に行ってくれるか？」
「シャルル。私は貴方の傍に居たいと、何度言えばわかるのかしら」
フランスの華と呼ばれた傑物に、彼よりずっと年下の娘は仕方がないわね、と言って微笑んだ。

「貴女には、貴女しかできないことが多くある。・・・でも、最優先されるのは、オレの・・オレと貴女で家族を作ること。
アルディ家に多くの・・・我が一族が望んだ、抗体を持つこどもを生み出すことだ」
「それは代わりが居ないから・・逃げ出したくなりそうなほど、大変ね」
「そうだ。大変な責務がある。・・・・ヒカルはそれを一緒に背負っていくことになるから・・・もう逃げられない」
シャルルはそう言って、彼女を抱き締めた。

昨夏は・・・彼女が彼を抱き締めたのに。
今はシャルルがヒカルを包み込む。
彼女の腕が、シャルルの背中に回されて、ふたりはまた・・・静かに抱擁した。

引き留めることはしない。
あの男の娘だから。
引き留めないかわりに、置いて行かないことを約束させた。
あの人の娘だから。

小菅で別れた、あの最後の日。
彼は、彼らに背中を向けて、アデュウと言った。
しかし、さよなら、と彼らに言わせることはしなかった。
あの人はいつも、またね、と言ったから。
彼は永遠のさよならと告げたが、あの人は・・・あの人の最後は「またね」という言葉だった。
また・・・・いつか、逢いたいから。
その時には・・・彼らは苦笑して迎えてくれるだろうか。
あの男は怒るだろうか。あの人は面白そうに笑うだろう。
・・・・あの人達の一番大事な晄を彼は貰い受けたシャルルを見て、見間違うこともなく、彼の名前を呼んでくれるだろうか。

「シャルル」
そっと、声をかけたヒカルの顔が近くにあって、シャルルは目を見開いた。
静かに抱合していたのに・・・彼の魂は遠い浮かぶ月の光に共鳴していた。

「私は必ず戻って、約束を果たす。・・・・だからヒカル・クロスとして行かせて欲しい。
シャルルに迷惑をかけることはしたくないし・・・そうしないと行き着けない場所に行くことが出来ない」
シャルルがかつて調査したあの現場は、今は閉鎖されてしまっている箇所があった。
ヒカルはそこに何かがあると・・・・予測しているらしい。
しかし実地検証を行っていないので・・・まったく未踏の地と言っても過言ではない場所に、彼女は赴こうとしている。
「・・・怖くないの？」
「ちっとも」
彼女はそう言って笑った。シャルルの腕の中で、くすくすと声を漏らして笑った。
「大事な人のために行動することは怖くない。・・・・シャルルだって・・・お父さんだって、そうだったでしょう？」

■23

この人は・・・今までのヒカル・クロスより強くなった。
しなやかに逞しくなり、そして愛を知って・・・大人になった。
シャルルは眼を閉じて大きく息を吸った。
吐き出すのではない。彼は大きく吸い入れた。
溜息は・・・倖せが逃げてしまうよ、とヒカルが憂えるから。
シャルルは、幸福を吸い込んだ。

涙を流すだけが泣くとは限らない。

かつて、彼女はそう言った。
あの人がヒカルの躰を使って、シャルルにそう忠告したかのようなそんな意味のある言葉だった。
この娘はいつも微笑んでいる。
しかし、微笑みの下でいつも泣いていた。
それに気付いていたのに、気がつかないふりをしていた。
それは・・・シャルルの罪だった。
彼女の深い憂いを知ってなお、自分の悲しみに溺れていた。

今、こうして彼女の息吹を感じていると・・・・
彼はその憂いさえ、身に引き受けようと思った。
涙の出ない涙さえ、止めて見せようと思った。
幸福は、そうでない時期を知っているものがより深く味わうことができる。
冬が来るから春が来る。
春が訪れるから、夏の夜が来る。
そして・・・それが過ぎるから、狂濤を乗り越えた夏の後に、また秋が巡るのだ。

「ヒカル」
シャルルは囁いた。
顔を上げたヒカルの瞳に、シャルルが映り込んでいる。
それほど近い距離に居て・・・それでももっと近づきたいと思うこの気持ちを、どうやって彼女に伝えたらよいのだろう。

「オレの夢を・・・叶えられそう？」
「私の夢はね、シャルルに夢を見てもらうことなのよ」
ヒカルは微笑んだ。
少し心もとなさそうに震える声で言う・・・愛する人の低い声音に、ヒカルは言葉を重ねた。

「・・・・今の私だけにしかできないことをやり遂げに行く。・・・皆がそうしたように。
私もそうしたい。・・・・夢で終わる夢にしたくない」

「オレは寛容な男だと思うよ。・・・・でもこれだけは忘れないでくれ」
彼はそう言って、ヒカルの肩に手を当てて、歩こう、と言った。
今度は・・・彼女はごく自然に、シャルルの腕に手を添えた。
月光の下で、彼らはランスの教会の中を練り歩くように、厳かに静かに歩みを進めていく。

正面を向きながら、シャルルは整った顔を厳しくして宣言した。
「シャルル・ドゥ・アルディの名前にかけて誓おう。・・・・オレはヒカルを妻にする。そして生涯愛し抜く。涙を流している妻の涙を止めてみせる」
「シャルル、シャルル」
彼女は慌てて言葉を遮った。
当主が名前にかけて何かを誓うことは滅多にしないことだと承知していた。
しかも当主という称号にかけた誓いではなく、彼の名前に誓ってしまった。
彼が生涯シャルル・ドゥ・アルディで在る限り、それは有効となってしまう。
「誓い事が多すぎる」
「オレは貪婪だと言っただろう、ヒカル」
くすり、と笑いながら、彼は斜めに視線を流して、彼の妻が慌てる姿を楽しそうに眺め回した。
「全部が欲しいから。貴女のすべてを手に入れる為には、何でもする。
・・・・これくらいの誓願ではちっとも実現しそうもないからね。
さて、どうしようかと考えているところだよ」
「シャルル」
困ったようにヒカルが声を漏らして哀願した。
「他の男には渡さないよ、ヒカル」
彼は短くそう言った。
そして次に、ふと・・・険しくしていた表情を和らげて、不安そうに顔を曇らせたヒカルを安心させるかのように柔らかく微笑んだ。
脇を締めて、添えられた彼女の手を捕らえる。
反対側の手の平で、ぽんぽん、とまだ疼痛が続く軽く彼女の腕を撫でた。

「世の者がなんと言おうとも。誰がなんと言っても。オレは貴女を失わない。失いたくない、ではない。失わないと言っている。
だから、オレが名前に誓ったからには・・・・ヒカルは相当な覚悟をしておかなければならない」
「覚悟・・・難しいわ」
ヒカルが苦笑した。
「いいや、貴女は、オレと一緒に・・・・」
そこまで言うと、彼は薄い唇を閉じて、はっと何かを思い起こしたように口を噤んだが、すぐに唇を歪めて言葉を続けた。
この言葉を繰り返すことになろうとは・・・・

「貴女は、ずっと一緒にオレと居るんだ。
たとえ、互いに離れた場所に居ても。
・・・・躰が魂から離れても。
オレから離れられなくなるほどに・・・オレは貴女を全部貰い受けると言っただろう」
「催眠術まがいの囁きはやめて・・・・」
ヒカルがそう言ったので、驚いたようにシャルルは目を見開いた。

「ああ、昔、あの人もそう言ったな。・・・・催眠術まがいだって。
・・・・でもこれは催眠などではないし・・・夢でもないぞ。・・・・確かめてみる？」
ヒカルは言葉を詰まらせた。
こういう思い出を・・・彼とあの人だけが知っている秘密めいた思い出を、シャルルが口にすることはこれまでなかったからだ。
そして、彼は惑わずに、あの人とヒカルを別人だと認識している。

「でも、夢にも思わなかったよ。・・・オレは彼らの義理の息子になるわけだ。・・・・・ヒカルの両親より年上の婿だね」
彼はそう言って、そっと・・・ヒカルの指先に触れた。
彼女が笑顔を見せたので、ほっと息をついた。
やはり、ヒカルには笑顔が似合う。

たくさんの書類にサインをしてきたのだろう。
彼女の指先からインクの香りがしたときに、シャルルは彼女の願いを察した。
望むなら・・・彼女の望みはすべてシャルルは受けようと思った。叶えてやろうと思った。
そのかわりに・・・シャルルの望みを。
彼の夢を・・・・・彼女は叶えようと言った。
誰に誓ったわけでもないのに、彼と彼女はすでに・・・固い誓約を交わしていた。
その指に、彼は彼女との約束を乗せる。

「婚約指輪は、戻って来てからだ。それまでに作っておく」
「必要ないわ」
「いいや・・・シャルル・ドゥ・アルディの婚約者が無環で在ることは赦されない。きれい事ではない、多くの事を解決するために、ヒカルはこれから・・・必要ではないものも持たなければならない。
でも、それは一人では背負わせない。
・・・・ヒカルがオレにそう言ったように。
すべてを分かち合ってくれ。
式はランスで挙げる。これは絶対だ。・・・誰かを見たり考えたりすることができないように、貴女を拘束する。それくらいは我慢してくれ」
「困った人ね」
「ああ、そうだよ。・・・・困ってしまうほど・・・オレは貴女に恋している」

好きで好きで・・・独り占めしたかった恋を経験した。
好きすぎて、とうとう独り占めできなかった。
今は・・・独り占めして良いと言われているのに、そうできない愛を知った。
彼は空を見上げた。
静かな夏の空を仰いで、彼は瞳を潤ませた。

見ているか？あのふたりは､見ているだろうか。

オレは・・・オレはヒカルと生きる。
そして彼女を倖せにする。
泣かせないと約束はしない。
きっと・・・何度も泣かせるだろう。
それでも、涙を止めてみせる。
たとえひとりで涙を流していても、シャルルと彼女の魂が寄り添っている限り、ヒカルは孤独の中で堕涙することはしないし、そうさせるつもりもない。
そして・・・・オレも命を閉じる時には倖せだったと感じるような生を歩くことにする。

いつか・・・いつか、逢いたいから。
君たちに、いつか、逢いたいから。

彼はそう心の中で呟いた。

夏の夜風であったのに、どこか・・・清涼で心地好かった。
厭わしいだけの夏であったのに。
・・・・・確かに薬効は切れていた。
彼は普段と同程度には感情を抑えることができなかったし、とうとう・・・挙式を待つ前に、ヒカルを彼の胸に抱いた。
彼女を・・・・狂ってしまうほどに愛する男が他にいるのに。
その存在を知っているのに、その男が長い間彼女を想って過ごした空間で、彼女と眠った。
残酷だと思う。
鬼神となって地下に瞑すに値する蛮行だとも思う。
でも・・・・でも、それが止められないのだ。
あの高みから、あの人を救うために飛び降りた時と同じ衝動が再び彼を襲ったのだ。
いくら最愛の者だとしても、彼女に願ってはならない願いをかけた。
でもそれでも良いよとヒカルが快諾したから。
彼は惑う路のぎりぎりで、いつもの夏のようにあちら側に渡ろうとした足を止めて、踏みとどまることができた。

わかり合えるということがどれほど尊いことであるのか、ジルが教えてくれたはずなのに。
判らないからこそ、同じ血でも激しく衝突することを､ミシェルが教えたのに。
・・・・そして家族の意味と、彼が焦がれた家族そのものと・・・愛という名前の魂の試練はひとりで身に受けるものではなく、分かち合うこともできるのだということをヒカルが教えた。
そして。
ルイがヒカルを愛していることを知ってなお、シャルルはどう生きるべきか知った。
あの男にだけは渡せないから。
・・・・・だからヒカルを倖せにする。
譲ったり、諦めたりすることができないとシャルルがルイに宣言するときが来た。
この愛は。ヒカルがシャルルを愛していると言う限り、滅しない。
・・・・あの人の時のように、ヒカルを解放することが愛の証ではない。

解放する愛を経て、この愛を得た。

愛は一つではない。愛は回帰しない。
同じ愛は存在しない。

・・・・ヒカル・クロスの言うとおりだ。

彼は空を見上げた。もう一度。

「ヒカル。・・・・明日の朝は・・・薔薇を一緒に摘もう」
「シャルルは起きられるのかしら」
面白そうに囁く人に、シャルルは少し笑って言った。
「それはヒカルへの忠告だよ。・・・・オレが今夜こそ貴女を解放するとでも思った？
・・・それはないな。何しろ、ベッドはひとつしかないから」
ヒカルがシャルルの名前を小さく呟いて、抗議の声を漏らしたが、シャルルはくすくすと声を漏らして笑っただけだった。
「さ、戻ろう。・・・・夜が更けて、月が高くなった。残りのオフ期間を有意義に過ごすために・・・・せめてバスルームの修理を急がせる指示書くらいは､オレに書かせてくれよ、ヒカル」
彼はそう言って、傍らの彼の永遠の晄に微笑んだ。
■24

夢のような、という言葉はシャルル・ドゥ・アルディの前ではほとんど使ったことがなかった。
彼は夢を見ないことを知っていたからだ。
深く睡臥に沈んでいくか、浅い眠りを繰り返すか・・・睡眠自体が、彼の疲労回復のための時間であるという程度のものとしか、彼は認識していないようだった。

短い休息についたシャルルの横顔を、ヒカルは仄暗い闇の中で見つめていた。
ヒカルを腕に抱いたまま､決して離そうとしなかった。
が、やがて呼吸音が等間隔になり、シャルルが彼の水底に沈んでいったのを確認すると、ヒカルは彼の腕の中からそっと抜け出した。起き上がって、身支度をした。

そして、シャルルの白い肩の上に、薄いブランケットをかけてやる。
オフを取得するまでの激務に加えて、彼はほとんど休息を取っていなかった。
寝乱れたシーツの中で、彼は微睡む白金の魚となって寝っていた。

あどけない眠り顔だった。
満ち足りていて、少し微笑んでいた。
彼は夢を見ないけれど・・・夢のような時間だと言った。

一生分の夢を見た、と彼はかつて言ったそうだ。

それと引き替えに・・・彼が失ったものや手に入れられなかったものがあった。
それを引き替えに・・・彼は今の彼になった。

彼は夢見る魚になって・・夢幻の海を泳ぐ。

ヒカルは、目頭を軽く押さえた。
慣れない夜更かしが続いている。
ヒカルの疲労もかなり蓄積されていた。

シャワールームを使うと彼が眼を冷ましてしまうので、あらかじめ用意してあった蒸しタオルで躰を拭き清めて彼の香りと愛の小夜時雨の痕跡を取り除いた。
着替えをするための衝立の奥に身を隠しながら、静かに身支度を始める。
それでも視線は彼から眼を反らさずに気配を察知できる距離に居た。
腕の腫れはだいぶ引いたが、熱されたタオルが彼女の体温を奪っていく都度、これが夢ではないのだという現実に浸る。

シャルルが一生分の夢を見た、と言ったが。
彼女も同じだった。
・・・これで思い残すことはない。

あの国からすぐに戻ってくることはできないかもしれない。
いつ戻れるかわからないよ、とミシェルは淡々とヒカルに説明した。
本邸の応接室の大きな机の上に、たくさんの書類を広げて、彼はひとつひとつに説明を加えた。
読めば判ると言って普段はそんなことはしないのに。
そして・・・・彼はシャルルと同じ貌で、じっと・・・冷たい青灰色の瞳で、ヒカルのサインがすべてに入るのを見つめていた。
代理人を立てずに、ミシェル自らがヒカルの渡航に関して、手続きから署名までを請け負った。
「一週間後かもしれないし、一年後になるかもしれない。結果をもたらすまで戻れない約束の調査隊だ。・・・・それでも志願するのだね」
「はい」
ヒカルは頷いた。最後の署名を終えて、ペン先を離した時のことだった。
ジルの体調は大丈夫なのか、と聞くと、ミシェルは冷笑した。
「他人の心配をする余裕を見せびらかしたいわけか」
「いえ・・・」
彼が他者より自分の心配をしろと言ったので、ヒカルは少し微笑んだ。
ミシェルは彼女の話を一切しない。
この家に本当の幸福が訪れていないことを知っているからだ。
戸惑っているようにも見えた。
「・・・・・彼らは、大丈夫だ」
低いバリトンで、ぽつりとミシェルは言った。
ジルだけを指した言葉ではないことがわかったので、ヒカルは頬を緩めた。
彼が・・・護っているのは、ジルとジルの中に眠る夢見る魚だけではないことを知って安堵した。
彼らのためにも・・・早く結果を持ち帰らなければならない。
この館の人間で、シャルルのモザンビークの行動記録を把握しているのは、ミシェルとヒカルだけだった。そしてミシェルはあの国に入ることができない。
ルイ・ドゥ・アルディにはシャルルの系図原簿は開示されていないから、知らないのだ。
どんな生活を送り、何をどうして・・・あの国を救おうとしたシャルルが病に冒されたのか詳細を知らない。そして、ルイ・ドゥ・アルディはまだ戻って来ていない。
だから。ヒカルが行くしかない。
本当は・・・本当はシャルルと離れていたくない。
ルイの安否も気になり、ジルが惑うことなく無事に過ごすように見届けたい。
でも・・・でも、それでは駄目なのだ。

ヒカルは、茶色の瞳を瞑って、そして一度だけ大きく息を吸った。

その時に、こうなることは説明を受けていた。
そしてミシェルはヒカルとシャルルが将来を誓ったと知ったようだった。
どこか・・・それを期待していたような瞳だった。
彼を冷たいと思い、激しく攻撃されて臆していた時代を超えて・・・ようやく、シャルルと同じ貌をした人を・・・・この家で、ヒカルに真実を告げ続けた人なのだという認識に改まった。
「シャルルのことだから、ヒカルの涙を止めてみせると豪語したのだろうが・・・貴女が本当に流す涙に気がつかないよ・・・まだ、ね」
「それでも良いのよ」
ヒカルは笑った。
「馬鹿な男だ」
シャルルをそう言える者は、とても少なかった。
彼よりはるかに高い知能指数を持ったミシェルは、シャルルのように美しいけれど・・・冷たい微笑みで、ヒカルを見つめた。
彼女も微笑みを返した。
寂しい笑いではなかった。
心から愛しているから。
だから・・・・だからヒカルのことを何よりも大切に思ってくれるシャルルの心が嬉しかった。

「ヒカル。・・・生き抜け。生きろ」
彼はそう言うと、その他に言葉を加えずに、書類を持って去った。

それで･･･・良い。
いつかこの憂いは、払拭されるから。
いつか、この憂いがあったから、その先があったのだと思う時が来るから。

ヒカルの秘めたる想いは・・・すべてを彼に伝え切れていない。

シャルルは、全部を欲しいと言った。
そしてヒカルはすべてを・・彼に渡せる。
自分の魂がなくなったときに、この肉体は薔薇に戻らない。
彼女は、薔薇の一族ではないから。
だから・・・海に還して欲しかった。
その前に遺体を切り刻んで、ヒカルという希なる命の分析を・・・シャルルとミシェルとルイと・・・彼らの血を引く優れた者たちで、研究してくれれば、それで良い。

■25

シャルルが突然動いたので、ヒカルは慌てて・・・シャルルが横たわるベッドに足を運んだ。
しかし彼は起き上がらなかったので、ヒカルは枕元に腕を乗せてシャルルの状態に異常がないかどうかを観察した。
断薬により、何か・・・体調に異常を来すようなことがあってはならない。
彼女の目的のひとつは、シャルルの様子を観測することだった。

白金の髪が頬にかかり・・・その間から、物憂げな青灰色の瞳がこちらを覗いていたので、ヒカルはぎくり、とした。

「・・・・・眠れないのか」
「うん。シャルルの顔が余りにも綺麗で」
彼は目を瞑って、くすりと笑った。
「君の方が綺麗だよ。・・・おいで、一緒に寝よう」
シャルルは気怠げに、腕を持ち上げることが出来そうもなさそうだった。
その代わりに、細く長い指先で、とんとん、と枕の脇を叩いた。
こちらに来い、という合図だった。
だがしかし、ヒカルはじっと・・・彼の顔を見つめたまま、横を向いた。
「駄目よ。・・・ベッドが一つしかないから」
「じゅうぶん、広い。・・・ふたりで寝られる」

そして次に、ヒカルは眉根を寄せて・・・言葉が乱れないように、一気に言った。
少し早口になってしまった。
「・・・・枕がひとつだから」
「・・・・君に貸してやるよ」
シャルルはそう言うと頭を起こそうとしたので、ヒカルはそっと、彼の肩を押してそれを留めた。躰を起こしてしまえば・・・枕がふたつあることに気がつくだろう。
シャルルは微睡みながら・・・ほんの少し、眉を曇らせた。
「一緒じゃ、いやか？・・・それなら、オレが出よう。君を床に寝かせるわけにはいかない」
ヒカルは涙を堪えながら・・・そっと言った。
「いいわ・・・良いわ・・・わかった。それなら、一緒に寝る」
ベッドの右側に居たので、彼女は腰を上げて左側に回り込み、そしてベッドに腰を下ろした。ぎしり、とスプリングが軋む音がした。
それは先ほど・・・彼と彼女が静かな抱合によって僅かに軋んだ音とは違っていた。

・・・苦しい。
けれども・・・愛しているから。

ヒカルはシャルルの温もりをすぐ近くに感じて・・・胸を押さえた。
悟られないように・・・少し乱暴に、ブランケットの端を持ち上げて、ベッドの隅に入り込んだが、シャルルが向きを反転して、彼女を彼の胸の中に寄せた。

いつもは、シャルルは彼女を反対側に寝かせる。
いや、違うのだ。
シャルルは、ヒカルをわざと・・・逆側に横たえていたのだ。
それなのに・・・彼は・・・ヒカルをシャルルは・・・ヒカルを抱くいつもと逆側の腕を伸ばして彼女の躯を抱いた。

彼はヒカルを優しく抱き締めた。ヒカルは・・・・彼の背中に腕を回そうとして・・そしてその腕を止めた。
自分の上腕を見たら、彼が困惑するからだ。
俯いて・・・シャルルの胸に両手を当てて・・そして広い胸に額を押しつけて唇を噛んだ。
「式はランスの教会だ。・・・昔から、アルディの当主はあそこで結婚する」
ヒカルは黙ったままだった。
すると、シャルルは怠そうに細い指先を持ち上げて、ヒカルの顎を上げ、彼女の顔をシャルルの方に向かせた。
「新婚旅行は・・・世界を回って月まで行こう」
溜息が出るほど美しい微笑みを携えて、シャルルは囁いた。
「何もかも・・・君にやる。この世界中で・・・オレが手に出来る全部を、君に・・・・」
そう言って、彼はヒカルの額と頬にキスをした。
「愛している。・・・永遠に君だけを愛している」
ヒカルの唇と、手が震えた。
彼はそれでも構わずに、彼女の髪を撫で続けた。

・・・ヒカルを「君」と呼ぶ。
その瞬間は、ヒカルはヒカルでなくなる。
シャルルは決して・・・決して惑わなかったのに。
彼は・・・夢を見ないのに。
ヒカルを抱き締めているときには、彼は彼女をヒカルと認識しているのに。

それなのに・・・・シャルルは夢を見る。
一度睡眠状態になって・・・ヒカルが腕の中に居ないと、彼は戻ってしまうことがわかった。
その中で彼は・・無意識だから・・・・戻ってしまうことを自分で防げない。

それが・・・昨夏のあのやり取りの繰り返しであり、それよりもっと前の過去に・・・ヒカルの母とのやり取りを再現しているのだと知った。
彼は眠りに墜ちる度に、こうして・・・・この場面を再現する。
時間にしてみれば本当に短い夢だった。

でも・・・ヒカルはそれを記録しなければならない。
ちらりと時計を見て・・・時刻を記録する。
そして、明日も・・・彼の目の届かないところで、記録をまとめて、ミシェルに報告を送信するのだ。
覚醒状態では治癒効果があるのに、睡眠状態や半覚醒では出現してしまうこの状態を改良するために・・・・やはり、あの国に行って、母因となる「モノ」を突き止めなければならない。

安らかな吐息が再びシャルルに巡ってくると、彼女は大きく溜息を吐き出した。
幸福が逃げてしまうのに。
それでも、この胸の苦しみは吸って解消できる程度のものではなかった。

そして・・・・ヒカルの瞳から・・・涙がこぼれ落ちた。

愛しているから、志願した。
そして、シャルルは間違いなく・・・ヒカルを愛してくれている。
惑ってなお、彼は「君」とヒカルを呼ぶが、決して「マリナ」とは呼ばない。
ただ、この場面を繰り返すだけだ。
目が醒めると、記憶は欠落しているが、自覚はないはずだった。

ヒカルが少し疲れているのは、彼が彼女と・・・・海間の回遊のような抱擁を繰り返し行っているためなのだと思っている。
彼女があの国に出発する前に・・・・これまでの時間の空白を埋めるかのような行為を繰り返すシャルルに・・・ヒカルはただ扈従していたから。

堪えきれなくなって・・・嗚咽を漏らした。
ゆっくりと・・・身を起こして、静かにバルコニーに出た。
その間、彼女は声を漏らさないように、口元に手をあてて・・・・溢れる涙を手の甲に受けながら、早くその場を立ち去らなければならないと思って小走りになった。
静かな庭園が見渡せる別棟のバルコニーからは・・・本邸の灯りが見える。
そして・・・白んできそうな気配を感じさせる夏の夜空に浮かぶ月が、ヒカルを淡く照らし出していた。

・・・・・・これは、私の贖罪なのだ。

ヒカルは思った。
彼の妻になった。彼にすべてを捧げた。それでも・・・・それでも苦しい。
絶え間なく、彼に愛を注いでいるのに、それでもまだ足りないと求め続けられる・・・地獄の業火に灼かれている。

本当は。
シャルルのためだけではない。
この家の者たちを救うだけではない。

本当は・・・・・
本当は、自分のために行くのだ。

シャルルが戻りたいと思っているあの時間を奪うために。
自分の苦悶を払拭するために。ヒカルが苦しいから。ヒカルは耐えられないから。
原因がもっとはっきりして、改良された治療薬を投与されるようになれば、シャルルは夢を見なくなる。
もう・・・夢の海で泳げなくなる。

幸福そうな・・・愛を囁くシャルルの夢を、奪うために、彼女はあの国に行くのだ。

シャルルがあの人だと誤認した別人に・・・夏のマリナに愛を囁く場面を目の当たりにして。
そして実際に惑った彼が、ヒカルに愛を囁くのに、彼の奥底の意識が、ヒカルを「マリナ」と呼ぶことを赦さないことを知って。

・・・・愛しているから、この想いを秘めて私は・・・・あの国に行く。

ヒカルは涙をこぼした。
大粒の・・・・スコールのような涙だった。
それを拭ってくれる人の居ない場所に行かなくては、彼女は強くなれない。
あの国に行って・・・・年若く知識も実績もない自分が何か働きを見せることはないだろうとも思う。
命があって戻ってくることすら難しい国に行くことが、怖くないわけがない。
彼女は与えられた創られた命なのに・・・・その生命を失うのが怖かった。

シャルルのためなら命は惜しくない。
でも・・・・でも。
マリナに惑い続けるシャルルを残して死ねない。死にたくない。

相反する気持ちが混じり合い、激しく攪拌されているのに溶け合うことはない渦を胸に押し込んで・・・ヒカルはまた・・・涙を流した。
■26

最終日になった。

シャルルとヒカルはごく平穏に数日間を過ごした。
かつてアルディ邸で過ごした時間よりももっと静かだった。
そして、シャルルはいつもヒカルを傍に置いた。
ヒカルも・・・・いつもシャルルの傍に居た。
誰かのことや・・・何かを考えることのない・・・互いのことだけを考えるための時間がゆっくりと・・・しかしあっという間に過ぎていく。

こんな日々を・・・ヒカルと過ごすようになるなんて。
シャルルはそう言って微笑んだ。

本を読み庭園を散歩し・・・そして食事を楽しんで、夕陽を浴びて・・・夜は音楽を聴き、薔薇園の焼失後に一時はまったく途絶えてしまっていた虫の音に耳を傾けて・・・そしてふたりでベッドに・・・縺れ込むように沈んでいく。
主寝室もバスルームも現状復帰されたが、それでも・・・彼と彼女はヒカルの用意したベッドで休んだ。
長い間ひとりで眠ったそのベッドに、今は、ヒカルは夫と定めた男性と一緒に眠る。
そして、彼がひとりだけで・・・深く水底を漂っている僅かな瞬間にだけ、彼女は涙を流す。
その繰り返しの日が終わろうとしていた。

「やはりベッドは用意した方が、良かったじゃない」
ヒカルがそう言うと、シャルルは辛辣に切り返した。
「必要になるような原因を作ったのはヒカルだろう」
彼は長椅子に横たわり高い天井にまで伸ばされた硝子張りの１階居間で寛いでいた。

「これからは・・・あのベッドを本邸の主寝室に置くよ」
「私がこどもの時から使っていた古いベッドよ・・・当主に相応しくない」
「アルディ夫人に相応しい発言だね」
彼はそう言って微笑んだ。
日差しが射し込んで、彼の白金の髪を明るく照らす。
彼女はシャルルの軽口に、僅かに微笑んで、黙ったままだった。

シャルルと婚約を済ませてから行け、と何度かシャルルからもミシェルからも言われたが、ヒカルはウイと言わなかった。
ルイが戻らないうちは・・・それはできないと言って持ち越しにした。

「それでも・・・・オレはヒカルの居ない独り寝が耐えられないから・・・・せめてヒカルの寝台で眠りたいよ。・・・ヒカルの夢を見ることが出来るかもしれない」

彼は夢を見ない。

それなのに・・・。
夢、という言葉にヒカルは肩を少し上げた。
敏感になってしまっているのかもしれない。
彼女の疲労はピークに達しようとしていた。
明日からは・・・シャルルは長期の外出をすることが決まっていた。
その間に、体調を整えようと思っていた。

今夜からは本邸に戻る。
荷物を片付けて・・・搬出が始まっていた。
それでも、騒音や他者の気配を嫌うはずなのに、シャルルは居間で静かに・・・時間を過ごしていた。
先ほど、投薬再開まえの処置として、軽い筋弛緩剤と安定剤を打ったので、眠気に襲われているようだった。
彼の白金の睫が、速度を落として、ゆっくりと瞬いている。

「夏が終わるね」
最初の時と、同じ言葉をヒカルは漏らした。
万感の思いを込めて言った。
「・・・・そうだね」
シャルルも、静かに答える。

彼が惑うこともなく、一夏を過ごせた。
マリナ、と誰にも言わなかった。
ヒカルにも、言わなかった。

しかし言動に少し変調が見られるので、やはり・・・投薬はしばらく続けなければならない。
この後、本邸に戻り、彼は投与を受けることになっていた。

ヒカルとシャルルの・・・・最初で最後の夏が終わろうとしていた。
次の夏からは・・・こんな風に過ごすことはないだろう。
あの国から戻ってこられないかもしれない。
これが・・・本当の意味での、最後の夏になるのかもしれない。
ヒカルが戻って来ても、彼がこんな風に想望の世界に顔を綻ばせる夏ではない。

戻っても、戻らなくても・・・彼を哀しませることには間違いない。
手放しの倖せではない。
そういう覚悟を持って、あの国に行かなければならない。

「・・・オレの夢が・・・・来年には現実になると良いなと思うよ、ヒカル」
彼はうっとりとした口調で、そう言った。

おいで、と言って、ヒカルを招き、ヒカルは彼の横たわる長椅子に腰を下ろした。
シャルルは優しく腕を取って、彼の胸の上にヒカルの頭を乗せる。
シャルルの鼓動が伝わって・・・ヒカルは目を閉じた。
手の平を彼の胸の上に置くと、シャルルがヒカルの手の平を、彼の大きな手の平で包んだ。
彼が気にしていないはずはないのに、シャルルの経過観察記録を閲覧している様子はなかった。
「後で纏めて見るよ」と言っていたが、肝心の・・・彼が発症している部分については、ヒカルとミシェルだけしか開けないパスワードによって護られており、別のルートで送信されていたので・・・シャルルは知らないはずだった。

「・・・データは取れた？」
彼は目を瞑ったまま、ヒカルに静かに尋ねた。
彼女は用意していた答えを彼に提出した。
「・・・特段に何も変化のない記録だけね。・・・・あなたは根治に向かっている」
その言葉に、彼は唇の端を曲げた。
僅かに、指先に力を入れてヒカルの指の温もりを確認しているかのようだった。
アルディ邸ではなく・・・ルイのセーフハウスに居たとき。
合間を縫ってシャルルが尋ねてきてくれた。そしてこうして彼に凭れて温度を感じる時間がなにより嬉しくて、なにより安らいだと思ったのは、それほど昔のことではないのに。
遠い・・・遙か遠い昔のことのように思える。

「オレは自分の父と同じように、二度目の正妻を迎える用意をしている。
・・・・不思議なものだね。
・・・・彼のようにはなりたくないし、なれないだろうと思っていた。
今もそれは変わらない。
オレはオレ以外にはなれないと言ったこともあった。
しかし・・・こうして・・・・過去をね、よく思い出す。
たくさんの記録された記憶から、いつも同じような場面だけが繰り返される。
母と父の静かな時間や・・・
母を失った時の父の荒れ具合や・・・・
周囲の者がどうして選んだのだと口を揃えて首を傾げる位の女達と狂瀾する父に・・・
婚姻とは、正式でも非公開でも、決して倖せになれない夢のように儚い約束でしかない、と思っていた」
この家で繰り返される歴史に、シャルルが深く憂えて居る事を再認識して・・・ヒカルは大きく息を吸った。
額を押しつけて、彼の胸に自分の顔を埋める。
彼の息吹や鼓動を確認するかのように。

シャルルは夢見るように、囁るようにゆっくりと話をした。

「貴女を求めるのは・・・救いが欲しいからではない。
もどかしくて苦しいけれども・・・・貴女以外には考えていない。
愛とは魂の試練だと思った。
ひとりで受け止めるものであり・・・そして答えを出すのも自分自身の問題だと思った。
でも、そうではないという愛を、貴女がオレに教えたんだ。

・・・愛しているよ。
何も見えない。
何もいらいらない。
ただ、欲しいのは貴女のすべてだけだ。

・・・・ヒカル

オレだけのヒカルになってくれとは言わない。
それなのに、オレだけのヒカルにするためにあれこれ手を尽くし・・・他の男に渡す日の事などは、少しも考えていない。

・・・・ああ、本当に愛とはパラドクスに満ちているよ。

いつか、貴女がオレではない誰か別の者を愛していると悟ったら、いつでも貴女を解放してあげよう。
しかし、そんな日は訪れないし、オレは・・・貴女を一生離さない。
いや・・・一生を終えてなお、貴女のすべてを求め続ける。
どちらが先に命の炎が燃やし尽くしても・・・他方が残る限り、それは続く。
オレの命が貴女より先に尽きても、オレは貴女を苦しめて・・・泣かせてばかりなのだろう。

死ぬほど愛している人がいたけれど・・・・
死んでなお愛したい人は、ヒカルであることを記憶してくれ。
忘れても良い。
それでも・・・魂に刻んでくれ。

肉体が滅んでも愛し続けることができる・・・・そんな風に、オレが夢見ることは、どうか赦して欲しい」
■27

ヒカルは喉を僅かに動かしただけで・・・押し黙ったままだった。

忘れても良いから、魂に刻んでくれ。

彼の極限の叫びを聞くのは、これが初回ではなかった。

父と呼ぶな、と言った時。
父と呼べ、と言った時。

彼の叫びに耳を傾けて・・・・深く、誰も触れたことのない心の声にヒカルが・・気がついていれば・・・彼はこの世界を、受け入れなければならないと思い定めることもなかっただろう。

貴女が居るから。
貴女と居るから。

だから彼は・・・・シャルル・ドゥ・アルディは・・・・

ヒカル思いを馳せていたその時。
シャルルが、ふと・・・青灰色の瞳を見開いた。
ヒカルは、その様子から、彼がいつもの「夢の状態」に泳いでいることを察した。

この居室には誰も入ってこないが、廊下越しに人の気配がする。

・・・確かに、シャルルは・・・まだ完治していない。
惑わないように、強い理性の力でもって抑えているが、彼は明らかに失調を来している。
言葉遣いが幼くなり、感情を抑えることができていない。
そして滅多なことでは願望を口にしたりしないのに、彼はヒカルに様々な・・・・夢や未来への可能性を囁く。その一方で過去に思いを馳せて、無我の状態では・・・ほんの一瞬ではあるが、戻りたいときに戻る。

ヒカルは静かに言った。
「私は・・・・ずっと一緒よ。ずっとシャルルの傍に居る。将来のことはわからないと誰もが言うけれど、わからないけれども一緒に居る」
それから、彼女も瞳を閉じた。
シャルルの鼓動だけに耳を澄ませる。
この温もりと鼓動を次に聞くのは・・・いつになるのかわからない。
けれども。
・・・けれども、忘れない。
忘れたくても・・・シャルルやこの家の人ではなくても、人には忘れられないものがある。

魂に刻もう。
忘れていても思い出したあの時と同じように。
自分も・・・いつか年月の波の中で夢か現かわからなくなってしまった時に思い出す言葉として、刻んでおこう。

「・・・・夢を。
一緒に夢を見よう。
シャルルがそうであって欲しかったという夢ではなくて、将来そうしたいという願望を一緒に叶えるの」
その言葉を聞いて、シャルルが大きく息を吸った。
胸の上で・・・ヒカルの茶色の髪がこぼれ落ちた。
頬を寄せる彼女の閉じた瞳からは涙は零れなかった。
しかし、泣きそうな顔をしている。
涙を見せない泣き顔さえ、愛おしい。
苦悶に歪んだ彼女の顔はそれでもなお美しかった。
この館で・・・ふたりで過ごし始める前の彼女と、明らかに違う顔つきになっている。
大人の女の顔だった。
彼が愛したファム・ファタルと呼んだあの人とシャルルが過ごした時の年齢を、とうに超えてしまっていた。
しかし、ヒカルは、ヒカルを産んだときのあの人の顔に良く似ているのだろうと思った。
憂いを知って悲しみを知って、喜びも知った人の表情だった。
シャルルは・・・ヒカルにすべてを貰い受けると言ったが、彼女はまだ心の奥底に秘めたる想いを沈めていた。
涙を止めてみせると言ったのに、涙を流して悲しみを訴えないヒカルを思うと、切なくなった。
・・・・シャルルはヒカルの顔をしばらく眺めていたが、やがて静かに彼女に囁いた。

「ヒカル。早く戻れ。オレは気長だけれど、それほど長くは待たない」
シャルルがヒカルの出立を許可する言葉を発したので、ヒカルは頬を緩めて、ありがとう、と言った。

「・・・・・生きていれば良い。
でも、二度とオレはあの迷夢を味わうことはしない。失わないと宣言したからだ。
・・・・伝えきれない想いを抱えて、惑って生きていくことはしたくない。
ヒカル。
オレは貴女にすべてを伝え切れていない。だから・・・早く戻れ」
シャルルはそう言うと、ゆっくりと身を起こした。
そして、同じようにヒカルを立たせると、シャルルは彼女を胸に抱いた。

「ありがとう」
シャルルはそう言った。
胸の中のヒカルは黙ったまま、シャルルの背中に腕を回した。
細くしなやかな腕が伸びて、シャルルを包む。
これほど華奢な手足で、どうやってあの過酷な国で過ごすのだろう。
行かせたくないと発言しそうで・・・シャルルは彼女の髪に頬を埋めた。
青灰色の瞳を強く閉じた。白金の髪が茶色の髪の上に乗って・・・ふたりはしばし無言で抱き合った。
彼女の顔を見なくてもわかる。
ヒカルは涙を堪えているのだろう。肩が細かく震えている。

「・・・・ヒカル。オレはね・・・傍にいない人の夢を見る傾向にあるらしい。
だからヒカルが居なかったら、ヒカルの夢を見るだろう。
あの人の夢は戻りたい願望ではなく・・・・過去、オレが刻んだ記憶だ。
それを否定しないで居てくれて・・・・ありがとう」

「シャルル。・・・・私はもう少し自分を信じようと思ったの。・・・・シャルルを信じる気持ちと同じくらい、自分の気持ちを信じようと思った。・・・それだけよ」

彼女が何を見て、何を感じたのかを確信して、シャルルは彼女の髪に厳かに・・唇を寄せた。
ごめんよ、という謝罪の言葉ではなく、ありがとう、と言った。

彼は、もうひとりの自分によって窮地に立たされた時があった。
人格が崩壊し分裂したのではないのか、と誰もが疑ったときに、たったひとりだけ。
彼に言った人物が居た。
「事実はどうでも良いの。
あたしが・・・シャルルを信じているかどうかなのよ」と言った。
結局はそれは捏造であったが、今は違う。

ヒカルが日に日に困憊していく様を見て。
最初は合歓による倦怠だと構えていたシャルルは事情を察したのだ。
だいじょうぶだ、と言う彼女の言葉を尊重して、黙っていた。
しかし、目覚めると、彼女は最初に休んでいた場所と反対側で身を小さくして眠っていることに気がついた。
頬にはたくさんの涙の跡があった。
ヒカルは用心深くいろいろと配慮したらしく、その他に確信できるような根拠はなかった。けれども・・・ヒカルがひとりで泣いているという事実には変わらなかった。
そして涙を流させているのは、シャルルの言動なのだ、という結論に至った。

ヒカルは、夢を語ることを極端に避けていた。
それはあの国に渡る決意が鈍るからという理由ではなかった。
シャルルが彼の願いについて「夢」と表現した時の、ヒカルの動揺した顔を見て・・・そして今のこの言葉で彼はそうなのだと結論づけた。
自分はまだ癒えておらず・・・そしてそれは彼がヒカルとあの人と間違えたのではなく、あの人とヒカルを区別しながら、それでも、シャルルが奥底で願っているのはあの人との記憶を叶えたい夢なのだとヒカルが思うほどに自分が惑ったのだと。

それでも、彼女はシャルルの言葉を信じた。
シャルルが実現したい夢は、過去に戻ってやり直すことではなく・・・ヒカルと明るい光波を一緒に泳ぎ渡ることなのだと、ヒカルは信じている。
だから、あの国に行くと強く言うのだ。
そして、ひとりで涙を流す。
シャルルが・・・シャルルが泳いでいたいと思った夢の海を、ヒカルは取り上げてしまうのではないのか憂えて居るのだ。
彼女が戻れば・・・・サンプルを持って調査を終えて戻れば・・・彼はもう、夢幻の病を発症しなくなる。
もう・・・もうあの人と会うこともないのだ。
あの人を好きなシャルルが好きだ、と言ったヒカルの言葉を思い出していた。

ああ・・・そうだったな。
シャルルは微笑んだ。

彼も信じてみようと思ったのに。
・・・忘れていたのだろうか。いや、愛されることにも愛することにも慣れていないから。
誰にも学ぶことの出来ない愛という目に見えないものについて、彼はもう一度、信じてみようと思ったのに。

「参ったな・・・どうしようもないくらい・・・貴女を愛しているよ」
「困った人だわ」
「ヒカルはどうして余裕なのか・・・是非分析してみたいよ」

ヒカルを抱き締めたまま・・・シャルルは言った。
「余裕？私が・・・どれほどシャルルを思っているだけで落ち着かなくなるのか・・・シャルルはわかっていない」
低くよく通るような声で、彼は笑った。
「オレに教えてくれよ。・・・オレのことだけを愛しているって。
もう良いよとオレが言うまで、わからせてくれ」
「どうやって？」
「・・・・それはね」
彼はそこまで言うと、言葉を切った。
軽いノックの音とともに、居間に人が入ってきたからだ。
何かを運び込む音がする。
ふわり、と薔薇の香りも風に乗って入ってくる。
彼の背中で、準備が出来たと言う声が聞こえたので、そこでようやくシャルルはヒカルから躰を離した。

搬出の準備が整ったらしい。
主は本邸に戻る。
以前の・・・ここの本当の住人がいつでも戻って来られるように現状復帰をし、そしてまだ完全に復調していないその人のために、様々な場所に・・・気にならない程度の補助施設が敷設されることになる。

シャルルの胸の中に居て、視界が遮られていたヒカルは顔を動かして・・・茶色の瞳を見開いて、絶句した。
「シャルル・・・・！」
■28　夢見る魚

「ここは硝子張りだからね。ここでは着替えられない。・・・だから、早く着替えておいで」
シャルルの言葉から、彼が用意したものだと知った。

間もなく、夕暮れになって空が緋に染まる。
・・・彼と心を交わしたあの海の夕暮れのような、そんな空模様だった。

ヒカルは、眼の前の白金の髪の人と、居間に運ばれてきた、白いドレスと薫り高い大きな見事なブーケを交互に何度も視線を往復させた。

「これ・・・・・」
「急拵えで用意させたから・・・・ドレスはミシェルからの計らいだ。ブーケは・・・ジルが作った」
ヒカルが口を開いたまま、驚愕のあまりに言葉を発せずに居ると、シャルルが苦笑して彼女の肩を抱き、介添の者に従うように、と言って、ドレスとブーケの傍に寄るように、と促した。
薫り高い・・・ジルがブーケを作りましょう、と言った時の微笑みを思い出していた。
彼女はまだ、ヒカルをマリナと思って・・・それでもシャルルとシャルルの傍らで微笑む人のために、これほどに手の込んだブーケを、時間をかけて作成したのだ。
アルディ邸の薔薇園はまだここまで立派に咲き乱れる花は再生できていない。
ジルが住まう、あの館の薔薇で・・・・朝一番で摘み取った薔薇なのだろう。
夕暮れでもなお・・・薫りが持続して、美しい姿のままの薔薇の束を見て・・・ヒカルは茫然としていた。

ドレスは純白で・・・そして長袖だった。
ヒカルの体型に合わせたものだった。
ヴェールは短丈のもので、若いヒカルに良く似合う、真珠とダイヤモンドの薔薇をあしらった小さなティアラが用意されていた。
夏のこの時期に用意するのは大変だったことだろう。
ヒカルが両袖を気にしていたことを知ってから・・彼が密かにドレスのデザインを変更させたのだと知った。
大聖堂で身につけるような、裾の長いものではない。
そう・・・かつて、シャルルと一緒に音楽会に行った時のような・・・そんな裾丈だった。

「・・・・我が侭なオレの恋人のために用意した」
シャルルはそう言って笑った。
「指輪もいらない、婚約式も、結婚式も挙げたくない。・・・・そう言って、貴女に焦がれて貴女の夢ばかり見る男を置いて、遠くに旅立つヒカルのために・・・ヒカルのためだけに、用意した」

彼は軽く顎を上げて、硝子の窓の向こうに聳えるチャペルの方角を指した。
「夜は閉めていたけれど、今夜は照明を入れた。
・・・夏の空に映えて、夕陽が天窓から入る。
夕方から夜にかけては・・・・狭いけれど、それなりに雰囲気も出るだろう」

「シャルル・・・」
ヒカルは言葉が詰まった。
シャルルは綺麗な笑顔で笑った。
「貴女の涙を止めてみせると言っただろう。
・・・それから辛い思いをさせたお詫び。
これで貴女が機嫌を取り戻して、また笑顔になってくれるかなという浅はかな夢、だよ。ヒカル」
「機嫌なんて悪くない。だって・・・ずっとシャルルと一緒に居られたから」
「で・・・オレは貪婪だと言っただろう。
貴女の笑顔も欲しい。貴女の約束が欲しい。
ヒカルが純白の衣に包まれて、オレに愛を誓う、その誓いの言葉さえ欲しい」

一体、いつの間に・・・ヒカルはまだ言葉にできず、驚愕の表情で居たので、シャルルはくすくすと声を漏らして笑った。
オレを誰だと思っているんだ？と彼は笑って言った。

「大袈裟にしたくないというヒカルの希望を尊重して・・・ランスでの式は戻って来てからだ」
シャルルは続けた。

「これは結婚式ではない。婚約式でもない。
誓ってしまえば貴女は黒須昶でなくなるから。
・・・・そうだね、少し前に日本で流行った『恋人式』だ。
指輪の交換もない。神に誓うのでもない。
・・・・ただ、空と・・・あの夕陽と・・・月と・・・・そして互いの魂に誓うだけだ」

「・・・・シャルル、シャルル」
ヒカルは唇を横に引いて、瞳を大きく見開き、そして高い天井を仰いだ。
そうしなければ、涙が零れそうだったからだ。

「嬉しい涙は流しても良いよ、ヒカル。でも・・・式の最中には笑顔でいて欲しい」
優しい声で、彼女の運命の人は言った。
上を向いても・・・彼女の瞳から、いくつもいくつも涙が零れていく。

「さぁ、夕暮れの時間が近い。今日でオフは終わる。
だから、オレが貴女のためだけに時間を過ごす今夏最後の夢を叶えてくれないかな。ああ、そうだ。
・・・・ヒカルにはノンという選択肢は用意されていないよ」
「もちろん、ウイよ。答えを聞かないで」
涙声で、衝動を堪えきれなくなり、シャルルの胸に・・・ヒカルは飛び込んだ。
「困った人だ。・・・でも、それでこそ、オレの永遠の晄だよ。
・・・・無鉄砲なオレの恋人を、オレは・・・愛しているよ」
彼は微笑んだ。

「涙を止めろ、ヒカル。そして、その薔薇を持って着替えておいで。

薔薇園を横切り、いつもの散歩の延長のつもりで、気楽に。・・・・集合場所は、あのチャペルで。
ほら、時間がない」
シャルルに再度促されて、そこでヒカルは頷きながら、涙を拭いた。
その時の彼女は笑顔だった。
「この休暇でわかった。・・・・シャルルはいつも私を驚かせてばかりだわ」
「そうかな？通気孔を破壊する人に言われたくないな」
ふたりは顔を見合わせて笑った。

「今夜から本邸に戻る。そして明日からはいつもの日常だ。でも・・・アルディ邸の当主の寝室にその朝に最高の状態の薔薇を捧げるのは・・・いつでも、ヒカルだけだ」
「はい」
ヒカルは頷いた。
感極まって声が上擦ってしまった。

ひとりで想いを捧げた祭壇に、今度は・・・あの不幸な事故以来、滅多に訪れることのなかった場所で・・・シャルルはヒカルに永遠を誓う。

「愛は繰り返さない。回帰しない愛はない。
・・・・でもヒカル。もう一度、オレはこの言葉を捧げよう」
シャルルはそう言って、目の前の茶色の髪の茶色の瞳の人に微笑んだ。
永遠の晄、という名前の、彼だけの天使に向かって。
もうひとりの・・・彼のファム・ファタルに誓いの言葉を立てた。
あとでもう一度言うけれどもね、と前置きして彼はヒカルに言った。
白金の髪が夏の夕焼け近くなった陽光に照らされて・・・彼の髪は眩しいくらいに煌めいていた。
てんしさんが居る・・・・

かつて、彼女は彼のことをそう言った自分の幼い声を聞いた気がした。
彼女を守護した天使は・・・こうして地上に舞い降りた。
晄を求めて。そして・・・ヒカルの傍に居る。
ヒカルは、彼のあまりの神々しさに、眼を反らすことが出来なかった。

これからは・・・彼と一緒に夢見るのだ。
未来へ。
未来を夢見て。
楽しいことばかりではない悲しい夢もあるけれど、その波を一緒に泳ごう、とシャルルが言ったから。

シャルル・ドゥ・アルディは。
青灰色の・・・静かな瞳で、しかし惑いのない強い晄をたたえながら、フランスの華は力強く言った。決してノンとは言わせない、という強い意志をもって。

「愛してる。・・・・永遠に、貴女だけを愛してる」

（FIN）

～科戸の風　清籟の晄～

アルディ邸の薔薇園から、ほのかに上品な薔薇の香りが漂う。
香気芬々と薔薇の誘いが、ルイ・ドゥ・アルディの鼻腔をくすぐった。

静かな…静かな午後の柔らかな陽射しが、彼の見事な金髪を明るく照らし出す。

彼が久しぶりに…誰の視線も気にしないで居られる午後だった。
彼は青灰色の瞳を細める。
無防備に顔を上げて、そして陽射しを顔に受けた。
白皙の整った憂いを帯びた顔が、少しだけ和らぐ。

木漏れ日と、薔薇の風と、芝生の感触。
それが彼に気怠い感覚を呼び起こさせる。

彼はいつも夜眠れない。

横たわる行為が、どうにもならなくなるほど辛い時がある。
そしてそんなときはこうして太陽光を浴びる。
鍛えられた肉体を酷使して得られる疲労感の伴った睡臥より、こうして浴びる陽光は簡単に彼を別の世界に誘う。

彼の求めて止まない…･静謐の世界へ。

木の幹にもたれかかり、彼は目を閉じて静かに…静寂に身を任せる。
真っ白い開襟の端が、級長戸の風に少しだけ揺らされた。

読みかけの本を持ったまま。
ルイの細く長い指が、頁をめくる動作を休止した。
誰もいないと確認することで、初めて手に入れられる…そんな僅かな時間だった。

アルディ家に吹き流れる香気と微風と慈光だけが、若い彼の本当の姿を知っていた。
あどけない、無防備な…･それでいて誰かを待っているかのような表情の、ルイ・ドゥ・アルディが居た。
彼は、微睡みの遑（いとま）を貪った。

ーーーーもう、何度目の邂逅なのだろう。
何かに執着することは決してないルイ・ドゥ・アルディなのに。
繰り返すことは決してしないのに。
それだけは来復する。

太陽と名付けられた彼は、その遑の狭間でだけ逢うことの出来る、彼だけの永遠の晄に微笑みかけていた。

****

ヒカル・クロスはルイが完全に意識を失うまで、じっと様子を見つめていた。
そして気配を消して…そっと彼に近づいていく。

音を立てずに風に乗った。
風下から近づけば、彼に気取られる可能性は低い。

深い眠りに落ちれば、彼はなかなか目が醒めない。
アルディ家の男子の特徴だった。
脳を酷使するから、一度睡眠状態に陥れば、脳も躰も休めるために、彼らは滅多なことでは起き出さない。
朝が弱いのもそれ故のことだ。

深く寝入ってしまったルイの傍に寄って…
ヒカルはゆっくり腰を下ろした。

ルイの見事な金髪が、晄を受けて、明るく輝いていた。
切れ長の瞳は閉じられて、彼は静かに寝息を立てている。
長い睫が影を落としていた。
酷薄そうな唇は少しだけ…微笑んでいるように見える。
何とも美しい日輪の貴公子が、薔薇の庭で静かに･･･休息を取っていた。

いつもこんな風に、もっと近づくことが出来れば良いのに。
ヒカルは茶色の瞳を少しだけ細めて、彼の眩しい姿を眺めた。
茶色の髪が風に揺れて、彼女の髪もたなびいた。

少し離れて座る。
躰を寄り添えば、彼は気がつく。
ルイは、他人の体温には敏感だ。他人との距離にも神経質だ。

ねぇ、ルイ。

ヒカルも、木漏れ日を見上げた。
同じ景色を見た。
彼女が見る、色鮮やかな心落ち着くような…･ルイが見る景色は、彼女と同じ景色でありますように、と祈りながら。
これほどまでに静かで穏やかで心地の良い午後の微睡みを･･彼がいつも味わうことが出来れば良いのに、と願った。

その時のことだった。
彼の頭がゆっくり動いて…
優雅な金の弧を描いて、彼女の膝の上に乗った。

「…･･！」
ヒカルが息を呑む。
膝の上に、ルイの美しい頭部が乗った。
緊張で、ぎゅっと躰を硬くする。
「ーーー硬い枕はごめんだな」
ルイが薄い唇を開いて呟いた。
よく響く低い声が、彼女の大腿骨へ振動する。

少し驚いたヒカルは、彼女の膝枕に臥せるルイを見下ろした。
「…･ルイ、いつから目が醒めていたの」
「その言葉は不適切。…眠ってないから、目が醒めたという表現は用いることが出来ない」
「と、いうことは寝たふりをしていたのね」
ルイは薄く微笑んだ。

目は瞑ったままだった。
「10分後に起こせ」
「人に頼む言葉じゃないわね」
ヒカルは呆れて言った。でも身を起こそうとしないルイの小さな頭を移動させることはしなかった。

眠らなくても良いらしいからね、今日は。

ルイ・ドゥ・アルディは小さく呟いた。

これほど近い距離に在るのに、ヒカルには聞こえないくらいの小さな声だった。
彼女がこの言葉を聞くのはもっと別の機会になるはずだった。
言うことのないまま消滅する言葉かもしれない。
この静謐の庭に、ルイの言葉は吸い込まれて行った。

ヒカルはまったくもう、と文句を言ったが、ルイが今度は本当に微睡みに墜ちていったことを知ると、口をつぐんだ。
彼の静寂を壊してはいけない。

風に吹かれて、ルイの金髪が精悍な頬にふりかかった。
ヒカルはそっと…指を伸ばして、彼の乱れた一筋の髪を整えた。
くせの強い背中まである髪が揺れた。
彼女からは清籟な香りが漂った。
彼は目を瞑っていてもわかる。

‥‥彼をやすらぎという幻に誘う。
科戸の風に乗ってやって来た、清籟の晄が、今ここに居る。
彼を優しく包んでいる。

…‥太陽光でなくてもその晄があれば彼は穏やかに目を瞑ることが出来た。
人との距離には神経質になるのに、その晄だけは、たとえ見えていなくてもわかる。

ヒカルは彼の顔を見下ろしながら彼を起こさないように…‥そっと顔を上げた。
木漏れ日の晄と、漂う薔薇の風。そして彼の髪を揺らす科戸の風。
すべての罪や穢れを払うという清き風を、華のような金鴉（太陽の美称）の青年が呼び起こしたように感じた。

春の風を抜けて夏の風に煽られて秋の風が薫り冬の風にもの想う。
そんな風に、彼に科戸の風がいつも吹けばいいのに。
ヒカルはそんなことを思っていた。
「ルイに清籟の晄がいつも注ぎますように」
彼女はそう、祈りを込めた。

「ヒカルが科戸の風である限りはね」
―――やはりルイは眠っていなかったようだった。
ヒカルのたなびく茶色の髪を細く長い指先で掴んだ。

「ヒカルの整髪料の匂いが障って睡眠妨害だ」
「…悪かったわね」

本当は違うのに。
彼女の香気が彼にはとても…狂おしく感じるのに。
風が具現して、永遠の晄を纏って彼の元に降りてきた。

そんな気がした。
彼が強く願ったから。
彼は執着しない生しか知らないのに。
今はただ、この時間とこの風と晄が欲しい。それだけだ。

「ルイ。言われたとおり、10分後に起こすわよ」
「…変更だ。オレの目が醒めるまで起こすな」
ヒカルはえっと声を漏らした。
ルイ・ドゥ・アルディは言い直したりしない。変更したりもしないのに。
それに、彼は一度寝入ってしまえばなかなか目が醒めない。
「起こすなよ。オレは…寝起きは機嫌が悪い」
だったらいつ起こせば良いのよ、とヒカルの文句が振ってきたが、ルイは気にせず彼女の膝の上で横を向いた。

…木漏れ日が彼と彼女を照らし出した。
風が、吹いた。
そして静かな薔薇の香りと、彼の求める永遠の晄の甘い香りに誘われて。

ルイ・ドゥ・アルディは今度こそ本当に、微睡みの世界に沈んでいった。

（FIN）

xanthophy

xanthophy

私の家の一室には、無題の絵がある。
大きさはそれほど大きくない。
・・・・国内外問わず美術品の収集に労力を惜しまないアルディ家の一族の家に相応しくないものだった。
退色防止加工を施され、立派な額に入っている。
この家で最も値打ちのある品として扱われるが、もっとも無名の画家によって描かれたものだった。
もうその画家によって作品が追加されることはない。
彼女は・・・その画家は女性であったが、不幸な飛行機墜落事故によって、帰らぬ人になってしまったということだった。
遺体はまだあがってはいない。
海に沈んだと言われている。
アルディ家に縁のある女性の描いた絵であることはわかっているが、なおさら、この絵にまつわる疑問が湧いてくる。
万人の目を惹き付けるような絵ではない。
タッチも荒いし、名匠と言われる者達のような斬新さも緻密さもない。
しかし、これがこの館に様々な者達を集わせるのだ。

その絵には名前がない。
だから私は「あれ」とか「それ」とか言うと、母様は少し悲しそうな顔をする。
いつか、この絵の意味の重さが私にもわかると言う。
これが完成していないから完成しているのと同等に・・いやそれ以上に値打ちがあるのだと言う。
そう言って、完成作品と同じように劣化防止処理を施して飾り続ける。
たぶん、この家の代が代わるまで・・いや、それでもこの絵の保存年限は無期限保存指定がなされていたから、永久に保存されるのだろう。
父様の母上・・・私の祖母にあたる方がかつて使用していたという部屋に移設されて、空調も湿度も整えられて、それは掲げられている。
父様の母上は、この館で過ごしたことがあるそうだ。父様も。
その時に描かれた、父様たちをモデルにした、おばあさまの絵と並べてみると、その画家の稚拙さが良くわかる。
エロイーズの描いた作品は素晴らしい。それは間違いない。
現在のアルディ家の当主であるシャルル・ドゥ・アルディと父様を描いた絵は、彼らの親睦の絆として、この家に保管されている。
あの絵と同じように、保存期限は無期限だ。
父様がこの絵を大事にする意味もわかる。
でもあの絵をなぜ、エロイーズの絵と同等に扱うのかがわからない。

でも、この絵を眺めるために、この館を訪れる人達が多いことは認めなければならない事実だ。

シャルル・ドゥ・アルディは、この絵を見て、父様と良く似た横顔を少しだけ曇らせる。
でも、同時に、無表情な彼の青灰色の瞳が、その時だけは優しくなる。
郷愁という言葉を噛みしめているようだった。
黙っていつまでも眺め続けている。
あの絵の正当なる持ち主である、画家の娘を傍らに置いているから、きっと人一倍感慨深いのだろう。
いつもシャルルと一緒にやってくる彼の伴侶は、そんなとき彼の背中をそっと撫でる。
彼の広い背中をゆっくりと黙ったまま撫で続ける。
そんなときは、どちらが年長かわからない。
年齢差のあるふたりではあったが、幼い頃からシャルルに育てられた彼女は、いつしか彼と様々なことを共有し、彼の滅多に露わにしない憐愍や激情についてどう対処するべきなのか、よく心得ているようだった。
静かに・・・静かに時間を過ごしているが、彼らの胸中は決して穏やかでも静かでもない時間を経験した者だけが感じる渦のような何かを感じているのだろうと思った。
そう言う時、私はただ彼らを眺めているだけで、何も声をかけない。
私はただ、傍観するだけだ。

時折、この画家に縁のある者を伴って彼女はやって来る。
画家の友人であったという人達だ。
男女問わず、彼女と一緒に絵を見にやって来る。
この絵がこの国にやって来るまで日本で保管していた人や、世界的に高名な音楽家や・・・日本から英国から、様々なところからやってくる。
彼女のたった一枚しかない遺作を眺めるために、はるばる遠方からどこにも寄らないで、ここにやって来る。
そして彼らはいつも、この絵を見て・・・そして涙ぐみ、かなり長い時間をそこで佇んだまま立ち尽くしている。
着席を勧めても、声が聞こえていないのではないのかと思う程、真剣に見入っている。

彼らは絵を見ているのではなく、絵を描いた人物と会話をしているのよ、とシャルルの伴侶は私に言った。
私がこの家の者の代表として、絵の閲覧の立会人という役割を持っているから、いつも同じ退屈な時間をつまらなさそうにしている様子を見かねたという感じだった。
私は言った。

その絵は、貴女が正当なる持ち主なのだから、アルディ家に持ち帰ることはしないのか、と。
そうすれば、私がこの家の者として引き受けた役割のうちのひとつが解消されて、私は解放されることになる。
なぜこの立会人という役割を私に指名したのか、父様と母様の意図がわからない。
彼女は彼女の母親が描いた絵を好きなときに自分の住まう邸で眺めることができる。
それなのに、それでは意味がないのだと言って、茶色の瞳で私をのぞき込む。
私の金髪を、白い手でそっと撫でる。
私ではない別の人の名前を呼んで、ああ、似ているわね、と言う。

わかっている。彼女が懐かしそうに私の頭を撫でる時には、この絵の中にいる金髪のこどもを思い出しているのだ。
彼女の幼なじみであり・・・彼女の伴侶の息子として、長らくアルディ邸で彼女とともに暮らしたあの人のことを。
絵を眺めにやって来る人達と同じように、私を見て、あの星辰の子を思いだしているのだ。

ルイ・ドゥ・アルディ。
本当は父様と母様の息子であったのに、事情があって結婚することができなかったので、承継者が居ないのに結婚しようとしないシャルル・ドゥ・アルディに実子として引き取られた。
その後、彼は分籍の手続きを取って、一卵性双生児であるシャルルと父様のうち、どちらが彼の本当の父親なのか、遺伝学上の証明書と分析結果を提出し、アルディ一族首長の息子という地位をあっさり捨ててしまった。
しかしその後、彼はシャルルの本当の実子と婚姻することになり、今一度アルディ家の次期当主として就任の準備を始めている。

濃い血族結婚になる。
私の父様と母様もいとこ同士だし、星辰の子も従妹と結婚することになる。
アルディ家は、同族でないと愛でられない廃れゆく種だと影で囁く者達もいる。
しかし、そうではない。
他家を迎えなくても繁栄できるから、そうしているだけだ。

ルイは私の従兄ではなく、私の実兄だったのだ。あまり実感はないが。
これほどまでに似通った顔立ちが多い一族の中でも、新しい種として完璧とまで言われるルイは、私の兄だった。
・・・だからいとこ同士でも、結婚話が持ち上がらなかったわけだ。
私と結婚してロシェル家の財を引き継げば、父様が展開している通信やバイオ産業についての権利を完全に掌握することができるというのに。
様々なことに合点がいった。
なぜこの絵がここにあるのか。
この絵に描かれている人物は、白金の髪の青灰色の瞳の男性と、男性と良く似た金の髪のこどもだった。光を背にして微笑みあっている。慈愛に満ちた微笑みは宗教画のようでそこだけは荘厳さがあると認めざるを得ない。

これはシャルルとルイかと思っていたが、そうではなかったのだ。
父様とルイだったのだ。
彼らの親子関係を表した絵であり・・・これを保管し続けるということは、その事実を認めているということだ。
アルディ家もロシェル家も、両方が認めていることであり・・・
つまりは、確認の証なのだ。
誰がルイという稀なる星辰を手中にすることができるのか、という確認の絵なのだ。
だから、美術品を収める専用の館に移すこともしないで、ここでこうして永久保存としている。
結局、系図原簿を書き換えて父母の名前を改めたとしても、彼はアルディ姓を名乗り続け、今また彼はシャルルの息子になろうとしている。
優れた者に継がせるという親族会の意向は通ったわけだ。

しかしそうなっても、私の中では何もかわらなかった。
私の身分や継承についての決め事が、彼の出現によって変更されることはなかった。
いずれ、私は・・・しかるべき家柄の者と娶せられるのだろう。
他家に嫁ぐことはできない。
他に適当な人物が居なければ、相手を養子としてロシェル家に迎え入れることになる。

そして、私はロシェル家の後継者として今般正式に指名された。
成年齢に達したら、ロシェルの家を正式に引き継ぐ。
母様は少し悲しそうだった。
彼女が長らく病に陥っていたときに、この館で治療していたのは父様とアルディ家だった。
ロシェル家は、もう何年も面会を制限されていたと主張したが、それは口実に過ぎない。
母様の扱いには困るが死なせるわけにもいかないので、適当に離れた場所に隔離して、自分たちでない誰かに押しつけた。
・・・この場合には、アルディ家の当主と父様と、ルイであったが・・・

母様には本当の家族がいるが、家族として認識している者達はもっと別の場所に・・・アルディ家に多く住まっている。彼らは足繁くここに集う。
用事もないのに頻繁に「絵を見に来た」と言って、私を立ち会わせ、そして内庭の噴水や薔薇の園を少し散歩し・・・そして帰っていく。
来訪者達は、母様や父様と、顔を合わせることもなく帰っていくことが多い。
でも、それで良いのだと言う。
私の顔を見に来た、と言うが私は曖昧に笑うだけだった。
家族という定義がこの家には存在しない。
アルディ家にも存在しない。
魂の結びつきこそが家族の根底であり、血族としての繋がりを前提とするものではないと言う。
でも、それでも血族による近しい結婚を繰り返す。
そして、母様は、血族であるのに縁遠いロシェルを捨て去ることができない。
あのフランスの華と賞されアルディ家当主に長らく仕えたからなのか。
だから、アルディ家とロシェル家が繋がりを深めるために、どこかの代で婚姻があるのだろうという予想は以前からあったはずだった。
本来なら、母様とシャルル・ドゥ・アルディが婚姻すれば、解決したのではないのか。
・・・なぜ、父と母は、結ばれたのだろう。
かつて、父様とシャルルが、当主争いを繰り広げた話は伝説となって今でも語り継がれている。

それなのに、仇敵同士であった彼らはなぜ、和解したのだろうか。
なぜ、母様はシャルルの信任厚い人物であったのに、父様と子を成したのか。
これほど・・私とルイの間に年齢差があるのはなぜなのか。
そのあたりのことは尋ねるべき事ではないという暗黙の律というようなものがあって、私はまだ直接彼らの口から説明を受けていなかった。

父様も母様もとても良く似通っている。
顔立ちもそうであるが、互いに自分のことをあまり話さない。
相手のことを聞くことが長年の習慣になっているようだった。
興味がないのではない。
それでも、父様は母様に「貴女はどう思うの」と良く尋ねている。
少し苛立ち気味に。
でもそこには母様が父様に向かって話をしたいということを心得ているが故の合図なのだということに随分大きくなるまで気がつ

かなかった。
二人のかみ合わない会話を傍聴しているだけで気鬱になった。
あのフランスの華のように、この家も、離散の憂き目に遭うのかと思うとすこしげんなりしたものだった。

私はまだ成年でない。
だから、万が一そんなことになっても、自分の行く路を選ぶことができないことに対する遺憾。しかし後継者として指名されている以上は、私の身分は保障されている。
そこに行き着きたいというような路かどうかはまだわからないが。
変化を嫌い、執着を厭う一族であるのに、それを声高に言っているのに、それなのに・・・この薔薇の一族は、決してその言葉に従わない血族だった。
ふたりも子を成したのに。
・・・それとも、私という存在は厭われていたのだろうか。
やむを得ず、ロシェル家を継承させるために創られた存在なのだろうか。
かなり年齢が高かったのに、母様は私を産んだ。
そのせいで、だいぶ体調を崩してしまったと聞く。
「そこまでして送り出したい命だということを忘れないで」とヒカルは言う。
でも、私はそうなのだろうかといつも疑問に思っていた。
健康管理だけは入念に行われ、健康で生き長らえていればそれで良いと言われているようだった。
それなら人工授精でも、代理母出産でも、現在の生命倫理は規制が緩和されているのだから彼らの都合の良いように私を創り出せば良かったのに。

◆中編

・・・・私はそこで、病になった。
この一族に伝わる、忌まわしい病である。
遺伝で体質を受け継ぐのに、ウイルス性であるという、最低の業火を持って私は生まれてきた。
父と母から受け継ぐ気質が濃いので、そのせいだと言われた。
父様、母様。どうして私の遺伝子操作をして除去手続きをしなかったの。
私は彼らの意図が理解できなかった。
もう予防接種によって事前に防ぐことができると言われたのに。
私は、まだこどもだったので、それを接種する前に病に墜ちた。

・・・母と同じ病だ。
そう聞かされた。
精神疾患の一種であり・・眠っているのに起きているような、起きているのに眠っているような状態に陥った。
眩暈がすると言ったのが自分の言葉であったのかどうかさえ、おぼろげだ。
その次に体が傾いた記憶だけがはっきりと残っている。
私は何か、悪いことをしたのだろうか。
何か、贖罪をするために生まれてきたのか。
母と父はどうして・・どうして私を育てるのか。
あの星辰の子が居れば、それで足りたのだろうに。
私は闇に目を向けてしまった。
この金の髪に、青灰色の瞳を、母様に良く似ているとヒカルは褒めるが、私はそれが厭わしかった。
どんなに金の髪になりたくても慣れなかった、とヒカルが少し悲しそうに告白する様を見ても何も感じなかった。
私だって好きでこの姿で生まれてきたわけではない。
私の顔立ちがもっと・・・この家の者そのものであるというような今の風貌でなかったら、彼らは私を愛おしもうとはしないだろう。
沈むのは簡単だった。そして心地良かった。
ずっとこのまま昏睡状態を続けられれば良いのに。
昏睡状態で意識がないはずであったのに、
私はそんなことを希望した。
脳が目覚めているから願望を感じるのだとわかっていたが、それでも目覚めているという状況は私には耐え難い苦痛だった。
ーーーだから墜ちた。

それなのに。
それなのに、深く沈み、そして本当に深淵に沈み込んでしまった私を癒した人がいる。

・・・ルイ・ドゥ・アルディだった。
彼は当主夫妻が持ち帰った貴重な調査データを元にして、新しい治療薬を開発した。
薬品開発は、気の遠くなるような根気を必要とする。実用化まで何年もかかる。
それなのに・・・彼は、驚異的な速さでそれを成し遂げた。
研究室に詰めて、他の併行する業務を一切停止させて、彼はたった数本のワクチンを私に打つためだけの分量を精製するために、彼の貴重な時間を消費させた。
その間の時間経過が、実はよく把握できていない。

気がついて、意識がはっきりしてきたなと思った時には治癒していた。
私は泣いた。
また、戻って来てしまったから。
また苦しい世の中で、私は薔薇の香りに包まれながら、自らの生命の意味を考え続ければならないのかと思うと沈鬱な思いしか感じなかった。
涙が目尻からこめかみを伝って、仰向けに寝かされた私の顔を伝って墜ちた。
そのあたたかさと蒸発する感覚から、私は戻ってきてしまったのだといよいよもって実感することになった。
・・・・辺りを見回すと、治療棟の天井だということが推測できた。
白いが少しくすんだ色合いにして治療効果を高める配慮が細部まで施されている部屋だった。
消毒液の匂い。
天井の、細かい目地の模様まで記憶している。
緩慢な動作でしか動かない・・・しばらく筋肉を動かしていない体。
点滴の針が入らずに、腕からではなく私の鎖骨下の血管から入り込む冷たい液体の感覚があった。もう腕の静脈からは点液できないほどに・・私の体が弱っていたのだと知った。
栄養チューブを入れられたのだろう。私は声を出すことができなかった。
その代わり、涙を流した。

苦痛からではない。憂えていたからだ。
私の生命は私自身では決められないのだと思った。
生かされているというより、生きる事を強要されたのだと思った。
白衣を着たたくさんの人達に囲まれていた。
そして、その中には、ルイの輝く金髪も見えたし、父様の白金の髪も見えた。
滅菌のための遮断エアシャワーが、上下から吹き付けている音が僅かにしたので、私が滅菌室に入れられているのだと言うことがわかった。
忘れられないのは血筋だろうか。
今でも・・時折思い出す。
私は夢を見ないから、それが私の唯一の夢なのかも知れない。
白日夢とは少し違うが、それは私の秘めたる想いと一緒に・・・誰にもそれを告げることはしない。
私の仄暗い気持ちは、私だけのものだ。
誰から与えられたものでもないし、誰にも奪えない。

たくさんの人達が私や私のように発症するおそれのあるこどもたちを救う為に・・・手を尽くし考え、そして原因となった国に足を運んだ当主夫妻が居た。
・・・遠くのガラス窓の向こう側で、こちらを見る、茶色の髪の茶色の瞳の・・・私の年下のいとこは、私に手を振っていた。
小さな白い掌がこちらに向かって降り続けられている。
陽光のような笑顔が眩しくて、私はまた瞬きをしながら涙を落とした。
愛に溢れたこどもは私に眺を向ける。でもそれが眩しい。眩しくて涙が出る。
私のように病に陥ることは決してない、稀なる体質を引き継ぐ素晴らしい種。
この古い家柄にどうして、外国人である彼女を招き入れたのか・・・もう、誰もが知るところであり、そして当主が愛する家族が、そこに居た。
私はまた涙を零した。
あの眺は誰にでも心地良い眺ではない。
少なくとも私にはとても・・目を開けていられないほどに苦しい眺にしかならない。

その次に、ルイ・ドゥ・アルディの青灰色の瞳を目があった。
彼の瞳はこちらをじっと見つめていて・・・とても静かだった。
まわりのみんなが私の覚醒を見て、体に繋げられている装置から私のデータを一生懸命に取っているという時に。
彼は私の顔を見ていたのだ。
様々な医療器具が告げるデータ値にみんなが・・そう・・・父様でさえ、私ではなく、そちらに意識を向けていたというのに。
ルイの薄い唇が動いた。
私と良く似た金髪の下の瞳が少し細くなった。
彼は声に出さずに、私に言ったのだ。

「生きろ」と。

ただ、それだけだった。
その一言がまた私の瞳から涙を溢れさせた。

・・・ルイ・ドゥ・アルディはわかっていたのだ。
私が本当は・・・夢の世界に入り込んでしまいたくなるほど、生きていたいと思っていることに。何もかもをのぞき込むような瞳で、ルイは私の心に入り込む。この闇を知っているのだろうと思った。
私が・・・戻って来たくなかったのに戻って来てしまったと思ってしまったことを、ルイは知っている。

そして彼はもっと知っている。
私が、誰かから愛されたいと強烈に求めていることに。
病に陥った原因を、彼はよく知っているようだった。
私とほとんど話をしたことがないくせに。
彼は、わかっているようだった。
戻りたいと思う過去がないから、私のようなこどもは遠く深い眠りに落ちる。
でも耳は聞こえているし脳で考え事もしている。
目は瞑っているが、いったいいくつの朝がやってきたのか、知ろうと思えば知ることができる。

そこでルイが少し微笑んだ。

ルイの微笑みは・・あの絵の微笑みとまったく同じだった。
あの時に描かれた父様と同じ表情をしていた。
屋敷に置いてあるあの絵が、本当は一体誰と誰を描いたものなのか、私はそこでようやく気がついたのだ。
そして、なぜ・・・あの館に設置され続けるのかも。
後にそれが想像ではなく事実であったことを確認しても、感慨深くなかった。
この瞬間にわかったから。

私のことをよく知らないと思っていた人は。
あの絵をまったくと言って良いほど、内覧しようとしない星辰の子は。
本当は、あの家のことを一番よく知っていたのだと思った。

それが覚醒の時の記憶だった。

◆後編

やがて復調して、館に戻ってすぐの時。
彼がふらりと館にやって来た。
ひとりでやって来ていた。
あの絵が見たいと言う。
私はまだ筋力が回復していないので立ち会えないから、どうぞご自由に、と言って微笑んだ。
私の部屋は、昔、母様が使っていた防音に優れた部屋を使っている。
そして、その反対側の棟に、同じような作りの棟があって、ルイはそこでしばらく療養生活をしていたのだと、ぽつりと告白した

。
ルイがここに住まっていたことは初耳だったので、私はそのとき、彼と同じ色の自分の瞳を見開いた。
私から少し離れて、彼は背の低いソファに腰掛けた。長身が沈む。
乗馬とフェンシングで鍛えられた鋼のような体軀が、ベッドに横たわるこちらからでも目に入った。
少し窓を開けてあったので、風が入り込み・・金の髪が揺れて、彼の大変に美しい顔に乱れて散った。

「立会人がいなければ閲覧は不能だな」
彼はそう言った。
それなら延期にしよう、と言った。中止にしようとは言わなかった。
それから、失われた筋力は訓練で回復するからと素っ気なく抑揚もなく言った。
焦らずにじっくり癒せということを言いたかったのだと思った。

私はこれまでの時間の経過や情報の整理ができずに・・・ただ黙ってルイを見つめた。
分籍手続きを取った直後に私は昏睡状態に入った。
だから、彼が実兄として系図原簿の父母欄を修正したことは知っていた。
だからと言って私に何も変化はない。
ロシェル家は病気を理由に、私を後継指名することを取り下げなかった。
ルイがこちらの家に入ることはなかったからだ。
私は少し皮肉っぽく微笑んだ。
私が選ばれたのではない。
もうそれしか残されていないから、仕方がないから選択されたのだ。
私は選ばれて生まれてきたのではない。
こんな病に陥ることを承知の上で産んだ母様の真意がわからなかった。

これは一度治癒しても、また発症する危険性があると説明された。
遺伝治療をこれからしていくことになるが、それでも解決されないメカニズムがあるのだろう。それは長い時間・・・経過をみていかなければならないことなのだ。
どんなにルイやシャルルや父様が尽力しても、彼らの時間も私の時間も、同じなのだ。
それを縮めて創り上げることができない何かがあることを、彼らは十分よく知っている。
たくさんの不可能を可能にしてきた人々であるけれど、彼らだけではどうにもできない時間というものがあるのだ。それは事実だ。

そして、私も知った。
自分でどうにもならないことがこの世にどれだけたくさんあるのか、私はもう知りすぎるほど多くのことを知っている。

これまで、あまりルイと話をしたことがなかった。
それなのに、彼は私の居室に足を踏み入れた。
事後経過観察、と言っていたがそれだけが理由であればこの時間にひとりでやって来ることはないだろう。

私は彼と顔を合わせるのが億劫だった。
彼は私の深淵を知っている。
私が何を考えたからこういう病に陥ったのか知っている。
・・・きっと、彼もそうだったのだろう。
彼がこの館で何の症状を改善させるために滞在していたのか、わかったような気がした。

それから、絵を決して見に来ない理由も。
私は言った。
遠慮することない、貴方はこの家の長子なのだから、いつでも好きなときに閲覧できると言った。
「事実ではあるが」
彼は憫笑した。
「その言葉は二度と使わないでくれ」
彼はそう命じた。
それから、ルイは顔を上げて、私の寝台の脇の壁を見つめた。
「今度からあの絵は、そこに置くことにしよう」
父様が許さない、と私が言うと、彼はくすりと笑った。
「オレが許可する」
彼は短く言った。
「それなら、立会人が出向かなければ観覧できないという問題も解消される」
私は呆れて言った。
私の居室に、自由気ままに誰かが入り込んで、絵を見るのはごめんだ、と言うと、ルイはそこでまた私をやり込めた。
「それなら早く絵が元の場所に掲げられるようにしろ」
要するに、早く治せと言いたいのだと思ったが、星辰の子はいつも・・こうして回りくどい話しかできないのだろうかと少しばかり絶句する。
命令口調で素っ気なく、一度きりしか言わない。
どうしてこんなに気むずかしい人物に、私の従妹は懐いているのか・・どうしてこの人物が教育係を引き受けているのか、理解に苦しんだ。

「・・・あなたの母はなかなか妊娠しなかった。父は望んでいたのに。病に陥る可能性があるし、体力的にも自然分娩は難しい。こどもがもう一人欲しいのであれば人工授精して代理母に産ませろ、とオレは言ったことがあった」
ルイが突然話を始めた。
ソファに座ったまま、彼は長い脚を組んで、肘当てに肘をかけ、少し遠くを見つめる目つきだった。
寡黙で通っているルイが何を語るのだろうかと思って私はそのまま彼の言葉を聞いた。
「・・そしてなぜ彼女のこどもでないといけないのだと質問した。そうしたら、ジルのこどもでないと意味がない、ジルから生まれないと意味がない、とあなたの父は言った」
私が不思議そうな顔をしていたのだろう。
まだわからない？と彼は冷ら笑いを浮かべた。
「・・・執着しないとオレにあれだけ教えたあなたの父が・・・ジルにだけ執着する。あの人とのこどもが欲しいと言う。いつも、欲しいと思ったらそれは語らずに必ず手に入れるのに。固執してはいけないのに、それに固執する。それはなぜなのか、理由があるとは思わないのか」

私は黙ったままだった。

母は確かに初産だったと言っていた。
ということは、ルイのことは・・・代理母による出産だった。
母様はその時病気だったという。だからとうてい産めなかった。
もっと違う理由もあったのかもしれない。
本当は、私のまだ知らない、そちらの理由の方が真実に近かったのだと思う。

あの絵が、本当に伝えたかったのは、父様が金の髪を持ったこどもを欲しがっていたこと。
・・・金の髪の家族を創りたかったのだと思った。
父様は白金の髪なのに。
あの絵は父様の願望なのだ。
執着してはいけないよ、といつも私に言うのに。
そしていつも忙しくてほとんどここに帰ってこないのに。
それなのに・・・金の髪の人と金の髪のこどもがいるこの館に戻ってくるということなのか。
ーーーーー家族が欲しかったのだ。

・・・・私は長い溜息をついた。

金髪の髪が厭わしいと思っていた。

「・・・帰る」
ルイはそこまで言うと、立ち上がってさっさと部屋を出て行ってしまった。
私と良く似た金の髪を少しかき上げて、ここは禁煙だからといって煙草を取り出した。
別れの挨拶も快気の言葉もなく、ルイはさっさと扉を開けて、姿を消してしまった。

また来るとも言わなかった。
でも彼はきっと来ると思った。

何かがふっと軽くなった様な気がした。
母様が私を大切にしてくれていることも知っている。
父様が私を癒すために尽力してくれたことも知っている。
でも、ルイは？
実兄として私に何か貸しを作っておきたかったということではないと思われる。
彼はいつか、シャルル・ドゥ・アルディに代わって、あの一族の頂点に立つ。
ロシェル家などは足元にも及ばない、栄華を極めた薔薇の一族の長になるのだ。

・・・・・あの絵に描かれた願望は、父様だけの願望でないのだ。

彼も。
ルイも家族が欲しかったのだ。
星辰の子と呼ばれて、彼は完璧だと言われているのに。
彼も執着してはいけないと言われて育ったのに、固執している。
恋着している。

ルイは・・・

白金の髪の父が欲しかったのだ。父の微笑みが欲しかったのだ。
彼らを暖かく包む、永遠の晄が欲しかったのだ。
彼が微笑んで手を差し伸べて、そしてその手を優しく包む家族が。

それを伝えることが未だにできないでいる。
本当の父と母の名前を述べることができるようになったのに。
彼はまだ、父様と母様に伝えられずにいる。
だから絵を見に来ない。
彼は滅多にここにやって来ない。

私が居るから。
私が居るから、彼はここにやって来ることができない。

自分が喉から手が出るほど欲しい家族がここにあって、彼はそれを主張することができる立場になったのに、まだ言えずにいる。

望まれて生まれたこどもが・・彼と同じ金の髪を持つ私が居るから。

・・・・まったく不器用な人だ。

それでもなぜ、私が深くあの夢幻の世界を彷徨ったのか、彼は理由を知っているから。
だから、私に告げに来た。
自分の仄暗い闇を告白しに来た。
・・・もう、彼は、後ろ暗い戻れない路に迷い込むようなことはないのかもしれない。
それでも、それでも。
私は愛されている、とルイは教えにやってきた。

あれほど誇り高い人が、自分の心の内を曝け出すということなどは絶対にしない。
それでも、ルイは見返りを求めずに・・私のために力を尽くした。
あなただけのためではない、利益があるからね、と彼は言うのかもしれない。
それは理由の一つでしかない。
結果として彼は私を呼び戻した。
でも、心がまだ癒されていないことを知って・・・彼はだから誰も伴わないで、ひとりで私に会いに来た。
あの絵を護って欲しい、と。

彼の誇りを護って欲しい、と。
あの絵は、やはりアルディ邸にあってはいけないのだ。
どんなに、シャルルが手元に置きたいと言ったとしても。
彼の伴侶が正当なる受取人であると主張しても。
これはルイの秘密であり、これを描いたあの画家の真意を知った。

私達は秘密を共有した。
ルイは私を救う為に、自分の秘密をひとつ開示した。

・・・・・あの絵は、見る者によって解釈が違う。
きっと、あの画家の絵を見に来る者は、あの絵を見ていながら、それを通して、もっと別のものを見ているのだ。
あの画家に会いに来ていることに加えて、各々が何か・・・自分自身に対して問い掛けているのだろう。
私は枕元の内線電話を押した。
2度、決められた回数のとおりにコール音が鳴って、着信する。
スピーカーにしてあるので、私は着信ランプが発声可能を知らせる青ランプに切り替わったのを確認して、ごく短く指示を出した。
私はあの絵をこの部屋に運ぶように言う。
できるだけ早くね、と念を押す。
それから、急な来客に体が疲れてしまったので、大きな羽根枕を背にしていた体をゆっくりと動かした。体を倒して、軽い羽布団に身を滑り込ませた。
・・・・少し眠る事にする。

圭角が取れたと言い難い星辰の子を相手にすると疲れる。
でもそれは不快ではなかった。
今度は、こちらから連絡をしてみようと思った。
彼の来邸を待つのではなく。

・・・そう、妹としておねだりをしてみるのも良いのかも知れない。
もっとも、彼は今、フランスの華の愛娘であるこどもの教育でかかりきりになっていて、忙しいはずだった。
あれほど完璧な人が困ったように陽光のような彼女の一言一句に耳を傾ける様を想像すると、可笑しくてくすりと笑みが漏れた。
きっと今の微笑みは、ルイと私は良く似ているのかも知れない。
だって、私達は家族なのだから。

だから。
私もこれから彼をたくさん困らせてやろうと心に誓った。
あの絵を見る、彼の横顔を観察しなければならない。
早く元気にならなければならない。
そう思った。

血縁だから当然に無償の愛を捧げられるべきだとは思っていない。
彼が私に施してくれた様々なことについて、礼を述べていないことに気がついた。
でもそう言うと、彼は何もしていないと否定するだろう。

私はまたひとつ笑みを漏らした。

それから貴人である割りに、寝室に入り込んでいる不作法を今度は注意してやろうと思った。彼は完璧であるのに、こういうところは疎いのか・・それとも家族だから、遠慮がないのか・・・
さて、どちらなのだろうか、と私は思った。

うつらうつらしてきた。
薬が効いているらしい。

・・・夢を見ないはずなのに、今は夢のような心地だった。

（FIN）

暁天の彩

◆前編

ルイ・ドゥ・アルディは朝が弱い。
アルディ家の経営する事業のうち、ルイが事業を手がけているオフィスのほとんどでフレックス制を励行するのは、彼が極端に朝に弱いからだとさえ言われている。
彼は就寝時の環境に酷くうるさい。
羽根枕の下に敷き詰めているポプリは毎日その日の体調によって違うものを指定しているし、遮光及び遮音された部屋でないと眠りが浅くなる。
完全な暗闇でひとり深い睡眠に落ちる。
一度深く眠りに落ちると、どんなことがあっても目覚めない。
彼の酷使された脳が深い睡眠を求めているから。
部屋のサッシもドアも完全防音の扉だった。

加えて寝起きも最高に悪い。
海の近くに住んでいるのに、彼は波音が聞こえると眠れない。
それなのに、かなり頻繁に海を見に行っている。
正確には夕景を眺めている。
太陽が水平線に沈むのを見に行く。
時々ひとりでふらりと朝焼けを見に行くこともある。
ここの大きな出窓からでも十分に臨めるのに。

・・・それほどまでに波音が障るのであれば、海の近くに住まなければ良いのに、彼はそこに住み続けている。ほとんど最近は帰っていないが。
ルイは多くの動産・不動産を持っている。
パリ市内だけでも何カ所もそういう場所を持っている。
もっと静かな場所でも交通の便が良いところでも彼が選べないことはないはずだ。

「・・・おい」
青灰色の瞳を持ち上げた彼は、彼の胸の上に散る茶色の髪の毛に気がついて、上半身を起こした。
目覚めから覚醒までの間が、人より極端に長い彼には滅多にない短い半覚醒時間だった。
彼が彼女の名前を呼んだ。
ぴくりともしない。
徐々に体が目覚めて行くにつれて、彼の良く鍛えられた胸の上に頭を乗せて睡臥に耽る茶色の髪の少女の姿を確認する。

彼は溜息をついて、大きく深呼吸した。
胸の上で小さな頭が上下する。
腕を軽く持ち上げて、彼は見事な黄金髪をかきあげた。
腕を伸ばして、ベッドサイドの照明の光源を落として点灯させる。
彼女の頭を乗せていたルイの体が斜めになって、彼女の白い横顔が見え、安らかな寝息が聞こえてくる。
・・・・それでも彼女は目覚めない。
彼は普段何も着ないで眠る事にしている。
が、先頃、この少女から「もう私もアルディ家の成年齢に達したのだから、ルイも服くらい着て寝てちょうだい」と言われて、軽いゆるやかなウエアを着ているが、上半身は何も身につけていない。
だから彼女の滑らかな頬が、彼の胸に押しつけられていて、ルイは憮然とした表情を浮かべた。
アルディ家の成人年齢はかなり低い年齢で設定されている。
社交界へ出たり、公式に夜会への出席をすることができたり、単独で何か事業を興すことができるようになる。
要は、才能在る者には権益をということだから、この平々凡々な少女には何一つ得失はないはずだった。
できると言えば、日本語が堪能であるということだけだ。
それから耳が良く、記憶力がずば抜けて優れていること。
瞳の色素が薄いので、色の変化に敏感であること。
しかしそれを活用できる才がない。
だから、彼女に、成人が与えられる権利を付与されているわけではないのだが。
彼女の弟妹たちは皆、何かしら特殊な才に溢れているのに、彼女はどうも・・・凡庸だった。
誰かと競争をすることを必要とされなかった故の穏やかさなのか、持って生まれた無神経さなのか。
時折、後者ではないかと思う時がある。
隔世遺伝というものについて論文をひとつ書きたくなるくらいだ。
そしてこうしてルイは滅多に帰邸しないというのに、彼女はいつもこうしてルイの帰りを待って傍に居ようとする。
アルディ邸に戻らずに、不在しがちな両親の元を厭がってこうしてルイの住まいに部屋を設けてしまった。
セキュリティの問題もあるから、帰れというとイヤだといって、こどもを放置するなんて幼児虐待だ、とその時だけは未成年であることを主張する。
あのフランスの華の愛嬢であり、あの特殊な稀なる人の娘でもあるのに。

そもそも、彼が教育係を引き受けざるを得なかったのは、理由があったからだ。
彼はアルディ家の後継者として長らくシャルル・ドゥ・アルディの実子として育てられていたが、実は彼は当主の弟夫婦の子であり、事情があって当主の実子と発表していた。
矛盾への指摘にはアルディ家は容赦なく不条理な力で握りつぶしてしまった。
「貫き通せば真実になる」と彼の実父は嘲笑した。
ルイ・ドゥ・アルディが教育係を引き受けざるを得なかったのは、当主のたっての希望であり断れない状況であったことと・・・彼が分籍の手続きをするにあたっての条件だった。
当主が長らく独身を貫いていたことが原因で、アルディ家の継承者が育っていないこともあり、彼を第一継承者に据え置いたまま、次の後継を育てることが彼の業務に加わった。
彼女の母を後妻としてシャルルが迎えるにあたり、戸籍を整理したかったというシャルルの意図もあった。
ルイはそれに乗じて、彼の正当なる実父と実母の戸籍に入ることになったが、彼の得ている権利はそのまま継続され、消失することはなかった。
シャルルは今でも「息子だ」と言って彼を次の後継に指名している。
母方のロシェル家では、すでに年の離れた彼のきょうだいが成人後、後継者として姓を名乗ることになって居る。
ルイが分籍手続きをするまではその子が長子であったから、そちらを後継者として指名し、現在に至る。

・・・そろそろ当主に就任するのではないのかという動きがあり、彼は今多忙を極めていた。

疲れて泥のように眠るか仮眠程度しか取れない日々が続き、ようやくここに入り込んだのは深夜遅くなってからだった。

ここのセキュリティロックの解除にはパスコードが必要なのに。
彼女はどうやって入り込んだのだろう。
疲れの取り切れていない痺れたルイの頭がどんどん鮮明になっていく。

「起きろ」
彼は体を反転させて、彼女の頭を彼の胸の上から転がり落とした。
その時になって、ようやく茶色の頭が動いた。
少し間があって、大きな欠伸をかみ殺すような気怠げな声が彼に抗議をした。

「・・・ひどい。優しくおはようのキスくらいしてくれたって・・・」
「オレは未婚の女性が不法侵入するような教育は施していない」
彼は寝起きで少し掠れた声でそう言った。

通常は同性の教育係なのに、彼女に関してだけはルイがずっと継続就任している。
解任はしないつもりらしい。
彼女は広いベッドの上で俯せになったまま四肢に力を入れると、まだ眠いと文句を言いながらゆっくりと体を起こした。

完全に遮光された部屋の中で、僅かな光源で闇に浮かぶ彼女の姿を見て・・・青灰色の瞳を見開く。
彼女は薄いキャミソールを身についているだけで、下履きはコットンの膝丈までのルームパンツだった。
その下には肌着を着用していないらしく、体の線が露わになる。
白い肩が発光しているように淡く若い肌であることを告げる。
色素の薄い茶色の髪に茶色の瞳。
東洋人の特徴が濃く出ていて、顔立ちは彼女の母親に酷似していた。
ただ目の前の少女は、癖の強い髪であった彼女の母よりうねりの強い巻き毛と言った方が良いほどの癖髪だった。
髪を長く伸ばしているので、それが波の渦のように波立っている。
体格は完全に欧州人だった。
若者の好む格好であったが、彼女のまったく恥じらいのないリラックスした目覚めの仕種に、ルイは呆れて言葉を失った。
成熟した女性の体ではない。彼女は円熟した女の恥じらいを知らない。
ましてや、あのアルディ家の者にありえない所業にルイは驚き呆れて絶句する。
まだ未熟な、あどけなさの残る顔が長い茶色の髪の間から現れた。
彼はかつて、激しく心を失うほど愛した人の面影をそこに感じて、呼吸を止めた。
そこで、精悍な顔を背けた。

「男の寝室に忍び込むなんて、正気の沙汰ではない」
「男・・・男・・・どこに居るの？」

彼女は彼の言葉を口の中で何回か繰り返し、きょろきょろと辺りを見回した。
大きな茶色の瞳がくるくると動き出して、広いがほとんど余計な装飾が一切ない殺風景なルイの寝室をぐるりと見廻した。
彼女の小さいときからここに出入りさせていた。
多忙であったし、面倒だったので、ひととおりのことは副長と呼ばれる諸般を担当する者に任せたきりだった。それ以外は放任というより放置していた。
あの家の開放主義は承知していたが、これではアルディ家が失墜するのは目に見えている。
どうして他の者と違うのだろうか。
他の者達はそうではない。
目の前の彼女だけが自由奔放で、何にも囚われず自由にあちこちを出入りする。
出入り・・・この部屋に忍び込んだ彼女にルイは声をかけた。

「どうやって入り込んだんだ？」
「聞こえたから」
ルイは美しい眉を顰めた。

これ以上彼女がここに入り込まないために対策を講じなければならない。
でなければ、居所を明らかにしないセーフハウスをひとつ増やすだけだ。
彼女の教育係である以上は、彼は彼女の安全も含めて管理しなければならないが、こうも公私混同の生活では厄介だ。
得意げに彼女は種明かしをする。

「ルイ、この間、私と電話で話しながら施錠コードを打っていたでしょう。それでわかった」

ルイは舌打ちをした。
彼女の耳の良さについて侮っていた。
パスコードから僅かに漏れる電子音と、ノック音で彼女はコードを覚えてしまったらしい。
論理的ではないが実に納得できる説明だった。
今度はパスコード制から少し前に切り替えられたIDフィルムを復活させようと考えた。
こちらで入場を制限させる。
旧式ではあるが、彼女は・・・いや、彼女ら若者は新式になる前のものについては興味がないのが特徴だったから、これで対応できるだろう。
その間に次の手を打つ。
だんだん・・・目が醒めてくる。
枕元にあった煙草に手を伸ばした。

「ルイ！煙草はだめだよ！」
彼女は彼が背凭れにもたれて、長い脚を伸ばし煙草に視線をうつした一瞬を狙って、彼の体の上に軽やかに乗った。
「・・・・マドモアゼル。オレは気が短い。・・・・早くそこをどいてくれないか」
彼は煙草をくわえながらそう言った。
ルイと彼女は、こんな風にベッドの上で朝床の戯れに興じる関係ではない。

・・・以前は親を恋しがって夜泣きする彼女と共に、一緒に眠ったこともあったが。

白い胸元と鎖骨が近づいてきて、ルイはまた横を向いた。
彼女は眩しすぎる。
どんどん・・・ものすごい速度で、少女から娘になっていく。
そしてルイがこよなく愛した彼の運命の人と同じ微笑みを彼に投げかける。

ずっと傍で手を握りしめ一緒に居た・・・・あの日々を思い出してしまう。
心の奥にしまい込んでいたものが疼く。

「オレに構うな。・・・・こどもは嫌いだ」
「こどもじゃない」
彼女はそう言った。
頬を膨らませて、もう成年だと言った。
そう言いながらも無邪気に彼のこめかみに顔を寄せて、音を立ててキスを落とす。
ルイは片目を瞑った。
彼らの独特の・・・朝の祝福のキスだった。

―――家族のキスだ。
その昔。
彼が自らそう言って落とした切ない祝福の接吻について、記憶が鮮やかに蘇ってくる。

「だって、ルイの肌は綺麗で・・・安心する。ほっとする」
彼女はどう表現して良いのか適切な表現が見つけることができずに言葉を濁した。
彼の皮膚は再生医療によって、移植をしてある。
今はもう誰もわからないほどに癒着しているが、それでも何度も手術を繰り返した。
彼女の母親の細胞を使った皮膚組織を使って。
だからそれを懐かしいと感じるのは・・・・彼女の娘であるからなのか。
生命の神秘とでも言うような不思議な現象を目の当たりにする。
彼は根拠の無いことは信じない主義なのに。

ルイは溜め息をついた。
・・・・彼女は成年齢に達した。
アルディ家の年齢ではあるが、その気になれば擬成人として結婚することも可能だ。
この国の法律は常に事実を優先する。
・・・・成年齢に達したならなおさらだ。
彼は呟いた。
勝手にルイの就寝時に入り込んでベッドで眠る年齢ではない。
それに・・・彼が惑って彼女を傷つけるようなことをしでかさないとも限らない。
最近とても良く似てきた。
声も話し方も少し遠くを見つめる目つきも。
何もかもが良く似ている。
だから距離を置くことにしたのに。

◆後編

「こどもじゃないなら」
彼は荒療治に出ることにした。

彼を男性と認識せず、男の生理についてまったく理解していない彼女に向かって、挑戦的に微笑んだ。
彼の腰上に乗り、にこにこと無邪気に微笑んでルイの目覚めを促す少女に言った。
「こういう教育もしなくてはならないのかな」
彼はそう言うと、彼女の腰を掴んで惹き寄せた。
「ルイ・・・？」
怪訝な顔をして次に事情を察して小さな悲鳴をあげる彼女の胸に顔を埋める。
彼女の華奢な体がしなった。
細い肩紐が肩から外れて落ち、彼はそのまま火を付ける前の煙草を手に持ったまま、彼女をきつく抱き締めた。
両手首を彼女の体の後ろで強く掴んだ。
彼女の細い手首は彼の片手の中にすっぽりおさまってしまう。
露わになった上腕部に軽く唇をつけた。
押しつけるだけで彼女の薄い皮膚の上に、赤い花弁が散った。闇の中でも彼女の肌は非常に白いので、浮かぶ彼の痕跡が現れる過程がよくわかる。
身を捩るその様が官能的で、彼はまだ固さの残る蕾の間にもう一度顔を埋めた。

ぎゅっと眉根を寄せて・・・・・ルイは金の髪を彼女の体に埋める。縋るように。
これで彼女がもうここに来なくなれば良いのにとさえ思った。

あの赤い夕焼けを一緒に見た時から。
彼女は彼と一緒に居る。
それが時々苦しい。
だから、彼は突き放して距離を保った。

音を遮った光の差さない空間にはひとりで居る事しかできない。
そういう闇でなければ彼は眠る事ができないのに、その闇に落ちていくあの感覚を思い出しそうになって・・・時々飛び起きる。
ベッドのスプリングが軋んだ。
「ルイ・・・！」
彼女がルイの名前を呼んだ。
ふわりと、彼女から甘い香りがした。
そこで彼は顔を上げた。
彼は我を失うことはもうないと決めていた。
我を失う愛を知ったから、もう二度とそんな愛をしないと心に決めていた。

彼女の体から・・・彼の羽根枕のポプリと同じ香りがした。
彼は彼女の体を離した。
そして、ベッドの上に彼女を放るように打ち投げると、おもむろに立ち上がった。
「これに懲りたら・・・二度と寝室に入るな」
彼は潰れてしまった煙草を捨てて、新しくもう1本ケースから取り出した。
最近吸わなくなったのだが、彼女と話をすると、どうにも・・・煙草が吸いたくなる。
ライターの光が室内を照らす。
ルイの端麗な横顔が彼女の視界に入った。

彼女は黙っていた。

彼は煙草を慣れた手つきで吸った。ふう、と天井に紫煙を吐く。
徐々に鮮明になってくる意識とともに・・・目を瞑る。
あの日々を思い出す。
ルイ、とはにかんで笑う少女の顔と声が忘れられない。

彼の療養中には欠かさず彼のために枕にオイルとポプリを敷き詰めていた人がいた。
とても細かい時間のかかる作業なのに、彼女は毎日欠かさずそうしてルイを癒した。
その時のことを思い出す。
一瞬、彼は暗闇の中で惑いそうになった。
あの人を抱き締めることができるのなら。
背中を向けた抱擁ではなく、こうして闇間に我を忘れて激しく抱合することができるのなら。
そういう、叶わない未来について考えることはやめたのに、彼は激しい感情を噴出させる。
それを止めたのは、彼女の香りだった。

彼の寝室に敷き詰められている香りと同じだった。

ベッドでうたた寝をしているときに移った香りではない。
髪からではない。
彼女の指先や手の平から香った。
彼女の体から立ち上る香りから、彼の枕を創っているのは彼女なのではないのか、と推測した。

「ルイはいつも忙しそうで・・・いつも見に行く夕陽が見られないのであれば、せめて朝焼けの海を一緒に見に行こうと思ったの」
彼女はぽつりと言った。
彼が多忙を極めており、唯一の安らぎとでも言うような日没の光景を見て考えに耽ることを彼女は良く承知していた。
一緒に連れていくこともあったが、今は彼女の顔を見ることさえ滅多になくなってしまった。
時間ぎりぎりまでは寝かせてやりたい。
疲れたルイを癒すために。でも彼には肉体の疲れの他に、精神が疲れていることを、彼女は知っていた。

それなのに、一緒に眠ってしまったというわけか。
彼は苦笑した。
彼女は若い。まだ幼い。明け方に時間を決めて目を醒ますことができないくらい、若いのだ。

ルイは溜め息をついて、壁に向かって歩いた。
電動遮光ガラスの操作パネルに指を伸ばす。
遮光カーテンが開き、そして窓ガラスの遮光フィルムが角度を変えたので、外の景色が一望できた。窓を少し開く。遮音ガラスから遠く波の音が漏れ始め、同時に空調管理された室内に、湿った潮の香りが風に乗って流れ込んできた。
青灰色の瞳を細める。急激な眩しさに彼は少し横を向いて背中を向け、目を馴らす。
部屋の中に一瞬で・・・・紅日が差し込んできた。
「ルイ！眩しい・・・」
ベッドの上で座り込んでいた彼女が抗議した。
「ちょうど・・・朝日が昇ったところ。ここは海辺ではないから・・・・昇ったくらいがちょうど良い。・・・・時間はぴったりだよ」

彼はそう言って、室内の彼女に向かって微笑んだ。
彼女は顔を上げた。
少女の幼い白い顔に、朝日の清麗な光が差し込んで、彼女の薄い茶色の髪を・・・金色に染めた。ルイと同じ色ではないが・・・・
あの人の言葉を思い出した。
「どんなに頑張ってもルイのような金髪のアルディ家のこどもになることができなかった」と。
いや・・・・ここにアルディを名乗る、あなたの血を引く晄の娘がやってきた。
あなたが焦がれた、オレと・・・あなたと・・・皆の血を引く娘がこうして朝日を見ようと言ってやって来る。
彼は誰かと一緒に眠る事ができない。
どんなに深く眠っていても目覚めが突然やって来る。
幻に惑い、あの人でない者をあの人の名前で呼ぶことが何より恐ろしいから。
それなのに。
目の前の朝日で金に髪色を染めるあの人の娘は・・・・・
彼の眠りを妨げない。
眠りを誘うように、帰邸しない日もあるのに、毎日彼のために寝室を整える。
ポプリを敷き詰め、こっそり様子を伺いにやって来る。
そして彼の胸が懐かしいと言って、頬を寄せる。

少女は真っ赤な陽射しが突然部屋の中に差し込んできて、目を細めた。
彼女も色素の薄い瞳をしており、色彩の変化には敏感だったので、こういった明暗の差が非常に目に堪える。
でも。
今、目を開いて見ておかねばならないと思った。
窓辺に立ち、朝日を受けて微笑む美しい金の髪の人を見た。
逆光だから、青灰色の瞳の色がよくわからないが、優しく彼女を見つめる。
いつも冷たいのに。いつも素っ気ないのに。

わかっている。
彼女を優しい瞳で見るときは、彼女を通して、別の人を・・・・あの人を見て居るのだと言うこともちゃんとわかっている。
でも、それでも良い。

それでも・・・・あの人を好きで居続けるルイが好きだから。

・・・・てんしさんがいる
彼女は彼のその姿を見てそう呟いた。

彼は本当に美しい。
上半身が露わになって、整えられた見事な体が朝日に照らされて、本当に・・・天使ではなく美の使徒がやってきたのだと錯覚するほどに美しい。

同じ顔つきの人を何人も知っている。
彼女の父も叔父も皆良く似ている。でも。彼ほど深い孤独と悲しみと憂いをたたえた瞳の人はいない。
ルイはいつも恐い顔をしている。
どんなに彼女が笑いかけてもにこりともしない。

それでも。
こうして、一瞬。ほんの一瞬だけれども、優しくする。彼女に微笑む。
彼の心を動かすのが、彼女の心根ではなく、彼女の容姿であったとしても、それでも良い。
ずっと、ずっと。傍に居たいから。一緒に居たいから。

彼女は故意にこどもっぽく声をあげて、ベッドから飛び降りた。
「ああ・・・素敵！スケッチしたいな！素敵な色だね、ルイ！」
朝も良いなぁ。でも眠い。
彼女はそう言って、伸びをした。
眠いと連呼して、欠伸をして涙が出たフリをしたが、それは眠気の涙ではなかった。

ルイが少女の名前を呼んだ。
はい、と彼女は言った。
彼の声を忘れることができない。彼が彼女を呼ぶ声に焦がれる。
忘れられないのは血筋だね。
でも、私はルイのことに関してだけ・・・忘れられない。記憶に刻む。忘れても思い出す。

彼女はそう思いながら、ルイと並んで朝焼けの空を見つめた。
遠くに見える水平線は静かに凪いでいた。
水平線から昇り、建物の合間から顔を覗かせる陽光は赤かった。
あの日の日没と同じようであるけれど・・・そうではない朝の光。

ルイは日没のあの茜色を、贖罪の業火だと思った。
それなら、日の出のこの染み入るような清らかな焔は何の晄なのだろう。
こたえはまだ出さなくて良いのかもしれない。
ルイはそう思った。
こうして並んで・・・煙草を燻らせながら景色を眺める。
鮮やかな色も。淡い色も。すべて、すべて教えてきた。

彼は彼女に教えてやることがまだ、あるような気がした。

年若い、彼の従妹に向かって、彼は煙草の煙を吐きかけた。
彼女がむせる。
「大人のやることは理解できない」
「こどものやることは理解できない」
彼はやり込めた。
「おい、アルディ家の令嬢ともあろう者が何て格好だ」
よく見てみろ、と彼が言ったので、彼女は自分の体に視線を落とした。

・・・・・完全に、体の線が露わになっていた。朝日に照らされて透けてしまっている。
彼女は顔を真っ赤にした。慌ててベッドの毛布を惹き寄せて、体を覆った。

「恥じらいだけは一人前のようだけれど、いい加減・・・客観的自己評価というものができるようになってくれないか」
彼は良く響くテノールで言った。
少し笑っていた。

「今度オレの寝室に入るときには・・・もう少し、ウエストとバストに差をつけてきてくれよ」
二度と入れないようにセキュリティを強化するけれどもね、と彼は言った。

ルイは意地悪だ、と彼女が恨めしそうにルイを見上げた。
・・・・身長が伸びた。髪も伸びて・・・そう・・・あの人のように綺麗になって行くのだろう。
今度こそ、あなたを倖せにする。倖せになった姿を見逃さない。
彼はまた煙草に口をつけた。

彼の従妹は彼に文句を言った。
「おとうさまに言い付けてやる」
「どうぞ、ご自由に。・・・・まだ婚姻可能年齢に到達しない当主の娘が、婚前に婚約者である教育係の居室を無節操に自ら訪れました、と報告するから」
「・・・ルイ！ルイ・ドゥ・アルディ！」
彼女は彼の名前を呼んだ。
彼は冷たく鼻で笑ったが、その瞳は優しかった。

「目が醒めた。・・・・これから少し時間があるから・・・出かける前に散歩に行く。ついて来るのは構わないが、その格好で出歩くのなら、金輪際ここには立ち入り禁止だ」
彼女の茶色の瞳が輝いた。

年端もいかない・・・この年齢の離れた、晄の人の娘を愛することができるのだろうか。
まだ答えは出ない。
彼は妻を娶らないと宣言したのに。
彼は彼女が大人になるまで待ち、その時に改めて婚約することを条件としてウイと言った。
両家の宿願でもある・・・かつて当主争いで２つに割れてしまった家の絆を深めるために。
彼はもう一度、シャルル・ドゥ・アルディの息子になることを承諾したのだ。
しかし彼女が成年に達した時に、誰か他の者を定めるのであれば、それはそれで良いと思った。
当主令嬢との婚約破棄を理由に二度と結婚話が出ることはないからだ。
濃い血族結婚になる。
それはわかっていた。
それでも彼はウィと言った。

彼女とは結ばれない。永遠に。
彼が愛したファム・ファタルは別の男の元で輝き続ける。

・・・・彼女はあの人ではない。
でも手放そうとは思わなかった。

彼に安らかな眠りをもたらす唯一の人でもあり、彼と一緒に長い年月を過ごしてきた
家族などいないと思っていた彼に、あの人が与えてくれた「もうひとりのあの人」・・・
でもあの人そのものではない。
その気質はかなり違っている。

しかし・・・・彼はもう一度愛を信じることができるのだろうか。
あのフランスの華のように。
ルイ・ドゥ・アルディは少女の名前を呼んだ。

もうそこには居なかった。

彼の部屋から飛び出して、彼女はルイ・ドゥ・アルディが出かける前に身支度を調えてくるだろう。
しかし、若いので・・・・あれこれ支度に手間取って、またルイを憤慨させるのかもしれない。
彼を振り向くことなく走って部屋を出て行った彼女の残り香が部屋に漂う。

これからたくさんのことを教えなければならない。
淑女としての恥じらいも。アルディ夫人としての教養も。

彼は苦笑した。
いつの間にか・・・朝日を浴びるあの朝日のような少女のことばかり考えている。
彼の安眠を願って彼女が作ってくれた羽根枕と同じ香りが漂った。

・・・・・彼が安らぐ場所がある。

早く・・・・早く再び一緒に眠りたい。
彼女が成人するまで、待つことにした。
一緒に過ごす日々を重ねていく。
彼の過去が積もっていきそして未来に続く。
過去も現在も未来も一緒に在り続けようとする人がいる。

太陽の名前を持つルイ・ドゥ・アルディは、同じように・・・彼と同じ意味を持つ少女の名前を呼んで、青灰色の瞳を少し細め、
綺麗な微笑みを浮かべた。

（FIN）

馨香

■01

「・・・・なんですって？」
私は自分の言葉が震えるのを感じた。
私に向けられた言葉が理解できなかったわけでも、聞き取れなかったわけでもない。
・・・受け入れたくなかったのだ。

私の目の前には、白金の髪の、青灰色の瞳の男性が座っていた。
青年とも言えるけれど・・・少年とも言えるような、中性的な印象を残しながらも、彼の視線はすでに私よりずっと老いていた。
ミシェル・ドゥ・アルディは、天使のような端整な顔立ちに少し不釣り合いな、悪魔のような妖婉な微笑みをうかべて、低いバリトンで言った。
「聞こえなかったわけではないだろう」
「聞きたくなかっただけ」
彼は私の言葉に少し声を漏らして嗤った。
「でも、真実を知りたいと言ったのは、貴女の方だ」
そして、細く長い指で机の上の煙草を取り出し、一本取り出すと、慣れた手つきで火を灯した。
薄い唇に銜えて一度だけ、大きく息を吸う。

「ここは禁煙よ、ミシェル・ドゥ・アルディ」
私は低い声で窘めたが、彼はまったく聞き入れなかった。
しかし、彼のために揃えられたシガレットケースやライターは、彼だけが特別であることを示していた。
私は下を向いた。
来訪者用のゲストカードが私の胸の上で、角度を変える度に照明光を受けて、私が呼吸する度に上下し、鈍い晄を伴いながら乱反射していた。

私が彼と最後に出会った時からそれほど長い年月が経過しているわけではないのに、彼が身に纏っている虚無感の波は更に激しい潮流となって彼を包み込んでしまっていた。
・・・・青灰色の双眸は無機質で硬質な硝子を連想させる。白金の髪は彼の美貌を彩る最高の色味であったが、同時に他者を寄せ付けない拒否の晄を放っていた。
・・・かつて、私を恫喝した男性と、もう一度こうして話をするようになるとは。

ここはアルディ家が出資をしている研究所だ。約束した時間に訪れると、白衣を着た研究員と思われる人物に案内され、棟の最上階に案内された。静音エレベーターに乗り、パスコードと白衣の人物のIDがなければ行き着くことの出来ない階層に到着するまでに、相当な時間を要した。
特別に用意された特別な空間だとすぐにわかった。
豪奢な家具はほとんど使用されていなかった。
最新の学術署が並んだ本棚は飾りでしかなかった。
曇り一つない光沢の強い鳶色の机の上に乗る３Dディスプレイが省電力モードになっていた。
充電式であり、無線で接続されているらしい。ほんの僅かにモーター音がしているだけだった。
それが電子カルテを見るための、マルチタッチパネル式医療ネットワークシステム接続のモニターであることだけが、この場所の意味を遠慮がちに告げていた。

ここが研究所であることを忘れてしまうほどの眺めの良い景色が、全面硝子張りの窓の向こうに広がっている。私は目を細めた。
私の住んでいた館の風景と良く似ていた。

・・・・誰かがここを常用しているとは思えなかった。
詮索してはいけないと厳しく教育されたであろうに、案内の者から受ける堪えきれない好奇の視線をさり気なく無視した。
滅多にない来訪者と接見するときにだけ使用される場所を指定されて、私はそこに座って待つように言われた。
そしてしばらく一人きりになって、ようやく・・自分の思考に沈潜することができた。
緊張していたらしい。
私の手の平は少し汗ばんでいた。
緊張しているときには、違うことを考えるに限る。

・・・・・・しかし否応なく引き戻される。これは何を意味しているのだろうか。

無味無臭の乾燥した空間だった。
その間、私は終始無言で、ずっと・・・ずっと考え事をしていた。
早く急いで、と願っているのに、その瞬間が訪れることが怖い。
そんな矛盾した感覚から解放されたのは・・
真実を知るのが怖いと思った。・・・・この感覚を、かつて味わったことがあった。
それ以来・・・私の秘めたる想いはそのまま取り残されてしまった。

幾度目かの深い溜息をついた時、いきなり扉が開いたので、私は腰を浮かせた。
私はその人物がやって来ることを知っていたのにも関わらず、少しばかり驚愕した。
美しい容姿の男が突然目の前に現れたからということもあったが・・・私はまだ、彼を赦していない。
いや・・・アルディ家の抗争に巻き込まれた時に、ミシェル・ドゥ・アルディによって窮地に立たされてしまった。
そして、愛する者を瞞さなくてはならないという苦悶を強いられた。
・・・・彼はあの時、不敵に嗤って言った。
「同じ遺伝子でも共有できないものがあり、共存してはいけない者が居る。
・・・・あの男が懊悩に喘ぐ様を見たいのでね。是非協力してもらうよ」
そう言って、彼は私を彼の言葉通り、煩悶の極みに貶めた。

最近になって、ようやく静かな生活を確保できたというのに。
私の待ち望んだ静寂をミシェル・ドゥ・アルディは簡単に奪い去って行く。

あの時もそうだった。
やっと訪れた平穏を・・・彼はいともあっさりと、何でもないと言った風に破壊していった。
ミシェル・ドゥ・アルディは研究所の最奥から、外来棟の最上階のこの部屋に入るなり、腰を下ろしていきなり煙草を吸い始めたのだ。
全棟禁煙だ、と最初のチェックを受けたときに言われたのに。
彼は規定を無視していたが、それは認められた「違反」であった。

目の前の主椅子に座った彼は、長い脚を組んで上を向いて煙を吐き出した様は・・・あのフランスの華と呼ばれる青年と良く似た顔立ちをしていた。
彼らは一卵性の双生児だから。
同じ遺伝子を持っているからだ。
しかし、その魂は遠くかけ離れてしまっていた。
慈愛を知っているシャルルと違い・・・ミシェルは慈愛を捨ててしまったようだった。
知らないのではない。
知っているのに滅去してしまったようだった。

ミシェルは煙草をひとしきり吸い終わるまで、無言だった。
私も無言で彼を見つめた。
優雅な仕草であったが、ひどく虚無的だった。

ミシェル・ドゥ・アルディが突然現れた時には、世間をだいぶ騒がせた。
唯一絶対と思われていたフランスの華には、実は双子の弟が居て、彼に闘いを挑んだからだ。シャルルとの当主争いを起こして敗れ、その後に世間をひとしきり騒がせた後、何をしていたのかは不明だった。
しかしまたパリに戻ってきて、この場所に居る。
今、最先端の技術の覇者になるために、皆が躍起になって研究を争っている分野の中でも、最も注目されている生化学や遺伝学や再生医療などに関して・・・・世界最高峰と言われているこの研究所の外来棟の最上階に座って居た。

・・・・彼は単刀直入に話を切り出した。

これが再会の言葉のかわりだった。
彼は低い艶のあるバリトンで、いきなり話を始めたのだ。

「単刀直入に言う。・・・アデリーヌ。代理母を務めてくれ」
それは依頼の言葉であったが、命令であった。
■02

そして吸い終わった煙草を灰皿に投げ込むと、ここは禁煙だ、と私に窘められたのにまた新たに煙草を取り出して、ミシェル・ドゥ・アルディはそれを口に銜えた。
「・・・貴女もどう？」
彼がシガレットケースを指さした。
私の喫煙癖を知っているからゆえの言葉であったが、その情報は古かった。
「・・・やめているの」
「それは結構。それなら着床手術の日程を早めよう。・・・禁煙と禁酒はしばらく続けてもらうよ」
ミシェルは私の返事を待たずに彼が机上のボードに手を伸ばして、電源を入れる。
３Dディスプレイに、浮かび上がるのは判らない言葉や記号の羅列だった。
その中で、唯一わかるのは・・・ごく限られた単語だけだった。
私のこの世で愛して止まない者の名前がそこにあった。

ミシェルは白金の髪を掻き上げたが、それは単に癖ではなく、彼がそうすることで自分へ他者が意識を集中させる仕草でしかないということを知り抜いていた。

「私は突然呼び出されて、いきなり『代理母』になれと言われて、その根拠を尋ねる必要があると思わる」
淡々と言ったつもりであったけれど、私の声は掠れていた。
長い時間待たされたのに、ティーすら出てこなかったのは正解だと言える。
傲慢に神託を述べるかのような物言いをする若者を・・・私はとうてい、我が息子の兄であると認識することができなかった。
同じ貌をしたシャルルには、懐かしささえ感じるのに。
愛したあの人の息子だった。そして何もかもが完璧だった。
茶色の髪の小柄な日本人の娘を連れて歩き・・そして彼女をファム・ファタルと定めた彼がその後、激動の人生を歩んで、今に至ったと聞く。
そう。人づての話しか知らなかった。アルディ家とはもう関わり合いがないと思っていた。
これからはずっと・・・私は私だけの息子と一緒に暮らしていけると思った。
あの別れの時以来、会っていなかった。

あの人もそうだった。
妻を愛しすぎて・・・そしてこよなく愛した人を失ってしまって以来、あの人は様々に愛を模索していた。
でもそんなあの人が好きだった。今でも好きだ。
彼の愛もひとつしかなかった。たったひとつだけの・・・愛を捨て去ったり忘れたりすることなんてできないのに。それでも彼は愛を上書きしようとした。そんなことは決してできないのに。
そんな欠点もある彼が好きだった。愛していた。だから、マリウスを産んだ。私の秘めたる想いを口にすることはもうないかわりに、私は秘めたる想いを生み出すことにした。
・・・・産まない選択は存在しなかった。
誰かを哀しませることになるかもしれないと思ったこともあったが、私の中に眠るあの人から受け継いだ命を廃棄することなんてできなかった。

あの激烈な死闘を垣間見て、それでも我が子をアルディ家の血縁者だと主張する気にはなれなかった。
あの人は、私に相当の財産を残してくれた。
私が秘書業務をしていたこともあり、いわゆる会社都合での解雇であったことも影響していた。
守秘義務を完遂するために必要とする金額以上のものと・・・館をひとつ、残してくれていた。
そこであった出来事を今も思い出すときがある。

しかしそれを誰かに言うつもりはなかった。

・・・定期的な入金があったが、私はそれをすべてマリウスのために貯蓄することにした。
シャルルが当主に返り咲いた直後。入金は始まった。
それが、シャルルの片腕であり、従妹でもあるあの女性から送られていることは知っていた。
アルディ家の口座からではなく、彼女の名前で入金されていたからだ。
一族に知られないように・・彼女が実家の口座を使って入金をしていて、それが誰の依頼であるのかもわかった。
でも、礼を言う手段がなかった。
そして私はそれを受け入れることにした。
あの時の・・シャルルのマリウスに見せた微笑みが嘘ではないと思いたかったから。
こちらから返答すれば、アルディ家にこちらの事情がわかってしまうから。
いろいろと理由をつけて・・・私は享受するままになっていた。

それでも。
いつか・・・彼が自分の出自を疑問に思った時には、すべてを明かすつもりだった。

いつか・・彼が自由に人生を選べると良いのに、と思ったから。
それには時間が必要だった。
アルディ家と関わりがないための環境と、あの一族が彼を見つけ出して、何かに利用しようとしないようにするために。

・・・でも、私はあの館を出ることが出来なかった。

彼と、彼の妻と、シャルルの思い出が詰まった館だった。シャルルが幼い時に手を加えたという館は・・あの人の私邸の一つであったけれど、何よりも思い出が深いはずだった。
館は容れ物でしかないと割り切ることが出来ない、様々なものが設置されていて、私はそれをとうとう、動かすことができなかった。
病弱な妻のために設けられたスロープや、小さいけれども見事な薔薇を咲かせる庭や・・・
あの人が、いつかあの館で・・・いつか、家族で静かに暮らすことを夢見ていた痕跡が随所に遺されていた。

残酷な人。
酷い人。

それでも、私は愛していた。欠点もあったけれど、大変に優れた人だった。
彼のような人には二度と、巡りあえないだろうと思った。
いや、巡りあったらいけないのだと思った。
誰かを彼と比べることはできない。

それなのに。
彼の息子は・・・私をこうして呼び出した。
なぜこうも、シャルルとミシェルは魂を遠く隔ててしまったのだろう。
能力も高く素晴らしい容姿を持ち、誰もが羨む家柄に生まれ・・・それでいてなお、彼らは反目し合う。
ひとりしか生きられない世は終わった。
ふたりで生きていける世の中になった。
それなのに・・ミシェルは誰かと寄り添うことを全身で拒絶していた。

鋭利な刃物を連想した。

彼は誰もを傷つける。不用意に触れようとする者は、誰も赦さない。
そのミシェルが私を呼び出した。
私には心当たりがあったから・・それに応じた。

これは、取引なのだと思わざるを得ない。
私が愛したあの人の息子は・・・冷たく言い放った。
機械的に無機質に。何も感じていないかのように。
ただ、冷たい微笑みだけが・・・彼が人形やホログラムなどではなく、血の通った人という生物であることを知らせている。

私の・・・私のマリウスは彼に良く似ていた。面立ちが似ていた。でも、違っていた。
何が彼らを分けてしまったのだろう。
何が・・・・彼をそうさせてしまったのだろう。
憎んだり恨んだりしてはいけないと思った。
彼らの生母とあの人との魂の契りを裏切らせるような行為をしたのは私の方だ。

勝手に・・・あの人との愛の証を産んだ。

恨んだり憎んだりするのは、彼らの方なのだ。

■03

「因果関係を話して」
私はそう言った。
ミシェルは少しだけ、眉を顰めた。
・・・彼の会話についていける人物はとても少ない。
あのフランスの華や、彼の秘書や・・・天賦の才を持って彼に挑まなければ、彼は会話に応じない。
しかし、そう言っている場合ではなかった。

「然るべき相手を捜せば良いでしょう」
「然るべき人物は、貴女が最適だと判断された」

ミシェルはそう言った。つまらなさそうに・・・淡々と彼は与えられた任務をこなしているという印象を受けた。
自分から望んで選んだのではなく、そうしろ、と言われて面倒だけれども遵わざるを得ない、と言った様子だった。

「・・・アルディ家が貴女のことを把握していないと思ったのか？
それはオレや当主が関わった相手として最初から・・貴女は監視対象者のひとりだったよ・・だからオレは貴女の居所を簡単に突き止めたわけだけれども」

「私は今は静かに暮らしている。アルディ家への権利放棄の誓約書も書いた」

私はそう反論した。
そう。今は、静寂を求めて・・・私は穏やかに暮らしたい。ただそれだけだったのに。
彼はそれを聞いて冷笑した。

「・・・その割には、随分と金銭が入り用なようだが」
そこまで調べておきながら・・・
私は、彼の狙いはマリウスなのかと思っていた。
しかし・・どうやら違うらしい。
私の健康な身体を使って、代理母になれと言っているのは理に適っていない。

ミシェルは気怠げに微笑んだ。
「人に長い説明をするのは疲れるね・・・しかし必要不可欠だから致し方ないと思うことにするよ。これはオレに課せられた業なのかな」

「アルディ家は、ひとつ・・・実験をすることにした。優秀な種を残すために、現存する者たちを争わせるのではなく、新しく種を創ることにした。・・・シャルルの品種改良が昂じたと思ってくれれば良い。・・・そして、これまでにない新しい種を産み育てる苗床を捜しているというわけだ。・・・我が一族は、RH－AB型という滅多に居ない血液型を保因している者が多くてね。
・・・流産や黄疸や成育異常をできるだけ避けるために、同型の経産婦を探していた」
「他にも居るでしょう」

私は、ミシェルの申し出に呆気にとられて言い返してしまっていた。
秘書業務は復唱することはあっても反論してはいけないとされている。
けれども・・私は長年経験していた知識や智慧とはまったく正反対の行動を起こしてしまっていた。
年若いけれど、老成した瞳を持つ青年が・・・何を言い出しているのか理解しようとしたがそれは徒労だった。
理解できない。
なぜ、突如呼び出されて・・私はこのような命を受けなければならないのか。

「聡明な貴女なら、気がついているでしょう」
ミシェルはそう言って微笑んだ。白金の髪が・・揺れて濃艶な笑みをますます際立たせている。

私は・・・どうして、ミシェルがその話を切り出しているのか、察知していたからだ。
ミシェルの言うとおりだった。
私はとうに・・その申し出の理由に気がついている。

あの人が愛した息子は・・・本当はひとりではなくふたりいた。
天使のような接吻をマリウスに落としたシャルルと同じ貌をしているのに。
悪魔のような微笑みで・・・ミシェルは私に逃れられない条件を突きつける。
そう・・私がそれを断らないと確信しているから、ミシェルはそう言うのだ。

全部説明しないといけないのか・・・と呆れたように、ミシェルは肩をすくめた。

「契約を守り、口が堅くて、守秘を守らざるを得ない人物は限られていてね。・・・」
彼が言葉を紡ぎ出した。
■04

他にも代理母を希望する者は居るでしょう、と言ったとき。
私に向かってミシェルが冷笑した。
そういうビジネスが成立していることも知っている。
しかし、自分ではない誰かが負うには重すぎる責務を・・・・私の上に降らせようとするこの青年の言葉を最後まで聞くしかなかった。

彼は話しながら、ディスプレイを何度かスクロールさせていたが、視線はまったく動いていなかった。内容をすでに暗記しているらしい。

「貴女があの館を売却しようとしていると聞いて、始まったな、と思ったよ。そしてやはり貴女はオレの見立てのとおりの女性であることも。結局は、オレの指示に従わざるを得ないわけなのだから、抗わずにウイと言え」
「そんな納得できない話を承諾するわけにはいかない」
私は身震いした。
なぜなら、彼は酔狂で言っているわけではないとわかったからだ。
・・・かつて、私の最も愛する者を取り上げて、私を遵わせた青年は・・・あれから月日が流れてなお、彼の根底に流れる冷たい河から浮き上がっていないのだと思った。
あたたかい、陽光の日差しのような父を持っているのに。
彼はどうして、これほどまでに神色自若として重大な話をするのだろうか。

「ここ最近で、相当額を取り崩している。そしてあちこち、昔のつてをたどって、医療関係者で権威と言われている人物にコンタクトしている。・・・マリウスはそんなに具合が悪いのであれば、アルディ家に援助を求めれば良いのに、貴女は強情だね。誇りを捨てて、縋り付くのが母の性であるという認識は改めないといけないな」
私は黙ったままだった。

彼は私の・・いえ、私たちのことを随分詳しく調べているはずだった。
極力、アルディ家の財力やコネクションを頼りにしたくなかった。それに私は前当主の秘書であっただけで、今はまったく繋がりがないことになっている。私がそう望んだからだ。現在の当主は私達が静かに暮らしていけるように手配していた。それを破ってまで・・・あの家に縋ろうとすれば、また、シャルルの地位が危うくなってしまう。それはいけない。あの人の愛した息子を窮地に陥れる真似は、一度で十分だった。
私が私の子を産むことは私だけの自由だと驕った価値観で、マリウスをこの世に生み出した。でもそれ以上に我が子がもたらしてくれた愛や安らぎや・・様々なことを思い返す度に、己のことだけで頭がいっぱいだったことを猛省した。傷つく人が居て、哀しむ人が居るのに。
・・・それなのに、シャルルはマリウスに祝福のキスを授けた。
彼の半身は、私からマリウスを奪い、シャルルを陥れようとしたのに。
だからマリウスにはアルディ家と一切関わり合いなく育った欲しいと思った。
あの時には、マリウスは物心つかない時であったから、当時の出来事が我が子に知られることはなかった。
彼はまだ・・・自分の父について知らない。まだ幼すぎるから、明かしていない。彼が知りたいと思っても、時期が来なければ話すつもりはなかった。
ひょっとすると、一生・・私の秘めたる想いとして奥底に抱いたままにしてしまうかもしれない。

「マリウスが不思議に思うから、アルディ家ゆかりの館を出ようと思っただけよ」
私の苦しい言い訳に、ミシェルはただ黙って唇の端を歪めているだけだった。

「アデリーヌ。オレが知らないとでも思っているのか？」
彼は厳しくそう言った。
・・・・煙草を口に銜えながら、彼はディスプレイ上のファイルをひとつ開き、私に向けて見せた。マルチタッチパッドのディスプレイの上に広がる内容は、医療カルテだった。
細く長い神経質そうな指先で、ファイルを拡大して見せる。今や、こうして何でも携帯できる世の中になった。調べようと思えば、世界の果てで行われている小さな出来事だって調べることが出来る。・・・ミシェルはずっと前から・・私たちのことを知っていた。
こうして、彼はシステムサーバに簡単に侵入して、あらゆる情報を搾取していたのだろう。

「・・・数ヶ月前、マリウスが輸血治療プログラムを受けたのは知っているよ」
私は唇を噛んだ。彼が何を言いたいのかがわかったからだ。
マリウスは私の不注意によって・・・あの館の庭で転倒し、頭を打って意識が昏倒し、その際に身を捩って躰を保護することが出来ずに、大出血を伴う骨折をした。
動脈を損傷しており、輸血を必要とする手術になった。
その時に・・・マリウスの血液が特殊であることを知って、私は・・・私は決して頼ってはいけない人物にコンタクトを取ったのだ。
私の血液を全部抜いてくれと言ったが、合致しなかったのだ。
「その時に、シャルルの第一秘書であり従妹でもあるジル・ド・ラ・ロシェルを頼って、貴女は、アルディ家の
手術の前に対象者本人から血液をあらかじめ採血して貯えておき、手術の時に戻す方法。最もよく行われる方法）

・・・彼女は、連絡を受けると、迅速に手配をしてくれたのだ。
シャルルには黙っておくことにした。
私がそうしてくれと頼んだ。
恩を仇で返すような行為であったけれど、彼にもう・・私たち親子のことで煩わしい思いをさせたくなかった。

一命を取り留めたマリウスと静かに暮らしていこう。
アルディ家とは関わってはいけない。
私はそう強く思った。
私は・・・これ以降は彼らを頼ってはいけないのだ、と固く心に決めた。

それなのに。
また・・・また、私は最後の晄を得るために、彼の突然の呼び出しに屈した。
もう二度と会うことはないと思っていた人物のひとりから連絡が入った。
だから私はここに居る。
私は・・・ミシェル・ドゥ・アルディの呼び出しに応じなければならなくなった。

「マリウスはその後、目覚めなくなった。何がそうさせるのかはわからないと原因を追及するが、貴女は突き止めることが出来なかった。手術の衝撃なのか、転倒したときの頭部への損傷なのか・・・あらゆる原因の可能性を貴女は探したが、結局見つからない。
医療費はかさむ一方で、マリウスはそれでも覚醒しない。・・・躰を動かさないから、体組織や躰の機能は低下していく一方だ」
彼は歌うように囀るように言った。何でもない話をするかのように、軽やかに。

「マリウスの治療と引き替え、ということなの？」
「そう。オレの話はこれで終わり。
選択はふたつ。
高額な医療費を工面して喘ぎながら・・・誰もが解明できない謎の奇病として、研究者に嬲り者にされて結局は救えなかったと言われて歎く路。
もうひとつの路は、この研究所の粋を集めた医療プロジェクトに加わって・・近い将来に出来るであろう遺伝子治療に息子の未来を託すかのどちらかを選べ」
私はそこでふと、ミシェル・ドゥ・アルディが、マリウスの病の原因を知っているのではないのか、と思った。
彼は近い将来に遺伝子治療が施せる、と言っていた。
つまり、現在の医療機関では確立されていない方法ではあるが、実用化もしくは実現するために具体的な作業に取りかかっているのかもしれない、と思ったのだ。彼は確実なことしか口にしない。そういう人だ。

「マリウスの目覚めない病の理由を、ミシェルは知っているのね」
私の言葉に、彼が微笑んだ。それは肯定の微笑みだった。
「良いよ。・・・父の愛人だった人ではあるが、貴女は聡い人だからだね。教えてやろう」
私を馬鹿にしているのか、実父を軽蔑しているのか、受け止めようがない表現に私はまた口を噤んでしまった。
■05

話は終わりだ、と言ったのに。彼は話を続けた。
「マリウスはシャルルの血液を使って輸血した。
アルディ家では有事に備えて、いろいろと課せられた義務がある。
家が絶えたら困る、という理由らしいが、まったく意味のない義務が生きていることもあるがね。
・・・そのうちの一つが、血液と髄液の保存だ。
髄液保存はまだ実用化までは少し時間がかかるが・・・」
彼はそこまで言うと、脚を組み直して、背もたれに深く沈んだ。
横を向いて・・・実につまらなさそうに話をする。
煙草を中途で灰皿に投げ入れていた。
彼の中ではすでに結論が出ていることを誰かに説明する時ほど億劫なことはない、と全身で言っていた。

「そしてその血液がウイルス感染していることが明らかになった。そしてその血液を・・無断で使用した者が居るということもわかった。無断で持ち出し、使用できるような類のものではない。これに関しては、機密事項だからね。・・・しかも権限を持っている者はアルディ家の中でもごく限られた者だけだ」
金の髪のシャルルの秘書であるあの女性がミシェルに漏らすことはしないと思ったが、それでも・・ミシェルの情報網について侮っていたことを悔いた。

私は膝の上で握った手が・・・ぶるぶると細かく震えるのを感じた。
私は我が息子に、病の源を注入したことになるのだ。
何度呼び掛けても、涙を流しても、マリウスは目覚めない。
夢の奥底に漂っていることを望んでいるかのような、少し微笑んだ寝顔を思い出した。

「ウイルス感染・・・」
「そう。シャルルがモザンビークに行っている間に感染した。そして、それは体液から感染し、ワクチンは開発されていない」
彼はまた躰を屈めて新しい煙草に手を伸ばした。
不治の病に冒されることを引き替えに、マリウスは黄泉の国から戻ってきたというのか。
「あの血液がなければ、マリウスは助からなかった。それに伴って副作用が出た、と思えば良い」
私は自分が何か途方もない大きな渦に、足を踏み入れてしまったことにようやく気がついた。

「貴女がここに居る原因となった事由は幾つも存在する。
ジルは事実を知って、貴女に連絡を取ろうとしたが、貴女は接触を断ってしまっていた。マリウスの昏睡状態について、匙を投げた担当医から、電子カルテによる医療診断の依頼がこの研究所に届いた。
そしてあの館の価値を知っておりながらなお売却しようとする愚かな女の話を聞いた」
「それが私が代理母を引き受ける理由と結びつかない」
ミシェルはそれは契約だと言った。
マリウスの治療を任せるかわりに・・・私が新しい命を宿さなければならない決定的な理由がわからない。
まだわからない？と言いたげな青灰色の視線があった。
ミシェルは小さく溜息をついた。

「マリウスの遺伝治療には、完全なる治療方法が確立されていない。
でも、進行を止める手段としての治療をすることはできる。
そのためには・・・臍帯血が必要なんだよ」

私は全身から汗が吹き出すのを感じた。
神を冒涜するような言葉と淡々と・・次から次に発している妍麗な青年は・・・この話の重さについてまったく配慮していなかった。
マリウスを救うために、彼の血縁者からの臍帯血が必要で・・・
代理母として宿す命が、誰の血縁なのかということを悟った。
マリウスに一番近い血を持つ者の受精卵の苗床となれ、と言われたのだ。
その見返りに・・その命がもたらす副産物を受け取れ、と。
それでマリウスは救われる・・・と。

「幹細胞からウイルスのワクチンを創るのには、母細胞に特殊なものを使わなければならない。しかしそれはまだ入手できていない。・・・代替として有効なのは、臍帯血から得られる免疫細胞だ。血縁であって遺伝情報が共通している項が多ければなお良い」

・・・・彼は私に魂だけでなく、すべてを売り渡せと囁いている。

「良い条件だろう。マリウスは救われて、治療ができる。完全に治癒するのは先の話だが、それまで進行を遅らせることができる。彼は普通に生活ができる程度にまで回復するだろう。金銭面でも苦労しない。あの館を売却する必要もない。そして貴女の望み通りに、その後一切・・アルディ家は貴女達親子に関与しない。監視はするけれどもね」
「・・・私が血液提供を申し出たから、マリウスはこんなことに・・・」
「ああ、終わった話を繰り返すことはしないでくれ」
彼は指先に煙草を持ったまま、軽く首を横に振った。

ミシェルは穏やかに静かな口調で私を恫喝した。
「アデリーヌ。選択するのは一瞬だ。時間はやらない。今すぐ決断しろ」
目眩がした。これが夢であるならどんなに良いのに、と思った。
しかし煙草の香りと燻りがそうではないと告げている。
■06

わかっている。あれは回避できないことだったのだ。
あの人が規定を破ってまで持ち出してくれた血液は、病を引き起こした。
でもマリウスは命が助かった。
そのかわりに・・・この研究所でも解明出来ないウイルスに冒された。
ミシェルはそれに取引を持ち出したのだ。
彼らの創り出す命を生み出すことに荷担する代わりに、マリウスを救おうと言った。
彼は狡猾で冷徹であるが、交わした約束を違えることはしない。彼の誇りがそうさせない。
「シャルルは・・・シャルルはこのことを知っているの？」
私は小さな声で言った。

わかりきった答えであったが、それでも・・聞かずには居られなかった。

目の前の男性と同じ容貌の、フランスの華は・・・慈愛を知っている。親子の愛を知っている。
それなのに、この計画に彼が加わっているとは思えなかった。

「いや。シャルルの安全を確保するのがオレの役割でね。
・・・彼にも知らないことや権限が及ばないことはある。
・・・今は彼以上の強い当主が居ないからシャルルを据え置いているだけだ。
それは彼も承知している。しかし、彼は後継者を創ろうとしない。
婚姻もせず、たったひとりの女を愛して愛し抜くことが最上だと思い上がっている。
いくら当主でも・・・アルディ家を滅亡させようとしかねない愚行に邁進する彼の耳に入れようものなら真っ先に中止となるだろうからね。
そうなったら、マリウスは助からない。このまま衰弱してやがて死に至る」
私は黙ったままだった。
そして私はぽつりと言った。

シャルルの血液が感染していると言う。
そして、彼はなかなか表舞台に出てこない。
ミシェルは彼の安全を確保する役割があると言った。
・・・臍帯血がもたらす細胞を手に入れたいと思っているのは、本当は・・・ミシェルなのだろう、と推測した。
遺伝子操作して、一番条件の良い受精卵を選択するのだろう。
そして・・・別の者の進行を遅らせることにも使いたいのだ。
それが誰なのかは明らかだった。

「シャルルが哀しむ」
ミシェルはそこで微笑んだ。
「哀しいとか嬉しいとか、そういう次元の問題ではないよ、アデリーヌ」
彼はそこで大きく煙草を吸った。整った眉を顰めて・・・彼はそしてまた煙草を灰皿に落とした。
そして足を組み直し、膝の上に肘を立てて、向かい合わせに座って居る私に顔を近付けた。
金の髪が精悍な頬に零れおちて・・・何とも言えない艶めかしい風情を醸し出していた。

「貴女は出産まで大切にされる。帝王切開になるだろうが、痕はほとんど残らないようにする。アルディ家の新しい種を生み出す聖母となれ。・・・父との不義も不問にしよう。
マリウスの未来を確保するかどうかは、貴女次第だよ」
「シャルルが哀しむ」
私は同じ事を繰り返した。
彼に非難されるかと思ったが・・・ミシェルは押し黙ったままだった。

「私はシャルルに幸せになって欲しい。
私は彼が新しい路を歩いて・・そう、あの茶色の髪の娘と一緒に微笑んでいた彼を哀しませたくない」
胸が痛くなった。彼が今、あの娘と一緒に居ないのだろうと思っていたからだ。
古の家柄の頂点に立つ、とはそういうことなのだ。
日本人を妻に娶ったことがある前当主の例を引き合いに出して、一族はこぞって反対するのだろう。
彼がそれに屈するとは思えないが、彼には捨てたくてもそうできないものが多すぎた。

「・・・・必要なものを創り出すだけだ」
俯いて声を詰まらせていた私に、ミシェルがそう言った。
「彼を哀しませるのではない。・・・必要だからだ」
ミシェルがそう言った声音は・・少し寂しそうだったので、私は顔を上げた。

「その命は、彼の苦責を分かち合うだろう。彼ができなかったことを成し得るだろう。
そして我が一族の重篤なる病を解決する糸口を持って生まれてくる。
いや・・そのこどもそのものが、何かを切り開くのかもしれない。
そういう可能性を生み出すだけだ」
ミシェルの顔は無表情であったが、それでも・・・先ほどの無機質な眼光ではなかった。
青灰色の瞳は・・・明らかに憂えて居た。そして訴えていた。

自分は必要ではなかったから、と。

シャルルに必要とされなかった。
一族に必要とされなかった。

彼がどうやって生きてきたのかは・・あの人からも聞いていなかった。
しかし、これほどまでに強烈な憎悪があるだろうかと思うくらいの強烈な意志が、彼を動かしていた。それを表に出さずに・・・・面白そうだから荷担してみるよ、と言った具合に語っていたが、そうではない理由が彼にはあったのだと知った。
決意を秘めた人間の行動は、誰かが止めることは難しい。
■07

しばし無言の時間が過ぎた。
その間、ミシェルは身動ぎ一つせず、私の正面で、こちらが臆してしまうほどの美貌でもって私が口を開くのを待っていた。
彼は待つことを知っている。
待つことを知らなかった時代を経て、待つことを知ったようだった。

この荒唐無稽な申し出に・・・結論を出さなければならない。
「私が断ったら他の人を探すの？」
「いや、その答えは想定していない」
ミシェルがそう言ったので、私は大きく息を吐き出した。
先ほどの汗が乾いて・・・私の体温を奪っていく。背筋に寒気が走った。
これから起こる様々なことを考えると・・・それだけで膝が細かく震える。

「ふたつ、質問をさせて」
私は言った。
「体液感染と言ったけれど・・・シャルルは生まれたばかりのマリウスに祝福だと言って、キスをしたことがある。これが原因とは考えられないの？」

彼は顔を上げた。
そうか、とひとり呟いたが、私の質問に即答した。
彼の思考に係る時間というのは、他の誰よりも短いものであるということを目の当たりにした。

・・・ミシェルはシャルルのことで知らないことがある。
シャルルでも知らないことがあるよ、と彼が言ったと同じように。

兄としての祝福のキスを、シャルルがマリウスに授けたことを知らなかったようだった。
その情報は彼には有益だったようだ。
何か・・・欠けていたパズルのピースが埋まったときのような充足感を感じたようだった。

「マリウスは、2回、シャルルに接触している。感染直後の彼と・・・そして輸血によって。
しかし・・・今回の事故で昏倒した原因が、その病によるものだったら。すでに発症していて・・・症状を加速させたのが輸血であったとしたら。
すでに、マリウスは感染していたということか・・・」

マリウスがすでに病に冒されていることには代わりがなかった。
それなのに、ミシェルはその順番に酷く拘っていた。

彼は少し微笑んでいた。
「これで彼女は少し・・・安堵するのだろう」
彼がその時だけ、少しばかり優しい顔になった。
誰のことを言っているのは察しがついた。
あの人だ。私に、黙って協力してくれた、見事な金の髪の・・・ミシェルにも良く似た女性のことを想っているのだとわかった。
その微笑みは・・・逝ってしまったあの人と少し、似ていた。
亡くなった妻を偲ぶ時には、いつも遠くを見つめて、そして僅かに微笑んだ。
そんな笑みを見せる時は・・・自らの胸に鎮めた秘めたる想いの相手について考えている時だった。

シャルルが自分の病のことを知らないで・・・キスをしたから発症したのだとは思わなかった。故意にということはあり得なかった。彼はいつも誰かのために自分を犠牲にする。

それに、あの時のキスがあるから、シャルルも私も・・・マリウスも幸せな家族の絆を感じられたから。だから、あれは必要だったのだ。

私はしばらく・・目の前の、愛した男の息子を見つめた。
高い知能指数を持ち、素晴らしい美貌を持ち・・そして何もかもを失った青年は・・・これから何を得ようとしているのだろうか。
取り返せないほど遠く離れた兄の心を知りながら、彼は実兄の治療方法を捜している。
必要とされていないのではなく、ミシェル・ドゥ・アルディが・・・誰かを。家族を必要としているのだと思った。切実に。強烈に。彼は渇望しているのだと思った。

「もうひとつ、質問よ」
私は彼に最後の質問をすることにした。
「その子は・・・生まれたら、どうなるの？」
「それは貴女が知るに及ぶところのものではない」
彼は素っ気なく言った。
「それなら質問を変えます。・・・その子は、生まれたらミシェル・ドゥ・アルディが育てるの？」
「そうなるだろうね」
「それなら良い」
私の返答に・・・ミシェルはおや、と眉を上げた。薄い唇から言葉が漏れる。
「良いと思う理由を。・・・オレは目的遂行のためなら、貴女の息子を拉致することくらい平気な男だよ」
「そうね」
私は微笑んだ。
「ミシェルはシャルルに必要なものを創る、と言ったけれど。
・・・私には、ミシェルにも必要なのだと思った。
あの人から素敵な贈り物をもらった。
シャルルが祝福のキスをマリウスに与えた。
マリウスの命を救ってくれた。
マリウスの治療をしてくれると言った。
・・・だから、私はあの人の息子達に何かを贈ろうと思う」
■08

そして、私は万感の思いを込めて・・・目の前の冷たい仮面を被ったままの青年に声をかけた。

母として。あの人を父に持つ人を目の前に、あの人を父に持つ息子を持つ者として。
そして・・・彼の秘めたる想いに少しだけ触れた者として。

「生きて・・・生き抜くの。ミシェル」
彼が息を呑んだ。身を起こし、背凭れに勢いよくもたれ掛かった。
顔を大きな手の平で覆い、彼は明らかに動揺していた。
「やめてくれ。・・・誰かを彷彿とさせる」
「誰か」とはきっと彼の生母なのだろうと思った。

彼がその時だけ、顔を歪めて横を向いたからだ。

命を産み落とした者が願うのは、ただひとつだ。
生きて欲しい。
生き抜いたその先にこそ倖せがあるのだから。

「これからオレがすることは、神への挑戦だよ。信仰なんてとうに捨てたけれども。
・・・貴女はそれを補助する」

「答えはウイ、よ。ミシェル・ドゥ・アルディ」
私は返答した。
これが・・・大それたことなのだと理解していた。しかし、こうするしかなかった。
ミシェルが最初に「契約だ」と言った本心が、少しわかったような気がした。
私しかこの任を受けることが出来ない。
それはわかった。
しかし、情に訴えれば私やマリウスが・・・今後もアルディ家に関わり合いができてしまうから。
だから冷たい物言いで・・・契約だから感情をさざめかせることはしないように、と釘を刺したのだ。
それほどまでに必要とされている眠る種を、私に託そうとする彼の真意は結局わからないだろう。
しかし、罪悪感をまったく感じていないわけではない様子を見て・・・私は心を決めた。
親の居ない子にはしない、とミシェルは言った。

・・・これまでの彼の言葉から・・・遺伝学上の父母の推測がついた。

彼なら、これから生まれてくる命に・・愛を注ぐことが出来るかもしれない。
シャルルの半身なのだから。
誰よりも愛を渇望しているとわかったから。
それは危険な賭なのかもしれないけれど・・・せめてそう思いたかった。

皆の思惑によって生まれてくる命を・・・生まれる瞬間まで慈しんでやろうと思った。
その他の者には任せられない。
生命の理を無視して・・私は息子を助けるために、生命の理に挑戦することになる。
でも。どんな過程で誕生したとしても。
日々膨らむ腹に生き抜く喜びを囁いてやりたかった。

彼はまた煙草を吸うために手を伸ばしたので私は言った。
「私にも1本ちょうだい」
「禁煙だよ」
「これが最後で・・・当分吸いたくても吸えないでしょう」
私がそう言うと・・彼は黙ってシガレットケースをこちらに向けたので、私は腕を伸ばして煙草を口に運んだ。久しぶりの感触と香りが口に広がる。
・・・そしてライターで灯りを灯すと、その後にミシェルに引き継いだ。
かつて、威喝された相手であるのに・・・今はふたりで同じ煙草を吸って居る。
何とも奇妙な場面が訪れようとは、あの時まったく考えていないことだった。
大きく息を吸って、煙草の煙を肺に入れた。
久々の喫煙だったので、軽い目眩がする。それが心地好かった。
緊張して伸ばしていた背筋の筋肉を解放し、私も背もたれに寄りかかった。
そして上を見て・・・
煙を吐き出し、その紫煙がゆっくりと昇っていく様を見つめていた。

マリウスの容態は思わしくない。
できることならなんでもしてやりたい。

馨香及ぶように・・・

私は紫煙を霖ながら、思わず口に出していた。

「これは徳の高いことでも何でもない」
ミシェルは煙草を咥えながらそう言ったので、私は嗤った。
「馨香は、遠くまで及ぶ高い徳のことを指すけれど・・・遠くまで及ぶほどに幸せにしてあげてちょうだい。私が・・・どこに居ても、その子が倖せなのだと知ることができるほどに」
「その子はおそらく・・・フランスの華と呼ばれる当主以上の美称を授かることになるだろう。
その者が、その称を使うことが出来るようになればきっと・・・馨香のごとく輝くのだろうね」
「そう。それなら・・・その子には、最高の美辞美称を与えてあげて」
「貴女が望むのなら」
「人の親になるとね。・・・健康で倖せであれば、そんな冠称はいらないのだけれど・・その名が永に渡って遠くまで及ぶ・・・馨しい香りのように、いつまでも薔薇の一族の薔薇でありますように、と願ってやまないわ」
「そしてその子は・・生き抜くだろう。この世のすべての澱を知っても生きるはずだ」
「ミシェルがそのように教育するのであればね」
私はまたそこで嗤った。・・・久方ぶりの喫煙だったので、少し咽せた。

彼に家族を与えてやる。
シャルルに家族を与えてやる。

・・・そして私は私の家族を救う。

そのためにこれから恐ろしいほどに静かで冷たい海の中に入っていくことを決めた後は・・・なんだか少し、軽くなったような気

がした。
本当は軽くなどなりはしないこともわかっていた。
・・・重い罪を背負っていくことを決めたというのに。
一生・・私はこのことで私は贖罪について考えるのだろう。
秘めたる想いを抱えながら。
私は私の罪について考え続ける。私の息子を救うために行ったことではあるけれども。
せめて・・それが間違っていないのだと思いたかった。
皆を助けるために。愛する子を助けるために。
・・・彼らが家族を創るために。
私が必要だと言われた。
自分の存在は必要でないと信じ込んでいる青年が私を必要だと言った。

・・・愛はね、ミシェル。愛は、要不要ではない。生きていてくれるだけで良い。
在るだけで良い。そんな愛もある。あのフランスの華がそう感じているように。

「生まれたら・・・ミシェルが祝福のキスをしてやるのよ」
随分と注文が多いね、と彼は言った。
「あら、これは契約でしょ。一方的な要望はフェアではない」
ミシェルは私の変貌ぶりに、少し呆れているようだったが、やがて、不敵に笑った。
「良いだろう。アデリーヌ。これは契約だ」

（FIN）

緋虹

■緋虹01

ミシェル・ドゥ・アルディは、酷薄そうな薄い唇に煙草を咥えながら歩き、そして唇の端に乗ったそこに真緋の焔を点そうとしていたところだった。

青灰色の視線を下に向けていたので、その場所に誰かがいるかどうかを確認することもないまま、角を曲がり・・・そしてそこで足を止める。

人の気配を感じたら、まずは察知したことを相手に気取られるなと教えられて育った。
キューバという遠い国で育ち、彼は彼の存在を消して生きろと言われた。
それ故の長い間の習慣は・・・今でも消し去ることが出来ない。

そこはミシェルの独擅場でもあったのに。
そこに、先に来ていた者の気配を感じて・・・彼は唇をぎゅっと引き締めた。
紫煙が立ち上り、僅かではあったが、彼の慣れ親しんだ香りが漂った。

青灰色の双眸が、物憂げで無機質な空気から、冷厳で凍て付くような視線に変化する。
喫煙については是非が問われており、この研究所では趣味嗜好として認識することのない朴念仁達が多くひしめき合っていた。

ミシェルには喫煙の習慣があった。
そして彼はこれを容認しなければ研究チームには加わらない、と暴慢に宣言した。
しかし、それはあっさりと承認されたので、ミシェルはその程度の規定であれば廃止しろ、と冷笑した。
誰の差し金かは想像がついた。

棟内では警報機が作動するので、調整が終わるまでのしばらくの間は研究所の外に設置された喫煙スペースで我慢して欲しいと言われて、彼は不承不承その申し出に従うことにした。
ここの感知器は繊細にできている。
他の建物やオフィスビルなどとは比べものにならないくらい僅かな噴煙で警報機が作動した。
それらを停止させるのはミシェルの役割ではなかったが、彼が唇に煙草を加える度に、周囲のスタッフが顔色を変えて、室内の扉を一斉に開け放ち、警報装置のスイッチを切るように支持する様に辟易していたミシェルは、しばらくの間ということを念押しして、研究所の非常階段の踊り場で煙草を吸うことにした。

緊急措置とされたその状況が、かなり快適であったので、彼はそれ以来、そこに入り浸ることにしていた。
セキュリティのためのIDシールの認識作業を経ないで、非常階段に続く螺旋階段の手前の踊り場に出ることが出来る。
息が詰まりそうな研究所の空気に、誰よりも短い時間で結論を出す仮説を立証することのできる彼と肩を並べて同じ速度でものを考えることのできない者たちとの能力の格差に苛立っていた。
しかし彼はここで成果を出さなければ・・・彼の存在を否定される。

生き抜け、と言われたから生きている。
それは彼の中で綻ばすことのできない約定だった。
でも、それが・・・シャルル・ドゥ・アルディという、もうひとりの自分と違う点だということについて、知った。
シャルルとの確執を滅消するために、彼はこの依頼を引き受けざるを得なかった。
彼と和解したかったわけではない。
あの闘いについて、今は問いただすつもりもない。
ただ・・・彼は敗北し、そしてシャルルは当主の座に再び昇った。

・・・それだけだ。

今後のことについて。
ノンと言えば、彼の命はただちに滅される予定だった。
ミシェルの知能指数や、システム構成に関する実績について惜しいと思わない一族の判断はいたって簡素だった。

シャルルより優れていない者の存在は必要としない。
当主に足りる人物はひとりで良い。

彼はその波に乗った。
自分の都合と彼らの都合が合致したから。

ミシェルはその決まりに逆らって生きている。
たった・・・ほんの少しばかり、シャルルより遅く呼気をしただけだという理由で。
ミシェルはシャルルより劣っていると定められた。
彼が秘匿された存在であったから。
フランスのパリで生きて・・そのまま成長していたのであれば、ミシェルはシャルルを越える軌跡を残し続けただろう。
けれども、彼は・・・いつも生きる場所を誰かに定めされるという人生だった。
アルディの家の籍とは少し違う場所を用意された。彼はそこでミシェル・ドゥ・アルディという名前ではない名を名乗れと言われて育った。それを知ったのは・・・シャルルが幸せの絶頂を味わっていたときだった。

彼は誇りを持っていた。
彼だけしか持ち得ない誇りであった。
存在を隠されていたのに、それでも彼はミシェル・ドゥ・アルディであろうとした。

シャルルと同じように。

彼の魂にも、誰にも傷つけることができない誇りが存在する。

それが・・・目の前に現れた人物が少しばかり意外だったので、ミシェル・ドゥ・アルディは唇の煙草を離脱させて会話を優先させることにした。

茜色の空に染まった小さな空間に居たのは、ジル・ド・ラ・ロシェルだった。
彼の従妹であり・・シャルルの腹心の部下である彼女が、そこに居た。

はるか下の芝生は手入れが行き届き、この研究棟は衛星視察を避けるために、低層を義務化しており、重要な内容について研究する部分はすべて地下に空間を設置している。
■緋虹02

・・・雨上がりの夕暮れ時のことだった。

象牙色の建物の壁までが真緋に染まり、そしてミシェルの白金の髪を金の髪のように染めた。彼の来ている白衣も茜色に染まっていた。IDカードに白衣の着用。彼が行っている実験では、完全に滅菌された低温の室内で何時間も作業が行われる。
ミシェルがその作業に最初から携わることもなかったが、検体が少ないということもあり、失敗することは赦されていない実験を繰り返していたので、肝心の判断をする瞬間だけは、彼はその室で立ち会って調査することになっていた。
何時間も室内の遮光された空間に居たので、雨が降っていたことすらわからなかった。
身体も冷え切っていた。
だから息抜きのために外に出た。
理由はそれだけだったが、煙草が吸いたかった。

知能指数が高いミシェルは、同じように優秀なスタッフに囲まれて、大変に水準の高い会話を繰り返していたが、それでも物足りなかった。
会話が継続しないのだ。だからミシェルは極力誰とも会話をしない。必要最小限だけに留めている。
ミシェルにはコミュニケーションは必要ではなかったし、与えられた、非常に興味深い症例について原因を究明するという目下の研究課題だけのために出勤しているようなものだった。
美しい彼の容姿に惹かれたり、その若さで大変に優れた結論を理路整然と述べる様に心酔したりする者は多く居た。けれども、彼はそう言った者を近寄らせなかった。

それは通り雨で、あっという間に降り、そしてあっという間に止んでしまったらしい。
踊り場から見える､研究所の敷地内の芝生を潤すスプリンクラーが時間通りに動き始めているから、予想していない降雨であったようだ。
乾水タイルが敷き詰められた足元の床はすでに乾いてしまっていたが、手摺りにはまだ湿り気が残り、僅かな水滴だけが、手摺りから落下しないようにと重力に逆らって今にも墜ちそうな状態を保っていた。
水の香りと、地面から立ち上る草の匂いが彼の美しい眉を曇らせた。

雨は嫌いだった。
そして、こんな赤い夕暮れも。
彼が育ったキューバの気候を思い出すからだ。
ここより気温も気候も違っていたが、雨上がりの時だけは・・・・とても良く似ていると思った。あの時代に戻りたいとか還りたいと願っているわけではないが。
それでも。・・・それでも、彼は時折追憶することによって現在の自分を確認している。

退屈な毎日。無機質な日々。
パリでの暮らしはまったくと言って良いほど、彼を満足させなかった。
あれほどの熱情で・・・彼は実兄を追い落として座ろうとした場所について、今はまったく違った見解を持っていた。

「ジル・ド・ラ・ロシェル」
ミシェルは深いバリトンで、先客の名前を呟いた。
赤い日差しに照らされて・・・・金の長い髪が、ミシェルの白金の髪より、鮮やかに燃えるような色で輝いている。
彼女の横顔が見えた。
白い頬、整った唇に、知性をたたえた秀でた額、まったく歪みのない耳から顎にかけての曲線。
同じように白衣を着た、彼と良く似た風貌の持ち主は、すぐに血縁関係にある者同士であるということがわかるほど、似ていた。
特に、彼の若い頃は、彼の実兄は彼女に代役を務めさせていたこともあるくらいだった。・・・・実兄とミシェルは一卵性双生児だ。

彼女は酷く驚いていたようだった。
非常の出入り口からこの空間には、ジルの立っている場所からは出入りを確認することができない。
しかし、ミシェルの沓音が聞こえるはずであったのに・・・彼女は考え事でもしていたのであろうか。
自分の名前を呼ばれて、一瞬、彼女は青灰色の瞳を見開き、そして、ミシェルの方に振り向いた。
ぱっと金の髪が散ったので、それが乱反射し、ジルの背中に見える赤い夕陽が・・・彼女自身から発せられたかのような光でミシェルの薄い蒼に近い灰色の瞳を焼きつけようとしたので、彼は少し目を細めた。

「ああ・・・ミシェル」

彼と彼女はいとこ同士である。
けれども。
まったくの他人であるかのように、彼らは会話をしなかった。
加わっている研究チームにジルの名前はあったが、まったくと言って良いほど、ミシェルが出席する場には姿を現さなかった。

彼女は。
ミシェルと死闘を繰り広げた実兄の腹心の部下であり、今は、実兄がしばらくの間滞在したあの国から持ち帰った様々な課題を解決するために、この研究所に居る。
時々・・・調査のために、出国もしているようだった。

だから彼女は不定期の出勤しかしない。

ミシェルが眉を顰めたのは、彼女の姿を見たからではない。
・・・彼女がその細い指先に、煙草を持っており、それは白い煙が揺曳して彼女の躯に纏わり付いていたからだった。その白煙でさえ、今は・・緋に染まっていた。

ジル・ド・ラ・ロシェルが喫煙するとは。
新たな情報だった。しかし、ミシェルはジルに関してはあまり多くを知らなかった。
興味がなかったから。

アルディ家の者に研究者が多く輩出されるのは、珍しいことではない。
大抵が、軍人か聖職者に就任するが、各方面に一族は散らばっていた。最近ではこの・・研究所での取り扱い分野が注目されはじめていたので、親族達はここに・・ミシェルとジルを在籍させることを決めた。
アルディ家では、何もかもが親族会の議決を経て決められてしまう。
自分の一生も。何もかも。
自分がアルディ姓を名乗るということを決めた時。そしてそれが認められた時。
彼は、この状況を受け入れることを承諾した。
実兄でもあるシャルル・ドゥ・アルディを補佐すること。
そして、彼の直系子孫が後継者として就任するまでは、決して婚姻したり子を作ったりしてはいけないこと。彼の議決権は剥奪されること。

生き抜け、と言われた。

だからそれを守って生きている。しかし、彼は・・・呼吸するだけの無駄な時間を過ごすことが生き抜くことなのだろうかとも思っていた。
信仰について、アルディ家のように生まれた時からひとつの唯一絶対が素晴らしいと教えられてはいなかった。
たとえそうだったとしても、これまでの人生の過程で、彼の価値観は大きく変更せざるを得なかっただろう。

ミシェルに用意されていたのは、残酷な現実だった。
住居も戸籍も十分な報酬も与えられた。
彼に相応しい資格も相当学歴も、虚偽の経歴も。
しかし・・・それでもなお乾いた空気が厭わしかった。
自分はなぜ、生きているのだろう。
あの孤島で一生幽閉されていた方が、まだ・・・まだ生きている実感が湧いたのかもしれない。
そんな妄想に取り憑かれる。

毎日が退屈だ、と思っていた矢先に。
ジルが目の前に現れた。
彼女は・・・とても気まずそうな顔をしている。そして、絡めていた煙草の火を持っていたシガレットケースの底にあった消火石で擦り、揉み消してしまった。
ケースを持っているということは、彼女は常喫者なのだ。
■緋虹03

「余りも赤い夕暮れだったので・・・」
ジルがそう言葉を発した。
彼女は誰かに喫煙風景を見られるのは滅多にないことだったらしい。
酷く狼狽していた。

柔らかな、たおやかな女性らしい声に彼は苦笑した。
なぜ、ジルが扮したシャルル・ドゥ・アルディに・・・誰も区別が付かなかったのだろうか。
彼の変声期が遅かったこともあったが、それでも・・・彼女はこれほどまでに大変に女性特有の条件を備えているというのに。
シャルルであることを求められて、彼女が配慮した様々な事について彼女は何も語らない。
丸みを帯びた身体を隠すために、胸にコルセットを巻き、服装に注意した。
立ち上がれば身長差がわかるので、高慢を装って、座ったままでいることにした。
それほどまでになぜ彼に心を配るのかが理解できない。
それこそ、彼らの年下の叔父にでも、当主の執務室に座らせておけば良かったのに。

ミシェル・ドゥ・アルディはジルの言葉を無視した。
白衣のポケットに放り込んであったライターを取り出して、彼は無造作に火を灯す。
「ここはオレの私有地ではない」
深いバリトンで・・・彼はそう言った。
慣れた手つきだった。
じゅっと煙草の先端が焦げる音がして、彼の手の中で煙草が夕焼けの真朱より強い晄を放った。

「喫煙の自由はあると思うが。副流煙の懸念を払拭できないのであれば誰も来ないところに行け」
彼がそう言ったので、ジルは彼と良く似た青灰色の瞳でミシェルを静かに見つめた。
喫煙を咎められるのかと思ったのだろうか。しかしここには喫煙を愉しむためにやって来るしか目的がないから、それを期待しているのであれば、大変に彼女は自虐的性格と言える。
ミシェル・ドゥ・アルディはジル・ド・ラ・ロシェルを黙って観察した。
最初の一息は勢いよく吸うことに決めていたが、彼はゆっくりと・・・唇の先に軽く乗せたまま、神経はジルの表情に傾けていた。
緋に染まった夕暮れの中で・・・ジルは他の者が見たら溜息しか出ないほどに清麗であった。華奢な細い首になだらかな曲線を描いた肩、薄皮で覆われたような薄い白い皮膚。
通った鼻梁は高く、睫は長く憂いの影を帯びており、唇は濡れて瑞々しかった。
彼と彼女は血縁関係にあり、そして彼女はシャルルの全幅の信頼を得ている唯一の彼の「鏡」だ。
鏡に映したようによく似ているミシェルがいるのに。
・・・・彼女は自分の事をシャルルの鏡だと言う。
「ここにいる理由が曖昧だな」
彼は冷笑する。

喫煙したくてこの場所にいるのか、夕焼けをひとり眺めたくて規定違反を承知の上でいるのか・・・ジルの言葉は不明瞭であった。
アルディ家の者には相応しくない物言いだった。
彼は単に、自分の静寂を守りたかっただけだった。
鬱陶しい干渉を避けて、彼が唯一自分の思い通りになるのはこの瞬間だけだった。
狭い空間だけしか自由にならない。自由とは一体、何なのだろう。
知能指数が高いから何でも知っているというわけではなかった。
興味の対象が幅広く、記憶容量が大きく、単に・・・何にでも好奇心を持つだけである。ただし、それらはすべて廃棄されることのない膨大な情報の海として、彼の脳内に蓄積されるという点で言えば、彼は誰とも違っていた。
なぜ・・・同じ時代に、シャルルとミシェルを誕生させたのだろうか。最も優れた当主を親族会が選ぶために・・・彼は競うために誕生したのだろうか。

自らの生命の意味を、自分で定める時が来るまでは。
決して、死なないと誓った。
自分の生きている意味。誕生した意味。
それらに意味を持たせるには自分の都合は大きく左右した。
アルディ家の当主となる、という都合を生きる意味として言い切った時代もあった。

・・・この虚脱感はいったいどういうことなのだろう。
しかしそれらを歎いて自分を憐れんで生きて行くには、彼は誇り高すぎた。誰に教えられたものでもなかった。

ジルは少しミシェルを見つめていた。
夕陽の逆光で彼女の姿は赤く燃え上がっているようであった。
やがて、彼女は華奢な首を少し傾けて、声を漏らして笑った。
「誰も来ない場所だと思っていたので・・・ミシェルは処理室に居ましたし」
それが本当の理由でないことは明らかであったが、彼はそれ以上問いただすことはしなかった。彼女にそれほどの興味は沸かなかったからだ。
「用事が済んだのなら､行け。オレはここを世間話をする社交場にするつもりはない」
「もうひとつ理由があります。・・・・夕焼けの後に虹が見えないかと思って」
ジルがそう言ったので、彼は空を見上げた。赤い残映が彼らを照らす。
誰かがそれを見ていたのなら、その姿に言葉を失っただろう。
死んだら薔薇に還ると言われているが、今まさにこの瞬間に夕さり（=夕暮れのこと）に立つ彼らは、太陽光を受けて輝く薔薇のようであった。
ほんの僅かな・・・・瞬間と言って良いほどの時間しか見られない夕日隠れの刻だった。
■緋虹04

「貴女が喫煙するとはね」
ミシェルから話を切り出すのは大変に珍しいことだった。
また、最初にこの研究所の前で話をした時以来、こうして二人きりで話をしたことはなかった。
ミシェルはアルディ家の動きについて一切の権利停止を余儀なくされている。
だから彼はジルと極力話をしないようにしていた。彼女から情報を引き出すことはまず無理だろうし、ジルもミシェルの動向について気を配っているようではあったが、ミシェルに接触する気配はまったくなかった。

研究所の前には杜が広がり、その奥に夕陽が今にも墜ちそうだった。
研究所に入ってしまえば、完全に遮光された空間がほとんどであったので、この外の景色を見るために外に出る者はまず居なかった。これほど赤い夕焼けなのに。
彼はジルを越えて見える空に目を遣った。

ミシェルの言葉に、ジルは唇を歪めて少し笑っただけだった。
薄いシガレットケースを白衣のポケットにしまい込んでしまい、それっきり彼女は2本目を吸おうとはしなかった。
「・・・あの国を思い出します」
彼女は手摺りに身体を向けると、ミシェルに背中を見せて、ぽつりと言った。
彼女は誰かの表情を見つめながら本当の自分の心の内はさらけ出さない人物らしい。
ジルの言うところの「あの国」と、ミシェルが記憶している「あの国」は違っていた。シャルル・ドゥ・アルディの命によって彼女が行ったモザンビークと、ミシェルの育ったキューバでは何もかもが違っていた。いや、パリと「あの国」とを比較するのであれば、それほど大きな違いはないのかもしれない。
しかし、開けた場所で、このような赤い空を眺めることがあった、というのは、両者に共通した記憶と経験のようだった。

「ミシェル。こちらで一緒に・・・緋虹を見ませんか」
ジルが振り返って言ったので、彼は煙草から唇を離して、灰を落とそうとした仕草を止めた。
振り返った彼女の顔があまりにも・・・あの時のシャルル・ドゥ・アルディと自分の姿に似ていたので、彼は一瞬、目の間にあの頃の自分が立っているのかもしれないと思った。
彼が惑うことはしない。
けれども、惑っていることを知らないまま惑っていることがあるのかもしれないという可能性を捨てられなかった。
彼の母のように。
・・・戻って来られなくなり、そしてそのままになれば、どれほど楽なのだろうか。
血のような赤い昊を見上げて、ジルは静かに言った。
「非の打ち所のない完璧な助手も、たまには息抜きが必要らしい」
彼はそう言って、ふらりと身体を動かした。ジルの隣の空いた手摺りに身体を預けて・・そしてまた持っていた煙草を一気に吸った。
その言葉に、ジルが微笑んだ。
「完璧でないからこそ完璧だと言ったことがあったと思いましたが」
「それなら、貴女は完全になりたいのかな」
彼は嘲笑した。完璧であると言われているジル・ド・ラ・ロシェルは、唯一、シャルル・ドゥ・アルディに逆らえないという弱点を除けば、アルディ家にすべてを捧げている者のひとりであると言えた。
アルディ姓を名乗っていないのに。
そして、アルディ姓を持つ正当な資格を持つ者たちは、皆、一族から離れて行くというのに。アンドリューが良い例だった。
滅ぶのなら、滅んでしまえば良いのにとさえ思う。

「・・・どうでしょうか」
彼女はまた、曖昧な表現をした。
ミシェルが彼女の隣に並んだのは気まぐれからだった。

誰もが眉を顰める喫煙について、ジルがこっそり許容していたことについて少しばかり興味が沸いた。というよりもむしろ、退屈だったから、と言う理由が勝っていた。
倦怠と空虚の日々の中で、彼の育った国を思い出すことはもうほとんどなかった。
それが、今はこうして・・・あの国を思い出す。
その一方で、隣に並ぶ、彼と良く似た風貌の女性は、自分と違う国を思い出しながら、同じ緋虹を見ようとしていた。

この大気の状態からすれば、間違いなく緋虹を観ることが出来る。
蒼の要素が抜けた赤い虹が、ごく希に見られることがあった。この地域では大変に珍しい現象であると言えよう。

空天色が薄くなり、雲さえ緋に染まっていく。
狭隘な雲の隙間から、漏れる光の帯が、夕刻の昊に舞っていた。
そして徐々に、雲に隠れていた夕陽が地平線に沈むにつれて、隠れていた仄日が、鮮紅の晄となって彼らを照らし出す。
まるで返り血を浴びているかのように。
・・誰かを傷つけたことがあるからこそ感じる感覚だった。
彼らはその若さで、生死とはどんなものであるのかを知っていた。

「・・・夕焼けを見ると、助けられなかった命たちを思い出します」
彼女がシャルル・ドゥ・アルディの代理として医療行為を行っていた時のことを指し示しているらしい。落日に思いを馳せるとは、アルディ家の者にしてみれば非常に感傷的であるとしか言いようがなかった。
「すべてを網羅することができるという確信があるなら、思い上がりだと認めろ。
すべてを網羅できないという諦観があるなら、嘆きを溢すのは無駄だと黙過しろ」
彼はそれだけ言うと、また2本目の煙草を口に銜える。
■緋虹05

「自分が神になりたいのであれば、もっと違う方法がある」
ミシェルはそう言って苦笑した。ジルという人物は相当に・・・彼と相性が合わないらしい。それにシャルルの側近中の側近でもある彼女が、こうして研究所に顔を出していることにすら疑問を感じるが、ミシェルを監視し、ある目的を果たそうとしているのだと思うと、彼女の自我はとうに喪失してしまっているのだと判断した。
それなのに、彼女は赤い空を見て、思いを巡らせている。
当主であるミシェルの実兄のためなら､何でもするだろうと思われる危険思想のリストの筆頭に彼女の名前はある。
傾倒しているうちは良い。けれども、当主とジルは同一人ではないので・・・どんなに彼の思考をトレースできたとしても、彼にはなれない。
アルディ家当主の希望することと、アルディ家が希望することは違うのだ。
その差異について、ジルは混同しがちであるというレポートを見た記憶を呼び起こしていた。
それは、彼がほんの一瞬だけ、アルディ家の当主の椅子に座った瞬間に、目にした書類のうちのひとつにあった。

ジル・ド・ラ・ロシェルは・・・判断を仰がずに行動することを許可された、シャルルの数少ない部下だった。
ジルがシャルルの従妹であることも理由にあったが、それ以上の重要な理由が・・・彼女にはあったようだ。

ジルは、すべてシャルルのために、彼女は思考し、行動する。
判断を仰ぐことをせずに行動する危うい側近を持ちながら、なお、アルディ家の当主は心許せる近しい者を増やすことが出来ないでいた。

「・・・私の神は唯一です」
「絶対ではないのだね」

彼は嗤った。
煙草を咥えながらゆっくりと煙を吸い込む。
唯一ではあるが、それは絶対ではない。
つまり、対象が変わることもあるのだ。

・・・誰にだろうか。

彼の関心が少し彼女に傾いた。
シャルルが唯一と言い、彼女は絶対と言わなかった。
他に対立するものがないという意味の絶対ではなく、ひとつしかない、と言った。
それなら、その「ひとつ」が違うものになる可能性があることを知らない彼女ではなかった。
「今のところ、私の唯一と絶対は同じですよ、ミシェル」

ジルがそう言って含み笑いをした。
湿った風に、ふわりと金の髪が凪がれて揺れる。彼女の金の髪は見事であった。
シャルルと酷似した容姿を持ちながら、彼女がシャルルとほんの少し違うのは、その黄金の髪と、青灰色の瞳が少しだけ青みが濃いことだけであった。
その他の点については、若い頃のミシェルと良く似ていた。
しかし並んで見たらきっとその違いに気がつくだろう。
シャルルはひとりしかいないと思うから・・・その違いに誰もが気がつかないのだ。

ミシェルの中で、仮説がいくつか浮かび上がった。

今、自分が着手しているものについて。
それから・・・その先に行うべき実験なのか作業なのかわからない、この世の聖職者たちからすべて批判されそうな所業を予定しなければならないのだろうという予想について。
それらに、ジルが深く関わりを持っていることは明白であった。
だから、彼の研究結果を確認するために、彼女は頻繁に研究所を訪れるのだ。

「・・・出ましたね」
今度は彼女から話しかけてきた。

・・・緋い虹だった。

それは七色と言われている虹の色から逸脱した、真緋の虹だった。
空に浮かび上がるそれは・・・・いつか彼女と見た虹とは違っていた。
両の端は研究所の周りに広がる杜の中に消えて朧であったが完璧な孤を描いて空に浮かぶ虹は、火色も深緋も茜も銀朱も混じった変移を見せている。

・・・・これにはミシェルも目を見張って無言のまま、空を見上げていた。

薄い唇を閉じて、唇から煙草を離した。指先で灰になっていくそれをそのままにして、彼は・・・手元で棚引く紫煙を見に纏わり付かせながら、白金の髪の下の青灰色の瞳で・・・その瞬間の美について記録を開始していた。
真っ赤な夕陽と虹が相まって、幻想的な空間が空に浮かんでいた。
仄日が沈んでいくにつれて、虹の色味が変化していく。
それらは全体が時間の経過と共に、徐々に薄くなり、それでいて夕陽の乱反射を受け止めているかのように煌めいている。
通常の虹の赤より暗紅が強かった。

非常に珍しい現象ではあるが、条件が整えばそれは発生する。

そう。条件が整えば・・・・
■緋虹06

「・・・滅多に見られない景色を誰かと見るのは良いものですね」
ジル・ド・ラ・ロシェルがそう言ったので、ミシェル・ドゥ・アルディは薄く嗤った。
彼はこれまでに、偶然を運命や必然にしたがる者を見てきた。
見てきた、というよりかはむしろ、ミシェルの周りにいる人物は大抵がそうであった。
彼との出会いや繋がりに縋り、誰もが・・・誰もが彼を通り越して違う人物を見ていた。
近付きがたく、そして滅多に人前に出てこないとされているアルディ家当主のことを見ているに過ぎない。
そしていつも彼の実兄を尺度にして、ミシェルは優劣を他者により定められる。
劣っていると決めるのは、己ではない。それが彼の誇りを激しく傷つけ、苛立たせた。
彼の実兄の人気は絶大だった。
生き別れになっていた弟との死闘を繰り広げて、最終的には今一度当主の座に登りつめた彼の軌跡は、この国を大いに騒がせた。
そして彼はフランスの華という称号を今でも保有し続けている。

そんなシャルル・ドゥ・アルディに影のように寄り添い、それでいて決して自分は公に出てこようとしないロシェル家の美姫は、ここでこうして紅い夕焼けと虹を眺めながら、ひとり煙草を燻らせていたところに彼が出くわしただけだ。

シャルルの影であることを望んだ者と、望まなかった者が、同じ虹を見て・・各々違う国の昊を思い出している。
良く似た面立ちなのに、蘇る記憶は違うのだ。

「二度も虹を見ましたね」
ジルが思い出したように、ふと、そう漏らしたので、彼は煙草の火を点す手を止めた。
かつて、彼女と虹を見上げたことがあった。
それほど昔の話ではない。
その時に、彼が何を言ったのかを思い出したが、そのことについてはジルは触れなかった。忘れることができないのは、彼女も同じだろうから、忘却しているということはあり得なかった。
それなのに・・・彼女は虹について述べた。

ミシェルは青灰色の冷たい瞳を斜めに見下ろして、僅かに低い視線の女性に、妖艶に微笑む。彼女は動じなかった。ただ緩やかに沈んでいく夕陽を、目を細めて眺めているだけだった。
・・・湿った風が彼女の金の髪に触れてそよいだ。
朱い晄に照らされて、彼女の髪は燃えるような黄金色に変化していた。
・・・白金の薄い髪色のミシェルでは、そこまで燃えるような髪の色にはならず、赤が強く出るだけだった。

彼は誰もが息を呑んで見惚れるほどに美しい微笑みを浮かべて・・・彼の従妹を見下ろした。
少女と見紛う程に美しかった顔立ちはそのままであるが、彼はそのまま・・・男神に変貌した。
衣を脱ぎ捨てるように。
音もなく。
そしてさらに、蠱惑的になり、さらにとらえどころがなくなった。

緋の虹は、徐々に・・・日が暮れていくにつれて輪郭を淡くしていった。それが日没の瞬間にだけ見せる現象であることもわかっていたが、何より、ミシェルはジルは緋虹のような人物だと感じた。
瞳の色のような蒼を消し、緋の色に見惚れる。
まるで、彼女の中の朱い血に・・・何か物思いを感じているかのように。

金の髪を巻き上げて白金の髪の人物に扮し、そして女という性を消して過ごした日々を、彼女は一体何を思って生きたのだろうか。
満足していたと本人は言うだろう。
それなのに・・・彼女は、こうしてひとり、空を見上げて、異国の地に思いを馳せる。
彼女がこうして物思いを感じていることについて、シャルルは興味がないのだろう。
労って犒って・・・ただそれだけなのだろうな、とミシェルは予想した。
彼女がシャルルに捧げた時間もそれ以上のものも・・・シャルルはどう受け止めているのだろうか。
そこまで考えて、彼は思考を停止した。
彼は・・・他者のことについて利益のない想像をすることはしないことにしていた。

無限に枝分かれする可能性について、場合分けをして考え始めると際限がないからだ。
しかし、彼女のことについては、少しばかり興味があった。

・・・彼の母が、ロシェル家のことを漏らしていたからだった。
シャルルとミシェルが同時に存在するだけでも彼女は惑ったのに・・・さらに加えて、彼らと良く似た娘が居ると知って、母はますます・・・戻れなくなっていった。
この一族は、なぜこうも、似ている者が多く出現するのか。彼らの年下の叔父もシャルルとミシェルによく似ていた。

彼女が気の病に陥ったのも頷ける。
弱い人であった。
けれども、次々と生まれてくるこどもたちは皆、同じ顔立ちをしていることに、何も感じないでいろと言う方が酷な話だった。
彼女が出産した双子のうち、片方はすぐに取り上げられて、良く似た親族達に囲まれれば・・・精神が病んだとしても、それはまったく原因がない、とは言えなかった。

そんな中で・・・晄のような存在のシャルルに追従することで生きていることを感じている人物を隣に置いて・・ミシェルは少しばかり観察してやろうという気になった。
不完全が完全だ、と言い切った彼女を試してやろうと思ったのだ。

「・・・虹を見る男女は契りを交わすという話をしたことを忘れたのか？」

彼はそう囁いた。隣に並ぶ、金の髪の、青灰色の貴人は微笑んでいた唇をきゅっと引き締めた。
■緋虹07

聞こえてなかったわけではなさそうだった。
彼女のその様子を、隣から観察しながら、ミシェル・ドゥ・アルディは興味がなさそうに唇に煙草を咥え直した。

彼の言葉を聞いたのなら、自分に都合の良い曲解によって、誰もが頬を染めたことだろう。しかし、ジルは・・・朱い晄に照らされていたので、紅潮しているかどうかさえ判別できなかった。
それに、そんな必要はない。

彼女はミシェルという存在を忌み嫌う側の人間だ。
彼の存在を快く思わないはずなのに、彼女は・・・ごく普通に話をする。

よくわからない女だな

その程度の感想しか湧かなかった。
彼女は、自分で望んで、シャルルの鏡になったのだろうか。
それとも・・・何か理由があったのだろうか。
もしくは、アルディ姓でもないのに、それほどまでにシャルルに近い存在になり得たのは、影であることをアルディ家に強要されて、そういうものだと信じて育ったからなのか。

・・・シャルルは人間関係などに疲弊したときに、一時期、誰とも会わずに過ごす期間を設ける。
回復期と表する人間もいるが、近辺の者たちはそれを「冬眠」と言っていた。
重大な秘密とされており、シャルルという人間を守り抜くために、彼女は性別も自己も捨てて、彼に成りきることに徹した。
彼女は彼を救いたいと思っていたのに、彼は自分ではない別の者を救えと言って、彼女をあの遠い国に送り出した。
社会通念上一般的とされている「普通」から彼女は逸脱しているように思えた。
もっとも、ミシェルも「普通」というカテゴリに分類されることはないが。

シャルルは今、当主としての業務だけではなく、鑑定医などして、アルディ邸には留まらず、そぞろ歩いている。己を知るためだと言うことらしいが。
・・・・彼女はその後始末をしている日々を過ごしている。
好き勝手に暮らしているあの男のことを、それほど思うのであれば・・・・何か方策を講じるべきであるし、実りのない愛に身を焦がすことがよほど好きな人物なのだろうか、と思った。
アルディ家の者は、究極的実在として、唯一を選ぶ者と、対蹠的実在としてあえて絶対を定めない者に大別される。
前者はシャルルで、後者はシャルルやミシェルの父や祖父であった。
多情で有名であったが、結局は、彼らが遺したものは、当主争いの種だけであった。
対極にいるようで、彼らは良く似ている。
唯一を求めて彷徨い歩くのだ。
愛という、形も定義も定まらないものを定めようとして・・・・迷夢に入り込んでいく。

彼は、そういったことについては、まったく愚かなことであると感じていた。

愛し合って夫婦と定めた父と母は、悲劇しか生まなかった。
その後の父の愛の遍歴は思い出すだけで時間と記憶の無駄であった。
ひょっとしたら、母が壊れてしまったのは、母の生存時から父にはそういった片鱗が見え隠れしていたのかもしれない。
気付いていたのかもしれない。
ひとりに定められないという性質に。
そしてそれは、確実に、彼らのこども達にも受け継がれていた。

ひとりと定めて心を惑わせた母と、ひとりを定めずに彷徨った父と・・・双方の性質を継いでいるとしたら。
シャルルの奇行についても観察するべき
「ミシェル。愛の対義語は何でしょうか」
「孤独。もしくは虚無」
彼が即答したので、朱緋の晄に照らされていたジルの顔がミシェルに向いた。
・・・彼女は彼を見ると、微笑んだ。
憎しみと答えればミシェルも「普通」になるのだろうか。
「よかった」

「何が？」
ジルが微笑んで頷いている様子に、彼は不愉快そうに眉を顰める。
まるで、彼がそう回答することを知っていたかのような彼女の仕草と言葉に、少しばかり億劫になった。
大抵の者は、ミシェルが何かに興味を持ったその次にはその会話が続くことを期待するものだ。
ジルと無駄な話をするつもりはなかった。
この煙草を吸い終わったら、彼は虹の消散を見届けることなく建物の中に戻るつもりだっ
た。
彼にとっては、緋の虹も空もただの自然現象でしかない。
少なくとも今は。

ジルは眺を受けて輝く、澄んだ瞳をミシェルに向けて、淡く綻んだ。
「貴方が愛を知っているから」
「・・・それが貴女の帰結だとしたら、大変な勘違いだね」
ミシェルは辛辣に言った。
彼女は、ミシェルが愛というものについて定義を持ち、だからこそ愛の対義を知っているのだ、と彼女が遠回しに伝えた言葉に、彼は冷笑したのだ。
つまり、彼は愛を知っている、と彼女が言った言葉を蔑んだ。
言語や文化は理解することができる。
しかし、価値観だけは同調するまで理解できないのだということを、彼は良く知っていた。

「シャルルへの憎悪は、愛の裏返しだった、と・・・オレを理解するふりをしないだけ、マシだと思うがね」

ミシェルは彼の実兄と良く似た皮肉のこもった笑みを浮かべながら言った。
持っていた煙草を口に銜えていたが、半分までで吸うのをやめてしまった。そのまま吸い殻を床に落としたので、ジルが目元を少し細めた。
間もなく清掃の人間が入るはずだったので、彼はそれを計算して吸い殻を落とした。
決して褒められた行為ではないが、彼はジルとは決定的に違い、そしてどんなに姿形が似ていても、ミシェルはシャルルと同一でもないし、彼を理解することはできないのだ、という宣言をしたつもりだった。
シャルルを理解し、支えるジルを理解できない、と辛辣に表現したミシェルに、ジルはそれでも怯まなかった。

彼は忘れたり間違えたりすることはない。
ミシェルは高い知能指数を誇り、そして現在は・・・シャルルの模倣を時折務めることを受け入れていた。
彼には彼の理由があったが、それを誰かに明かすつもりはなかった。
必要ないから。

シャルル、と呼ばれて微笑む度に、彼は、なぜあの時にシャルルを殺めておかなかったのだろうかと思ったものだった。
同じパリに居ながら、ほとんど会うことはなかった。
それなのに、彼の代行をしろ、と親族会はシャルルと酷似している器だけをミシェルに要求する。
しかしそれはある意味気楽であった。誰とも接触することもなく、ただ研究所で研究を続け時折「シャルル」になることを受け入れれば、彼は快適な生活を送ることが出来た。
行こうと思えば、どこでも行くことが出来る。
彼にはできないことはなかった。
しかし、できることをしないという究極の解放を手に入れたのだ。
これまで・・・生まれてから、彼の意向は叶ったことがない。
だから、選ばない自由を選んだのだ。
彼女にはそれが理解できないらしい。

「・・・私の見ている虹と、ミシェルの見ている虹は違う、ということですね」
ミシェルにジルはそう言って笑った。嫋やかで、この上なく美しいが儚い微笑みだった。
生命に満ちあふれたあの小さな日本人をシャルルはこよなく愛していた。
ジルを同じ感情で愛することはないだろう。
彼女はそれを知っている。知っているのに、彼女は自分の人生を捧げようとしていた。
彼女が救いたいのはシャルルであったのにシャルルはそれを受け入れず、彼はジルにその才能や能力を他の者に分け与えろと言った。
傲慢なのは、彼が、アルディ家の頂点に立っているからなのか。
それとも・・・

思い通りにならない、目の前の金の髪の女性を、ミシェルは少し苛つきながら見つめていた。
平等な慈愛というものは存在しない。彼の母がそうであったように。
同じだけの愛を皆に注げないのは、ジルも同じだろうと思った。
彼女は捧げたい愛をシャルルに受け取ってもらえないから、彼に成り代わった。彼になった。彼になれば・・・救われると思ったのだろうか。

彼は淡い色に変化していく虹を見つめながら言った。
彼女の顔を見ていると・・・壊れていく直前の母の顔を連想する。
終始哀しそうで、いつも・・いつも遠くを見つめていた。
傍に、彼が居るというのに。

「・・・確かに、貴女とオレの虹は違うだろうね」
彼は低い、艶のある声で言った。
■緋虹08

「どちらもこのパリの空の虹ではないということだ」
彼がそう言うと、彼女はそうですね、と肯定し、次の彼の言葉を補足した。
「でもどちらも本物ですね」
ミシェルは薄く嗤った。
同じ者を見ているのに、愛と憎のどちらが湧くか、それは各々違っていた。
だからこそ。
だからこそ・・・彼はこうして怠惰な日々を送っているというのに。
同じ遺伝子を持って生まれたが、シャルルとミシェルは何もかもが違っていた。共通しているのは容姿と、激しいまでに孤独な誇

りと、高い知能指数程度だった。

身体的特徴を述べてもそれは美点にはならない。
それをどう生かすかが、それからを決定する。
無駄に過ごすも有効活用するのも、自分次第であることを、彼は証明したつもりだった。あの激しい闘いの中で、彼は余裕の表情を終始崩さなかったが、それでも、シャルルに屈した。
その理由について知っている者が、まるで違う人物と接するかのように、自身の主を傷つけた人物と話をする。
これはまったく滑稽な茶番劇のようで、ミシェルを苦笑させた。
それなのに、こうして会話を続けている自分自身にも苦い嘲笑しか浮かばない。

彼女がミシェルの短い会話についてきているからだと知ったのは、それから少ししてからだった。
頭の良い女は嫌いではない。
しかし、良すぎると面倒だ。
傲慢さを含んだミシェルのそんな真意を知ってなお、彼女はミシェルが去っていけば良いのに、とは考えて居ないようだった。
彼女の喫煙を眺めながら、ミシェルが何も感じていないことに安堵しているかのように見える。

優等生であったようだ。
そんな女が箍を外すのは、よくあることだった。
そうでもしなければ心の平穏を保つことが出来ないのであれば、彼女の主のように、さっさと薬物に溺れてしまえば良いのに、とさえ思う。
シャルルと言えば、最近摂取量が増えてきているでしょう、とシャルルの側近がミシェルにそう言ったことがあった。
近しい者でさえ、どちらか区別がつかないほど似ているというわけではなかった。
シャルルはジルの懐かしむあの国に頻繁に行っていたから、日焼けの名残があったし、彼は・・・いくつもの癒しきれない傷が無数に点在していた。
それなのに、周囲の者は、シャルル・ドゥ・アルディはたったひとりだけだと信じて疑わないので、小さな差異にも大きな特徴にも目を瞑ってしまうのだろうと考えると、ある意味、シャルルは満足した状況ではないのかもしれないとミシェルは思った。

そこだけは互いに似ていた。
満足するということを知らないのだ。
極めればその先に行こうとするか、もっと別の路もあるのではないのかと考え始める。
完結してしまったものには興味がなくなる。
それは・・・フランスの華とその実弟は極めて良く似ていた。

医師で、人々を癒す側にいながら、自分自身も・・・自分自身の影さえ救えないのだ。
憐れな男だと思った。
こうして心中で、ミシェルが彼を蔑んでいることすら、シャルルは察知しているというのに。
・・・・この重大な研究を任せるということについて、彼は一体何を考えて居るのだろうか。
読めない男に、読めない女が対になって、一体何を秘匿しようとしているのか。
ミシェルには仮説があったが、それを立証するつもりはなかった。
今はまだ。

「私は彼の鏡になろうと思いました」
ジルはやがてそう言った。
虹の両端は消えて・・・朱い夕焼けの中に、僅かに両端が消えていく虹の上部だけが、朱い色を残して浮かんでいた。
それもやがて消えるだろう。
輪郭が薄くなり、はっきりと視認できるほどに、それらが消えていく様が観測できた。

「影ではなく・・・鏡に。彼を映して彼を模写して、彼そのものになろうと思いました」
「そう」
ミシェルが深いよく響くバリトンで答えた。
彼女は金の髪を靡かせながら、白衣のポケットに両腕を入れた。彼女にしては珍しい行動だった。・・・・両手を隠すというのは、深層心理で、自分の真意を隠したいときに現れるからだ。
そういう教育を受けて、目の前の人物について観察するようにと育てられたはずなのに、金の髪の人は、ミシェルの前でどこか幼い少女のような仕草をした。
「でも彼そのものにはなれない。・・・・所詮は、私は、彼の偽物にさえなれなかった」
シャルルの親友である、強い癖のある黒髪の男が、ジルのことをシャルルではないと見破り、ミシェルのことをシャルルであると信じ込んだことを指しているのだろうと思った。
骨格の差があり、冷徹になりきれない彼女が見破られるのは当然のことだと思わず、彼女は今でも自分自身を責めていた。

ミシェルは溜め息を漏らした。
他者の嘆きほど、まったく関心のない事柄はなかった。それなのに、彼女の言葉に耳を傾けてしまう。これは、近しい血縁だからそうなるのか・・・それとももっと違う理由からなのか、判断する必要があるのだろうか、と考え始めていた時のことだった。

ジルが少し目を細めて、ミシェルを見つめた。
「ミシェル。シャルルを理解できる人は本当に少ない。だから・・・・」
彼は片手を上げて、その言葉を遮った。聞いてしまえばその願いを聞き入れたことになってしまうからだ。そうするつもりはまったくなかった。
親兄弟で憎み合う歴史は何度も繰り返されている。世界各地でどんな時代にでも。
よって、一卵性双生児だから、とか、兄弟だから、とかいう理由は、シャルルとの和解を受け入れなければならない理由としては薄いと考える。

彼は、理解してもらわなくても良いのだ。
彼は、肯定してもらえればそれで良いのだ。

だから・・・当主に就任してもああして世の中をそぞろ歩き、時折消息を絶つ。
それはアルディ家の者として、傲慢や放蕩と言うには限度を超える愚行ではないのだろうか。
しかし、彼らにはもう、興味がなかった。彼は彼の興味のあることを自由にできることと引き替えに、この研究所での実験や研究を続けることを受け入れた。ただそれだけだ。

憐れな女の身の上話や嘆きを聞くつもりはなかった。
ジルは想定していたようだった。
ミシェルが彼女の言葉を聞き入れることは決してないのだろう、と。

ジルは微笑んだ。儚い微笑みであったが、それでよい、と思っている節があった。
ミシェルは夕焼けを背にしたジルを眺めながら・・・逆光で光り輝くジルに目を細めた。

・・・こういう女は厄介だ。
感想はそれだけだった。

「偽物も本物だ」
彼はぽつりと言った。何かを言うつもりはなかったのに。
その時に・・・何かが彼の躰を借りて、そう言わせたといっても過言ではない。
計算された会話を言う以外に・・・彼が先に言葉を発することは大変に希有なことであった。
ミシェルは酷薄そうな唇を歪めた。
思わずして、という言葉は彼の中には存在しない。
それなのに。それなのに・・・・

しかし、驚愕していたのはミシェルよりジルのほうが程度が大きかった。
彼女は切れ長の青灰色の瞳を大きく見開き、逆光を浴びて金の髪のように白金の髪を輝かせる彼を見て・・・そして大きく溜め息を漏らした。
彼の髪はシャルルと同じ白金だ。
それなのに、緋の彩を浴びて・・・・見事な金髪のように見えた。
金の髪の、蒼灰色の男性。
そんな容貌の者が・・・アルディ家の次代に現れるのかもしれない、という神託なのかと思えるほどに、彼の全身は緋虹の色に染まって神々しく輝いていた。

ミシェルは横を向いた。
こちらが消えるか、彼女が消えるか、どちらかを選択しなければ、この場の奇妙な空気は払拭できないだろうと思った。
ここには単に、退屈しのぎで喫煙をする場所という意味しかない。
それなのに、彼女はミシェルに見咎められるという可能性を知りつつも・・虹を眺めに来ていた。
執着するな、というアルディ家の方針でもある言葉に従わず、ジルは複数のものに執着し続ける。

「偽物も本物」
彼女は彼の言葉を復唱した。
・・・そしてその意味を知ると、声を漏らして笑った。
「・・・良い言葉ですね」
片方から見ればそれは偽物であるが、もう片方から・・・特に偽りだと規定された側から見ればそれが真実であることもある。
ミシェルはそう言ったのだ。
それは彼女にだけ言った言葉ではなかった。

ジルはその言葉を聞くと、先ほどミシェルが言葉を遮ったというのに、その言葉の続きを敢えて、柔らかな濡れた唇から発した。
「・・・・私は虹になりたいのです、ミシェル」
「虹・・・ね」
ミシェルがそう言うと、ジルは小さな顎を引いて、頷いた。
「そう。架け橋という意味だけではない、もっと違った意味も含めて」
「・・・・それはオレと寝るということ？」
ミシェルが可笑しそうに言ったので、ジルは黙り込んでしまった。
彼は何手も先を読んで言葉を発する。
彼女の言葉から、どういう結論になるのかを想定し、会話を終了させるために最適の言葉を選んで提示する。

彼女が虹の架け橋になるというのは、シャルルとミシェルとの間に立つことを考えて居る、ということだった。
鏡ではなく、虹に。
彼女の言葉はそう言う意味だ。
シャルルが誰かと誠実で深い信頼と愛に包まれた関係を築けるのであれば、彼女は自己が消えても構わない、と考えているのだ。
・・・自己犠牲に喜びを感じるとは、治療が必要なのは、この女の方ではないのか。
ミシェルはそんな感想しか持たなかった。
そこである仮説が・・・彼の頭を過ぎったのだ。

シャルルがなぜ、鑑定医としての業務多忙につき」という理由で公式に表出することを避けているのか。
・・・なぜ、ミシェルが症例の少ない、解明不能と言われる現在の研究を命じられて続けているのか。
そして・・・・ジルがなぜ、ミシェルと接触しようとしているのか。

彼女とここで出くわしたのは、偶然であったのだろうが、これを千載一遇の好機として、ジルが話を切り出したのだと気がついた。

だから、ミシェルはジルに一言で多くの質問を投げかけたのだ。
彼と寝るということは、女という性であることをジルが肯定していることになる。
主のために男装し、そして長らく彼の代行を務めていた彼女が、その役割を捨てるということに近い行為を受け入れるのか、と彼は尋ねた。

シャルルのために、他の男に抱かれる覚悟があるのか。
シャルルへの想いが何であるか、自分自身で理解しているのか。
そして・・・これ以上、ミシェルに対して開示している情報を制限していることはできないだろう、という彼からの宣言でもあった。

「虹とは、契りを示す、と貴方は言いました。契りとは誓いのことです。
・・・それなら、あの朱い虹に誓いましょう。

・・・いつか、シャルルとミシェルは今一度・・・心を通わせることができるようになるための、虹になろうと。ジル・ド・ラ・ロシェルの名前にかけて」
「粋狂な話だね」
ミシェルが憫笑した。
憐れな女だと思ったが、彼女を辱める言葉は彼女を傷つけることもないのだろう、と思った。
最も彼女を貶める商談を持ち出したのに。
ジルは肯定も否定もしなかった。

やがて、彼女は唇を一度だけ噛んで、そしてゆっくりと話をし出した。
これをいつ言おうかどうかと頃合いを見はからっていたかのように、流れるような口調で言った。

「・・・・私はもう一つ、不妊治療にかかる研究をしています。救えなかった命を救うことはできないけれど、救うことができる命を救わないこともできない。だから、力を貸してください」
「・・・・オレを買おうと言うの？」
「・・・そういう言葉で表すこともできますが。理由はどうであれ、貴方が必要なのです」
アルディ家の者たちからは不要であると切り捨てられた人物を、彼女は必要だと言った。
決してミシェルが当主へ逆らわないように、顫ることはしないようにと言われていたはずなのに。
それが、ジルの・・・心からの偽りのない言葉であることを知った。

白金の髪の青年は・・・焔の精霊のように見えた。
シャルルと違った煌めきがあった。
生き抜くことに誇りを捧げるミシェルを眩しそうに、ジルは見つめる。
彼女は生きることに対して、ミシェルのような強い意志を持たなかった。
誇りがあるなら、命を捨てろという家に育った。

それなのに、ミシェルはアルディ家に生まれながら、その教えに逆らって生きている。
・・・・逆光で彼は緋虹を正面に受けていると言うのに・・・眩しくて、直視できなかった。
■緋虹　09

「オレを買うとは・・高い代償を支払うことになるよ」
「構いません」
彼の対価というものは金品ではないことも、ジルは承知しているようだった。
シャルルが、かつての愛のない婚姻を承諾した時と同じ瞳で、彼女はミシェルを見上げた。

・・・虹が消えかかっていく。

彼女は虹と夕焼けを背にしていたが、緋虹の消滅を背に感じていた。
ミシェルの黄金とも朱金とも言えるような、燃える金色が・・・徐々に本来の白金の色を取り戻していったからだ。

「・・・ミシェルの望むだけの金額を振り込みます」
「それは対価には安すぎる」
彼はそう言って、酷薄そうな唇を歪めた。
決して、金銭で彼が心を動かされることはないと、承知しているのに・・・ジルがそう言ったからだった。

緊迫した空気が流れた。
稚拙な取引を愉しむほど、彼と彼女は若くはなかった。
死線を越えて、いくつもの生死を目の当たりにしてきた者の、張り詰めた感覚が・・・彼の頬を熱くする。かつて感じたこの感覚を、ミシェルが決して厭っているわけではないのだということを、自分自身の肉体でもって確認した彼が微笑んだ。

「オレの報酬は・・・そうだね、ジル。君だ。
オレと虹を何度も見交わす人に、オレは並々ならぬ何かを感じるよ。
『何か』とは何だろうね」
彼はそう言うと、ふと、言葉を句切って・・・思い出したように、彼女に近付いた。
茜色に染まった白衣の裾が揺れて・・・衣擦れの音を聞き届けるより前に、彼は・・・シャルルに良く似た顔で、彼女に近付き・・・そして見事な長身を屈めて、彼女の耳元に囁いた。
彼が近付くと、煙草の香りがする。
決して不快な香りではなかった。

・・・それどころか・・・彼女の主を思い出した。

しかし微妙に香りが違っていた。
何もかもが同じように見えて、彼らは・・・何もかもが違っている。

けれども。

・・・どこか、懐かしかった。

本当は、彼が、最もシャルルに近い場所に居たのだろうに。
双子は争いの種にしかならないと言われているが、引き離された双子だからこそ争いになるのだと・・・誰も考えなかったのだろうか。

ジルはその言葉をミシェルに言わなかった。
彼はすべてを判っているような気がしたからだ。

ミシェルは様々な物思いに身を浸しているジルの虚を突いた。
冴え冴えとした冷たい美貌がジルに近付き・・・そして、彼女の唇に自分の唇を掠めたのだ。

それは触れたかそうでないのか、わからないほどに軽いものであった。
整った彼の唇がもたらす恋の雨に焦がれる者は多いと聞くのに。
・・・ミシェルはジルに、面白そうに接吻したのだ。余興のように。
軽く、浅く、心のないキスをした。

「これは契約の証だ」
やがてゆっくりと躰を起こすと、ミシェルはそう言った。
彼の躰からは煙草の香りがしたが、彼女は無表情だった。
本当に驚愕するときには、表情の動きは停止する。
ジルもミシェルの気まぐれとしか言いようのない行為に酷く驚倒していたようだった。
彼女にはそれすら計算できないのだろうか。

判っているようでそうではない反応を見せる、金の髪の女性に、彼は嘲笑した。
「ミシェル。それでは契約にならない」
そこで初めて彼女が困ったような声を漏らした。
「そう？」
ミシェルが尋ね還す。
「貴女の主と友好関係とは決して言えない男に頼み事をする貴女が捧げることのできる報酬とは、もう貴女自身しかないのではないのか、と考えないのか？
ロシェル嬢。貴女はアルディ家の者ではないから、アルディ家の潤沢な資金を運用することもできないし・・・ロシェル家からの持ち出しもできないのではないのだろうか。しかも、シャルルには内密に事を進めているようだし、ね」
彼女は押し黙った。ミシェルの説は当たっていたらしい。
「死地に赴いた人物の発言と提案とは思えないね、ジル」
彼が辛辣にそう言ったので、ジルは唇を噛んで、少し下を向いた。
「ジル、上を向け。アルディ家の者が下を向いたときは屈伏を表す。・・・・オレを退屈させないでくれ」
「判りました」
アルディ家の者ではないことを指摘したのに、ミシェルは彼女に「アルディ家の者」と言った。・・・彼は、彼女がシャルルの傍で仕えるようになった経緯を知っているようだった。
あの国でシャルルが見て体験して来たことを、彼女も経験してきた。
累算すれば彼が滞在する以上の時間を費やした。
シャルルに人生を捧げること。
それが彼女の誇りであるはずなのに。
彼女はいともあっさりとミシェルの申し出を受け入れたので、ミシェルは青灰色の瞳で、目の前の女性をじっと・・・観察していた。

「貴方に従います。ミシェル・ドゥ・アルディ」
彼女はそう言った。
彼がアルディ姓を名乗ることを最良の決断としなかった、親族会の者たちと同じ感想を持っているだろうが、彼女はその方針を曲げて、ミシェル・ドゥ・アルディと彼の名前を呼んだ。
「・・・・私は確かに、ロシェル姓ですが、これまでの経緯から、親族会で投票権と発言権を持っています」
「だから？」
「だから・・・剥奪された貴方の諸々の権利を復帰させることも・・・」
「オレは現状に満足しているよ」
彼はジルの言葉を遮った。
それでは報酬にならない。アルディ姓を名乗ることを許可された代わりに彼が背負った様々な枷と、奪われた様々な権利についてジルから施しを受ける必要はなかった。
彼は冷たい微笑みを浮かべ、そして彼女から離れた。

・・・・虹が消えて、赤い夕焼けが色を変えていく。

ミシェルは肩を竦めた。

「観覧は終わりだ。
・・・まだそこに居たいのならどうぞ。しばらく誰も来ないはずだから」

ここはミシェルしか使用していなかった。
だから誰も来ないということはミシェルが出て行き、彼女の隠れた喫煙を妨げないということを示していた。

彼女は首を振った。
「私は喫煙はしないので・・・」
そこで彼は、向きを変え始めていた躰を戻し、彼女の方に今一度向き直った。

虹になりたいといった女性が何を言っているのか・・・ミシェルは理解した。
■緋虹　10

彼は唇を歪めて、ジルに向かって言い放った。
彼女はミシェルの言葉を待っているかのように、躰を動かすこともせず、ただ見つめているばかりだった。
彼と彼女は良く似ていた。
まるで一対の薔薇のように。
それでいて・・二人の間には決定的に何かが違っていた。

「緋虹に乗じて重大な発言をするのは、貴女の気質なのかな。それとも・・・」
「単に『その時』が来たから、そうしたまでです」
今度は彼女が短く彼の言葉を遮ったので、ミシェルは満足そうに顎を引いて頷いた。

彼との会話をこれほど往復させる人物は、この研究所内ではおそらく彼女だけだろう。
幾手も先を読んだ会話の減省を読んで、彼女は適切な回答を出しているように思えた。
判断力に翳りは見えなかった。
ジルは研究者としては非常に優秀であり有能であり、彼女の書いている研究論文や解析レポートについては、客観的に見ても、こ

こ最近の研究者達の中でも随一であった。

虹と夕焼けの色が消えて、周囲が急に紺色に包まれる。
日没の夕焼けが濃いときには、緋の色が強すぎて薄墨の広がりに気がつくのが遅くなりがちだった。
太陽の反対側ではすでに暗澹たる闇が広がっていたというのに。
ミシェルは、虹の色に輝く人と日没と緋虹を眺めていたので、その闇に背を向けてしまっていた。
彼らと同じ青灰色の空を通り越して、一気に闇紺に変化していく。
強い日差しの太陽が、雲に隠れるときにできる濃い影よりももっと濃い色が、ジルの白衣を緋から褐色に染めていった。

情報の収集は終わった。
ミシェルは物憂げな瞳で、ジルに視線を向けると、白金の髪を少し揺らして空を見上げた。
もうすでに虹はなかった。

研究所の非常灯が夜間設定に切り替わり、蓄光型の淡い光から夜空を凌駕するほどに眩い光を放ち始めた。
少しだけ顎を上げて、ミシェルは彼の従妹を見た。
しかし、何を考えて居るのか表情からは読み取れなかった。
恐ろしく整った顔立ちで、ミシェルは酷薄そうな笑いを浮かべ、そしてジルを見つめる。
それは美しい男女が何かを始める恋の最初でもなく、研究者同士の有意義な会話でもなく、血縁者同士の気安い会話ですらなかった。

・・・彼女はこれから共犯者になれ、というのだ。ミシェル・ドゥ・アルディに向かって。
虹となり架け橋となりたいということは、そう言うことなのだ。
そして逃れることもできたのに、彼の戯れのようなキスを受けて、彼女は承諾した。
申し出たのはジルからだ。
そして、無言の動作のうちに、彼女はそれを承諾した。それを受けざるを得ない状況で、かなり逼迫していることが判った。

なぜなら。
彼女は「自分は喫煙しない」と言ったから。

彼は笑った。
冷たい微笑みだった。
瞳は微笑んでいない。
猛禽のように、ジルを無遠慮に眺め回した。
しかし飢えていない獣が獲物を前にしてすることはひとつだった。嬲るのだ。
ミシェルは自分から飛び込んできた愚かな思想に取り憑かれた女性を眺めた。
彼女はいつも年若いということを忘れてしまうようなほど、化粧気もなく主張の乏しい衣類を身につけてばかりいる。
質素であることが美徳あると信じて疑わない。

「まずはその衣装を改めることだな。唯美主義のシャルルの従妹らしからぬ風情に、彼も歎くだろうよ」
「・・・努力します」

彼女がそう言うと、彼は満足したように頷いた。
「喫煙スタイルを装うのはやめろ。皮膚吸収タイプのシールに切り替えろ。・・IDチップシールと同じ形状で作れば、誰も気がつかないし、服の趣味が変わった、と言えば、露出する部分を隠した服装にしても・・・複数枚使用しても気がつかれない」

ジルがそこで息を呑んだ。
しかし彼にどうして、とは尋ねなかったので、ミシェルは当然に帰結されるこたえの種明かしをする時間はまったくの無駄である、と述べることはなかった。

「種というのは明かしたくなるものだ」
ミシェルがそう言って苦笑した。
そして青灰色の双眸をまた空に戻す。もうジルの姿は見ていなかった。

「・・・貴女に近付いた時、燻りではなく、薬品の匂いがした。・・タブレットで摂取するには、彼に見咎められるからだろう？それに定期的に摂取する必要があり、体内で効果を発揮するには時間がかかる。即効性を求めるほど、進んでいるのかな？・・・皮下注射をすれば医療行為記録が残る。
だから、煙草の形状ににて、肺からの摂取にした。フィルターからか？それとも、吸入タイプのものなのか？吸い終わった殻を大事そうに自分のシガレットケースに戻したのも、それらを始末する人間に、それがシガーではないと気がつかれるからだな」
ジルは黙ったままだった。違う、と否定しなかった。
ミシェルはそこまで言うと、お喋りが過ぎた、と言った。

彼女の身に起こっていることを、ミシェルは把握したからだ。
「私には時間がないのです、ミシェル」
「そうだろうね」
しかし、彼女の主張するところの残された時間について、ミシェルは興味がなかった。
「それはオレには関係がない。だから自分の身を削ってシャルルにすべてを捧げる貴女を理解したいとも思わない」
ミシェルはそこまで言うと、翳りのある表情をしているジルに背中を向けた。

彼女は、短い会話で、すべてを悟った彼の慧眼に溜め息を漏らしている。
しかし、ジルにはこうするしかなかったのだろう。
路がない。戻れない。
彼はゆっくりと大きく溜め息をついた。
同じように嘆息に身を浸している彼女に向かって、低い魅惑的なバリトンで、囁くようにしかしはっきりと、彼の肩越しに言った。

「ジル・ド・ラ・ロシェル。・・・・これは契約だ、と言っただろう」

そして彼は続ける。
「契約は有効だ。だから、オレは必ず取り決めた事を遂行する。報酬は君だ、ジル。・・・オレは、あの男の歎く姿が見たいんだよ。何もかもを手に入れて、手に入れれば飽きたと言って放り投げてしまう、あの愚かな男が・・・どうすれば苦しむのか考えている」
「私が居なくなってもシャルルには打撃にならない」
「どうかな。・・・それは使いようだと思うがね」
ミシェルがそう言ってくすりと声を漏らして笑った。
「『その時』を効果的に使うまでだよ、ジル」
彼女が言った言葉をそのままに、ミシェルはジルに宣言した。

「あの茶色の髪の日本人も、同じようなことを言っていたかな。だが、シャルルの弱点はいくらでも、ある」
「彼からまた、何もかも奪うのですか」
「愚かしい質問だよ、ジル。奪うのではない。・・・取り返すだけだ」
ミシェルはそう言うと、細く長い指先を彼の唇に持っていった。
甘く痺れが走る。彼女の摂取した薬が効いているのだ。
「・・・これほど強い薬なら、相当進んでいるね、ジル。・・・これが効かなくなったら、次は腰椎に直接打たないと効かないぞ」
彼はそう言って背中を向けたまま、片手を上げた。

その背中に、ジルが声をかけた。
「ミシェル。・・・・ありがとう」
「貴女は随分と、変わった人だね、ジル」

彼は何を取り戻すのか言わなかった。しかしジルには伝わったようだった。
頭の良い女は面倒だ。
けれども屈伏させるには大変に手がかかり、だからこそ彼は退屈しない。
彼は、数多の温度に触れて来たが、彼女の肌の温かさと、金の髪を散らして涙を流す様を考えるだけで・・・彼はシャルルの嘆きを予想でき、日々の退屈な実験の繰り返しが少しだけ愉しくなりそうだった。
しかも・・ミシェルの思考に寄り添う程の頭脳の持ち主に出会ったことに高揚感を覚えた。

彼は契約だと言った。
同情や憐憫からではなく、対等な取引だと言ったのだ。
同時に、彼女が悩んでいるあの重篤な事実について解明し、シャルルを救ってやる。
シャルルは嫌悪感を露わにするだろう。
自分と同じ貌をした男が、腹心の部下を奪われ、そして自らを生き存えさせるために、ミシェルの力を借りなければならない。

・・・感染していない細胞の持ち主と、感染した細胞の持ち主は、同じ遺伝子を持っている。・・・比較するには最適であろう。

「緋虹を共に見た貴女となら。・・・男女の交わりに意味があるとは思えないが、オレはシャルルが次の世代の後継者を創り出すまで誰とも結婚しないし、誰とも子を成さない誓約をしているけれど。・・・貴女となら、そうしても良いよ、ジル」
彼がそう言ったが、ジルから返答はなかった。

ミシェルは悪くない状況だね、と言ってその場を後にした。

すでに虹を遵えた赤い夕焼けは終わりを告げて、夜が訪れていた。
この国の空は、彼の思い出す国の空と違って、明るすぎた。
それをわざわざ眺めるために、ここで時間を費やすより、今契約締結したばかりの案件に着手した方が有意義そうだと感じていた。

「ミシェル。・・・私も、約束は守ります」
「約束程度の拘束力ではない。・・・契約だと言っただろう」
ミシェルはそれだけ言うと、非常扉を開けて棟内に入っていった。
もう彼女を振り返らなかった。

・・・まずは貼付形式の皮下摂取シートを作ることから始めるか、と考え始めており、その美しい整った顔から、再び表情が消えていた。

それは、あのフランスの華が、幾手も先を考えて思考に耽る様に非常に良く似ていた。
これほどまでに考えに耽るのはどれくらい久しぶりなのだろうか、と彼は思った。

次に・・・まだ痺れの残る唇を少し噛んだ。
面白いね・・・触れれば神経を麻痺させるほどに強い薬を摂取しているから、誰も彼女に触れることができない。
・・・まるで棘で包まれた薔薇のようだった。

アルディ家の者は死んだら薔薇に還ると言われている。
彼女はアルディ家の者でありながら、姓を変えて生きていることを肯定している。

そして、触れれば・・・誰もがたちどころに彼女の棘に萎れる。

彼女はまるで虹のようだった。
手を伸ばしても触れることはできず、そのまま眺めていればやがて消えてしまう。

虹になりたい、と言っていたが、彼女は緋虹そのものだった。
燃えるような金の髪を凪がして、彼女は青灰色の瞳でミシェルに契約を持ちかけた。

痺れとは違った、久しくなかった剣戟への疼きが彼を支配し始める。

彼女は虹・・・か。
ミシェルは呟いた。

彼女にしていない話がある。

儚く美しい幻の架け橋を見た男女は契りを交わしそして・・・子を成す兆しとされている。

彼女とは、情交ではなく契約を交わした。
彼と対等に渡り合える人間は少ない。
しかし、彼女はミシェルに承諾させたのだ。方法や報酬は何であれ。

虹は契りを印す。
そしてその次は・・・・・

ミシェルの中で何かが煌めいた。ちかり、と小さな光が煌めいたのだ。
そしてそれは徐々に光を強くして・・・彼にある計画を囁いた。

退屈な生を生き抜け、と言われた。そして生き抜く。何があっても。
それがミシェルの誇りだからだ。

・・・・彼は微笑んだ。冷たく、そして美しく。

まるで、あの虹のようにやがてそれはゆっくりと消えた。

表情を引き締めて、棟内を悠然と歩く。
・・・当面はこちらに没頭することになり、シャルルの代行などを請け負うよりも優先される事項だと考えながら。

（FIN）

疎眠る

◆壱

疎眠る（※しばらくの間、うとうとすること。束の間の夢のこと）

割の良い契約だと思った。

期間は、夏が終わるまでのほんの短い時間。
でも、24時間拘束されるから、他の契約は同時に結べない。
指定された場所で過ごさなければならない。
外出することも禁止。携帯電話も禁止。
一切外界と遮断された場所で、夏の短い時間を過ごす。
契約期間満了後は、相手が満足すれば、海外に旅行に行くことができるそうだ。

私は法外な料金を提示されたものの、その奇妙な条件に少しばかり唸った。
だいたい、こういう契約を持ち出してくるのは、おかしなトラブルに巻き込まれるケースが多い。
私の同僚も何人か、それで酷い目に遭っている。
金持ちの考えることが良くわからないと思うのはこういうときだった。
ベッドの中では何をするのかはみんな大抵同じだけれど、こうして・・・閨の空間以外も拘束されて、思い通りに動きなさいと言われるのはあまり好きではない。
確かに一緒に居るときには、相手の要望に添うようにする。
私達は肉体だけを売り物にしているわけではない。相手に合わせて何が求められているかを瞬時に判断する能力がなければすぐに飽きられてしまう。
特に、こういう雇用契約を結びたがるような、バカンスの添え物になるような人形を求める酔狂な輩というものは、自分の要求通りにならなければ、金払いを途端に渋り出す。

私の・・私達のエージェントは有能で、私は些細な迷惑を被る以外にはあまり・・・奇妙だと思う相手に会ったことがなかった。
「あんたはお人好しなのよ。娼婦のくせに」
同じ職業の者にそう言われても、可笑しいだけだ。
笑ってしまう。
私達は春を鬻ぐ職業であるけれど、同時に・・相手の願望を叶えてやる。
それに報酬を得て何がいけないのだろうか。

相手は名前を名乗らないのも気にいらない。
でも私は断って良いよと言われなかった。
そういう選択は私には与えられていない。
エージェントは依頼主を知っているらしい。
しっかりした身元だから、と言うが、しっかりした身元の者がこういう奇妙な契約をするわけがない。矛盾しているわよ、と言おうと思ったが、そう言おうものなら、次から私に割の良い仕事は廻されなくなる。
私はウイと返事をして、その場で同意書にサインをした。後日、分厚い契約書が届き、私はひとつひとつの説明を聞くのも面倒だったので、代わりにサインをして置いてくれと呆れて言った。
女を買うだけなのに、これだけの用意をする者とは一体誰なのだろう。
私のようなアジア系の人種を好む上流階級のお貴族様気取りの輩は、私があまりにも若く見えるので、永遠の少女の様だと言って褒めそやす。

娘のような年頃の者が好む着古した洋服を着させた人も居た。
日本の着物を着せて歩かせた人も居た。

私の幼い顔立ちが、彼らの何を満足させているのかはわからない。
でも需要があるから供給があるのだ。
父親が日系人であったので、日本語が少しできるが、それも加わって、私は東洋人好きの者達から特別にオーダーを受けることが多かった。

その場所はどうもパリのどこかであるらしいのだが、そこまでは目隠しをされて大音量の音楽を聴かされ、マスクをして完全に五感を遮断された状態で護送されるという。車も数回乗り換えるから乗り物酔いには対策を立てるようにと言われた。
たくさんの守秘同意書にサインをさせられて、健康診断を受け、低容量ホルモン剤を渡された。
かつ、念には念をということで、ホルモン注射も受けて月の障りを操作された。
場所を特定されてはいけないので、瞳孔を開く点眼液を義務づけられた。
そんなことしなくても私はだいぶ目が弱いので、コンタクトをしなければ何も見えないし・・・それに、私は何も観るつもりはない。
ただ淡々と過ごすだけだ。
この仕事が終わったら、少し休暇を取るつもりだった。
さすがに・・・少し疲れていた。
こういう職業だから、人に言えるものではない。
そして、常に学習していなければ、知性が損なわれる。
独学で勉強は続けて居たし本も好きだからたくさん読むことは苦痛ではない。
体の手入れも怠ってはいけない。
それもあまり苦痛ではない。
しかし何が疲れるのかというと・・・
相手に合わせて自分を消すことが辛い。
相手は私のことを尋ねない。
私を通り過ぎて、別の何かを見て居る。
大抵の人は、何か心に瑕を持っていてそれを私という人形で癒そうとする。
人形に語りかけても癒されないから、適切に返事をする人形に語りかけて満足する。
彼らは、自分自身の内面と見つめ合うことはしない。
余裕がないのかできないのか・・・そうすることは時間の浪費だと言う。
お金の浪費はするくせに。
でも、何でもお金で解決しようとするが、それがいかに虚しいかと言うことも知っている。
・・・・そういうことでしか生きられない人も居る。
だから私はその人の何がそれほど傷つけるのだろうと観察をしている。
記録は取らない。

すべて私の心の報酬として頂戴する。
そして私は自分自身が崩壊することを食い止めているのかも知れない。
私を組み敷く者達は・・・決して手に入らないものがあって、それを手に入れることができないことを知っているから。
他の何かを補充し続けることで渇きを癒しているだけなのだ。

ご褒美に海外旅行にいけるというのも、楽しみの一つだった。
・・・つまりは、ここからしばらく身を隠せということなのだと思うと、それほどの大物が私を指名した理由を考えざるを得ない。
理由を聞いてはいけないことになっているから、相手に尋ねることもできない。

だからそこに到着して・・・お城のようなその場所に佇む美しい人を見た時に。
ここは夢の場所なのかと思った。
目隠しをはずされて、太陽の強い晄に慣れるまで目を細めていたが、瞳孔が開く点眼を受けていたこともあって、足元がおぼつかない。
広大な庭が広がっていて、薔薇の香りがする。
そしてよく刈り込まれた芝生を歩いて渡ると、ガラス張りの温室が目に入った。
たいそう立派な設備であることは、すぐに見て取れた。
でも、鋭い視線を時折感じるので、周囲には隠れて護衛だか監視の者が居るのだろう。
たくさんの人の気配を感じる。
ここまでして用意される舞台の上で、茶番を繰り広げようとしている人は、本当にこの人なのだろうか。
私はよく見えない目で、近づいてくる人の特徴を捉えようとした。
きらきらと髪が輝いている。プラチナ・ブロンドだ。
色は白く、背が高い。
良く鍛えているようで、均整のとれた体つきのようだ。
ふわりと良い香りがした。
「マリナ」
彼はそう言った。私に微笑んで、大音量の音楽を聴かされ続けて、平衡感覚を失ってふらつく私の体を抱いた。
「探した。・・・どこに行っていたの」
彼は微笑んで、私の額に唇をあてた。
もう、業務開始というわけだ。

私をここに連れてきた人の声と良く似ていた。
今目の前に居る人より、若い男の人の声だった。
「ようこそ、夏のマリナ」と彼は私に言った。
「瞳はブラウンかな。マリナと同じにしつらえろ」
私は頷いた。
その時だけヘッドホンを外された。
車の中では、私以外に誰かが乗り込んで、私の観察をしていることに気がついた。
その人が別の誰かにそう命じていた。

マリナ。
そうだ。
私の本当の名前ではなく、マリナと呼ばれることも条件に入っていた。
その条件を聞いたとき。
そこで予想がついた。
この人は、私をマリナという叶わない恋の相手として過ごしたいのだと。
ああ、本当に悲しくて寂しい人達だ。
可哀想だと思う。どうしてこういうことでしか人を愛せないのかと思う。
私はちょっと首を傾けた。
「散歩」
彼がくすりと笑った。
「それならオレを起こしてくれないと。・・・・目覚めて君がいないから、心配した」
「ごめんなさい」
私は彼を見上げた。話を合わせることは得意だ。
でも、彼の様子からすると、まったく異常な性癖であるとは感じられない。
逆に・・・その話し方から、非常に若いのではないのかと疑ったが、私に触れた皮膚の感覚から、彼は少年ではなく、盛年というか大人の男性であることがわかった。
恐ろしく整った顔をしているらしい。
それは目の悪い私にも良くわかった。
コンタクトを持ってくれば良かったと後悔した。
私の唯一の弱点だ。
視力が異常に弱い。
「ああ、眼鏡をかけていないから・・よく見えないのか」
目を細めた私の顔を見て、彼がああ、そうだったと言ってポケットに手を伸ばした。
はい、と言って私の目の前に差し出した物体を少し見つめて、私はゆっくり手を伸ばした。
彼が忘れ物だよ、と言って私に眼鏡を差し出したのだ。
古い・・・時代遅れのデザインの眼鏡だった。
しかも度が入っていない。

「ありがとう、シャルル」
私は言った。
呼べと指定された名前を発すると、彼は嬉しそうに頷いて、ぽんぽんと私の頭を軽く撫でた。
「子ども扱いはしないで」
「そうだったね」
私と彼・・・・シャルルのお芝居が始まった。
◆弐

一緒に過ごすようになって、数時間もすると、自分が彼の何に違和感を感じていたのか、気がついてきた。
そしてその他のいろいろなことも。

彼は・・・どうも、私をマリナと信じて疑わないようだった。
私を誰かの代用にする人はシャルル以外にも過去に居た。
でも、夢想した相手そのものだと思う人は彼が初めてだった。

シャルルと言う人物は、麗人と言ってもおかしくないほど、とても美しく物腰が静かで、完璧な紳士だった。

暴力をふるったり傲慢に接したりすることはない。
時折、シニカルな発言をすることもあったが、それは彼の生来の性格なのだろう。
食事の作法やほんの細かい仕草から、まだ若いのにここの主であるらしいということがわかった。
彼の家族に会ったりすることはなかったので、ここは別邸なのだろうか。
限られた場所しか移動することができないので、この広大な敷地や屋敷の間取りについて、正確に把握することはできなかったが、途方もなく広いということはわかった。
パリでそんな場所はないから・・・ここはパリの郊外なのか。
それすらわからないほど、夏の青い空が広がって、緑が生い茂り、その景観を他の建造物が遮ることのない場所に私は居た。

散歩をして、スケッチブックを持たされる。
最近の流行ではない服装をするように言われる。
そして髪飾りをつける。
食事をして、薔薇園の薔薇の品種について嬉しそうに語る話を聞く。
「ファム・ファタル」という名前がすべてにつけられた珍しい薔薇のことについて、彼の説明を聞くが、専門用語が多すぎてわからないので、黙って頷くだけだった。
わかったのは、彼は恐ろしく頭が良いということだ。
彼はフランス語ではなく、日本語で私に話しかける。
聞くことが出来るが、拙い言葉でしか返答ができないので、私は極力短い返答をすることに徹していると、彼は少し悲しそうな顔をして・・・君のお喋りが聞きたいな、と言う。
食事をして静かに音楽を聴き・・・彼の居室の前に掲げられた美術品を見て長い廊下を往復する。
手を繋ぎ、肩を抱かれ、薔薇園では「愛しているよ、死ぬほど愛している」と囁かれてキスを受ける。
彼のキスは啄むような・・・少年の様な稚拙なキスだった。
恥ずかしそうに頬を染めて、青灰色の瞳を近づける。
その時にだけはっきりと見える彼の双眸は、どこか遠くを見ていた。
でもマリナと私を呼んで、彼は胸に抱く。そっと、壊れ物を扱うかのように。

夜は一緒に寝室に入り・・・私は彼と肌を合わせる。
彼は儀式のようにマリナを抱き締める。
あの時の続きだね、と言うが、何のことだかわからない。
でもすぐに彼の力強い腕に抱かれて、溜息を漏らす自分が居る。
彼の愛撫は最高だった。
人を酔わせる側の者であるのに、私は魅了されて・・・あやうく堕ちそうになる。
でも、彼が「マリナ」と囁く度に我に返る。
彼が微睡んでいる間に私はそっと腕から擦り抜けて、隣室の簡易ベッドで眠る事にする。
人とは一緒に眠れない。
シャルルもどうやら同じのようだった。
彼は一緒に眠ろう、一緒に眠りたいと思うのはマリナだけだと言うが、彼の中では・・・・・彼の奥底に眠る本能が、お前はマリナではない、と言い切っているかのようだった。
浅い眠りには落ちるが、決して深く睡臥を貪るまでには陥らない。
彼の健康を重視することも条件のひとつだった。
だから一緒に眠らない。

心は売らない。
私はこの人の寂しさを埋めるためにここにやって来た。
だから私が埋めてもらったら、それは・・・ビジネスでなくなる。
私の唯一の誇りについて、偽りなく生きていることを私だけが知っている。

私の心は誰のものにもらない。
私は、私だけのものだ。

こういう恋や愛の始まりはあるのかもしれない。
昔の映画で観たことがあった。
でも、私はそれが決して現実にならないことも知っている。
こういう出会いや身分違いの者同士は、激しい恋に酔いしれるが、同時に褪めるのも早い。
熱情の温度が下がるのではない。
褪めるのだ。
退色していく褪せた花弁のように・・・恋が褪めていく。
育った環境も人種も何もかも違うのに、シャルルはそれでもこれほど「マリナ」に焦がれている。
彼は、焦がれているのだ。
死ぬほど愛していると言い切りながら死ぬことができない。
きっと・・・叶わない恋だったのだろう。
こんなに美しくて優しい人なのに。
それが切なかった。
少しだけ、胸が痛んだ。

ーーーーそして彼はこの一日を繰り返す。

最初の出会いの翌日のことだった。
朝が弱いらしい彼は昼近くになってようやく起きてきたらしい。
私は、庭に出て散歩をしていた。
監視の者が、今からシャルルが来るからと短く告げる。
それ以外は会話をしない。
目に見える者が何人か広い庭を点在していたが・・・・私のことを監視しているようだった。
彼がやって来て・・・・私に「探したよ」と言った。
「散歩していたの」
私も答える。
そして彼が忘れ物だよ、と言って、私に眼鏡を差し出したとき。
「それならオレを起こしてくれないと。・・・・目覚めて君がいないから、心配した」
彼が・・・昨日と同じ言葉を繰り返したとき。
私は、彼の異常に気がついた。
私は今、昨日彼に与えられた眼鏡をかけている。まったく度が入っていないので、見えていないが。

驚いても逃げ出すことはできないから、私はそのまま平静を装って、やり過ごすことにした。
人に合わせるのは得意だ。
しかし、同じ事を繰り返す人に遭遇したのは初めてのことだったから、とりあえず、普通に話を進めていくことにした。

眼鏡を受け取り、さり気ない仕草で、今身につけている眼鏡を取り外した。
そして、度の入っていないそれをかけた。
「ありがとう」と微笑んだ。
シャルルはこれがないと見えないだろう、と言って少し笑った。
少年の様な微笑みだった。
でも、それは「少年の様な」ではなく「少年の」微笑みだったことに気がついた。
彼は・・・・彼は少年時代を繰り返していると気がついた。

「探した。・・・どこに行っていたの」
彼は繰り返した。
私は泣きそうになる。
暑い夏のはずなのに・・・私は背筋が凍り付くような寒気を覚えた。
この人の遠い眼差しは、色素の薄い瞳だからなのではない。
本当に遠くを見て居るのだ。
・・・・彼は。狂っている。
確信した。
この狂人は・・・・マリナと過ごすために、毎日を繰り返しているのだ。
職業柄、研ぎ澄まされた洞察力は、自慢することではないが、人物評価についてはあまり外れたことがない。

マリナという人物に焦がれるあまりに・・・マリナと過ごす夏を繰り返している。
毎日毎日が・・・・新しいマリナとの一日なのだ。
天気が雨でも。晴天でも。彼は繰り返すのだ。
薔薇を愛でて、最高の状態の薔薇をマリナにあげると言って剪定をする。
煙草を吸うが、それもあの男には内緒だよ、と共通の友人らしき人のことについて思いを馳せる。
未成年が吸ったらいけない、と怒らないでくれよ、と彼は笑う。
そして少し躊躇ったようにキスをする。
死ぬほど愛していると囁き、ランスの教会で式を挙げた後は、世界を巡って月まで行こうと囁く。
彼があの高名な家柄の者であることはすぐにわかった。
でもそれは関係がないし、私には興味がないし、誰に漏らすことでもない。

言葉の端々から・・・彼が、まだ10代の少年時代を巡っていることがわかった。

私は驚愕し、すぐに契約解除を申し出ようとしたが、この奇妙な狂者について・・・もう少しばかり観察してみようと思った。これほどの監視体制の中で演じられる芝居は、安全であると言うことが確認できているからだ。それに・・・私に何かを求めるのであれば、それが何かを知りたいと思った。
私の誇り。
唯一の誇りだ。
相手が何を知りたいのかを把握し充足してやる。
それを指摘してやる。
そうすると相手は怒るか驚愕する。
でも、それが本当のことだから、次に私に尋ねる。
私は微笑んで・・・・「自分で路を見つけなさい」と言う。
それが相当額の報酬に勝る私の報酬だ。
力でも金でもない。
私をねじ伏せても私は屈しない。
私に救いを求める愚かな人達に指摘をしてあげる。
でも教えてやらない。
自分たちがいかに渇望しているのかということを、思い知るが良いと思う。

しかし、この奇妙な契約を実行しているシャルルは、彼らとは少し違っている様だった。
演じているからではない。
彼は本当に・・・夢の中に棲んでいるからだ。
マリナと一緒に生きる日々を繰り返している。
そして何度も愛を囁く。
私もよ、という言葉は彼を安心させることはできない。
マリナという人は・・・彼をどこに導こうとしているのだろうか。もういない人なのだろうか。
詮索するつもりはないが、これほどまでに優れた人がどうして少年時代を遡っているのかわからなかった。
それ以外の時事や知識については、現代のものをそのまま兼ね備えているから・・・彼は少年の時で時がとまり、そのまま経年しているということではなさそうだった。
つまり、惑っているだけのだ。
その過去に遡りたいと・・・強く願っている。
そしてそれはきっと叶わなかったことなのだろう。

しかもどうも・・・彼はマリナ以外にも心を砕く人が居るらしい。現代に。
彼は私の茶色の髪と瞳を見て、マリナと呼ぶが、それ以外にも名前を呟くときがある。

それは私と薔薇園で過ごしているとき。
最高の状態の薔薇を私に捧げるという儀式を彼は厳かに行う。
その時に、彼はこの上なく美しい微笑みで美しい唇を動かし・・・・その時だけは、私をマリナと呼ばない。
本人は気がついていないが、違う名前を呼ぶ。

そして「オレの天使」と彼は言う。
マリナのことはそうは言わない。
彼はマリナをファム・ファタルと言う。

過去には存在しない名前なのだということは彼の言葉からわかった。
でも、現代にもマリナと同じくらい・・・心を寄せる人が居るのに。
なぜ、彼はこうも儚い過去の夢の世界に浸ることになったのだろう。

彼を知れば知るほど・・・いたたまれなくなる。
彼と褥を共にすればするほど・・・・彼の悲しい愛がどこを彷徨っているのだろうと思う。

シャルル。
現代に生きる、その人のことを思い出して。
「オレの天使」と言い「永遠の晄」と呼ぶその人のことを思い出して。

◆参

私の契約期間も折り返しを迎えた。
さすがに・・・毎日同じ事を繰り返すのは慣れては来たが、彼の夢幻の世界のことについて想像してしまう。

ビジネスとしては最高に割の良い仕事だった。
彼の話は繰り返す。
彼の毎日は繰り返す。
だから、それに合わせて微笑んでいれば良い。
彼の愛は私が溺れそうになると踏み留まるように自分に言い聞かせなければならないほど、素晴らしい。
でも、寂しい。
これはビジネスに感じてはいけない余計な感情だった。
彼が私を愛してくれないから寂しいのではない。
彼の魂が・・・この上なく痛々しいのだ。
あれほどの人物なのに。
愛に不器用であると思った。

どうも・・・彼とマリナの共通する人物との間で、恋愛関係で揉めていたらしい。
そして彼が身を引いた。
彼の愛は破壊的なのだろう。
友人として祝福するということがすぐにはできなかったことを彼は悔やんでいる。

でも。
その愛に囚われないで・・・あの永遠の晄という名前の人と向き合えば良いのに、と思った。

どんな人なのだろう。
彼にあれほど穏やかな表情をさせる人。

マリナと一緒の彼は、恋に苦しんでいる。
穏やかな表情を浮かべているが、彼は恋が苦しくて・・・一緒に居るだけで心臓が張り裂けそうなくらい狂おしい恋に身を置いているのだろう。

叶わない恋に溺れても夢から覚めたくないと思う彼の傷ついた魂を癒すのは、マリナではない。

そんな繰り返しの夏の日のことだった。

「いつも」と同じように、私はシャルルと共に、薔薇園に赴いた。
けれども、何かがいつもと違う。
物々しい・・・。
いつも通りを装っているが、使用人達や、護衛の特殊配備された者達の人数が多い。
しかも、彼らは私やシャルルの前では決して使用人同士で会話しないのに、しきりに打合せをしている。
一体・・・一体なんだろう。
ああ、こんなときに目が弱いのは不都合だ。
私は目を細めて周囲を見廻したが、何かが把握できることはなかった。

「騒がしいね・・・・」
シャルルが少し眉を顰めた。
彼も何かを感じているらしい。
「シャルル・・・薔薇の話が聞きたいわ」
私はそう言って、彼の関心を別に向けることにした。
彼が愛するファム・ファタルと名付けられた、薔薇園の薔薇は見事だった。
品種改良を趣味としていることは彼から聞かされていた。
シャルルはそれらすべてにファム・ファタルと名前を付けて・・・愛でている。
マリナの代わりに愛でている。こうして、マリナが傍らにいるという夢を見ているのに。

そして、彼の日常では・・・・その花を捧げる人はマリナではないことまでには彼の夢は及んでいない。
あの「永遠の晄」の人がこの姿を見たら、きっと悲しむ。そう思った。
クライアントには情をかけてはいけないという常套句を私は無視した。
この・・・年上の彼は、少年に戻り、私のことを愛でるのに。
その一方で、魂が。彼の魂が、別の人の名前を呼ぶ。
・・・・彼は狂ったのではない。何かの、病なのだ。
それに程なくして気がついた。

この状態は、自身の意思かも知れない。
でも、これは病なのだ。
確信する。
愛する人が居るのに、彼は夢の世界に堕ちてしまう。
いや・・・・その「永遠の晄」の人がここを訪れていないので・・・彼は面会謝絶になっているか、彼と事情があってその人は会えないのかもしれない。

「愛しているよ・・・・」
彼はまた薔薇の話をひとしきりすると、私に薔薇を差し出した。
今日、最高の状態の薔薇だった。
私はありがとうと言って受け取ると・・・彼は私の顔にそっと顔を寄せて、整った唇を重ねてきた。
日中の、彼のキスはいつも拙い。
情熱的な口吻は罪深いというかのように。
長いキスをした。

その時。
どん、と何かを叩く音がしたので、私は顔を上げた。
シャルルには聞こえていないのだろうか。
彼には・・・・・見えていないのだろうか。

温室のガラス窓に両手をついて、こちらを見つめる少女の姿が。
目の弱い私にも見えた。
茶色の髪を伸ばした若い娘だった。
私とあまり・・・年齢が変わらないだろう。
遠くで、シャルル、と言う声と。やめておけ、という男性の声がした。
ああ。目が弱いと耳が聡くなる。
あの声は・・・・初日に私に「夏のマリナ」と言った人の声だった。
何か揉めているらしい。男性が少女に近寄ったが、彼女が首を激しく振っていた。

しばらくこちらを見つめていた。
私も観察していた。
やがて彼女は引き摺られるようにして、その場を去っていった。あの男性に連れられて行った。
涙を流していたのかも知れない。両手で顔を覆っていた。
「シャルル・・・・少し散歩しない？」
私はいつもの予定を変更して、薔薇園を歩くことにした。
彼は前日と同じ事を繰り返す。
だから、昨日と予定を少しだけ変更した。
内容が同じであれば前後しても彼は文句を言わない。

彼女は、明日も来る。きっと来る。
そう確信したから。

◆肆

ーーーー翌日。
私は翌日は薔薇園を散歩しようと提案した。
それは最終日まで少し日にちがあった。
でもこれで最後の日になるだろうと思った。

昨晩は・・・・私は初めてシャルルと一緒に眠った。
でも彼は眠れなかったらしい。
私も眠れなかった。
これが現実だ。
よく眠れた？と聞くと、まあね、と言って笑ったが、彼は一緒に眠る事のできる人と一緒に眠ったのに、眠れなかったという事実について、何か思うところがあったようだった。

それで良いのよ、シャルル。
本当は誰と微睡みたいのか・・・もうそろそろ、知っても良い時期よ。

あなたは少年ではない。
大人になった。
だから逃げてはいけない。
病なら・・・なおさら、癒す努力をして。
あなたはこの国の重要人物であり・・・若い世代を導くこともできる人なのだから。
自分で惑っているだけなら私は何も言わない。
自分で選んだのだろうから。
でも、誰かを。
大事な誰かを惑わせたり泣かせたりしてはいけない。

彼は少し寝不足の顔をしていた。
日が眩しいね、と言った。
私はそうだね、と言って笑った。

夏の薔薇の苑は、香りが強い。
陽射しが強く時折吹く風が心地良いが、眩しくてよく見えない。
でも、シャルルはいつも私の傍に居て、私の歩みに自分を合わせている。

少し歩いていくと・・・視線に気がつく。
彼女が来た、と思った。
私は気がつかないフリをして、そのまま、シャルルと一緒に歩いた。
「ねえ、シャルル」
今日は私がシャルルに声をかけた。
初めて、契約にないことをした。
こちらから声をかけることは・・・フランス語で声をかけることはしてはいけないということだったのに。
彼は少し無言だった。
なぜ、マリナが日本語ではなく流暢にフランス語を使用しているのか、という疑念の表情だった。

私は彼に向き直った。
微笑みが零れる。

「楽しかったわ。お仕事でも楽しいと思った。でもね、シャルル。早く気がついて。あなたが本当は・・・誰を愛しているのか。死ぬほど愛しているって、決めぜりふにならないわ。死んだら愛さないってことでしょう・・・もっと。そう、もっと違う愛の囁きを考えるべきよ」
私は微笑んだ。

視線の向こう側で・・・・幾人かが、声を上げる。
シャルルの均整の取れた体の向こう側から。
何かが・・・そう、何かではない。
彼女が制止を振り切って、シャルル目指して走ってくる姿が見えた。

私は彼の青灰色の瞳を見た。
もう、見ることはないだろう。
「アデュウ・・・シャルル」
シャルルが何を言っているんだ、と言って息を止めた。

私だけに注がれる視線は・・・・信じられないと戸惑っていた。

「行きなさい・・・・・・永遠の晄の場所へ。ヒカルの場所へ」
私はそう言って、彼の胸を両手でとん、と軽く押した。
彼女が彼の言う「永遠の晄」「ヒカル」であることはすぐにわかった。
私と良く似た面立ちの・・・マリナの血縁なのだろう。
年齢から推測してみると・・・・娘なのだろうか。

「シャルル！」
蹌踉けたシャルルを、背後から・・・・誰かが腕を伸ばした。
彼女だ。
私は微笑んだ。
彼の瞳が・・・今まで私を見つめている遠くを見るような晄ではなくなったから。
理知的で慈愛に満ちた・・・今のシャルルがそこに出現した。

ああ。
シャルル。
行くのよ。

私の目の前で、二人は縺れて・・・互いをかばって地面に墜ちた。
背中を丸めて、受け身の姿勢を取ったが、彼らは互いをしっかりとかばい合いながら・・・・抱き合って芝生の上に転倒した。

そして、私は大きな声を上げた。
これで私の契約は終わる。
誰かに姿を見られてはいけないというのが、私の契約の中にあったから。
先方がそれを拒否しても、私はそれを理由に・・・・この館を今すぐ、出るつもりだった。

夏の陽射しが眩しかった。
夏の薔薇の香りは強く豊潤だ。

でも。
それよりも。
夏の陽射しに疎眠る、白金の髪の人と、彼が永遠の晄と嬉しそうに呼んだ彼女の体が強く抱き合わさっている姿うぃ見ることができて、私は少し微笑んだ。

こんな状況なのに。
私は胸が躍った。
この二人は年齢差も惑いも憂いもこえて、夏の陽の光の下で・・・・現在を生きる。
そう。
シャルル、あなたは今を生きて。
あなたは生きているのだから。
生きるという意味を考えて。

私は報酬を受け取った。彼の悲しみや苦しみは、とっくに・・彼は気がついているのだから。
私が彼に告げる言葉は何も無い。

ただ。
ただ、生きて欲しい。
あなたに戻って来て欲しいと思う人が・・・あなたの永遠の晄がそこに居るのだから。

ファム・ファタルという永遠の人はひとりだけとは限らない。
運命の人・・・宿命の人・・・
命を運んでくる人は、ひとりではない。
だからシャルル。
愛を知っているのなら、愛をもう一度始める勇気も必要よ。

私の契約は契約期間を満了することなく終わった。
この後の休暇は、予定していた日にちよりも早く始まった。

（FIN）

適用除外

exclusion from application of・・・・・（適用除外）

■前編

アルディ家当主は、就任前に婚姻していなければならない
アルディ家当主は、婚姻前に1ヶ月花嫁の実家で暮らさなければならない

彼女の父親である現当主は、このしきたりをことごとく廃止した風変わりな人物だった。
長きに渡って栄華を誇るアルディ家の当主にあるまじき因習廃止論者であり、それを廃止するにあたっては有無を言わさない理由を提示するので、親族会でも却下という議決に至らなかった。
彼は廃止したのではなく、附則を付けたのだ。
つまり、この限りではないと例外を設けた。
彼の就任時それから在任時には、アルディ家は曠古の時代を迎えていたのだから。

それなのに。
自らの時にはこの2か条を廃止したのに、今になってこれを「施行していないだけで、廃止はしていない。因ってルイ・ドゥ・アルディは適用除外にあたらない」と言い出した。
古から続く慣習を守ることに親族達の大多数は賛成であったから、親族会はルイに婚姻前にアルディ邸に移り住むように、と宣旨のように彼に要求した。
最初は、自由奔放な愛娘の言い分通り、ルイの住居を改装し、そこに彼女が移り住んで準備を整え、結婚後はアルディ邸に別邸を構えて住むという話で進んでいたのに。

父親の思惑はお見通しだ。
彼女は運び込まれたばかりの真新しいベッドに倒れ込んだ。
まだ新品の匂いがする。

・・・ルイはアルディ邸の別棟に長らく住んでいた。
正確に言えば、ルイはアルディ邸の当主の実子として、アルディ邸に住んでいたことがあり、成人してからは外に出て別に居住していたが、この別棟はルイが住んでいた場所だ。
今は彼女が使用している。
ルイが寝泊まりしても充分過ぎるほどに広いし部屋はたくさんある。
しかし、今日から彼女が本邸に移り、ここはルイが使用することになる。

ルイは彼女の教育係であったので、何度かここに足を運んだこともあるが、決して中に入ろうとはしなかった。
いつも本邸で打合せや用事を済ませて帰ってしまう。
そもそも、アルディ邸に足を踏み入れることさえ滅多にない。
薔薇園を散歩しようと言っても彼はさっさと帰ってしまう。
昔、薔薇園の温室で不幸な事故があった。
彼はその時に重傷を負っており、その時のことを思い出すのだろうと、彼女は想像していたが、それだけが理由ではないことも知っていた。
その時に焼失してしまったアルディ家に多数存在する、彼女の父が品種改良をした新種の薔薇たちの復元に尽力したのはルイだ。
だから、温室の薔薇や薔薇園で咲き誇る薔薇たちに興味がないわけではない。

・・・・彼女は知っている。彼女の母を見つめる、ルイの切ない青灰色の瞳の色を。
・・・・彼女は知っている。時折、彼女の顔を見て、息を潜める僅かな呼吸音の差を。

寂しいわけではない。でも、苦しい。
愛する人と結ばれるのに、うかない顔をしているね、と言われた。
でも、愛しているから苦しい。愛しているから悲しい。

彼女は俯せになって、広いベッドのシーツに顔を埋めた。
茶色の巻き毛が飛び散って、彼女の頬にかかる。
両手両脚を伸ばした。
若い肢体がベッドの上で大きく弧を描いて伸びていく。
運び込まれた真新しいベッドが少し軋んだ。
ルイが居住するために、あれこれ・・・考えに考え抜いて家具を揃えた。
短期滞在なのにそれほどそこに労力を割くなと忠告されたが、それでもルイのためにあれこれ考えるのは楽しい作業だ。
準備に追われてどんなに時間がなくても、それだけは厭わずに準備に勤しんだ。
最初、彼は非常に趣味が良いので、自分で選ぶのかと思ったが、彼女に素っ気なく「任せる」と言っただけだった。

ルイ・ドゥ・アルディは完璧だ。
そして、この結婚は誰もが望んでいる。
彼の両親も、彼女の両親も。
何より彼女自身が。

血が濃すぎると眉を顰める者も居るが、それは問題にしていない。
若々しい彼と本当に若い彼女との年齢差を気にする者達も居る。
でもそれを同じように年齢差のある当主夫妻を目の前にして声高に言う者は居ない。
そしてルイはこの選択に対して、ウイと言ってくれた。
彼は賛成しないことに対しては容赦がないし、次期当主として長い時間をアルディ家に捧げているルイの発言は絶大だ。
何より、彼女が一番望んでいる。ルイの傍に居たいという強烈な欲求があり、これを諦めること何てできない。彼女は小さいときから彼を見つめてきた。これからもそうする。
彼がたとえ・・たとえ、誰を愛していようとも。
あの人を愛している彼を愛している。
これほど彼女の魂が彼を求めるのは、彼女が彼を求めてやまないから。
それなのに気鬱な気分が彼女を襲う。

大きく溜息をついて、彼女は顔をシーツに埋めた。

―――俯せに眠るのは、恋をしているから

そう聞いたことがある。
苦しいから耐えきれずに臥せる。
それなのに恋の苦しみを逃がさないように俯せる。
この愛のパラドクスについて、彼女はいつも考える。
確かに彼女はルイに恋している。ルイを心から愛している。
彼を想うと心が安らぐ。心が躍る。それなのに、苦しい。
彼が愛している人を、彼女もこよなく愛している。
入り込めない絆が彼らにはある。
彼女と同じように、あの人と彼は小さいときからずっと・・・時間を重ねていた。
同じように彼女を育て、見つめ続けた当主と結ばれたあの人をルイはその後も見つめ続けた。
彼の愛は永遠だ。
・・・・永遠に、あの永遠の晄を焦がれ続ける。
それでも良い。そんな不器用なルイが好きだった。
完璧と言われて、星辰の子と称賛される彼は、愛に関してだけはいつも・・・頑なだった。
ルイが彼女という婚約者がいる身でありながら、時折・・・耐えきれない激情に身を投じて、一瞬の恋でもない情熱を味わっていることも知っている。
あの人の代わりに誰かの温もりを代用していることも知っている。
だから、早く大人になって、彼女が彼の贖罪の焔とでも言うべき熱情を受け止めようと思った。

彼女はようやく成人した。
誕生日を迎えたその日に彼の元に行った。
すぐにでも妻にして欲しいと言った。
ランスの教会で豪勢な式を挙げなくても良い。
ふたりで静かに、あの海の近くの小さな教会で式を挙げようと言った。
でもルイは静かに彼女の茶色の髪を撫でて、困った人だと少し寂しそうに笑った。
彼は彼女に情熱的な抱擁をしない。彼女の髪を撫でて、こめかみにキスをする。
そこで彼女は思い知った。
彼はもう二度と同じような恋情の炎を燃やすことはないのだと。
繰り返すことはしないと彼は誓ってしまったのだと。

挙式前に訪れる特有の感情なのかもしれない。
でも、これはずっと・・・ずっとついて回ることなのだ。
愛は優劣がない。
愛には・・・愛にはいろいろな形態があり、彼女なりの愛し方があるということは知っている。
この気持ちにアルディ家の規則のように決まり事があって、それを順番に護っていけばやがて消えてなくなるのだろうか。

こうして俯せに寝る。
彼と一緒に臥所を共にするようになっても、彼女は彼の傍らで俯せになって、苦しさを内包したまま眠る。

茶色の巻き毛の間から、部屋の窓から薔薇園とアルディ邸の本邸を眺めた。
ルイの就寝を妨げないように、防音設備が強化されて、遮光にも優れた室内に改装された。
薔薇の透かし模様が入っているドレープの利いたカーテンも真新しい。
そこから見える薔薇園と、アルディ邸の本邸を彼はどんな気持ちで眺めていたのだろうか。
ルイは若いときここに住んでいた。
彼女のように、ひっきりなしに誰かがここを訪れて、お茶会をしたり、薔薇の剪定方法を習ったりすることはしなかったのだろう。
誰もがルイの過去のことについては語らない。ルイはもっと語らない。
語るほど過去がないからとルイは自嘲気味に笑って言う。

少し・・・少し涙が出た。

彼が望んでこの結婚に踏み切ろうとしているのか、彼女は判別がつかなかった。

ああ、そうか・・・・・・。

彼女は薄い茶色の瞳を閉じた。
彼女は、一度も。一度も聞いていないからだ。
彼から。
ルイ・ドゥ・アルディから、愛しているよと言われたことがなかったから。
人は貪欲だ。自分が捧げている愛に見返りを求めたくなる。
愛した人と結婚できる。永遠を誓うことができる。
どんなに愛していても結婚できない場合がある。
だから彼女は倖せなのだ。誰かと比べる倖せは倖せではないと思うから、考えたこともなかった。
彼女は、彼女が生きている中で今が一番倖せのはずだった。
それなのに・・・それなのに・・・・

彼女は茶色の瞳を閉じた。
目頭から、涙がこぼれ落ちた。

父でもない、兄にもなれない。
そう言い切った彼と出会ったあの夕陽を思い出していた。
一目で。
そう、一目で魅了された。
天使が微笑んだと思った。
海に天使がやって来た。
あまりにも夕陽が美しいから。
そう思った。

彼女はまた一筋、涙を落とした。
糊の利いた真新しいシーツに涙が染みこんでいく。
窓から柔らかい陽射しが入り込んできて、室内を薄い橙に染めた。
あの海で見るような強烈な赤い陽射しはここには入らない。

ルイ・・・・・

彼女は呟いた。
■中編

気がついたら辺りはすっかり薄暗くなっていた。
彼女を呼び出す携帯電話の端末が、ポケットで点滅していた。
それだけが暗い部屋の中で光っていた。
・・・・いつの間にか眠ってしまったらしい。
ゆっくりと起きあがるが、全身が痺れていた。
寝返りを打たずにそのまま深く眠っていたようだ。

見れば、アルディ邸に照明がついている。
今日はルイがやってくる初日だから、本邸でささやかではあるけれど、家族で食事会をしようと、彼女の母が提案してくれた。
・・・手伝いをしに来るように、と言われていたのに、ここで眠り込んでしまった。
その呼び出しの着信なのだろうと思ったが、どうにも気鬱だった。
あの人を見つめるルイの視線を見るのが辛い。
いつものように、闊達に微笑むことができるだろうか。

目がきちんと開かない。
泣きながら眠ってしまったからだった。
ゆっくりと起き上がり、彼女は少し溜息を漏らした。
後でベッドメイキングをもう一度御願いしなければならない。
彼女の母親はこれほどの家柄の者であるにも関わらず、自分の事は自分でするようにという主義で、こども達に徹底して教え込んだ。
誰かに給仕されることなんて考えられない世界だってあるのだ、ということを彼女の母よく知っていたからだ。
それでも、彼女の拙いメイキングでルイが顔をしかめるより、誰かに御願いしてまででも、快適に過ごす空間を与えたい。
両手で顔を覆った。
何度か顔を上下させて、強張った筋肉をほぐしていく。

・・・・・・その時だった。
彼女は動きを止めた。
薄い茶色の瞳をゆっくりと開いた。

****

「来ていたの？」
ルイは荷物を持って来ていない。
文字通り、体一つでここにやって来たらしい。
階下に降りて、広いガラス張りのリビングに明かりが付いていて、そこで薔薇園とアルディ邸を長めながらルイが煙草を吸っているところだった。

彼の喫煙癖は改善されない。
昔よりは本数が少なくなったし、彼は吸わないと決めると何日も禁煙状態を継続できる。
でも止めない。
「ここは禁煙よ」
「オレの別棟を勝手に使う者に言われたくないね」
彼は背中を向けたまま冷たくそう言った。
彼がここを使用していたときより、随分と変わってしまった。
でも、彼はこうして・・・ガラス張りの窓越しに、夜鏡に映る自分の姿を見て・・・そして、アルディ邸に灯る晄を見つめて、いつもそうして煙草を燻らせていたのかと思うと、彼女は胸が潰されそうに酷く痛んだ。
ここにはルイの孤独で苦しい思いしか残されていない。
本人達も含めて、関係者は多くを話さないが、彼と当時実父とされた当主の不仲が長らく続いていたことについては知っている。

本邸に住まうように、変更をすれば良かった。
明日にでもそうしよう。
でも、それではかえってルイが気遣いをしてしまうのではないかと思った。

そう思った時だった。
「こちらで問題ない」
彼女の心の声を聴いたように、ルイがそう言った。
「あちらにはこどもが集って始終騒がしい。・・・・・・こちらの方が、良い」
彼女はほっと息を吐き出した。
そうだね、と言って笑った。
「・・・・・呼び出しに応じないので、どこに行っているのかと、探していたぞ」
ルイがそう言ったので、彼女はちょっと笑った。
誰が彼女を探していたのか、ルイが言葉を省略したからだ。
彼が背中を向けているのが今はありがたかった。
彼女の泣き顔を照明の下で見られるのは恥ずかしい。

貴女は笑顔が似合う。

ルイがいつかそう言ってくれた。だから泣かないことにした。
苦しくて悲しくて辛いこともたまにはある。
でも、泣かないで、そういう時には微笑むことにした。

彼のひとことひとことを忘れることができない。
それは血筋であったけれど、彼の事に関してだけは、彼女は何もかもを記憶し続ける。
忘れたいような記憶もあるのに。
それでも、彼女は記憶に刻む。魂に刻む。
ルイをずっと見ていようという気持ちが覆ることはない。

「ベッドルームでうたた寝していますって連絡してくれたって良いのに」
きっと、また母と父に怒られてしまう。
彼女は肩をすくめた。夜鏡に映る若い者のしぐさに、彼は背中を向けていながらも苦笑した。

「それより・・・・これ、ありがとう」
彼女は左腕を持ち上げて、右手で指さした。
細い白い腕には、彼女の肌によく似合った美しいブレスレットが輝いていた。
アルディ家の家紋が入っている。そして良く見ると薔薇をあしらった花弁をデザインした、補足華奢なブレスレットだった。他の装飾の邪魔にならないようにという配慮があり、身につけていることを忘れるほど軽量だった。非常に美しい。照明にあてられて、それは上品な輝きを放っていた。

「指輪ならもっと嬉しいのだけれど」
「紛失するだろう」
ルイからもらったものを紛失することはない。
彼女はちょっと笑った。
「よくある恋愛話のようにはいかないわね」
「よくある恋愛をしたかったらどこかに落ちているよ」
彼は彼女に言い返した。
彼はいつもそうだった。

ルイは執着してはいけないというアルディ家の教えや決まりを遵守する。
彼女が婚約を破棄したいと言ったら然るべき手続きを取るまでの日程を即座に考え始めるのだろう。
わかっている。彼は妻を娶る気持ちがない。
だから彼女が婚約を解消したいと言ってくることをずっと待っていることも。
そうすれば、彼はこれから一生誰とも結婚しないで過ごすことができる。
でもそれは赦さない。
彼女は赦さないことにした。
わかっているけれども、これだけは譲れない。

また少し泣きそうになる。
「指輪は・・・結婚式まで待つことにするわ」
「そうした方が無難だな」
彼女はゆっくりと彼の隣に近づいた。
ルイが煙草を揉み消した。
彼女が煙草を好まないことを知っているからだ。

「・・・・おかえりなさい」
彼は今日からここから外出することになる。
業務は多忙を極めている。
その合間に彼はここに帰ってくると言うより、休息するためだけに立ち寄る。
それでも良い。
彼が何を見つめていたのか尋ねなかった。
今は左腕に輝く彼からの贈り物で胸がいっぱいだった。

眠っている彼女の腕に、彼が自らこれを結んでくれた。
たったそれだけのささやかな行為であるのに、彼女は胸が熱くなる。
ルイの背中に、彼女は額を押しつけた。
彼の背中は懐かしい。
こうすると落ち着く。
ルイ、こちらを見ないで欲しい。今は涙顔だから。
彼女はそう心の中で呟いた。

「起こしてくれれば良かったのに」
「起きなかった」
彼は持っていた灰皿を、テーブルの上に置くように、と彼女に用事を言い付けた。
そして後ろを向いたまま、クリスタルの灰皿を差し出す。
はいはい、と彼女は苦笑してそれを受け取り、近くのテーブルの上に置いた。
彼が好む家財道具ではないかもしれない。インテリアも気にいらないのかな。
まったく興味がないかとでも言うかのように、彼は久方ぶりに訪れる彼の居住棟に入るというのに、まったく感想を述べなかった。

彼に表情が見えないことを幸いに、彼女は少し唇を噛んだ。
■後編

その時だった。
彼が、彼女の名前を呼んだ。
はい、と言って顔を上げたとき。
次の瞬間には彼の胸の中に居た。
彼は乗馬とフェンシングの名手だ。鍛えられた体は経年を全く感じさせない。
その彼の厚い胸の中に、息も出来ないくらい強く抱き締められて、彼女は小さく悲鳴をあげた。
この胸の上で微睡んだ幼い日々を経験しているのに。
彼女は真っ赤になって、逃れようと身を捩った。
いつものルイではなかったからだ。

「ルイ・・・」
顎を強く掴まれて、上を向かされた。泣いて腫らした目を見られたくない。
彼女はイヤだと言って身動いだ。
茶色の目を瞑った。
赤く充血した瞳を彼に見られてしまった。
青灰色の瞳が怒気を含んでいるのがちらりと見えて、彼女は目を瞑って隠そうとした。
しかし彼は彼女を胸に強く抱き、彼女の小さな顎をそのまま引いて・・・・・

一瞬、何が起こったのかわからなかった。
ルイが見事な金髪を彼女の頬に落とした。
端正な顔を傾けて、彼女に唇を落としたから。

薄い酷薄そうな唇が彼女の桜色の唇を覆った。
突然の出来事で、彼女が呼吸をすることができずに唇を開くと、ルイはそこに彼を滑り込ませた。
彼女の唇を強く吸い、何度も角度を変えて、長い激しいキスをした。何度も。
それは彼女が夢見た・・・・彼からの情熱的な口吻だった。
高い鼻梁が彼女の頬にあたり、彼女はまったくこれまで彼から教わったことのない問いかけに応えることができない。どうすれば良いのかわからない。

家族のキスではない。
いつも交わす、こめかみや頬に落とす慈愛のキスではなかった。

・・・・・煙草の味がした。

膝の力が抜けて、虚脱状態になる。
彼女は彼の愛の嵐に・・・ただ戸惑うばかりだった。
あれほど・・・・激しく彼女を荒らしてくれないだろうかと願っていたのに。

一緒に落日を見つめた。旭陽を見た。海を見て育った。
儀礼一般では伝えきれないものを教わった。
彼から何もかもを教わったというのに。

「・・・・・オレに応えて・・・」
彼が囁いた。
その時に彼が・・・男の人の眼差しで、彼女の薄い茶色の瞳をのぞき込んでいる視線と出会った。
「教えてもらっていない」
「今、教えている」
彼は唇の端を歪めた。
そしてまた彼女に息ができないほど激しくて深いキスを落とす。
彼のどこにそんな熱情があるのか、と酷く彼女が驚くほどに。
ルイは決して、彼女にはそんな感情を見せないのに。
彼女は眉根を寄せて、遣る瀬無い思いを抱えながら・・・彼のキスに応えようとしたが、力が抜けてしまって何もすることができない。ただ、受け止めるだけだ。

「これで望み通り？」
彼がやがて唇を離してそう言ったので、彼女はその言葉を聞いて、激しく渦巻いて彼女の体を巡っていた何かがすっと熱を引いて消えていくのを感じた。
茶色の瞳から、涙が落ちた。
ルイ、と呟いた。
笑顔が似合うよ、と言ってくれたのに。また、彼女は泣いてしまった。今度はルイの前で。

ルイは彼女の物思いを察して彼女の望むとおりにしただけだ。
でも、彼女は傷ついた。
彼が・・・・彼が彼女のことを愛していないということではない。
彼はいつも慈しんでくれている。
ルイは彼女に愛を教えた。生命の素晴らしさを教えた。
そして悲しみも苦しみも何もかもを彼は教え続けている。
彼女の唇が震えた。
涙を堪えて拳を作ったが、うまく力が入らない。

ルイは彼女を抱いたまま、細く長い指で滑らかな白い彼女の頬からこぼれ落ちる涙を拭った。
「・・・・貴女が泣いて眠るからだよ」
ルイは静かにそう言った。
堰を切ったように、彼女の大きな瞳から次々に流れ落ちる恋水（※恋のために流す涙のこと）を、彼は大きな手の平で受け止めた。
「・・・・・・・・・・怒っているの？」
「少しだけ苛立っている」
彼は滅多に自分の感情を話さないのに、彼女にそう言った。
怒って呆れているのに、彼女の涙を受け続ける。怒って呆れているのに、彼女に接吻する。
・・・・わからないよ、ルイ
彼女はそう言った。彼は溜息を漏らした。
「貴女の喜ぶ顔が見たくて、贈り物をした。目覚めてから貴女がどんな感想を話すのかを待って、かなりの時間ここで待っていた。それなのに貴女はそうして泣く。・・・・・指輪はダメだ。常に身につけられるように・・・完全防水のブレスレットにしたのに」
彼女はごめんなさい、と言った。
もう涙は出なかった。
ルイは指を彼女の頬から離すと、今度は彼の胸の上に乗った彼女の手の平を、そっと握った。
小さな手だった。白く滑らかだ。

ルイは知らなかった。
彼女はいつから俯せになって愛に焦がれて眠りに落ちるようになったのだろう。
彼女の幼い時には一緒に眠ったこともある。
しかしルイは彼女が安らかに嬉しそうに眠る顔しか知らなかった。
それなのに、彼女は苦悶の表情で、涙を流して眠る。苦しいと言う。
ルイの心に住み続ける人のことについて、彼女は理解している。
それでも良いと言う。
あの人を愛しているルイを愛していると言う。・・・・あの人と同じように。
そして、ルイは彼女に、あの人と同じ愛は捧げられない。
愛に優劣はないからどちらが勝るということはないのよ、と彼女は言う。
愛がたくさんある人は一番倖せに近いのよ、と彼女は言う。
ひとつの愛しか定められないルイに、一緒に倖せになろうと言う。
この孤独な愛を持ったままで良いから、一緒に生きようと言う。
そんなことは彼は教えなかったのに、彼女は彼に愛を教える。
彼女なりの愛の表現で。

・・・・・・そんな彼女がまた涙を流す。

彼は大きく息を吸った。
「本邸では主賓を待ちかねている。・・・・行くぞ」
「はい。・・・・あの、ルイ。あの・・・」
彼女がそう言ったので、ルイは彼女から体を離した。
茶色の髪の茶色の瞳の彼女は、ルイに微笑んだ。
少し恥ずかしそうに、はにかんだ微笑みだった。

一緒に過ごした、あの人の笑顔と同じだった。
「ルイ、私はルイを愛しているの。・・・・一緒にどこまでも行きたいと思うほどに」
彼女は微笑んだ。そして首を傾げた。少し・・・ルイが黙っていたからだ。
彼女の口から愛していると言う言葉を聞いたのは初めてだった。
彼女はいつも・・・ルイに好きだ、と言う。決して愛しているとは言わない。
「結婚式までとっておこうと思ったのに」
彼女はまた笑った。
彼がすっと・・・切れ長の双眸を細めて、眩しそうに彼女を見た。

「おいで」
ルイはもう一度彼女を抱き締めた。
今度はいつもの彼だった。
どこまでも優しく壊れ物を扱うかのような抱擁。
彼女も腕を伸ばして彼の背中に手を回した。
「・・・・倖せになれるよ、私と一緒なら」
「そうかな・・・」
彼は苦笑したが、茶色の髪に顔を埋めた。
柔らかい髪から、彼女の香りがする。
彼女の額に、唇を寄せた。
ルイ・ドゥ・アルディの最上級の愛の表現だ。
彼女は目を瞑った。
安心する。
安らぐ。

彼からは煙草の香りがした。
彼は忘れられない記憶に思いを馳せるときには必ず煙草を吸う。
それを禁じることはできない。
でも、そう言う時には・・・これからは一緒に、夕陽を見に行こう。
朝焼けを一緒に見よう。
・・・・海に言って煌めく波間を眺めよう。
彼女はそう思った。

「忘れられないのは私とルイの血筋だから」
・・・・・だから忘れられないことを苦しまなくても良い。
彼女はぽつりと言った。
ずっと傍で手を握りしめて・・・一緒に居よう。

「お腹がすいたね、もうそろそろ行こうか」
彼女はそう言った。
騒がしいのは嫌いだ、とルイ・ドゥ・アルディが言ったが今日は我慢して、と彼女は笑った。
主賓の居ない宴が始まろうとしていた。

「寝るときはいつもどおり静かになっているはずだから」
彼女が言うと、ルイは冷たく言った。
「・・・・今日は、枕が違う」
彼女があっと声を上げた。彼はいつもポプリを敷き詰めた枕で休む。深い睡眠を促すために。
・・・・・忘れていた。
彼女は決して忘れないのに。

「ごめんなさい、今から用意する・・」
「良いよ」
ルイはくすりと笑った。とても若く見える・・・そんな笑いだった。
「今日はこの香りが良い」
そう言って、彼女の肩を抱いて、茶色の巻き毛に顔を寄せ、キスをひとつ落とした。
彼女の顔が赤くなった。彼が何を言っているのか、わかったからだ。
「信じられない。・・・・花嫁の家に滞在するのはアルディ家の習慣だからでしょう」
「オレの別棟だと主張しているのに、貴女が勝手に自分の棟にしたからだろう」
シーツは糊が利きすぎだ、と彼は批判した。
花婿が花嫁の家に滞在するというのは、そういうことだよ、と彼は言ったが、彼女は知りませんと顔を赤くして首を振った。
「そんなのどこにも規則類集に載っていません」
「適用除外という言葉を知っているかな？」
彼はおかしそうに言った。
「貴女はアルディ家の者であるけれども・・・あなたの祖母の血が濃く出ているから。格例や風儀を守り、固く遵守することについて異論があるだろうが、貴女の持論はオレには適用されない」
それからふと、可笑しそうに声を漏らして笑った。
「それから・・・アルディ家の者なのに、居処を知らせないでふらふらするのは止めろ。・・・これからはそうもいかない」
彼女はそこで思い当たる節があったようで、茶色の瞳を大きくした。
「・・・・ルイ・・・まさかこれ・・・」
耳が良い彼女は、左腕に光る彼からの贈り物に、何が込められているのかわかったようだ。

「そう。GPSを付けて置いた。それから、IDも入っているから、勝手に別棟に入らないように。
・・・もちろんパスコードも変更済みだ」
どうして着脱可能な指輪でないのか。
どうして「完全防水」と言ったのか。
どうして・・・彼女が外すことのできないようにブレスレットを彼自らが嵌めたのか。
今になってようやくわかったの？耳の良い貴女が、その電子音が聞こえないのなら、是非商品化しようと彼は冷笑した。
彼はそこまで言うと、長身を屈めて、彼女の頬にキスをした。
彼女はそれでは誤魔化されない、と言って怒り出した。

「誤魔化す・・・？そんなにここに入り込みたいなら、適用除外を使え。・・・このブレスレットの使用には、但し書きがある。他の権限を持つIDと接触すると、権限が消滅し、他の権限に書き換えられる。それは離れるまで有効だ、と」
いつになく言葉が多いルイは、不敵に笑った。
彼が何を言っているのか理解できずに、彼女は少し考え込んでいたが、やがて、わかったといって笑った。

「こうすれば良いのね」
そう言って、彼の指に、彼女の華奢な白い指を絡めた。
ルイはその無邪気な姿を見て、苦笑した。
彼は一緒に夜を過ごそうと言っているのに。
成年に達してなお、この闊達さは幼すぎる。
しかしいつも朗らかで笑顔を絶やさず、ルイだけを見つめ続ける・・・暁光の人の手を離すことはしなかった。

ルイは彼女に届かない声を発した。

離れてはいけない。ずっと一緒だ。朝日を見に行こう。夕陽を眺めよう。海に還ろう。

この場所は彼と彼女が育った棟だ。
でも、彼らが帰る場所は別にある。
海の見える、あの屋敷で一緒に年を重ねていく。
早く改装が終わればよいのに。
改造後にあの部屋で次に朝日を見るときは・・・その時は彼女は彼の妻として眺めることになる。

彼は彼女の指の感触を感じながら・・・決して足を踏み入れることのなかったアルディ邸の晄に向かって歩み始めた。彼女は、ルイに歩幅が違うからもっとゆっくり歩けと言ったが彼はそれに従わなかった。
しかし、彼女は彼と繋いだ指を離すことはしなかった。

（FIN）

nil admirari　前編

■01

私は、黒須昶が嫌いだ。

彼女がこの学校に転校してきたときから何となく「虫が好かない」相手であると認識した。
茶色の髪の茶色の瞳の少女は、学期が変わるころにやって来た。
この学校では、昔ながらの伝統を重んじて、年次制度が廃止されたこの国では珍しく、三学期分期制度を採用している。
昔で言うところの「二学期」が始まる、夏の終わりに彼女は突如として現れた。
引っ越しが突然決まったので、と言って中途入学してきた彼女の言葉に、虚偽の香りを感じた。
突然のことであれば、完全受注の制服や身の回りの支度を用意することなどできない。
そして寮生となって、この学舎にあっというまに馴染んでしまった。
彼女は長らくパリの日本人学校に居たというので、日本語は流暢だったが、素晴らしい運動能力を兼ね備えた体軀だった。
勉強も良くできる方だと思われる。

謎めいた少女が、ほとんど出入りのないこの学校にやってきて、噂や羨望の的にならないわけがなかった。

しかし・・・彼女はあっという間に目立たなくなってしまった。
私は注意深く彼女を観察していた。
嫌いというのは、とても恐ろしいことだといつも言われていた。
誰かが困ったり悲しくなったり不幸になったりすることを願うことだとある人に言われていたからだ。
でも、彼女は誰にでも好かれるかわりに、誰とも仲良くしなかった。
同性のこの時期特有の共有感というものを持ち合わせていなかった。

この学校では、生徒数が少なく、クラス替えをしても皆が顔見知りという規模のクラス編成を特徴としていた。
だから、中途入学はよほどのコネクションがなければ許可されることはない。

彼女の母親も、そういう流転が多かったとだけ聞いたことがあったが、私はそれを聞いてなお、彼女と相容れないと思った。
彼女の保護者は、両親ではない。
幼い時に飛行機事故で行方がわからないということを随分後になって知った。
彼女は柔和な微笑みで、誰にも優しい。
けれども、私はそんな黒須昶が嫌いだった。

誰にでも優しいのは、誰にでも優しくないのと同じだ。
誰にでも好かれるのは、誰にでも好かれないのと同じだ。

彼女は嫌われるのが厭で、存在感の消滅を自ら望んで図っているように見えた。

茶色の瞳の茶色の髪の少女は、何もかもが違っていた。
洗練された物腰に、帰国子女であるのに日本語を完璧に操る。
クォーターであるということ以上の何かが備わっていて、彼女はひときわ目立っていた。
それなのに、目立たないようにやり過ごそうとしている性根がどうにも私の癇に障った。

「ヒカルは柳のような人ねぇ」
私はそう言って彼女を辱めようとしたことがある。
彼女の核心に誰も触れることが出来ないのに、彼女はいともたやすく人に近づくからだ。
どんな人間にも平等であるが、それはどんな人間にも不平等だということを、彼女自身が知っているように思えた。
私がそう言うと、彼女はちょっと悲しそうな顔した。
けれども、それは誰かに対して優先順位をつけていると肯定して、宣言しているようなものではないか。
私はそう思って抗議したことがあった。
すると、彼女は笑った。とても儚い微笑みだった。
「そうかもしれない。でも、これが私なの」

誰にでも親切な彼女。
誰にでも近付ける彼女。

それなのに・・・彼女は決して誰にも自分を近付けない。

私は彼女と距離を保つことにした。
彼女と一緒に居たいと願う者は多かったが、私は決して賛同しなかった。
室内が二分されていると教師に指摘されたこともあったが、私はそれでも彼女の存在を無視した。
黒須昶はそれでも優等生を演じきった。

いつも物静かで、そしていつも微笑みを絶やしたことはなかった。
彼女の声高な笑い声や、涙を流して憤る様は誰も見たことがない。
彼女が居るクラスは誰もが諍いを起こすこともなく、皆が仲良く過ごし、ただただ柔和な空気を泳いでいるような印象を受けた。
私は窒息しそうだ、とせせら笑ったが。
徐々に酸素を抜かれていく観賞魚のようだと嗤った。

私の両親は私という存在を忘れてしまったかのように、ほとんど家にない。
小等部であったときからそうだった。幼い年齢で寮生活を行う者はほとんど居ない。
私はこの学校では非常に希な古株だった。ここが、私の家のようなものだ。
寮母も代替わりして幾人かを見送った。

寮長になったこともあったが、それはとても煩雑で権力の象徴とは言い難いことがすぐにわかり、それ以来私はできるだけ人との関わり合いを持たないように、自分のテリトリを護っていくようにしている。
そんな孤独を親は知らない。気まぐれに、世界のあちこちから、絵はがきやカードや季節のプレゼントや・・・この年齢には余るほどの多額の小遣いを毎月振り込むだけで、彼らは教育を施していると錯覚している。
どんなに、恵まれていても、親として・・・人を育てることも自分を育てることもできない人間が居ることを思い知る。
そして、私は・・・大人になったから万能になるわけではないのだ、と早々に悟ってしまった。

だからこそ。黒須昶のあの諦観溢れる態度に苛つくのかもしれない。
余所者という意識ではなく、異端者という敵愾心でもない。
ただただ・・・彼女は何もかもを諦めているような気がした。
だから、腹立たしいのだ。

・・・やがて、彼女が、この国でも名の知られるクロス・グループの孫娘であることがわかった。
そして、あの親日家で有名なフランスの事業家であるシャルル・ドゥ・アルディの監護権を受けて、彼の援助で生活していることを知ると、誰もが彼女への接遇を変更した。
ひた隠しにしていたであろうに、人の口に戸は立てられない。
シャルル・ドゥ・アルディを当主とする古の家柄であり、大変な親日家でもあり、この国に優遇措置と称していくつもの恩恵をもたらしている彼のことを知らない者はこの学苑には居ない。
ここは裕福な層が多く集う場所で、通学による誘拐や外部からの影響を懼れて寮生活を推奨しているくらい閉ざされた場所ではあるけれど、こう言った情報に関しては、どこよりも早く通達されるのだ。

それでも彼女は高慢にならなかった。女王の座に上り詰めるだけの権力を持っていたのに彼女はあっさり抛棄した。

誰にも優しい彼女。
誰にも心を開かない彼女。

参観日でも、誰も訪れない。
彼女のバースデーには寮母からささやかなバースデーケーキが贈られるだけだったが、それをいつも彼女は別の部屋の者にわけることも、口にすることもなかった。
別室の寮生に誕生日であることを知られるのが怖かったのだろうと推測する。
いつだったか、誕生日の話をしていて、彼女がその話をした日と同月に、誕生日を迎えることを知ったことがあった。周囲の者は誕生日の月日を知りたがったが、彼女は曖昧に微笑んで・・・とうとう、最後まで答えなかった。
この狭い世界では、楽しみはほとんどない。しかも少人数だから、誰がいつ誕生日で、誰を婚約していて・・そして両親は何をしている人なのかということまで熟知していることが当然であったのに、彼女のことは卒業まで、ほとんどよくわからなかった。

不思議な人だ。
しかし、個人情報を遵守するこの学校は、生年月日を公にすることはしない。
帰国子女が多く、学年を遅らせて入学する者が居るからだ。
大人にとってはひとつふたつの年齢差はあまり関係がないのかもしれないが、この世代の当人達にとってみれば重大事だ。

だから。
普通なら、生年はともかくとして、積極的に自分自身で自分の祝い事をアピールするのが常のに、彼女はそうしなかったので、私はそこで滅多に開かない口を開いてずけずけと尋ねてみた。
「黒須さんは、秘密主義よね」
私の棘のある言い方に、彼女は臆することなく微笑んだ。
そして答える代わりに、こう言ったのだ。
「貴女だけはいつも変わらない。だから安心する」
謎めいた言葉であり、誰もが彼女に何かを話しかけて欲しいと思っているのに、彼女に特別な表現をされたことに対して嬉しく思うどころか、私は酷く困惑した。
「・・・・そうね。貴女に対する評価はいつも一定よ」
私はそれだけ言うのがやっとだった。

なぜなら、彼女が固い殻に閉じこもっているのと同じように、私も・・・この苑の中で朽ち果てそうな程の長い時間を過ごして、変化を嫌っている生き物に成り下がっていたからだった。だから異質な彼女が気になり、そしてどこか煙たく思うのだ。
自分にまったく関係ないのに。無視すれば良いのに。
・・しかし彼女はまったく無視のできない人物だったのだ。
時折遠くを見る彼女の眼差しが・・やはりどこか気になった。
茶色の瞳で空を見上げて、柔らかい雨が降ると、学舎の庭に咲く薔薇の花片に目を細める。
そんな絵画の一枚のような彼女の静止した姿が、今でも脳裏に焼き付いている。
だから。だから、私は、私は変化していないと彼女に言われて、言葉を失ったのだ。
あの頃は、他者の一言が、ずっと忘れられないという時代なのだと後になって振り返って納得する頃がやって来るとは思っていなかった。
その時は・・・ただ、言葉を失っただけだった。私はこれほど彼女を無視しているのに、黒須昶は私のことをきちんと認識していたのだ。
指摘をされて、悔しかったのか・・それとも嬉しかったのか・・・・動揺していたのでよく思い出せなかった。

私は変わり者で通っていたから、友達もいなかった。
世間で言う「顔見知り」は多かったが私は決して自分の部屋に誰も招かなかった。
・・・協調性を養う複数人での同室制度は、私には適用されなかった。
長らく寮生活をしていると、裕福な者が優遇されるのではなく、長くそこで生活をする者から優遇されていく。
私は両方の条件を兼ね備えていたので・・・つまり長らくこの宿舎に留まる主のような存在のひとりであったし、家も裕福な部類に入ると思う。
だから、庭付きの角部屋を与えられた時には、そうか、と思っただけだった。
嬉しく思うこともなかった。
庭に植えるものも、何もなかったし・・・日中は不在にしているから、夏の斜陽がきついな、と逆に煩わしいと思ったものだった。
しかし、ここは自由だった。
この角際の部屋というのは植垣が高くそびえ立っていて、こちら側がよく見えないように出来ているが実際は来訪者の父兄もよく通る公道に面していて、外の往来がよく見えるのである。

もっとも、来訪者に解放するのは年に数回であり、その騒がしさを我慢すれば、庭付きの個室で他の部屋よりも若干広い場所を占有できる。
ひとりが好きだというわけではなかった。
けれども、私は・・・・時々、普通の暮らしというものがどんなものであるか、夢想する時間が欲しかった。
普通って何だろう。
私には両親が居て何もかもに恵まれているのに、散失感を拭うことが出来ない。
何かに憂える必要のない空間に棲息しているのに、何か・・・黒須昶のように諦観の念にも似た静けさを持つことが出来ない
皆が休暇の度に、自宅の宿泊申請を出すにも関わらず、私はほとんど外出しなかった。
まるで監獄に居るかのようであったけれど、私にとってみれば外の世界が監獄だった。
卒業すれば、留学しようと決めていた。
だから、この国の世間一般の事情に通じている必要はなかったし、古式ゆかしい何もかもが古典的なこの空間が何より落ち着いた。
そう言う意味で言えば、黒須昶が私に向かって言った言葉である「変わらない貴女」というのはぴったりの言葉だったのだ。
■02

それはある日突然のことだった。
私にとっては突然であったが、黒須昶は「いつその日が訪れるか」と待ち侘びていたらしい。
まったく彼女らしかった。
平静を装っていたのだ。

柔らかい・・・柔らかい雨が降っている日のことだった。
長い休みの始まりの時だった。
創立記念日と祝日がうまく重なって、しばらく長い休日が続くということで、皆、事前に外出許可や外泊許可を申請しておくことに抜かりはなかった。
私は相変わらず、居残ることを決め込んで、不在の場合の食事配膳の継続依頼の用紙を出して部屋に戻ってきたばかりだった。
寮生のほとんどが不在になってしまうので、こう言った場合には事前に申請がある者だけにしか料理が用意されない。
つまり、滞在する者の方が少ないということなのだ。
しかも、ありがたいことに室食で良いと言う厚遇に恵まれる。
家庭の事情であったりする場合を配慮して、ということらしい。
すでに私が帰省しない部類だということは誰もが知っているところだったので、食堂で食べても良かったのだが。
しかしここはマナー取得も重視するので、食事中は同じテーブルに就いた者同士以外では話をすることも禁じられているから、何処で食べても会話のない味気ない食事であることには変わりはない。
ひとりで丸テーブルに座るか、分不相応の広い個室の食事スペースで摂取するか、その程度の違いだ。
誰かと話をしたかったわけではないから、どちらでも良かった。
だから、寮棟内は、廊下ですれ違わない限り、誰かと顔を合わせることをしなくても良い期間であった。私はこの期間が好きだった。中には、帰省しないと惨めだと思う者も居るらしいが、私は私だけの時間を満喫することができてとても解放された気持ちになる。
授業もなく、煩わしい交流もなく・・・そしてとても静かな空間だった。
私は部屋から外に出ないことを決め込んで・・・そして部屋に鍵をかけた。
誰が訪れるわけでもないが、誰にも訪れて欲しくないという私の心の鍵なのかもしれない。
部屋の床を汚さないようにという注意書きも虚しいくらいに、私は要領を得ていた。
図書室で大量の本を借りて、ミネラルウォーターを余分に確保しておく。
夜明けまで本を読んで過ごすこともできたし、今ではインターネットが普及しているので、各部屋から端末操作によって、情操教育とやらに支障が出ない範囲で、好きなだけ閲覧することだって可能なのだ。

私の耳に入る黒須昶という人物について、暇に飽かせてインターネットで調べてみた。彼女の名前から検索できなかったが、彼女の両親の墜落事故のことや、後見人であるアルディ氏のこと・・・そしてクロス・グループがいかに繁栄しているかということについてひととおりの情報を得たが、それ以上のことを想像して、身近な『灰かぶり姫』のことについて興味を膨らませることはしなかった。私は彼女の境遇が羨ましい反動で嫌いなのではなく、彼女の誰も寄せ付けない暖かい冷たさが嫌いだったからだ。
貴賤は問題ない。この学舎では誰もが似たり寄ったりの家庭環境だからだ。
ただ、一つだけ疑問に思った。
なぜ、今、この時に彼女は日本に戻ってきたのかということだった。
彼女の実家や後見人の資力からすると、まったく閉鎖された完全極秘の全寮制に通わせることは容易かったかもしれない。彼女の経歴を華々しいものにするのであれば、わざわざ・・この国に戻すことはなかったのではなかろうか。
そして中途で入学することは滅多なことではあり得ないこの学校にすんなりと入ってきた彼女の事情というものには少しばかり興味が沸いた。
目立ちたくないと思っているのに、こうしてひとつひとつについて触れてみると、彼女の何もかもが際立つのだ。

・・・・だから。

だから、その彼女から伝言メッセージを受けた時には、正直言って途惑った。
食事を一緒にしませんか、という趣旨のメッセージだった。
私はしばらくひとりの時間に耽っていたので、彼女が扉の下にメッセージを残して行ったことにさえ、気がつかなかった。
物音もしないし、施錠されているから留守か日帰りで外出していると思ったのだろうか。
どちらにしても、今日の夕食をこの建物の中で私が取るであろうということを知っていた所業だったので、途惑った次に、私を憐れんでいるかと思って腹が立ってきた。
■03

これまで一度も食事に招かれたことはなかった。
食事に招く、というのは、同じテーブルで同じメニューで食事をしましょう、ということだ。
テーブルマナーが同程度でないと黒須昶の相手は務まらない。

彼女は完璧に訓練されていた。

洗練された物腰、ナイフやフォークなどからまったく音の漏れない静かな動作。
決して相手を困惑させたり不愉快にさせたりしない会話の運び。
さりげない気配りに、好みの良さ。豊富な知識。
食事の席ではすべてがわかる、と言われるくらいであるが、黒須昶はすべてにおいて失点のない人であった。
テーブル・オーナーと言われるこの制度では、オーナーは食事の選択をすることができる。相手の好みの料理を用意し、季節に合った食事を組み合わせる。

食器やクロスの色、花の組み合わせに、食後のティーを出すタイミング。
何もかもが完璧だった。

誰もが彼女の所作を真似したがる。
彼女は高慢になることもなく、伝授できるものは伝えるようにしているようだった。

・・・いずれ、こういった席の主催者側になるための訓練のためということであったが、いつの間にか、管理者側がこれを黙認していることを良いことに、一種のステータスの表れのような制度になってしまっていたことが私は気にいらなかった。
私は静かに過ごしたいだけだ。
残り少ない生活を、彼女のせいで乱されたくなかっただけだ。
だから、私は誰かを誘ったりしない。
だから、私は誰かから誘われてもその席に喜んで参じることはしない。
どうして、自分と違う性質の人間が居ることについて、想像できないのだろう。
認識できないのだろう。
・・・・皆が自分と同じであると考え違いをする根拠がわからない。
そもそも、このルールでは・・・誰かを食事に招くということは相当親しい間柄でないとなかなか実現しない。
誘いを受けた者は断れない。
断る時には相当の理由があるか、次回の茶会に必ず主賓として参加するか・・・とにかく相当の代償を支払うことになる。

上級生が下級生に。
優位の者が下位の者に。
それは抗えない命令にも誘惑にも似たものであった。
誘われた者はそれがステータスになる。
だからこの一方的で横暴な制度に異を唱える者はいない。
長い年月を経て、儀式と化したそれは、この帰省による閑散時期にしか適用できない。
食事を摂る場所を選択することができるこの時期にしか、こういった招きは行うことが出来なくなった。
昔は・・・帰省しない者が多かったらしい。
その昔、この学舎には、麗人と言われて・・・女王とか伯爵とか子爵とか・・いろいろな称号で寮生が呼び習わされていた時には活発だったと言われているが、今はそうでもない。
その頃を知っている人からは、時代なのかね・・・と残念がられるのだけれども。

だから、私はこれを知って憤った。
意味がわからない。
ある日突然このような断り切れない食事の招きを受けて、私がどう思うのか、黒須昶は考えたことがあるのだろうか。
どうも、彼女は相手のことを先回りして考えすぎて・・・相手の本当の希望を聞き逃す傾向にあるのではないのかと思った。
つまり、「相手を思って身を引く」傾向の女性になるのだろうと、容易に想像できたわけだ。
私はそう思うことによって彼女を貶めたかったのかもしれない。
私が彼女の気の回らない招待を受けて、辱められたように。
彼女のことも、恥をかかせてやれ、という気持ちになっていた。

だから、夕刻の時間が訪れて、人影のまばらなテーブルに、ひときわ大ぶりの花瓶に見事な薔薇が活けられている場所に、黒須昶が時間前であるのに、すでに座って居たとき。
私は無言で怫然として席に着いた。
彼女は私の気配を感じて、はっと顔を上げた。
・・・来るかどうかわからないといった面持ちであったが、私の姿を見ると、「来てくれてありがとう」と最初に礼を言ったが、私はそれを無視して横を向いた。
「気が向いたから」
そう言うと、彼女はまたありがとうと言って微笑んだ。
柔らかい・・・茶色の瞳が細くなった。
癖の強い茶色の髪が、少し揺れて、彼女と私のテーブルに、キャンドルがもうひとつ灯された。
・・・これで全員が揃ったという合図だ。
テーブルの上には、僅かな光でも十分に強い光沢を放つ、青灰色のリボンが茎のように品よくナプキンを包んでいた。ナプキンは、薔薇の形に折ってあった。

黒須昶から誰かを誘うということは滅多になかった。
いや、私の興味がなかっただけかもしれないが、皆無だった。

「この色のリボンを見つけて、少し嬉しくなってしまったの。・・・知っている人の瞳に良く似ているから」
私は黙っているのに、彼女はそう言った。
小さな囁くような声で。
しかし耳を澄ませているわけでもないのに、良く聞こえる。

知っている人、と言った。青灰色の瞳であれば、外国人だろう。
彼女自身も、父親がハーフだと聞いていた。彼女は長らくパリに住んでいたということなので、薄いブルーグレーの瞳の知人はひとりふたりと居てもおかしくはない。
けれども、彼女が酷く大事そうにそう言ったので、私はミネラルウォーターの入ったグラスを持ち上げかけて、そしてまた戻した。
そう言えば・・・彼女には婚約者が居たのではなかったのだろうか。
■04

相手と会話をしたくないときには、その次の会話が出ないように、完結した言葉を返事にするのが一番だ。
ヒカルが食事の合間に私に話しかける間、私は必要最小限の言葉しか発しなかった。
「この木苺のソースはおいしいわね。ハーブの混ぜ具合が優しい味だわ」
「そうね」
「貴女はどちらの水が好きかしら。いろいろ取りそろえたのだけれども、結局決められなくて・・・」
「どうでも良いわ。あまり拘らない」
私の言葉は短くて、始終その先に進むことが出来ない返答でしかなかった。

確かに料理は美味しかった。
特別に頼み込んで作らせたコースであることは一目瞭然だった。

彼女は、オプションコースを申し込んでいるので、最高級の材料しか口にしない。食器もテーブルクロスもすべてが彼女の指定のものか、彼女自身で用意したかのどちらかである最高級品だった。
彼女はまるで・・・かつてこの苑に君臨した女王のように、何もかもが特別なのだ。
私はそれが気にくわなかった。
この学苑で過ごすには生活レベルが違うと主張するのであれば、どこにでも行けば良いのだ。
それなのに・・・彼女はここに居る。
どうしてこの苑に埋もれているのだろうか。
彼女はどこにでも行けるというのに。
まるで・・・
何かから逃れるかのように。
何かから隠れるように。
そして・・・
何かを誰かを待っているかのように。

何もかもに恵まれているくせに、彼女は何もかもに恵まれていない顔をしている。
不幸願望という奇病に冒されているに違いない。
意地の悪い考えではあった。でもそう思うしかなかった。
そう思わなければ彼女がここに居る理由がわからなかったからだ。

黒須昶は最後まで気を悪くした風でもなく、ただ一方的な会話をぽつりぽつりとしていただけだった。
他のテーブルよりも皿数が多かったので、私と彼女の皿がすべて片付けられて、最後のティーが運ばれてきたときには、もう辺りは誰も居なかった。
談話室に移動しているのか、それとも私のいつもの習慣のように、さっさと自室に籠もるか・・・いずれにしても、辺りには誰もいなくなってしまった。
給仕をする係員の人々の人数の方が何倍も多かったが、彼女は、ティーを持ち運ばれた後に軽やかに微笑んで言った。
「ありがとう。後は・・私が給仕します」
それは遠回しに丁寧に述べた人払いだった。
私はますますむっとした。
食事中には決め事はしてはいけないと言う。ビジネスの話や、私事の四方山話も好まれない。
彼女はそれらを巧みに避けて、なおかつ、私の無愛想な返事にひとつひとつ丁寧に頷いた。
まったく、彼女は神か天使を気取っているのだろうか。
上からの目線で、おこぼれを恵んでやっていると思っているのだろうか。
私は・・・それほど気高いわけでもないが、それほど低頭に慣れているわけでもない。
しかし、彼女は微笑んで、このティーの香りは、あたたかいうちに味わった方がより素晴らしいと思う、という提案をしたが、黒須昶自身もカップに唇をつけることはしなかった。
招待客の私がまだ口を付けていないからだった。

「・・・誰かと一緒が良ければ、私でない誰かであれば誰にでも、満足できたでしょうに」
私はその時に、初めてぽつりと言った。
「こういう会話は何を意味するのか、貴女はわかっているのに、自尊心は傷つかないのかしら」
私は意地悪く言ってやった。
誰も居ないということも手伝っていた。

でもそれには理由があった。
私は、彼女の言葉を聞きたくなかったからだ。
「どういうことなの？」と聞き返すだろうという確信めいた予感を感じていたからだ。
つまり、一方通行では終わらない会話を、彼女はとうとう始める気になったのだということを察知したから。
また、私が自分から質問をしたのは、好奇心旺盛だったからではない。
黒須昶が人払いをして、私に何かを話したいのだという空気を濃厚にしたからだ。
私はそれを聞く前に何とか席を立てないかという画策めいたことをしようとして、先ほどの攻撃的な言葉に繋がってしまったことを後悔はしなかった。

「こういう会話は慣れているの」
彼女は微笑んで、平然として言った。私は呆れてしまった。
こういう会話を続けることは苦痛であり侮辱であるはずなのに、黒須昶はどことなく嬉しそうなのだ。
「貴女は、私の知っている人を思い出させる話し方をするから・・・」
そこまで言って、彼女は茶色の瞳を伏せた。
密集した長い睫が頬の上に影を落とす。

「そういう回りくどい言い方は止めなさいよ。・・・はっきり言わないとわからないこともあるでしょう。相手に次を求めていないようで、そういう表現は相手に何かを求めている卑しいおねだりにしか見えないわよ」
そこで彼女は顔を上げた。
少し、驚いているようだった。それはそうだろう。先ほどから、私は言葉少なく彼女に何かを肯定することも否定することもなかったのに、意地悪くいきなり・・・私は彼女に意見をし始めたのだから。
しかし、どうにも黙っていることは出来なかった。
この空間で・・・黒須昶は、私に何かを依頼しようとしている。
だから食事に誘ったのか。
・・・どうして、彼女はこういう手段でしか人と接することができないのだろうか。
■05

「不快に思ったらごめんなさい」
彼女は素直に謝った。

それすら、高慢な者特有の、定められたお決まりの仕草のように思えて仕方がない。
それくらい、黒須昶のすべてが・・・何もかもがごく自然で違和を感じさせない。
それが違和感そのものだということに気がついていないらしい。
私の中で・・・どんどん醒めていく感情がふつふつと怒りを燃やし、また醒めていく。
この繰り返しが、黒須昶の存在が、私を苛ませるのだ。
聖母のような微笑みが、後ろ暗い者から見れば、時には驚異になることすら・・・・彼女は知らないのだろう。

彼女はティーカップを置いた。
かちんと、僅かに硬質な音がして・・・黒須昶は薄い茶色の瞳を伏せた。
そして、何か思いきったように顔を上げて、私を見つめる。
・・・・美しい人というのは、すべてに置いて何もかもが・・・吸い込まれるような引力を持つことを、自覚しているのだろうか。
顔の造作で言えば、完璧な美麗を持ち合わせているとは言えなかった。
けれども彼女の身に備わった気品と知識と・・・あまりある愛に触れたという彼女のこれまでの経緯が、黒須昶という人物を希なる人として定めていると、誰もが気がついている。
その彼女が、静かに誰とも競うことなく埋もれて過ごしたいと願うから・・・擬似的な静寂を彼女の周りに張り巡らしていることさえ、彼女は気付いているのに。
それでも・・・・私にこうして波風をもたらす彼女の真意がわからなかった。

できることなら関わり合いになりたくない部類の人間だ。
私は黒須昶と言葉を交わすことに対して、優越感を持っていない。
むしろ・・・私に照準を定めて彼女が話しかけてくることに疑問を感じる。
人違いではなかろうかとさえ思う。
私は食事に誘われたからという理由を自分のステータスにするつもりはない。
「こんな凄い人が同寮に居る」と自慢するほど、自惚れていないし、狭隘でもなかった。

「確かに最高のディナーだった。・・・でも薔薇の香りが障るわ」
私はそう言って、テーブルの上に飾られた薔薇の花を見つめた。
・・・新種だろうか。見たことのない品種のものだった。
先ほどから気にはなっていたが、それよりも憤悶していたので、彼女に尋ねることはしなかった。
しかし、どうにも気になる。
「・・・・私が・・・パリから持ち込んだもので、鉢植えでも咲く丈夫な種なのよ」
種苗法をまったく無視したその発言に、しばし私は唖然としていたが、ペットの飼育を現金とされているその学苑では、植物栽培を趣味にしている者が幾人かいたので、黒須昶もそのひとりなのだと、そこで初めて知った。
「・・・でも、これだけ咲かせるとなると、相当大きな鉢にしないと・・・」
私はそこで口を噤んだ。
彼女は何を言いたいのか、理解できたからだ。

株分けをするほど、部屋は無限に広いわけではない。寮内の持ち込みには制限があり、鉢植えなどせいぜい二鉢くらいしか持ち込めない。
それなのに、これだけの花を咲かせているのであれば、黒須昶の持ち込んだ鉢は・・・間引きしてこうして余剰華を卓上に飾らねばならないほどに肥育しているということらしい。
彼女らしかった。
切り落とすことが出来ないで、鉢ごと親株を刈らしそうになっているのだろう。
よく見てみれば、棘も弱々しく、葉も色が薄かった。
どれだけ丁寧に扱っても、鉢に収まりきらないくらいに密集すれば花も枯れるし株根が弱くなっていずれ枯れてしまう。
どんなに丈夫な種であったとしても、だ。

彼女は私に懇願するような視線を送って寄越したが私はふふんと小さく鼻で笑ってやった。
彼女の優しさは、全部を駄目にする優しさなのだということを、誰も教えてやらなかったのだろうか。
さぞかし、周囲に居る者は・・・特に、家族ほど親しい者は苛立ったことだろう。
博愛主義に反対するつもりはないが、彼女の万人に等しく、という考え方が如実に表れている。
・・・この薔薇が良い例ではないか。
これほどまでに見事な薔薇の種は見たことがない。
それなのに・・・無造作に、一度限りのディナーの席に飾るには惜しい華を、私に願いごとをするために、捧げるのだ。
それが止む方ないと思っても、捨てきれないで・・・・こうして、ディナーの席に飾る。
彼女のことだから、ディナー後は、枯れるまで自室で水差しにでもするのだろう。
しかし、この手の薔薇は、水差しにすれば途端に弱ってしまう。
枯れて朽ちる様を見られるくらいなら、いっそのこと散ってしまいたいと思っているだろうに。・・・・彼女は残酷だ、と改めて思った。

ここで黒須昶が私にどんな用事があったのか、内容を確信したからだ。

私は溜息をついた。
かなり大袈裟に。
「・・・・・それで、私の部屋の庭に、どれくらいのスペースを確保したいの？」

それまで少し泣きそうだった黒須昶の顔が、輝くばかりの笑顔になった。

「・・・凄いわ、貴女はとても・・・私の知っている人に似ている」
「どこが？」
私は私でしかないのに、黒須昶はしきに感心して頷いている。
「私の知っている人。・・遠くの空にいるけれど・・・全部を言わなくてもわかってしまうところや薔薇の造形が深いところ」
私は苦笑した。
「これは小さい時からのそういう環境だったからよ。今は・・・この品種がなんと言う名前なのかさえ知らない」
「ファム・ファタル」
彼女はそう言った。
「え？」
私は聞き返した。
黒須昶の顔が泣きそうになったからだ。
しかし彼女はそれでも微笑んでいた。
「大事な人が、大事な人のために創った品種改良された薔薇よ。・・・一鉢だけ持たせてもらったの。丈夫だから、貴女の母のように逞しく生きるでしょう、と言って譲ってくれたの。・・・・だから、枯らすわけにはいかない」
なるほど。
それで、彼女は私をディナーに招いたというのか。
合点がいった。

鉢植えの薔薇を間引きすることができない黒須昶の薔薇の鉢は、今頃根が密集して、養分が行き渡っていない状態なのだろう。

改善策は土に植え替えしてやることだ。
水耕栽培は物理的に無理であるから、私の・・・庭付きの部屋に越すか、その部屋の住人に頼み込むかのどちらかしか選択肢はなかったのだろう。
そして彼女が選んだのは後者の方だった。
・・・・無理を言って、特別室にでも移れば良かったのに。
彼女の影響力なら、それも可能だったであろうに。

「どうして他の人に依頼しないの」
私は質問した。庭付きの部屋をあてがわれているのは私だけではない。
下級生や同級生にも、何人か知り合いがいるだろう。
彼女は目立たないようにしているが、彼女と知り合いになりたいと思う者は皆無ではなかった。逆に、多いはずだった。
少なくとも、私のような考えを持って意地悪く彼女を観察している者はいないはずだったから、好意的に要望に従ってくれただろう。
しかし黒須昶は短く返答をした。
「貴女が良いと思ったから」
「だからどうして」
「貴女はこの薔薇を枯らすことはしないから。決して」
私は言葉に詰まった。
私のことを・・・彼女はどれだけ知っているだろうか。そこで初めて疑問に思ったのだ。
興味が無かったので、黒須昶という存在について考えたり情報収集することはなかった。
けれども・・・彼女が私と同じであったとは限らない。

少し緊張して・・・私は居住まいを正した。
■06

「それは命令？」
「お願い事」
「おねだりの間違いね」
「ああ、本当にそうね」
短い会話にさえついてくるので、彼女は決して要領が悪いわけでもないし、頭の回転が悪いわけでもなさそうだ。

ほとんど親しくもない者に、自分の大切な鉢を託してかつ、それを庭に植えろと言う。
庭は専属の庭師がついているので、私の不在中に水不足で枯らすということはなさそうだが、彼女はそれすら私に押しつけようというのだろうか。
なんて図々しい人なのだろう。
無神経にも程がある。

「この品種は、水あまり影響しないし・・・・日本の気候にあっていると思うの」
彼女は嬉しそうにそう言った。
けれども、私はむっとしたままで黙っていた。
なぜ、私が気分を害しているのかまでは考えに及んでいないのだろうか。
これほど何もかもに恵まれているのに。
いや、恵まれているからこそ・・・彼女は何も見えていないのだろう。

私は目の前の茶色の髪の貴人を見た。
なぜ、彼女は最も来てはいけない場所に来てしまったのだろう。
同世代の者同士が集う場所というのは特殊だと、わかっていない。
自分が他人より優れているところを探すのに、自分が他人より劣っていることを認めることが出来ない、そんな人間だってたくさん居るのだ。
そこに、非の打ち所のない人間が飛び込んで来れば、無視されるか非難されるか・・・・崇拝されるかのいずれかだ。仲間意識は決して持たれない。
自分とは違う異質なものだから、という理由で隔離されることには変わらない。
もし、黒須昶が穏やかに過ごしたいと思っているのであれば、ある意味、黙殺されることは願った状況なのかもしれない。
それなら人種も国籍も価値観も年齢も違う、あの国の整えられた環境で過ごしていれば良かったのに。

・・・高慢な姫君に付き合いきれないとは思ったが、どうにもその薔薇が気になった。
黒須昶を受け入れることはできないが、薔薇には罪がないことは私は承知している。

「私のことを調べたの？」
調べたという言い方をしたのは、私が自分の知識として、薔薇の栽培方法などを詳しく知っているということを誰にも漏らしたことがなかったからだ。
ここでは、そういう特別な知識は必要とされないし、それを自慢げに語れば、私は自分が忌み嫌っている「特殊な人間を自負している者たち」と同じになってしまうと思っていた。
誰かと何かが違うと傲慢になるより、相手の違いを認めて受け入れる方が何倍も難しい。自分は自分であると言って、のびのび羽根を伸ばしている黒須昶は、本当はその羽根は十分に伸ばし切れていないことを知らないのだ。

可哀想な人だと憐れむことも面倒になってきた。それほど彼女に深く何かを感じることはない。これからもそうなのだろう。
こういう特殊な人間は、同じように特別だとカテゴライズされる人間達と集って居る方が倖せになれるのだ。
はやくそれが判ればよいのに。

「調べたというか・・・以前、貴女の名前を雑誌で見つけたことがあったので同一人かどうかわからなかったけれど・・・でも写真がついていたから、確信したの」
私は内心舌打ちしたくなる気分でいっぱいだった。
誰も知らないような専門の業界の者しか読まないような雑誌だ。
そこに。うっかり・・・写真を一度だけ掲載されてしまったことがあった。
その時は・・・まだ・・・家族というものについて夢も希望もあったころだった。
満面の笑みを浮かべて、私は未来について何でもできると信じていた。
こんなふうにひとりで寄宿舎に籠もっている自分を想像すらしていなかった幼いときのものだ。
それなのに・・・それを黒須昶が見ているとは知らなかった。
「前に住んでいた場所の薔薇の育て方について・・・参考にしていた雑誌だったの」

黒須昶が付け加えたが、そんな古い雑誌を読み耽る若い人が居るのだろうか。
同世代では間違いなく皆無だ。
それに、写真が出てしまったのはそれが一回きりのことであった。
だから彼女が・・・本当は、私の名前を何かの拍子で思い出したことは本当なのだろうが、それ以降の私の経歴についても、調べているはずだった。

「そう」
私は素っ気なく行った。
私のことを調査したことに対して憤っても、何も解決しない。
卒業までの辛抱だ。
私はそこでようやく自由になるのだから。

大人になったら必ず実行しようと思っていたことがいくつかある。
そのうちのひとつに「興味の無い相手とは話をしない」という項目を付け加えようと心に決めた。

「・・・・最適の温度や状態がわからないから、貴女の部屋での育成環境をメモして、あとで鉢ごと私の部屋に届けて。・・・それくらいはできるでしょう」
結局、彼女の計算通りに事が進んでいることが面白くなかった。

黒須昶はその言葉を聞くと、顔の前で両手を合わせて喜んだ。
とたんに、花が咲いたようにふわりと艶やかに彼女が微笑む。
あの薔薇は、この笑顔をこよなく愛する者からの贈り物なのだろうと思った。

「ありがとう」
心の底から言われる感謝の言葉とは、時にとても隔靴掻痒（※いらいらすること）とする。

私はまたひとつ、溜息をついた。

とにかく、早くこの席を立ちたかった。ただそれだけだ。
■07

結局、私は押し切られてしまう格好になってしまった。
彼女は交渉事に向いているのかそうでないのか、わからない。
が、結局は自分の思うとおりに事を進めてしまうのだから、前者なのかもしれない。
そのかわりに、同じ人物から・・・特に同性からは、二度と快諾は受けられないと思ったが。
人は強制されるとその能力の8割までしか発揮しない。
薔薇は強制されるとその美しさの6割しか表出しない。

少なくとも、私はやる気をまったく削がれている状態なので、託された鉢の何割を再現してやることができるだろうかと思うと、また鬱屈した思いに襲われた。
どんなに断れない状況だったとしても、二度と彼女からの誘いは受けないと心に決めた。

やっかいで気鬱な休暇になってしまった。

いつのもとおり、好きなことをして過ごす時間になると思っていたのに。
過去の陰鬱な思い出を繰り返すつもりはない。
「そうしなければならない」時間を強引に押しつけられて、私は辟易してきた。
いっそのこと・・・自分が厭っているあの場所に帰ろうかとさえ思う。
誰も居ない自宅という名称の所在地で、ぽつんとひとりだけ取り残されて過ごす空間を楽しむことが出来ないほどに幼かった私を置いて、両親はいつもいなかった。
人と交わるように、ということでこの苑に入れられた。
けれでも、自分がその気にならなければ大勢の場所に身を置いても同じだということに、いつになったら周囲は気がついてくれるのだろうか。

黒須昶はふた鉢を両手に抱えて、食後にすぐ持ってきた。
メモは次の日の朝一番で持ってきた。
寝不足になって眼が赤く腫れても、彼女はどうしても私に鉢を押しつけたかったらしい。
私はその日から作業に入らなければならなくなった。
まずはこの花の親株になったものから調べなければならないのだが、複数を複雑に組み合わせた新種であり、しかも遺伝子組み換えまで行っている。
薔薇の花弁の形状、葉の葉脈の密集具合、根の太さ・・・あらゆるところから考えたのだが、さっぱりわからない。
しかし、わからないのは黒須昶も同じであるか、彼女に尋ねても私の欲しい回答は戻ってこないし、極力、黒須昶とは接触したくなかった。
彼女には「分析をするから、それまでは放っておいてくれ」と厳重に言ったからしばらくは部屋を訪れないはずだった。

鉢を庭に植えるのが一番だ、と彼女は言ったが、初めて土に植える薔薇が全滅してしまう可能性がある。
私は一鉢を半分に割って、4分の１だけを庭に植えることにして、後の半分を養分の入った水に浸し、残りの鉢を室内でしばらく観察することにした。

しかし、ここで植物栽培をすることは想定していなかったので庭師に頼み込んで僅かな養分アンプルを分けてもらう以外には何も設備が揃っていない。

かつ、親株の品種がわからないから、何を揃えれば良いのか、というところから始めなければならなかった。

これはバイオテクノロジーの発達した機関で調べてもらうか・・・やむを得ないが実家に助力を乞わないと解決しなさそうだった。

見れば見るほど、美しい薔薇である。
私は室内の鉢をしばし眺めながらそう思った。
花瓣は柔らかく、棘は完璧な円錐形だ。
葉は発色も良く、特に香りが強かった。

・・・まるで、黒須昶そのもののような薔薇だった。
遠目で見ていれば十分鑑賞として満足できるが、近寄れば、その強い香気にあてられてしまう。

薔薇には罪はない。せめて、枯れるなら、庭に置いてやろう。
しかし、それにしても惜しい。

結局、私は午前中に早々に分析を諦めて、室内に置いて観察用にした鉢を・・湿った脱脂綿や古新聞紙にくるみ、十分に外気に気をつけて外出することにした。
口惜しいが・・・ひとりの力では無理だった。
今から出発しなければ、夜までに戻ってこられない。
今日の夜は雨になる予定であったから、湿気を薔薇に含ませるのは良くないと思ったが時間がなかったので、慌てて寮を後にした。

そして待たせていたハイヤーに乗り込んで、私は少し遠くなるができるだけ急ぐ、帰りもこの車に乗るから、と言って労をねぎらった。
長距離を移動するので、温度変化の繰り返しや乾燥した空気は薔薇に良くないし、車内に香気が籠もるので、こういったことに配慮のない交通機関を乗り継いで辿り着くことは難しそうだと判断したからだ。

私は滅多なことがなければ外出しないので、外出届を提出した際には酷く驚かれた。
しかし両親が今来日しているので、どうしても見送りをしたいのだと言って帰寮時間の延長申請を出しておいた。
その上、普段使わないハイヤー使用申請も一緒に出したので、今頃は・・・寮の管理棟では噂になっていることだろう。
それくらいしか楽しみがないから仕方のないことだが、誰かの口の端に自分の名前があがることは嬉しくもないことだった。
際立つ者はそれでも気にしないという教育を受けている者たちが多い中で・・・自分が際立っていることすら気がつかない黒須昶は私にとってはこの上ない頭痛の種である。
大抵の者たちは、自分がさらに輝くように、そうでない者を従える。
けれども、それを意識していない黒須昶は自分の晄に霞む者がいることを悟らない。
自分自身のことをよく知り尽くしているようで、そうではない。
決して自分のことを知ろうとしない、愚かな娘のことをこよなく愛する者たちによって護られて、そして何事もなく黒須昶は花を咲かせるのだろう。
苦労や苦慮を知らない人間は、いつまで経っても・・・そのままなのだ。
少女が年齢を重ねて外見と環境だけ変化していくだけ。
中身は変わらずに、周囲に侍る者たちだけがくるくると変わるだけ。
それを「本当の友達がいない」と言って歎きながら生きていくのだ。

私はどんよりした雲行きになってきた空を眺めながら溜息をついた。
こういうときに、私語を慎む運転手付きの車は余計な気遣いがなくて安心する。
しかし、学生である私がこういう贅沢をするのは、私が嫌っている者たちと同じであるということもわかっていたので、私は眠ったふりをして、ずっと目を瞑り、時折その意識が戻ったかのように見せかけて、外の景色を眺めて、車内で茫洋と過ごした。

暗い室内で、ひとりの時間に耽っている時と同じだった。

広い屋敷の中で、ひとり座って食事をする時と同じだった。

庭に出れば、無数のむせかえるような薔薇で溢れたあの家で唯一・・・私を慰めたのは、植物たちだった。
彼らと話が出来るとさえ信じていた。
明け方早く起きて、朝咲きの薔薇の開花を眺めた。
月夜は眠くて目を擦りながら、月晄に煌めく夜の薔薇の葉を眺めた。
それだけで倖せだったのに。

私は溜息をついた。
思いもかけない急な展開の出来事に、私自身が戸惑っているらしい。
大きく息を吸うと・・・・・薔薇の香りが私を癒す。
少し香気が飛んで、私の隣に鎮座している薔薇が・・私を慰めているような気がした。

これから彼女はあの調子で、毎朝毎晩のように薔薇の様子を見に来て、学舎内でも声をかけてくるのだろうか。
・・・そんなことになる前に、さっさと命令に近いこの注文を片付けてしまおうと思った。

それにしてもまったく困った人に目を付けられてしまった。
私のことをきっと調べ上げていたのだろう、と思った。
それは友達とは言わない。
単に・・・奴隷というのだ。
彼女の魅力や光輝に絡み取られて衆愚となった者たちは、心を奪われて・・・そしてその先はどうなってしまったのだろう。
彼女のことを考えるだけで苛立たしいのに。
彼女の周囲に侍る者たちを気の毒だと思う一方で、そう思う自分が一番高慢なのだということに気がついた私は、考えることを止めた。
・・・とにかくこの薔薇について答えを出せば。
彼女から及第点をとれば、自分は解放される。

いきなり突きつけられた試練のような・・・黒須昶の気まぐれのゲームに巻き込まれたようなそんな感覚だった。
長い、単調な朝晩を繰り返す・・・けれどもひとり静かに過ごせる休暇になると思っていたのに。

私はすでに黒須昶の手の平で転がされて弄ばれていた。

■08

戻って来た時間は、帰寮時間を延長したにも関わらず、申請した延長刻限にかなり近い時間だった。
あらかじめそのような時間に戻りそうだと連絡を入れておいたので、締め出しされることはなかったが、エントランスの門扉には常夜灯しかついていなかった。
ナンバーを登録されていないハイヤーは、門扉を空けてもらうことは出来ない。
事前にそういった車が入ることと、同乗者に学籍を持つ者が居て、それが証明できることが条件でないと入り込むことが出来ない。
しかも、運の悪いことに守衛は席を外しているようで、誰も居なかった。
エントランスの手前までしか入り込むことが出来ない。
いつ戻ってくるか判らない者を待つことほど無駄な時間はない。

私は溜息をついて、ここで良いから、と言って手前の緩い坂道の下で降車することにした。
外は雨が降っていた。
途中まで同行しようかと声をかけてもらったが、すぐそこなので必要ないと言った。
まさかここで歩くとは思わなかったし、両手に鉢を持っていたので傘をさすことは出来なかったから、不要の道具だった。
私は薔薇が濡れないように、出発するときに持参してきたビニールシートを鉢の上にかけ直した。
鉢の半分は割って置いて来た。
やはり分析には時間がかかるということだった。
これで完全な鉢植え状態のものがなくなってしまったが、やむを得なかった。

少なくとも・・・枯らしたとしても、分析して遺伝子レベルまで調べてくれるだろう。
私はゆっくりと、緩い上り坂になっている小道を歩いた。
久しぶりの道路の感触に疲労感を増す。
広大な敷地の中で用事は済ますことが出来るし、必要なものはネット経由で寮の購買部を利用して依頼することが出来た。
今は古書を手に入れることも難しくない。
最新の文字を追いたければ、ネットでなんでも拾い上げることが出来る。

黒須昶は品定めをしていたのだ。
誰に寄生するのが適当か、彼女は人を観察していたのだ。
そう考えると・・腹立たしい。私の意志は関係ないと言われているかのようだった。
彼女は・・・どうしてこうも他者の思惑を想像できないのだろう。
人と交わってあれこれするより・・・誰か専門の業者に頼めば良かったのにと思った。

・・・柔らかい霧雨だった。

夜の霧雨は好きだ。
蜘蛛の絲のように柔らかくて・・・そして何もかもを露玉に包んでしまう。
しめやかに、ひそやかに。

土に植えた薔薇が、黒須昶の申告通り「外気にも強い」品種であるならば、この雨は恵みの雨のはずだった。
ミネラルや必要な養分を含んだ土中の水を吸い上げて、薔薇は根を広げていくだろう。

ほっと溜息を漏らす。
だいぶ慣れては来たが、まだこの香気に目眩がするほどの強さを感じる。
この薔薇の香りは雨に流れて・・そして明日の朝はもう少し湿気に落とされて落ち着くことだろう。

・・・誰も通らない、静かな路を、ゆっくりと上っていく。
部屋に戻れば熱いシャワーを浴びよう。
しかし今は・・・しばし雨に濡れて、纏わり付いた黒須晄の薫りを祓い清めようと思った。
白い玉砂利が敷き詰められた部分までさしかかった時。

そこに・・・誰かが立っていたので、私は脚を止めた。

長身で痩身の男性だった。全体的まだ若い印象を受けたが、私は今来た道を、戻ろうかどうか少し考えてしまった。
来客にしては時間が遅すぎるし・・・この部分に入るためには、先ほどの正門よりもっと手前でチェックを受けなければ入り込むことが出来ない。
自由にここに入り込むことが出来る若い男性なんて、この苑には存在しないのだ。

それが、ルイ・ドゥ・アルディを見た最初であったが、私の第一印象は、「なんて綺麗な薔薇のような男の人なのだろう」だ。
目に入らないわけはない。どうやってひとり佇んでいることができるのだろう。
誰かに見られたら・・・私のように、彼の姿に茫然としてしまうのは間違いなかった。

伸びた背中は若々しいが、落ち着いた仕立ての良い上品なスーツを着ていた。
一目で彼の住んでいる階級が判断できるほどの外見だった。
ハイカットの革靴はよく磨かれていて・・・腕にはジェイコブのブラックダイヤ付き6タイムリバーシブルが光っていた。
あの色見は市販されていないから、メンズ用の限定非公開モデルなのかもしれない。
夜目にもはっきりとわかるほどの存在感があった。
それに負けず劣らず彼の容姿に驚愕した。
横顔を向けて、じっと門扉のやや斜め上を見上げているが、こちらから見えない反対側と左右対称なのだろうな、と思ったくらい美しい横顔だった。
締まった頬に、高い鼻梁に・・・酷薄そうな薄い唇。
深く切れ込んだ双眸は、薄い瞳の色で、特に目立つのは、彼の見事な金髪が輝いていたからだ。
こんな雨の日なのに。
こんな夜なのに。
彼は・・・金色の薔薇のような人だった。
霧雨を含んで湿ってなお、金の髪が光っていて眩しいくらいだ。
彼自身が発光しているような気にさえなってくる。

守衛を待っているのだろうか。それとも・・・
この中にいる人物と待ち合わせなのか、送り届けてきたのか。

洗練された男性、というよりかはむしろ「胡散臭い」と思った方が良さそうなくらいに・・・まるで夢物語の登場人物のような出で立ちだった。

私は彼を直視しないように、脇を通り抜けようとした。
こんな人物とすれ違っただけでも、翌日の朝食の自慢話として話を大きく膨らませる輩と同じになりたくなかった。
帰ってくる時間を誤った、と思った。
ここは男子禁制ではあるが、この場所までは、親族や特別に認められた関係の者は許可があれば入ることが出来る。
・・・・要するに、婚約者だ。

彼女たちは、小さい時から許婚がいることが多く、家族ぐるみで付き合いがあるから、そのフィアンセとの夜遊びであれば、帰寮時間が遅くなったとしても、卒業の近い上級生は多目に見てもらえるわけだ。
申請した人物と違う人物と、夜遊びしている者も居るが。これは時代なのかもしれない。
しかしそれでもこの先には進めないから・・・誰かを送り届けて見送っているのだろうか。
それならばここで雨に濡れて立ち竦んでいる理由もわからない。

姿が見えなくなっても、それでも気配を求めて追いかけている位熱烈に愛されている者が、この苑に居るのか。
・・・私には関係のないことであったが。
それに、外国人の男性がこうして夜に門扉前で佇んでいるなんて・・・彼は、外聞が悪いとは思わないのだろうか。
見れば、小道を越えたはるか向こうに、エンジンを切って車を寄せてあるのが見えた。
相当な人物なのだろう。
その車そのものは、私が乗ってきたハイヤーはかなりの贅沢だと思っていたのに、それすら廉価であると思わせるようなものものしいものだった。
運転手や随行者と思われる人物達がさかんにこちらを見ていた。
私が制服を着ていなければ、きっと・・・この不審者として尋問しかねない勢いだった。
不審者として詰問したいのはこちら側なのに。
彼の堂々とした雰囲気が、こちらを萎縮させる。

その人物は、まったく動く気配はなかった。
しかし私はそろそろここを移動して中に入らなければ、帰寮時間の点呼に間に合わなくなる。遅刻した者はたとえ、一分でも遅れると、保護者に連絡通知されることになっている。
延長申請を出した上に遅刻では、実際に両親と会っていないことが明らかになってしまう。
早くセキュリティチェックを受けて、IDパスをゲートに通さなければならない。
彼の集中を妨げるような行為をするのは気が滅入った。

けれども仕方なしに、息を止めて・・彼の脇を通りすぎようとした。
玉砂利の足音を、わざと大きく立てる。
雨によって、気配が消えてしまっているかもしれないと思ったからだ。
私の存在に気がついて、さっさと背中を向けて、車に乗り込めばよいのに。
そう願いながら、小走りで彼の立っている門扉の脇の、ゲートチェッカーのパネル前に到着した。
影を察知すると自動で点灯するパネルは遮影に反応し、オフ状態から薄い橙色に発光した。
私はIDカードを出そうとして、しばしそこでポケットをまさぐった。
・・・・・そこで、彼が気がついてこちらに視線を寄越したのに気がついており、また視線を外して去ってくれないだろうかと祈りながら、息を止めながら立っていたので、自然に手元が焦りがちになってしまう。

霧雨が薔薇の上に載せたビニールシートに降りかかり、玉水になって私の腕に墜ちていく。

■09

物語にありがちな展開というものは期待していない。
とにかく、手元の薔薇を濡らしてはいけないという考えがあった。
それから、遅刻してはいけない、ということも念頭にあった。
「しなくてはいけない」という縛り事で自分を拘束しなければならない時期はもうすぐ終わる。そうしたら、私はここを離れて・・・もっと楽に生きられる場所を今度は自分で見つけようと思っていた。
帰寮時間が煩わしいのではない。
私は人が煩わしいのだ。
大勢の中に居ると、いかに多数に共感できるかが生きやすさを決定する。
けれども、私にはそれは適用できないらしい。
しかも、誰かと違っていることを誇りに思えないし、誰かと同じであることにも安堵できない。
要するに半端者なのだ。
そう考えている私につけ込んで、黒須昶が私をつまみ上げた。
・・・だからさっさと試練は終わらせて、元に戻りたい。
美しい夜中の訪問者に見惚れていて、入寮が遅くなったなどとは、私の中ではあり得ない。

内部関係者用の入り口で私はIDカードを取り出して、軽くかざす。
最近では周波数改訂があり、カードをかざすという行為そのものさえ必要でないことが多いのに、ここではいつまでも旧式のやり方だった。
最新式を投入しても数年単位で入れ替わる生徒達に指導教育するのが億劫なのだろう。
設備投資に金額を積むことが出来ないわけではないのに、大人という生き物は変化を嫌うらしい。
守衛などという人的配置をしているから、こういう事態に陥るのだと私は酷く残酷なことを考えていた。
虹彩認証や指紋認証だけでは防ぎきれない事故を想定するとなると、結局最後は人的判断を要するので、仕方のないことなのかもしれない。
けれど、多くの人が集えばそれだけ摩擦も生じるものだというのに。
無機質を推奨しているわけではないが、こういう配慮が万全とは思えなかった。
IDをかざして、私は安堵した。
これで後は内部で帰寮時刻の電子サインをするだけで終了だ。

今日の私が出来る範囲は終わった。

このぴりぴり肌を刺すような緊張感のことについて注意がそれた瞬間に、それは始まった。

「失礼。・・・Mademoiselle」

素晴らしい発音でゲルマン民族そのものであるような男性は、私に話しかけてきたのだ。
びくり、と肩が震える。
失礼、と前置きした艶やかな低い声は、完璧な日本語のイントネーションだった。
ここは聞こえないふりをして、通り過ぎた方が良いだろうか。
解錠と同時に声をかけてくるとは・・・不審な侵入者なのだろうか。
それにしても堂々としすぎるので、私はまったく彼の意図も状況も想定できずに、目を見開いて、その男性を直視してしまった。

・・・ああ、やはり。

彼は、綺麗な人だった。そういったことに疎い私でさえわかった。
外国人の美醜はあまりよくわからないが、それでも綺麗なのだなということがわかる。
しかも相当な美形だった。陽光の下では、誰もが振り向くのだろう。
ますます怪しかった。
傘もささずに何をしているのか・・・どんなに身なりが整っていたとしてもそれは信頼と引き替えに出来るほどのツールにならない。
しかし、彼が傘もささないのは、自分で傘を持つという習慣がないのだということがわかった。
少し向こう側から、傘を持った随行者がこちらに向かって歩き始めていたからだった。

「夜分に申し訳ない。・・・貴女の持っている薔薇・・・・」
そこで彼が私の名前を口にしたので、私が驚いて顔を上げ、また彼の顔を凝視してしまった。
彼は・・・・私に微笑んだ。
うっとりするような綺麗な微笑みだったが、その青灰色の瞳は笑っていなかった。
ふわり、と雨の風に乗って、彼の薫りが漂う。煙草と薔薇の香りだった。

「どうして私の名前を知っているのですか」
新手の誘拐だろうか。しかしこんなに綺麗な男性に拐かされたのなら、相当目立つだろうし・・・私に接触しても何も利益は上がらないほど、彼は余裕たっぷりだった。

「少し・・お話できますか」
それは提案ではなく命令だった。
有無を言わさない口調で、まだ一言二言しか喋っていないのに、彼は私との上下関係を築いてしまっていた。
私は身構えた。
遠目でこれが薔薇の鉢植えだということが判るのはおかしい。
近寄れば薫りが強いので、それとなくわかるだろうが、薫りだけでは判別できないはずだった。
よほどの愛育家でない限り、多くの知識を兼ね備えているのは考えがたい。
彼はコレクターなのだろうか。

優麗な美を持った男性は、自分の名前を名乗った。
ルイ・ドゥ・アルディと言った。
・・・フランス人か。
そしてアルディと聞いて、私の中に蓄積されている知識が勢いよく胸から登り頭に向かって上昇していく。
ちかり、と頭の右上で何かが光ったような感覚を覚えると、そこから先は早かった。

「・・・私、帰寮時間ですので。面会であれば明日アポイントを取ってください」

そう言うと、彼は微笑んだ。
丁寧に断ったのに、彼はそれをあっさり無視したのだ。
「アポイントはすでに取ってありますよ。・・・Mademoiselleを濡らしたままではいけない。・・・良かったら僕の車で話をしませんか」
これでは誘拐犯の常套句ではないか。私は守衛が戻ってくるまではそれはできないと言った。
「今、帰寮のためのタイムスタンプを押してしまったところですから」
そう言うと彼は薄く笑った。
「アポイントは取っていますよ。それから、許可も」
誰の許可かとは言わなかった。
恐ろしく頭の切れる男性という印象を受けたので、すべての許可を言っているのだろう。
アルディ。
ルイ・ドゥ・アルディ。
私はここでその名前を聞くことになるとは思わなかったので、しばし茫然としていたが、それも少しの時間のことだった。

守衛が戻ってきたからだ。

金の髪から・・ひとしずく、水滴が墜ちて彼の肩に消えていく。
・・・水が滴ってなお、美しい男なんて、拐かし以外にあり得なさそうだった。
彼は私の疑いの目つきに気がついたらしく、微笑みながら内ポケットから優雅な仕草で、細く長い指先にIDと入苑許可証を載せて、私に差し出した。
次に、顔を斜めにして、後ろからやってきた随行者に振り向くこともなく、それらを差し出した。
守衛の初老の男性に付き従って、事務総長が顔を出した。
雨で濡れているルイ・ドゥ・アルディに対して、外に出て室内に入るように慌てて言って居た。
彼は手を挙げてそれを制した。
「すぐに終わりますから・・彼女と少し話をさせてください」
彼の何倍もの年齢を重ねている者たちに圧巻とも言える威圧感でもって彼はそう言った。
守衛の男性は、ルイに軽く会釈をした。

・・・・これらの様子から、何となく察しがついた。

彼はこの苑ではＩＤや入苑許可証を提示する必要のない人物らしかった。
・・・でも、外の世界に疎い私は、彼が本物のルイ・ドゥ・アルディであることを、周囲によってようやく判ったのだった。

大人達の遣りとりには興味が無い。
けれども・・私とあまり年齢がかわらない若い男性が、幾人もの人々をごく当然のことのように支配している様を見ると、何となく・・・そう、黒須昶を思い出した。
しかし彼女のような傲慢さはない。
ルイ・ドゥ・アルディは、生まれた時からそういう教育を受けており、納得させてしまうような何かを持っている。
うまく言葉で表現できる理由が見つからないが・・・あのフランスの華の息子である彼が、プライベートジェットを飛ばしてこんな場所にやって来るとは・・・
豪奢な車で乗り付けて、それでも中に入らずに私を待ち受けていた。

私は・・・雨ではない滴が背中を抜けていくのを感じた。
冷や汗とも脂汗ともつかないものだが、それが私を冷静にさせてくれる。
私は薔薇の鉢をぎゅっと握った。

事務総長が私の名前を呼んで、しばらくアルディ氏との面会を許可すると言った。
私が申請しているわけでもないのに。
「ありがとう」
少しもありがたみを感じさせない儀礼的な言葉がルイ・ドゥ・アルディの口から漏れた。
こんな場所で対応するべきことではないことは、この場に居た誰もが承知していた。
そして・・・私が早くルイ・ドゥ・アルディの言葉に従って、ついて行くことでこの場の慌ただしい騒動は、解決するのだ。

nil admirari　中編

■10

学校公認で車に連れ込まれた私は、はしゃぐ気にもなれずに、押し黙ったままだった。
それは大変に絢爛な内装で、車内灯ひとつをとっても、どれもが特別にしつらえたものであることがわかった。
しかし安全性や調和を無視した誇示ではなかった。
外から見たら目立たないような仕様になっていたので、プライベートで行動するときのものなのかもしれない。

僅かに上品な残り香があった。
ルイ・ドゥ・アルディのものではない。
・・・恋人のものだろうか。
しかしこの苑では香水などの装いは禁止されていたので、これは誰か別の人の香りだと思った。
それならこの苑に居る人物は・・・彼とは一体どういう関係になるのだろうか。
妄想が拡がるより前に、私は現実に引き戻された。
彼は私の正面に座って、脚を組み、そして「失礼」と言ってシガレットケースから煙草を取り出して、あっという間に火を灯したからだ。
相手に許可を求める言葉ではなかった。
それでも、彼は煙の少ないタイプのものを選んで吸ったらしい。
いつもと違う銘柄だったらしく、僅かに眉根を顰めていたことから判断できた。

どうしてなのだろう。彼を見ていると、黒須昶を思い出す。
しかし、彼女のように腹立たしい気持ちにはならない。
男女や見目の違いとういわけではなさそうだった。
彼の黒蝶貝のカフスボタンが鈍く光った。
光沢の軌跡を目で追っていくうちに、私はあることに気がついた。
ああ・・・そうだ。
手の動きが似ているのだ。
そこに気がつけば、後は簡単だった。合点がいく。
彼と彼女は、ごくさりげない所作や間の取り方が似ているのだ。
空気の流れというものは、一朝一夕では変化することはない。
元々他人の夫婦がともに似てくるのは、同じ時間を共有することによって、その「間」の取り方が同じタイミングになるからだ。

ルイ・ドゥ・アルディのことは、世俗に疎い私でも知っていた。
社交界や世界の実業家の子息について情報網を持っているわけではないが、それでも彼の名前は何度か耳にしたことがあった。
親日家としても知られるアルディ氏のひとり息子であり、彼は星辰の子と呼ばれている。
フランスの要人だ。その若さで、いくつもの特許を取得し、バイオや通信業界では彼は若き帝王として君臨している。まるで、昔の実父であるシャルル・ドゥ・アルディを彷彿とさせるかのような鞅掌ぶりだということだ。
元貴族の・・・古からの家柄の貴公子が目の前に突如として現れたのだ。
誰だって動揺する。

ヒカル・クロスは縁あって、そこで養育されたという話を、噂好きの上級生が囁いていたことを思い出した。彼女は現代の寓話の主人公なのだ。誰もが諦めの溜息と同時に彼女ならしょうがないと言って黒須昶をますます遠い存在に押しのけていく。
存在感を消すのではなく、周囲から消された存在であることに、黒須昶は気がついているのだろうか。
あからさまな無視はしない。
後々の付き合いに影響するからだ。
ここで得た人脈は、いつかきっと・・また巡ることを私たちはよく知っている。
自らのことをまったく口にしないヒカル・クロスの意志を尊重しているのではなく、単に・・そこに触れると自分たちとあまりにも違いすぎるから、あえて周囲は触れないのだということに気がつかない愚かな娘の婚約者の顔を、まじまじと見た。

私は黒須昶の婚約者を無遠慮に見回した。
彼女は、長らく事実と存在を秘匿されて暮らしていたが、先般、突然婚約発表をしたとかしないとかいう噂が流れたことがある。
何年も昔の話ではないはずだった。
その相手が、アルディ家の子息であるという噂が断切されたかのようにぷっつりと聞かなくなってしまった。
あまり覚えている人はいないだろう。
・・・私もあまり興味が無いから、詳しいことは知らない。
噂好きの口の軽い者がそういうことを言って、窘められていたところに同席していなければ、きっと忘れたままだった。

車内のファンが追いつかずに、少し煙りだした。
「失礼」
ルイ・ドゥ・アルディはそう言って、煙草を咥えたまま操作パネルに指を伸ばして、雨が入り込まない程度に僅かにウインドウをほんの少しだけ開けた。
湿った風が流れ込んで来るかわりに、室内に充満した紫煙が薄くなっていく。

・・・それが私のためなのだと気がついて、私は礼を述べた。
「ありがとうございます」
彼は表情を変化させることなく、言った。
「薔薇が萎れてしまったら、困るのは貴女だろう？」
ルイ・ドゥ・アルディは知っているのだ。
そう思った。

薔薇は急激な気温変化に弱い。
特に、この種に混ぜられているものは、自然の気候には環境適用できるかもしれないが、車内の空調を直接浴びればすぐに傷んでしまうことを、彼は知っているのだ。
彼はそう言ったが、私が室温と雨滴で暖まった薔薇の香気に顔をしかめた瞬間に窓を開いたのは事実だ。
「薔薇の香りが強くて」
私は正直に言った。
彼の煙草の煙より、手元の強く芬々とする花香に辟易していることを正直に打ち明けた。

すると、彼は薄い唇を少し歪めて笑った。
「・・・僕はちょっと怪我をしてね・・・嗅覚が鈍くなるときがある」
ルイ・ドゥ・アルディは横を向いて、煙草の煙を吐き出した。

「むせかえるような芳香が煩わしいと思うかもしれないが。・・・煩わしいと思う『それ』こそが、貴女を希有なものにしているということを忘れないように」
私はそこで話を切り出すことにした。
初対面の者に対して、忠告をするほど、彼は暇でもないし、お節介でもない。
・・・・何が言いたいのか、明瞭になって来た。
この人は不思議な人だ。
短い会話で事が足りる。
言葉を何往復もさせなくても彼は会話を成立させることができるのだ。
恐ろしく頭が良い人だと思った。

私は彼を改めて見た。
見事な金髪に、青灰色の物憂げな瞳が印象的だった。
完璧な日本語を話し、そして時折見せる皮肉気な微笑みは老成しているとしか言いようがなかった。
背もたれに寄りかかり、リラックスしているようで、決してそうではない。
彼の瞳は始終私を観察しているようだ。
年若い異性を目の前にしているという凝視ではなく、私という器や資質を見極めているといった属目だった。
ルイ・ドゥ・アルディは、若さというか・・・闊達さを捨てるかわりに、静逸の中でだけ生きることを選んだのだと思うほどに、静かな仕草が総身に染みついている。

「それで、伝言を預かるのなら、不本意ですが受けましょう。・・・この鉢を持ち帰るのなら、どうぞ」
私は持っていた薔薇の鉢をルイ・ドゥ・アルディの目の前に差し出した。
半分に割ってあり、本数が少なくなっているが、これはあの黒須昶が丹精込めて育てた薔薇には違いない。
私には価値のないものであるが。彼にとってはそうではないはずだった。

これを引き取ってくれるのであればそれに越したことはない。

これまでのことがパズルのピースのように当てはまって、私の謎を解き明かしていく。
鉢には・・・黒須昶がディナーの際に用意した、あの青灰色のリボンが巻き付けられていた。私はその色を見て、彼の瞳の色と、黒須昶の言葉を思い出したのだ。
彼女は、大事な人から株分けしてもらったと言っていた。
それは、ルイ・ドゥ・アルディのことではないのだろうか。
まったく同じ色の瞳の人物が、目の前に居る。

・・・でも、ルイ・ドゥ・アルディは黒須昶に会いに来たのではなく別の用事でここに居る。
しかし、それらは皆・・彼女に繋がっているのだと思うと、またしても黒須昶に動かされた気がして、私はそのまま黙り込んでしまった。

「寡黙な人は良いね。・・・お喋りであるより有能に見えるから」
彼は歌うように囀るようにそう言った。
私が彼の言葉を引き出そうとしていることを既に察知していたらしい。
しかし頭脳ゲームやパワーゲームに付き合う時間も余裕もなかった。
私は、彼と競うつもりはまったくない。
■11

私が差し出した薔薇を一瞥するだけで、ルイ・ドゥ・アルディはそれを受け取らなかった。
薔薇に造形が深い者や、バイオ関係に携わっている者であれば、この薔薇の鉢がどれだけ希少価値であるかすぐにわかるだろう。
それなのに、彼はまったく興味が無いと言うかのように横を向いた。
彼は横顔が美しい。
そう思った。
怪我をしたと言っていたけれど、どこをどう負傷したのかさえ判別できないくらい完璧な顔立ちだった。

彼はこの薔薇を知っている。

ひょっとすると黒須昶に捧げた薔薇なのかもしれない。彼ならあり得ることだった。
ルイ・ドゥ・アルディならできる。
だんだん・・・私は記憶を呼び起こしていく。
忌まわしいとさえ思った自分のことを穿り返すことになるから、それは止めていたのに。
様々な化学式や遺伝配列の図式が紋様のように頭に浮かんでは消えていく。
同時に・・・忘れたはずの匂いも蘇る。それは家の庭の薔薇の香りだった。

この薔薇の香りに及ばないほどの僅かな香気であるのに、私は酔ったように薔薇たちの傍で睡臥したことを思い出した。

「・・・リボンが濡れてしまいましたね」
私はそう言った。
鉢に紡がれていたリボンが・・・湿って本来の青灰色からもっと濃い色に変化してしまっていた。
私はその紐の色が、ルイ・ドゥ・アルディの瞳と同じ色であることに気がついていた。
でも言わなかった。

このような場面で述べる言葉はきっと決まっているのだろう。
彼女は元気ですよ、とか。
彼女の婚約者ですね、とか。
そう言ったのであれば、ルイ・ドゥ・アルディは即座に私に車を降りろと促したのかもしれない。

私とルイ・ドゥ・アルディを繋ぐ共通項は、目の前の薔薇を持ってきたあの人しか居ない。

それなのにそのキーワードを口にすることを禁じた星辰の子は、私を試すように話を切り出した。
彼は言葉少なく返答する私について判定するために、長い話をさせるつもりらしい。

私は困ってしまってだんまりを決め込んでいたがそれでは解放されないことを知った。
私の第一目標は、この車から脱出して、自室に逃げ帰ることなのだから。
壮絶な美というものは、時に遠ざかりたいと思ってしまう。
薔薇の美しさでもそうだった。
あまりにも美しい薔薇は、周囲に他の種が育たない。
そして、薔薇の鉢そのものも、花を結ばせる本数が極端に少ない。
・・・まるで、艶やかに鮮やかに咲き乱れるぶん、他の者の命や養分を吸い取っているかのように。

彼は黙ったままだった。
その先の言葉を私が繋げることを強要して、煙草を吸い続けている。
・・・・このまま吸い続けていれば、どんなに窓を開放していたとしても、やがて薔薇の花弁は傷んで萎れてしまう。
それを私がよしとしないことを、ルイ・ドゥ・アルディは知っているのだ。

美しい人は・・・見惚れるだけでは済まされないよと言っていた。
彼にも棘がある。
どんなに柔らかくても、美しくても棘は咎なのだ。
彼は・・・痛点を刺激しないほどに鋭い棘を持っている。
孤独で誇り高いことが最上の成分であると主張するかのように。
・・・・確か、薔薇の子孫だと名乗る一族がパリに居たと思った。
それは、彼の一族なのかもしれない。

不用意に近づけば血を流す結果になる。
しかしそれを知っていても手を伸ばす者が居る。
知っているから遠巻きにしか眺めない者も居る。
・・・・私はどちらだろう。
関わり合いになりたくないな、というのが正直なところだった。

こうして考えると、黒須昶とルイ・ドゥ・アルディは対照的だ。
黒須昶は意図せずして相手に近寄る。
ルイ・ドゥ・アルディは意図して相手と距離を置く。
それなのに、非常に良く似た空気を纏っていた。

私の中では、すでにそれは確信だった。
ルイ・ドゥ・アルディは黒須昶の婚約者だ。
それなのに彼女に会おうとしない。

黒蝶貝のカフスボタンは、薄く薔薇の紋が刻印されていた。
ひょっとすると、という私の考えはかなりの確率で的中しているのかもしれない。

しかし自分の予想というか妄想を繰り広げるには、この空間は狭隘すぎた。
ルイ・ドゥ・アルディが僅かに開いた窓から出入りする、湿っているけれども新鮮な空気は、室内の充満を解消するほどの風量ではなかった。
私は顔を顰めた。
むせかえるほどの強い香気に目眩がしそうになり、とうとう根負けして私から種明かしをする羽目になってしまった。
何か言葉を発しないと、とてもこの状態で沈黙を保ちながら呼吸することは困難だったからだ。
花のにおいに酔いそうだった。

「・・・・さて。僕がどうしてここにやって来たのか、理由のうちのいくつかに、思い当たる節があるようだね」
「そうね」
私は頷いた。
ルイ・ドゥ・アルディの青灰色の物憂げな瞳がこちらを向いていたけれど、手元の鉢から漏れる香気に眼が潤んでくるので、その潤がちょうどよく彼の美貌をフィルタにかける役割を持ったようだった。

ルイ・ドゥ・アルディの美貌は目を見張るばかりだ。
きっと・・・この苑の同世代の者たちが彼を見たら、一目で魂を奪われてしまうだろう。
そして彼の出自や環境を知ると、もっと焦がれるようになるだろう。
しかし、そういった羨望のまなざしは、彼には通用しない。

私は溜息をついた。

「この薔薇のことを少し調べた」
「そう」
彼はわかりきっている回答を繰り返すことは時間の無駄と言うように、素っ気なく言葉を出した。
相づちにもならない短い言葉を出すだけだった。
そして煙草をまた吸う。
優雅に、慣れた手つきで。
回答を知っているのに、私の口から言わせることに意味があると彼は考えているのだ。
金の髪の、青灰色の瞳の人は、私に向かって・・・・飾り立てず、前置きの枕詞を並べ立てることもせず、ただただ、私とルイ・ドゥ・アルディの間にある、この薔薇の鉢のことを気にかけている。

彼が先ほどから私を見るのではなく、私の膝の上に乗った鉢に集中していることくらい、私にもわかった。
言葉が少なく、それでも私を知っていると主張するルイ・ドゥ・アルディは、私の何もかもを知っているのだろう。それなのに何も言わない。
あの黒須昶のように。
彼女も・・・自分が相手をどう思っていてどうしたいのか、最後まで言わないで、相手に言わせるように仕向ける。
それが狡いのだと私が言っている言葉が、無声映画のように彼女には届かない。

いや、そう誰かに言われていることそのものが、わからないのだ。

「・・・あれは愚鈍な娘だからね。もっと指摘して追い詰めてやって欲しい」
彼が私の考えを察したかのように、そう言ったので、私は苦笑いを浮かべた。
彼女の愚行や浅慮を許容してくれというのではなく・・・彼はもっと責め立てろと煽る。
彼は、彼女の定められた人ではないのだろうか。

私は溜息をついた。
「貴方と彼女の関係は興味がないし、その関係に役立つ行為を無償で提供するつもりもない」
「有償なら良いと？」
「それもないわね」
その言葉に、彼がくすりと笑いを漏らした。
「良いね・・・・。その答え方の万分の一でも、彼女が学んだのなら・・・・もっと違う結果になったのだろうけれども」
「そこに『彼ら』も付け加えてくれると、私は少し喜んで気をよくすると思うわよ」
そう言うと、今度は彼は煙草を手元の灰皿に押し当てて、吸い始めたばかりの煙草の火を消した。

「それは貴女の返答次第。・・・・さぁ、回答刻限は過ぎている」
彼が促したので、私は眼を瞑って、大きく息を吸った。
鼻呼吸すると、華香で目眩がしそうになるので、大きく深呼吸して、そして口から吐息を漏らした。
その時に「薔薇は嫌いよ」と言ったころ、ルイ・ドゥ・アルディがそれに呼応した。
「奇遇だね。・・・オレも同じだよ」
■12

ルイ・ドゥ・アルディに「自分と同じだ」と言われたら、多くの者は、舞い上がって喜び、それだけでこれから数年を自分の自慢の粮にして過ごすことが出来るのだろうと思った。
でも私はますます困惑した。

彼と黒須昶は似ている。
だから、そんなルイ・ドゥ・アルディと私が似ていると言われると、そこから導ける方程式はひとつしかない。
私と黒須昶が似ていると示唆されて、私は辟易した。

「よして」

私があからさまな嫌悪感をあらわにすると、ルイ・ドゥ・アルディはますますおかしそうに・・・満足そうに嗤った。

私の困惑する姿を見て。
薄い唇の端を歪めて、彼は微笑んだ。
自分と同じだと言っておきながら、自分と違うことを確認して、満足そうに・・・彼は嗤った。
ルイ・ドゥ・アルディは誰と同一でもないということに誇りを持っているようだった。
誰と同じでもないことを確認することで、彼は彼であり得る。
そんな気がした。
魂や性質が似通った者を求めるのは人間の性だと教えられた。
似た魂を持った人々を、私は知っている。
彼らから逃れるように、この苑にやってきた。
決して薔薇を植えることのない、無機質で無為で殺伐とした世界に望んで足を踏み入れた。
こんな高雅な薔薇の香りをかぐ事はないと思っていたのに。
それなのに・・・黒須昶とルイ・ドゥ・アルディが突如として私の前に現れて、私の記憶を穿り返す。

それなのに・・・
ルイ・ドゥ・アルディは僅かに微笑んだ。

私は異常な空間に存在していた。
日常では決してあり得ないような婉美な世界に私は放り込まれた。
見たことのないような目の醒めるほどに美しい男性を正面に配し、狭い空間で息の詰まるような薔薇の芳香が立ちこめる場所で・・・私は私の話を始めることになろうとは。

「・・・・この薔薇のことを調べた」
私は止むなく、話を始めた。
沈黙が怖いわけではない。
しかし、ルイ・ドゥ・アルディの時間は少ないのだと思った。
各国の時間を記す時計を身につけて、プライベートジェットで飛び回る彼の生活は、私とかけ離れている。
それなのに、日本の時刻を気にして、パリの時刻を気にする時計を身につける彼は、時刻を気にしているのではないと思った。
・・・その場所にいる人を気にかけているのだと、思った。
時差の計算はきっと・・彼にとってみれば、たいした作業ではないはずだった。
それなのに、ルイ・ドゥ・アルディは時差は影響しないと訴えるように、こんな時間に出没する。

彼は人に合わせるのではない。
彼に人が合わせるのだ。
類い希なる人と一緒に居ると、こちらが苦しくなる。
同じレベルで呼吸をすることができないからだ。
・・彼はここに居てはいけない人なのに。
それでも、彼女のために・・・・
ここにやってくる。

環境が変わっても、決して自分を変化させることをしないあの人のために彼は・・・無表情に、退屈そうに・・・それでも呼ばれた彼女の近くにやって来る。
本当な・・・ルイ・ドゥ・アルディは彼女に会いたいのではないのかと思った。

こうして距離や時間をおく者ほど、その欲求は強烈だ。

会わなければ、楽なのだ。
ますます会いたいと思うこともないから。
会ったら、苦痛を感じる。
もっともっと会いたいと思うことを止められなくなるから。

私はそっと溜息をついた。
この吐息の代償は高くつくでしょう。
そう思いながら。

「・・・今日、実家に行きました」
「それで？」
ルイ・ドゥ・アルディが言葉を促したので、私は続けることにした。
問答をやり取りするより、肺肝を開くことを決して話を披露してしまった方が楽だった。
誰かと・・・質疑応答を繰り返すほどには、私は・・・自分を受け入れられていない。
客観的に自分のことを話すことはできる。
しかし、誰かと主観的な話をすることはまだできていない。

私が言葉が少なく、そして決して黒須昶のことを明かそうとしないことから、ルイ・ドゥ・アルディは的確な空間を提供した。
彼が謎解きをするのでは、解決できないのだ。
私が、私のことを冷静に見つめられて・・・あの晄の娘のことを、ルイ・ドゥ・アルディに正確に伝えることができるかどうか、試されているのだと思った。
■13

私は仕方なしに話を始める。
それがルイ・ドゥ・アルディのやり方なのだと知った。
自分の思いの通りに人を動かし、そしてそれが赦される環境にあり、誰も不平を言うことの出来ない容姿を持っている人が目の前に居る。
一生の中で、そんな人と巡り会う機会は、そうそうはないだろう。
私は・・・・いや、私を含めたこの苑の人達は、他の人よりも遭遇する確率が高い世界に近い場所で生きている。
でも、自分はそんな場所で生息していても、特殊な能力を身につけることはない凡庸な人間なのだと思い知らされる。

「薔薇を分析に回した」
「鉢が半分に割ってあるから、それは見ればわかることだよ」
「・・・・・貴方はどこまで知りたいの？」
どこまで知っているの、とは聞かなかった。
彼は黙っていた。
私のことは興味が無いのだろう。
私も彼に興味を持たれても困るだけだ。
静かに生きていたいのに、どうして黒須昶はこうやって厄介事を持ち込み、私を静寂から引き摺りだすようなことをするのだろうか。
理解できない。
いや、理解したらお終いだ。
「・・・・・この製法について、類似のものがデータベースにあった。遺伝子組み換えを行ってあって、改良すれば食用にもなる。わかったことは少ししかなかった。
その技術はこの国にはないもので・・・・そしてその論文を書いている人も見つけた。
けれども、実証論文を発表せず、それは埋もれたままになっていた。
もし・・・これが世に出れば、創り出すことができないとされていた幻の薔薇がいくつも誕生することになる。
・・・・商品価値もあるけれども、それ以上に農林学だけではなく・・・世の研究者達が血眼になって、この薔薇の創作者のことを探すでしょうね」

そこまで言うと、彼は満足そうに青灰色の双眸を細めて、僅かに頷いた。
彼の求めていた答えを私が導き出したからだろうか。
「いや、それ以上だよ」
私の思考を読み取ったかのように、彼はそう言って微笑んだ。
冷たい微笑みだった。
「ほとんど時間がなかったはずなのに、そこまで調べたのか」
「薔薇の香りが特殊だったから」
私は肩をすくめた。
ルイ・ドゥ・アルディは脚を組み直した。
「・・・・アルディさん」
「ルイで良いよ」
彼は彼の名前を呼ぶことを許可した。
けれども、私は気安く彼の名前を呼ぶことが出来なかった。
私は唇を噛んだ。

「今日、貴女が行った行動には無駄はなかったよ、Mademoiselle。
こちらの予測していた範囲の中で、最速の時間で辿り着いた」
「私がデータベースにアクセスしたことを知っているのね」
「そう」
彼は満足そうに言った。
煙草を口に銜えながら・・・彼は少しも面白くなさそうなのに、面白い話をしようと言った。

「・・・・ある男が居てね。
・・・・そいつはある時期に集中して・・・・狂ったように論文を出した時があった。
そうかと思うと、突然学会論文を発表することを止めてしまった。
検証も実験もせずにそのまま放置し、その一方で、開示しない薔薇の品種改良を行い続けるという奇特な人物だ。
その膨大な量はデータベースに蓄積されているけれど、公開論文については、手続きを踏めば、アクセスすることができるサーバに格納されている。

その古い論文などに頻繁に同一人がアクセスしているということが明らかになった」

私が、論文の中で遺伝子組み換えを行った薔薇について、当時は画期的で奇抜な論理を展開していた論文があったことを思い出して、アクセスをしたことについてルイは指摘したのだ。
私は反論した。
「正規の手続きを取ったわよ」
それなのに、ルイはそこでまた挑戦的に微笑んだ。
この上なく魅惑的な微笑みだった。

「パスを持っている人物は・・・今は居ない人物なのに？」
「・・・・・」

「カードは順番に出すことも必要だけれど・・・一気に手持ちを見せた方が、話が早いと思わないか」
ルイは私に辛辣に言った。

次は彼が自分の持ち札を出して私を誘導する。

「そのサーバ管理は、アルディが管理運営を行っているデータベースでね・・・僕はシステム関係にも少し携わっているから。
その膨大な種苗データベースによって、数多の国の農産物は管理されている。
学会での論文を含めて、様々な遺伝配列記録や、組み替え実験による結果や分析・・・一元化された深い階層になっている、古い論文集のデータベースを検索してアクセスする人間などはごく限られている。
今の世は、品種改良ひとつとっても・・・観賞用だけをごく限られた愛好家によって創り出すだけではないことは知っているね」

私は黙ったままだった。
彼はどこまでも・・・すべてを知っているのだ。

「でもそれは貴方がここにやってきた理由にならない。・・・アクセス記録から私を突き止めることはできても、私は何か咎を受けることをしていたわけでもない。・・・あのパスは両親から譲渡されたものよ」
私は虚しい言葉を繰り返した。
長らく使用していないパスコードを使って、研究所のサーバ経由でデータベースにアクセスしたのに、彼は私がやった小細工などお見通しなのだと言ってのけたから。

「それに管理運営企業が、ユーザーに会いに来るなんて、おかしい」
そこまで言って、私はふと口を噤んだ。
彼がここまで乗り込んでくる理由が・・・わかったからだ。

「彼女ね」
私は腸がぎゅっと持ち上がる感覚に襲われた。
黒須昶だ。

「この敷地の奥深くに・・・薔薇が枯れそうなので、成育方法に間違いがないか確認して欲しい、と言ってメールを送って寄越す愚かな娘が居る」
彼はそこまで言って、溜息をついた。まったく困ったものだよ、と言ったが少しも困っている風ではなかった。
面白くもないのに面白い話をすると言う。
困っても居ないのに困ったと言う。
彼の感情の起伏というものは、平坦で、決して波を立てるようなことはないのだろう。
そう教育されている人々のうちの一人なのだと思った。
論文の執筆者と同じ姓を持つ人物は、私の前で泰然と構えていた。

「詳しい友人に聞いてみると言って、その人物の名前も記載されていた。・・・名前を見て、僕は立ち寄り先を変更する気になったというわけだ」
「友人・・・」
私は呟いた。それが私のことだと認めたくなかった。
黒須昶と私はいったいいつから友人関係になったと言うのだ。
彼女の傲慢さがまたここで露呈して、私はさすがに不愉快そうに顔をしかめた。

「そして、同じ頃に、品種改良されたものを入手したが、新種であるから類似模倣の品がないかどうかの調査依頼と、新種であればそれを詳細分析して欲しいという依頼が、ある研究機関から・・・・こちらの研究所に連絡があった」
それで彼がこれほどの握っているということなのか。
この短い時間で、私のことを徹底的に調べ上げたのだろう。

nil admirari　後編

■14

私が行動したことは限られている。
サーバにアクセスして調べ物をしたが、セキュリティの問題で、この寮からはアクセスできないページがあったので、研究所の検索室に赴いた。
そこでいくつか検索をしたり文献を読んだりして作業をした。

次に、鉢を割って、実家近くの研究室に行き、無理を承知で分析を頼み込んだ。
・・・画像のいくつかと、考察をあらかじめ送ってあったので、話は短く済んだ。
年端もいかない私が持ち込んだ薔薇について分析をしてくれるという約束を取り付けてきた。
両親と深いなじみのあるその人は、大変に興味深いものだと言ってそれを引き受けてくれた。
またこの場所に来てくれて嬉しい、と言われて私は困った笑いを浮かべるしかなかった。

もう二度と、あそこには脚を踏み入れないと思っていたのに。

研究所からの検索アクセスがあったのに、その研究所から調査依頼があったので、ルイは私が関わっていると確信したのだろう。

「大変な価値について知らない愚かな娘に、誰かが薔薇を持たせた。これが土中に植えられて増殖し、目にとまれば・・・大変な騒ぎになるだろう。それは望まない」
私はそこまで聞いて、おや、と思った。
青灰色の瞳の持ち主から贈られたと、彼女は言っていた。
それはルイ・ドゥ・アルディではなかったのだろうか。
そうなると・・・・・
その相手が誰だか明らかになったが、私はその人の名前を言わなかった。

「論文の執筆者が、実証するために薔薇を創作するのはよくある事よ」
私はそう言った。私のよく知る人々も同じだったからだ。

原種ではないから、これが発覚すれば大変な騒ぎになるだろう。
あまり詳しくない、閉ざされた空間のこの苑の中で行われた出来事だったから・・・そこで留め置くように、とルイ・ドゥ・アルディが乗り込んで来たというわけだ。

「莫大な製法特許の取得と・・・法の兼ね合いもあるが。これを世に出したくないという意志が働いていることを含み置いて発言してくれ」
ルイは私に忠告した。

そうだった。忘れていたわけではないが、あまりにも忘れたいと強く願いすぎて、気がつかないふりをしていたのだ。
アルディの名前を聞いて、どこか心に残るものがあったのは、遠い記憶に・・・薔薇の製法について、特許取得したときの筆頭代理人が、確かミシェル・ドゥ・アルディで、複代理人としてルイ・ドゥ・アルディという名前があったことを思い出した。
検索をして、それが事実であることを確認した。
だから、黒須昶の婚約者であるアルディ家は、我が家とも、少なからず関係があるのだ。
彼女は、それを知っていたから・・・私に近づいたのだろうか。
しかし、ルイ・ドゥ・アルディがこれほど若い人物だとは思わなかった。
年齢差のある許婚はよくあることだったから、もう少し年上かと思っていたが・・・・
これほど若い人物であるなら・・・一体、彼は当時何歳だったのだろうかと内心冷や汗をかいた。
恐ろしく頭の切れる人だとは思ったが、彼は・・・天才なのだ。

「貴方が彼女に入れ知恵したの？」
私はただ、静かに過ごしたいだけなのに。

「答えはノンだ」
ルイは嗤った。
「彼女と連絡を取ったことはない。一方的に、いつも近況報告だと前置きをしたくだらないメールが不定期で来るだけだ」

彼女のことだから、誕生日や季節ごとの行事がある度に、彼にメッセージメールを送っているのだろう。
しかしどうにも奇妙だった。
それらに眼を通しているのに、ルイはまったく返信をしないと言う。
そして全く自分のことを口にしない黒須昶が薔薇のことだけは気にかけて、普段まったく行き来のないルイにまで助力を求めるようなメールを送るとは・・・・
このふたりは、どういう関係なのだろうか。
婚約者なのに、近くにいるのに、逢いに行こうとしない。

そして、考えもなく大きな事態を引き起こそうとした娘の後始末を淡々と行うために、こうして手回しをして私に口止めをしにやって来るルイ・ドゥ・アルディ。

そして青灰色の瞳の持ち主と、彼と彼女の間には、計り知れない何か・・・理解し得ない深い溝があるように思った。
彼女と私が過ごした年数よりもっと遠い昔からそれが存在するのだろう。

ルイは自分の親のことを「あの男」と言った。他人のように語った。

彼の言葉は正しかった。
きっと・・・私はルイに似ているのだろう。

両親は私に愛を注いでいる。彼らなりのやり方で。
だから彼らに一緒について行くことが辛いのだ、と吐露したときに、困った顔をして次に悲しそうな顔をしたけれど、結局、この苑に私を置いて行くことにした。
全寮制で、実家からうんと遠いわけでもない。
留守がちな家に置き、薔薇の香りに酔う娘のことを憂えて・・・取り扱いを考えてここに置いて行くことにした。

私はしばらく黙ったままだった。
ルイは、私に要求しているのだ。
この薔薇のことは秘匿するように、と。
研究所からの調査依頼が彼のところに来た段階で、彼のことだから、置いて来た鉢の半分を回収して、調査打ち切りを命令していることだろう。
半分に株を割った鉢を見て、見れば判ると言いのけたのは、その残りの半分の行方を知っているからだ。

ルイ・ドゥ・アルディは話題を突然変えた。
黙っているままの私が、彼の申し出を断ろうとしている可能性があると判断したらしい。
彼は、次の持ち札を使うことにしたらしい。
湿った金の髪はまだ濡れたままだった。
見事な黄金の髪の下から・・冷徹な青灰色の瞳を覗かせて、正面から私を見た。
息を呑むほど美しい貌に見惚れるより、緊縛した空気を感じてますます私は黙り込んでしまう。

「・・・・貴女の家は大変な愛好家として有名だね。一家の写真が専門誌に紹介されるほどに。・・・彼女はそれを見て、貴女を思い出したようだ。
薔薇の温室設備は私設でありながら素晴らしいと聞いているよ。
そして改良だけに留まらず事業を展開して・・・様々な種の改良によって莫大な富があるはずなのに、研究所を設立すると、それを全部委託して、両親は世界各国で新種の普及に勤しんでいる。」

「最初は小さな薔薇の専門店だったのに」
私は呟いた。
それが、あっという間に変わり果ててしまった。

「雑誌には、興味深いことが書いてあったよ。・・・貴女のことだ。薔薇に囲まれて、始終薔薇に包まれた娘は、嗅覚器官が発達しており、薔薇の香りを嗅ぎ分ける能力が抜きんでて素晴らしい、と」
「今は違う」
私は溜息をついた。
一家の写真、と聞いて諦めがついた。
あの倖せそうに映っている写真を見ているのだったら、どうして今、私が薔薇と縁のない生活を送っているのか・・・両親が家を空けて、事業を託して、自分たちは忙しく飛び回っているのか、奇異に思うことなのだろう。

この苑の人には、誰にも話していないことだった。

ルイ・ドゥ・アルディは更に持っているカードを使った。
そうして私を追い詰めていく。

「嗅細胞は、通常600万個あると言われている。
けれども貴女のそれは・・・当時で倍以上あると言われていた」
私は彼を見て、苦笑した。
彼は確か、バイオ業界の偉人でもあったはずだった。
私は彼が取り扱っているあらゆる方面で興味の対象になっているのだ。
だから・・・彼はこうしてやって来たのだ。
私は嗤った。
自分自身を嘲笑った。

そう。
この薔薇の種は、香りがきついのではない。
本当に僅かしか香らないから、黒須昶はディナーの席にこの花を飾った。
食用にもなるくらいだから、強香では味覚に影響するので、そうは作られていなかった。

だから。
ルイ・ドゥ・アルディの嗅覚が異常なのではない。
おかしいのは、私の方なのだ。

私はくすくす嗤いながら皮肉めいた言葉を出した。

「・・・・僅かにしか香らないはずの薔薇の香りがきついと言って、顔を顰める日々を送るのに。
自宅の薔薇の匂いに酔って倒れる娘を・・・薔薇が授けた娘だ、と言ってもてはやした大人達は私のことを持て余して、結局私を遠ざけることに同意した」

遠ざけたのではない。
私から、遠ざかったのだ。

両親は私の様子を見て、薔薇を伐採しようとした。
でも止めてくれと言った。
それは彼らが望んでいないことだったから。
私が薔薇に囲まれて育った記憶は私のものであり、それらを剥奪することは誰にも赦されないことだと思ったから。
私は、自分がここに居なければ良いのだからと言った。

思春期を迎えるころにそれは突然始まった。
それまで芳醇に香っていた、私のお気に入りの空気を身に受けると、目眩がして頭痛がする。調子が悪いときにはそのまま昏倒し

てしまう。
薔薇の香りが障るという程度では済まされなかった。

・・・やがて、私の嗅細胞が異常なほど増殖と減少を繰り返していることがわかった。
年齢が高くなって、成人する頃には落ち着くだろうということで、私はしばらく家を離れることになった。

嗅覚異常やアレルギーという言葉で片付けられなかった。
元からそういう体質を持って生まれてきたから。
これは何かの業なのか因縁なのだろうかと言われた。
薔薇を愛する人達から生まれたのは、薔薇を厭う娘だったから。

静かにひっそりと過ごし、卒業後はまったく関係のない場所にでも移るつもりだった。
人が多いところが好きなわけではない。
そういう場所であれば、嗅覚過敏について、何も問われないからだ。
特定の香りにだけ異常に反応する。
だからその源がほとんどない場所に行けば、普通に生活が送れる。
・・・屋敷を壊すことが忍びなくて、私が家に寄りつかないことで私と両親は、折り合いをつけたのだ。
■15

そんな事情を知っていて私を・・・遠ざかっていた匂香の前に引きずり出した黒須昶を恨んだ。
単に・・・彼女は私の実家が薔薇の愛好家でそれを生業にしている家であり、倖せそうに映っている家族写真を見て、私にも両親と同じように薔薇の知識が豊富にあって彼女の窮地を助けてくれるのかもしれないということを期待していただけなのかもしれない。

それでも。
私は彼女が嫌いになった。
ますます、厭わしいと思った。
他者がどう思っているのか考えないで、近寄ってくる。
そして有無を言わさない状況に追い込んで、ノンという選択肢を考えていない。

薔薇に飢えているのに薔薇から遠ざかる者を見て、彼女が憐れんで、施しのためにと勝手に判断して、薔薇を差し出したのだ。
喉の渇きを癒すことの出来ないものに海水を差し出すように。
それがどれだけ私を貶めているか、彼女は気がついていないのだろう。

自分の事情を明らかにするつもりはなかったし、結局は引き受けざるを得ないことになりそうだったので、この事態については文句はない。そう思うことにする。
それに、新種の・・・この花のこれまでにないような清雅さに惹かれて、私は結局、彼女の申し出を受け入れてしまったのだから。
黒須昶が困っているから助けたわけではない。
私は・・・私は彼女の元で咲く薔薇が気になっただけだった。

「その薔薇は持ち帰り、彼女に言うと良いよ。鉢植えでしか育たないので、少し大きめのプランターに植え直すように。露地植えはしてはいけない・・・と」
「嘘はいけない」
私は慌てて言った。この種は、本当は根が長いので、露地に落としてやった方が良い。
格段に成育速度も状況も改善されるはずなのだ。
「嘘ではない。・・・それは本来あるべき場所の土でしか咲かない。一度は花を咲かせるが、翌回からは二度と咲かない」
彼がそう言うのであれば、そうなのだろう。何かを納得させるような言い方だったので、ルイ・ドゥ・アルディは確証があってそう言っているに違いない。

「私が口を噤んでいることで私は何を約束されるの？」
私は静かに言った。

黒須昶は来年の今頃はここにいない。
だから、去る時には土に植えた花ごと持ち去ってしまうだろう。
あの娘のやることだ。
思い出深い薔薇を放置していくことはしないだろう。
そしてまた別の土に植えて・・彼女のように、様々な場所を流転しながら命を削っていく苗たちを見るのは忍びなかった。
私と同じだからだ。
別の場所に行っても私の憂鬱は解消されない。何かの拍子に、こうやって・・・家のことであれこれ言われたり、薔薇の香りに酔って気分を悪くしたりすることもあるのだろう。
根本的に改善にならないそれらの人生は、つまらないだろう、とルイが指摘しているのだ。

彼女に事実を曲げたことを伝えなければならない理由は十分に存在する。
ルイは利害関係があるから。
私は薔薇が愛おしいから。
だから、この苑には残していかない。
世に出てはいけない薔薇を、黒須昶は胸に抱いたまま、鉢植えにして自存できずに寄生して生きていくのだろう。
誰かに助力してもらいながら・・・永遠の晄と名付けられた彼女は、晄を欲する憐れな人々に対して、常に慈愛という名の虚無の晄を放ち続けるのだろう。
それが彼らをさらに枯渇させる結果になったとしても。
この薔薇の扱いが良い証拠だと思った。

だから、私は黒須昶が嫌いなのだ。
無邪気な・・無邪気な危険な晄で輝き続ける人。

彼は煙草を揉み消すと・・・雨に眼を細めた。
「この国は雨が多いな」
そして、空いた片手を伸ばし・・・私の脇に置かれた薔薇の包みを、軽く持ち上げた。

半分に割っても土を含んでいるので、相当な重量があるはずなのに、彼は軽々と持ち上げて・・・そして自分の瞳を同じ色であったリボンに眼を細めて微笑んだ。
「あの人らしい。気遣いのつもりが・・・こうして汚れて行くことで辱められることを念頭に入れていないのだろうな」
澄んだ青灰色の瞳が一瞬だけ和んだような気がした。
辛辣な言葉を吐いているのに、彼は・・・彼女のことを話す時だけは、言葉が多いような気がした。
そして、私にその鉢を戻すと、今度は取引を持ちかけてきた。
取引。まさに、そんな言葉でしか表現できないような、奇妙の申し出だった。
金の髪が揺れて・・・彼は
「・・・アルディ家のネットワークを使って、貴女の両親の普及活動を支援しよう。・・・特許取得時には、契約関係にあったのに、彼らは人と人の繋がりが重要だと言って・・今でも現地に赴く方式で各地を移動しているが」
「微妙な土の配合や設定についてまで指導しているからよ」
・・・彼らは種を授けるだけではなく、それが生き存える方法まで伝え歩く。
単なる販売物ではないのだ。
彼らにとっては、娘同然だから。
薔薇と暮らすことが出来ない娘のかわりに、彼らは・・・自分たちの開発した薔薇を愛でる。
代償行為に他ならならない、と自分たちもよくわかっているのだ。
「それはいらない。・・・支援されても、彼らは独自のネットワークを確立しているから、いずれは不要になるし、私には影響しない」
黒須昶との関係を保持しろ、と遠回しに言われて私は困却した。
「いや、貴女がいずれ・・必要になる」
私はその言葉に顔を上げた。
ルイの美しい顔を再び正面から見ることになり・・・私はぎゅっと唇を噛んだ。
優雅にけれども物憂げに語る彼は、説明さえ面倒だと言わんばかりに溜息をついた。
彼は・・・誰かと話をするときには既に結論が出ているのだろう。
私が理解するように話をして納得させるのではなく、彼の中では単なる宣言にしかすぎないのだ。

「今は確約しないが。・・・いつか、貴女のその嗅細胞が安定化するための遺伝子治療が施せる日が近い」
「どういうこと？幹細胞治療は駄目だった」
私のカルテを読んでいるのだろう。
ルイ・ドゥ・アルディは、状態が判らないとは言わなかった。

「いずれ、今よりもっと有効活用できるiPS細胞が出回る。それまで待て」
「どうしてそう言い切れるの？貴方たちの『いずれ』というものはとても遠い先のことを指していることがほとんどだ」
「・・・もっと近い将来だよ。オレの予定では、あと５年以内に確立する」
「５年？・・・気が長い話だわ」
彼は少し声を漏らして笑った。
オレはもっと長い時間を待っているよ、と彼は言った。

「オレの予定は絶対だ。確実に実現される。・・・・それなら、４年以内に縮めてやろう。貴女の嫌悪感に免じて」
「ありがたいお言葉ね」
私は彼の言葉に溜息を漏らした。
これまでどんな治療を施しても、快癒することはなかった。
一瞬だけ、改善したかのように見受けられるが、それでもすぐに嗅細胞は増殖を繰り返し、あっという間に死滅する。
どういうサイクルなのかさえ、わからない。
それを容易い問題で、すでに決着はついていると自信満々でルイ・ドゥ・アルディが囁く。

金の髪の青灰色の瞳の持ち主は・・私の前に突然現れて、そして永年に渡り私を悩ませてきた問題をあっという間に解決しようとしている。

両親が各地を巡って普及活動を行わなくても良いネットワークを提供し、私の嗅細胞を平準化させると言う。
互いに利害得失が一致しているから、この薔薇を公開することはない。
彼はそう判断して、次の手を使うことにしたのだ。

・・・それには、黒須昶との付き合いを続けろと言うことだけが、条件だった。

彼は胸ポケットから小さな紙片を取り出した。
・・・・黒須昶が私に寄越したメッセージカードと同じ風合いのものだった。
細かい織りがあり、薔薇の刻印が入っている。
和紙で出来たそれは、吸湿性に優れている大変に手の込んだものだった。
濡れたスーツの下で、それは滲みもせず歪みもせず・・・ただ私に渡されるためだけに彼の胸の中で眠っていたようだった。
そこに、ブラウンブラックのインクで、所在地が印字されており、最後に同系色のサインがあった。ルイ・ドゥ・アルディの直筆の署名だった。

フランス語で書かれていたが、その所在地と所在地から、そこが私が薔薇の品種分析を依頼した研究所と提携された施設であることはわかった。

「4年経過後に、電子カルテを送信しろ。そしてその後ならいつでもここに来て良い。ただ、治療には時間がかかるから短期滞在でないことは確かだ」

「貴方にそれほど大きな借りを受けて・・私は同等の見返りを要求されても何も持っていないわよ」
「いいや、違うね」
彼はそう言って挑戦的に笑った。
頬に僅かに赤みがさして・・・彼の表情が蠱惑的なそれに変化する。
■16

「貴重な解析データを取得できる。それでも気に病むと言うのなら、貴女の髄液とＤＮＡ採取の許可を書面に残しておいてくれ」
私が苦笑いをすると、ルイは更に言った。

「将来のアルディ夫人の学友ということであれば、治療費は微々たる交際費さ」
静かに、よく通る声で。
将来を述べるとき、ルイは僅かに嬉しそうだと感じた。
その時だけは、彼は煙草に手を伸ばさないからだ。

「・・・それでも何かを支払いたいというのであれば・・・そうだね・・・彼女の結婚式には、貴女がその薔薇でブーケでも作ってやってくれ」
彼はそう言って僅かに顎をあげて、鉢の薔薇をさした。

「それは株分けをして鉢に植えて・・・貴女の知っている方法で栄養補給をする程度で永らえる。
それでも萎れたり枯れたりする時期が来るが、その時には・・・・彼女は戻ってくる頃だから」
彼の待つあの国に、彼女が戻るということなのだろう。
ということは、黒須昶はパリに行くのだろう。
私がその研究所を来訪するときには『アルディ夫人の学友』という肩書きがついていることになっているようなので、それを考えると・・・。
彼女はその時には彼と式を挙げている予定なのだ。
・・・その計画は、彼の言うところの「5年以内」に入っているのだろうと思った。
それを1年繰り上げて、4年以内と言ったのだから、ルイはそのとおりに実行するためにすでに色々と考え始めているのだろう。

「彼女には何らメリットがないわね」
私がおかしくなってそう言った。
ルイは、彼女が渋るようなら、パリの土に植えろと、私から助言しろと言うのだ。
そして、彼女をパリに寄越すように、と彼は指示した。
私が誰にも従わないことを知っているのに。
「貴女の言うことなら、彼女も耳を貸すだろう。それに疎ましいと思うのであれば、ますます・・・こちらに寄越した方が得策だと思わないのかな？」
「過分な信用の具合だけれど・・・私はそれほど彼女と親しくないわよ」

吸い込まれそうな程に美しい薄い瞳を、私に向けて・・・ルイ・ドゥ・アルディはふっと唇を歪めて、放胆に嗤った。
「貴女のことを、彼女は『nil admirari（ニル・アドミラリ）』だと」
「nil admirari・・・」
「そう。何事にも動じないことを意味するが、転じて不変という意味がある。・・・彼女なりの讃辞の言葉だね・・・意味はともかくとして。あの人は・・・そういう風に誰かを比喩したり特定の誰かの話をしたりすることは滅多にないから」
彼女のことをよく知り抜いているといったような言葉だった。
彼は間違いなく・・・彼女と永遠を誓う間柄なのだ。
そして長い時間を一緒に過ごし・・それでいてなお、贔屓目や欲目で彼女を評することはなかった。
しかし、この薔薇を黒須昶に贈ったのは、ルイ・ドゥ・アルディではなく、あのフランスの華なのだ。
・・・彼は、実父にでさえ、嫉妬しているのだろうか。
それなのに、私に彼女と友達になってやれと強要に近い懇願を届けに来るのか。

「私は彼女が嫌いなの」
うっかりしたことをこの苑の者に言えば、あっという間に尾鰭がついて広まってしまうので、決して口にしなかったことを、本人の婚約者の目の前で言ってのけた。

「そう。・・・気が合うね」
「焦がれているのに手が入らないから厭うという場合もあるわよ」
私が反論すると、ルイ・ドゥ・アルディは微笑んだ。
「それはオレに適用されないね」
「私にもよ」
彼は煙草に手を伸ばした。細いタイプの煙草を口に銜えて、また火を灯す。
・・・今度は相当な香りが充満して、私はぴくりと眉を上げた。
「減香タイプは好まない。・・・やはりきつい方が良いね」
そう言って紫煙を吐き出した。あっという間に車内は煙で充満してくる。

「・・・・でも、愛しすぎてそれを越えると・・・人はその人を忘れたくないから、忘れられないから、嫌いだと口にするのよ」
この苑に自由に出入りできる特権を持っているのに。
この扉を越えていけば、ルイのすぐ目の前に、彼女が住む部屋があるのに。
決して中に踏みいらない。
踏み越えていくことが出来ないからだ。
彼女は・・・誰の苑にも立ち入ることが出来る。
でも、立ち入った後のことを考えない。

・・・だから私は彼女が嫌いなのだ。

心を奪われた者たちは、彼女が去った後、どうやって過ごせば良いと言うのだろうか。
元通りの平穏な閑寂を取り戻すために、大変に苦労するというのに。
一度乱された苑は元に戻るまでには時間がかかる。踏み荒らすのは一瞬なのに。

「随分と道学的だね」
「真実であり、真理であると思うわよ。
・・・・貴方が彼女をこよなく愛していることはこれで証明されるから」

定めた相手なのに、踏み込むことが出来ない。
それなのに、こうして遠路はるばる彼女を救うためにやって来る。
そして自分には都合が良いと言ってのけたけれども、相当に負担を被って、私の口止めを行う。
・・・これが世に出回れば、所有権で揉めるだろう。
どこをどう取っても・・これは見事すぎて争いの種にしかならない。

新種であるか原種の亜種であるかということで、何年にもわたって諍いを続けている人々を間近に見ていた私には、間違いなくそうなるであろうという未来が見えた。

・・・これは、黒須昶の手元でのみ、存在を赦される薔薇なのだ。
銜えていた煙草を外して・・少し驚愕したような表情で、ルイが私を見た。

「・・・それはないね」

これほど截然としている反応をしていることがわからないのだろうか。
彼は星辰の子と呼ばれているのに。
たくさんの星を随えているのに・・・彼は随行する者のことには気を配るのに、彼が新付の民は把握できるのに。
・・・それなのに、彼は自分が惹かれている唯一の晄についてはまったく無防備なのだということがわかっていない。
ルイ・ドゥ・アルディのその返答の仕方が、これまでのように用意されたものではなく、かなり間があったことが、良い証拠ではないか。
彼は眼を反らして、私の言葉を完全に否定した。

「でも近い将来、彼女はアルディ夫人になる」
「愛がなくても結婚できる」
彼は短くそう言って嗤った。
少し・・・苦しそうに感じたのは、きつい煙草を吸っているからだろうか。
そうではないことはわかりきっているのに、彼は誤魔化そうとしている。
誇り高いということで高名な一族の貴公子は・・・静かに無表情に言った。
「そしてどんなに愛していても・・結婚できない時もある。
・・・良い見本が近くに居てね。
これは理の当然だと思っているよ」

私は自分のことでもないのに胸が疼いた。
この人は、実らない想いを秘めて・・・そして何年も彼女に逢わないことを自分に課している。
たとえ結婚しても彼女の心は手に入らないと思っている。

「彼女が私のことを『nil admirari』と言うのであれば、私は貴方こそが『nil admirari』だと思うわ」
彼にこの言葉の意味がわからないわけはないと思う。
だから、説明の言葉は付さなかった。
何年も変わらずに、彼女だけを見つめてきたルイ・ドゥ・アルディだけが・・・彼こそが、nil admirari（不変者）であるのだと思う。

彼は変化しない。
いや、彼は・・・ルイ・ドゥ・アルディは、彼女によってだけ変化する。

彼はまた横を向いた。
頬が少し朱に染まっていた。

私は嗤った。
形勢逆転とまでは行かない。
でも、ルイ・ドゥ・アルディに対して一方的な勝利を許したわけではなかった。
彼の冷たい表情を打ち崩すことが出来るのは、黒須昶だけなのだと思った。
感慨深いわけではないが、この冷酷な貴公子が唯一顔を綻ばせる相手は、やはり彼女しかいないのだ。
私は黒須昶が嫌いだったが、傲慢な星辰の子は嫌いになれなかった。
彼がそれで倖せになれるのであれば、黒須昶と卒後の連絡交換程度はしても良いのかもしれないと思った。
それに・・・彼は約束を違えることはしないとわかっていたから。
きっと
おそらく。
私が、またあの薔薇の咲き誇る家に戻れる日が来ることを、彼は確約したのだから。

･･･薔薇の家で育ったから。私と彼女は良く似た環境の空気を吸って育った。
だからなのだろうか。

彼女は私を定めた理由は、単に・・・単に便利で都合が良かったからという理由だけはないのだ。
彼女には、彼女の理由がある。
私が薔薇や黒須昶を厭わしいと思うのと同じように。
彼女には・・・愛おしいと思う者が居て、愛おしいと思うものがあるのだ。

それは目の前の貴人も同じだった。
違っているのは、彼があの人のために、こうして近くに来ていながら逢おうとせず、彼女に気付かれないようにそっと行動しているところだった。

・・・不器用な人達だな

そう思った。

「そろそろ時間だ」
見事なブラックダイヤの入った時計をちらりと見遣りながら、ルイ・ドゥ・アルディは私の降車を促した。
「その鉢は持っていってくれ。・・・その薔薇には用はない」
もう半分の鉢は、すでに回収しているのだろうと確信した。トランクにでも入っているのだろう。

「残りの鉢は彼女に返却するように。それから・・・残った株は貴女が持っていてもらっても構わないだろう。彼女なら記念に礼だと言って、押しつけて行きそうだが」

「ああ、想像できるわ」
「だろうね。・・・彼女はそう言った事には気が回らないから」
「それなら預かることにする。・・・これをいつか返すために、パリに行きましょう。今よりもっと・・・美しい最高の状態になった薔薇を見て、悔しがらないでね」
「楽しみな挑戦だね」

そう言って彼は私にそれを持たせた。
これが何を意味するのか・・・随分後になってから知ることになる。

最後に、私と彼は握手をすることもなく、ときめくような抱擁もなく、ただ素っ気なく「戻ります」「そうか」と言って別れることになった。
車から出た時。
・・・雨は止んでいた。

それほど長い時間滞在していたわけでもないのに。
まるで・・・星辰の子が、天空に指示して雨を止ませたかのようだった。
雲の切れ間から、朧に輝く月の光がちらりと見えた。

・・・上を向いて、深呼吸する。
水の香りが私の肺に入り込む。この匂いは好きだ。雨と葉露の混じった夜の香りだ。
嗅覚過敏になって以来、そんな動作はしなかった。
月夜や雨夜に深呼吸することを愉しむことさえ久しぶりの行為だった。

車のエンジンがかけられた。
ルイ・ドゥ・アルディは私を下ろしたあと、窓硝子を全開にして横顔だけを見せ続けていたが、ひっきりなしに煙草を吸っており、正面を向いたままでもう、こちらに向き直ることはしなかった。

最初に見た横顔と反対側の表情は、予想したとおりに完璧に整った左右対称の顔立ちだった。美しい眉を僅かに潜めて、彼は煙草を口元に運ぶ。彼なりの見送りだと思った。

私はふと・・・黒須昶は最初から・・・本当は最初からこうなることを知っていたのかもしれないと思った。
薔薇の香りに悩む私とルイ・ドゥ・アルディを引き合わせて・・・治療方法に役立つ情報提供をもたらすことを意図していたとしたら。
それなら、少し見直してやっても良いと思う。

「彼女は策士ね」
私がぽつりとそう言ったので、彼はそこで私を見上げた。
「いや、彼女は知らないことが多くてね。知ろうとしないと言った方が的確だが」
「貴方がメールを欠かさずチェックしていることも・・・こうやって近くに頻繁に来ていることも？」
彼はそこでまた銜えていた煙草を指に持ち直して、脚を組み直した。
金の髪が眩しく煌めいていた。
気のせいか、少し微笑んでいるかのように見える。

「・・・いつか、この薔薇と・・我が家の『虹の薔薇』を掛け合わせても良いと言う許可を貰いに、行くわね」

彼の国には、ファム・ファタルという言葉がある。そしてこの薔薇の名前だ。
運命の人という意味だが、彼のファム・ファタルは、いつになったら気がつくのだろう。

自分の瞳と同じ色のリボンを巻いた薔薇の鉢は、彼と彼女を暗喩しているものだと思った。
色が褪せても。雨に濡れても。彼は彼女の薔薇をまもり続けるのだ。
それがルイ・ドゥ・アルディを思い出して巻かれたリボンでないことを承知の上で。
彼は・・・彼は彼女に愛を注ぐ。

だから黒須昶は厭わしいのだ。
本当に気がつかなければならないことに・・・・気がつかないから。

彼がこれほど・・・これほど焦がれていることに。
彼がこれほど・・・これほどまでに彼女を愛していることに。

彼が・・・彼が彼女のnil admirariとなって、運命の人となって、彼女に微笑んでもらう日が来ると良いのに、と思った。

「彼女と貴方のお式には、是非、ブーケを作らせて頂戴。交配が間に合えばの話だけれでもね」

私の言葉にルイ・ドゥ・アルディは冷たく少し笑うだけだったが、どこか・・・穏やかな微笑みをしていた。
綺麗な・・心に染みるほどに透明な微笑みだった。

「それでは結婚式の招待者名簿に名前を入れておくよ。・・・・ホンダ夫妻によろしく」
「伝えます」

私と彼はそう言って別れた。

本当に彼女に逢わずに・・・彼は一度だけ、遠い目つきで、扉の向こう側を見た。
あの向こうには、もう長い間姿を見ていないであろう人が居る。
彼の・・ファム・ファタルがそこに居る。
でも、美しい薔薇になった彼女の目の前に彼が姿を現すのは、まだ今ではないということらしかった。

ルイ・ドゥ・アルディがそう決めてしまっているのであれば、それを堅守するのだろう。

雨が上がり、手に持っていた鉢を持ち替えた。

これから私は庭に植えた株を引き揚げて、鉢に植え替えしてやらなければならない。
そして、愚鈍な彼女のために・・・鉢植えで持ち運びに耐えうるための手順書を作ってやらなければならないし・・・とにかくやることが山積している。

この休みは短く感じそうな休みになりそうだと思った。

私はひとり、砂利道を歩き出した。

月が出て来た。

・・・この月夜を、彼女も見ているだろうか。

同じ空の下で・・・とても近い場所で、彼女を壮絶なまでに愛している男性が・・・近くで同じ空を見上げているのよ、と心の中で呟いた。
■17

結局、私はルイ・ドゥ・アルディのシナリオ通りに行動することになった。

黒須昶には、鉢植えで株分けをしないでも育てられる方法を教えた。
全部枯らせてしまうより、間引いて残りの命を救うことを教えた。

躊躇っていた彼女も、それが命というものであり、作られた命を守ることも作った側の使命であることや、そしてそうしなければ救えない命もあるのだということを、私が少し怒ったように告げると、そこでようやく納得したと言って頷いた。

「今度・・貴女のおうちの素晴らしい薔薇園を見せて欲しい」
彼女は少し興奮気味にそう言ったので、私は「そのうち」という曖昧な返事をして苦笑するだけだった。

あの家は、祖父母の代に父が住んでいた屋敷で、一度は人手に渡ってしまったのだが、それを父が買い直した思い入れのある屋敷だった。
当時から最新の設備で整えられた薔薇の温室で・・・幻の薔薇と言われている「虹の薔薇」が開花した。
だから、薔薇を刈るのだけはやめてくれと私が懇願したのは・・・父と母の思い出の薔薇園を壊したくなかったからだ。
それに、我が家の繋がりは・・・あの薔薇なのだから。
それが失われてしまえば、ばらばらな家族は二度と集約しないと思った。

最初は緑で、次に色が抜けてクリーム色になり、それが強くなって橙になり・・もっと強くなって赤になって、赤紫からブルーの薔薇になる。
蒼い薔薇は当時は幻の薔薇と言われていて、遺伝子操作しなければ誕生させることができない。
それを独自の研究で誕生させた祖父母は、今はもう居ない。
彼らが当時に文献を調べていた際に登録していたデータベースアクセスキーが、私が今回使ったものであり、「今はもう居ない人のもの」とルイ・ドゥ・アルディが言ったのは、そのためだ。すでに居ない人々のIDで、彼らの死後に発表された論文を検索する人物が居る、ということでルイ・ドゥ・アルディの興味を惹いたのだろう。

「実は貴女に話しかけたくて頃合いを見ていたのだけれど話しかけられなかった」
黒須昶は素直に白状した。
製薬会社を経営していた祖父と・・薬品医療機器を扱うクロス・グループとは知らない間柄ではなく、薬品のバイオシミラー（バイオ後続品）問題やジェネリック医薬品（後発薬）の問題では提携があったと聞いて納得した。
その後に祖父は退任をして、不幸な死に方をすることになり、一度は途切れてしまった縁がここで息を吹き返した。
・・・薔薇の開発に伴って、ある成分の医療効果が高いことがわかったからだ。
今では、バイオテクノロジーを利用して当たり前の世界になっているが、それでもまだまだ解明できていないものがたくさんある。
私のこの嗅覚過敏のように。
それで、各国の医療機関や研究所と連絡するための機関を設立し、半官半民のような団体を作って、父母はそちらにも肩入れしている。
各国を飛び回っているのは、ある国の貧困をこれで救えるかもしれないということがあるからだ。
後に知ったが、その国は、あのフランスの華も助力を惜しまずに援助している国だった。
・・・だからアルディ家では、こちらの動向などはお見通しだったわけだ。

保護者達の思惑や状態は、この閉ざされた苑の中で閉じこもっている私が積極的に知ろうとしない限り、漏れ伝わってくることはなかった。
それは知らなくてはいけないのに知ろうとしない黒須昶も同じだったわけだ。
しかも黒須昶は永らく日本を離れており、黒須家との関わりが少なかったので、最近になってそれを知ったということだった。

大人同士の繋がりを述べて話しかけるきっかけを作っても、私は絶対に応じないとわかっていたようだった。

あの薔薇がもたらしたものは莫大なものだった。
だからこそ、話しかけるタイミングがなかった、と彼女は言った。

「いつか、パリの・・あの薔薇園も見て欲しい」
彼女は嬉しそうにそう言った。

それから、私と彼女はやり取りを何度かしたり、食事をともにすることがあったりしたが、私は至って変わらずに・・・話しかけられなければ話すこともしなかった。
「貴女は変わらない」
私のことを『nil admirari』と言った人は、私に向かって微笑んだ。
「いつも変わらないということはとても、難しいわね・・・」
その時だけ、ちらりと・・・彼女が大人びた顔をしたので、随分後になるまでその表情が忘れられなかった。
でも、ただそれだけだ。私の人生の中のほんの一瞬を共有しただけであり、取り巻きのように・・・彼女がすべてではなかった
私は、人から冷たいと言われるのだろうな、と思ったが、それでも変わらずに黒須昶は私に微笑みかけていた。

そして私と彼女はすぐに離ればなれになった。
退寮年齢に到達するし、すでに各々進路が違っており、彼女は卒業後は別の路に進むことが決まっていたからだ。

だから約束のきっかり4年後を過ぎたときに、電子カルテを送信するように、という指示の入ったメッセージカードが届いた時には、正直に言って忘れてしまっていた。
日々の生活に慌ただしく過ごしており、嗅覚の異常のことについても、神経過敏にならないように自分を納得させることにしていた頃だった。

しかし、差出人はミシェル・ドゥ・アルディとあった。
ルイ・ドゥ・アルディの親族であることも、その名前によって我が家の特許権が失われずに存続することもわかっていたが、どうしてルイ・ドゥ・アルディや黒須昶からの結婚式の招待状は届かずに・・・メッセージのみが送られて来たのか、わからなかった。
今はパリの研究所に赴かなくても、提携研究機関に脚を運べば、同じ治療が受けられることも付記されていた。・・・要するに、パリには来てくれるな、ということらしい。

彼らはどうしているのだろう。

・・・・指定された国内の治療機関に行くと、そこには既に私のために調合された私のためだけの遺伝子治療が待っていた。
躰に負担をかけず、定期的に点滴を受けるだけで手術したり痛みを伴ったりすることがない。
これほど呆気なく画期的な治療方法がもし・・確立するとなれば、世界の医療が変わっていくことになるだろう。
私はその過渡期に身を置いており、恩恵を受けているのだと実感した。
受けたくても治療を受けられない者や・・・適合者がいないために病に苦しんでいる者や・・・そういった人々が少なくなるのだろう。

私は約束通り・・・・彼らのために、密かにあのときの株を育てていた。
別れの際に、彼女は一鉢私に託したのだ。
ファム・ファタルという名前の薔薇であるが、これに虹の薔薇を掛け合わせて・・・私は新しい種を創り出している途中だった。
名前は「nil admirari」・・・・虹色に変化する花弁を持つ薔薇を掛け合わせてなお、香りが持続し、食用にもなる柔らかい棘の薔薇を・・・私は生み出していた。
変化させた種であるのに、変化しないもの、という名前をつけた。
決して公開されない薔薇であるが私はこれをいつか、彼と彼女に引き渡して、有効活用してもらうつもりだった。
広大なネットワークを保有するアルディ家での取り扱いが望ましいと判断したからだ。
そして、この薔薇のように・・・不変の愛を、ルイ・ドゥ・アルディが持ち続けているかどうか、とても興味があった。
だから、薔薇にはそのような名前をつけた。
彼なら・・・少し頬を歪めて、酷薄そうな笑いを浮かべ、辛辣なコメントをするのだろう。
どんな言葉が出てくるか、それさえ愉しみに思えてきた。

・・・私と彼女の関係のように。
・・・私の薔薇に対する気持ちのように。

そして・・・・彼の秘めたる想いのように。

人には、何年経過しても変わらないものがある。不変のものがある。

それを抱えてそれでも変化して・・・だから人は人なのだ。
それをあの娘は・・・・大人になって知ったのだろうか。

今でも彼女のことを好ましい人物だとは思わない。
けれども・・・けれども、どうにも気にかかる。
いつも思っているわけではないが、ふとした時に思い出す。

そして治療を何年か継続して受けて、私の長年の気鬱が解消されようと言う時。
私の元に、招待状が届いた。
黒須昶からだった。
ルイ・ドゥ・アルディが約束した4年はとうに経過していた。
でも、治療開始は彼が約定した4年後だった。

・・・後になって知ったことだが、最初に私にメッセージを寄越したのはルイ・ドゥ・アルディの実父で・・本当はあのフランスの華の実子ではなく、理由があって、彼は甥を実子として育てていたということだった。
・・・招待者名簿に、交流のほとんどない私の名前を見つけて、ミシェルが関係を調べたところ、事情を知って連絡をしてきたと言われた。
ルイ・ドゥ・アルディは今、どこにいるのだろう。
なぜ、彼は連絡して来ないのだろう。

私が過ごした年月と同じだけ、彼らにも時間が流れて居るのだと思った。
予想できない様々なことが生じて、彼らは・・・あの夜のような・・・雨上がりの月夜を一緒に眺める間柄にならなかったということだけを事実として受け入れた。
しかしルイはアルディ家の当主後継に指名されて、実子と何ら変わらない待遇を授けて・・・そしてフランスの華は、黒須昶の夫

になるという。

私は驚愕した。
その招待状を受け取ったとき。
・・・すでにフランスの華と黒須昶の間にはこどもが居るということを知った。
報道規制が解除されて、世間では大変な騒ぎになっていた。

黒須昶があのときに言っていた「大事な人」というのは。
ルイ・ドゥ・アルディではなかった・・・・

その事実には驚いたが、頷ける場面がいくつかあったので、私は「そういうことか」と妙に納得していた。

招待者名簿は何ページにもおよび、その時の紙材は、あのときの・・・ルイや黒須昶が使用した紙材と同一だった。
ルイ・ドゥ・アルディが製法特許を取得した特殊用紙であり、薄く丈夫で湿気に強い。
今では日本の障子などにも使用されている。
私は触感から当時の記憶を呼び起こしていた。

人の記憶というものは・・・五感に大きく影響される。
その紙材に触れただけで、あの当時の私の憤慨や歎き・・そして目眩がするほどの強い香気や、さり気なく気遣われた煙の少ない煙草の燻り。

・・・それらを瞬時に思い出す。

変わらないという名前の・・・私の・・nil admirariは・・・今、実を結んでいるというのに。

私の思いは変わらない。
私は変わらない。

彼女と過ごした時間や、ルイ・ドゥ・アルディとの会合は、決して色褪せることはない。

今でも・・・彼女が変わっていなければ、面と向かって彼女に「貴女が嫌いだ」と言ってのける自信がある。
ルイ・ドゥ・アルディの深い愛を受け入れなかった愚かな女性を諫める言葉はたくさん用意してやろうと思った。
けれども。

溢れんばかりの大きなブーケを持って泣き笑いになった女性からの依頼で、私はもっと後に、もう一度同じブーケを作ることになる。

その時には、その種は各国に出回り、そして廉価で手に入れることが出来るほどに普及されているというのに。
・・・彼女はその華が良いと世界に名だたるフラワーアレンジメントの著名人を廃して、私とnil admirariを使用することを指定してきた。

・・・他でもない、ルイ・ドゥ・アルディの花嫁のために、ブーケを作って欲しい、と。

私の友は、そう言った。

アルディ夫人となった友のために私は快諾した。

友。

長い時間をかけて、やっと、そう呼ぶことが出来た。
時に反目し合い、時に彼女を想う人のことを思い出して憂えた。
彼女自身が好きなのかどうかは、まだ答えが出ていないが、私が人生を閉じるときにまでに回答すれば良いと鷹揚に構えている。

そして。

私のnil admirariは変わらずに・・・優しい微笑みを浮かべていた。

たくさんの、愛する者に囲まれて。彼女は変わった。
人を愛して・・・・柔らかいあたたかい空間だけでは人は生きていけないことを知った。
あの薔薇のように。
鉢の中だけでしか生きられないよと人から言われてなお、外に飛び出すことを知った強さを持った。

そうね。
私は謝らなければならない。
本当は・・・あの薔薇は露地植えが一番適しているのよ。
囲まれた人工的な空間ではなく、自然の厳しさを知ってはじめて強くなる種なの。
まるで・・・貴女のように。

創られたという言葉に過敏に反応するルイ・ドゥ・アルディが、長い年月を経て、彼だけのnil admirariを手に入れたように。

人はね・・薔薇はね・・・生命はね・・・滅することはないのよ。

変化しないようで、少しずつ変化している。
変わったようで本当は本質は変わらない。

彼女は・・・ルイ・ドゥ・アルディを祝福する。

「やはり、貴女は私の『nil admirari』だわ」と言いながら微笑む。

私は、ブーケを創るための最高の状態の薔薇を見極めるために、大きく息を吸った。
薔薇の芳香によってその状態を知ることが出来る私が・・・唯一できること。

それは、愛おしいあの時代をともに過ごした、彼らのために、薔薇を束ねることだった。

雨上がりの夜。
私は空を見上げた。

雨に乗ってむせかえるような薔薇の苑の中で、私は今夜も月夜を見上げながら、物思いに耽る。
香りに触発されて、記憶を蘇らせる。

いつか、この薔薇の温室を見せてあげようという約束は今度果たされることになる。
そして、私に見せたいと言っていたフランスの薔薇の温室は・・・一度は焼失したのに、今は薔薇で溢れていると言う。

・・・あの薔薇の原株を観に行っても良いな。

ようやく、そう思えるときが来た。

（FIN）

うなさか

〔舟が水平線の彼方に見えなくなるのは，海に傾斜があって他界に至ると考えたからという〕
神話における海神の国と人の国との境界。「―を過ぎて漕ぎ行くに海神 （わたつみ）の神の娘子（おとめ）に／万（**1740**）」「即ち―を塞 （さ）へて返り入りましき／記（上）」

●01

これが最後かもしれないという危機感に煽られたのかもしれない。
理解していたけれども、どうにも解決できない自分の気持ちの靄について説明することができなかった。
ヒカル・クロスは、自分の身辺を整理し始めた。
いつ出発しても良いように、という意味で必要最低限の私物しか置かないようになった。
モザンビークとフランスと日本を行き来する彼女は、いつ、どこで何が起こっても良いように備えるようになった。
備えるというのは、備蓄するという意味ではない。
その逆だった。
何もかもを中途半端にすることはできないのだと思い始めたのだ。

シャルル・ドゥ・アルディと人生を共にしようと言われた。
それが、世に言う・・・求婚の言葉なのだとわかるまでに、彼女は随分と時間を浪費してしまった。
シャルルは白金の髪を揺らして「君が他の選択肢を望むのであればそれを受け入れる」と言ったけれども、ヒカルはまったく考えていないことなのだと告げると、シャルルはいつも厳しい表情を浮かべてばかりの美貌に華のような笑顔を浮かべてヒカルを魅了する。
はじめて会った時にも・・・幽鬼のような窶れ具合であったのに、彼はとても綺麗に微笑んだことを思い出す。

結婚という制度について、シャルルが懐疑的であることは承知していた。
永遠を約束するものなのではないのだと彼は知っている。
実際に、彼は一度結婚し、永遠を誓ったのにもかかわらずそれを反故にしてしまっている。
自分が同じ様に、彼の妻になってしまったのであれば、そこで何かが終わってしまうのかもしれないという懼れがあった。
シャルルが本当に妻にしたかった人物は、ヒカルでもないし、最初の妻でもない。
マリナ・イケダという人物であったことは周知の事実であった。

そして、それは今でも変更されていないのだろうと思う。
愛に順番をつけてしまうことはないと思うが、彼はマリナのことをこよなく愛しており、ヒカルはマリナの娘でなかったとしたら、彼に微笑んでもらうことすら実現しなかったのだろうと思われた。

特にこれと言って特技があるわけでもない。高い知性があるわけでもなかったし、母のように絵の世界で生きていきたいと強烈に願ったわけでもない。茫洋とした人生であったことに、ヒカルが愕然としたのは・・・シャルルが彼女を生涯の伴侶と選んだ後であったことが彼女を酷く動揺させた。
彼が、ヒカルを選んだのは、ヒカルがマリナとカズヤの娘であるからなのだと認めることになるから。だから、彼女は彼に少し待って欲しいと言った。
何をどう待つのか、その期限はいつなのか・・・そのことにヒカルが問答したいのだと言った時に、シャルルは華のような微笑みで許諾したのだ。
そのことにも意外であった。
あれほど、ヒカルとの距離を縮めることに熱心であったシャルルが、ヒカルの申し出を最優先させると言って、彼は彼女に触れることをやめてしまった。
しかし、そうして欲しかったわけではない。けれども、触れられると困ってしまうのは事実であった。
親子のような関係を永らく続けておきながら、彼と彼女は一対の番いになることを選んだ。
獣のようだと言われてしまえば、それまでであった。他者がどう言おうと本人達の問題なのだからと言い切れない事情があったし、ヒカルだからこそ、それを理解できていたのだろうと思った。

●02

それは海の浪が大きく満ちる時と同じであった。
ある一瞬を過ぎると、潮境を越えた刻のように勢いが増す。
ヒカルの中にある潮の境が溢れて流れ広がる。
シャルルがヒカルの運命の人だと気付いてから、急速に彼に傾く気持ちを抑えることができなくなった。
そして長い時間が経過し、今に至るまでに様々な出来事が起こり、彼女はそれに翻弄され続けた。
・・・最初は、時が全ての哀しみや苦しみを緩和させると思っていた。
そうではなかった。
アルディ家に住まうようになっても、日本に戻ってからも。
彼女は居所を時折変える生活をしているが、忘却の幇助にはならなかった。
順応した途端、時折突如として思い出す光景がより鮮明になるばかりだった。

ヒカルはそれらを幾度も繰り返すことによって、ようやく・・・環境や時間というものは愁いを忘れさせることはないのだと実感する。

導かれるこたえはいつもひとつだった。
どれほど年月を重ねても、環境を変えても。
自分の根幹になるべきものというのは変わらないのだ、と知った。
そしてどれほど哀しいことであったとしても忘れることなどはでいないのだというこたえしか残っていないのに、幾度も繰り返してしまった。
しかし、その繰り返しの時間が無為であったとは思わない。
なぜなら、彼女は繰り返すことによって、徐々に浪を満たしていったからだ。
同じことであるかのように見えながら、それらはいつも違っていたことを知ったからだ。
両親が帰ってこないという事実は、彼女の「日常」になったが、どれほど経過してもヒカルの「当然」にはならなかった。
そのことを十分理解していたのに。
シャルルがいない人生を、これから考えることができなくなってしまった。

しかし、それらを越えてしまった今・・・・。
ただ静かにシャルルとの時間を過ごしたい、と思うのだ。
こどもの頃の時に抱えていた感情とは違っていた。
シャルルは彼女の父になれない、とヒカルに言った。
両親を慈しみ尊ぶ気持ちを忘れてはいけない、と彼はいつもヒカルに言い聞かせるように、様々な季節や景色をヒカルに見せ続けた。
本当なら家族でともに共有するべき景色だから。彼女が家族を作った時のための素材と情報でしかないと彼は言ったけれども、本当はそうではなかった。

どんな絶勝も彼と共有しているから素晴らしいと思えた。
ヒカルはシャルルと一緒であることが嬉しかったのだ。
親でもなく、きょうだいでもなく、ヒカルの友人としての立場を守り抜いた。
そんな彼の眺める景色は一体どんな色なのだろうかと思い、それは目線の高さの違いであるのだ、と信じ込んでいた。彼はとても長身で、ヒカルはとても幼かったから。

けれども、それは真実ではなかった。
目線の違いがそうさせていたのではなかった。

・・・シャルルが見せたかった景色を、ヒカルは見ていた。
誰に対して見せたかったのか、彼女はよくわかっていた。本当はヒカルに見せたかったのではなく、ヒカルを通して・・・彼らに見せてやりたかったのだろうと思った。

そして、シャルルは彼を通して、ヒカルが成長していく姿を彼らに見せたかったのだろうと思う。
だから、彼女が望んで見た景色は、少し違っていた。シャルルと一緒の時に見る景色とは違っていた。
そして恥じた。
自分が最もシャルルに近い場所であったと慢心していたのだ。

そういう愁いが続いた。
シャルルのことを愛しているからこそ、一緒に暮らせないと思った。
モザンビークに行くことを志願したのは、あのままシャルルの妻になってしまうことが怖かったからだ。
ヒカルの親族への説得が終わっていない。特に、父方の親族はこの結果についてあまり良い顔をしなかった。面と向かって反対されているし、それは今でも変わらないがそこで話し合いをやめてしまったのなら、何も解決しないと思う。
こちらから強く主張しても受け入れてもらえないだろうし、懇願するほど媚びてもいけない。
シャルルに言われてその通りだと思ったが、それでも、自分の中で折り合いがつかなかった。皆に祝福されて幸せになるという、御伽話のような世界の結末にヒカルは向かって居るわけではないことは承知していた。

あの国に、ヒカルが行かなければならないという絶対の理由は存在しない。でも、ヒカルが行かなければ、何も変わらないと思った。それで命を落とすようなことがあっても、ヒカルはあの国の病を持ち帰ることはないが、病の原因を持ち帰ることはできる。
確かに事情を知る彼女だけが、もっとも確実な成功を導くことができる。だから渋々シャルルが行くことを承諾してくれたのだと思うと・・・つくづく自分は我が侭で振り回してばかりなのだと思ってしまう。でも、それでも行くことの決心は揺らがなかった。

●03

「ここは貴女の家も同然なのだから」
シャルルはそう言うが、「ヒカルの家だ」とは言わない。
彼女が、シャルルの言霊に縛られてしまうのかもしれないということを懼れているかのようであった。
長い時間を過ごした場所であったのに、ヒカルにはまるで違う景色のように見えた。 慣れ親しんだ温室が、彼女のよく知る状態とかけ離れた場所になってしまったことも起因していた。

シャルルがよく言い含めたのだろうか。
彼女の帰邸を喜ぶ関係者の中には、彼女のことを明らかに「アルディ家当主の最後の恋人」として扱う者たちが居た。 立場が違えば、対応も変わる。

それは既に知っていたことなのに、いざ、自分がその渦の中に入り込むと、ヒカルは当然のように闊歩していた本邸を歩き回ることができなくなってしまった。

朝の日課となっていた、温室には立ち入ることもできない。
その他様々な設備でもって退屈することもなかったが、ただ心が引き攣れるような思いを抱えて過ごし、シャルルの帰邸を待ち詫びる時間を過ごすことはできないと思った。 この家の本当のこどもである、星辰の子の容態が案じられるので、パリを離れることができない。

それに。
何より、彼女にとって最大の心配事があった。
日本にいる、彼女の親族達への説得が完璧でなかったのだ。
母方の親族は、ヒカルの決断に委ねるという方針を貫いているものの、父方の・・・特に、クロス・グループとしての利益が関係するのであるのだから、致し方ないとは思いつつも、親族でありながらもわかりあえないこともあるのだと思い知る結果になってしまった。
まだ結果ではなく、完結していないのだから、と思うからなのかもしれないけれども。
彼女には、帰る場所がないのだと、思った。
自分がいかに都合良いときだけ場所をかえて暮らしていたのかということを実感する。

夏のひとときだけ、日本に戻る。
そしてそれ以外は日本に住む親族達とは疎遠になる。
行き来することになんの苦痛も感じなかった。それが、当たり前だと思っていたのだ。
けれども。
夏のアルディ邸ではどういう状態であったのか、知らなかった。
拠り所としていたはずのジルの行方も知らなかった。

愛する人達の中で、自分は綿菓子の中で生きていたのだ、と思う。
苦しいことも哀しいことも、すべて知らずにいた。
そして自分が、どれほど多くの者たちの庇護があって生きていたのかということを知るにつけ、彼女の気持ちは変わらないのだ、と確信した。
シャルルのことを、惑い故の愛ではないのだと知った。
だから、これは自分を知る機会なのだと思った。
それから、シャルルのことも。

少しだけかもしれないが、ヒカルはシャルルの違う面を知った。
なぜ、父になれないと言ったのかも理由があったのだと思う。
彼は人間嫌いで、知能指数が高い故に誰との会話にも満足していない。
けれども非常に繊細で誇り高く、彼の芯の部分には誰も触れられない。

だからこそ、ヒカルの父と母は、彼の良き理解者であったのだろうと思われた。

そんなシャルルだからこそ、彼女は彼を愛おしいと思う。
そして、シャルルが「ファム・ファタル」をたったひとりだけ、と決めてしまったように。
ヒカルにも、運命の人がいた。
溺れて酔いしれているわけではない。
シャルルが決して切り離すことのできない部分ごと、彼を愛している。

今の彼女なら、断言できる。
彼のことを、愛している。
彼が愛している人も含めて、深く激しく求め続ける彼を、愛している。
だから。
アルディ家には滞在することはできないとシャルルに言った。

彼と彼女の間では、すでに互いしか存在しないというような暗黙の了解が成立している。
ヒカルは、これから先の人生はやはりアルディ家と関わりを断っていくことはしないと思っている。
シャルルは、これからのことも考慮して、クロス家との問題を解決しなければならないと考えている。

結婚と恋愛は違うのだ、と世間の者は口にする。
確かに、自分達だけの感情でどうにかなるとは思えなかった。
けれども、そのために愛を諦めることはできない。
だから、時期を待って、周囲を納得させるためにシャルルとヒカルは距離を置く必要があった。
別れるのではない。

逆に、ヒカルはそれがどこか恐ろしかった。
少しでも離れて居れば、次に会った時に自分が堰を切ったように理性が弾け飛ぶのではないのだろうかと思ったのだ。

皆が納得し、アルディ家の問題が解決してからでないと次には進まない。
シャルルはそう言っているというのに、ヒカルは・・・自分の中にある、恋慾という名前の翼を広げて、羽ばたけないのに羽搏こうと必死になる自分が容易に想像できた。

●04

「いつも難しい顔をしている」

シャルルにそう言われて、ティーカップから唇を離した。
目の前では、白金の髪を持った、青灰色の瞳のフランスの華がじっとこちらを見ていたので、彼女は少し朱くなって目を伏せた。
彼の美貌は経年しても相変わらず美しくて、彼女が知っている限り、ほとんど衰えていない。瑞々しい若さだけが人の美しさではないのだと思う。彼の若々しい姿はいつものことであったが、これまで彼女が見つめてきたシャルルよりも少しだけ・・・そう、本当に少しだけ穏やかさを増したように思える。
諦めではない。根拠のない希望でもない。
これまでと同じ様に、ヒカルの両親の探索を続けている。
どこかで生きているのではないのだろうか、と彼が考えている限り、それは続く。そして継続させるために、彼は当主であり続ける。
彼は、誰かに求められることを遠ざけてきたけれど、彼はいつも求めていたように思う。
周囲がそれに気がつかないだけで、幾人かは彼の孤独について深く理解しており、彼を支え、見返りも求めない愛を持ち続けるシャルルを慈しみ続けた。
ヒカルも、そんな風にして彼を愛することができるのだろうかという覚悟を胸に刻んでいる。

長く家族同然に暮らしてきた者を、永遠の人として愛していくことは、皆に受け入れられることではない。
獣のようだと言われることもある。
だから。
自分だけが満足すればそれで足りるというものではない。

彼を愛している。
心の底から。
ずっと一緒に居たいと思う。
それは、彼が他の者を愛さないから。
彼が、他の者に心を奪われることがないと思っているから安心していた。
このような、嫉妬にもならない感情を持って生きているヒカルのことを、シャルルはそれでも愛おしいと思ってくれているのであれば。
迷いをもって愛することはやめようと思った。
どんな困難にでも打ち克ちたいと思う強さを持ちたいと思った。
この家の者たちは、皆、そういう強さを持っている。
自分も、強くなりたいと思った。

「そう？」
ヒカルが淡く微笑むと、彼は目を細めてそれを嬉しそうに眺める。
そして軽く頷いた。

「貴女の笑い方は、彼に似ている」

彼を理解し、支え、時には殴り合いもしたと言ったシャルルの親友は、ヒカルの父である。
彼女の記憶は年々不鮮明になっていっている。 遠い昔のことになってしまっている。 それでも、シャルルの中の思い出は何ひとつ色褪せてはいないのだ。
彼が記憶したことはすべて自分の都合の良いように改編されるという過程は持っていない。
どんなに彼にとって都合の悪いことでも、苦しいことでも、彼は剝き出しの記録として保持し続けている。

たったひとつだけ、そうではない部分もあったが。

それが、ヒカルの母との想い出なのだろうと思った。
シャルルは口に出すことはない。
あの海での叫びは、ヒカルとシャルルだけの秘密である。誰も知らない。
彼がいつ惑ったとしても、彼女にはシャルルを呼び戻したいという強い気持ちがあり、あの日のあの出来事があるからこそ、そう言い切れる強さを持つことが出来る。

何から始めて良いのか、わからない。

そう言ったのなら、シャルルはどう答えるのだろうか。
ヒカルはカップをソーサーの上に置き、更にそれらをテーブルに乗せた。

シャルルの治療経過は良好で、ヒカルがモザンビークから帰ってきた時には、彼は更に改良させた試薬でもってジルに対する治療の見直しているところだ、と言っていた。
なぜ、彼の祖父が母親の違う子を次々と誕生させたのか、理由が垣間見える。
いつか、このようなウイルスに感染した時に、旧い血だけでは対抗できないのだと考えていたのかもしれない。
未来と愛を天秤にかけるような人物ではなかったと聞いているので、妻をひとりの人だけであると定めることがなかった気質の当主であったことは事実だろう。
その時々に、愛を求めた結果そうなったのかもしれない。
けれども、シャルルはその血を引いていることをどこか懼れているような気がした。

彼は、父と母の相互から受け継いだものを残すことに、逡巡としていたのではないのか。
彼は、アルディ家の当主である誇りは持っているが、ロベールとエロイーズの子であるということに対して誇らしく、彼らの息子で良かったという発言はしていなかった。
少なくとも、ヒカルの前ではそうであった。

すでに故人であったし、亡くなってしまった者たちに付随する記憶をヒカルの前でひけらかすことはなかった。
彼女が待ち詫びている両親についてよくない連想をさせてしまってはいけない、という配慮であるからということもわかっていたが、シャルルはヒカルへの配慮だけではなく積極的に話そうとしない。

●05

「シャルルに『難しい』と言われると、何だか少し変な感じがする」
ヒカルがそう言うと、シャルルは笑った。
「意味が違う」
そうだね、と言ってヒカルは笑った。
彼女は、彼のファム・ファタルのように開放的で直情径行であるわけではない。
顔立ちはとてもよく似ていると自分でも思うし、周囲はもっと強烈に意識していることもわかっている。
だから、彼女は彼女のことを知らないどこかに行ってしまえれば、この憂いのすべてが払拭できると思っていた。けれども、そうではなかった。
そして、戻って来た。

次に戻って来た時には、もう、少女のままのヒカル・クロスでなくなってしまうことも承知していたし、シャルルに背を向けて去ってしまった時に、彼女の中で少女の時期は終わってしまったのだと思っていた。

シャルルとヒカルは、静かに愛を始めた。
彼の心の奥深くに住んでいる人々というのは、ヒカルにとっても大事な人々だ。
彼らのことを否定するつもりになれないし、忘れて欲しくなかった。

そして、あの国に行く前に。
彼女は、彼の妻になった。

妻という称号が嫌であれば、それは必要ない。

彼はそう言った。

愛という名前の運命で、自分は逆らえないのだと思いたくなかった。
自分で決断し、自分で選択している。だから、自分の責任で、誰かや何かの責に帰するものでは

ない。

しかし、ヒカルには感じていた。
彼が、ヒカルのことを一時期の狂気によって蹂躙したのではないのだ、と証明したいのだと思われた。
彼が彼女を引き取った経緯は、詳細は聞かされていなかったがクロス家では不本意な結論であったことは承知している。
祖父は彼女のことを引き取りたいと言ったし、毎年クロス家を訪問する度にそのように言われ続けた。ありがたいことだと思う。
自分で生計を立てられるようになるまでは、何もかもが援助を前提にしなければ生きていけない。自分は何もできないのだ、と日本に居るときに改めて思い知らされた。

彼女が労働しても、何もしないで暮らせるほどの大枚を得ることはない。
そして、すべてを忘れるほどに激しい感情を、誰かに持つこともなかった。
我慢し過ぎだ、ごまかしてばかりいる、と指摘されることはあったけれども、何を解放すれば良いのか、それすらわからなかった。

でも。
今は、迷いがなかった。

モザンビークに行った時に、若い頃のシャルルを知る人物に会ってきた。
それから、ジルのこともよく知っていた。
まだ少年や少女の年齢であるのに、彼らに自分達の未来だけではなく現在も過去も託して背負わせたと言われて、ヒカルは言葉に詰まった。
無償の奉仕を、シャルルがこの国に与え続けている理由を知って、また自分は何も知らないままで居たと痛感する。
あれほど、彼の傍に長い時間居たというのに。

父と母が、今、言葉を交わすことができたのだとしたら。
ヒカルに行ってこい、と言ったと思う。
彼女だけしかできないこと、為すべきことを為してこい、と言うと思う。

愛は、ひとつではない。
たったひとつだと決めてしまっているシャルルが、彼の考えを改めた。
だから、ヒカルもできることをしたい。
家族に対するような愛なのかもしれない。彼女は、家族を知らない。
模擬家族であるかもしれないけれども、シャルルは彼女に無償で愛を与えてくれた。
白金の愛の雨に、ヒカルはただ感歎し、そしてそれを浴び続けることに陶然とするばかりで・・

・必然ではないのだと思うことはなかった。
だから、離れている間に考えていたことが、今の彼女の基礎になっている。

あの国から戻って来た時。
真っ先に、彼は彼女を迎えに来た。

遠目でもすぐにわかった。
人々に囲まれて、彼は彼女を先に見つけていた。

すぐに、青灰色の視線と自分の視線が合う。

・・・痺れが走った。

それほど彼を求めていた自分の中に、「少女」でもなく「親友の娘」でもなく、「彼の愛を受けたいと願うひとりの女」が息づいていることを強烈に実感する。

人目があったので、彼は彼女を狂おしい眼差しで見つめながらも、ただ、頷くだけであった。
彼が治癒するまでは、決して行けない場所に、ヒカルは行ってきた。
そして、彼女の肉体を構成している細胞という名前の小さな命の集合が、彼にもアルディ家の者たちにも必要であった。
この命がなくなっても、後悔しない。
でも、彼らが治るまでは、彼らを放置しては逝けない。

それが、彼女を動かしている。
生きる理由を作り出しているのかもしれないけれど。
また、会いたいと思う人が居る限り。
彼女は戻ってくる。

強くなれたわけではないかもしれない。
幾度も、挫けた。
幾度も、泣いた。
でも、その度に彼女は少しずつ、強くなっていった。
シャルルも同じだと思う。
傷つく度に、彼は強くなっていく。

・・・少年の頃には、癒す術は睡りしかないと思っていた彼は、年月を経て、生きることや赦すこと、赦されることや誰かを愛することについて、変化を受け入れたように思う。

愛する者たちに去られて、たったひとり孤独に生きていた彼に、ヒカルは永遠の晄となることはできないのかもしれない。
強烈な太陽光も持っていないし、月光のような癒しも持っていない。
でも、傍に居ることが出来る。
どんなに弱々しくても。
常に輝く、決してなくならない輝き続ける昶として生きていきたい。

それが彼女を大人の女性に変化させた。

●06

今度は、一緒に日本に行こう

彼は順序を気にしていた。
ヒカルはモザンビークへ発つ前に、あらかたの事情を話してきたので必要ないと言っていた。
誰もが賛成する話ではない。逆に、シャルルとヒカルのこれからには困難がついて回ることは確実であった。
そんな中で変わらぬ愛を持ち続けていられるのか、と尋ねられることも一度や二度ではなかった。
しかし、ヒカルはそれだけ気に懸けてくれる者に囲まれているのだと思う、と言うとシャルルは冷笑を浮かべて黙り込んだ。
彼はヒカルにはいつも優しく、彼の宣言通り「甘やかしている」状態であったが、時々、このようにヒカルにはあまり見せたことのない冷然とした部分も存在していることをヒカルに隠さなくなってきた。
これが、彼の本質なのだろうと思う。
そうでなければ、彼はこれほど長い期間を当主として君臨することはできなかっただろう。

モザンビークから戻ると、彼女はしばらくシャルルに会うことが出来ない。
徹底的に検査されて、特に異常も異変もなく健康体であることを証明しても、それでもしばらくの間は観察時間を過ごさなければ、シャルルに触れることは許されていない。
彼女を経由して、シャルルにどのように影響するのか、まったく路であったからだ。
それも覚悟の上の出国であったのだが、これが最もヒカルにとっては辛いことであった。
毎日のようにビデオメールで元気な姿を見せ続けたが、近くに居ながら彼の声を聞き、彼の頬に触れることが出来ないことがこれほど苦しいのだと思わなかった。
しかし彼女はそれが辛いと言わなかった。

自分は、欲深いのだと考えていた。
シャルルが幸せであればそれで良いと思うのに、そのシャルルの傍らに居られないことを歎く。
苦痛を伴う検査を受けていても、それが終わればシャルルに会えるのだと思い込んでじっと耐える自分は何と愚かな人間なのだろうか、と繰り返し思うのにその考えは彼女中から消えることがない。
彼女は皆を救うことができる肉体を持つと言われるが、己の心を穏やかにすることすらできない。自分自身さえ救う事ができないでいるのに、なぜ、多くの者を救う事が出来るのだろうかと考える。

シャルルに愛されることで・・・シャルルを深く愛することで、彼女の愛は海の向こうに沈んでしまったとさえ思う。愛が終わったという意味ではなく、更に深いところに潜っていったのだ、と考えていた。

「ヒカル？」
経過観察を終えて、ようやく彼に会えるというのに、彼女は少し考え事をしてしまっていたようだ。
シャルルは戻って来たヒカルを労るために、パリから少し離れて違う場所で語らいの時間を持とうかと提案してきたが、ヒカルはアルディ家に戻りたいと返答した。
何と言っても、多くの時間を過ごした場所である。
消失した薔薇園の再建も気になっていた。
それに、シャルルは気儘に時間を組み替えることのできる立場ではなかった。
大人になるにつれて、自由になることも多いが自由にならないことも多くなる。
周囲の大人たちを見ていて、ヒカルが学んだことであった。
そして自分も、今はそうなってきている。

愛だけに生きることができないが、愛を糧に生きていることを実感できるのも、彼女が大人になったからなのだと思う。

ヒカルは顔を上げた。
そして笑顔を向ける。
「少し、考え事をしていた」
「少し？」
シャルルは白金の髪の下でおかしそうに美眉を持ち上げた。青灰色の物憂げな瞳が、彼女を見つめていることに気がつき、ヒカルは頬を赤くして眼を逸らす。
ずっと見たいと思っていた。

空港では彼とは視線を合わせただけであった。

それから彼女は隔離されて、暫く時間が経過している。その間にも、彼はアルディ家で採取された最高の状態の薔薇を彼女に届け続けた。
メールも電話も欠かさなかった。
彼女がパリに戻ってきたことを知らせる手段と考えられるものは惜しみなく使い続けた。
シャルルという人物はかなり神経質な人間で、人間嫌いで気難しいということで有名であったが、ヒカルに見せる情熱に誰もが驚き、年若い彼女にフランスの華が夢中であることを知った。
触れあうことを許されない時間を苦しく思っているのは、自分だけではないのだという思いが、ヒカルの鼓盪（動揺させること）を鎮めていく。
その時間はとても長く感じていたのに、いざ、こうしてシャルルを目の間にすると夢を見ているのではないのだろうかと思ってしまうのは、なぜなのだろうか。

●07

ヒカル・クロスが自分の中にある気持ちに困惑していることは、シャルルには悟られてはいけない、と思った。
だから、極力、朗らかに振る舞う。
かつての、娘と養い親のような関係の時と同じヒカルとして行動する。
少し大袈裟に反応し、彼への報告事項は辛かったことは何も言わない。
帰国前に送信された報告書を読んで、把握していることを承知のうえで彼女は口頭で重要事項と保留事項、それから早急に対応しなければならないことと所感をはっきりと区別してシャルルに報告する。
彼が必要だと思った時以外は、過程については報告しない。

そして、ヒカルが話している間、彼は黙って目を伏せ、一言一句聞き漏らさないようにと神経を集中させて聞き入っていた。
白金の髪の下で、理知的な額や経年してなお美しい容貌が見え隠れする。
ごく短い時間で、それすら終わってしまう。

旧い家柄の当主としての威厳がそこにはあった。
彼はヒカルの前では極力そういった厳しい姿勢を見せないようにしていたが、今はそうではない。
ヒカルがシャルルの傍に・・彼の妻になるというのは、そのような面もすべて知っているということだ。
家同士の結婚にはならない、とシャルルが公言しているとおり、アルディ家とクロス家の確執は年々広まるばかりであった。
ヒカルはその狭間に立って、これから幸せだけを噛みしめるという人生ではないのだという覚悟がなければシャルルの傍で生きていくことはできない。傍に居るだけではなく、時には離れてあの国に調査に行くこともあるだろう。

これが最後だとは思っていなかった。
一時的な帰国、と考えていた。
パリで、ヒカルの細胞提供を待っている者たちが居る。今は培養技術が進化して、一度分析されればその後は採取の必要はないとされているがヒカルの場合にはそれは適用されない理屈であった。
彼は暫くの間、黙ってヒカルの話を聞いていた。
決して愉快ではない話も聞くことになった。
愛する者同士の逢瀬を楽しむのではなく、追跡調査を行ってきたヒカルがシャルルというフランスの華と呼ばれる研究者でありアルディ家の当主に向かって事実だけを述べる。
彼女に託されたものがあった。
ある日突然、連れ去られてしまったシャルルのことを語る者はひとりやふたりではなかった。
それを聞かせれば、彼はまたあの地に赴きたいという欲求を抑えることができるのだろうかと思うほど、彼は必要とされていた。
しかし、あの場所で寸暇を惜しんで救うことができる人数にも限りがある。それならば、同じ時間をより多くの者を救い慢性的な疲弊の源となっているものを根治する方が良いと彼は判断し、そして現在に至る。
・・・行きたくてもいけないという事情もあったが、それはとうとう伝えることはなかった。
こうしてあの国でシャルルを知る人々とシャルルの間の架け橋になることができればヒカルはそれで良いと考えていた。
約定の上に成立する決め事は、シャルルとヒカルには存在しない。
誰を傷つけても、何を無視しても、それで良いから結ばれるということはしたくないと考えている。周囲の顔色を窺うのではなく、彼らのこれからには必要な試練であった。
シャルルは長い間、当主の座を専有していた。私有化していたことはなかったが、それでも当主の重篤な秘密を守るために動かした人員や時間は計り知れないものがある。それを支えているのはミシェルでありジルであり・・・あの家でシャルルを理解し支える者たちであった。
だからその一方的な報告が終了してしまった時。
ヒカルは、その後に続ける言葉を全部使い切ってしまい、途方に暮れた。
沈黙が怖かった。
その次に、何があるのか予知できなかったからだ。
少しの間離れてしまっていたから、そこでヒカルへの熱が醒めてしまったかもしれないと思っていた。だから、これほど静かに彼と彼女は距離を保って話をすることができるのだという確信の根拠になった。
熱に浮かされるような日々を過ごした。
それだけで充分だと思う程に。
シャルルがヒカルの熱情に押されて彼の思いを彼の望まない方法で封印してしまったのではないのだろうかと思った。
疑っているのではない。愛を信じていないのではない。

たとえ、それでシャルルがヒカルに「なかったことにして欲しい」と言ったとしても、ヒカルはシャルルを愛し続けるだろうと思う。実際、今でも強烈に惹き寄せられる。

この国に降り立った時。あの国を去る時と同じくらいに緊張した。いつから自分は愛に餓えた鬼になってしまったのだろうと思った。
そして、それを薄々察知していながらも、シャルルに会いたくて戻って来てしまった。
自分はとても卑小でそして、愛に餓えた狭量な人間だ。
シャルルを思い描く度に、そう思う。シャルルが誰か他の人と幸せになってくれれば良いのにと思っていた少女の頃の自分が懐かしかった。そして胸が痛い。あの頃のままの純真な気持ちで居られたのなら、ああしてシャルルの傍に居たいのだと喚くこともなかっただろう。
愛に餓えた者になってしまったのだろうと思った。
そして、それを薄々察知していながらも、シャルルに会いたくて戻って来てしまった。
自分はとても卑小でそして、愛に餓えた狭量な人間だ。
シャルルを思い描く度に、そう思う。シャルルが誰か他の人と幸せになってくれれば良いのにと思っていた少女の頃の自分が懐かしかった。そして胸が痛い。あの頃のままの純真な気持ちで居られたのなら、ああしてシャルルの傍に居たいのだと喚くこともなかっただろう。

●08

焦げるような感覚を味わった。
ちりちりと音を立てて、湿気を失って残った要素を煮詰めていくだけの感覚。
シャルルの視線を感じた時。
自分は、あの人の視線を独り占めしたいのだと感じた。
どこまでも薄い、青と灰の瞳が見つめる先を、ヒカルは自分だけの世界にしてみたいと邪な気持ちを持って、そしてすぐに自己を嫌悪した。
何とも愚かで浅はかな願いなのだろうと思う。
もっと大きな視点で、彼の愛を受けることのできる卓越した人間であることが求められているのだと思っていたから。
求めるばかりの人間が、求められるものの大きさを知った時。そのときに、どうすれば良いのか。誰にも教わることはできない。ヒカルが自分ひとりで受け止め、さらにそこから押し流されないように方策を講じなければならない問題であった。

「・・・それで？」
シャルルが次を促した時に、ヒカルはそのまま黙ってしまった。
くせの強い茶の髪を、耳に残してかき上げる手の平が震える。
彼に見られているという気持ちが、彼女から平常心を奪っていった。
こうして会話することは珍しいことではない。けれども、彼の視線がどうにも苦しい。

シャルルに会いたかったのに。どうしても会いたくて、このまま何も持たずにパリに戻りたいと涙を浮かべた夜もあった。
彼女に重ねた彼の肌の湿りや重さがただ、懐かしくて、夢と思いたくなくて、そして幾度も自分自身を抱きしめながらあれは決して幻ではなかったのだ、と言い聞かせた。
この世のすべての者から糾弾されてしまうかもしれない贅沢な物思いであった。
シャルル・ドゥ・アルディの能力を、世界中の者が求めている。
ヒカルの持っている無抗体の細胞をこの世に無秩序に放ったのなら。
命の尊厳も、命の理も、すべてなくなった混沌とした世界がやって来ると思う。
時間がかかるかもしれないが、あの国に何かを返せると思うからこその協力であった。
そして、欧州の民族に蔓延すると思われる、重篤な病を根絶するために、ヒカルの細胞は必要とされる。
誰かに感謝されたいからそうするのだと言われてもヒカルはただ微笑むだけであった。確かに、そうであったから。
無償の愛というものを持っているのだと高らかに宣言することはなかった。
誰かが、この細胞で何かを得てくれるのであれば。
それはヒカルの願ったことであり、ヒカルの両親がいつも気に懸けていたことを実現しているのだと思う。
自分の満足のためなのだと言い切ることさえできた。
誰かを助けて・・・誰かの命になりたいと思った。
自分は、そうして生まれて来たのだから。
ヒカル・クロスという人物の名前は残らなくても良い。
でも、シャルルの役に立ちたい。あの家で憂えていることを少しでも和らげたい。今は、ただ、そう思う。

「ヒカル？」
シャルルの艶のある声がヒカルの耳に届く。
音声マイクを通してではない、肉声であった。彼の声は彼女を安らがせる。モザンビークに発つ前に、彼女を朝まで抱いた彼の声が甦る。
たくさんこどもを生んで欲しいと言われた。代理母による出産ではなく、ヒカルが腹を痛めて産んで欲しい、と。
そしてヒカルは承諾した。
これまで彼は数多の女人と逢瀬を重ねてきたものの、それを願うことはなかった。彼の子を生んで欲しいと言った者はヒカル・クロスだけだと思われる。少なくとも、ヒカルを彼の恋人だと公言してからはそのように振る舞っていると思われた。
意図せずして子を持つことになった事への報復なのだろうか。
彼は、彼の意志で決められない人生を背負っている。それがいけないのではない。そうしなければ維持できない理由をシャルルは持っていたから。

彼は・・・親友の愛した人を愛してしまい、誰とも同じ様な愛を分かち合うことはないのだろうと決めてしまっていた。彼がそれに決着をつけるのは死んだ時・・・そして、死ぬほど愛しているのに死ねないという苦悶を味わった。
相手は、帰らない海に消えて締まったのに。今でも、待っているのだと思う。
ヒカルが傍に居ても、彼は彼らが戻ってきたのならそのときに戻ろうとするのだろうと思った。
ヒカルを軽んじているのではなく、彼らと過ごした時間そのものがシャルル・ドゥ・アルディを生かしているのだと思うから。
「もっと話しても良い？」
ヒカルはそう言って、シャルルの顔を仰ぎ見た。
本当なら、彼に飛びついてキスをねだりたい。彼に抱かれて息継ぎする余裕もないほどに彼のことを感じていたい。
しかし、平凡な恋愛の駆け引きを最初にやり取りするほど、彼と彼女は稚拙な愛に溺れているわけではなかった。
愛に優劣も順番もないものだと承知していながらも。
堪えられない愛への渇望が、ヒカルを愚かにさせてしまう。
そんな彼女を押しとどめているのは、入国してから今に至るまで繰り返し行われた検査の名残である痛覚だけであった。
「話す事があるなら」
シャルルはそう言って、彼女に微笑む。ふたりの距離さえ恨めしい。
人目を憚らず、彼に駆け寄って帰邸を祝うキスを浴びせたあの頃の彼女であるのならば、何も問わず何も考えずにシャルル・ドゥ・アルディの胸に飛び込んでいただろう。
しかし、彼女は知ってしまった。
彼を愛すること。
そして、家族の愛ではない感情で彼を支えていくことを選んだことを思い知る。
ヒカルは、彼のファム・ファタルの代わりではなくこうして生きていることの証を立てるために彼と離れる。
彼と離れていたいとは少しも思わないのに。彼と離れて、そしてまた彼の前に現れる時だけは、彼女は「ファム・ファタルの娘」ではなくてヒカル・クロスとなって、彼の恋人として、肉の器を纏うことになる。

●09

体が震える。
モザンビークに行く前に彼と過ごした、短くて儚いけれども充実した時間を思い出す。それが彼女の支えであった。彼女はそこで彼の妻になり、彼は生涯をかけて愛すると言った。それから、彼女のすべてを奪うと言った。

名前であり、これからの生活であり、彼女の未来を取り上げると言って泣いた。

そして、彼女は。
あの国に行き、実情を知り、シャルルの尽力はまだ完成されてはいないのだと思うと本当に辛かった。それを彼に告げなければならないということに気鬱になった。
少年医師が他国の疾病者に寝る間を惜しんで治療にあたったという伝説のような話を聞くと、彼は今でもこの国に遠くからであったとしても、同じ様に心を傾けているのだと彼女は胸に溢れるものを感じた。
そして、自分の肉体に宿る奇蹟が、この国を救うことになるかもしれないとも実感する。それには、手続きを経なければならないことも改めて思い知った。
動揺してはいけない。これから、ずっと長い時間をかけていかなければならない。
瞬きをする間に奇蹟を起こすということは、シャルルにはできるかもしれない。けれども、それでは、あの国の大勢の人々は救えない。だからこそ、彼はあの国から離れた。それを知っているヒカルだからこそ、継承することができるのだと思った。
そして、それを生きる糧にするという愚かさを、シャルルは許してくれた。
・・・いや、そう思いたかったのだ。
あまりにも重いものをヒカルは抱えすぎていて、間もなくそれは海に沈んでしまいそうなほどであった。シャルルは、あの国にヒカルを行かせることで・・・少し距離を置くことで、ヒカルに新しい空気を送り込んだ。
彼女が行きたいと願ったことであったが、結局は・・・逃げ出したことと同じであった。

ヒカルは、シャルルのファム・ファタルと定めたヒカルの母にはなれない。
それでも。
一緒に居たいと思う。
一緒に生きていきたいと思う。

彼女の生命の起源を知り、シャルルの混沌を知り・・・そして、自分とシャルルの間にある愛は、彼の愛した人と彼との間にあるものとはまったく違うものであった。
それでも良いと思う。良いのだ。
シャルルは、彼の愛した人と添い遂げることができない。
ヒカルは、自分をファム・ファタルと思わない人を、運命の人にした。
生涯、片想いだ。生涯、自分はシャルルの中では「あの人の娘」であり、「もうひとりのファム・ファタル」であり続ける。
逃れようもない事実が、ヒカルとシャルルを繋げる。

自分で選んだ。
自分で望んだ。

だから、これで良いのだ。
そう思って、あの国に向かった。それなのに・・・彼が恋しくなり、涙した夜はひとつではなかった。
この国には、少年であった頃のシャルルが溢れていた。それから、シャルルを支えようとした者たちの思いの多くがヒカルを圧迫した。
ひかし、シャルルにそれを語ることはない。これから幾度も訪れることになるだろうと思われるあの国を、心の底から愛する事が出来ない。

それが、ヒカルを苦しませる。
シャルルが愛したあの国を、ヒカルは同じ様に受け入れることができないと思ってしまったから。
狭い考えであるとは承知の上だ。そして自分がそういう負の感情を持つことに戸惑った。そして、そのまま帰国の途についた。
そこで思うのだ。

彼も、同じ様に考えたのか。
自分の馴染んだ国に戻りながら、自分の思い通りにいかないことに対して憤り歎き、そして最後には放棄してしまうのだと。シャルルはそうしなかったのに。
ヒカルは、この国に戻るまでは思わなかったのに、シャルルの気配を感じた途端に、そのような問答に苛まされる。
そこでヒカルは考える。自分は、なぜ、ここに居るのだろう、と思う。
思いたくなくても、思ってしまう。
思わないようにしようと決めていても・・・思ってしまう。

ヒカルは黙ってしまう。それ以上、語る言葉を持っていなかったから。彼は待っているのだ。ヒカルが、言葉を尽くすその瞬間を。
すべてを奪うと言った彼の言葉は今でも実行されている。
ヒカルの言葉が終わるまで、彼は待っていた。彼女が唇を動かさなくなるまで。彼は、ただ、静かにその時を待っていた。

ヒカルは桜色の唇を引き締めると、穏やかに座っているシャルルに向かって、か細い声で尋ねる。
「話が終わったら・・・今度はシャルルが私に報告して」
「何を？」
彼女は困ったように言う。呼吸が途絶えそうだ。彼の青と灰の混じった瞳が、甘くけれども強く輝く。こういう視線で見つめられることは慣れていない。
眼を逸らすことが出来ない。

●10

ティーカップから細く長い指を離すと、シャルルは立ち上がって壁際に活けられた薔薇を眺めた。
彼は窓際に立つ事は無い。
壁際であったとしても、長時間その場所に立っていることはしない。
これは彼が昔、襲撃されたことによるところが大きかったが注意深い彼は常にこのような振る舞いを忘れずに生きている。
生まれながらの高貴な血の者であることを、ヒカル・クロスは思い知る。
彼は、本当にフランスの華なのだ。そしてそんな彼の傍に居たいのだと喚き、とうとう、彼の傍に居ることにウイと言わせてしまった。
自分がどれほど未熟であるのか、彼の傍にいる時間が増える度に、ヒカルはひとつずつ知っていくことになった。
だから、もう、守られているばかりで微笑んでいる、彼の天使であり続けることはできなかった。天使の羽根が欲しいと思っていたのに、それを自ら放棄してしまった。
そんな気になってしまう。
シャルルの姿を目の前にして、彼女が彼の体に飛びついてキスを求めることができないのは、そういう気持ちが彼女を大きく圧迫しているからだ。

「・・・ヒカル？」
「はい」
彼の呼び掛けは彼女の幻聴ではなかった。慌てて返事をするが上擦った声になってしまっている。
恥ずかしいと思った。平静で居られない。
彼の視線に自分が入っていることがこれほど居たたまれないと思ったのは経験のないことであった。
互いに自分の状態を相手に説明する。
その会話さえ、音声つきの 夢を見ているようだ、と思った。
なぜ、自分はここに居るのだろう。
これは本当に現実なのだろうかと考えてしまう。

恋しくて、彼が元気でいるかどうかと考えない日はなかった。
様々な通信手段で毎日のように話をしていたのに、それでも彼に直接触れたくなる。
・・・罪深いことだ、と思った。
人々を助けたくて、自分しかできないことを為し遂げたくて、愛する者の傍から離れたという

のに、彼女はシャルルを恋しがってひとり胸を痛める。
自分の勝手な行動であったのに、シャルルは送り出してくれた。

でも、彼女は置き去りにしていってしまったのだ。
シャルルを待たせたままにしてあった。
だから、戻って来て、やはり彼女と生涯をともにすることはできないと言われることが怖かった。
会っていない日々の、彼女の知らない時間の中で、彼が他の者に目を向けても仕方が無いと思った。そのときは、笑顔で祝福しようとさえ決めていた。
しかし、こうして目の前に立つシャルル・ドゥ・アルディの姿を見てしまうと、彼女の中にある彼を独り占めしたいという気持ちが大きくなっていくのをはっきりと自覚する。

自分でモザンビークに行くことを決めたのに。
帰国の日程が決まった時には、嬉しくて昂ぶって眠れない夜を過ごした。寝不足で憔悴した顔になり、それを見たシャルルが失望するかもしれないとわかっているのに、それでも浮き立つ心を抑えられなかった。
その疲弊がシャルルを心配させることも承知しているのに、何とも自己中心的な傲慢な態度しか見せることができない。
大人になったら、もっと相手のことを思い遣れる素晴らしい人格者になれるのだと思っていた。
でも、そうではなかった。その者の心の在り方を決めるのは年月ではなく、その者が強く願って弛まぬ努力を続けているかどうかに左右されると知った刻には、すでにヒカルは大人と言われる年齢になっていた。自分が年齢を重ねるたびに、年齢が止まったままの両親の年齢を数える。少し考えなければ計算できないことに愕然とした。

部屋の中央にある円状卓に乗った、糊の利いたテーブルクロスとティーカップに目を向ける。何もかもが、懐かしい。戻って来たのだと実感する。ひと呼吸そのものに、涙が出そうになるほど懐かしさを感じる。でも、きっと、また暫くしたらあの国のことが懐かしくなるのだろうという予感もあった。シャルルが離れがたいと思った理由がわかるような気がする。
空腹は感じていなかった。喉の渇きも。
ただ一つのことにだけ餓えているだけだ。

なぜ、シャルルがこうして客人を遇するかのようにテーブルを挟んで彼女と話をしようとしているのか、まったくわからなかった。

以前は、少しの間留守にしていただけでも、シャルルはヒカルの元に顔を出し、そして彼女も同じ様に彼に対して声をかけ続けた。

今すぐにでも、彼の胸に飛び込んでいきたい。何もかもを忘れるほどの激しい嵐に身を任せてし

まいたい、と思う。
けれども、シャルルは何か考えがあって、ヒカルに触れない。出国する直前に交わした愛の時間は夢であったのかもしれないと思ってしまう。

●11

「何だか、いつも通りなのね」
少し寂しそうに、ヒカルは言った。シャルルは答える。
激しい嵐のような渦がヒカルの中で鎮まっていく。
この声が聞きたかった。
そして、この声に、ヒカルは乱される。彼は離れている間、彼女を恋しく想ってくれているだろうかという愚かな疑問を持ち続けていたことを、彼女は言い出すことはできなかった。自分の近況を報告するための時間なのに、彼女は少しも自分のことを話していなかった。それをシャルルは見抜いており、彼女に触れることはなく、ただ出発前の時よりも離れて彼女と接する。
キスも抱擁もない、静かな会話。ヒカルはただ戸惑っていた。こういう時には、どうすれば良いのかまったく見当がつかない。恋をしたり、仲違いをしたり・・・ヒカルには、そういうことが欠落していたのだと知った。自分は、シャルルの愛し方を知らない。知っていたのは、慈愛だけだった。愛され方だけであった。
彼が何も教えてくれなかったのではなく、彼女が何も知ろうとしなかっただけなのだ。
愛されたいと願い、愛したいと願う。細やかな幸せではなく大それた願いであることは、ヒカルは承知していたことだった。
彼は冷淡で傲慢で人を寄せ付けない。けれども、ヒカルだけは違った。彼女のことを甘やかすと言った時以来、彼は彼女を癒し、満たし、安らがせ、憩った。両親が戻ってこないという果てのない待機を自分の覚悟や承諾なしに突然突きつけられて、戸惑ったヒカルを救ったのはシャルルであった。
他の肉親は、ヒカルをただ「可哀想だ」と言った。何が哀れなのか、わからなかった。
事実を受け入れなければならないと言った者もいた。
しかし、ヒカルの事実は「両親が不在」ということであり、「両親が永遠に戻って来ない」ということではない。一緒に待つには、肉親は濃すぎた。ヒカルは幼いながらもそれを感じ取っていたからシャルルに逃げたのだ。それを承知のうえで、彼は彼女を引き取り、育てた。シャルルはヒカルを求めていたのではなく、ヒカルがシャルルを求めていたのだ。今ではそれを確信している。
ひとりで生きていけないのはヒカル・クロスの方だ。
母方の親族に囲われていたのなら、彼女はきっとマリナ・クロスに近くなっていただろう。そして、父方の親族に育ててられていたのなら、カズヤ・クロスに似た人物になっていただろう。
「似た」という言葉には語弊があり、彼女はそのものになっていたのだろうと思った。
ヒカル・クロスという個を殺さず生かすために、シャルルはヒカルをこれほど遠い場所まで連れてきた。
彼が決して正しい方法で遂行したとは思えない。しかしながら、あの時はあの方法でしか、ヒカ

ルを運び出すことはできなかった。彼は弁解しないけれども、ヒカルはあの時の事情はそうであったのだと確信する。
だから、ヒカルの母の親族は彼女を日本に置くことよりも、シャルルに託すことを考えたのだ。彼女が、突然失われてしまった愛すべき者の依り代になることを危惧して、日本から押し出した。
たくさんの者に愛されて、ヒカルは今に至っている。
寂しいとか苦しいとか思ってしまえば楽なのだと知った。
あの国に行って、そう思った。
自分は報われない哀れな者であると言い聞かせて酔い痴れることは心地好いかもしれない。けれども、あの国を見て、シャルルがなぜあの国を救うために帰国したのかという経緯を聞いて。ヒカルは、そのまま幸せな綿菓子のような存在で生命を終えることはできないと固く決めるに至った。
自分がこれほどシャルル・ドゥ・アルディを求めていたのだと、離れてみてわかった。
彼が彼女を日本に帰してくれた時よりも、ずっと、激しく・・・強烈に、猛烈に、熱烈に彼に会いたいと思った。たとえどんなことに牴触していたとしても。
そういう自分に遭遇するとは考えていなかった。自分が抱えなければいけないものを、シャルルが背負ってくれていたことを知る。離れていればいるほど・・・それを強く感じる。
ヒカルが個を失っていく過程を、彼は見ていられなかったのだろうと思う。
自分と同じ・・・己を保つために、彼はヒカルを呼び寄せた。でも、ヒカルの方が、もっと多くを求めていた。

「今日からは、そういうことになるかな・・・不満か？」
シャルルの問いに、彼女は大きく首を横に振った。
「いいえ・・・なんだか、夢みたいだなと思っているだけよ」
彼女はそう言って微笑む。自分の中の苛立ちも焦りも、すべて押し隠す。これまでと同じだ。そして、これからも剝き出しの自分を出すことを良いことだと思うことはないのだろう。それがヒカル・クロスであるからだ。母とも父とも違う、彼女の個がここにある。
海の際に立っているようであったけれども。ヒカルは、シャルルに震えていると承知の上で、語った。
ヒカル・クロスは、立ち上がった。
忙しなくテーブルを半周する。円心からはとても離れた場所であった。
ティーカップの湯気が消える前に席を立つとは儀礼から遠い作法であるとわかっていたのに。シャルルと向き合うことにも、立位の彼から覗き込まれるように観察されることも、彼女は取り繕うことはできなかった。

そしてシャルルが壁際に居るのに対し、彼女は窓際に立った。テーブルを挟んで、対極に存在する。自分は、波打ち際の浪の端であると思っていた。けれども、その縁にすら到達しない。
こうして対面しているだけでも、息苦しく、そしてもどかしい。なぜ、彼に近寄れないのか。自

分に聞いても、ヒカルの満足するこたえをヒカルそのものが導きだせない。

●12

「そろそろ、休みなさい」
シャルルはヒカルにそう言った。確かに、疲れていた。
パリに戻ってきてからも、検査や聴取で緊張してばかりの時間を過ごした。戻って来てから、シャルルとゆっくり話を交わすのは、これが最初であった。
ただし、一つだけ禁じられていることがある。
シャルルと閨を共にすることだけは禁じると言われていた。
彼の中に潜んでいる病は、まだ消滅しているとは言えなかった。・・・おそらく、生涯、それとつき合っていくことになるのだろう。しかし、ヒカルにはその病の耐性があり、根治に近い状況を作り出すことができる。彼女しか持っていない、希有なる力だ。そして、そのことによって医療が変化することも知っている。
世界がこの変化と劇的な発見について行けないことも知っていた。行き渡るには、まだ、数年かかることも。でも、このことによって、シャルルが懸念していたあの国での課題が幾つか解決し、欧州での深刻な病のひとつが消滅するとしたら。ヒカルは、それだけで生きている価値があると思った。
どれほど辛い穿刺検査が残っていたとしても。
彼女を母床として利権を争う闘いを耳にしても。・・・世界を救いたいと思う気持ちに揺らぎが生じることはなかった。

あの国に行って、わかった。
シャルルがなぜ救いたいと思ったのか、理解できた。
母と父が、望んだことのようにも思える。
それよりも、何よりも・・・ヒカルが、シャルルの意志を受け継ぎたいと思った。
彼が、感染を薄々察知しながらも、それでも留まったあの国のことを、ヒカルは愛していた。
情に厚く、どの家庭の子も、どんな子も愛する事を最上の幸福とする、あの国に・・・彼が生涯を捧げたいと思った理由を、ヒカルは共有した。
暁も、夕闇も、月の光も、そして何もかもが色濃い国で感じたことを、ヒカルは言葉でひとくくりにすることはできなかった。
母の様に、絵で表すことができたのなら。きっと・・・言葉は必要ないのだと思われる。
ヒカルは、それを伝えられない。どれほど心を動かされたのか・・・どれほど飛沫を浴びて、彼女は驚愕したのか。
シャルルの想い人だと知って、ヒカルへの待遇がどれほど変わったのか。彼女はそれまで知らせなかったのに、彼女の容貌があの国人々を変化させたことを、まだ、言えなかった。
彼は、常に語っていたのだ。自分の大事に思う人物が、どんな容姿をしているのか。

それはヒカルのことではなく、ヒカルの母の姿であったのかもしれないけれども。
それでも、確かに伝わっていた。年月が経過していたのに、それでも、残っていたのだ。
「どうかな・・・興奮して、眠れない」
ヒカルは少し微笑んだ。この国では、眠る時間ではない。しかし、ヒカルがあの国での習慣を上書き更新できていないことを、彼は承知しているからの言葉に、ただ、微笑むしかなかった。

「君は・・・」
「え？」
シャルルは、彼女の様子を見ながら、囁くように掠れた声で言った。その声が聞き取れなくて、ヒカルは反復する。
茶の香りの強く残る部屋の中で、佇んで居るのはヒカルとシャルルだけであった。
長身は相変わらずで、経年による背筋の衰えはまったく感じなかった。彼はいつまでも若く、そしてヒカルの傍に立っていても年齢がわからないほどに強い肉体を維持している。
彼は若い頃に、大変な傷を幾度も負ったと聞く。それでも、彼はまったくそれを感じさせなかった。
あの国に出発する前に、彼女が触れたシャルルの肌は・・・傷があったけれどもそれすら美しいと思わせる体軀を彼女に重ねていた。
・・・その時の逢瀬を思い出し、沈降する自分は何と浅ましくて愚かな人間なのだろうかと思った。
あの時、彼は彼女に誓いを立てた。それが永遠であることを、彼が強要して良いのは彼自身であり、ヒカルはそれを強制することはできないのだ。

それでも。
彼を愛そうと決めていた。生涯、愛すると決めた。
他の誰かを、シャルルが選んだとしても。ヒカルは、シャルルを定めてしまった。
自分の選択が間違っているとは思わない。どこに居ても、彼を思い、彼の幸せを願っている。
傍にいるのがヒカルではなかったとしても、祝福できると思っていた。
それほど、浅い愛なのだとは思っていなかったからだ。
シャルルがヒカル以外の誰かを選んだとしても、それは仕方が無いことだ。
人の感情は、人が左右させることはできない。シャルルの愛が、誰か他の人に移動してしまったのなら、それはヒカルが口だしすることはできないと考えている。
彼の上品な瞳がヒカルを試すように、射竦める。
そうなってしまえば、彼女は何も言えなくなる。そんな風に、見つめないで。
幾度か懇願した。
けれども、彼は許さなかった。ヒカルの全てが欲しいと言い、ヒカルの全てを奪っていった。差し出すまでもなく、彼は彼女の何もかもを持ち去る。そして、それは掠奪ではなく・・・緩やかな共有になった。
ヒカルの孤独も、寂しさも、シャルルという年齢の離れた父のように慕った人物を恋人とする躊

躇いも・・・何もかもを、シャルルは吸い寄せ、そしてヒカルに告げる。それがヒカルだけの悩みではないのだと囁く。
幼い時からずっと一緒だった。親子ほどに年齢が離れており、親子以上に親しかった。
それなのに。
彼に向かって体を寄せて、彼に向かって妻の主張を繰り返す。そのことがどれほど悩ましいことなのか・・・シャルルは知っている。
帰国して、彼に飛びつくように近寄ることができなかったのは、ヒカルが彼の養い子であることが浸透していたからだ。

周囲の視線を気にするヒカルを慮って、シャルルは彼女に近寄ることはなかった。
獣の王だ、と言われて彼はそれを受け入れていた。
年齢や状況はまったく関係なく・・・運命の人の子であることを理由に、彼はヒカルを妻にすると決めた。ヒカルが、あの人達のこどもでなかったのなら。ヒカルは、彼の生涯の伴侶として選ばれなかったのかもしれない。
愛おしさと切なさと、身を切られるほどに辛い孤独が彼女を待っていた。
人を愛するということは、満たされることなのだと思っていた。
実際、彼女はシャルルの妻になるまで、満たされた愛しか知らなかった。満たされなかったとしても満たす努力をしていた。
けれども。
彼に愛されて、彼に送り出されて、戻って来たヒカルには、ただ、洞のような虚無が残る。
シャルルが愛していたのは・・・ヒカルではなく、ヒカルの母なのだと改めて知ったからだ。
わかっていたことなのに。
それは、生涯、覆ることもない事実なのに。
なぜ、今になってヒカルの胸を貫く槍になるのだろうか。

●13

フランスを出る前に、寝室はこれからは同じだ、と言った同じ唇で、シャルルはヒカルに休息を促す。
「いつでも眠れるようにしてあるから、ヒカルが好きな時に休めば良い」
彼の申し出は有り難かった。実際、とても体は疲れていたし、一度横になったら泥に沈むように浮き上がることができないまま眠りを貪ることになりそうだという予感があった。
まるで淡々と業務をこなす当主の様子そのもので、ヒカルはただ寂しさのあまり何も言えなくなってしまう。寂しいのだ、と伝える術を知らなかった。彼女はいつも孤独と無縁であったから。
寂しいとわかるけれども、寂しいのだと伝えることができない。

ヒカルは、ただ、ウイと言って素直に従うしかできなかった。
何をどうしたら良いのか、まったく見当がつかない。
その時に知ったのだ。自分はまったく何も知らないのだ、と。
愛を継続することは、愛を始めることよりもずっと難しいことで、シャルルの心の内を推し量ることができなくなってしまった自分は・・・きっと、曇ってしまったのだと思った。
今までは、彼の心の内が少しだけであったが理解できた。
何を厭い、何を疎んで、何を好んでいたのか。彼が微笑むと、自分も嬉しくなった。彼女と一緒に居て微笑む彼は、まさしく天使そのものだと幾度も感じた。
変わったのは彼の方ではない。自分の方なのだ。
そう感じる。
再会した時に、彼がヒカルに対して手放しで喜びを表現し、何も憚ることもなく彼女を抱きしめ、深い口吻と強い抱擁で痺れるほどに愛を語り合うことを期待していた。それが現実にならないことで、ヒカルは深く失望しているのだ。わかっている。
それがこどもじみた・・・いや、こどもですら望まないことであることを、頭では理解している。
けれども、理性ではない別の焔が、彼女を炙っていく。
海の水に浸されて、揺らめく魚のように互いを求め合ったのに。
今は、ヒカルはこれほど距離を置かれて、戸惑ってしまっている。
養い子としてのヒカルを演じれば良いのか。
彼の恋の相手としてのヒカルを見せれば良いのか。
良いか悪いかという問題ではないこともわかっている。でも、本当に何をどうしたら・・・彼に手が届くのかまったく考えつかない。
彼女は、どこで眠れば良いのか。
シャルルはそれを示さない。
白金の髪は少し伸びていた。そして、少し痩せた感じがする。彼は眠っているのだろうか。十分に休息し、必要な栄養を摂っているのだろうか。
立ち上がったままで、ヒカルは彼を見る。
彼は壁際に体を凭せ掛ける。
この距離が、ヒカルを苦しくさせる。会いたい、と何度も言った。愛していると囁いた。彼女の運命の人は目の前にいるのに、胸の中に飛び込めない。
「あの・・・私は、もう、今日は自分の部屋で休むわね・・・」
狡い言い方だと承知の上で、ヒカルは言った。彼女の居室は昔からある場所ではなく、今度から当主の寝室と居室を共有するようにと言われてパリを発った。
けれども、彼女は自分の部屋に戻ると言った。
そこで眠れば・・・昔と同じ様に、朝一番に最高の状態の薔薇をシャルルに届けるヒカル・クロスに戻れると思った。
夢のような、あの時間はきっと・・・本当に夢だったのだと思えるだろう。そうしなければ、生きていけないいと思った。

なかったことにしてくれてという話を切り出されるより前に、ヒカルの方から察して退かなければいけないと思っていた。

そうだ・・・そうだ。彼女は自分の声に頷く。
親子ほどに年齢の離れた、何もかもが違うヒカルとシャルルが結ばれるわけはないのだ。彼の祖父のように、幾度も愛を交歓する相手を変える選択も、シャルルには残されている。愛を求めているのであれば、愛を探せば良いのだ。ヒカルに縛られることはない。それが「たったひとりだけ」と決めてしまったシャルルの新しい生き方なのであれば、ヒカルはそれすらシャルルの一部として肯定したい。否定できないから。望んでいるわけではない。
ヒカルが、彼の親友と運命の人との間の子どもであるから。だから、ひとときの夢を見せてくれたのだと思うことにすれば・・・それは、とても哀しくて儚いけれども夢なのだと思うことができる。強い気持ちを持って、そうなのだと自分自身に言い聞かせれば、それはきっと達成できる。そう思った。
「自分の部屋？」
シャルルがそこで反応した。先ほどから多くを語らないやり取りに、ヒカルは困惑してばかりであった。その空気より、シャルルのその問いかけの方がずっと彼女の身体を強ばらせるに足りる。
ヒカルは頷いた。
シャルルは、その様子を見て、呟くように言う。
「痩せたな・・・」
「動き回ることが多かったから」
寝食を忘れて自分の為すべきことを遂行することに夢中になっていたとは言えなかった。

でも、あの国では。
ヒカルの体を検査し、常に体液を採取する日課は存在しない。
涙を流したり血を流したりする度に、彼女を診察台に乗せる理由はどこにもなかった。

戻ってくれば、辛い日々が待っていることも承知していた。髄液を抜かれ、血液検査は定期的に行われ、痛点の少ない部位に針を埋められる。
麻酔は施されていたが、それでも肉の内に刺さる痛みは消えることがないし、一度そのような体験をしてしまえば体が痛みを覚えてしまう。
怖がってはいけないと思うのに、身構えてしまう。
それは恋と同じだと思った。
痛いと思ったら・・・同じことを繰り返すことを怖がって、怯えて、そして目を閉じてしまうのだと思った。
シャルルはヒカルに言ったのに。
ヒカルの何もかもが欲しい、と言ったのに。

「そう・・・私の使っていた部屋。まだ、それはある・・・？」
ヒカルは、声を途切らせながら、言った。
シャルルがこちらを向いている。それだけで自分の理性がかき乱されてしまうと思う程なのに。
自分が途方もなく嫌な人間だと思った。
彼が、ヒカルの部屋を処分するわけはないと思っていた。それなのに、確認するかのように問い掛ける。
なぜ、そんな風に確認することでしか愛を感じることができないのだろうか。

これほど近い距離なのに、彼と彼女の距離はとても遠かった。いや、違う。ヒカルが何かを発することをシャルルは待っている。それをわかっているからこそ、ヒカルは惑う。
何もかもが、烟って・・・そして見えなくなっている。

「ヒカルの使っていたもので、なくなったものは何一つない」
シャルルの言葉に、安堵と失望を同時に感じる。模範解答であると言えばそれまでであった。
ヒカルの痕跡が、あの家で消えていないことはないだろうと思われた。
敷地内では、火災による大きな消失もあった。
そして、ヒカルの部屋にあったものはほとんどがシャルルの居室に移されていた。彼女はすでに、滞在者ではなくて、彼と寝室を伴にする者という存在であったのだ。

●14

ここの部屋の中で発せられたヒカル・クロスの言葉は殆どが確認作業であった。
それは自覚している。
アルディ家を離れて暮らしていると、それまで見えてこなかったものが突然見開かれることがある。
自分は愛されているのだというまったく根拠のないものに満ちあふれた日々を送っていたのだと感じた。
逆に、それまで見えていたものが遮られたかのように見えなくなってしまうこともあった。
シャルルは、ヒカルがなくしたものはひとつもないと言うけれども。
それでも、ヒカルは自分そのものがシャルルにどう映っているのか気になって仕方が無かった。
相手にどう思われているのかを慥かめるような言葉を計算して言うことは、ヒカルには慣れていないどころか生涯をかけてもとうていできそうもない芸当に思えた。
それには理由がある。
自分の持っているものを駆使して相手に挑むことをこれまで経験していないからだ。
人から拒まれることが怖くて、人に愛されることに夢中になるより、人から悪意を向けられない

ように生きることに精一杯だった。
それが時には相手を苛立たせるのだと幾人かに教えられたが、その言葉の中に秘められた優しさを
受け入れなかったのだと思う。
だから、これほどシャルルとの意思疎通に難儀しているのだ。
シャルルが失望するような言葉を敢えて選んでしまっているような気がする。
あの時までは。
この国にシャルルを置いて、モザンビークに向かって行く時までは、まったくそんなことを感じなかったというのに。
なぜか、今は・・・シャルルに対して距離を置いてしまっている。シャルルが遠巻きにしているのではなく自分が拒絶しているのだとわかっている。だから彼はこうしてヒカルに触れることはない。
養父としての行くつく染みをみせることもできないし、恋人としての言葉をかけることもできない。すべて、ヒカルが頑なに防御しているからシャルルは当たり障りのない会話しか寄越さない。

鳩尾から、熱いものが迫り上がってくる。到底自分では抑えきれない衝動であった。
「部屋はいつものとおりだよ。いつでもヒカルを待っている」
それを聞いて、ヒカルは押し黙る。黙っているだけなのに、息苦しい。そして、この部屋の空気が重く彼女にのし掛かっているような気がする。

「具合が悪いのか」
シャルルの気遣う声が、遠く聞こえる。
よそよそしく聞こえる。
なぜだかわからないが、良くない方向へしか思考が飛んでいかない。自分に都合の良い考え方はできなくなってしまっている。事実が事実ではないように感じ、シャルルがヒカルの処遇に困惑しているのではないのだろうかと感じる。
彼は、一度でも情を交わしたヒカルのことをこれから生涯をかけてでも大切な存在として取り扱うだろう。恋人同士の関係が解消されたとしても。
・・・元々は、ヒカルが彼に強引に割入ったのだ。
彼は誰も受け入れないと決めていたし、そんな彼に、最初で最後の運命の人でなくても良いから、彼と彼が愛している人々すべてを含めて愛することを赦して欲しいと懇願した。
シャルルが断るわけはないのだ。
すぐにわかることだ。

皆は息災か、明日にでも出向いて顔を出してきても良いか・・・そんな話を捻り出しながら、シャルルとの会話で沈黙が訪れることを防ぐことに躍起になっているヒカルは、さぞかし滑稽に映

っていることだろう。
しかし、シャルルはそれにつき合っているのだ。

わかっている。ヒカルは怖いのだ。シャルルから、ヒカルが望まないことを告げられるのが、怖いのだ。
シャルルは深く溜息を放った。
ヒカルが、肩を震わせる。今すぐに、扉の向こう側に走って行き、そのまま消えてしまいたいほどの羞恥を味わう。彼は今、失望している。
それを確認したいわけではないのに、彼女は結果的に彼を彼女が望まない状態にしている。
為す術もなく、ヒカルはシャルルの方に向き直る。
このまま知らないふりをするのは簡単だ。いつものように鈍感なヒカルを演じ、疲れたと言って退出を申し出ればシャルルはそれを受け入れるだろう。
「あの・・・ごめんなさい」
「ヒカルはなにか、謝らなければならないようなことをしでかしたのか」
「そうではないけれども・・・・」
詰られるより、こうやって質問される方がずっと堪えるのだと知った。
彼は声を荒げることもなく、淡々と質問する。
「それなら、これまでの会話にヒカルがそれほど落胆するような事実が含まれていたのかどうか、説明してくれ」

・・・どうしよう

心臓が急速に拍数を増やす。
シャルルが、滅多にないほどに怒っている。
そう思った。彼は感情を荒げている様を滅多に人に見せることはない。苛立つ様子は見せるが、感情を大きく起伏させても彼の述べていることを理解するものは誰もおらず、そして彼がなぜ気分を害しているのかを察する人間が周囲には少なすぎるのだ。

ヒカルもそのひとりだと感じる。
シャルルが、ヒカルの言動に不審に思い、そして質問しているのに満足な回答をすることができないでいる。
だから、怒っているのだ。
彼は普段、ヒカルの前では非常に冷笑的で毒舌の持ち主でもあったが、ヒカルそのものを攻撃したことはなかった。
最初に彼がヒカルに言ったとおりに、ヒカルは甘やかされて育った。教育に怠惰であったわけではない。その反対に、必要以上に知識や作法や心構えなどには細かく指摘が入っていたように思う。
パリを離れて、日本で暮らしていたときには、周囲に「そこまでしているのか」と驚かれるほど

ヒカルは多くのことを教えられていた。
それは今回も役に立った。何もかもが違うあの国で、ヒカルは他者との人間関係で摩擦を生じさせることもなく、恙なく過ごすことができた。目的もある程度見通しを付けることができた。
シャルルがヒカルに施してくれたものがいかに大きかったかという証明そのものであった。

その代わりに、シャルルのためにヒカルが持って帰れたものはとても少なかった。
その上・・・彼を失望させているのだと知ると、ヒカルは何を大きな望みを彼に寄せていたのだろうかと自分の愚かしさについて今更ながら羞恥に目眩がしそうになる。
シャルルは深く息を吸った。そして、大きな足音を伴いながら、大股で彼女に近付いた。
ゆらりと体が揺れたと思ったら、次の瞬間にはヒカルの目の間に立って、いきなり彼女の顔に手をのばし、顎を捕らえて彼女の顔を自分に向けさせた。
力強く引き上げられたので、ヒカルは目を細めて額に力をこめる。
こういう風に、乱暴に扱われたことはなかった。だから、彼女は驚いて茶色の瞳をシャルルに向ける。彼女の瞳やくせの強い髪は幼い時より色が薄くなった。母のような髪の色でもないし、父のような黒髪でもない。祖母の特徴に近いのかもしれないと言われて、少し哀しくなったことを思い出した。
自分の中に受け継がれているものが、表出しなくなってしまったことでシャルルは自分をどう見つめるのか、それを考えるだけで怖かった。
しかし、それすらシャルルは愛してくれた。
そのシャルルを怒らせた、と思い、彼女は顎を彼の手に包まれながら、小さく呻いた。「シャルル、ごめんなさい」
「謝るな。ヒカル、なぜ、謝る」彼の口調には確かに怒りが混じっていた。それから、哀しみも。

●15

ずっと彼に会いたいと思っていた。
ディスプレイやスピーカー越しの会話はとても物足りなかった。
日本で過ごしていた時より何倍も強くて大きい孤独が彼女を苛んだ。
自分で選んだことだと言うのに、後悔していると叫びそうになり、すぐにでもシャルルのいるフランスに飛んで帰りたいと思った夜もあった。
しかし、それらを越えられてきたのは、シャルルだけではなく、この国でヒカルの持ち帰るものを待っている人が他にもいるからで・・・そして、何よりもシャルルに早く癒えて欲しいと思っている気持ちが大きかった。
何と利己的な考え方だろうと思う。けれども、それがヒカルを動かしていた。ヒカルを生かしていた。
ただ、どう伝えて良いのか、わからない。

そして、気の遠くなるほど長い年月を離れて暮らしたわけではないのに、彼のまわりにはヒカルと違う空気が膜のように張り巡らされていて、彼女を眩しくさせている。
とても近い存在であると思っていたシャルルが、遠かった。そして自分は彼と一緒に生きるに足りる人間なのだろうかと思いながらも、他の者が彼のとなりに並ぶことを心から祝福できるのかどうか、自信を持って答える事が出来なかった。
彼が別の生き方を選んだのなら、それを尊重したい。それは偽らざる真実の心である。
しかしながら、彼女がそれを望んでいるのかどうかはまったく別の話である。
シャルルと一緒に居たい。シャルルと一緒に生きていたい。
それは、今までの、彼の天使と呼ばれたヒカルであればできないことであった。
彼を慈しみ、彼を安らがせ、彼が幸せであればそれが自分の幸せであったと思っていた、あの少女の頃のヒカル・クロスではなくなってしまっていた。
それを知って、彼女は愕然としていた。
自分の中に、これほど醜い感情があり、彼を束縛し独占し、そして誰も愛するわけはないのだという傲慢な確信が自分を動かしていたのだと知る。
彼は、もう戻って来ない確率の高い者を永遠に愛していると決めてしまっているから、ヒカルは安心して手放しで彼を愛することができていたのだと悟った。
誰も、彼女以上にはなれない。誰も、彼女以外に最愛の人にはなれない。
それをわかっているから、ヒカルは、シャルルの運命の人の娘という立場を利用して彼の心に忍び込んでいるような羞恥と後ろめたさを感じていた。

・・・自分は、天使などではない。
醜くて愚かな独りよがりの愛に溺れて満足しているとても矮小な器しか持っていない人物なのだ、と自分ではっきりと自覚できた。
シャルルは変わらずに、ヒカルの体調を気遣い、彼女の望むとおりにしようと配慮してくれている。

それを感謝するどころか・・・戸惑って、彼を困らせている。何か行動すればきっと彼を失望させるのだろうと先回りして読み込んでいることが、彼の落胆を招いている。わかっているのに、止めることができない。

だから。ヒカルは羞恥で頬を染めた。今、自分のことだけしか考えていなかったからだ。
「私・・・」
彼女は頬を赤くした。
「私・・・」
ヒカルは口籠もる。決して泣かないと決めていたのに、涙が零れそうになる。
目の前にいる人は、何度も夢に見て会いたいと強く願った相手だった。
白金の髪に、物憂げで少し哀しそうな青灰色の瞳。切れ長の瞳は優美で、繊細な彼そのものを表しているようだ。経年してもなお均整の取れた体に、ほのかに漂う彼の薫り。

まだ・・・時折、煙草を吸っているのだろうか。

しかし、ここで何も言わないのであれば、何も伝わらない。
それはシャルルに教えて貰ったことだ。その場を逃げ出すのは簡単であるが、逃げずに立ち向かうことは困難でありながらも必要なことであるのだとヒカルは学んでいた。
もう、逃げない。
あの海で、彼にぶつけた気持ちを偽りにしたくなかった。
そして、彼がそれでもヒカルとともに生きることを選択しない人生を選ぶのであれば・・・最初は許容し難いかもしれないが、いつか、きっと、彼に微笑むことができると信じて生き抜くことにする。
死んだら、終わりだ。何もかも、永久になってしまう。
永久は簡単だ。そして、永久は卑怯だ。
永遠に、愛という名前の呪縛で誰かを縛り続けることができる安易な魔法だと思った。

顔を彼の方に強制的に向けさせられて、彼女は呻く。
傷みは感じない。
ただ、彼がいつもと違う視線で彼女を覗き込んでいる。今、この瞬間が最も近い距離にある視線の交錯であった。それがヒカルを震わせる。
「ヒカル」
シャルルは低い声で言った。甘く魅惑的な声。少し、低い。そして、彼女の心も体も震わせる。
恐ろしいのか、慕わしいのか・・・それとも、もっと別の感情なのかさえわからなくなって、どうでも良いという放棄を選んでしまいたくなるような、シャルルの声と視線がヒカルに向いている。
「ヒカル。はっきりと言ってくれ。オレは、曖昧は嫌いだ」
彼はヒカルの前では、若い時と同じように「私」と言わずに「オレ」と発音する。
それがただ懐かしくて、嬉しくて、そして愛おしい。
再会の喜びを手放しで喜べなかったので、ただ、タイミングを失ってしまっているのだと言うことはできなかった。
シャルルは苛立った声で言った。
ヒカルに対しては、いつもは、そのような態度は見せたことはなかった。
しかし、シャルルは感情を剝き出しににして、ヒカルに挑んできた。
彼の細く長い指先がヒカルの顎に食い込み、そしてもう片方の手は彼女の腕を掴んで、そしてとうとう、ヒカルの自由を奪ってしまう。
・・・何もかもが欲しい、と言ったシャルルの言葉が甦る。
自分は、一体、あの時のシャルルの熱情が欲しいのか、それとも・・・今でも自分を愛していると告げて欲しいのか、わからなかった。
ただひとつ、はっきりしていることがある。

それは、彼女がシャルルの心が涸れてしまったのだということを宣告されることは望んでいないということであった。
喘ぐように、ヒカルは言う。
酸素を欲する魚のように、声のない声を奏でる。

「シャルルに、会いたかった」
「それなのに、ヒカルはオレにそんな仕打ちをするのか」
彼は冷笑しながらヒカルの顔から手を離した。彼の温度がとたんに恋しくなる。
ヒカルは息を切らせて、シャルルに言った。
彼が責めているのは、彼女がまったく彼の恋人らしからぬ、人形のような所作しか見せなかったことを言っているのだろうと察知する。
どうしたら良いのかわからないということを繰り返しても、彼には理解してもらえないだろう。
ヒカルは、恋を交わして誰かと愛を交歓したことはない。
シャルルが最初の人で、そしておそらく、最後の人になるだろう。
だから、彼に対してどう接すれば良いのかわからなかったと告げるようとした。
「仕打ち・・・違う。本当に、会いたかった。本当に、会いたかったの」
ただひとりの、彼女の運命の人である。
何度も、何度も。彼と再会する日を夢見た。自分で選んだ生活であったのに、彼の居ない日々のちょっとした瞬間や、彼が傍に居ない夜があれほど苦しいものだとは思わなかった。

「心が移ろいだのなら、そう言ってくれ。・・・でも、それすら、オレは・・・」
シャルルが苦悶に満ちた声を絞らせながら、言った。彼女の腕に乗った手の平に力が入り、ヒカルは傷みで我に返る。
彼はヒカルに言った。
彼女のすべてを捧げてくれ、と。
もし、彼女の心が離れてしまったのなら、それすら、シャルルに与えて欲しいと彼は言っている。
そして、求めている。
ヒカルは泣きそうになる自分に強く言い聞かせながら、言った。
ここで逃げてはいけない。ここで逃れてはいけない。
・・・ここで、彼を諦めたら、ヒカルはヒカルを許せなくなってしまう。

「シャルル・ドゥ・アルディは私の夫よ。・・・夫と会えて、嬉しくない妻はいない。少なくとも・・・私は、とても、会いたかった。今、あまりにも嬉しすぎて、どうして良いのか、わからない。学んでいないから、わからない」
その瞬間。
彼女は、強い力に惹き寄せられ、声を上げる余裕もなく何かに顔を強く打つけて眼を瞑った。
・・・それが、シャルル・ドゥ・アルディの広く逞しい胸の中だと気がつくまでに、それほど時

間はかからなかった。しかし、少し時間がかかってしまった。
なぜなら、彼女は彼の胸の中に入るなり、大きな声で泣き出してしまったからだ。

あれほど、涙を流さないと自分に強く言い聞かせてきたのに。
あの国に居ても、決して涙を流して崩れることを自分に許可しなかったのに。
今、彼に見つめられて、腕を掴まれて、そして自分の本音を曝け出すことを強いられて・・・そして泣き出してしまう。
自分は、シャルルの前では何も取り繕うことはできないと改めて知った。

彼の両腕が、彼女を優しく抱きしめた。
ヒカルは、激しく落ちる涙を、ただ、彼の胸の中に落としていく。
その間、彼は、ずっと彼女の背中を撫でていてくれた。

●16

以前は、大人になりたくないと思っていた。
父と母が、自分を見つけられないかもしれないと思ったからだ。
そして、日増しに母の面差しを強くしながらも父の特徴を持っていることを自覚することが増えて戸惑った。
自分の容姿が戻って来ない彼らを思い起こさせることについて、良いことなのか悪いことなのか、それともそのように区別する類のものではないことなのか、考えて決めることができなかった。
ヒカルは、大人になることは怖かったが、大人になると、できなくなることが少しずつ増えていくと思っていた。
大人になれば、できないことができるようになるけれども、それと引き替えに失くすものもあるのだと知った時には、もう、既に大人になってしまっているのだと思った。が、それは半分だけしか正解ではなかった。
そして、大人というものを定義しようとしていた時の頃の方が、ずっと涙を堪える力が強かった。
脆く儚くなった。強くありたいと願っていることは変わらないというのに。
明らかに違っている。
それまで堪えられたことが制御できなくなっている。
どうしてなのだろう。
その理由を探し終えることもないままに、ヒカルはシャルルを見つめ始めてしまった。
だからこそ、距離を置き、そして自分自身を見つめ直すためにこの国を出た。

すべてが自分の勝手によるものであったのに、彼はいつも自分よりヒカルを優先させた。

シャルルが、今は、ヒカルの近くにいる。
これは幻なのだろうか、と思ったがそうではない。彼は、確かにここに居る。
ただ、黙って彼女に優しく腕を回し、そしてヒカルの涙が誰にも見られないように、彼の胸の中に彼女を入れて護っている。

ひとしきり涙を流した彼女は、やがて自分が酷くこどもじみた行動をシャルルに打つけていることに気がついた。
彼は誠意ある行動を見せ続けている。乱れることもなかったし、ヒカルに対して節度有る行動しか見せていない。それなのに、ヒカルは心を乱し、自分ひとりで解決できないことを承知の上で、この場を逃げ出そうとした。
シャルルの前で無邪気に微笑んでいた自分がいかに見苦しい存在であったのかを、ようやく自覚した。それなのに、傍に居たいと喚き散らし、そして今はまた、彼の胸の中で自分の心がいかに不安であったのかだけを訴えている。
相手を労り、相手を慰め、そして相手を微笑ませるために己を律している彼と、いかに違っているのかを思い知った。
「あの・・・シャルル」
涙で濡れた頬をそのままに、ヒカル・クロスはくぐもった声で言った。
彼の腕の中は心地好く、そして窮屈とは感じなかった。それは、シャルルがヒカルを苦しくなるくらいに力強く抱きしめるのではなく、囲うように憩うようにやわらかい抱擁を続けているからだ。
ヒカルは涙で赤くなった頬を更に朱く染める。自分の醜態に今になって気がついた。

「困った」
ヒカルは言った。
確かに、困ってしまっている。
うまく振る舞えない。
「困っているのか？」
シャルルが彼女の頭上でそのように囁くので、ヒカルは素直に頷く。
これまで、先ほど、彼女の顎を強く掴んで惹き寄せ、心の奥底まで覗き込むようにした青灰色の瞳が彼女に注がれている気配を感じ、ヒカルは彼の腕の中で自分の頬を手の平で拭った。
涙は、見せないと決めていた。
しかし、シャルルは涙を止めてみせると言った。
「本当だ」
彼女は少し笑った。彼は、彼女の涙をすぐに止めてしまう。
そして顔を上げた。笑みを浮かべて。彼を困らせたくなかった。
たとえ、自分が困ってどうしようもない状況であったとしても、彼を困らせたりしたくなかった

。
薔薇の苑の中から生まれたような、華のような人はとても美しい。
年齢も、これまでの苦悶も感じさせないのは、彼が今まで苦難の道を知らないで生きてきたからではなくて、その道の上でしか生きていないから故のことなのだと思った。
彼の目覚めに必要な、最高の状態の薔薇を届ける役割を、ヒカル・クロスが担って良いのだろうかという躊躇いが湧き起こる。何があっても彼を信じることはできるのに、彼のことを信じる自分そのものを、彼が信じてくれているのだという自信が芽生えては摘取られてしまう。

強烈に惹きつけられる。
それなのに、戸惑う。
矛盾した強い力の狭間で、ヒカルはただ行き着く先の方向さえ定めることができずに翻弄される。

「何が？」
何が本当なのか、と彼が質問する。
ヒカルはまた笑った。啜り上げた声をおさめて、朗らかに、いつものように屈託無く笑う。
「困っていたけれども、今は困っていない。それから、シャルルは私の涙を止めるのがとても上手で・・・」
ヒカルがそこまで言うと、重ねるようにシャルルは言う。
「できないことは言わない」
「そうだね。そうだったね。・・・忘れていた」
彼の言ったことを忘れることはないのに、ヒカルはそう言って彼の胸の中で身動いだ。
涙を啜りながら、彼女は汚れた顔を拭い、そして俯いたままで言う。
ただ与えられるばかりの優しさに、ヒカルが怯えているのだとは言えなかった。
その愛を失ってしまう恐ろしさを考えると、何も考えたくないと体も心も硬直してしまう。

彼は囁く。
「ヒカルが休めるように部屋を整えてある。枕はジルからの届け物だ。はやく休まないと減香してしまう」
その言葉に、ヒカルは頷いた。自分の帰国を待ってくれている人が居ると聞くと嬉しいと感じる。それを隠してはいけないと学んだ。嬉しいことは、人と分かち合うからこそ嬉しさが大きくなる。誰かと共有することを知っているヒカルは、微笑んだ。
シャルルは涙を止める天才だ、と思った。ヒカルの心の揺らぎを、彼は的確に把握している。
「今日はゆっくりと休めそう。・・・でも、明日の朝には、必ずシャルルを起こしに、部屋まで行くわ。薔薇たちは、元気なの？」

そう言った瞬間のことだった。

あっと声を上げる間も与えられないままに、ヒカルはシャルルの胸に抱かれて、先ほどとは比べものにならないほどの力で彼の腕で体を締められた。
両手を彼の胸にあてる余裕もなく、両腕を下ろしたまま、彼の胸に頬を強く押し当てて無防備な格好になってしまう。
こういう風に、彼が配慮もなくヒカルを抱きしめるのは、彼女を幼い養い子として認識しているからなのか、それとも・・・これまでヒカルが経験していない範疇の事柄に起因する行動からなのか・・・わからなかった。しかし、不知であることは負罪を免れると言うことではない。
彼女は確かに贖罪の娘であった。
罪深く、罪を作ることに対して無邪気でありすぎる故に招く困惑を払拭することができないままに、戻って来てしまったのだから。
彼が、ヒカルの耳元に唇を寄せた。屈んだ体から、微かにシャルルの匂いがヒカルに移っていくのを感じる。ヒカルの体が、そうしようと思っているわけではないのに震えはじめた。
「・・・ヒカル。ヒカルは、オレを夫と呼び、ヒカルを妻だと言った。それなのに、起こしに行くと言うのは・・・説明するに値する箇所だと思わないか」
ヒカルが声を呑み込んだ。

●17

「泣くな、とは言わない」
彼がヒカルの耳元でそう言うと、彼女はただ、こくりと頷いた。
ようやく彼と距離を縮めることができたというのに、ただ喜びに涙を流し、そしてもどかしさに喘ぐしかできない自分が苛立たしい。彼女が待ち侘びたように、彼も待っていてくれていたのだ、と考えに及ばなかった。自分のことに精一杯で、相手のことを考えられないのだと思うと、恥ずかしくて顔が上げられない。彼はそんなことは教えなかった。決して顔を俯かせてはいけないのだと教えてくれたのは、シャルルであったのに。そのシャルルの前で、自分は彼の顔を見せられないと下を向く。
「ヒカル。上を向いて」
シャルルはどこまでも優しく言う。ヒカルは、聞きたかった声があまりにも近くにあって、そして彼の言葉に従った。
次に何が降ってくるのか、わかっていた。
彼女の両の手の平が、強く握られて、体が硬直する。幾度も交わした・・・家族に対するものではないキスに、ヒカルは眼を瞑って堪えた。
彼の薄い唇がヒカルの上に重なって、逃げることを許さない。追いつめられたヒカルは逃れるように唇を開き、上を向いたまま身を捩らせる。嫌なのではない。ただ、自分が立っていられないほどの陶酔にいきなり入り込んでしまったことに戸惑っているのだ。
縋り付く場所がなかった。膝が震え始め、体が痺れてくる。何もかもを忘れてしまいそうになる

ほど、彼の口吻は情熱に滾り、彼女を彼女ではないものに変化させてしまう。
彼にしがみつくことも許されない。体の自由を奪われて、彼が常々言っている「ヒカルのすべて」を欲しているのだと知る。
彼は頬を傾け、そして長く彼女を慥かめようとし続けた。唇が濡れ、シャルルの睫が角度を変える度に、彼女の頬や瞼を擽る。シャルルの腕の力が少しだけ強くなった。
目を開けていることすらできない。ただ、彼の愛を受けるばかりのヒカルの喉が上向きになり、そして白金の髪が自分の視界の上を燦めきながら走っている気配だけを感じながら、ただ、抗うことすら忘れてヒカルは体を震わせながら彼の唇を受けていた。
それはとても長い時間のように思えたが、それほど長くはなかった。彼女の呼吸が止まる前に、シャルルは彼女から唇を離し、そして次には困ったように美しい眉を顰めてヒカルの額に自分の額を押し当てた。

「・・・妻と言うのなら、飛び込んで来てくれ。そうでないと・・・」
彼は囁いた。彼女が躊躇って足踏みしていることを咎められているのだと思った。
彼の方がずっと年上で、こういう時にどうすれば良いのか十分に経験しているはずであった。それなのに、彼は少年のように額を擦りつけてヒカルに不満を漏らす。
「オレからはするべき行為ではない。一度で覚えてくれ」
シャルルはそう言うと、彼女の身体を強く抱き締める。ヒカルは、それに合わせて腕を伸ばし、彼の背中に自分の手の平を添えた。
どれほど求めた背中の温もりだろう。
どれほど、触れたいと思っていたのだろう。
自分がそれすら忘れて、抱擁に忘我する。
夫婦と言うには情熱が強すぎた。
恋人と言うには忍耐が混じり過ぎていた。
互いの気持ちが離れてしまったとは思えなかった。
彼の心を疑ったのは、彼が冷静にヒカルに対応していたからだ。しかし、今の口付けと抱合でわかった。
確実に、彼と彼女の距離が彼らの情の焔を煽っていることは間違いようのない事実だ。

「・・・はい」
彼女がそのように素直に返事をすると、シャルルは頷いた。それから、もう一度軽く唇を重ねる。・・・ヒカルは彼を見上げながら、涙で頬を濡らしたまま、覗き込むようにして言った。
「シャルルは怒っているの？」「かなり」
彼がそう言ったので、ヒカルは声を上げて慌ててしまう。どうしよう、と呟いた。
「遠慮して近寄らない人に苛立っている。そのうえ、彼女は相手の気持ちも知らないで、自分ひとりで休むと言って、すぐに逃げ出そうとする。・・・オレよりずっと年下の貴女に翻弄される男の身にもなってくれ」

シャルルがそう挙げ連ねるので、ヒカルは恐縮して身を縮ませた。
「ごめんなさい」
「素直なところや、隠し事ができないところは、ヒカルの良いところだと思うが、せめてオレの前ではもう少し・・・」
彼はそこまで言ってから、言葉を切って笑った。
「小言はなしだ」
彼はそれだけを言うと、ヒカルの顔を覗き込む。
「ヒカルの部屋はそのままだが、貴女が眠るところはそこではない」
彼にはっきりと言われて、ヒカルは口籠もった。それは、彼と閨を共にするということを言っているのだとわからないわけではない。でも・・・ヒカルは目を泳がせる。
「いやか？」
「そういうことでは・・・」
ヒカルの言葉に、シャルルは愁いを含んだ表情になったので、ヒカルは慌ててその場を取り繕った。自分はいつも言葉が足りない。彼と眠ることが嫌なのではない。それなのに、彼を拒絶するような物言いしかできないでいる自分は、彼のとなりに立つというより、後ろを追いかけているような気がする。

「・・・いやか？」
彼がもう一度尋ねた。一度で覚えろと言ったのに、彼女にもう一度確認する。これでヒカルが嫌だと言えば、彼はそのまま引き下がってヒカルをそっとしておくことにするのだと思った。だから、彼女は勇気を振り絞って、言う。それはとても自分から言うことではないと固く信じていて、口に出せないままでいたことであった。
そして、同時に、彼女が強く望んでいたことでもあった。
「シャルルと一緒に・・・あなたの傍で目覚めたいの」

●18

その時。
突然、体が浮いた。浮いたと思ったのは、シャルルがヒカルを抱き上げたからだ。
シャルル、と彼の名前を呼んだ時には、彼女の身体はシャルルに持ち上げられたまま、ふたりがそれまで対面していたテーブルの上に乗っていた。糊の利いた刺繍の入ったテーブルクロスの上の冷めたティーカップが震動でかちかちと硬質の音を立てる。
反射的に両手を縁に乗せたが、彼はそこに体を屈めて、彼女の腰を抱いた。まったく無防備であったので、両脚が開いてしまい、そこにシャルルは体を入れて彼女が倒れ込まないように支える。
ヒカルは自分の足元が乱れて露わになったことを感じ、慌てて身を起こそうとしたがシャルルは彼女の身体に重なったままで抱き起こそうとはしない。
「シャルル」

動揺した声で、ヒカルが言った。

何が起こっているのか、まったく思考がついて来ない。ただ、体が倒れると感じて両手をテーブルの上についたものの、シャルルの重みに堪えかねて彼に腕にしがみつくようにして強く手の平で握って姿勢を保っている・・・そういう順番で自分の身体が移動しているのだ、と思ったが、そう思った次には彼は流れるように、計算していたかのように彼女の身体をテーブルの上に置く。
カップや花瓶があり、背中でそれを受け止めなければならないのだ、とヒカルが小さな悲鳴を上げると、それに重なるように彼は腕を勢いよく振り払った。

・・・テーブルの上にあったものが音を立てて床に落ちていき、砕ける音がした。花瓶は罅が入ったのだろうか。ヒカルの視界の端で、転がっていく。
シャルルが、腕で卓上のものを振り落としたのだと気がつくより前に、ヒカルの背はテーブルクロスの上に乗せられてしまっていた。
器が壊れることを惜しんだり、床が水れ濡れて花が散ってしまうことすらまったく気にしていない様子のシャルルは、ただ、じっとヒカルを見つめている。
こんな風に熱を帯びた視線で、彼女は見つめられるとは予定していなかった。
幾度も、そうであったら良いのにと思いながら求めていた視線であったのに。
今、実際にそれを見てしまうとただ声もなく吸い込まれていきそうになる。

これほど派手派手しい物音を立てたのに、誰も様子を見に来ない。シャルルが誰も入ってこないようにと言ったからだ。
彼が誰かの入室によってその激情をおさめてくれるのを期待していたヒカルの頬に、彼の頬が重ねられる。
「あの・・・シャルル・・・」
「貴女は、オレが平気だと思っているから」
シャルルの声は掠れていた。
彼が少し怒っていると思ったのは、間違いではなかった。

・・・乱れた服の裾が気になり、ヒカルは彼の体から逃れようとするが、彼はそのまま彼女の首筋に唇を這わせる。
シャルルの手の平が、ヒカルの膝に乗った。そして、彼女の大腿に指が伸びる。
「待って・・・待って、シャルル」
「待った。十分。十分過ぎるほど」
シャルルはそう言って、ヒカルの腰を抱きしめた。鎖骨の上を強く吸われて鋭い痛みを感じるが、それは不快なものではなく彼の残した甘美な愛の徴であると知ると、ヒカルは目を潤ませて、唇を震わせた。

彼に触れられると、自分の肌が汗で濡れるのを感じる。呼吸が乱れ、瞬きすることが難しい。彼は唇を重ねて彼女の声すら奪う。
ヒカルは彼の腕を掴んだ。身を捩ればそれだけ彼の体に自分の身体を猥らに押し付けることになってしまう。羞恥で彼女は真っ赤になった。
猛った彼の愛撫は、嵐のようだ。それでも、ヒカルを気遣っていることがわかる。彼女が受けた幾つもの検査の名残を避けて、彼はヒカルの肌を慥かめる。
それでも。
身を捩って、思わず逃げようとするヒカルを追い立てるように、彼は追いつめた先で指先に力を入れ、磁器を思わせる白い隆起を掴んだので、彼女は小さく呻いた。
彼が穏やかであるのは、彼女とのことをなかったことにしたいからなのかもしれないというヒカルの杞憂を吹き飛ばすに充分な熱情だった。
彼の掌で炙られる。

決して乱暴ではないが、彼の激しい情熱がヒカルの上で吹き荒れていた。
そして、彼の言葉にヒカルは彼女が不安に思っていることを彼が、今ここで解消しようとしているのだ、と思った。

彼にヒカルに対する我を忘れるほどの熱がなくなってしまったと感じるなんて。
ヒカルの目に、涙がにじむ。そして、激しく彼女を求めるシャルルにそっと腕を伸ばした。自分から求めて、彼の唇に自分の唇を重ねる。卑しい女だと蔑まれても良いと思った。何より、自分自身で思っている。貪欲で、惨めで、矮小な人間だ。
でも。今は、彼の愛が欲しい。

茶色の髪がテーブルの上に散って、ヒカルは酷く乱れた格好をしていた。
それがシャルルの望みであるのなら、それでも良いと思った。このままここで獣の交わりのように彼と睦み合い、それでシャルルの歎きを鎮められるのなら。
ヒカルが招いたことであるのだから、それはヒカルだけで受け止めたかった。
他の誰にも彼に触れて欲しくない。彼には、他の誰にも触れて欲しくない。
そういうこどもじみた嫉妬が自分の中にあるのだとは、まったく考えていなかった。
この恋を知るまでは。

●19

「ヒカル・・・」
彼の掠れた声がヒカルを滾らせる。受ける側とされる性であっても、このように迸る狂熱に浮かされるのだと知る。
彼は、ヒカルに様々なことを教える。
ただ穏やかな感情だけではなく、惨めで悲哀に満ちたものも学んだ。

それでも生きることに貪欲で幸せになりたいと強く求める気持ちを分かち合う。
日本に戻された時。
毎日、彼は幸せだろうかと願い、自分のことよりもシャルルやフランスに住む知り合いの者たちが健やかであることを願っていた。

ヒカル、と呼ばれる度に、彼女の中で漣がうねりに変わる。
彼の掌が、ヒカルに近付く。ヒカルから見えるのは、シャルルの白金の髪が見えて、激しい息遣いが聞こえるばかりであった。
彼女の身体に自分の息吹を重ねるシャルルはこの上もなく優雅で余裕さえ含まれているように思える。しかし、ヒカルは、そういったことに感覚を研ぎ澄ませることができない。余裕がないのだ。同じ様にして応えることができない。

頭が痺れて顔が火照り、彼に触れられている部分が自分の肌でないような感覚がヒカルを覆う。
羞恥よりも忘我が先に来てしまう。
どうにもならないほど。どうにかなってしまいそうなほど。
体を起き上がらせることができないほど、体が震える。彼の指先や手の平や頬が彼女に触れると、その都度、自分が自分でなくなっていく。気がつけば、いつの間にか彼女の上衣はたくし上げられていて、彼女の汗ばみ始めた肌によって消毒薬の匂いが濃く立ち上り始める。様々に検査した名残の匂いだ。
彼女はそれで、瞑っていた眼を見開いた。

彼の両肩に手を置き、そしてヒカルは慌てて言った。自分の声ではないと思ってしまうほど嗄れていた。それまで自分が刺激に餓えた獣のように声を嗄らしながら喘いでいたことに気がつき、そして唇を強く噛みしめた。
「待って・・・待って、シャルル」
彼女はいつもシャルルを待たせてしまう。どうしても、踏み込めないところがあるのだということは自分でもわかっていた。こういうことは慣れていない。楽しむこともできなかったし、彼女はただ戸惑って彼の愛を受け止めるだけしかできていない。彼女も愛を返したいと思っているのに。
シャルルを愛していることを示したいのに。彼女は、そういうことをシャルル以外から学ぶことはなかった。
だから、ヒカルはどのように振る舞ったら良いのか、わからない。
「煽ったのは貴女だ」
彼女はそれを聞いて、息を呑んだ。自分の何が、彼をそのようにさせるのかがわからない。
しかし、彼も、知っていた。
彼の仕草のひとつひとつが彼女に浪を呼び込んでいることは知っていながらもそれを貪り尽くそうとしている彼の浪の源はヒカルなのだとわかっている。

いつもの彼は、耳元で彼女に愛を囁く。愛していると言う時もあれば、オレの天使と囁くこともあった。しかし、今は違う。言葉で彼女を追い立てることもなく、彼も苦しそうに彼女の肌を貪るだけであった。
「私、私は・・・」
切れ切れに彼女は言う。自分は、本当に待って欲しいのだろうか。
彼が我に返ってヒカルから離れることを願っているのだろうか。
彼の中にあるヒカルを確認したいから、そんな風に抗うのか。
「待たない」
シャルルはそう言うと、彼女の腰を引いて自分の身体を更に重ねる。
両手はいつの間にか、彼女の脇腹に触れていた。激しい痺れが彼女の身体の内に焔を灯す。ひとつではない。幾つも、幾つも。

淫蕩に体が崩れそうになる。狂おしそうに上体がうねり、そして浮いた背にシャルルが手を添えて腕を滑り込ませた。彼女の骨盤を掴み、そして彼は自分の方に引き寄せる。

・・・テーブルクロスが位置を乱して、ヒカルとシャルルの下で悲鳴のような摩擦音をふたりに聞かせるが、それで彼らが蠢きを止めることはなかった。
どうしよう、と思いながらも。
ヒカルは、彼の肩に添えた手を固く握りしめて、彼の首筋に指を伸ばしそして堪えるために力を入れる。
しかし、それがシャルルの中にある情炎を息吹かせていることに、ヒカルは気がつくことができない。
吹き荒れる愛の嵐にただ、体を縮めるが、シャルルはそれを根気よく伸ばし続ける。いつの間にか無我夢中となって体を反らせた。
体を重ねられて、引き攣れそうなほどの悦楽がヒカルの体を支配してしまう。それが怖かった。
本当はそうしたいのに、それは怖いことだと考えていた。
溺れるのはとても恐ろしい。
・・・自分がもし、自分の立場を忘れて彼に多くを求めてしまうことが当たり前だと思ってしまうようになった時は、その時はシャルルの傍にはいられないと思っていた。
ヒカル、と名前を呼ばれる度に、彼女の何かがひとつずつ甘く崩れていく。
「待たないよ・・・」
シャルルの声音は優しくて熱かった。ヒカルが天使だと思った人は、今、熱い眼差しで彼女を見つめている。
彼女は、紅潮した顔を左右に振った。彼の唇がヒカルの肘に触れ、愛おしそうに切ない表情を浮かべながら手を取り、手首まで這い上がる。
心がすべて彼のことで満たされて溢れてしまうと思った。
彼にそんな顔をさせるのが自分であることが嬉しいのか切ないのか哀しいのか・・・わからなくなってしまう。

そして、彼のことで頭がいっぱいになってしまう。
自分が彼に組敷かれて抱かれている様はとても猥らで恥ずかしいと思うのに、拒絶することはできない。
なぜ、そんな風になってしまうのか、彼女はわかっている。
それは彼が彼女の愛する人だからだ。
誰でも良いわけではない。
同じ様に・・・シャルルも彼女にそれを感じているからこそ、彼は彼女の声を聞いているのにその先に踏み込もうとする。

●20

自分がこれほどまでに自分の心に翻弄されてしまっている理由は何なのか、ヒカルは彼と離れている間、考えた。
日本に滞在していた時にはそうは思わなかった。それなのに、モザンビークに行った時には違う感情に苛まされてしまった。
その違いはいったい何なのか。
こうしてシャルルに触れてこたえが出る。
困り果てた自分の感情を持て余していて、そして自分は・・・シャルルに愛を求めているのだ。
たったひとりの人だと言われた。それでも、自分は満足できていないのだ。
愛されたくて、嫉妬するのだ。帰ってこない、シャルルのファム・ファタルに対して。
自分も彼女の帰りを待っているというのに、彼が恋い焦がれる相手には決してなれないことを思い知った。
そして、そこでようやく理解したのだ。
張り裂けそうなほどに強張ったヒカルの肌を、押し潰すようにそれでいて細い指先で擦るように愛でながら・・・・彼は彼女の耳元で、再び甘く誘う。彼女の名前を呼び、その語尾は消え入りがちであったが、彼女の耳には確かに届いていた。
「ヒカル」
彼はいつも自信に満ちあふれ、ヒカルの前では常に余裕のある態度で彼女を安心させる彼であるのに。
この時はとてもか細い声で彼女に彼女であるための名前を告げる。
なぜなのか、どうしてなのか。
そう尋ねたいのに、ヒカルが言いたいことは一体、誰に尋ねる問いかけなのか、わからない。

・・・自分は、どこに行ってしまうのだろう。

ヒカルは彼を「天使さん」と呼んだ。
本当に、天使のように見えた。
そして、彼女は彼に恋をした。あまりにも長く一緒にいたので、そのことに気がつかなかったけれども。離れることになって、はじめて気がついた。ヒカルはずっと彼に恋をしていた。けれども、それは愛に変わった。愛をしてしまった。自分がシャルルの求めている人そのものになれることは決してないけれども、そんな彼をとても愛おしく思えた。
その時には、彼はもう天使などではなかった。彼女の運命の人なのだと悟った。
誰かに決められるのではなく、自分がそう決めた。その時に、少しだけ彼のことが理解できた。
恋や愛に堕ちた理由を、彼は決して抗えない神の差配として受け止めることはないのに。
神を否定しているわけではないのに。
そうして、彼は彼に挑戦するような態度を見せる。

彼女が纏っている布の間を泳ぎ分けて、シャルルはヒカルの中に近付こうとする。
ヒカルは苦悶する。自分はそれ以上・・・触れられたら、困る。そう。怖いのではなく、困るのだ。
肌が露わになる。
その都度、彼女の肌が外気を吸って張り詰めていく。自分ひとりだけでは決して感じない緊張に、ヒカルは身が震える。
彼はヒカルの声が届いているのに、ヒカルに気づきを与えるために、彼女に自分を被せる。そして、重ねる。それから、委ねる。
シャルルが彼女の温度を慥かめるために。
彼女がここにいるのだという現実を確認するために。
ひたむきで強いあの人をシャルルは愛した。そして、生きていていることを願って、今でも捜索をやめることはしない。当主の座を退かないのは、そのためだ。それから、ヒカルを守り育てるために彼は当主であり続けた。
彼を解放できるのは、彼女であったのに、それに甘んじてしまった。
そのヒカルは、今、シャルルを求めている。どうしようもなく、強く。

そこで、彼女の首筋が仰け反った。
そうしようと思ったわけではない。しかし、体がそのように反応してしまう。
短い声を出すと、シャルルはそのまま彼女に餓えを落とし続ける。ただ単に、女の肌を恋しく思っているのではないのだとヒカルに伝えるかのように、彼は自分の戀慾だけを晒すことはしない。
彼の体も熱くなり、汗ばみ、そして渇望していることを、ヒカルはその肌で感じている。でも、彼はそれ以上先には進まない。自分の肌を曝し、ヒカルに乗せてこの場で彼女の中に焔を埋めて、灼熱を海に沈めることはしない。
多くの者たちから崇められているフランスの華が、ヒカルの前で熱を散らす。
舌で薙ぎ伏せ、押し捏ね、きつく吸い上げてヒカルを翻弄する。

衝撃が彼女を翻弄する。彼は少しもヒカルを手荒に扱うことはないのに、彼女は瀕死の魚のように痙攣し、僅かな滾りでも大きく波紋を広がらせる海面になってしまったのだと思ってしまう。
「・・・逃げないから・・・」
それだけ言うのがやっとであった。しかし、シャルルは彼女の言葉に返しをささめく。
「貴女が逃げないとは言い切れない」
これほど狂おしい愛撫を加えながらも、彼は彼女の喘ぎに呼応する。
確かに、自分は逃げ出そうとしていた。つい先ほどまで。だから、シャルルはそれは信じないと言っている。ヒカルは困り果てた。
それ以上に深い考えを及ばせることができない。それほど、彼の愛撫はヒカルを酔わせる。そして、また暗い餓えを彼女に与えるのだ。このようなことは、ヒカル以外の誰かと交わすことはして欲しくない、と。

●21

シャルルが彼女を追いつめていく。
優しい瞳でありながら、熱を帯びた青灰色の視線がヒカルの肌を灼く。

堪らなく愛おしい。
けれども、ヒカルは逸って心のままに乱れることはできなかった。
目を開けていることができないほどに、自分の中の何かが音を立てて弾ける。
ただ求めるだけなのではなく、互いが求め合うことがこれほど違うものであると、ヒカルは今、知った。

彼がヒカルの肌の上を滑る。ただ貪るのではなく、慈しみ、労るように愛でる。
こんな風に大事に扱われて、ヒカルはとても幸せであったのに、どこか苦しくて体が痛い。
シャルルがヒカルの帰りを待っていてくれたと感じる。ただ待っていただけではなく、待ち詫びていたのだと感じる。
自分は、このまま消えてしまうかもしれない。それでも、後悔しないほどに満たされているのに、もっともっとシャルルを知りたい、もっともっと・・・シャルルに触れていたいと思ってしまう。
そういう風に願うのは、いけないことだと思っていた。
自分の要求を満たすことを最優先にしてしまえば、自分は自分でなくなってしまうと考えていた。
なぜなら、ヒカルのためにシャルルが犠牲にしたものの多さと大きさを知っているからだ。
彼は決して犠牲にしたとは思わないだろうが。
その反対に、彼女が諦めるものはとても少なかった。
父方の家族との不和、両親の友人であるシャルルとの恋を受け入れないと思う者たちとの
決別・・・誰からも祝福される恋愛ではないことは承知の上であったのに、それがヒカルを哀しくさせる。
いつか、努力をやめてしまわないで続けていたのなら、いつか・・・きっと、欠けてしまったものも埋まるのだと思った。
ヒカルがこうして、激しい愛に身を投げだしてしまっている姿は、彼女の望んだ愛の確認ではなかった。でも、体が求めてしまう。頭の芯が痺れて、彼のことしか考えられなくなってしまう。
彼女は、シャルルの目眩のするような情愛を身に受けて、本当に戻って来たのだと感じる。涙が出そうなほどに、嬉しい。
でも、同時に・・・こういう愛交はどうしても臆してしまう。

彼の洞を、誰も満たせないから。ヒカルも、それを全部埋めて幸せで溢れさせることはできないから。彼はヒカルを抱くときに、いつも彼の運命の人のことを心のどこかに浮かばせている。
形代ではないが、それでも、彼女の娘であるヒカルから、少しずつ何かを奪い取っているような後ろめたさを感じている。
でも、ヒカルがあの時に。海で、叫んで、そしてシャルルを追いつめた。
彼は、彼女の手を取るしか選択できなかった。

・・・・ヒカルはそれを知っていながらも彼の懐に滑り込んだと思っている。

自分は、卑怯だ。
それを知っていながらシャルルを絡め取ってしまった。
わかっているのに・・・彼を解放することはできない。
だから、こんな風に彼女が熱望していた、彼の息吹を身に受けてなお哀しいのだ。
いつの間にか、また、涙を零していた。目尻から顳顬を流れ、彼女の髪に流れて行く細く途切れてしまいそうな河はとても熱かった。
シャルルの愛を得て、自分は弱くなった。
決して泣かないと決めていたのに、彼女は涙を流してばかりいる。
「ヒカル」
シャルルの声が、ヒカルの耳元で鳴った。
彼の声は音楽だ。ヒカルの心をさざめかせ、落ち着かせ、時には心を激しく揺さぶり、そして眠りに誘う。奇蹟のような命の傍にいて、ヒカルはヒカル・クロスで良かったと思う。
彼の役に立つのであれば。
この体の特質から得られるもので彼が癒えるのであれば。
彼女は、いくらでも身を削ろうと思っていた。
痛みに怯えてしまったとしても。逃げ出しそうになったとしても。
それでも、シャルルや、この家の者たちが救われるのであれば、彼女は何もかもを差しだそうと思った。
彼女の母親が、彼に対して解剖同意書に署名したことがあったと聞いた。ヒカルも同じ事を求められれば、きっとそうするだろうと思う。
それでも、彼は本当に救いたいと思った者を救えなかったと苦悶する。
ヒカルは知っている。彼が、時折、悲痛な面持ちでじっと空を見据えて時間を過ごしていることを。
彼がいくら素晴らしい頭脳と行動力と実現可能な環境を持っていたとしても。
世の中の命すべてを救うことはできない。
だから、彼は医療というものを根本から覆そうとした。その先にあるものを現実にするために、ヒカルが必要だった。利用されたとは思っていない。
けれども、そう思う者がいることは確かだ。それも、ひとりやふたりではない。

ヒカルという偶発的に生まれた存在は、矛盾に満ちた命でもあった。
彼女もまた、人工的に生まれた生命である。
タイプHと呼ばれた時から、アルディ家の管轄下にあった。
形にならない時から、この家に深く関わっていた。
その命に肉と魂を与え、永遠の光という意味を持つ名前を与えた。
そして、ヒカルはシャルル・ドゥ・アルディに焦がれて・・・どうしようもなく焦がれて、今に至る。

「シャルル・・・」
彼女の名前を呼んだ人は、ヒカルが彼の名前を呼んだので、そっと彼女の涙を彼の唇でぬぐい取った。
涙で、喉が詰まる。
すると、彼は彼女の上から身を起こした。溶けそうなほどの熱が与えられてばかりであったヒカルに、空気は冷涼であった。冷える、と思った時には、彼女の衣類はシャルルによって整えられていた。
それまで談笑していたテーブルの上で、乱れた自分を投げだしたままになっていたヒカルは突然スイッチを切り替えられたように、身を起こす。そこにはもう、シャルルの身体という重石はなかった。
「・・・貴女は誰にも渫われないのに」
シャルルが呟く。最初に過ごした日と同じ様に、彼は苦悶に満ちていた。
獣と同じ路に堕ちてしまうと懼れることはなかった。しかし、シャルルにとってヒカルはあの人の娘であるという意識がある。それでも・・・それでも、ヒカルを追い払うことはしなかった。
彼は彼女の額に自分の額を押し当てた。
「ヒカル。ここで貴女を一晩中抱くわけにはいかない」
その瞬間。
ヒカルは全身を朱に染めた。
彼が途中で動作を止めた理由を明かされて、ただただ、羞恥に眼を瞑る。

彼は、ヒカルが感じたように。誰かに心を奪われていないかどうかを確認したかった。それが嬉しくて・・・でも抗ってしまった。そしして、彼はそのまま先に進むこともできたのに、恐ろしい程の忍耐力でもってそれを鎮めてしまった。
ヒカルはそうできなかった。それが造りの違いからくるものなんかというと、そうではないと思う。彼は、特別なのだ。そして、自分のことより・・・きっと、ヒカルのことを優先させている。
それはずっと変わらないだろう。自分のことを優先させるのであれば、彼はこのままヒカルを蹂躙し尽くしただろう。
でもそうしなかった。そうはしなかった。

・・・そこに、彼の愛がある。彼の誇りがある。そして、それをヒカル・クロスは愛したのだ。生涯をかけて、愛したいと思う程に強く惹かれた。

●22

「シャワーを浴びておいで」
小さなこどもに言い聞かせるように、シャルルはヒカルに囁いた。その声音には、先ほどの情熱的で狂気すら孕んでいる様子は消えてしまっていた。
これほどの短い時間の中で、自分自身を収めてしまう傑出した人物を、ヒカルはぼんやりと見上げていた。激しく抱き合って、そしてその途中で放り出されてしまった。
突然、目の前にあった宝物を取り上げられてしまって途方に暮れるよりも前に何があったのかわからないという状況で、彼女は茶色の視線を宙に彷徨わせた。
体が火照り、肌の表面の感覚が鈍く彼女は腕を引かれて体を起こした。
まるで、映画の中の出来事のようだ。自分がこれほど・・・何もかもを忘れて、彼にしがみつくようにして愛を乞うとは思えなかった。
そうしようと思ったわけでもない。彼女はとても虔しい程度の戀慾しか持ち得ないと自己認識していた。
他の同世代の者との会話がかみ合わないのも、「取り澄ましている」と言われても、彼女はすべて自分が至らないせいだと思っていた。
今でもそう思っている。
どうしようもなく惹かれてしまう相手の前で、乱れた心を曝け出すことはとてもいけないことなのだと思っていた。
しかし、シャルルを前にすると、どうにもならない感情が噴出してしまう。勢いよく、そして止めどもなく。
情けない程に、自分の心が体を支配してしまっている。
形容しきれない脆弱さを目の当たりにして、彼女はただ呆然とテーブルの上で体を起こした。シャルルが腕を優しく引き、腰を支えて彼女の脚を宙から地上に戻す。
ヒカルのことをとても大事に扱う。
そしてヒカルは、それをごく自然に受け止めている自分の身に染みてしまった習慣や仕草のひとつひとつに愕然とするのだ。
彼がいる日々を当たり前と思っていた頃が長すぎて、彼女はこうしてシャルルが見せる感情の切り替わりについて行けずに、ただ、どうしてよいのかわからずに次の行動や言葉を紡ぐことができない。
乱れた髪が自分の顔に降りかかっていた。
身繕いする余裕すら、ない。乱れた服をそのままに、ヒカルは浮遊感の中、彼に尋ねる。
「なぜ？」
意味がわからなかったわけではない。ただ、張り詰めた緊張の糸が急に解けてしまい、自分でも

愚かしいと思うような質問しかできなくなっていた。
すると、シャルルは青灰色の瞳を細めて、彼女を眩しそうに見つめる。
「これから貴女は夫と寝るから」
そう言って、彼は薄い唇を綻ばせる。
「そして、オレはこれから妻と寝る」
睡臥するという意味だけではないものを含ませていることを察知して、ヒカルは潤んだ瞳に光を戻し始める。我を忘れていたようなぼんやりと曖昧な意識であったものが、彼の言葉を聞いて突然、鮮明になった。
シャルルは反対側の腕を伸ばして、彼女の唇に自分の指を押し当てる。
「ヒカル。・・・ヒカルが嫌だと言っても・・・聞いてやることはできない」
それから、彼は白金の髪を傾けて、彼女の唇を指でなぞった。
細く神経質そうな指先は冷たくて、先ほど彼女に触れた熱い手の平の持ち主とは思えないほどであった。しかしそれは自分の身体や頬が火照っているからなのだと気がつき、ヒカルは恥ずかしそうに目を瞑る。
しかし、視界が遮られると余計に・・・触れられた部分が気配に敏感になって、また体が震え始めて呼吸が乱れそうになる。

それから、彼は目を閉じたままの彼女にそっと言った。
優しく近付く彼の顔が、彼女に限りなく近くなり、そしてふっと彼女の前髪を吹きながら彼は言う。
「貴女が欲しい」
彼はそんなことを言わない人物だと考えていた。
ヒカルが知らないだけで、彼はこういう場面を幾度も経験していると思う。ヒカルよりずっと年上の彼が、何も知らないということはないと思われた。実際、彼女はシャルルが永遠の伴侶を見つけてくれれば良いのにと思っていた時期も長かったので彼が泡沫の恋を幾度か迎えていることは知っていた。
はっきりと聞いたことはなかったが。
しかし、滅多になかったふたりきりの外出では、同伴する人物に断りを入れたと言っていた。相手は誰であったのかわからないままになっていたが、シャルルにはそういう人も存在するのだと思って、何とも言えない複雑な気持ちになったことを思い返す。
そして、それを読み取ったかのように、シャルルはヒカルの額に唇を押し当てながら、また小さい声で補足する。
「ずっと、ヒカルだけだ」
鳩尾が締め付けられるように苦しかった。同じ気持ちを、シャルルはヒカルに対して思っているのかもしれないと思うと、切なくて、また涙が出そうになってしまう。
「ヒカルと一緒に眠るのは、オレだけにしてくれ」
彼はそう言ってから、彼女の顳顬に自分の額を擦りつける。幼い仕草であった。

しかし、彼はそうして肌を合わせて誰かと心の内を交換するようなことはしない。
心と、体と。
全身でもって囁く彼の愛の言葉を、彼女は自分の肌に刻み込んだ。そのまま、消えない刻印になってしまえば良いのに、と思ってしまう程に強く。
生きていることを決してやめようとしなかった人の安らぎになりたいと思った。
そして、そんな彼の傍にいたいと思った。なぜなのだろう。ずっと前からかなりの時間を共有してきたのに、彼女は彼がとても愛おしい。
愛されたいと願いすぎて、誰かに拒絶されることが怖くて・・・そんな風に息を潜める陽にして生きてきた彼女が深呼吸をすることを覚えた途端、彼女を取り巻く空気が変化したような気がする。
そして、あの国に行って、また自分は少し変化したと思った。
生きることへの渇望というものは、決して罪深いものではなく、生きていたいと思う気持ちが生命を生かし、希望を持ち続けることがすべての物事への動力であることも知った。
もちろん、ヒカル・クロスという人物が齎すものについて、ヒカルが望まない未来を望むものもいる。しかし、彼女は神でも女神でもなかった。
どれほど、稀なるものを持って生まれたとしても、万能ではないし不老不死ではない。
この世で多く語り継がれている「すべてを超越する者」を具現化した生命などではなかった。
それでも、そのことによって、ヒカルは父方の実家と今も意思疎通ができないままになっていた。
今、こうしている瞬間にも、彼女に失望し、歎き、怒り、呆れ、そして不幸になってしまえば良いのにと願うものが存在することを、ヒカルは忘れてはいけないと思っている。
自分だけが幸せであったのなら、それが全てなのだとはどうしても思えなかった。
でも。シャルルを前にすると、理性という名前のヒカルの罪悪感が大きく揺らいでしまうのだ。
彼が他の者には決して言わないような言葉でもって、ヒカルに求めているものは、ただ熱く溶けるような滾りだけではなく・・・もっと別のものも含まれていた。
ただ合歓の時間を持ちたいのであれば、彼はこのまま彼女を組敷き、そして彼女が朦朧としていることすら奪っていくだろう。
彼は最初に宣言していた。ヒカルの何もかもが欲しいのだ、と。そして彼女はそれでも良いと言った。

●23

シャルルに言われるままに、彼女は湯浴みをすることになった。
しかし、魂を抜かれてそのままに誘われてしまっているような体を起こされて、支えられながら部屋を出る。
彼が少しだけ声を張り上げて人を呼ぶと、どこからから人の気配が増えてくる。

そして、ヒカルの世話をする割り振りを与えられたものに体を預けるようにしてヒカルは部屋を

移動する。
割れたカップが気になったが、彼女が拾い上げるほどの力もなく、仕方なく後に入ってきた者に始末を頼んだ。
何がこの部屋で行われたのか、一目瞭然の場を去る時に。
ヒカルは羞恥のあまりにこのまま部屋に閉じこもってしまいたいと思ったものの、彼女が今夜泊まる場所はシャルルの居室なのだと聞かされてまた緊張する。

「シャルル」
不安そうに目線を向けると、彼は少し微笑んで、また後で、と言っただけだった。
シャルルはヒカルを見送るとそのまま廊下を歩き、姿を消してしまう。
何処に行くのかもわかっていた。
彼は、ヒカルを迎えるために当主の居室に向かった。

私室と寝室は続きの間になっている。
彼は当主となってから・・・ずっとそこに居る。
昔は別の部屋を使っていたが今は執務室に近い居室を選んで過ごしていた。

・・・ヒカルは、ヒカルと話をするためにシャルルが人払いをしていたのだとあらためて確信する。
誰にも聞こえなかったのではなく・・・シャルルはヒカルとの会話を誰にも聞かせないために、誰も寄せ付けなかったのだ。
彼に触れられるのが怖いと思ったのに、彼が触れなくなった途端に不安を覚える。
意気地のない自分の心の揺れに、ただ情けなくなってしまうばかりであった。

彼は予定していたのだろうか。
ヒカルのためだけに用意された、沸かされたばかりの湯は柔らかく、彼女の身体に心地好い刺激だけ与え続けた。手指の痺れが去り、自分のものであるという感覚が戻ってくる。
けれども、湯で肌を流すときに彼女は戸惑ってしまった。
彼が触れた痕跡そのものを流し落としてしまうことに躊躇したのだ。
湯水に浸かってしまえば、彼の肌のぬくもりが消えてしまう。
彼のことを夫と呼び、自分を妻だと言い放った。
アルディ家ではランスの教会で式を挙げることを結婚と認める。
彼が、あのランスの教会のことで考えるところがあることも知っていた。
だから、あの場所では結婚式をしたいと自分から言う事は無かった。いっそのこと、仰々しい儀式は必要ないとさえ思っている。
そう考えていたら、シャルルが恋人式をしようと言ってくれた。
あの国に旅立つ前のことである。

そして彼女は彼の妻になった。
しかし、戻って来て、こうして実際に彼と抱擁を交わした後に残る言いようのない不安がヒカルを無言にさせていた。
バスルームから出ると、今度はマッサージを施されて、髪を乾かしてもらい、肌に贅沢なほどの化粧液を塗られる。あの国での慌ただしい毎日の生活の中では到底考えられない贅であった。
少し距離を置いてみてわかった。
シャルルは、ヒカルが望んではいけないほどに希有な存在で・・・そして、自分はもう彼がいなければ生きていけないとさえ思うほどに彼を深く愛してしまっている。
なぜなら、彼の為なら身を引けると思ったからだ。しかし、彼と一緒に居るとその考えが引き汐のように急激に遠のいてしまう。
もし、彼が他の人と一緒に過ごすことで幸せになれるのであるのならば。
それを見送る勇気を持っていたいと思うのに、すぐに挫けてしまう。

・・・自分は、彼を幸せにしたくて一緒に居たいと言ったのではなかった。
自分が倖せになりたいから。彼を、誰にも渡したくないから。
そして、自分は彼の運命の人を忘れられないあの人を好きだから。
最愛の人にならなくても良いと思った。一番にならなくても唯一にならなくても良いのだと思っていた。
でも、彼の唯一は争われることがない位置にあった。
ヒカルは、永遠に唯一になれない。
しかし、この世に生きるどんな者も、彼の唯一にはならない。
だから、安心してしまったのかもしれない。

安心しないと愛せないというのは、違う気がしてならなかった。
自分は・・・シャルルに誰かと比べられていると感じたことはないのに、自分自身がいつも己と彼のファム・ファタルとを比べてしまっているのだと思うと、ただそれが切なくて心が痛かった。
シャルルは新しい路として自分を許し、自分を受け入れ、そしてヒカルを迎えてくれた。
そんな彼に応えたくて、足掻いている。自分は、どうにもならないほどに彼を求めているのに、彼に与えるものはない。シャルルはそれを知っているからこそ、ヒカルの全てが欲しいと言ったのだろうと思われた。

そんなことを考えているというのに、体は怠く、自分が育った国に戻ってきたのだと実感した。
自分の好んだ香りの湯、ほどよい照明、以前に使っていた品は真新しく、今回のヒカルの帰還のために取りそろえられたものだとわかる。
思わず微睡んでしまいそうになるほど快適な時間であった。
それまで緊張していた神経が緩み、思ったよりも疲れていたのだと知った。

考えに耽っているのか、揺蕩っているだけなのか、わからないほどに自分は疲弊していると思った。
戻って来てからも、やることはたくさんあった。自分は特別に早くシャルルに会わせてもらえたものの、日程は詰まっていたし、すぐに日本に向かわなければいけない事情も追加されていた。
いよいよもって、クロス家とアルディ家の話し合いに本腰を入れなければならくなってきたのだ。

・・・人は、血が繋がっているだけではわかり合えないのだと思うと、哀しくなってくるが歎くだけでは先に進まない。
少なくとも、自分の希望でここに居るのだと知らせたい。そして、自分が思っていることと違うことを思っている相手の気持ちが知りたい。

母方の親族ですら、最初に聞いた時には驚きを隠せなかった事態である。ヒカルは、誰に祝福されなくても、それでも良いからシャルルと一緒に暮らしたいと思っている。でも、それを理解して欲しい相手が理解することもないのに、宣告のように告げるのは余計に相手を哀しませるだけであることも知っている。
だからこそ、心を砕き、誠意を持って相手に何度でも会ってくることが大事なのだと思う。

後で知った話であったけれども。
シャルルも同じ様に、ヒカルを引き取るために、引き取った後も何度も日本に足を運んでいたことを知った。その時間を捻出するために、彼はどれほどのものを引き受けたのだろうと思うと胸が詰まる。そして彼はそんなことをしているのだとは一切口にしなかった。
ただ唯一、夏のあの時間だけはとうとう、日本に行くことが無かった。
だから。
今度、シャルルとヒカルがともに日本に行くときは、夏にしようと決めていた。
まだヒカルの心の中だけのことであるが、シャルルもノンとは言わないと思う。
その前に、このような揺れ動く気持ちのままで過ごすわけにはいかない。
心浮き立つ考え事ではなかったが、これからずっと、ヒカルは考え続けなければならないことなのだろうと思うし、そのつもりであった。
かなり長い時間をかけて、身支度を整えた。肌は上気して体の芯からあたたかい、と感じている。
乾かされた自分のくせの強い髪がまたひときわ、薄くなったように思った。
他のものは年齢を重ねると色が濃くなる傾向にあるのに、ヒカルの髪は陽に透かすとかなり薄くなっていることがわかる。長く伸ばしているので、気にしたこともなかったが。

・・・彼がその髪に口づけて、彼女の名前を呼び、愛おしそうに頬を擦るだけで、ヒカルは体の内から震える。

これから先は、幸せなことばかりではない。それでも、彼と生きていきたい。
自分がそんな風に考えていることを、父と母なら、どう受け止めるのだろうか。
きっと、自分達のこどもらしいと笑って見送ってくれると思う。本心はそうでなかったとしても。

・・・自分の考えを押し通すことになる。
傲慢だと言われることも多々あるだろうし、実際にそう言われ続けてきた。
それでも、目を逸らすこともなく、自分の意志を貫いて、生きているうちに成果が出るように急ぐことを目指す。長い研究の期間が必要であることも、ヒカルが知らない長い間にそれは進められてことも承知している。
これから自分の肉体は管理されていくことになる。それが時には鬱屈した気持ちを呼び起こすかもしれない。
それでも、笑顔で・・・笑顔で、彼を愛しながら生きたい。ヒカルが生きる場所はシャルルの傍が良い。

先ほどは頭の芯が火照っている感じであったが、今度は彼女の意識は冴えて居た。綿菓子の中にいるような甘い切愛を受けて陶酔していたヒカルは消えている。
彼の最愛の人にならなくても、最も近い場所の者になれる。それで良い。それで良いのだ。
自分が望んではいけないものを望んでしまったのだから。
ヒカルは彼にこの渇望すら捧げることになる。これから彼がヒカルを抱く度に、彼が思い描いているのはヒカルではない、ヒカルによく似た人のことであったとしても彼女はそれを愛おしみ、慈しみ、そのすべてを抱えて彼を愛する事が出来る唯一の存在である。
そうすることで、彼女は彼のたったひとりになれる。自分の愛し方は、きっとこういう愛し方で、他に変えることはできないのだろうな、と思った。勿論、誰か他の者を愛するようになるとは思えなかった。
彼女は彼に押し付けた彼女の愛を、最後まで見届けなければいけない。

●24

シャルル・ドゥ・アルディの部屋に入ると、懐かしい香りがした。
いつも、朝になると彼を起こすためにやってきて、最高の状態の薔薇の名前をシャルルの前で諳んじることが日課になっていた。
ヒカルが選ぶものは何でも喜んだが、シャルルはそのうちに、どのような点を注意して選ぶべきなのか教えるようになった。
そしてヒカルの日常は、アルディ家の温室にある薔薇のことを考えるところから始まっていた。
・・・無性に懐かしかった。
今は、朝ではない時間にシャルルの部屋を訪れる。

彼の目覚めを独占していたが、今度は彼の眠りさえヒカルが見届けることになるのかと思うと、目眩がするほどの幸せを感じる。欲張りな自分を発見し、そしてその感情はシャルルを求めている気持ちと表裏一体なのだと思うと・・・ただ、戸惑う。
見たいものだけを見つめてきたこれまでと違うことはわかっている。

それに、自分は彼に相応しい美しい肌をしているわけではない。
日焼けをしたし、数々の検査や穿刺によってところどころ陥没した部分があった。帰国してすぐに検査が始まったので、その際の腫れや内出血も残っている。慣れない生活で、シャルルに指摘されたように少し痩せて貧相になってしまったし、髪も手入れが行き届いていない。
しかし、ヒカルはそんな自分に誇りを持っていた。
どんな苦難でも、乗り越えられると信じなければ乗り越えられないと思っていたし、実際に彼女は今回の滞在についてはとても納得できるものであったのだと考えている。手ぶらでは戻らないと固く決めていたからだ。
でも、彼の前ではそんな気概も霞んでしまう。

自分がどれほどこの家に貢献できるかはわからない。生体すべての組織を提供するだけでは済まされないほど、彼女はこの家の者たちに護られて生きてきた。
明日には、各邸を回って、皆の状況をこの目で確かめたかった。やるべきこと、やりたいことは無数に存在する。
それなのに、今は・・・彼のことばかり考えてしまう。
それで良いのだ、と誰かに背中を押されたかった。
でも、誰かにそう言われたから彼に添うのではない。
「シャルル・・・？」
部屋の中には、彼がつい先ほどまで居たことを思わせる人の気配が残っていた。ヒカルは辺りを見回す。
彼女が最後に見た時と変わらない風景であった。季節が巡っているので、少しだけ違うものが目に付くが、それはヒカルが居た時からの僅かな変化であり、彼女はそれを見分けることができる自分に安堵していた。
何が変化し、何が残されているのかさえわからなくなってしまったのなら、自分は元々ここに存在しなかったのではないのだろうかと思ってしまっただろうから。

彼はとても気難しく人嫌いで有名であったが、その一方で、ひとたび自分の内に入れてしまった時や、彼が擁護する立場の者に対してはとても寛容であった。
天才と呼ばれる高い知性を持っていながら、ヒカルのために話を合わせる。
彼に、護られていた。
ヒカルはただ、護られているだけの人生であったが、彼と離れて暮らす度に、少しずつ変わっ

ていった。
一度目は、日本に帰されてしまった時。
正直に言えば、彼が自分のことを見限ってしまったのかもしれない、面倒に思ってしまったのかもしれないと思ったこともあった。しかし、彼はいつも変わらずヒカルを気に懸けていた。
そして二度目は・・・今回の長期滞在だ。
それよりも前に日本に戻り、状況を説明し、各種手続きを取った時にはまったく感じなかった寂しさがあった。
彼と心が通じ合っていればそれで満たされると思ったのに。
彼の温度を知り、彼の唇を覆い、彼の歎きにも似た猛りを浴びて彼女は全てを忘れてしまいそうになるほどの幸福を味わった。もう、それ以上求めたらいけないのだと思う程に。
彼は彼女のすべてを欲しいと言ったが、彼の方こそ彼のすべてを彼女に与えているのだと思われた。

そんな風に息われて生きるだけではなく、護られるだけではなく、彼女は護りたいと思った。孤独で、決して手に入らないものを求め続ける高潔な人を、傍で見守りたいと思った。
上手く言葉にならないが、彼の狂気はなくならない。じりじりと焔を忍ばせて、彼を焦がし続ける。ヒカルがそれを取り祓うことはできないかもしれないが・・・一緒に灼かれることは厭わなかった。彼と一緒なら、それでも良い。

ヒカルにとっては、彼は初めて一緒に夜を過ごした相手だ。
だから、彼に執着しているのだと言われてしまえば、何も言い返せない。彼はヒカルの最初で最後の夫になる。
アルディ家の者は幾度か結婚を繰り返すことが多い。
シャルルもこれは初回の婚姻ではない。彼女は、どこまでいっても彼の「はじめて」になることはなかった。
しかし、「おわり」になることはできる。ヒカルが彼を愛し続けて、そして彼がそれを嫌だといわなければ。この関係はずっと続く。彼は、心が離れてしまったとしても、自分から離れていくことはない。
・・・そのような、まだ発生してもいないこれからのことを想定することが愚かしいと思うが、そういう状況が訪れた時に自分が取り乱さないでいられるだろうかと思うと、それは甚だ疑わしいことだと思えた。

部屋は薄暗く、とても静かであった。
火照った頬が徐々に朱を失っていく。
長湯をしてしまった。シャルルは既に休んでいるのだろうか。
そのまま寝室に入る。勝手を知っている場所であったが、朝の寝室とは違った雰囲気があった。ヒカルが踏み入れない間というものがそこにはあり、本当は自分はそこに入り込んではいけないのだという自覚はあった。でも、彼の姿を探し求めて、自分は脚を進める。闇であっても明るい

光の下でも。彼女はシャルルを求めるために臆さず手を伸ばす。
暫くすると目が慣れてきて、彼女は広い天蓋付きの寐台にシャルルの横臥する姿を発見した。ひとりで眠るには広すぎるが、彼が長い手足を伸ばして寛ぐ空間としてはこれくらいが必要なのだろう。
耳を澄ませば、彼の安らかな呼吸が聞こえる。
白金の彼の髪が闇に浮かんでみえた。
ヒカルの髪より明るく輝く彼の髪はとても印象的で、見る者を惹きつけた。青灰色の切れ長の瞳も、通った鼻の稜線や顎の曲線、そして形の良い耳や額は、彼が多くの者を神から授けられているのだとさえ思える。

空気が揺れることすら、彼の障りになると思い、ヒカルは静かに彼に近寄る。
失望と安堵のどちらも同じくらい大きかった。
長湯しすぎてしまったので、待ちくたびれてしまったのだろう。彼も多忙な日程であると聞いていた。
互いに時間を作るのは、難しい状況にあった。それでも彼は彼女のために時間を捻出してくれたのだろう。
彼に感謝する。どこまでも優しい人は、どこまでもヒカルを甘く優しく広く包み込んでくれる。
しかし、彼を包みたい。彼女も、彼を同じ度量でもって愛したい。

・・・近寄ってみたが、彼はまったくヒカルの気配に気付かず、少しも動こうとしなかった。

このまま眠りを与えてあげたいと思った。
あんな風に、途中で切り上げられてヒカルの体は戸惑っていたが、そういう時もあるだろう。
元々、ヒカルの方が困惑して彼の愛に夢中になれなかったのだから。
こういう時に、どうすれば良いのかまったくわからなかった。
しかし、彼がヒカルの目の前で眠りを貪っているのであれば、その顔を見てから・・・自分は別室で休もうと思った。そっと手を伸ばして、寐台の上に片膝をつき、そして彼の方に身を屈める。自分は様子を伺う獣のようだと思った。
愛を乞う獣だ。これほどの人物の愛が欲しくて、自分だけしか持っていないもので彼にウイと言わせてしまった。
彼女は、彼の最愛の人の娘だから。切り捨てることもできず、彼女を受け入れるしかなかった。

それでも良い。・・・それでも一緒に居たい。
惨めになる気持ちは、自分だけが見ていれば良いのだ。
笑顔で、ただ彼だけを見つめる無邪気なヒカル・クロスであれば良いのだ。本当はそんなことは少しも思っていないのに、彼女はそう考えて決めてしまおうとした。
・・・シャルルの髪に触れた時に、柔らかい感触が彼女の指先を麻痺させる。

間違いない。シャルル・ドゥ・アルディ本人だ。彼もバスを使ったらしく、髪から淡く香りが立ち上っていた。
経年に比例しない締まった肩が見える。彼は普段も眠る時には殆ど何も身につけない。
ヒカルは成長するまでは彼がなぜベッドから出てこないのかまったく気がつかなかったので、周囲に随分と嗜められた。それはシャルルも同じで、彼は彼女が年頃になると薄い部屋着は着るようになった。ああ、そんな小さな思い出すら、懐かしい。
ヒカルはくすりと笑った。
話をする時間はある。
自分は戻ってきたのだから。
戻って来た、という言い方が不自然であるのなら。
ヒカルはやって来た。シャルルに会いに。シャルルに会うために。
ただひとりだけ、と定めた人は眠っている。
彼女の身体で傾ぐほど狭いベッドではなかった。

彼の体を覆うシーツが僅かに皺の波を作る。
様子を伺いながら、彼を眠りから醒まさないように髪に指を伸ばす。
なぜだかわからないが、とても秘密めいた行為のように思えて胸が高鳴る。彼の睡臥する姿を、彼女ひとりだけが見ているからだろうか。

「・・・おやすみなさい、シャルル」
彼女は小声でそう言った。どうか、良い夢を。そして、美しい朝を。
彼はもう夢を見ないと言っていたけれども、いまひとたび、夢を見ながら眠って欲しかった。叶わない夢かもしれない。でも、夢の中でなら彼のファム・ファタルと語らう時間もあるだろう。
彼女は満たされていた。彼の顔が見えなかったけれども、きっと安らぎを味わっているのだろう。
疲れて、待ちくたびれて眠ってしまった彼女の最愛の人に・・・彼女はいつまでも片想いを続ける。

●25

その時、急にシャルルの顔がこちらを向いて、彼女の手首に狙いを定めて自分の手を伸ばしたので、ヒカルは小さな悲鳴をあげた。
そして腕を反射的に引こうとするが、彼はそのまま彼女の手首を強く引きあっという間に彼女は彼の体の下に収まってしまう。

・・・今まで彼の体温しかうけとめていなかったシーツの温もりが、ヒカルの背や剝き出しになってしまった膝や脛で感じられた。

ヒカルは何が起こったのか一瞬わからずに、茶色の眼を瞬かせた。
先ほどのようなテーブルの固さはなかったが、彼女は体を引いたというのに、彼女は少しもそこから逃れる事は出来なかった。
「・・・つかまえた」
「シャルル？」
彼の掠れた声がヒカルの耳朶を擽る。思いがけないほど彼の力は強かった。体ごと引き寄せられて、ヒカルはベッドの中央まで引き摺られる。
「起こしてしまったの？」
理性が焼き切れそうになる。それでも、ヒカルは彼の体の重みを感じながら顔を横に向けて彼の視線を逸らかそうとした。
しかし、ふと、違和感に気がついた。
彼が本当に眠っていたのなら感じないことであった。
・・・彼が、少しも体を動かさないでいることに、おかしいと気がつかなかった。
自分の声が震えているのがわかった。
彼の青灰色の双眸が、こちらを覗き込んでいることは暗闇の中でもわかった。

また、あの時のように。彼は彼女を想ってヒカルを抱くのだろうか。

ヒカルの体がシャルルを受け入れたいと思っているのに拒んでいるのは、あの時のことに拘っているからなのだろうか。
しかし、彼はいつも彼女のことを「ヒカル」と呼んで彼女を愛おしんでくれた。それ以上に、何を求めたら・・・ヒカルは満足するのか。

自分でもわからなかった。
何に、それほど臆しているのか。
どうして、彼の胸に飛び込んでいけないのか。
そして、それを察知して、シャルルは彼女との抱合を幾度も中断してしまっている。
わかっているのだ。
自分とシャルルは女と男で・・・何もかもが違う。
ヒカルは彼のことを激しく求めている。
シャルルにも、同じ様に求めて欲しいと思い、それが叶っているのに彼女は引き汐のように体を退かせてしまっている。
シャルルは、求めているのに。
・・・それがたとえ、ヒカルという器であったとしても。

ヒカルが何も言わないでいると、彼は少し視線を泳がせた。
彼女の様子を観察しているのだ。

そして、彼は自分の瞳に映るヒカルを通して、更に何かを覗き込もうとしていた。
それがヒカルのことなのか、シャルル自身なのか・・・それとももっと別のもののことなのか、ヒカルにはわからなかった。
ああ、そうか、と思った。
彼女は長い時間をシャルルと共有してきたというのに、彼のこういう部分を知らないままに育った。
彼がどれだけ激しくファム・ファタルと呼んだ人のことを愛したのか。
そして、どれほど深い喪失感を今でも癒すことができないでいるのか。
だから。彼女は正直に言うことにした。
上手に伝えられるという自信はなかった。
でも、シャルルは言葉を待っている。
言葉のない世界に入る前に、彼は言葉が欲しいとヒカルに無言で要求している。
だから、ヒカルは言う。
自分の言葉で。彼の気に入るような言葉であるかどうかを考える余裕はなかった。
「シャルル。私は、シャルルのこういうところを知らないから・・・どう応じて良いのか、わからない」
「方法が必要なのか？」
「・・・わからない」
「ヒカル。貴女は、さっきからわからないと言うばかりだよ」
彼の高い鼻梁がヒカルの頬を滑る。しかし、シャルルは彼女の唇を塞がない。
彼はヒカルを組敷き、そしてそれでも彼女と海辺の際を越えることはなかった。
ヒカルが戸惑っているからだ。
勢いに任せて、そのまま戻れない場所に流されてしまうことは簡単である。
けれども、シャルルはヒカルが飛び込んで来るまで待っていた。
それが年の嵩を持つ者のつとめであるかのように、彼は理性によって自分の猛々しさを優先させることはない。
「・・・すべてを知ってしまったのなら、私にはもう、シャルルに捧げるものがなくなってしまうから」
シャルルはそれを聞くと、彼女のすぐ近くで薄く笑った。
こうして抱き合うことをヒカルがどれほど待ち詫びていたのか、シャルルは知っているのに、その先に進まない。

我を忘れる前に、我を知らしめよということなのか。

シャルルの白金の髪の先端が、ヒカルの顔にふりかかる。
白く・・・長らくあの国に行くことが無いために元通りになってしまった白くなった肌であった。
しかし、彼の体には無数の傷跡がある。ヒカルはずっと前からそれを知っていた。

驚くべきことに、それらのひとつひとつの傷についてシャルルはきちんと記憶していた。
いつ受けたもので、どんな治療を行ったのか。
そして、なぜ、形成によって修復しないのかも、知っていた。
それは、彼の履歴そのものであるからだ。完璧なはずの彼であるのに、唯一、完璧ではない部分が彼を完璧に近付けている。
シャルルが唯一絶対の存在であることの証であった。

「まだ貴女のすべてを貰い受けていないよ」
シャルルはそう言った。ヒカルは、困ってしまって眉を寄せる。
彼の溜息が出るほどの美貌は経年しても変わらなかった。
いや、年齢を重ねるほど、それまでの気品に嵩が増して、フランスの華と呼ばれるに当然と思われるようなほどの重々しい空気を纏いはじめている。
「貴女のすべてが欲しいと言った」
シャルルがヒカルのことを「貴女」と言う度に、彼女の躰の深い部分に少しずつ溜まりができる。
悦予を貪るためだけであるのなら、シャルルはきっとこんな風にして相手を待つことはないだろう。
それでも、彼の持ちうる限りの理性を注ぎ込んで、彼女に語りかけているシャルルの心根が、ただ、嬉しかった。
彼女が戸惑っているように、シャルルもどこかでこのまま引き返した方が良いのではないのだろうかと考えているのだろうと思われた。

ヒカルは彼の貌を覗き込む。
蒼と灰の混じった瞳が、ヒカルだけに向けられて、彼女は苦しくなって目を閉じようとする。
しかし、彼はそれを許さなかった。
こんな風に、情熱的な視線を注がれて、心が揺らがない者は居ないだろうと思われる。
どこまでも綺麗な、孤独を受け入れた人の瞳はどこまでも深い。
けれども冷たくて底が知れない。
大変に成功した人生であったのかもしれないが、彼は苦難の道を歩き続けている。
次の結婚も、長続きしないと言われるだろう。彼の家の者にはよくあることだと言われているから。
しかし、シャルルはきっとそうしないと思われた。
なぜなら、ヒカルがあの人のこどもだからだ。
たったひとり残された、唯一の家族をシャルルは家族として受け入れ、そして次に彼の妻として永遠にアルディ家の者との繋がる者であるという立場を用意しようとしてくれている。
それは、ヒカルがこの家の者になりたかった、という声にしない願いを彼が自分の内に取り入れたからだ。

・・・この人は、この際に立ってなお、人のことを考えている。

そう思うと、愛おしくて、切なくて、遣る瀬無くて、ただ涙を堪えるので精一杯だった。
自分のことがわからずに、涙を流した先ほどと違う。
もっと熱くて、もっと苦しい。そして、追い立てられているような感覚を味わう。

ヒカルは目を瞑りながら、軽く述べる。
彼の視線と垂直になるように横を向いて、自分の髪が顳顬から目尻を隠していることが、丁度良いことなのだと重いながら。

「寝たふりをしている人への対処をどうしようかと迷っている」
「貴女がいつまでも来ないからだよ」
ようやく絞り出して泣きそうな声で言ったのに、シャルルは彼女をいなしてしまった。
彼は彼女の身体の上で、ゆっくりと重さを増やして彼女に自分を預けていく。
まずは片脚を乗せ、次に自分の体を彼女に乗せた。
彼の熱い身体がヒカルに熱の波を寄せてくる。
ヒカルが引き汐であるのなら。
彼は満ち潮であると思った。
夕刻に退き行くヒカルの体を押しとどめるように、シャルルはヒカルを満たして行く。
合歓の刻というのは、こういう前置きあってのことなのか。
他の時間を知らないヒカルは、ただ、ただ、彼に委ねようとしている様をシャルルに見咎められているかのようで、彼の近すぎる視線から自分を遠ざけようとするけれども。
彼は、少しも許さない。

彼は彼女の上で言った。
ぎしり、と褥が軋む音だけが響く。その中で、ヒカルとシャルルの呼吸と声だけが異質なものとしてそこに存在する。
自分達は、どこに行き着くのだろう。
いや、シャルルを引き込んだのは自分だ。

それなら。

・・・ヒカルの汐は、どこに行くのだろう。

●26

彼の腕がヒカルの腕に重なり、そして彼は始まりを告げる。
・・・スプリングが静かに音を立てる。
彼女の頬に顔を寄せて、洗髪したばかりの香りを肺一杯に吸い込んだ。
「待っていたよ」
待たないよと言ったのに。彼は、待った、と言った。
彼女の脚を割って、彼は自分の身体を滑り込ませる。体調管理と健康維持に気を配しているシャルルの肉体は変わらずに鍛えられた鋼のようであった。
過不足がない体の持つ筋肉の重さがヒカルの上にのしかかるが、それは決して苦しいものではなかった。

シャルルがヒカルの頬や耳朶、そして顳顬や眦などを啄むように唇を擦る。そしてその度に、ヒカルの情炎を増やしていく。
彼は、先ほどはあれほど荒々しくヒカルを掠奪ように熱を押し付けたというのに、今度はただ、優しい。
そして静かに彼女に触れた。

ヒカルの首の下に腕を伸ばし、彼はヒカルを軽く抱き上げて、彼女の着ていたものを剥がしていく。
それはとても薄い皮でできていて、少しでも乱暴に扱ったのならヒカルの肌ごと剥がれてしまいそうだ、と思っているかのような丁寧な仕草であった。
その間も、彼は彼女に軽く口付けを繰り返していた。
ヒカルは彼の背に腕を回し、彼が何も身につけていないことを知り、目を瞑る。
しかし、目を瞑ればそれだけ肌から得る感覚と彼の息遣いと、自分が時々そうしようと思わないのに溜息混じりの切ない声が聞こえて来て、彼女は再び目を開け、そしてシャルルの白金の髪に自分の顔を寄せてしまうということを繰り返していた。
自分のものではない、彼の叢が彼女の腰や大腿に触れる。
ヒカルは彼の背中に腕を伸ばして、ただ、手の平に感じる僅かな溝や隆起を指先で感じる。
・・・これは、彼がかつて受けた傷が癒えた痕だ。
完璧な人であるのに、彼は体の傷を平滑にすることはなかった。それが、愛おしい。戻って来たのだと思うと同時に、シャルルに触れているのだという実感が湧く。ヒカルは、その無数の傷を撫でた。彼女だけが、今は、そうすることができる。

しかし。
ヒカルは、誰かと何も身につけずに抱き合うことに慣れていない。
シャルルには物足りないことだろう。彼は大人で・・・一度結婚さえしている。
数多の恋の噂も耳にしている。
しかしどうすれば彼を満足させられるのかさえ、ヒカルにはわからないままにそれが始まる。
彼の手の平が、ヒカルの背中に直に触れて、そしてその時だけは強く彼女を抱きしめた。
頭だけではなく、体全体の中心が痺れて、何も感じなくなってしまう。
周囲のこと、これからのこと・・・その他全ての未来を感じなくなる。

「・・・震えている」
それを聞いて、ヒカルは首を横に振り、彼の首にしがみついた。
怖いのか、と聞かれることが怖かった。
ヒカルの心臓が壊れそうなほどに早打っていることはシャルルには知られてしまっている。
なぜなら、今、彼女に一番近い場所にいるからだ。
真白の雪の上に桜の蕾を落としたような円みをシャルルの上に押し当てる。
シャルルが彼女をさらにきつく抱きしめた。彼女の震えが寒さからきているのであれば、彼女に温度を与えることによってそれを取り除こうとしているかのように。
何も言葉を交わしていないのに、ただ、こうしているだけで何かが通い合う。
具体的な映像を共有することもないが、ただ、互いが互いを待っていたのだという強烈な思いがそこには存在する。
強烈な思いであるのに、それが強まるほど、彼の愛撫は優しくなり、儚くなり、弱いものになる。
彼はヒカルとこうしていても、決して、彼の孤独をヒカルに刻むことはない。
それが、少し哀しくて、泣きそうになり、ヒカルはただ彼にしがみつき、彼の背中に腕を重ねて自分を彼に曝け出す。
自分だけが満たされればそれで良い、という合歓ではなかった。
目の前で震える陽炎のような、睫が生んだ儚い影が震える。
どうしても彼と離れたくなかった。
彼が、たとえ自分のことを運命の人の代わりの器だとしか見ていないとしても。
ヒカルと彼は、同じだ。
最も愛している者の一番にはなれない。だから、ヒカルは愛に順はないのだという気持ちを受け入れ、理解し、そしてそれが彼女の真実だと考えるようになった。
・・・自分がこれほど醜い感情を持っていることを、シャルルに知られたくなかった。
だから、誰の前でも涙を出さないように腐心した。

彼は優しい。そして彼が乱れることはない。たとえ、抱合の途中であってもヒカルの様子がおかしいと感じれば中断することもできるくらいの理性を残しながら彼女を憩う。
彼の手はヒカルをくるみ込むようにして揉み立て、指先を這わせる。彼女の肌の上を躊躇いも

なく、順に進み、戻ることはなかった。
ヒカルが苦しそうに目を瞑り、陶酔に酔わないように自分を抑え込んでいる様を見て、彼はどう思っているのだろうか。
「目を開けて」
シャルルはヒカルに囁く。
その間も、彼はヒカルに口付けし、瞼に舌を乗せ、そして髪に手を差し入れて自分の方に彼女の顔を向けた。
ふたりの間には言葉がないからこそ、闇の中で浮かぶシャルルの声がヒカルの抗力を奪う。
身を重ねながらも、ヒカルは彼にひとつずつ愛の印を刻まれる度に、唇を閉じ、歯を食いしばって乱れて溺れそうになる自分を律し続けた。
拒んでいるわけではない。
その証拠に。
彼女の身体は先ほど湯を浴びた時よりも熱を帯びているというのに、睡臥の欲求はどこにもなかった。そして、ヒカルの肌は湿り気を帯び始めていた。
「ヒカル」
彼はもう一度開眼を促した。

そして彼は自分の頬を彼女の頬に擦りつける。
母を求める時のように胸元を求めるのでもなく。
快楽だけを求める時のように表情を見ないで貪ることにだけ熱中するのでもなく。
彼は、ヒカルの心を一緒に抱きたいのだと囁く。
自分だけだ、ただひとりだけで・・・死ぬほど愛しているのだ、とは言わない。
それで良いと思っているのに、時々、それ以上のことを求めてしまう。
シャルルにではない。自分自身に、だ。
時々、彼女は彼女の母になろうとする。いつも朗らかで、人の生命について考え続けていた彼女がシャルルに及ぼした影響の大きさを考えると、ヒカルは母になれないことが明らかであるのに、シャルルがヒカルの中に探しているものがヒカルには持ち得ないものであるということを改めて確認することになってしまう。

シャルルがヒカルの惑いを感じ、彼の熱情を半分しか与えていないことも、わかっていた。ヒカルは大きく溜息を放つ。彼の運命の人よりも愛して欲しいとは思わない。彼女のことを、ヒカルも愛している。深く、強く。
でも、時々、羨ましくなってしまう。
自分は欲深で、罪深いと思った。
自分の立場を利用して、シャルルを求めた。そして、戻って来てからは彼が心変わりしていないのだろうかと憂えて、自分のことばかり心配した。
今、一番強くあの国に行きたいと願っているのは、ヒカルではなくシャルルの方だというのに。

はやく実現するように、ヒカルはそこに赴いた。自分ができることはとても少ないけれども、できることを見逃すことはできないと思った。
苦悶の表情を刻みながらも、彼女はシャルルの波に満たされていく。
彼はヒカルの頬を撫でた。
「ヒカル」
シャルルは彼女の名前を呼んで、そしてそっと彼女の腕を取り、自分の頬に彼女の手の平を導く。
次には首筋、そして彼の広く逞しい胸に手の平を誘う。
彼女の葛藤すら、彼は自分の中に擒（とりこ）にしてしまう。
「・・・すべてを欲しいと言っただろう」
無言で、漏れそうになる忘我の声を堪えながらもヒカルは彼が自分の方を向いて欲しいという囁きに遵えずにいた。

「強情な人だ」
シャルルは言った。しかし、それはいつもの・・・優しさを交えた声音ではなかった。
苛立ちはなかった。ただ、焦げ付くような熱い焔を含んだ声が、ヒカルの首筋に注がれる。また、彼は彼女の柔らかい肌に唇を乗せて、軽く歯を立て、そして彼女の皮膚を吸った。
くぐもった声が自分の内から出ていくことを妨げることができない。
彼が額を擦りつける度に、彼にも湿りと熱が籠もっていることがわかった。
ヒカルが気付くまで、彼は保護者であり導く者であり、そして同じ哀しみを共有する者であった。
しかし、今は違う。
彼に、家族のキスを教えて欲しいと請うた時に、彼は啄むような軽い口吻だけを彼女に与えた。
そして、次に。彼女が彼なしでは生きられないと言った時に浴びせた熱情を伴う焔は、彼が今でも・・・今でも、彼の運命の人を待ち焦がれていることを表していた。
それでも良い、と思ったのに。
ヒカルは、そこで自分に絶望してしまった。愛されているのに、寂しい。寂しいのに、愛されたいと願う。
心が乱れてどうにもならない程に遣る瀬無くなり、苦しくなる。それでも、シャルルの愛を得たいと思う。
だから。
声を洩らさず、自分は決して乱れないという気配を保つことは、ヒカルには重要なことであった。
彼に翻弄されないということではない。自分に弄ばれないということだ。
戀慾に溺れ、乱れ、そして失うものがあるとわかっていたから。だから、怖かった。
彼女の最初の夜のときに。
シャルルが、とても優しかったことがヒカルを哀しませた。彼が乱れることはないのだと思ったからだ。

ヒカルと愛を始めても、ヒカルと今後の人生を歩んでも。決して、彼は自分を失わない。
・・・あの、不幸な航空機事故があった時に、彼がどうなったのかはあらかたを聴いていたが、それでも自分で実際に見ていないから、彼の荒れ様はわからない。
でも。
最初に、彼に会ったときに。
彼は泣いていた。失調し、それでも日本での家族の儀式に参加したいと言った。
そして、自分を責めていた。自分が、愛のない結婚をするために、彼らを呼び寄せたことが始まりであったのだから。

●27

彼がヒカルに重なる時に、彼女は彼の胸に顔を埋めた。けれども、シャルルはすぐにヒカルの顔に手を添えて、愛おしそうに口付けを交わしながら、彼女の顔を上向かせる。
そして、彼はゆっくりと彼女に沈む。彼が僅かに苦しそうな吐息とともに押し上げる熱情は、ヒカルだけのものであった。
でも。
自分がシャルルという波に揺らされることが苦しくて、彼女は目を瞑ってしまう。
目を開ければシャルルが彼女を覗き込むようにして様子を伺っている視線と重なってしまうから。
でも、彼が幾度も彼女に見ろと言うので。とうとう、彼女は彼の顔を近くで見ることになってしまう。シャルルの願いを叶えたいと思うが、何より自分の羞恥がそれを阻んでしまう。それを繰り返す。
彼の体がヒカルの背中をシーツに沈めていく。何も纏わない姿を見せることには慣れていないヒカルは、彼の肌を感じて、ただ、何もできずに体を強張らせているばかりであった。
本当は、もっと彼の愛を貪りたいと思う気持ちがある。しかし、彼女の中で越えられないものがあるのだ、と感じる。それが彼女をとどめていることは、シャルルから見てもわかるのだろう。

体を彼に預け、そして深く抱合する。それがどれほど罪深いことであっても、どれほど後ろめたいことであっても。彼女は、シャルルにだけ赦す。
ただ、戀慾のままに、自分の肌を灼く人物は誰でも良いのだとは思えなかった。
シャルルでなければ、考えられなかった。
自分は・・・どこに行ってしまうのだろう。
シャルルの優しい溜息と、迸る熱が交互に訪れる。
わかっている。
互いに、互いを求めることによって得るものと失うものが両方あることを、シャルルもヒカルも

わかっているのだ。
寄り添うべき相手が目の前の相手しかいなかった、ということだけでは、惹き合わなかったと思う。
彼女の顔の両側に肘をつき、シャルルはヒカルに自分を重ねて行く。ゆっくり、静かに。それでいてどこにも逃げないように彼女を自分自身で囲ってなお、彼女の温度を確かめる。
抱きしめ、肌に自分のすべてを滑らせ、切ない優しさでヒカルを感じようとしている。
人の温もりが恋しくて、幼い頃にはシャルルの寝室を訪れたことがあった。彼は「ヒカルはオレの天使だから」と言ったが、ヒカルは彼の優しさに縋り甘え、そして落ち着いて目を閉じることができる唯一の場所としてその場所を認めるようになった。
シャルルの傍らで眠る時が、最も安らげた。
それなのに、今は最も穏やかではない場所になってしまっている。
それは忌避したいことでは無かった。彼女は・・・彼女の内にある淫欲を感じ、認めざるを得なかった。
ヒカルは顔を背ける。
拒んでいるのではない。自分の痴態をシャルルに晒していることが耐えられない。
このまま息絶えてしまいたいと思うほどに、自分の肌は火照っている。彼とこうして番うのははじめてのことではないのに、彼女は左乙女のように身を竦ませてしまう。

「貴女が怖がっても、待たない」
彼は再び、言った。待たない、と繰り返す。彼は誇り高くて、すべてのことを記憶できる頭脳を持っていて・・・美辞麗句を並べようとするのに、ヒカルの脳神経はヒカルの指示に従わない。
なぜ、彼と一緒に居たいのか、なぜ、彼を運命の人に定めてしまったのか。
幾度も幾度も考えた。それでも、理由を探しても無数にあるし、それは結局ないに等しいのだと築き、そして戦慄いた。
彼の手の平がヒカルの温度を上げていく。そして、彼の唇は彼女の溜息を増やしていく。
抗おうとしても逆らえない波に向かって立ち竦んでいるようであったのに、孤独は感じない。
肌を合わせるというのは、こういうことを言うのか、と改めて思った。
旅立つ前までは、ただ、導かれるままであった。彼の指し示す方向に向かって泳ぐだけであった。どんなに遠い道程であっても、激しい潮であってもシャルルと一緒だからという気持ちが彼女の怯えを除去していった。
しかし、今は違う。
ヒカルは押し出されるような恐怖を感じていた。自分の身体が変化していく。少女であった頃から、大きく変わった。
彼がずっとそうしていたように、温室の薔薇のようにどんな刺激からも護られていた幼いヒカルは、それから長い年月が経過して・・・愛する人の吐息を求めることを知ってしまった。
シャルルの指先が彼女の曲線を追いかける。その度に、ヒカルは歯を食いしばる。声が出てしまうからだ。自分の中の獣が目覚める。そう思わざるを得ない。理性で制御できない自分を曝け出

すのが怖かった。相応しくない醜態をシャルルの目の前で広げるくらいなら、彼女はこのまま唇を噛み切ってしまった方が良いとさえ思っていた。
「君の声も欲しい」
シャルルの囁きに、ヒカルはとうとう目を開けていられなくなって、ぎゅっと瞼を閉じきってしまった。そうすることで、更に感覚は鋭くなっていくというのに。
彼女は、どうにもならない際のところまでやって来てしまっていた。
知識はあったが、自分がそのような境地に上りつめることはないのだろうと思っていた。なぜなら、彼女は贖罪の娘だから。そして、シャルルもヒカルも・・・最も愛した人から最も愛されることのない者同士だから。だから喜びに沈んではいけない。

●28

「だめ」
いけない、いけないのだ、と思うことの殆どは魅惑に満ちたものになる。抗えないものに、ヒカルは必死で抵抗した。シャルルから求められているのに、ヒカルはそこに踏み込めない。嗄れた自分の声が、闇に響く。彼の廣すぎる寝室に、彼女の声が放散される。
彼女は、どこにも逃げられない。彼の体の下で、身悶えた。
すると、シャルルが先ほどと同じ様に、彼女の顎を手の平で押さえた。
寐台がぎしり、と音を立てる。シャルルの身体がヒカルをとらえたからだ。
悦を交わすというのは、こういうことなのだとシャルルによって知らされる。
彼は彼女の名前を呼んだ。間違えないように、彼が律せるすべてでもって、彼女の名前を呼ぶ。
わかっていたことだし、承知の上でシャルルに飛び込んだ。
彼は誠実に、ヒカルを愛そうとしてくれている。
それだけを頼りに、それだけを因にして彼女はここまでやって来た。
愛は人を強くさせる。でも、時に愚かにさせる。臆病にもさせるし、困惑することもあった。
しかし、他の誰かとこうすることなど考えられなかった。
若いけれども滑らかとは言えないヒカルの部分にシャルルだけが口付けることができる。
シャルルは彼女の肩の上で軽く溜息をつくと、青灰色の瞳で彼女の茶色の瞳を覗き込んだ。
どこまでも澄んでいる、物憂げで寂しそうな瞳がヒカルの近くにあった。
呼吸が乱れ、彼の肌も汗ばんでいる。極限まで自分の戀淫に抗っている。
シャルルはヒカルの膝を割った。体を浮かせ、ぎりぎりの場所で彼女を見つめる。
恋の寝間で、相手の許可を待つというのは苦しいことなのだとヒカルも感じている。でも、シャルルはヒカルの嫌がることはしない。だめ、と言われて彼は待っているのだ。
目の前にある波に溺れないように、彼は自分を鎮めている。
しかし、それでも・・・シャルルは、ヒカルとともに泳ぐことを決めたと宣言する。
彼女の顔を、手の平で包みそしてゆっくりと、聖句を唱えるように、言った。
「うなさかを見せてくれ」

今度は、彼は待たなかった。それだけ言うと、ヒカルの顔にあてていた手の平をぐっと広げて細く神経質そうな指を彼女の唇の奥に潜り込ませる。
ヒカルは目を見開いた。
彼の指が彼女の唇から彼女の舌、そして声の洞に入り込んでくる。
歯を食いしばって堪えていた声が、彼によってこじ開けられてしまった。
しかし、唇を閉じて彼を拒絶することができない。そうしてしまえば、彼の指先が傷つくからだ。それは避けたい。彼を傷つけたくない。その気持ち故に、彼女の唇が開いてしまう。
我慢していた声が漏れてしまう。
発音にならない吐息と歓呼の呻きが部屋中に響き渡る。はしたないと言われる媚態にすらならない反応をシャルルに晒してしまっていた。

同じ様に、彼女の躰の最奥に彼は入り込んでいった。
「呼吸して」
彼は導く。しかし、彼の指先が彼女の歯をなぞり、彼女の声を吸い込んでいく。
ああ・・・と彼女が声を洩らし始める。
何も考えられなくなりそうであった。
自分の罪深い叫びが禁断の領域に追い上げていく。抑えきれなくなった嗚咽を伴いながら、彼をヒカルの海に招く事になった。
しかし、波を作るのはシャルルであった。彼の漣が徐々に大きくなり、白浪となって彼女に海の揺らぎを注ぐ。
打ち沈められる激しさに、ヒカルは顔を仰け反らせ、また背を反らせた。
苦しくて・・・苦しくて。
涙がにじむ。
花液が満たされて、彼はそこに導かれるように、引き波に乗ったかのようにごく自然に彼女に近付いた。
しかし、ヒカルは「うなさかを見せてくれ」と言われて、頬を朱に染め彼の唇を重ねられていた。彼の手によって固定された顔を動かすことはできない。
逃げるということではなく・・・シャルルは、ヒカルの中にある罪悪感や躊躇いや、その他のものを引き受けようとしているのだと感じて、また、涙が出そうになった。
悦楽に浸る時間であるのに、彼はそこまで考えているのかと思うと・・・何も考えずただ愛に生きた日々を彼女が取り払ってしまったような結果になり、そしてこれから先も彼は自分の見たいと思う過去に戻れないことに対して、ヒカルはただ息苦しく嗚咽を漏らすだけであった。
愛撫によるものなのか、それとも、これから先にまでずっと至る自分の罪に対する贖いの声なのかは、ヒカルにはわからなかった。
でも、彼の言葉が胸に残った。
うなさかを見せる。
ヒカルは・・・まだ、うなさかを見せていないということを言っているのだから。
彼女はやがて激しい波に呑まれ、その言葉の意味を考えることすらできなくなってしまった。

自分を律することは禁じられた。
彼に黙って組敷かれるという状況は、シャルルは望まないことだと言われたのだ。
ヒカルとシャルルに必要なのは、没頭そのものだけであった。
言葉や仕草で相手と意思疎通する時期は越えた。
愛に満ちた強い絆を求めて、シャルルはヒカルの弱い部分を見せて欲しいと言った。
あの国に出発する前に、シャルルがそうしたように。
自分が意図していないことであっても、愛する相手に見せて・・・それでも一緒に居たいと言う。これはぎりぎりの選択であった。
代案がない選択だ。だから、ウイかノンしか存在しない。
けれども、シャルルに彼女はウイと言った。彼女のすべてを捧げると誓った。

どうにもならない愛おしい気持ちが、ヒカルの躰を開き、シャルルを受け入れる。
そして彼は彼女の・・・うなさかが欲しいと言う。

波に揺られて、彼女は自分の髪の毛の先が自分の背や首の下で蠢く震動を感じながら、そうだったのか、と悟った。

重なり熱を与え続けるシャルルの背中に腕を回し、そして彼の湿った背中の上に手の平を置いた。

●29

夜はとても長くて、それでいて少しの間も惜しむような抱合でヒカルの全ては奪われていた。
掠奪されたのではない。
惹き寄せられた切なさも愛おしさも、すべてが込められていて、それをひと掬いずつ、丁寧に見逃すこともないようにヒカルに触れるシャルルに彼女は全てを委ねた。
泣き出しそうなほどに、嬉しかった。
彼が、彼女のことを依り代として胸に抱かなかったから。
彼の激しさと優しさを同時に感じて、彼女は何をひとりで靄の中を漂っていたのだろうかと思った。
このまま、幸せの絶頂で命が絶えてしまいたいとさえ思った。でも、彼女は生きる。生きることによって自分をヒカル・クロスだと証明し続ける。
歎きも、迷いも、すべて・・・シャルルは欲しいと言った。
それが何を意味するのか、ようやく、わかった。

うなさかとは、海境のことだ。海神の国と人の国を隔てると言われている世界のことである。

神話の世界では、ここを境界として神世と人世がわかつとされている。
それを欲しい、と彼は言った。
ヒカルの中にある境について、シャルルは気がついていた。
このまま愛に耽って良いのだろうか、この愛に生きて良いのだろうかという迷いを、彼は振り払った。ヒカルから奪う、という形で。
いつも与えてばかりの彼が、ヒカルから何もかもを欲しいと言いながらもそれでも取り上げることのなかった優しい日々とは何もかもが違う、荒い波の中に、ヒカルとシャルルは浸った。
それは惑いという名前の波であった。
さらに深く沈めば、そこにあるのはただの静寂と、遠い日の光と・・・波の呼吸する音だけであった。
そう。
シャルルの波に泳いだのは、自分の方であった。

シャルルとともに生きるということは、美しい世界だけではないことは承知している。でも、最も惑っていたのはヒカルであったのだ。
彼と合歓の時間を過ごし、自分ではない自分に変わっていく。彼に愛されて、躰が変化し、彼を愛して自分が変わる。
これまでの、涙を抑えているヒカルではなく、シャルルの生涯の伴侶として涙も笑顔もすべて彼と共有する覚悟があるのか、とシャルルは問うた。そしてヒカルはウイ、と応えたのだ。

うなさかには傾斜があって、そこから先は神の世界だと言われていた。

彼は神から多くの祝福を与えられた者と言われている。
けれども、多くの者が手にできないものを手にしているが、多くの者が手にしているものを手に入れることができなかった。
ファム・ファタルの愛であったり・・・彼が心の底から欲しいと思っているものは彼の前に現れては消えて行った。
最初からなかったのであれば、彼は望まなかっただろうに。
家族や、愛や、信頼、安らぎ・・・彼が求めるものはごく普通の感情であったのに、彼がそれを享受することは神が赦さなかった。

彼は、神と人の狭間を見て、何を思ったのだろうか。
そんなフランスの華と讃えられる人のことを愛してしまったヒカルができることは何なのだろうか。
この問答は、ずっと続くのだろう。
シャルルはきっと語ってくれることはない。でも、傍にいることは許可した。
構わない、と囁いてくれた。

捧げる愛を永遠としていた彼が、共有し、時には相手からそれを取り去るための奪取を試みる。
この変化をヒカルは他の人に確認して欲しくなかった。
彼の愛を受けるのは、自分だけで在って欲しいと思ったのだ。
邪だと言われてしまえば、反論できなかった。
でも。
どうしても。
・・・・どうしても、彼の傍にいたい。

世界のどこかで幸せであってくれていれば良いのだと思わない。
自分の傍で、幸せになって欲しい。自分が、彼を幸せな笑顔を浮かばせたい。
誰にも渡したくなくて、誰かと愛を語って欲しくなくて・・・。
独り占めしたいのに、独り占めできない。
彼は、ヒカルの所有物ではない。ヒカルを手放して日本に返したシャルルの苦悶をヒカルは今になってようやく・・・どれほどの苦しさであったのかとわかる気がした。

彼に触れられて、こわれそうになって軋む躰を自分で抱きしめる。
彼の愛の痕跡が、彼女から逃げ出さないように。

ヒカルのうなさかが欲しい、と言われて。ヒカルは自制心が崩壊した。声を洩らし、涙を滲ませ、そしてシャルルを激しく求めた。・・・自分はいつから、こんな風に自分の戀慾に対して無防備になってしまったのだろう、と激しく己を責める。

●30

「・・・ヒカル」
シャルルの掠れた声がヒカルの頭上で鳴った。
彼の言葉は、声というより音楽や楽器の韻に聞こえる時がある。
耳が良いからだ、とシャルルは言うけれども、ヒカルはそれを意識したことはなかった。時々、心地よいシャルルの声が音楽や風の音のような・・・万物が戻りたいと思っている森羅万象に傾いている音域を持っているのではないのかと思ってしまう。
海にはすべてがある。生も死も。そして、愛も。
そう思えるような時間であった。波の中を漂い、彷徨い、そして躍り弾けて彼女はシャルルと久しぶりのふたりだけの時間を過ごした。

「・・・理由は？」
彼が何を言いたいのか、わかっていた。

なぜ、彼から逃れるように、背を向けるのか。
その理由を聞いている。

「隠れているの」
彼女は言った。

ヒカルは、シーツを纏って自分を覆い、そしてシャルルに背を向けてしまっていた。
なぜ、彼女が彼に対して背中を向けるのか、それを知りたいのだとシャルルは端的な質問をしているに過ぎない。
「隠れるにしても中途半端だ」
シャルルは嗤う。
冷たいシーツの漣が、ヒカルの躰を滑った。躰を動かす度に、波の音に変わってシーツの掠れる音がヒカルを現実に引き戻していく。

ヒカルはシャルルがはじめての共寝の相手であった。でも今宵がはじめての夜ではない。だからこそ、なのかもしれない。
どうして良いのかわからない。何が良くて何が悪いのか、それすらわからない。
彼から全てを学んだ。彼から教えてもらえないことは、彼とよく似た人から学んだ。
でも・・・
こんな時には、どうやって振る舞えば良いのか、何を答えれば良いのかまったくわからないで困惑するばかりであった。
視線を逸らせばそれで良いのかというとそうではないことも、承知している。
「恥ずかしいから、隠れようとしたけれども・・・これしか思いつかない」
彼女は顔をあからめながら、そう言った。
くぐもった声になってしまった。
不機嫌そうな声に聞こえたかもしれない。
でも。
・・・・でも、それでも躰を反転して彼の青灰色の瞳を見ながら言うことが出来なかった。
「・・・貴女は誰のかわりにもならない」
彼は彼女を抱きしめた。背後から、優しく。そして耳元で囁いた。
いつもは、目線を交えて話をする。大事な話である時ほど、彼は彼女を覗き込むようにして話を進める。自分の決定を通告するときもあれば、彼の用意した選択肢をヒカルに選ばせるときもあった。

久しく味わってきた穏やかな時代とは違う荒々しさに、ヒカルは慣れていなかった。慣れるために困惑を呑み込むことも・・・大人然とした様子で受け入れることはできなかった。
自分ではない誰かと夜を過ごすということの本当の意味を、今宵はじめて悟ったように思う。
愛していると伝えることでもなく、愛していることを確認することでもなく・・・。

海原のように愛を広げ、相手を包み、そして自分とシャルルの境を薄くしていく。

彼がどれほど言葉や愛をヒカルに捧げても、ヒカルがそれを信じ、彼の愛したファム・ファタルごと愛さなければ、この愛は続かない。
そう思った。
もちろん、彼が愛し続けている人ごと、彼女は彼を愛している。
自分の根源となる人であり、彼女の中にはほとんど記憶が残っていなかったけれども自分の命を慈しんでくれたということだけは永遠に消えることのない記録として体に刻み込まれている。
幸せで満たされているはずなのに、少し、哀しい。
しかし、この幸せをシャルルが他の者と分かち合うことはしないで欲しいと願う。
贅沢で、我が侭な願い。
わかっているけれども、そう思ってしまう。
「見ないで」
ヒカルは体を屈めて自分の表情をシャルルから遠ざけようとする。
しかし、彼は彼女の体の下に腕を差し入れると、あっという間に自分の胸に寄せてしまった。
「強情な人だ。でも、悪くはない」
彼はそう言うと、彼女の髪に接吻した。癖の強い髪は、成長するにつれて薄くなってきた。もう、彼女の髪は、彼女の母とはかなり違ったものになっていた。それでも、シャルルはそこに愛を落とす。
「・・・貴女は不満足だった？」
そう言われたので、ヒカルは弾けるように顔を上げた。そんなことはない。彼に不備があるとは思わなかったし、そんなことを言わせたくて顔を背けているわけではなかった。
「やっと顔を見せた」
しまった、と思った。シャルルの思惑のとおりに行動してしまった。
ヒカルは彼の腕の中で溜息を洩らす。
「・・・そんなことは決してないことはわかっているのに、なぜ、そんなことを？」
ヒカルの質問に、彼は片肘をついて体を起こし、反対側の腕で彼女を抱きながら言った。
「貴女はシャルル・ドゥ・アルディの妻だと自分で言うのに、夫から逃れようとするから」
彼がそれで、少しばかり機嫌を損ねてヒカルに意地悪い囁きを投げかけたということに気がついて、彼女は薔薇色の頬を上向かせた。すると、彼はそれを狙っていたかのように彼女の唇を啄んだ。

それから、甘いキスを繰り返した後に、ふっと、彼は真顔になった。
「ヒカル」
青灰色の瞳が間近にあって、彼女は蕩けるようなキスの余韻に浸りながらも、彼の声に耳を傾ける。

●31

翠帳閨門で囁く言葉にしては硬い声であった。
ここはシャルルの閨であると同時に、これからはヒカルの寐床になる。
それを承知のうえで、シャルル・ドゥ・アルディは言った。
彼女の肩の際に唇を押し当てて、その次に彼は言った。
「賛成することはできないと言う者もいるだろう。ヒカルの実家・・・クロス家との関係がこれで良好になるかと言えばそうではない」
ヒカルは茶色の眼を見開いた。
彼が何をこれから話そうとしているのか、察したからだ。
頭を起こし、彼の方に向いた。それでも、物憂げな青灰色の瞳の人の表情を全部見ることが出来ないので、仰ぎ見ることは放棄して体を起こした。
片腕を自分の頭の下に差し入れて気怠げそうであったけれども愁いに満ちた顔つきの彼女の愛する人を改めて見つめる。

「己の病のためにヒカルを生涯離さないのだと言われ、養い子を妻にしたと誹られる。貴女は人生を翻弄された贖罪の娘と語られる」
ヒカルはそれを聞いて、眉を動かした。
汗を吸った髪が重く彼女の背の上に寄りかかる。それは、これからヒカルが背負うものであった。
若い裸体を起こして、シャルルという名前の運命の人を見つめた。
憩われて、護られていたけれども。
シャルルは本当はとても繊細な人で、誰かを愛することによって自分が少しずつ壊れていくのかもしれないというおそれも常に持ち歩いている人だ。

自分に対する他者からの誹謗中傷などは、彼は気にしないだろう。けれども、ヒカルに対するそれは赦さないと言っているのだ。

こうして肌を重ねた後に、そんなことを言い出す彼の胸中を知り、ヒカルは言葉が詰まってしまう。自分は未熟であるけれども、シャルルのことを誰よりも好きだという気持ちでいるけれども・・・彼はもっとずっと先のことを見回しているような気がしていたが、こんなことを考えていたのか。

「アルディ家とクロス家の関係を修復するために結ばれたという理由であっても良い。アルディ家の当主は代々・・・恋に溺れて、東洋人の妻を持つ狂った習性を持つと誹られても構わない。貴女とこれから生きていく。でもそれは皆に祝福されるとは限らない」

「シャルルは、他の人から祝福されたいの？」
ヒカルは呟く。
人の視線を気にして生きてきた。誰にも嫌われないようにするためにはどうしたら良いのかと考えて、彼女はあまり自分の内を曝け出さないように過ごしてきた。
でも、それは己の本当の幸せにならないのだと、彼女に関わった人達から教えられた。
勿論、自分だけの我が侭で物事を運ばせようとは思っていなかった。
それでも。
目の前で、愛する人が困窮している。自分との愛に理由をつけて、ヒカルが傷つかないようにするためにはどうしたら良いのかと考えている。
彼にできないことはないのに、なぜ、彼は愛に関してだけはそんなにも不器用なのだろうかと思った。
「私は、諦めない」
ヒカルは吐き出すように言った。
彼が、皆の祝福を浴びることが己の幸せだとは決して思っていないことはわかっていた。
恥ずべきことはないと思った。彼女の心が激しく揺さぶられ、そしてシャルルはそれに応えてくれた。それがどんな経緯だったとしても。ヒカルは、自分が後ろめたいと思えばシャルルを哀しませることになると承知していた。だからこそ、彼は敢えてそのようなことを言うのだと知ると、彼女はシャルルの顔をはっきりと見て、言った。
この人を幸せにしたいと思った。そして、幸せになって欲しい、とも。ヒカルが存在しなければシャルルが幸せになれるのかと思ったこともあったが、今は、違った。
彼の傍に居たいという気持ちと、彼の生命を見届けるという強い欲求が、彼女の中に生まれていた。

互いに、最も愛した者に愛されないという路を選んだ。でも、それでも良いのだ。彼女の両親を愛したシャルルを・・・そして、運命の人を定めて想い続ける彼を、愛しているのだから。
今生で寄り添うだけの存在であったとしても。ヒカルは、シャルルから愛をたくさん浴びて育ったし、これからは・・・慈愛以上の愛が欲しいと求めてしまった。
彼女のうなさかを見せてくれと言ったシャルルの心が、垣間見えた。
そして彼女には、彼のうなさかが見えた。

「シャルルがもう良いよと言っても、私は諦めない。シャルルは私を妻だと言った。私はシャルルを私の夫だと言った。誰が認めなくても良い。・・・神様が反対しても、私の心を変えられるのは、私だけ。シャルルでも変えられない」

いつしか・・・彼女の目には涙が浮かんでいた。決して誰かの前では泣くことはしないと決めていたし、それが唯一の誇りであると思った。しかし、今は哀しみも喜びもわかり合い分かち合う者が目の前にいる。少なくとも、ヒカルはそう思っているし、そうしたいと思っている。

「貴女はあの人にとてもよく似ているよ」
シャルルは笑う。困ったように。でも、嬉しそうに。次に、少し哀しそうに。
それから、青灰色の瞳を閉じた。彼の眦に、疲労の色が僅かに滲み出ていた。
「・・・これから、貴女を名実ともに妻にするために、どれほど多くのことを動かすのかと考えると、貴女の気持ちを確かめる機会はこれで最後になりそうだから」
彼はそう言い訳した。わかっている。待ち望んだことであったけれども、それは同時に多くの困難を受け入れ乗り越える覚悟を問われることになることになるということも、全部頭では理解できている。

シャルルはヒカルを抱き寄せた。そして、彼の枕元で座り込むヒカルの腰を抱き、彼女と纏っていたシーツごと彼女を抱えて彼女の中に顔を埋めた。
「シャルル・・・」
ヒカルが驚いて、彼を見つめるが、白金の髪しか彼女の目に入らない。

シャルルが愛おしい。そして、彼の愛が欲しい。
ヒカルのすべてが欲しいと言ったシャルルの、決意というものが感じられた。
彼は持てる限りのすべてを使って、これからのことを考えている。それでも、ヒカルがまったく傷つかないで事が運ぶ方法はないのだと結論づけた。だから、ヒカルに尋ねる。彼は見せたくないものまで見せることになってしまったことを苦悩していた。

そのまま・・・彼女よりずっと年上の彼を抱きしめようとして腕を回した時に、あっと声を上げてしまう。
彼女の腰を抱き、彼がまたヒカルをベッドの上に倒したからだ。
背が軽く弾む。そして勢いよく倒れ込んだので、目を瞑ってしまった。
「貴女はもう少し注意深くなった方が良いな」
彼はそう言うと、ヒカルの瞳を覗き込んだ。
汗と涙と・・・シャルルの香りが立ち上った。
しかし今度はヒカルは彼から顔を背けることはなかった。じっと相手の顔を覗き込んで、そして瞬きすら惜しいというかのように、ただ熱心にシャルルの中に映る自分の姿を見つめている。

それから、彼は言った。
幾度となく繰り返した言葉を言う。彼からの、愛の言葉であった。
「貴女のすべてが欲しい。・・・うなさかさえも」
彼女は頷いて、目を閉じた。
これから解決していかなければならないことは山積している。時には涙を流すこともあるだろう。でもこれからは人前では泣かないという決意で涙を堪えることはしなくても良いのだ、と彼が囁いているように思えた。

心が震えて、声にならない。唇が震えて、彼に承知したと言い返すことができない。

●32

心ゆくまで時間を過ごしたいと思っていても、実際はひと晩を殆ど眠らないで過ごしただけ、という時間しかふたりには与えられていなかった。
微睡む時間さえも愛おしかった。朝になってしまえば、何もかも消えてしまうということもなかったのに、貪るように慈しんだ。滾るものを堪える事もなく、ただ、求め合った。

ヒカルの体は彼に相応しいとは言えない状態だ。これからも。彼女は同じ年頃の者達と肌を見せ合って若さを謳歌することもないだろう。
すべてを手に入れるということではない。ヒカルにもヒカルが諦めなければならないものは幾つもあった。彼の前では諦めないと言ったけれども、それは「諦めたくない」という意味だ。
やがて夜明けを迎えた時の微睡みからシャルルは深い睡臥に入り込んでいった。彼が人前で眠る姿を見せるのは、多くないことなのだろう。ヒカルは彼の朝を持ち込む役割であった遠い昔を思い返す。
・・・彼女はまだ若く、これほどの睡眠不足でも少し頭を振り、熱いシャワーを浴びてバスルームから出てきた時には完全に覚醒していた。疲労は感じるし、また横たわってしまえば眠りに落ちてしまうだろう。
でも、彼女はシャルルの晄だ。永遠の晄という名前のとおり、彼に朝を告げ日の終わりを捧げそして夜はともに過ごす。
そういう生き方をしたいと想った。はじめて、自分がこういう風に生きたいと強烈に想う。

ヒカルはシャルルの愛の証を確認するように、丁寧に自分の肌を手で撫で、水気を拭う。
その間に彼を起こしてしまうかもしれないと思ったが、彼は眠ったままだった。少しも、目を離していたくない。そう思った。そして微笑む。
問題は、少しも解決されていない。
少しでも、彼と彼女の間にある課題を解決して結ばれたい。それまでは、結婚はしないと決めていた。結婚式だけは挙げて神の前で誓ってくれと彼は言ったが、それに難色を示したヒカルに対して彼は恋人式を執り行い、シャルルはあの国にヒカルを送り出してくれた。
本当は、神の前の誓いではなく、互いに、約束をしたかったのだと思う。ヒカルが不安に思うように、シャルルもヒカルがいつか離れてしまうかもしれないと感じながら過ごしているのだとしたら。心変わりなどはあり得ないと言い切ることはできし、その通りにする意志の強さも持っていたいと思う。
でも、先のことはどうなるのかわからないという陳腐で稚拙な言葉によって不安定なふたりの関係と定めてしまいたくなかった。

永遠を誓うということは、誓って終わりではない。互いに努力し、譲歩し、時には意見を交わして高め合っていく。理想の愛の継続であったが、ヒカルが若すぎてシャルルが束縛しているのではないのかと彼は案じている。
・・・おかしなことだ。彼女は彼の妻だと言い切り、彼は彼女を妻だと言った。そういう言葉だけでは人の感情は縛れないということをシャルルは知っているからこそ、縛りたくないのか、それともヒカルの身分を確実なものにしようとしているのか・・・・
彼の心が、遠くにあるのではなく透明で通り抜けていきそうで、ヒカルはそれが怖いと思った。

厚く垂れた遮光カーテンに、更に日覆い、加えて窓際には扆もあった。
完全に昏くしなければ彼は眠れない。朝が来たことを知るのは、ヒカルが持ち込んだ温室で栽培された最高の状態の薔薇を彼の枕元に活ける時であった。
朝の使者という役割を認められて、ヒカルは嬉しかった。彼の朝になりたいと思った。でも。
今は、朝も昼も夕もそして夜更けさえも一緒にいたい。
なぜ、これほど夢中になってしまっているのか、考えることも必要だった。
何度も、自分に尋ねた。一時の感情であるのなら、これほど苦しくはなかったのか。思われているとわかっているのに、苦しい。そして、彼の苦悩を和らげたいと思う。彼の狂気や懊悩を除去することはできない。彼が過去に遡るというのは、その時に戻ってやり直したいと思っているからではなく、その時の行動を後悔していないからだ。ヒカルはそう思った。そして、その瞬間を、ヒカルは取り上げてしまったことになる。彼はもうあの頃には戻れない。戻りたいと思っていても、戻れない。ヒカルの細胞から加工された、まったく拒絶反応を示さない究極の薬剤でもって、彼は彼の幸せを強制的に手放すことになった。
・・・夏の一瞬だけ、彼は彼の過去を自由に跳び、そして心を保っていた。これからは、ヒカルをマリナ、と呼ばない代わりに彼が与えられる忍耐と苦痛を考えると、ヒカルは遣る瀬無くなり、涙が滲む。でも、彼のことを離さない。彼が他に幸せを求めることを、ヒカルは禁じたのだ。
贖罪の娘と呼ばれて久しい。
残った命がどれほどの長さかもわからないけれども。その間、彼女は持っている命を祈りと思い、大切に生きていく。与えられた命かもしれないけれども。それを捨てることはない。でもそれはシャルルと一緒に生きるからだ。

彼の居室には、ヒカルの身の回りのものが用意されていた。
シャルルはここでヒカルが朝を迎えることを予想していたのだろうか。
逃げ道を塞いだ、とシャルルは思っている。でも、そうではない。
ヒカルは選んだ。彼と生きたいと願った。
覆すことなんて、あり得ない。若いから。未熟だから。そう思うのかもしれない。シャルルから見れば、ヒカルの足掻きはとても稚拙であるのかもしれない。
でも。彼女の躊躇いを、シャルルは文字通り肌で感じ、踏み出せない際を取り払ってしまった。
彼によって。

ヒカルは、大きく息を吸った。吐き出してはいけない。彼女の中に取り込んで、そして自分はそれを糧にして生きていく。
懐かしい、シャルルの寝室の薔薇の匂い。彼が薔薇を好んで毎朝ヒカルに運ばせた結果の香りだった。
そう。ヒカルと、シャルルには長い年月が存在する。誰にも、入り込めないほどの蓄積がある。それに頼ってはいけないけれども。でも、彼女の恋情が一時のものではないことを示すに充分な年月だ。何も知らなかったかもしれない。でも、これからは・・・シャルルがヒカルの戸惑いをうなさかと言い、彼がヒカルからどんな重苦を取り除いたのか、彼女は朝日を浴びて改めて悟ったから。

●33　海界を過ぎて

「シャルル、朝よ」
彼女がそうやって声をかけたのは、陽も高くなり、手に薔薇を携えてそれを彼の眠る枕元の一輪挿し専用の花器に備えた途端のことであった。
シャルルは身動きする。彼の朝は遅い。ヒカルと過ごした朝であってもそれは変わらない。彼女が日本に赴く時には、自分の朝が遅いことを怖れて眠らないで温室の薔薇を世話していたシャルルを思い出す。
ああ・・・
父母の愛で満たされる代わりに、シャルルは無言の愛でヒカルを愛し続けてくれた。家族の愛であったかもしれない。でも、それが境界を越えて違う愛になったとしても、彼と彼女の時間は変わらない。
生きることを信じる。
彼女は、もう一度声をかける。
「シャルル、朝よ」
ありふれた朝の到来への宣言が、今は嬉しい。

降りつのる想いを言葉にすることができる。ヒカルの声が、シャルルに届く。
これがどれほど素晴らしいことなのか、この国を離れるまで知らなかった。
ああ、そうなのだ、と思う。
ずっとこの国で生きていたのなら、わからなかったことなのだ。

そして・・・そして、幸せというものは求めるのではなく自分で育てるものなのだと知った。

彼が、ヒカルの全てが欲しいと言った意味が、今ならほんの少しだけ理解できるような気がする。彼女の中にある戸惑いや愁いを、彼は全部引き受けるのだと決めてしまったのなら。

ヒカルが持つ特異な体質を彼が必要としているのなら、それでも良い。
・・・それでも、良いのだ。
ヒカルが生まれてきた理由を、他者が与えるのではなくてヒカル自身が知ることができる。きっと、自分の思惑と違うことであったかもしれないが。
「シャルル・・・朝よ」
ありふれた朝の到来への宣言が、今は嬉しい。

降りつのる想いを言葉にすることができる。ヒカルの声が、シャルルに届く。
これがどれほど素晴らしいことなのか、この国を離れるまで知らなかった。
ああ、そうなのだ、と思う。
ずっとこの国で生きていたのなら、わからなかったことなのだ。
彼は身動ぐ。今はじめて知った事実でという受け止め方ではなかった。声は届いていたらしい。
誰かが、彼に朝がやって来たのだと知らせるのだと、彼は承知していた。
それが彼のはじまりであり、おわりであったとしても。
そして彼女はそれを受けて、張り詰めた空気にこたえを呼び込む。
「・・・ヒカル」
ああ、彼の声だ、と思った。彼女は微笑む。もうすっかり身支度を整えたヒカルに比べて、彼は閨から出てこようとしない。
ブラインドもカーテンも開ける。眩しい陽光が射し込んできて、ヒカルは目を瞬かせた。

・・・朝がやって来る。朝が、やって来る。
彼女は呟く。
行き場がないと感じるような重苦しい懊悩を感じることもあるだろう。きっと、愛に苦しむ瞬間はまた訪れる。それでも、良い。それでも、ヒカルは生きている。それから、シャルルも。
慌ただしく過ごす一日が始まる。
何もかもが解決されたとは思っていないし、実際に何も解決していない。
でも。
シャルルの気持ちを知った。それから、自分の迷いが切れ間を見せて陽光が入り込んだような気がする。
苦しくて辛いこともあるだろうが、自分が彼を愛していることだけは変わらない。そして、心を強く持って生きる。難しいことであるが、挑戦するだけの価値があり、この命が終わる時にはそれを誇りに変えて逝きたい。
何かに背中押された感覚があった。誰かに、それで良いのだと髪を撫でられた気がする。

幸せは、見つけるものではなくて、育むものだ。

もう一度、心の中で繰り返した。
それは愛と置き換えることもできる。探すのではなく、育てる。彼が温室の薔薇を育てるように

。生涯、彼が抱えているものを愛していく。
それから、ヒカルが抱えているものも。

翻弄されることもあるだろうが、多くを望まず、ただ、うなさかというものが自分の中にあることを忘れないで生きていけば、見失わないだろう。
この世とあの世の境のことを言う。海に消えた彼と彼女の大事な人達に近付くことはできるのだろうか。いつかは・・・いつかは、そこに行くこともあるだろう。
水平線の向こう側の姿が見えないのは、海に傾斜があって姿が隠れてしまうと考えた古代の者達は、そこに何もないとは思わず、何かがあると考えた。
見えないけれども、確実に何かがあり、そこは人が知らない別の世があって・・・海神を含めた神々が幸せに暮らしているから海が続くのだと言い伝えた。海が荒れるのは、境を穢したからだと言う者もある。しかし、うなさかに踏み入った者は、何を見たのだろうか・・・そう思った。

彼女の中にある戸惑いを、彼はうなさかだと言った。
これ以上は堪えられないという限界をひとりで堪えるなと囁き、彼は彼女を招いた。誇り高い人であるのに。

確かに、彼が言うとおりこれからの方が苦しいだろう。愛は成就したら終わりではないのだとシャルルもヒカルも知っている。

夜明けは通り過ぎてしまい、朝がやって来た。

「ヒカル」
今度ははっきりとした声がして、彼女は振り返った。そこには、不機嫌そうな顔をしたシャルルが青灰色の瞳をヒカルに向けている姿があった。
「おはよう、シャルル」
彼女は微笑む。そして、近寄ってベッドに腰掛け、彼の顳顬にキスをした。
「今日も良い天気よ」
そう言った彼女の頭の後ろに手を回して、彼は目覚めのキスを返す。幸せだ、と心から感じる。
「もう陽が高い」
「まだ朝のうちだ」
彼が午前中は起き出さないことを知っているヒカルはまた綻ぶ。ヒカルが住まうようになってからは、彼はかなり自分の習慣を曲げていたのだと思うと・・・彼の無言の愛が彼女に染み入る。

「よく眠れた？」
「寝相の悪い妻と一緒に寝るのは大変だ」

彼は辛辣に言った。彼女は深く眠ると体を曲げて眠るから。そのことを言っているのだ。
「慣れてね」
彼はそれには返事をしないで、彼女の額にもうひとつ、キスをした。
「貴女も」
気難しい彼の習慣はよく知っている。でも、知らなかったその先を、知ったから。
だから。
ヒカルは笑った。
「努力します。でも、時にはつき合ってね」
「『永遠に』」
「え？」
「『永遠に』、努力して、添ってくれ」
ヒカルは黙った。彼が口にした言葉の意味がわかって、表情を一瞬、失ってしまう。
彼は永遠という言葉を滅多に使わない。
過去、永遠に運命の人だけを愛すると誓ったからだ。
それから、最初の結婚の時ですら彼はその部分を復唱しなかったという。
別の言葉に変えたようであったが、彼は決して永遠とは言わなかったのだそうだ。
その彼が、彼女に向かって言った。

永遠だ、と。
永遠に、添って欲しい、と。

ヒカルは込み上げる涙を鎮めることができなくなってしまう。
彼はそんなヒカルの頬を撫でた。
「努力で愛は生まれない。しかし、努力なしには愛は育たない」
彼女の瞳から、涙が落ちた。彼が一緒に、困難に立ち向かおうと言ったから。
フランスの華と呼ばれて、彼にできないことはない。しかし、彼ひとりでできることも、誰かと一緒にできることは違っているから。

・・・この愛が、やむを得ず受けた愛ではなく、そしてこれからも彼は愛を継続したいと言ったから。

愛している、という言葉も。結婚しよう、という言葉も。そして、一緒に生きようという言葉すら越えたヒカルへの願いに、彼女はただ涙を零した。

「はい・・・・」
「・・・貴女はそれほど涙脆くなったのかな」
シャルルが微笑みながら、言った。
そして、彼女の顔を静かに引き寄せた。

「貴女を泣かせるけれども、その涙を止めてみせる」

彼はそう言うと、ヒカルの髪を撫でた。そして、彼女の唇を自分の指先でなぞり、濡れた頬を手の平で覆った。
彼女は泣きながら笑った。
「シャルルが泣かせる」
「そう。オレだけが、貴女を泣かせる」
彼はそう言って、ヒカルの体を再びベッドに引き込んだ。
「シャルル」
起床を促したヒカルの声を無視して、彼は腕の中に妻を抱きしめながら言った。
「貴女のうなさかを・・・もう一度聞きたい」
彼が耳元で囁くので、それで彼が愛の媾を求めていることを知り、彼女は顔を赤くした。
「泣いたり笑ったり・・・忙しい人だ」
「そう・・・シャルルも、これから忙しくなる」
彼は自分の額を彼女の額に押し当てた。

ああ、本当だ、と思った。
彼女の涙は、彼の腕の中では確かに・・・確かに、涙ではなく海の波泡になった。

そして、ふたりはまた体を寄せて、今度は晄の中で目を閉じる。
永遠に・・・この朝が繰り返されることを願い、そうすることを誓いながら。

（FIN）

つきむ

■つきむ_01

恐ろしい程に美しい月夜のことであった。
私は、またこの海にやって来ていた。

そこで見た光景は、その後ずっと忘れることができなかった。
忘れる必要はなかったけれども、見て良いのだろうかという問答を続けることになる。
私は、それほど誰かに関わることが久方ぶりなのだと知り、僅かな痛みと懐かしさをもって回想することにする。

私は、汐の匂いを身体中に取り入れた。
海が好きだと言っていた人のことを思い出す。
そして、その海に連れて行かれた者達のことを思い出していた。

シャルル・ドゥ・アルディの結婚式に招かれて乗り込んだ黒須夫妻とともに、それらは消えてしまった。今でも、それらがどうなったのかまったく消息がわからない。
なぜ、そうなってしまったのかという原因を推測する記事や考察は多かったが、検証する材料や情報が少なすぎた。あの時には、まだ、フライト・レコーダーは衛星通信によって外部サーバーに共有されるほどの機能がなかった。
最近では、これらの情報は常に衛星通信によって網羅されて、フライトにかかる履歴や異常の連絡についてはすべて機体に登載されている情報はリアルタイムでミラーリングされている。その技術を開発したのは、ルイ・ドゥ・アルディであった。
シャルル・ドゥ・アルディの甥であり、彼の愛娘の婿となった人物だ。
そして、その後は、長らく当主の座にあったシャルルに代わって当主の座に上りつめた。ルイが長年望んでいた地位であったのに最初は固辞していたのだと聞いた。

私は海の匂いを全身に浴びながら、微笑んだ。
あの金の髪の、不遜な笑みをする青年の姿を思い浮かべる。
そうか、彼は・・・様々な海の波を見て、ついに自分の海を見つけたのか。
そう思った。

アルディ家の者は「極の者」であることが多い。
要するに、たったひとりを愛せるか、そうではないかのどちらかである。
人は皆そのどちらかであるが、あの家はその落差が激しすぎるのだ。
だから極端な者、という意味で密やかに社交界ではそう呼ばれている。

あの家の者たちは皆、美しく古い家柄である故の誇り高い者が多く、芸術に造詣が深いながらも当主以外は聖職者か軍人になることが多い。これも「極みの者」といわれるに値する彼らの特質が出ているのではないのかと思ってしまう。昔から聖職者と軍関係者は政（まつりごと）に荷担する。頂点に立ちたいのか世を支配したいのか、わからぬ一族であるけれども、それ故に彼らは近寄りがたい程の気位の高さを持ち合わせながら、これだと決めてしまったものを譲ることはないという、何とも気性の激しい者達を多く輩出する傾向にあった。

ルイはシャルル・ドゥ・アルディに生き写しの容姿をしており、かつ、気難しい彼よりかはずっと世慣れていた。それが演技であったとしても、彼は完璧に近付く努力をしていたのだから、それすらが好ましい点として与えられた。
ルイの容姿はあのフランスの華と良く似ている。
見事な金髪と、物憂げな蒼灰色の瞳。通った鼻梁に引き締まった知的な唇は酷薄そうにも見える。しかし、ひとたび彼が微笑むとまわりの空気が一瞬で変わってしまう。それくらいに影響力の大きな者であった。
彼は何をしてもそつが無く、そして乱れることもなかった。
完璧な人、というのはああいう人のことを言うのかもしれない。
フェンシングと乗馬に関しては、趣味という程度以上の域に達していたし、チェスの名手でもある。また、様々な分野で新しい技術を開発し採用した。この点では古いやり方を踏襲するというアルディ家とは異なった能力を発揮することになった。

そんな彼は、若い頃は浮き名を流した人物であったけれども、それでも危険だと承知のうえで皆が寄ってしまうことを本人は十分に承知していた。なぜ、皆が彼に魅せられてしまうのか。
それは、自分こそが彼のたったひとりになる、という願望を持ってしまうからだ。
彼が期待させるのではない。皆が、彼に遵ってしまう。道に迷ってしまう。
だからルイは「星辰の子」なのだ。上を向き、眺めすぎて迷い道に入ってしまったことすら気がつかなくなってしまう。
本来、天体というものは路を迷わないためのものであると教えられていたのに。

星々を遵えるという美称を持ちながら、彼は氷の貴公子として有名であった。
いくつも煌めく星のような恋を掴んだ。
でも、かりそめの恋は彼を温めることはなかった。
それはすでに彼が唯一の光を決めてしまっていて、それ以外の誰かを「たったひとり」と決めることがないからだ、ということに一体どれだけの人物が気がついていたのだろう。

シャルル・ドゥ・アルディを越える傑物になるだろうと言われていたけれども。
あの不幸な事故の後には、長い間、その姿を見せることもなかった。
大怪我をして復帰は難しいだろうと思われていたが、彼はやがてちらほらと姿を表すようになった。

彼が現れたのは、もう一度星辰の子としてシャルルの後継となることを目標として活躍するためではなかった。
彼は、シャルル・ドゥ・アルディの愛娘の教育係、という肩書きを持って再び登場した。表舞台に出ることはなかったが、彼の頭脳は少しも休むことなく、それまで以上のものを残し続けることになる。
まるで、何かに取り憑かれたかのように。彼は、生み出し続けた。
自分が遺伝子操作されて生まれて来たことを誇りにさえ思っているようであった。なぜなら、彼は大怪我によって失われた体組織を再生医療によって取り戻すことができたからだ。
彼が生まれてからずっと肉体面で調整され続けて、彼に関する情報が管理されていたからこそのことである。普通の者なら彼のように復帰することができたとは言い難い。

私は日が落ちて、それでも薄明るい空を見た。
間もなく、この空は闇に陥る。この海も。
どうにも哀しくなってしまう。
どうして、こうなってしまったのか。
あの海に消えてしまった人達を迎える場所としてこの場所は設置されたのに。
いつの間にか、彼らを思い出すための場所としてこの場所にやって来るようになった。
諦めきれない者たちが沖に出て彼らを探す、ということはなくなってしまった。
繰り返される歎きに人々は感覚を鈍らせていった。
もう、戻らないと諦めてしまった者は少なくない。あの機体に乗っていた者達はどうなったのだかと考えを廻らせれば廻らせるほど、彼らの生死は絶望的であったから。
せめて、遺品のひとつでも手に入れることができたのなら。
そう思って、波打つ際の端を歩く者達の数が減っていったのはつい最近のことではなかった。
アルディ家が出資して、誰もが立ち入ることのできる公園が作られた。海際の公共施設であったけれども、どんな場所よりも清潔で設備が行き届いていた。
娯楽を目的とする者、散策を好む者、そして海を眺める者・・・そういう者が、海から戻ってくる愛しい人を待ち受ける者よりも多くなったとしても、シャルル・ドゥ・アルディは諦めなかった。
それでも。
彼は、たったひとつ、彼に残された希望と残された人生を生きることを決めた。

彼がファム・ファタルと定めた人の娘と彼は結婚し、子をもうけたのだ。
順番は逆であった。事実婚を続けて、子をアルディ家の者に相応しい教育を受けさせるために籍を入れた。
彼がずっと育てていた娘と、彼は永遠を誓ったのだ。
誰もが驚いた。そして、納得した。
ああ、彼もやはり「極の者」であったのだと確認したようなものだから。

そして、最初の結婚で認知したとされる彼の息子は、その実は彼の従妹であるジル・ド・ラ・ロシェルと彼の双子の実弟であるミシェル・ドゥ・アルディとの間の子であることを公表した。そして、彼のことを後継として指名し、シャルルと妻になったヒカルの子であるアウロラの教育係となった。

私はその経緯を切れ切れながらも聞き及んでいて、そして何とも言えない胸の痛みをそっと自分の両手で押さえるばかりであった。
愛の連鎖というものは、どうしてこうまでして人の心を大きく揺り動かすのだろうか。

■つきむ_02

いつかこの海を泳ぎ切って岸辺にたどりつくことを祈って、シャルル・ドゥ・アルディはこの地域を整備し続けている。常に誰か人気があるようにすれば、何か異変があったときに気がつくだろうという儚い願いを持ち続けている。
それは、今もそうなのだろう。
人によっては傲慢だと言うのかもしれない。
彼は彼女を独り占めしたくて仕方がなかったのだ。そして、今でも帰ってくる日を待っている。
でも、それはひとりではなく今では、一緒に待つ者とともに生きている。
それが良いことなのか、悪いことなのか私が判断することではない。
無責任で無慈悲な言い方かもしれないが、そう思うのには理由があった。

「だいじょうぶですか」
少したどたどしい語り口調で私に尋ねる隣に座る人に私は微笑んだ。作り笑いではない。相手を安心させるためのものでもない。だから私からは自然に笑みが漏れてしまう。

私達は、陸と海を吹きぬける風が切り替わる瞬間に立ち会っていた。
そして、陽と闇が同時に存在する時間。
私の国ではそれを逢魔が時と言っていた。魔が差すのではなく、生死が行き交う場所なのだと思った。海の夕刻というものは実に寂しい。生き物が波に乗って汐の香りを漂わせてくる。けれども、そこには皆が待っている者達の命は漂着したことはなかった。
どこかに行き着いて、生き抜いて幸せに暮らしている・・・そういう想像をしたくなった時にこの海にやって来る人がいる。または、長年待ち続けて疲れ果てた自分を励ますために海を見る者もいる。もしくは、長く抱え続けた煩悶を断ち切るために決別の宣言を放つために海に向き合う者もいる。
今、私の目の前にいる人はいったい、それらの目的のうちのどれを持ってここにやって来たのだろうか。
帰ってこない人達と直接に関係しているといえばそうであったし、そうではないと言うのであれ

ば確かにあまり執着する意味がないほどに、ここに流れる年月は余りにも長くなりすぎていた。

「アウロラさん」
私はそっと言った。波が打ち付ける音がする。下を向いて波を覗いていると、どちらが陸でどちらが海なのかを忘れてしまいそうになる。
彼女は面白そうに笑った。
「お願いです。私のことは、アウロラ、と」
年若い彼女は私に屈託のない笑顔を向ける。それだけで眩しい。私は、困ってしまって首を竦めた。どちらが年下なのかわからなくなってしまう。彼女の顔を見ていると、懐かしいあの人を思い出すからだ。
もう、どれだけ姿を見ていないだろう。そして、どれだけ声を聞いていないのだろう。いつでも会えると思っていたから。だから、失ってしまって、その傲慢さがシャルルのことを嗤えないほどに根深いものであることを知った。

ああ、似ている。
そう思った。
彼女の祖母である人に、とても良く似ている。アウロラの母となった人も似ていたけれども、目の前の彼女はもっと似ていた。だんだん、マリナを忘れて行く時間が長くなったから、そう思うのだろうか。彼女が消えてしまった時間により近い者が、私の中で「最も良く似ている者」になっているだけではないのだろうか。
年月というものがもたらす残酷な忘却を私は知っている。痛みが薄れるだけではなく、当時のことを事実として認識するだけではなく自分の物思いという名前の靄をかけたり願望という色を与えたりすることもある。
要するに、自分の都合の良い様に変化させてしまうわけだ。

マリナがなぜ、別れ際にはいつも底抜けに明るい挨拶をするのか理解できなかったけれども、今では少しだけ理解できるような気がした。
変化していく中で、彼女の別れの言葉だけはまったく変化しなかった。
その後、再会してまた別れる時も彼女は同じであった。
さらにもっと年月が経過して、好きな人と結ばれて子を設ける間の苦しい時間が彼女に影響を与えたことも私はそれを彼女の表面に見つけることはなかった。
一瞬、彼女には痛みというものに関して鈍いのかもしれないとさえ疑ったほどである。

私が返事をしなかったものだから、アウロラは私の顔を覗き込もうとして顔を傾けた。
「危ないわ。目の前は、海よ」
私ははっとして慌てて言った。ここはせり出した埠頭の先で、私達はそこに座って夕陽を見ていたのだ。少し前を向けば、満ちてきた汐が先ほどよりも近い場所で波を刻んでいる。投げだした

足を少し内側に向けた。気のせいか、無意識に体が海に対して警戒しているようであった。それほど、夜の海は恐怖を感じさせる。
「はい」
私の忠告に彼女は素直に従って、顔を上げて背を伸ばす。

巻き毛が背中に散っていた。
彼女の母よりも、祖母にあたるマリナよりも薄い色素であった。
手足も長くすっきりしているし、とにかく若かった。
だから、なぜ、彼女がマリナと似ていると強く思ってしまうのかと考えてしまう。
似ているか、ではなくて・・・
彼女を思い出させるのだ。否応なく。
マリナと造作が似ているのではなく、瞬きの仕方であったり邪気のない笑顔であったり、そういう些細な仕草やもの言いが非常に良く似ていた。
「戻りますか」
アウロラは心配そうに言った。
私は顎を引いて少し考える。
「もう少し」
元々、ここに一緒に行きましょうと同行を求めたのはアウロラであった。私ひとりでは危険だから行かせられないと言い張っていた。
でも、私はすぐに気がついた。彼女は、何かを吐露したいのだ、と。

クロス夫妻が消えた海の夕陽を眺めたい、というのは何とも歪んだ希望であったことも理解していた。けれども、どうしても見てみたかった。
私は幾度もこの場所を訪れることができるほどの距離に住んでいるわけではなかったし、何より、肉親であるヒカルやアウロラ達を差し置いてそんなことはできなかった。
でも、アウロラの様子を見て、私はそれを決行することにした。
彼女が同伴すると行ってくれて、アルディ家の車を出してくれると申し出てくれたところから、私とアウロラの密やかで無言の作戦が決行されたのだ。
示し合わせたわけではない。
ただ、彼女は私に話を聞いて欲しくて、彼女の話を私が聞きたかった。
つまり、そういうことなのだ。

何か話があるのではないのですか、と私から切り出すことはなかった。
しかし、彼女はそれを聞かれるのを待っている。

そういう無言の時間が過ぎていく間、私達は並んで、まるで暮れゆく陽に祈りを捧げているかのように夜を待った。
右隣に並んでいたアウロラの髪が風に揺れて海の泡のようにも見えるし、海と夕焼けに魅せられ

てしまった精霊のようにも見えた。
右隣であるので、彼女の左薬指の指輪がよく見える。
アルディ家の婚姻に用いられるものであるのだろうから、さぞかし豪奢なものであろうかと思っていたが、簡素なものであったので私は少なからず内心で驚いていた。
それを隠すだけの術を身につけてしまった私は、アウロラから再会の抱擁とキスを受けた時、素直に「その指輪は素敵ね」と言うことができなかった。
だから、今、ここで「狡猾な大人の知恵」というもので言い訳を作ることにする。

「その指輪、素敵ね」
夕陽に照らされて光る指輪は、ルイ・ドゥ・アルディから永遠を誓われた証であった。
「はい。とても気に入っています」
まだ指に馴染んでいないというような感じで、アウロラは自分の右手を左手に添えた。朗らかで、誰とでも親しくしている。そしてそんな要素から、シャルルが特に愛している娘で、幸せを全身で浴びているような育ちであることは間違いようのない事実であった。
それでも、ふとした瞬間に垣間見える彼女の憂い顔が気になった。
彼女は特に、若くして結婚したのでもっと嬉しさを全身で表現しても良いように思うのだが。
気がつかない者からは「初恋の相手で、かつ教育係でもある年上の従兄を射止めた幸運な娘」と言われているが、実際はそうではないのかもしれないという疑問が払拭できていなかった。
それは余計な節介であったのだろうが、私は常に彼女と親密な連絡を取る関係ではないから、「この次に聞こう」ということはもうできないかもしれないと思っていた。
彼女はなにひとつ不自由なく育ったと言われるし、あの名門のアルディ家の息女であった。しかるべき家の者と結婚することもなく、従兄であるルイ・ドゥ・アルディを婿として迎えてアルディ家は盤石の体制を整えた。何もかもに恵まれたアウロラのことを、人は、暁の娘と呼んだ。
そしてルイ・ドゥ・アルディはとうとう、アルディ家の後継として迎えられて実際は長らく当主の代行のようなことも行っていたのだと聞くが、名実共に、彼の望んだ地位に就くことになった。
それなのに、なぜ、目の前の娘はそれほど喜んでいないのか。私は不思議で仕方が無かった。

私は彼女の滑らかな手の平を見つめる。そこに隠されてしまった指輪は、本当に素晴らしい出来のものであった。きっと内側には彼女とルイだけしか知らない誓いの言葉が刻まれているのだろうし、削り出して作った環には豪奢な宝石はちりばめられていないけれども摩耗しないように特殊加工されていて、しかもどの角度から見ても彼女の指の美しさを損なうことはなかった。
この世でたったひとつだけの、彼女のためだけに創られた指輪。
本当は、何もかも手に入れたようで、何もかも失ってしまったと感じているのかもしれないなと思うと、アウロラの横顔が少し違って見えるような気がした。
ただ純粋に、願ったことが叶ったのだと思っているわけではないらしい。

■つきむ_03

「ここの海の音が好きです」
彼女は言った。彼女の母親は日本語を母国語としていて、父は非常に熱心な親日家でもあった。だから日本語を話せる彼女は私に合わせて日本語を駆使するけれども、その発音はやはり生まれ育ったものが聞くと違和を覚えるものであった。それでも、会話に不自由はなかった。
そういう完璧でない部分を見せるのも、彼女の長所の一つなのだろう。そして決して隠そうとはせず、通訳も付けずに私とふたりで出歩く豪胆さも持っている。警戒心がないところが彼女の魅力のひとつであった。
これから世界を知り、朗らかで暖かくて幸せだけではない場面にも遭遇するのだろうし、実際に既に経験しているからこそこんなに消沈しているのだと思うと何かせずには居られない。
マリナが、常に誰かのために行動したり、誰かのことを思い遣ったりしている姿を見ていた私は、アウロラにその姿を重ねてしまっていた。
今度は、私でも助けてあげられるのかもしれない。
そう思った。
いいや、そうしたいのだ。
私が。
私そのものが、そう言っている。

「太陽が沈む時には、音がするみたいで好きです」
暁の娘はそう言った。明け方のことを指し示す言葉を持っているのに、彼女は日暮れの音が好きだと言う。
おや、と思った。
私と話を交わす度に、彼女の発音が流暢になっていく。どうやら、相当に耳が良いらしい。本当に音がするわけではないのだろうが、こうして彼女の聴力の効果を見ていると、日暮れの音というものがあるのかもしれない、と思い、それが真実に聞こえて来そうなほどであった。
若者のおしゃべりは好きだ。屈託がなくて。生命そのものが飛び出しているような気がするから。
でも、隣に座っている若い娘は結婚したというばかりであったのに、どこか遠くを見ている。私達は今政に、文字通り地に足の着かない状態で波を見ていたから、もう少し浮かれた話が聞けるのかもしれないと思っていたというのに。
「ルイとは、いつも見に来るの？」
「いいえ」
彼女は即答した。
「ここは、彼ひとりでやって来ます。それはいつものこと」
そして唇をぎゅっと横に引いて、沈みゆく陽を眩しそうに見つめていた。
こうして髪を編まずに下ろしていると、本当にマリナに良く似ていた。彼女も時々ああして遠くを見つめていた。絵を描くときや何か考えている時だけではなく、ふとした最中に口を閉じて黙

ってしまう。心の中では相当に多くのおしゃべりをしているのだろうと思った。彼女はいつも、誰かと繋がっていることを確認しているかのように会話を続けることを好んだ。
どんな時でも希望を持っている彼女がとても好きだった。
自分では決してできないことであったから。
慣れた様子でこの海を案内してくれたアウロラは、ルイについては饒舌であった。
「彼の大事な場所です。ひとりになりたいときにはいつもここに来る。彼と・・・彼女の大事な想い出の場所なのだろうと思います。ふたりとも何も言わないけれども、きっと、そう」
アウロラが言っている「彼女」が誰のことなのか、何となく察しがついていた。ルイの最初の婚約者のことである。そして、アウロラの母親のことであった。

何ということであろう。
彼は、今でも彼女のことを忘れていないのだ。そういえば、彼と彼女はふたりきりになることはなかった。ルイも彼女も敢えてそうしているようであった。

私はルイ・ドゥ・アルディのことを思い出す。妻となったアウロラと私を見送りに出てくれた彼は、見事な金髪と青灰色の瞳の持ち主で、シャルル・ドゥ・アルディと良く似た姿をしていた。そう。ちょうど、黒須夫妻の娘を自分の妻とすることを決めた頃の姿とルイが重なって見えて、私は困惑していた。
アルディ家の当主は結婚を繰り返すことでも有名であったが、それはきっとルイは覆してしまうのだろうと思った。彼は生涯、誰も娶らないと言っていたそうだが、とうとうアウロラと結婚した。物腰柔らかく、久々の再会に対して礼儀正しい口調で喜びを述べていた。
けれども、どんなに酷似していても彼はシャルルではない。
だから、少しほっとしていた。シャルルのように、帰ってこない運命の人を待ち続けることもないのだろう、と思っていたから。
一連のアルディ家に纏わる出来事はかいつまんで聞いていたけれども、本当のところは私にはわからなかった。ルイがなぜシャルルの実子として扱われていたのか、娘のような年齢のアウロラを妻にするにあたってどれほどのことがあったのか。それらは私にはわからないことであったけれども、わからないように当事者達が配慮しているのであれば知らないままにしておこうと思った。
秘する恋もあれば、秘めたる思いもある。それが人というものだから。
私の近しい者も、そうして苦悶していたし、私自身も愛について深く考えさせられる瞬間を幾度も迎えたから。

彼女が幼子の時から教育係として接してきたルイが娘のような年齢の従妹を妻にすることについては、私は狂っているとは思わなかった。
彼のような思慮深い人間が間違った答えと思っているとは考えていなかったし、何より、それがもっとも円満な解決方法だと納得してしまうような状況であったから。

親族達から絶大な愛を得ているアウロラと、業績も経験値も何もかもが人並み外れているルイの結婚は、分断してしまった親族達をまとめるきっかけになる。それに、彼が遺伝子操作されて生まれて来た子であることは周知の事実であるものの、彼の偉業を残すためには当初の目的のとおりアルディ家の当主となったという最終結果が必要であることも、考慮したのであろう。

それに、愛している人の娘を妻に迎えるにあたっては、ルイは切り分けて考えているようにみえた。
どこまでも、世間一般的な家族の関係を得ることができなかった彼が、アウロラという長年彼を見つめてきた人と人生をともにすることを決めたのは自然な成り行きというものであったのかもしれない。
彼だけを見つめている娘は、きっと、これからもずっと彼だけを見つめて生きていくのだろう。
アルディ家の者は、こういう気質が強く出ているようだ。
つまり、たったひとりと決めてしまうとそれを理想化し、絶対としてしまうところがある。
それはアウロラもルイも同じであった。勿論、シャルルもそうだ。
「そう。貴女にとっても、大事な場所なのですね」
私はそっと言った。彼女はそれを聞いて、嬉しそうに微笑んだ。
「はい。ここに来ると、いつも思います。たくさんのことを思います」
彼女は言った。彼が大事にしている場所だから大事なのだ、というわけではないようだ。心の底から、彼女が大事にしている、とっておきの場所なのだということがわかった。
「最初の思い出は、夕焼けを見ているルイを父と間違えてしまった時のことです」
彼女はくすくすと声を洩らして笑った。幼い時の驚愕を、今も覚えているらしい。

「そう」
私は注意深くなってしまい、それ以上言えなかった。
いつか、ふたりで見ることができたら良いのにね、という言葉を使えなかった。なぜなら、それは私の願望であったけれども、アウロラには辛い話であるだろうと思い直したからだ。
各々、最も愛している者を想って、愛している者達を想って海を眺める。
決して戻って来ない人達に語りかけるように。きっと心の中で対話しているのだろう。しかし、その心の声を相手に聞かせることはしない。
並んで眺めたら、それが顕著になってしまうからこそ一緒に眺めることができない風景のひとつなのだろうと思われた。

「私達は、一番好きな人の一番にはなれない。独り占めしたい人を独り占めできない。でも、それで良いのです」
アウロラは目を細めて言った。その口調はとても静かで、彼女が何度もそのことについて考えた結果の声なのだろうと思うと、とても遣る瀬無くなってしまった。幸せな結婚ではないのか。
私が思っていることを感じ取ったのだろうか。アウロラは私に顔を向けて、豁達に言った。
「私はとても幸せです。好きな人の傍に居られる。好きな人から、ずっと傍にいて良いと証を貰

った。」
私は同じように言った人のことを思い出していた。
迫り上がってくる胸の痛みがあった。言い聞かせているようにも聞こえるし、後悔しているかのようにも聞こえる。
でも、そこから逃れることはしないと決めている人の口調だった。
「アウロラ」
私は、思わず手を伸ばして彼女の細い肩を抱いた。抱擁を許す間柄ではなかったかもしれないが、彼女は黙って私の方に体を預けた。
「良い匂い。・・・思い出すわ」
きっと彼女の母のことだろう。私が羽織っているショールは彼女の母から譲ってもらったものであった。
そのまま帰りの機内まで持ち込んでもらって構わないと言われていた。
海の匂いと、薔薇の匂いが混ざって彼女を懐かしくさせている。
私は彼女の髪をゆっくりと撫でた。

「私達は体の中に海があるから、海はいろんなことを思い出させる」
私は優しく、彼女の耳元で囁いた。このくらいの声でも、彼女には聞こえるだろう。私にとっては小さい声であっても、アウロラにとっては大声量であることには間違いない。
「ルイにとって、貴女は暁そのものなのね、アウロラ」
私は続ける。ショールを広げて、彼女の肩にもかけてやった。アウロラは目を閉じて私の声に耳を傾けていた。波の音と、風の音と、私の鼓動・・・それらすべてが彼女の中に吸い込まれて記憶という名前になって融合していく。
傾く陽を受けながら、彼女の髪は明るく輝いていた。透けてしまいそうなほどに。ああ、この娘も苦しんでいる。そう思った。
それでも、彼女は愛しているのだ。
彼も、彼が愛している彼女も。不幸な連鎖だとは思わない。しかし、彼女の母も同じ様に苦しんだのだと思うし、アルディ家の者達は皆が最も愛した者と真に結ばれることがないという絶望を抱えている。
■つきむ_04

「相手を見つめることから始まるのが恋だとしたら、相手と見つめ合うことから始まるのが愛なのよ」
私は心を込めて言った。

「愛をしなさい、アウロラ。愛するのではなく、愛をするの」
私は優しく言った。
でも、声が震えていた。

自分でもわかっている。こんなに生きているのに、少女のような若い、妻となったばかりの者に苦言めいたことを言うことは、彼女の望まない贈り物であろうということも察していた。でも、敢えて口にする。
海の前で、私達はほんの少しばかり思うところを口にする。アウロラの体が僅かに震えていた。
「さあ、顔を上げて」
そう言うと、彼女は黙ったまま顔を上げて、次に、閉じていた眼を開いた。私は彼女の左手を取り、親指でそっと彼女の薬指を撫でた。
「彼を縛っていると思わないで。彼と見つめ合うことができるのは貴女だけだから・・・彼が見つめ続けた人を貴女も愛しているのなら。彼と心を通わせ彼を信じ、そして慈しむこと。彼を愛するように、自分を愛して生きていくの」
私は、言った。
「愛をするということは、その人のために、その愛のために力を尽くし、時にはじっと我慢する。愛を求めるばかりではいけないし、己の愛だけを見つめてはいけない。愛はね、見つめ合うことなのよ。愛し合うというのは愛をし合うということなのだから」

茶色の瞳は僅かに潤んでいた。しかし、真剣に私の声を記憶に刻んでいた。今は音声だけしか記憶していないのかもしれない。でも、意味はわかっているようである。それを繰り返し再生して彼女は自分なりの解釈にしていくのだろう。
若い者に遺していく言葉は、そうと決めて述べるものよりも何気なく言ったことの方がずっと残るものである。私もそうであったから。でも、彼女には何かを遺したくなる。そういう人であった。希望の塊。命の塊。
彼女は私の顔をじっと見つめて、私の中の見つめようとする。ああ、こんなところもマリナにとても良く似ている。でもね、これ以上踏み込んではいけないのよ。私は微笑んだ。
貴女が踏み込むべき相手は、私ではなくて、貴女が最も理解したいと切望しているルイ・ドゥ・アルディなのよ。遠慮はいらない。喧嘩も時々必要でしょう。貴女が年若いからルイ・ドゥ・アルディには何も届かないと思わないで。
私も・・・アウロラと同じような年齢の時に、暁のような人に出会って、そして今、こうしてまだ生きているから。
「ありがとう。・・・ありがとう」
彼女は言った。そして、海の端に消えて行きそうな光を見つめながら万感の思いを込めて言う。
「こんなに素敵な言葉をくれる方を友に持ったマリナを尊敬します」
「貴女はとても良く似ているわ、アウロラ」
私は彼女の手の平を軽く撫でる。そして、マリナに聞いた秘密を、ひとつ明かすことにした。
良いわよね、マリナさん。
私は心の中で赦しを請う。
「彼女はね、最初、呪いをかけられたと言っていたの。だから、そういう類の話が好きで彼女に聞かせて嫌がられていた私にそっと質問してきたのよ。ある人物に、酷い言葉をプレゼントされた、と言っていた」

私はその時の彼女の青ざめた顔を思い返す。本当に、不可思議なことに対しては驚くほどの過剰な反応を示す人であった。
「ひとつめは、生涯背丈が伸びないように。ふたつめは、もし恋をしたのなら、ことごとく駄目になって、その人とは絶対結ばれないように、というものであったの」
「マリナに効かなかったから私達にも・・・・？」
アウロラは真剣な面持ちで私に言った。私は思わず笑ってしまう。深刻な話であったのに。慌てたアウロラの顔が、あまりにもあの人に似ていたから。それでも、「私」と言わずに「私達」と言った彼女の優しさと想いの深さに私は応えたいと、真摯な気持ちになった。

「貴女は、なんて答えたの？」
ぎゅっと私の腕を掴んで、アウロラが身を乗り出してきた。
私は穏やかに答を言う。海の向こうにいる、まだ帰ってこないあの人のために、私の魂ごと持っていくつもりであったものを、ひとつ、この人に託してみようと思った。
「言葉は言の霊であり、言の賜という意味よ。言葉の贈り物というものには力があると思うの」
そこまで言うと、明らかな絶望がアウロラの中に浮かんできた。彼女は、ルイ・ドゥ・アルディと結ばれないと思っている。結婚したのに。彼女は、名目ではなく心を結びたいのだと強く願っている。求めるだけではない愛を知っている人に年齢は関係ない。だから、話そうと思った。この人に、あの人の囁きを遺していこうと思った。
そんな私の話を聞いて、彼女は呟く。
「それなら、恋は実らないの？」
「その哀しい贈り物によれば、恋はそうかもしれない。駄目になってしまうかもしれない。恋した相手とは結ばれないかもしれない。でも、私はこう言ったの。『でもね、愛をした相手であったのなら・・・愛をするのであれば影響しない』と」
私は力強く言った。

「アウロラ、と名前を付けたのは、それが皆の希望だから。暁には、夜明けという意味もあるけれども、夜が白む直前の時間帯のことも言うの。夜が明ける瞬間よりも、その瞬間の少し前の瞬間に希望というものは存在するのかもしれないわね」
彼女は神妙な面持ちでそれを聞いていた。

「あかつき、という意味には念願が叶うという意味もある。とても、深いわね。アウロラ。貴女の中には、私の知っている多くの人達の血が流れていて、貴女の中でそれは生きているのだから」
彼女の母は類稀な体質である。しかし、アウロラにはそれがない。だから完全に同一ではないし、シャルルはそれ以上のことについて娘の体を調査することはなかった、と聞き及んでいた。
ヒカルがもたらした奇蹟はヒカルのみ起こせるものなのだ、というシャルルの決意があった。
・・・ルイを助けた再生医療がどんな様子であったのかはわからない。しかし、彼が生きている

のは生きて欲しいと願った者がいるからなのだ。

彼女は私の顔を見つめていたけれども、もっと遠くを見ていたように思えた。
とても若い人は、私を通して自分を見つめている。普通は、逆なのに。
より年嵩の者の方が、これまで見聞きしてきたものをより年下の者を通してもっと違う風景に見ようとするのが常であると思っていた。
「これは私の出した宿題、というより・・・あの人の出した宿題かもしれないわね、アウロラ」
もちろん、私が言う「あの人」と言うのはマリナのことだ。でも、同時にヒカルから託されたものも、カズヤ・クロスから託されたものもあるのだと思って欲しかった。それから、アウロラの父であるシャルルからも。
「拒む無かれ」
私は言う。
日本語を流暢に操ることができるアウロラであっても、不知の単語はその言葉の意味がわからない。だから、彼女は私に首を少し傾けて見せた。
「つきむ・・・？」
アウロラは「月向」と解釈したらしい。空を見上げたけれども、今日は月が出ていなかった。私は苦笑する。そうか、そういう意味もあったわね、と納得する。
「『つきむ』は『拒む』こと。拒絶することよ。拒まずに向き合って。見つめ合いなさい。それから愛し合うという意味と、愛をするという意味と・・・頭で考えることも必要だけれども、貴女のように耳で覚えて音が導くままに貴女は生きれば良い」
「ああ、たくさんの宿題ね」
アウロラは困ったように言った。
「どうか、私にひとつずつ出題してください」
「アウロラ。貴女の時間と私の時間は違っている。ルイの時間もそう。だから、貴女の時間で考えていけば良いの」
私は思いと願いを込めてそう言った。
彼女のうねりの強い、くせ髪というより巻き毛と言った方が良い髪をもう一度撫でた。

「それから、もうひとつ、私からの贈り物よ」
私は言う。
「自分が愛した人ごと自分を愛してくれる人は、その人にとってとても大事な存在になるものなの。時間がかかるかもしれない。でも、拒まれると哀しくなって、自分の愛そのものを否定して臆病になってしまう。だからね、アウロラ。今のように、ルイもルイの好きな人のことも愛してあげられる貴女は素晴らしいと思う。それでも、時には自分を見つめて欲しいと言ったり、そっと見つめて見守るだけの時間を怖がったりしないで、刻を過ごして」
彼女は、頷いた。そしてアウロラは私との距離を詰めて、私と抱擁した。
最初で最後の、海を前にした抱擁。
マリナが見ていたのなら、自分も混ぜろと言って怒るのだろうか。それとも、マリナと一緒にい

るであろう、カズヤ・クロスと同じ様に抱擁して喜び合うのだろうか。彼と彼女はいつも向き合っていた。どんな時も。
・・・彼女の髪はとても手触りが良くて、心地好かった。
「さあ、そろそろ・・・迎えの車が来る。行きましょうか」
「車は待たせたままだけれども」
不思議そうな顔をしたアウロラに、私は片眼を瞑って見せた。
「私ね、思いの通じ合わない人達と出会う確率がとても高いのよ。そして同じ位の確率で、仲直りする人達の姿も見る機会が多いの」
その言葉をルイが聞いたのなら、苦笑いするのだろう。そして、マリナが効いたのなら、困った顔をするのかもしれない。
「新婚のアルディ夫人。貴女の最愛の人に、私はちょっと意地悪を言ってみたのよ。『日暮れまでに迎えに来なければ、貴方の大事な人を海に突き落とすから』って」
アウロラは顔を上げた。耳の良い彼女には聞こえたらしい。渋い顔をして若妻を迎えにやって来た星辰の子と呼ばれた人がやって来たばかりの車から降り立つ足音まで、聞き分けたのかどうかはわからない。でも、彼女は一瞬でぱっと顔を赤らめて、そして嬉しそうに立ち上がった。若々しい機敏な動作について行けない私は苦笑しながら言った。
「さあ、行って。まだ搭乗時間まで少しあるから。私はもう少し、この海を見てから行くわね」
「ああ、本当に・・・何と言って良いのかわからない」
私が立ち上がるのを手伝いながら、彼女は弾んだ声で言った。
「もう一度、貴女を抱きしめて良いですか」
「あら、恥ずかしいわ」
私はそう言いながら、アウロラが私に飛び込んで来たのを受け止める。足元がふらついたけれども、ふたりで海に飛び込むほどではなかった。

アウロラ。私は囁く。
目を閉じて、あの人よりずっと背の高い娘を抱きしめた。
あの人が私に託していったものを、孫娘にようやく返却したような気分であった。

ひとつめの呪いは、マリナの中に。ふたつめの呪いは、彼女の血を受け継ぐ者の中に。それぞれ残ったけれども、それらは彼らを縛るわけではなかった。
己の中に取り込み、そして違う意味を持って静かに睡っている。
「つきむ無かれ」
慌ただしく走って行く彼女を見送りながら、私は呟いた。
己の気持ちを拒まないで。誰かを羨んだり妬んだり、時には自分で自分が嫌になるかもしれないけれども、どうか、見つめ合って。そして、見つけ合って。貴女の愛には貴女だけしか持っていない愛があるの。
私の中にもそんな思いが生きている。今でも、持っているから。それは自分の一部でもあるから

。
私は祈りにも似た気持ちでそう思っていた。
あっという間に姿が見えなくなっていく娘の体には、先ほど私がかけてやったヒカルのショールが巻かれたままであった。
ひとつのことに集中すると、他の状況は見えなくなってしまうようだ。それも、彼らに良く似ていた。
そう。マリナだけではなく、シャルルにも。カズヤ・クロスにも通じている特徴であった。
私はすっかり姿を隠してしまった陽のあった方向に向かって呟く。
彼女がよく口にしていた言葉を、囁く。
大きな声で叫ばなければ、もう聞こえないかしら。お互いに、年齢を重ねて貴女の孫を見る年齢になってしまったわ。そう思いながら。
「またね、マリナさん」
私はそう呟いた。目の端から、涙がこぼれ落ちる。
でも、それは決して憐憫の涙ではなかった。またきっと会える。そう思えたから。だから、私は涙を流す。誰もが寝静まった夜のことではないのに、気持ちが昂揚してしまっていた。私は、静かに漂う波をただ、黙って見つめていた。

■つきむ_05

アウロラは黄金の花々を眺めながら、ショールを引き上げた。最近では少しの気温の変化にも敏感になってきたので着脱可能な防寒具が欠かせない。
年齢を重ねた指に残る結婚指輪に視線を落とす。すでに彼女の体の一部になってしまったかのように、その重さや違和感を思い返すこともなくなっていた。

時折、様々な昔のことが甦るようになった。自分も、そういう年齢になったのだろう。アウロラにも「その時」が近いのかもしれない。それまで考えつかなかったことであったけれども。
彼女はショールの中に身体を埋める。懐かしい。懐かしい匂いが染み付いたショールが彼女の宝物であった。アウロラの、母の匂いと祖母の友人の匂いが混じったものであった。そして、彼女は知っている。時折、誰もいないことを確認して、それをルイが愛おしそうに撫でていたことも。もし、彼の誇りが赦してくれるのであればそれを抱きしめていたのだろうと思う。ルイの愛した人のことを思うと、アウロラは見て見ぬふりをするしかなかった。

あの時、彼女はなぜ結婚したばかりのアウロラを訪ねて来たのか理由は明かさなかった。
しかし、こちらで用事を済ませることが幾つかあったのだと知った。
ひとつは、彼女が保管していたマリナの絵の状態を確認しに来たこと。それからもうひとつは、マリナの戻って来ない海で鎮魂の瞑想時間を迎えたいと思ったこと。
ルイがヒカルと婚約するという発表の場に居合わせたひとりだと知っていたけれども、アウロラは彼女に会ってみて、こだわりを捨てた。

日本人らしい奥ゆかしさを持っていたが、それは彼女が高名な彫刻家の父と歴史の家柄の娘である母を持った人を家族に持っているからなのだと勝手に納得していた。でも、後になって知った。
彼女は母の連れ子で、彼女の義父となった人は前妻を深く愛しすぎて、それ故に諍いがあった時期もあったのだと聞いた。
それらの事情をアウロラに教えてくれたのはルイであった。
彼は人の事情のことは知っていても口にすることは殆どなかったから、アウロラがそれを聞くことができたのはルイと結婚してからずっと後のことであったけれども。

こうしてひとりで座っていると、あの時に腰掛けた埠頭のことを思い出す。確かにあの場所は彼女にとって唯一の場所であった。何もかもが始まった場所であったから。今でも耳を澄ませば、あの時の波音が甦る。

マリナの友人で、彼女が一枚の絵を託した人物であった。そして、遺されたヒカルの身を案じ、若い頃のルイと会ってそれ以来、アルディ家の美術蒐集に関しては関係の深い人物となっていた。
そんな彼女が少女時代に、義父の娘と知り合って体験したことや、それまでの苦悶について思いを馳せるが、どれほどのことがあったのかはわからない。
彼女も、もう、ここにはいないから。

アウロラの髪をしきりに撫でていたのは、彼女の義理の姉のことを思い出すからなのだと思った。
マリナ・イケダとしてアウロラの祖母もその人の絵を描いている。
巻き毛に近い、うねりの強い髪と、その人が逝った頃に近い年齢のアウロラを見て彼女は思いを放出したのだと思った。

結婚したばかりであったのに、憂い事ばかりで見せかけの朗らかさに苦しんでいたアウロラに様々な言葉を遺した。
聡明で物静かでどこまでも優しい人であった。
それでも、アウロラと同じ気持ちを持ったことがある者が家族に居たから気持ちがわかる、という、押しつけるような言い方はしなかった。最期まで。何も言わなかった。
それは呪いなどではなく、貴女が拒めば跳ね返せるものであるのだと教えられた。そして同時に、己の選んだ路を拒んではいけないと教えてくれた。

恋をすることは見つめること。
愛をすることは見つめ合うこと。

彼女はそう言ってくれた。それで楽になった。
自分が苦しいのは、恋をしているからで、それは呪いがかけられているから成就しない想いだけれども、愛になったのならそれは自分次第なのだと言ってくれた。

あの人は、どんな気持ちでそれを言ってくれたのだろう。
自分の父と母の間柄も同じであったから。彼女はアウロラを助けたいと思ってやって来てくれた。
それまでのアウロラは自分の気持ちにばかり貪欲でルイの心に向き合うことを怖れていた日々に暁をもたらしてくれたのは、ほかならぬその人であったのだと思う。求めているばかりでは駄目なのだ、と教えてくれた。
否定するのではなく、それは恋であるから呪いがかけられていて成就しないことになっていると言って、アウロラの心を軽くしてくれた。
誰も知らない、彼女だけの秘密を明かしてくれた。
きっと、誰にも言うことはないと思っていたのだろう。
アウロラも、ルイ以外の誰かに言うことはなかった。

人は、その時が近付くと知己達に少しずつ自分というものを分け与えたくなる。
今のアウロラならそれが理解できた。彼女もそうであったのだろう。

アウロラはマリナが描いた絵を知っている。
重大な秘密を隠した絵。当初はシャルルとシャルルが抱き上げる実子の絵であるとされていたけれども。本当はミシェルとルイの絵であったことが後にわかって、それ以降ミシェルが保管していた絵の最初の保管主はあの人であった。
マリナが託した絵であった。

アウロラはその絵が好きだった。
泣きたくなるほど懐かしくて、そして未来を感じさせる絵であった。

彼女の祖母であるマリナは日本で「まんが家」という職業であったが、その作品はほとんど残っていない。
アルディ家にゆかりの深い者であるのに、彼女の軌跡でわからない部分が幾つかあった。

あの人は、それを知っている数少ない人であった。

だから、アウロラはアルディ家が管理している、あの海のある公共公園に行きたいと言った時に同行を申し出た。それは親切心からではなく、彼女ならシャルルやヒカルが知りたいと思っているマリナの話を聞けるのかもしれないと思う下心からであった。そして、彼女なら愚痴を言っても良いのかもしれないという甘えた気持ちがあったから。

ほとんど会わない人物であるのなら、何を言っても影響しないという傲慢な気持ちがあった。
でも、それを知りながらあの人はアウロラに親切であった。
たとえ、彼女の巻き毛があの人の思い出す人を彷彿とさせたとしても。
・・・彼女の義姉は長い巻き毛であったと言われている。
あの当時のアウロラと同じであった。踝までは伸びていなかったが、彼女が本当に撫でたい相手はアウロラではなかったのだと思うと、ただ、切なくなる。

誰もが・・・触れたい相手に触れられない。

海風は身体に障るということなので、彼女は久しく海に出ていなかった。でも、あの波音を聞いているとはるか昔にルイと出会った時のことや、彼と喧嘩した時のことや・・・結婚の愁いについて悩みを吐露したことを思い出す。
秘められたものがどれほど多かったのかということを知った今となっては、全部を抱える苦しさも越えて、自分が語らなければ永遠に明らかにならないものを持って逝くのだということへの恐怖も感じなくなってしまった。

近寄っては遠ざかっていく波のように、あの人とアウロラは一瞬だけ交わった時間を持った。ルイが迎えに来たという嬉しさで、あの人の申し出を受けてあの人を置いて行ってしまったけれども、それが本当に正しいことであったのか、アウロラは後になって随分と悩むことになった。
失敗しない人はいない。それを失敗と思うかどうかがその人を成長させる。シャルルはそう言った。失敗しない人なのに。
それでも、彼の中では彼の考えた結末に至らない事が幾つかあったのだろうと思う。

恋の呪縛からアウロラを助けてくれた人のことを、彼女は忘れられない。
それは呪いなのだ、と言った人がアウロラを解き放ってくれた。
恋の呪いは続くかもしれないけれども。愛を縛るものは誰もいない。だから、愛をしなさい・・・彼女はそう言ってアウロラの背中を押した。

ふっと一息ついて、呼吸を整える。

自分の中の醜い部分を見せてしまうと思った。
そして同時に、自分は狡い人間だと思った瞬間でもあった。
なぜなら、あの人になら何を言っても・・・残らないと思ったから。
でもそれは間違いだった。
言葉にしたら楽になると思ったことも、結局言葉にできなかったことも、全部あの海に見せてしまった。
そして自分が恋をしていることを悟った。愛ではないから、と否定されることはなかった。そこ

から先を行き進み、愛をしなさいと言われて、彼女は改めて自分の夫を見つめることになった。ずっとずっと、長く見つめてきた相手を違う視線で見つめることになった。それは今でも後悔していない。あの頃のアウロラとルイには必要であったことだから。
迎えに来てくれた夫のことを、彼女は今でも愛している。
心の底から。
そして、彼で良かったのだと今でも思っている。それ以外には考えつかないから。アウロラに一番必要なものは彼女の物思いを一緒に抱えてくれるものであったから。

助けてあげて欲しい

そういう声があったのかと思う。当時のアウロラは、アルディ家に生まれた希望と好意の塊であった。皆が彼女を愛し、皆が彼女に希望を託した。それが苦しかった。なぜなら、ルイが造られた理由を否定されるような気がしたから。

そして、自分の強いくせのある巻いた髪を愛おしそうに撫でてくれる人がいた。
それは自分ではない誰かのかわりであったかもしれないけれども。
本当に撫でたい人はここには居なくて、その人にはきっとそうすることはできないのだろうとわかっている人がアウロラの目の前にやって来た。

誰かの代わりになることは慣れていた。

でも、そうではないのだと言い聞かせるように彼女の髪を撫でる人はあの人だけではなかった。最愛の人であるルイもそうであったし、彼女の母も父も・・・そして彼女を取り巻く多くの人々はアウロラそのものを愛してくれた。

懐かしい波の音をショールに乗せながら、アウロラはゆっくりと立ち上がった。
あの人が捧げてくれた言葉が、今の彼女を支えてくれている。

恋は、見つめるもの。
愛は、見つめ合うもの。

愛をするということを、あの人はアウロラに教えてくれた。
誰かを深く愛していたのに、その愛を失って決して手に入らないことを承知のうえで一緒になった別の男女を、あの人は知っている。
そして、「独り占めできない相手」との愛の果てに得た命を、マリナが心配していることを誰かに告げるために、マリナが遺した絵を保管していた人。
マリナによって愛の深さを知った人は、それをアウロラに託した。
人の業と愛は、区別を付けがたい。でも、決して失くしてはいけない感情であった。

「さようなら・・・」
彼女は呟く。そして、すぐに次の言葉を呟く。これくらい小さな言葉でも、あの人には聞こえるだろう。アウロラと同じ様に、小さな声を、あの人は聞くことができる。
アウロラはぐるりと周囲を見回して、その場所に別れを告げる。アルディ家の庭を眺めるだけで精一杯で、あの海に行くことは難しいけれども。この風のそよぎは、海の波音に似ていた。
向かい受けるような風のことを「つきむ風」と言うそうだ。彼女は、愛について述べた鈴屋美都のことを思って、つきむ風を浴びながら、微笑んだ。
笑って生きて、泣いて生きる。そして、つきむ生命を惜しんではいけないと逝ったマリナの友の言葉と、彼女の遺した課題を、アウロラは抱きしめて・・呟くのであった。
「またね、また、会いましょう・・・そして、愛をするということについて、また話してくださるわよね、美都」
（FIN）

贖罪の娘

http://p.booklog.jp/book/45870

著者 : tomogon
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/tomogonn/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/45870

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/45870

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.